

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173

津島遺跡 4

岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査

(第1分冊)

2003

岡山県教育委員会



1 調査区全景（南西から）



2 弥生時代前期の水田1（南から）

卷頭図版 2



3 5区土層断面



2 3区土層断面



1 1区土層断面



1 3区弥生時代後期～古墳時代遺構全景（南から）



2 弥生時代後期竪穴住居11～16（南から）

巻頭図版 4



1 河道1 建築部材検出状況（南東から）



2 河道1 構造材1 検出状況（南から）



1 弥生時代後期の土器（河道1）



2 古墳時代前期の土器（土器溜まり1）

卷頭図版 6



1179



1189



1190



1190



1195

河道 1 出土壺・器台形土器



W102

1 河道1 北岸出土木器（裝飾板）



W67

3 河道1 北岸出土木器（鞞装具？）



W82

3 河道1 北岸出土木器（盾）



1 籠目土器



2 刻骨



3 絵画土器

序

この報告書は、平成17年第60回国民体育大会の主会場となる岡山県陸上競技場の改修に伴って、平成11・12年度に発掘調査を実施した津島遺跡の発掘調査報告書です。

岡山県のほぼ中央部を南北に貫流する旭川は、その河口付近に沖積作用によって広大で肥沃な岡山平野を形成しました。近年、この平野の各所では発掘調査によって縄文時代中期から近代にかけて多くの遺跡が確認され、吉備中枢部の発展の過程を知るうえでの具体的な成果が得られつつあります。

この沖積平野のほぼ中央部に位置する津島遺跡は、縄文時代後期から中・近世に至る複合遺跡として、さらに戦前から全国的にも著名な遺跡としても今日まで多くの人々に知られていました。とりわけ津島遺跡を巡っての昭和43年の武道館事件におきましては、全国規模での保存運動の結果国の史跡に指定され、将来にわたって保護・保存されることとなりました。

今回の発掘調査では、弥生時代前期の水田の広がり、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落のあり方、さらには古代の条里遺構の発見等、数多くの成果をあげることができました。

なかでも、弥生時代後期後半の河道斜面からは近接して存在していたであろう掘立柱建物が一括廃棄された状態で、また数多くの木製品や土器がこれに伴う状況で発見されたことが特筆されます。この発見は、当時の建築建物の実体を知るうえで、さらに生活文化を考えるうえで貴重な資料をもたらしたといえます。

これらの成果を忠実に記録したこの報告書が、岡山平野の歴史・文化を解明する基礎資料として活用されれば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、「津島遺跡検討委員会」委員ならびに同顧問の先生方に多大の御指導を賜りました。また、発掘調査に参加いただきました多くの皆様をはじめ、岡山県国体・障害者スポーツ大会局、岡山県総合グラウンド事務所には温かい御理解と御協力をいただきました。あらためまして関係各位に厚く感謝の意を表します。

平成15年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

歯の鑑別	小田嶋梧郎（岡山大学名誉教授）
炭化物の識別	松谷 暁子（東京大学総合研究博物館）
炭化米のDNA分析	佐藤洋一郎（静岡大学）
漆の分析	四柳 嘉章（漆器文化財科学研究所）
種実同定・灰像分析・年代測定	(株)古環境研究所
ガラス滓の分析	木戸 一博（株式会社ニコン）
植物珪酸体・珪藻・花粉分析	(株)パリノ・サーヴェイ
木器・木材の樹種同定	(財)元興寺文化財研究所
石器・石製品の石材鑑定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学）

- 8 本書の編集・構成は、第2章・第3章第1～4・9・10節を島崎、第1章・第3章第5節を岡本・金田、第3章第6～8節を時實、観察表等を時實、写真図版を時實が担当し、全体にわたって島崎・岡本・時實が行った。
- 9 遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第V系（日本測地系）の座標北である。また、抄録に記載した経緯度は日本測地系に準拠している。
- 2 本報告書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺については明記してあるが、おもなものについて一部例外はあるものの、次のように統一している。

遺構

堅穴住居・掘立柱建物（1/60） 井戸・袋状土壙・土壙・土壙墓・溝断面（1/30）

遺物

土器（1/4） 土製品（1/3） 石器・石製品（1/2・1/3） 骨角器（1/2）

木器・木製品（1/4） 建築部材（1/6） 金属製品（1/3） 玉類（1/1）

- 3 遺構全体図のなかで各遺構名を表示しきれない場合、次のように省略している。

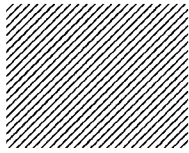
堅穴住居 → 住 掘立柱建物 → 建 袋状土壙 → 袋 土壙 → 土
井戸 → 井

- 4 堅穴住居断面図に記した高度値は、複数の高度値がある場合を除き1か所表記としている。
- 5 本報告書に掲載した遺物の番号については、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、木器・木製品等にわけて通し番号をつけ、土器以外については、次のアルファベットを番号の前に付している。

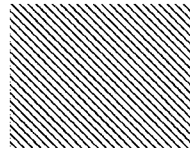
土製品：C 石器・石製品：S 金属器：M 木器・木製品・建築部材・植物製品：W

- 6 本報告書に掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、口径が全体の1/6以下のため口径が不確実なものである。
- 7 土層断面および土器観察表における色調は、『新版標準土色帖（1996年版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所票監修）によっている。
- 8 本報告書に掲載した地図のうち、第2～4図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 9 本報告書に掲載した図版1-2は国土交通省国土地理院の許可を得て、図版1-3は岡山県広報協会の承諾を得て複製・掲載したものである。
- 10 本報告書に用いた遺構・遺物の時代時期区分については、一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。なお、弥生時代・古墳時代の時期区分上での表現については各執筆者の意向に沿っており、あえて統一はしていない。

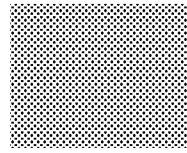
- 11 本報告書に掲載した遺構・遺物図においては、断面・被熱範囲、炭・焼土の分布範囲等を次に示すスクリーントーンで表現している。



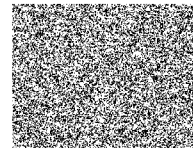
遺構地山、土製品・
金属製品・骨角器断面



石器断面

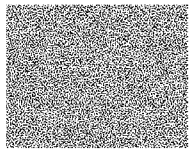


被熱範囲

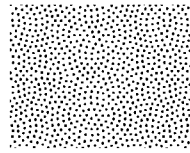


焼土

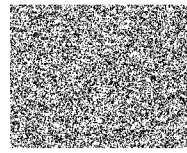
- 12 本報告書に掲載した木器・木製品・建築部材実測図について、樹皮残存部、漆残存部、赤色顔料残存部、欠損部の範囲を下記のスクリーントーンで表現している。



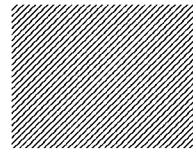
樹皮残存部



漆残存部



赤色顔料残存部



欠損部

本文目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査の契機と経過	7
第1節 発掘調査の契機	7
第2節 発掘調査の体制	13
第3節 発掘調査の経過	15
第4節 日誌抄	17
第5節 報告書の作成と体制	18
第3章 調査区の概要	21
第1節 調査区の概要	21
第2節 基本層序	29
第3節 弥生時代前期の遺構・遺物	31
1 弥生時代前期の概要	31
2 微高地	31
3 水田	33
4 溝	44
5 畔路	49
6 遺構に伴わない遺物	49
第4節 弥生時代中期の遺構・遺物	52
1 弥生時代中期の概要	52
2 土壙墓	52
3 溝	54
4 池	60
第5節 弥生時代後期の遺構・遺物	65
1 弥生時代後期の概要	65
2 竪穴住居	65
3 袋状土壙	95
4 土壙	101
5 溝	140

6	河道	148
7	遺構に伴わない遺物	357
第6節	古墳時代前期の遺構・遺物	361
1	古墳時代前期の概要	361
2	竪穴住居	361
3	掘立柱建物	392
4	井戸	393
5	土壙	399
6	溝	405
7	貝塚	406
第7節	古墳時代中期の遺構・遺物	407
1	古墳時代中期の概要	407
2	竪穴住居	407
3	井戸	429
4	土壙	435
5	溝	436
6	たわみ	437
7	土器溜まり	437
8	河道	444
第8節	古墳時代後期の遺構・遺物	448
1	古墳時代後期の概要	448
2	竪穴住居	448
3	掘立柱建物	462
4	土壙	464
5	溝	467
6	配置土器	467
7	河道	468
8	遺構に伴わない遺物	473
第9節	古代の遺構・遺物	475
1	古代の概要	475
2	土壙	475
3	溝	476
4	遺構に伴わない遺物	483
第10節	中世～近代の遺構・遺物	484
1	中世～近代の概要	484
2	土壙	484
3	溝	485

第4章 まとめ	497
第1節 発掘調査成果の概要	497
第2節 弥生時代前期水田	502
第3節 弥生時代前期水田から出土した円礫	505
第4節 津島遺跡出土の木製品	507
第5節 特殊な壺・器台形土器	516
第6節 「L」字形カマドを付設した竪穴住居について	519

(第2分冊)

附編 岡山県陸上競技場改修に伴う調査の鑑定および自然科学分析

1 岡山県陸上競技場改修に伴う調査の自然科学分析	523
2 津島遺跡の花粉分析	540
3 津島遺跡における灰像分析	544
4 津島遺跡における放射性炭素年代測定	547
5 津島遺跡出土の種実同定	549
6 津島遺跡出土木製品の樹種鑑定	553
7 津島遺跡出土建築材の復原	573
8 津島遺跡出土の弥生時代歯の鑑別	577
9 津島遺跡出土の動物遺存体の分析	581
10 津島遺跡出土炭化物の識別	597
11 津島遺跡出土炭化米のDNA分析	613
12 岡山市津島遺跡出土漆塗木弓の科学分析	617
13 津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物	625
14 津島遺跡出土土器の胎土分析 - 文様のある特殊な壺、器台の分析 -	633
15 津島遺跡出土のガラス滓	637

遺構一覧表

遺物観察表

遺構名称新旧対照表

図版

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1 調査区全景（南西から）	巻頭図版 5	1 弥生時代後期の土器（河道1）
	2 弥生時代前期の水田1（南から）		2 古墳時代前期の土器（土器溜まり1）
巻頭図版 2	1 1区土層断面	巻頭図版 6	河道1出土壺・器台形土器
	2 3区土層断面	巻頭図版 7	1 河道1北岸出土木器（装飾板）
	3 5区土層断面		2 河道1北岸出土木器（鞆装具?）
巻頭図版 3	1 3区弥生時代後期～古墳時代遺構全景（南から）		3 河道1北岸出土木器（盾）
	2 弥生時代後期竪穴住居11～16（南から）	巻頭図版 8	1 籠目土器
巻頭図版 4	1 河道1建築部材検出状況（南から）		2 刻骨
	2 河道1構造物1検出状況（南から）		3 絵画土器

図目次

第1図	遺跡の位置（星印）	第27図	溝1断面図（1/30）
第2図	調査区周辺の地形と主要遺跡分布（1/25,000）	第28図	溝1断面図（1/30）・出土遺物（1/4）
第3図	津島遺跡周辺弥生時代推定地形図（1/10,000）	第29図	溝1断面図（1/30）
第4図	津島遺跡周辺条里推定復元図（1/10,000）	第30図	溝1断面図（1/30）
第5図	岡山県総合グラウンド内発掘調査区配置図 （1/3,000）	第31図	溝1断面図（1/30）
第6図	陸上競技場改修平・断面図（1/2,500）	第32図	溝2断面図（1/30）
第7図	調査区配置図（1/2,000）	第33図	溝3～6断面図（1/30）
第8図	1～3区弥生時代中期～近世遺構全体図（1/800）	第34図	溝7～11断面図（1/30）
		第35図	畔路1・2断面図（1/30）
		第36図	遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）
第9図	1区西壁土層断面図（1/80）	第37図	水田2・4出土礫の分布状況（1/400）
第10図	2区西壁土層断面図（1/80）	第38図	水田出土礫（1/3）
第11図	3区西壁土層断面図（1/80）	第39図	土壙墓1（1/30）
第12図	1・3区土層断面柱状図（1/20）	第40図	溝12～15・池1・土壙墓1（1/300）
第13図	微高地出土遺物（1/4）	第41図	溝12出土遺物（1/4）
第14図	水田1～2・3～4（1/1,000）	第42図	溝12断面図（1/60）
第15図	水田1出土遺物（1/2）	第43図	溝12断面図（1/60）
第16図	水田1・2断面図（横1/182・縦1/36）	第44図	溝13・14断面図（1/60）
第17図	水田1（1/300）	第45図	溝14出土遺物（1/5）
第18図	水田2（1/300）	第46図	溝13出土遺物（1/4）
第19図	水田2出土遺物（1/4・1/2）	第47図	溝14出土遺物（1/4）
第20図	水田3出土遺物（1/4）	第48図	溝15断面図（1/60）
第21図	水田4出土遺物（1/4）	第49図	溝16～21（1/300）
第22図	水田3（1/300）	第50図	溝16断面図（1/60）
第23図	水田5（1/200）・土層断面図（1/50）	第51図	溝17断面図（1/60）
第24図	水田6（1/200）	第52図	溝18断面図（1/60）
第25図	水田6断面図（1/50）	第53図	溝19～21断面図（1/30）
第26図	水田4（1/300）	第54図	池1（1/60）

第55図	池1断面図(1/30) ……………	61	第99図	袋状土壙5出土遺物(1/4) ……………	100
第56図	池1出土遺物①(1/4) ……………	61	第100図	袋状土壙6(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	100
第57図	池1出土遺物②(1/4) ……………	62	第101図	土壙1(1/30) ……………	101
第58図	池1出土遺物③(1/4) ……………	63	第102図	土壙2(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	101
第59図	池1出土遺物④(1/4) ……………	64	第103図	土壙3(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	102
第60図	竪穴住居1(1/60) ……………	66	第104図	土壙4(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	102
第61図	竪穴住居2(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	66	第105図	土壙5(1/30) ……………	103
第62図	弥生時代後期遺構全体図①(1/300) ……………	67・68	第106図	土壙6(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	103
第63図	弥生時代後期遺構全体図②(1/300) ……………	69・70	第107図	土壙7(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	103
第64図	竪穴住居3～5(1/60)・出土遺物①(1/4) ……………	72	第108図	土壙8(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	104
第65図	竪穴住居3～5出土遺物②(1/2) ……………	73	第109図	土壙9(1/30) ……………	104
第66図	竪穴住居3・4(1/60) ……………	73	第110図	土壙10(1/30) ……………	105
第67図	竪穴住居5(1/60) ……………	74	第111図	土壙10出土遺物(1/4・1/1) ……………	106
第68図	竪穴住居6～8(1/60) ……………	75	第112図	土壙11(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	107
第69図	竪穴住居6(1/60) ……………	75	第113図	土壙12(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	108
第70図	竪穴住居7(1/60) ……………	76	第114図	土壙13・14(1/30) ……………	108
第71図	竪穴住居8(1/60) ……………	76	第115図	土壙13出土遺物(1/4) ……………	109
第72図	竪穴住居9(1/60) ……………	78	第116図	土壙15(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	109
第73図	竪穴住居9出土遺物(1/4・1/2) ……………	79	第117図	土壙16・17(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	110
第74図	竪穴住居10(1/60)・中央穴(1/30)・ 出土遺物(1/4) ……………	80	第118図	土壙18(1/30)・出土遺物①(1/4) ……………	111
第75図	竪穴住居11～16(1/60) ……………	81	第119図	土壙18出土遺物②(1/4) ……………	112
第76図	竪穴住居11～16断面図(1/60) ……………	82	第120図	土壙19(1/30) ……………	113
第77図	竪穴住居11(1/60) ……………	83	第121図	土壙19出土遺物(1/4) ……………	113
第78図	竪穴住居12(1/60) ……………	83	第122図	土壙20(1/30) ……………	114
第79図	竪穴住居13(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	84	第123図	土壙21(1/30) ……………	114
第80図	竪穴住居14(1/60) ……………	85	第124図	土壙22(1/30) ……………	115
第81図	竪穴住居15(1/60) ……………	86	第125図	土壙23(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	115
第82図	竪穴住居16(1/60) ……………	87	第126図	土壙24(1/30) ……………	115
第83図	竪穴住居16出土遺物①(1/4・1/3・1/2・1/1) ……………	88	第127図	土壙25(1/30)・出土遺物(1/4・1/3) ……………	116
第84図	竪穴住居16出土遺物②(1/3) ……………	89	第128図	土壙26(1/30)・出土遺物①(1/4) ……………	117
第85図	竪穴住居17(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	89	第129図	土壙26出土遺物②(1/4) ……………	118
第86図	竪穴住居18(1/60)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	90	第130図	土壙27(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	119
第87図	竪穴住居19(1/60) ……………	92	第131図	土壙28(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	119
第88図	竪穴住居19内土壙(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	93	第132図	土壙29・30(1/30) ……………	120
第89図	竪穴住居20(1/60) ……………	94	第133図	土壙31(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	120
第90図	竪穴住居20出土遺物(1/4) ……………	95	第134図	土壙32(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	121
第91図	竪穴住居21(1/60) ……………	95	第135図	土壙33(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	121
第92図	袋状土壙1(1/30)・出土遺物①(1/4) ……………	96	第136図	土壙34(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	121
第93図	袋状土壙1出土遺物②(1/4) ……………	97	第137図	土壙35(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	122
第94図	袋状土壙1出土遺物③(1/4) ……………	98	第138図	土壙36・37(1/30) ……………	123
第95図	袋状土壙2(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	98	第139図	土壙38(1/30) ……………	123
第96図	袋状土壙3(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	98	第140図	土壙39(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	124
第97図	袋状土壙4(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	99	第141図	土壙40(1/30) ……………	124
第98図	袋状土壙5(1/30) ……………	99	第142図	土壙41(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	124
			第143図	土壙42(1/30)・出土遺物①(1/4) ……………	125

第144図	土壙42出土遺物② (1/4) ……………	126	第188図	貝塚1～4断面図 (1/60) ……………	157
第145図	土壙43 (1/30) ……………	126	第189図	貝塚1出土遺物① (1/4) ……………	158
第146図	土壙44 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	126	第190図	貝塚1出土遺物② (1/4) ……………	159
第147図	土壙45・46 (1/30) ……………	127	第191図	貝塚1出土遺物③ (1/4・1/2) ……………	160
第148図	土壙46出土遺物 (1/4) ……………	128	第192図	貝塚2出土遺物 (1/4・1/2) ……………	161
第149図	土壙47 (1/30) ……………	128	第193図	貝塚3出土遺物 (1/4・1/2) ……………	161
第150図	土壙48 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	129	第194図	貝塚4出土遺物 (1/4) ……………	161
第151図	土壙48出土遺物② (1/4) ……………	130	第195図	段階状遺構 (1/30) ……………	161
第152図	土壙48出土遺物③ (1/3) ……………	131	第196図	護岸断面図 (1/60) ……………	161
第153図	土壙49 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	131	第197図	河道1北岸遺物出土状況全体図 (1/200) ……………	162
第154図	土壙50 (1/30) ……………	132	第198図	河道1北岸遺物出土状況① (1/30) ……………	163
第155図	土壙51 (1/30) ……………	132	第199図	河道1北岸遺物出土状況② (1/30) ……………	165・166
第156図	土壙52 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	132	第200図	河道1北岸遺物出土状況③ (1/30) ……………	167・168
第157図	土壙53～55 (1/30) ……………	133	第201図	河道1北岸遺物出土状況④ (1/30) ……………	169・170
第158図	土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	133	第202図	河道1出土土器① (1/4) ……………	172
第159図	土壙57 (1/30) ……………	134	第203図	河道1出土土器② (1/4) ……………	173
第160図	土壙57出土遺物① (1/4) ……………	135	第204図	河道1出土土器③ (1/4) ……………	174
第161図	土壙57出土遺物② (1/4) ……………	136	第205図	河道1出土土器④ (1/4) ……………	175
第162図	土壙57出土遺物③ (1/4) ……………	137	第206図	河道1出土土器⑤ (1/4) ……………	176
第163図	土壙57出土遺物④ (1/3・1/1) ……………	138	第207図	河道1出土土器⑥ (1/4) ……………	177
第164図	土壙58 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	138	第208図	河道1出土土器⑦ (1/4) ……………	178
第165図	土壙58出土遺物② (1/4) ……………	139	第209図	河道1出土土器⑧ (1/4) ……………	179
第166図	土壙59・60 (1/30) ……………	140	第210図	河道1出土土器⑨ (1/4) ……………	180
第167図	溝22断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	140	第211図	河道1出土土器⑩ (1/4) ……………	181
第168図	溝23断面図 (1/30) ……………	140	第212図	河道1出土土器⑪ (1/4) ……………	182
第169図	溝24・25断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	141	第213図	河道1出土土器⑫ (1/4) ……………	183
第170図	溝26断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	142	第214図	河道1出土土器⑬ (1/4) ……………	184
第171図	溝27～30断面図 (1/30) ……………	143	第215図	河道1出土土器⑭ (1/4) ……………	185
第172図	溝31断面図 (1/30) ……………	144	第216図	河道1出土土器⑮ (1/4) ……………	186
第173図	溝32断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	144	第217図	河道1出土土器⑯ (1/4) ……………	187
第174図	溝33断面図① (1/60) ……………	144	第218図	河道1出土土器⑰ (1/4) ……………	188
第175図	溝33断面図② (1/60) ……………	145	第219図	河道1出土土器⑱ (1/4) ……………	189
第176図	溝33出土遺物① (1/4) ……………	145	第220図	河道1出土土器⑲ (1/4) ……………	190
第177図	溝33出土遺物② (1/4) ……………	146	第221図	河道1出土土器⑳ (1/4) ……………	191
第178図	溝33出土遺物③ (1/2) ……………	147	第222図	河道1出土土器㉑ (1/4) ……………	192
第179図	溝34・35断面図 (1/30) ……………	147	第223図	河道1出土土器㉒ (1/4) ……………	193
第180図	河道1出土縄文土器 (1/4) ……………	148	第224図	河道1出土土器㉓ (1/4) ……………	194
第181図	河道1遺物出土状況 (1/300) ……………	149	第225図	河道1出土土器㉔ (1/4) ……………	195
第182図	河道1肩部断面図 (1/30) ……………	150	第226図	河道1出土土器㉕ (1/4・1/2) ……………	196
第183図	河道1中央部断面図 (1/60) ……………	151・152	第227図	河道1出土土器㉖ (1/4) ……………	197
第184図	河道1出土遺物 (古段階) (1/4) ……………	153	第228図	河道1出土土器㉗ (1/4) ……………	198
第185図	河道1出土遺物 (新段階) ① (1/4) ……………	154	第229図	河道1出土土器㉘ (1/4) ……………	199
第186図	河道1出土遺物 (新段階) ② (1/4) ……………	155	第230図	河道1出土土器㉙ (1/4) ……………	201
第187図	河道1内遺構図 (貝塚1～4・護岸施設・ 段階状遺構) (1/150) ……………	156	第231図	河道1出土土器㉚ (1/4) ……………	202
			第232図	河道1出土土器㉛ (1/4) ……………	203

第233図	河道1出土土器㉓ (1/4) ……………	204	有機物層断面図 (1/40) ……………	254	
第234図	河道1出土土器㉔ (1/4) ……………	205	第278図	河道1北岸構造材1 (1/30) ……………	255
第235図	河道1出土土器㉕ (1/4) ……………	206	第279図	河道1北岸構造材2 (1/20) ……………	255
第236図	河道1出土土器㉖ (1/4) ……………	207	第280図	河道1北岸構造材3 (1/20)・ 部材緊縛状況 (1/10) ……………	256
第237図	河道1出土土器㉗ (1/4) ……………	208	第281図	河道1北岸構造材4 (1/30) ……………	256
第238図	河道1出土土器㉘ (1/4) ……………	209	第282図	河道1北岸構造材5 (1/30) ……………	257
第239図	河道1出土土器㉙ (1/4) ……………	210	第283図	河道1北岸構造材6 (1/30) ……………	257
第240図	河道1出土土器㉚ (1/4) ……………	211	第284図	河道1北岸構造材6部材緊縛状況 (1/4) ……………	258
第241図	河道1出土土器㉛ (1/4) ……………	213	第285図	河道1北岸構造材7 (1/30) ……………	259
第242図	河道1出土土器㉜ (1/4) ……………	214	第286図	河道1北岸構造材8 (1/20)、 緊縛状況 (1/4) ……………	260
第243図	河道1出土土器㉝ (1/4) ……………	215	第287図	河道1植物質遺物出土状況 (1/50) ……………	260
第244図	河道1出土土器㉞ (1/4) ……………	216	第288図	河道1北岸出土木器(斧柄)① (1/4) ……………	262
第245図	河道1出土土器㉟ (1/4) ……………	217	第289図	河道1北岸出土木器(斧柄)② (1/4) ……………	263
第246図	河道1出土土器㊱ (1/4) ……………	218	第290図	河道1北岸出土木器(柄) (1/4) ……………	263
第247図	河道1出土土器㊲ (1/4) ……………	220	第291図	河道1北岸出土木器(ナスビ形農耕具)① (1/6) ……………	264
第248図	河道1出土土器㊳ (1/4) ……………	221	第292図	河道1北岸出土木器(ナスビ形農耕具)② (1/6) ……………	265
第249図	河道1出土土器㊴ (1/5・1/4) ……………	223	第293図	河道1北岸出土木器(ナスビ形農耕具)③ (1/6) ……………	266
第250図	河道1出土土器㊵ (1/4) ……………	224	第294図	河道1北岸出土代掻き検出状況 (1/20) ……………	267
第251図	河道1出土土器㊶ (1/4) ……………	225	第295図	河道1北岸出土木器(代掻き) (1/4) ……………	267
第252図	河道1出土土器㊷ (1/4) ……………	226	第296図	河道1北岸出土木器(鋤) (1/6) ……………	268
第253図	河道1出土土器㊸ (1/4) ……………	227	第297図	河道1北岸出土木器(反柄) (1/6) ……………	269
第254図	河道1出土土器㊹ (1/4) ……………	228	第298図	河道1北岸出土木器(柄) (1/6) ……………	270
第255図	河道1出土土器㊺ (1/4) ……………	229	第299図	河道1北岸出土木器(竪杵) (1/6) ……………	271
第256図	河道1出土土器㊻ (1/4) ……………	230	第300図	河道1北岸出土木器(横槌) (1/4) ……………	272
第257図	河道1出土土器㊼ (1/4) ……………	231	第301図	河道1北岸出土木器(編台目盛板) (1/4) ……………	272
第258図	河道1出土土器㊽ (1/4) ……………	232	第302図	河道1北岸出土木器(編台) (1/4) ……………	273
第259図	河道1出土土器㊾ (1/4) ……………	233	第303図	河道1北岸出土木器(木錘) (1/4) ……………	274
第260図	河道1出土土器㊿ (1/4) ……………	235	第304図	河道1北岸出土木器(櫂) (1/6) ……………	275
第261図	河道1出土土器㊱ (1/4) ……………	236	第305図	河道1北岸出土木器(網杵) (1/6) ……………	276
第262図	河道1出土土器㊲ (1/4) ……………	237	第306図	河道1北岸出土木器(柄頭) (1/2) ……………	277
第263図	河道1出土土器㊳ (1/4・1/2) ……………	239	第307図	河道1北岸出土木器(武器・武具他) (1/4) ……………	278
第264図	河道1出土土器㊴ (1/4) ……………	240	第308図	河道1北岸出土木器(盾) (1/4) ……………	279
第265図	河道1出土土器㊵ (1/4) ……………	241	第309図	河道1北岸出土木器(食事具) (1/4) ……………	280
第266図	河道1出土土器㊶ (1/4) ……………	242	第310図	河道1北岸出土木器(容器)① (1/4) ……………	281
第267図	河道1出土土器㊷ (1/4) ……………	243	第311図	河道1北岸出土木器(容器)② (1/4) ……………	282
第268図	河道1出土土器㊸ (1/4・1/2) ……………	244	第312図	河道1北岸出土木器(容器)③ (1/4) ……………	283
第269図	河道1出土土製品 (1/3・1/2) ……………	245	第313図	河道1北岸出土木器(装飾板) (1/4) ……………	284
第270図	河道1出土石器① (1/2・1/3) ……………	247	第314図	河道1北岸出土木器(発火具) (1/4) ……………	285
第271図	河道1出土石器② (1/3) ……………	248	第315図	河道1北岸出土木器(腰掛) (1/4) ……………	285
第272図	河道1出土石器③ (1/3・1/2) ……………	249	第316図	河道1北岸出土用途不明部材① (1/4) ……………	286
第273図	河道1出土石器④ (1/3・1/2) ……………	250			
第274図	河道1出土石器⑤・鉄器 (1/3・1/2) ……………	251			
第275図	河道1出土骨角器① (1/2) ……………	252			
第276図	河道1出土骨角器② (1/2) ……………	253			
第277図	河道1北岸構造材・有機物出土状況 (1/150)、				

第317図	河道1北岸出土用途不明部材② (1/4) ……………	287	第362図	河道1南岸土層断面図 (1/40) ……………	328
第318図	河道1北岸出土用途不明部材③ (1/4) ……………	288	第363図	河道1南岸構造材・木器等出土状況 (1/40)・ 杭位置図 (1/20) ……………	329・330
第319図	河道1北岸出土用途不明部材④ (1/4) ……………	289	第364図	河道1南岸出土土器① (1/4) ……………	332
第320図	河道1北岸部材出土状況 (1/20) ……………	290	第365図	河道1南岸出土土器② (1/4) ……………	333
第321図	河道1北岸出土用途不明部材⑤ (1/6) ……………	290	第366図	河道1南岸出土土器③ (1/4) ……………	334
第322図	河道1北岸出土用途不明部材⑥ (1/8) ……………	291	第367図	河道1南岸出土土器④ (1/4) ……………	335
第323図	河道1北岸出土用途不明部材⑦ (1/4) ……………	292	第368図	河道1南岸出土土器⑤ (1/4) ……………	336
第324図	河道1北岸出土用途不明部材⑧ (1/4) ……………	292	第369図	河道1南岸出土土器⑥ (1/4) ……………	337
第325図	河道1北岸出土木器(編物) (1/4) ……………	293	第370図	河道1南岸出土土器⑦ (1/4) ……………	338
第326図	河道1北岸出土遺物(環・樹皮製品) (1/4) ……	293	第371図	河道1南岸出土骨角器(1/2)・石器(1/3) ……	339
第327図	河道1北岸建築部材出土状況 (1/50) ……………	294	第372図	河道1南岸出土木器(斧柄) (1/4) ……………	340
第328図	河道1北岸出土建築部材① (1/8) ……………	295	第373図	河道1南岸出土木器(ナスビ形農耕具) (1/6) ……………	341
第329図	河道1北岸出土建築部材② (1/12) ……………	296	第374図	河道1南岸出土木器(代掻き) (1/4) ……………	341
第330図	河道1北岸出土建築部材③ (1/8) ……………	297	第375図	河道1南岸出土木器(横鉞) (1/6) ……………	342
第331図	河道1北岸出土建築部材④ (1/8) ……………	298	第376図	河道1南岸出土木器(鋤) (1/6) ……………	342
第332図	河道1北岸出土建築部材⑤ (1/8) ……………	299	第377図	河道1南岸出土木器(反柄・柄) (1/6) ……………	343
第333図	河道1北岸出土建築部材⑥梯子 (1/12) ……	300	第378図	河道1南岸出土木器(堅杵) (1/6) ……………	344
第334図	河道1北岸出土建築部材⑦ (1/12) ……………	301	第379図	河道1南岸出土木器(横植) (1/4) ……………	345
第335図	河道1北岸出土建築部材⑧ (1/12) ……………	302	第380図	河道1南岸出土木器(木錘) (1/4) ……………	346
第336図	河道1北岸出土建築部材⑨ (1/12) ……………	303	第381図	河道1南岸出土木器(櫂) (1/6) ……………	347
第337図	河道1北岸出土建築部材⑩ (1/6) ……………	304	第382図	河道1南岸出土木器(食道具) (1/4) ……………	348
第338図	河道1北岸出土建築部材⑪ (1/4・1/6) ……	305	第383図	河道1南岸出土木器(容器) (1/4) ……………	348
第339図	河道1北岸出土建築部材⑫ (1/6) ……………	306	第384図	河道1南岸出土用途不明部材① (1/4) ……	349
第340図	河道1北岸出土建築部材⑬ (1/6) ……………	307	第385図	河道1南岸出土用途不明部材② (1/4) ……	350
第341図	河道1北岸出土建築部材⑭ (1/8) ……………	308	第386図	河道1南岸出土用途不明部材③ (1/4) ……	351
第342図	河道1北岸出土建築部材⑮ (1/6) ……………	309	第387図	河道1南岸出土用途不明部材④ (1/6) ……	351
第343図	河道1北岸出土建築部材⑯ (1/6) ……………	310	第388図	河道1南岸出土遺物(編物) (1/2) ……………	352
第344図	河道1北岸出土建築部材⑰ (1/8) ……………	311	第389図	河道1南岸出土遺物(樹皮製品) (1/4) ……	353
第345図	河道1北岸出土建築部材⑱ (1/8) ……………	312	第390図	河道1南岸出土用途不明部材⑤ (1/4) ……	353
第346図	河道1北岸出土建築部材⑲ (1/12) ……	313	第391図	河道1南岸出土用途不明部材⑥ (1/8・1/12) ……………	354
第347図	河道1北岸出土建築部材⑳ (1/6) ……………	314	第392図	河道1南岸出土遺物(導管) (1/8) ……………	355
第348図	河道1北岸出土部材① (1/6) ……………	315	第393図	河道1南岸出土二股杭 (1/8・1/12) ……	356
第349図	河道1北岸出土部材② (1/4) ……………	316	第394図	遺構に伴わない遺物① (1/2) ……………	358
第350図	河道1北岸出土部材③ (1/4) ……………	317	第395図	遺構に伴わない遺物② (1/3) ……………	359
第351図	河道1北岸出土部材④ (1/8) ……………	318	第396図	遺構に伴わない遺物③ (1/3・1/2) ……	360
第352図	河道1北岸出土部材⑤ (1/6) ……………	319	第397図	竪穴住居23 (1/60) ……………	362
第353図	河道1北岸出土部材⑥ (1/32・1/8) ……	320	第398図	古墳時代遺構全体図① (1/300) ……	363・364
第354図	河道1北岸部材出土状況 (1/20) ……………	321	第399図	古墳時代遺構全体図② (1/300) ……	365・366
第355図	河道1北岸出土部材⑦ (1/8) ……………	322	第400図	竪穴住居24 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……	367
第356図	河道1北岸出土部材⑧ (1/8) ……………	323	第401図	竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	367
第357図	河道1北岸出土部材⑨ (1/8) ……………	323	第402図	竪穴住居26 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	368
第358図	河道1北岸出土二股杭 (1/8・1/12) ……	324	第403図	竪穴住居27 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	368
第359図	河道1北岸出土木製品(二股材) (1/12) ……	325			
第360図	河道1北岸出土杭① (1/8) ……………	325			
第361図	河道1北岸出土杭② (1/12) ……………	326			

第404図	竪穴住居28 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	369	第446図	土壙65 (1/30) ……………	400
第405図	竪穴住居29 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	370	第447図	土壙66 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	400
第406図	竪穴住居30 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	371	第448図	土壙67 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	401
第407図	竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	372	第449図	土壙68 (1/15)・出土遺物① (1/4) ……………	402
第408図	竪穴住居32 (1/60) ……………	373	第450図	土壙68出土遺物② (1/4) ……………	403
第409図	竪穴住居33 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	373	第451図	土壙69・70 (1/30) ……………	403
第410図	竪穴住居34 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	374	第452図	土壙71 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	403
第411図	竪穴住居35 (1/60)・出土遺物① (1/1・1/2) …	375	第453図	土壙72・73 (1/30) ……………	404
第412図	竪穴住居35出土遺物② (1/4) ……………	376	第454図	土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	404
第413図	竪穴住居36 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	377	第455図	土壙75・76 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	405
第414図	竪穴住居37 (1/60) ……………	377	第456図	土壙77 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	405
第415図	竪穴住居37出土遺物 (1/4) ……………	378	第457図	溝36断面図 (1/30) ……………	406
第416図	竪穴住居38 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	378	第458図	溝37・38断面図 (1/30) ……………	406
第417図	竪穴住居39 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2・1/1) ……………	379	第459図	貝塚5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	406
第418図	竪穴住居40 (1/60) ……………	380	第460図	竪穴住居50 (1/60)・土壙 (1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	408
第419図	竪穴住居41 (1/60) ……………	381	第461図	竪穴住居51 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	409
第420図	竪穴住居42 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	381	第462図	竪穴住居52 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	410
第421図	竪穴住居43 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	382	第463図	竪穴住居53 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	410
第422図	竪穴住居43中央穴 (1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	383	第464図	竪穴住居54 (1/60)・カマド (1/30)・ 出土遺物 (1/4) ……………	411
第423図	竪穴住居44 (1/60)・出土遺物 (1/2) ……………	383	第465図	竪穴住居55 (1/60) ……………	412
第424図	竪穴住居45 (1/60)・ 出土遺物 (1/4・1/1・1/2) ……………	384	第466図	竪穴住居55カマド (1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	413
第425図	竪穴住居46 (1/60)・住居内土壙 (1/30) ……	385	第467図	竪穴住居56 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/1・1/4・1/2) ……………	414
第426図	竪穴住居46出土遺物① (1/4) ……………	386	第468図	竪穴住居57 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	415
第427図	竪穴住居46出土遺物② (1/4) ……………	387	第469図	竪穴住居58 (1/60)・火処 (1/30)・ 出土遺物① (1/4) ……………	416
第428図	竪穴住居46出土遺物③ (1/4) ……………	388	第470図	竪穴住居58出土遺物② (1/3) ……………	417
第429図	竪穴住居46出土遺物④ (1/4・1/2) ……………	389	第471図	竪穴住居59 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	417
第430図	竪穴住居47 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	390	第472図	竪穴住居60 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	418
第431図	竪穴住居48 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	390	第473図	竪穴住居60カマド (1/30) ……………	419
第432図	竪穴住居49 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	391	第474図	竪穴住居61 (1/60)・出土遺物① (1/3) ……	419
第433図	竪穴住居49中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	392	第475図	竪穴住居61出土遺物② (1/4) ……………	420
第434図	掘立柱建物1 (1/60) ……………	392	第476図	竪穴住居62 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	420
第435図	井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	393	第477図	竪穴住居63 (1/60) ……………	421
第436図	井戸1出土遺物② (1/4) ……………	394	第478図	竪穴住居63出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……	422
第437図	井戸2 (1/30) ……………	394	第479図	竪穴住居64 (1/60) ……………	422
第438図	井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	395	第480図	竪穴住居64カマド (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	423
第439図	井戸4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	396	第481図	竪穴住居65 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	423
第440図	井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	397	第482図	竪穴住居66 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	424
第441図	井戸5出土遺物② (1/4) ……………	398	第483図	竪穴住居67 (1/60)・カマド (1/30)・ 出土遺物 (1/4) ……………	425
第442図	土壙61 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	399	第484図	竪穴住居68 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……	426
第443図	土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	399			
第444図	土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	399			
第445図	土壙64 (1/30) ……………	400			

第485図	竪穴住居68出土遺物② (1/4) ……………	427	第527図	竪穴住居82 (1/60) ……………	459
第486図	竪穴住居69 (1/60) ……………	427	第528図	竪穴住居82カマド (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	460
第487図	竪穴住居69カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	428	第529図	竪穴住居83 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	461
第488図	竪穴住居70 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	428	第530図	掘立柱建物 2 (1/60) ……………	462
第489図	井戸 6 (1/30)・出土遺物① (1/2・1/4) ……	429	第531図	掘立柱建物 3 (1/60) ……………	463
第490図	井戸 6 出土遺物② (1/4) ……………	430	第532図	土壙82・83 (1/30) ……………	464
第491図	井戸 7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	431	第533図	土壙84 (1/30) ……………	464
第492図	井戸 8 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	432	第534図	土壙85 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	464
第493図	井戸 8 出土遺物② (1/4) ……………	433	第535図	土壙86 (1/30) ……………	465
第494図	井戸 9 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/2) ……	434	第536図	土壙87 (1/30) ……………	465
第495図	井戸 9 出土遺物② (1/4) ……………	435	第537図	土壙88 (1/30)・出土遺物 (1/6) ……………	465
第496図	土壙78・79 (1/30) ……………	435	第538図	土壙89 (1/30) ……………	466
第497図	土壙80・81 (1/30)・土壙81出土遺物 (1/4) ……	436	第539図	土壙90 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	466
第498図	溝39 (1/30) ……………	436	第540図	土壙91 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	466
第499図	溝39出土遺物 (1/4) ……………	437	第541図	溝40断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	467
第500図	たわみ 1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	437	第542図	溝41断面図 (1/30) ……………	467
第501図	土器溜まり 1 (1/20) ……………	438	第543図	配置土器 (1/10)・出土遺物 (1/4) ……	468
第502図	土器溜まり 1 出土遺物① (1/4) ……………	439	第544図	河道 2 出土遺物① (1/4) ……………	469
第503図	土器溜まり 1 出土遺物② (1/4) ……………	440	第545図	河道 2 出土遺物② (1/4) ……………	470
第504図	土器溜まり 1 出土遺物③ (1/4) ……………	441	第546図	河道 2 出土遺物③ (1/4) ……………	471
第505図	土器溜まり 1 出土遺物④ (1/4・1/2) ……	442	第547図	河道 2 出土遺物④ (1/4) ……………	472
第506図	土器溜まり 1 出土遺物⑤ (1/2) ……………	443	第548図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	473
第507図	河道 1 出土遺物① (1/4) ……………	444	第549図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/1・1/2) ……	474
第508図	河道 1 出土遺物② (1/4) ……………	445	第550図	土壙92・93・溝42 (1/300) ……………	475
第509図	河道 1 出土遺物③ (1/4) ……………	446	第551図	土壙92 (1/30) ……………	476
第510図	河道 1 出土遺物④ (1/4・1/2) ……………	447	第552図	土壙93 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	476
第511図	竪穴住居71 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……	449	第553図	土壙94 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	476
第512図	竪穴住居72 (1/60) ……………	449	第554図	古代遺構全体図 (3区) (1/300) ……	477・478
第513図	竪穴住居73 (1/60) ……………	450	第555図	溝42断面図 (1/60) ……………	479
第514図	竪穴住居73カマド (1/30)・ 出土遺物 (1/2・1/4) ……………	451	第556図	溝42出土遺物① (1/4・1/2) ……	480
第515図	竪穴住居74 (1/60) ……………	452	第557図	溝42出土遺物② (1/3・1/2) ……	481
第516図	竪穴住居75 (1/60)・出土遺物① (1/4) ……	452	第558図	溝43～47断面図 (1/30) ……………	481
第517図	竪穴住居75カマド (1/30)・ 出土遺物② (1/4) ……………	453	第559図	溝48断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	481
第518図	竪穴住居76 (1/60) ……………	454	第560図	溝49・50 (1/20) ……………	482
第519図	竪穴住居77 (1/60) ……………	454	第561図	溝49・50断面図 (1/80) ……………	482
第520図	竪穴住居77カマド (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	455	第562図	溝49出土遺物 (1/4) ……………	482
第521図	竪穴住居78 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/1) ……	456	第563図	溝50出土遺物 (1/4) ……………	483
第522図	竪穴住居79カマド (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	456	第564図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	483
第523図	竪穴住居80 (1/60) ……………	457	第565図	土壙95 (1/30) ……………	484
第524図	竪穴住居80カマド (1/30)・ 出土遺物 (1/1・1/2・1/4) ……	458	第566図	土壙96 (1/30) ……………	485
第525図	竪穴住居81 (1/60) ……………	458	第567図	溝51断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	485
第526図	竪穴住居81出土遺物 (1/1・1/2・1/3・1/6) ……	459	第568図	溝52・53断面図 (1/60) ……………	486
			第569図	溝52出土遺物 (1/4) ……………	486
			第570図	中世～近代遺構全体図① (1/300) ……	487・488
			第571図	中世～近代遺構全体図② (1/300) ……	489・490

第572図	溝53出土遺物① (1/4) ……………	491	第588図	時代別遺構変遷図③ (1/1, 200) ……………	500
第573図	溝53出土遺物② (1/4・1/5) ……………	492	第589図	岡山県総合グラウンド調査区位置図 (1/6, 000) ……………	502
第574図	溝54断面図 (1/30) ……………	493	第590図	下層水田遺構全体図 (1/1, 250) ……………	503
第575図	溝55断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	493	第591図	溝2 試料採取土層……………	503
第576図	溝56断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	493	第592図	津島遺跡弥生時代前期水田出土の円礫の大きさと重さの分布……………	505
第577図	溝57断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	494	第593図	石製投弾出土例 (1/4) ……………	506
第578図	溝58断面図 (1/30) ……………	494	第594図	農耕具の分類 (1) (1/12) ……………	508
第579図	溝59・60断面図 (1/30)・溝59出土遺物 (1/4) ……………	494	第595図	農耕具の分類 (2) (1/12) ……………	509
第580図	溝61断面図 (1/30) ……………	495	第596図	建築部材の分類 (1) ……………	511
第581図	溝62断面図 (1/30) ……………	495	第597図	建築部材の分類 (2) ……………	512
第582図	溝63～65断面図 (1/30) ……………	495	第598図	建築部材の分類 (3) ……………	513
第583図	溝66断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	495	第599図	建築部材の分類 (4) ……………	514
第584図	溝67・68断面図 (1/30)・溝67出土遺物 (1/4) ……………	496	第600図	壺・器台形土器推定復元図 (1/8) ……………	517
第585図	溝69断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	496			
第586図	時代別遺構変遷図① (1/1, 200) ……………	498			
第587図	時代別遺構変遷図② (1/1, 200) ……………	499			

図 版 目 次

図版 1	1 遠景 (南西から)		2 竪穴住居 9 (東から)	
	2 空中写真 (昭和23年 南から)		3 竪穴住居10 (東から)	
	3 空中写真 (昭和37年 北東から)		図版10	1 竪穴住居11～16 (南から)
図版 2	1 水田 1 (西上空から)		2 竪穴住居17 (西から)	
	2 水田 1 (南西から)		3 竪穴住居18 (南東から)	
	3 水田 1 石包丁出土状況 (南西から)		図版11	1 竪穴住居19 (東から)
図版 3	1 水田 1 (南から)		2 竪穴住居20 (東から)	
	2 水田 1 (北西から)		3 竪穴住居21 (南東から)	
	3 水田 3 (南西から)		図版12	1 袋状土壙 1 (北東から)
図版 4	1 水田 2 (南から)		2 袋状土壙 4 (南東から)	
	2 水田 4 (北東から)		3 土壙10 (北東から)	
	3 水田 4 (南から)		図版13	1 土壙10炭化米出土状況 (南東から)
図版 5	1 溝12・33 (南西から)		2 土壙18 (北東から)	
	2 溝12・33土層断面 (南西から)		3 土壙57 (南東から)	
	3 溝12・33土層断面 (北東から)		図版14	1 河道 1 全景 (南から)
図版 6	1 溝33 (南から)		2 河道 1 北岸遺物出土状況 (東から)	
	2 溝16～21 (南西から)		3 河道 1 北岸木製品出土状況 (北東から)	
	3 土壙墓 1 (南西から)		図版15	1 河道 1 北岸貝塚 1・階段状遺構 (東から)
図版 7	1 溝12～14・池 1 (南から)		2 河道 1 北岸貝塚 4 (南から)	
	2 池 1 堰 (南から)		3 河道 1 北岸護岸杭列 (西から)	
	3 池 1 籠状有機物出土状況 (南から)		図版16	1 河道 1 北岸建築部材出土状況 1 (南東から)
図版 8	1 竪穴住居 1 (南から)		2 河道 1 北岸建築部材出土状況 2 (南から)	
	2 竪穴住居 2 (東から)		3 河道 1 北岸建築部材出土状況 3 (東から)	
	3 竪穴住居 3～5 (北から)		図版17	1 河道 1 北岸構造材 1 出土状況 (南から)
図版 9	1 竪穴住居 6～8 (南から)		2 河道 1 北岸構造材 2 出土状況 (南東から)	

- 3 河道1北岸構造材7出土状況(南東から)
- 図版18 1 河道1北岸構造材3出土状況(南から)
2 河道1北岸構造材3緊縛状況1(東から)
3 河道1北岸構造材3緊縛状況2(東から)
- 図版19 1 河道1北岸構造材5出土状況(北東から)
2 河道1北岸構造材6出土状況1(南東から)
3 河道1北岸構造材6出土状況2(北西から)
- 図版20 1 河道1北岸構造材6緊縛状況(北から)
2 河道1北岸構造材6緊縛状況(北から)
3 河道1北岸構造材6緊縛状況(南から)
- 図版21 1 河道1北岸植物樹皮出土状況(南西から)
2 河道1北岸植物性繊維出土状況(南から)
3 河道1北岸植物性繊維出土状況(南から)
- 図版22 1 河道1北岸植物性繊維出土状況(西から)
2 河道1北岸植物性繊維出土状況(南東から)
3 河道1北岸植物性繊維および構造材出土状況(北から)
- 図版23 1 河道1北岸遺物出土状況1(北東から)
2 河道1北岸赤色顔料出土土器(南東から)
3 河道1北岸土器内植物繊維出土状況(南から)
- 図版24 1 河道1北岸ナスビ形農耕具出土状況(東から)
2 河道1北岸ナスビ形農耕具出土状況(北から)
3 河道1北岸鋤出土状況(北から)
- 図版25 1 河道1北岸代掻き出土状況(東から)
2 河道1北岸反柄出土状況(北から)
3 河道1北岸装飾板出土状況(南から)
- 図版26 1 河道1北岸腰掛け出土状況(南から)
2 河道1北岸先端加工材出土状況(北から)
3 河道1北岸環出土状況(東から)
- 図版27 1 河道1北岸蹴放し出土状況(北西から)
2 河道1北岸槍状部材出土状況(北西から)
3 河道1北岸粗加工材出土状況(南西から)
- 図版28 1 河道1南岸木製品出土状況(北東から)
2 河道1南岸代掻き出土状況(南から)
3 河道1南岸刻骨出土状況(北から)
- 図版29 1 竪穴住居28(北東から)
2 竪穴住居29(南東から)
3 竪穴住居30(南東から)
- 図版30 1 竪穴住居31(北東から)
2 竪穴住居34(南西から)
3 竪穴住居35(南東から)
- 図版31 1 竪穴住居36(北東から)
2 竪穴住居37(北東から)
3 竪穴住居39(西から)
- 図版32 1 竪穴住居40・41(北東から)
- 2 竪穴住居42(南東から)
3 竪穴住居43(北西から)
- 図版33 1 竪穴住居45(南西から)
2 竪穴住居46(南から)
3 竪穴住居49(南東から)
- 図版34 1 井戸1(南から)
2 井戸2(北から)
3 井戸5(北西から)
- 図版35 1 土壙67炭化米出土状況(北東から)
2 土壙68製塩土器出土状況(北東から)
3 竪穴住居51(南東から)
- 図版36 1 竪穴住居54(北東から)
2 竪穴住居54カマド(北から)
3 竪穴住居54カマド(北西から)
- 図版37 1 竪穴住居55炭化材出土状況(南東から)
2 竪穴住居55カマド(南東から)
3 竪穴住居56・73(南東から)
- 図版38 1 竪穴住居57(南から)
2 竪穴住居58(南東から)
3 竪穴住居59(南東から)
- 図版39 1 竪穴住居60(南から)
2 竪穴住居60カマド(南から)
3 竪穴住居61(南から)
- 図版40 1 竪穴住居62(北西から)
2 竪穴住居63(南から)
3 竪穴住居64(南西から)
- 図版41 1 竪穴住居66(南東から)
2 竪穴住居67(南西から)
3 竪穴住居67カマド(北西から)
- 図版42 1 竪穴住居68(南東から)
2 竪穴住居69(南東から)
3 竪穴住居69カマド(南から)
- 図版43 1 竪穴住居70(東から)
2 井戸6(西から)
3 井戸7(南東から)
- 図版44 1 井戸8(北から)
2 井戸9下層土器出土状況(東から)
3 土器溜まり1(西から)
- 図版45 1 土器溜まり1(東から)
2 竪穴住居73(南東から)
3 竪穴住居74(南から)
- 図版46 1 竪穴住居75(東から)
2 竪穴住居75カマド(東から)
3 竪穴住居77(南から)
- 図版47 1 竪穴住居80(南から)

	2 竪穴住居82 (南東から)
	3 竪穴住居83 (南東から)
図版48	1 掘立柱建物2 (南から)
	2 配置土器1出土状況 (南から)
	3 河道2 (北から)
図版49	1 3区全景 (北から)
	2 溝42 (西から)
	3 溝43~48 (北西から)
図版50	1 4区溝49・50 (南から)
	2 4区水田5 (南東から)
	3 5区調査区全景 (北東から)
図版51	弥生時代前期 (微高地 水田1~3) 出土土器・土製品・石器・礫
図版52	弥生時代中期 (溝13) 出土土器
図版53	弥生時代後期 (袋状土壙1・5) 出土土器
図版54	弥生時代後期 (土壙57) 出土土器・玉類
図版55	弥生時代後期 (河道1) 出土土器
図版56	弥生時代後期 (河道1) 出土土器 (籠目土器)
図版57	弥生時代後期 (河道1) 出土特殊台形土器・線刻土器・土製品・石製品
図版58	弥生時代後期 (河道1) 出土骨角器
図版59	古墳時代前・中期 (井戸3・6・7、竪穴住居26) 出土土器
図版60	古墳時代中・後期 (土器溜まり1、竪穴住居68、配置土器) 出土土器

図版61	古墳時代前~後期出土石製品・土製品・金属器
図版62	古代~中世 (溝42・53、包含層) 出土土器・金属器
図版63	河道1出土木器 (斧柄)
図版64	河道1出土木器 (ナスビ形農耕具)
図版65	河道1出土木器 (代掻き・鋤)
図版66	河道1出土木器 (反柄・柄・横杵)
図版67	河道1出土木器 (竪杵・編台目盛板・編台・木錘)
図版68	河道1出土木器 (櫛・網杵・柄頭)
図版69	河道1出土木器 (武器・武具・盾)
図版70	河道1出土木器 (食事具・容器)
図版71	河道1出土木器 (裝飾板・発火具・腰掛)
図版72	河道1出土用途不明部材
図版73	河道1出土建築部材
図版74	河道1出土建築部材
図版75	河道1出土建築部材
図版76	河道1出土建築部材・部材
図版77	河道1出土建築部材
図版78	河道1出土部材・二股杭
図版79	河道1出土木器 (斧柄・代掻き・鋤・反柄・柄)
図版80	河道1出土木器 (木錘・横杵・櫛)
図版81	河道1出土木器 (食事具・容器・用途不明部材・編物・樹皮製品・導管)
図版82	井戸6・河道2出土木器・河道1出土部材 (緊縛状況)

表 目 次

表1	調査工程表..... 16	表3	河道1南岸出土木製品出土点数と割合..... 340
表2	河道1北岸出土木製品出土点数と割合..... 261	表4	中期の竪穴住居の規模..... 519

写 真 目 次

写真1	溝2試料採取土層断面..... 503
-----	---------------------

第1章 地理的・歴史的環境

津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町の県総合グラウンドを中心に、北東から南西に伸びる微高地上に立地する複合遺跡である。地形的には、岡山県三大河川の一つである旭川西岸の沖積平野に立地し、遺跡の内容としては集落および水田が主体をなす。

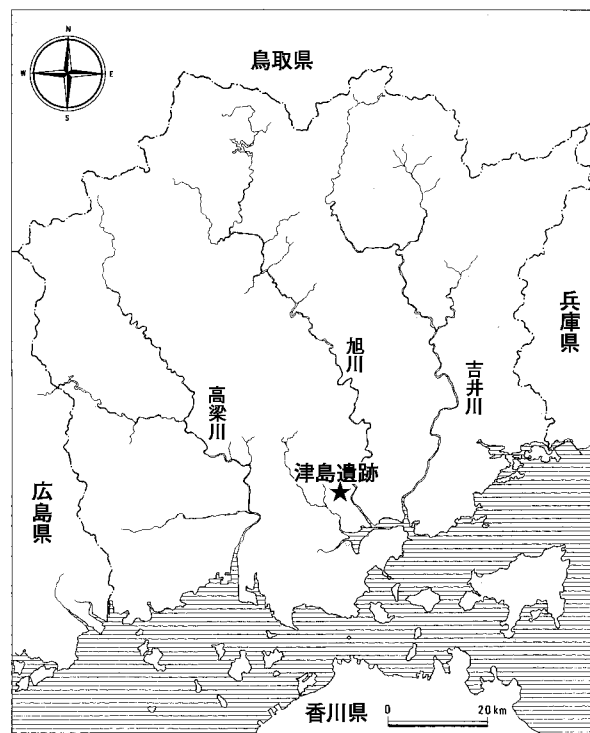
海水面が現在より最大で100m以上も低かった旧石器時代には、瀬戸内海は完全な陸地であった。岡山平野も例外ではなく、ボーリング調査の成果によると、旭川下流域では地表下約17mに当時の地表面に相当する更新世の砂礫層が認められるという（註1）。その後、いわゆる縄文海進の開始に伴って陸地は海没し、海進最大時には現在の吉備高原南端部が海岸線となったと考えられている。そこへ吉備高原を流下してきた旭川をはじめとする大小の河川が流れ込み、吐き出される土砂は海底に堆積し、現在の岡山平野を形作っていった。

また、近世以降は農地拡大を目的に干拓事業が推進され、平野はさらに南へと拡大していく。現在の広大な岡山平野のうち操山山塊より南側の部分は、こうした干拓事業によって出現した人工的な地形である。したがって、中世以前の生活の舞台は操山よりも北側の地域であり、時代を遡るほどその範囲は北部へと限定されることになる。

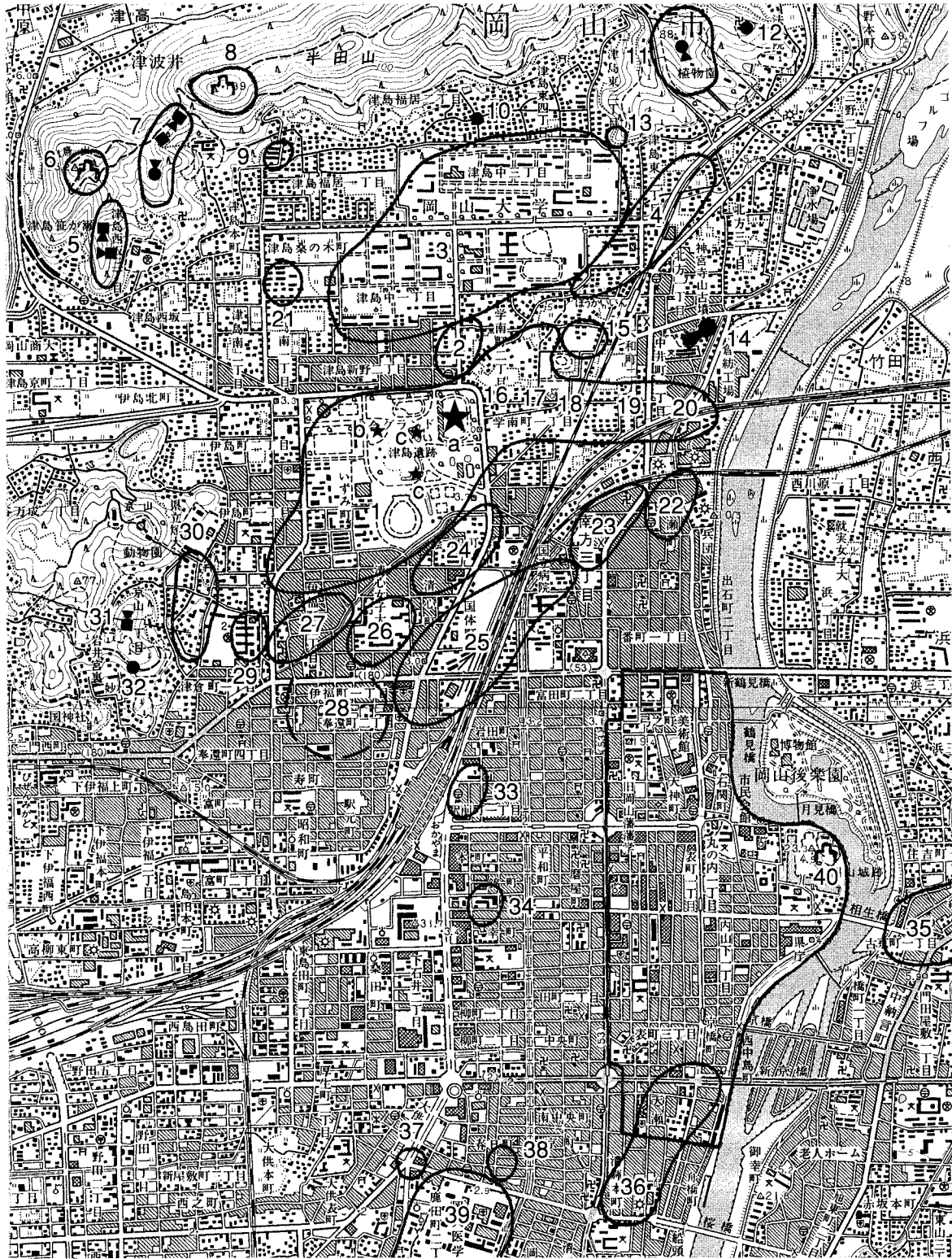
さて、岡山平野北端部近くに位置する津島遺跡周辺に着目すると、旭川の右岸にあって現在はほぼ平坦な地形であるこの一帯も、かつては第3図に示すように何条もの河川が網目状に分流し、その間に大小さまざまな規模の微高地が点在する複雑な地形であった。微高地の多くは、河川の流路に規制されて北東から南西に細長く伸びた鳥状を呈する。津島遺跡も、このような微高地上に展開した遺跡の一つであり、北隣の津島岡大遺跡と並んで近隣では最大級の面積を誇っている。

津島遺跡の周辺は、微高地上を中心として遺跡の密集する地帯であるが、大部分は弥生時代以降に属するものである。旧石器時代の遺跡は平野部では無論、北側の丘陵上でも未だ確認されておらず、やや内陸部に位置する田益田中遺跡において縄文時代晩期の河道に混入する形でナイフ形石器が出土している程度である（註2）。

縄文時代になると、平野部への人々の進出が活発化し、遺跡数も徐々に増加していくが、津島遺跡周辺では北側の半田山南麓に分布が集中する。形成時期が前期に遡る遺跡としては、津島岡大遺跡と朝寝鼻貝塚が挙げられる。朝寝鼻貝塚では、最近前期の層からイネのプラントオパールが検出され、稲作の起源との絡みで注目を集めている（註3）。ただ、本格的な定住の



第1図 遺跡の位置（星印）



1. 津島遺跡 (a : 陸上競技場 b : 武道館建設当初予定地 c : 北・南池) 2. 津島新野遺跡 3. 津島岡大遺跡
 4. 津島江道遺跡 5. 七つ坑古墳群 6. 烏山城跡 7. 都月坂墳墓群 8. 半田山城跡 9. 津島福居遺跡 10. お塚様古墳 11. 一本松古墳群 12. 不動堂古墳 13. 朝寝鼻貝塚 14. 神宮寺山古墳 15. 散布地 16. 北方下沼遺跡 17. 北方横田遺跡 18. 北方中溝遺跡 19. 北方藪ノ内遺跡 20. 北方藪ノ内遺跡 21. 散布地 22. 広瀬遺跡 23. 南方遺跡 24. 絵図遺跡 25. 南方遺跡 26. 上伊福九坪遺跡 27. 上伊福遺跡 28. 散布地 29. 伊福定国前遺跡 30. 上伊福西遺跡 31. 津倉古墳 32. 妙林寺古墳 33. 散布地 34. 散布地 35. 古京遺跡 36. 天瀬遺跡 37. 散布地 38. 散布地 39. 鹿田遺跡 40. 岡山城跡

第2図 調査区周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000)

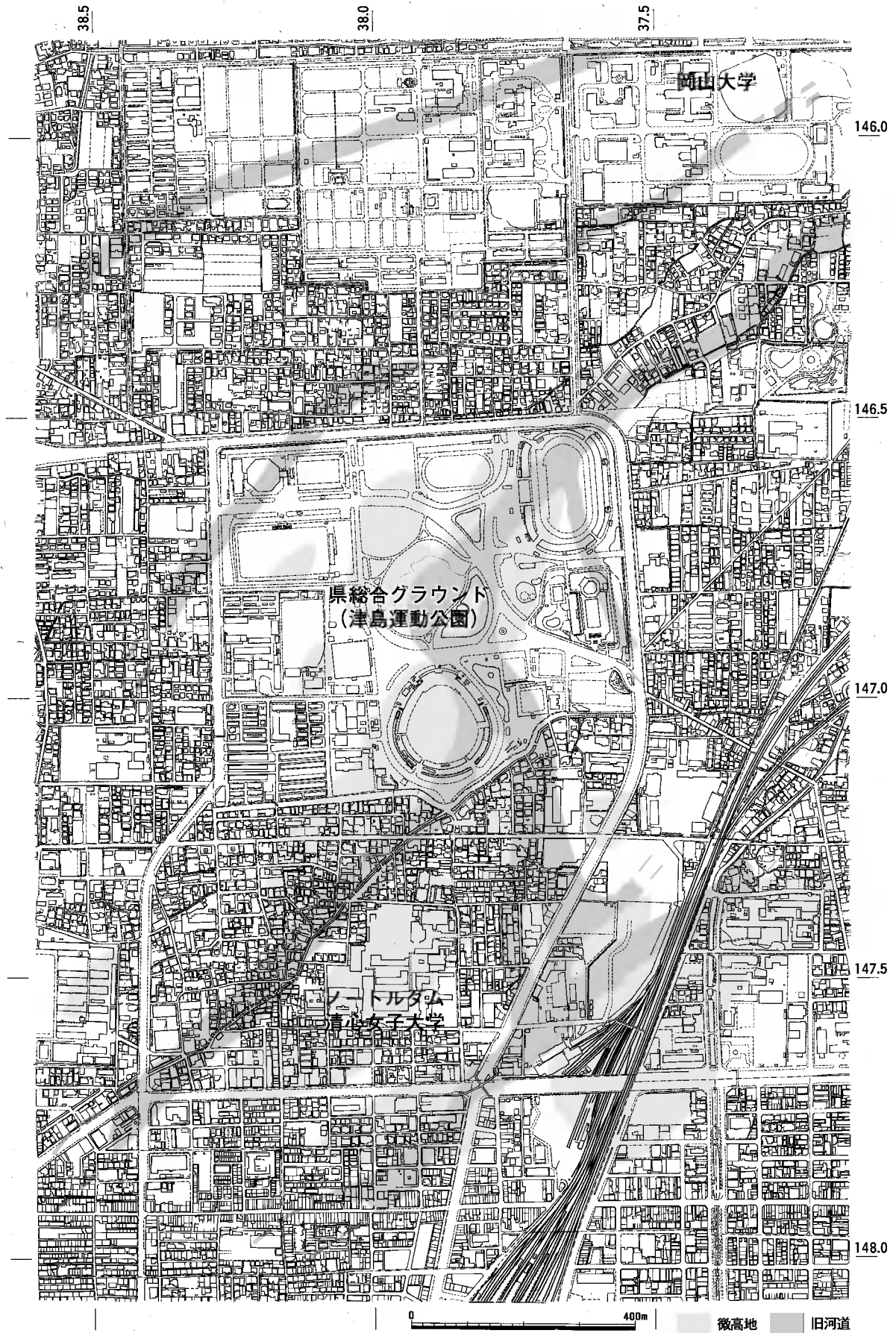
開始は後期に入ってからで、朝寝鼻貝塚や津島岡大遺跡などでもこの時期に至って定住が開始される。津島岡大遺跡では炉や貯蔵穴といった集落に伴う遺構が検出された（註4）。遺跡の拡大・発展は晩期にも続き、遺構・遺物の量も増加してゆく。津島遺跡でもトレンチ調査によって遺構・遺物がわずかながら検出され、人間の活動が晩期まで遡ることが確認された（註5）。しかし、本格的な定住であったかは定かではない。

弥生時代に入ると、微高地縁辺部の低湿地で本格的な稲作が開始される。津島江道遺跡では縄文晩期ないし弥生早期とされる水田の検出が報告されているが、これについては疑問視する意見もある（註6）。前期に至ると水田面積は飛躍的な拡大を見せ、津島遺跡のほか津島岡大遺跡や北方下沼・地蔵・横田遺跡などにも水田が拓かれてゆく。水田面は畦畔で区画され、用排水路も整備されるなど当時の技術水準がうかがわれる。水田層内からは稲作の指標となるイネのプラントオパールも検出されている。ただ、これら「稲作跡」が即「水田」を意味するか否かについては近年疑問視する声もあり、今後さらなる検討が必要であろう（註7）。一方、同時期の集落は津島遺跡で微高地上の堅穴住居・掘立柱建物が検出され、遺物も多数出土するなど（註8）存在は確実であるが明確な遺構が少なく、水田経営の母体となるべき集落の様相が今一つ明らかでない。

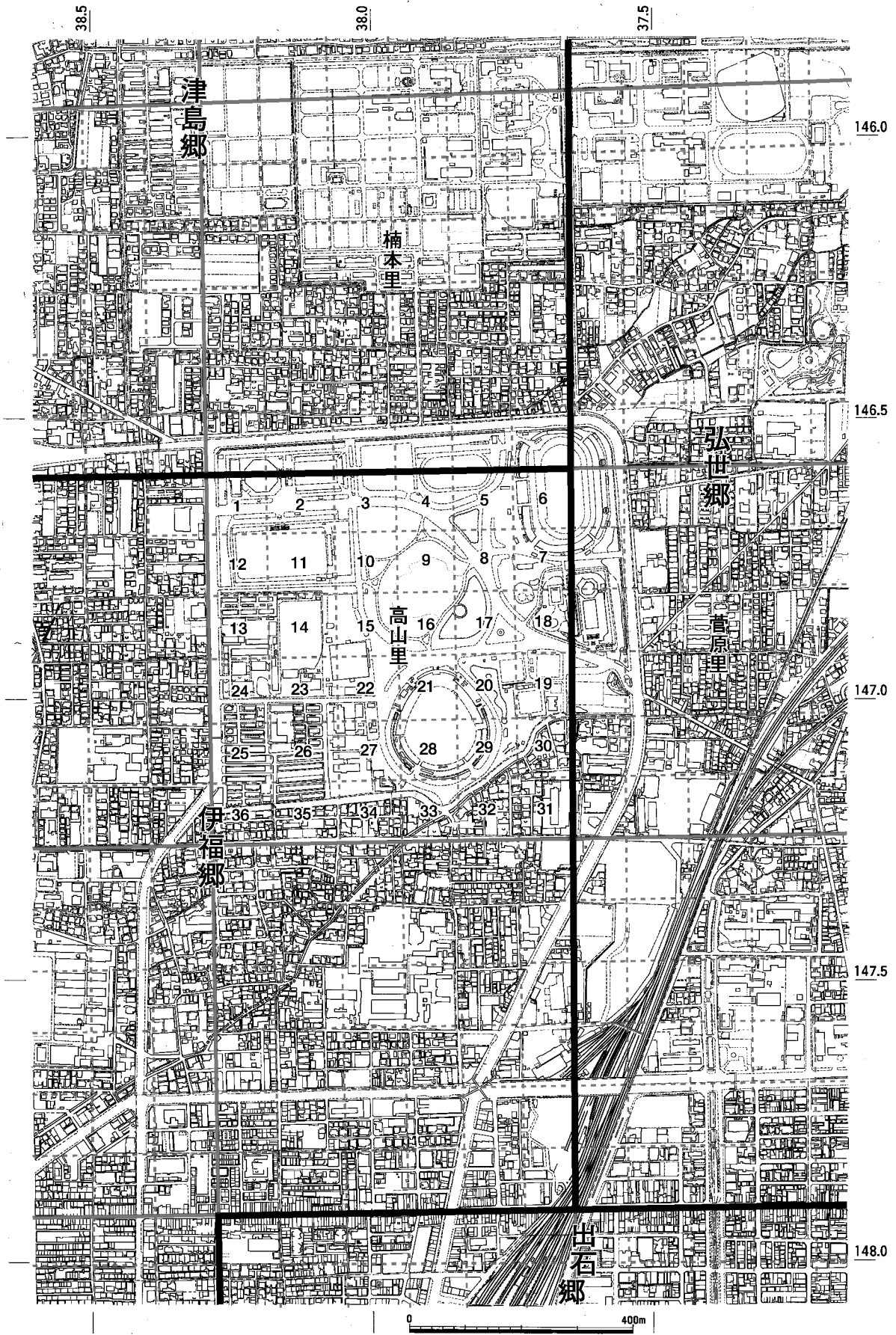
弥生時代中期の遺跡は、津島遺跡よりも南側を中心に分布する傾向がみられ、南方遺跡や上伊福九坪遺跡では多くの遺構・遺物が出土し、集落の拡大がうかがわれる。特に南方遺跡においては、微高地上で堅穴住居・土壙墓などの遺構が検出されたほか、河道から精巧な加工の施された木製品が多数出土し、石器未製品などの存在から石器製作も行われたことが推測される（註9）。この他、北方中溝遺跡では水田域も検出されている（註10）が、削平等の影響か、前期ほどの広がりは見られない。

弥生時代後期に至ると、沖積作用の進展により微高地間の低位部や河道が埋没し、微高地の面積はさらに拡大し、立地する集落も一層の発展を見せる。この時期の遺構は周辺の微高地上では普遍的に検出される。津島遺跡では多数の堅穴住居のほか、河道内から後半期の建築部材を始めとする多量の木製品が出土している。津島江道遺跡では、後期前半から古墳前期までの集落が検出され、多くの住居から獣骨や骨製品が出土することから骨角器製作集団の集落と考えられている（註11）。南方遺跡では土器棺や土壙墓が検出され、中期同様集落周辺に形成された墓域がみられる。津島遺跡の西側では伊福定国前遺跡が挙げられる（註12）。南部に目を向けると、天瀬遺跡や鹿田遺跡で中期末から後期にかけて集落が形成される。鹿田遺跡では後期を中心とする集落が存在し、多数の製塩土器の出土と立地条件から製塩に関わる集落と推測される（註13）。

弥生後期末から古墳時代になると、周辺の丘陵上に墳丘墓や古墳の築造が開始される。半田山に築かれた20×16mの長方形をなす都月坂2号墳丘墓（註14）を嚆矢とし、七つ埴1号墳、都月坂1号墳や京山の津倉古墳などの前期古墳が続く。七つ埴1号墳は全長48mの前方後方墳で、前方部・後方部の両方に堅穴式石室を有するが、後方部石室は破壊が著しく、前方部石室は小規模で副葬品を伴わない（註15）。都月坂1号墳は全長33mを測る前方後円墳であり、出土した特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が最古段階の埴輪として「都月型」と命名されている（註16）。一方平野部では、津島遺跡の北東に位置する神宮寺山古墳が特筆される（註17）。全長約150mを測り、4世紀末から5世紀前半頃の築造と推定され、旭川西岸地域を掌握した首長の墓と考えられる。中期の古墳としては半田山に全長約65mの前方後円墳である一本松古墳などがあるが概して少なく、後期に至ると目立った古墳は周辺には築かれなくなる。



第3図 津島遺跡周辺弥生時代推定地形図 (1/10,000)



第4図 津島遺跡周辺条里推定復元図 (1/10,000)

古墳時代の集落は、各遺跡において弥生後期から引き続いて営まれたものが多い。通常の集落のほか、津島江道遺跡では後半期の集落内に鍛冶炉が検出され、鉄器生産に関与する集落との位置づけがなされている（註18）。上伊福西（尾針神社南）遺跡では須恵器埋納土壌が検出され、状況から地鎮に関わる遺構と考えられる（註19）。

古代以降、津島遺跡とその周辺の大部分は耕作地としての歴史を歩むこととなる。古代の条里制関連と思われる溝が津島遺跡をはじめ周辺の遺跡で確認されている。津島江道遺跡では給柱建物の存在や硯などの出土から官衙的施設の存在がうかがわれる（註20）。集落の実態は未解明な部分が多いが、「鹿田荘」に比定される鹿田遺跡では建物や井戸などが検出されている（註21）。中世に至ると鹿田遺跡などで集落跡もみられるが、広範囲な水田層の存在から平野部の水田化がさらに進展したものと考えられる。この状況は、近世に入り岡山城とその城下町が建設された後も変わることはなかった。

こうして穀倉地帯となった津島の地は、近代に入り大きな転換点を迎える。明治40年（1907年）、旧陸軍第17師団の設置に伴って、津島遺跡一帯は大規模な造成により陸軍練兵場へと変貌を遂げた。また周辺でも宅地化が進行し、かつての水田景観は徐々に失われてゆく。戦後の昭和23年（1948年）には津島運動公園に決定され、以降は公園として整備され現在に至っている（註22）。

なお、この章は註7文献「津島遺跡2」の第1章を基調とし、一部を改変したものである。（岡本）

註

- (1) 『岡山県史 自然風土』岡山県 1983ほか
- (2) 岡山県教育委員会「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 1999
- (3) 「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 1998
- (4) 「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998ほか
- (5) 「津島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 2001ほか
- (6) 神谷正義「最古の水田」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社 1992、平井勝「弥生時代への移行」同上
- (7) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 岡山県教育委員会 2001
- (8) 高橋 護 「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』1997
- (9) 「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区Ⅰ・Ⅱ）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1994・1995年度』岡山市教育委員会 1996・1997ほか
- (10) 「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- (11) 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18 岡山県教育委員会 1988ほか
- (12) 「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1998
- (13) 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988ほか
- (14) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (15) 七つ塚古墳発掘調査団編『七つ塚古墳群』1987
- (16) 近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (17) 『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社 1991ほか
- (18) 「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996年度』岡山市教育委員会 1998
- (19) 「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995年度』岡山市教育委員会 1997
- (20) 註11に同じ。
- (21) 註13に同じ。
- (22) 『岡山県史 近代Ⅰ』岡山県 1985、『岡山市史 戦災復興編』岡山市役所 1960ほか

第2章 発掘調査の契機と経過

第1節 発掘調査の契機

平成17年に開催される第60回岡山国体の主会場用地問題で石井正弘知事は平成9年8月6日、候補地に決まっている岡山市古都南方・下地区をめぐり、岡山市との整備費用負担割合などが合意していないこと、危機的な財政状況や開催までの時間的制約、整備費等の大幅削減が見込めるという理由から、昭和35年の国体で利用した県総合グラウンド（岡山市いずみ町）の活用を検討することを発表。さらに、県総合グラウンド内には全国的な遺跡保存運動を経て、昭和46年1月にその一部が国の史跡に指定された「津島遺跡」にかんがみ、「文化財保護に十分留意しながら、文化財関係者と協議の上、最小限の施設改修について、調査・研究を始めたい」との意向表明がなされた。

県文化課は平成9年8月26日の岡山県文化財保護審議会において、県総合グラウンドが国体主会場候補地になったことを知事の記者会見での発言を引用しながら説明を行った。

そして、県教育委員会は津島遺跡の確認調査を実施すること、調査に当たっては専門家による検討委員会を発足させ、意見を聞きながら発掘調査を行う予定であること、検討委員会から出された調査の結果や今後の取り扱いについて報告を行うこと、今後は第2部会長および審議会会長にご相談する趣旨を説明し、了承された。また、平成9年9月2日に県庁9階の大ホールで公開された岡山県遺跡保護調査団との連絡会議にて、「県行財政改革懇談会専門委員会」による大規模事業の凍結や見直し、既存施設の有効利用などの徹底した改革が求められていること、国体主会場整備の在り方も検討せざるを得なくなり、県総合グラウンドでの国体開催の可能性を研究するとの知事の意向を説明した。ついで、①国体の秋季大会の開・閉会式は第一種公認陸上競技場で行うこと、②主会場には陸上競技場、補助競技場、投擲練習場の3施設がセットで必要なこと、③メイン会場となる陸上競技場の観客収容人員は3万人程度を希望すること（現状は15,000人ほど）、④陸上競技場は9レーンが望ましいこと、⑤補助競技場は400m周回とすることなどの日本陸連からの条件を紹介し、本グラウンドを国体主会場として想定するなら一定のリニューアル化が要請されることを説明した。

引き続き、県教育委員会は埋蔵文化財の保護保存の観点から津島遺跡全体の調査を行う必要性を考えており、「津島遺跡検討委員会」を直ちに設置し、県内研究者の意見を伺っていくこととしたい趣旨等を説明して協力と委員の人選をお願いした。また、県外研究者若干名を顧問として委嘱する事を説明した。

平成9年9月4日付、県教育長から「津島遺跡検討委員会委員候補者の推薦について」の依頼を行い、9月19日に遺跡保護調査団委員長から受諾に当たり、①津島遺跡は国指定の史跡であることを十分にふまえて対処すること。②津島遺跡検討委員会の検討結果を尊重すること。③試掘や発掘などの実施に当たっては、最初の段階から委員会の検討事項とすること。④調査は公開とし、委員の調査地点への立ち入りを随時認めること。⑤調査の経過は遺跡保護調査団との連絡会議においても報告すること。の5項目の条件が寄せられた。同日、申し入れ事項については承諾の回答を行う。9月24日付

で遺跡保護調査団委員長から県教育長へ、津島遺跡検討委員会委員8名の推薦が寄せられた。

このような経過でもって、平成9年9月29日に第1回津島遺跡検討委員会が開かれた。

そして、平成9年11月10日から総合グラウンド内9か所のボーリング調査を開始。11月28日、第3回津島遺跡検討委員会においてボーリング調査の結果を検討し、確認調査の方法・場所を審議した。平成10年1月19日から陸上競技場周辺に10か所。平成10年度は補助競技場内に3か所、軟式野球場内に1か所、プール及び児童公園の周辺に5か所、蹴球場周辺に10か所、計19か所のトレンチ調査を実施した。その調査結果について、第8回から第12回の検討委員会で総合審議を行い、平成10年8月20日、津島遺跡検討委員会から「津島遺跡第一次調査コメント」が公表された。

津島遺跡の保護については、「県総合グラウンド内には、稲作の歴史を解明することが可能な遺構が存在するなど、各時代にわたる複合的な遺跡が広がっている。また、将来、学術的な発掘調査を実施するに当たって広域に調査することが可能な全国的に見ても残り少ない場所である。さらに、公有地であることから、遺跡の保護をしやすいところである。今後、県総合グラウンド全体について、遺構の広がりや性格を具体的に把握するための確認調査を進める必要があるが、現在のところ津島遺跡の保護については、以下のように考える。」であり、その詳細説明が次の内容である。

①軟式野球場の南寄りで確認された弥生時代前期の微高地とそれに隣接した低い部分は、国指定史跡地につながるものと判断されることから、保護に努める必要がある。また、これらの東でも各時代にわたる遺構の存在が確認されたことに配慮し、その保護に極力努めるべきである。

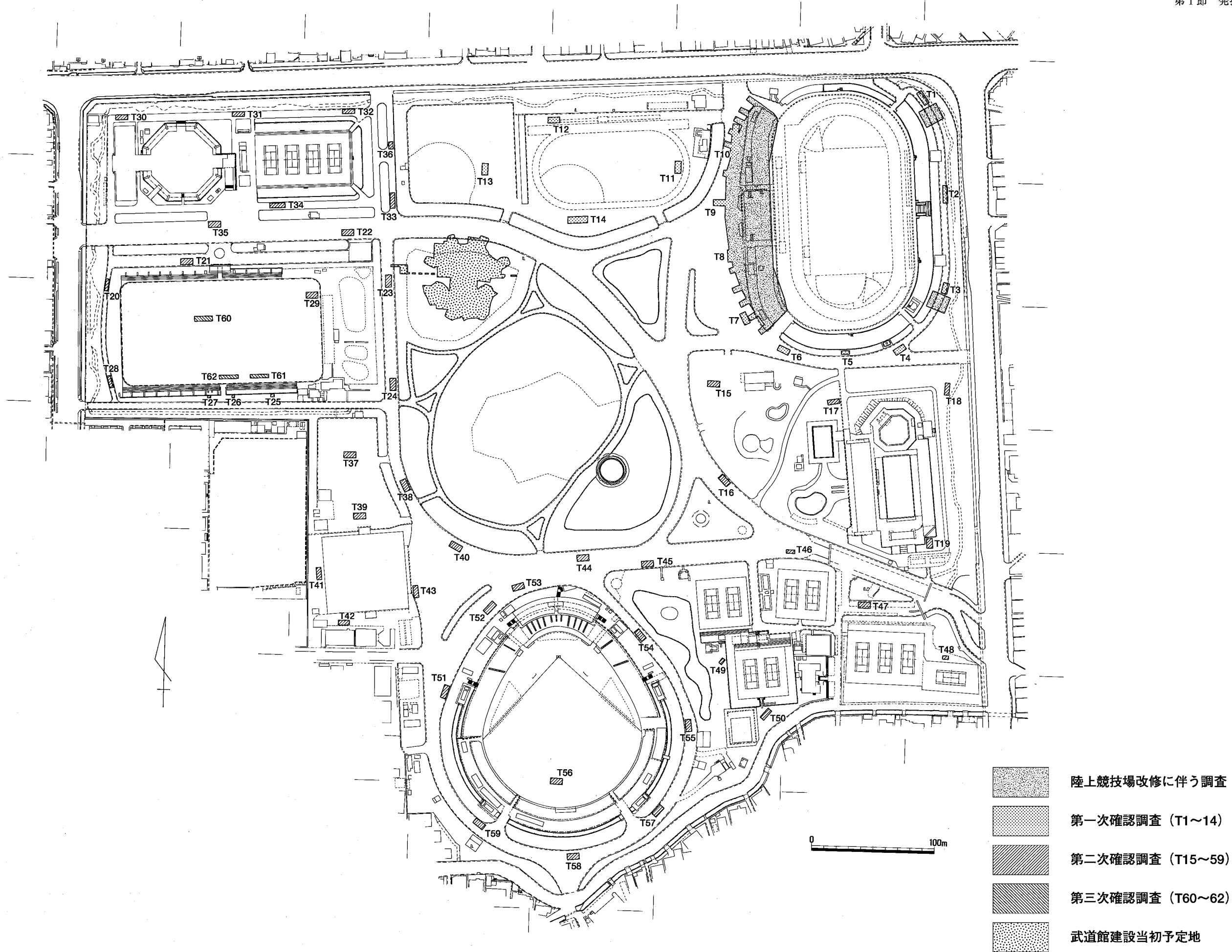
②国指定史跡の積極的な公開活用を進め、史跡地と関連した埋蔵文化財の意義の周知に努める必要がある。

県教育委員会では、検討委員会の意見を踏まえて、直ちに石井知事をはじめ各関係機関に伝えた。知事部局では教育委員会関係機関と協議を重ね、石井知事は平成10年9月8日の定例県議会開催に当たり、懸案になっていた岡山国体の秋季大会主会場については、検討委員会による埋蔵文化財調査結果や諸々の状況を踏まえ、関係機関と慎重に検討した結果、現在の県総合グラウンド陸上競技場を改修して主会場とする結論に達したこと。なお、改修に当たっては、津島遺跡検討委員会の調査結果を尊重し、埋蔵文化財の保護・保存に十分配慮のうえ、スポーツ施設と文化財が共存する施設整備に向けて、今後、関係者と協議を重ねていくことの提案説明をした。

県総合グラウンドの陸上競技場を改修し、国体の主会場に充てる決定をしたことに対して、岡山県遺跡保護調査団は、津島遺跡検討委員会の第一次調査のコメントに基づき、陸上競技場一帯の遺跡の保護に万全を期すように求める要望書を石井知事に提出した。

石井知事は、9月県議会での国体主会場整備に関する各党の質問に答えて、津島遺跡は貴重な遺跡であると十分認識しており、改修に当たって文化財関係者等と協議を重ね、埋蔵文化財の保護・保存に努めること。遺跡への影響を最小限に留めるような改修工法について、文化財関係者と十分協議を重ねていくこと。文化財関係者やスポーツ関係者等の意見を聞き、規模や工法などを内容とする基本計画を今年度末までに策定すること。県総合グラウンドは将来とも遺跡とスポーツ施設が共存する公園として整備したいと考えており、グラウンド全体の埋蔵文化財調査の結果を待って、整備構想を検討すること。等の考え方を明確にした。

このような知事の方針を受け、国体準備局では「陸上競技施設整備委員会」の発足に当たり、文化財についても十分配慮していく観点から、津島遺跡検討委員会の代表委員の参加を文化課に依頼をし



第5図 岡山県総合グラウンド内発掘調査区配置図 (1/3,000)

た。第13回津島検討委員会で参加依頼についての質疑応答があり、検討委員会の目的が遺跡の性格の学術評価にあり、建築物の工法などの検討は含まれていないこと、遺跡保護調査団の推薦で委員が選出されているから委員だけでは回答が出せないこと。検討委員会としては、直接に遺跡保護調査団宛に依頼すべきであるとアドバイスを受ける。平成10年10月2日付で遺跡保護調査団宛に委員候補者の推薦を依頼し、遺跡保護調査団委員長から委員の推薦は辞退するとの回答を受けた。

そして、第60回国民体育大会秋季大会会場の主会場となる陸上競技場施設整備の円滑な推進を図るため、陸上競技施設整備委員会が発足し、平成10年11月2日に第1回目の会議がもたれた。第2回目に各委員から施設整備に当たっての意見が述べられ、文化課は、遺跡を破壊しないように極力保護するような工法の検討、②改修に当たっての全面調査によって貴重な遺構が発見された場合は、時代を問わず現地で保存する方法の検討、③スポーツ施設と埋蔵文化財が共存するという観点から、特にガイダンスルームのような施設が必要なこと、④公園の入り口から史跡地までの間に案内看板を作ること、道路にも津島遺跡の看板が必要なことを要望した。平成11年1月25日の第3回目の施設整備委員会では、コンサルタント側から文化財に関わる基本方針として、文化財とスポーツ施設の共存、埋蔵文化財を守るとともに文化財を誇り、共に歩むこと、構造・工法としては、メインスタンドは出来るだけ軽量とし、ロングスパン（長支点間）構造で、杭幅を出来るだけ広げること、バックスタンド部分の基礎は盛土の中に限定すること、また、公開活用の観点でスポーツ資料室と併設する形で展示資料室を設置すること、全面調査の結果、貴重な遺構が発見された場合には、建物床面を強化ガラスで覆い、遺構レプリカを見ることが出来るようにすることなどが提案された。

陸上競技施設整備についての基本計画段階で配慮すべき点の協議は、第14回から第18回までの津島遺跡検討委員会を中心に行われた。平成11年1月18日の第14回検討委員会では、構造物周辺の地耐力検査のため5か所でのボーリング調査、総合グラウンド全体の測量のために基準杭の設置を計画・実施中であること、平成11年度に入ってメインスタンドの解体撤去、陸上競技場と補助競技場の間に仮設倉庫・仮設事務所の設置、メインスタンドの解体撤去後、埋蔵文化財の全面調査に着手する予定を説明した。委員からトラックヤードの移動の有無、バックスタンドの拡張規模についての質問が出された。第15回検討委員会ではメインスタンド部分の全面調査は、平成12年1月からの予定で全体を2～3分割をして、北側から6名の調査員が行うこと、陸上競技場周辺の樹木の内、改修のために撤去せざるを得ないものについては、地下遺構に影響しない範囲で根回しを行い、専門職員の立ち会いのもとに9月から移植作業を行う予定を伝える。第16回検討委員会はバックスタンド等の対応方法について審議を行った。今回の計画では現在の芝生席の上とこれを延長した石垣の外側に7～8m幅の常設スタンドが作られ、さらに仮設スタンドがつく。仮設スタンド部分は、現地表に載せる形であるので発掘調査対象とはならないが、常設スタンドの下についてはどのような方法が考えられるかという内容である。すなわち、常設スタンドはメインスタンド部分と同様に恒久的建造物であるため発掘調査が必要であるが、基礎をベタ基礎とすれば遺構に影響を与えることなく、常設スタンドを立てることが可能である。そして、国体準備局は発掘調査をしないのであれば、この構造で十分だという見解を示したことを伝えた。恒久的建造物の対応は、文化庁通知および岡山県内でも取り扱いにバラツキがある実状、また、文化庁から各都道府県教育委員会において、工事の種別ごとの取り扱いおよび数値の適応基準を定める指導があることを説明した。

平成11年9月17日の津島遺跡検討委員会では、委員会から要望のあった陸上競技場の詳細な設計図

第2章 発掘調査の契機と経過

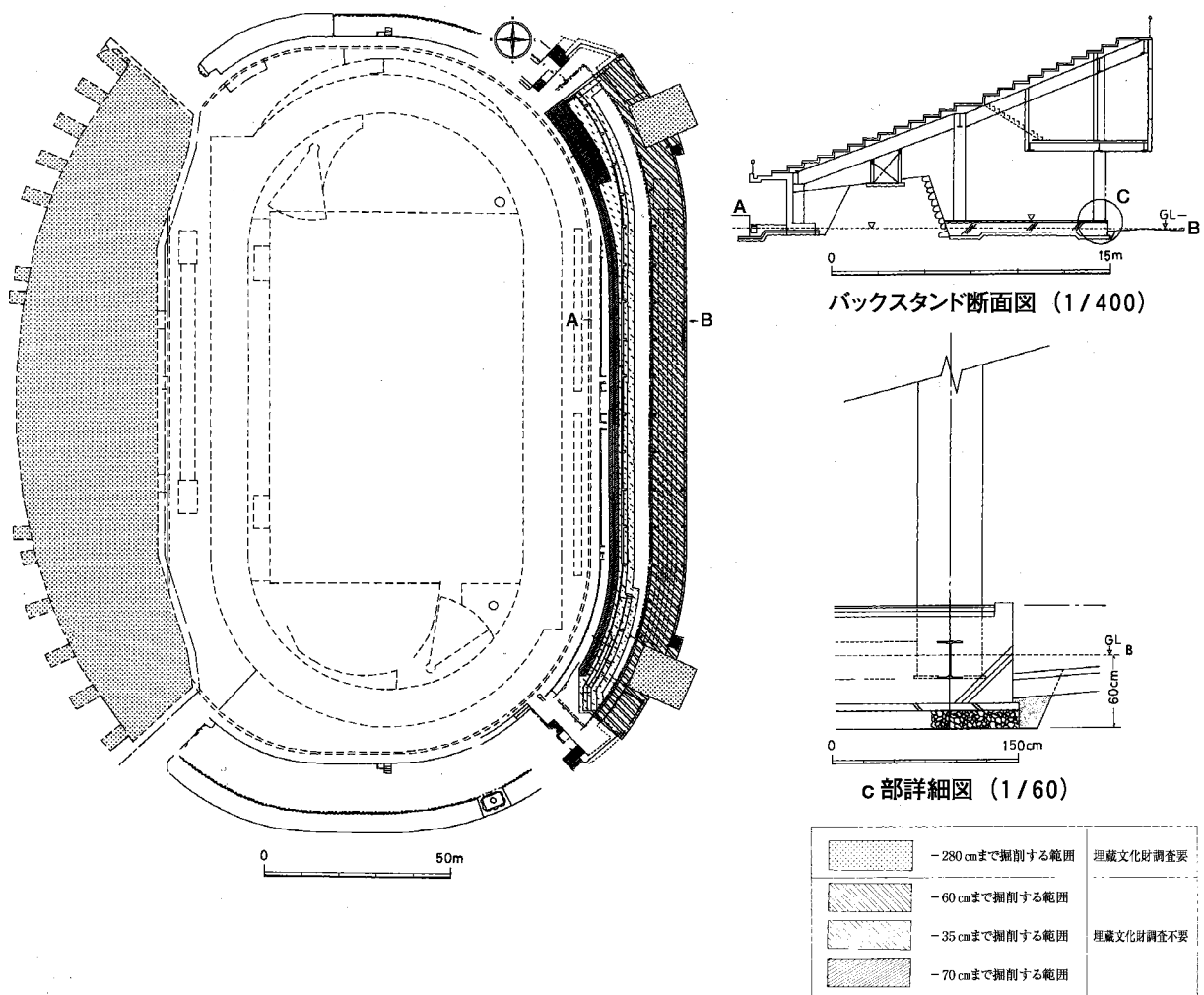
を提示し、バックスタンドをベタ基礎で構築する場合、現在の地表下約80cmに掘削が及び、コンクリート基礎下部の砂利が明治時代の水田層の直上で止まること、このベタ基礎工法では、地下遺構を直接は破壊せずに保全が可能であることの説明を行い、検討を願った。

各委員とも、恒久的建造物のベタ基礎による保存が、県内での他遺跡に及ぼす影響に危惧を示された。そのうえで、遺跡を壊さないために地下を掘削しないように設計変更できる箇所は、すべて調査する必要はないという立場をとりたい。一般的には、壊れないで済むものは出来るだけ調査をせずに将来に残していくことを主眼にすべきである。ただ、今回の問題は掘削深度が明治時代の層に近接しており、将来取り壊す際のことから、あと30cmほど土盛りを行い、なるべく明治時代の層から離す工夫をしてもらいたい。

まとめとしては、特にこうすべきだということではなく、それぞれ意見を述べて、将来に出来るだけ遺跡を残す工夫をしていく必要性が要望された。

平成11年11月29日、第18回津島遺跡検討委員会では、国体準備局からバックスタンド増設部分の基礎を当初計画より20cm上げ、地表下60cmに変更すること。ただし、この方法では樹木を移植するために掘った箇所が残り、不等沈下する恐れがあるので、明治時代の直上まで土壌改良を行うことを説明した。

(高畑)



第6図 陸上競技場改修平・断面図 (1/2,500)

第2節 発掘調査の体制

発掘調査は、平成12年1月5日から平成12年12月27日までの12か月間6,200㎡を対象に実施した。調査は、工事工程との調整から1区北側から開始することとなり、平成11年度1月から3月にかけては、調査員6名が2班体制のもと1,000㎡を対象に実施した。平成12年度からは残りの5,200㎡を対象に調査員をさらに6名から9名に増員してこれに当たった。また、調査途中の9月から11月にかけての2か月間、蒜山広域事務組合教育委員会から1名の専門職員の協力を得た。

発掘調査および報告書作成について岡山県教育委員会は、当該事業の実施に当たり、遺跡の保護・保存ならびに調査・報告書作成の専門的な指導および審議を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に津島遺跡検討委員会の委員を委嘱している。また、これと同時に県外の考古学研究者に顧問を委嘱している。

調査の体制

津島遺跡検討委員会

顧問

坪井 清足	元興寺文化財研究所理事長	佐原 眞	元国立歴史民俗博物館館長
田中 琢	元奈良国立文化財研究所所長		(平成14年7月逝去)

委員

稲田 孝司	岡山大学教授	西川 宏	岡山理科大学非常勤講師
亀田 修一	岡山理科大学教授	間壁 忠彦	倉敷考古館館長
小林 博昭	岡山理科大学教授	松木 武彦	岡山大学助教授
新納 泉	岡山大学教授	山本 悦世	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教授

平成11（1999）年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬 定生
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	宮野 正司
------	-------

文化課

課長	松井 英治
課長代理	佐々部和生
参事	正岡 睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	
	松本 和男

文化財保護主任	大橋 雅也
主任	奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原 克人
次長	大村 俊臣

〈総務課〉

課長	小倉 昇
課長補佐(総務係長)	安西 正則
主査	山本 恭輔

〈調査第一課〉

課長	高畑 知功(調査担当)
課長補佐(第一係長)	中野 雅美

第2章 発掘調査の契機と経過

文化財保護主幹	平井 勝(調査担当)	岡山県古代吉備文化財センター
文化財保護主幹	島崎 東(調査担当)	
文化財保護主幹	光永 真一(調査担当)	
文化財保護主事	氏平 昭則(調査担当)	
文化財保護主事	岡本 泰典(調査担当)	
平成12(2000)年度		
岡山県教育委員会		
教育長	黒瀬 定生	
岡山県教育庁		
教育次長	宮野 正司	
文化課		
課長	松井 英治	
課長代理	佐々部和生	
課長代理(埋蔵文化財係長)		
	松本 和男	
文化財保護主査	福本 明	
主任	奥山 修司	
		所長 正岡 睦夫
		次長 能登原 巧
		〈総務課〉
		課長 小倉 昇
		課長補佐(総務係長) 安西 正則
		主査 山本 恭輔
		〈調査第一課〉
		課長 高畑 知功(調査担当)
		課長補佐(第二係長) 島崎 東(調査担当)
		文化財保護主幹 井上 弘(調査担当)
		文化財保護主事 金田 善敬(調査担当)
		文化財保護主事 岡本 泰典(調査担当)
		文化財保護主事 杉山 一雄(調査担当)
		文化財保護主事 小林 利晴(調査担当)
		文化財保護主事 時實 奈歩(調査担当)
		主事 米田 克彦(調査担当)
		主事 中島 和哉(調査担当)

調査協力者 蒜山広域事務組合教育委員会 新谷 俊典

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、メインスタンド部分と2基の照明塔部分の総面積6,200㎡が調査対象であった。

調査期間は、陸上競技場建設全体工事計画のなかで発掘調査は平成12年度途中の12月27日が終了期限に設定されたことで、平成12年1月5日から12月27日までの12か月間であった。

平成11年度は、まず既存陸上競技場施設の撤去等工事工程の都合から調査区北端部分1区北半の1,000㎡から着手することとなり、事前の明治40年に造成された旧日本陸軍練兵場の造成土の除去等条件整備を終了後、平成12年1月から3月にかけての3か月間調査員6名が2班体制でこれに対応した。また、この期間中の2月末から3月にかけて次年度4月以降の調査にあわせて事前条件整備である練兵場造成土の重機による掘削除去を1区南半と3区全域について実施した。

調査は、北半調査区をさらに北側と南側に分けて実施した。遺構は、重機掘削面を清掃した段階、また一部掘り下げた段階で弥生時代後期から近世までの溝を中心とする遺構がほとんど同一面で確認される状況であった。また、この下層約50cmには弥生時代前期の畦畔・溝を伴った水田2面が広範囲に展開しているのが確認された。

平成12年度は、調査員を前年度の6名に3名が増員され、4月当初9名三班体制で調査を実施することとなった。調査工程は、まず1班と3班の二班が1区南半の1,000㎡を9月までに終了させ、2班が既に入っている3区の2,000㎡に途中参加してこれを10月までに終了させる。その後10月から2班と3班の二班で2区1,800㎡と4・5区の350㎡に順次入り全調査工程を完了する予定であった。なお、1班については10月から12月までの3か月間は当該調査から離れ、津島遺跡第二次確認調査を実施した。

ところで、3区は重機掘削段階の状況で既に予想されたこととはいえ遺構密集度は前年度実施した1区の状況とはまったく異なり、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての堅穴住居・土壙等全検出遺構350のうち217遺構と数多くの遺構がしかも予想以上の密度で存在し、またこの下層50cm付近の海拔2.00m前後には弥生時代前期の水田層2面の存在もあり、当初9月末終了とした予定調査工程期間内の終了が困難な状況となった。そこで3区については1か月間の延長を決定した。ただし調査計画全体の工程に変更の余地はなく、この後に予定していた2区、4区、5区へのしわ寄せが憂慮された。

この解決策として再度国体推進局と協議を行った結果、重機を再度導入しての掘削を検討した。弥生時代後期から古墳時代の集落が調査終了後はその面から約50cm下層の弥生時代前期水田直上までの堆積土については本来手掘りするところであるが、土層観察の結果幸いにもこの間は遺構・遺物をまったく含まない層であることが確認されたため、この層については調査員立ち会いのもと重機を用いて間層を除去し、また同時に弥生時代前期の水田層直上面まで削り出すことによって水田畦畔検出のための時間短縮を図った。また2区のほとんどを占める幅50mの北東から南西方向に流れる旧河道内堆積土砂の掘開・掘り下げ等についても重機の導入と有効な掘削方法を検討することによって期間の短縮を図る等、これに対応することとなった。

結局、2区への調査着手は3区の終了後の11月6日であり、残された調査期間はこの時点で既に2か月を切っていた。

第2章 発掘調査の契機と経過

2区は、北東から南西方向に幅50mの流路をもった旧河道がぶつかる地点に当たり、既にこの河道の状況については1区南半での8月までの一部調査によって斜面部には建築部材・木器・木製品・土器等が多量に検出され、その存在が明らかにされていた。特に建築部材については、北側に近接する集落からほぼ同一地点に一括投棄された状況であった。多量の柱材等が集積している状況は全国的にも極めて希有な発見であり、調査の進展に伴い周辺部での在り方も注目をあびる存在であった。したがって、2区の調査では2か月を切った、残された時間のなかでまずはいかに幅50m、深さ最深部で5mにもおよぶ土砂を除去し調査の体制にもちこめるか、さらに斜面部での当然予測される建築部材・木器・木製品・土器等記録をとりながらいかに取り上げていけるかが焦点となった。

北と南側斜面部の調査からは、それぞれに護岸施設を検出しており、中でも北側斜面には護岸施設以外にも足場状遺構、貝塚等の遺構やこれらに交じって多くの遺物が堆積しており、調査の結果、整理箱に1,000箱を超える土器と1,400点を数える木器・木製品等が出土した。土器、木器・木製品等入り乱れた足の踏み場のない重複が激しい状況下、残り少ない時間との競争のなかでの過酷な実測・取り上げ・掘り下げ作業であった。

2区の重機掘削が終了後は4区と5区についても重機を導入し、旧日本陸軍練兵場の造成土の除去を行った。その後人力による掘削作業を行った。4区では畦畔を伴っての弥生前期水田と北方下沼遺跡溝24から続くと考えられる古代～近世にかかる溝を検出した。5区では、水田層以外の遺構の存在は確認されなかったが、第一次確認調査のT3で確認された弥生時代前期以前の水田層を確認した。ただし、ここでは面的な畦畔の検出、遺物の出土を期待し精査を行ったがかなわなかった。（島崎）

表1 調査工程

調査区	平成11年度				平成12年度								面積 (㎡)
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12(月)	
1	1班 →												1,000
	2班 →												
			(3/17)										
1					1班 →								1,071
					3班 →								
					(4/10)								
2											2班 →		1,795
											3班 →		
											(11/6)	(12/27)	
3					2班 →								1,984
					(4/10)								
4												2班 →	175
5												2班 →	175

第4節 日誌抄

- 平成12年 1月5日(水) 1区調査開始。
- 1月17日(月) 岡山県議会議員発掘状況の視察。
- 2月8日(火) 黒瀬定生県教育長、宮野正司教育次長現地視察。
- 2月16日(水) 岡村道雄文化庁主任調査官現地視察。
- 2月21日(月) 第19回津島遺跡検討委員会開催。
- 3月9日(木) 弥生時代前期水田の空中写真撮影。
- 3月17日(金) 平成12年度調査終了。
- 4月3日(月) 平成13年度発掘調査準備。
- 4月10日(月) 1・3区調査開始。
- 5月2日(火) 岡山市立横井小学校現地見学。
- 5月24日(火) 岡山市立京山中学校現地見学。
- 6月2日(火) 岡山市立東山中学校現地見学。
- 6月5日(月) 第20回津島遺跡検討委員会開催。
- 7月1日(土) 現地説明会開催。
- 7月3日(月) 岡山県議会文教委員会委員現地視察。
- 8月2日(水) 「岡山県ふるさと再発見事業」実施。
岡山大学博物館学履修生現地見学。2日～8日。
- 8月9日(水) 1区河道1出土建築部材報道発表。
- 8月10日(木) 第21回津島遺跡検討委員会開催。
- 8月31日(木) 1区調査終了。黒田龍二岡山県文化財保護審議員建築部材視察。
- 9月26日(火) 第22回津島遺跡検討委員会開催。
- 10月26日(木) 3区調査終了。
- 11月6日(月) 2区調査開始。
- 11月9日(木) 坂井秀弥文化庁調査官現地視察。
- 11月10日(金) 春成秀爾国立歴史民俗博物館教授現地視察。
- 11月12日(日) 津島学区ウォークラリー参加者土器等見学。
- 11月14日(火) 第23回津島遺跡検討委員会開催。
- 11月17日(金) 近藤義郎岡山大学名誉教授現地視察。
- 11月28日(火) 石井正弘知事現地視察。
4・5区調査開始。
- 12月18日(月) 4・5区調査終了。
- 12月19日(火) 第24回津島遺跡検討委員会開催。
- 12月27日(水) 2区調査終了。調査機材等撤収。

第5節 報告書の作成と体制

報告書作成の対象遺構と遺物は、遺構350基、土器1,515箱、木器・木製品・建築部材1,400点を数えた。整理期間は、調査終了後の平成13年1月5日から平成15年3月31日であった。

土器は、調査中から順次洗浄作業を実施していたものの河道1出土の土器が1日最高60箱を数える状況に至っては従来までの室内作業員3名体制ではもはや限界となり、現場から整理事務所に帰ってくる土器の置き場所に苦慮する状況であった。このため事務所の拡張を行い収納場所の確保に努めた。しかし、河道1だけで1,000箱と予想をはるかに超える出土量から、たちまち収納場所が足りない状況となったのでやむなく事務所前にテント4張りを建ててこれに対応した。また、木器・木製品についても同様で事務所周辺に1×0.6×3.6mの水槽を10基増設し、これに仮収納して新たな整理体制下での洗浄等に備えた。

平成12年度は、調査終了直後の平成13年1月から3月まで現場調査担当者のうち5名が残留しこれを担当した。また、整理作業員も従来の9名から19名体制へと増員してこれに当たった。作業は、土器洗浄・注記、木器・木製品の洗浄、図面台帳・遺構台帳等の整理が当面の急務であった。中でも土器の洗浄と木器・木製品の洗浄作業はできるだけ早期に終了するのが全体の工程を考えても得策であり、そのためには9名を土器洗浄5名と木器4名に分けてそれぞれが専従することによって、また従来の洗浄方法では時間短縮にはならないので、コンプレッサー機器を導入してこれに対処した。またこれに平行して注記作業も専用機器を導入して時間短縮を図った。さらに土器の復元と実測も編集作業を考え、堅穴住居・土壙等遺構に伴うものから優先的に順次継続して実施した。

平成13年度は、前年度に引き続き調査員5名、整理作業員19名体制で実施した。調査員が前年度と同じであったことで作業の継続性は保たれたといえる。

土器の洗浄は、一日平均10箱のペースで済ませ、7月中旬には1,515箱すべてが終了し、作業の中心は注記と復元作業に移行した。また、木器・木製品もコンプレッサー機器の導入により早期終了が見込まれたばかりではなく、その繊細さからその過程で新たな資料等の追加もみられた。

復元作業のうち河道1については、全体量が1,000箱を数える状況では一堂に広げての復元作業は不可能であった。そのため、取り上げ期日の比較的近い箱40～50箱単位に実施した。そして、それが一巡した後は単位毎に組み合わせを順次変えながら全ての土器について一応の接合を試みた。この結果、実測対象となった土器は、完形品もしくは完形品近いものとなり、総数約1,000点を数えた。

一方、土器は河道1の復元に時間がかかることもあり、また編集作業もにらんでまずは遺構に伴うものから実施した。木器・木製品は、保存処理ができていない水づけ状態での実測であったため、しかも建築部材等大型製品も数多くあったため、出し入れには相当の労力を必要とした。

こうした編集作業も終盤近くになって掲載番号等が確定した後は、遺物を番号順に整理箱に収納し台帳を整備して全ての報告書整理作業を終了した。

報告書作成の体制

平成12（2000）年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

課長代理(埋蔵文化財係長)

松本 和男

文化財保護主査 福本 明

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧

〈総務課〉

課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第一課〉

課長 高畑 知功(整理担当)

課長補佐(第二係長) 島崎 東(整理担当)

文化財保護主事 金田 善敬(整理担当)

文化財保護主事 岡本 泰典(整理担当)

文化財保護主事 時實 奈歩(整理担当)

平成13（2001）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 國貞 忠克

文化課

課長 松井 英治

課長代理 藤井 守雄

課長代理(埋蔵文化財係長)

松本 和男

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧

〈総務課〉

課長 安西 正則

係長 田中 秀樹

主任 小坂 文男

〈調査第一課〉

課長 高畑 知功(整理担当)

課長補佐(第二係長) 島崎 東(整理担当)

文化財保護主事 金田 善敬(整理担当)

文化財保護主事 岡本 泰典(整理担当)

文化財保護主事 時實 奈歩(整理担当)

平成14（2002）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化課

課長 西山 猛

課長代理 宮田 正彦

課長代理(埋蔵文化財係長)

松本 和男

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正岡 睦夫
次 長 藤川 洋二
〈総務課〉
課 長 安西 正則
課長補佐(総務係長) 田中 秀樹

主 任 小坂 文男
〈調査第一課〉
課 長 高畑 知功
課長補佐(第二係長) 鳥崎 東(整理担当)
文化財保護主事 岡本 泰典(整理担当)
文化財保護主事 時實 奈歩(整理担当)

報告書作成協力者

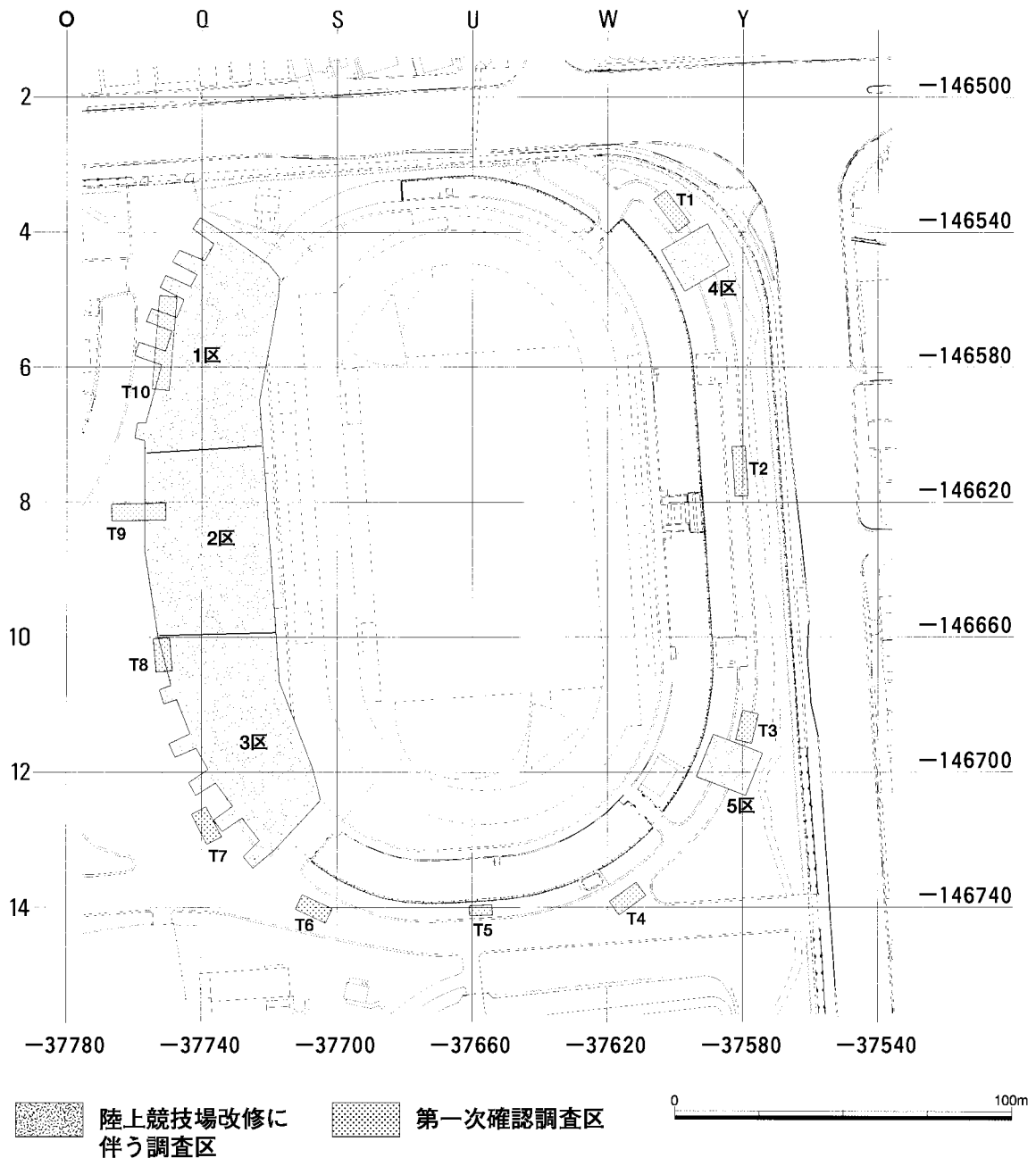
今津節生(奈良県立橿原考古学研究所) 大澤正己(九州テクノリサーチ)
大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館) 黒田龍二(神戸大学)
高橋照彦(奈良国立博物館) 山口松太(岡山県指定重要無形文化財保持者)

赤木直美 岡山顕子 小林和美(旧姓藤田) 西本尚美 松浦公子
三垣佐知子 光森ゆみ 仙野智子 長瀬清可 高旗えり

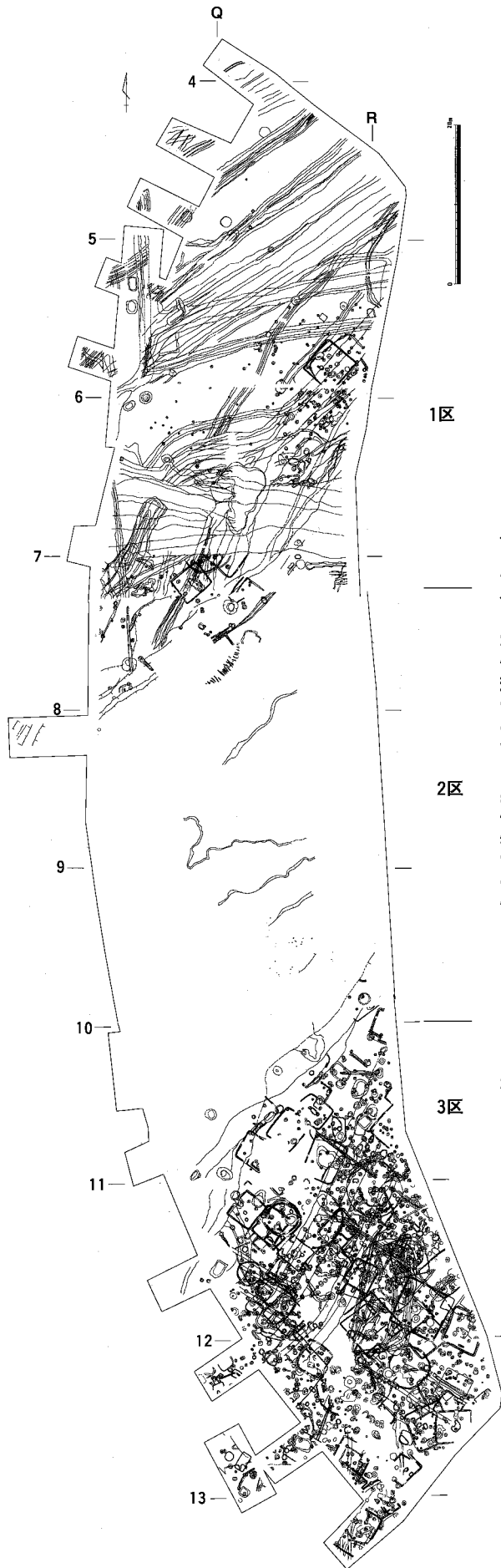
第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

今日津島遺跡として広く一般に知られるのは、岡山県総合グラウンド内の国指定津島遺跡を中心とした学南町から伊福町にかけての北東から南西方向楕円形に延びた地域である。調査の対象となった岡山県陸上競技場は、この岡山県総合グラウンド北西隅に位置する。調査区は、昭和36・37年に調査



第7図 調査区配置図 (1/2,000)



第8図 1～3区弥生時代中期～近世遺構全体図(1/800)

された北池の北東70m、昭和43年に調査された旧武道館予定地の東250mの地点に位置する。また、北東側には都市計画道路万成・国富線建設に伴って調査された北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡・北方藪ノ内遺跡等が所在し、弥生時代前期の水田、古代の条里溝等の遺構が本遺跡と関連して検出されている。

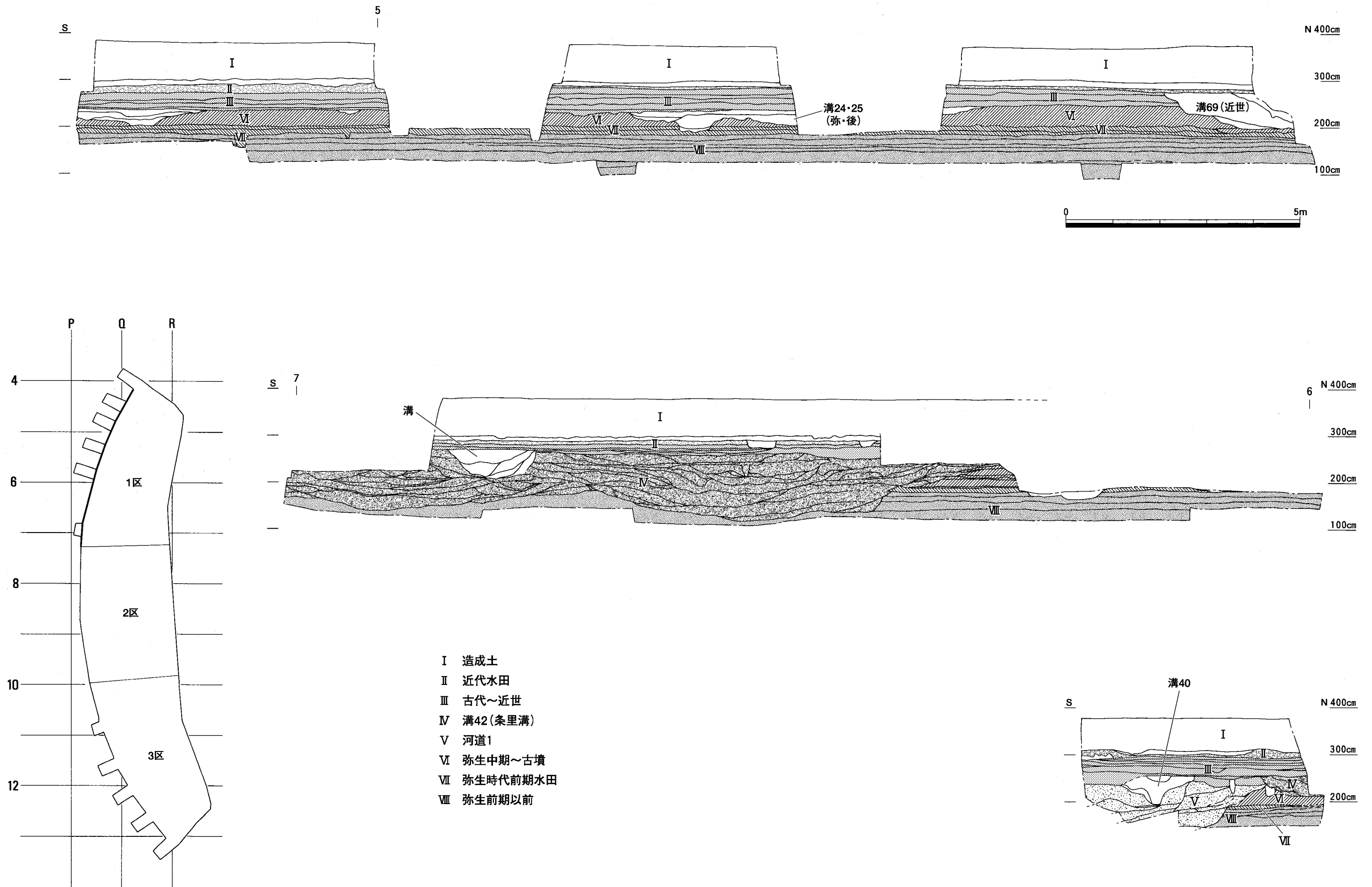
岡山県総合グラウンドは、明治40年旧日本陸軍の練兵場として造成された場所で、その範囲は一辺約700mの総合グラウンドおよび岡山県警機動隊等敷地範囲に一致する。造成は、西の京山、日焼山を開削して土砂を運搬してなされ、グラウンド内での確認調査においても現在の地表下約1m前後までは明治40年の水田層直上に花崗岩バイラン土の土層が存在し、これが全域で確認されている。

調査の対象となったのは、メインスタンドと照明塔2基の3か所である。便宜上メインスタンド部分を北から1～3区に、北照明塔を4区に、南照明塔を5区として調査を実施した。

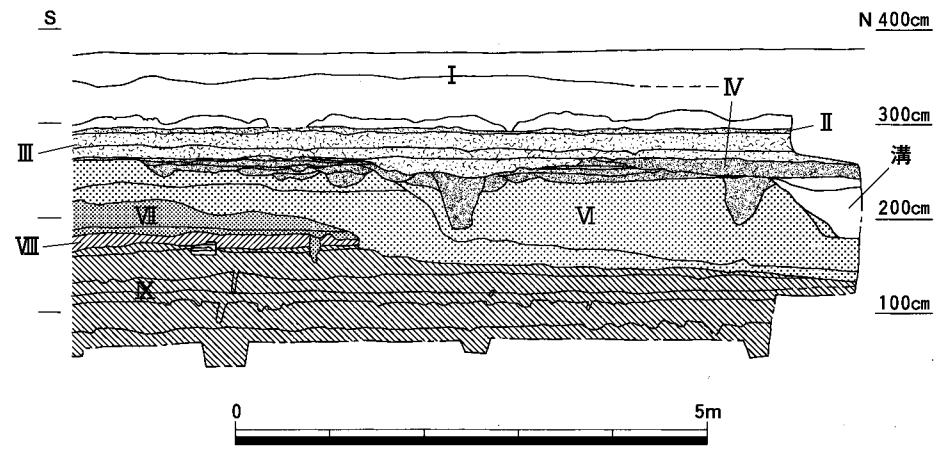
調査の結果、弥生時代前期～後期、古墳時代前期～後期、古代、中世～近代までの遺構が合計350基検出された。

弥生時代前期では、メインスタンド部分調査区中央部が北東から南西方向へ流れる幅約50mの河道によって既に消滅し存在はしないが、ほぼ全調査区において水田を検出した。水田には、北側に微高地が、そして水田への水の給排水を可能とする溝の存在も認められた。

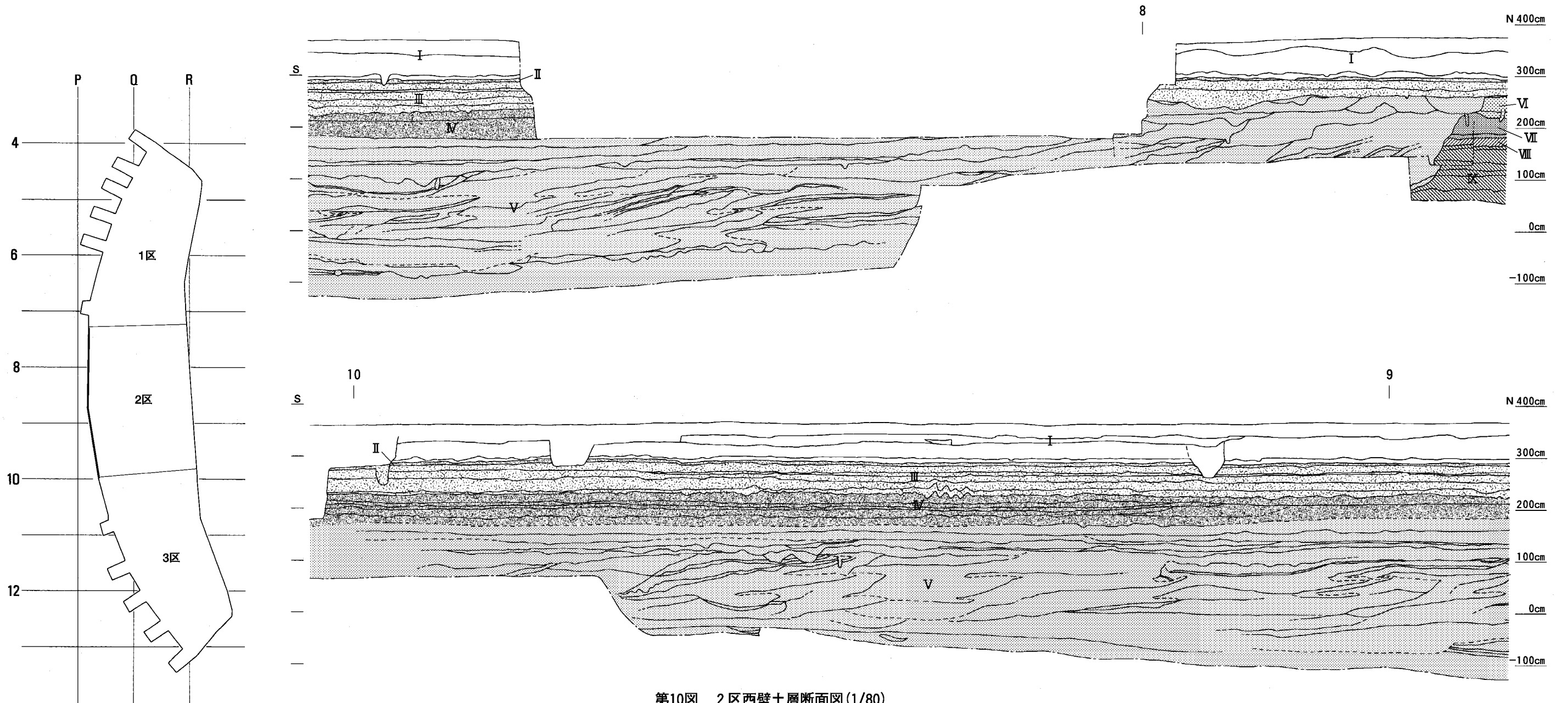
弥生時代中期は、これも河道1・2によって既に消滅していることで判然としないが、1区と3区からは北東から南西方向に開削された比較的しっかりした一



第9図 1区西壁土層断面図(1/80)

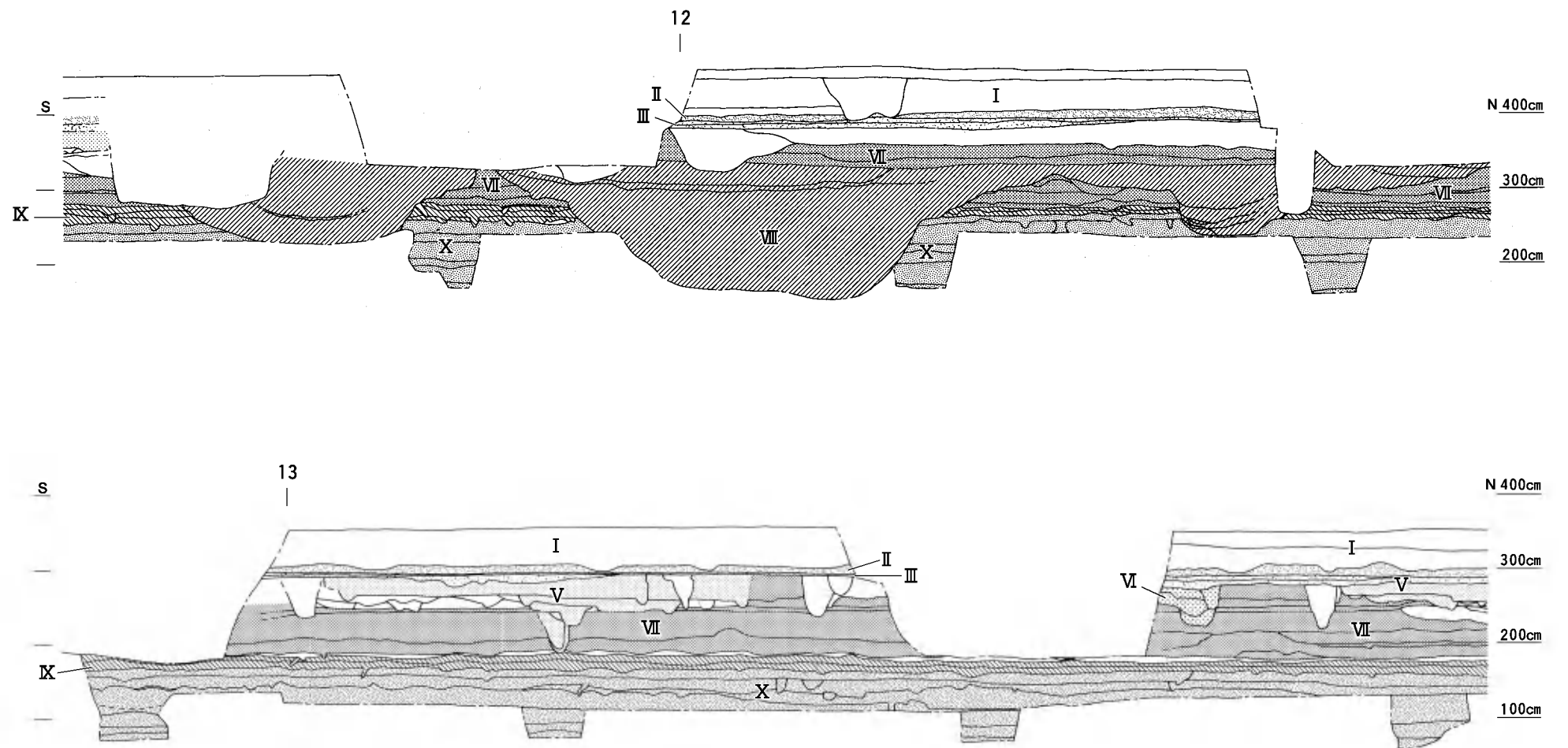
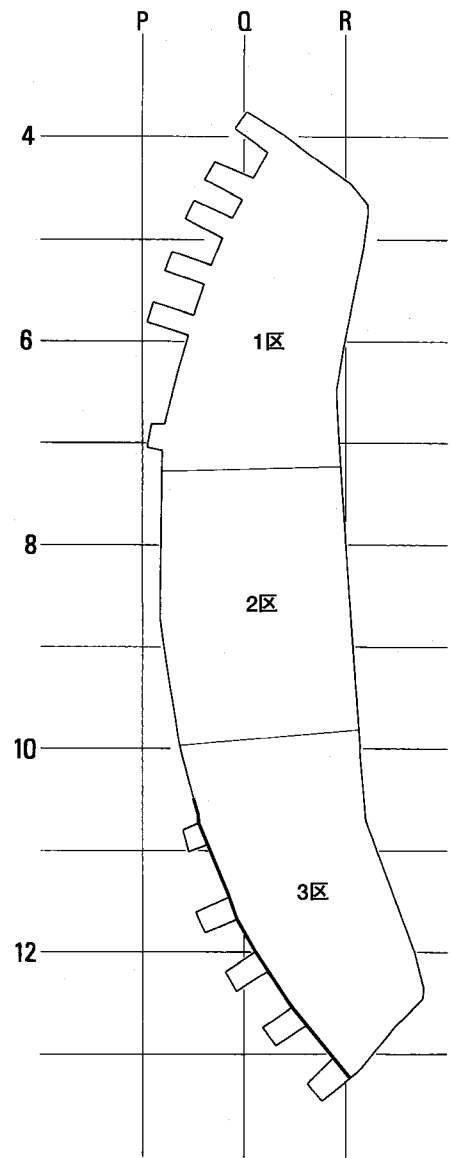
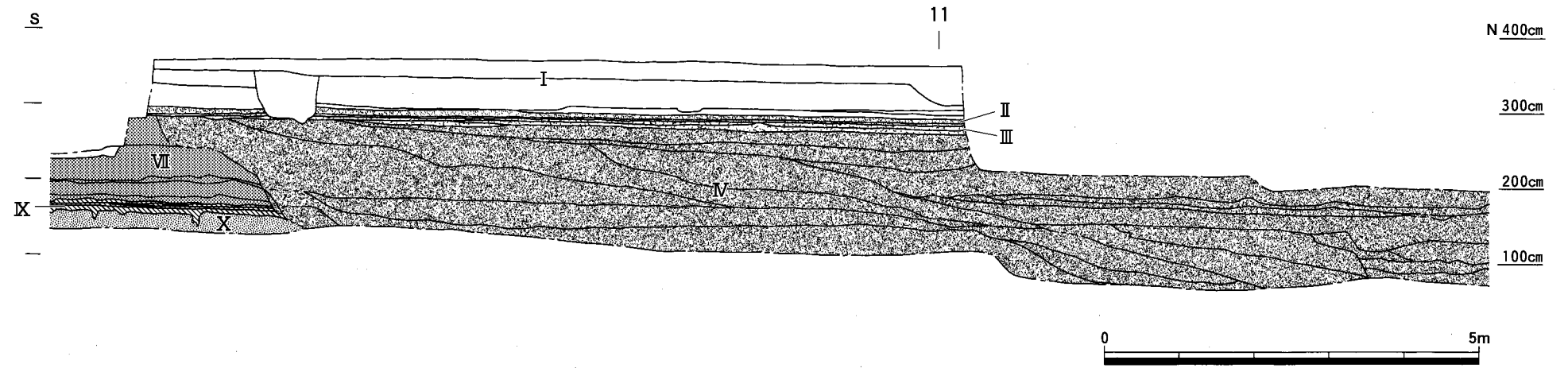


- I 表土
- II 近代水田
- III 古代～近世
- IV 弥生後期住居
- V 河道1
- VI 弥生中期溝
- VII 弥生中期～後期
- VIII 弥生時代前期水田
- IX 弥生前期以前



第10図 2区西壁土層断面図(1/80)

- I 表土
- II 近代水田
- III 古代～近世
- IV 河道2
- V 古墳住居
- VI 弥生後期住居
- VII 弥生中期溝
- VIII 弥生中期～古墳
- IX 弥生時代前期水田
- X 弥生前期以前



第11図 3区西壁土層断面図(1/80)

部重複する7条の溝、さらにこれと重複した状態で土壙墓を1基確認した。ただし、竪穴住居等は確認されていない。

弥生時代後期は、河道1を境に北側と南側とでは様相が異なる。北側1区では検出された竪穴住居1軒・袋状土壙6基・溝等いずれもの遺存状況が悪くわずかに床面・底部等を20cm程度残す状態であった。本来の生活面はもっと上位にあったようで、後世の土地変革によって竪穴住居・土壙等遺構は削平され消滅した遺構も数多くあった可能性が高い。一方、3区は1区に比較して地形的に低位にあったことで削平を免れたようで竪穴住居・土壙等の遺存も1区に比較して良好で、重複した状況で竪穴住居19軒・土壙60基等数多くの遺構が検出された。

こうした傾向は古墳時代も同様であった。古墳時代全般を通して、中央の河道1・2をはさんで北側1区の竪穴住居5軒・井戸6基・土壙10基に対して南側3区は竪穴住居53軒・井戸3基・土壙81基等遺構は多く、重複も顕著である。遺構検出面が弥生時代後期と同じであることと竪穴住居の床面の高さ等から本来の生活面は弥生時代後期に近かった可能性が高い。

古代は、1区において備前国御野郡の津島郷と伊福郷の郷境の溝と考えられる溝を確認した。しかし、3区においてはわずかに柱穴・格子状の溝等を確認した程度である。

中世～近代は、1・2区を中心に北東から南西方向の溝を18条検出したが、3区においては溝が3条検出されたにすぎない。

第2節 基本層序

岡山平野は旭川の沖積作用によって形成された平野で、その過程で自然堤防、後背湿地、埋没流路等を複雑に形成・展開しながら今日見る姿を完成している。

津島遺跡の土層断面には地点ごとに状況は異なるものの、おもに弥生時代前期以降現代に至るまでの痕跡が累々と刻まれている。

津島遺跡の場合、地点によって異なるが基本的な土層の状況は次の通りである。

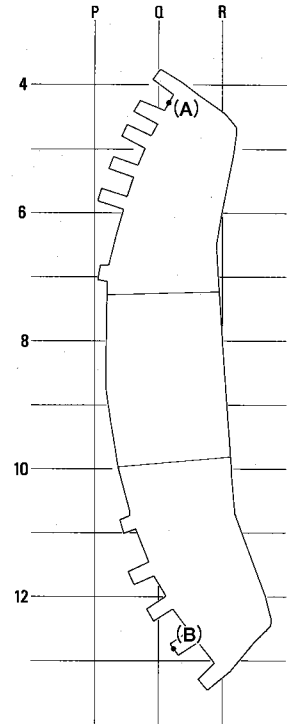
最上層である第1層は、明治40年の練兵場造成のために水田直上に約1mにも達する土砂で、京山から運搬・盛土されていたことは既に述べた。調査は、その造成された花崗岩パイラン土および直下の明治の水田層（第3・5層）、さらには水田堆積砂（第2層）以下を対象に実施した。

調査地点によっては明治40年の水田床土層除去段階で土質、色調、遺物の包含の有無等によって様相が異なる場合がある。それは調査地点が微高地部であるのか低位部であるのかの差異ともいえ、顕著な場合調査前からおおよその見当がつくところである。前者の場合1区南東側と3区のほぼ全域で見られ、おおむね竪穴住居・土壙等遺構の重複した微高地上面の状況を如実に反映する。一方、後者の場合1区北西側、4区、5区が該当する。多くは水田層であることが多く、土器の包含はほとんど確認できない。ただし後世の大規模な土地変革によって集落の存在する微高地は削平され、より深く地中に刻まれた部分しか遺構として残存しない場合もあり、現況が水田であったとしても本来の微高地の在り方がどうであったのかは明言出来ない。1区の場合、竪穴住居・袋状土壙の遺存状況から考えても、また河道1北側斜面に堆積した膨大な遺物によっても集落を載せる微高地が本来存在し、それが後世に削平され、やがて耕地化されたことは想像に難くない。また、弥生時代後期段階の微高地基盤層が弥生時代前期以降一貫して微高地として存続していたかどうかについては、旧武道館予定地

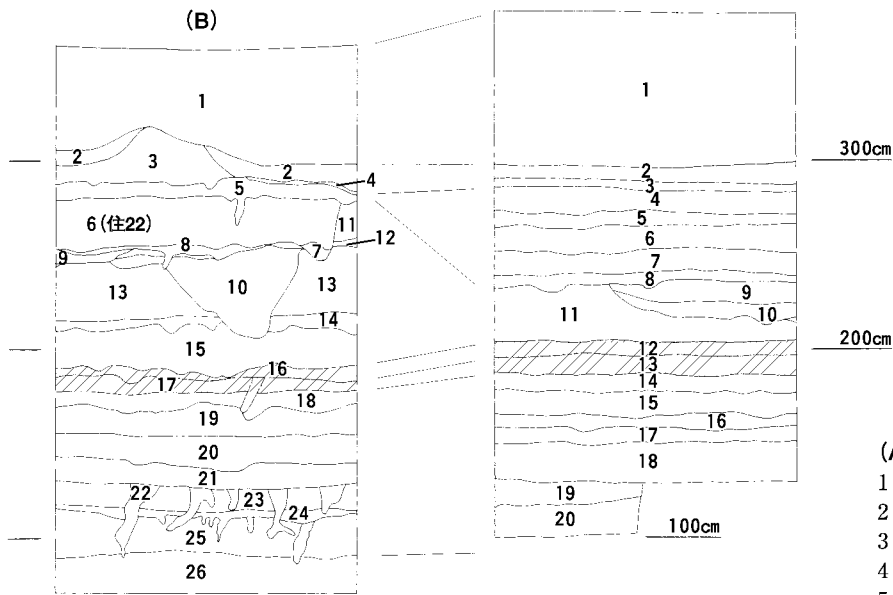
第3章 発掘調査の概要

等で一致する場所も存在するものの明言できない。弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の形成された3区の場合は、下層に弥生時代前期水田（第16・17層）が海拔180～190cmの高さで展開し、その存続性はないといえる。

津島遺跡では、弥生時代前期以前に既に形成されていた黄褐色土および黒褐色土を基盤層とする微高地が所々小規模な存在を見せ、その周辺低位部に堆積した120～190cm間の黒褐色土層が水田に利用されている。本調査区においては1区北端部分で黒褐色土の厚い堆積による微高地が水田面より若干高いレベルで調査区境に確認されたが、これは小規模で集落を載せるものではない。水田の上層（第13～15層）には黄色粘質土が厚く堆積する。地点によっては洪水堆積砂と認識される層の存在も周辺部の確認調査で認められるが全体を通してはみられない。また、弥生時代中期と考えられる水田層の存在も周辺部の確認調査で確認されるがこれも全体には及んでいない。



(A) (島崎)



(A)

- 1 造成土
- 2 にぶい黄色微砂 2.5Y6/3
- 3 青灰色粘質土 10BG6/1
- 4 灰色微砂質土 7.5Y6/1
- 5 オリーブ黄色微砂質土 5Y6/3
- 6 灰色粘質土 5Y6/1
- 7 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 8 褐灰色微砂質土 10YR6/1
- 9 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 10 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 11 にぶい黄橙色粘質土 10YR6/4
- 12 褐灰色粘質土 7.5YR4/1
- 13 黒褐色粘質土 7.5YR3/1
- 14 灰色粘質土 5Y4/1
- 15 灰色粘質土 7.5Y4/1
- 16 灰オリーブ色粘質土 5Y6/2
- 17 灰色粘質土 10Y4/1
- 18 オリーブ灰色粘質土 5GY6/1
- 19 青灰色粘質土 5B5/1
- 20 オリーブ灰色粘質土 7.5Y6/2



(B)

- 1 造成土
- 2 黄灰色粘性細砂 2.5Y6/1
- 3 灰黄褐色粘性微砂 10YR6/2
- 4 明黄褐色粘質土 10YR6/8
- 5 灰褐色粘質土 7.5Y6/2
- 6 黒褐色粘性微砂 10YR3/1
- 7 褐灰色粘性微砂 10YR4/1
- 8 暗褐色粘性微砂 10YR3/3
- 9 灰黄褐色粘性微砂 10YR4/2
- 10 黄灰色微砂 2.5Y4/1
- 11 灰褐色粘性微砂 10YR5/1
- 12 にぶい黄褐色粘性微砂 10YR6/4
- 13 灰黄褐色粘性微砂 10YR6/2
- 14 にぶい褐色粘性微砂 7.5YR5/3
- 15 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 16 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
- 17 黒褐色粘質土 10YR3/1
- 18 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- 19 にぶい黄橙色粘質土 10YR7/3
- 20 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
- 21 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 22 灰色粘質土 5Y4/1
- 23 灰オリーブ色粘質土 5Y5/2
- 24 灰色粘質土 5Y5/1
- 25 浅黄色粘質土 2.5Y7/4
- 26 灰色粘質土 5Y6/1

第12図 1・3区土層断面柱状図 (1/20)

第3節 弥生時代前期の遺構・遺物

1 弥生時代前期の概要

調査区は、昭和43年弥生時代前期の集落が確認された当初武道館予定地の東約250mの地点に位置する。調査区からは、水田遺構が弥生時代後期の幅約50mの河道によって寸断されてはいるものの、本来調査区のほぼ全域に存在していたと考えられる状況で検出された。ただし、遺構には堅穴住居・掘立柱建物等集落の存在を窺わせるものはなく、いずれも水田・溝・畦道等を中心とした水田遺構である。黒色土の存在によっておおむね認められる前期水田等遺構の検出面は、北側1区の調査区境が最も高く海拔215cmを測るが、南に行くにしたがい地形は下がり、1区南端では海拔180cm前後での検出となる。詳細には、北西から南東方向へと地形が徐々に下がるのが認められる。途中明瞭ではないが、3区の北側10Q～11Q付近が最も低く、160cm前後を測る。ところが南に下がりつつあった地形はこのあたりを境に一変し、南側12Qから11Rに向けて、すなわち北西から南東方向へと徐々に海拔180cm前後まで高くなる。

遺構は、調査区北端部において島状を呈する微高地、微高地部を開削して南に直進の後東流し、直進を繰り返す溝、その間周辺に広く地形の在り方に則して広く展開する水田、さらには水田を構成する畦のなかにあつて幅の広い帯状の畔路と考えられる高まりがある。

遺物は水田遺構が中心とあつて多くはないが、微高地上面からは土器、水田面からは磨製石包丁が1点、さらに性格不明ながら同じく水田面からは4cm前後を測る川原石の面的な存在が知られた。(島崎)

2 微高地

微高地1 (第2～4・13・14図、巻頭図版1、図版3・4・51)

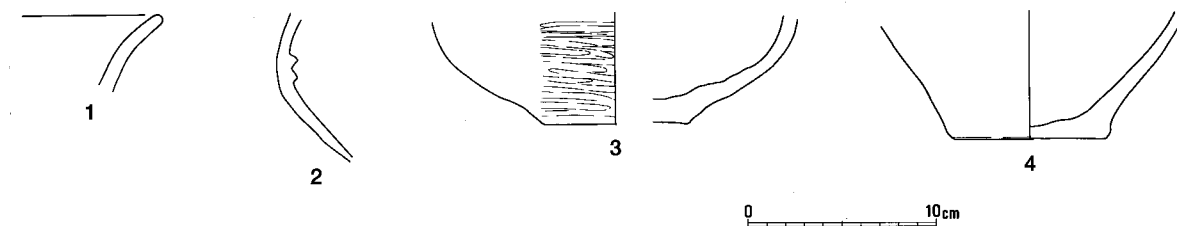
調査区北側の4Q区にあつて海拔215cm付近で検出された、周囲の水田面より約10cm高い黒色土をベースとする高まりである。ただし、この面から遺構の存在は確認されなかった。微高地は、二つの高まりからなりその中央部には溝1があつて、その流れを刻む。南側に広く展開する水田の畦はこの微高地端部からほぼ放射状に派生しており、百間川遺跡群の弥生時代後期の島状高まりに近似する。

時期は、出土遺物、水田との密接な関係から弥生時代前期である。(島崎)

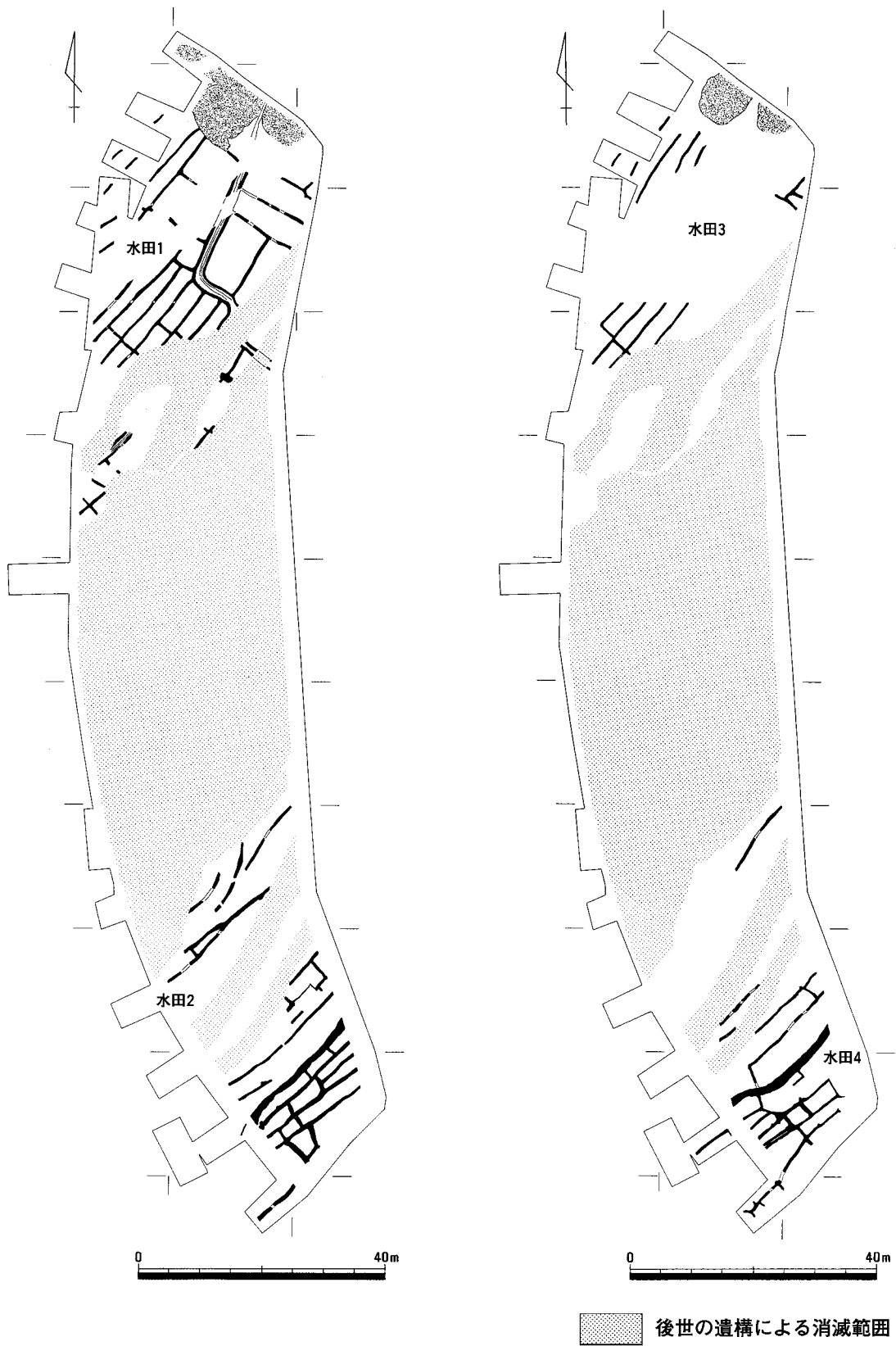
微高地2 (第2～4・13・14図、巻頭図版1、図版3・4・51)

微高地1の上層に存在した不定形な高まりである。微高地1と同じく水田との共存が認められる。

時期的には、上層の水田に対応し、同じく弥生時代前期である。(島崎)



第13図 微高地出土遺物 (1/4)



第14図 水田1～2・3～4 (1/1,000)

3 水田

水田は、2区で弥生時代後期から古墳時代にかけての幅50mの河道によって寸断されているものの1区から5区までの調査区のほぼ全域にわたって存在しているのが確認された。

水田は、黒色を呈するものとその上層に確認された灰色を呈する2枚の存在が確認された。ここでは、下層で検出された黒色を呈する水田で中央の河道1を境に北側1区を中心に検出された水田を水田1、南側3区を中心に検出された水田を水田2、さらに上層水田も同様に、北側を水田3、南側を水田4として報告する。なお、水田5と6は、照明塔設置部分の4区と5区でそれぞれ検出された水田を示す。

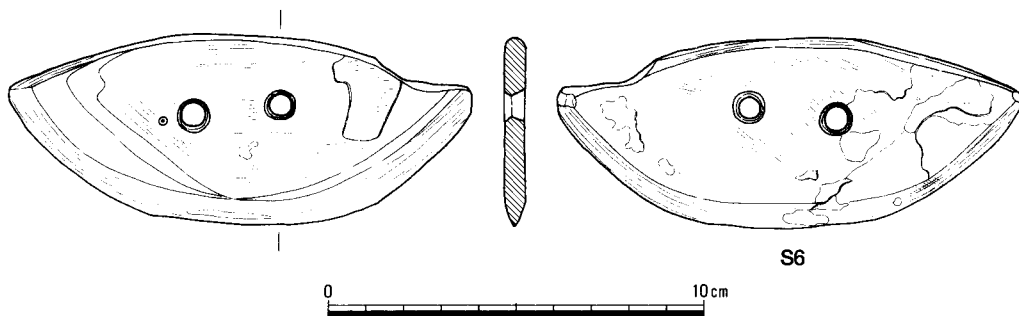
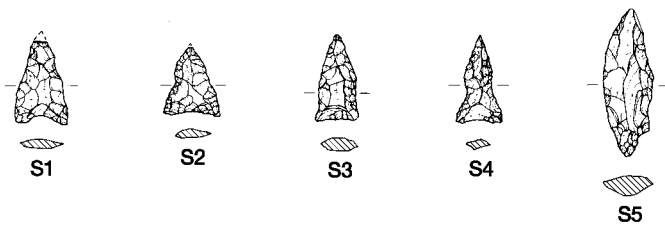
水田1（第2・3・14～17図、巻頭図版1、図版51）

水田1は、水田3の下層に検出された全面黒色粘質土の田面・畦畔で構成されるものである。河道1の南側に展開する水田2と本来同一面にあると考えられる。弥生時代中期の溝12～15、池1、後期の河道1等の開削によって消滅しているものの1区と2区北側のほぼ全域で畦畔が、さらに1区では用水路・排水路と考えられる溝が明瞭に確認された。

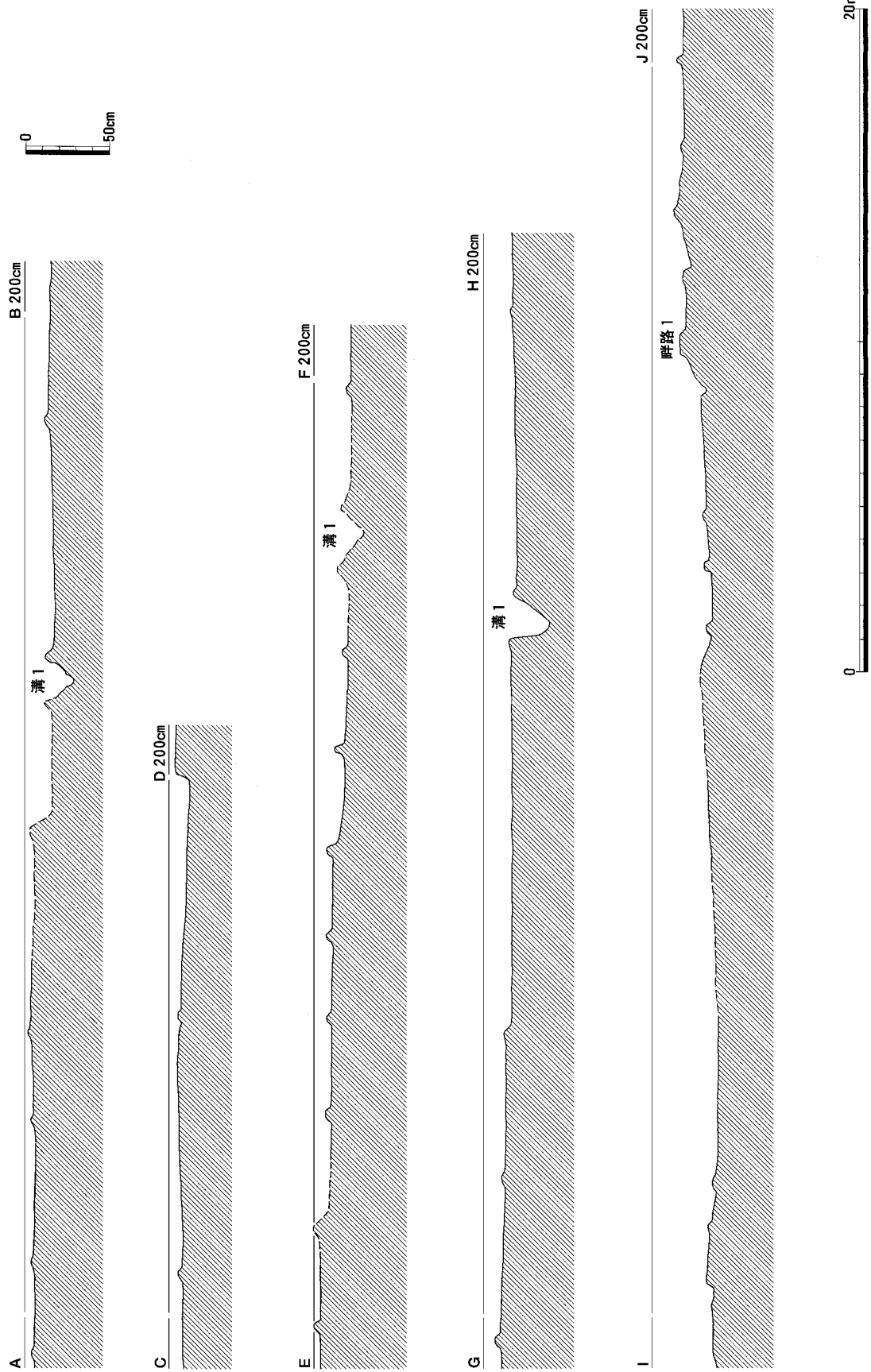
水田1は、北側に島状に認められる微高地の中を南に貫流する溝1、さらには微高地から放射状に直線的に伸びた畦と有機的に結びついた状況で平面長方形を基調とした水田が多い。畦畔の在り方から知られる全体の傾向として水田は北東から南西方向に長辺側を見せる。これは北西から南東にゆるやかに下がる地形の在り方から水持たせを意識して造作された結果必然的に地形の等高線に沿う状況になったことが窺われる。水田面それぞれの高さは、溝1を中心として北西側のものの比高差が大きく、東側は比較的平坦である。畦畔の検出時最初に確認されるのが等高線に平行した長軸方向で、短軸方向の畦は長軸に比較して低く、検出に苦慮することが多いことから首肯されるものと考ええる。

面積的には、計測可能な水田のなかで最も小規模なものが13.7㎡で大規模なものが70.5㎡である。平均的には、28㎡とやはり小規模の感は拭えない。

水田面からは、土器の存在はまったく確認できなかったが、磨製石包丁1点・石鏃3点が比較的近接して出土した。また、この他にも水田面および畦畔付近に点在して4cm前後の円礫が数多く確認されている。（島崎）



第15図 水田1出土遺物 (1/2)



第16図 水田1・2断面図（横1/182・縦1/36）



第17図 水田1 (1/300)



第18図 水田2 (1/300)

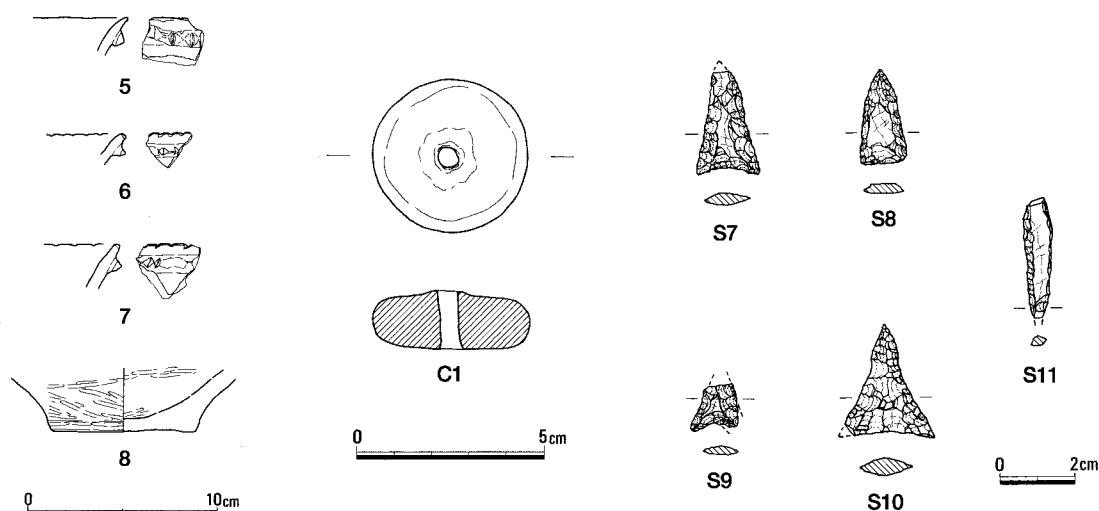
水田2 (第14・18・19図、図版4・51)

河道の左岸に広がる黒色土の平坦な広がり、その上面に畦畔と考えられる高まりが確認できることから水田と判断した。水田面は起伏が顕著で、全体的には北東から南西に向かって下がっており、海拔約170~180cmを測る。畦畔は、北東から南西方向のものが水田面からの高さ約10cmを測り、明確に検出できるが、北西から南東方向のものは総じて5cm以下と低く明確でない。したがって、水田面一帯を北東から南西方向の畦畔で幅140~310cmに短冊形に区切り、その中を低い畦畔で区画していると考えられる。水の供給方法は、明瞭な水口が検出されないことから、北東の高い方向から低い畦畔の上を掛け流すことによって行っていたと推察される。

出土遺物は、水田面の検出中に少量出土している。5~7は縄文晩期の突帯文土器の口縁部で、6・7は口唇部に刻みをもつ。8は弥生前期の壺の底部で、内外にヘラミガキが看取される。C1は土製紡錘車で、12Q区の大畔のすぐ北側の北東から南西に伸びる畦畔上で出土した。S7~11はサヌカイト製の剥片石器で、S11が錐でその他はすべて鏃である。出土状況が確認できた石器はいずれも水田面直上付近で出土している。また、河道で採集できる小円礫が水田面直上かやや沈み込んだ状況で多数出土しており、投弾の可能性はある。

水田の時期は、周辺の調査状況と出土土器から弥生前期頃と考えられる。

(杉山)



第19図 水田2出土遺物 (1/4・1/2)

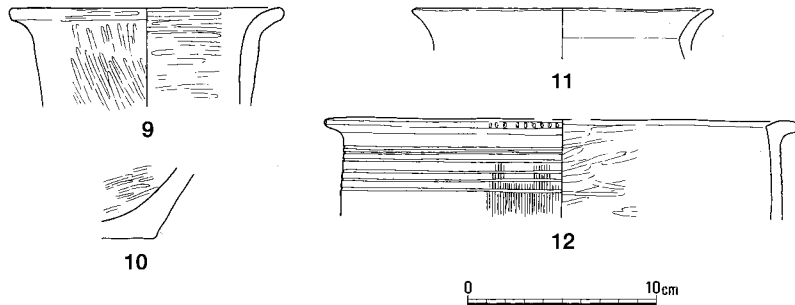
水田3 (第14・20・22図、図版3・51)

水田1の上層の海拔190~210cmにあって、ほとんど密着して検出された厚さ5cm程の灰色粘質土を耕作土とする水田である。調査区北側部分では、水田1の微高地周辺部を削平して耕地の拡大意図が認められ、水田1段階より微高地が規模を縮小している。これに伴って下層の水田1にはみられなかった微高地と水田境の溝2が水田3耕作土の直下にあつて微高地境に沿った状況で検出された。

水田は、畦畔・溝等が検出できない調査区もあったことで水田全体がどのようなものであったか判断できない。しかし基本的には水田1の上層にあって同じ地形の上に造られたものの特性から、畦畔の在り方等これに近似する状況にあったようである。詳細には水田3の畦畔は水田1の畦畔とその位置がよく一致する。ただし、微高地周辺部においては微高地を中心に放射状に畦畔が延びるのであるがここではまったく異なった箇所が存在する。これは微高地を開削し耕地の拡張をなした際、新たに既存

の畦畔とのつなぎのための畦畔とのズレが生じ、これを調整することによって従来の畦とは場所が変わってしまった結果と考える。

なお、水田1の中央部に認められた南方向に流れる溝1と同じ機能をもった用・排水路溝の存在および溝1との関係等については明確にはできなかった。



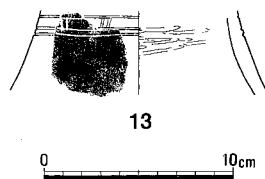
第20図 水田3出土遺物 (1/4)

出土遺物は、微高地付近を中心として小片ながら壺9・甕11・12等が出土している。甕は、口縁端部が逆「L」字状を呈するもので口縁直下に巡らされた沈線は多条化傾向にあった。

時期は、前期新段階を示す。(島崎)

水田4 (第14・21・26・37・38図、図版4)

3区全面に広がる水田層であり、水田3上面に位置する。水田4は上面の黄褐色を基調とする砂質土層下から出土し、水田3より色調がやや薄い黒褐色土層を目安に検出した水田面である。この水田4の水田面は南側に行くにしたがい、徐々にレベルが高くなる。3区北端の水田4のレベルが標高155cmを中心とするレベルであるのに対し、3区南端付近の水田4のレベルは標高180cmを中心とするレベルにあり、25cm程の高低差がある。水田4を精査した結果、水田畦畔を検出した。水田畦畔で北東から南西にいたる畦畔は比較的検出しやすかったが、そこから南北等に分岐する畦畔はあまり明確に検出することができなかった。特に3区の北側ではそれほど明確な水田区画を検出できなかった。他方、南側では北東から南西方向の畦畔を約10本検出した。そのうち、1本は幅120cm前後、高さ2～



第21図 水田4出土遺物 (1/4)

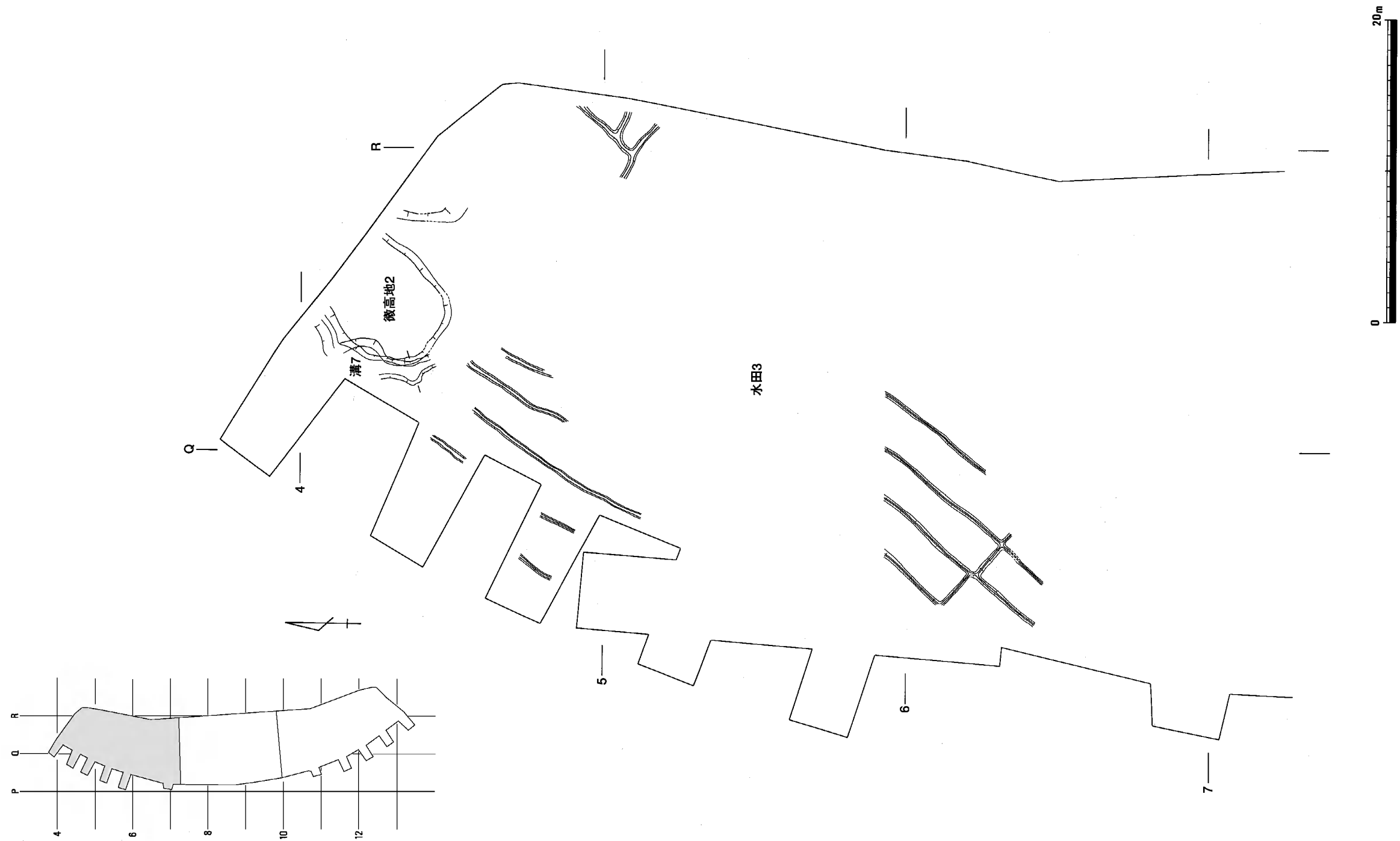
3cm前後を測る幅広のもので、通路ともいえるものであった。その他は幅約30～50cm、高さ3cm前後であった。これら畦畔に直交する畦畔を6か所ほど検出した。1枚の水田の面積は約6～11.5㎡を測る。水田上面から少量の弥生土器が出土している。その他、小さな円礫が多数出土している。弥生時代前期後半頃の水田の可能性が高い。(金田)

水田5 (第23図・図版50)

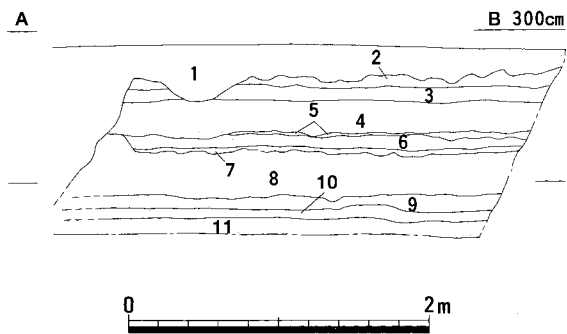
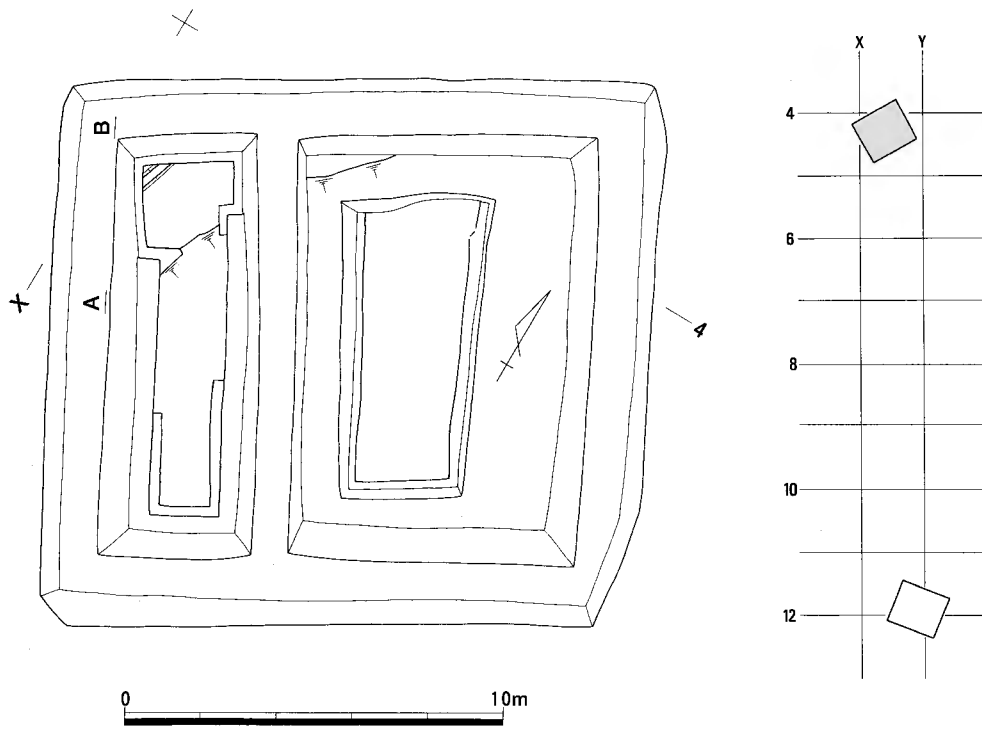
4区の北側照明塔調査区で検出された水田である。上下2枚の水田の存在が確認された。海拔190cmで灰色粘土の上層水田が、その下層180cmで黒褐色粘土を耕作土とする水田が検出された。畦畔の確認されたのは下層水田のみで、南北方向に1本、1区と同じく地形に則した在り方をみせている。遺物はまったく出土しなかったが、時期的には弥生時代前期である。(島崎)

水田6 (第24・25図、巻頭図版2、図版50)

5区は第一次確認調査時において弥生時代前期2枚と前期以前の可能性をもった2枚の計4枚の水田層が確認されたT3の南側に隣接する地点である。最上層の水田は、海拔170cmで検出されたが下層の水田と同じく畦畔は田面が黒色土と灰色土が塊状にまだらに見えるのみでまったく認められな

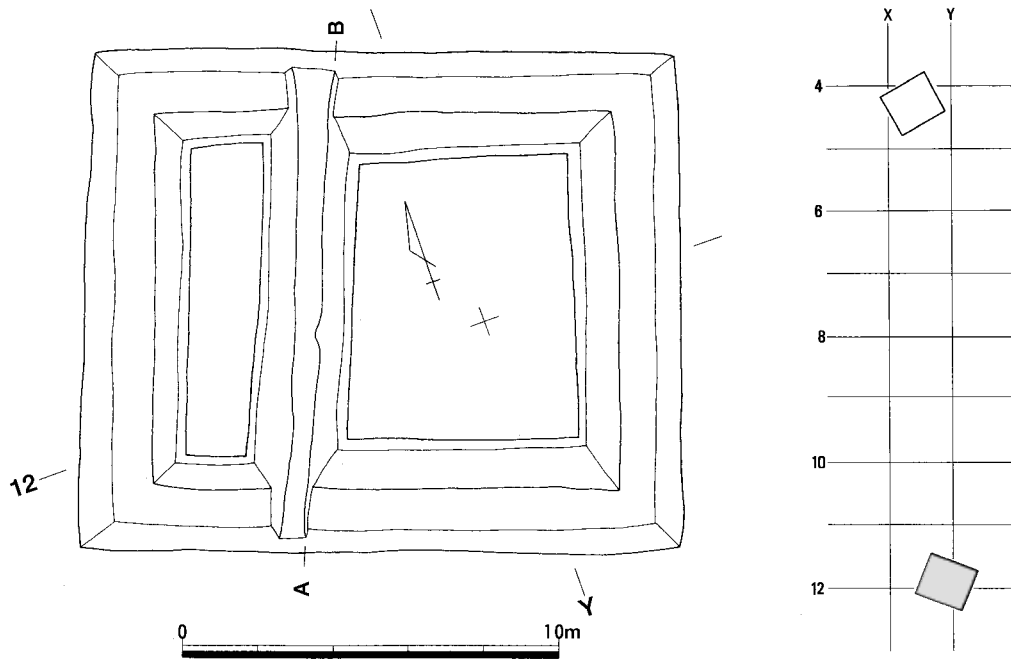


第22図 水田3 (1/300)

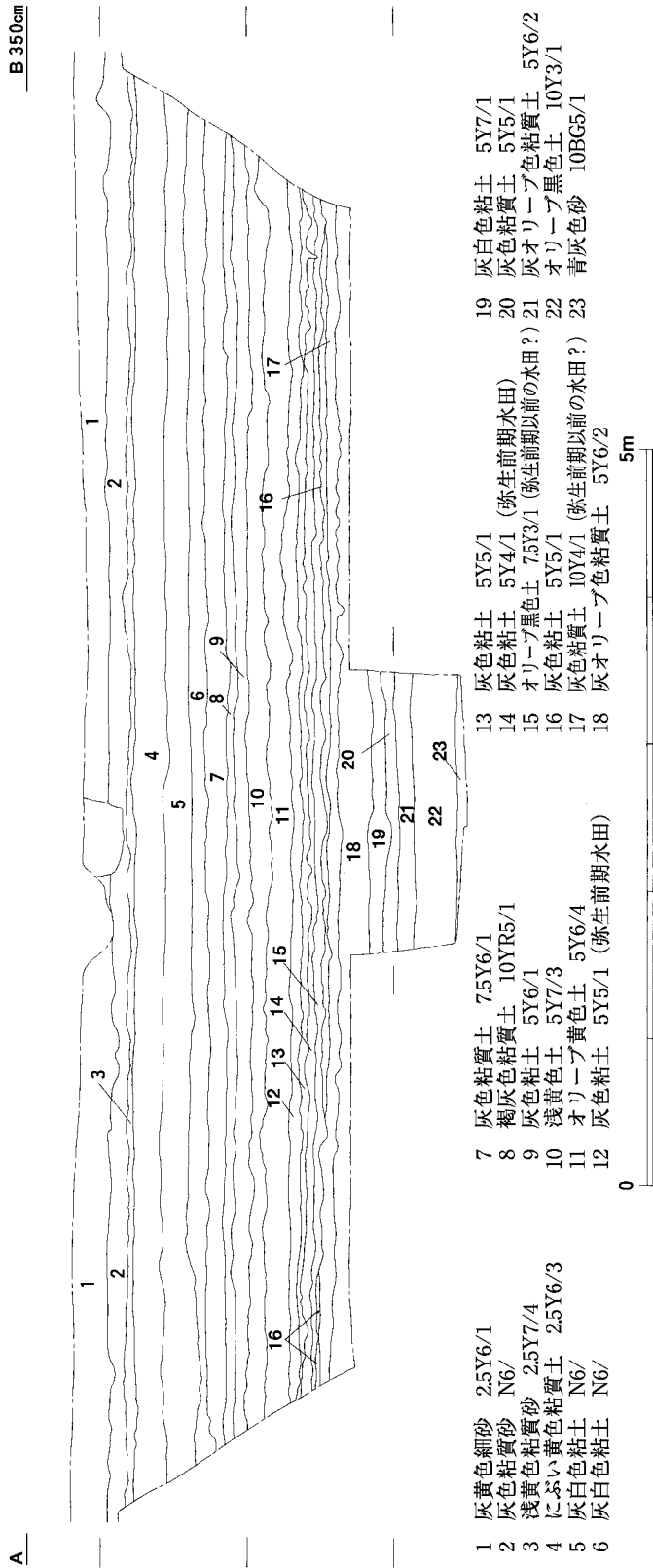


- 1 灰黄色細砂 2.5Y7/2
- 2 浅黄色砂質土 2.5Y7/4
- 3 明黄褐色粘質土 2.5Y7/6
- 4 黄橙色砂質土 10YR8/6
- 5 灰黄色細砂 2.5Y7/2
- 6 灰黄色粘質土 2.5Y7/2
- 7 灰白色細砂 2.5Y7/1
- 8 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3
- 9 灰色粘土 5Y5/ (水田層)
- 10 黒褐色粘土 2.5Y/3 (水田層)
- 11 暗灰黄色粘土 2.5Y4/

第23図 水田5 (1/200)・土層断面図 (1/50)



第24図 水田6 (1/200)



第25図 水田6断面図 (1/50)

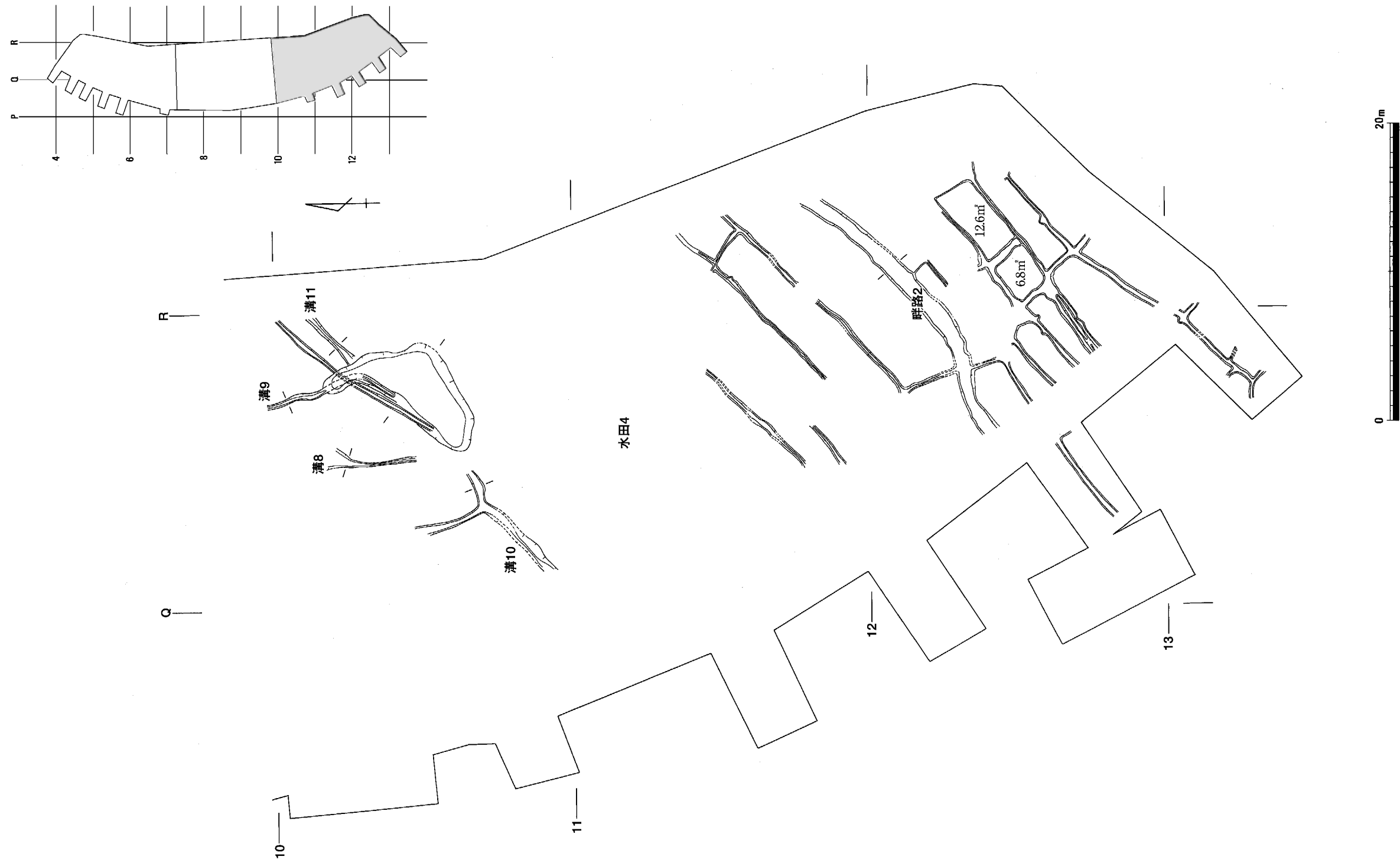
かった。この在り方は、下層の3枚の面も同様であった。また遺物の存在についても精査を実施したが確認できなかった。

なおこれら4枚の層について植物珪酸体分析を行った。この結果、前期の2層からは低率ながらイネ属が検出されている。一方、前期以前と考える2層については第15層で低率で認められたものの第17層では確認されなかった。(島崎)

4 溝

溝1 (第17・27~31図)

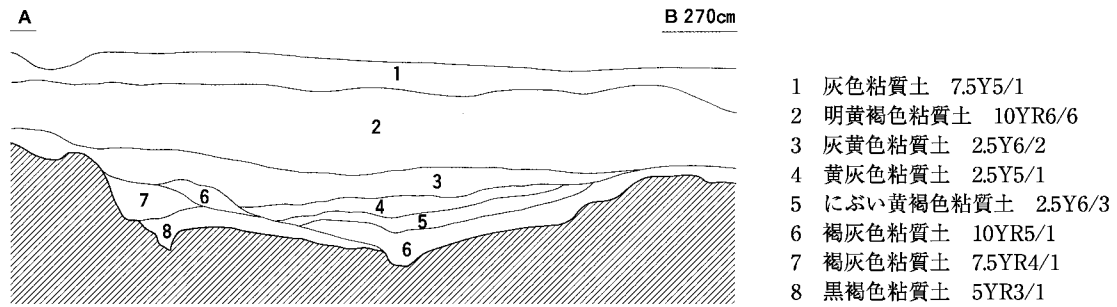
1区から2区にかけて水田1に伴って存在した溝である。溝は、北側微高地の間を出て南に約30m直進した後そこでほぼ直角に角度を変えてさらに7~8m東流する。ここで弥生時代中期の溝12~15によって寸断されるが、溝はさらに東の溝2と南に流路を分岐するようで断片的にその存在が認められた。規模は、おおむね幅160cm前後で整った形状をみせる。断面は、浅い皿状を呈し、中央部がさらに窪む。溝の両側には、水田畦畔と同規模の畦畔状の高まりを伴って水田との区画を明瞭なものとしている。機能的には、調査区内検出の溝肩口に水口の存在が認められなかったことと断面が比較的浅い皿状を呈し溝底の高さが水田面に近い状況にあったこと等から、この溝1は増水時に水を両脇の畦畔状の畦



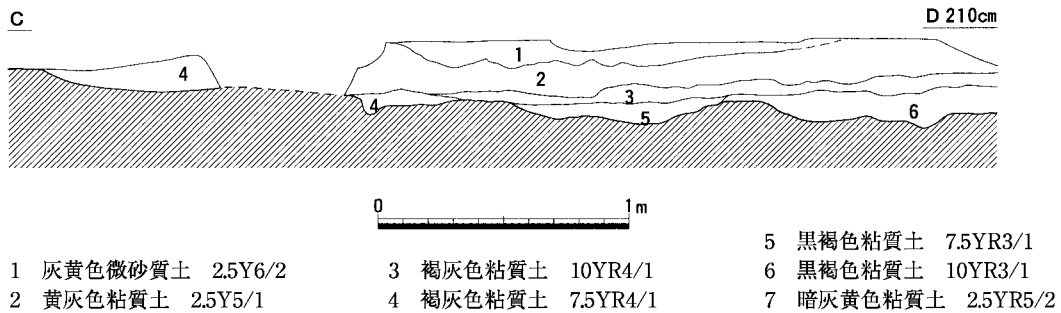
第26図 水田4 (1/300)

を越して流れ出させ個々の水田に水を供給する用水路と考える。同様の溝は北東に近接して所在する北方地蔵遺跡1区においても見られる。なお、微高地部での溝底には鉄分およびマンガン粒の沈着が顕著に認められた。

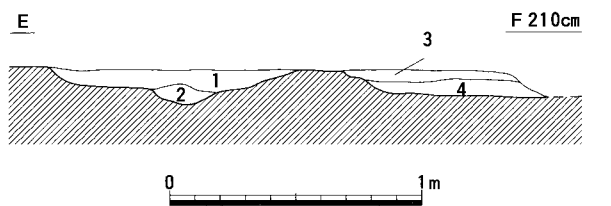
溝埋積土中からは、土器をはじめとする遺物の出土は多くなく、わずかに壺と甕の小片が散見されたにすぎない。甕は、水田1と同じく逆「L」字状をしたもので、端部には刻み目が、直下には多条化したヘラ描き沈線が10条施されてあった。時期は、前期新段階である。(島崎)



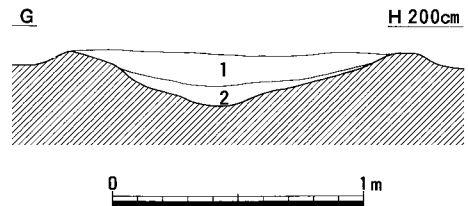
第27図 溝1断面図 (1/30)



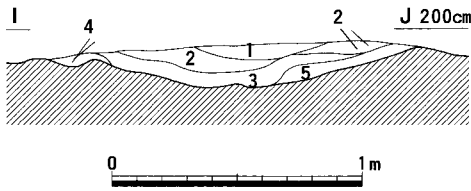
第28図 溝1断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



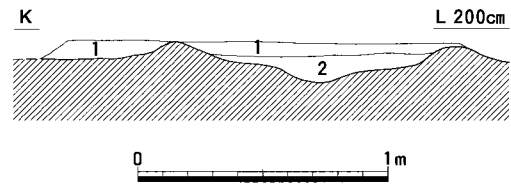
第29図 溝1断面図 (1/30)



第30図 溝1断面図 (1/30)

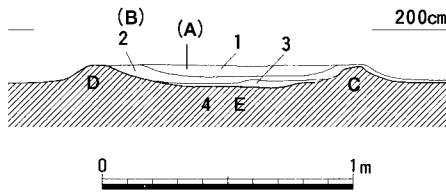


- 1 灰黄褐色粘質微砂 10YR5/2
- 2 にぶい黄褐色粘質微砂 10YR4/3
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 5 黒褐色粘質微砂 10YR3/1



- 1 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3
- 2 暗灰黄色粘性砂質土 2.5Y5/2

第31図 溝1断面図 (1/30)



- 1 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/4
- 2 暗灰黄色粘性粘質土 10YR6/4
- 3 明赤褐色粘質土 5YR5/6
- 4 明赤褐色粘質土 5YR5/8

第32図 溝2断面図 (1/30)

溝2 (第17・32図)

水田1に伴う溝である。1区南端にあって中期の溝12によって溝1と分断され、さらに東側は溝15で切られている。規模および両側上端に畦畔状の畦を有する構造上の在り方等から溝2は水田1への用水路と思われる溝1が分岐したものとする。イネ属の珪酸体は第4層以上において出現率は低いもののいずれからも検出されている。(島崎)

溝3・4 (第18・33図)

水田2の検出時に北半で確認した幅50~100cmの断面皿状をした浅い溝で、埋土はいずれも灰色土であった。両溝共に南側畦畔に平行する。特に溝4は畦畔に接してみられる。遺物の出土はみられなかった。(島崎)

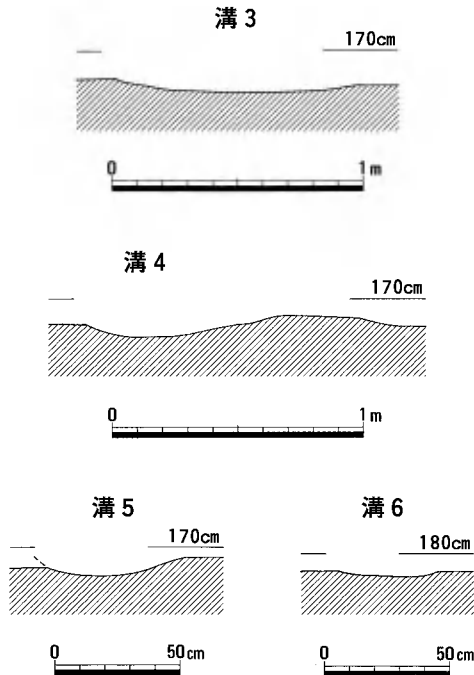
溝5・6 (第18・33図)

水田2の南半部分において確認された50cm未満の断面皿状をした溝である。溝6は、畔路1の北側縁辺に沿った状態で存在する。溝5は溝6の途中から北に向かってほぼ直角に流路をのぼす。(島崎)

溝7 (第22・34図)

水田3に伴う微高地2の縁辺部、水田層下層においてこれに沿った状況で検出された。島状高まり遺構に伴う溝と同じ性格が考えられる。(島崎)

溝8~11 (第26・34図)

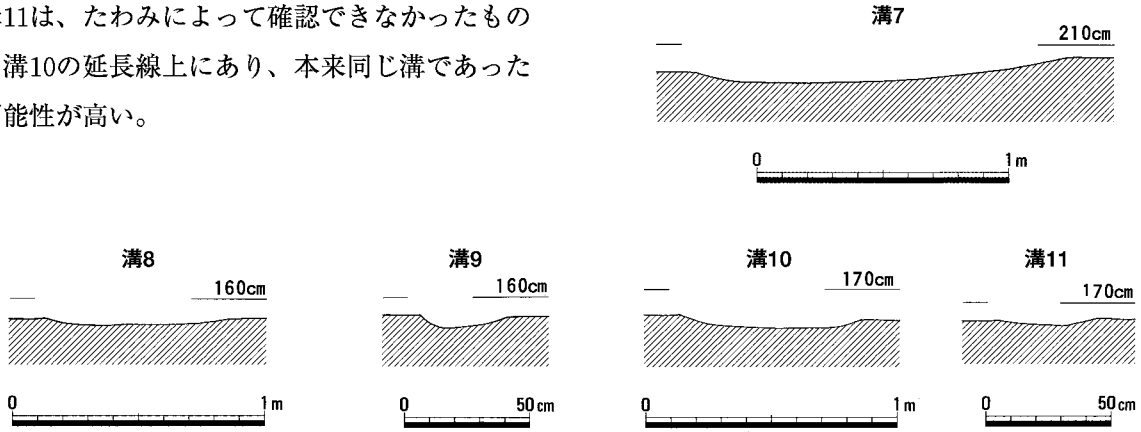


第33図 溝3~6断面図 (1/30)

水田4の北側において水田面検出途中で確認された溝状の遺構である。いずれも灰色粘質土で埋積しており、検出面から底までは5cm前後と浅い。

溝8は、北側に向けて幅が広がる。溝9はたわみと重複して見られ、たわみの埋没後これを切って掘られていた。溝10は、北東から南西方向を基調とした幅50cm前後の溝で、途中から北に分岐する。

溝11は、たわみによって確認できなかったものの溝10の延長線上にあり、本来同じ溝であった可能性が高い。

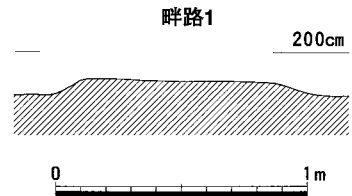


第34図 溝7～11断面図 (1/30)

5 畔路

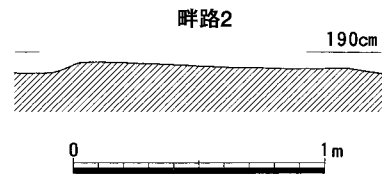
畔路1 (第18・35図、図版4・51)

水田2に伴って確認された北東から南西方向に水田畦畔と並行して、上端幅70～100cm、水田面との比高差5～10cmをもって延びる黒褐色土を基盤とする畔路である。(島崎)



畔路2 (第26・35図、図版4)

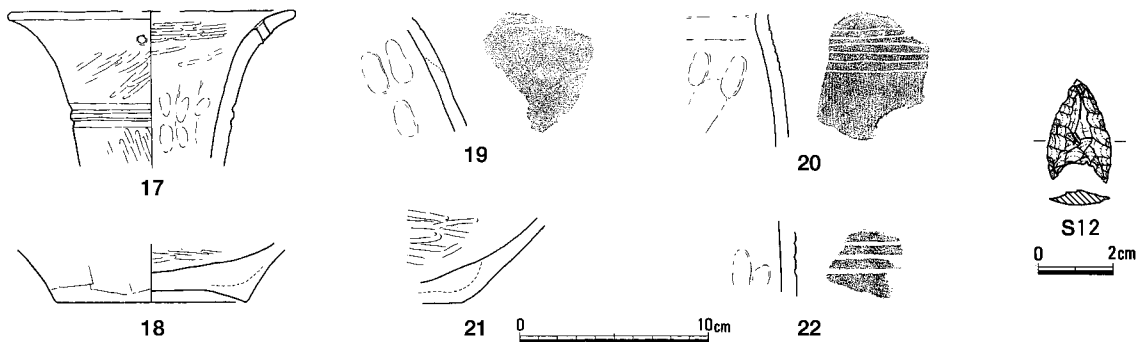
水田4に伴って検出された上端幅70～120cm、水田面との比高差5cm前後にあって北東から南西方向に延びる黒褐色土を基盤とする畔路である。畔路1とは多くの部分で重複はみられるが西側についてはまったく異にする。(島崎)



第35図 畔路1・2断面図 (1/30)

6 遺構に伴わない遺物

前期は水田を中心とした広がりであるため、遺物の出土も希であった。17が河道1、18・19が溝14、20・21が溝12等いずれもが弥生時代中・後期の溝から出土した遺物である。17・19は壺である。17には頸部に削り出し突帯が施され、口縁部には円孔が穿たれている。18・21は内面ヘラミガキが施されている。20・22は、多条化した段階の甕である。(島崎)



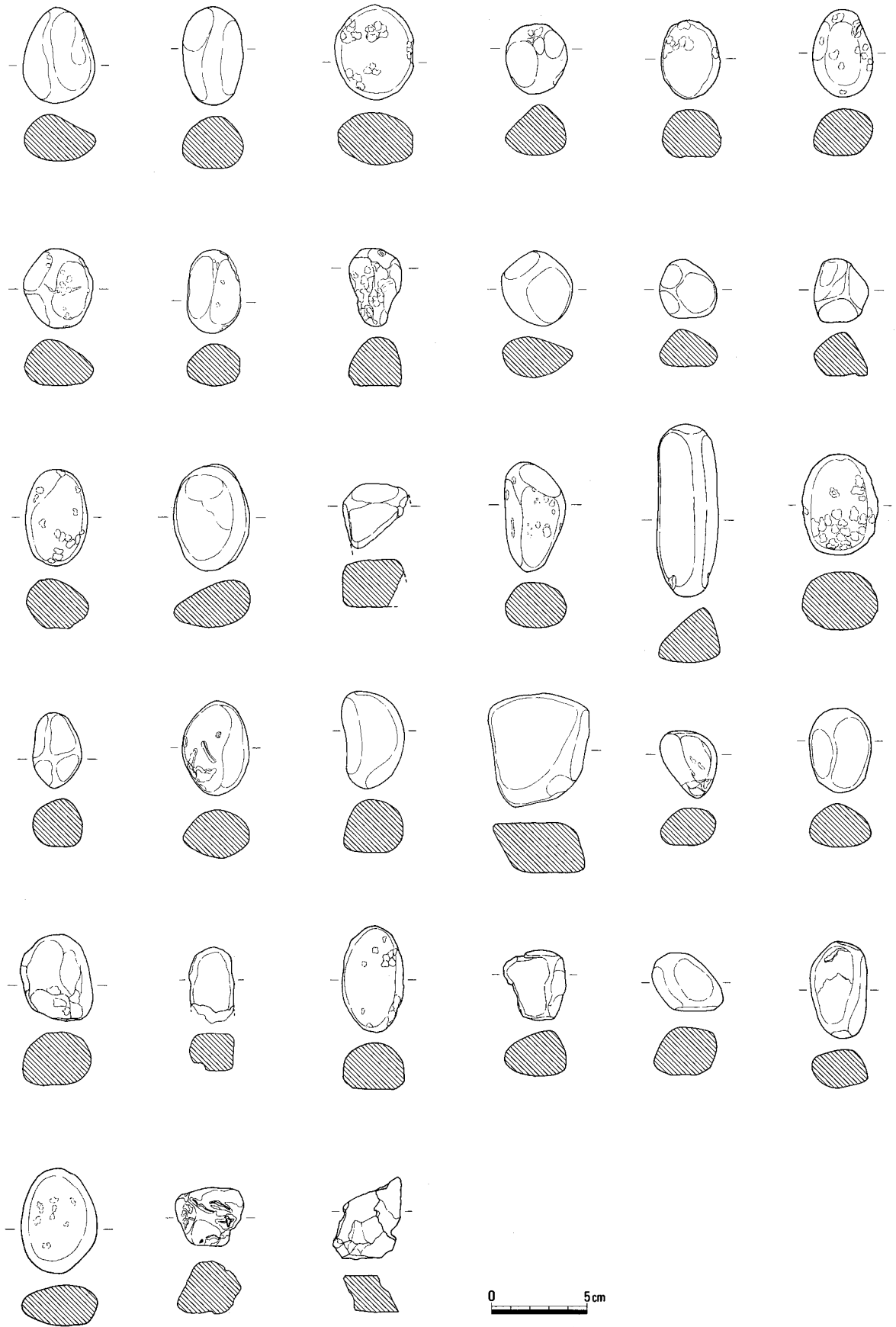
第36図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

水田出土礫（第37・38図、図版51）

1・3区の前期水田面から、長径4cm前後の自然礫が多数出土した。礫は後世の遺構による損壊部を除いてほぼ水田全域に分布し、特に集中する箇所などはみられない。これらの礫は、水田内に投げ込まれた投弾の可能性が高いと考えられる。詳細な分析結果は第4章の考察を参照されたい。(岡本)



第37図 水田2・4出土礫の分布状況 (1/400)



第38図 水田出土礫 (1/3)

第4節 弥生時代中期の遺構・遺物

1 弥生時代中期の概要

弥生時代中期は、2区のほとんどを占める河道1によって調査区中央部がすでに幅50mにわたって消滅しており、全体像については定かでない。遺構は、1区において溝12～15・池1・土壙墓1が、3区で溝16～21等が検出された。土器の出土をみない溝が多いなか、溝12～14・池1等はいずれもが中期末段階の仁伍式の土器を伴うものであり、切り合い等の状況を考えても他の遺構についてもほぼ同時期と考えて差し支えないものとする。

ただし、溝・土壙墓以外に本調査区からは竪穴住居等集落の存在を窺わせる遺構は全く検出されておらず、当該調査区内には集落の存在はなかったものと考えられる。この時期の集落は、第二次確認調査のT15およびT16等調査区において竪穴住居・土壙等が多数検出されており、本調査区の南西約100m前後を中心とした範囲に存在していたようである。

溝は、幅150～450cm、深さ100～150cmの断面「U」字状もしくは逆台形をした比較的しっかりとしたもので、中には溝17の断面にみられるごとく溝さらえの痕跡を認めるものも存在する。いずれも砂で埋没しており、洪水による埋没が想起される。

すなわち、中期は中期末段階の北東から南西方向に向けての用・排水路と考える溝が比較的集中して、その南西側に集落が存在する状況が考えられよう。(島崎)

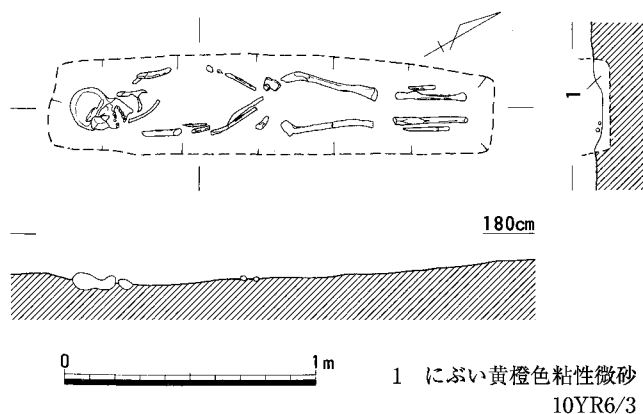
2 土壙墓

土壙墓1 (第39・40図)

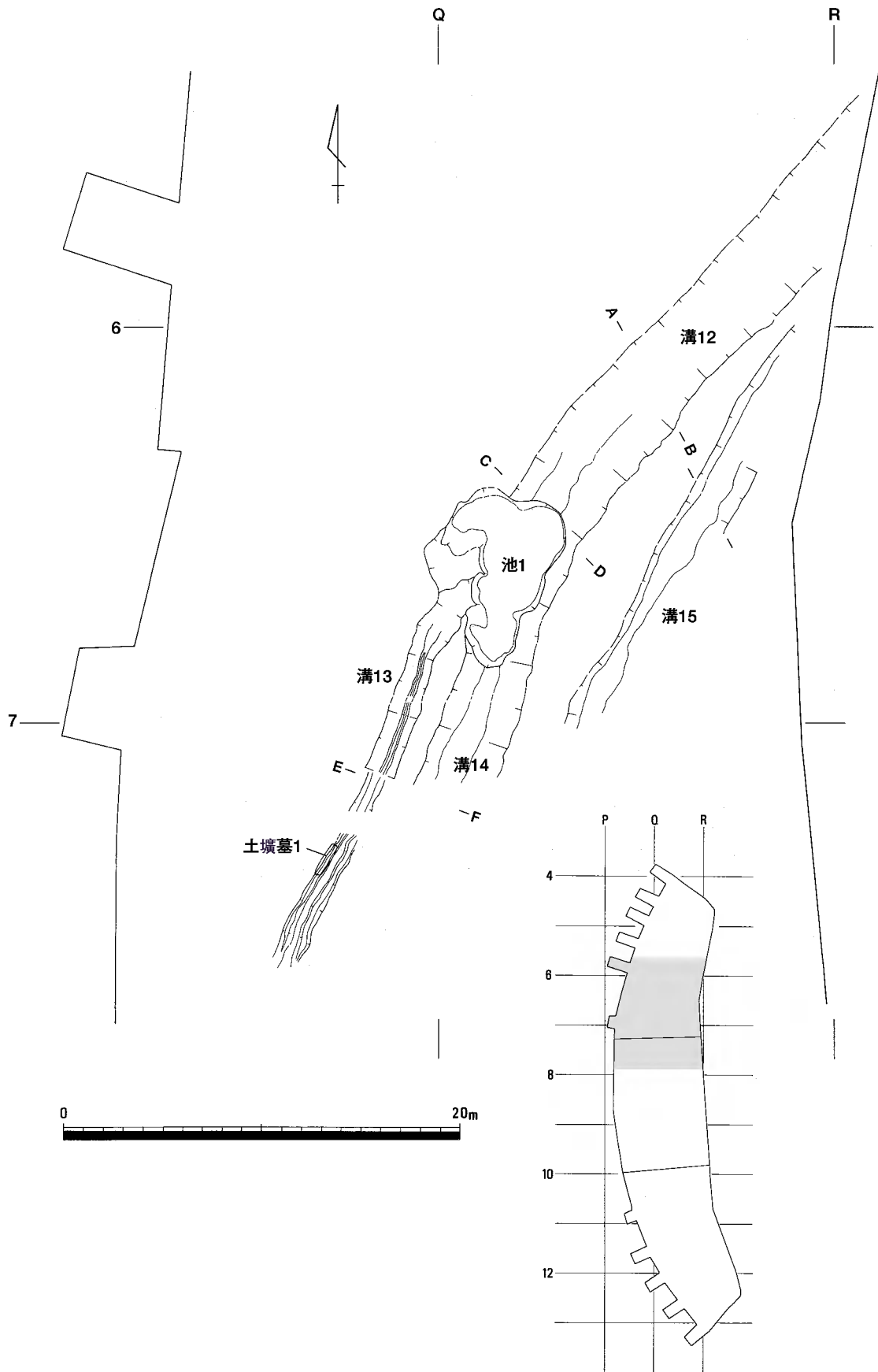
7P区に位置し、溝13の埋土上面の西側肩口で検出された。掘り方は、埋土が微砂で溝と同質であるため非常に不明瞭だが、やや粘性があることから範囲を推定した。その結果、有機質の影響も考慮する必要はあるとは思いますが、おおよそ176×40cmの長方形の掘り方が推定でき、深さも14cmほどで人骨がようやく収まる程度の規模と考えられる。人骨は、骨の大部分が粘土化していて不明なものもあるが、骨組に乱れないことから肉の付いた状況であったことは明らかである。頭位を南にした伸展

葬で、両腕を腰の位置で組んでいる。歯の依存状況が比較的良好であったので鑑定を行ったところ、40歳代の男性であるとの結果を得た。詳細については附編の小田嶋先生の玉稿をご覧ください。

土壙墓の時期は、溝13の上面に位置する弥生時代後期の溝31の埋土上面では、掘り方が確認されなかったことと、弥生時代中期の溝13の埋没後に掘削されていることから弥生時代中期頃と判断される。(杉山)



第39図 土壙墓1 (1/30)

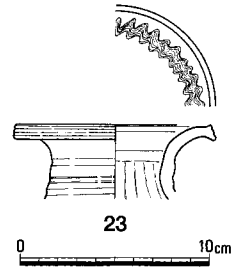


第40図 溝12~15・池1・土墳墓1 (1/300)

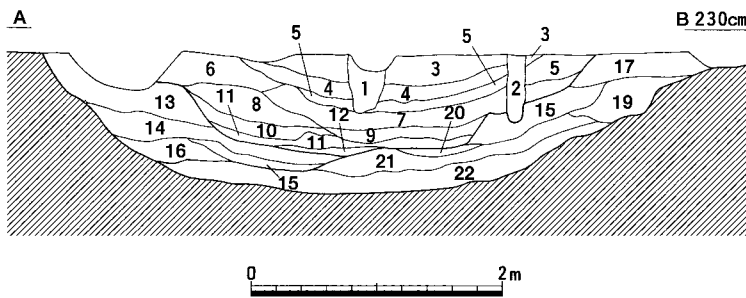
3 溝

溝12 (第40~43図、図版5・7)

5 Qから6 P区にかけて検出した溝である。流路方向は、底面の標高から、北東から南西に流れていたと推測される。溝は、上流部では単一の溝のように観察されるが、下流においては少々複雑な様相を呈している。第42図のように上流部においては、その断面形も浅い碗状に窪むものである。その溝も、少し埋まり、幅を狭めた状態でも機能していた状況が窺われ、第11層付近を底面とした溝が想定される。第43図は、複雑な様相を呈している。少なくとも3条の溝の重なりがみられる。第15・16層付近が先に述べた第11層に対応する溝であり、また、第26層を底面とする溝が考えられる。第24層は、別記する池の一部と考えられる。溝の幅は約520cmを測り、時期は、弥生時代中期後半と推測される。(井上)



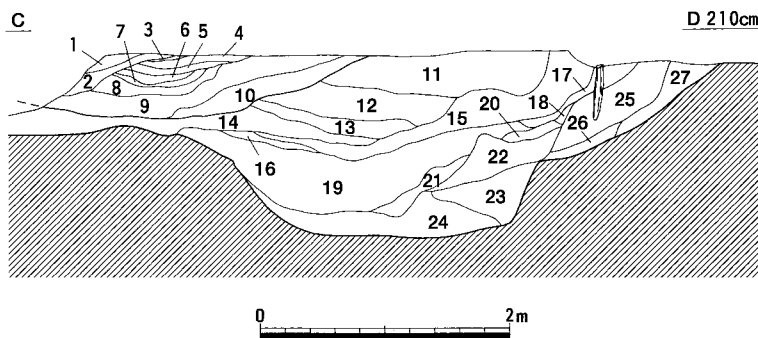
第41図 溝12出土遺物 (1/4)



- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 11 灰色粘質細砂 7.5Y4/1 | 15 灰色粘質微砂 7.5Y5/1 |
| 12 灰色微砂 5Y5/1 | 16 灰色粘質微砂 7.5Y5/1 |
| 13 黄褐色粘質土 2.5Y5/3 | 17 にぶい黄褐色粘質細砂 10YR4/3 |
| 14 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3 | 18 灰色粘質微砂 N5/ |

- | |
|-----------------------|
| 1 灰黄色砂質土 2.5Y6/2 |
| 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 |
| 3 にぶい黄褐色粘質微砂 10YR5/3 |
| 4 黄灰色粘質土 10YR5/2 |
| 5 灰色粘質土 N4/ |
| 6 灰黄褐色粘質細砂 10YR4/2 |
| 7 黄灰色粘質細砂 2.5Y5/1 |
| 8 にぶい黄色細砂 2.5Y6/3 |
| 9 黄灰色粘質細砂 2.5Y5/1 |
| 10 灰色粘質細砂 7.5Y4/1 |
| 19 にぶい黄褐色粘質細砂 10YR4/3 |
| 20 灰色微砂 5Y5/1 |
| 21 灰色粘質細砂 N5/ |
| 22 灰色粘質細砂 N4/ |

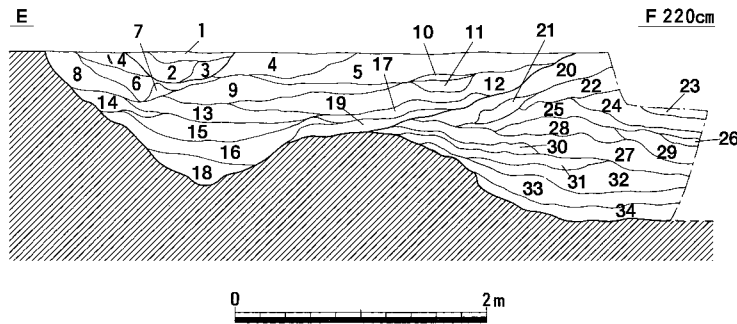
第42図 溝12断面図 (1/60)



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 11 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 | 17 灰オリブ色土 5Y5/2 |
| 12 黄褐色粘質土 2.5Y5/4 | 18 灰色粘質土 7.5Y5/1 |
| 13 灰色粘質土 5Y4/1 | 19 灰色粘質土 5Y5/1 |
| 14 灰色粘質細砂 5Y5/1 | 20 灰色粘質細砂 7.5Y5/1 |
| 15 灰色粘質土 7.5Y5/1 | 21 灰色粘質細砂 |
| 16 灰色粘質細砂 5Y5/1 | 22 灰色粘質土 7.5Y5/1 |

- | |
|-------------------|
| 1 黄灰色粘質土 2.5Y6/1 |
| 2 褐灰色粘質土 10YR6/1 |
| 3 明黄褐色細砂 10YR6/6 |
| 4 褐灰色粘質土 10YR5/1 |
| 5 にぶい黄色細砂 2.5Y6/4 |
| 6 灰黄色粘質細砂 2.5Y6/2 |
| 7 灰色粘質土 7.5Y4/1 |
| 8 灰色粘質微砂 5Y5/1 |
| 9 灰色粘質土 5Y4/1 |
| 10 灰色粘質土 7.5Y4/1 |

第43図 溝12断面図 (1/60)



- | | | |
|----------------------|----------------------|-------------------|
| 13 灰色砂質土 N6/ | 21 褐灰色砂質土 10YR6/1 | 29 青灰色砂質土 10BG6/1 |
| 14 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/4 | 22 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3 | 30 灰色粘質土 5Y4/1 |
| 15 灰色砂質土 N5/ | 23 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3 | 31 灰色砂質土 N6/ |
| 16 灰色砂質土 N5/ | 24 褐灰色砂質土 10YR6/1 | 32 灰色砂質土 N5/ |
| 17 青灰色砂質土 5B5/1 | 25 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3 | 33 灰色粘性砂質土 |
| 18 灰色砂質土 N5/ | 26 灰色粘性砂質土 5Y6/1 | 34 灰色粘性砂質土 N5/ |
| 19 灰黄色砂質土 | 27 青灰色砂質土 5BG6/1 | |
| 20 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3 | 28 灰黄褐色砂質土 10YR6/2 | |
- 1 明褐灰色砂質土 7.5YR7/2
 2 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/3
 3 灰白色砂質土 10YR7/1
 4 にぶい黄橙色砂質土
 5 灰黄褐色砂質土
 6 明褐灰色砂質土 7.5YR7/2
 7 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/2
 8 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/4
 9 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/4
 10 にぶい黄橙色砂質土 10YR6/3
 11 灰黄褐色砂質土 10YR6/2
 12 褐灰色砂質土 10YR6/1
- 1~19: 溝13、20~34: 溝14

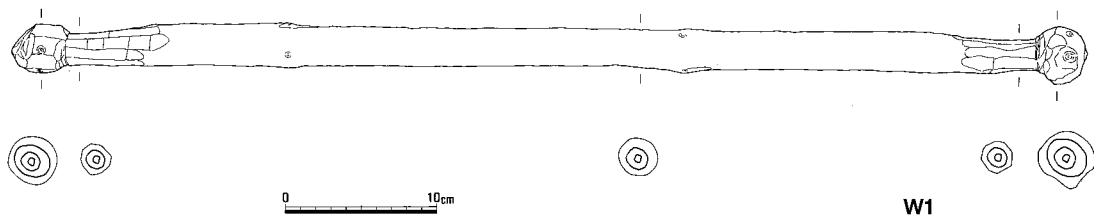
第44図 溝13・14断面図 (1/60)

溝13 (第40・44・46図、図版7)

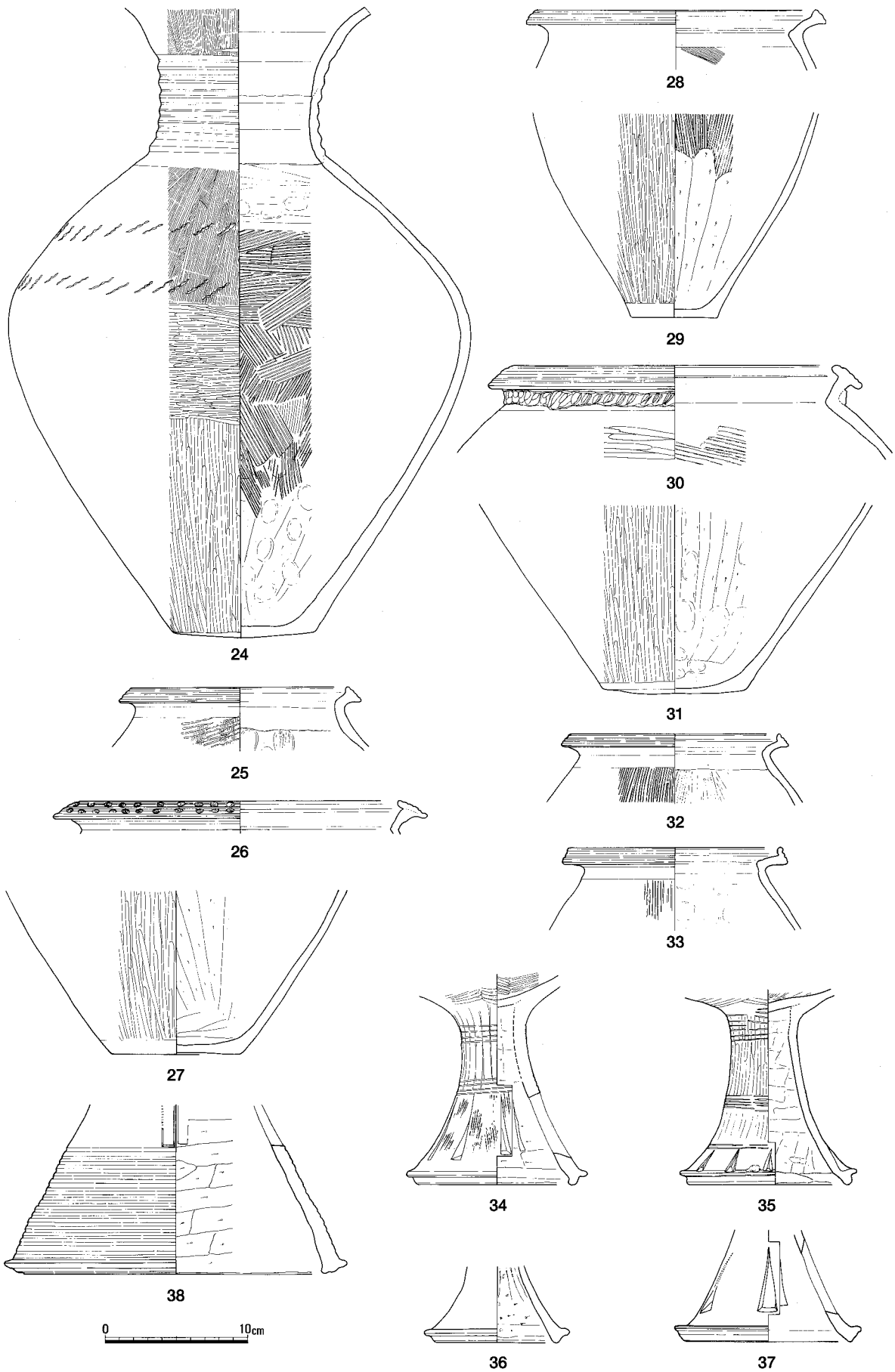
6・7 P区に検出した溝である。流路方向は、北東から南西に流れていたと推測される。調査した溝の全長は約20m、幅約260cmを測る。溝は、この上流では溝12として報告するものである。第42図では、第11層付近を底面とし、第43図では第15・16層を底面とするものがこの溝に相当するものと考えられる。溝の断面形を第44図で見ると、大きくは楕形を呈するものであるが、底面は幅が狭く尖り気味である。また、西壁は少し急斜面を呈しているが、東壁は、底面から少し上がったところで少し平坦面を形成しておりその後、緩やかな斜面を呈している。出土遺物としては、第46図に示す土器がある。24は、壺である。口縁部を欠くが、頸部には凹線文が施される。25~33は、甕である。胴部外面はヘラミガキ、内面はハケメと下半にヘラケズリが施される。34~37は高杯である。34・37は、脚部に三角透かし孔がみられる。35も三角透かし孔がみられるが、貫通していない。38は、器台の脚部である。凹線文と方形透かし孔がみられる。溝の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。(井上)

溝14 (第40・44・45・47図、図版7)

6・7 P Q区に検出した溝である。流路方向は、北東から南西に流れていたと推測される。調査した溝の全長は、約8mを測る。溝の幅は540cm前後を測る。この溝は、池を境に上流は溝12として報告するものである。溝13も同じ溝12から分流するが、第44図をみれば、20層付近を境にそれ以前が溝14であり、それ以後が溝13であることから、溝13が新しく、溝14が古いことがわかる。最も古い段階の溝12は、溝14の方向に流れていたが、少し埋まった段階で流れが溝13の方向に変わったことがわか

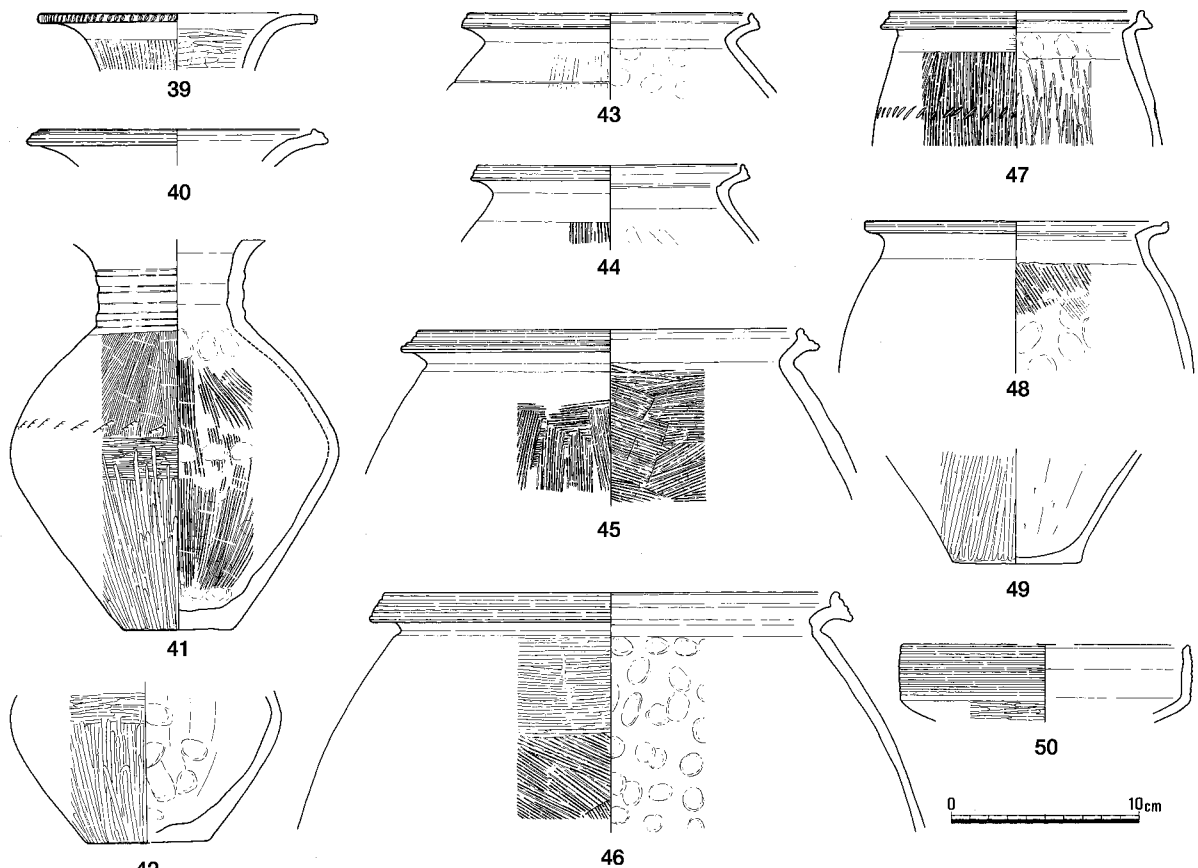


第45図 溝14出土遺物 (1/5)



第46図 溝13出土遺物 (1/4)

る。溝の断面形は、第44図からは全体が判明しないが、第43図と合わせて観察すると、溝12の形状を受け継ぐものと考えられる。出土遺物としては、第45図に示す木器がある。全長71cmを測る丸太で、その両端に近い部分を削り、端部を拳大に丸く加工した遺物である。土器は、第47図に示すものがある。壺・甕ともにその胴部内面はユビオサエ、ハケメが多く用いられており、ヘラケズリは胴部下半にみられる。溝の時期は弥生時代中期後半に属すると考えられるが、溝13よりは古い。 (井上)

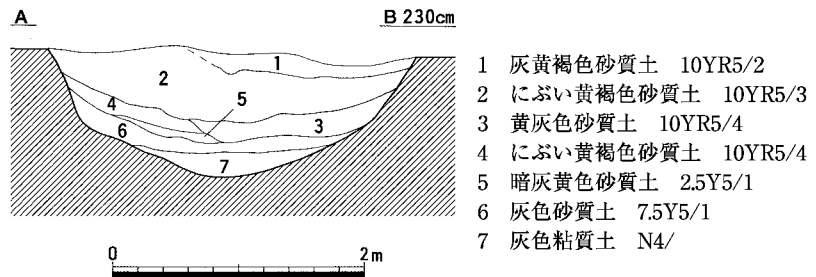


第47図 溝14出土遺物 (1/4)

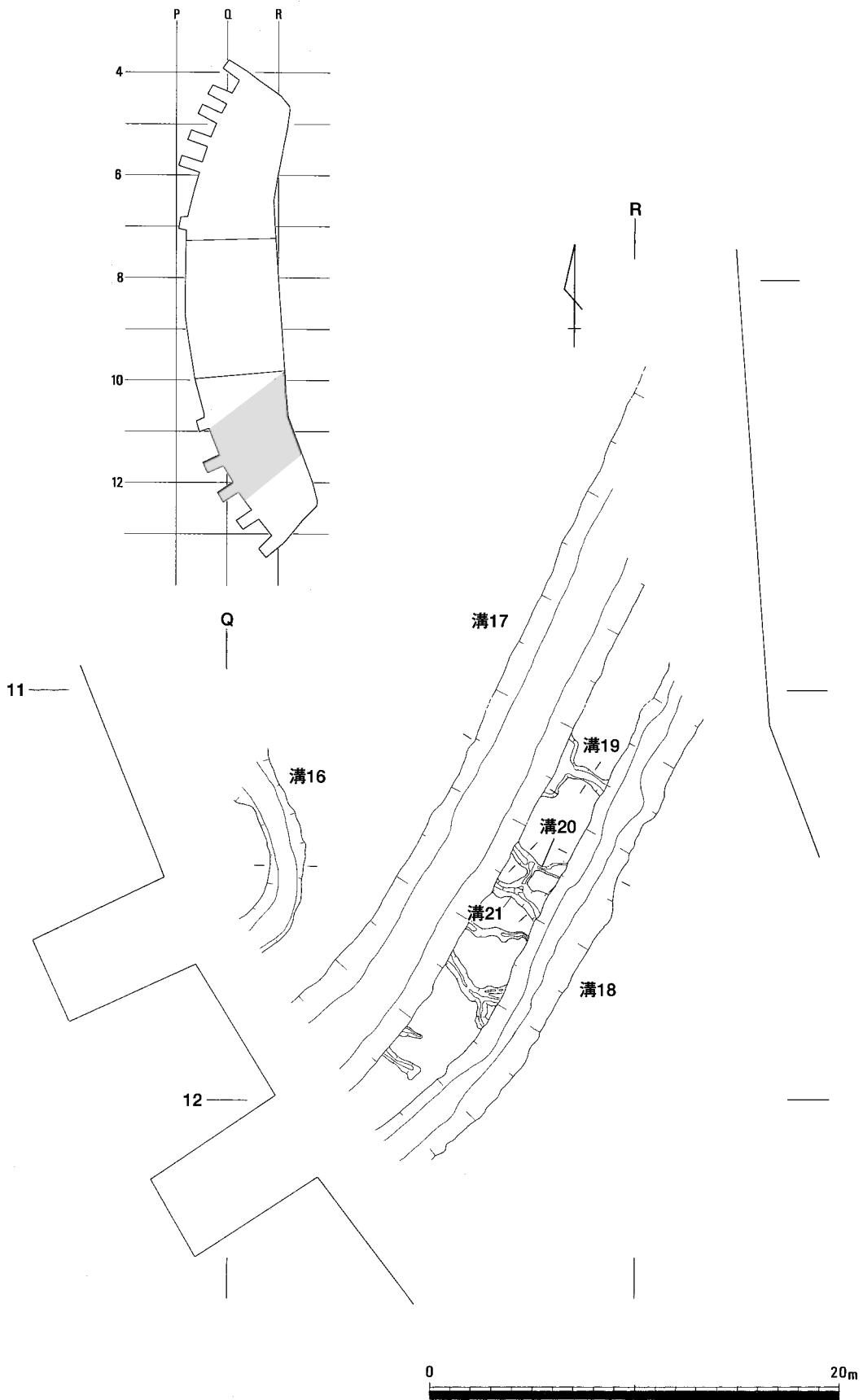
溝15 (第40・48図)

6 Q区に位置する、北東から南西に流れる溝である。検出面での幅約3 m、深さ約1 m程度を測る。断面形は椀状を呈し、底は明確な面をなしていない。南半部では中世の溝42によって上面を削平され、7 Q区以南では弥生時代後期の河道1によって寸断され続きは検出されていない。土器小片が少量出土したのみであるため、

時期を直接特定はできないが、弥生時代中期後半に位置づけられる溝12～14と流路が平行し、ほぼ同一面で検出されたことも併せ、同時期と見てよいと思われる。 (岡本)



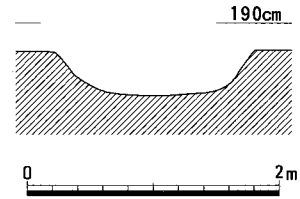
第48図 溝15断面図 (1/60)



第49図 溝16~21 (1/300)

溝16 (第49・50図・図版6)

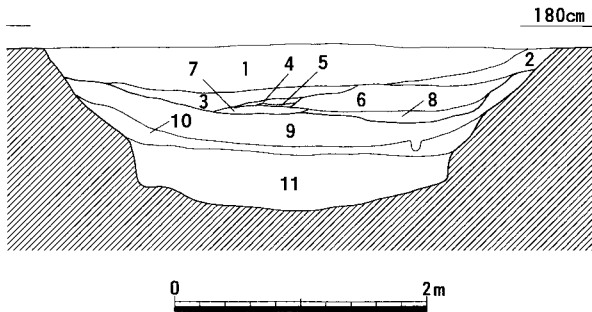
洪水砂で埋没した幅160~200cmの弧状を呈する溝である。北側が河道1によって切られており、出土遺物も確認されなかったことでこの性格および時期等についての詳細は不明である。(鳥崎)



第50図 溝16断面図 (1/60)

溝17 (第49・51図・図版6)

弥生時代後期の生活面下層約50cmの海拔150cmにおいて検出された北東から南西方向に延びる、幅430~500cm、深さ130cm、断面逆台形を呈する溝である。下部の両壁には溝さらえ痕跡と考えられる垂直気味の壁がみられる。埋土は、基本的には砂と粘質土が互層をなしており、また最下層には粗砂の堆積が約40cm程みられ、この埋没が相当の水流で一気になされたことが窺われる。土器等遺物の出土が全く認められないことで詳細な時期は不明であるが、中期の範疇で理解される溝である。(鳥崎)

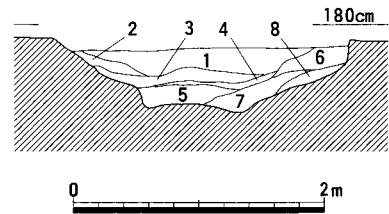


第51図 溝17断面図 (1/60)

- 1 黄褐色粘質細砂 2.5Y5/3
- 2 にぶい黄色粘質細砂 2.5Y6/3
- 3 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 4 灰色粘質微砂 5Y6/1
- 5 灰色粘質土 7.5Y4/4
- 6 暗灰黄色粘質細砂 2.5Y5/2
- 7 灰色粘質土 N5/
- 8 灰色粘質土 N4/
- 9 灰色微細砂 7.5Y6/1
- 10 黄灰色粘質土 2.5Y4/1
- 11 灰色粗砂 10Y6/1

溝18 (第49・52図・図版6)

溝17の東側250~300cmに一定の距離を保って流走する、幅250~300cm、深さ50cm前後の溝である。溝17同様洪水による堆積砂によって埋没しており、時期についても遺物を全く伴っていないことから明確にはできなかった。土層の状況から溝17との関係が示唆されるが、肩口は本来もう少し近接していたことが知られる。(鳥崎)

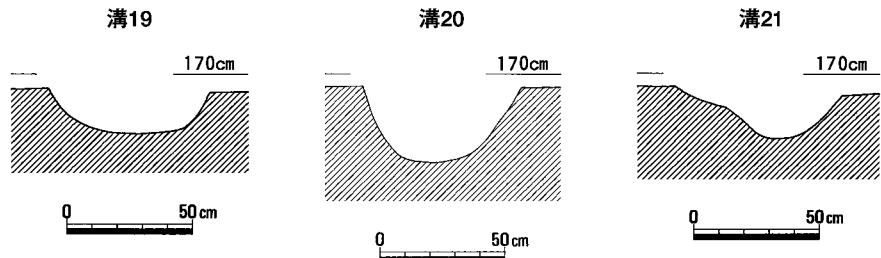


- 1 にぶい黄色粘質細砂 2.5Y6/3
- 2 灰黄色粘質微砂 2.5Y6/2
- 3 黄灰色粘質細砂 2.5Y6/1
- 4 褐灰色粘質土 10Y6/1
- 5 黄灰色粗砂 2.5Y5/1
- 6 浅黄色粘質細砂 2.5Y7/4
- 7 黄灰色粘質細砂 2.5Y5/1
- 8 にぶい黄色粗砂 2.5Y6/3

第52図 溝18断面図 (1/60)

溝19~21 (第49・53図・図版6)

溝17と18の検出途中でこの間のみで確認された。溝17と18をつなぐ、検出面で幅30cm前後を測る小規模な溝状遺構である。いずれも砂質土で埋没しており、同時に機能していたようである。(鳥崎)



第53図 溝19~21断面図 (1/30)

4 池

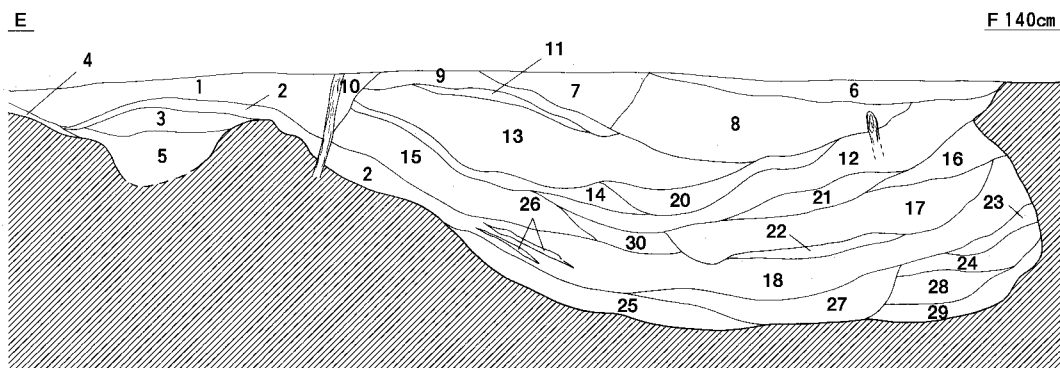
池1 (第40・54~59図、図版7)

池1は6Q区に位置する。平面形は不整形をなし、長いところで約840cm、短いところで約550cm、



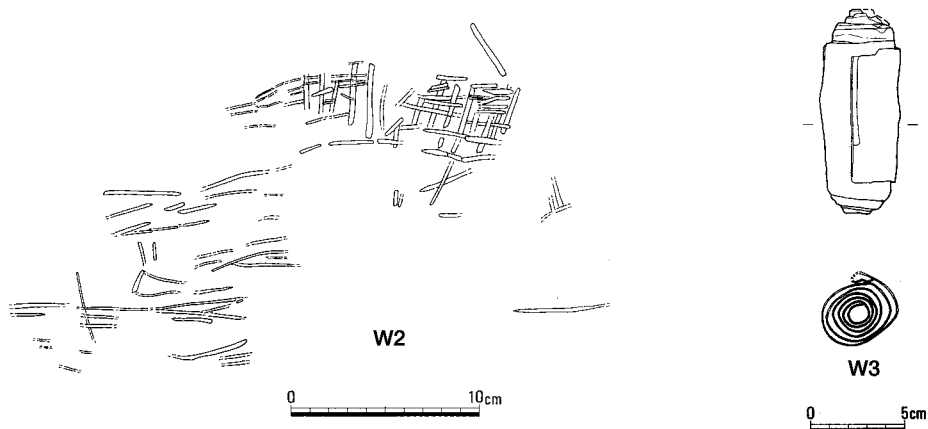
第54図 池1 (1/60)

深さは約110cmを測る。池1は溝12の底よりも深く掘削されており、粘質土や砂質土が互層状に堆積していた。おそらくは溝12から運ばれてきた土砂により埋没していったものと考えられる。池1の西側には杭がいくつか打ち付けられており、数はそれほど多くはないものの、簡易な護岸状の施設があった可能性が高い。池1は切り合い関係から溝14よりも新しいものと判断している。また、池1と溝13が接する付近で、長さ約220cmの棒状の材木を横に設置し、その南側を杭で打ちつけて固定している施設がみられた。この構造物については、この辺りが池1と溝13との境目に位置することから、堰のような施設が存在したことが想定され、溝13と池1は互いに有機的な関係にあったといえる。池1は溜池のような役割をもち、簡易な堰で水量を調節していた可能性がある。池1の中からは弥生土器や有機質遺物が多く出土したが、いずれも破片を主とするものである。51・70～74は壺である。52～60・75～84・86・98は甕である。61～65・85は底部である。67・87～89は高杯である。66・95は台付鉢、



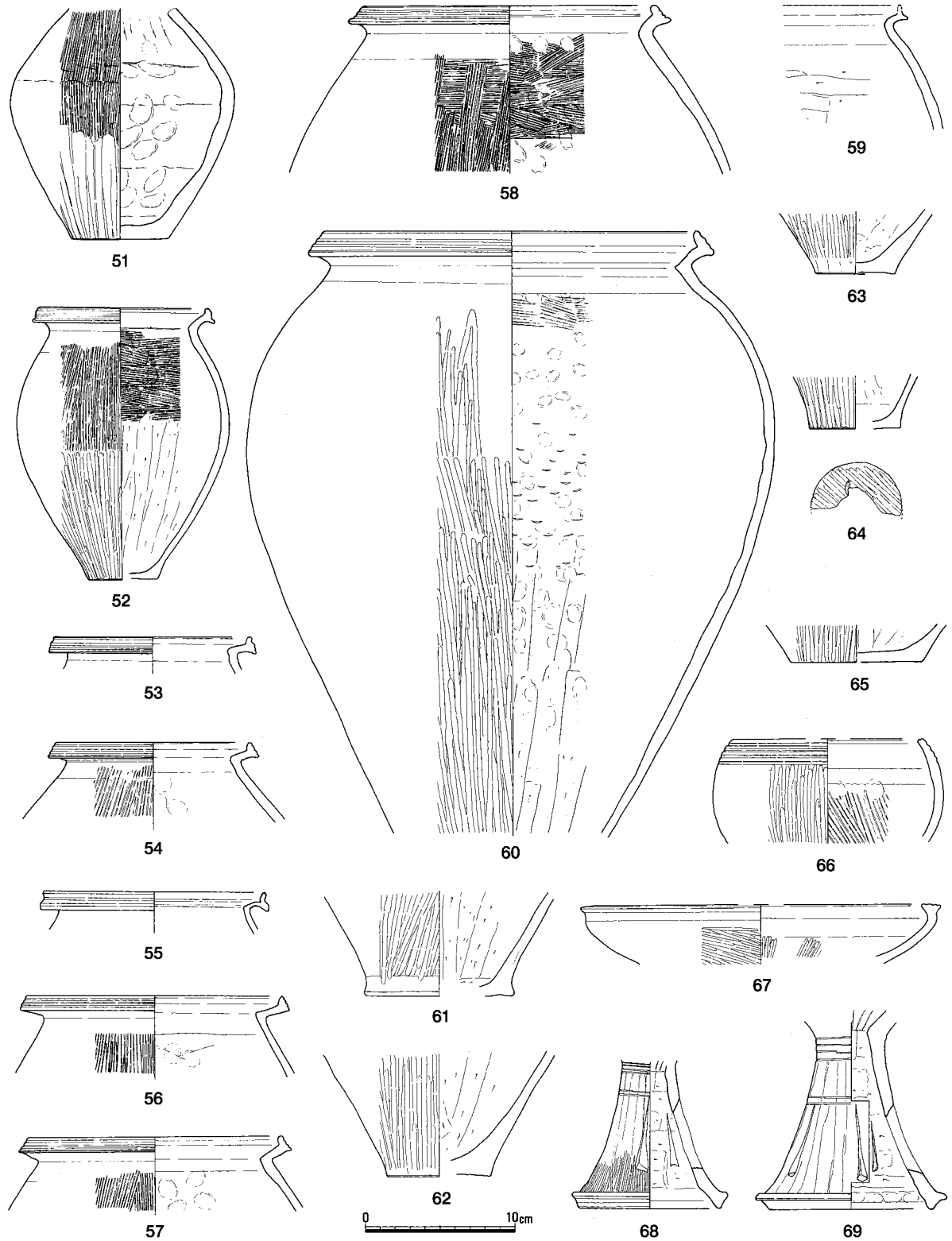
- | | | |
|-----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1 暗緑灰色砂質土 7.5GY4/1 | 11 暗青灰色砂質土 10BG4/1 | 21 灰色砂質土 N4/ |
| 2 灰色砂質土 10Y5/1 | 12 暗緑灰色砂質土 5G4/1 | 22 オリーブ黒色粘性砂質土 5Y3/1 |
| 3 オリーブ灰色粘性砂質土 5GY6/1 | 13 灰色砂質土 N4/ | 23 褐灰色粘質土 10YR5/1 |
| 4 灰色砂質土 | 14 暗緑灰色砂質土 5G4/1 | 24 黄灰色砂質土 2.5Y6/1 |
| 5 緑灰色粘性砂質土 5G5/1 | 15 暗灰色粘性砂質土 N3/ | 25 黒褐色粘性砂質土 2.5Y3/1 |
| 6 暗緑灰色砂質土 10G4/1 | 16 緑灰色粘質土 7.5GY5/1 | 26 黄灰色砂質土 2.5Y4/1 |
| 7 灰色砂質土 N5/ | 17 オリーブ灰色砂質土 2.5GY6/1 | 27 黄灰色砂質土 2.5Y5/1 |
| 8 オリーブ灰色砂質土 5GY5/1 | 18 灰色砂質土 N4/ | 28 褐灰色粘質土 10YR6/1 |
| 9 青灰色砂質土 5BG5/1 | 19 緑灰色粘質土 10YG6/1 | 29 褐灰色砂質土 10YR6/1 |
| 10 オリーブ灰色砂質土 2.5GY5/1 | 20 暗緑灰色砂質土 5G4/1 | |

第55図 池1断面図 (1/30)

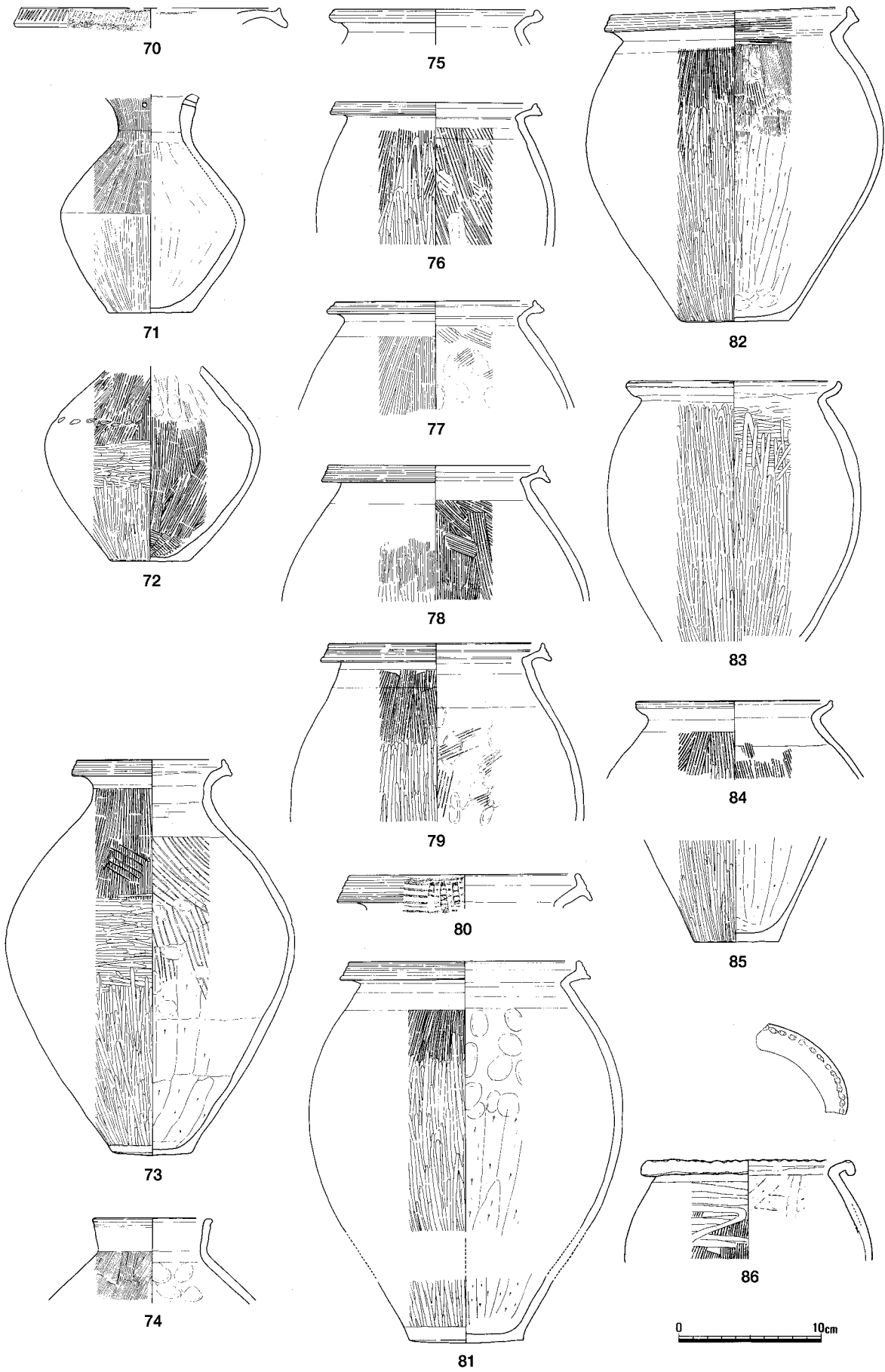


第56図 池1出土遺物① (1/4)

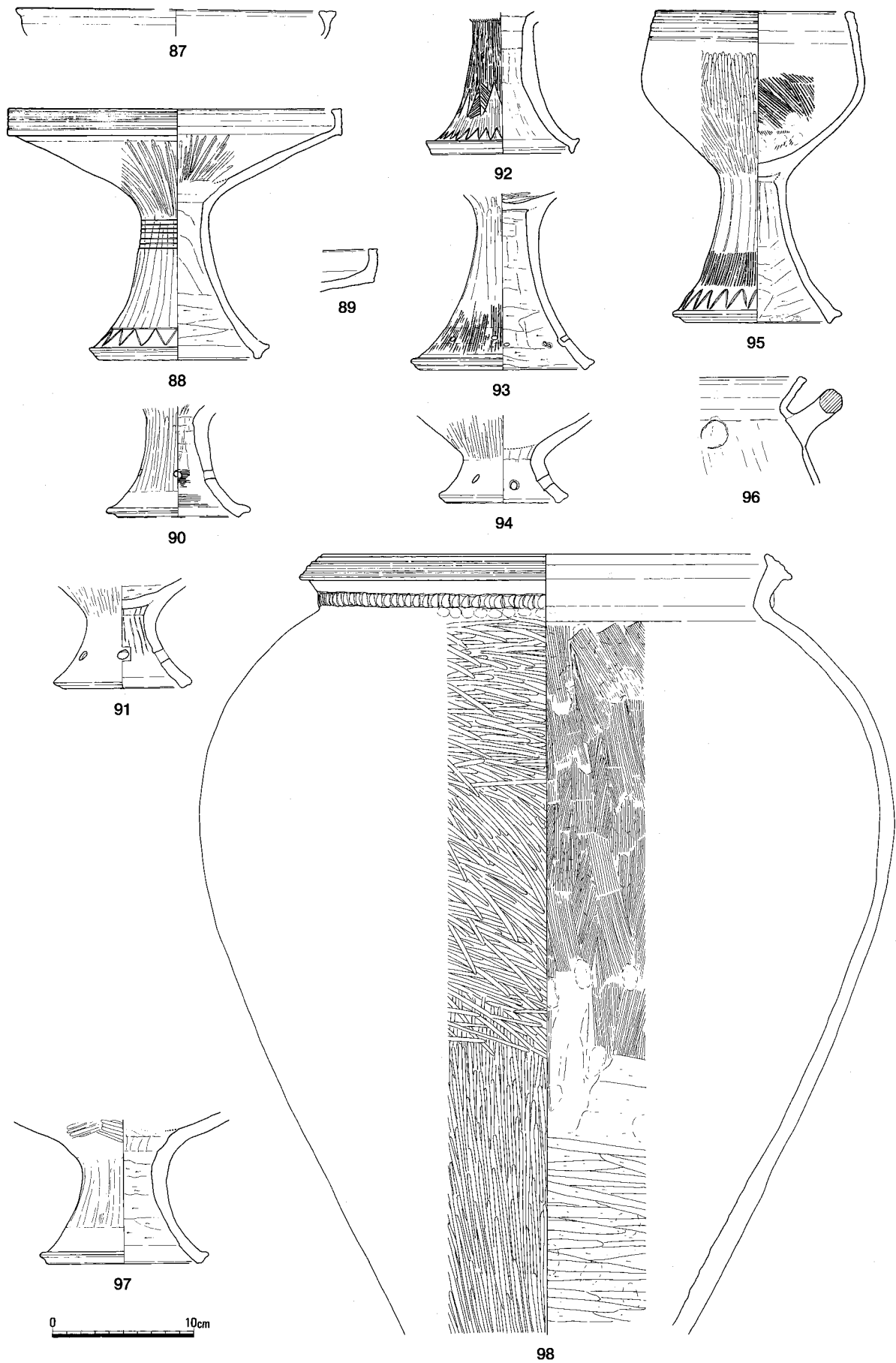
68・69・90～94・97は台付鉢の脚部である。96は把手のついた甕である。W2は籠である。W3は樹皮を巻いたものである。その他に、池1の埋土中に有機物を多量に含む層が検出され、水洗を行った結果、モモを含む多くの植物の種子等を検出した。分析の結果、イネ、ウリ類のほか樹木や草本の種子類が多く出土した。これらの出土遺物から池1は弥生時代中期後葉頃に営まれたものと考えられる。(金田)



第57図 池1出土遺物② (1/4)



第58図 池1出土遺物③ (1/4)



第59図 池1 出土遺物④ (1/4)

第5節 弥生時代後期の遺構・遺物

1 弥生時代後期の概要

弥生後期に入ると、微高地面積の拡大とともに遺構・遺物は急激な増加をみせ、総合グラウンド内各所に分布が認められる。当時期の遺構は陸上競技場周辺のほか、旧武道館予定地、南池、野球場周辺などでも検出され、集落域の拡大を窺わせる。

調査区内の遺構は、メインスタンド調査区の中央部（ほぼ2区に相当）を流れる幅約50mの河道の南北に分布する。この河道は、出土遺物からみて後半期には存在したことが確実だが、正確な出現時期は判断しがたい。遺構の分布状況は、南部では竪穴住居・土壙などが密集し明確に集落の様相を呈するのに対し、北部は袋状土壙や溝など少数の遺構が残存する程度と対照的である。なお、照明灯部分の4・5区では当時期の遺構は検出されていない。

細別時期の判明する遺構に着目すると、その密度は時期によって一様ではなく、後・Ⅰ～Ⅱの段階では遺構は全体的に少数で、削平の影響を考慮しても希薄な印象は否めない。北部では袋状土壙の分布が目立つ。後・Ⅲに至ると、南部を中心に遺構数が増加し、続く古墳時代にも引き継がれてゆく。対して北部では住居は少なく、むしろ溝の存在が目立つ傾向がある。

このように、遺構の種類・検出数が河道の南北で対照的な要因としては、削平の影響が標高の高い北部に強く及んだ可能性が高いと考えられるが、前半期において袋状土壙と溝の分布がほぼ北部に限られる傾向はあり、遺構の在り方に多少の相違があった可能性も考えられる。

中央部の河道からは、後期後半の土器が多量に出土した。通常の土器以外に、特殊器台片、日常土器の胎土を用いた特異な大型器台など、祭祀的色彩の強い遺物も含まれる。また、両岸では各種の木製品、建築部材が多量に出土し、当時の木工・建築技術を知るうえで貴重な資料となった。（岡本）

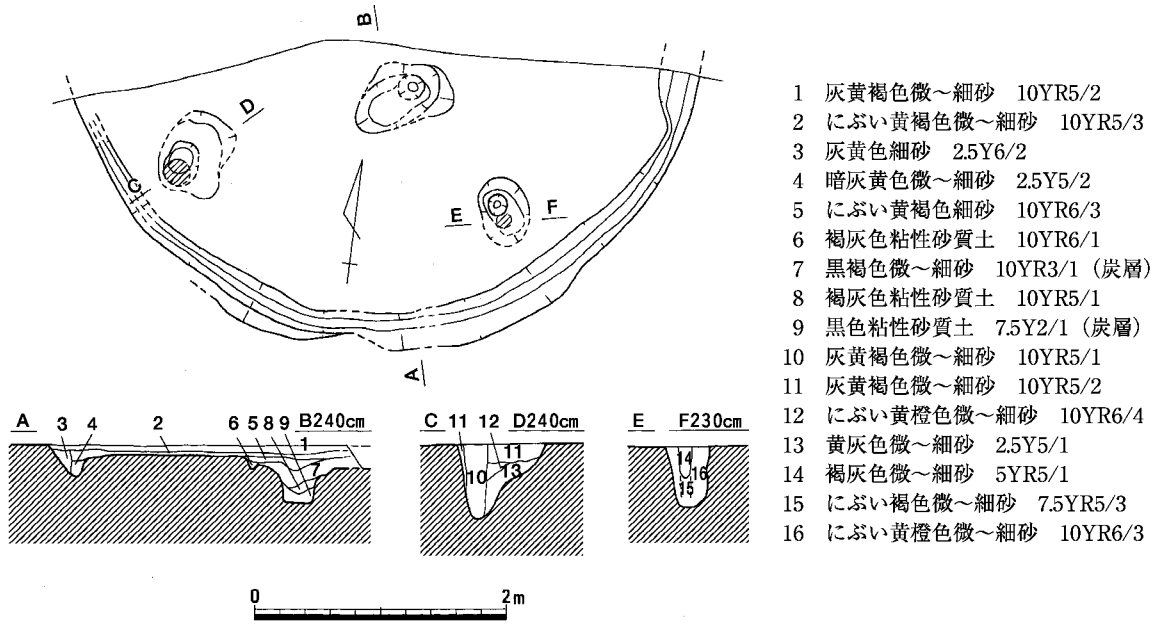
2 竪穴住居

竪穴住居1（第60・62図、図版8）

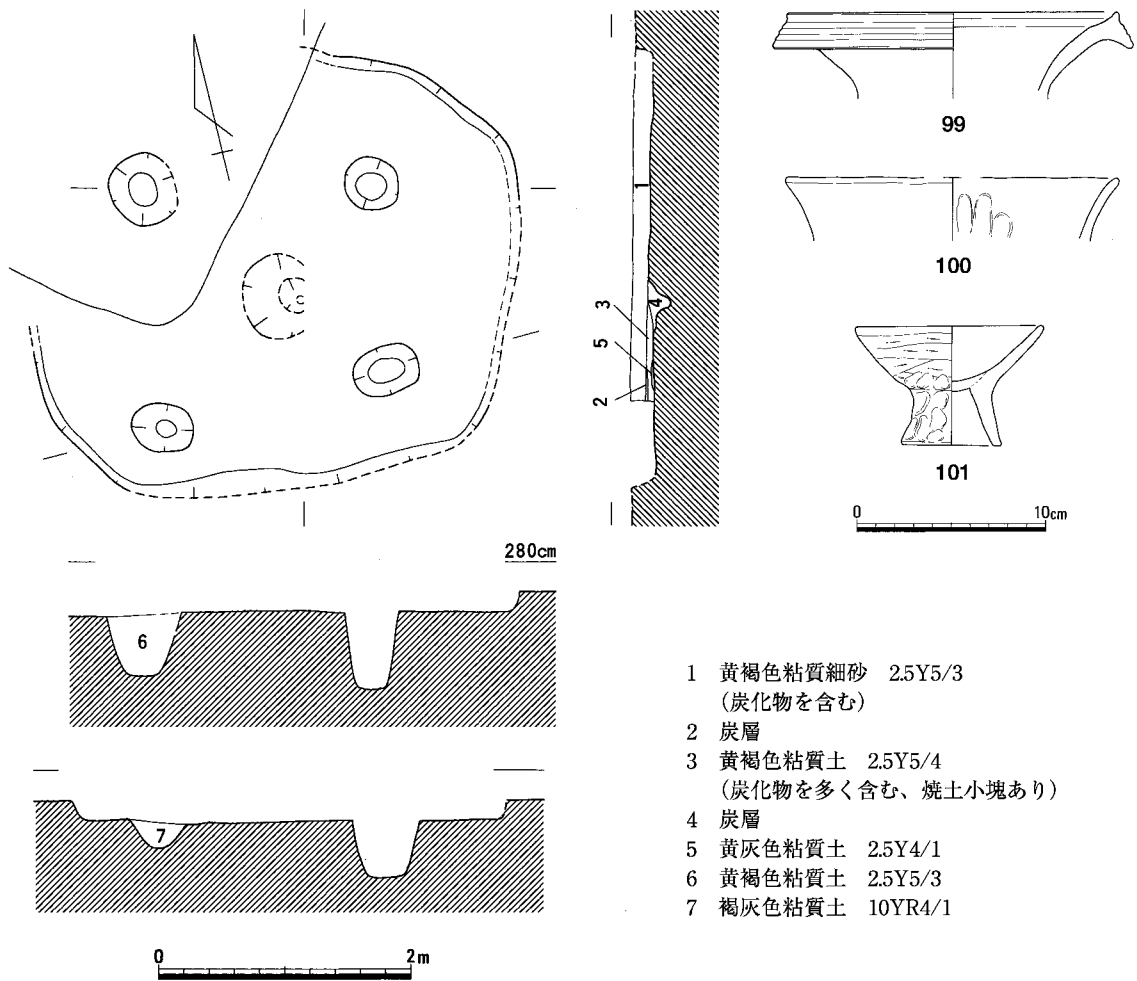
竪穴住居1は7P区東半部に位置する。北半部はいわゆる条里溝である溝42で削平されているため残っていない。平面形は円形で、周辺に壁体溝が巡っている。復元で径約5mの大きさが想定できる。住居内からは柱穴が2基と中央穴1基が検出された。柱穴は大きいもので径約70cm、深さ約60cmを測る。これらの柱穴の位置から、この竪穴住居の主柱穴は4～5本である可能性が考えられる。中央穴は楕円形を呈し、長径80cm、短径50cmを測る。中央穴内には炭を多く含む層がみられた。住居内からは若干の弥生土器が出土しているが、いずれも小さな破片であったため、図示しえなかった。土器の特徴から、弥生時代後期のものである可能性が考えられる。このことから、竪穴住居1は弥・後・Ⅳに属するものであると推測できる。（金田）

竪穴住居2（第61・63図、図版8）

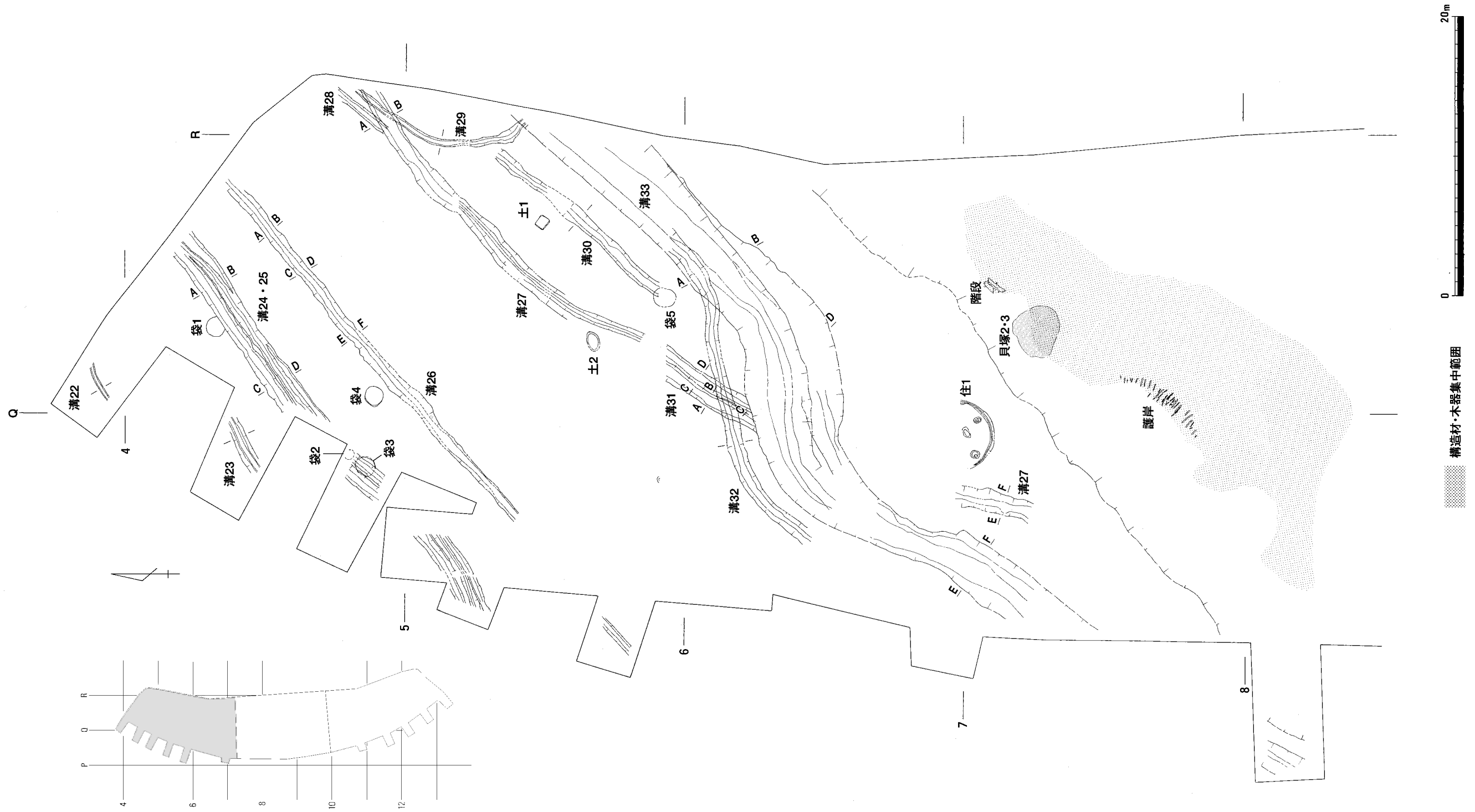
10Q区の中央部やや南東よりに位置し、土壙9・10に切られる。平面形は不整な円形を呈し、長軸392cm・短軸344cmを測る。復元される床面積は10.78㎡である。主軸はN-8°-W。遺存状態はあまり良くなく、深さは約17cm程度にすぎない。特に南東部は床面直上で検出している。壁体溝は現状で



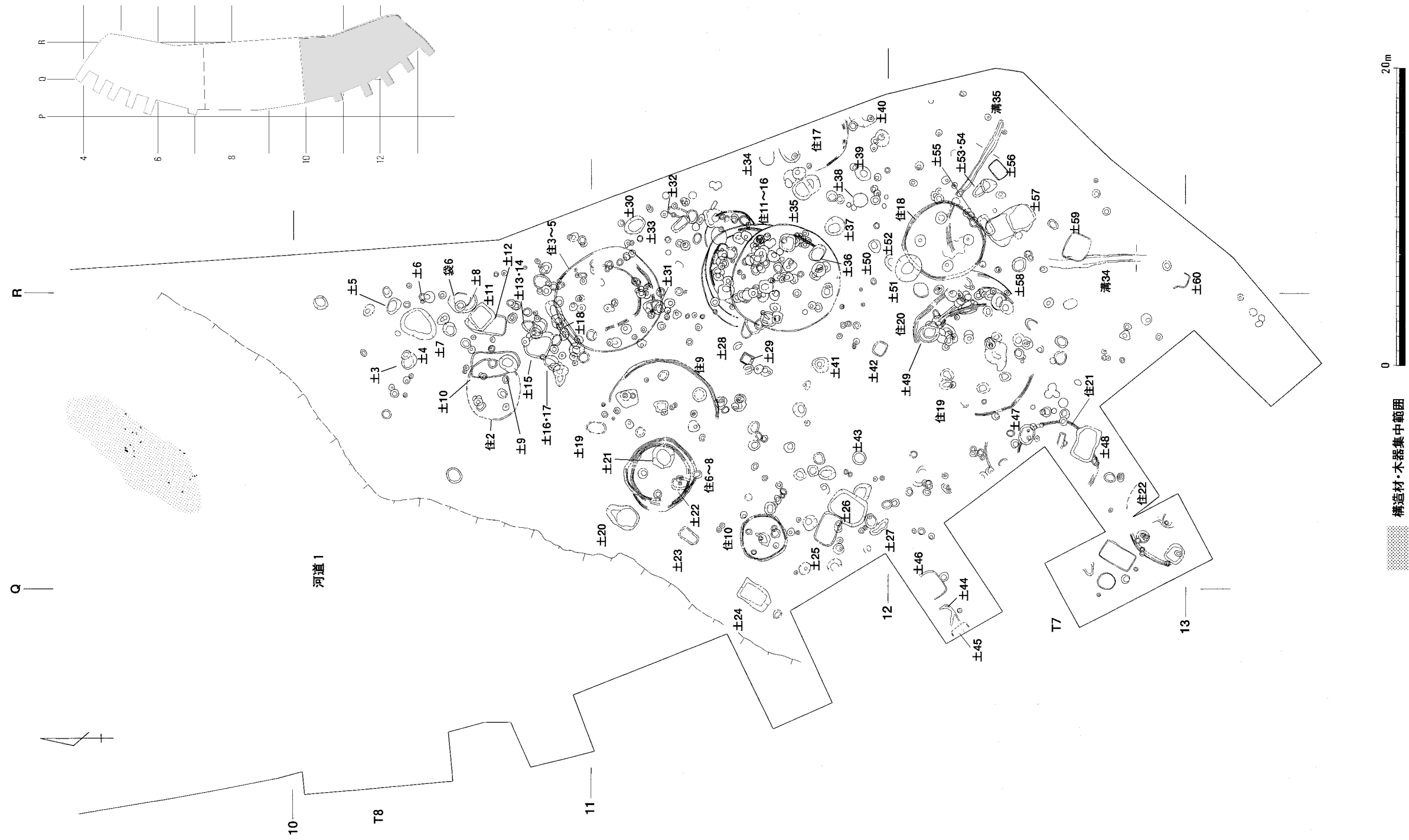
第60図 竪穴住居 1 (1/60)



第61図 竪穴住居 2 (1/60) ・出土遺物 (1/4)



第62図 弥生時代後期遺構全体図①(1/300)



第63図 弥生時代後期遺構全体図②(1/300)

は確認できなかった。主柱穴は4本であり、柱穴の深さは深いもので約60cmある。またいずれの柱穴も柱痕は認められなかった。床面中央には約67×50cmの円形を呈する中央穴が設けられており、深さは床面から53cmである。住居南側の床面付近には、炭化物・焼土塊が多く認められたが、炭化材などは検出しておらず、焼失住居としての根拠は薄い。

遺物は少なく、いずれも覆土中からの出土である。99は壺の口縁部であり、3条の凹線文が施されている。100は鉢の口縁部で、逆「ハ」の字形に延びる。内面には指オサエの痕跡が残る。101は脚台付の鉢である。脚台は高く、口縁部と一体に製作されており、円盤充填が用いられている。外面調整は、受け部は横方向のヘラケズリ、脚部は指オサエがなされている。

遺構の時期は、これらの出土土器より弥・後・Iに比定される。(米田)

竪穴住居3 (第63～66図、図版8)

10Q～11R区において海拔260cm付近で検出された竪穴住居5およびこの住居床面除去後、さらに2軒の竪穴住居の存在が確認された。これら竪穴住居は、切り合い関係等で最も古いと判断されたものが竪穴住居3で以後竪穴住居4から竪穴住居5への拡張が判明した。

竪穴住居3は、竪穴住居5の床面下層南側の一部で床面および壁体溝が確認されている。壁体溝の規模から復元される規模および平面形は、長軸500cm、短軸450cmの楕円形である。なお、柱穴・中央穴等の存在については基盤層まで掘り下げる等精査を実施し検出に努めたものの全く確認することはできなかった。

床面にはほとんど全面にわたって炭の薄い広がりが見られた。しかし、床面に遺存する土器をはじめとする遺物の遺存は認められなかった。

したがって、住居の時期は共伴する遺物が特定できないことで明言できない。ただし、上層竪穴住居5との拡張状況から時間的な隔たりはさほどないと考えられ、またこの下層に重複して存在する土壙18が後期前葉に位置づけられることから、竪穴住居3は竪穴住居3～5に伴う土器とほぼ同じく後期中葉頃として差し支えないものとする。(島崎)

竪穴住居4 (第63～66図、図版8)

竪穴住居3の壁体溝の外周約1mの距離に壁体溝を有する竪穴住居3が拡張された竪穴住居である。確認された壁体溝は、全長約4m程の残存でしかなく全体像は判然としない。壁体溝の在り方から住居は竪穴住居3から同心円状に拡張されたものであることが知られる。これに伴う柱穴は竪穴住居3の壁体溝と重複する位置に直径40～70cmのものが4本200～250cmの芯心距離をもって存在し、これに調査時の側溝開削によって消滅したであろう未確認柱穴1本を加えた計5本柱が想定された。

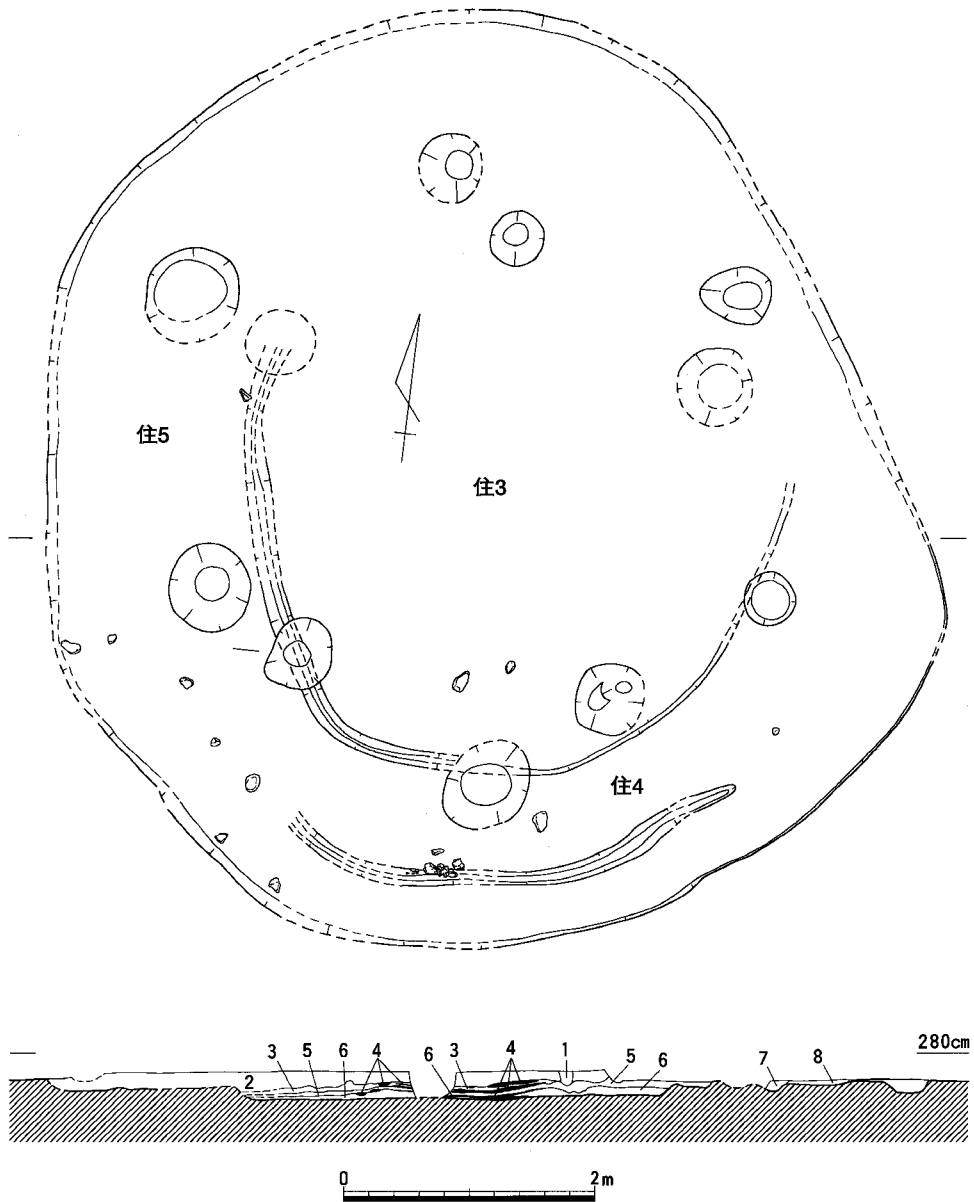
これによって推定される竪穴住居4の平面規模は、直径6m前後の円形であったものと考えられる。柱穴は規模が不揃いで深さも一定でない。

床面は、竪穴住居3の床面に黄色粘土を貼りつけ、これを埋めて床面としていたことが土層より知られる。

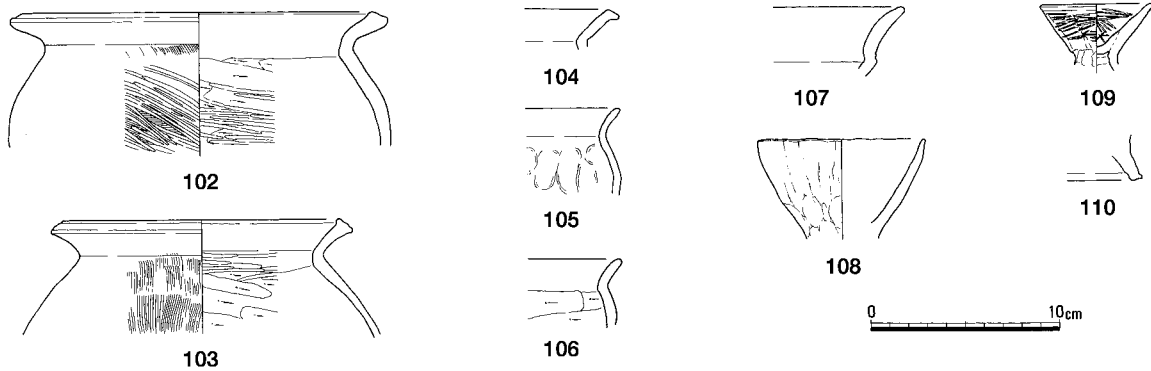
時期は、これも竪穴住居3と同様に共伴する遺物が特定できなかったことで明言はできない。ただし、竪穴住居4も竪穴住居5への拡張過程にあることで、また竪穴住居3～5出土とした土器がいずれも後期中葉頃に比定されることからこの年代に比定して差し支えないものとする。(島崎)

竪穴住居5 (第63～65・67図、図版8)

竪穴住居5は、平面を海拔260cmで検出したものの床面までは最深部分で約10cmと浅かった。竪穴



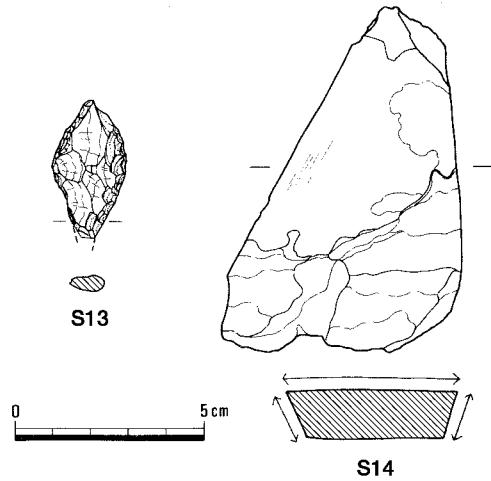
- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 攪乱 | 5 にぶい黄橙色土 10YR6/4 |
| 2 褐灰色土 10YR4/1 | 6 褐灰色土 10YR5/1 |
| 3 明黄褐色土 10YR6/8 (貼り床) | 7 灰黄褐色土 10YR5/2 |
| 4 炭層 | 8 にぶい黄褐色土 10YR5/4 |



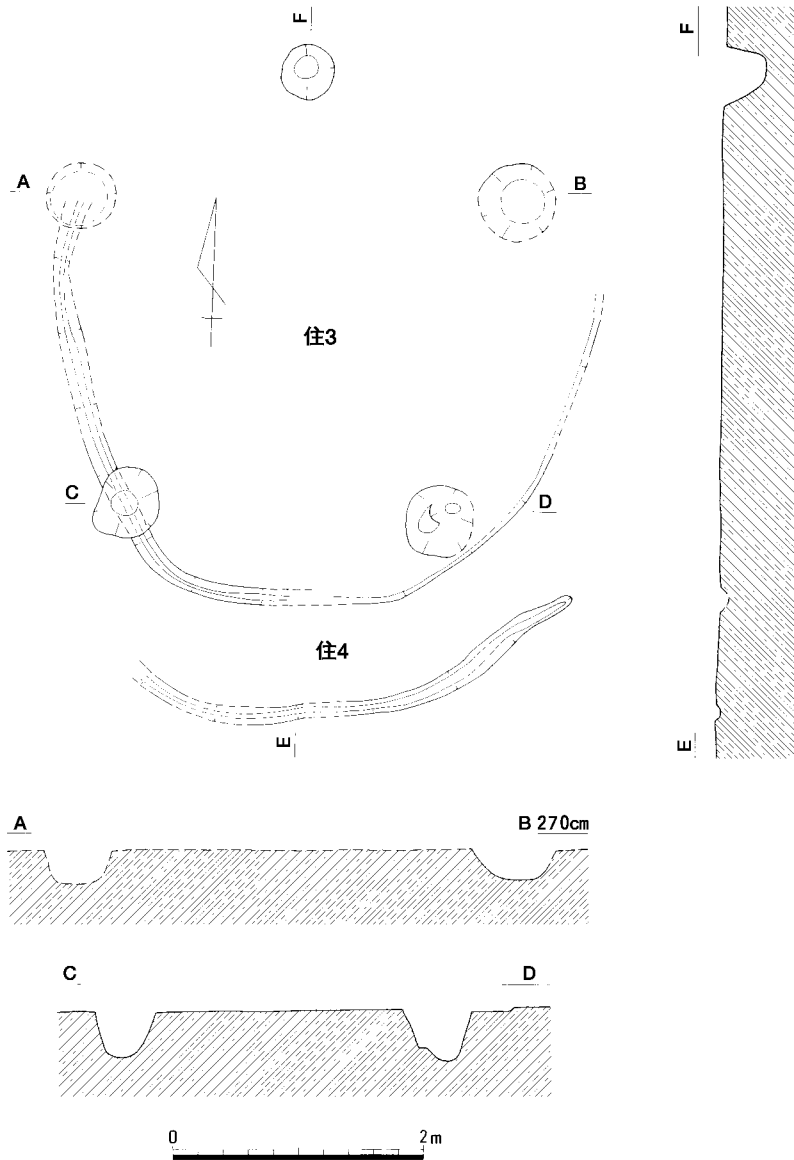
第64図 竪穴住居 3～5 (1/60) ・出土遺物① (1/4)

住居本体のほとんどが既に削平されており、竪穴住居の壁の高さが通常1 m前後にあることを考えれば、本来の生活面の高さは遺構検出面より少なくとも80cm以上は上にあつたであろうことは容易に推測される。平面形は、円形を基調としながらも長軸742cm、短軸700cmの不定形を呈する。

床面には、中央部にわずかに炭の散布がみられたが中央穴・火処等の存在を窺わせる被熱痕跡は認められなかった。柱穴は、北東部分において一部近接するもののおよそ壁から1 m前後に一定距離を保って直径40~70cmの柱穴合計6本が配置されていた。柱間は、250~270cmとおおむね一定している。ただ



第65図 竪穴住居3~5出土遺物② (1/2)



第66図 竪穴住居3・4 (1/60)

第3章 発掘調査の概要

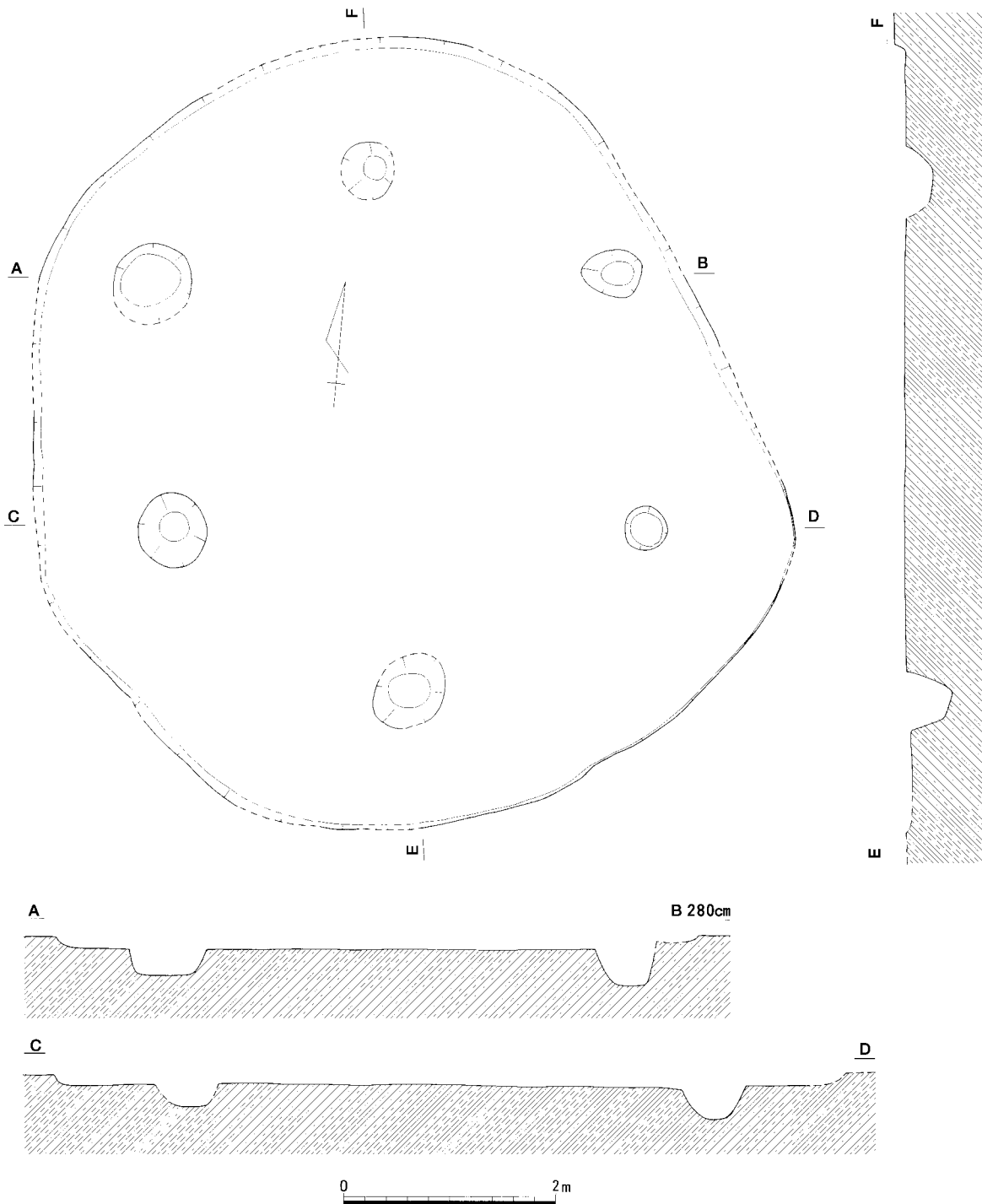
し、個々の柱穴は大きさ・深さ共に不揃いであり、中には床面からの深さ20cmと浅い柱穴もみられた。

なお、竪穴住居5の床面にはこれに伴う壁体溝の存在は確認されなかった。

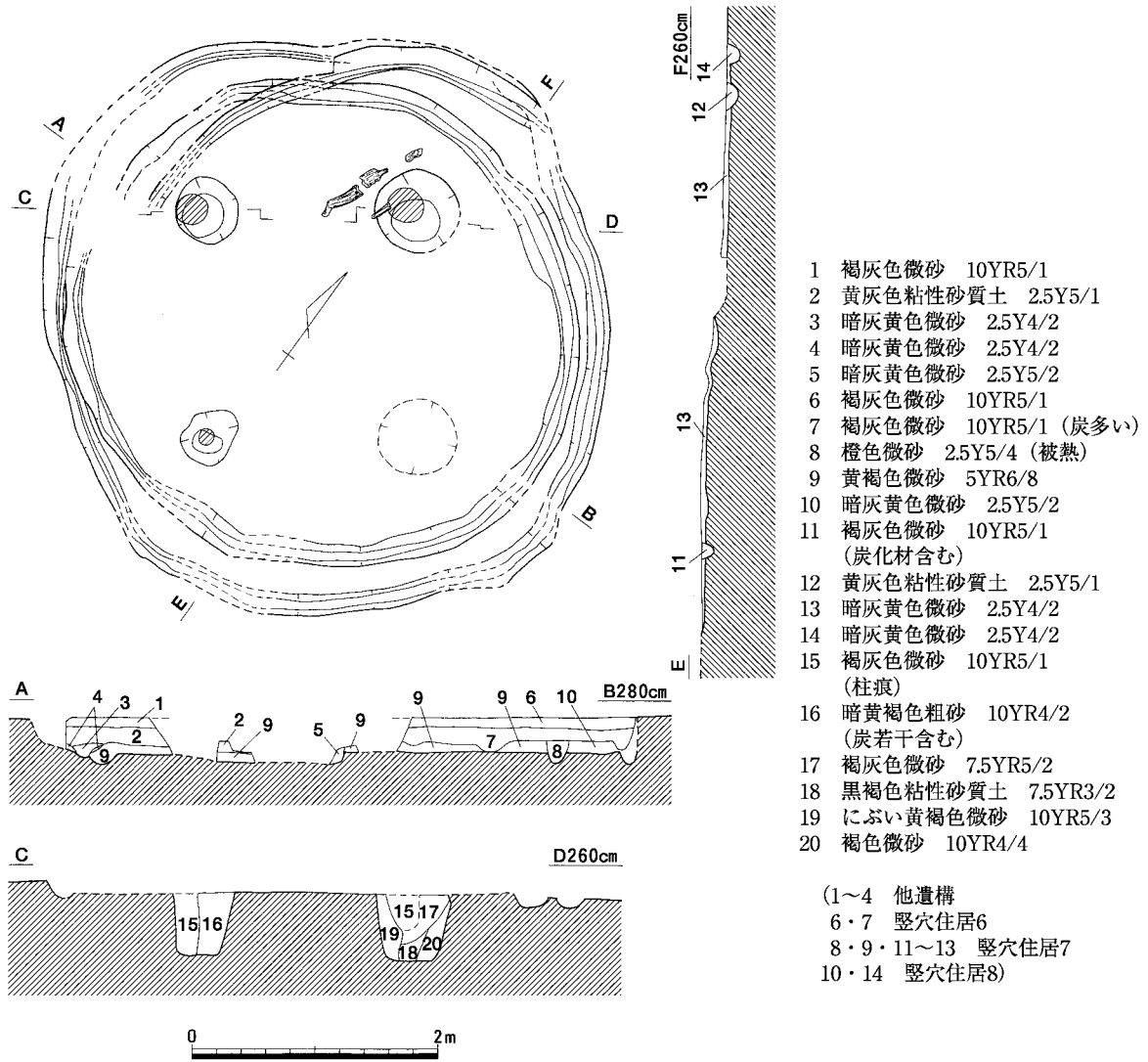
床面からは南側に集中する状況で川原石の散在が認められたものの、土器の遺存はみられなかった。

土器は、ほとんどが竪穴住居埋積土中からの出土であって明確に竪穴住居との関係はいえない。

出土した遺物には、甕・鉢・高杯等の小片および石錐・砥石がみられる。土器の特徴はいずれも後期中葉に位置づけられるものである。 (島崎)



第67図 竪穴住居5 (1/60)



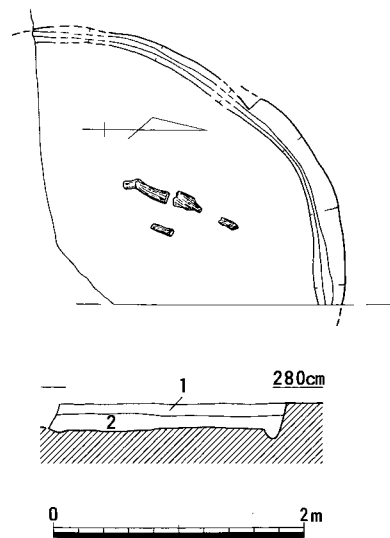
第68図 竪穴住居 6～8 (1/60)

竪穴住居 6 (第63・68・69図、図版 9)

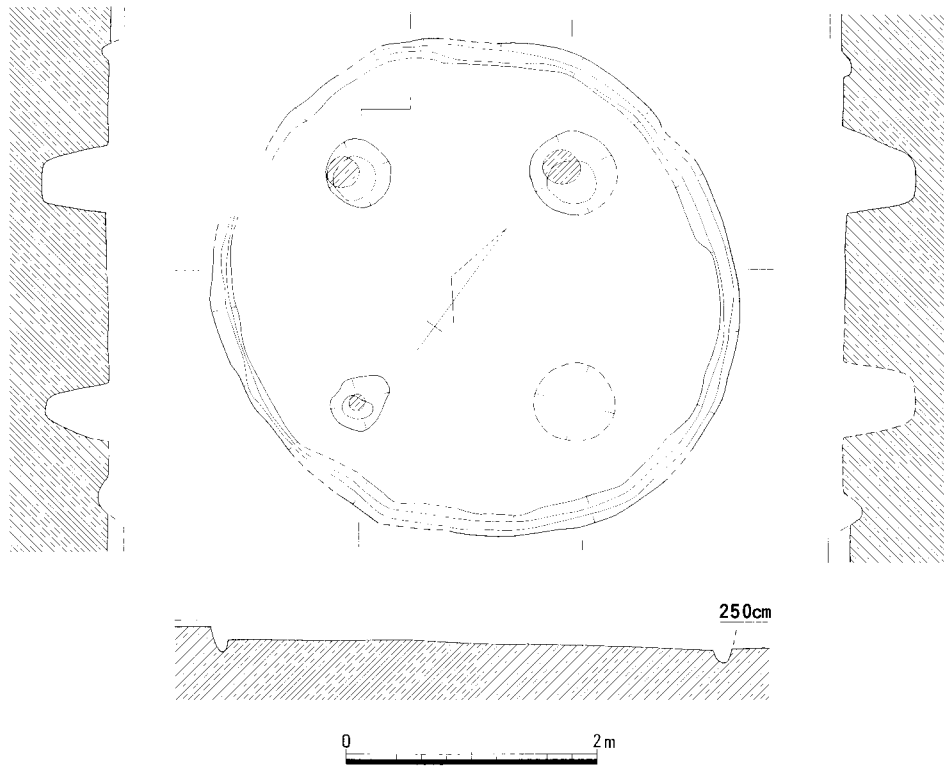
3区11Qで検出した円形の住居である。後述する竪穴住居7・8とはほぼ同じ位置の上層で検出しており、これらの住居が建て替えられた最終段階のものであると考えられる。削平されているために全体の約4分の1を検出したにとどまった。床面までの深さは20cmを測り、深さ29cm、幅27cmの壁体溝が巡る。柱穴は確認できなかった。床面では炭化材及び炭の散布を検出しており、焼失住居であったと考えられる。時期は、出土した遺物に弥生土器の小片があることと、竪穴住居7・8を切っていることなどから、弥生時代後期後半のものと考えられる。(時實)

竪穴住居 7 (第63・68・70図、図版 9)

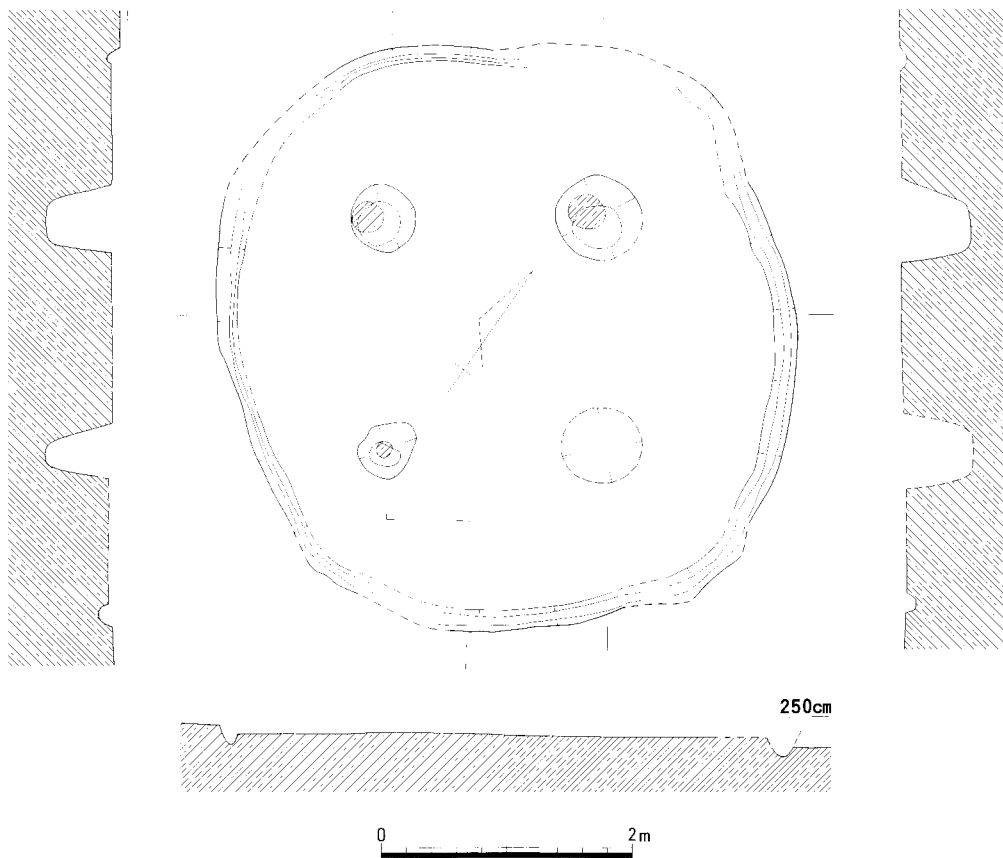
3区11Qで検出した円形の住居で、規模は直径414cmを測る。後述する竪穴住居8と同位置で検出していることから、この住居



第69図 竪穴住居 6 (1/60)



第70図 竪穴住居 7 (1/60)



第71図 竪穴住居 8 (1/60)

が建て替えられたものであると考えられ、以前のものよりも直径にして約50cm、内側に縮小して建て替えられていることが分かる。床面は竪穴住居8の床面より約3～5cm上層で検出しているが、この床面で柱穴を検出しており、竪穴住居8の床面で他の柱穴を検出しなかったことから、柱を引き続き使用し、床面と壁体溝を新たに構築した住居であったことが理解できる。柱痕跡は、細いもので直径約14cm、太いものは30cmであった。時期については、細片であるが短脚の高杯が出土しており、この遺物から弥生時代後期後半の竪穴住居であるといえる。(時實)

竪穴住居8 (第63・68・71図、図版9)

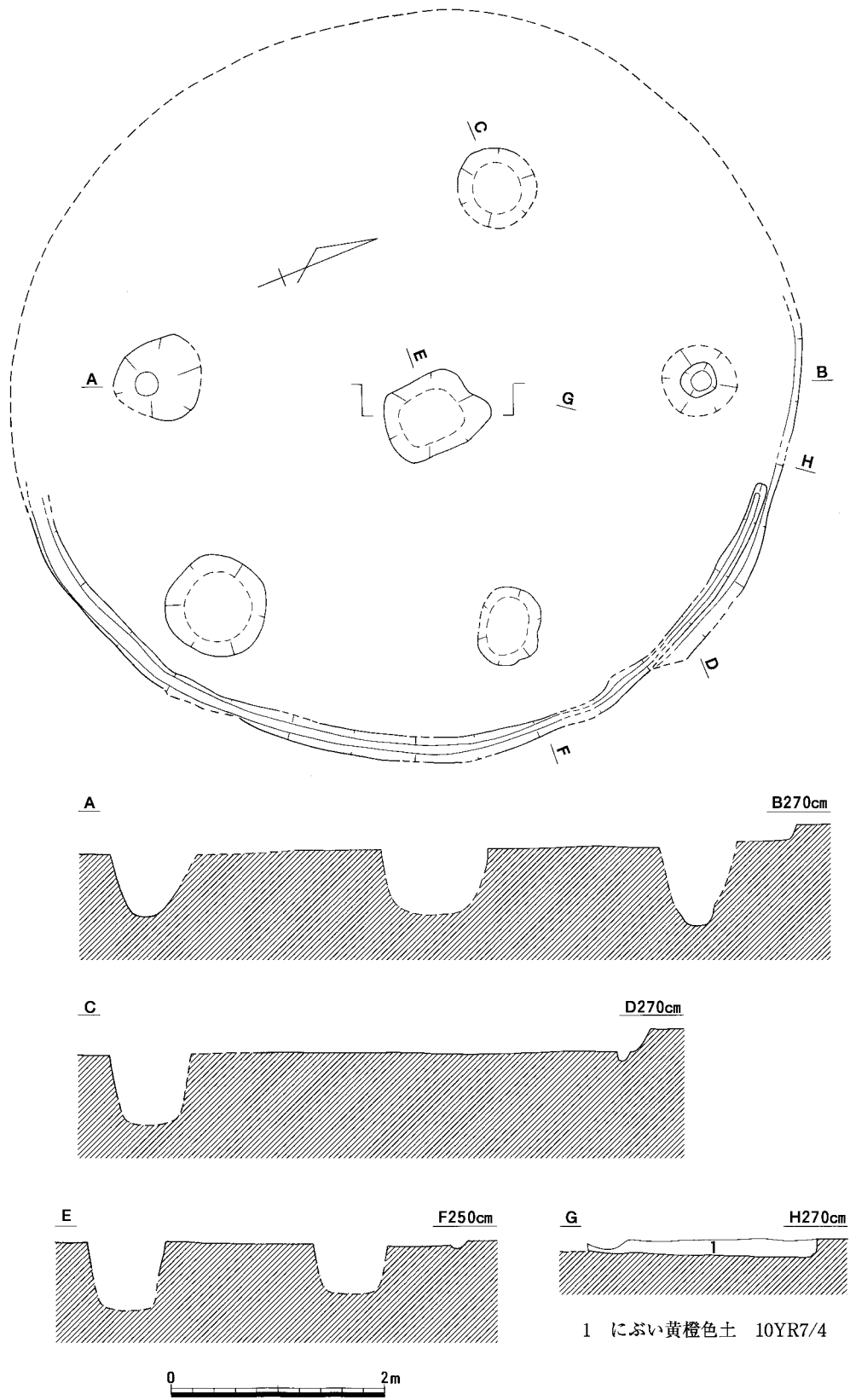
3区11Qで検出したやや歪な円形の住居である。後に2回の建て替えが行われているため、竪穴住居6・7によって埋土上層は切られているが、規模は長径462cm、短径460cmを測る。検出面から床面までの深さは31cmで、海拔高は236cmである。壁体溝は幅18cm、検出面からの深さ39cmを測り、竪穴住居7の床面を3～5cm掘り下げたところで検出した。柱穴は他の遺構で切られている1本を除く3本を検出しており、本来は4本柱の住居であったと推測され、これは後に建て替えられた竪穴住居7で引き続き使用されるものである。時期は、図示できないものの弥生土器の細片が出土しており、これから弥生時代後期後半の時期の竪穴住居であると考えられる。(時實)

竪穴住居9 (第63・72・73図、図版9)

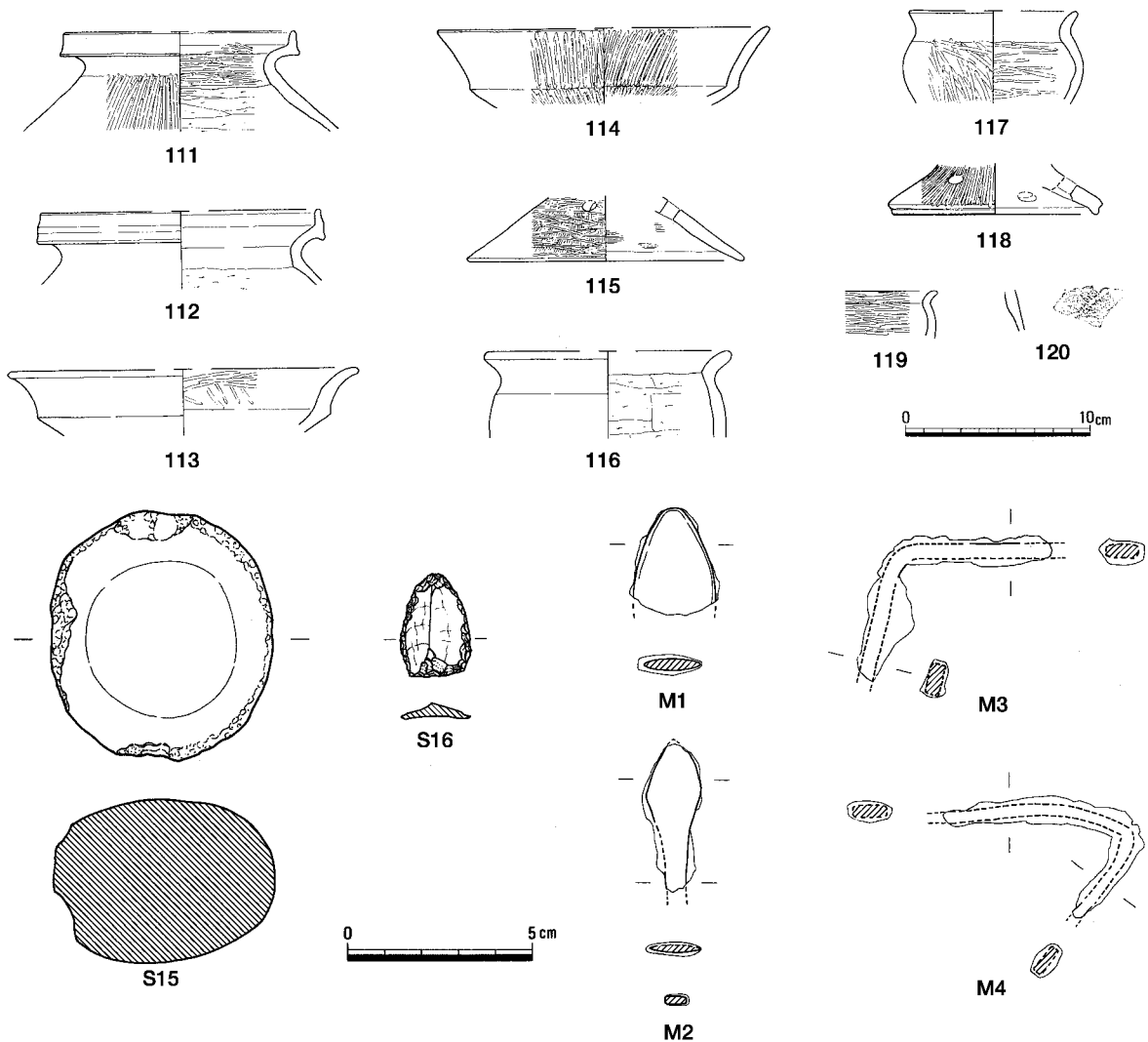
竪穴住居9は、3区中央部のやや北側で11Qに位置する。住居の残存状況は、東側半分のみが残され、西側半分は、上半部が削平されており、柱穴のみが残存する。このため本来竪穴住居9の西側に近接する弥・後・Ⅳの竪穴住居6・7に切られていたものと思われるが、現状では確認できない。他の住居では、東側約2m付近に竪穴住居5が、南東側約4.5m付近に竪穴住居16が存在するなど、7mを超える規模の住居が近接する。

住居の規模は、上半部が残存する東側部の形状や、柱穴の位置などから考えて、約7m程度になることが予想される。平面形状は円形である。住居の床面は、標高245cm付近でほぼ水平に掘り込まれているが、貼り床の残存は認められない。柱穴は、全部で5本存在する。住居の上面が削平されている西側でも柱穴のみは存在する。柱穴の深さは、床面から測定すると約60～80cmの深さになる。柱穴のなかには礎板痕跡を残すものも存在する。これらの柱穴は、壁体から約30～50cm付近の、比較的壁体に近い位置に存在する。壁体溝は住居上半が残存する東半分のみ存在する。残存する幅は約10cm、深さ約10cmで壁体に沿って1条のみが残存する。中央穴は、住居の東よりに存在する。規模は長軸長約100cm、短軸長約73cmで、平面形状は不整形である。深さは65cmを測り、断面形状はおおむね碗形を呈する。この住居9は壁体溝や柱穴・中央穴の残存状況などから判断すると、建て替えは一度も行われなかったと思われる。

出土遺物には、111～120までの弥生土器、S15・16の石器、M1～4までの鉄器がある。111・112は甕の口縁部である。どちらも端部が直に立ち上がっているが、112は下部が若干張り出しており、端面には擬凹線文の名残がある。113～115は高杯である。このうち113・114は杯身であるが、どちらも口縁部が外反するタイプである。115は脚部であるが、円孔がまだ4つあるタイプではない。116・117の鉢は、どちらも小型で口縁部が小さく外反する。118は脚であるが、115同様まだ円孔は4つ開かない。119は手捏ね土器である。120の器種は不明であるが、外面に蕨手状の線刻がある。石器のS15は叩き石で、壁体溝から出土した。S16は石鏃で、床面を掘り下げる過程で出土する。形状は丸みを帯びており、厚さは薄い。M1は鏃になると思われるが、法量大きい。M2は不明であるが、ヤ



第72図 豎穴住居 9 (1/60)



第73図 竪穴住居9出土遺物 (1/4・1/2)

リガンナになるかもしれない。M3・4は鏃になる。以上の出土遺物から考えて、竪穴住居9の時期は弥・後・Ⅲになる。

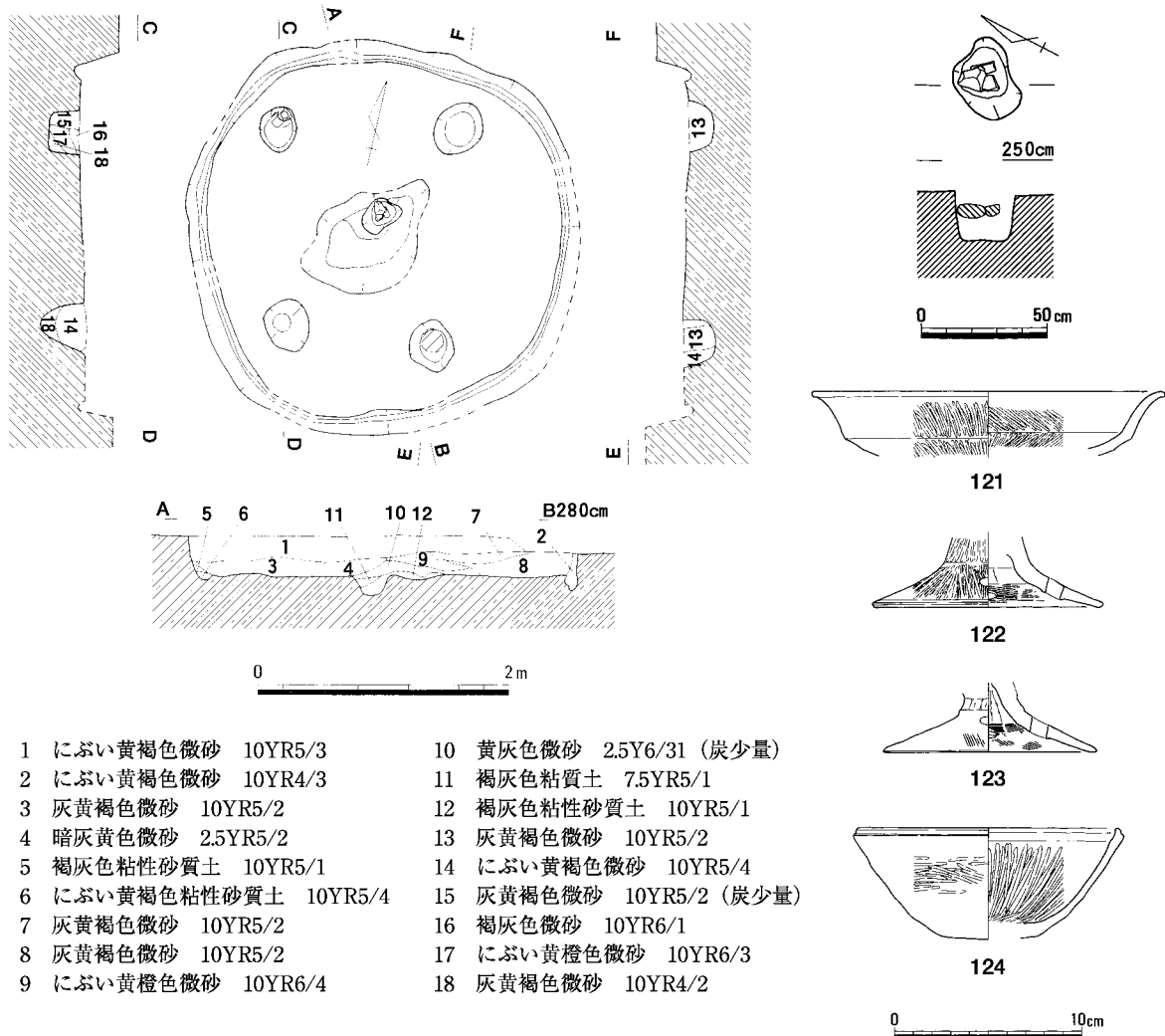
この竪穴住居9の特徴として、調査区内では比較的大型の部類に入る。また時期が異なり、やはり大型になる竪穴住居5や竪穴住居16などが近接して存在することは、大型住居の変遷を考える意味では興味深い事実である。(小林)

竪穴住居10 (第63・74図、図版9)

3区11Qの西側で検出した円形の住居で、規模は長径330cm、短径315cm、床面積は9.46㎡を測る小規模なものであり、今回の調査で検出した弥生時代の竪穴住居のなかでは、規模が一番小さいものであった。検出面からの深さであるが、床面までは約31cmを測る。壁体溝を有しており、幅は約15~20cm、検出面からの深さは36cmであり、A-Bラインの土層断面を観察すると、南側の土層の状況は壁体溝の内側の立ち上がりから垂直に上がっている第2層が観察でき、これは壁体溝に板などで壁面を構築しているものが、そのまま放置されて痕跡として残ったものと推定される。柱穴は4本柱で、そのうち2本で柱痕跡を検出した。この柱痕跡は北西隅のものは直径15cmを、南東隅のものは直径17cmを測るものであり、土層断面に柱痕跡が明瞭にみえることから、この2本については転用されず、そのままの状態に放置されて廃棄されたものと推測される。

また、床面の中央部分には長径34cm、短径23cm、床面からの深さ19cmを測る中央穴をもつ。中央穴の上層部分には自然石が3個入っていたが、被熱などは認められず、人為的に置かれたものかは判断することはできない。中央穴の埋土および上層にあたる第12層は、炭を多く含んでいる層であり、長径140cm、短径98cmの不整形な範囲で床面上に検出でき、先述した中央穴内の石の下層にも炭を含んでいる状況であった。この炭を除去すると長径122cm、短径79cm、深さ5cmの浅い皿状のくぼみが認められ、このくぼみの北側に中央穴が位置していた。

出土遺物には、高杯121・鉢124がある。121は口縁部であり、内外面の調整は縦方向のミガキを施している。122は、脚部であるが、外面は縦方向のヘラミガキで、脚裾部はハケメの上に粗いヘラミガキを施すものである。124は口縁がやや内傾するように摘み、内外面にヘラミガキを施している。この住居の時期についてであるが、これらの遺物の特徴から、弥・後・Ⅲでも新段階にあたるものと考えられる。 (時實)

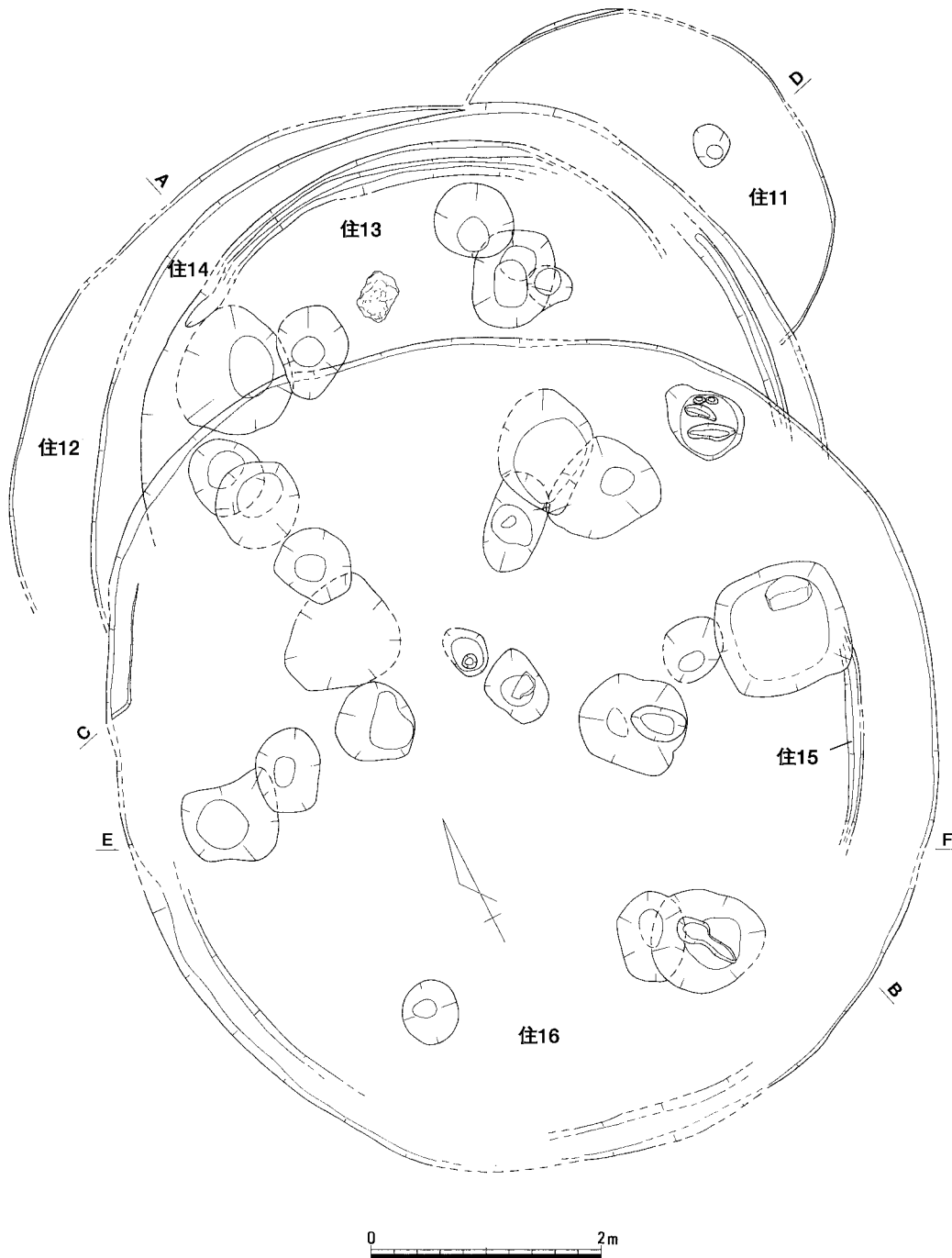


第74図 竪穴住居10 (1/60)・中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居11～16 (第63・75～84図、巻頭図版3、図版10)

11Q～11R区においておよそ10m四方の範囲に6軒の竪穴住居が密に重複した状況で確認された。これら住居は、古墳時代の竪穴住居37・61等調査終了後の海拔250cmにおいてまず竪穴住居11・12北側の一部肩口が明瞭に確認され、これを発端に順次解明されたものである。

切り合い関係を整理すると、6軒の竪穴住居のうち最も古い住居は竪穴住居11である。竪穴住居11は竪穴住居14によって切られ、竪穴住居12もさらに竪穴住居14によって切られる。また、竪穴住居14は、竪穴住居13の拡張によって造成されており、同心円状の拡幅をみせる。そして、さらにこれら竪穴住居12～14を切った状態で存在するのが竪穴住居16である。ただし、竪穴住居16も竪穴住居15の拡張したものである。すなわち、竪穴住居は11・12・13・14・15・16の順番で建てられていたものと考えられる。時期は、床面に遺物の遺存がほとんどみられなかったことで個々の竪穴住居の位置付けについては明言出来ない。



第75図 竪穴住居11～16 (1/60)

竪穴住居11（第63・75～77図、巻頭図版3、図版10）

重複した竪穴住居11～16の中で北東部分に半月形にかろうじて平面形を留める。直径350cmのほぼ円形であったことが推測される。

竪穴住居の検出面は海拔257cmにあり、床面までの深さ5cmと浅くほとんどが削平を受けており、床面には土器等遺物の遺存は全く認められなかった。

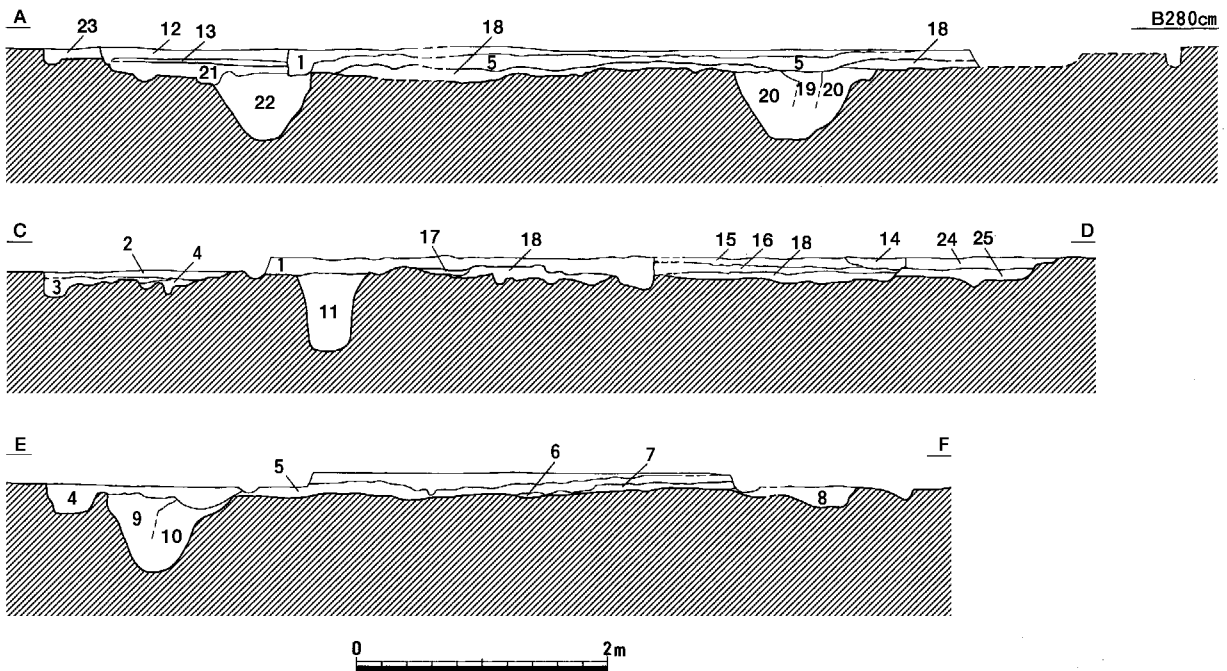
床面には、壁体溝がなくわずかに径35cm、深さ45cmの柱穴が2本、235cmの芯心距離をもって存在するのが確認されたのみである。

時期は、土器が柱穴1から甕・鉢の細片が出土したにすぎず、明確な位置づけはできない。およそ後期後半であろう。（島崎）

竪穴住居12（第63・75・76・78図、巻頭図版3、図版10）

住居は、竪穴住居11を切り、竪穴住居14によって切られた住居である。したがって、遺存する床面はわずかに最大幅70cmの帯状であった。住居の検出面は竪穴住居11と同じく257cmで、床面までの深さ約7cmと浅い。

弧状を呈する住居肩口の状況から復元される住居の規模は、およそ径6mと推測される。



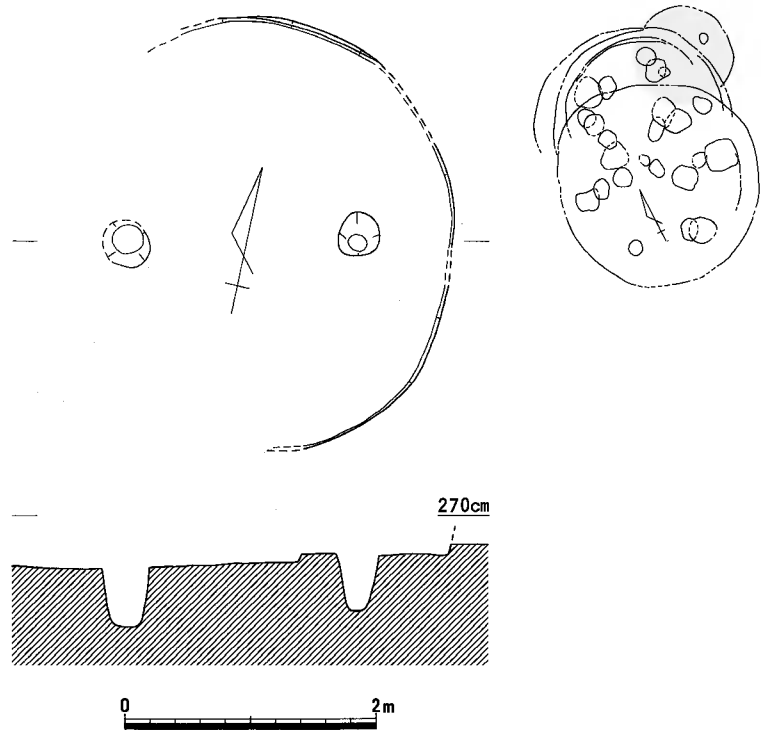
- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 灰黄褐色土 10YR4/2（竪穴住居16） | 14 褐灰色土 10YR4/1（竪穴住居14） |
| 2 にぶい黄褐色土 10YR5/3（竪穴住居16） | 15 にぶい黄褐色土 10YR4/3（竪穴住居14） |
| 3 にぶい黄褐色土 10YR5/4（竪穴住居16） | 16 浅黄色土 2.5Y7/4（竪穴住居14） |
| 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3（竪穴住居16） | 17 にぶい黄褐色土 10YR5/4（竪穴住居14） |
| 5 明黄褐色土 10YR7/6（竪穴住居16） | 18 明黄褐色土 10YR6/6（竪穴住居14） |
| 6 黄褐色土 10YR5/6（竪穴住居16） | 19 褐灰色土 10YR4/1（竪穴住居14柱穴） |
| 7 明黄褐色土 2.5Y7/6（竪穴住居16） | 20 にぶい黄褐色土 10YR5/3（竪穴住居14柱穴） |
| 8 竪穴住居16 | 21 にぶい黄褐色土 10YR5/3（竪穴住居13） |
| 9 灰黄褐色土 10YR4/2（竪穴住居16柱穴） | 22 にぶい黄褐色土 10YR4/3（竪穴住居13柱穴） |
| 10 黄褐色土 10YR5/6（竪穴住居16柱穴） | 23 灰黄褐色土 10YR6/2（竪穴住居12） |
| 11 灰黄褐色土 10YR5/2（竪穴住居15） | 24 黄褐色土 10YR5/6（竪穴住居11） |
| 12 灰黄褐色土 10YR5/2（竪穴住居14） | 25 にぶい黄褐色土 10YR5/4（竪穴住居14） |
| 13 明黄褐色土 10YR6/6（竪穴住居14） | |

第76図 竪穴住居11～16断面図（1/60）

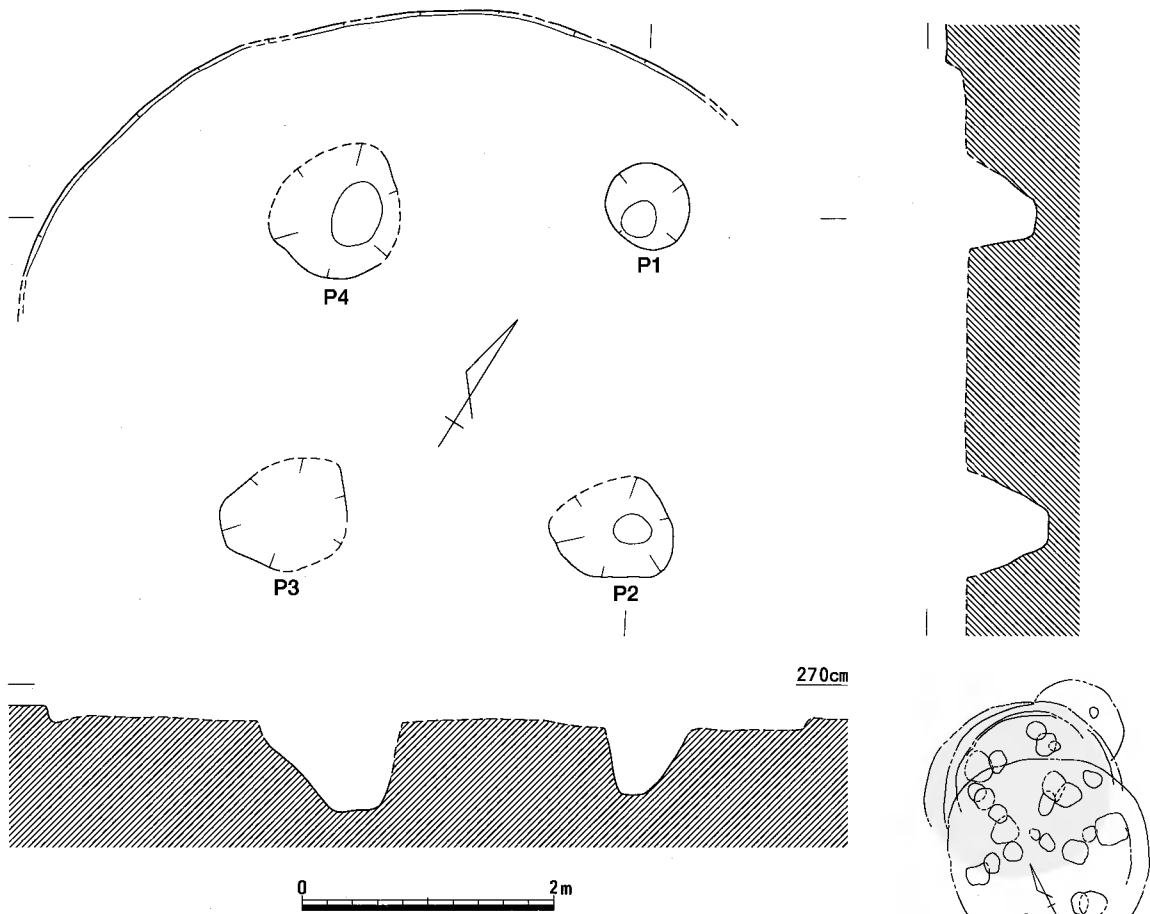
柱穴は、調査時においては確定できなかったが終了後、個々の住居を検討した結果4本の柱穴の存在が判明した。

柱穴の規模は、P1の小さいもので径70cm、大きいものでは長軸が100cmを超える不定形なもので、深さも50~70cmと比較的しっかりとしていた。

時期は、土器の床面での遺存が認められなく明確ではないが、後述の竪穴住居13が後期Ⅲへの位置づけが考えられることからおよそ後期後半頃への位置づけで差し支えないものとする。(島崎)



第77図 竪穴住居11 (1/60)



第78図 竪穴住居12 (1/60)

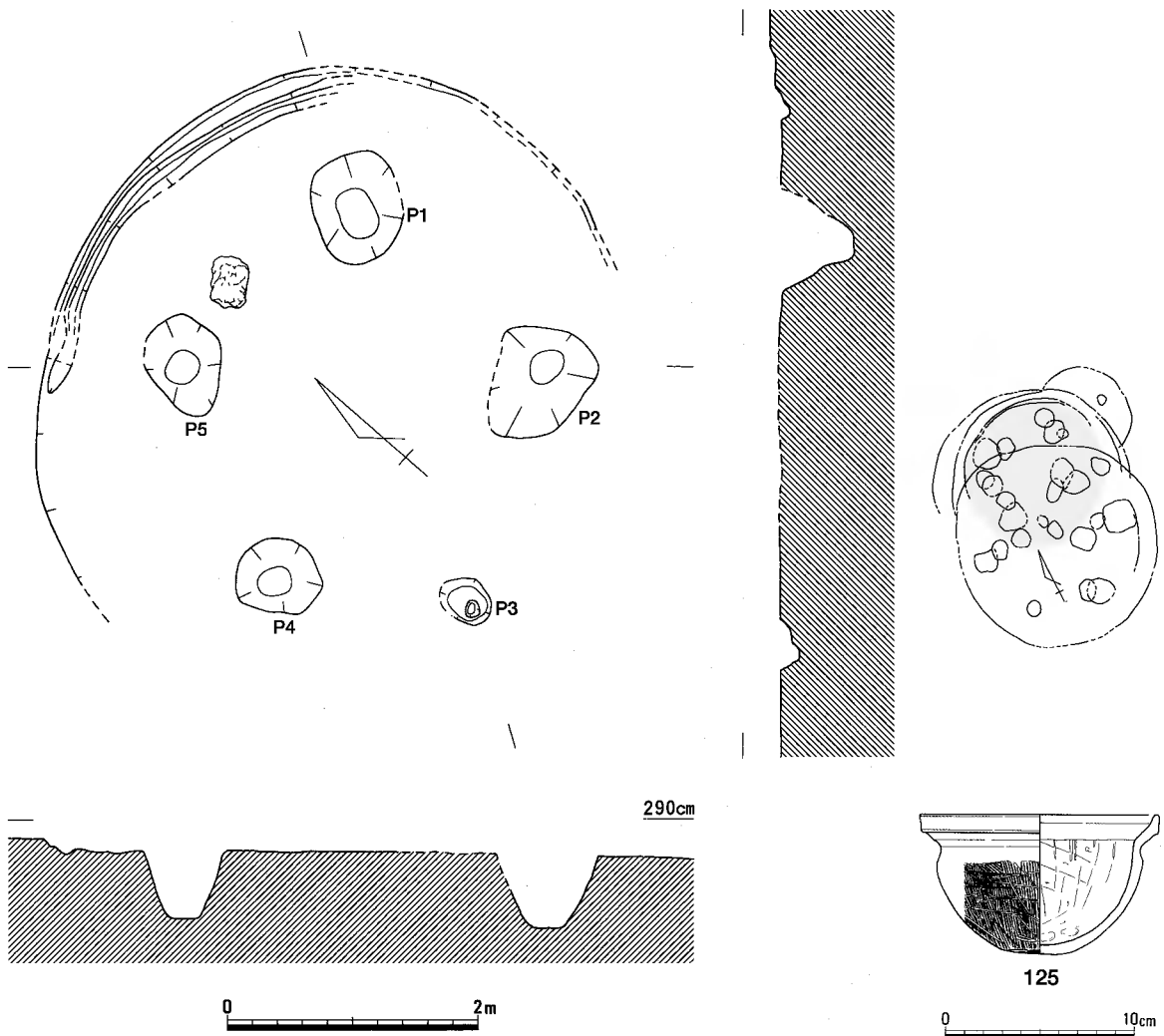
竪穴住居13 (第63・75・76・79図、巻頭図版3、図版10)

竪穴住居14の調査終了後床面下層の海拔240cm前後において検出された竪穴住居である。これは竪穴住居12を切り、竪穴住居14・15によって切られていた。そのため住居の床面は最大幅150cmの半月状を呈する程度にわずかに遺存していたにすぎない。この状況から推定される住居の規模および平面形は、長軸が550cm前後、短軸が470cm前後の楕円形と考えられる。床面は、検出面から約5cm程度の深さにあった。

柱穴は、合計5本の存在が調査後の検討作業のなかで判明した。P3の45cmを除いてはいずれも長軸70~100cm・短軸60~80cmと大きく、またそれぞれの芯心間距離もP3とP4間が150cmを測り最短である以外はいずれも200cmを測った。床面からの深さは、P3の15cmを除き他はいずれも70cmに近いしっかりとしたものであった。

中央穴については、該当箇所が存在を想定して精査を実施したが確認できなかった。

時期は、多くの遺物を床面に残していないため詳細な検討はできないが、唯一床面に遺存していた鉢125および柱穴に包含された小片の土器を検討した結果、おおむね弥・後・Ⅲを示すことで、当該期への位置づけが考えられる。
(島崎)

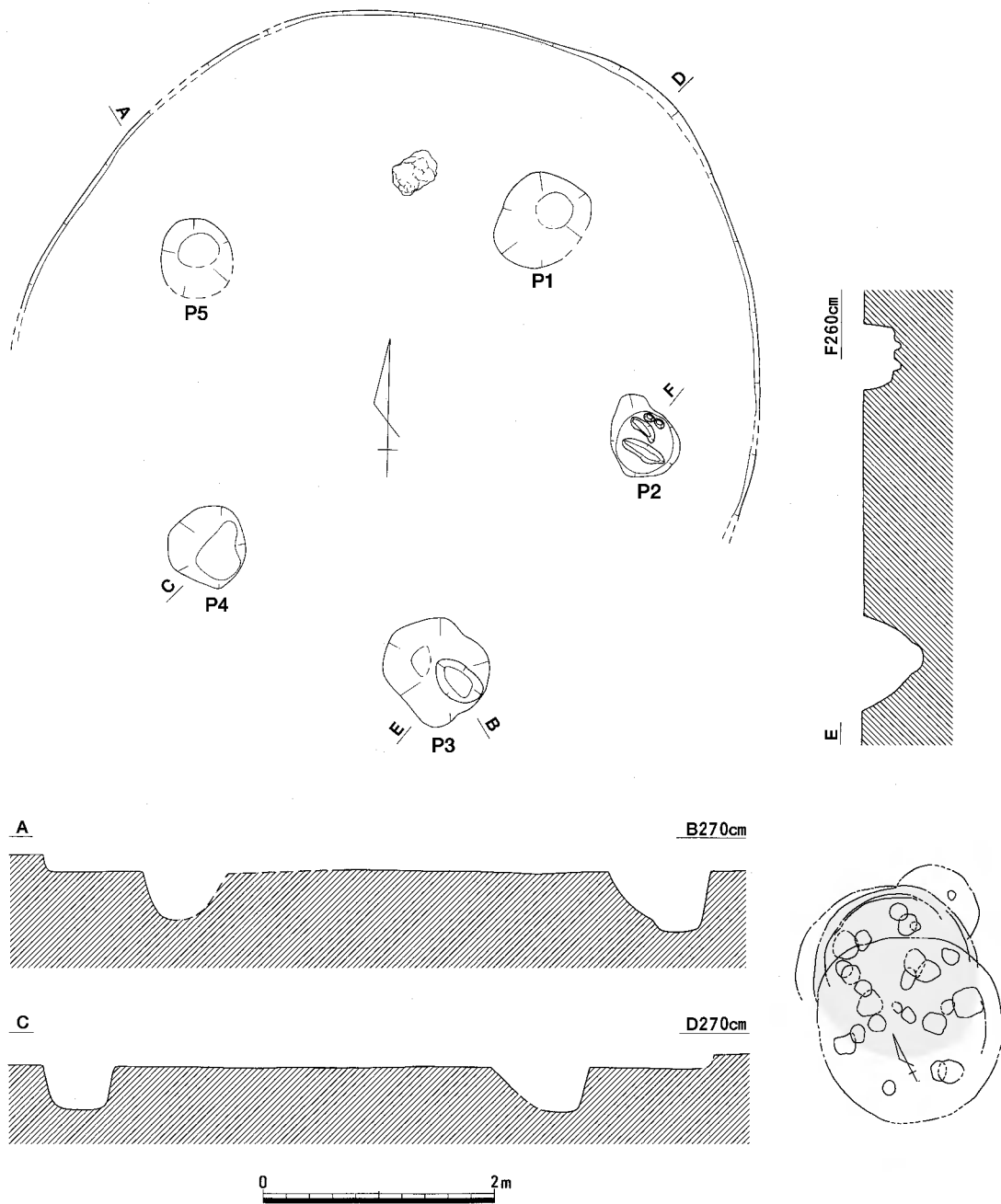


第79図 竪穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居14（第63・75・76・80図、巻頭図版3、図版10）

竪穴住居13が同心円状に拡張されて建てられたのがこの竪穴住居14である。図上では北側の半分近くが遺存するようであるが、実際には竪穴住居15・16によって南側のほぼ半分が切られているため床面を残すのは最大幅200cmの三日月状の範囲である。住居検出面は住居北側で海拔263cmにあり、床面は竪穴住居13を約10cm埋めて造成したようで、その比高差約10cmを測った。

柱穴は、調査中は無数の柱穴が雑然として特定できない状況であったが、机上での詳細な検討を行った結果五角形を形成する5本の柱穴の存在が確認された。柱穴間の芯心距離はP1とP2の間が200cmと最も短く、最長がP1とP5間の300cmであった。なお、P2の底面には礎板痕跡が存在していた。また、床面北側のP1とP5柱穴間からは30×40cmの長方形範囲に被熱した粘土床の火処が確認



第80図 竪穴住居14 (1/60)

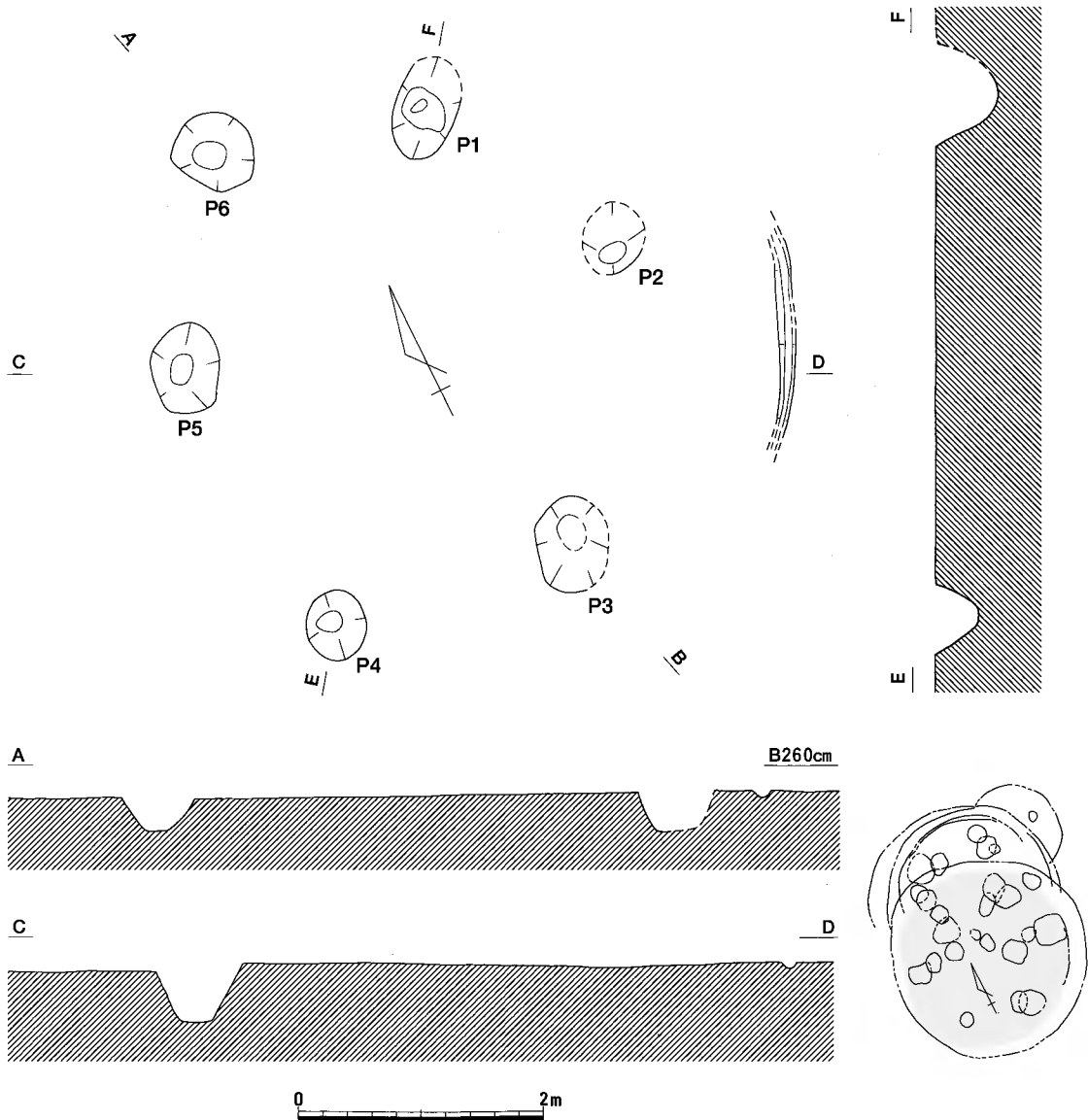
された。

時期は、床面および柱穴内からも明瞭な遺物が出土していないため明言はできない。ただし、竪穴住居の切り合い関係からは弥・後・Ⅳへの位置づけで差し支えないと考える。(島崎)

竪穴住居15 (第63・75・76・81図、巻頭図版3、図版10)

竪穴住居16の調査終了後、床面下において検出された竪穴住居である。肩口が竪穴住居16の床面下にわずかに150cm程に弧状を呈して確認されたにすぎず、床面として全体を確認することはできなかった。この住居に伴う柱穴については壁体溝を中心に検討した結果、6本が判明した。柱間は、P2とP3、P4とP5の間が250cmと他の柱間が200cmであるのに対して長い。こうした壁体溝および柱間隔からこの住居は、およそ径6m弱の円形にあったことが推測される。ただし、床面が竪穴住居16によって既に切られていることで火処および中央穴の存在については特定できなかった。

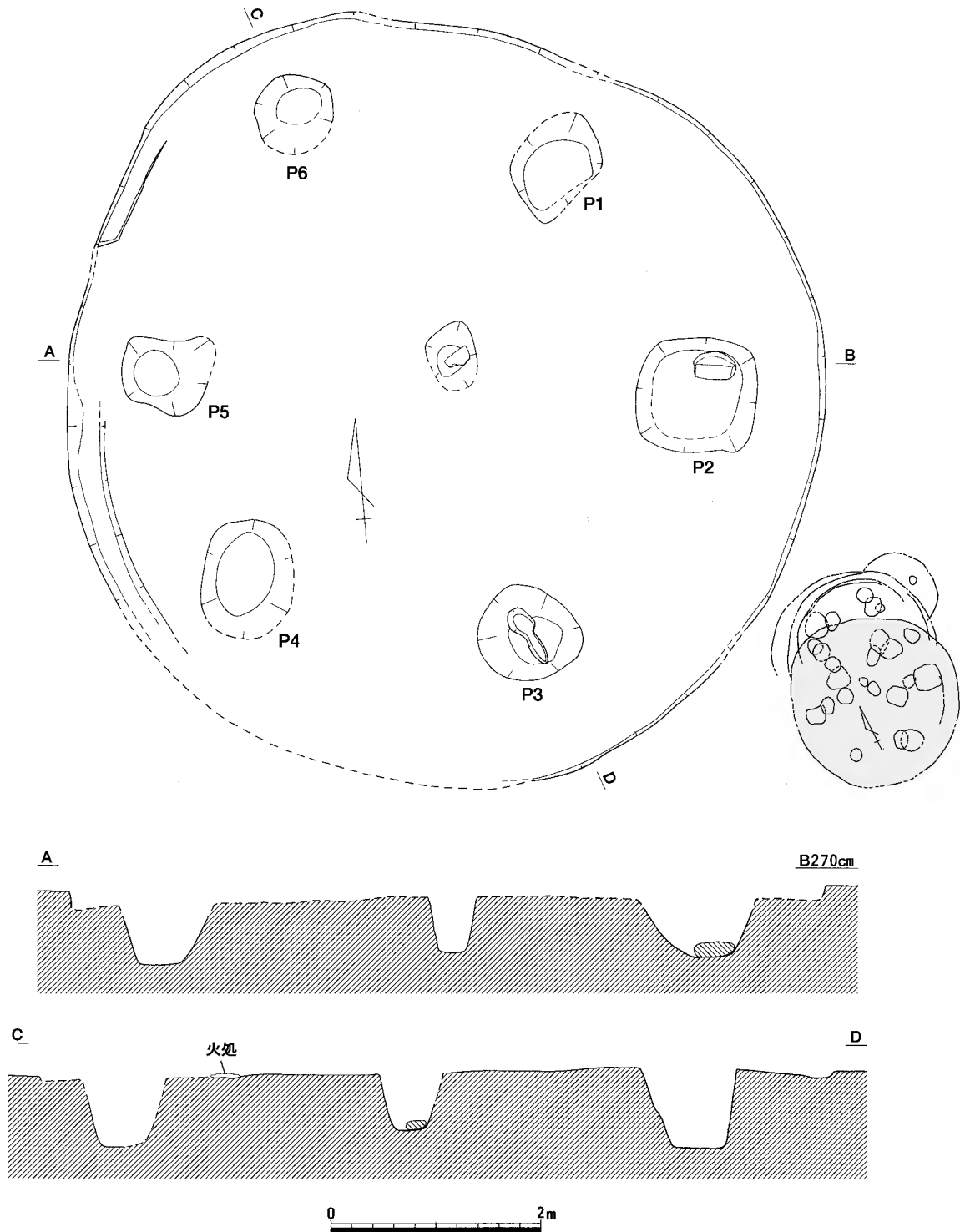
時期は、共伴する遺物が柱穴内に包含された土器の小片でしかない状況で詳細には言及できないが、周辺の竪穴住居等の切り合い関係から弥・後・Ⅳへ位置づけられよう。(島崎)



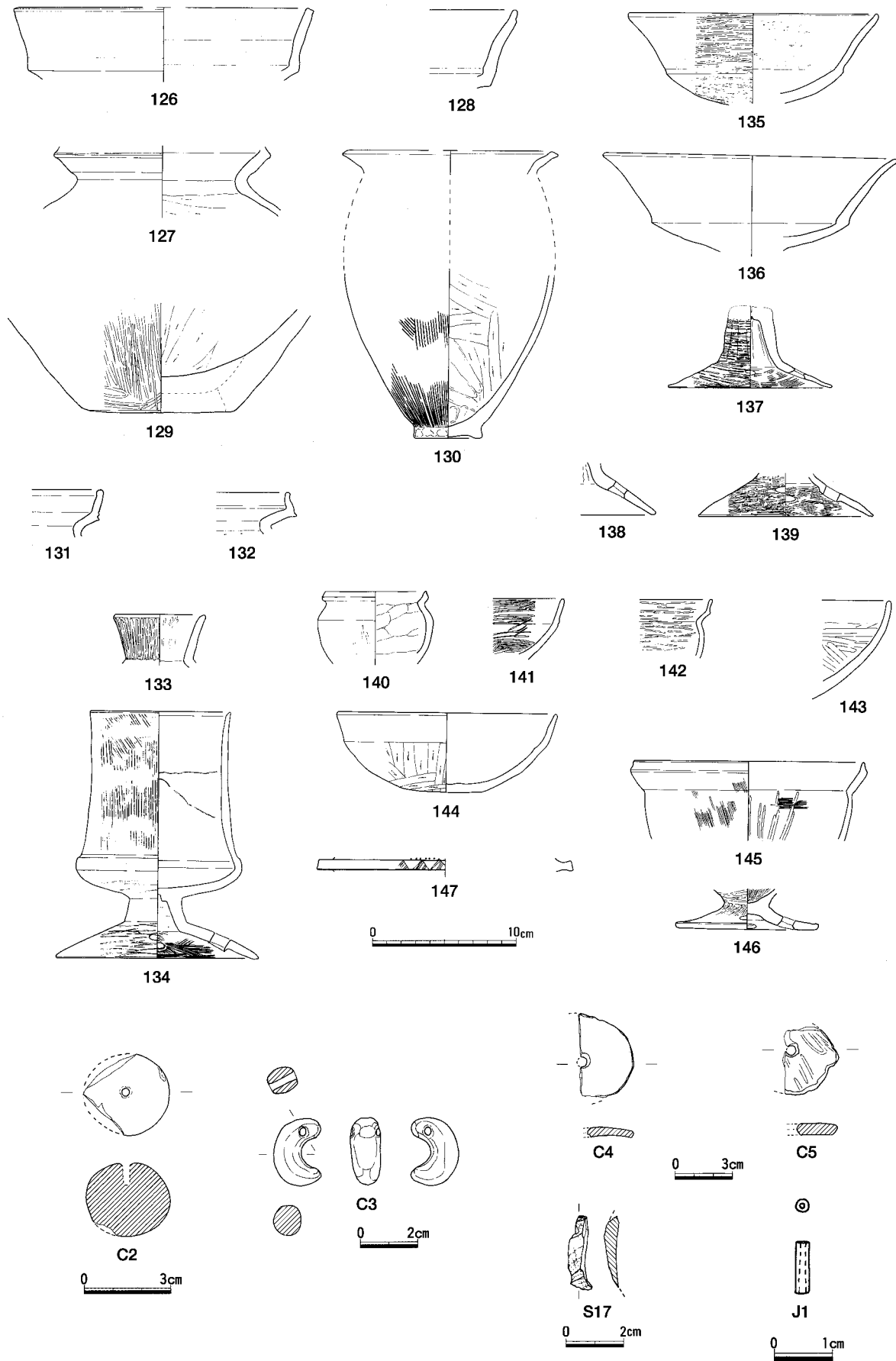
第81図 竪穴住居15 (1/60)

竪穴住居16（第63・75・76・82～84図、巻頭図版3、図版10）

6軒切り合って検出された竪穴住居のうち最も新しい竪穴住居である。竪穴住居は、南北700×東西720cmを測る円形であった。住居の検出面は、海拔256～263cmにあり床面からは合計6本の柱穴と中央穴が1本、さらにこの西側から南側にかけては壁体溝の一部が確認された。床面は平坦ではないが検出面から約15cmと比較的よく残存していた。



第82図 竪穴住居16 (1/60)



第83図 豎穴住居16出土遺物① (1/4・1/3・1/2・1/1)

柱穴は、底に礎板痕跡、礎石を有するものがあり、最大の柱穴であるP2では一辺110cmを測るものの中に28×40cmの大きさの礫が据えられており、直径28cmほどの柱痕跡がその面に認められた。礎板痕跡は、P3とP5で確認された。P2の礎石の長軸が放射状あることとも符合しいずれも中央穴から放射状に敷設されたものである。規模は、80～100cmを測り、柱間も最長がP2とP3で300cmを、最小でもP4とP5の250cmと周辺に存在する竪穴住居のなかにあっては最大規模である。

中央穴は、北側の一部に被熱痕跡を伴う。検出面から底までの深さは50cmと深く、底には約20cmほどの大きさの角礫が存在した。

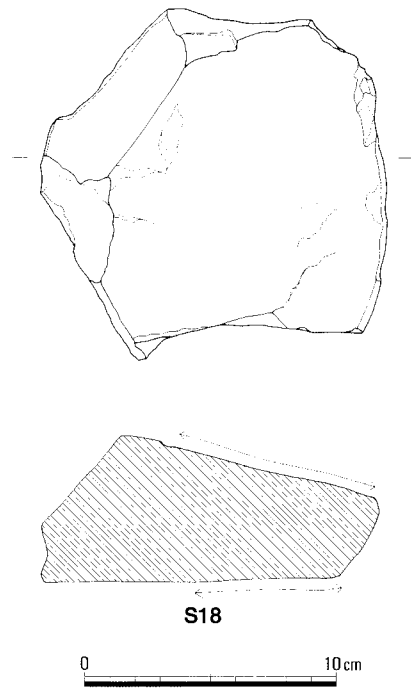
この他にはP6に近接した位置に被熱した30×40cmの範囲が存在した。側溝によって切られ規模・広がりにはできなかったものの、竪穴住居16に伴う火処の一つとして考えられた。

出土遺物には、小片ながら土器、土玉C2、土製勾玉C3、紡錘車C4・5、管玉J1、砥石S18等がある。土器は、壺126～129、甕130～132、高杯135～139、鉢140～146、台付鉢145・146、脚付直口壺133・134等がある。中には古い土器も含まれるが甕は口縁部を上方に長く拡張したもので、高杯135、脚付直口壺等はヘラミガキ調整が横方向に転じた段階である。

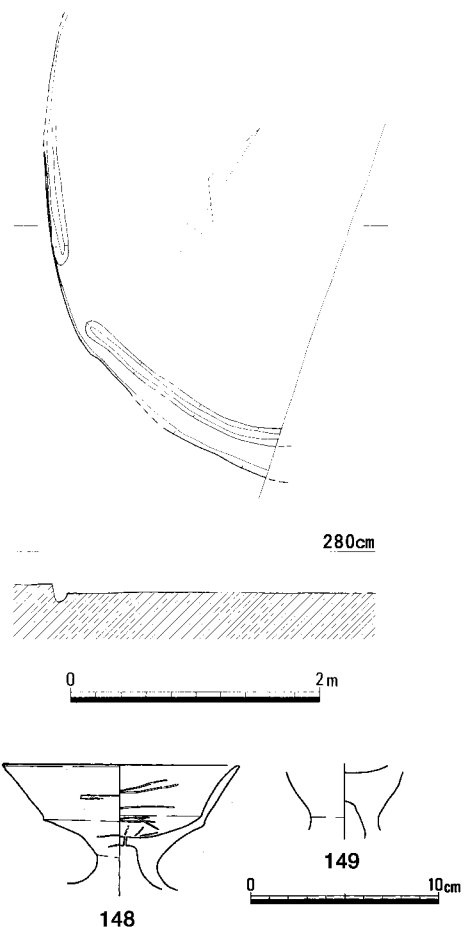
以上の出土遺物、中でも壺126と128にみられる拡張した型式から竪穴住居16の時期は、弥・後・IVに位置づけられよう。(島崎)

竪穴住居17 (第63・85図、図版10)

竪穴住居17は、3区の東側端の11Rに位置する。住居の残存状況は、東側半分は調査区外になるため調査はしておらず、また西側でも北半分は古墳時代の住居に切られて存在しない。よってこの竪穴住居17は、本来の1/4の残存状況である。住居の規模は本来6m前後になると考えられ、平面形状は円形である。床面は標高250cm前後ではほぼ水平になるが、貼り床などは存在しない。今回の調査区内では柱穴や中央穴を発見するには至らない。壁体溝は1条存在し、南側では壁体から15cmほど離れている。出土遺物は、148の高杯と149の脚部などがある。この住居の時期は、弥・後・IVになる。(小林)



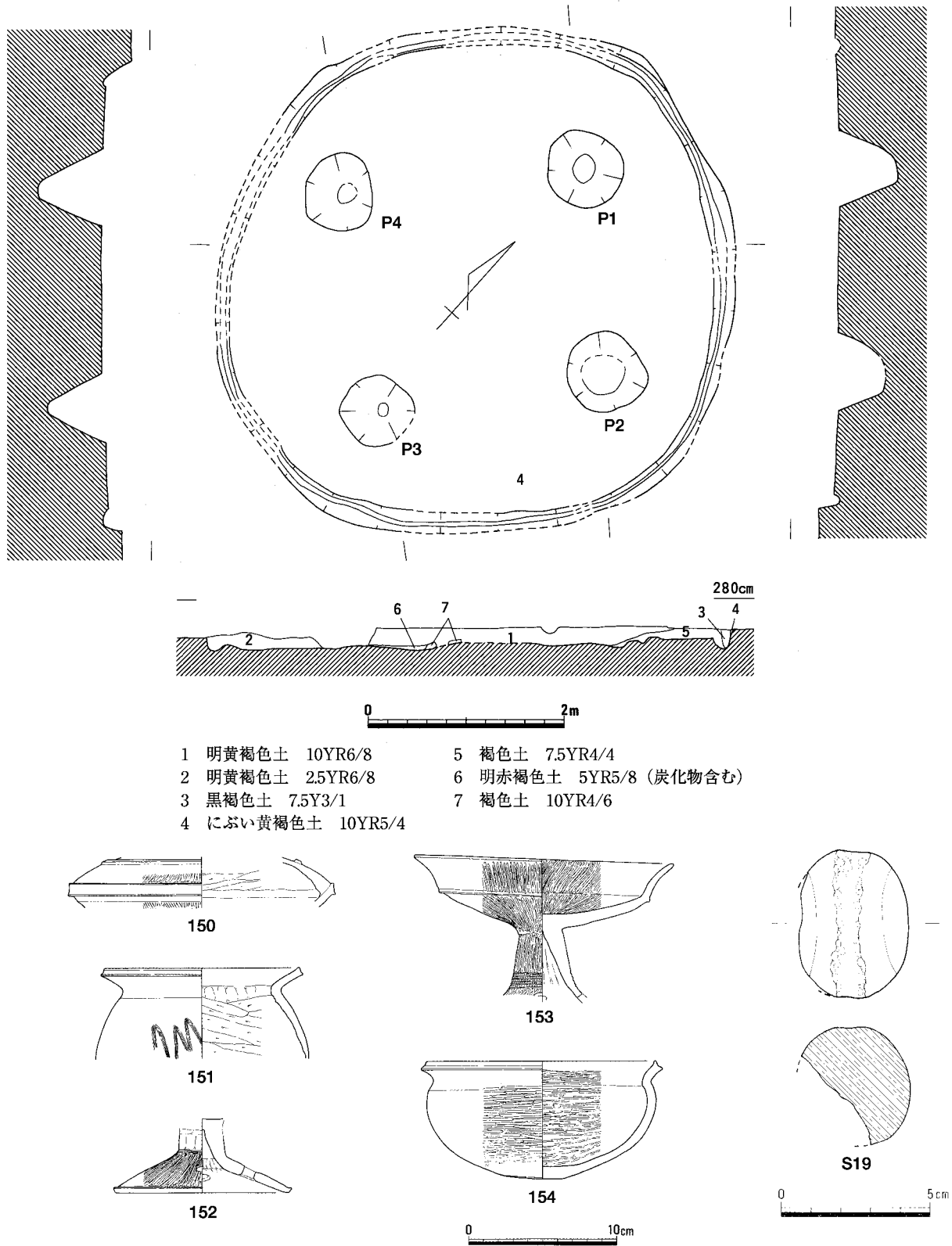
第84図 竪穴住居16出土遺物② (1/3)



第85図 竪穴住居17 (1/60)・
出土遺物 (1/4)

竪穴住居18 (第63・86図、図版10)

12R区北西隅において海拔250cmで検出した直径510~520cmのほぼ円形を呈する竪穴住居である。住居は、土壇51・溝35によって切られた状態で存在した。壁際には、壁体溝が明瞭な状態を保って全



第86図 竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

周する。床面は検出面から約20cmの深さにあり、本来の高さから考えれば相当の規模での削平が後世行なわれたことが推測される。この住居は、床面に検出された柱穴P3とP4との間およそ150×100cmの範囲に炭の薄い堆積がみられた。

柱穴は、4本が検出された。直径70～90cm、深さ50～60cmの掘り方をもったものである。掘り方の断面は垂直に掘られたものではなくいずれもが緩やかで播り鉢状であった。柱痕跡が存在しなかったことと柱穴内埋積土がいずれも1層であったこと、さらに柱穴が炭の広がりの一部切っていたこと等で柱は抜き取られ、また住居についても床面から検出面にかけて明黄褐色土1層で埋積しており、意図的に埋められたものと推測された。

柱間は、P1とP2、P3とP4がおおよそ220cmで、P2とP3およびP1とP4が230～250cmとやや長い。この違いは上屋構造をある程度反映していると考ええる。

なお、比較的分かりやすい床面にあって中央穴および火処の存在については確認はできなかった。

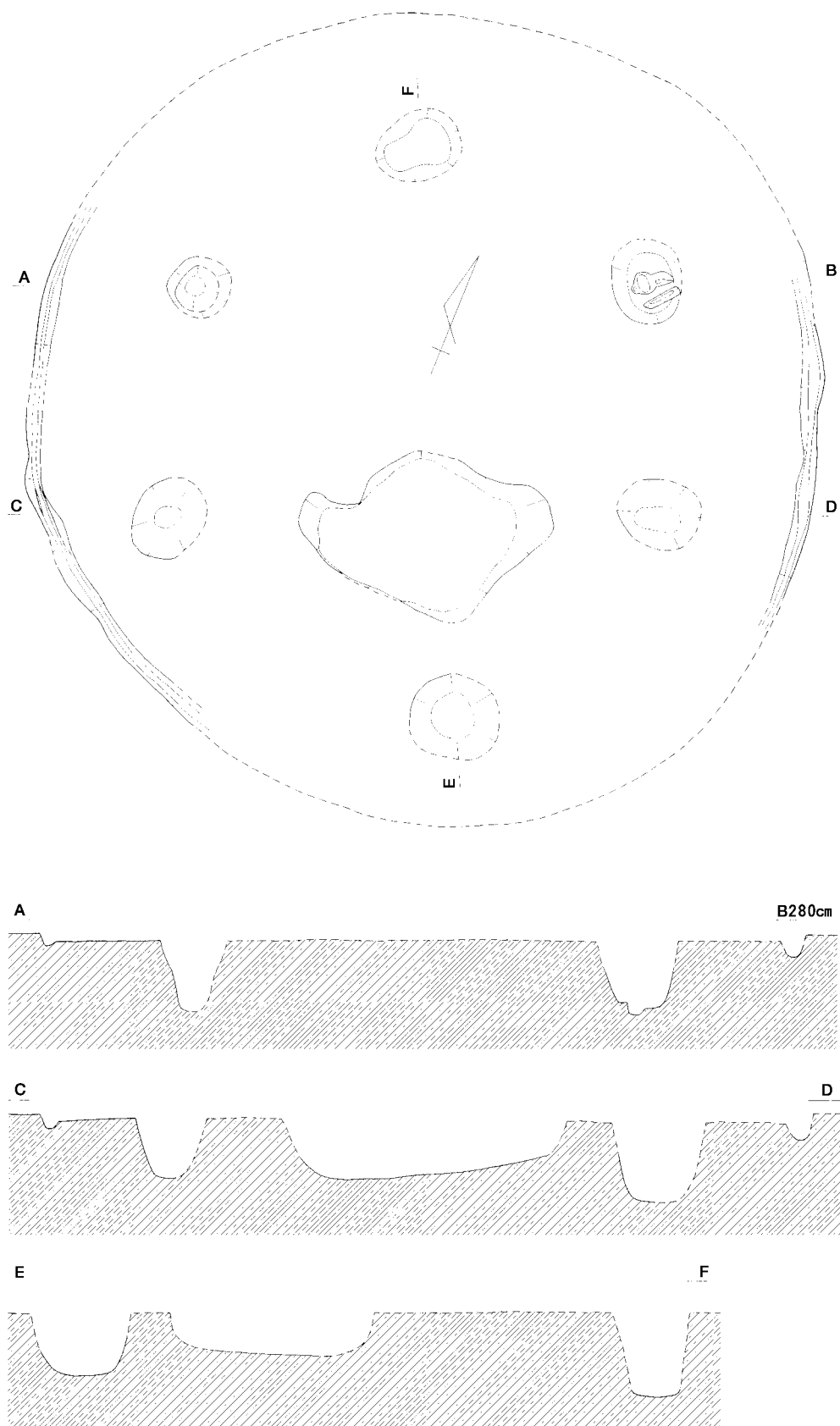
住居床面からは少量ながら脚付直口壺・甕・高杯・鉢等の土器と石錘が出土した。脚付直口壺150は、杯部から肩部にかけての小片であるが体部最大径を巡る突帯外面には赤色顔料による塗布が認められる。高杯には胎土の違いで新旧が認められる。水こし粘土を用いた高杯152以外はおおむね古相を呈し、おおむね後期中葉から後半にかけてのものと考えられる。

したがって、竪穴住居18は弥・後・Ⅱから弥・後・Ⅲにかけての位置づけが考えられる。（島崎）
竪穴住居19（第63・87・88図、図版11）

竪穴住居19は12Q区に位置する。竪穴住居19の中央部付近は調査前に存在した建物の基礎で破壊されており、遺構の残存状況は良くなかった。調査の段階で、この破壊を受けている箇所は西側と東側に竪穴住居の壁体溝と思われる遺構が検出されていた。その形状から、この破壊を受けた付近を中心に竪穴住居の存在が推定されたことから、現地調査での所見および図面上での復元作業の結果、図示したような竪穴住居の存在を推定するに至った。これによると、竪穴住居19は径約740cmの円形を呈する住居で、当遺跡の弥生時代に属する竪穴住居のなかでも大きなものの部類に属することがわかる。竪穴住居19の周辺には壁体溝を施していたと推測される。主柱穴は6本を確認している。柱穴は径50～80cmを測り、検出面からの深さは50～80cmを測る。柱穴の底部では、木質自体は残存していなかったが、土質の違いから、柱を支えるための礎板（根がらみ）のような施設の存在をうかがわせるものも存在した。また、住居内には不整形であるが、長さ約166cm、幅79cm、深さ50cmほどの土壇がみられた。この土壇からは炭を含む埋土等が厚く堆積していた。この土壇はこの竪穴住居19に伴うものかどうかについては確証はない。

なお、住居内からは弥生土器が出土している。先述したとおり、この住居はその多くの箇所削平を受けており、出土した土器は比較的少なかったが、155～158は残存していた床面から出土したものである。155は甕である。口縁端部を上方につまみあげ、体部外面にはハケメを、内面にはヘラケズリを施している。底部には平底を残す。口径13cm、器高15.2cmを測る。156～162は高杯である。157～160は杯部、161～162は脚部である。156・157は杯部の口縁が外側に開くタイプのものであり、158と160は杯部が椀形を呈するものである。高杯はいずれも短脚のものであり、脚裾部には四方向に円形の透かし孔が観察できる。高杯の外面はいずれも縦方向のヘラミガキを中心とするものである。163はいわゆる手捏ね土器であり、表面に指オサエの痕跡をのこす。

以上の出土遺物から、竪穴住居19は弥・後・Ⅲ～Ⅳに比定することが可能であろう。（金田）



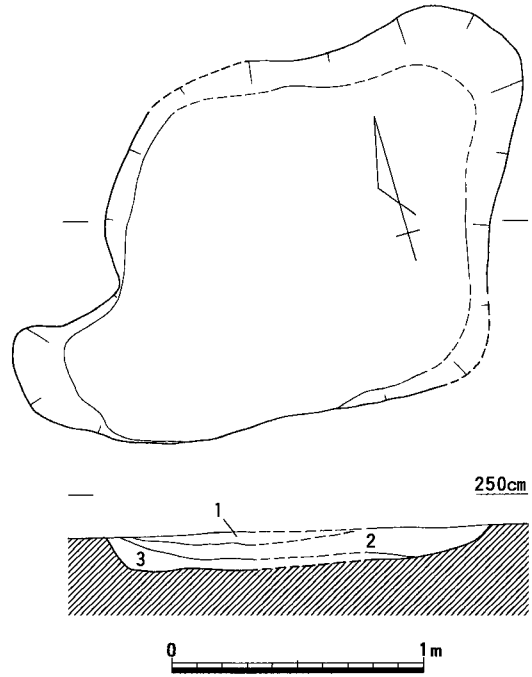
第87図 豎穴住居19 (1/60)

竪穴住居20 (第63・89・90図、図版11)

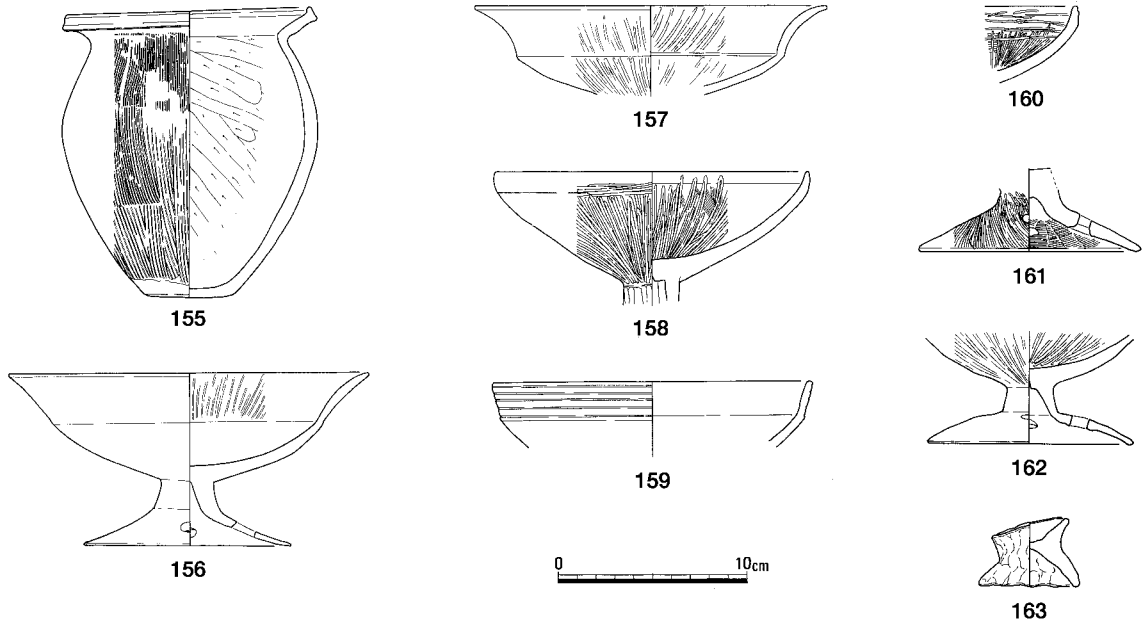
12Q区に位置する円形の住居で、ほぼ中央から西側が建物の基礎によって攪乱を受けている。東側では、外側に壁体溝が2条確認され復元推定径約8mを測る。柱穴は切り合った状況で検出されたが、6本柱と考えられ柱穴の集中と切り合い状況から2回以上の建て替えがあったと判断される。また、床面の海拔高は240cm前後で、2条の切り合いを持つ溝が検出される。これらの溝は建て替えに伴うか、別の住居の壁体溝になるかは判然としないが、本住居の柱穴には切られた状況で検出されたことから、古くなることは明らかである。

遺物は、床面検出中に土器片が出土している。164・165は口縁端部を拡張する甕で、166は鉢である。

住居の時期は、出土土器と検出状況から弥・後・Ⅲと考えられる。(杉山)



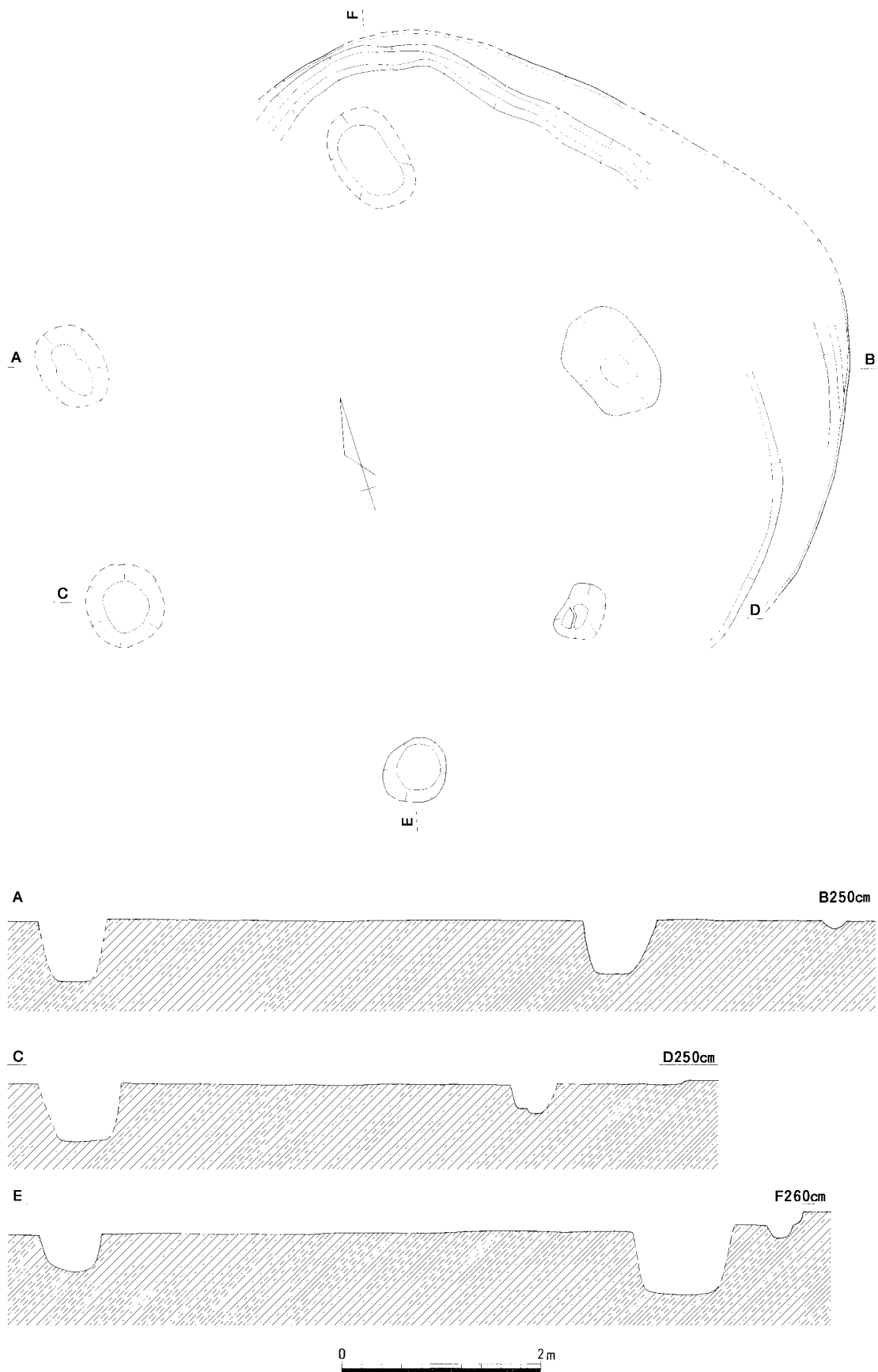
- 1 暗褐色微砂 10YR3/3
- 2 におい黄橙色粘性砂質土 10YR7/4
- 3 黒褐色微砂 10YR3/1 (炭・焼土多く含む)



第88図 竪穴住居19内土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居21 (第63・91図、図版11)

12Q区に位置する。平面形が円形で、復元で径約560cmを測る。土壙が切り合って存在していたため残存状況は良くなかったが、住居の周囲には壁体溝と考えられる溝が巡り、床面と思われる層も良好な状態で検出できた。柱穴等については明確なものは検出できなかった。図示しえた遺物はないが、土器および土壙47・48との切り合い関係から弥生時代後期後半の竪穴住居と考えられる。(金田)



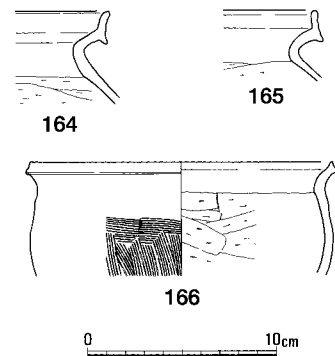
第89図 豎穴住居20 (1/60)

竪穴住居22 (第63・9図)

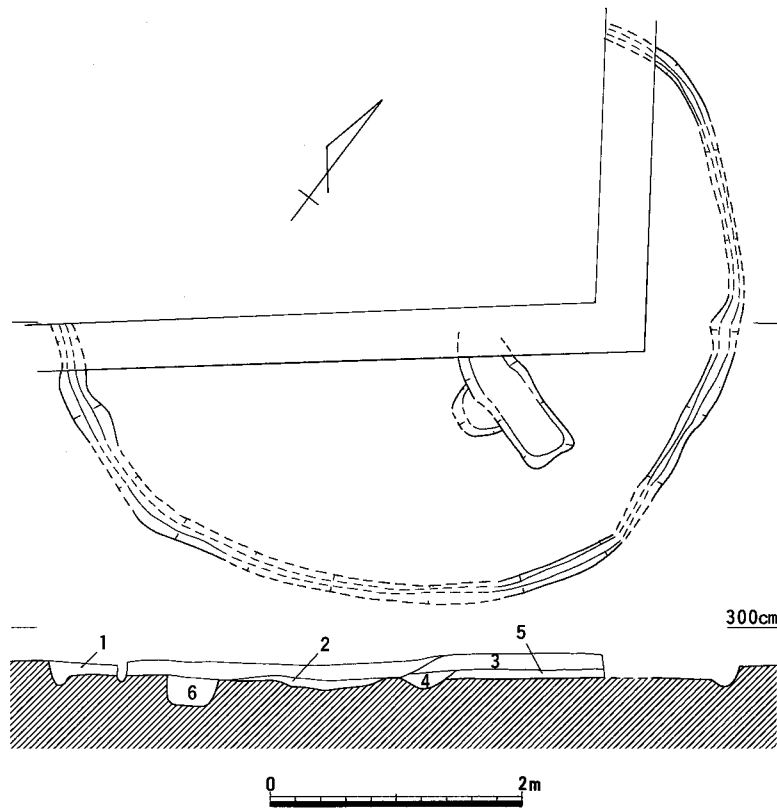
12Q区の南西隅に位置し、第一次確認調査時にT7で検出され『津島遺跡1』で竪穴住居2として報告している住居の一部分にあたる。

上面は古墳後期の竪穴住居81による削平を受け、床面近くが辛うじて残存していたにすぎず、面的な検出ができなかったため個別図は作成していない。また、遺物も新規の出土はなかった。

T7では、壁体溝を伴う円形の住居として認識され、伴う柱穴3基も検出されている。出土遺物は小型の鉢1点のみで、時期は弥生時代後期の範囲内と考えられる。(岡本)



第90図 竪穴住居20
出土遺物 (1/4)



- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1 褐色微砂 10YR3/4 | 4 褐色微砂 10YR4/4 |
| 2 黄褐色粘質土 10YR5/6 (炭含む) | 5 にぶい黄褐色微砂 10YR4/3 |
| 3 暗褐色微砂 10YR3/3 | 6 灰黄褐色微砂 10YR4/2 |

第91図 竪穴住居21 (1/60)

3 袋状土壙

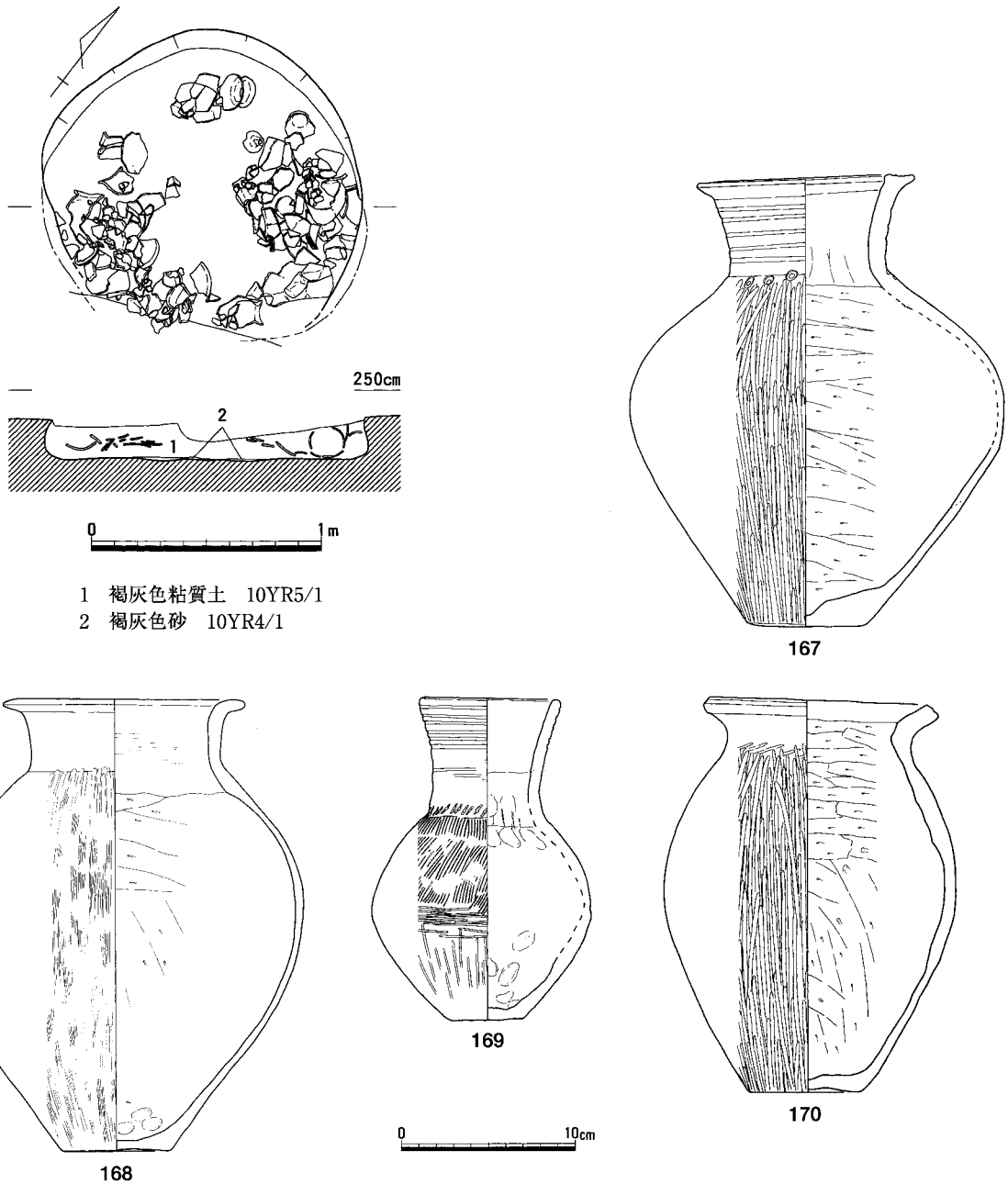
袋状土壙1 (第62・92~94図、図版12・53)

4Q区の中央からやや北西寄りの位置にあり、南東隅の一部を溝24によって切られる袋状土壙である。平面形は円形を呈し、検出面での最大径は140cmを測る。深さは14cmと袋状土壙としては極めて浅く、上部を大幅に削平されたものとみられる。断面形は、壁面がややオーバーハングしたフラスコ

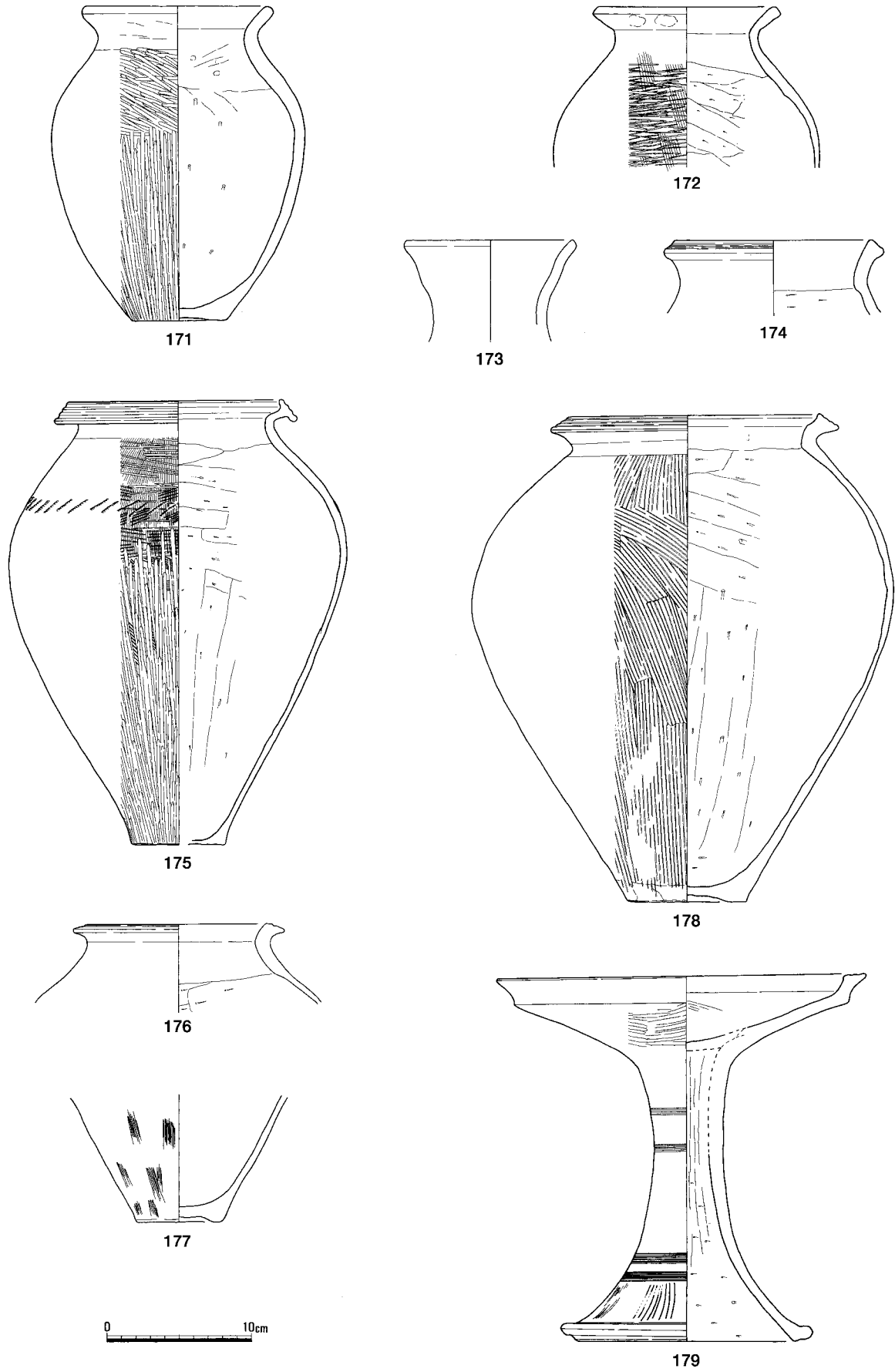
状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、中央部が周辺部より若干盛り上がっている。

埋土の最下層中からは、土壌の廃絶時に投棄されたと思われる多数の土器が出土した。出土状況を見ると、中心部よりもむしろ壁際寄りに集中する傾向がある。また、完形品に近い個体や大型破片が目立ち、多くの土器を図示することができた。

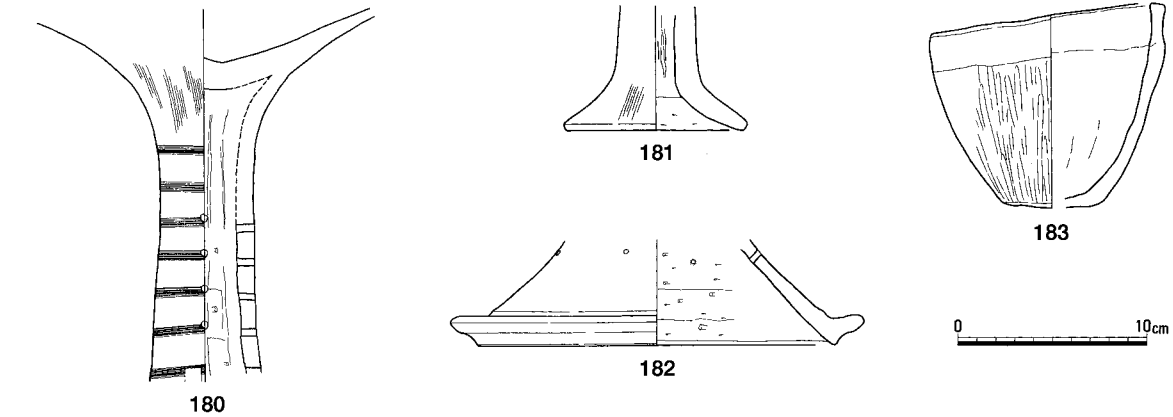
167～174は壺で、多様な形態のものがみられる。167・169は底面直上からの出土であり、いずれもほぼ完形で、頸部には浅い沈線が巡り、頸部と胴部の境には刺突文が施される。168は直立する短い頸部から口縁部がほぼ水平に張り出している。170～172は無頸で、外反する口縁部が胴部に直に取り付く。173の口縁部は逆「ハ」の字状に開く。174は端部がやや肥厚し、剥落しているが擬凹線文が施されていた可能性もある。



第92図 袋状土壌 1 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第93図 袋状土壌1出土遺物② (1/4)



第94図 袋状土壌 1 出土遺物③ (1/4)

175～178は甕である。175・176は拡張した口縁端部に擬凹線文を施す。175は肩部に櫛歯状の刺突文が巡っている。器形や口縁部の作りに中期的な様相を留めている。176も顕著ではないが肥厚した端部に擬凹線文がみられる。

179～182は高杯である。179・180は脚柱部に櫛描きの沈線文を巡らす。180の脚柱部には沈線文帯と同じ位置に縦4列の円孔列があり、最大で5個が残っている。181は底径が小さく脚裾端部の肥厚もない、やや特異な形状を呈する。

183は口径11.8cm、器高12.5cmを測る小型の鉢である。

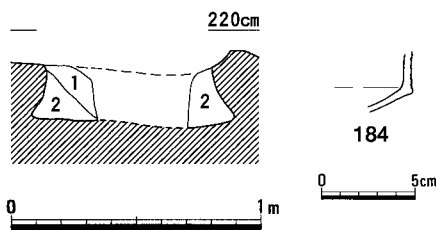
以上の出土土器から判断して、この土壌が廃絶した時期は弥・後・Iと考えられる。(岡本)

袋状土壌 2 (第62・95図)

4 P 区の南東部で検出された袋状土壌である。調査区壁面で断面のみ確認されたため本来の規模は不明で、深さは最大24cmを測る。中央部を溝24が切っている。弥・後・IVの甕口縁部184が出土しているが本来伴うものとは思われない。土壌自体の時期は弥・後・I～IIの間と考えている。(岡本)

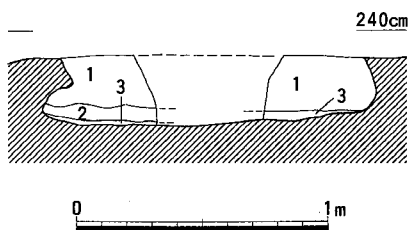
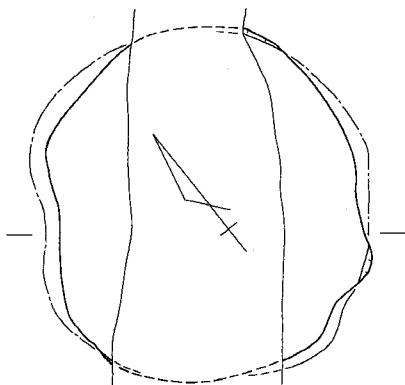
袋状土壌 3 (第62・96図)

4 P 区に位置し、袋状土壌 2 のすぐ南側に隣接して検出された。袋状土壌 2 と同様、中央部が溝24によって損壊を受けている。平面形はややいびつな円形を呈し、想定され



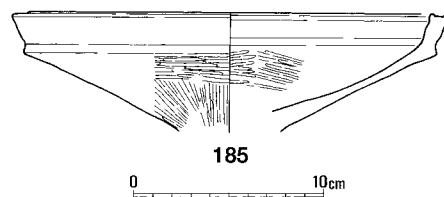
- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR5/2

第95図 袋状土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 2 灰黄色粘質土 2.5Y6/2
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 (炭多く含む)

第96図 袋状土壌 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)



る長径は約140cm、短径118cm、底面の最大径150cm、検出面からの深さは最大28cmを測る。断面形は底部が広がったフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦に掘削されている。埋土はほぼ水平な堆積状況を示し、3層に分層される。最下部の第3層には灰および木炭が大量に含まれていた。

埋土中からは、下層部を中心に少量の土器片が出土した。185の高杯は第3層出土で、弥・後・Iの特徴を示しており、土壌の時期も同様とみられる。(岡本)

袋状土壌 4 (第62・97図、図版12)

4 Q区の南西部に位置し、袋状土壌3の東方約4mで検出された。平面形はややいびつな円形で、長径136cm、短径128cm、深さ28cmを測る。断面形は底部がわずかに広がった逆台形を呈し、底面は平坦である。底面からやや浮いた位置に、焼土・灰が薄く全面を覆った状態で堆積する(第4層)。遺物は、土器片とサヌカイト製の石鏃S20が出土している。

遺構の時期は、遺物が小片のため確定しがたいが、弥・後・Iの中にはおさまると考えられる。

(岡本)

袋状土壌 5 (第62・98・99図、図版53)

5 Q区南東に位置する、平面形が円形の土壌である。断面はフラスコ状を呈する。

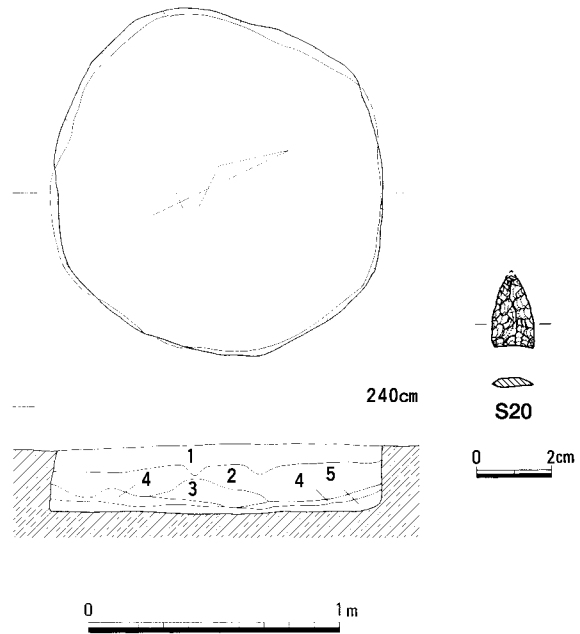
平成11年度調査区の南端で、土層観察と排水のための側溝掘り下げ中に土器を検出したため、遺構の存在がわかった。この側溝のため、図の中央部に存在した遺物の出土状況が図化できなかった。

図示していないが、埋土は2層に分かれ、底面付近で中央より東側に灰黄色微砂層が存在し、その他がにぶい黄色微砂～細砂層である。遺物はほとんどがにぶい黄色微砂～細砂中に含まれる。

出土遺物は土器で、土壌底面よりやや上部に層状になって検出された。図示できたのは、ほぼ完形に復元できる甕1個体、器台2個体と底部のみの破片である。この土壌は、出土土器により弥・後・Iの時期に埋没したといえる。(氏平)

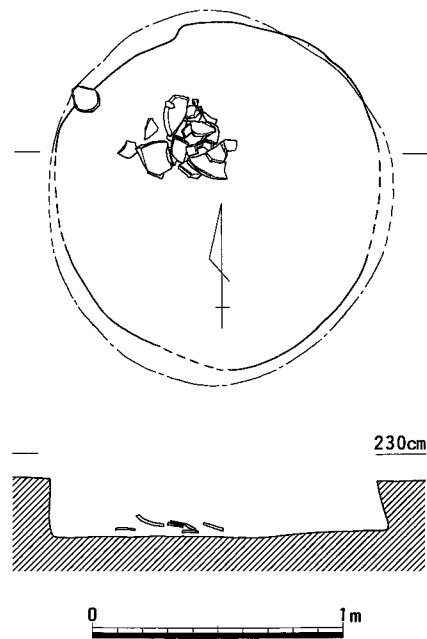
袋状土壌 6 (第63・100図)

10Q区の東部に位置し、3区で検出された唯一

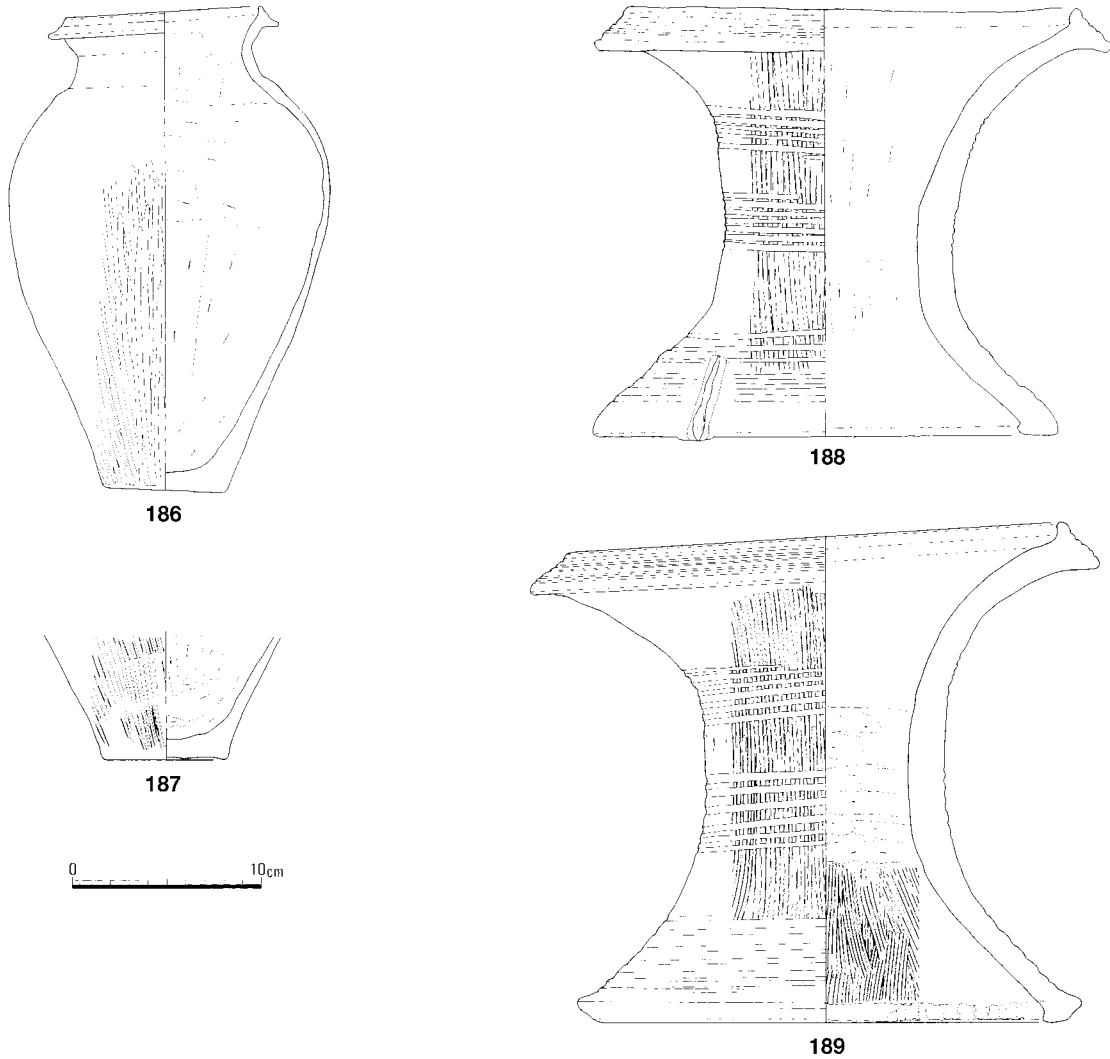


- 1 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 2 褐灰色粘質土 10YR5/1
- 3 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
- 4 焼土(にぶい赤褐色土 5YR5/4) (炭化物含む)
- 5 褐灰色粘質土 10YR5/1

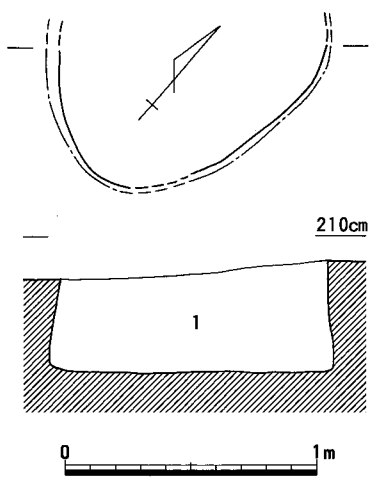
第97図 袋状土壌 4 (1/30)・出土遺物 (1/2)



第98図 袋状土壌 5 (1/30)



第99図 袋状土壙 5 出土遺物 (1/4)



1 褐灰色粘質土 10YR4/1
(炭化物含む)

第100図 袋状土壙 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

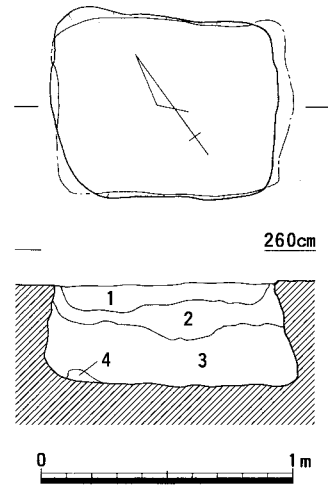
の袋状土壙である。重複する土壙 8 の埋没後に掘り込まれており、両者の埋土は区別困難であったため南半部のみの検出となった。そのため疑問も残るが、調査時の所見を尊重して一応袋状土壙として報告する。

平面形は楕円形と推定される。現存する径は115cm、深さは43cmを測る。壁面はオーバーハングし、底面は平坦である。埋土中から出土した高杯190から土壙の廃絶時期は弥・後・Ⅲに位置づけられ、1区の袋状土壙群よりも新しい。(岡本)

4 土壙

土壙1 (第62・101図)

5Q区中央やや東よりに位置する、平面形が長方形の土壙である。形状から袋状土壙の可能性もある。土層の内、第2層に焼土と炭を含み、特に西側でこの傾向が顕著である。第1・3層は土質が類似し、第4層は基盤層がブロック状に入ったものである。遺物は土器の小片が見られる程度で、ほとんど存在しない。時期は、検出面と周囲の遺構から弥生時代後期の前半の可能性が高い。(氏平)



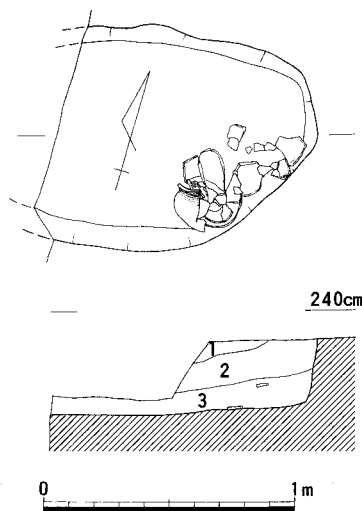
- 1 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 2 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 3 にぶい黄褐色微砂 10YR5/3
- 4 明黄褐色微砂 10YR6/6

第101図 土壙1 (1/30)

土壙2 (第62・102図)

5Q区南西側で、溝57に北半分を削平された土壙である。東側は、土層観察などのため南北に設定した側溝によって切られる。残存部分から想定すると、平面形は不整な楕円形で、断面は方形である。

土層は3層に分かれる。各層で、粘土と砂が縞状に堆積した様子が観察できた。また、第2・3層には炭を含み、特に底面に付近に厚さ約1cmで炭の多い部分がみられた。遺物は土器で、ほぼ完形の壺192などが出土した。191は壺で埋土中出土、192は出土状況で図示したように、土壙の底面に接した状態で出土した。



- 1 灰黄色微砂 2.5Y6/2
- 2 暗灰黄色微砂 2.5Y5/2
- 3 黄灰色微砂 2.5Y5/1

この土壙は、出土土器により、弥・後・IIの時期に埋没したと考えられる。

(氏平)

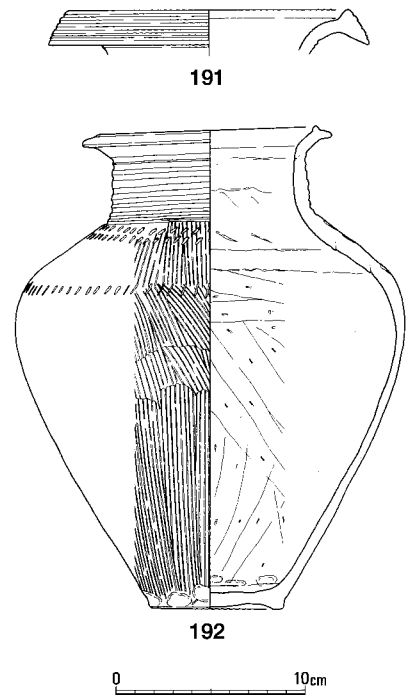
土壙3 (第63・103図)

10Q区の東部に位置し、土壙4の西方約1mで検出された。北東側を他の柱穴

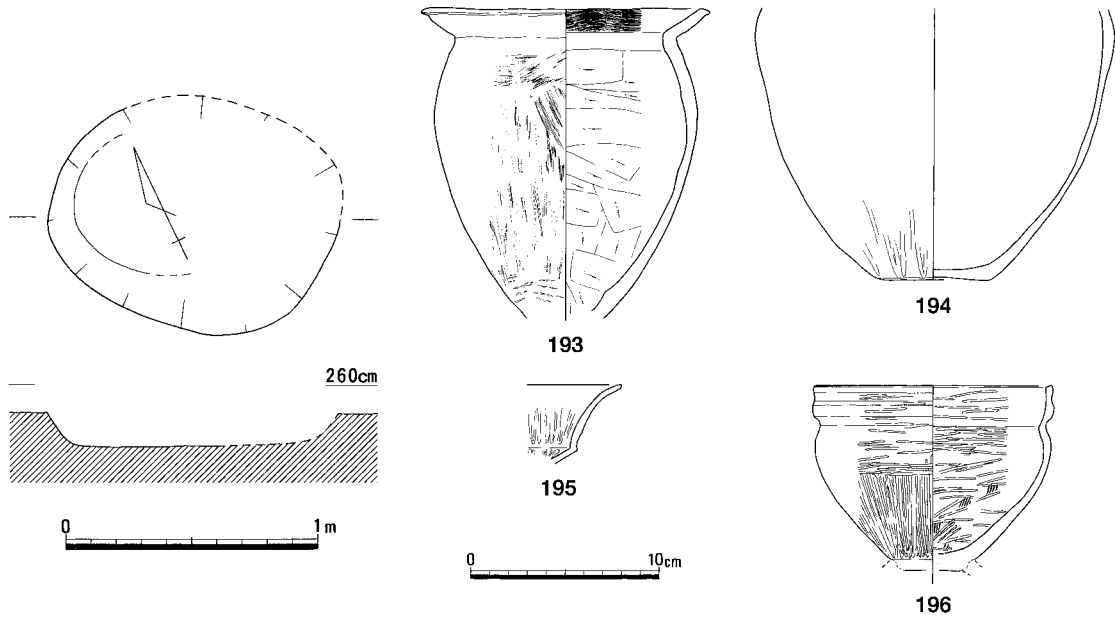
に切られて全形をとどめないが、楕円形の土壙と推定される。現存する長径は110cm、検出面からの深さは38cmを測る。埋土中から甕193・194、高杯195、台付鉢196などが出土している。193の甕は外面にタタキメの痕跡がわずかに残っている。

この土壙の時期は、出土遺物から判断して弥・後・IVに位置づけられよう。

(岡本)



第102図 土壙2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第103図 土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

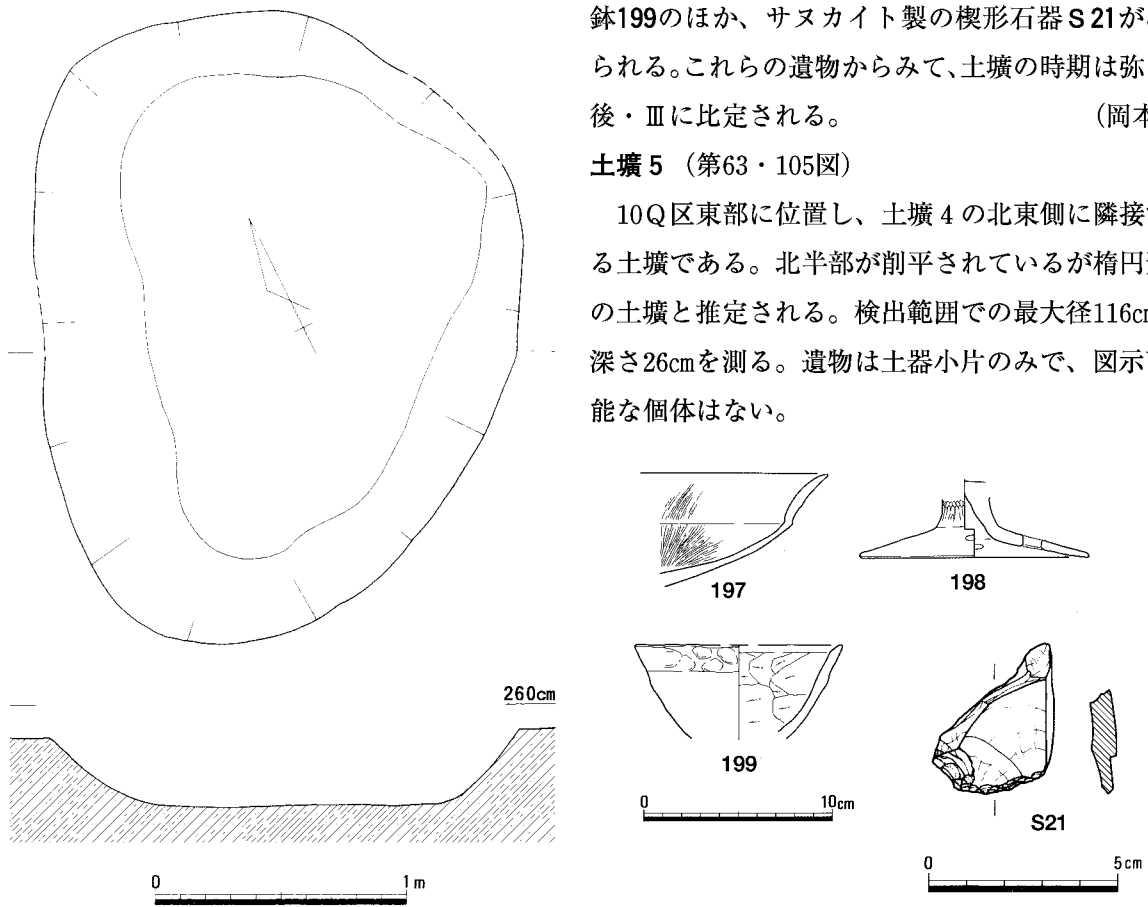
土壌4 (第63・104図)

10Q区東部に位置し、土壌3の東方、土壌5の南西に隣接する。平面形は不整な楕円形を呈し、長径252cm、短径187cm、検出面からの深さ31cmを測る大規模な土壌である。

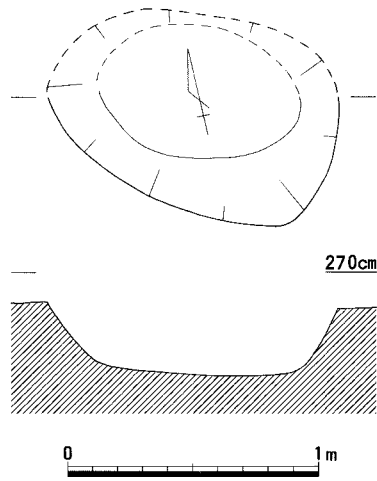
出土遺物は規模の割に少なく、高杯197・198、鉢199のほか、サヌカイト製の楔形石器S21がみられる。これらの遺物からみて、土壌の時期は弥・後・Ⅲに比定される。(岡本)

土壌5 (第63・105図)

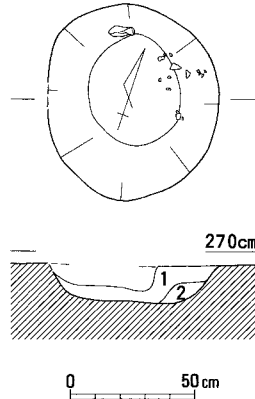
10Q区東部に位置し、土壌4の北東側に隣接する土壌である。北半部が削平されているが楕円形の土壌と推定される。検出範囲での最大径116cm、深さ26cmを測る。遺物は土器小片のみで、図示可能な個体はない。



第104図 土壌4 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

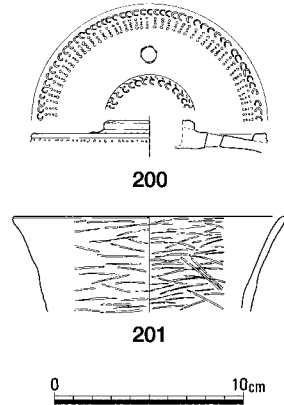


第105図 土壌 5 (1/30)



- 1 灰褐色粘質土 7.5YR5/2
- 2 灰黄色粘質土 2.5Y7/2

第106図 土壌 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

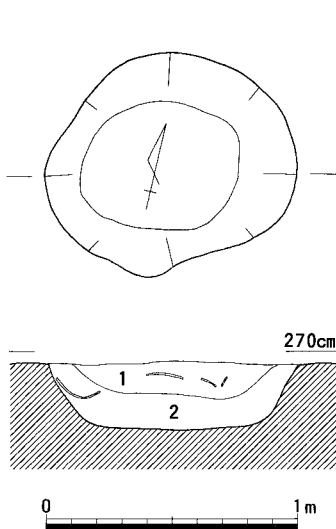


時期の特定は難しいが、出土遺物や埋土からみて弥生後期の範囲にはおさまるとされる。(岡本) 土壌 6 (第63・106図)

10Q区の東側中央部に位置する。平面形は円形を呈し、長軸76cm、短軸68cmを測る。断面形はA-a形で、深さは15cmである。上面には焼土塊が散在しており、第1層には炭化物も多く認められた。焼土塊は拳大から細片まで大きさは様々であった。200は装飾高杯の脚部であり、外面裾部には半裁竹管文と刺突文、中央部には半裁竹管文と列点文が円周している。201は弥・後・Ⅳの高杯の口縁部であり、深身でわずかに外反する。本土壌の時期は弥・後・Ⅳに属すると考えられる。(米田)

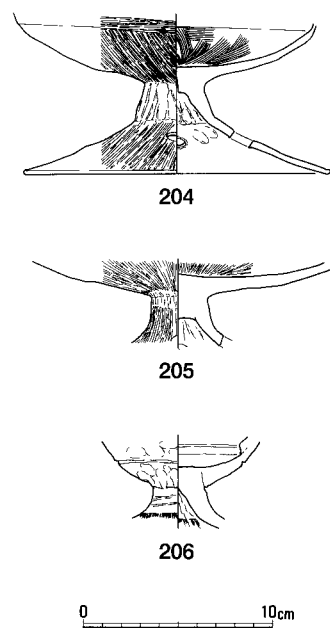
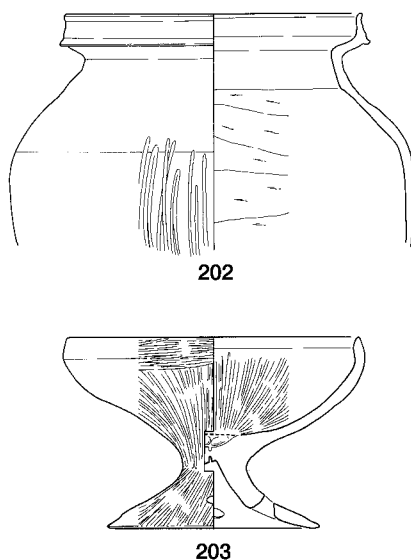
土壌 7 (第63・107図)

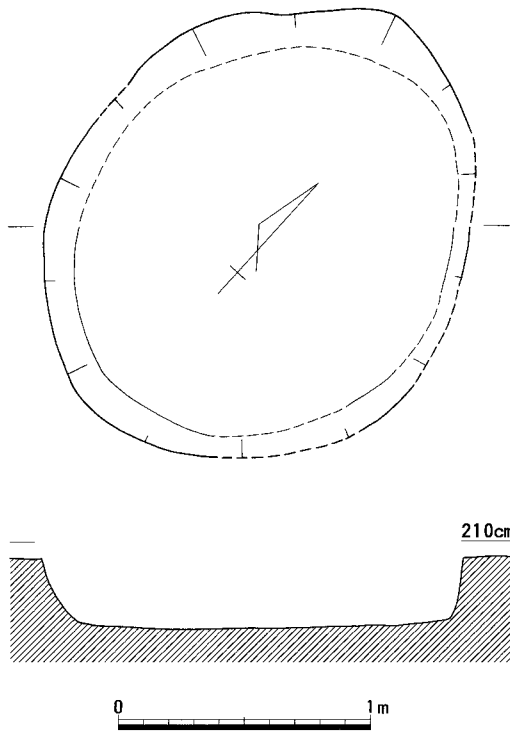
10Q区の東側中央部に位置する。平面は長軸100cm、短軸82cmを測り、不整楕円形を呈す。断面形はA-a形で、深さは27cmを測る。層位は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。土器は埋土上位から比較的多く出土している。202は甕であり、口縁部が上方に拡張され、退化した凹線文が施されて



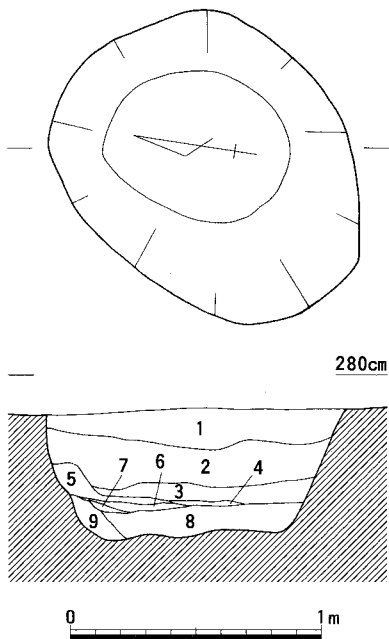
- 1 灰褐色粘質土 7.5YR5/2
- 2 灰黄色粘質土 2.5Y7/2

第107図 土壌 7 (1/30)・出土遺物 (1/4)



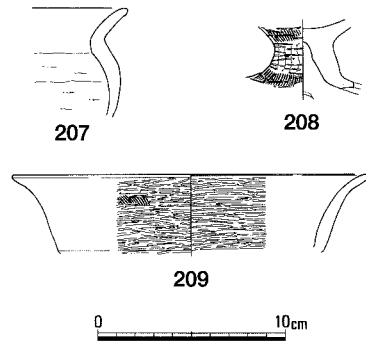


第108図 土壌 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2
- 2 灰黄色粘質土 2.5Y6/2
- 3 にぶい黄色粘質細砂 2.5Y6/4
- 4 褐灰色粘質土 10YR5/1
- 5 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 6 灰黄色粘質土 2.5Y6/2
- 7 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3
- 8 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- 9 灰黄褐色粘質土 10YR4/2

第109図 土壌 9 (1/30)



いる。203～205は精製の高杯であり、短脚で、杯部が碗形を呈する。206は手捏ねの高杯であり、小型で外面に指オサエの痕跡が残る。土壌の時期は弥・後・Ⅳに比定できる。(米田)

土壌 8 (第63・108図)

10Q区東部に位置し、土壌11・12の北東側に隣接する。平面形は円に近い楕円形を呈し、長径198cm、短径163cm、深さ28cmを測る。この土壌の埋没後、重複する位置に袋状土壌6が掘削されていたため、両者の埋土の区別は困難であった。壁面は急傾斜で落ち込み、底面はほぼ平坦である。埋土中から土器片が少量出土した。土壌の時期は、出土した高杯208・209からは弥・後・Ⅲに位置づけられるが、調査時に袋状土壌6から混入した可能性も排除できない。(岡本)

土壌 9 (第63・109図)

10Q区南東部に位置し、土壌10の埋没後にその南端部を切って掘削された不整な楕円形の土壌である。規模は、長径130cm、短径105cm、深さ51cmを測る。壁面の傾斜は急で、底面には緩やかな起伏が認められた。各層には炭化米が散発的に含まれ、特に第4・7層には比較的多く認められたが、本来伴うものではなく土壌10に含まれる炭化米が混入した結果と考えられる。埋土中から土器小片が少量出土しているが、図示可能な個体はなかった。

この遺構の時期は断定しがたいが、少量の出土遺物や土壌10との関係から判断して弥・後・Ⅳに位置づけておきたい。(岡本)

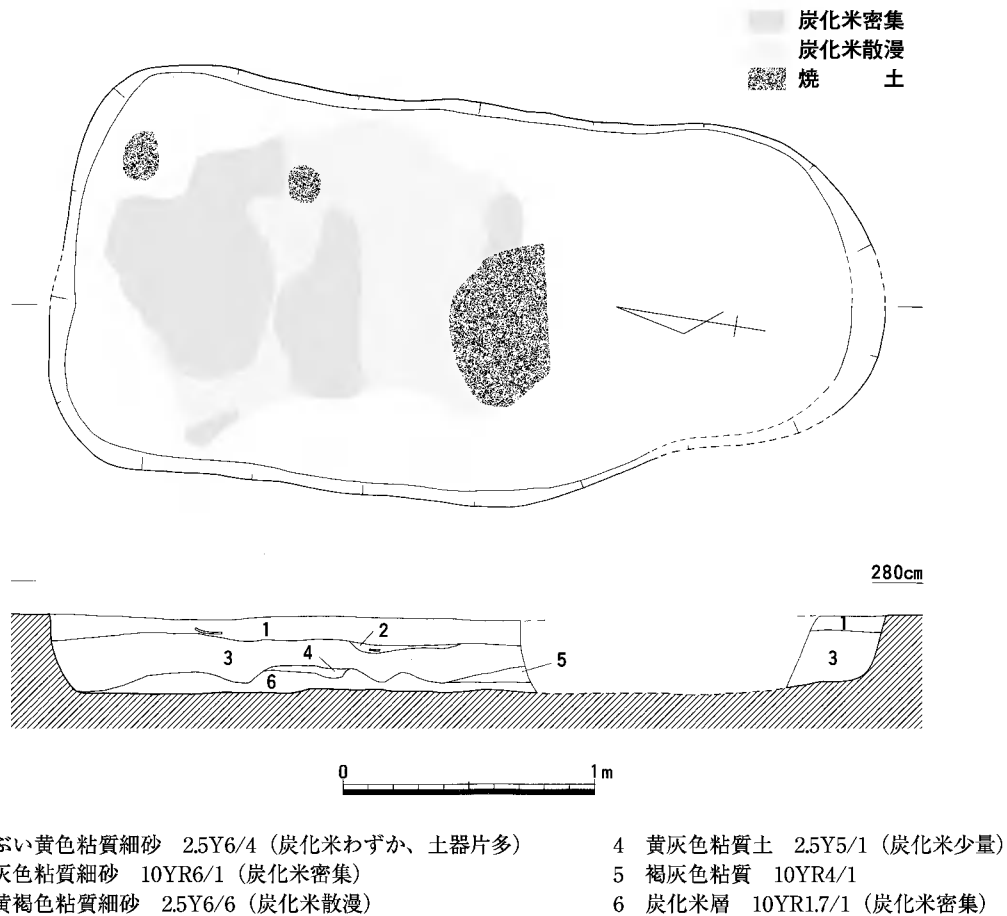
土壌10 (第63・110・111図、図版12・13)

10Q区南東部に位置する大型の土壌である。竪穴住居2の東端に接しており、切り合い関係から本土壌のほうが新しい。また、南端部は土壌9によって破壊されている。平面形はいびつな長方形で、幅は北側ほど広くなり北端部は隅丸方形を呈する。北辺および東西両辺はほぼ直線的であるのに対し、南端部は円弧状を呈している。規模は、長さ324cm、北端部の最大幅160cm、検出面からの残存深さ31cmを測る。壁面の傾斜は垂直に近く、底面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で特別な構造物の存在は認められなかった。

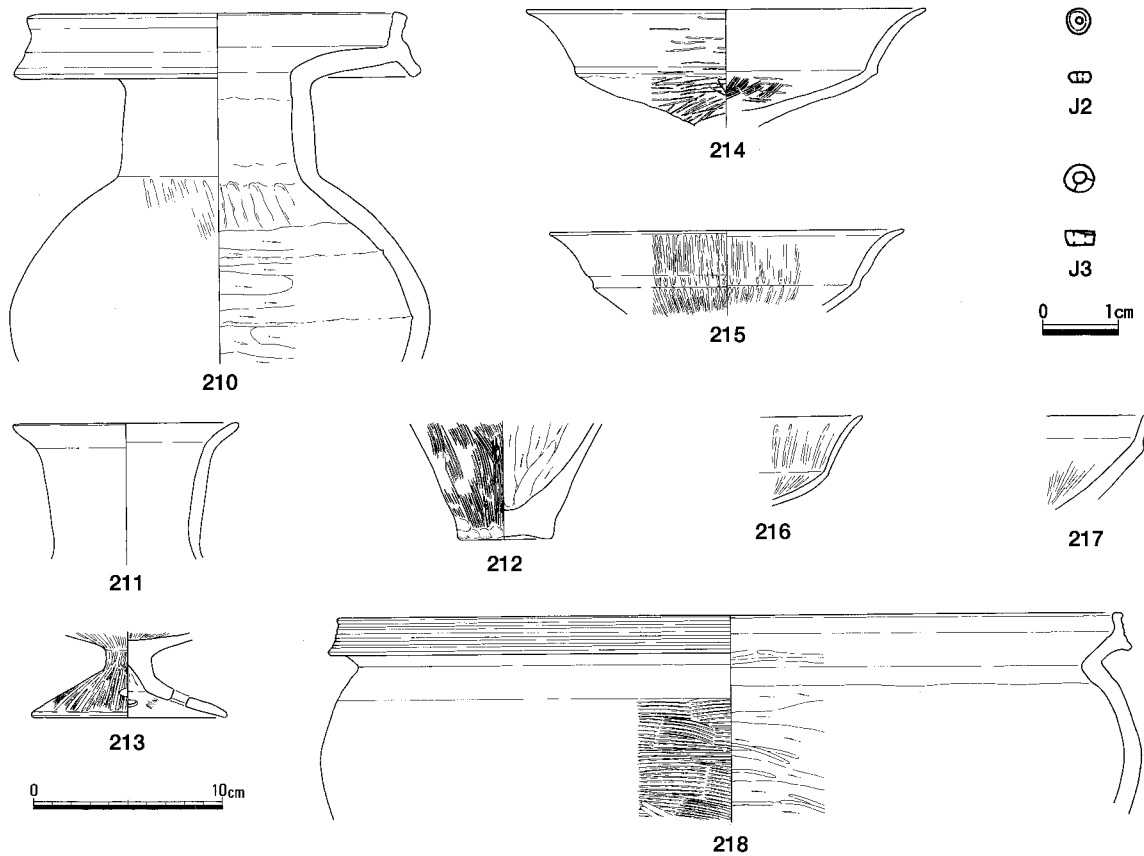
さて、この土壌で特筆すべきは埋土中から大量の炭化米が出土した点である。土壌9の掘削によって欠損する南端の一部分を除いて、土壌内のほぼ全面にわたって分布が認められた。炭化米の密度は層によって一様ではなく、断面図でいうと第2・6層で密度が高く、特に最下層の第6層は土壌をほとんど含まない炭化米密集層である。一方、最上層の第1層では炭化米の密度は散漫であった。また、炭化米に混じって赤褐色を呈する焼土塊も多く出土しており、これは炭化米密集層よりも第3層などむしろ土壌が中心の層に多く含まれる傾向があった。

炭化米の成因については、燃焼によらずに「黒色化」する可能性も最近指摘されてはいるが、本例に関しては焼土塊の出土という事実を重視し、火災などで炭化した米の廃棄土壌という解釈を現時点では採用しておきたい。

炭化米の調査・整理手順は、まず現地で土ごと袋詰めして持ち帰り、水洗して米粒のみを回収し、



第110図 土壌10 (1/30)



第111図 土壌10出土遺物 (1/4・1/1)

乾燥後に重量および体積を測定した。層ごとの取り上げは行っていないが、大部分は第6層からの出土である。作業の過程で上層部に含まれる若干の炭化米を取りこぼした以外は、ほぼ全量を回収できたとみている。炭化米の総量は、乾燥重量で約14.7kg、体積は約22.7ℓに達する。

出土炭化米は、いずれも粃が脱落した状態であり、肉眼観察では現代のものとよく似た形状であった。うち5点について静岡大学の佐藤洋一郎氏に残存DNAの分析を依頼したところ、熱帯ジャポニカ種が存在するとの結果を受領している。依頼したサンプル数が少なく熱帯と温帯の比率は算定困難だが、一般に畑作性とされる熱帯ジャポニカ種の存在は、水稻と陸稻の併存の可能性を示唆し、当時の稲作農耕の実態を推測するうえで興味深い成果である。今回の分析結果のみで即断はできないものの、稲作即水田という図式にも再考の余地があるのかも知れない。今後の検討課題である。

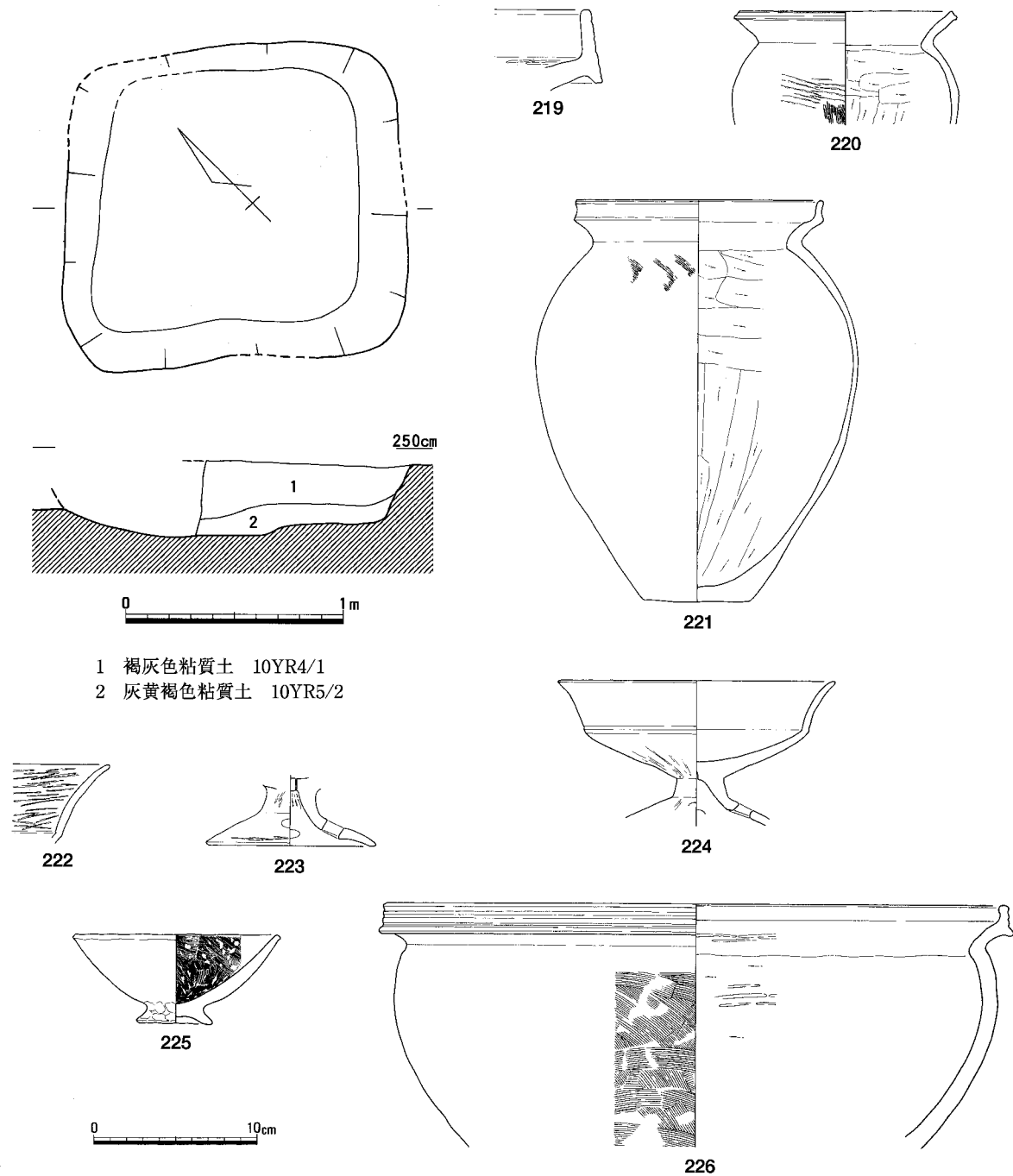
いま一つ注目されるのがいわゆる「ガラス滓」の出土である。これは炭化米を水洗する過程で見いだされた、径数mm程度の褐色を呈する多孔質の細粒である。木戸一博氏の分析では、土・砂・植物灰を出発物質とするもので、百間川遺跡群や津寺遺跡などの出土例とほぼ共通の組成とのことであった。この物質の正体は未だ不明で、ガラス生産と直結させる考えには近年疑義が呈されている。

埋土中からの出土土器を第111図に示した。210・211が壺、212が甕、213～216が高杯、217・218が鉢である。また、水色を呈するガラス小玉J2・3も出土している。以上の出土遺物からみて、この土壌の埋没した時期は弥・後・Ⅲに位置づけられよう。

なお、本土壌の北側約4.5mにおいて、やはり埋土下層に多量の炭化米を包含する土壌67が検出されているが、出土土器からは古墳時代前期に位置づけられるため同時存在は考えにくい。(岡本)

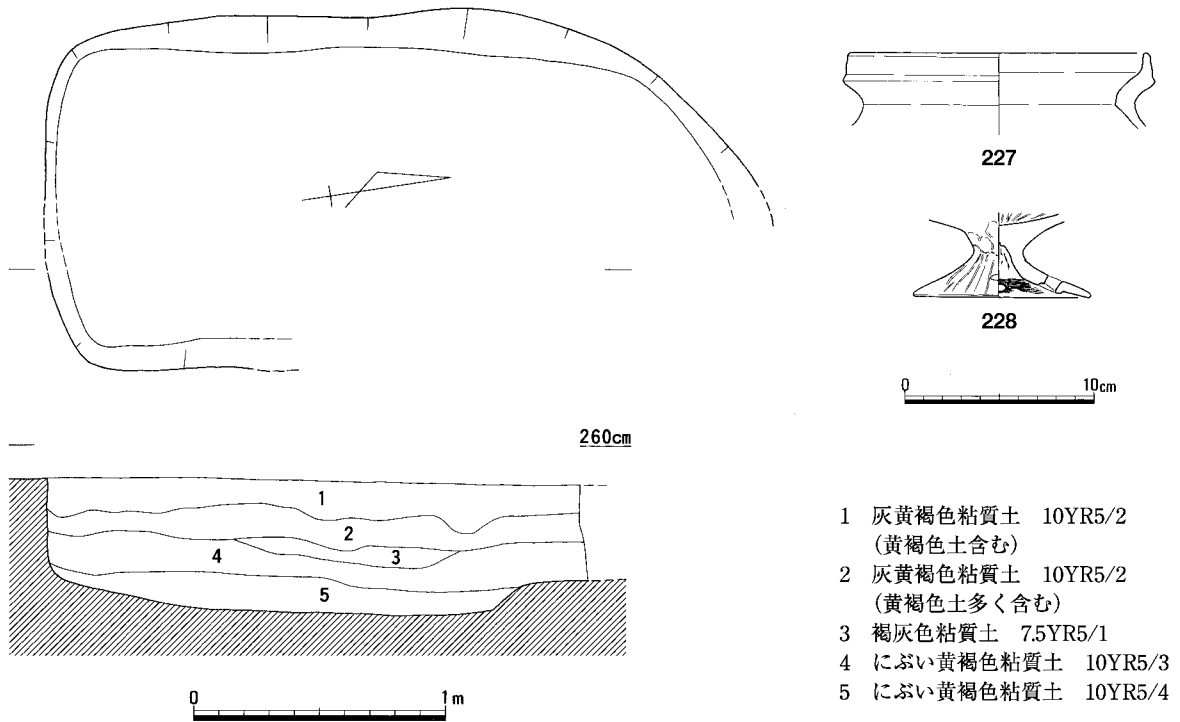
土壌11 (第63・112図)

10Q区の東側中央部に位置し、土壌12を切っている。平面は方形を呈し、一辺143~158cmを測る。断面形はA-b形で、深さは34cmある。遺物は弥生土器が多く出土しており、器種が豊富である。219は長頸壺の口縁部であり、外面には擬凹線文を施す。220の甕は「く」の字に外反する口縁部を有し、外面にはタタキメによって整形されている。221は上方に拡張する口縁部をもつ甕である。222~224は弥・後・Ⅳの高杯であり、口縁部が外反し、短脚である。225は小型の鉢で、脚台がつく。226は大型の鉢であり、口縁部が上方に拡張し、擬凹線文が施されている。219・220は弥・後・Ⅲの可能性はあるが、221~226は弥・後・Ⅳの時期に属する。(米田)



- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR5/2

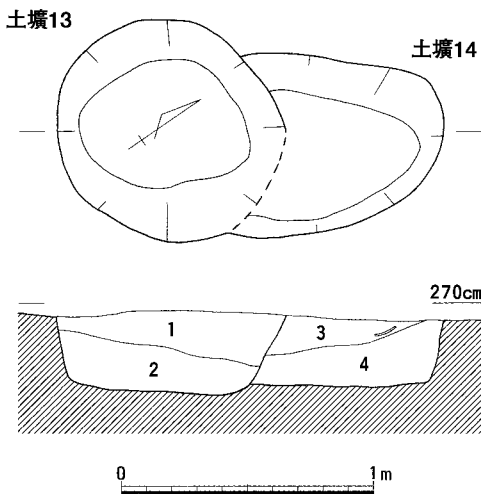
第112図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第113図 土壌12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌12 (第63・113図)

10Q区の東側中央部に位置し、土壌11に切られている。平面は不整長方形に近く、長軸282cm、短軸131cmを測る。断面形はB-b形で、深さは53cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は5層に分層でき、いずれも水平に堆積する。出土遺物は少なく、図示できたものはわずかであった。227は甕の口縁部、228は高杯の脚部であり、ともに弥・後・IVに比定される。前述した土壌11も弥・後・IVに属するが、層位による新旧関係では確実に本土壌が土壌11より古い。(米田)



- 1 褐灰色粘質土 7.5YR4/1 (炭化物含む)
- 2 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 (炭化物含む)
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR5/2

第114図 土壌13・14 (1/30)

土壌13 (第63・114・115図)

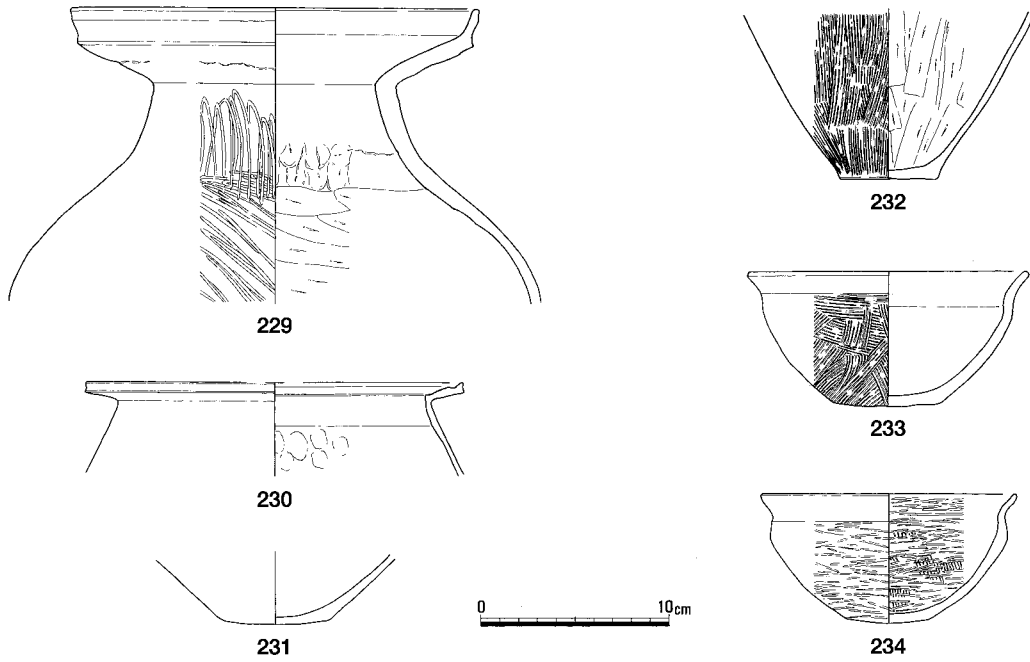
10Q区南東部に位置する、ほぼ円形を呈する土壌である。切り合い関係から隣接する土壌14・15よりも新しい。長径90cm、短径84cm、深さ33cmを測り、壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。出土遺物には壺229、甕230~232、鉢233・234などがある。230の甕は讃岐地方からの搬入土器で、口縁端部内面に段が作り出されている。

土壌の時期は以上の出土遺物により、弥・後・IIIに比定される。(岡本)

土壌14 (第63・114図)

10Q区南東部に所在し、西側を重複する土壌13によって切られた、楕円形と推定される土壌である。検出面での幅73cm、深さ27cmを測る。

埋土中から土器小片が出土しているが、図示可能



第115図 土壙13出土遺物 (1/4)

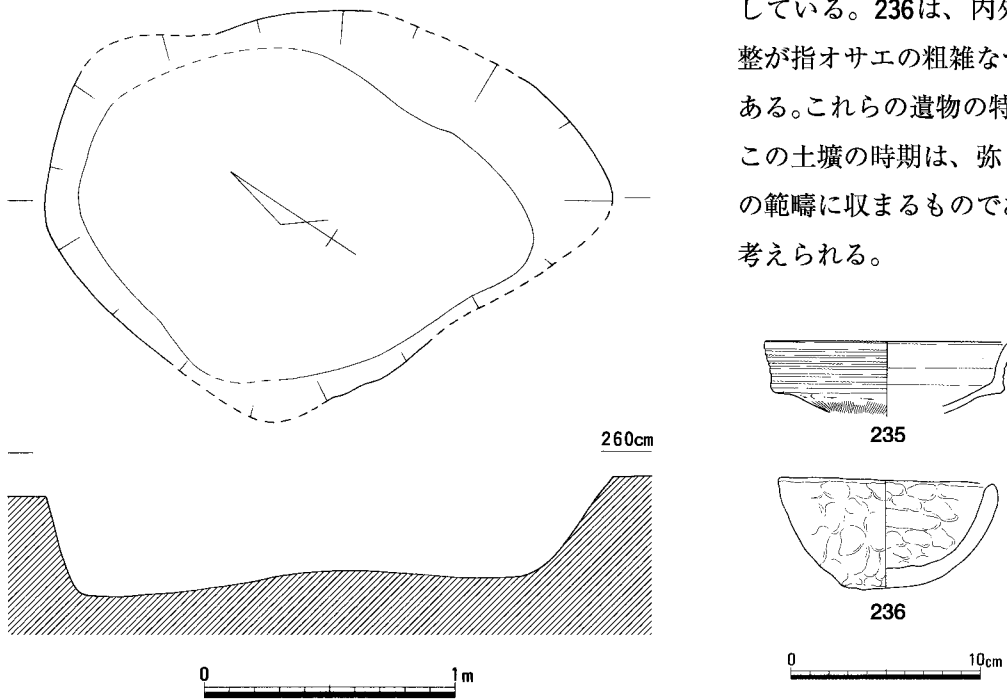
な個体はなかった。したがって土壙の時期については確言できず、土壙13との関係から弥生時代後期後半の範囲と推測している。 (岡本)

土壙15 (第63・116図)

3区10Qで検出した、長径228cm、短径162cmを測る、不整形の土壙である。深さは36cmを測るものである。断面の形状は中央部がやや膨らんでおり、壁面の立ち上がりは急であるといえる。

出土遺物であるが、壺235・鉢236がある。235は口縁部分で、外面には凹線文が巡り、上方に直立

している。236は、内外面の調整が指オサエの粗雑な作りである。これらの遺物の特徴から、この土壙の時期は、弥・後・Ⅳの範疇に収まるものであろうと考えられる。 (時實)



第116図 土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙16 (第63・117図)

10Q区南東部に位置する土壙である。北半部が後世の遺構によって大幅に欠損しているため、本来の規模・形状は不明であるが、残存部分から判断して長径90cm、短径80cm程度の楕円形の土壙と推測される。検出面からの深さは最大で53cmを測る。

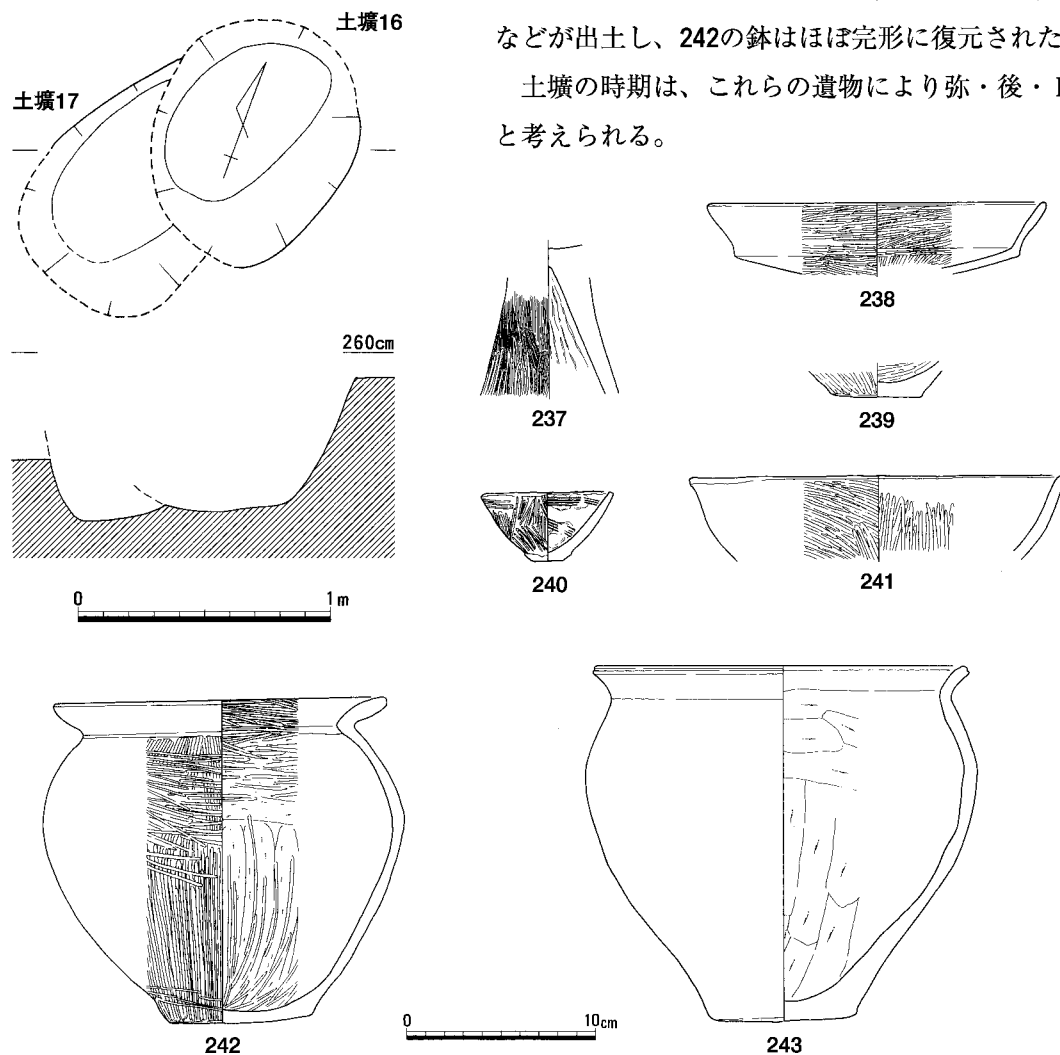
出土遺物には、高杯237・238、鉢240などがみられる。これらの遺物から、土壙の時期は弥・後・Ⅱと考えられる。 (岡本)

土壙17 (第63・117図)

10Q区南東部に位置する。東側を土壙16、西側を別の遺構によって破壊されているため本来の規模・形状をとどめないが、残存部分からみて楕円形の土壙ではないかと推測される。検出面からの深さは

最大で56cmを測る。埋土中から甕底部239、鉢241～243などが出土し、242の鉢はほぼ完形に復元された。

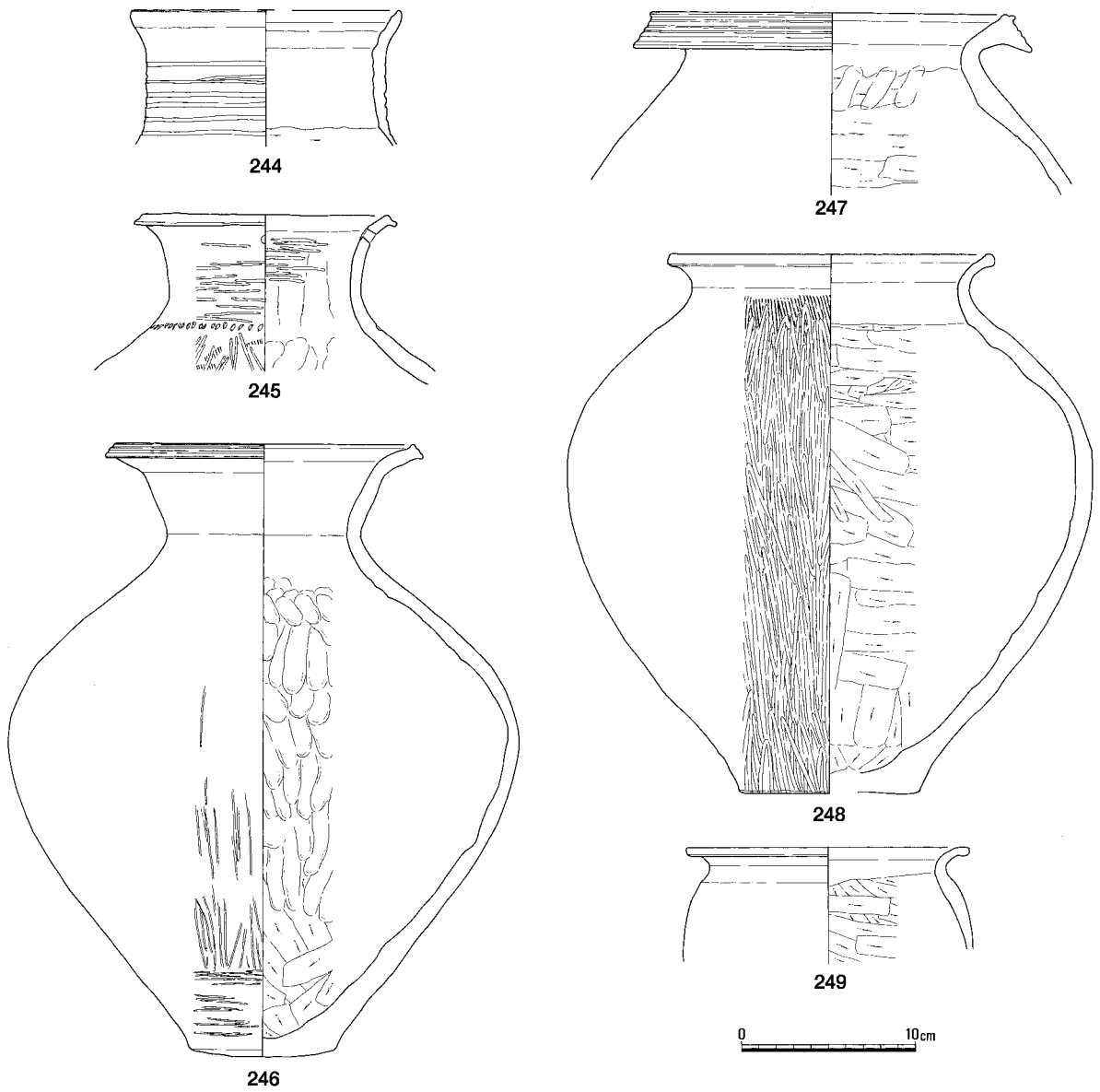
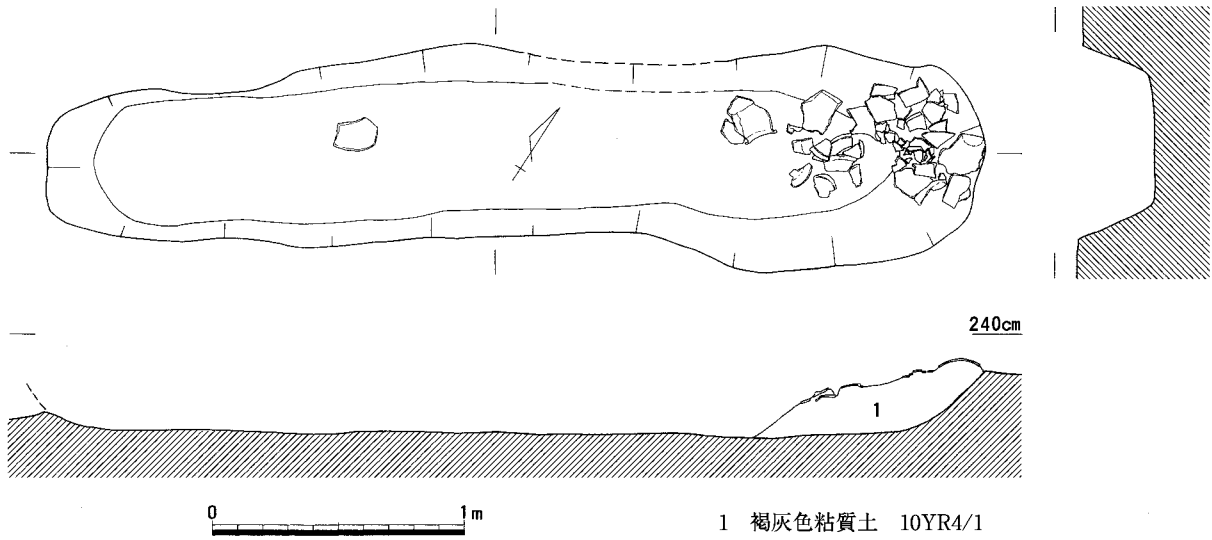
土壙の時期は、これらの遺物により弥・後・Ⅱになると考えられる。 (岡本)



第117図 土壙16・17 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙18 (第63・118・119図、図版13)

10Q区の南東部に位置し、住居5に切られる。平面は長軸373cm、短軸77cmを測り、溝状を呈している。断面形は逆台形(A-a形)で、深さは25cmほど残存していた。残存状況が良好であった土壙東側において確認できた埋土は1層のみである。土壙東端では土器片が集中し、底面から約20cmほど高い位置で検出したことから、土壙埋没後に廃棄されたと理解できる。また土器片の一群は、土壙の断面

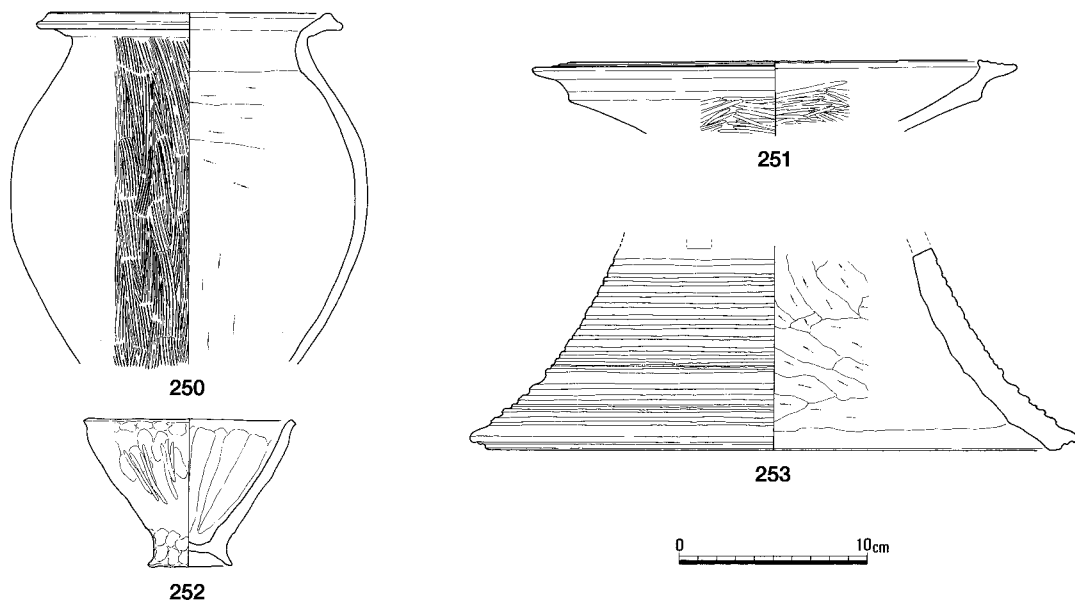


第118図 土壙18 (1/30)・出土遺物① (1/4)

形に沿うように、肩部の方は高いレベルで検出でき、土壌の中央部へ向かうほどやや落ち込んだ状態で認められた。土器片の一群はそれぞれの各個体でまとまっており、一群の東部は壺246、中央部は251があるが、土器の大半は破損していた。

出土土器は壺・甕・高杯・鉢・器台の各器種が認められる。244～246は壺である。244は長頸壺で口縁部は欠損しておらず、内面には不明瞭ながら凹線文が施されているように見受けられる。頸部外面にはヘラ描きによる平行沈線文を有す。長頸壺の初期的な様相を示す土器と考えられる。245は広口壺で、口縁部を屈曲させ、口縁下端部をわずかに外方に拡張している。外面の頸部と肩部の境に列点文を施す。246は短頸広口壺であり、口縁部は大きく外方へ開き、胴部は「く」の字状に張り、重心がほぼ中央に位置する。外面調整は2方向のヘラミガキ。内面は底部付近のみヘラケズリで、頸部以下は指オサエの痕跡が顕著に残る。247～250は甕である。247は口縁下端部を拡張し、退化凹線文を施す。248は大型甕で、口縁端部を丸くおさめ、胴部がやや球形を呈す。外面調整はハケメの後、縦方向のヘラミガキが丁寧に施されている。内面は頸部までヘラケズリがなされている。249は小型甕で、口縁部を外反させ、端部を丸くおさめる。250は口縁下端部を外方へ拡張し、1条の退化凹線文を施しており、肩部は張らない。251は高杯で、杯部から稜をもたせて口縁をわずかに外傾させ、端部に4条の凹線文を施している。内外面は丁寧にヘラミガキされている。252は鉢であり、上げ底で、杯部が逆「ハ」の字に開く。調整は外面にヘラミガキがわずかに施されているものの、内外面の大半には指オサエの痕跡が残る。253は器台の脚部であり、裾部は緩やかに開く。外面には多条の平行沈線を施文し、18条確認できる。また胴部には長方形の透かし孔を配している。

本土壌からは比較的まとまって土器が出土しているが、247・252は弥・後・I、246・251・253は弥・後・I新相、245はII古相、248～250はII新相に大別できる。したがって出土土器の時期幅はあるが、遺構の廃絶時期は弥・後・IIに比定される。(米田)



第119図 土壌18出土遺物② (1/4)

土壌19 (第63・120・121図)

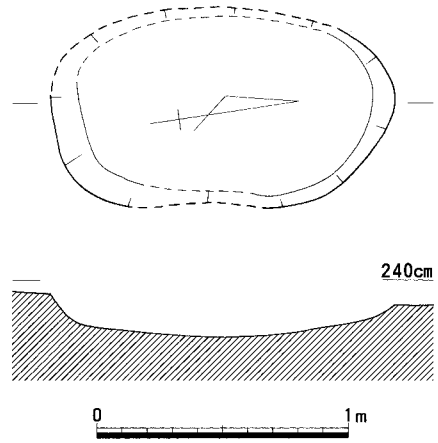
11Q区に位置し、上部は建物の基礎により大きく削平され、攪乱を受けていたため平面を検出するまでに10cm程度掘り下げを行った。そのため、埋土は14cmほどしか残されていないが、平面形は136

×約75cmの楕円形を呈し、底面海拔高218.5cmを測る。平面検出後の埋土は粘性が強い土の単層である。

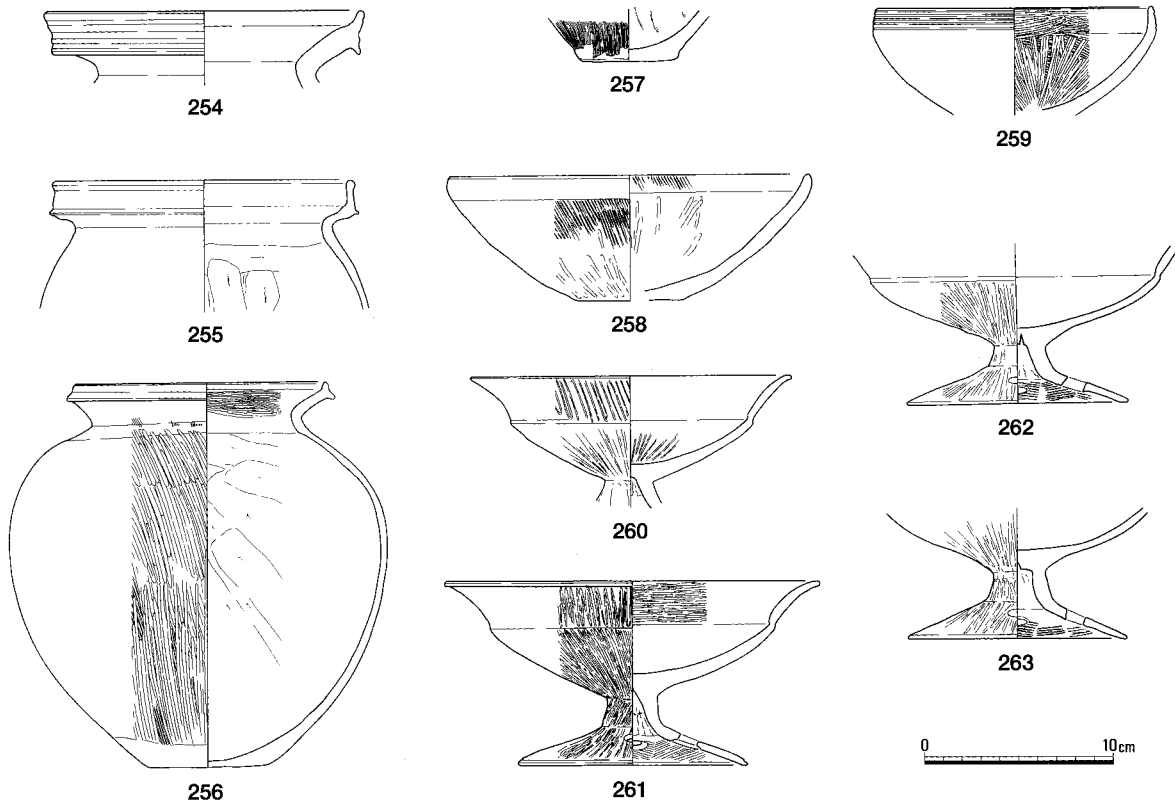
遺物は、検出中に254・256・257・259～261などコンテナ1箱分が出土し、検出後の埋土中からは255・258・262・263など少量の土器が出土した。254・256は壺で、254は口縁端部の上下に拡張した面に擬凹線文がみられる。下端部は斜め下方につまみ出す。256は口縁部を拡張せず強いナデによる面がみられ、口縁内面にはハケメが残る。体部は外面全体に縦方向のハケメが残り、内面は右上方へのヘラケズリが頸部まで施される。底部は明瞭な平底である。255は端部が上方に拡張する甕の口縁で、下端部は水平方向に強くつまみ出され、外面には擬凹線文が施されている。257は甕の底部で明瞭な平底を呈し、外面に縦方向のハケメが残存する。258は鉢で、内外にハケメを施し、口縁端部は尖り気味に内傾し、外面に稜線がみられる。259～263は高杯である。口縁部を拡張する260～263のうち調整の残るものは、いずれも外面縦方向のヘラミガキで、立ち上がり部も縦方向のヘラミガキである。内面は261では立ち上がり部には横方向のヘラミガキがみられる。柱部は高さ約1cmと短く脚端部は丸もしくは尖り気味に収まる。259は杯部が椀形を呈すもので、脚部は欠損しているが他と同じく短脚になると考えられる。口縁部外面に沈線がみられ、端部は尖り気味に垂直方向に短く立ち上がる。内面には口縁部が横方向で体部から底部にかけては縦方向のヘラミガキがみられる。

時期は、出土土器から弥・後・Ⅲと判断される。

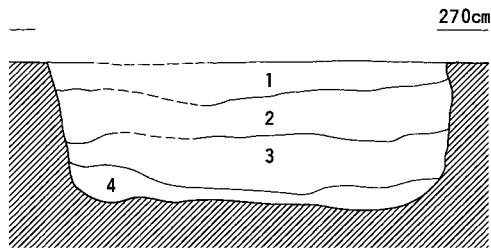
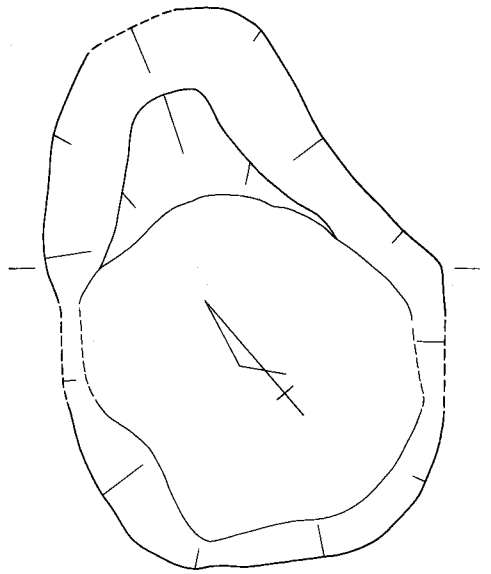
(杉山)



第120図 土壌19 (1/30)



第121図 土壌19出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色微砂 10YR4/1
- 2 黄灰色微砂 2.5Y6/1
- 3 褐灰色微砂 10YR5/1
- 4 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3

第122図 土壌20 (1/30)

土壌21 (第63・123図)

3区11Qの中央部付近、竪穴住居7・8の南東で検出した、平面形が不整円形を呈している土壌である。

規模は、長径163cm、短径144cm、深さ65cmを測るもので、断面の形状は椀状を呈するものである。

埋土のうち第1～5層は、平面では検出することができなかった、竪穴住居7・8の南東側にあたる主柱穴の埋土であった可能性があると考えている。

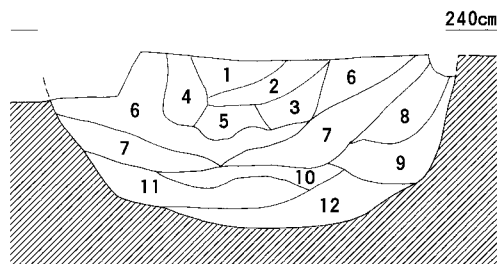
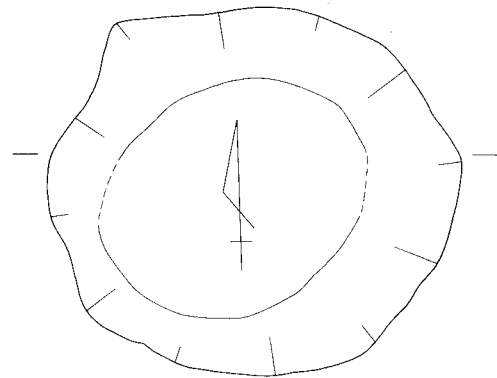
出土遺物は細片のみの出土であったが、時期については弥生後期の範疇に収まると考えている。また、竪穴住居7・8の主柱穴に切

土壌20 (第63・122図)

3区11Qの北西に位置し、竪穴住居73の下層で検出した土壌である。平面形は不整形な楕円形を呈している。規模は、長径221cm、短径149cm、深さ60cmを測るものであった。

断面の形状は、北側に段を有しているものの、立ち上がりは垂直に近く、底面の形状もほぼ水平である。埋土の堆積状況は、4層の微砂とも水平堆積である。

出土遺物は細片であるため、図示はできなかったものの、弥生時代後期のものであると考えられることから、この土壌の時期も、同時期であろうと考えられる。(時實)



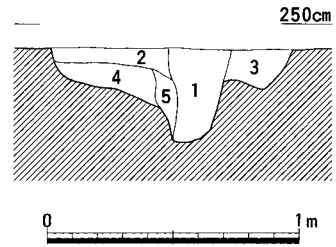
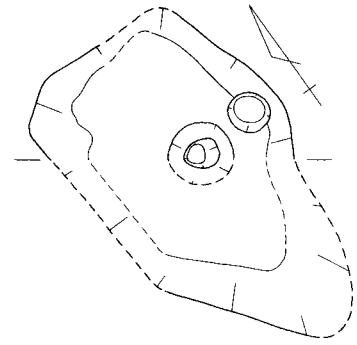
- 1 黄灰色微砂 2.5Y6/1
- 2 灰黄褐色微砂 10YR5/2
- 3 暗褐色微砂 10YR3/3
- 4 黄灰色微砂 2.5Y5/1
- 5 灰黄褐色粘性砂質土 10YR4/2
- 6 明黄褐色細砂 10YR6/6
- 7 にぶい黄褐色細砂 10YR4/3
- 8 灰黄色粗砂 2.5Y7/2
- 9 にぶい黄色粘性砂質土 2.5Y6/2
- 10 灰黄色粘性砂質土 2.5Y6/2
- 11 褐色粘性砂質土 10YR4/4
- 12 にぶい黄橙色粘性砂質土 10YR6/3

第123図 土壌21 (1/30)

られていると考えられることから、弥生時代後期後半以前の時期であるといえるであろう。(時實)

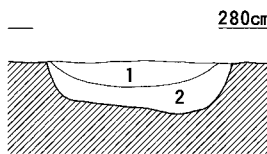
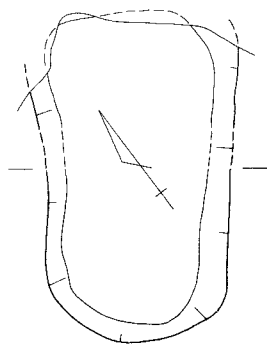
土壙22 (第63・124図)

3区11Qに位置している、不整形の土壙である。規模は長径125cm、短径103cm、深さ36.5cmを測る。土壙中にある東側の柱穴状の落ち込みは、竪穴住居7・8の南西側柱穴の柱痕跡のみを誤認して完掘したものである。竪穴住居7・8に切られていることから、弥生時代後期後半以前の時期のものであると考えられる。(時實)

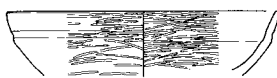


- 1 褐灰色微砂 10YR4/1
- 2 黄灰色微砂 2.5Y6/1
- 3 褐灰色微砂 10YR5/1
- 4 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 5 にぶい黄褐色微砂 10YR5/3

第124図 土壙22 (1/30)



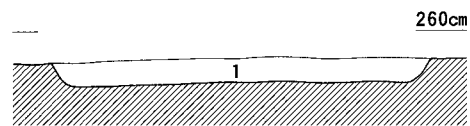
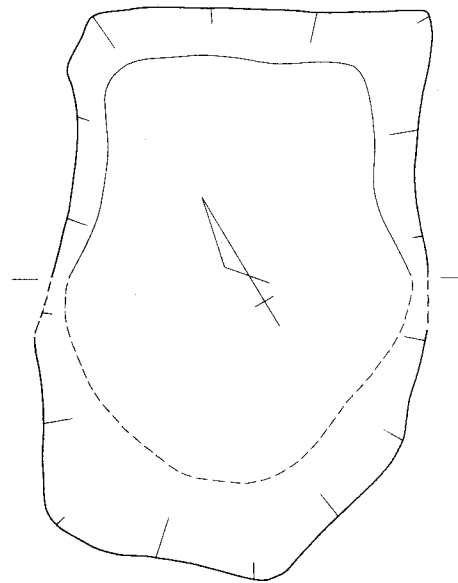
- 1 褐色砂質土 10YR4/4
- 2 黄褐色砂質土 10YR5/6



264



第125図 土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色細砂 10YR4/2

第126図 土壙24 (1/30)

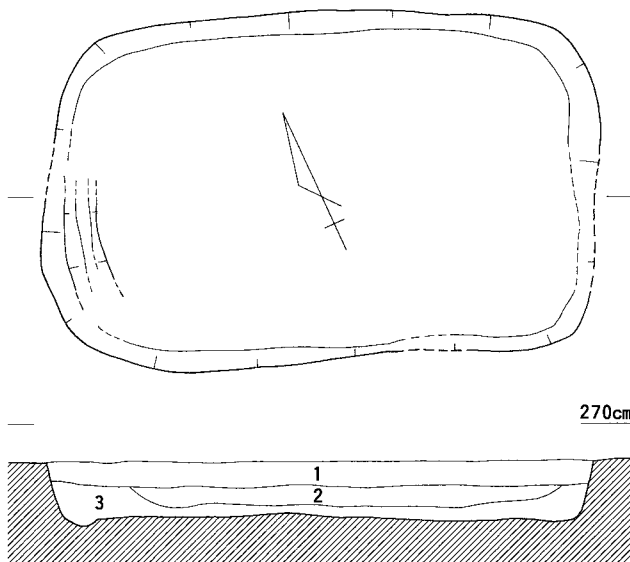
土壙24 (第63・126図)

3区11Pで検出した土壙である。平面形は不整形で、規模は長径220cm、短径152cmを測るものである。断面の形態は浅い皿状を呈しており、深さは10cmと浅く、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色細砂の単一層であった。出土遺物は細片のみでの出土であったが、この土壙の時期は弥生時代後期のものと考えられる。(時實)

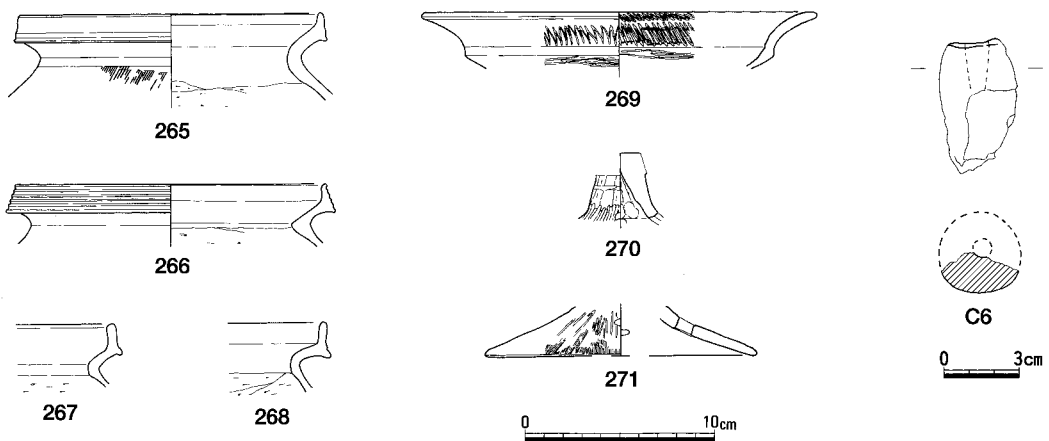
土壙25 (第63・127図)

土壙25は11Q区に位置し、土壙26の北側に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈する。長さは215cm、幅は132cm、深さは25cmを測る。土壙の底面はほぼ水平であるが、土壙底面の西側付近では浅い溝状のものがみられた。この溝はこの部分の約50cmほどの範囲でしか検出されず、その他の箇所では検出することができなかった。土壙25の埋土は褐色を基調とする微砂であり、基本的に水平堆積に近いものであった。埋土中から弥生土器および土製品が出土した。出土した土器はいずれも破片であり、

完形のものは見られなかった。265~268は甕である。いずれも口縁部の破片である。266の口縁部外面には擬凹線文が施されており、口径16.5cmを測る。269は高杯の杯部である。杯部の口縁が大きく外反するタイプの高杯で、口縁部には内外面ともに縦方向のヘラミガキが施されているが、杯底部には横方向のヘラミガキもみられる。270・271は高杯の脚部である。脚裾部では四方向に円形の透かし孔が確認できる。C6は土錘である。残存している長さで5.15cmを測る。これらの出土遺物からこの土壙25は弥生時代後期後半に掘削されたものと考えられるが、その性格等については不明である。(金田)



- 1 褐灰色微砂 7.5YR5/1 3 灰黄褐色微砂 10YR5/2
- 2 灰黄褐色微砂 10YR6/2

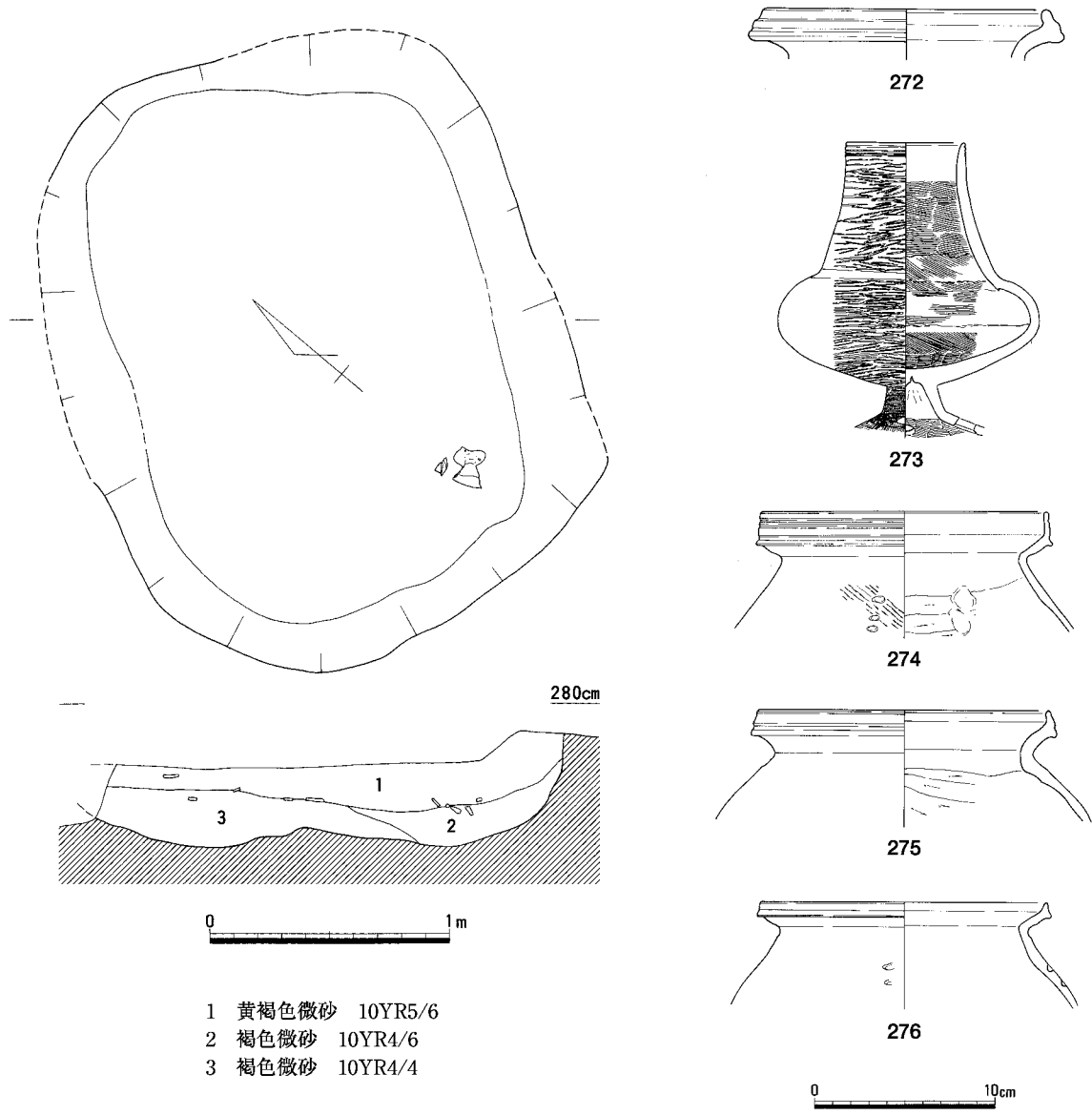


第127図 土壙25 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

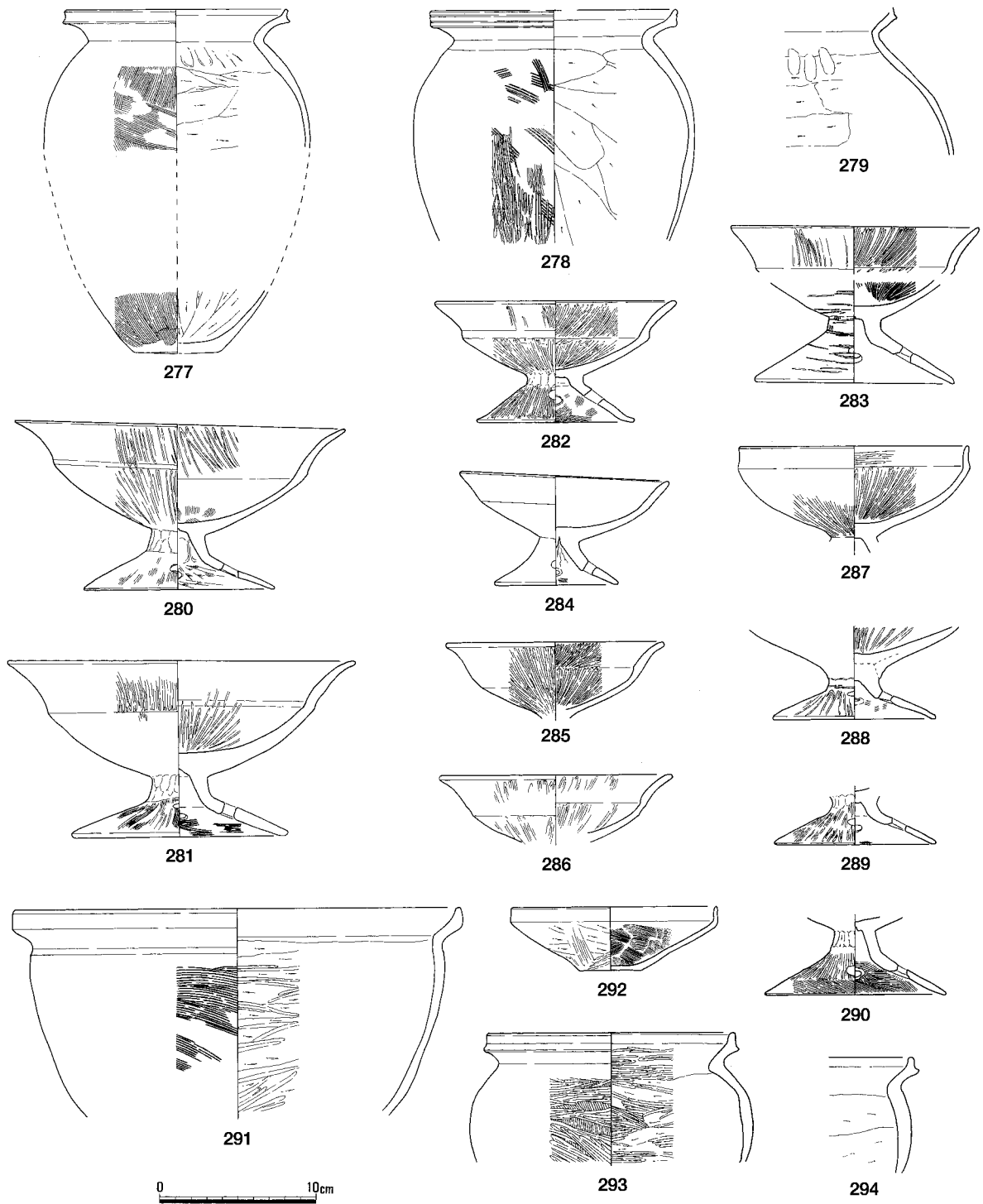
土壙26 (第63・128・129図)

土壙26は11Q区に位置し、土壙の西側は一部、土壙25によって切られている。平面形は楕円形を呈し、長径263cm、短径211cm、深さ約50cmを測る。土壙26内には褐色を基調とする土が堆積していた。土壙の底面は凹凸に富み、平坦面等をなして、整地されている様相はみられなかった。土壙26内からは比較的多くの弥生土器が出土した。出土した土器の大半は破片であったが、そのうちのいくつかは完形に近いものであった。

272は壺の口縁部である。273は台付直口壺である。外面には横方向のヘラミガキ、内面にはハケによる調整が施されている。脚部には4方向の円形の透かし孔をもつ。274～279は甕である。274・275は口縁端部が上方に大きくのびるタイプのものである。274と276の体部には米粒大の圧痕が観察できる。276～278は口縁端部を若干上方につまみ上げたタイプの甕である。280～290は高杯であり、いずれも短脚である。280～286は口縁が外反するタイプでいずれも縦方向を基本とするヘラミガキが施されている。280は比較的大きな杯部をもち、口径21.2cm前後を測る。282～286は口径13.8～15.9cmと



第128図 土壙26 (1/30)・出土遺物① (1/4)



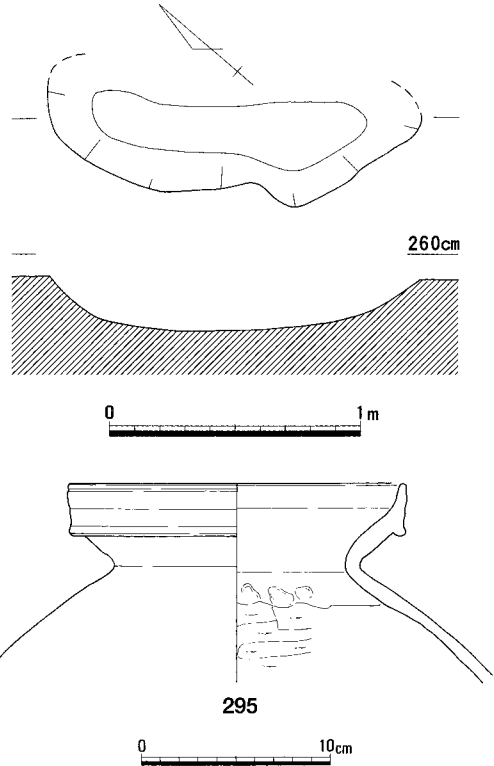
第129図 土壙26出土遺物② (1/4)

やや小さい杯部をもつ。287は椀形の杯部をもつ高杯で、口径14.6cmを測る。291～294は鉢である。291は大型の鉢で、口径28.7cmを測る。外面にはハケメが、内面には横方向のヘラミガキが施されている。292は小型で皿状を呈する鉢である。293は口径16cmを測る鉢で、外面にはハケメののちヘラミガキが、内面には横方向のヘラミガキが施されている。

これらの出土遺物から、この土壙26は弥生時代後期後葉に営まれたものと推測できる。(金田)

土壌27 (第63・130図)

3区11Qに位置している、北側を削平された平面が不整形の土壌である。規模は、長径126cm、残存している短径85cm、深さ20cmを測り、断面形は浅い椀状を呈している。出土遺物には、壺295があり、口縁部は下側にややつまみ出されているが上へ直立している。この遺物から遺構の時期は、弥・後・Ⅳであると考えられる。(時實)



第130図 土壌27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌28 (第63・131図)

11Q区に位置し、竪穴住居36によって西側を切られる。平面は楕円形を呈し、底面海拔高は239cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で、出土遺物は少量の土器があるのみである。

296の甕は口縁端部を強くなでて面をなし、わずかに下方につまみ出す。内面のヘラケズリは頸部よりやや下まで施されており、古い様相を示す。297の高杯は外面の調整は不明だが、内面には縦方向のヘラミガキがみられる。298・299は鉢で、

298の口縁端部は強いナデにより段を有する。299は手捏ね土器で全面に指頭圧痕がみられ、口縁部は強くつまんで薄く尖り気味になっている。

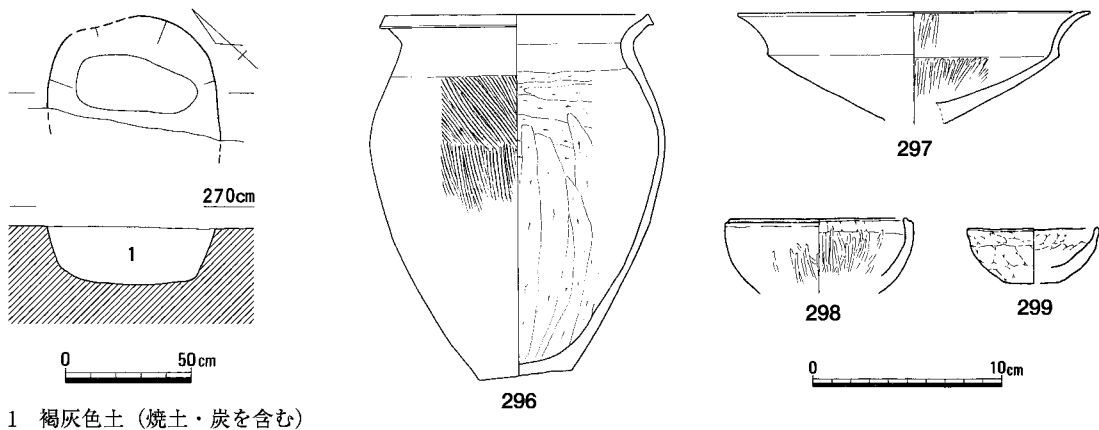
この土壌の時期は、出土遺物から弥・後期中葉と判断される。

(杉山)

土壌29 (第63・132図)

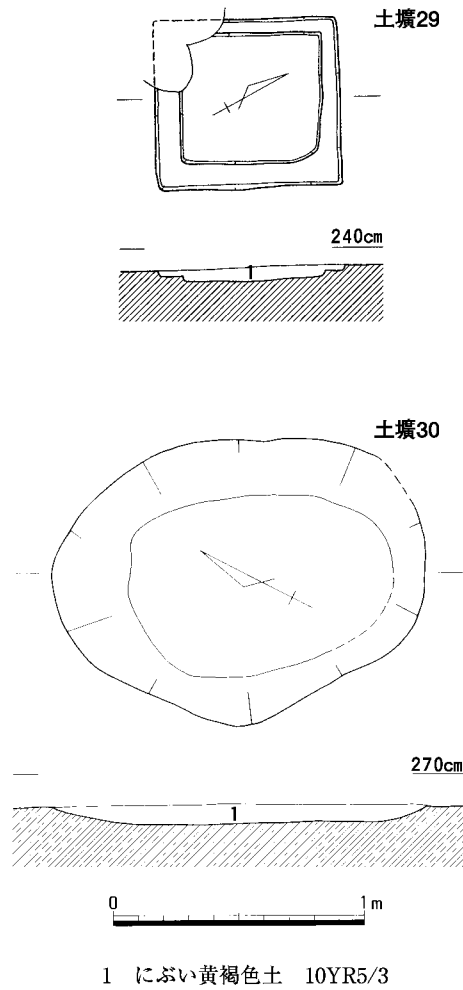
11Q区の竪穴住居36の床下に位置する。73×66cmの方形で、隅は直角を呈する。埋土は6cmと浅く、検出面から約2cm下がった面で56×53cmの方形にさらに一段下がり、底面海拔高は227cmを測る。埋土は褐灰色土の単層で炭や焼土はみられない。床面は水平だが固くしまった状況ではなく、機能は不明である。

出土遺物が小片のため時期の詳細は不明だが、検出状況から弥・後期頃と推察される。(杉山)



1 褐灰色土 (焼土・炭を含む)

第131図 土壌28 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第132図 土壌29・30 (1/30)

土壌30 (第63・132図)

11R区に位置する平面不整楕円形を呈する土壌である。規模は148×66cmで、底面海拔高は251cmを測る。底面は凹凸が顕著で、埋土は単層だが炭・焼土はみられない。

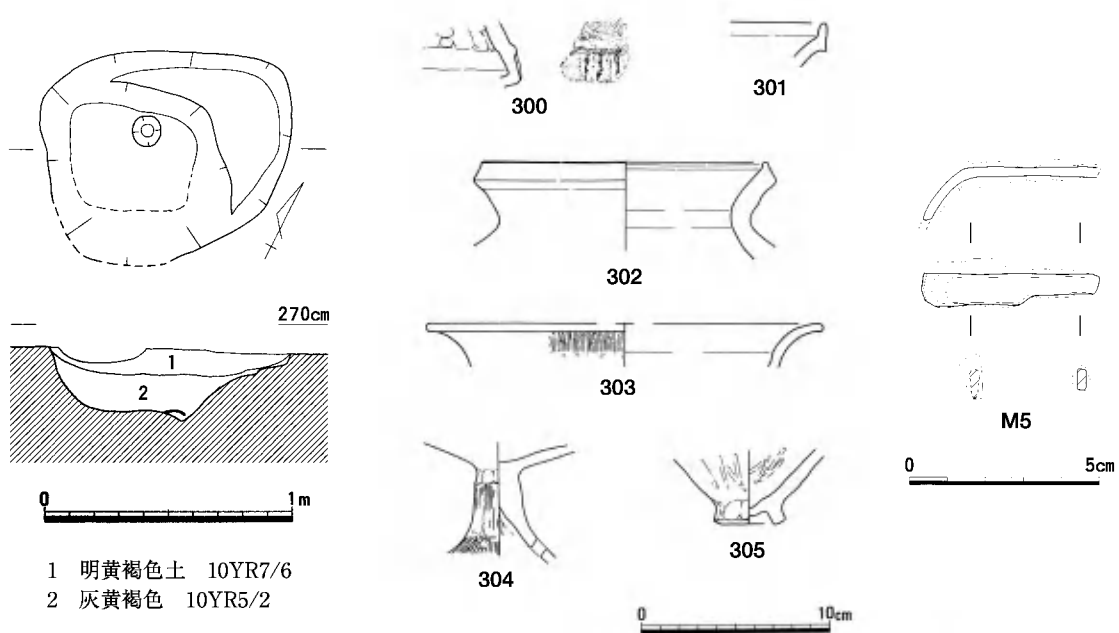
出土遺物は小片の土器があるのみで、時期の詳細は不明だが、検出状況などから判断すると弥・後期頃と考えられる。(杉山)

土壌31 (第63・133図)

11Q区に位置し、竪穴住居4・5と切り合い関係を持つ。平面98×83cmの不整楕円形を呈し、検出面から約6cmほど下がって北東側に段が付き、さらに下がって底面に至る。底面には、径約12cmのピットがみられる。埋土は大きく2層に分かれ、第1層目の底面は段の底面とほぼ一致する。土壌として報告したが、周辺状況から柱穴の可能性も否定できない。

出土遺物は主に第2層から出土しており、300～302は壺、303・304は高杯、305は鉢である。300の体部には棒状の貼付凸帯がある。M5は先端が欠損しているが鉄製の刀子と推察される。

この土壌の時期は、竪穴住居との切り合いや出土遺物の特徴から判断すると弥・後・Ⅱ～Ⅲ頃になると考えられる。(杉山)

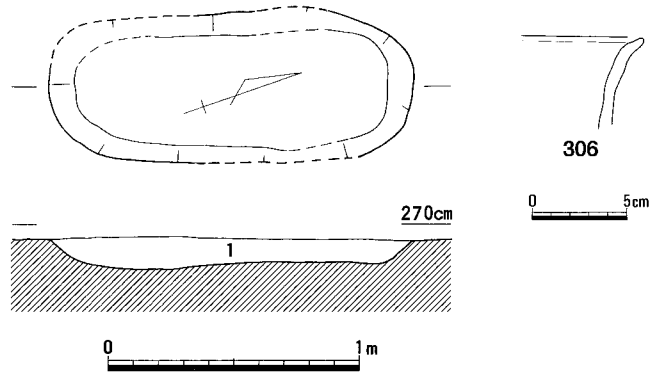


第133図 土壌31 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壙32(第63・134図)

11R区に位置し、土壙33に切られて
いる。平面144×58cmの長楕円形を呈
し、底面海拔高は237cmを測る。底面
は比較的凹凸がみられるが、炭などは
含まれていない。出土遺物は、小片の
土器がわずかにある。309は鉢で内外
ともナデが主体で、外面にはヘラケズ
リがみられる。

時期は、出土土器と周辺の状況から
弥・後・中葉頃と判断される。(杉山)



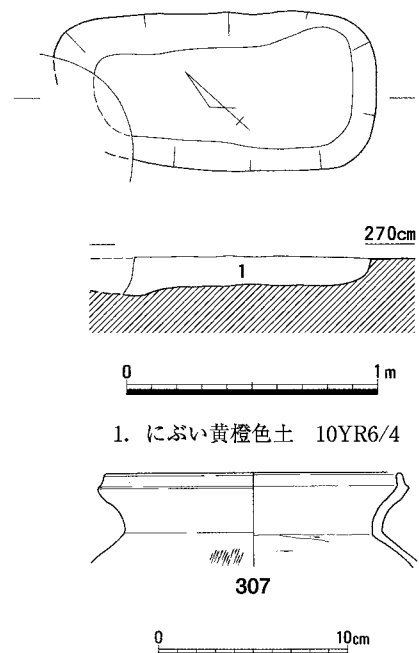
1 褐灰色土 10YR4/1

第134図 土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙33(第63・135図)

11R区に位置し、土壙32を切る。平面は127×57
cmの楕円形で、底面海拔高は250cmを測る。底面は
凹凸が顕著で、北側でやや深くなる。出土遺物は、
土器の小片があるのみで、唯一図示できたものは
307の壺のみである。

時期は、出土遺物と周辺の状況から弥・後・中葉
頃と判断される。(杉山)

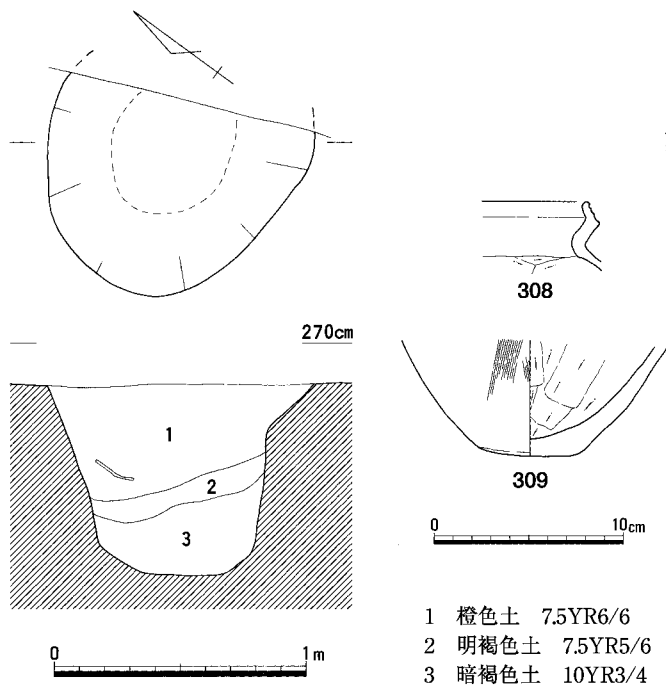


1. にぶい黄橙色土 10YR6/4

第135図 土壙33 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙34 (第63・136図)

土壙34は、3区の東側端の11Rに位置する。竪穴
住居17の北側に位置し、もともと竪穴住居17を切っ



1 橙色土 7.5YR6/6
2 明褐色土 7.5YR5/6
3 暗褐色土 10YR3/4

第136図 土壙34 (1/30)・出土遺物 (1/4)

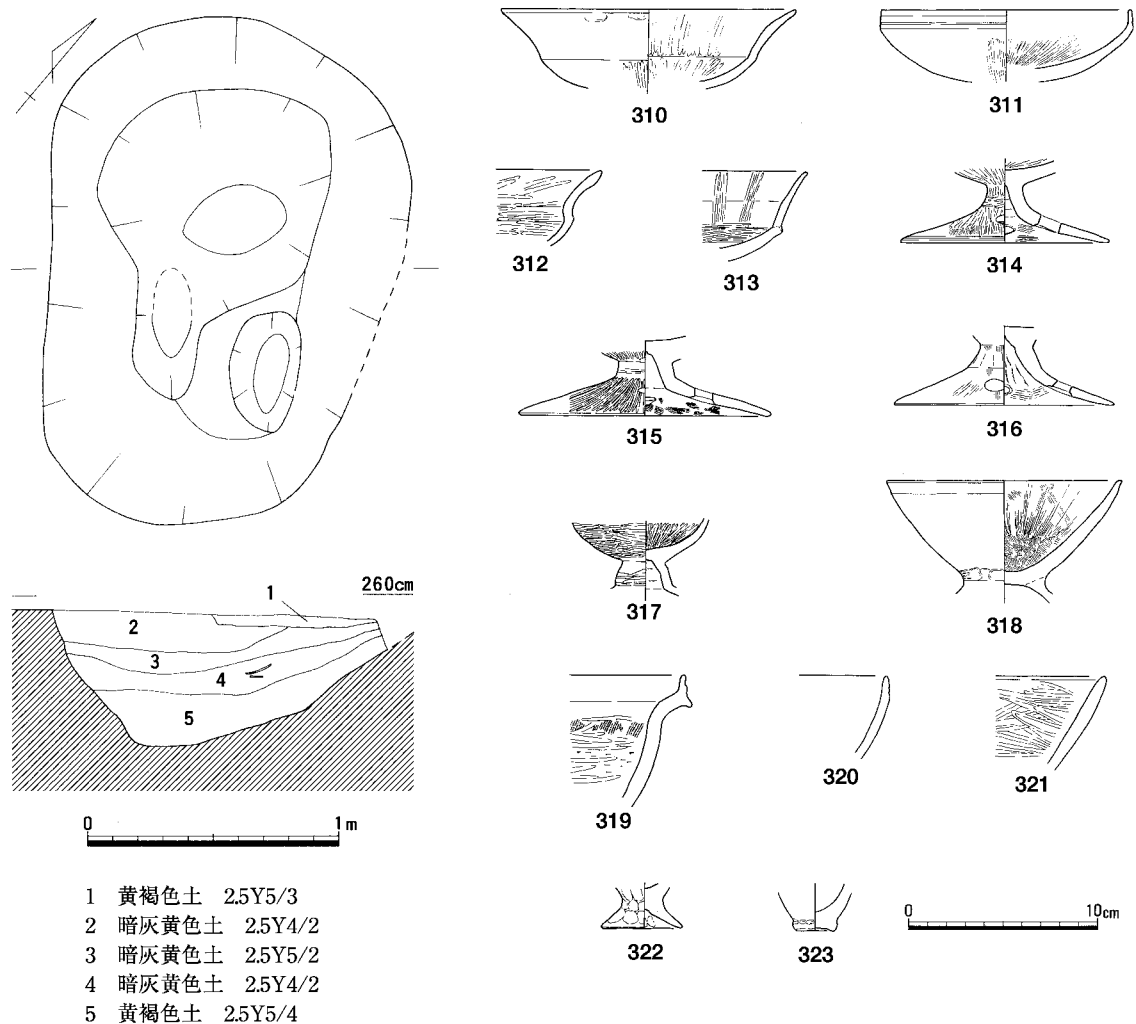
ていたのかもしれない。残存状況は、
東側1/4が調査区外になる。規模は、長
軸長約105cmで、形状は円形を呈する。
深さは検出面から75cmを測り、底面海
拔高は178cm付近である。出土遺物は、
308と309があり、どちらも甕になる。

308は口縁端面に擬凹線3条があり、
弥・後・IVになる。309は底部片であ
るが、底部は尖り底になりわずかしこ
存在しない。この形状はやはり弥・
後・IVになると思われる。(小林)

土壙35 (第63・137図)

土壙35は、3区の東側の11Rに位置する。竪穴住居16と竪穴住居17の間にあり、竪穴住居17とは近接する。土壙の規模は、長軸長200cm、短軸長150cmで平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から53cmを測り、底面の海拔高は200cmである。断面形状は、A-bタイプである。

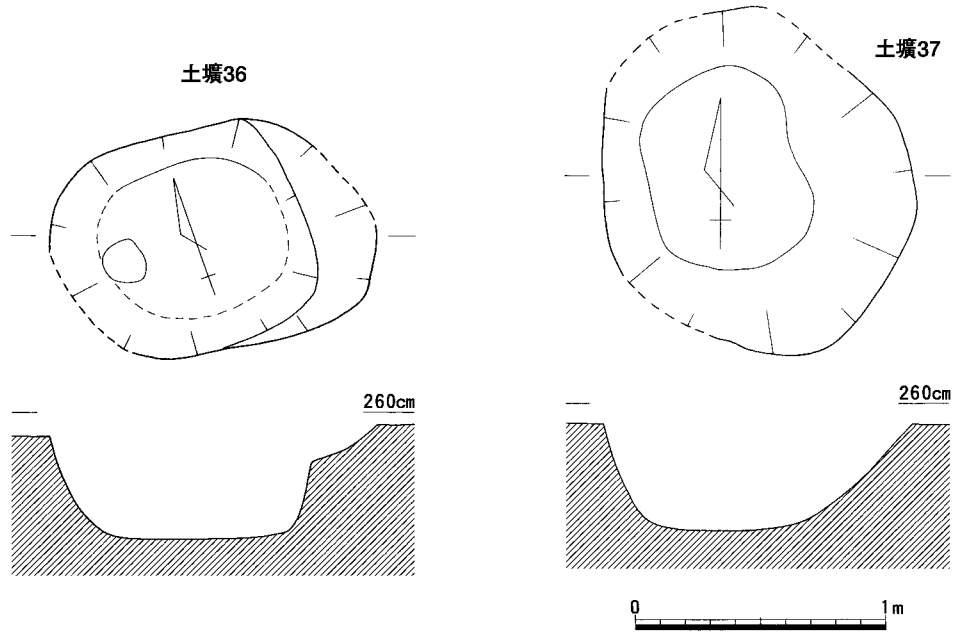
出土遺物は、弥生土器のみであるが、比較的まとまった数が出土する。出土状況は、すべての覆土から万遍なく出土し、特に出土の多い層位はない。310～317は高杯である。口縁部の形状は、外反する310と、内湾しながら外反する312、直気味に外反する313、端面に擬凹線文が2条ある311がある。314～316は脚部で、いずれも短脚である。317はミニチュアの高杯になる。318～321は鉢で、このうち318は脚がつく。319の口縁部は、上下に拡張し、端面には擬凹線が施される。322は製塩土器の脚部で、323はミニチュア土器の脚部である。出土土器の特徴として、高杯や鉢などが大半を占めていて、壺や甕などが全くないことがあげられる。時期は弥・後・Ⅲである。 (小林)



第137図 土壙35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙36 (第63・138図)

土壙36は3区の中央部の南東よりに位置し、11Rにある。竪穴住居16を切る形になり、住居16内の南東側にある。規模は長軸長126cm、短軸長89cmで、平面形状は楕円形になる。確認面からの深さは42cmで底面の海拔高は210cmになり、断面形状はA-bである。時期は弥・後である。 (小林)



第138図 土壙36・37 (1/30)

土壙37 (第63・138図)

土壙37は、3区の中央部の南東よりに位置し、11Rにある。北西側には堅穴住居16が、南東側には土壙38が近接する。規模は長軸長140cm、短軸長124cmで、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から42cmを測り、底面の海拔高は210cmで、断面形状はA-aである。時期は弥・後である。(小林)

土壙38 (第63・139図)

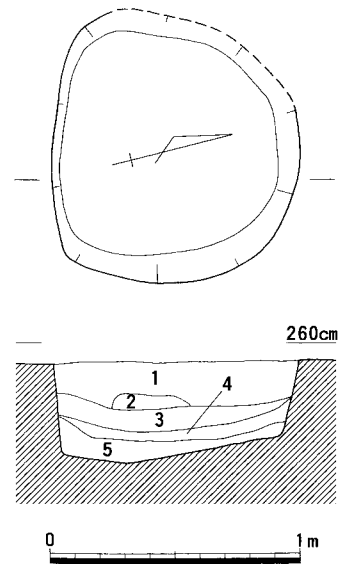
土壙38は、3区の南東側に位置し、11Rにある。北西には土壙37が、東側には土壙39が近接する。規模は長軸長108cm、短軸長97cmで、平面形状は円形を呈する。深さは確認面から41cmを測り、底面の海拔高は212cmで、断面形状はB-aである。覆土はおおむね水平に堆積する。時期は弥・後である。(小林)

土壙39 (第63・140図)

土壙39は、3区の南東側に位置し、11Rにある。東側には土壙38が、北東側には堅穴住居17が近接する。土壙の規模は長軸長121cm、短軸長87cmで、平面形状は楕円形である。確認面からの深さは43cmで、底面の海拔高は213cmである。断面の形状はA-bであり、覆土はおおむね水平に堆積する。出土遺物にはS22があり、叩き石になる。時期は弥・後になる。(小林)

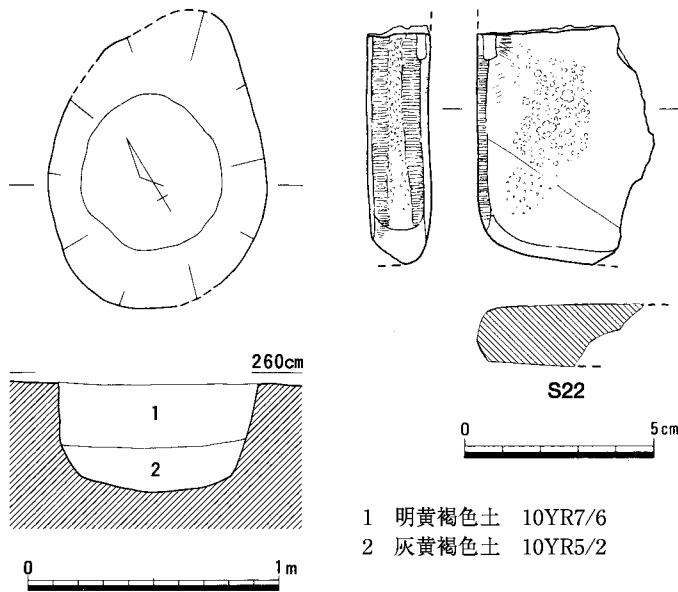
土壙40 (第63・141図)

土壙40は、3区の南東側に位置し、11Rにある。北西側には堅穴住居17が近接し、西側には土壙39が存在する。残存状況は、東半分が調査区外になり不明である。規模は長軸長約178cmで、平面形状は円形になるとと思われる。確認面からの深さは16cmで、海拔高は239cmになる。時期は弥・後である。(小林)



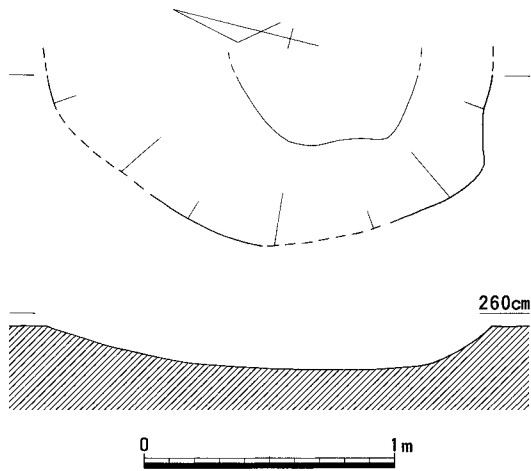
- 1 灰黄褐色土 10YR5/2
- 2 明黄褐色土 10YR7/6
- 3 にぶい黄橙色土 10YR7/5
- 4 灰黄褐色土 10YR6/2
- 5 にぶい黄橙色土 10YR7/3

第139図 土壙38 (1/30)

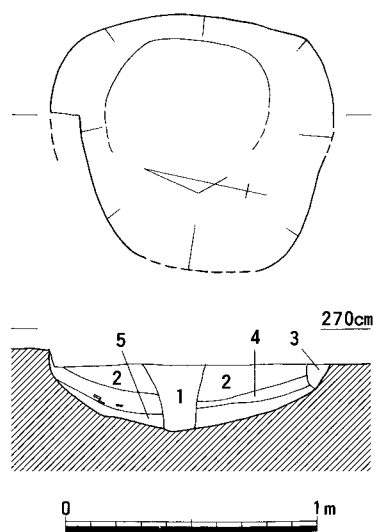


- 1 明黄褐色土 10YR7/6
- 2 灰黄褐色土 10YR5/2

第140図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/2)



第141図 土壌40 (1/30)



- 1 褐色土 5YR5/1 (ピット)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR6/4
- 3 褐灰色土 10YR6/1
- 4 黒色土 10YR2/1 (炭・焼土含む)
- 5 褐灰色土 10YR5/1

第142図 土壌41 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌41 (第63・142図)

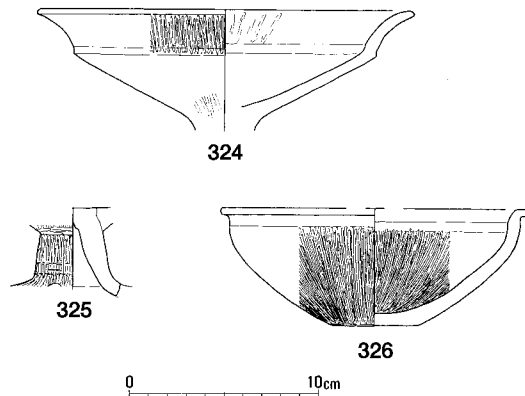
11Q区の南中央に位置し、西側を建物の基礎によって削平されている。平面117×100cm以上の不整形円で、底面は東よりに深くなっており、最深部の海拔高は230cmを測る。埋土は第1層が新しいピットで、第2層以下が埋土になる。

出土遺物は土器の小片が多いが、324・325が高杯、326は鉢である。時期は弥・後・Ⅲと判断される。(杉山)

土壌42 (第63・143・144図)

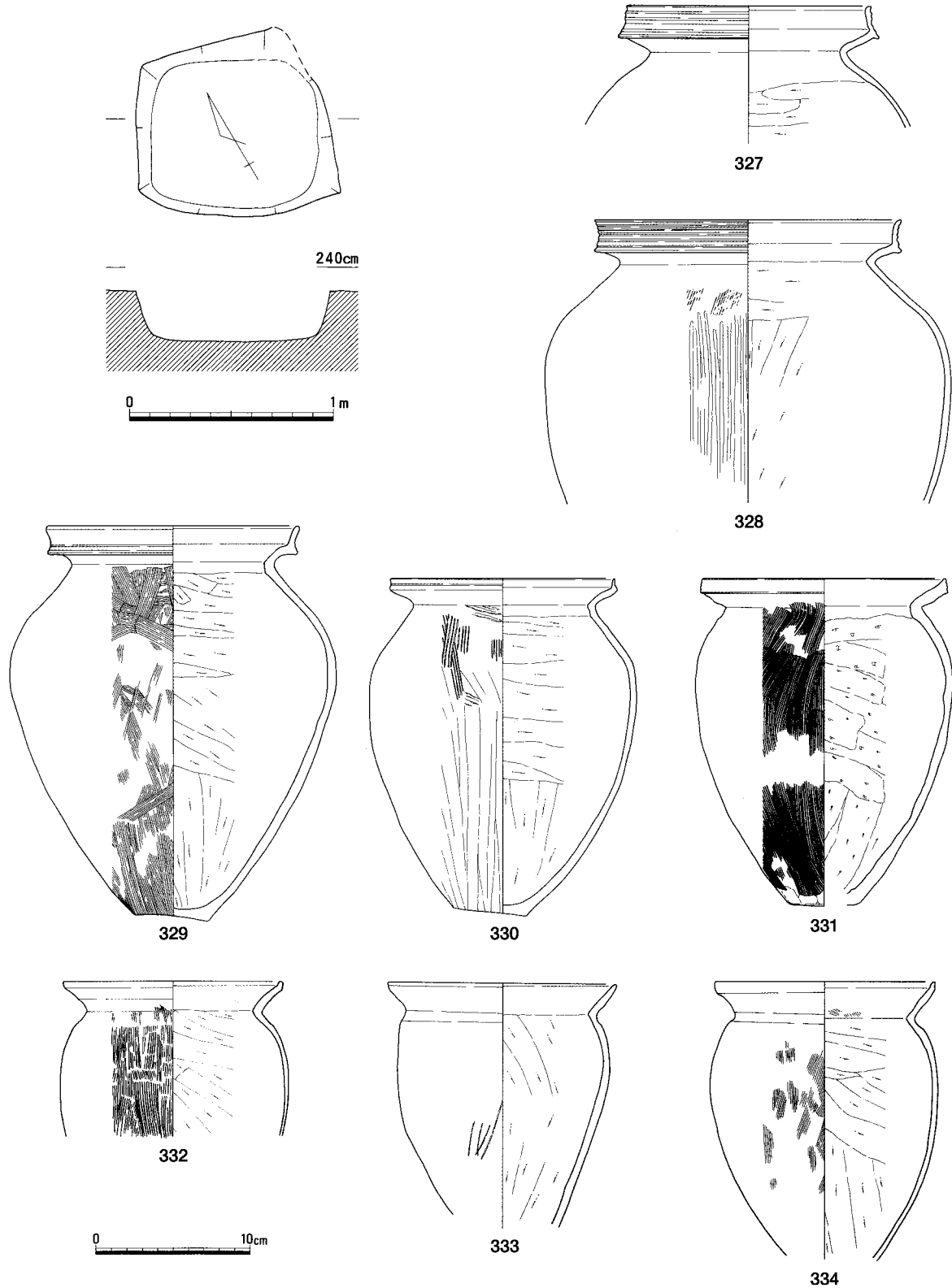
11Q区南端に位置し、竪穴住居40・42の床下に位置する。平面99×60cmの方形を呈し、底面は比較的平らで、海拔高は203.5cmを測る。埋土には炭を多く含んでいるが、壁面には被熱痕は認められない。また、埋土中には破損した土器が密集して入っていたが、これらも二次的な被熱は顕著ではない。

327～335は甕で、327・328は口縁部外面に擬凹線文がみられる。329の口縁部外面はヨコナデがみられる。330も口縁外面はヨコナデだが、端部を上

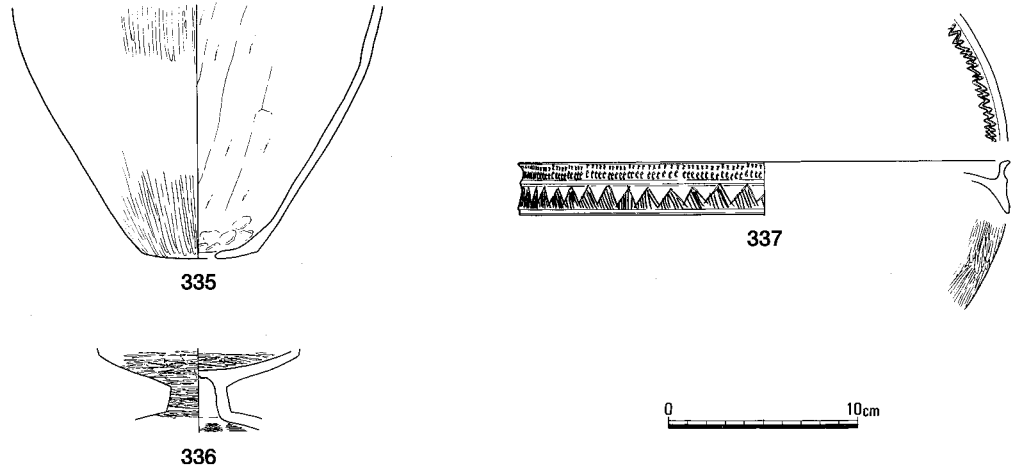


- 1 褐色土 5YR5/1 (ピット)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR6/4
- 3 褐灰色土 10YR6/1
- 4 黒色土 10YR2/1 (炭・焼土含む)
- 5 褐灰色土 10YR5/1

方につまみ上げている。また、体部外面はハケの後下半部はナデを施す。331は口縁端部に強いヨコナデが施され、面をなしているが、332・334は口縁端部を上方につまみあげるだけである。333は口縁端部をなでるだけで尖り気味に仕上げている。また、体部外面には明瞭なハケメがみられず、工具の当たり痕跡が看取されることから、板状工具によるナデ仕上げを施していると考えられる。335は



第143図 土壌42 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第144図 土壙42出土遺物② (1/4)

平底の底部片だが、焼成後の穿孔がみられる。336・337は高杯で、336は柱部から杯部にかけての外面と杯部内底部に横方向のヘラミガキを施す。337は飾り高杯で、端部上面は内傾気味に面を持ち、内側に櫛描き波状文を施す。口縁外面は凸帯により二段に分け、上半に櫛による刺突文を上下2段に、下半に鋸歯文を施す。

時期は、出土土器から弥・後・Ⅲと判断される。

(杉山)

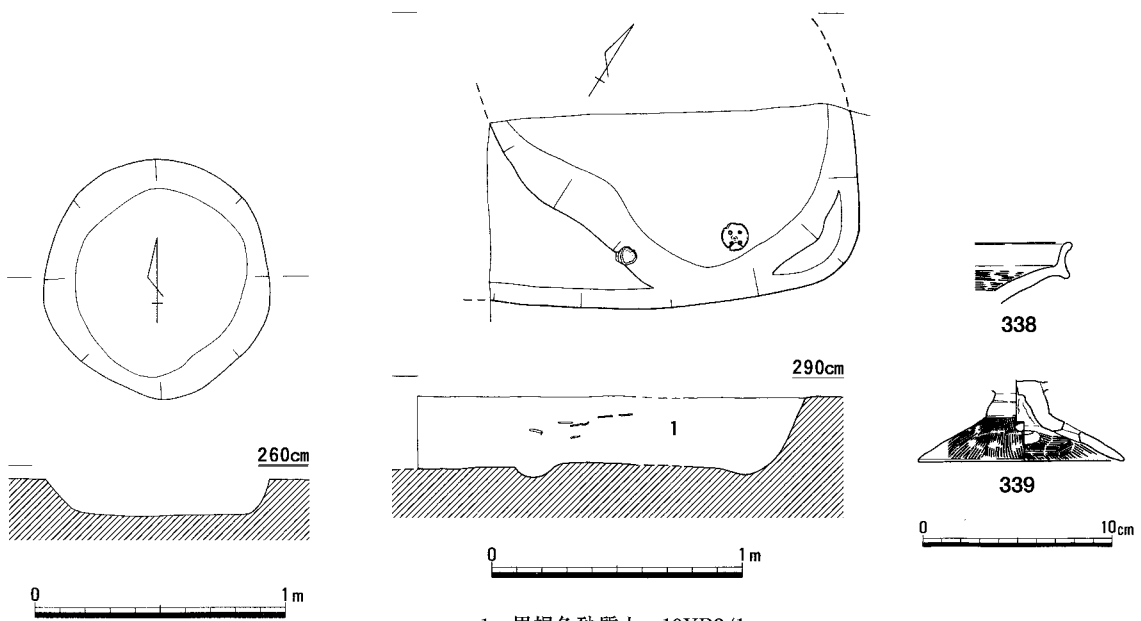
土壙43 (第63・145図)

3区11Q区において検出した、円形の土壙である。規模は、長軸94cm、短軸90cm、検出面からの深さ24cmを測るものである。底面はほぼ水平で、壁面は緩く立ち上がる、断面が皿状を呈しているものである。時期は、出土遺物が細片ではあるが、弥生時代後期と考えている。

(時實)

土壙44 (第63・146図)

12P区南部で調査区西端に位置し、土壙45に切られている。平面方形を呈し、東西長は180cm強と推定されるが、北側と西側は調査区外に延びていく。底面は比較的平らでしまりがよく、南東隅と南



第145図 土壙43 (1/30)

1 黒褐色砂質土 10YR3/1

第146図 土壙44 (1/30)・出土遺物 (1/4)

西部に段があり、中央の一段下がったところでの海拔高は265cmを測る。床面には被熱面や炭の散布は認められなかった。

土器は小片のことが多いが、338は南西の段からの下がり、339は中央の低い部分の床面で出土した。338は壺の口縁部片、339は高杯の脚部である。

時期は、出土土器から弥・後・Ⅲと判断される。(杉山)

土壙45 (第63・147図)

12P区南部で調査区西端に位置し、土層観察用の土手でのみ検出した。土壙は竪穴住居77に切られ、土壙44を切っており、南北長は122cm、底面海拔高243cmを測る。埋土は4層に分層が可能で、第2層の炭層下に第3層焼土層がみられるが、壁面には被熱痕は認められず、機能についても明確でない。

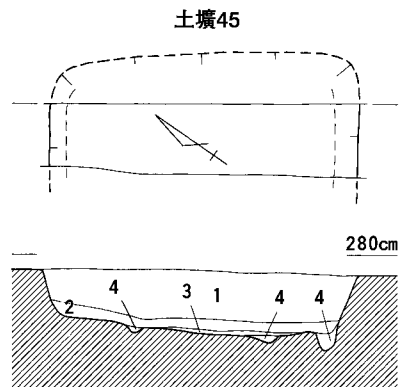
出土遺物がないため、詳細な時期は不明だが、周辺の状況から弥・後期頃と推察される。しかしながら、古墳時代まで下がる可能性は否定できない。(杉山)

土壙46 (第63・147・148図)

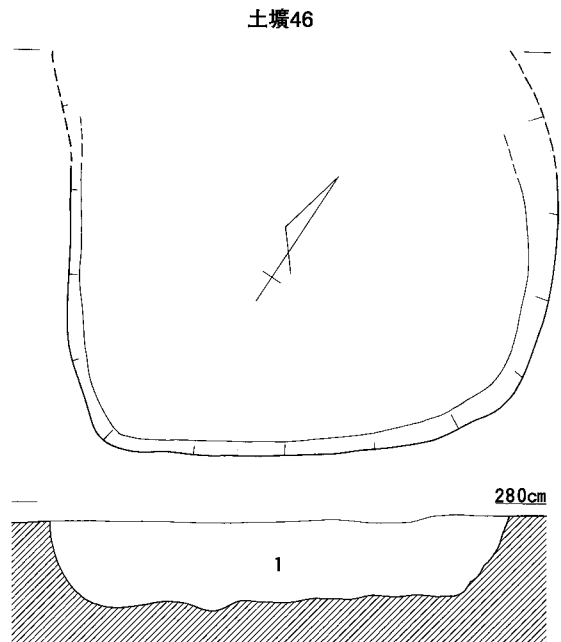
12P区南部で調査区西端に位置し、土壙北端は調査区外に伸びる。平面は193×160cm強の方形に近い楕円形を呈し、底面は凹凸が顕著にみられるが、およその海拔高は約237cmを測る。

340～345は壺で、340～343は口縁部を拡張し、340・341は外面にヘラ描きの鋸歯文を施す。345は直口壺で、内外ともヘラミガキを施す。346～348・351は甕で、346は口縁端部を上方につまみ上げて面をなし、そこに擬凹線文が巡る。内面のヘラケズリは肩部付近までしか及んでいない。347は口縁部を強いナデによって上方につまみ上げている。348は口縁部を上下に拡張して、強いナデによって擬凹線文状になっている。351は小型品で口縁部はナデを施し、端部は尖り気味に仕上げる。部分的に口縁部に補修のためと考えられる粘土が貼ってある。349・350は鉢で、349は外面はハケメの後粗いヘラミガキ、内面はハケメの後丁寧なヘラミガキを施す。350は口縁部を強いナデによって段が付く。

時期は、出土した土器と周辺の状況から弥・後・中葉と考えられる。(杉山)



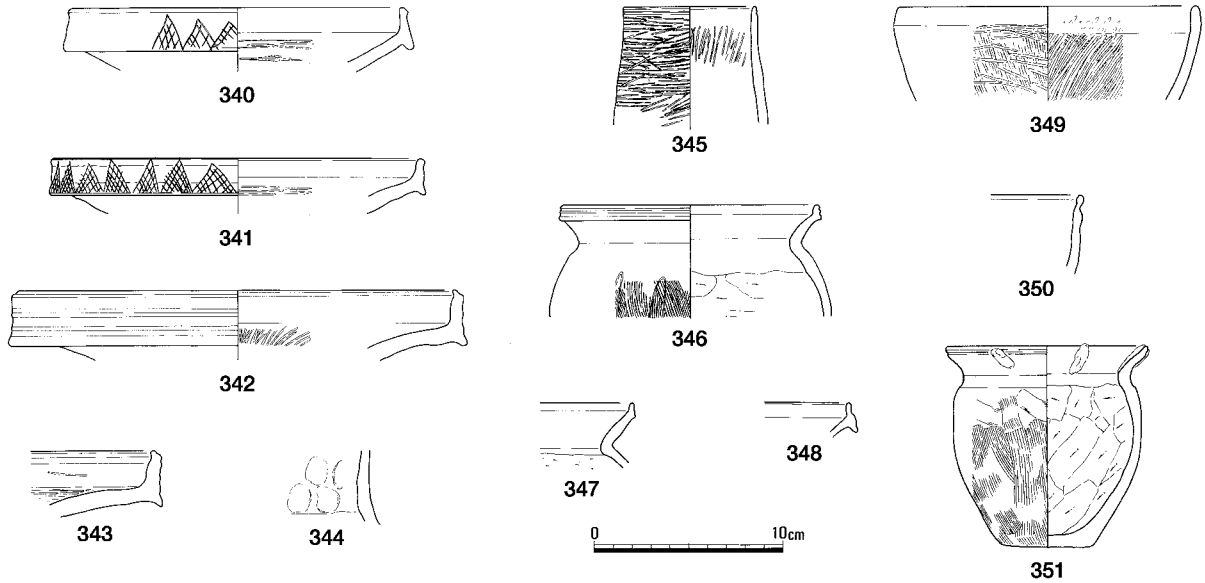
- 1 黒褐色砂質土 10YR3/1
- 2 炭層
- 3 焼土 5YR5/8
- 4 褐灰色土 10YR5/1



0 1m

- 1 褐灰色砂質土 10YR4/1

第147図 土壙45・46 (1/30)



第148図 土壌46出土遺物 (1/4)

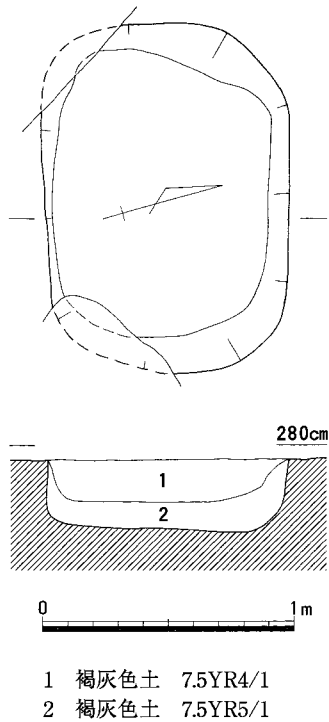
土壌47(第63・149図)

12Q区北東で、調査区西端に位置し、竪穴住居21を切る。平面は139×98cmの隅丸方形を呈し、底面海拔高は245cmを測る。埋土は大きく2層に分かれるが、土質には大差がない。埋土除去後に底面中央でピット2基を検出したが、直接的な関連は不明である。

出土遺物は土器の小片のみで、時期の詳細は不明だが、竪穴住居との関係から弥・後・Ⅲ以降と判断される。(杉山)

土壌48(第63・150～152図)

土壌48は12Q区に位置する。土壌48はやや不整形を呈しているものの、その平面形は長方形に似た形状である。土壌48は長さ約245cm、幅約153cm、深さ約22cmを測る。土壌48の底は比較的平坦であり、褐色を基調とする埋土が堆積していた。しかしながら、埋土は隣接する竪穴住居21とよく似た埋土であったため、土壌48および竪穴住居21の切り合い関係などについては十分に把握することができなかった。土壌48内からは弥生土器および土製品が比較的多く出土した。しかしながら、先に述べたように、竪穴住居21の埋土と区別することが困難であったこともあり、図示した土器には、竪穴住居21の土器が含まれている可能性もあることを



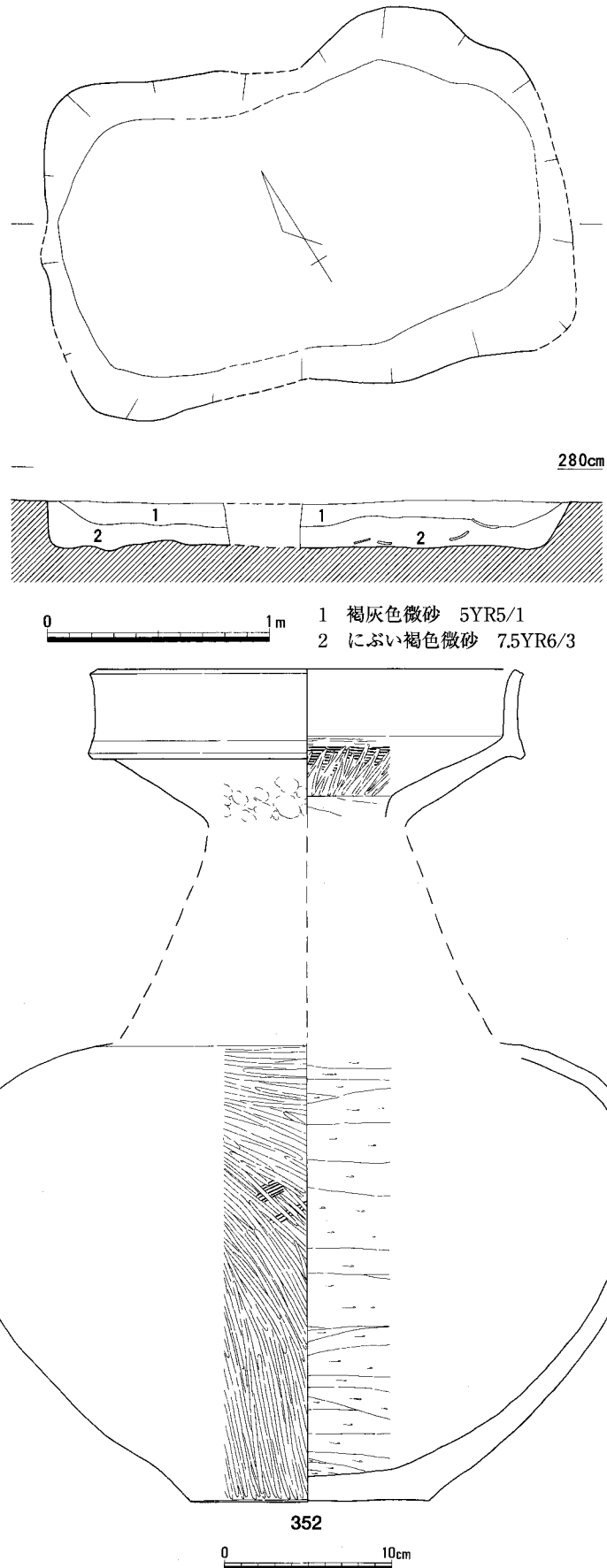
- 1 褐灰色土 7.5YR4/1
- 2 褐灰色土 7.5YR5/1

第149図 土壌47 (1/30)

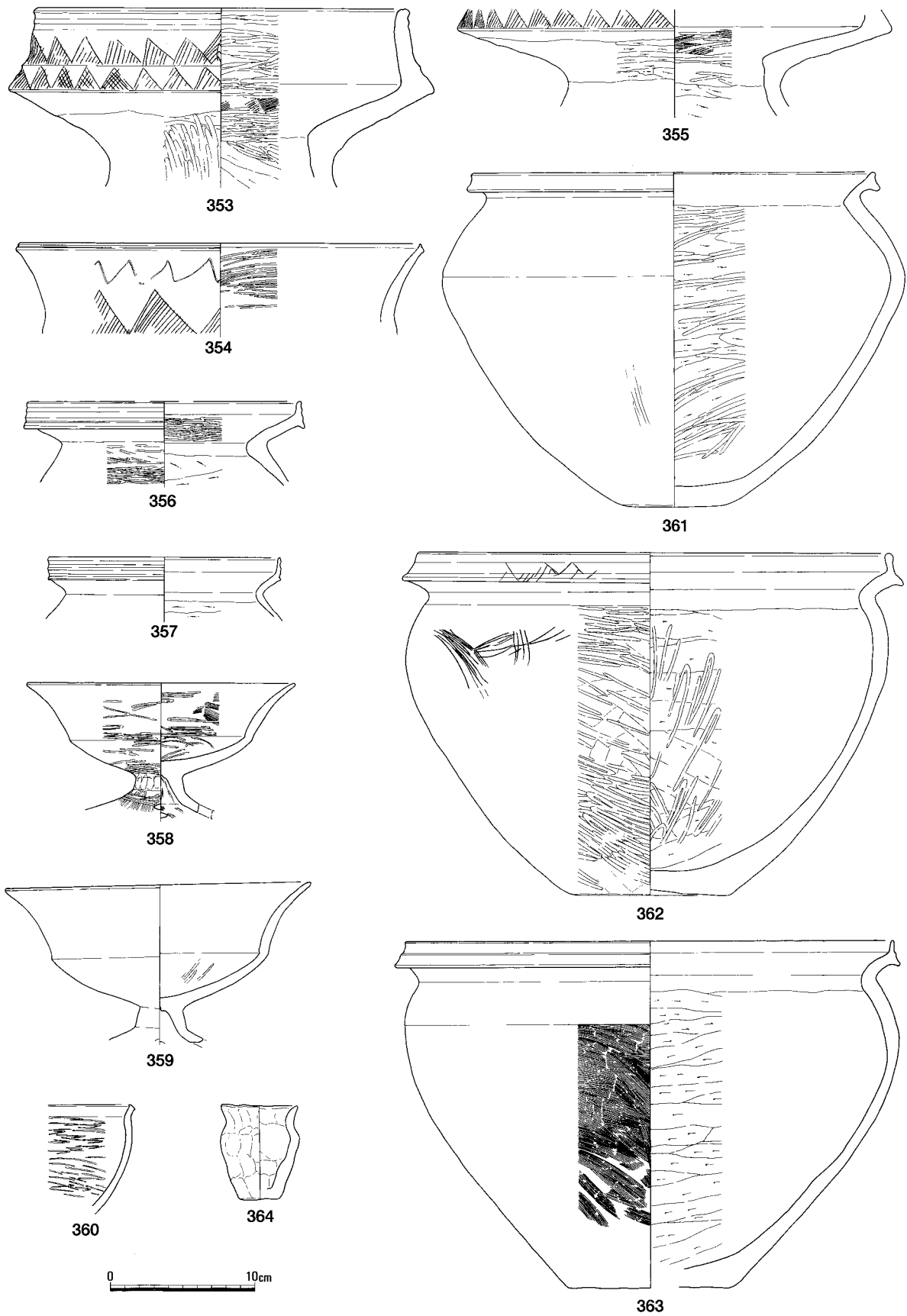
断っておく。遺物の出土状況として、壺や鉢など大型の器種が比較的多く出土した印象があるが、いずれも破損しており、土器そのものを埋置したような状況は観察できなかった。

352～355は壺である。352は二重口縁をもつ壺である。頸部は不明であるが、体部と口縁部は主に胎土の特徴から同一個体のものと考えられ、図上での復元が可能である。口縁部は径25cm、器高は36.8cm以上を測る。体部外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリで調整が行われている。体部の最大径は41.2cmを測り、最大径は体部の高さの上半分に位置する。353～355は上方にのびる二重口縁壺の

口縁部に相当する。353と355は内傾する口縁端部をもつものに対し、354は外反する口縁端部をもつ。これら上方に拡張された口縁部の外面にはいずれも鋸歯文が施されている。353では鋸歯文が口縁外面に上下に2条がみられる。354では口縁外面の下半には明瞭な鋸歯文が観察できるが、上半部にはおそらくは鋸歯文を意識したような文様が見られる。355については口縁の上半部が欠損しているため、どのような鋸歯文が施されていたかは不明である。356・357は甕の口縁部である。いずれも上方に口縁端部が立ちあがるものである。358・359は高杯である。いずれも短脚の高杯で、杯部の口縁が外方に広がるタイプのものである。358には横方向のヘラミガキが施されている。361～363は鉢である。いずれも大型のもので、口縁部が径28～33.7cmを測る。361の外面調整については不明であるが、内面はヘラケズリののちヘラミガキが施されている。器高23.5cm。362は外面には工具による調整ののちヘラミガキが、内面にはヘラケズリののちにヘラミガキが若干施されている。なお、362の口縁部には鋸歯文を意図したと思われる文様が施されている。また、体部には線刻による



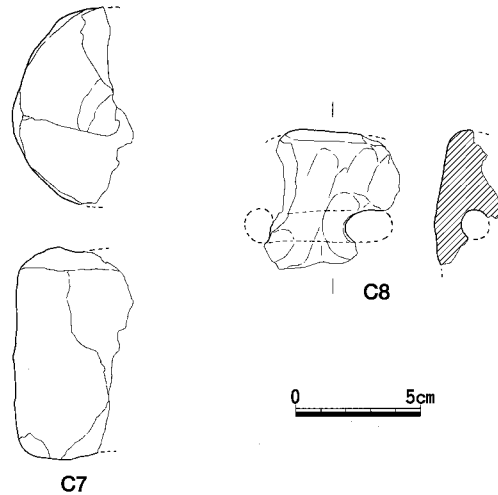
第150図 土壌48 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第151図 土壙48出土遺物② (1/4)

る文様がみられる。器高23.7cmを測る。360は小型の鉢である。内面には横方向のヘラミガキが施されているが、破片のため詳細な形状は不明である。364はいわゆる手捏ね土器である。器高5.4cmを測る。C7およびC8は土錘である。C7で最大長8.4cm、C8で最大長4.3cmを測る。

これらの出土遺物から判断して土壙48は、近接する竪穴住居21と同様に、弥生時代後期後葉を中心とする時期に営まれたものと考えられる。(金田)



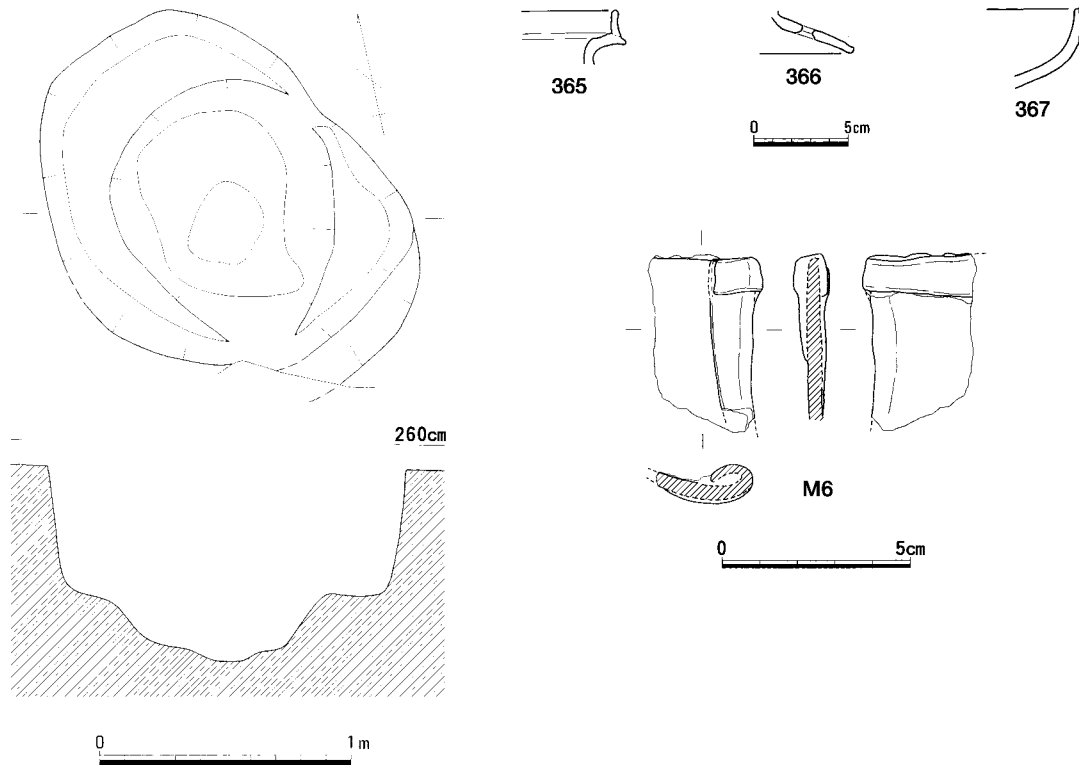
第152図 土壙48出土遺物③ (1/3)

土壙49 (第63・153図)

12Q区北東で、竪穴住居20内に位置し、平面は168×120cmの楕円形を呈する。掘り方は検出面から垂直に落ち、短辺側に約50cm下がったところで段になり、中央がさらに深くなる。検出時は土壙と考えたが、周辺の状況から柱穴の掘り方と判断される。

365は甕である。366の高杯脚の外表面は、タテハケメの後縦方向のヘラミガキが施される。367の高杯口縁部は、端部外表面に4条の沈線が巡り、外表面は横方向のヘラミガキで内表面は縦方向のヘラミガキがみられる。M6は鉄製の袋状斧の袋部と判断され、端部を外側に折り曲げている。この形式のものは九州を中心に分布しており、県内では類品はみられない。

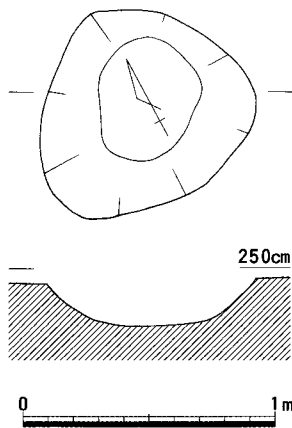
時期は竪穴住居20との関係と出土遺物から弥・後・Ⅲ頃と考えられる。(杉山)



第153図 土壙49 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壌50 (第63・154図)

11R区南西隅に位置し、平面90×82cmの円形を呈し、底面海拔高は229cmを測る。出土遺物は土器の小片のみで、時期の詳細は不明だが、周辺の状況から弥・後期と考えられる。(杉山)



第154図 土壌50 (1/30)

土壌51 (第63・155図)

12R区北西隅に位置し、竪穴住居18を切る。平面194×168cmの円形を呈する。掘り方は、緩く傾斜していく途中で傾斜を変え底面に至り、その海拔高は233cmを測る。北側の肩口にピットがあるが関連は不明である。埋土は砂質が強い土の単層である。

出土遺物がないため時期の詳細は不明だが、竪穴住居18との切り合いから弥・後・IV頃と判断される。(杉山)

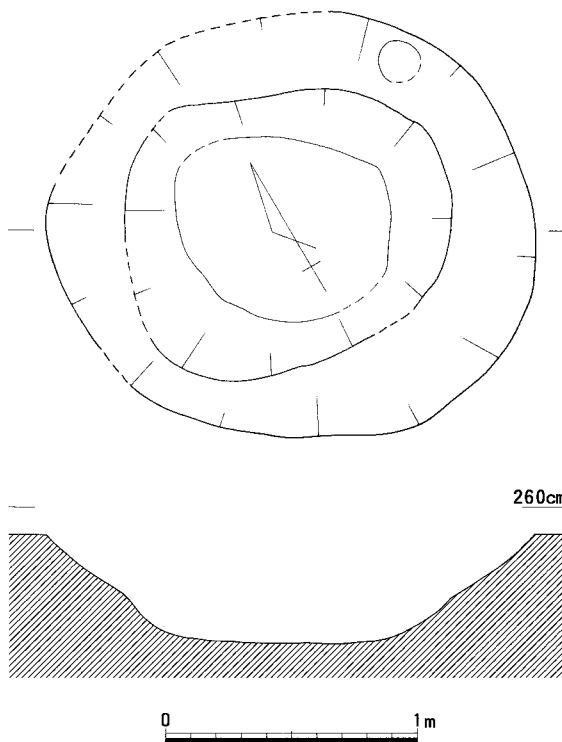
土壌52 (第63・156図)

11R区南西隅に位置し、南側を土壌51に切られている。平面は東西112cmの楕円形を測り、底面海拔高は233cmを測る。出土遺物は土器が少量あるのみである。368は器台の柱部で、外面タテハケの後ヘラミガキを施す。現状で4条の沈線文が巡り4個の円孔が残る。

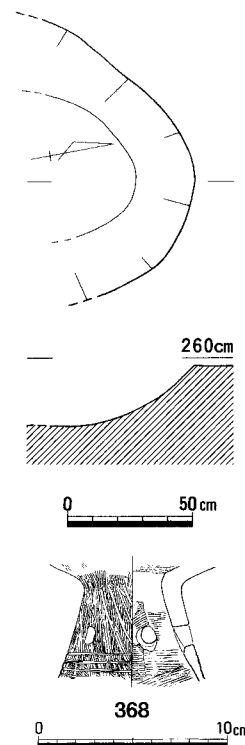
時期は、切り合い関係などから弥・後・後半と推察される。(杉山)

土壌53 (第63・157図)

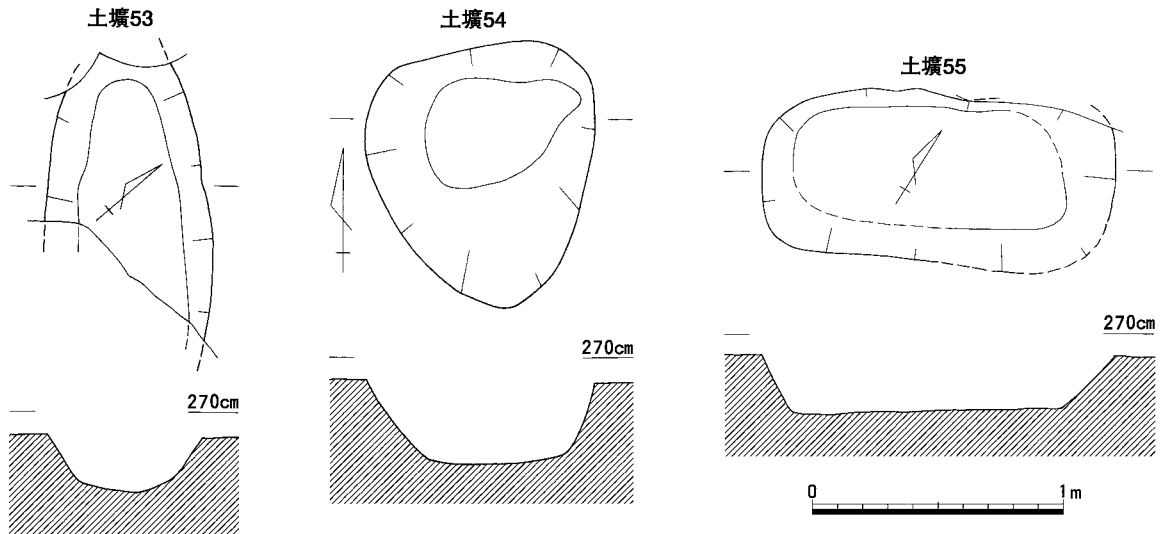
土壌53は、3区の南東側に位置し、12Rにある。南東側には土壌54が位置し、これに切られている。規模は長軸長112cm、短軸長61cmで、平面形状は楕円形である。確認面からの深さは23cmで、底面の海拔高は238cmである。断面形状はA-bになる。時期は弥・後である。(小林)



第155図 土壌51 (1/30)



第156図 土壌52 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第157図 土壙53～55 (1/30)

土壙54 (第63・157図)

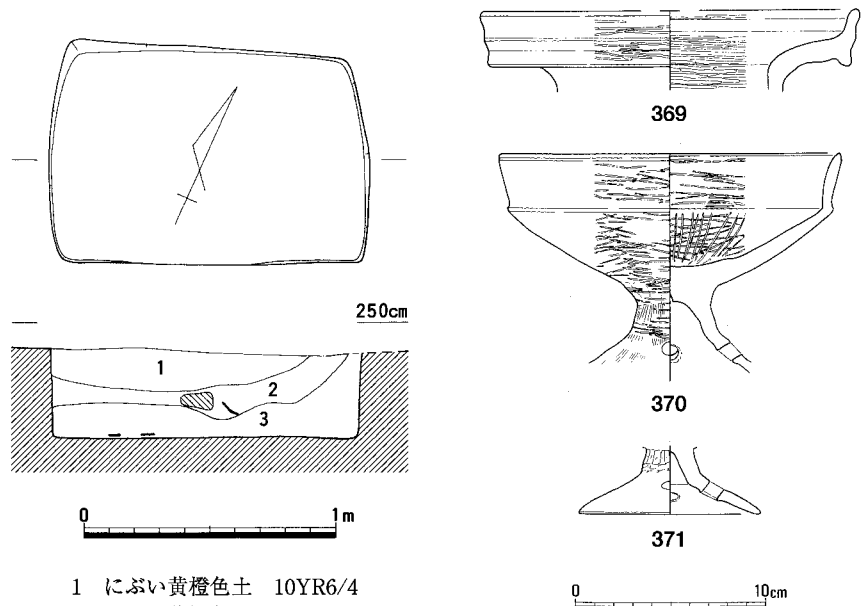
土壙54は、3区の南東側に位置し、13Rにある。北西側には土壙53があり、これを切るかたちになる。規模は長軸長103cm、短軸長91cmで、平面形状は楕円形である。確認面からの深さは33cmを測り、底面の海拔高は228cmである。断面形状はA-aになる。時期は弥・後である。(小林)

土壙55 (第63・157図)

土壙55は、3区の南東側に位置し、12Rにある。北側には堅穴住居18が近接し、南側にある土壙57に切られる。規模は長軸長141cm、短軸長66cmで、平面形状は隅丸方形である。確認面からの深さは24cmを測り、底面の海拔高は239cmである。断面形状はA-aになる。時期は弥・後である。(小林)

土壙56 (第63・158図)

土壙56は、3区の南東側に位置し、12Rにある。規模は長軸長126cm、短軸長82cmで、平面形状は方形である。確認面からの深さは36cmを測り、海拔高は204cmである。断面形状はB-aになる。遺物は覆土中でも第2・3層から出土し、369は壺口縁部、370・371は高杯になる。370の口縁部はやや外反しながら直に立ち上がる。時期は弥・後・IVである。(小林)



- 1 にぶい黄橙色土 10YR6/4
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 3 にぶい黄橙色土 10YR6/4

第158図 土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙57 (第63・159~163、図版54)

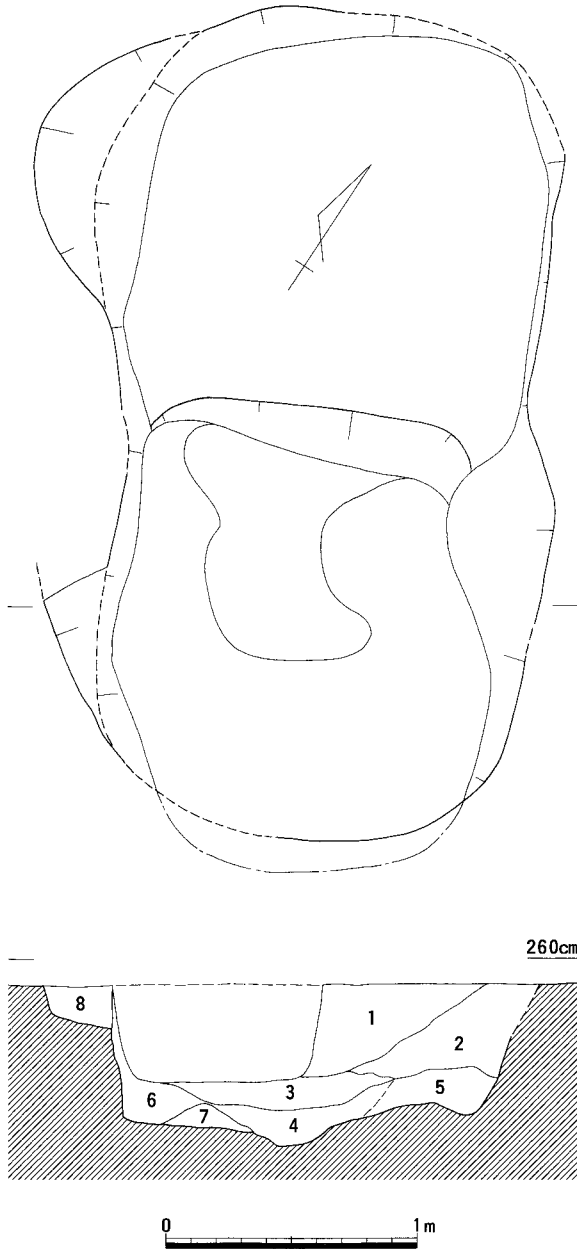
土壙57は、3区の南東側に位置し、12Rにある。他の遺構との切り合い関係は、竪穴住居18が北西側に近接する。またやはり北西側に土壙56があり、これに切られる形となる。土壙の規模は、長軸長330cm、短軸長160cmとかなり大型になり、平面形状は不整形である。確認面からの深さは64cmで、これは海拔高でいうと187cmになる。断面形状は、A-bである。

この土壙57は覆土から見ると、何回かの掘り返しがあったと思われる。新出から述べると、第1層の段階・第3~5層の段階・第6~7層の段階・第8層の段階である。このなかでも2番目に新出の

段階の、層位でいうと第3層から多量の遺物が出土した。372~405の土器類は、おおむね弥・後・Ⅳの時期になり、他の時期の土器は混じらない。よって新出から数えて2回目の段階は、弥・後・Ⅳの時期になると思われ、3・4番目の段階は弥・後・Ⅳもしくはそれより古くなると考えられる。

出土遺物のうち、372~376は壺である。このうち372・373は頸が長くなるタイプである。372の口縁部は、直上よりやや外反し、口唇部はわずかに張り出している。底部はまだ完全には丸底にならず、わずかに存在する。373の口縁部は外反し、端部には櫛描文がある。口唇部は下方に張り出している。頸部下には列点文があり、胴部にはこの列点文の直下までヘラミガキされている。胴部上方が張り出す形態である。374は頸部がない。口縁部は上方に立ち上がり、面にはヘラ描き沈線が数条存在する。375は短頸の壺であり、口縁部は段をなさず、直口に立ち上がっておわる。胴部は上方が張り出す形態で、外面調整は頸部直下までヘラミガキである。376は、頸部の下方に突帯が1条存在する。

378~387は甕である。口縁部の形態は、378~380は端部が長めに上方へ立ち上がっている。381~383はやや長めに立ち上がり、384~386はわずかに短く立ち上がっている。長めに立ち上がるタイプで

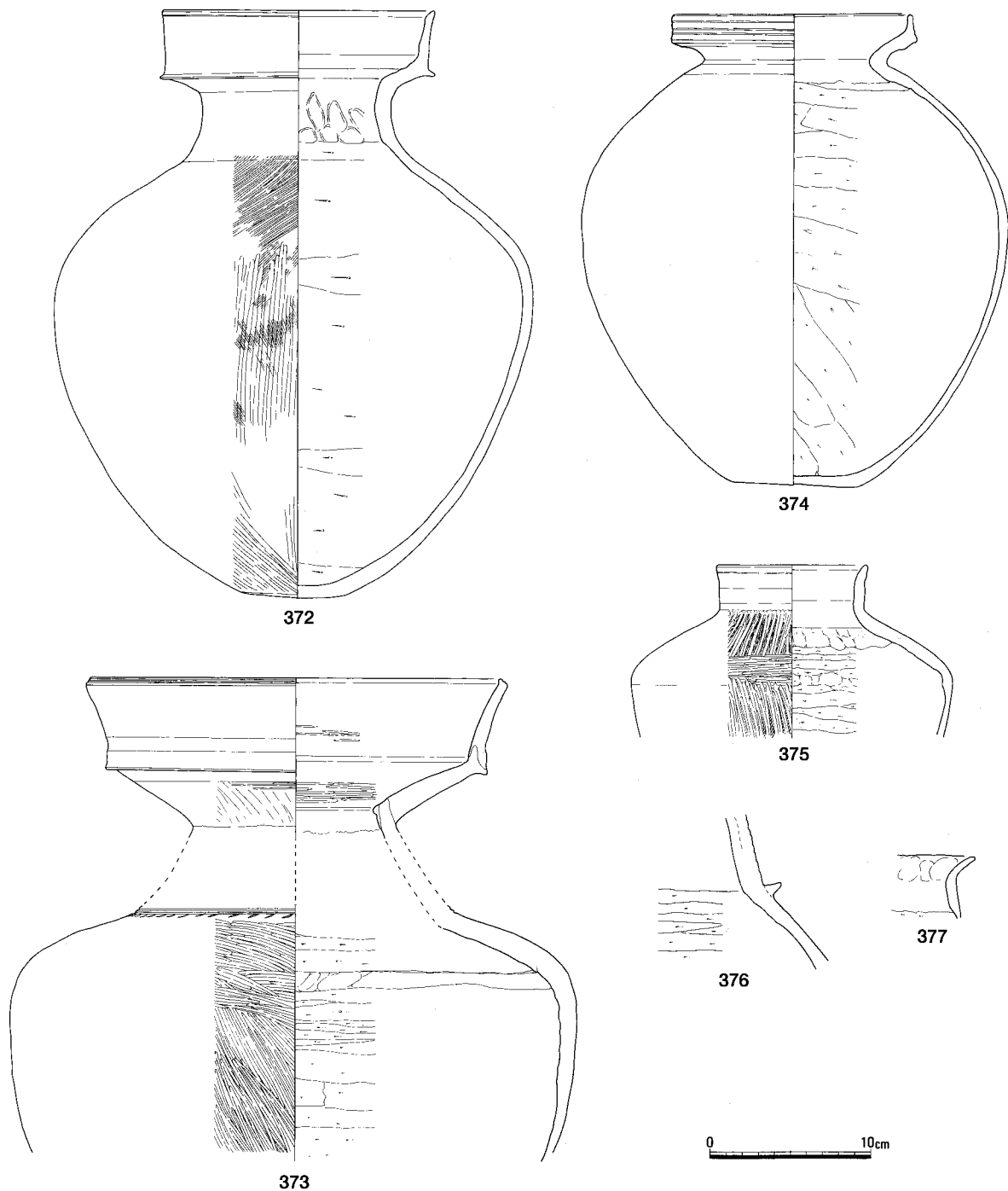


- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 黄褐色土 10YR5/6 | 5 褐色土 10YR4/6 |
| 2 黄褐色土 10YR5/6 | 6 暗褐色土 10YR2/3 |
| 3 暗褐色土 10YR3/3 (土器多) | 7 褐色土 10YR4/6 |
| 4 暗褐色土 10YR2/3 | 8 にぶい黄褐色土 10YR5/4 |

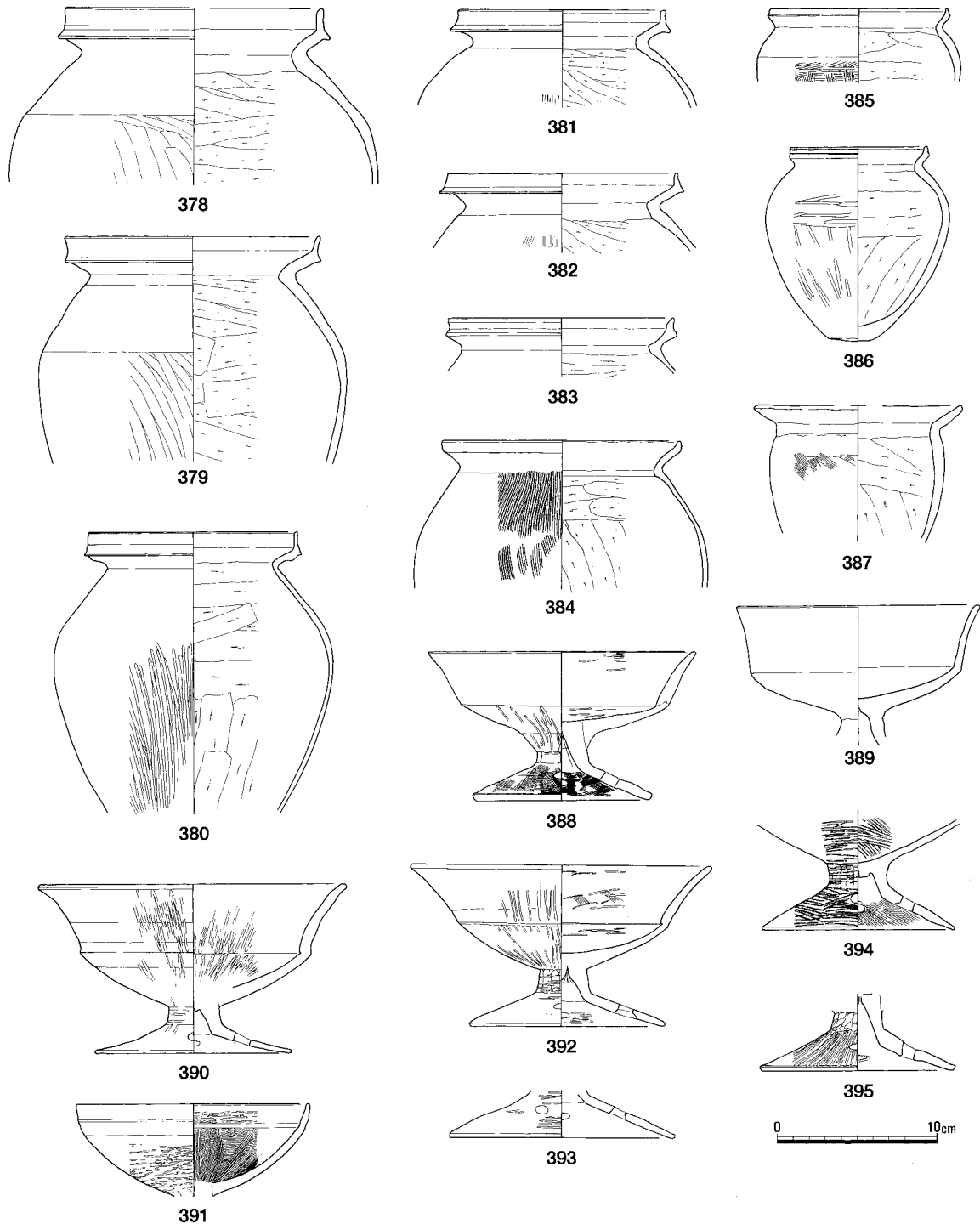
第159図 土壙57 (1/30)

も、378・380は直上に、379は外方に立ち上がる。やや長めのタイプは、382は内方、381は直上に、383は外方に立ち上がる。短く立ち上がるタイプは、内側に立ち上がるものがほとんどである。このうち386は、端面にヘラ描き沈線が1条存在する。なお長めに立ち上がるタイプには、口縁部に沈線があるものはない。387は「く」の字形の口縁になり、口縁部径が胴部最大径より大きくなる。器形自体も小型である。

388～395は高杯である。脚部が存在するものは、すべて短脚になる。杯身の形態は、390・392・389のように深くなるタイプと、浅いタイプの388がある。深いタイプにはさらに、逆「ハ」の字にな



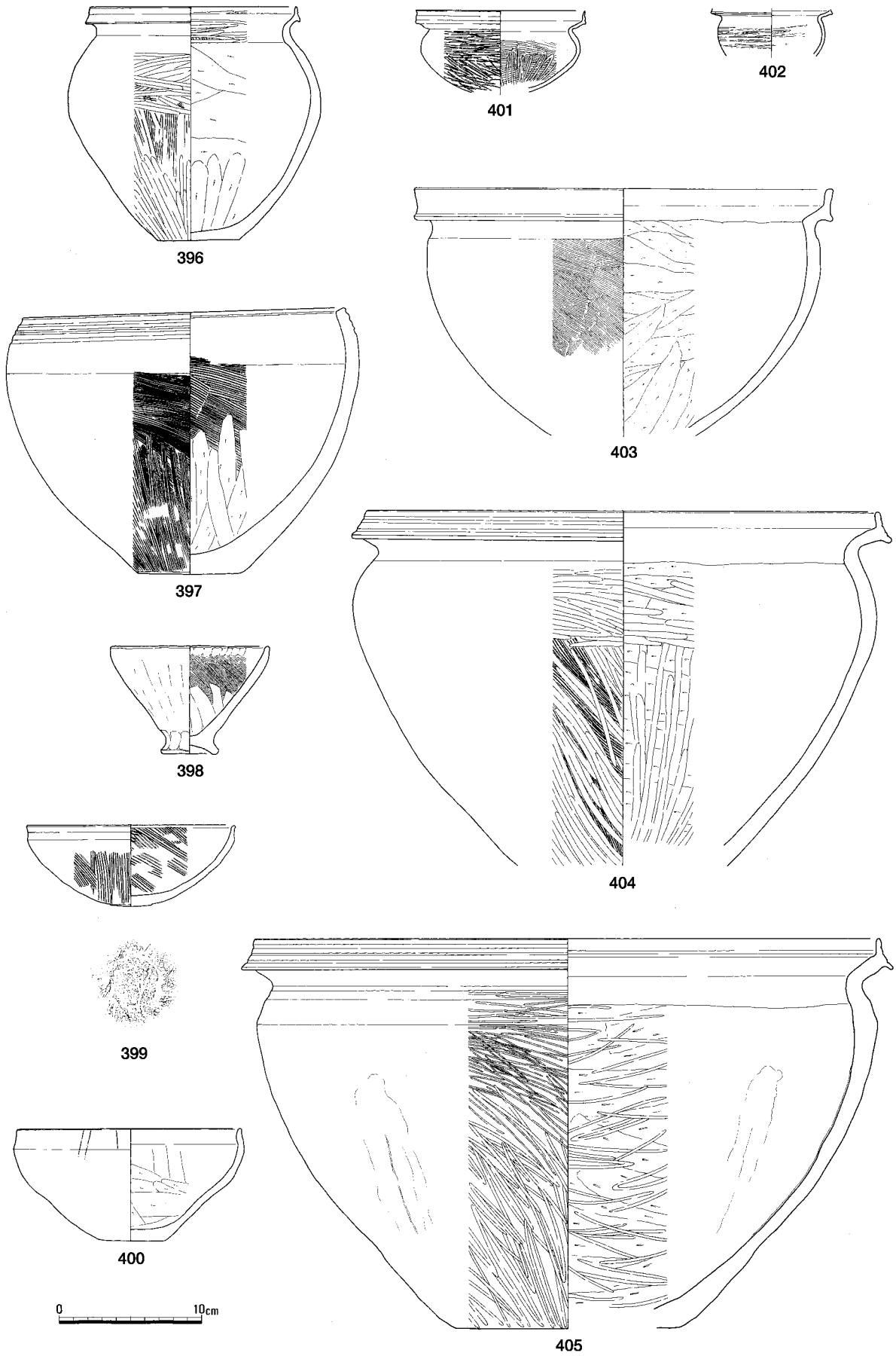
第160図 土壙57出土遺物① (1/4)



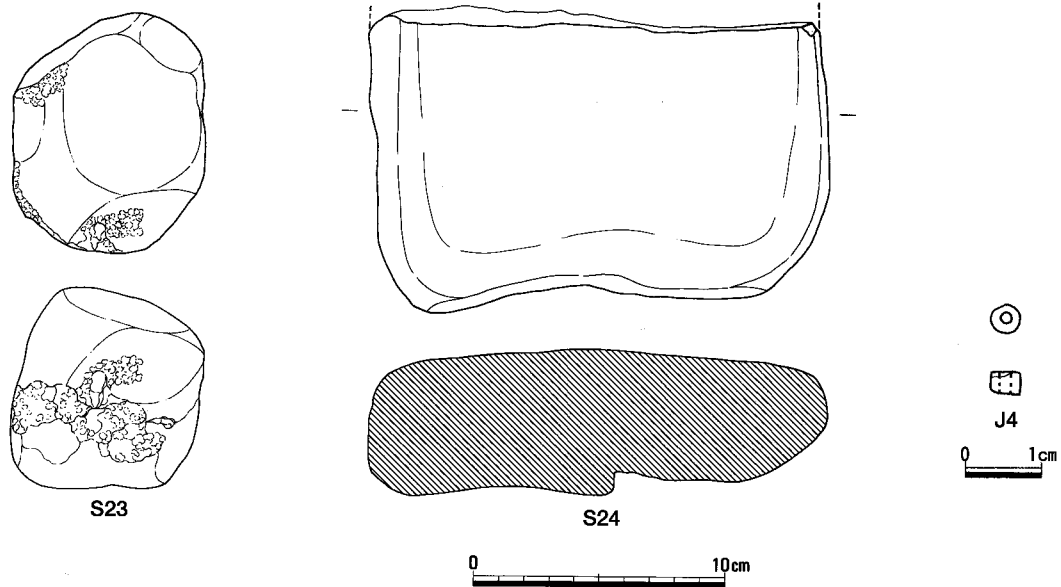
第161図 土壙57出土遺物② (1/4)

る390・392と、直に立ち上がる389がある。391は、丸くおさまる杯身である。杯部が逆「ハ」の字になる388・390や392などは、外面のヘラミガキが縦方向になるが、丸くおさまる391は、横方向である。

396～405は鉢である。404は口径が38.2cm・405は44cmの大型品である。口縁部の形態は、どちらも端部が内側に立ち上がり、唇部が張り出すタイプである。端面には擬凹線文がある。397は身が丸くおさまるタイプである。口縁端部はやや内傾し、外面には擬凹線文がある。403は口縁部がやや外側に立ち上がる。396～401は口縁部が直に立ち上がる。397・400は口縁部が段にならない。398は脚台



第162図 土壙57出土遺物③ (1/4)



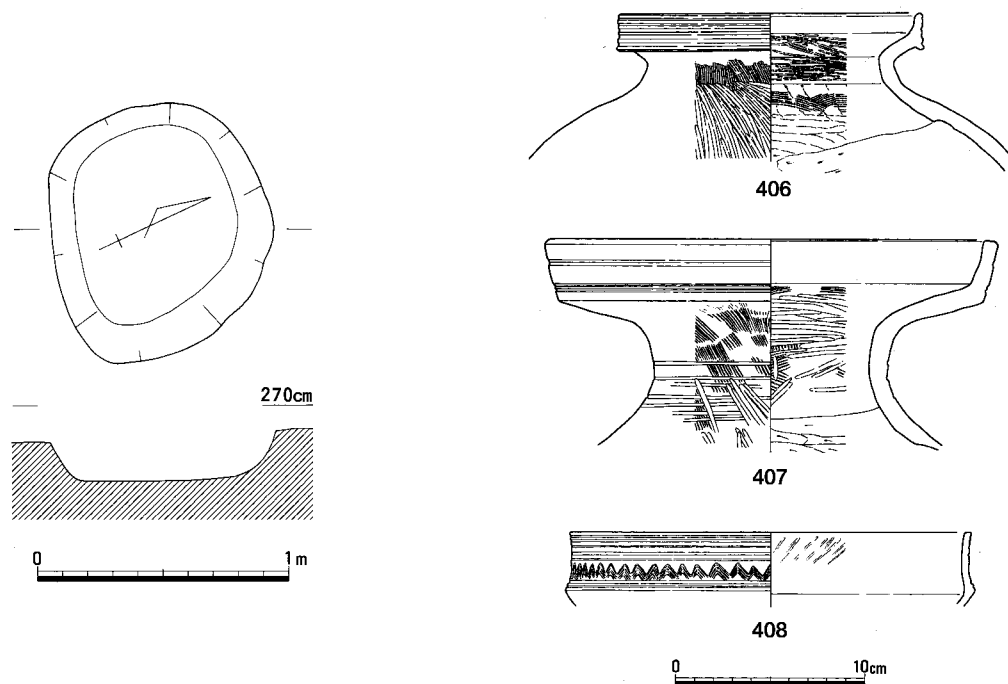
第163図 土壌57出土遺物④ (1/3・1/1)

がついている。

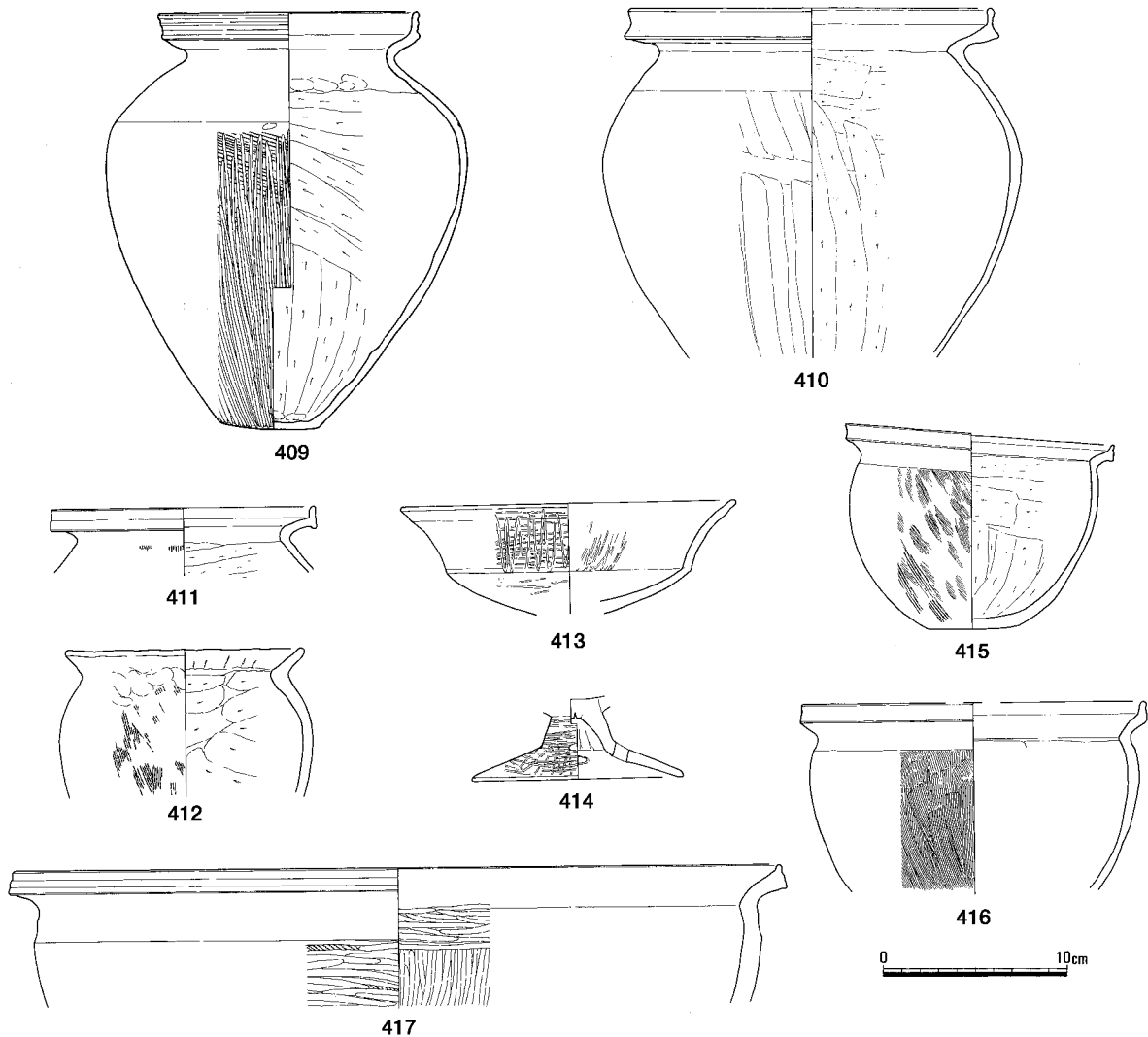
S23は、長石製の叩き石である。使用痕が2か所に認められる。S24は、流紋岩製の石皿である。使用した面は、1面だけである。J4は、ガラス小玉である。形状は円柱状を呈している。(小林) 土壌58 (第63・164・165図)

12R区西部に位置する。平面は107×88cmの楕円形を呈し、底面海拔高は240cmを測る。埋土は約20cmしか残っていないが、土器は比較的密に含まれ、炭も多くみられる。

406～408は壺で、406の口縁部外面には5条の擬凹線文が巡り、内面のヘラケズリは肩部付近までで頸部付近はハケメの後ナデを施す。407は口縁端部に面を持ち、1条の沈線が巡る。408は口縁部上



第164図 土壌58 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第165図 土壙58出土遺物② (1/4)

半に6条の沈線と、下半に櫛描き波状文が巡る。409～412は甕で、409は口縁部外面に擬凹線文が巡り、体部外面はハケメの後ヘラミガキ、内面は肩部よりやや上位までヘラケズリを行う。底部は平底だが、内面に押圧痕がみられる。410は口縁部がナデのみで、体部外面もナデが看取されるのみである。内面は頸部までヘラケズリが入る。412は口縁部から頸部にかけて指頭圧痕が明瞭に残り、体部外面はハケメの後ナデ、内面はヘラケズリを施す。413・414は高杯で、外面は丁寧に横方向にヘラミガキ、その後粗く縦方向にヘラミガキを施す。415～417は鉢で、416の内面は単位は不明だがヘラケズリがみられる。大型の417は頸部に段を有し、体部の内外面ともハケメの後丁寧にヘラミガキを施す。

時期は、出土遺物から弥・後・Ⅲ頃と判断される。

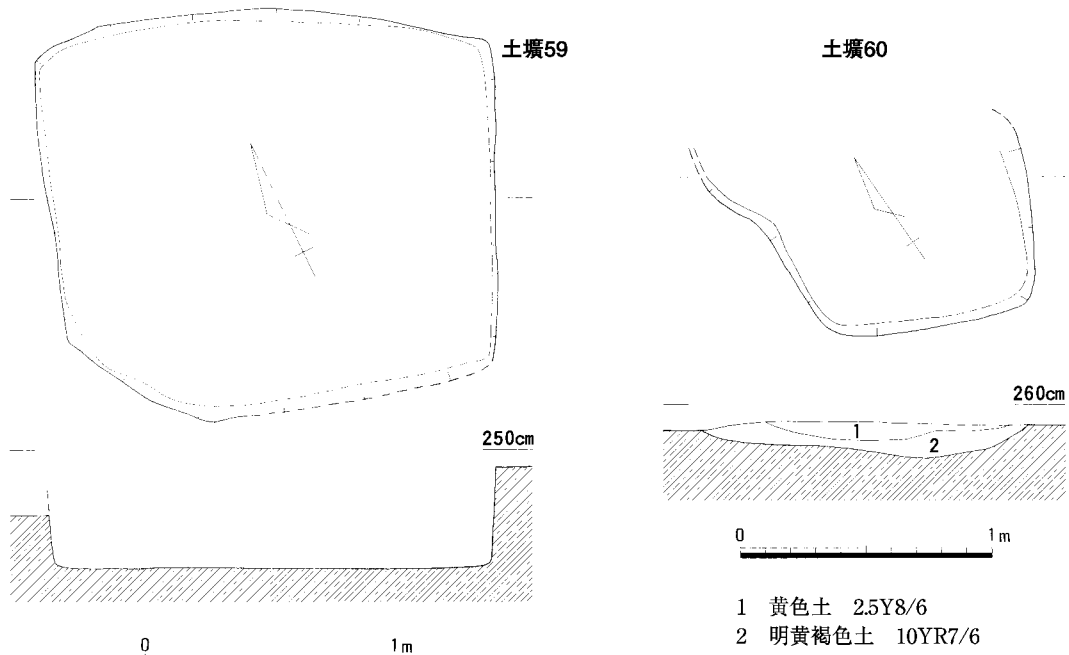
(杉山)

土壙59 (第63・166図)

12R区西部の溝34の上面に位置し、南側の一部を建物の基礎で削平を受けている。平面は180×162cmの比較的整った方形だが、南辺がやや外へ開いていく。掘り方の壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面も平らで海拔高203cmを測る。

時期は、出土遺物が小片の土器のみで詳細は不明だが、古墳時代前期の堅穴住居46に切られていることと周辺の状況から弥・後・後半と推察される。

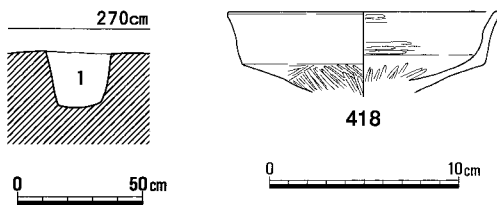
(杉山)



第166図 土壙59・60 (1/30)

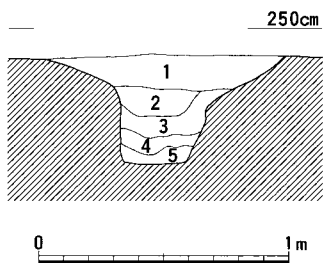
土壙60 (第63・166図)

土壙60は、調査区の南側の13R区に位置する。同時期の遺構は近隣には存在しない。土壙59の残存状況は、北東側半分がなく、南西側のみ存在する。規模は長軸長の推定が125cmで、平面形状は不整形である。深さは14cmで、海拔高では239cmになる。断面形状はA-cである。時期は弥・後。(小林)



1 黄灰色粘性微砂質土 2.5Y5/1

第167図 溝22断面図 (1/30)・
出土遺物 (1/4)



1 褐灰色粘質土 10YR5/1
2 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
3 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
4 褐灰色砂 10YR5/1
5 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3

第168図 溝23断面図 (1/30)

5 溝

溝22 (第62・167図)

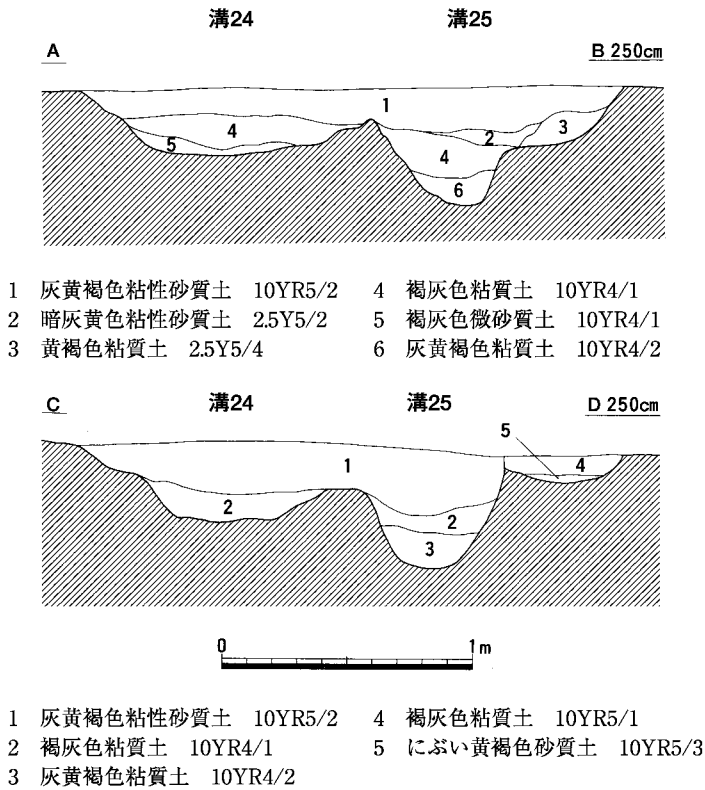
3 Q区南西部にあり、調査区の最北端に位置する溝である。北東から南西に流走するが、調査区の隅に位置するため検出できたのはごく一部である。検出面での幅約25cm、深さ約20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。土器片が少量出土し、高杯418は弥・後・IIの特徴を示す。(岡本)

溝23 (第62・168図)

4 P区東部に位置する。調査区の突出部にあたり、ごく一部の検出にとどまる。北東から南西に流下する溝で、上端幅90cm、深さ45cm前後を測り、中央部がほぼ垂直に深く掘削されている。出土遺物は土器小片のみで時期を決めがたいが、埋土や検出層位から弥生時代後期と推測される。(岡本)

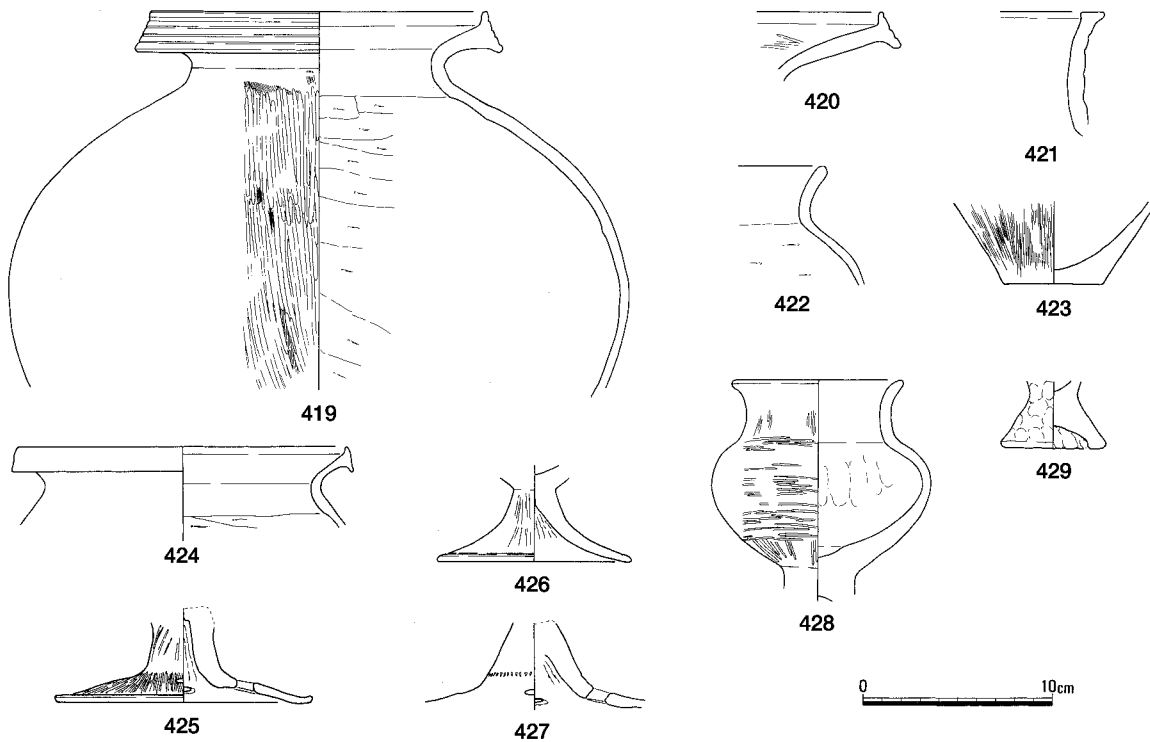
溝24・25 (第62・169図)

4 Q～5 P区にかけて、緩く蛇行しながら流れる溝である。『津島遺跡1』で報告したT10の溝4・



5と同一遺構で、溝24が溝5、溝25が溝4にあたる。2条の溝が接した形態をしているが、実際には流路が完全に一致し、最上層の埋土は共通することから本来は1条の溝と考えてよいと思われる。両者併せた上端幅は約220cm、深さは西側の溝24が約30cm、東側の溝25が約50cmを測る。全体としては、溝中央からやや東寄りを1段深く掘り窪め、両側をテラス状に残した形態を呈する。

埋土中から、壺419～421、甕422～424、高杯425～427、壺状を呈する台付鉢428、鉢の脚部429などが出土している。これらの遺物から、溝の時期は弥・後・Ⅲと考えられる。(岡本)



第169図 溝24・25断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

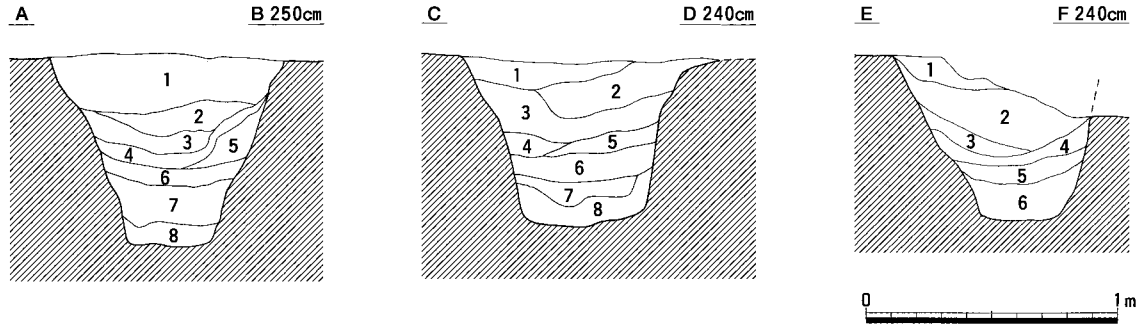
溝26 (第62・170図)

4Q～5P区にかけて、北東から南西に向け直線的に流下する溝である。一部を古墳時代の溝39、古代の溝51などに切られている。上端幅は90～100cm程度でほぼ一定し、深さは最大で約75cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面幅は30cm前後を測った。埋土は厚さ10～30cmの層が順次堆積しており、

第3章 発掘調査の概要

最下層は粘質土であった。

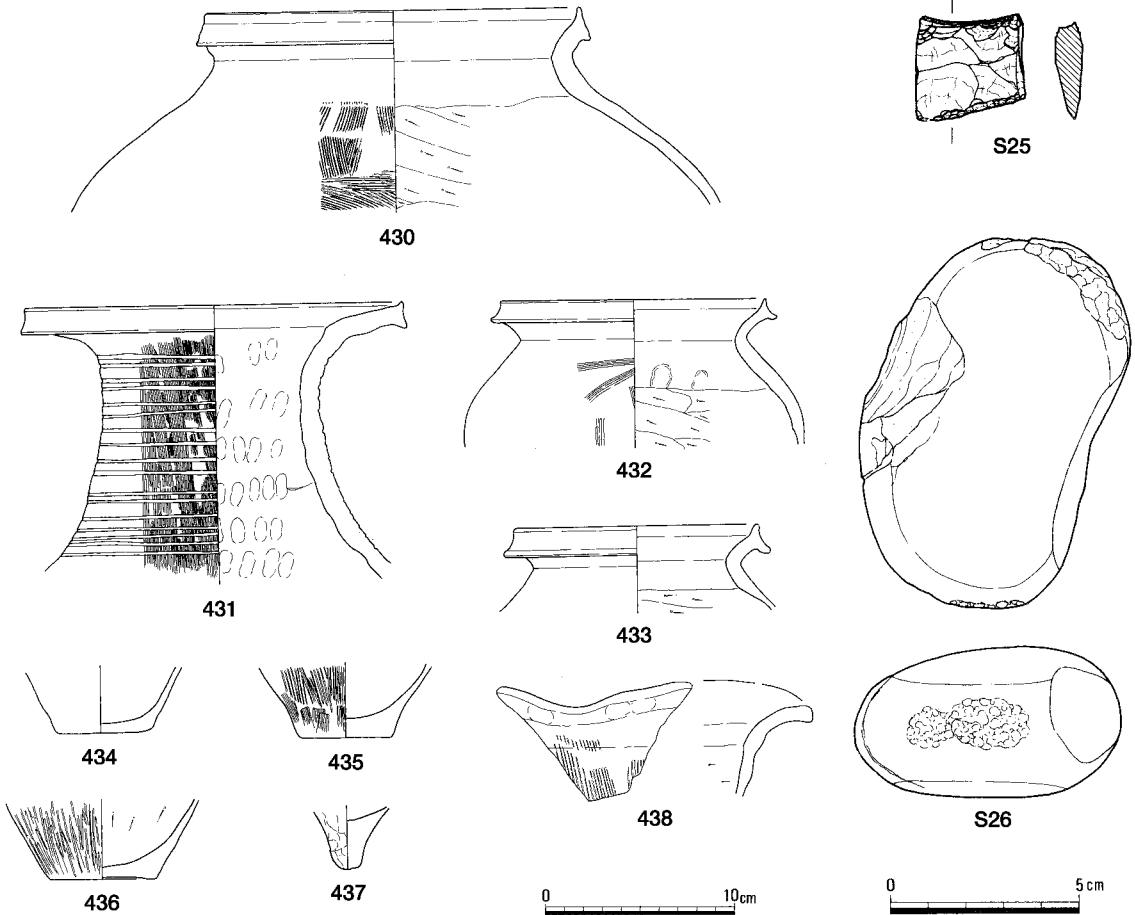
出土遺物は多くはないが、甕430～436、器種不明の土器437、片口を有する鉢438、楔形石器 S 25、叩き石 S 26などがみられる。これらの遺物から溝の時期は弥・後・Ⅱに位置づけられる。（岡本）



- 1 褐灰色粘性砂質土 10YR5/1
- 2 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
- 3 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2
- 4 灰色微砂質土 N5/
- 5 にぶい黄色微砂質土 2.5Y6/3
- 6 褐灰色微砂質土 10YR4/1
- 7 灰色粘質土 N5/
- 8 暗灰色粘土 N3/

- 1 褐灰色粘質土 10YR5/1
- 2 灰黄色粘質土 2.5Y6/2
- 3 灰色粘質土 N4/
- 4 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 5 褐灰色微砂 10YR6/1
- 6 褐灰色粘質土 7.5YR4/1
- 7 灰色微砂質土 N5/
- 8 暗灰色粘土 N3/

- 1 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 2 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 3 黄灰色砂質土 2.5Y5/1
- 4 灰色砂質土 5Y5/1
- 5 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 6 暗灰色粘質土 N3/



第170図 溝26断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

溝27 (第62・171図)

1区4R～6Q区にかけて検出した、検出長11.5m、幅160cm、深さ37cm、北東～南西方向へ流路を取る溝である。時期については、出土遺物がなく、溝31より新しく、弥・後・Iの溝32に切られている。時期は弥・後・Iであると考えられる。(時實)

溝28 (第62・171図)

4R区で検出された、北東から南西に向けて流下する溝である。溝27に切られて残りは悪く、上端幅・深さはそれぞれ最大で70cm、33cmを測った。出土遺物は土器小片のみで、図示可能な個体はない。遺物および埋土や検出層位から弥生時代後期の遺構と判断した。(岡本)

溝29 (第62・171図)

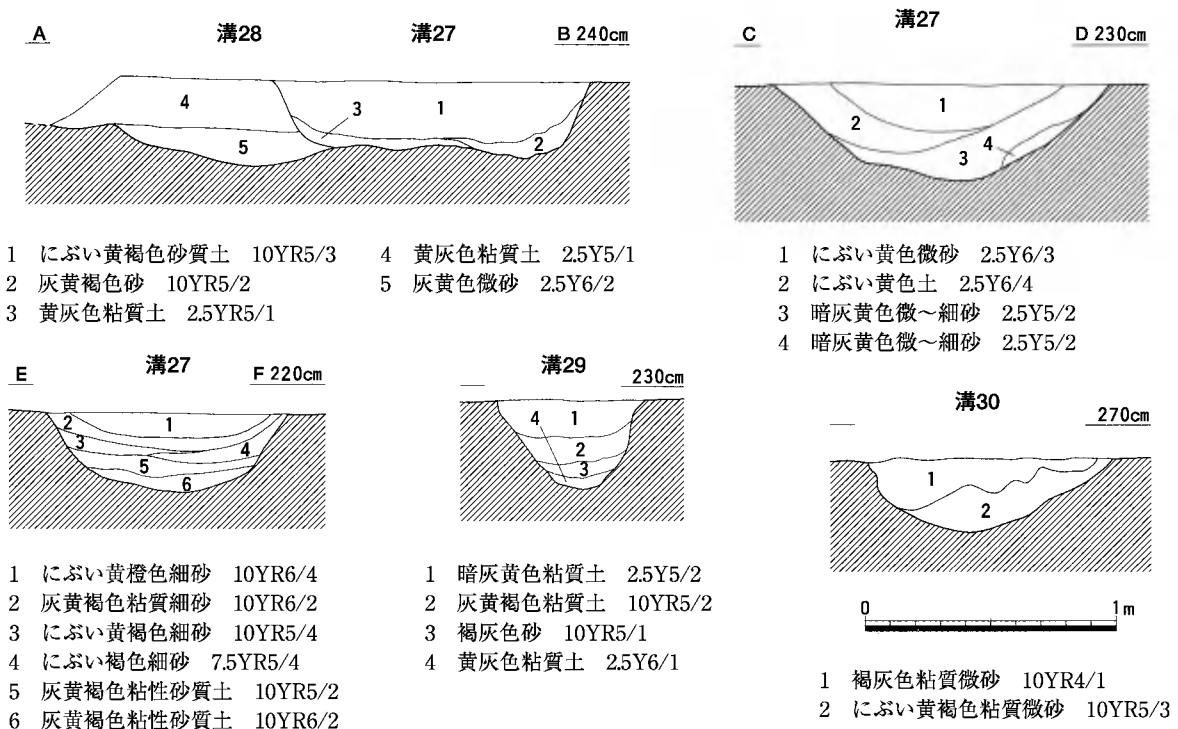
調査区東端の4R区ほかに位置する。北東から南西に向かった後、弧を描いて南南東に向かい再び調査区外に出る。重複する溝27より新しい。幅・深さはそれぞれ最大で120cm、35cmを測る。遺物が少なく時期特定が難しいが、埋土などから判断すると弥生時代後期におさまると思われる。(岡本)

溝30 (第62・171図)

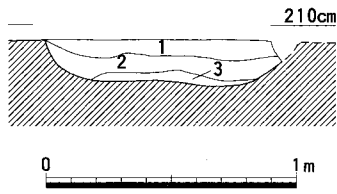
5Q区北東から南西に流れる溝で、検出面での幅80～130cm、深さは23～29cm程度を測る。底面には凹凸が見られる。土層を実測したところ以外の埋土で、第1層と第2層が混ざり合ったようすが確認できた。遺物は少量で、それらからこの溝の時期は弥生時代後期であると考えられる。(氏平)

溝31 (第62・172図)

溝31は5Q・6Q区に位置する。溝27に沿って、北東から南西の方向に流れている。幅は約130cm、深さ約20cmを測る。なお、溝内からは土器片が出土しているが図示しえなかった。溝31の検出レベルや周辺の遺構の状況から弥生時代後期の溝と考えられる。(金田)



第171図 溝27～30断面図 (1/30)

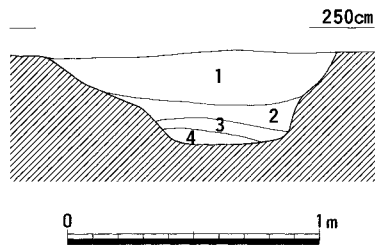


- 1 明褐色砂質土 7.5YR7/1
- 2 にぶい橙砂質土 7.5YR7/4
- 3 にぶい褐砂質土 7.5YR6/3

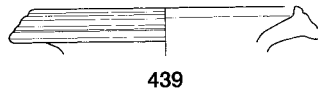
第172図 溝31断面図 (1/30)

溝32 (第62・173図)

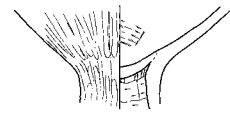
溝32は 6 P・6 Q区に位置する。幅約120cm、深さ約35cmを測る。溝32は、調査区の中央付近では東から西に向かって流れているが西側でやや流路を若干南よりにかえている。溝32から弥生土器が出土している。439は壺である。口径13.8cmを測る。440～441は高杯である。いずれも脚部を中心に残存しており、円板充填技法が用いられている。442は台付鉢である。これらの遺物および溝33から、溝32は弥生時代後期前半頃に営まれたものと考えられる。(金田)



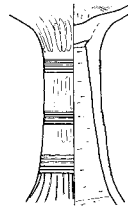
- 1 にぶい黄褐色粘性砂質土 10YR6/4
- 2 灰黄褐色粘性砂質土 10YR5/2
- 3 褐灰色細砂 10YR6/1
- 4 灰白色細砂 2.5Y7/1



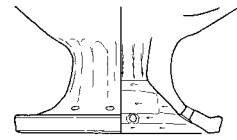
439



441



440



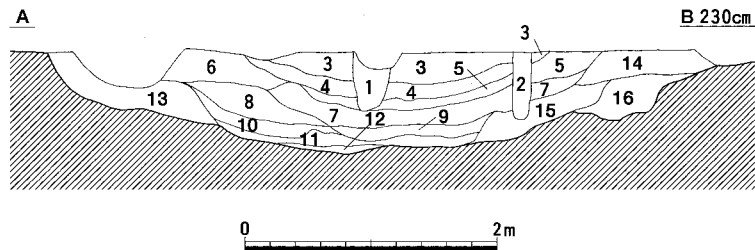
442



第173図 溝32断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

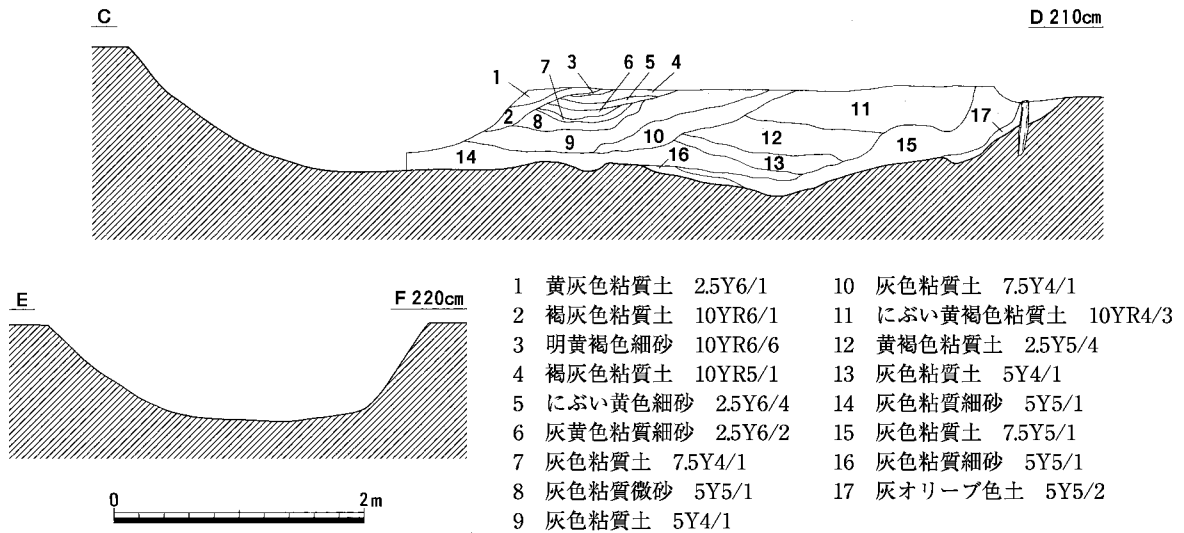
溝33 (第62・174～178図、図版5・6)

5 Q～7 P区で検出された幅の広い溝で、蛇行しながら北東から南西に流下している。弥生時代中期に属す溝12～14と重複し、両者の関係は連続的で本来明確な断絶は捉えがたいが、ここでは弥生後期に属す部分について報告する。土層断面は、堆積状況や出土遺物を基に後期と推測される部分のみを掲載しているが、中期と峻別できている確証はない。断面図から分かる通り、埋土の堆積状況は複雑で、一度ではなく数回に分けて埋没した、ないしは徐々に流路位置が移動した状況がうかがわれる。



- | | | |
|-----------------------|---------------------|-------------------|
| 1 灰黄色砂質土 2.5Y6/2 (柱穴) | 8 にぶい黄色細砂 2.5Y6/3 | 15 灰色粘質微砂 7.5Y5/1 |
| 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 (柱穴) | 9 黄灰色粘質細砂 2.5Y5/1 | 16 灰色粘質微砂 7.5Y5/1 |
| 3 にぶい黄褐色粘質微砂 10YR5/3 | 10 灰色粘質細砂 7.5Y4/1 | |
| 4 黄灰色粘質土 10YR5/2 | 11 灰色粘質細砂 7.5Y4/1 | |
| 5 灰色粘質土 N4/ | 12 灰色微砂 5Y5/1 | |
| 6 灰黄褐色粘質細砂 10YR4/2 | 13 黄褐色粘質土 2.5Y5/3 | |
| 7 黄灰色粘質細砂 2.5Y5/1 | 14 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3 | |

第174図 溝33断面図① (1/60)

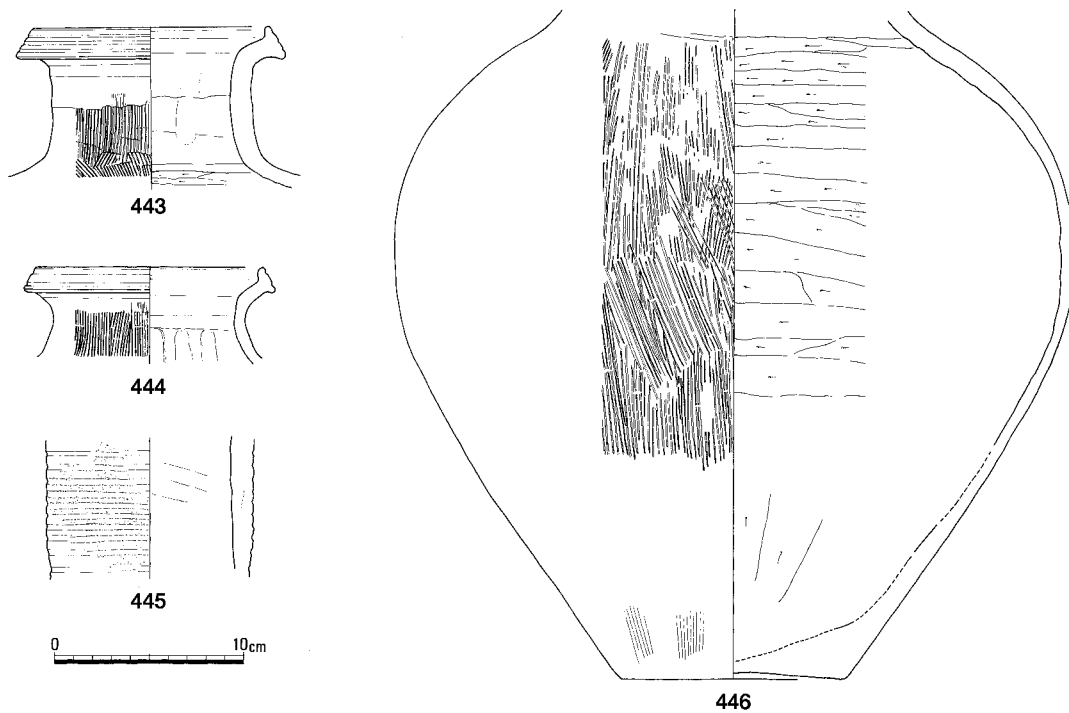


第175図 溝33断面図② (1/60)

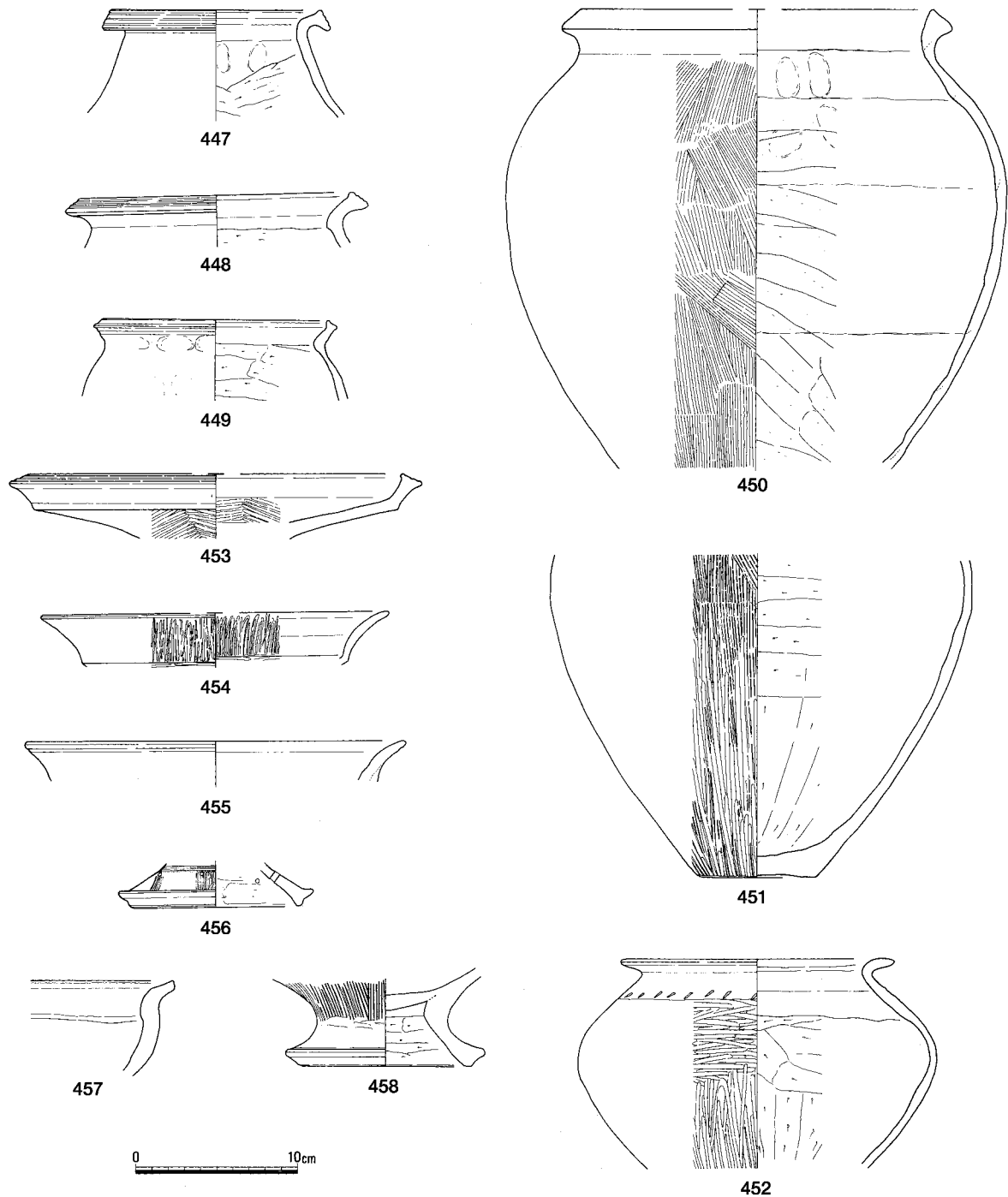
本来、時期ごとに細別して考えるべきであるが、調査時に各地点間の土層の対応関係を十分に把握できなかったため、ここでは溝33と一括して記述する。

溝の規模は、上端が幅3～6.5m、深さは最大で約1mを測る。壁面の傾斜は比較的緩く、断面形は浅い椀状を呈する。ただ、これは上述の通り時期を異にする複数の溝が重複した結果と考えられ、単一の溝の状況を示すものではない。したがって、実際に溝が機能した各時期においては幅・深さ・位置はさまざまに変化したものと考えられる。なお、肩の一部で杭の存在が確認されたが、この溝に本来伴うものかどうか定かでない。

出土土器は中期に比べてかなり少なく、残存率も悪い。出土層位としては、調査時に「溝45a」と



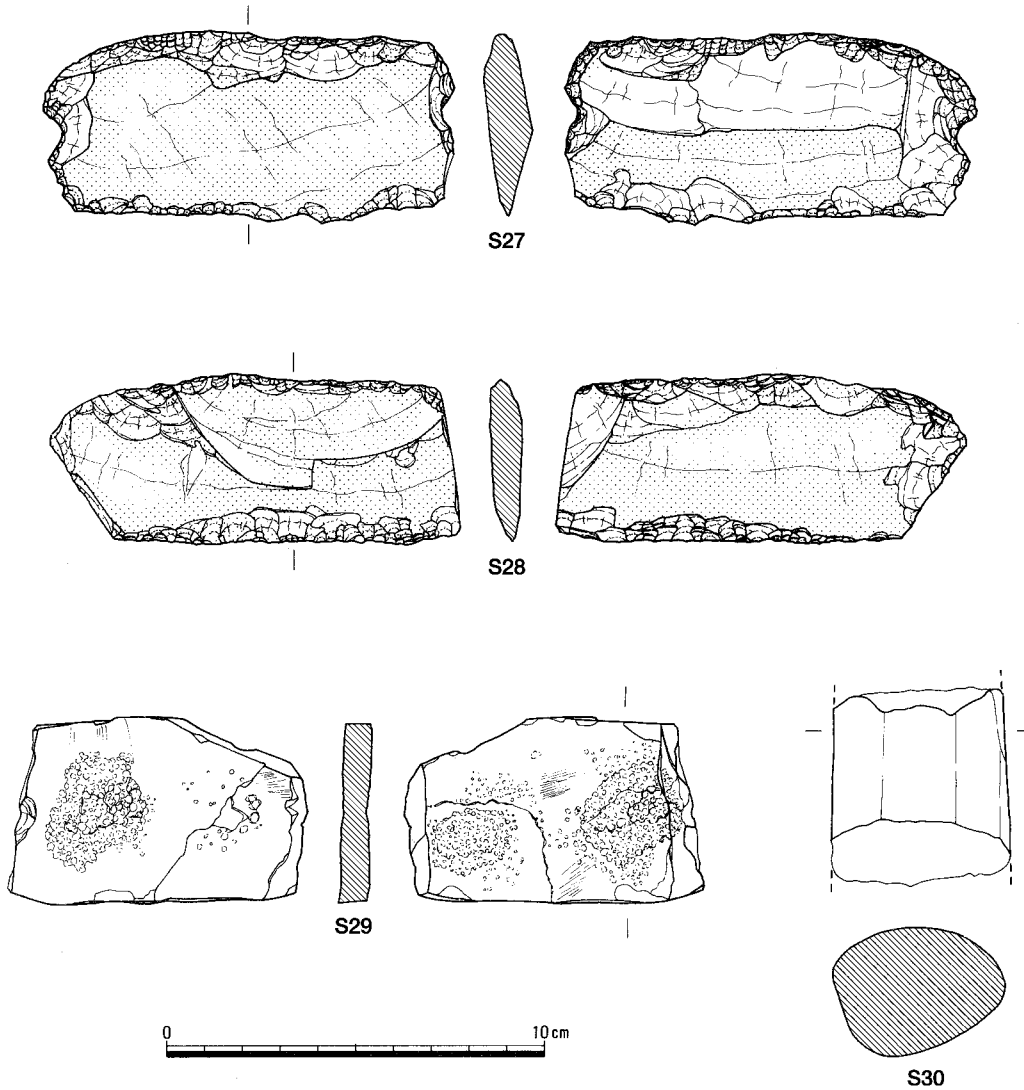
第176図 溝33出土遺物① (1/4)



第177図 溝33出土遺物② (1/4)

呼称していた層位からの出土量が最も多い。443～446は壺、447～451は甕、453～456は高杯、452・457・458は鉢である。時期的には弥・後・Ⅰ～Ⅱが多いが、高杯454などには弥・後・Ⅲに降る可能性のあるものもあり、時期幅が認められる。

石器は図示した4点が出土している。S27・28はサヌカイト製の打製石包丁であり、S27は両端に紐掛け用の抉りが入る。いずれも表面には珪酸分が付着して光沢を呈しているが、S28は刃部への付着が少なく、刃部の再調整がなされたようである。S29は薄い板状の石を用いた叩き石で、両面に敲打痕が残る。S30は残りが悪く器種は判然としないが、側面の一部に擦痕が観察される。



第178図 溝33出土遺物③ (1/2)

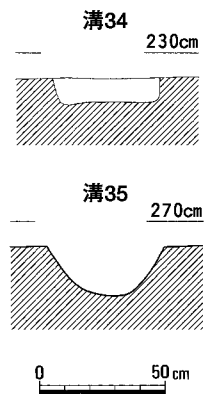
以上の遺物から判断すると、この溝は中期から引き続いて使用され、流路の変更や埋没を繰り返して遅くとも弥・後・Ⅲの段階で完全に廃絶したものと考えられる。性格としては中期同様水路と推測される。具体的な用途までは想像の域を出ないが、下流に存在が予想される農地への灌漑用水とみるのが妥当なように思われる。(岡本)

溝34(第63・179図)

12R区の西端のみで平面的に検出でき、そこから南への繋がりは不明である。北への繋がりは竪穴住居18の下を通り、土壙39の方向へやや東に逸れながら繋がっていくことをトレンチで確認した。出土遺物はないが、他の遺構との関連から弥・後・前半頃と推察される。(杉山)

溝35(第63・179図)

12R区中央で、北西から南東方向の向きで検出され、南に向かって次第に浅くなり終わる。北については竪穴住居18の床下までは検出できたが、それより北については不明で、溝34との関係も明確でない。時期は周辺の状況から弥・後・前半と推察される。(杉山)



第179図 溝34・35断面図 (1/30)

6 河道

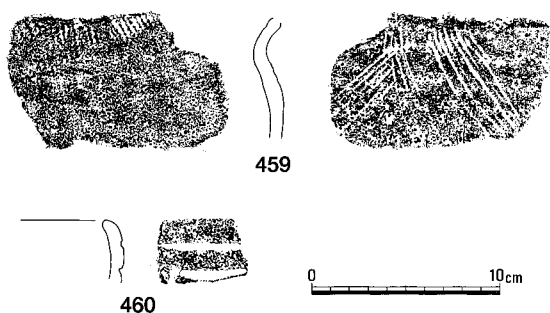
河道1（第180～393図、図版14～28・55～58）

メインスタンド調査区の中央部（ほぼ2区に相当）において検出された、北東から南西に流下する自然河道である。検出面での幅は約50m、検出面からの深さは中央部での調査掘削が湧水のため中断を余儀なくされたため正確には捉えられないが最大で5m以上に及んでいる。

当時の津島遺跡周辺は、集落の立地する微高地間を多数の河川が北東から南西へと貫流しており、この河道もそのような河川の一つに数えられる。周辺での調査成果をも加味して旧流路を復元すると、第3図に示したように北東方向から現在の総合グラウンド内に流入し、陸上競技場内で南へ支流を分かち、本流は南池付近で南に折れた後、現在ひょうたん池のある野球場の東側で2条に分岐するという流路を取っていたものと想定できる。もちろん、時期による流路の変更や規模の拡大・縮小も考えられるため、終始この流路が一貫して存在したとは断定できない。流路の兩岸には幾つもの集落域が接し、人々の生活と密接な関連を有する河道であったといえよう。河道内からの大量の出土遺物もそれを裏付けている。なお、出土遺物の中に縄文後期土器459・460があり、磨滅が著しいことから上流に位置する遺跡からの流れ込みとみられる。

河道1の出現時期は、弥生後期の集落構造を考えるうえで重要なポイントと思われるが、今回の成果だけからは特定が困難である。しかし、後述する遺物の出土状況から判断すれば、少なくとも弥・後・Ⅱ頃の段階では出現していたと見積られる。続く弥・後・Ⅲ～Ⅳの段階では兩岸に各種の施設が構築され、出土遺物もこの時期のものが最も多い。その後も、土砂の堆積により深度・幅を徐々に減じつつも長期にわたって存続し、最終的には7～8世紀頃に至って完全に消滅したものと考えられる。古墳時代の状況については第6節を参照されたい。

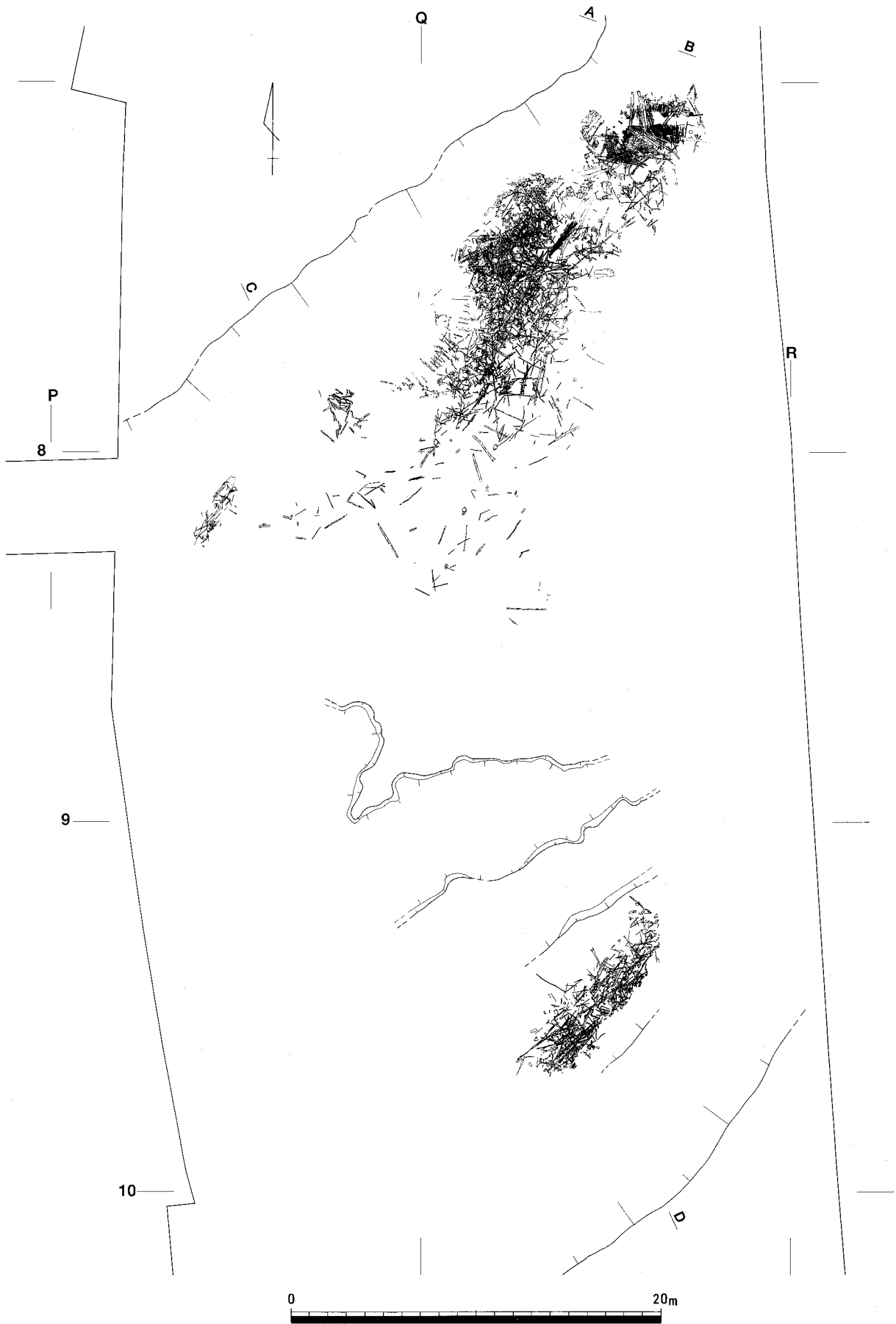
河道内の堆積状況は極めて複雑であり、全体を統一的に把握するのは困難であった。第182・183図には北端部（A-B）および中央部（C-D）での断面状況をそれぞれ示している。中央の断面図では、弥生後期と古墳時代との境界その他を模式的に示しているが実際には曖昧であり、図はあくまで概略と考えていただきたい。埋土は基本的に砂質土ないし砂であり、層位によっては粘土や植物遺体を含んでいる。両図に示すように、弥生後期の中でも幾つかの不連続面が認められるため、流路の変遷があったものと考えられる。第183図に示した断面付近では、相対的に上位の層を「新段階」、下位の層を「古段階」と大別し、可能な範囲で遺物の層位別取り上げを行った。ただ断面設定位置から離れるに従って層位の対応が困難となるため、厳密な分別は不可能であった。第184～186図に示すように、古段階では弥・後・Ⅱの時期、新段階では弥・後・Ⅲ～Ⅳの時期の遺物が中心を占めており、あくま



第180図 河道1出土縄文土器（1/4）

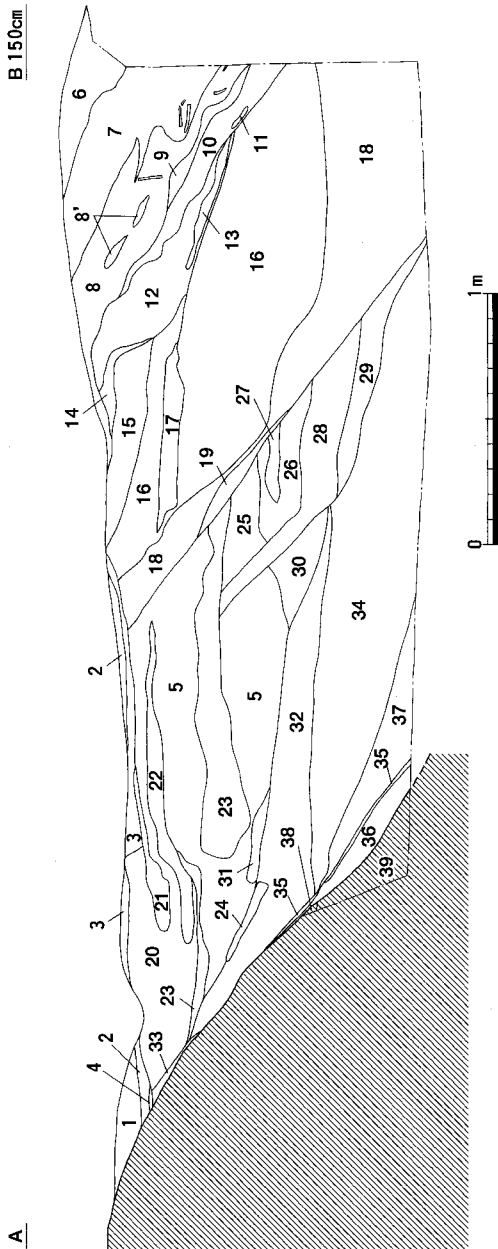
で大まかな傾向としては埋没過程と遺物とがほぼ対応していると考えられる。量的には古段階の遺物は少なく、後述する建築部材内出土土器なども層位的には新段階に所属する。

河道の兩岸部においては、弥・後・Ⅲ～Ⅳの時期に属する各種の遺構が検出されている。北岸部では、護岸施設と思われる杭列、足場状の遺構、4か所の小規模な貝塚が認め



第181図 河道1 遺物出土状況 (1/300)

- 1 オリーブ灰色砂質土 (中砂) 2.5GY6/1
- 2 青灰色砂質土 (細砂) 5BG6/1
- 3 灰黄褐色砂質土 (中砂) 10YR6/2
- 4 青灰色砂質土 (細砂) 5BG6/1
- 5 明緑灰色砂質土 (中砂) 10GY6/1
- 6 緑灰色弱粘質土 (シルト) 10G6/1
- 7 青灰色粘質土 (シルト) 5BG6/1
- 8 青灰色弱粘質土 (微砂) 10BG5/1
- 8' 青灰色弱粘質土 (微砂) 10BG5/1
- 9 緑灰色弱粘質土 (微砂) 10GY6/1
- 10 青灰色弱粘質土 (微砂) 10BG6/1
- 11 緑灰色砂質土 (細砂) 10GY6/1
- 12 緑黒色砂質土 (細砂) 5G2/1
- 13 青灰色弱粘質土 (シルト) 5BG6/1
- 14 緑灰色砂質土 (細砂) 10GY6/1
- 15 緑灰色砂質土 (細砂) 10GY6/1
- 16 明緑灰色砂質土 (細砂) 10GY7/1
- 17 緑灰色砂質土 (細砂) 10GY6/1
- 18 青灰色粘質土 (微砂) 5BG6/1
- 19 緑灰色粘質土 (細砂) 7.5GY6/1
- 20 明緑灰色砂質土 (中砂) 10GY5/1
- 36 明緑灰色弱粘質土 (細砂) 7.5GY7/1
- 37 明オリーブ灰色粘質土 (細砂) 2.5GY7/1
- 38 明オリーブ灰色弱粘質土 (細砂) 5GY7/1
- 39 緑灰色砂質土 (細砂) 5G5/1

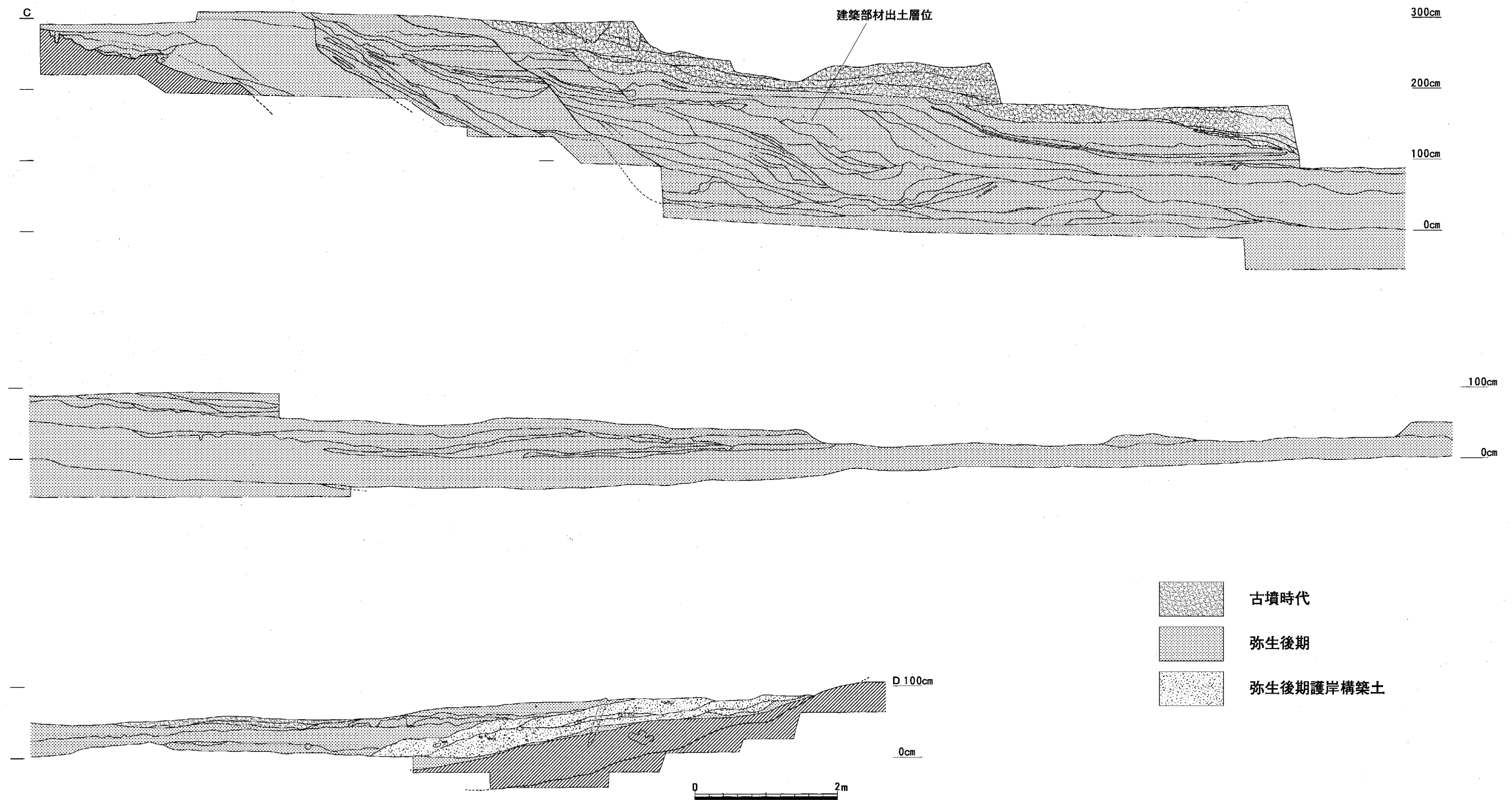


- 21 緑灰色砂質土 (細砂) 10GY6/1
- 22 青灰色粘質土 (シルト) 5BG3/1
- 23 青灰色粘質土 (シルト) 5BG6/1
- 24 青灰色粘質土 (シルト) 5BG6/1
- 25 明緑灰色砂質土 (細砂) 10GY7/1
- 26 緑灰色砂質土 (シルト) 7.5GY6/1
- 27 明緑灰色砂質土 (細砂) 10GY7/1
- 28 緑灰色弱粘質土 (微砂) 7.5GY6/1
- 29 明緑灰色砂質土 (細砂) 7.5GY7/1
- 30 明緑灰色砂質土 (中砂) 10GY7/1
- 31 青灰色粘質土 (シルト) 5BG6/1
- 32 明緑灰色砂質土 (中砂) 7.5GY7/1
- 33 緑灰色砂質土 (細砂) 7.5GY6/1
- 34 灰色砂質土 (細砂) 10Y6/1
- 35 緑灰色弱粘質土 (細砂) 10G6/1

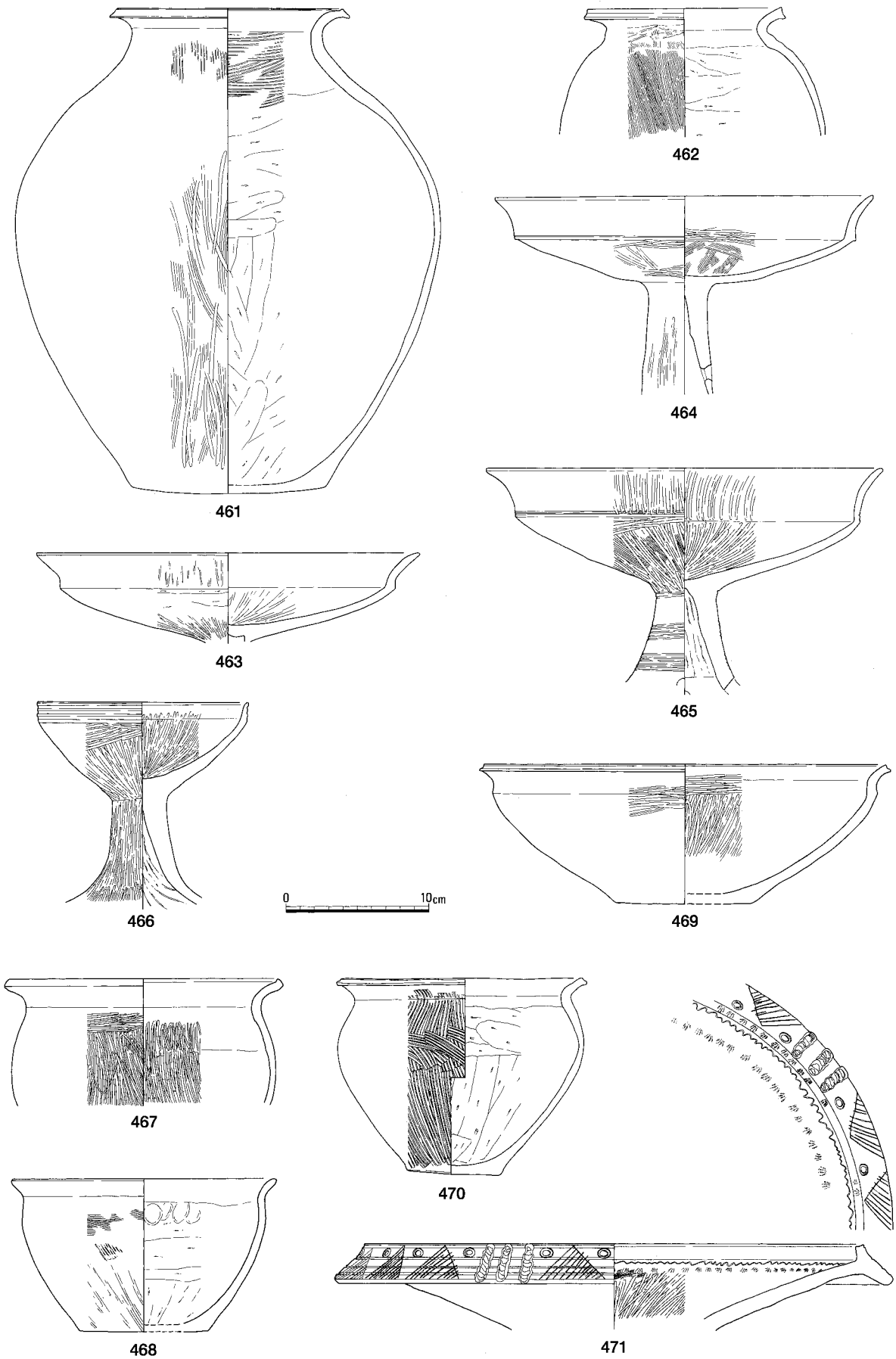
第182図 河道1層部断面図 (1/30)

られ、南岸部では斜面部に盛土して多数の杭を打ち込んだ護岸遺構が良好な状態で残存していた。これらの遺構は、この河道が生活空間の中で占めていた重要な位置を物語るものといえる。なお、貝塚の構成貝種にはヤマトシジミ・ハイガイ・マガキ・カワニナなどがあり、食生活の一端がうかがわれるとともに河口域にほど近い本遺跡の立地条件がよく反映されている。

さて、この河道で最も特筆すべきは、南北両岸部から出土した大量の木製品類である。これらは、先の遺構群とほぼ同一層位内に折り重なるように堆積し、残存状態の良い個体が目立つことから比較的近い場所から投棄されたと推測される。その内容は梯子・柱・蹴放しなどをはじめとする建築部材のほか、農耕具・食具・武具など多岐にわたり、当時の建築・木工技術を今に伝える貴重な資料である。建築部材については宮本長二郎氏より復元案の玉稿をいただいた。また、木製品と同一層位を含め河道内各所から出土した土器類は約1,000箱にも及んでいる。主体をなすのは後半期のもので、保存状態の良好な個体が多い。また、特



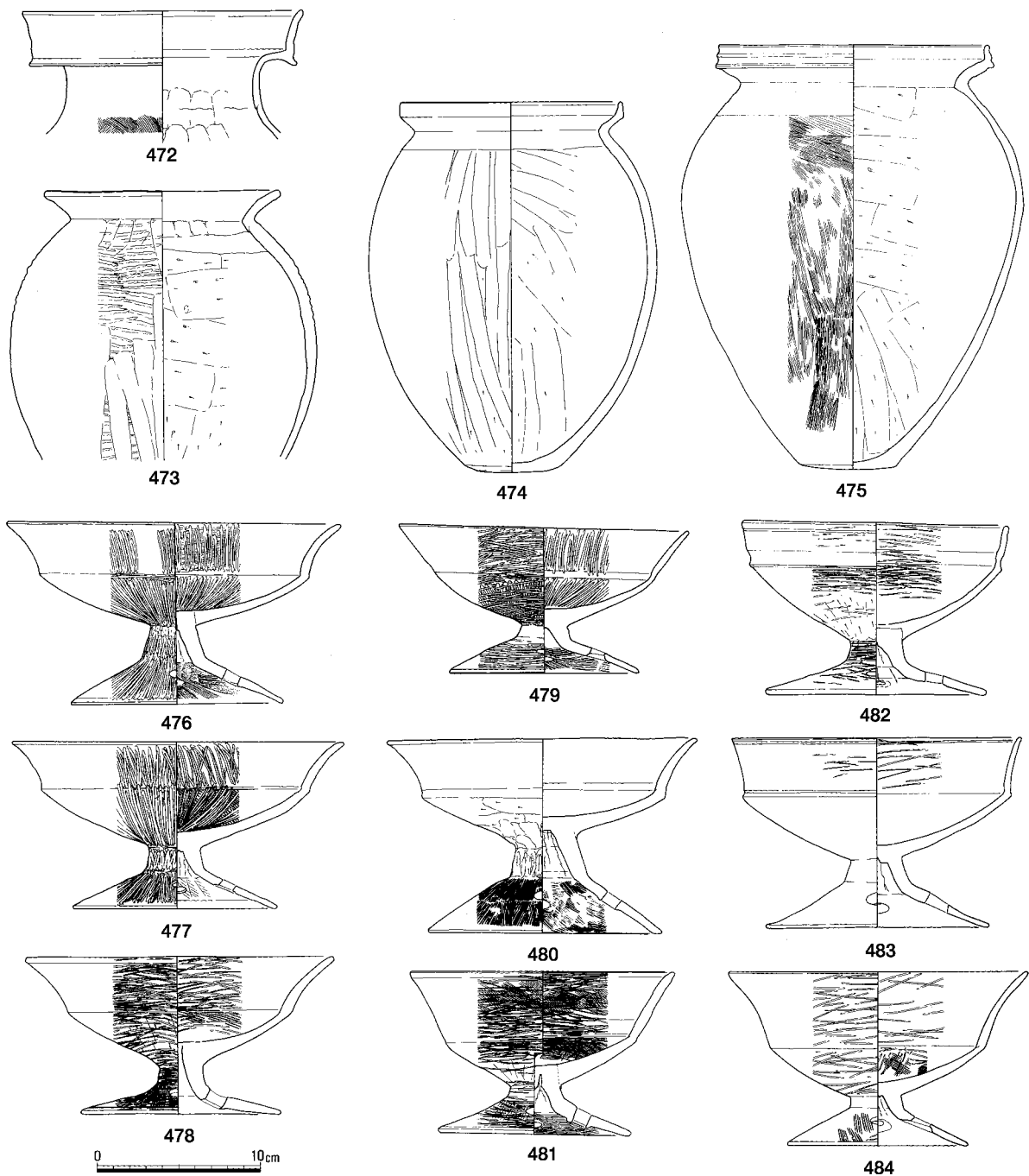
第183図 河道1 中央部断面図 (1/60)



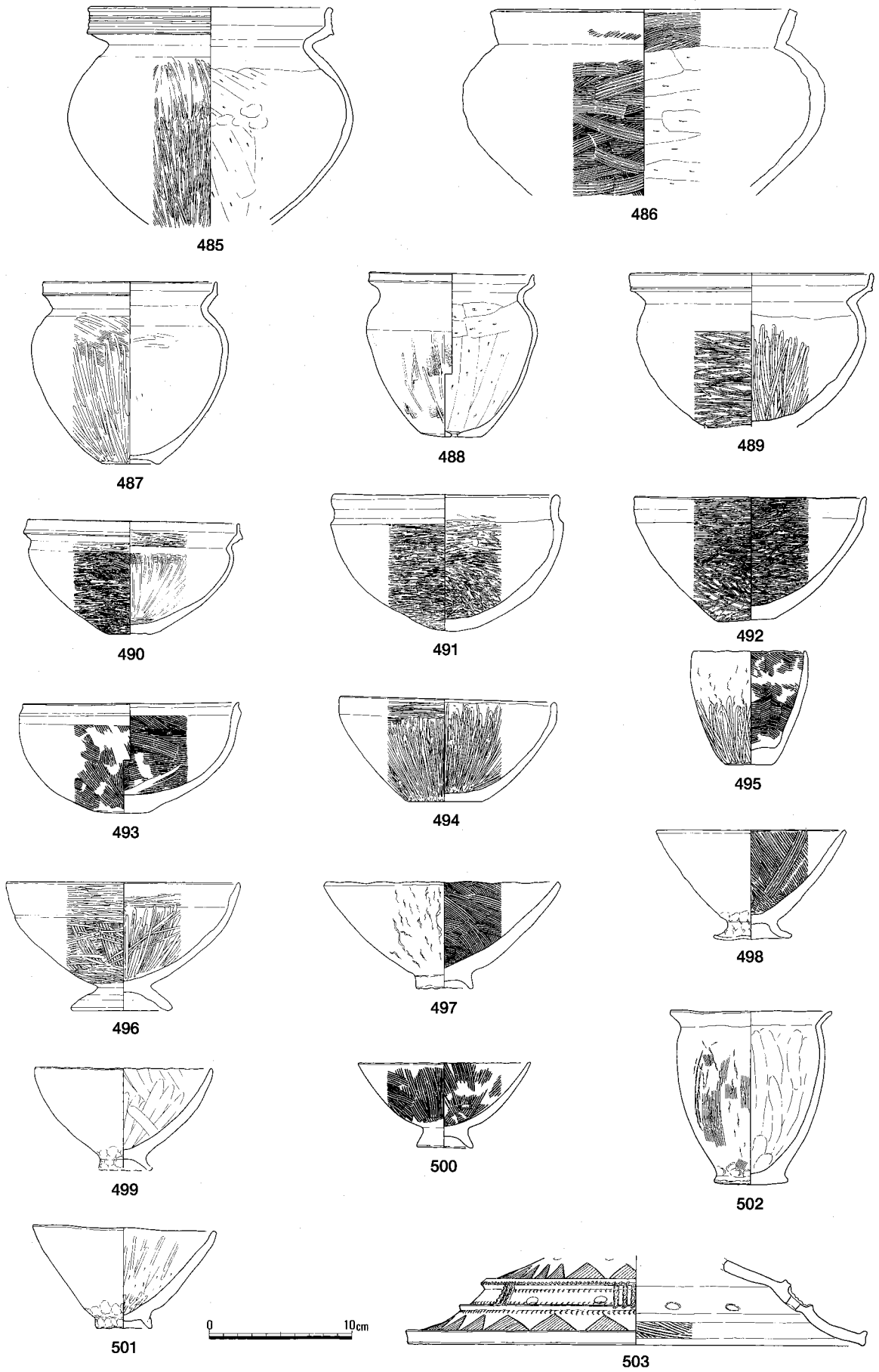
第184図 河道1 出土遺物（古段階）（1/4）

殊器台片や日常土器と同じ胎土を用いた装飾器台、卜骨・刻骨など、祭祀的性格の強い遺物の出土も注目される。

出土遺物の扱いであるが、木製品とそれに伴う土器については、現地で1/10の実測図を作成するとともに主要なものには番号を付して取り上げたため出土地点の特定が可能である。それ以外の土器類も、出土層位と極力対応させる意図で「灰色粘質土」「暗褐色粘質土」などと現地で出土層位を細分して取り上げていた。しかしながら、整理作業の時点で土器に注記されている層位名と土層断面図との照合が極めて困難であったため、遺物は出土地点と無関係に器種ごとの掲載とした。木製品については、出土点数が膨大な上に大形品の掲載は多くの紙数を要するため、加工の顕著でない材木類はかなり割愛したことを断っておく。 (岡本)



第185図 河道1 出土遺物（新段階）① (1/4)

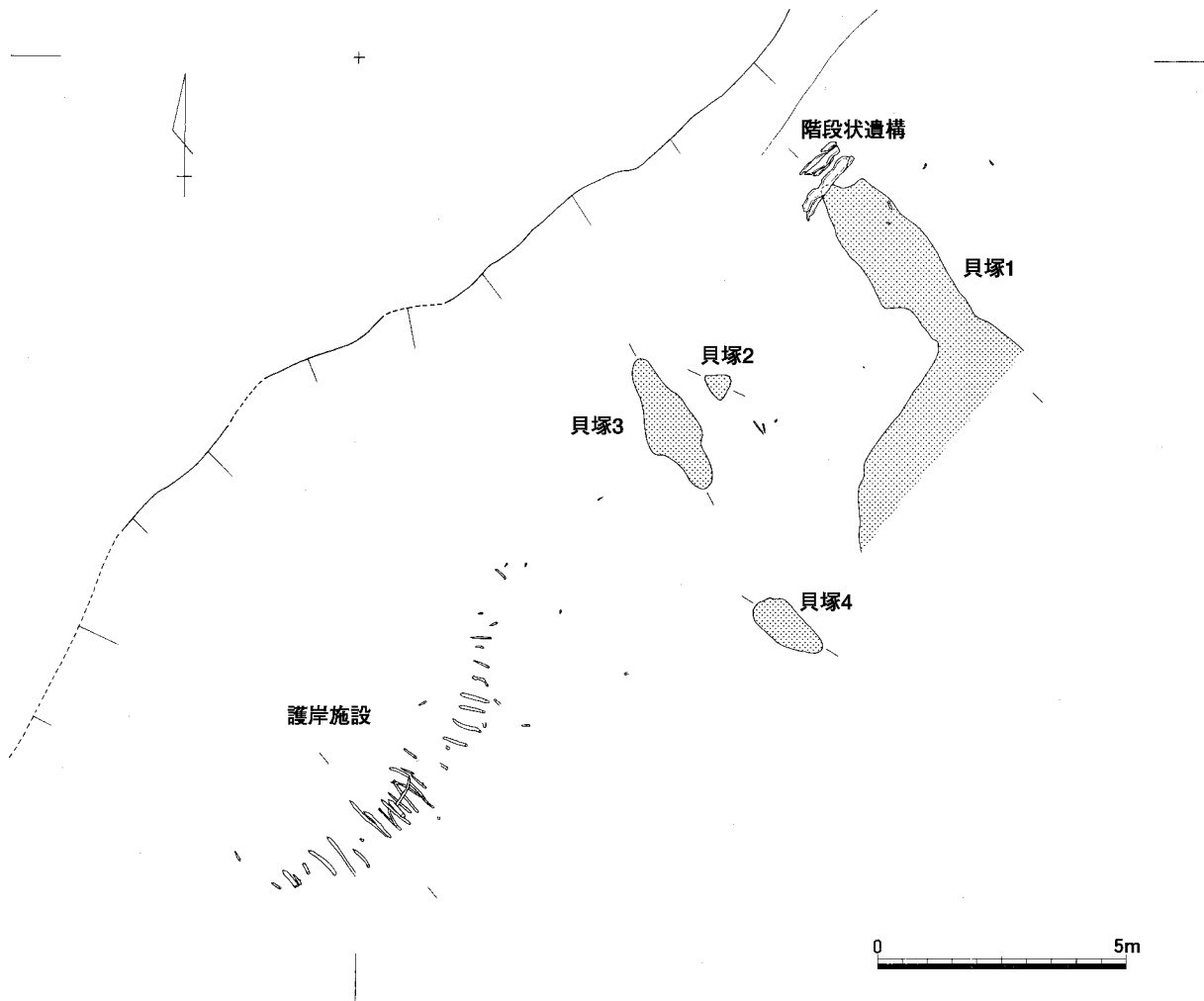


第186図 河道1出土遺物（新段階）②（1/4）

河道1北岸内遺構（第187～196図、図版15）

河道1北岸では貝塚、階段状遺構、護岸施設などの遺構が検出された。貝塚は北岸の4か所で貝等の集積層がみられ、いずれも木製品等の集積層よりも下層の部位で出土した。貝塚では貝塚1が最大のものである。貝塚1は階段状遺構を伴い、長期にわたり貝等の廃棄が行われたと考えられるが、その他は廃棄された貝等の量も少なく、一時的なものであったと推定できる。護岸施設としては打ちつけられた杭列がある。杭列は検出された河道1北岸の中央付近に位置する。杭の中には木製品集積層の上から打ち付けられたものが存在していたことから、木製品等の集積中あるいは集積後に設置された可能性がある。以上から、河道1北岸の遺構は貝塚・階段状遺構が早い段階に形成され、後に護岸施設が営まれたものと判断でき、弥生時代後期後半期に比定することができよう。

貝塚1は階段状遺構の下部から長さ5.6mを測る貝層であり、厚い箇所では約30cmを測る。貝塚1は階段状遺構から南東に広がり、幅約150cmを測るが、階段状遺構から4m下付近で南西の方向に広がっている。これは、廃棄された貝の一部が河川の流れにより移動した結果と推測できる。貝塚は残存状況が良好であり、貝類の量も多いことから、階段状遺構が存在する付近から長期にわたって貝等を廃棄した貝塚であるといえる。貝塚1の貝類は可能な限りすべて取り上げ洗浄し、選別を行った。貝塚



第187図 河道1内遺構図（貝塚1～4・護岸施設・階段状遺構）（1/150）

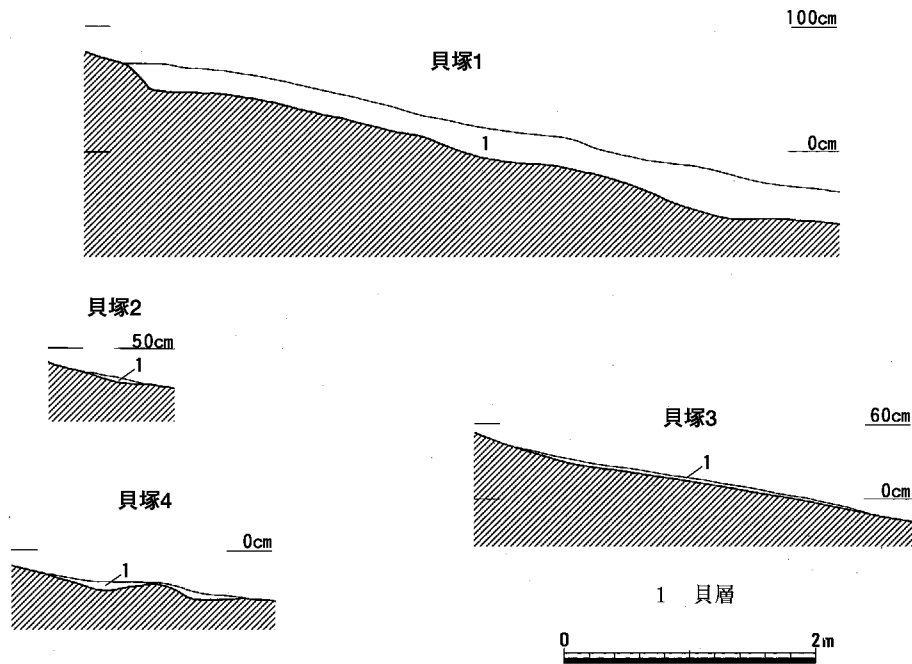
1に含まれている貝類は、その大部分をハイガイ・ヤマトシジミが占めるが、その他にマガキなどの貝類が混ざる。また、動物の骨類等も出土し、魚類、爬虫類、哺乳類等に属する骨も検出された。それらの詳細は付載の鑑定結果に報告している。貝層の中には弥生土器の破片が混ざっており、長頸壺、甕・高杯・鉢・脚付直口壺などが出土しており、おおむね弥生時代後期後葉に属するものである。その他、骨鏃や鉄片が出土している。

貝塚2は貝塚3の東に位置する、全長約50cm、貝層の厚さ約4cmの小規模なものである。貝層はハイガイ・ヤマトシジミを主体とするが、貝類に混ざって、若干の弥生土器片と耳栓が出土している。貝塚2の時期は弥生時代後期末葉と考えられるが、その規模から一時的な廃棄場であった可能性が高い。

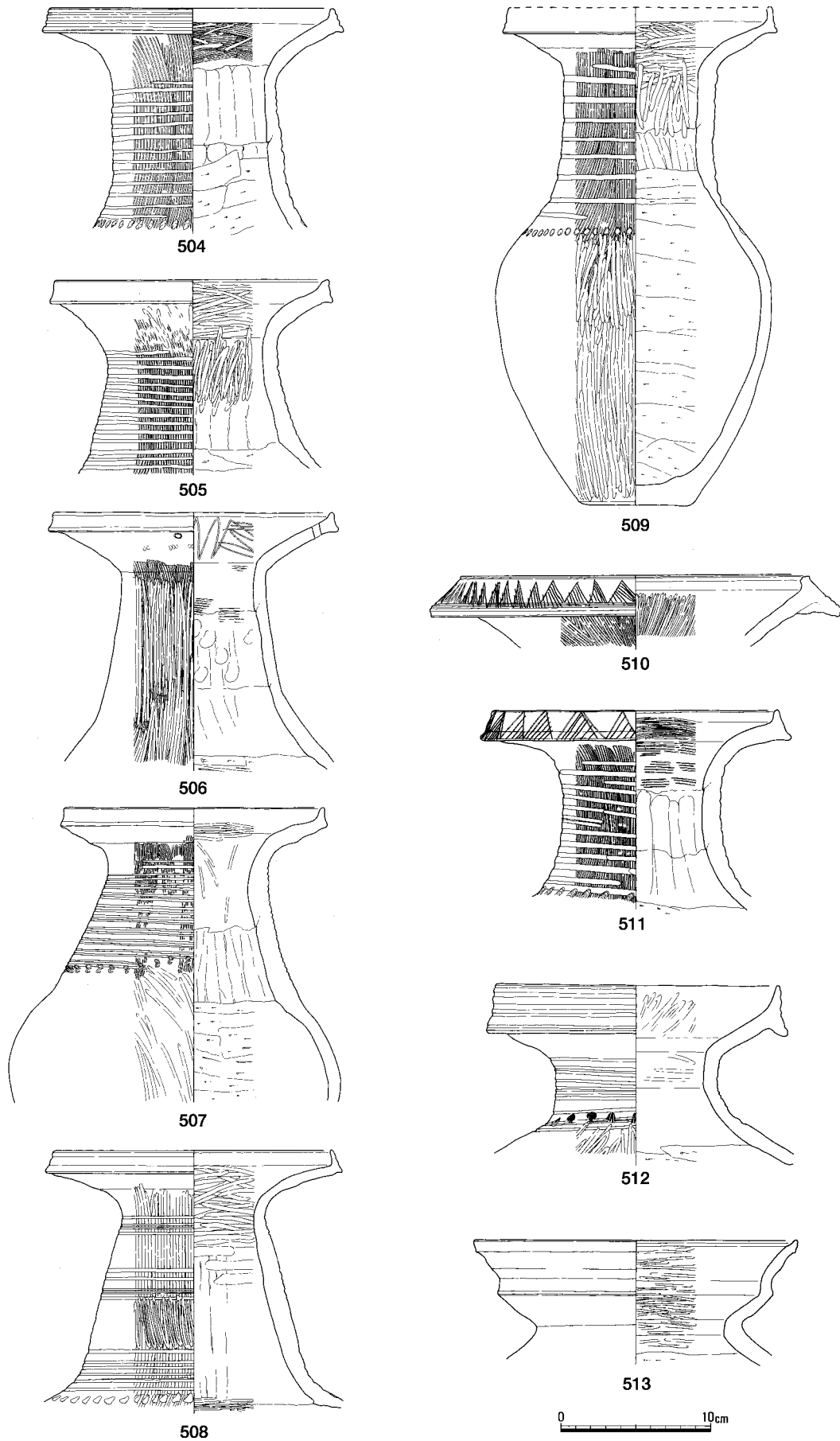
貝塚3は長さ270cm、貝層の厚さ約2cmの薄い貝層である。貝類の存在する範囲は広いが、貝層自体は薄く、残存状況も良くない。本来はもっと厚い貝層の堆積があったものと思われるが、上面の貝類は流出して失われたものと考えられる。ハイガイ・ヤマトシジミを主体とする。若干の弥生土器と鉄片が出土している。弥生時代後期後葉に属するものと考えられる。

貝塚4は長さ160cmを測る。ハイガイ・ヤマトシジミを主体とし、約8cmの貝層が残存していた。他の貝塚よりも河道の中央に近い位置で出土し、貝層を検出したレベルも低い。あまり規模が大きなものではなく、一時的な廃棄場であった可能性が高い。貝類に混じって弥生土器片が出土した。これらの土器から貝塚4の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

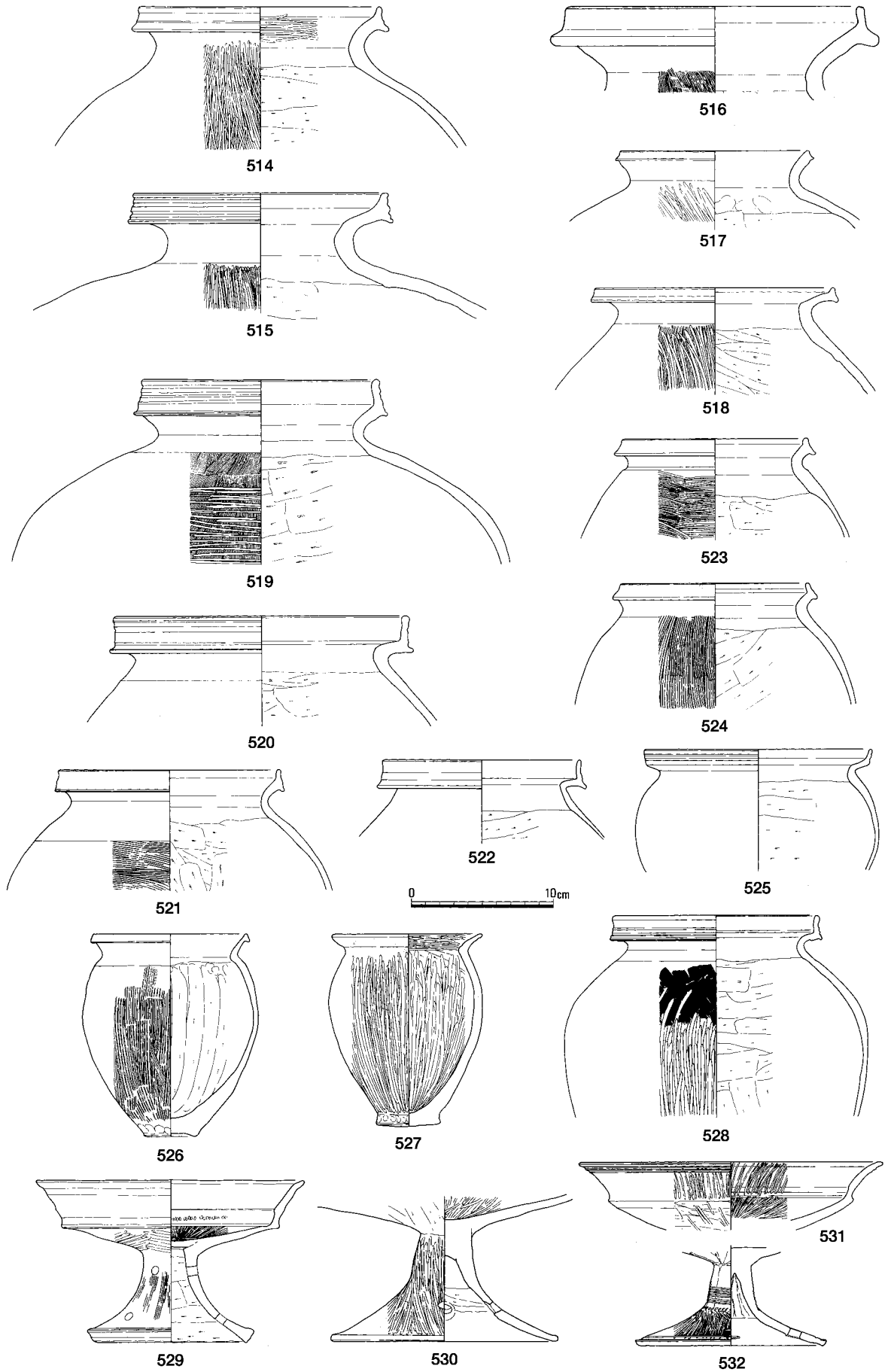
階段状遺構は貝塚1の上段に位置する。残存状況が悪く部材を取り上げることはできなかったが、最低2枚の板を上下に並べて、2段の階段状の施設を造っている。上段部で長さ約100cm、幅33cmを、下段部で長さ155cm、幅27cmを測る。板材は腐朽が激しく、詳細な観察はできなかったが、複数の板材が利用されている可能性もある。これらの部材の下には多くの杭や棒材がみられた。全体的に乱雑



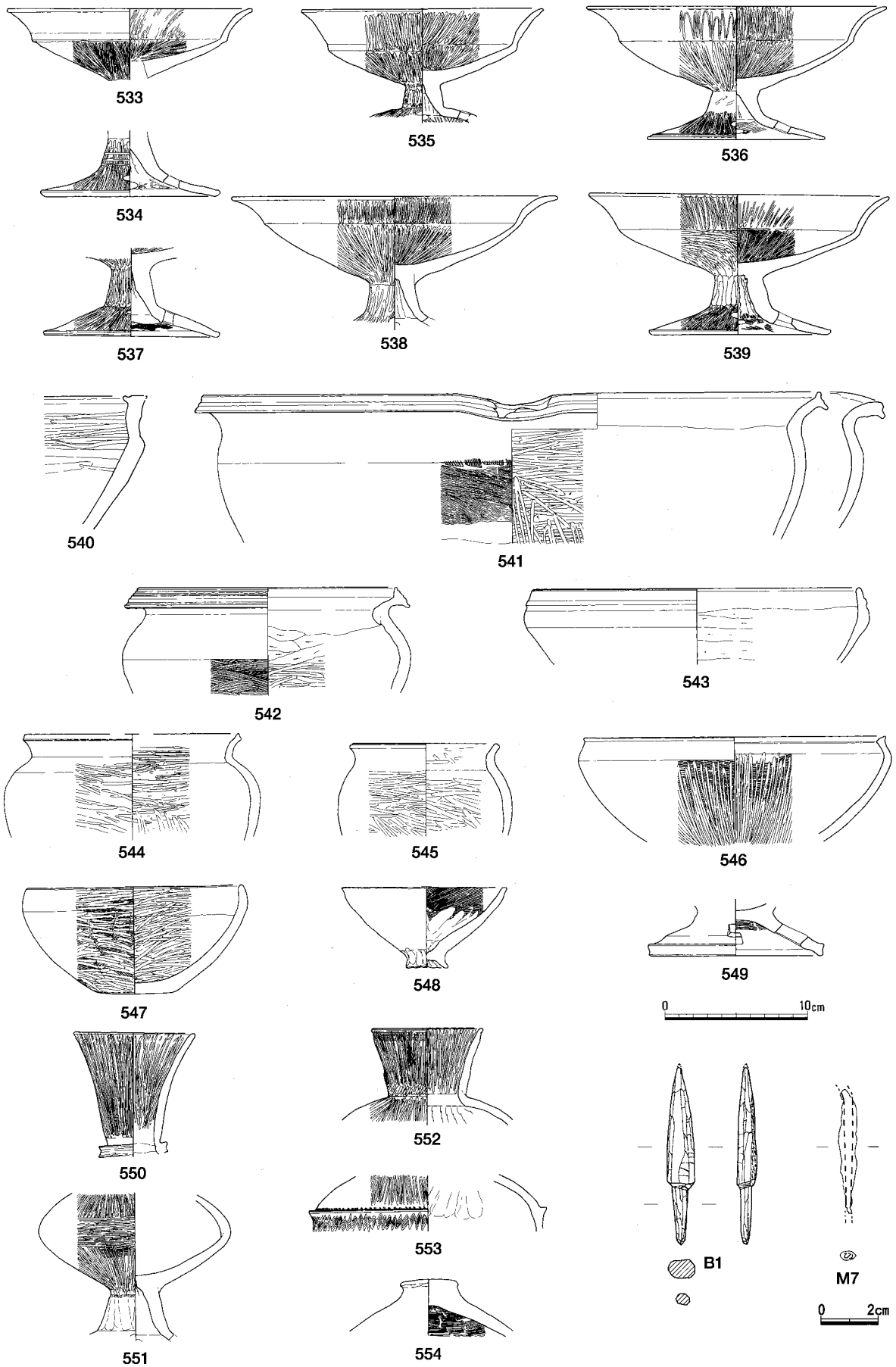
第188図 貝塚1～4断面図 (1/60)



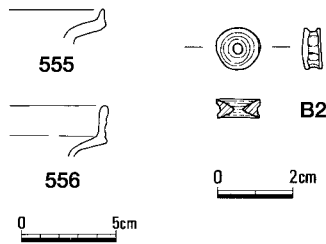
第189図 貝塚1 出土遺物① (1/4)



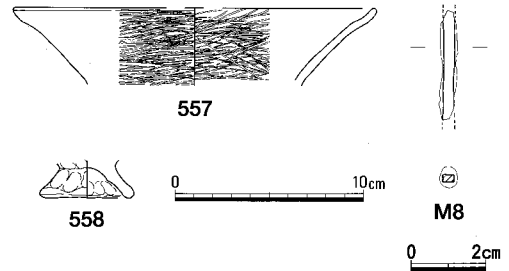
第190図 貝塚1出土遺物② (1/4)



第191図 貝塚1出土遺物③ (1/4・1/2)

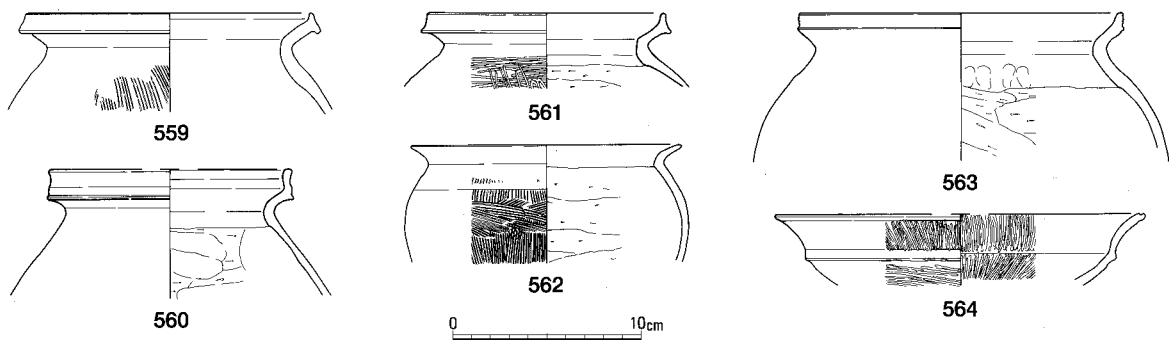


第192図 貝塚2出土遺物 (1/4・1/2)

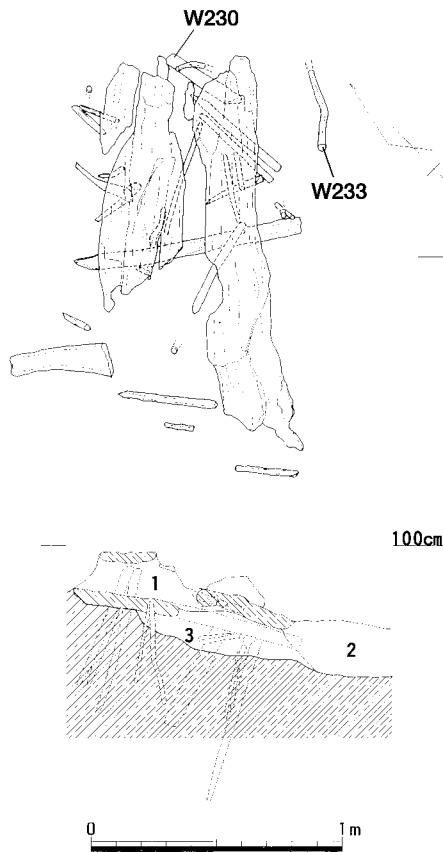


第193図 貝塚3出土遺物 (1/4・1/2)

な様相を呈するが、中には階段状遺構に伴ったものである可能性も否定できず、それらは板材の沈下をくい止めるために設けられたものであったと推測できる。なお、階段状遺構と貝層との関係であるが、下段の板材の下にも貝層がみられることから、まず貝層の堆積がはじまり、その後階段状遺構



第194図 貝塚4出土遺物 (1/4)



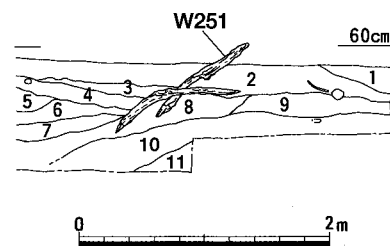
第195図 階段状遺構 (1/30)

階段状遺構(第195図)

- 1 灰色粘質土 N4/
- 2 暗緑灰色粘質土 10GY4/1
- 3 暗緑灰色粘質土 7.5GY4/1

護岸断面図(第196図)

- 1 灰色粘質土 5Y5/1
- 2 灰色粘質微砂 5Y5/1
- 3 灰色粘質微砂 7.5Y6/1
- 4 灰色粘質細砂 5Y6/1
- 5 灰色粘質土 7.5Y5/1
- 6 灰色粘質細砂 10Y6/1
- 7 灰色粘質土 10Y5/1
- 8 灰色粘質細砂 5Y5/1
- 9 灰色粘質細砂 7.5Y5/1
- 10 灰色粘質細砂 10Y5/1
- 11 灰色粘質土 7.5Y4/1



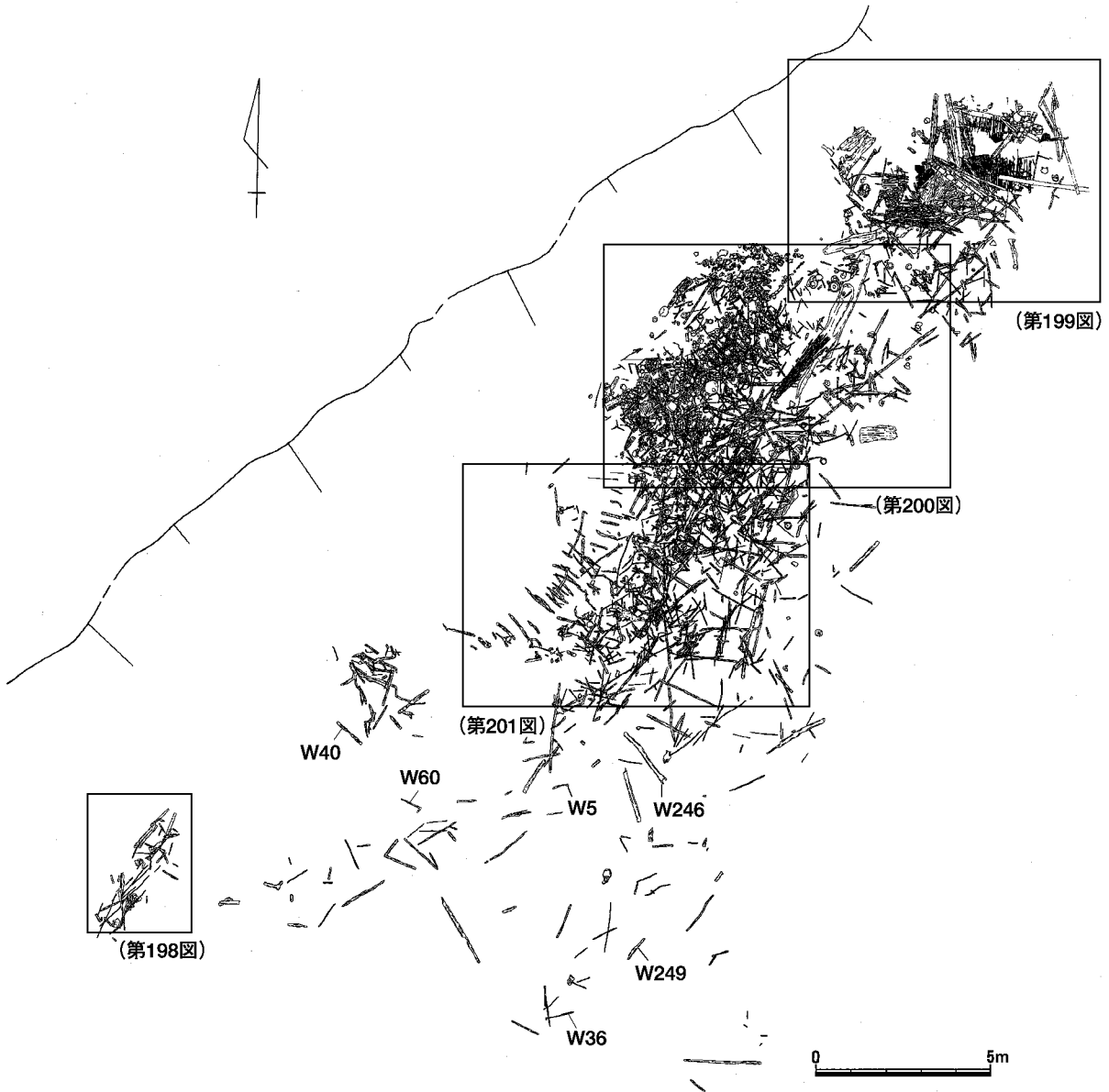
第196図 護岸断面図 (1/60)

がつくられ、その後も貝の廃棄がつづいたものと考えられる。階段状遺構は貝塚1との位置関係から、河道に貝類等を廃棄するために設けられた足場のような用途が推定できる。その時期は貝塚1から出土した土器から弥生時代後期後葉の時期に属するものと考えられる。

護岸施設は河道1北岸に打ち込まれた杭列である。護岸施設は杭を斜めに打ちつけただけの簡易な構造で、これに付随する横木などの存在は確認できなかった。杭は自然木を加工したもの（W251など）が多かったが、中にはかなり折れ曲がったものや、槍状の部材（W222やW223）が利用されていた。杭列は、木製品の集積層を上から貫いているものもあり、河道1のなかでも新しい時期に比定することができ、おおよそ弥生時代後期IVに属するものと考えられる。（金田）

遺物出土状況（第197～201図、巻頭図版4、図版14～28）

河道1北岸の緩斜面では、灰色を基調とする粘質土および砂質土中から多量の弥生土器や木製品が出土した。特に木製品を含む有機物は標高約1m以下のレベルで多く残存していたが、これは、この付近のレベルが地下水位の影響で常時滞水した状態であったため、木材を含む有機物の残存状況が良



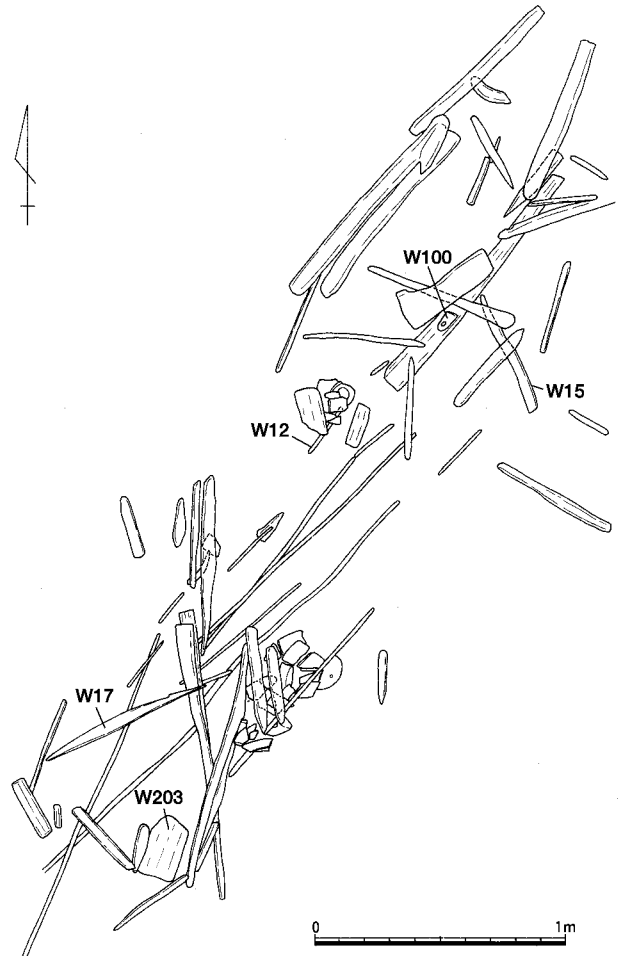
第197図 河道1北岸遺物出土状況全体図 (1/200)

かったものと判断できる。逆にこのレベル以上の場所では、地下水は常時滞水していたとは考えられず、有機物の残存状況は良くなく、腐朽あるいは消滅したものも数多くあったものと推測される。

遺物の出土状況は北岸緩斜面ではその遺物の密度に差がある。特に北岸の肩部から約10mほどの間には多くの遺物が出土している。これらは、付近の集落から遺物を河道緩斜面に直接廃棄したためと考えられ、当時の遺物の廃棄状況が推測できる。一方、肩から10m以上離れると遺物数は少なくなる傾向にある。これらの遺物は一度廃棄されたものが、二次的に流出したためと考えられる。なお、河道1の肩から10m以上離れた部分では、河道1北岸の緩斜面を標高マイナス1mほどまで調査を行ったが、それ以上は、地下水の湧出が激しく、河道1の底部まで掘り下げることができなかった。

これらの遺物出土状況の全体図は第197図に示しているが、特に遺物が集中した区域を第198図から第201図に拡大して掲載している。以下、この遺物出土状況図をもとに説明を行う。

第199図は河道1北岸の北端部に位置する。この範囲で出土した遺物は河道1北岸の遺物出土範囲の中で比較的レベルが高い位置にある。有機物のほとんどは標高1m以下で残存しており、前述したようにこのレベル以上では有機物は残存しにくい状態にあったものと思われる。この区域では特に建築部材の出土が顕著である。建築部材は梯子(W168)の出土した部分を中心に分布し、柱等が出土している。これらの建築部材の出土状況については後述する。また、この区域では建築部材のほかに構造材1・3が出土し、建築部材との関連性が考えられる。また、階段状遺構や貝塚1なども存在し、生活感を感じさせる遺構が多い。木製品では、建築部材が出土した付近から柄頭(W65)や刀装具(W67)、W69～71に見られる漆を塗布した木製品が出土している。その他、ナスビ形農耕具(W18・21)、腰掛(W104)、容器(W91)が出土した。弥生土器は建築部材や木製品とともに多く出土した。その大部分は破片であるが、中には完形に近いものも存在した。器種は壺・甕・高杯・鉢等が見られるが、弥生土器は後述する第200図や第201図で出土した土器群に比べ、やや新しい様相を呈しているようにも思われる。これらの弥生土器の中で、中に植物の茎が炭化したものが残存している壺が出土している。この炭化した有機物は灰像分析によるとイネ藁を給源植物とする炭化物であるとの結果を得た。



第198図 河道1北岸遺物出土状況① (1/30)

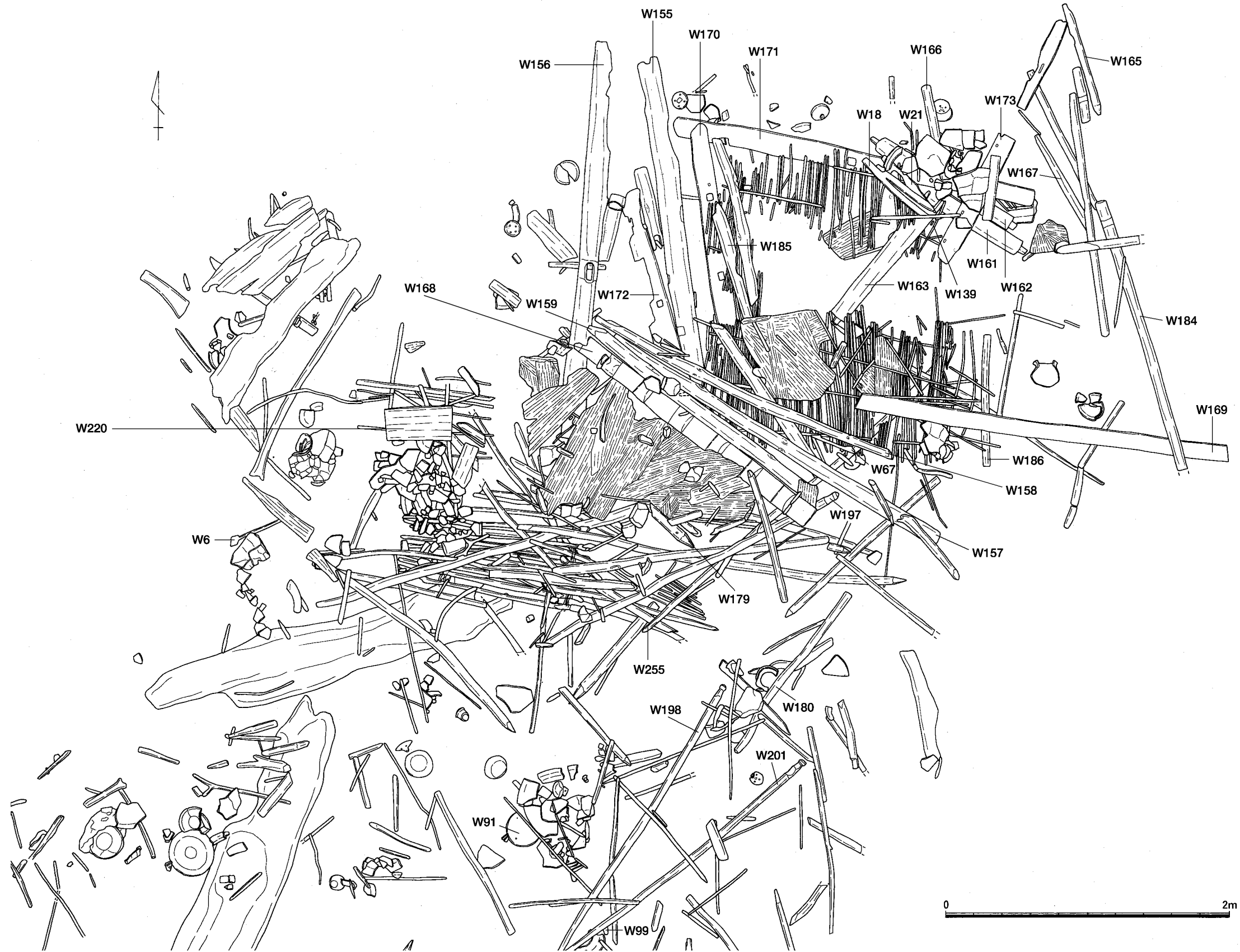
壺の中にイネ藁が入っていたと考えられ、当時の壺の用途を考える上で貴重な資料である。なお、この付近では河道1北岸内での土器の廃棄は後の古墳時代まで行われている。

第200図は第199図の南側に位置する箇所遺物の出土状況図で、遺物が最も集中して出土した場所である。この場所には構造材2・4～8とともに木製品や弥生土器が多く出土した。出土した遺物のレベルは高いもので約1mを測るが、低いものでマイナス約0.5mを測る。主要な木製品の出土状況は以下のとおりである。構造材4～6はいずれも重なりあって出土し、付近に構造材2・8、あるいは蹴放し(W175)、栓のついた板(W176～178)、板材(W216)など建物の一部を構成していたと考えられる部材も比較的良好な状態で出土した。また、特筆すべき木製品として装飾板(W102)がある。装飾板は遺物の堆積層の最下層で出土し、2片に割れ、若干ずれたような状態で出土した。また、第199図の右下では先端が槍のように尖った部材(W221)を検出した。この部材は長さ約6.5mを測る。調査では先端部分が調査域の外に出ていたため、一度木製品を切断して取り上げたが、後の補足的な調査で部材の先端部を発見した。そのため、W221は図面上ではつながっていないが、木製品の位置や形状から一連のものであるとの結論に達している。また、ナスビ形農耕具(W19・20)が並んで出土した。この2点のナスビ形農耕具は大きさが類似しており、また、形状から未使用の可能性が高く、製作後、まもなく廃棄されたものと考えられる。また、構造材2の北側で代掻き(W23)を検出した。さらに、第200図の右下で鋤(W26)が出土した。その他に用途不明であるが木葉形木製品(W92・94・95・97)が第200図の左下付近で出土している。また、弥生土器も多数出土した。土器は完形のものも多く、また、完形とはいかなくても全体を想定しうるにたる資料が数多く出土した。これは、この付近が集落で使用しなくなったものを直接廃棄した場所であったことに由来するものであろう。器種は長頸壺・甕・高杯・台付直口壺・大型鉢等がめだつ。なかでも装飾された器台(1177～1195)は特筆すべき資料であるが、調査区内で、いずれも破片の状態で散乱した状態で出土した。また、赤色顔料が入っている甕も出土し、分析の結果、水銀朱・ベンガラであるとの報告を得た。

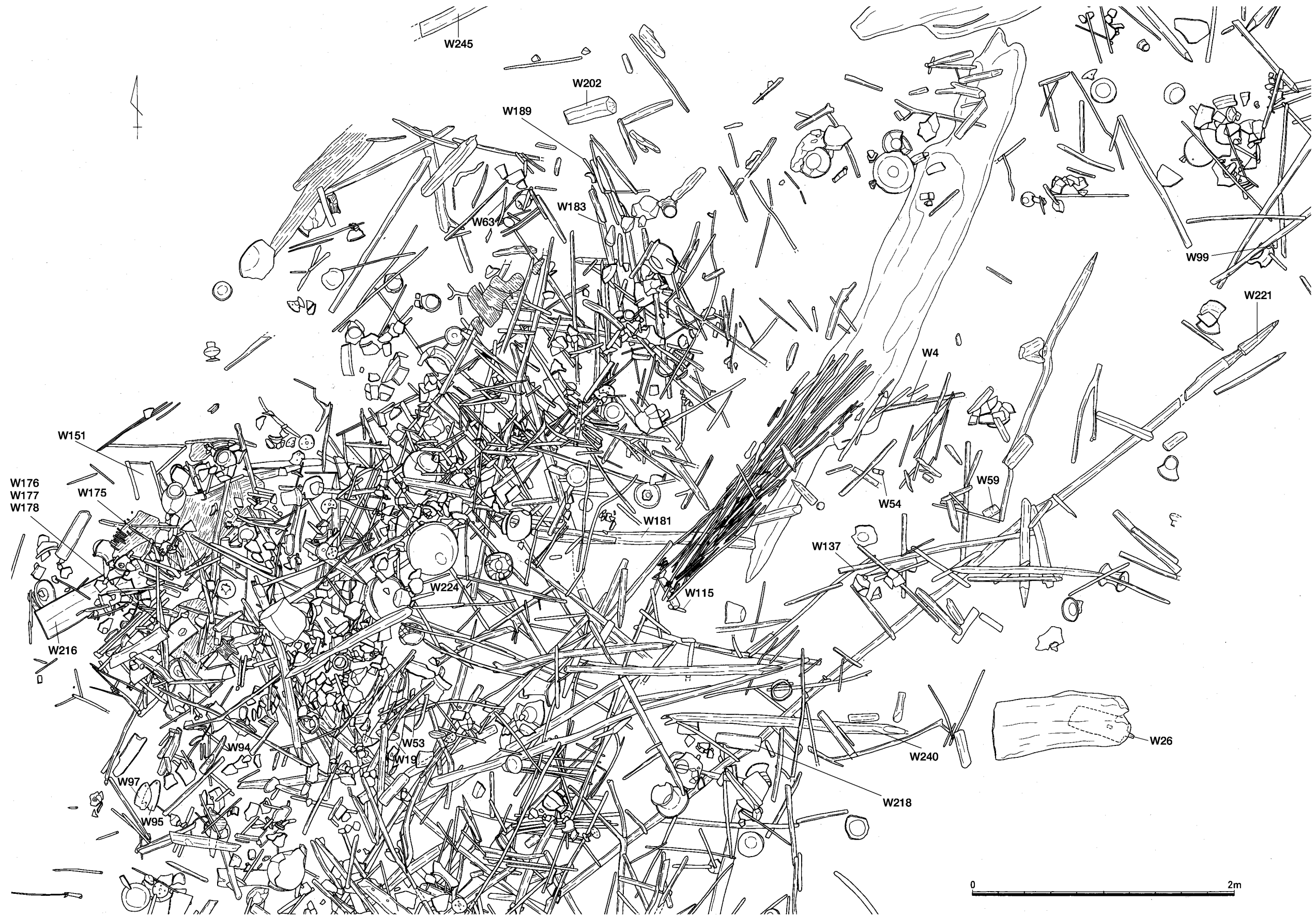
第201図は第200図の南側に位置し、西側には杭列からなる護岸施設が存在する。土器や木製品の遺物は標高約0.7mから約マイナス1mの範囲で出土した。遺物の出土状況は、この付近になると遺物の密度は南側にいくにつれて希薄になる。これは、この範囲を境に集落から直接廃棄されたものが、河道の本流となる中央付近に流出したためと推測することができる。このような状況であるが、中には意図的な廃棄を感じさせる部分もある。第201図の中央やや下の付近には有頭棒状の部材を格子に組んだもの(第320図)がみられる。また、第354図にその拡大図を示しているようにみかん割材を加工した粗加工材(W226・227・229・231)が集中している箇所もみられる。また、第201図の右下では反柄(W32)の上面に構造材7で使用された細木がまとまって出土している。この他、木製品では鉄刃を装着する透かしの入ったナスビ形農耕具(W22)が、W22のやや南で反柄(W32)が出土している。弥生土器も数多く出土し、壺・甕・高杯などの器種がみられる。

第198図は河道1北岸の西端に位置する。遺物が出土したレベルは標高約1m～0.5mの間であったが、これは、この付近が調査区境に近く、調査での安全性の問題から、深いレベルまで掘り下げることが不可能であったためである。河道1北岸の遺物の出土状況から推測すれば、下層にはさらに多くの木製品が埋没していると考えられる。木製品ではナスビ形農耕具(W15・17)や把手(W100)などを検出した。また、弥生土器も多くみられた。

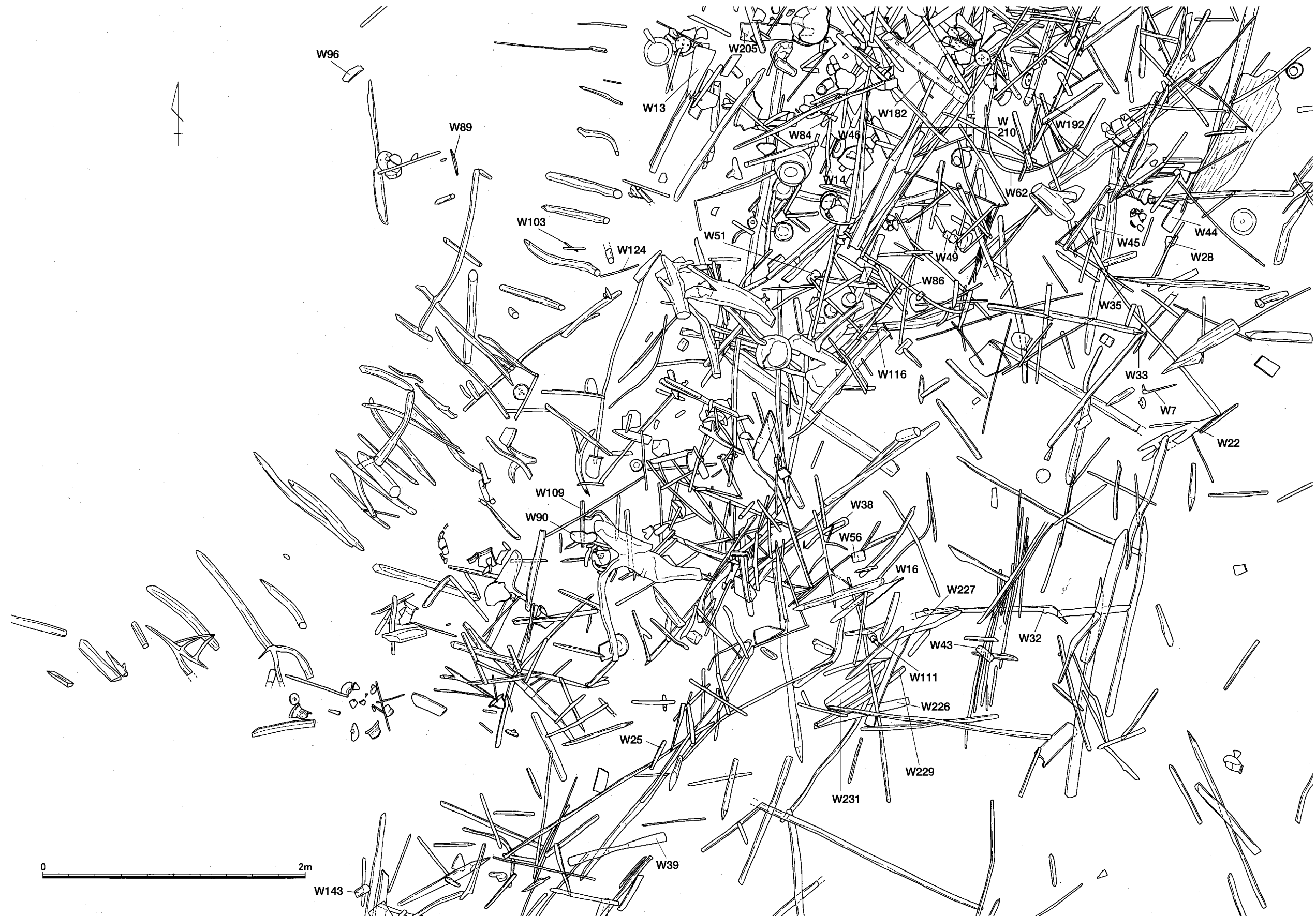
なお、第198～201図の出土状況図では出土場所を図示していないが、弥生土器や木製品の他に、石



第199図 河道1北岸遺物出土状況②(1/30)



第200図 河道1北岸遺物出土状況③(1/30)



第201図 河道1北岸遺物出土状況④(1/30)

器・土製品・鉄器・骨角製品が出土している。石器では磨製石斧や打製石包丁・磨製石包丁・石杵・石錘・砥石等が出土している。土製品では紡錘車や土錘等が出土している。鉄製品では鋏や鋤の刃に利用される方形板刃先や鍛冶道具である鑿が出土している。骨角製品では、骨鏃・管玉・耳栓・柄・鹿角等が出土している。

その他、第198～201図の範囲以外からも多くの土器や木製品等が出土している。そのなかで、624の長頸壺は河道の中央付近で出土した。有機質で本来ならば残存しにくい籠自体が土器表面に付着し、いわゆる籠目土器の実態を知る貴重な例である。木製品では「T」字状の把手をもつ柄（W36）が出土した。また、特殊器台（1202～1204）も河道中央付近で出土している。（金田）

土器

河道1からは弥生時代後期後葉から末葉を中心に一部古墳時代前期を含む、整理箱に約1,000箱相当の土器が出土した。ここに掲載するのは、多量に復元された中でも完形品もしくは復元作業の結果ほぼもとの状態になったもの、さらには搬入土器等に限定したものである。以下に壺・甕・高杯・鉢・器台等の順に概観してみる。

壺（第202～229図）

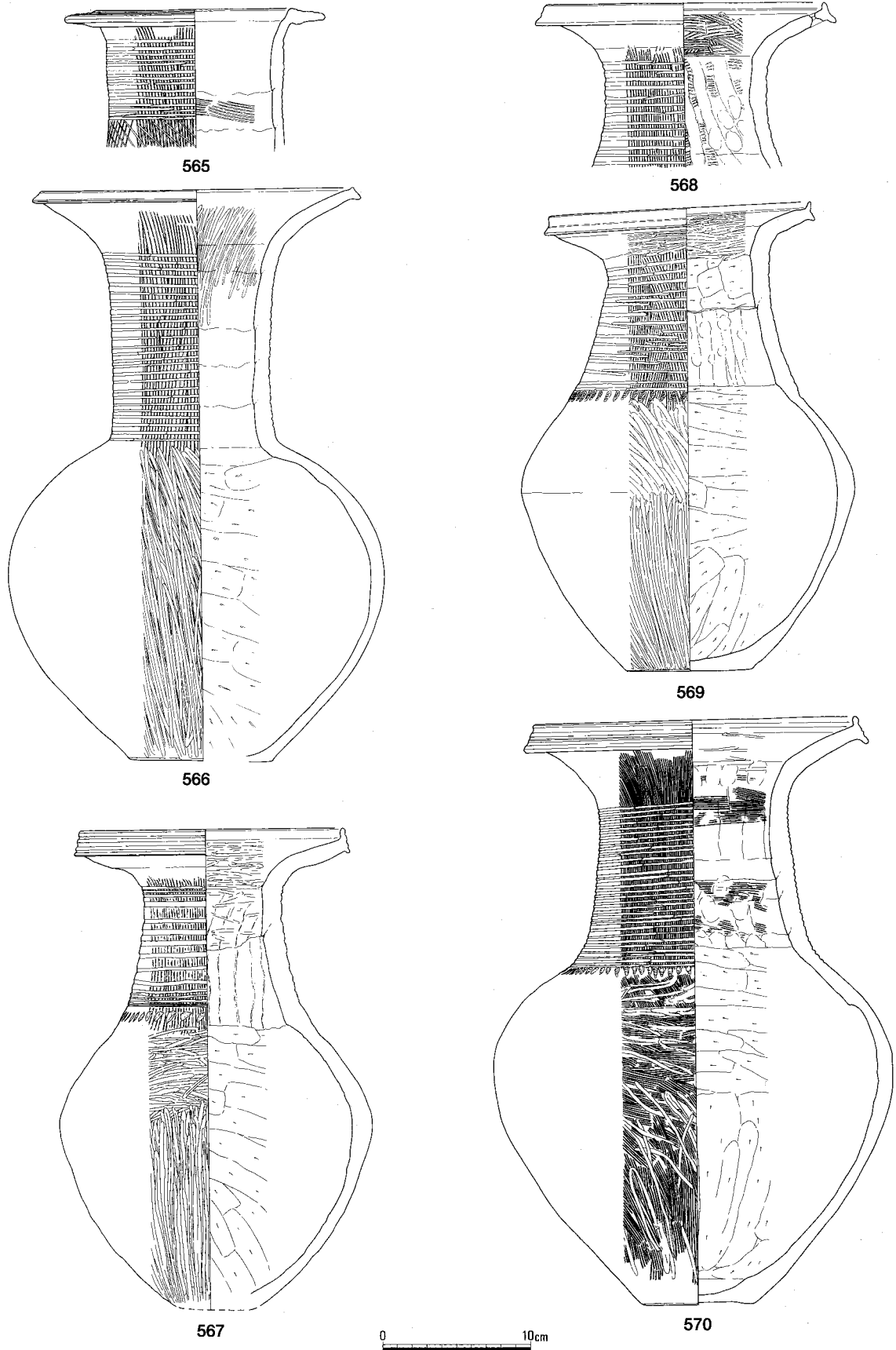
壺には、頸部の長短等の状況によって長頸壺・短頸壺・壺・直口壺等に分けることができる。

長頸壺には、頸部外面に沈線が巡るもの（565～595・624・625・638・697）と巡らないもの（596～611・639・701・702）が存在する。前者には、1周毎に1本ずつ完結するもの（565～572・574～582・584）と螺旋状に施されるもの（573・583・586～591）の二者に分類される。565は、口縁部は外に拡張し上面には擬凹線文が施される。566は、垂直気味な頸部から大きく外反する口縁部で、端部の拡張はない。両者共に古い様相を示すものである。568は、口縁部近くに焼成前に小孔が穿たれていた。569は、多くの長頸壺の頸部内面がシボリとヘラミガキによって調整されるのに対して、ヘラケズリがなされる。571の頸部内面器壁には頻繁なものの出し入れによってと思われる光沢が認められた。これは、578・605・615も同様であった。

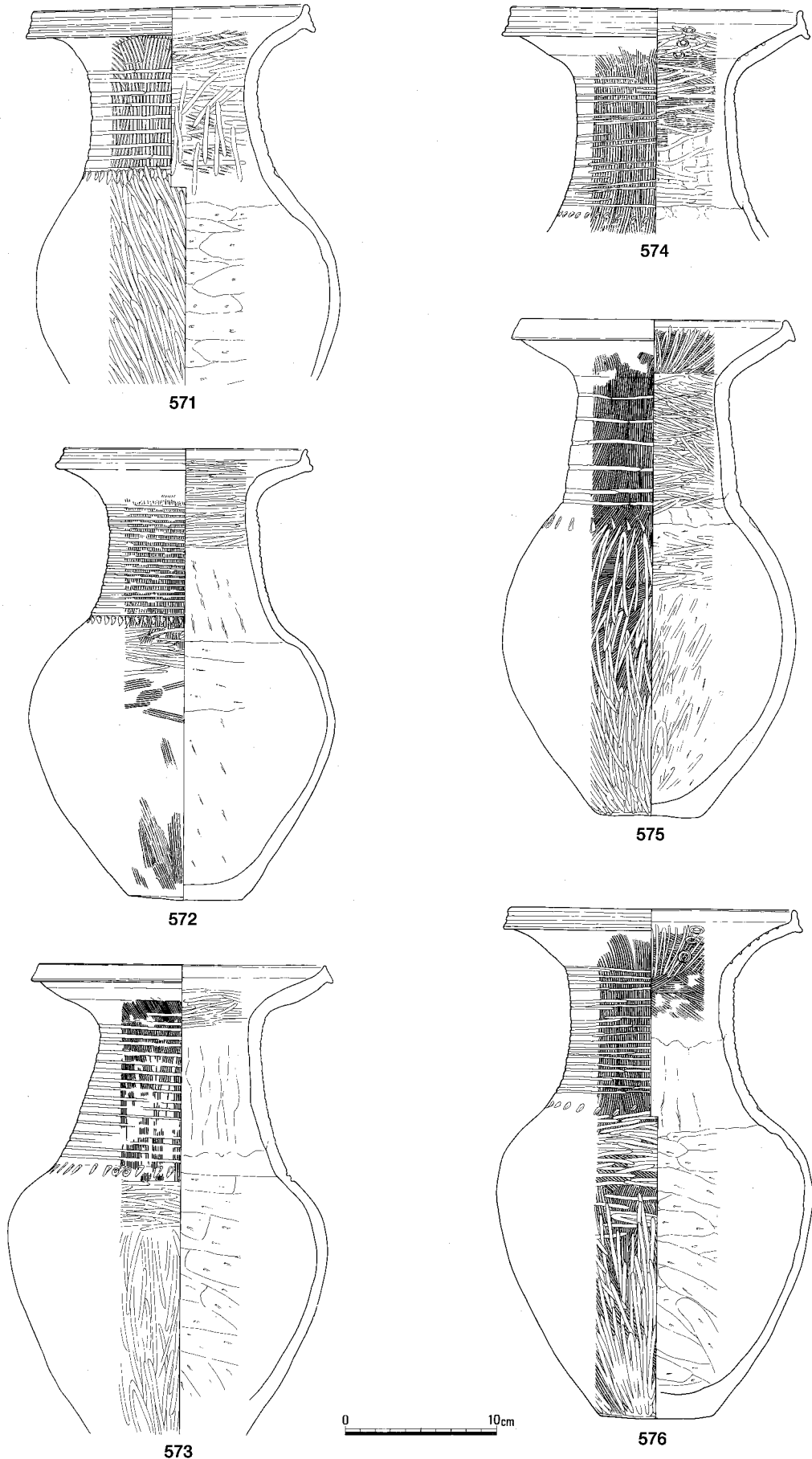
壺のなかには胴部外面に煮沸痕跡である煤を残すもの（572・576・580・584・593・595・611・621・636・642・644・646・655・656・664～666・669・671・680・683・707）が認められた。また、その中には内面に炭化物の遺存を認める595・642・656・665・666・669があり、壺による煮沸の実体が明らかとなった。

なお、壺のなかには胴部全体に蔓で編み上げた籠材が遺存する624、および籠材は残らないが緊縛痕跡を比較的明瞭な状況でみせるもの（625～627・630～639・653・696）が存在する。本来的には籠材で編み上げられた状態で廃棄されたものが腐朽したものと考える。籠材をよく残す624は、幅7mm前後の蔓で斜め方向と胴部最大径付近に2条が斜め方向のものを固定する状況に編み上げられており、斜めになされた紐掛けが頸部との境1か所に斜め材が集中するような状況で遺存していた。ただし現状でこれが吊下げを意図したものでどうかは明言できない。痕跡のみのもも紐掛けは横方向と斜め方向に籠目痕跡があり、基本的には624にみる方法で編み上げを行っていたものとする。籠目痕跡をみせる壺は、626にみる高さ21cmの小型品から大は637の47cmを測る大型品まで各種存在する。

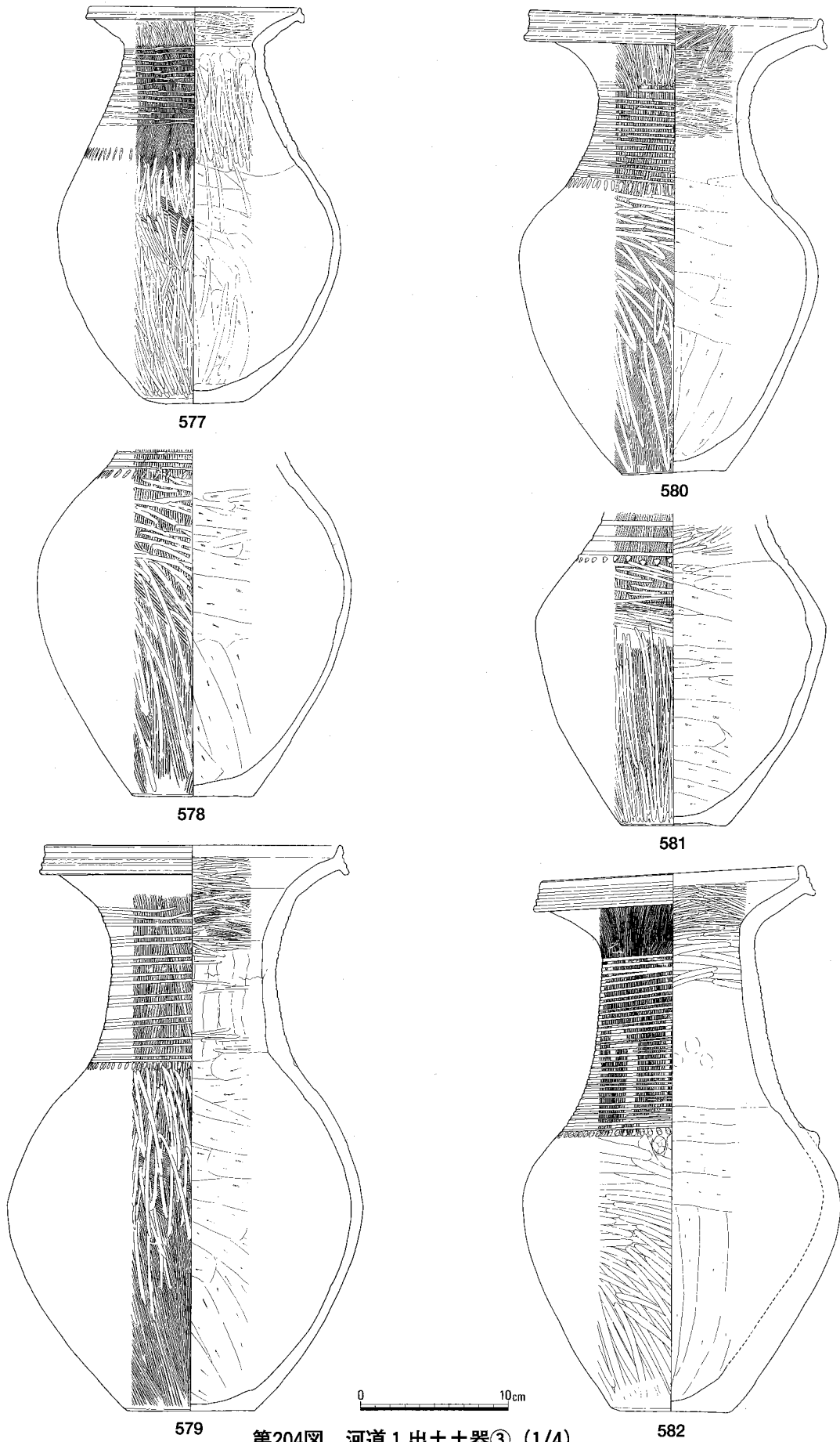
575は、口縁部から胴部内面にかけてヘラケズリ後にヘラミガキ調整がなされる。576の口縁部内面には、調整後に竹管文が3個施される。同様の例は、584・600・607で2個、608で3個みられる。582の肩部には1点突起が付けられる。585は、頸部と肩部の境に竹管による刺突が施されるが、全周



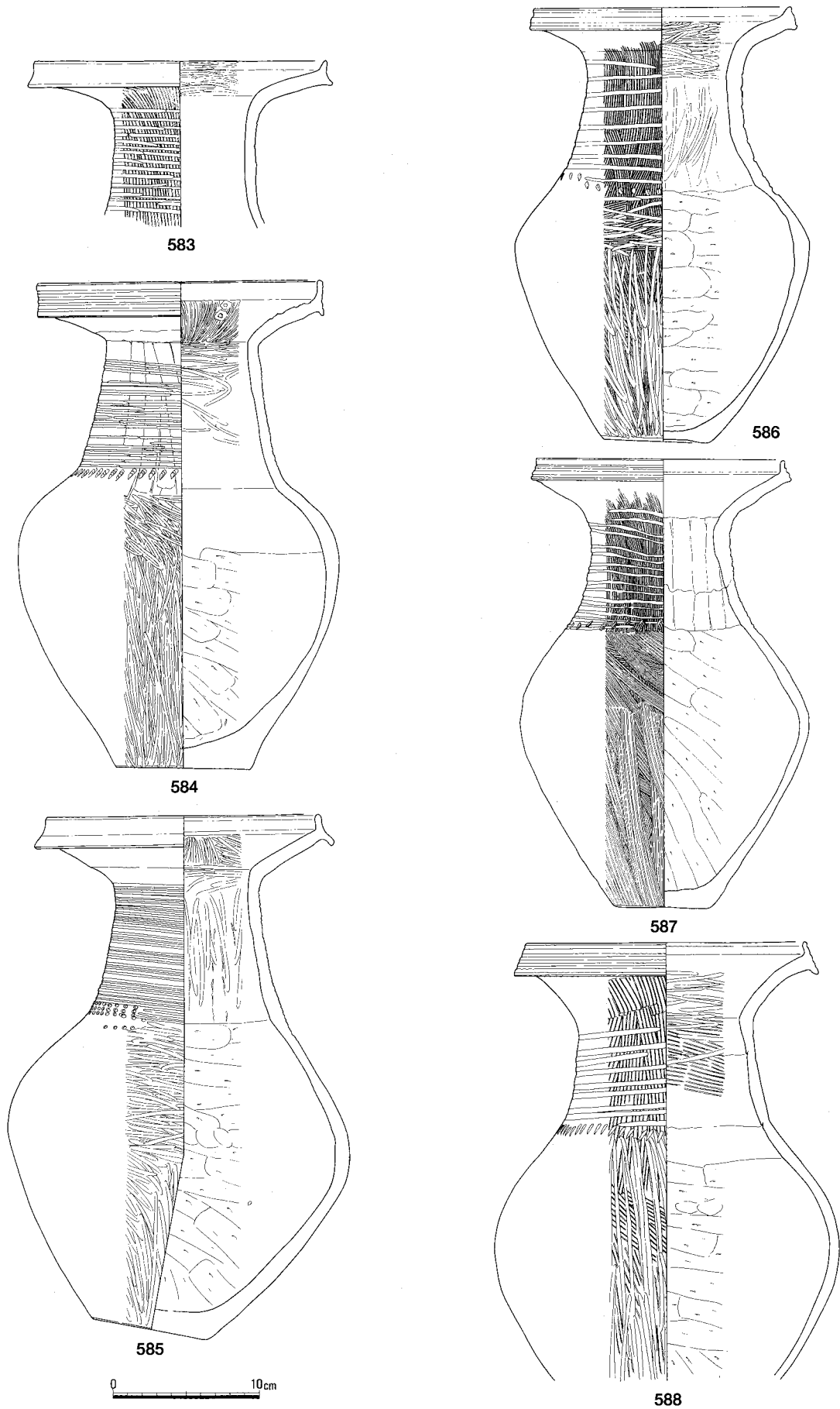
第202図 河道1出土土器① (1/4)



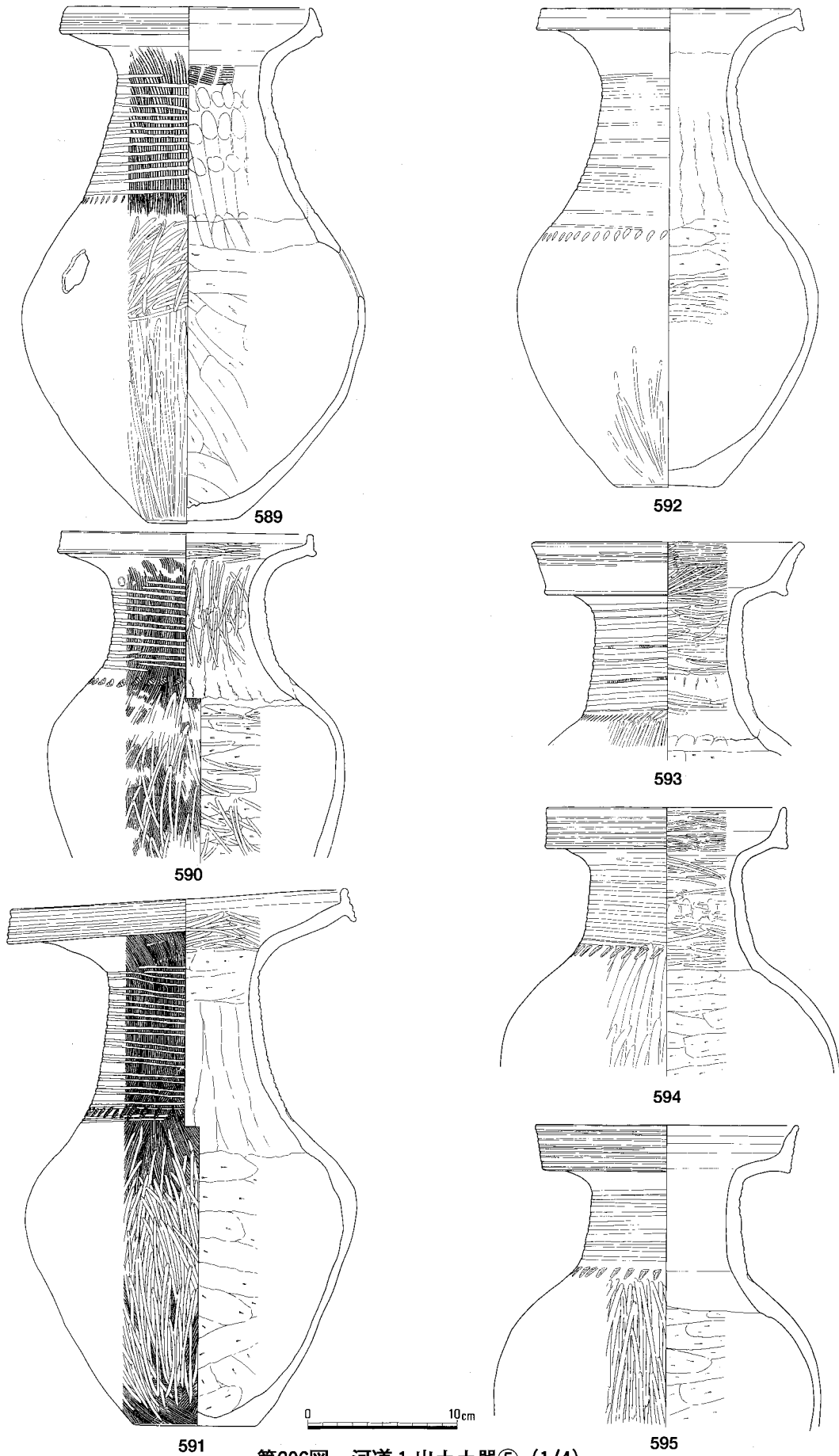
第203図 河道1出土土器② (1/4)



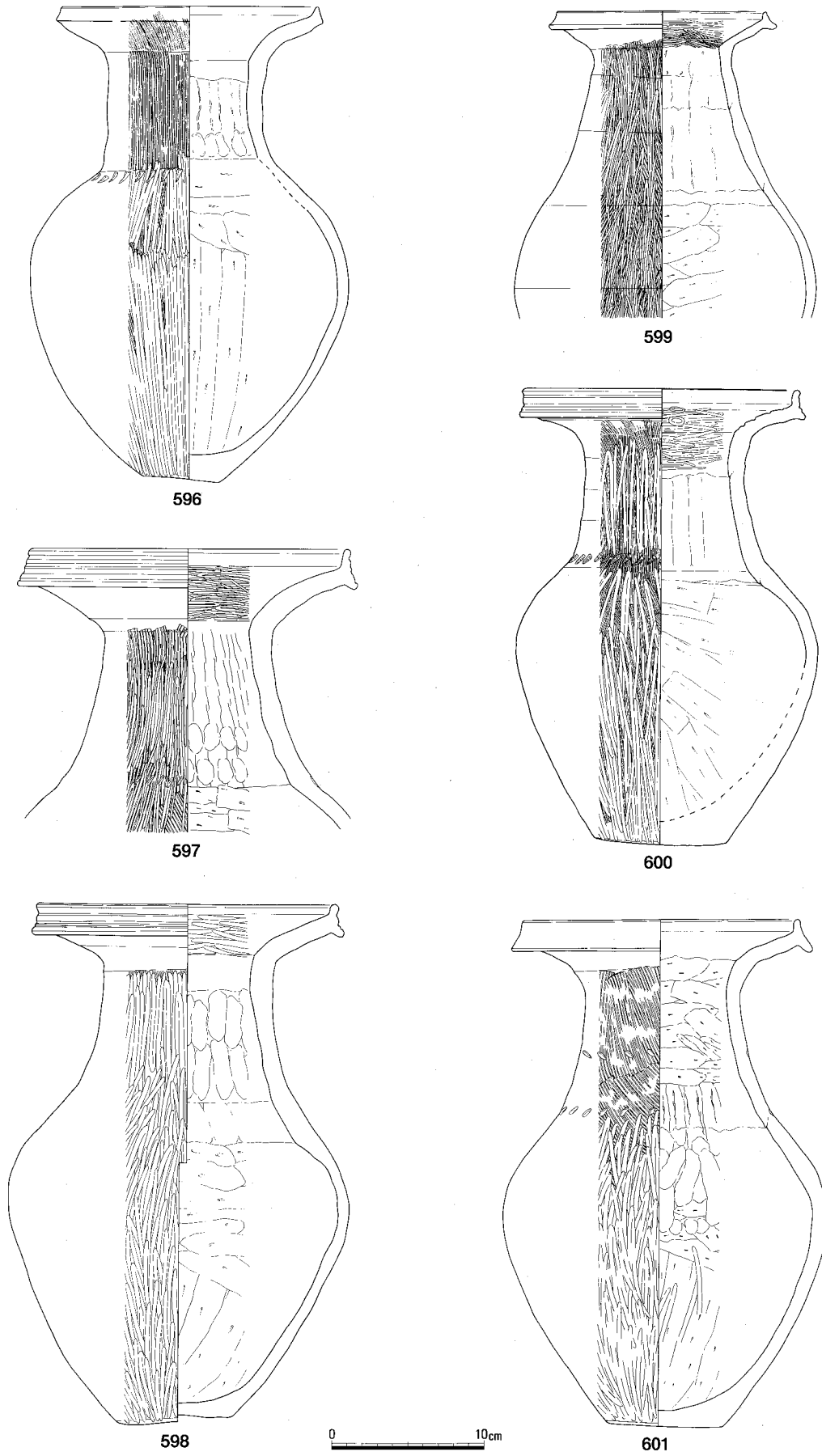
第204図 河道1 出土土器③ (1/4)



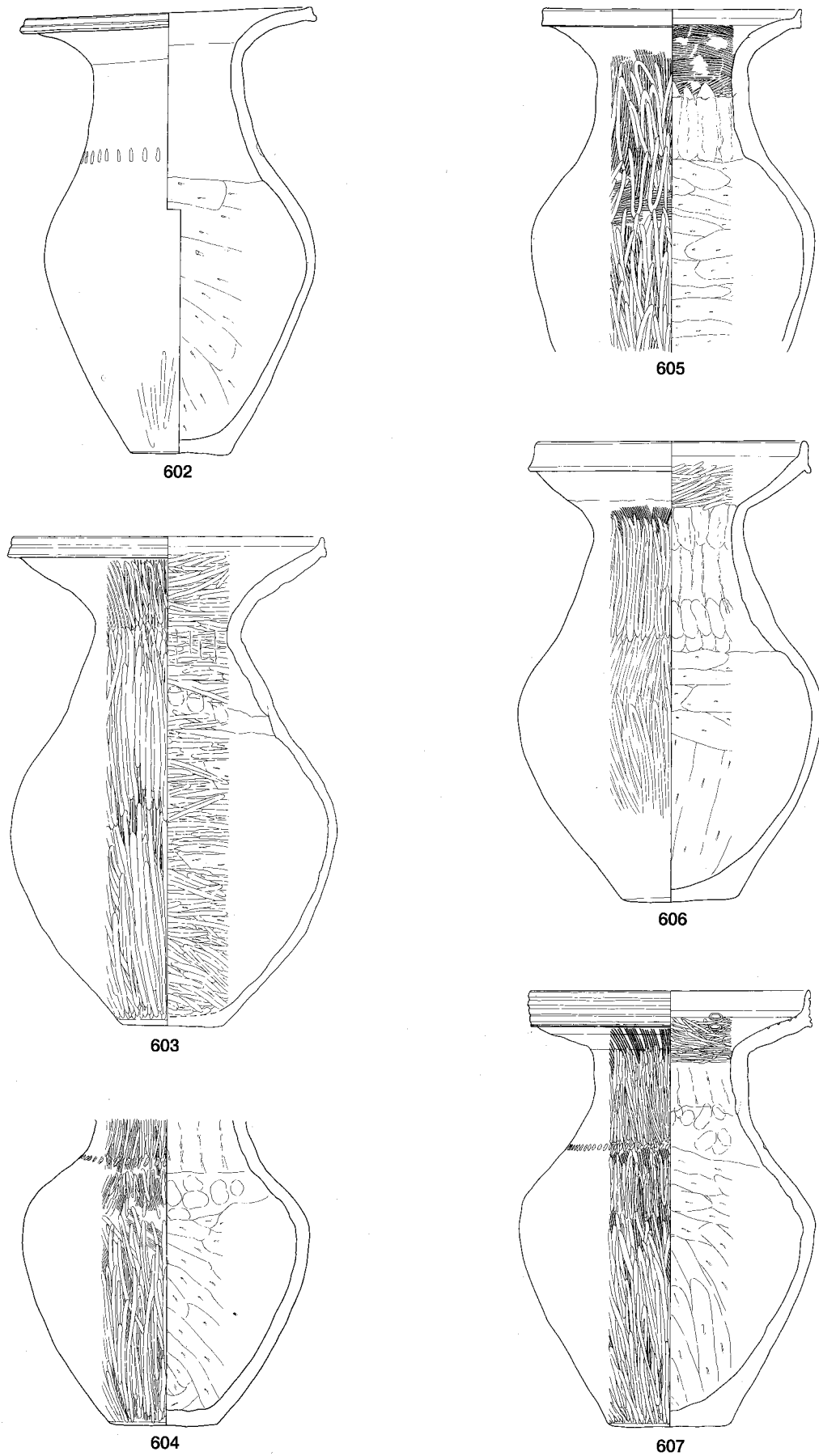
第205図 河道1出土土器④ (1/4)



第206図 河道1出土土器⑤ (1/4)

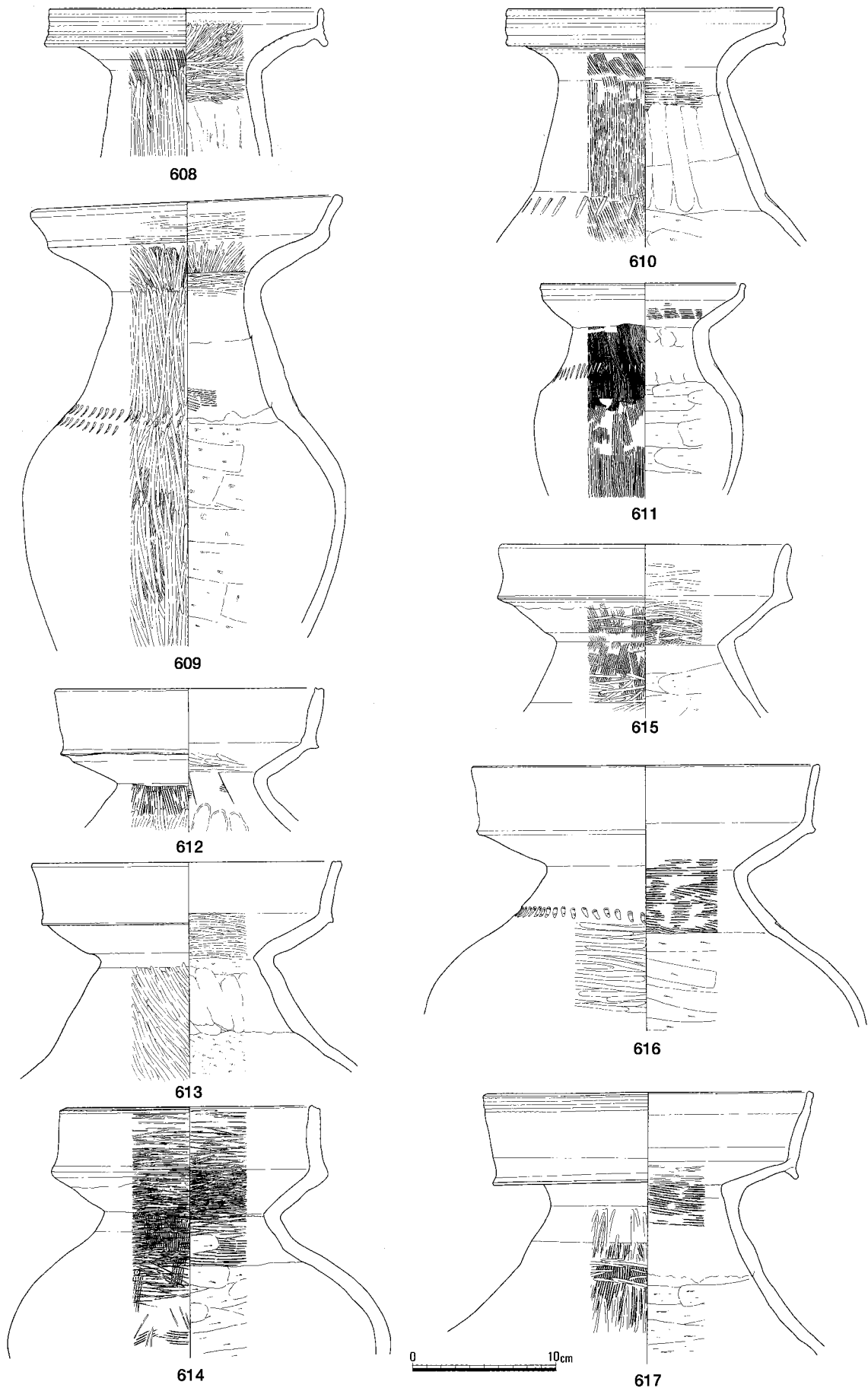


第207図 河道1出土土器⑥ (1/4)

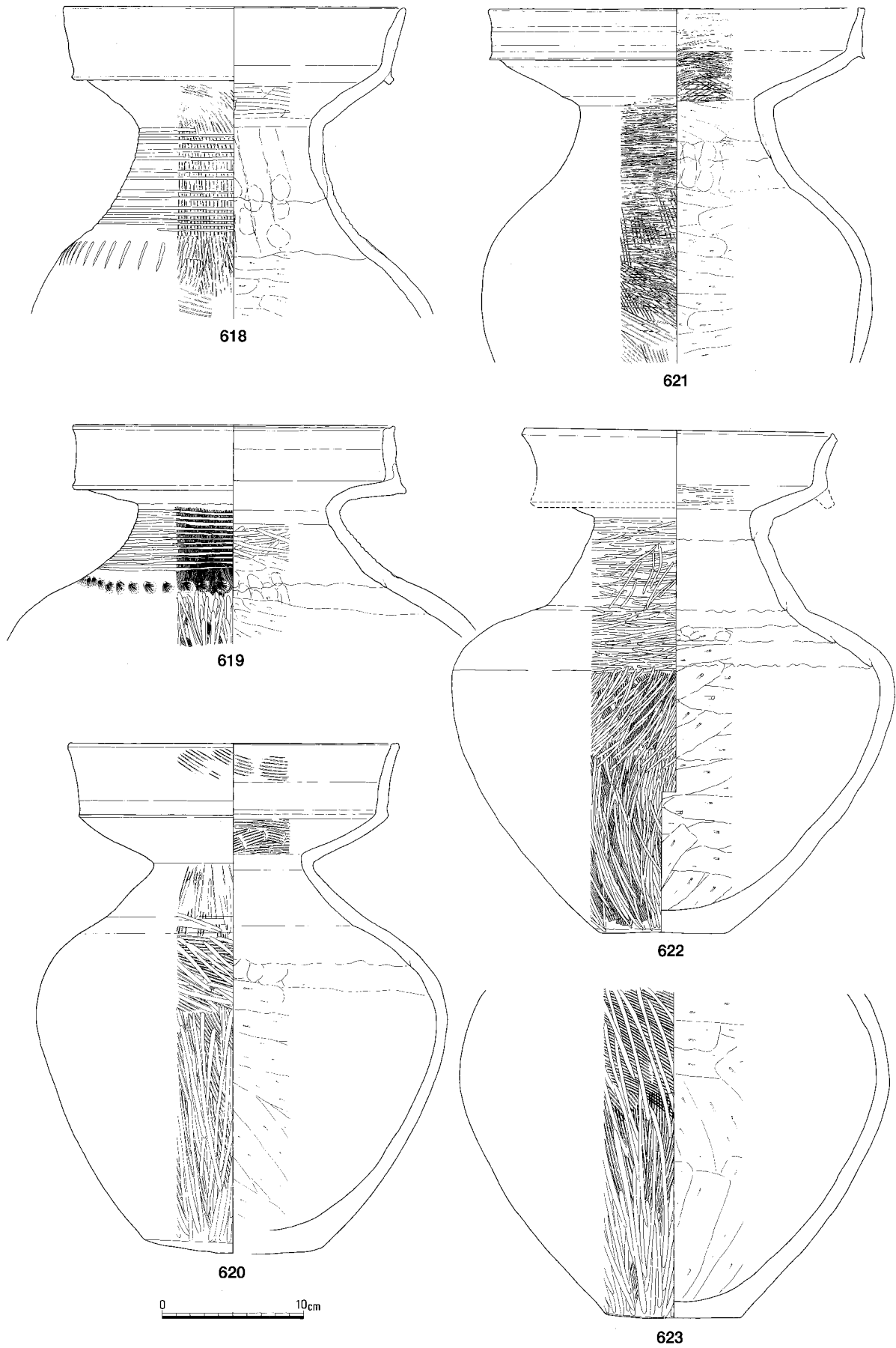


第208図 河道1出土土器⑦ (1/4)

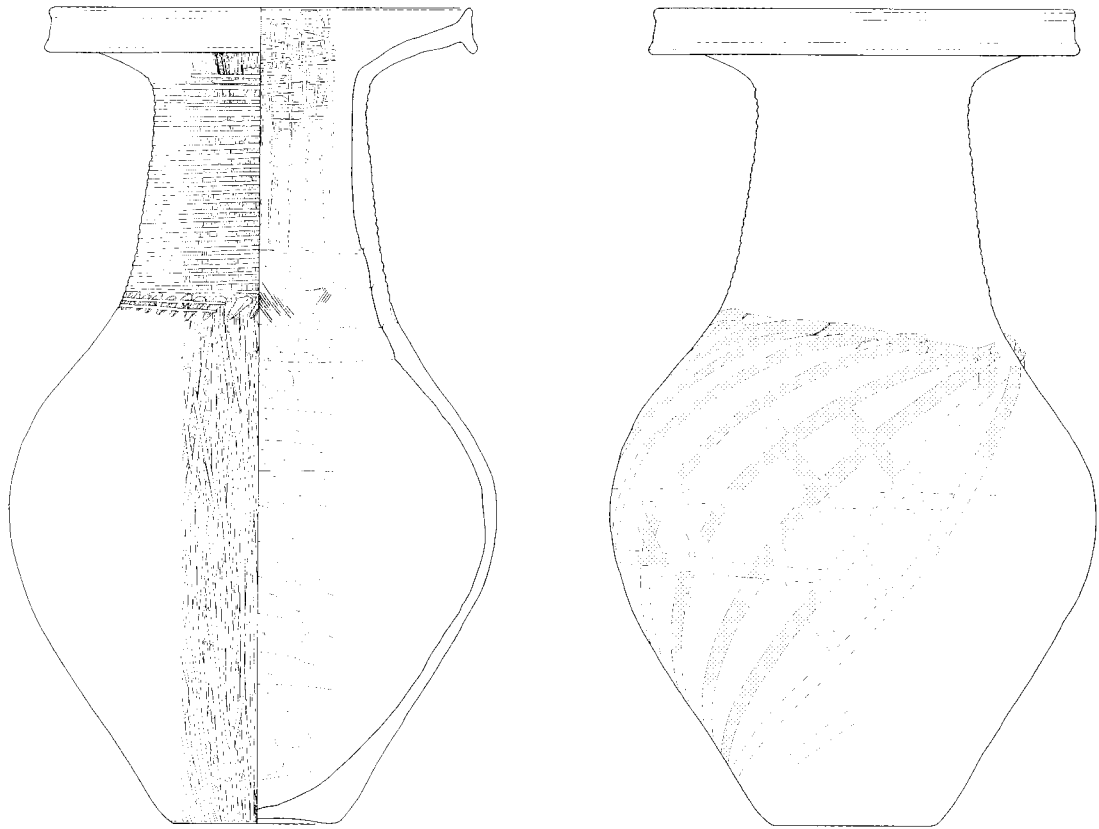
0 10cm



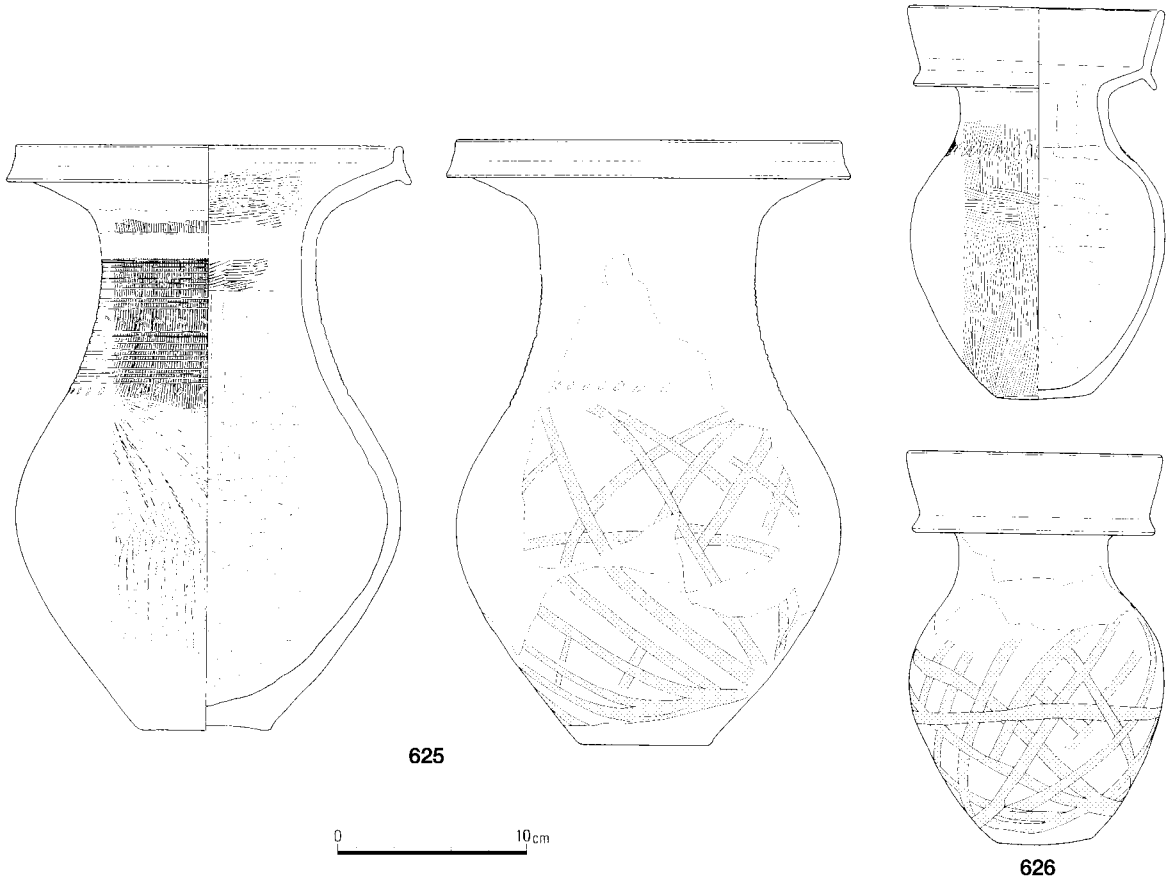
第209図 河道1出土土器⑧ (1/4)



第210図 河道1 出土土器⑨ (1/4)



624

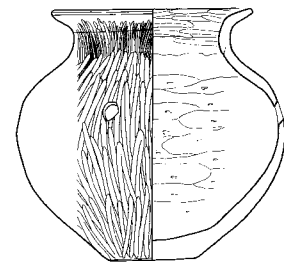
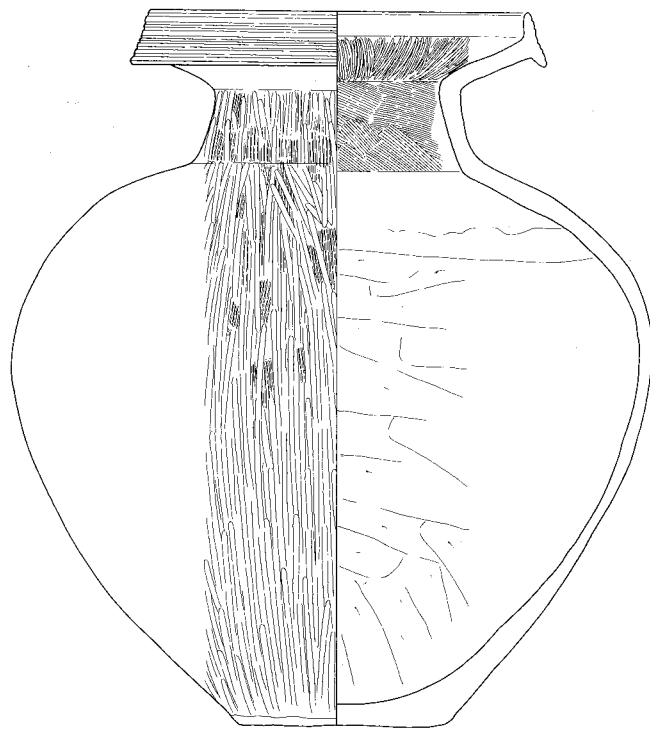


625

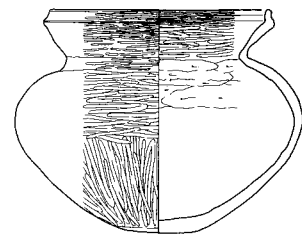
0 10cm

626

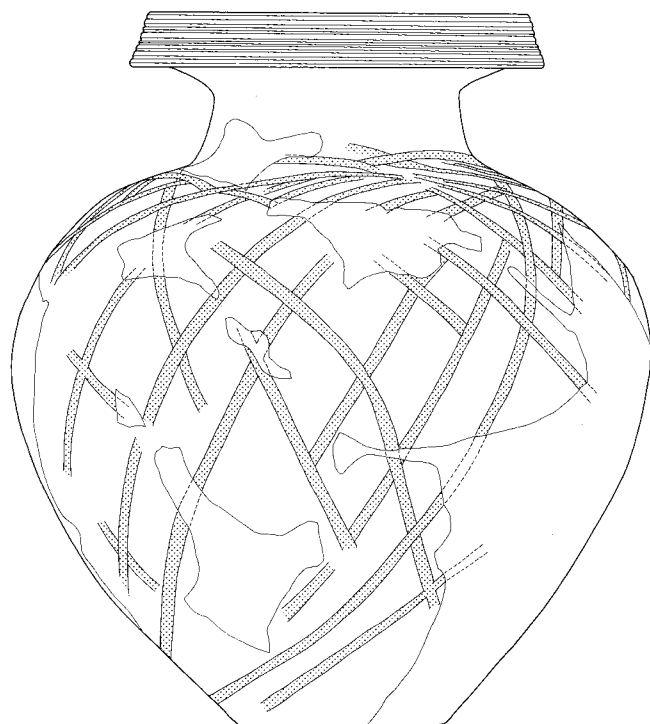
第211図 河道1出土土器⑩ (1/4)



628



629



627

0 10cm

はしない。589は、肩部に1か所焼成後の外面から内面方向への穿孔が認められる。593～595は、口縁部が垂直もしくは外方に長く拡張したもので、外面には擬凹線文が施される。当該地域に本来存在する形状ではなく、県北の影響下に存在するものであろう。611・626は、小型の長頸壺である。638は大型品で口縁部は上下に長く拡張し、その外面は鋸歯文で飾られる。639も口縁部が拡張され、外面上半には竹管文が、下半には鋸歯文が施される。また頸部と肩部との境には細い突帯が巡る。また、タタキメによる成形が見られる701の突帯には竹管による刺突文が巡る。

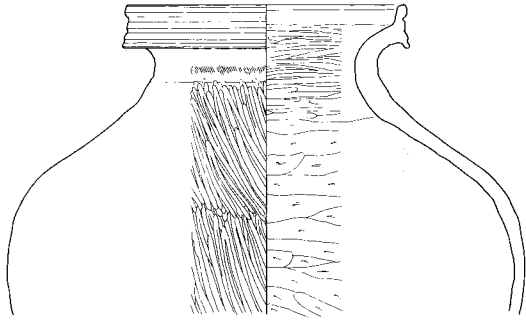
短頸壺には、いわゆる長頸壺の系譜に繋がると考えるもので頸部が短く「ハ」の字状を呈し、

第212図 河道1出土土器① (1/4)

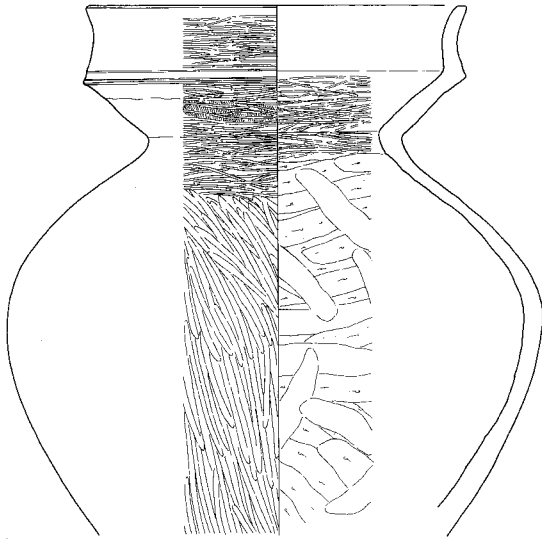
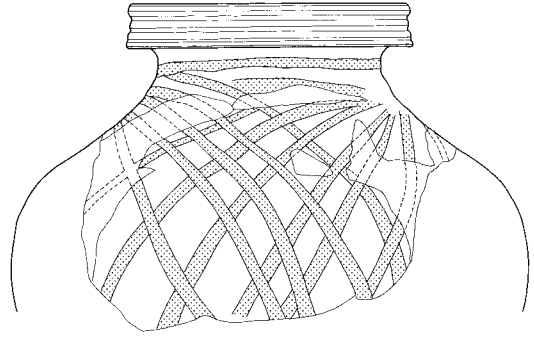
長く上方に拡張した口縁部と口縁部の長さにはほぼ等しい頸部を有するもの（612～622・696・698～700）、長頸壺の系譜とは異なると考える直立した頸部に上方に拡張した口縁部を有するもの（674～676・684・685・687・686・688～695）、長頸壺の系譜とは異なるもの（627・631・634・635・637・640・643～647・651～657・661）等がある。前者「ハ」の字状を呈するものの中にはまだ頸部にヘラ描き沈線文を巡らすもの（618・619・696・698～700）も存在するがほとんどのものにはみられなくなる。また口縁部の拡張は下端にもみられる。これは、あらかじめ擬口縁として整形された稜線をそのまま突帯として見せるもの（619・688）と、粘土帯を下端に貼付けるもの（617・618・622・633・638・635・639・674・713）がある。619の擬口縁は明瞭で形態的には前段階の口縁部と同じく短く端部をつまみ上げたもので、仕上げには丁寧なヨコナデ調整がなされていた。640は、口縁部を上方に拡張するのではなく斜め下方に垂らし、その外面に擬凹線文を巡らす。胴部外面のヘラミガキ等古相を呈するものである。644は口縁端部が拡張しないものである。645は大型品で頸部から口縁部にかけて器壁を増す。口縁部外面には擬凹線文が巡る。647は口縁部



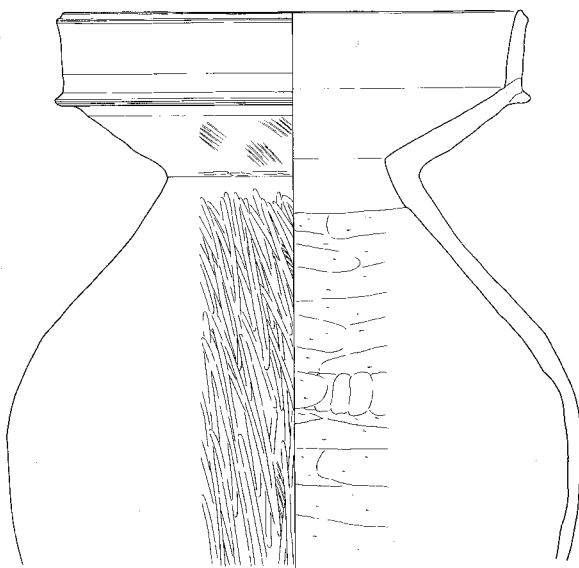
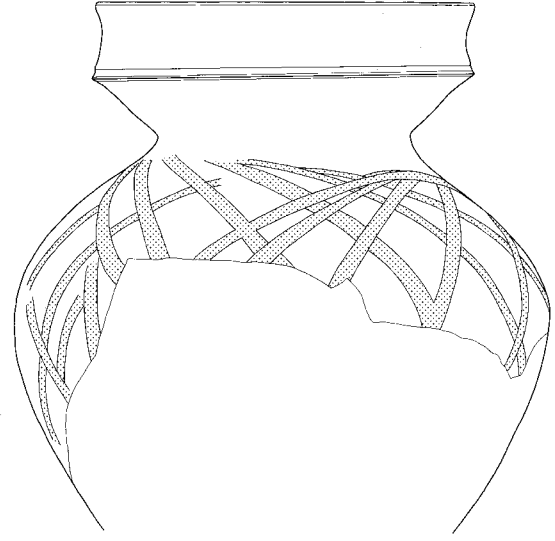
第213図 河道1出土土器⑫ (1/4)



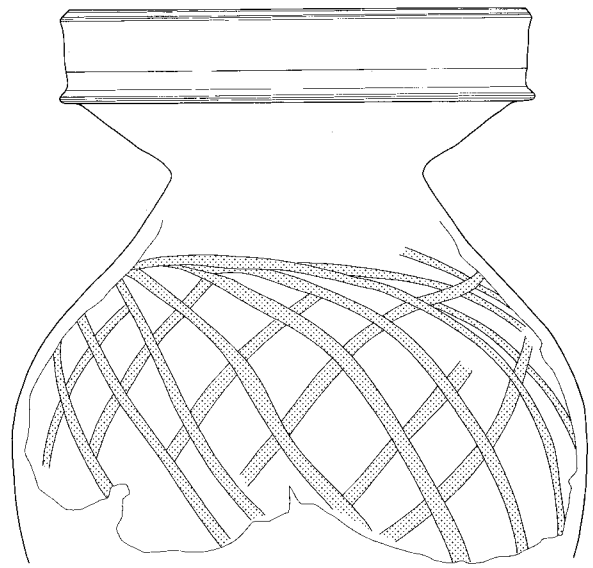
631



632

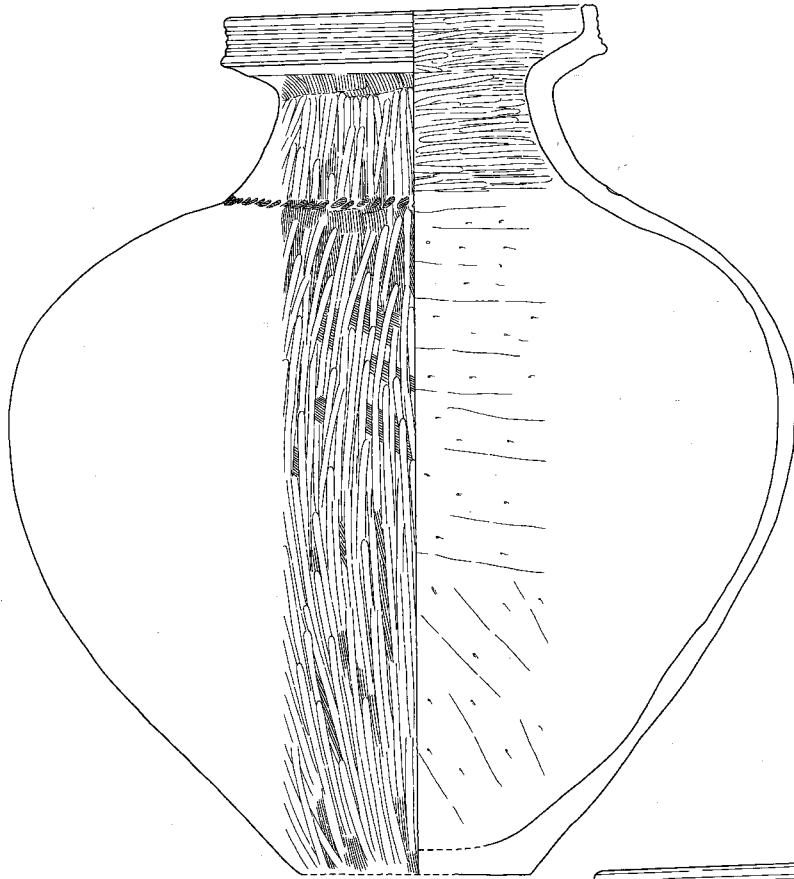


633

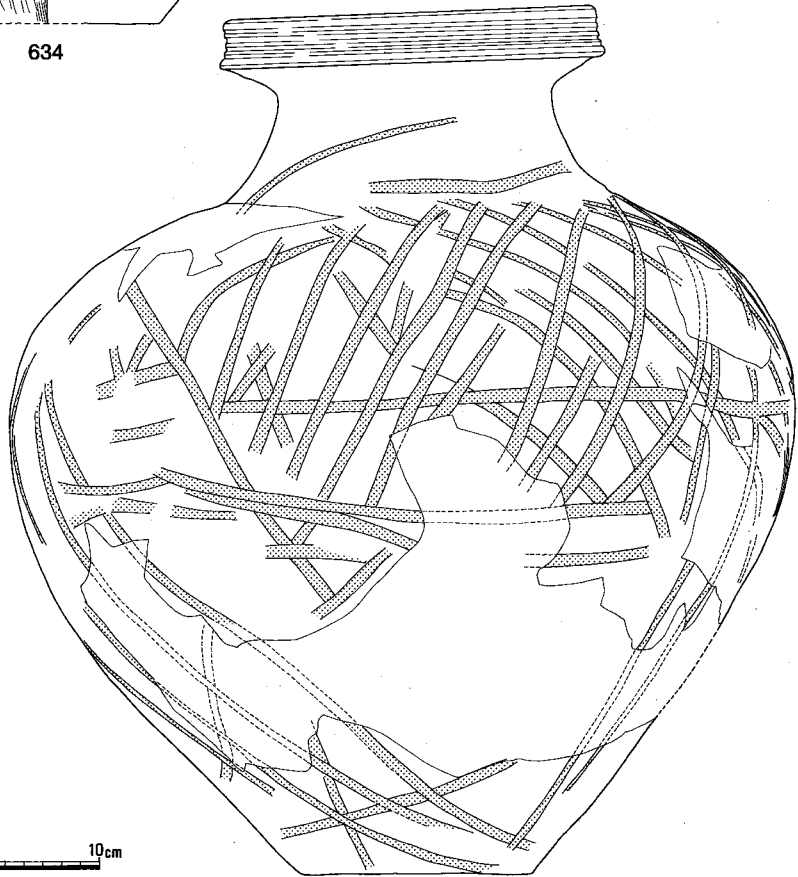


0 10cm

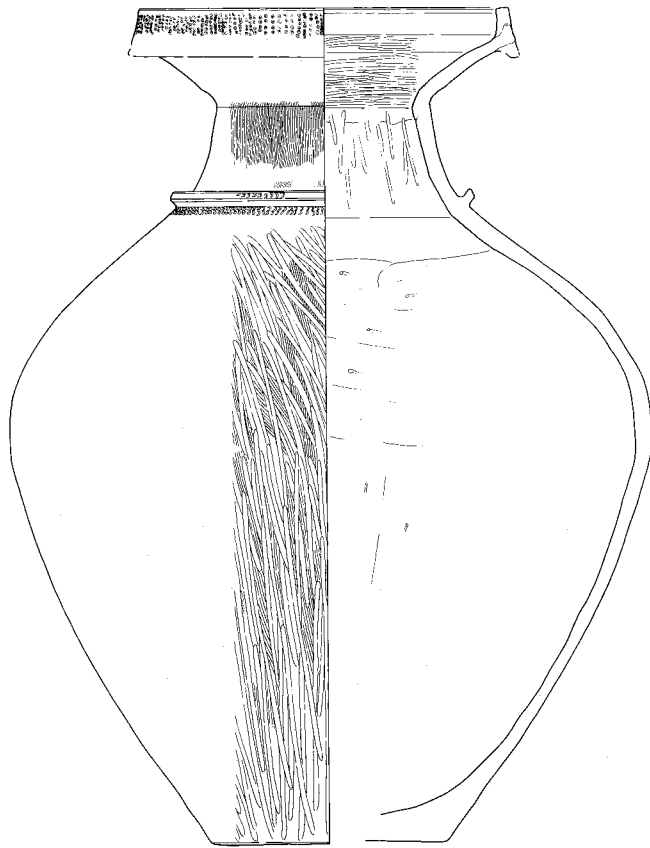
第214図 河道1出土土器⑬ (1/4)



634

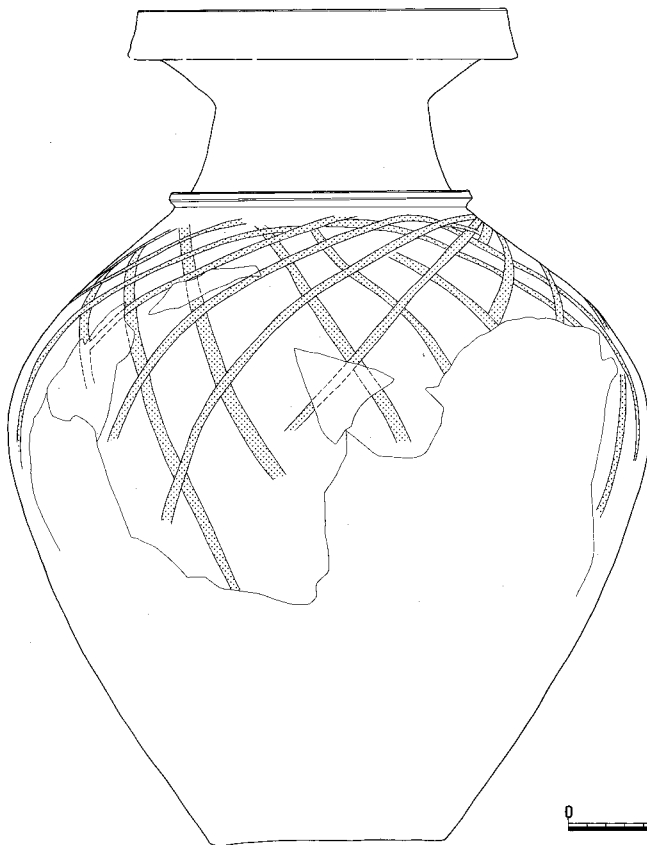


第215図 河道1出土土器⑭ (1/4)

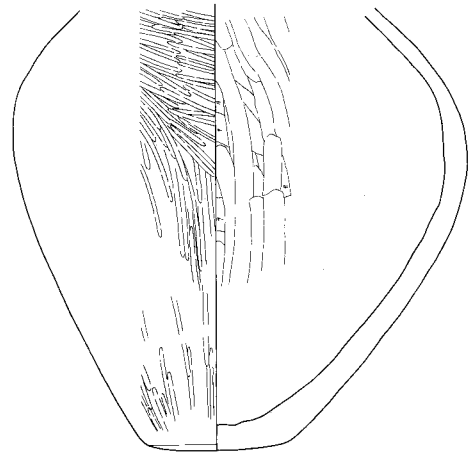


にヒビ割れを粘土で補修した痕跡が残る。
651は外面ナデによって仕上げられているが、胴部には3か所の大小の焼成後の穿孔がみられる。652は口縁部の大きさに対して比較的細い頸部を直立させる。653は頸部から口縁部にやや内傾気味に逆「ハ」の字状に立ち上がるもので頸部と口縁部の境に稜線を作りだし境としている。

直立し拡張した口縁部を有するものは、外面に比較的丁寧なヘラミガキ調整がなされる。中には頸部と肩部との境に突帯を巡らすもの(676・684・685・687・693)、口縁部外面を鋸歯文・線刻文等で飾るものもある。695は、二次焼成の結果細片化したもので口縁部外面に線刻によって人物が描



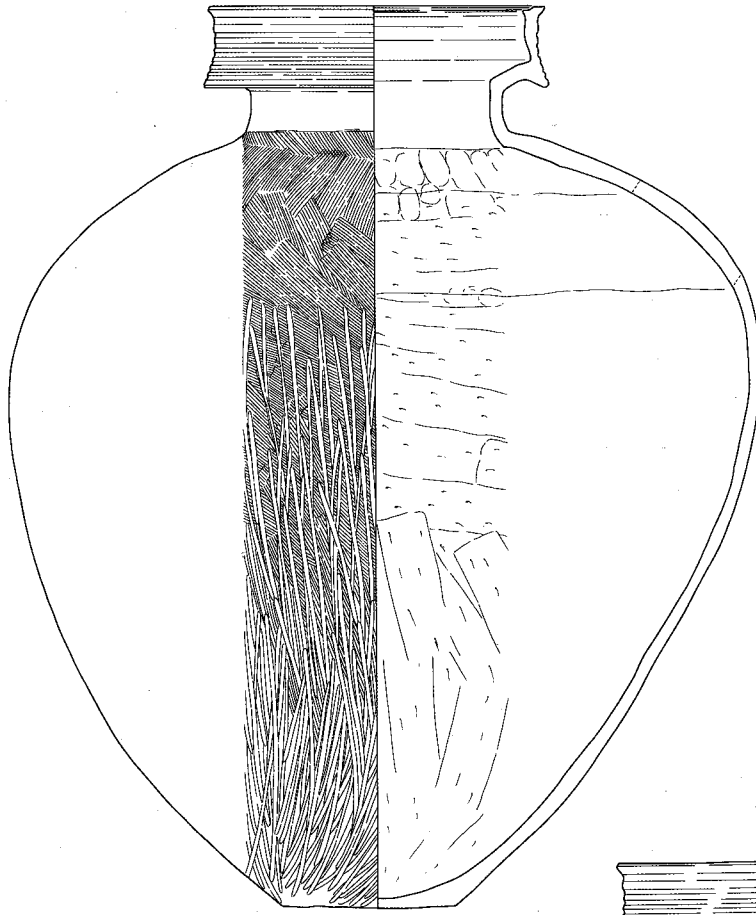
635



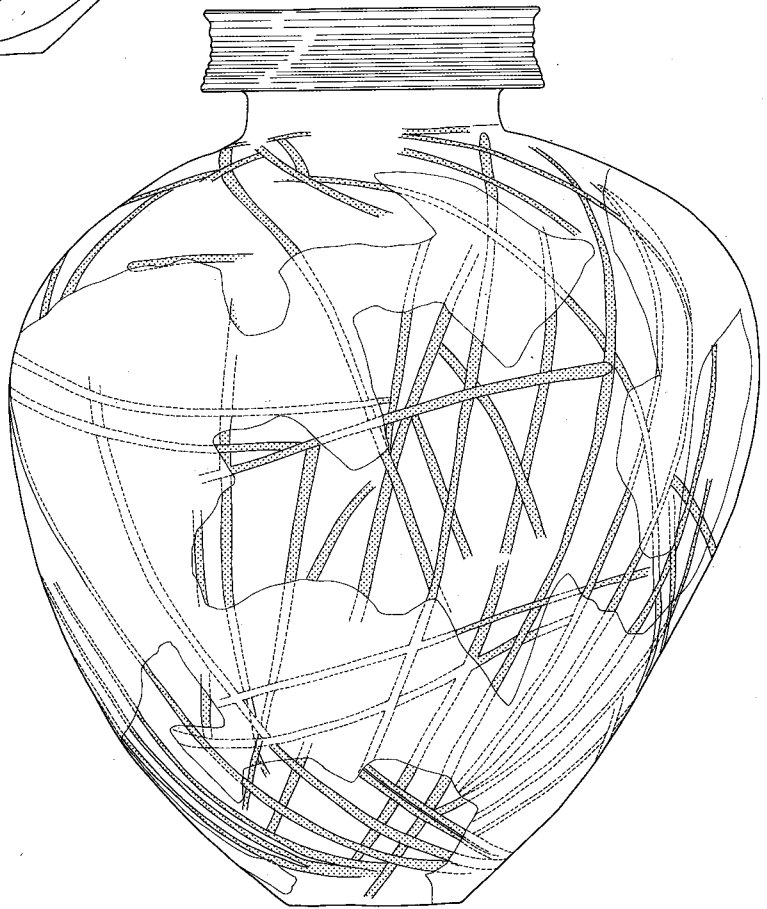
636



第216図 河道1出土土器⑮ (1/4)

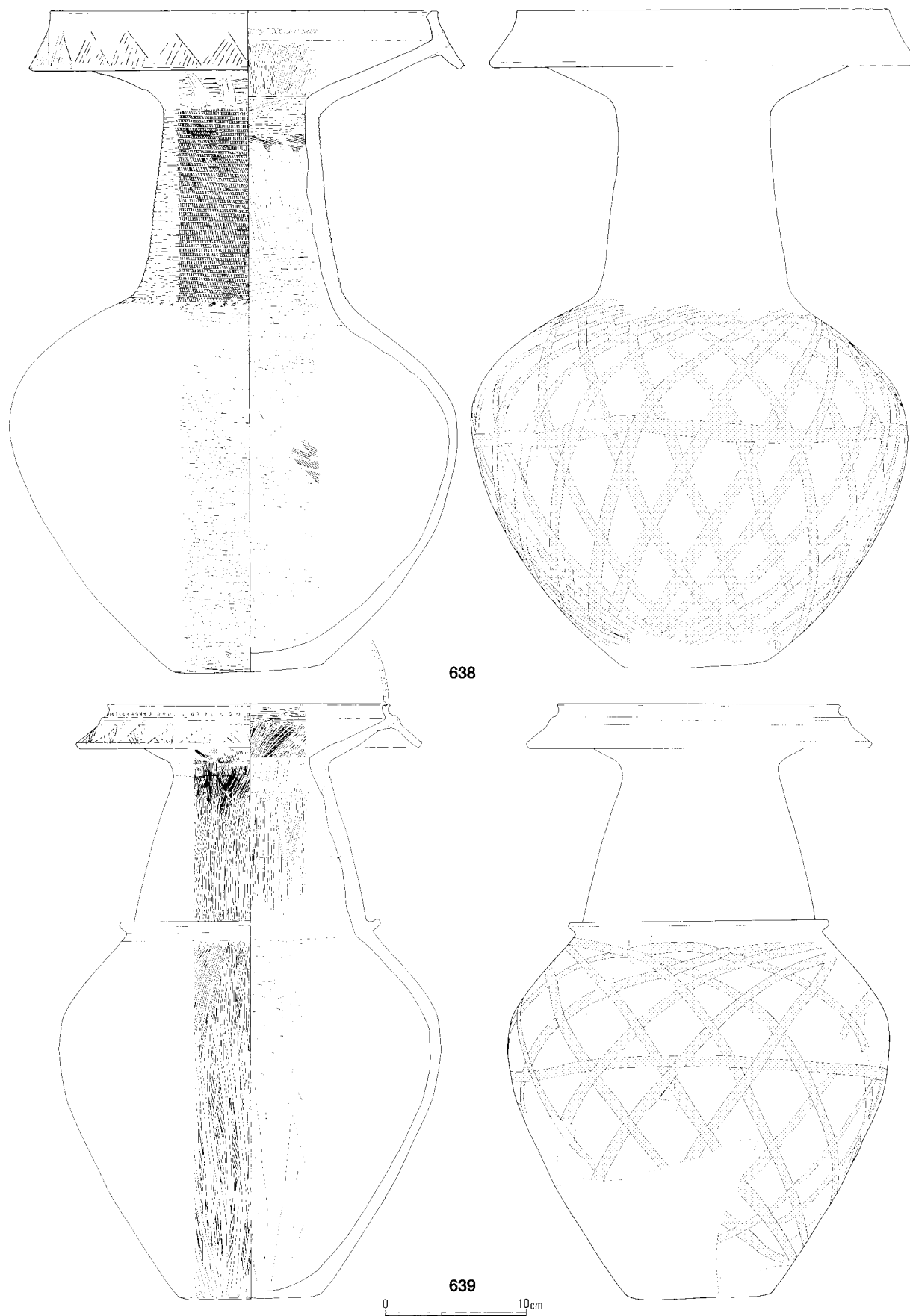


637

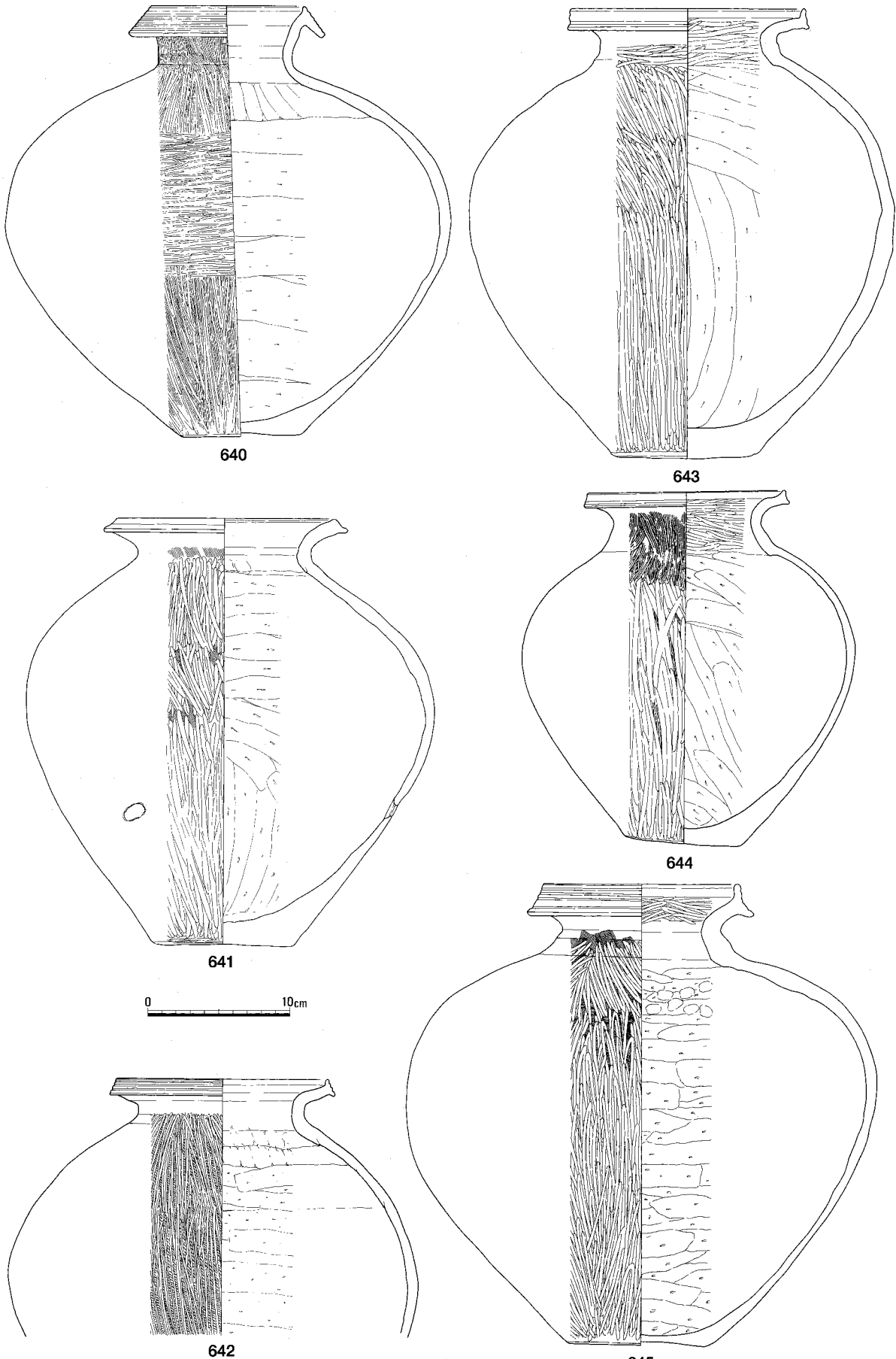


0 10cm

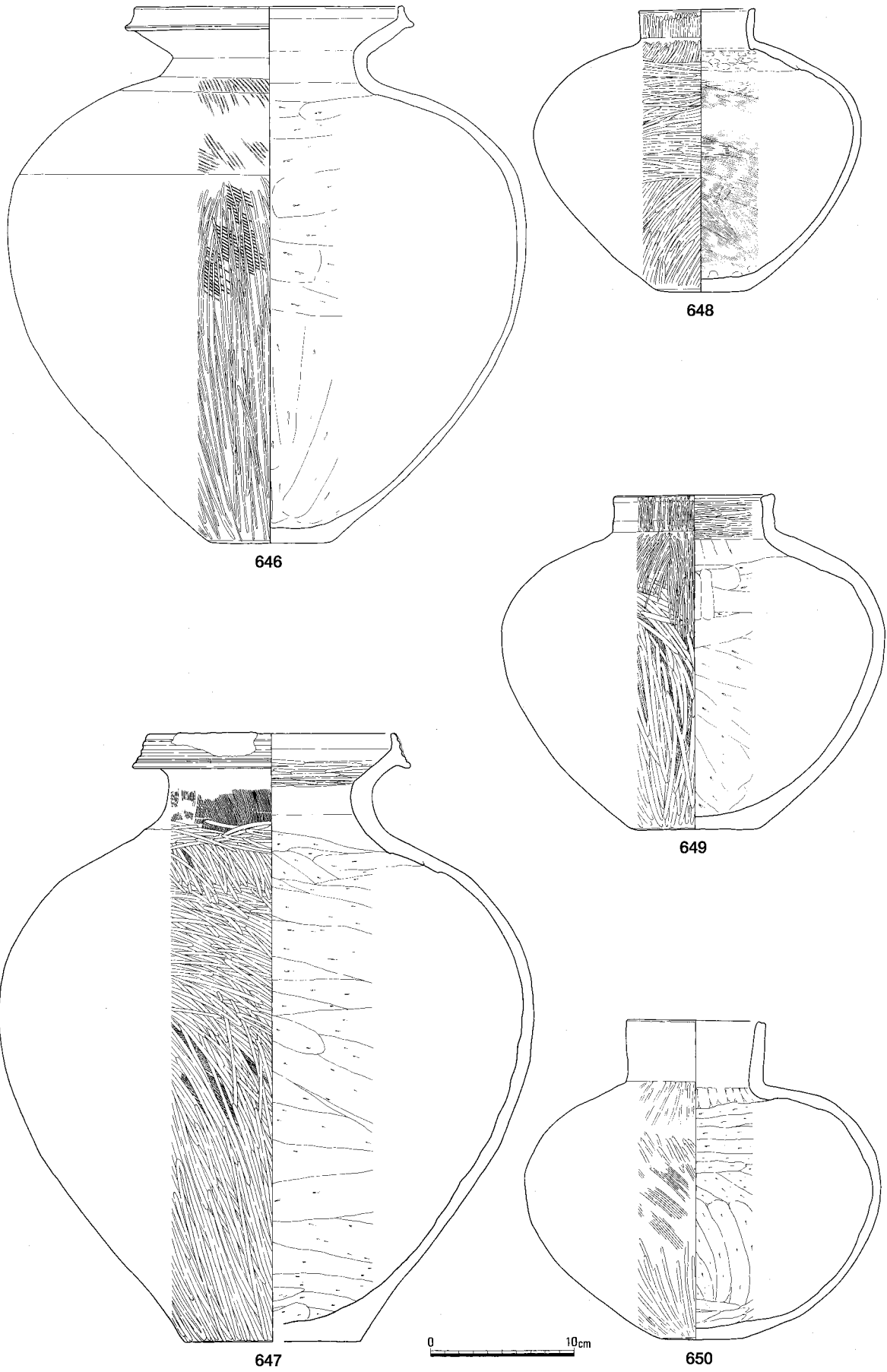
第217図 河道1出土土器⑩ (1/4)



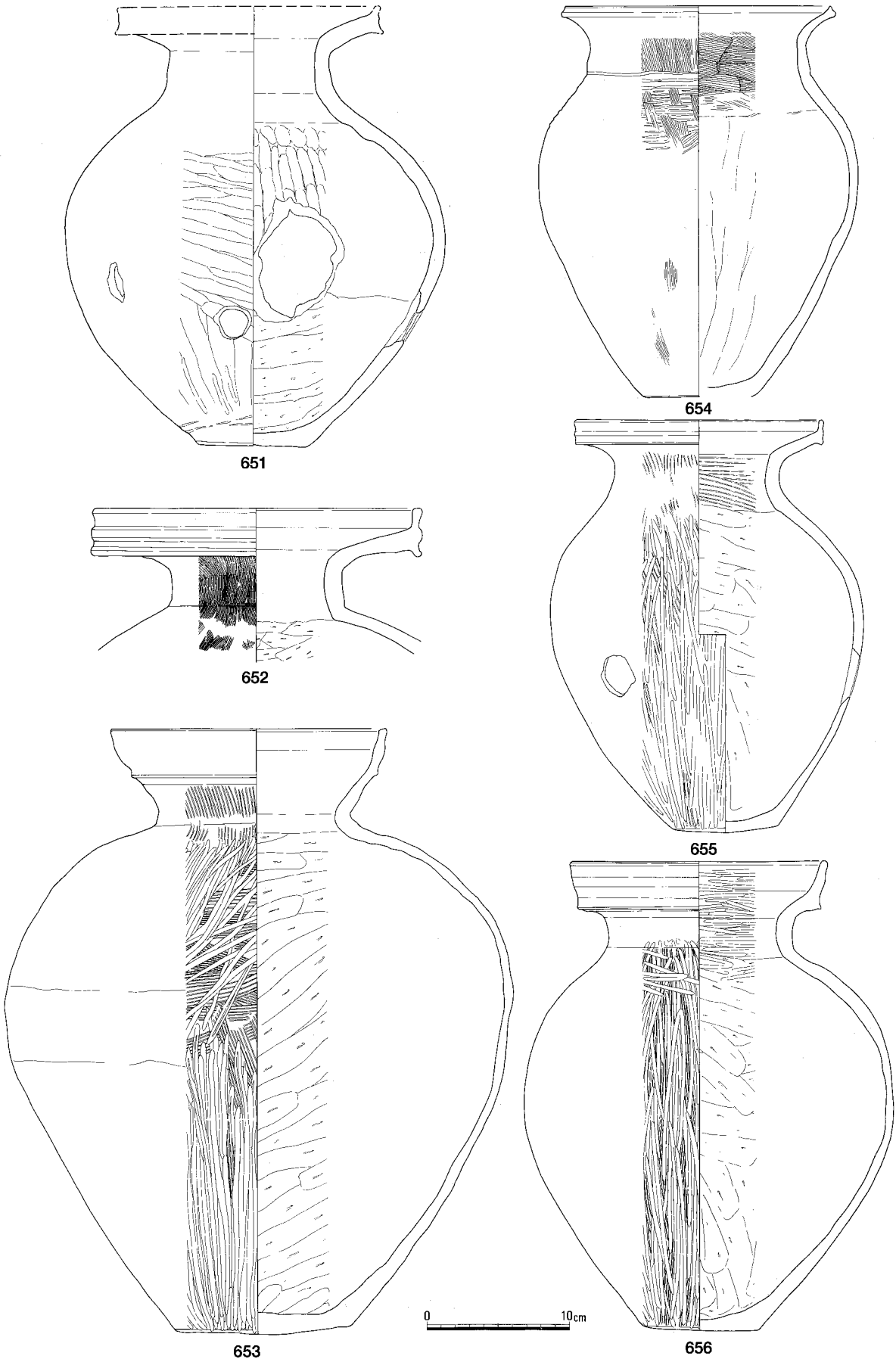
第218図 河道1 出土土器⑰ (1/4)



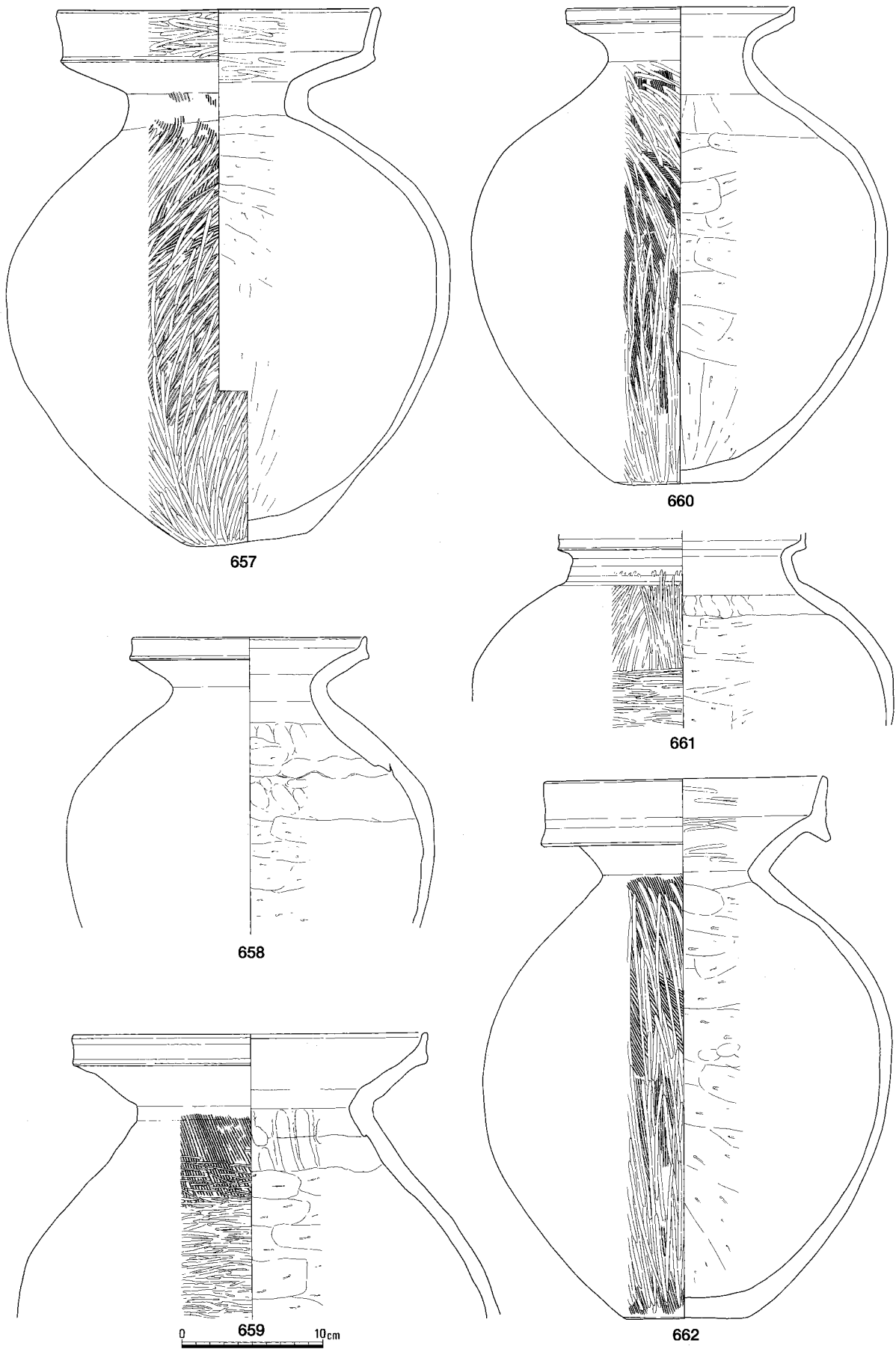
第219図 河道1出土土器^⑮ (1/4)



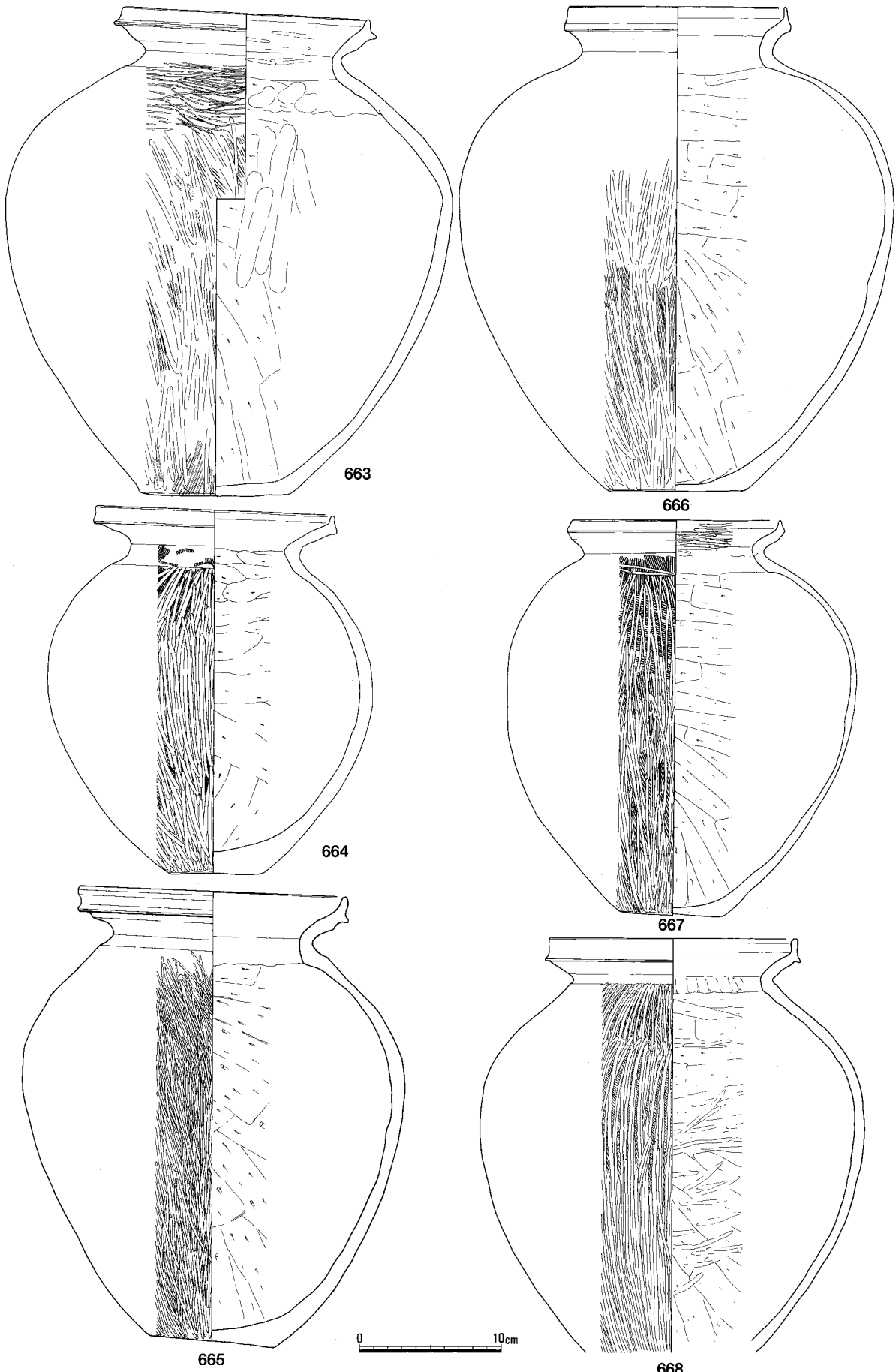
第220図 河道1 出土土器⑱ (1/4)



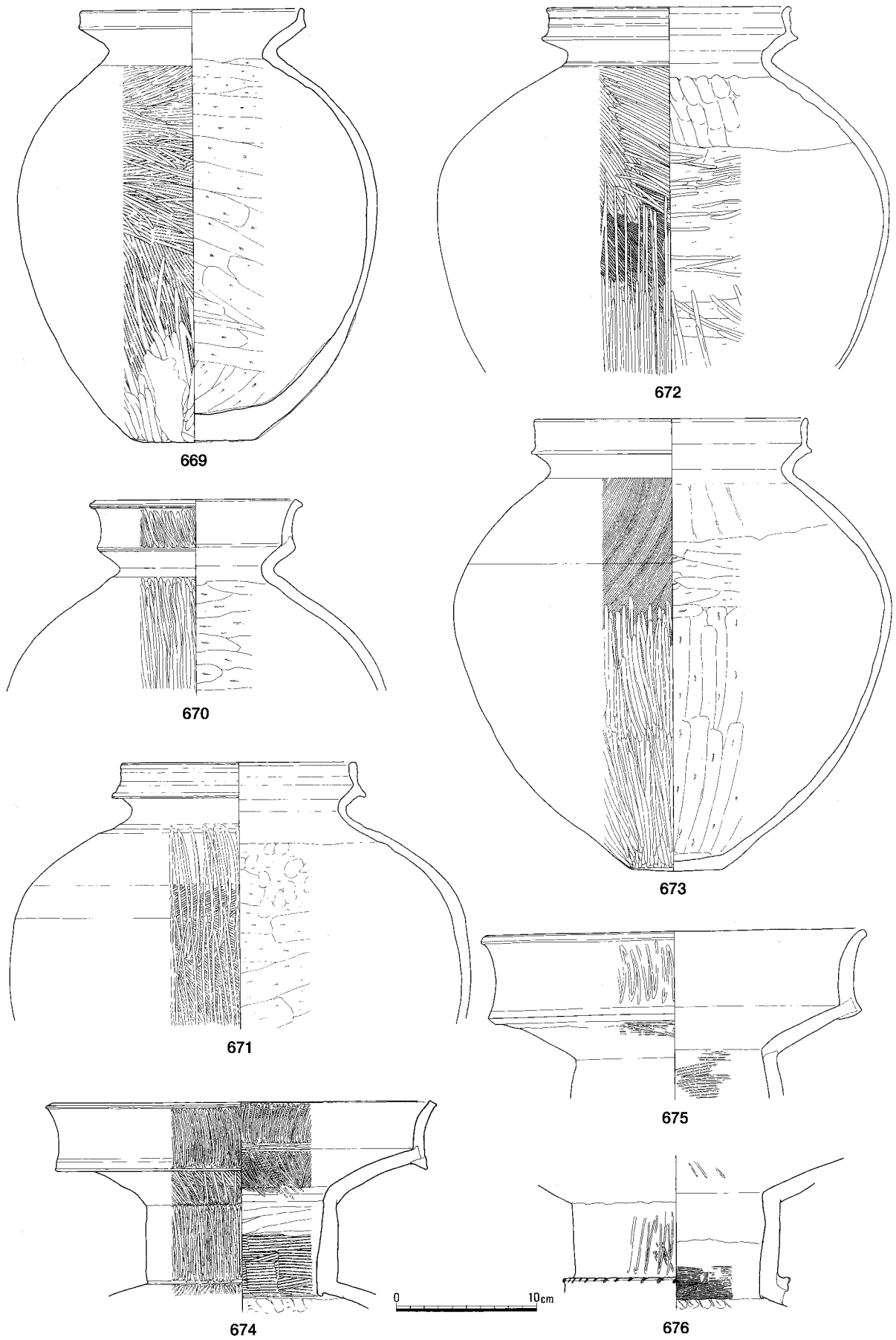
第221図 河道1 出土土器⑳ (1/4)



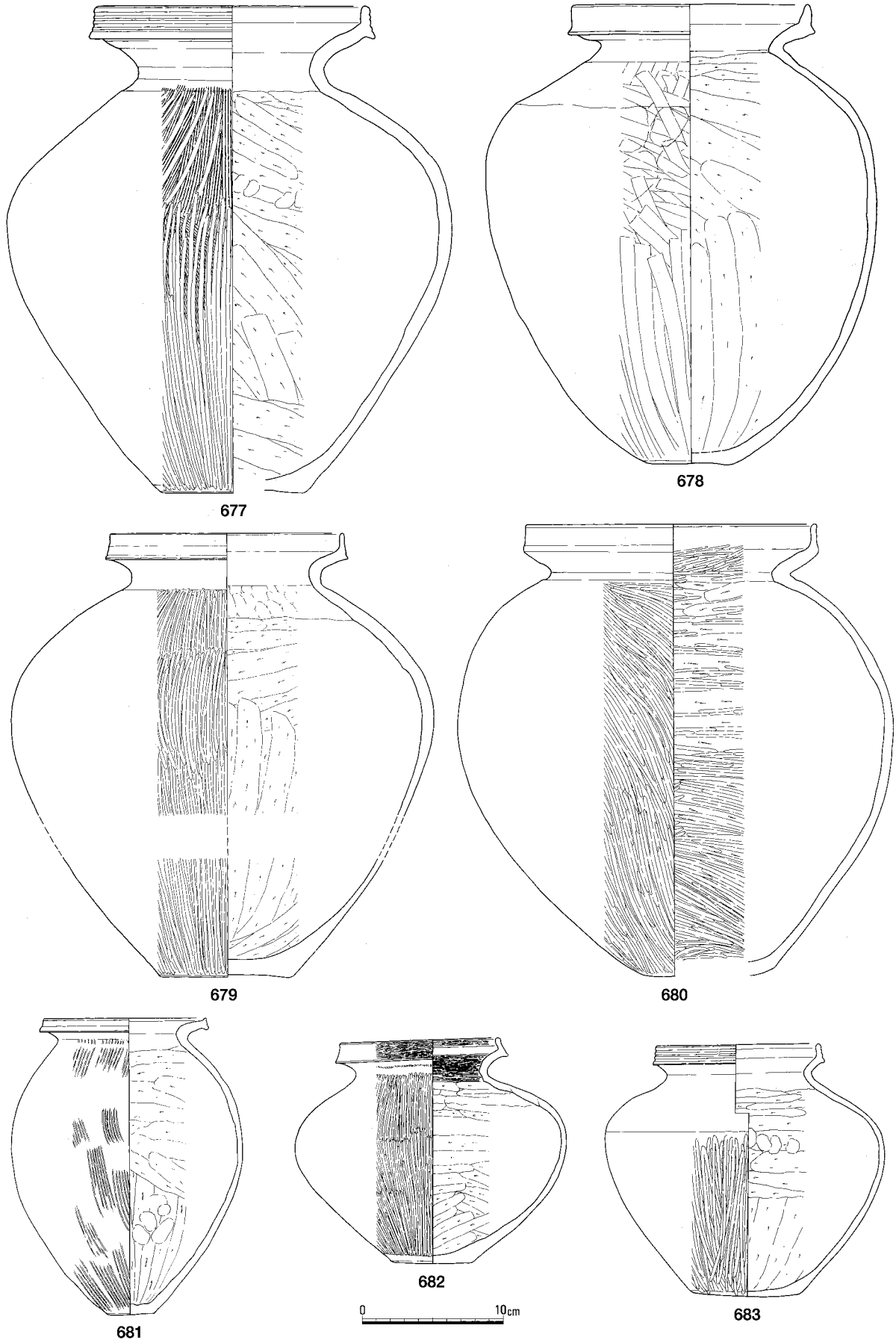
第222図 河道1 出土土器② (1/4)



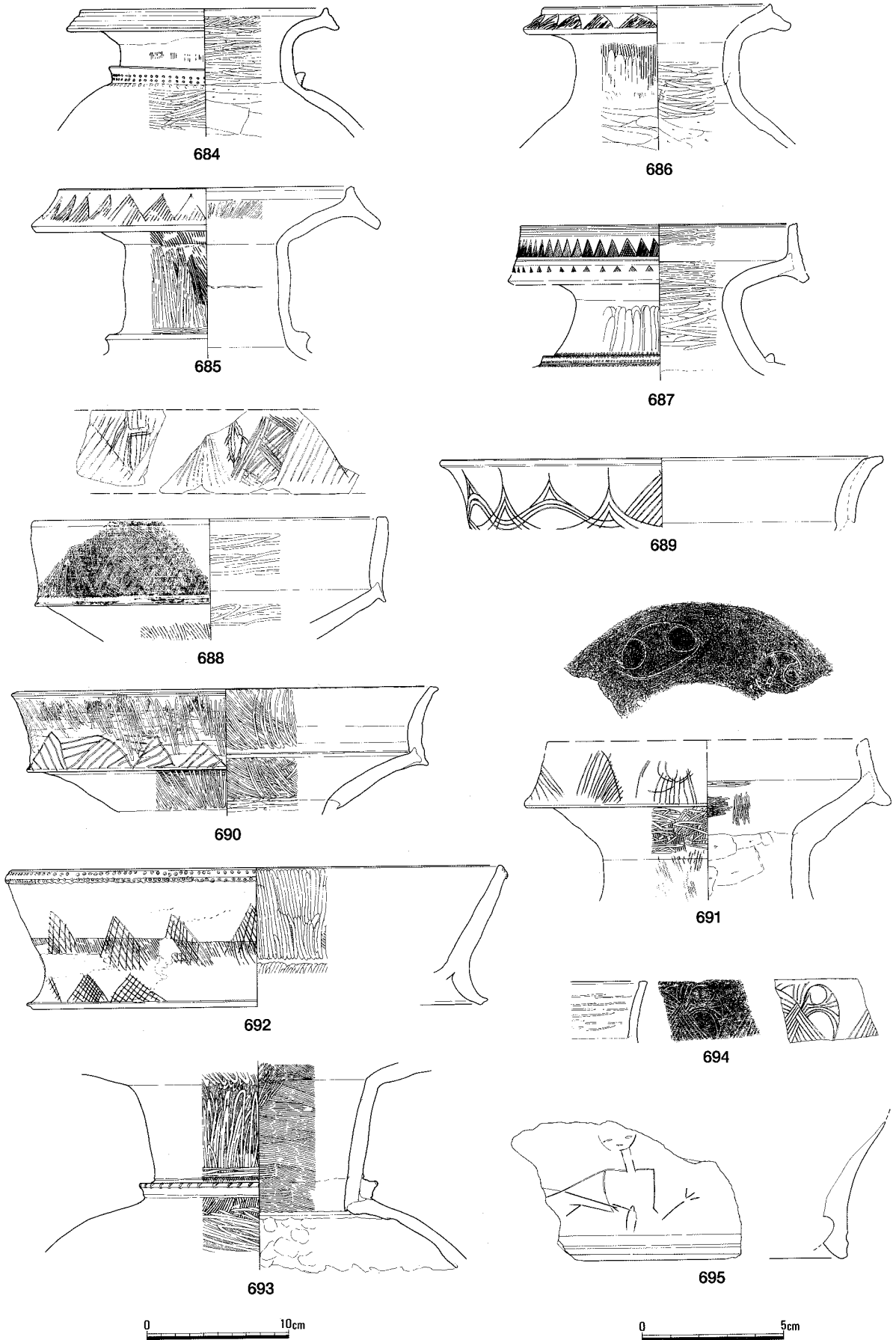
第223図 河道1 出土土器② (1/4)



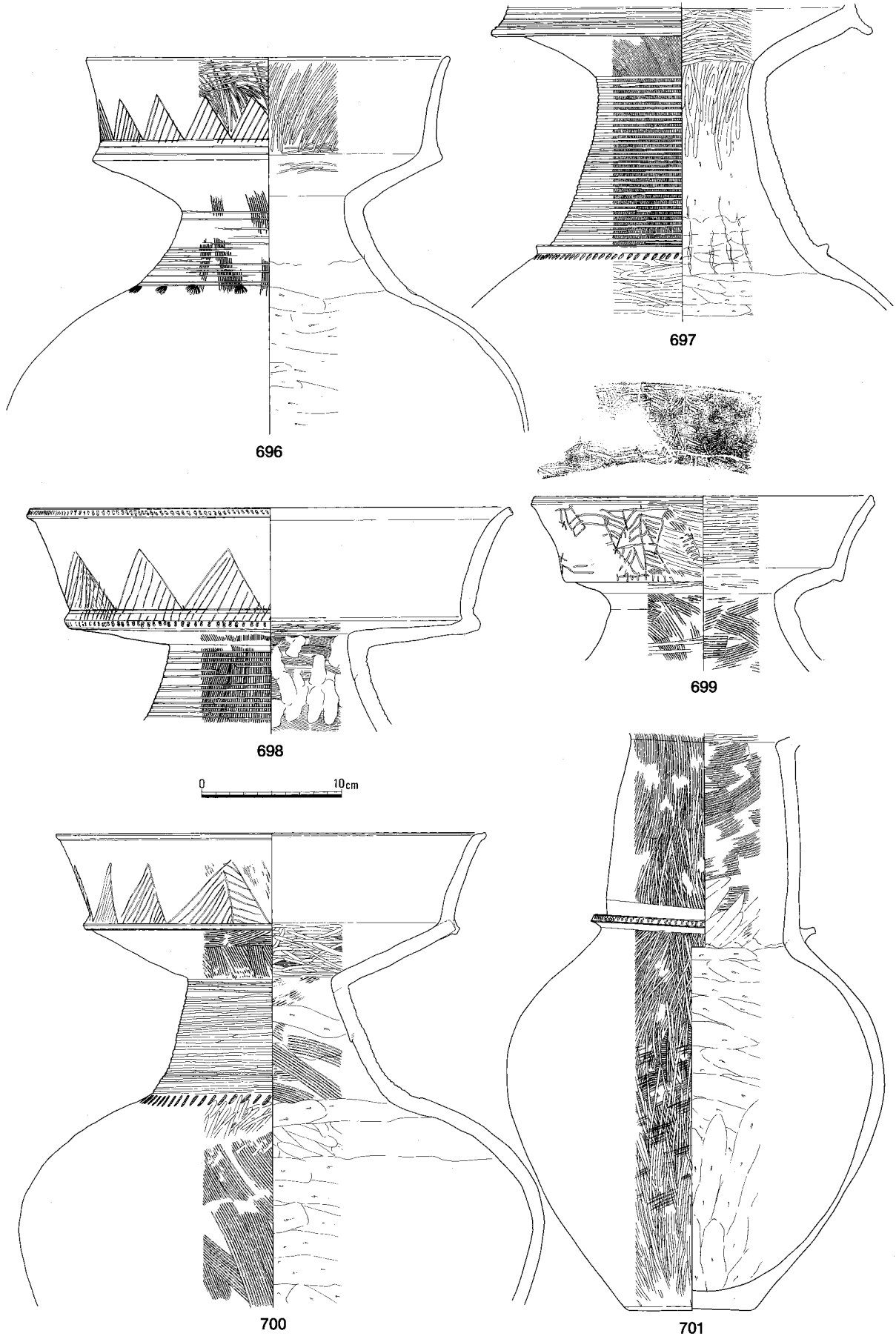
第224図 河道1 出土土器② (1/4)



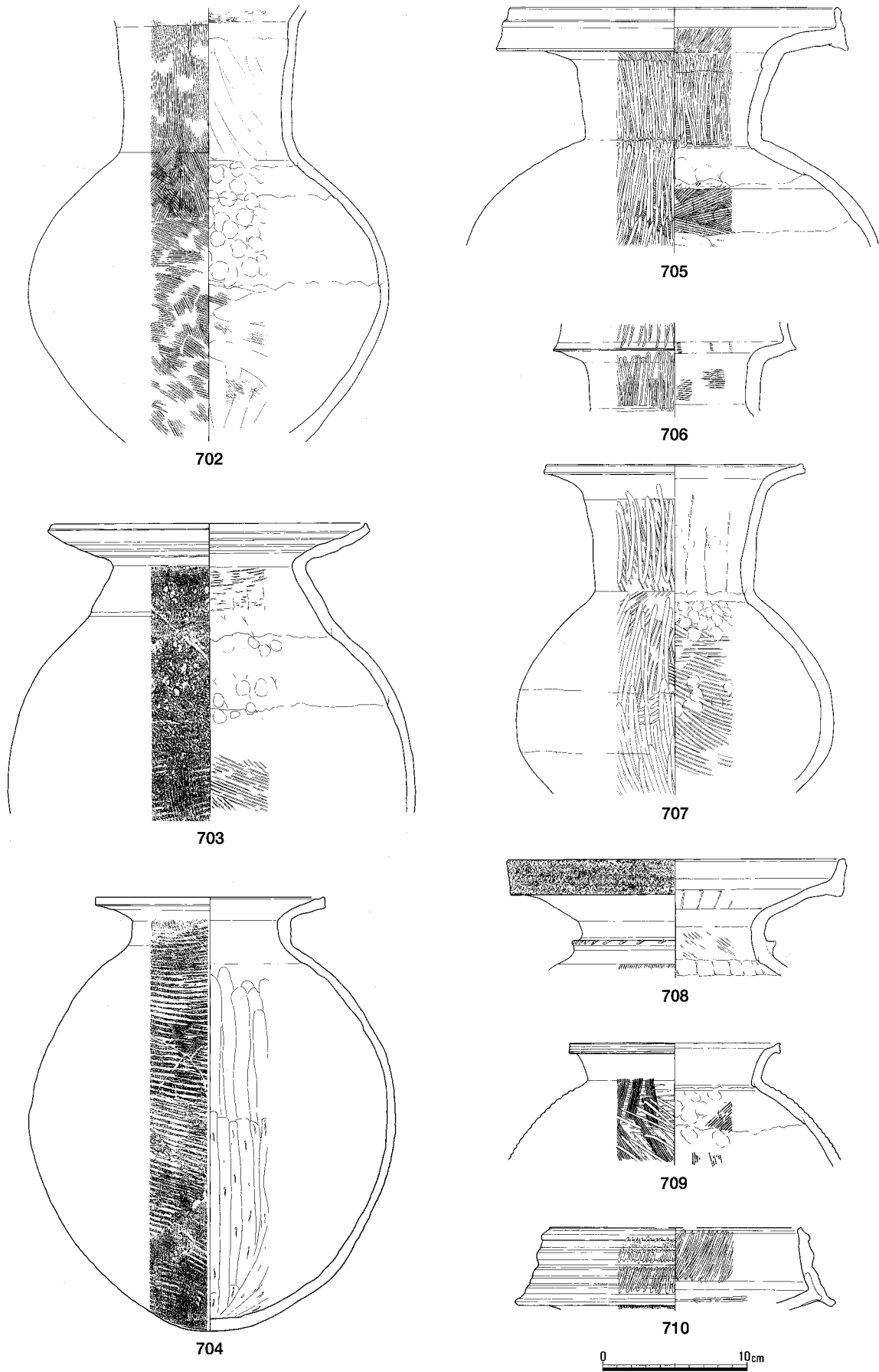
第225図 河道1 出土土器② (1/4)



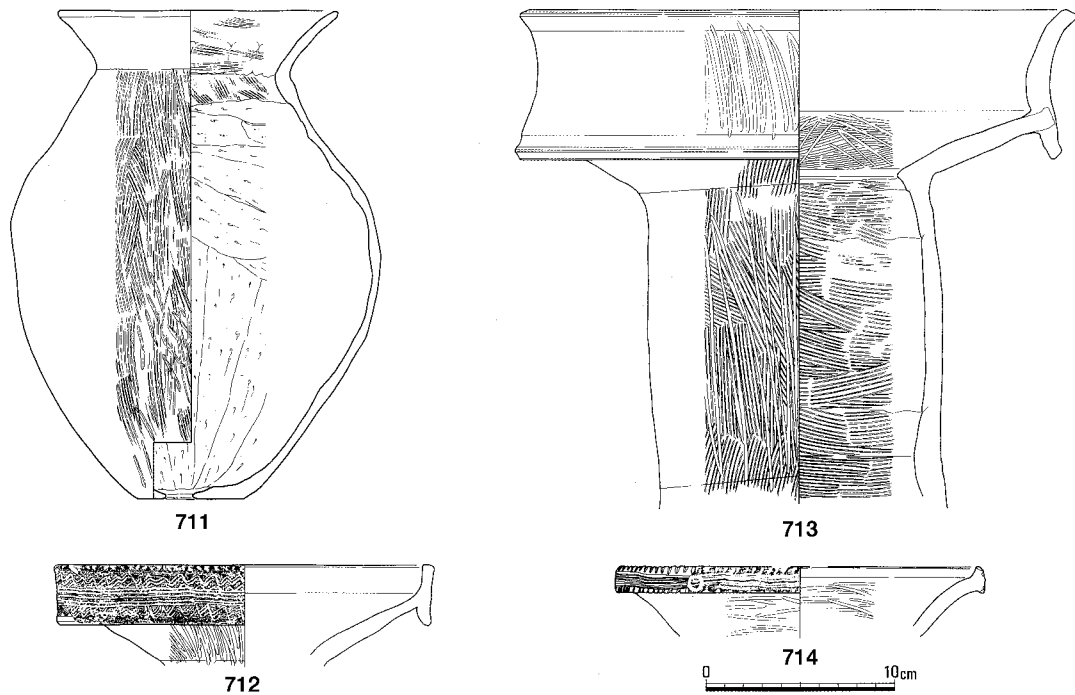
第226図 河道1出土土器② (1/4・1/2)



第227図 河道1出土土器② (1/4)



第228図 河道1出土土器㉞ (1/4)



第229図 河道1出土土器㊸ (1/4)

かれている。684～686は古い型式のものである。688外面には鋸歯文と鋸歯文との間に繊細な線刻がみられる。691内面と694外面には撥形文が線刻される。

壺はここでは便宜上肩部から口縁部への変換を途中頸部をもたさず「く」の字状に外反して短い口縁部をつくるもの（628～630・632・633・641～643・659・660・662～671・672・673・677・683・711）をいう。628・629は小型の壺で、丁寧なヘラミガキによって調整される。628には焼成後による穿孔がみられる。630は大型品で口縁部は拡張をしなく、外面には擬凹線文が巡る。632・633は、胴部最大径の部分から頸部まで直線的に続く肩をみせるもので、口縁部を上方に拡張させる。641は、口縁部が拡張しない古相を呈するもので、胴部には1か所焼成後の穿孔がみられる。658は、内面ヘラケズリが及ばない押圧等調整痕跡をみせている。662は口縁部が上下に拡張したもので内面頸部近くまでヘラケズリがなされている。

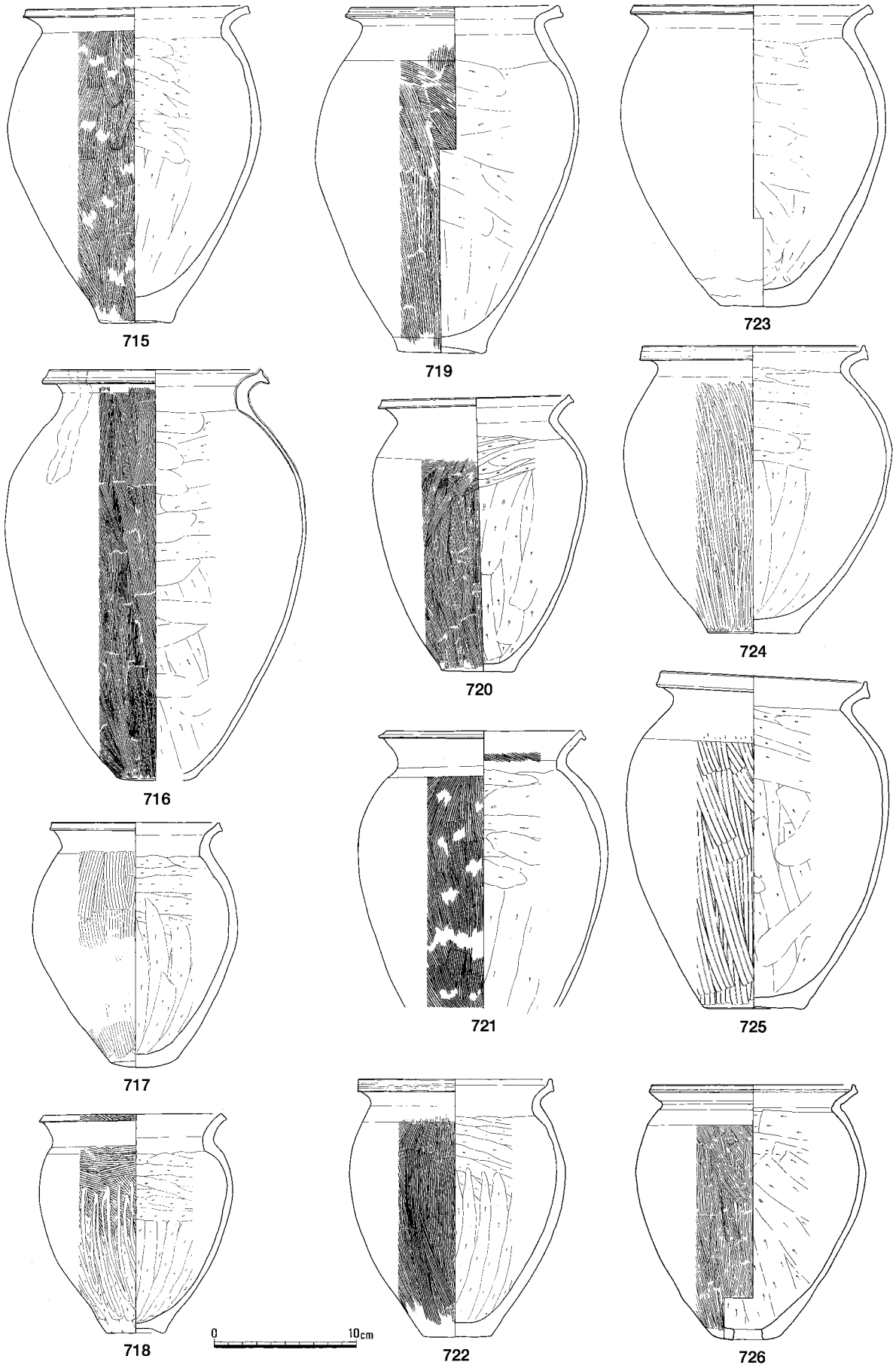
直口壺（648～650）は、肩のよく張った胴部に直立する短い口頸部を有するもので、量的には多くない。いずれも高さ20～25cmのものに限られ、外面は丁寧なヘラミガキが施される。

他の地域からの搬入品と考えられるものも存在する。637は、口縁部が上下に長く外反気味に拡張するもので口縁部上端には面をつくる等、備後地方の特徴をみせる。702は口縁部と底部を欠くが胎土中に雲母を多く含み、胴部内面が押圧とナデにより調整されている。703は胴部外面にタタキメを残し、口縁部上面には擬凹線文が巡る。704は全体に白く焼成されており、外面にはタタキメが、内面はナデアゲとヘラケズリで調整されている。705と706は直立もしくは逆「ハ」の字状の頸部と内傾気味に短く拡張する口縁部を有するもので、雲母を多く含む。707は、704と同じ色調を呈しており、外面にはタタキメがヘラミガキの下に、内面にはハケメがみられる。708は頸部に断面三角形の突帯、口縁部外面には細かな櫛描き波状文が巡る。709は外面にタタキメ、内面には押圧とハケメ調整されている。710は637と類似した口縁部の在り方を示すもので、備後地方の土器である可能性が高いと考える。713は後述する特殊な壺・器台等に近い胎土である。（島崎）

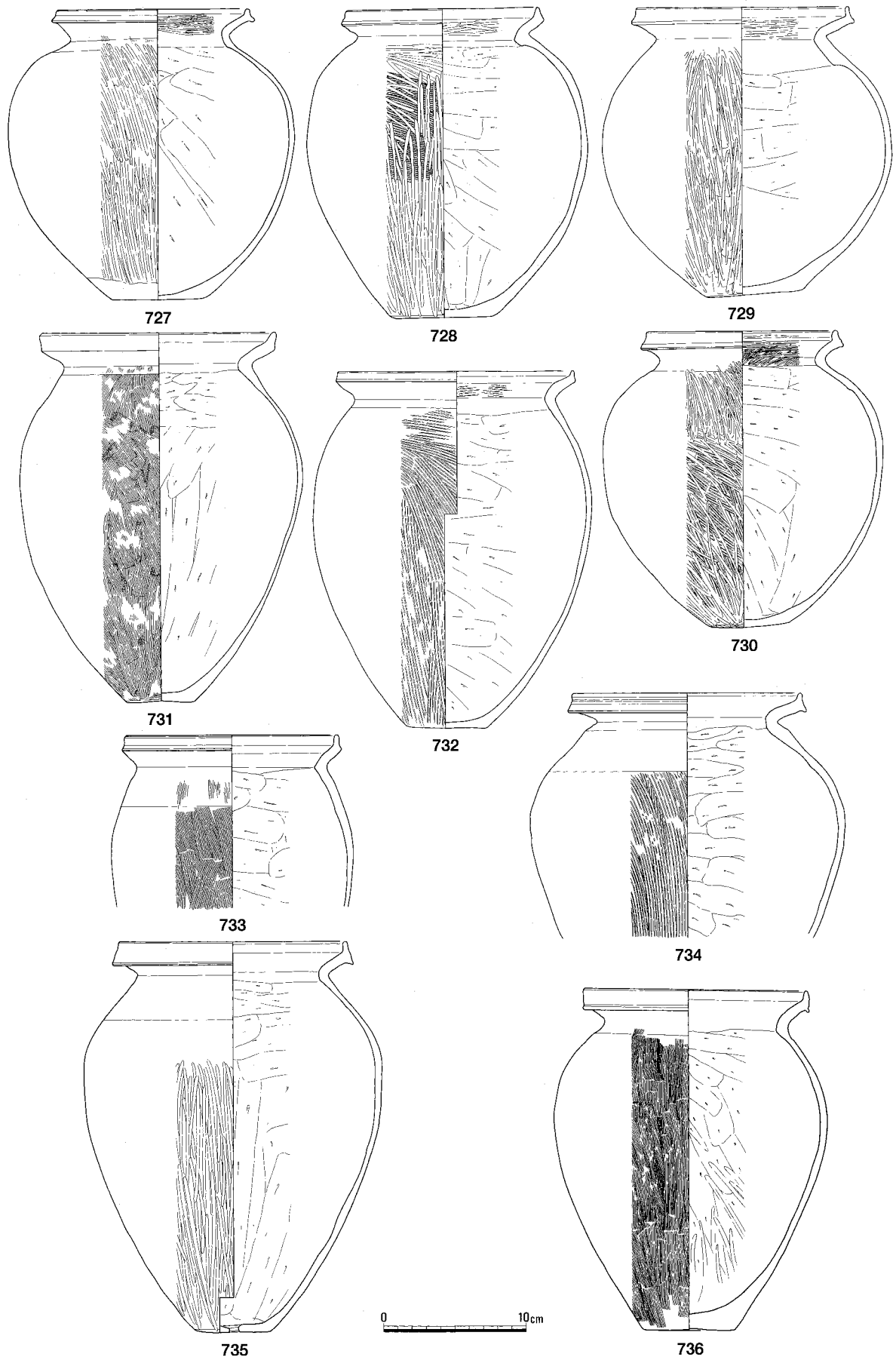
甕 (第230～240図)

時期的には後期中葉から終末までのものを含む。ほとんどの甕が体部内・外面に煮沸痕跡である炭化痕跡・煤を残している。底部から口縁部にかけて全面に遺存するものに715～723・725・732～750・752～756・758・762～764・767・769～774・776・778～781・783～790・792～799・801～803・805～806・808～812・814～817・819・820がある。部分的にみせるものに726・731・777・807・818が、煤の遺存は認めないが煮沸の際の被熱痕跡をみせるものに782・807・813がある。一方、全く被熱・煤等煮沸痕跡が認められないものに724・727～730・751・757・761・765・768・791・800・821がある。なお、全面煤がみられるものの中には付着の状況が一様でなく、また黒く光沢をもつ722等もある。さらに全面に煤が付着するものの中には煮沸時の吹きこぼれ痕跡が遺存する717・722・733・736・755・779・781・784等が存在する。内面の状況については全く炭化物および痕跡すら認めない723・724・726～730・745・751・753・757・761・764・768・770・773・776・777・779・780・781・786・789・791・792・795・798・800・807・812・813等があり、認めるものもそれぞれに様相が異なるため個別に説明を行う。

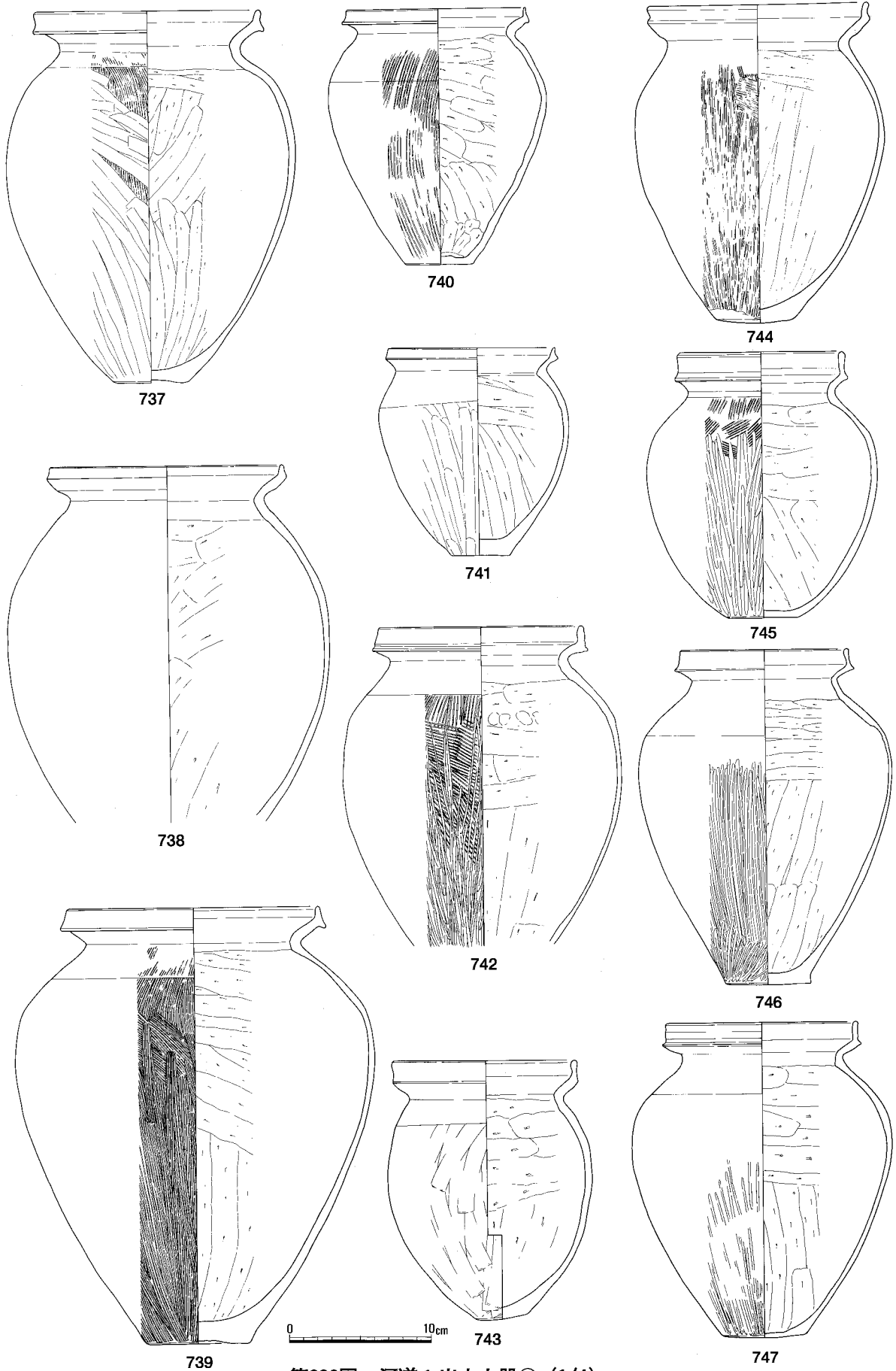
715は716～726と同じく重厚な底部と口縁部が拡張しない段階のものである。内面には炭化物および痕跡を認めない。716は口縁部から肩部に粘土を貼り付けた補修痕跡がある。内面体部中央部に幅5cm前後の環状に炭化物の痕跡がみられる。717・718は器高15～17cmの小型製品である。717の底部付近は被熱により器壁が剥落して、その後にも煮沸がなされている。内面には明瞭な焦げはみられない。718は内面全体に焦げ痕跡を残す。719は比較的厚な底部と拡張しない口縁部をみせる。内面体部下半中央部には幅5cm前後の環状に炭化痕跡を認める。720は内面には炭化痕跡を認めない。721は口縁部をわずかに下方に伸ばす。内面下半に炭化物付着痕跡と思われる色調の変化を認める。722内面底部付近に環状に色調変化を認める。724は727～730と同一の規格にあり、口縁部内面ヘラミガキ調整の在り方、内・外面に煤・焦げを認めないことで共通する。725の内面には炭化物痕跡を底部から肩まで認める。726の底部には焼成後の穿孔がある。731～733は口縁部をやや上方につまみ上げる段階のもので、内面体部下半に幅5cm前後の環状炭化痕跡を認める。732と733には焦げ痕跡が認められる。735は底部に焼成後、回転によって小孔が穿たれる。736は内面全体に環状を呈する幅5cm前後の炭化痕跡が3条それぞれに無痕跡帯をはさんでみられる。737内面は色調の変化で炭化物の存在を推測できる。738・739は内面全体に炭化痕跡を認める。740は外面被熱により底部に剥落がある。内面には744と同じく底部から2cm上に幅5cm前後の環状に炭化痕跡が認められる。742は口縁部の拡張が進んだ段階で後期Ⅲとなる。内面体部中央付近に幅2cm前後に環状炭化痕跡を認める。746内面にはほぼ全面にわたって炭化痕跡が認められ、一部に米粒痕跡がみられる。747内面には底部から3cm上に幅2cm前後に環状炭化痕跡が遺存する。748は口径18cm・器高30cmを測る大型品である。内面には体部下半に幅6cm前後に環状炭化痕跡を認める。749・750の内面にはほぼ全体にわたって炭化痕跡がある。752は底部に焼成後穿孔による孔が穿たれているが、内面に遺存する底部付近と胴部最大径付近にみられる幅3～5cm前後の環状炭化痕跡との関係については明瞭でない。754・756・760・762・767の内面にはほぼ全体に炭化痕跡が認められる。759は口縁部の上方への拡張がさらに発展した結果として外面に擬凹線文が施される。時期的には後期Ⅳ段階に相当する。底部には焼成後の穿孔と内面には体部下半に炭化痕跡を認める。757と758の肩部外面にはそれぞれ1点、762には2点、766には3点、768には横方向に3点の刺突文が付けられる。器高37cmと大型の761には内・外面に煤・炭



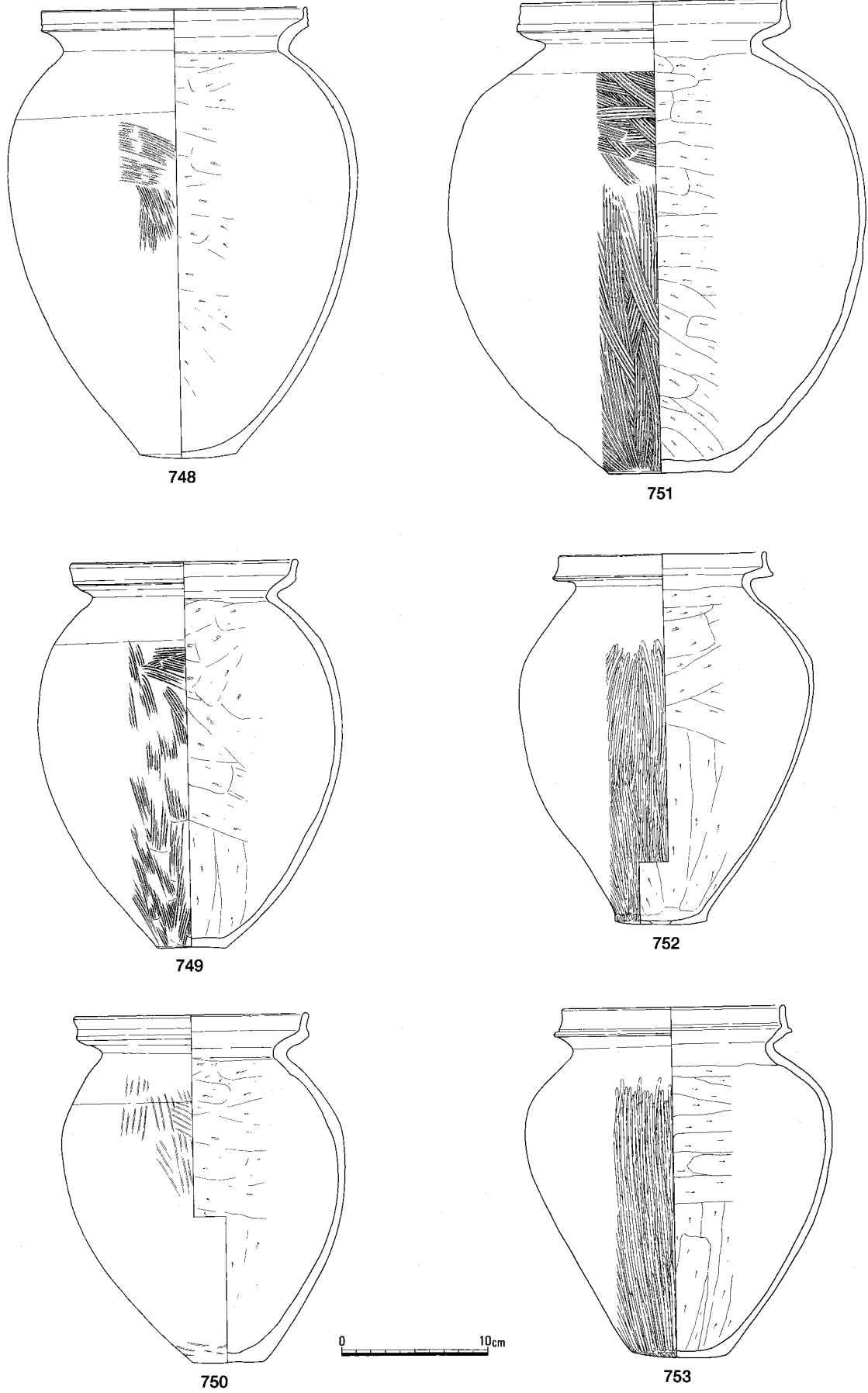
第230図 河道1出土土器㊟ (1/4)



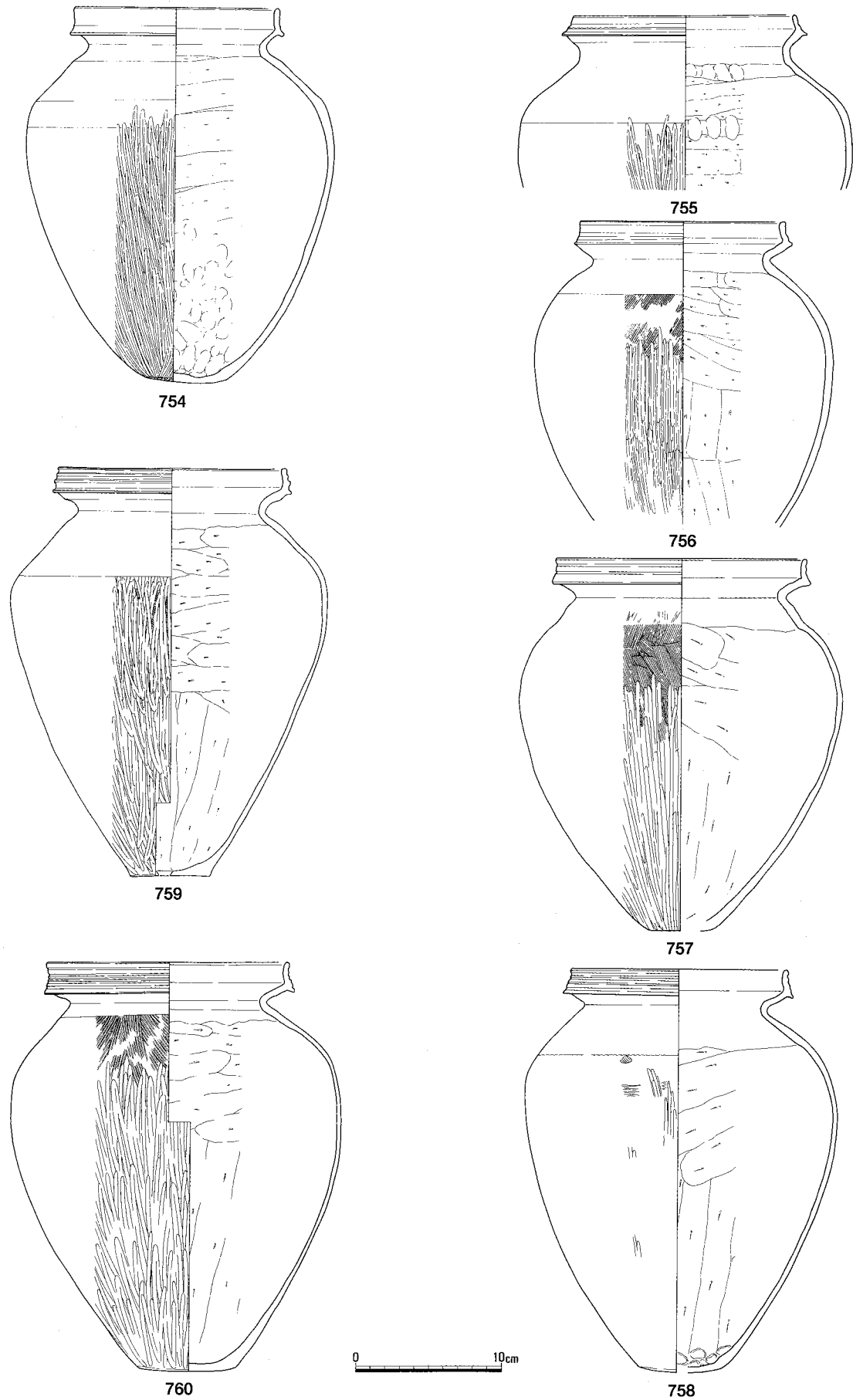
第231図 河道1 出土土器⑩ (1/4)



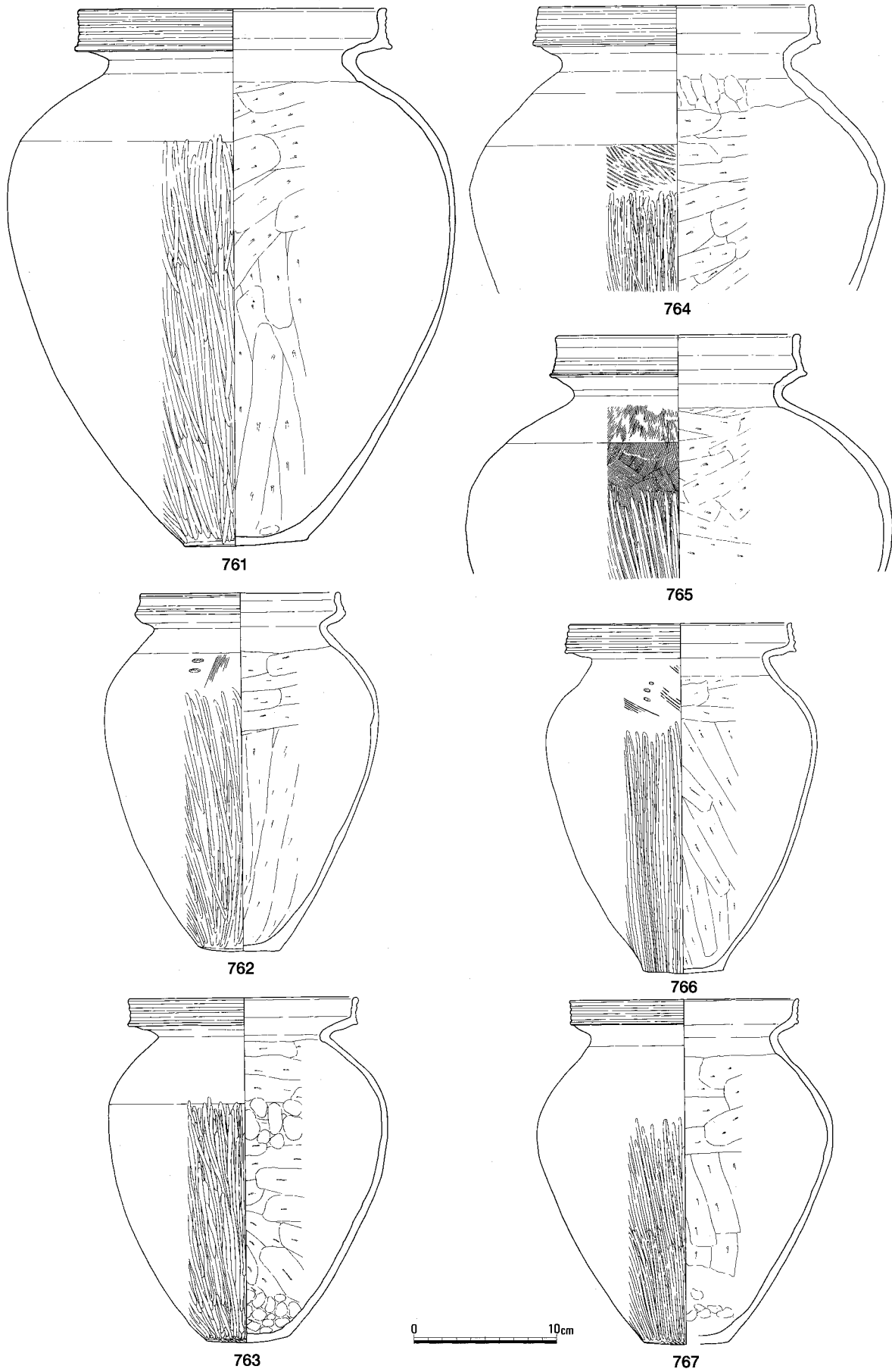
第232図 河道1出土土器③ (1/4)



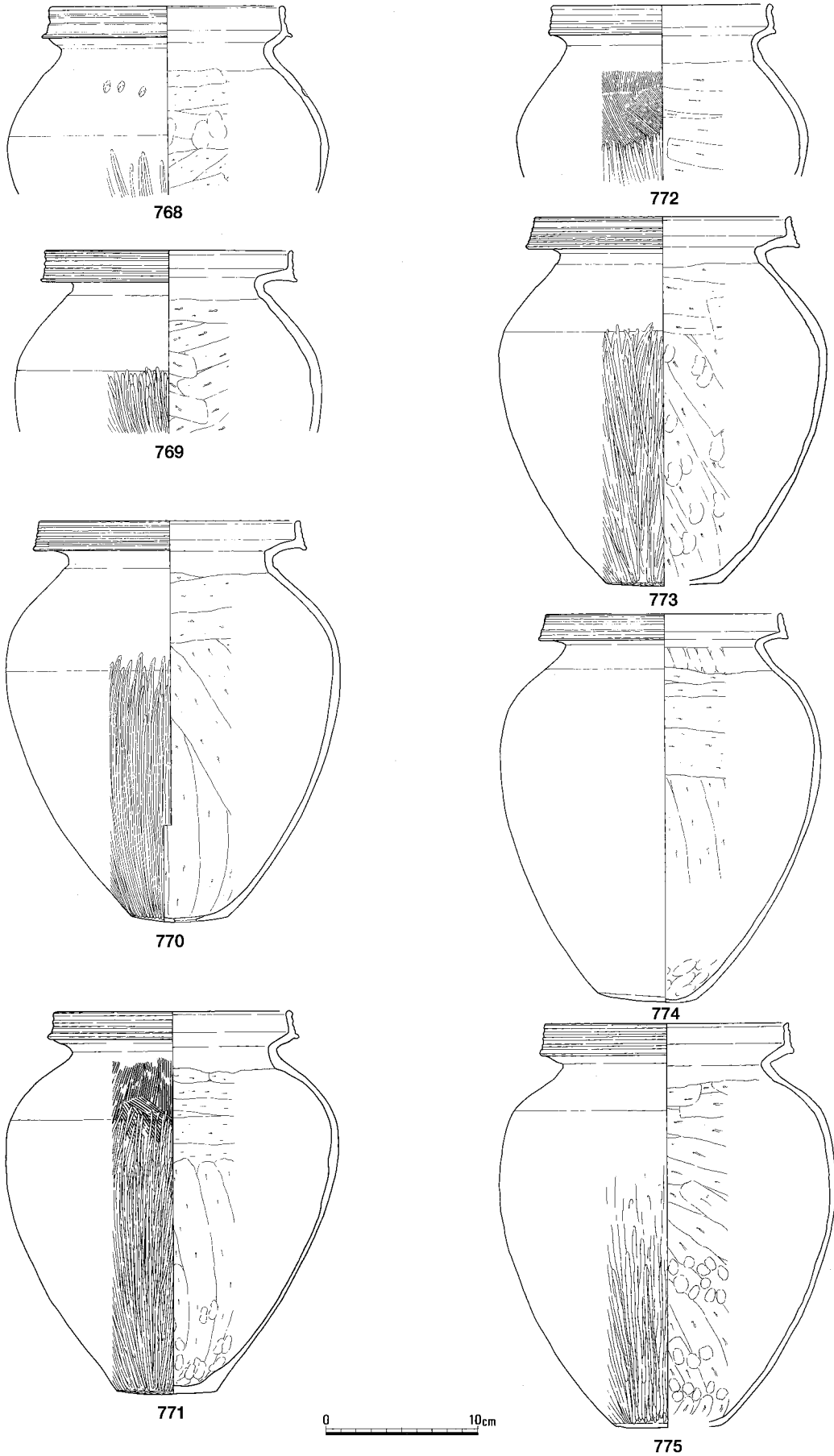
第233図 河道1出土土器③ (1/4)



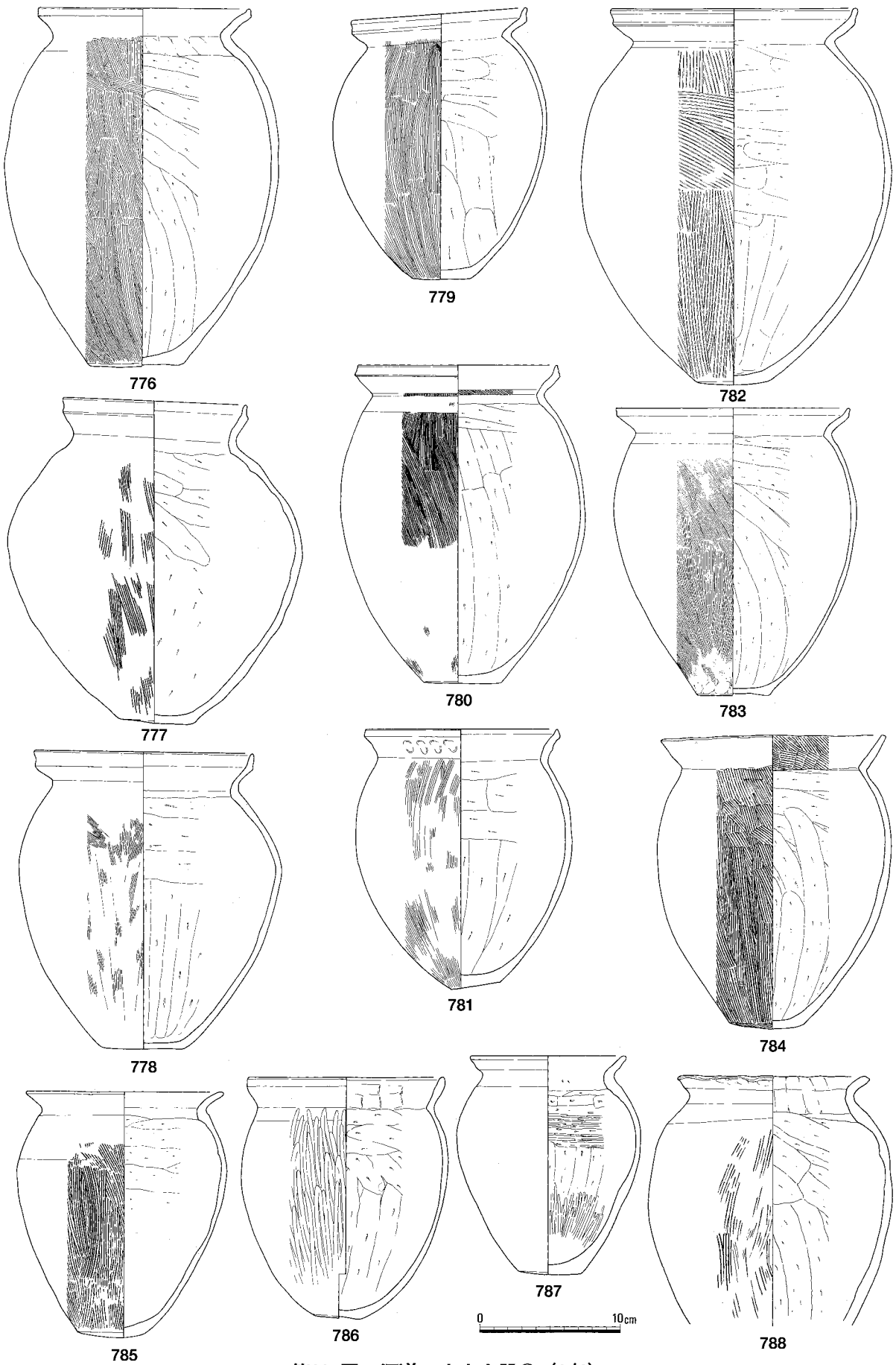
第234図 河道1出土土器③ (1/4)



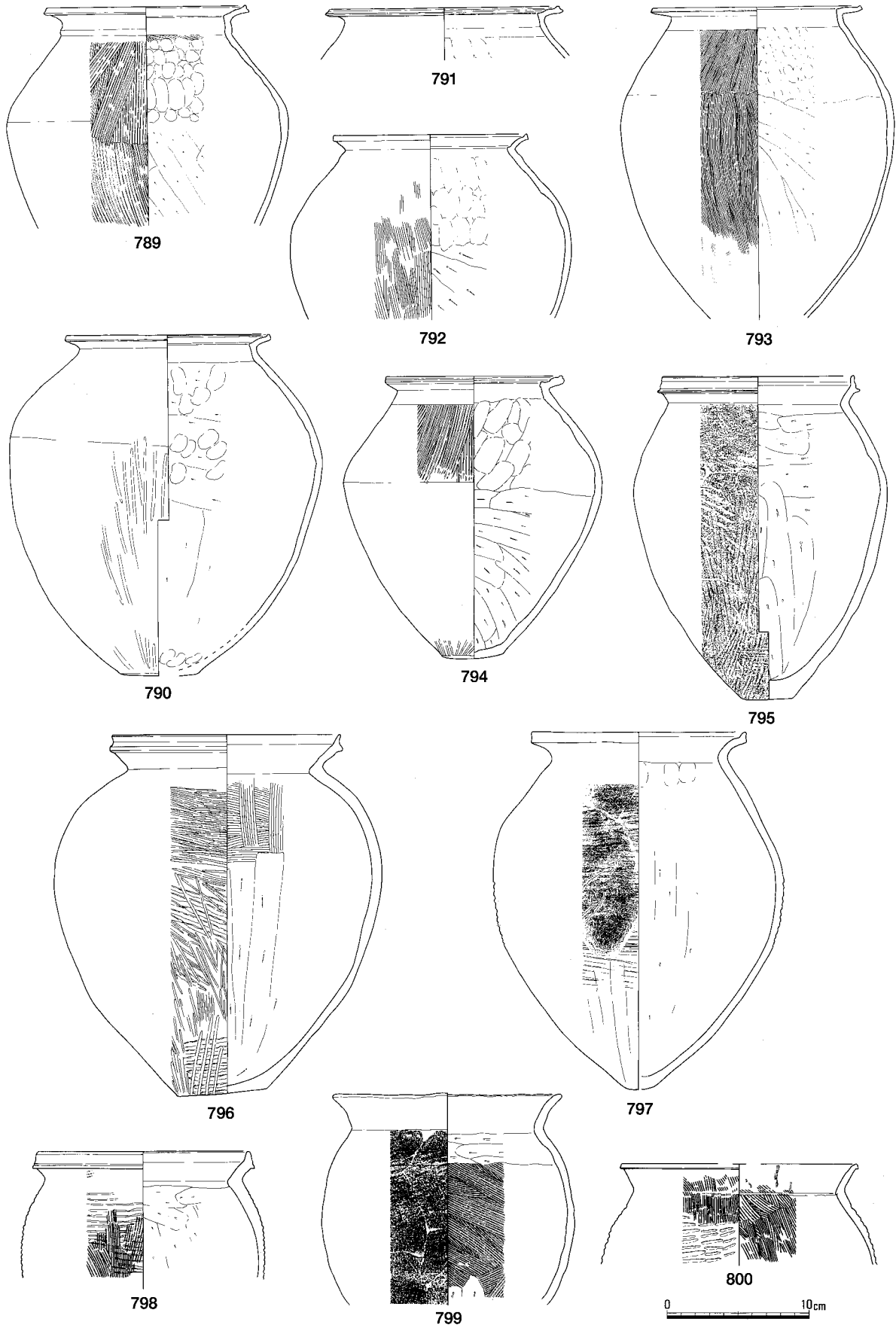
第235図 河道1出土土器③ (1/4)



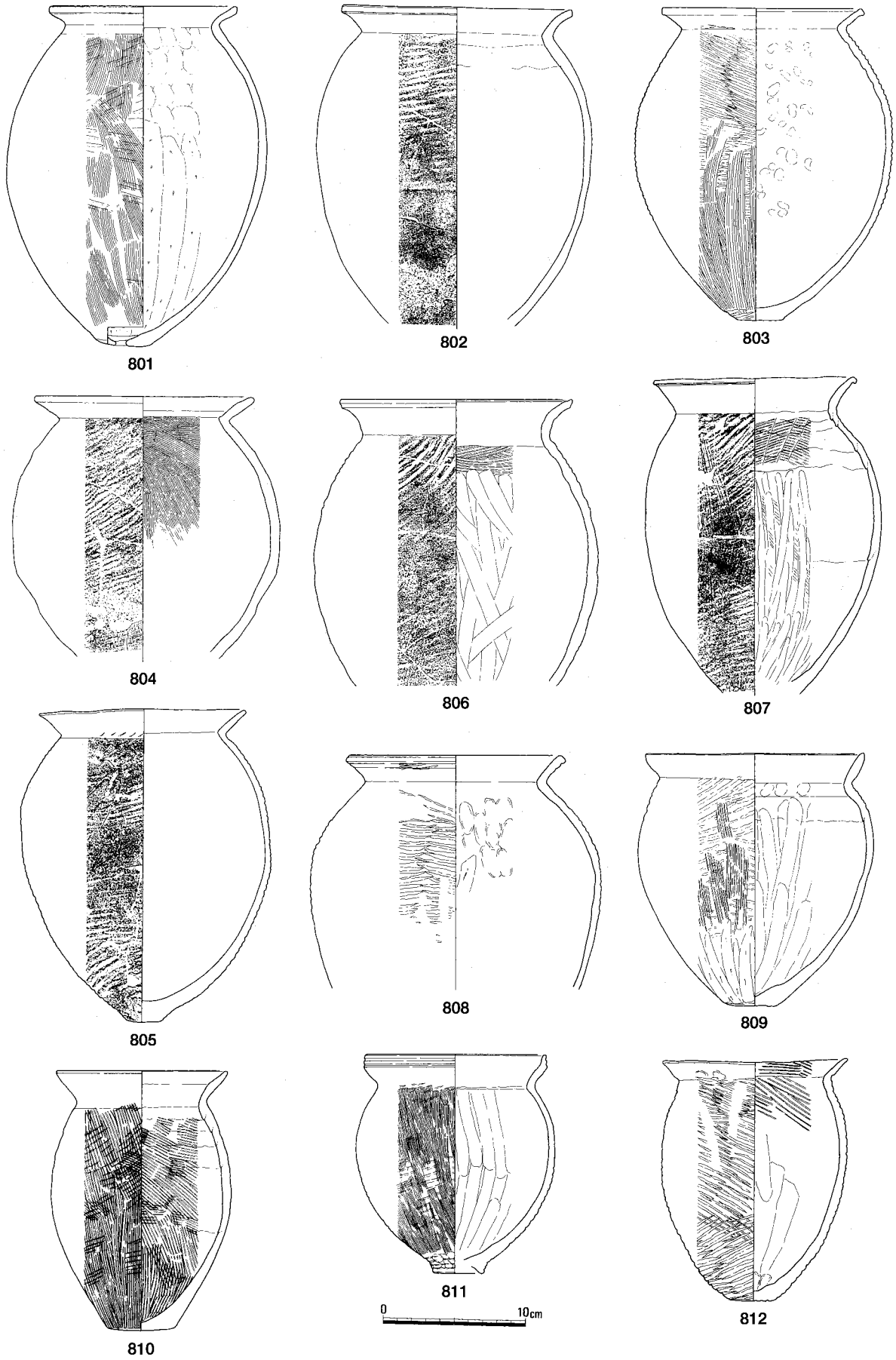
第236図 河道1出土土器㊸ (1/4)



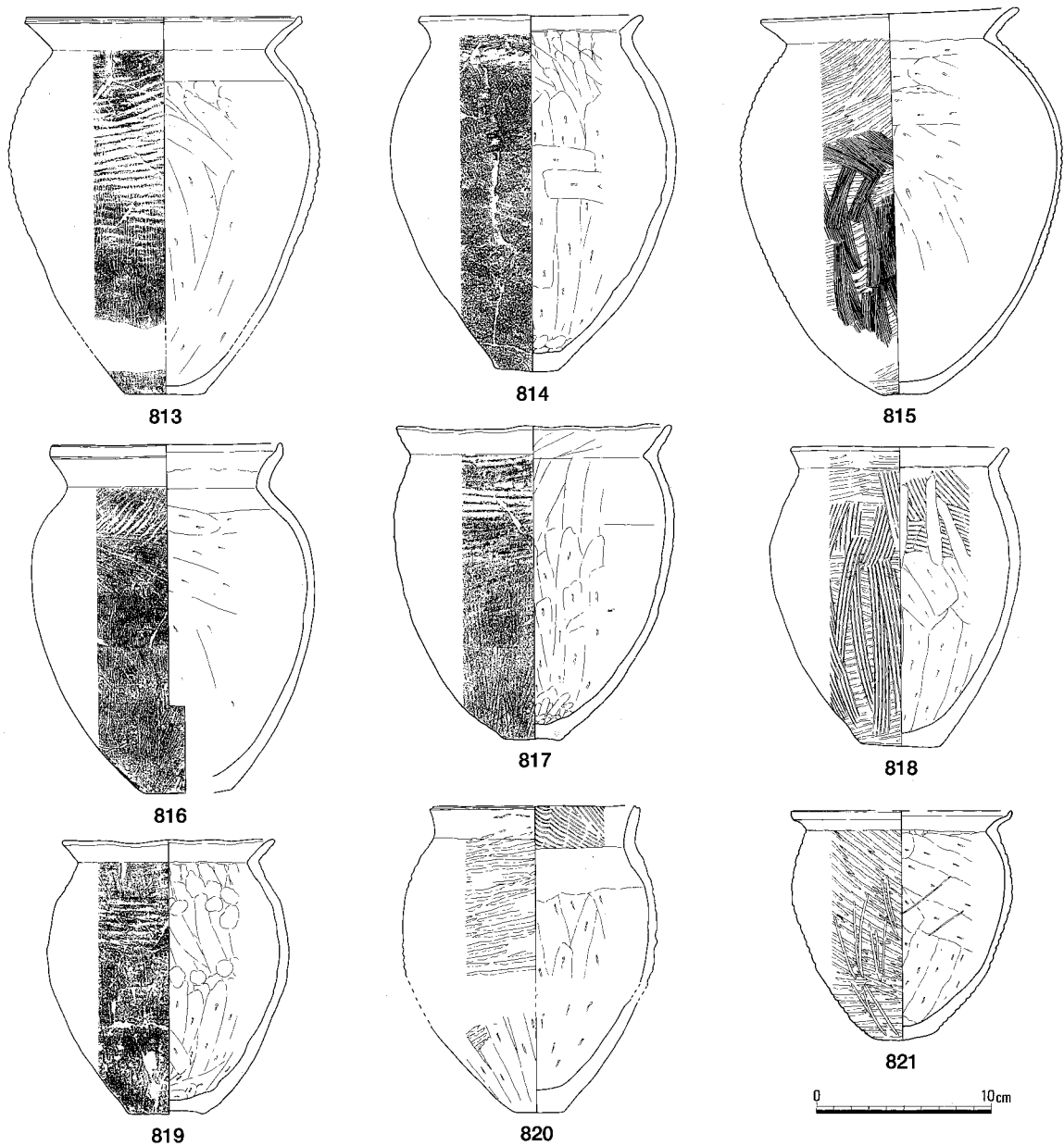
第237図 河道1 出土土器③ (1/4)



第238図 河道1出土土器③ (1/4)



第239図 河道1出土土器③ (1/4)



第240図 河道1出土土器㊟ (1/4)

化痕跡は認めない。763の底部内面には指頭による押圧痕跡が顕著に認められ、底部から3 cm上に約3 cm幅に炭化痕跡が環状に認められる。770は底部が薄くなり、中央部には穿孔がある。内面下半に炭化痕跡がみられる。775は内面底部から4 cm上に幅3 cmの環状炭化痕跡がみられる。甕には、断面「く」の字状の形態のものも存在する。内面にはほぼ全面にわたって炭化痕跡をみせるものに777・779・782がある。778外面は被熱による剥落がみられる。783には底部から2 cm上に幅2 cm前後の環状炭化痕跡が認められる。

また、甕の中には他の地域から搬入されたと考えられるものが存在する。789～794は胎土に雲母を多く含み讃岐産の可能性が高い。いずれも胴部が算盤玉状によく張り、口・頸部へと直線的な伸びをみせる。口縁部は外方に短く直線的に伸ばしたものである。上面には擬凹線文の凹凸が巡る。肩部内面は指頭押圧痕跡が顕著に認められる。795～821は土器成形時のタタキメを残したものである。

タタキメには右下がりがある795・796・797・812・821に、左下がりが802・804～807・809～811・

813・815・816、平行にみられるものに797・798・800・808・817・818・819・820等に分類できる。また、同一個体にあつてタタキメに変換を認めるもの796・801・803・806・807・805・809・812・817・821等が確認され、製作工程での変化が認識される。内面調整は、ヘラケズリを中心とするもの(795~798・801・808・813~821)、ハケメを中心とするもの(799・800・804・810)、ナデアゲを中心としたもの(806・807・809・811・812)、押圧を中心としたもの(803)等に分類できる。795は比較的厚手のもので、口縁部はわずかに端部を拡張している。796内面には全面炭化痕跡をみせるが中には米痕跡を残す。801は内面ヘラケズリで、803と同じく胎土中に雲母を多く含む。底部には焼成後穿孔が認められる。806・808・809・815・816には底部から体部下半にかけて炭化痕跡を認める。814は讃岐産の可能性をもった789~794と同じ胎土のものである。820は底部外面が下から上にかけてのヘラケズリで成形がなされている。(島崎)

高杯 (第241~246図)

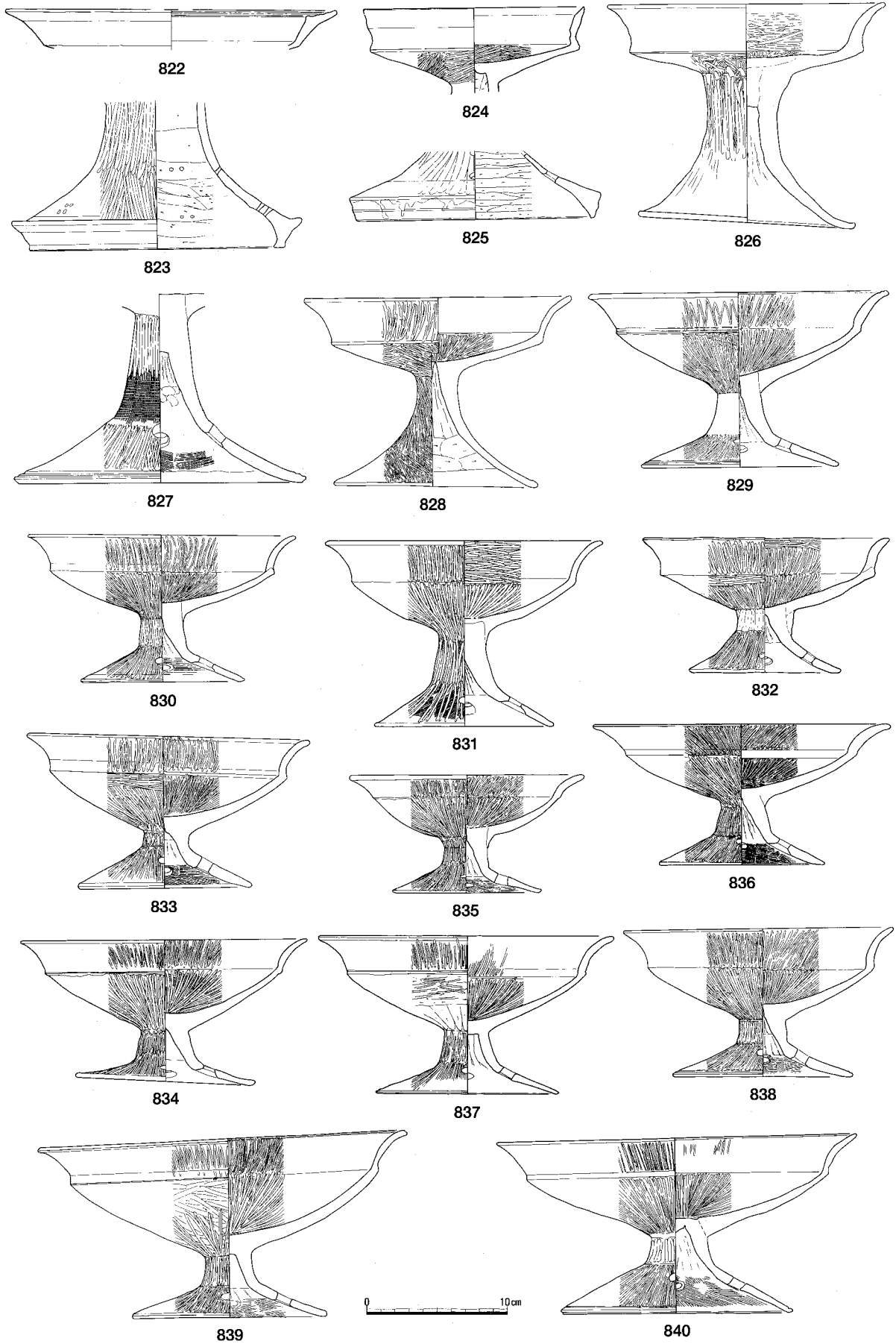
河道1から出土した高杯は弥生後期Ⅰ段階に822・823の2点、Ⅱ段階に826・827の2点が古くみられるだけで他は後葉から末葉にかけてのものがほとんどで、保存状態の良好なものであった。口縁部・脚部の型式と調整の違い等によって大きく822~859・860~902・903~937等3分類が可能で、以下に説明する。

胎土は、細かい砂質のものから水こしされたものまでみられる。ただし両者の区別は明確なものを除いては困難であった。

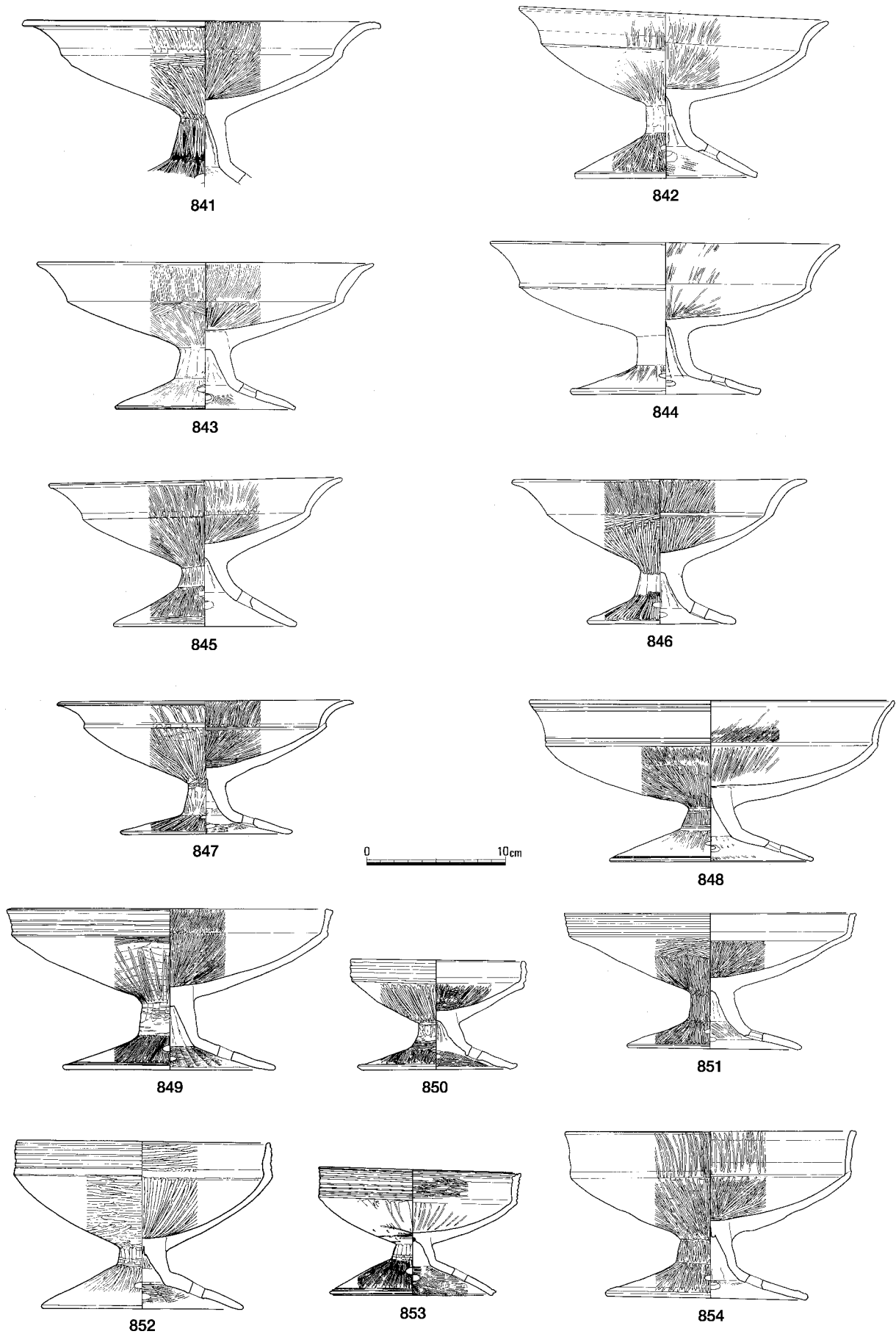
中でも最も古いと考えられるものが822・823で、後期Ⅰである。824と825は共に胎土中に角閃石を含み825は外面に赤色顔料の塗布がみられ、後期Ⅲ段階備中地域からの搬入品と考えられるものである。826と827は後期Ⅱの特徴を示し、この系譜につながるのが828で、859までは比較的長い脚柱部としっかりと踏ん張る脚部、さらには杯部高との比率に近く重厚で外反気味に付けられる口縁部の在り方で分類される。調整もほとんど全面が縦方向に比較的短い振幅でヘラミガキされる。杯部外面はいずれもが横方向のヘラケズリの後、丁寧な縦および横方向のヘラミガキ調整が施される。脚部内面にみられるシボリメは826~833・835~838・840・841~852・857~859等にみられ、新相を呈する860~937に比較して多くみられる傾向にある。

器種構成は、大型には径25cmを超える839~841・844・848・858・859が、中型には径20~25cm未満の829・836~837・842・843・845~847・849・854・855・857が、小型には径15cm前後から20cm未満のものが存在する。器形には、口縁部を外反させるもの828~848、口縁部を上方に直線的に立ち上げるもの(849~859)の2種類がある。826は、円盤充填と脚柱部内面に粘土塊の充填である。他はいずれも杯部差し込みである。834・839・852の胎土中には全体が砂質である中に角閃石が多く含まれる。839の口縁部上面には2条の沈線が巡る。

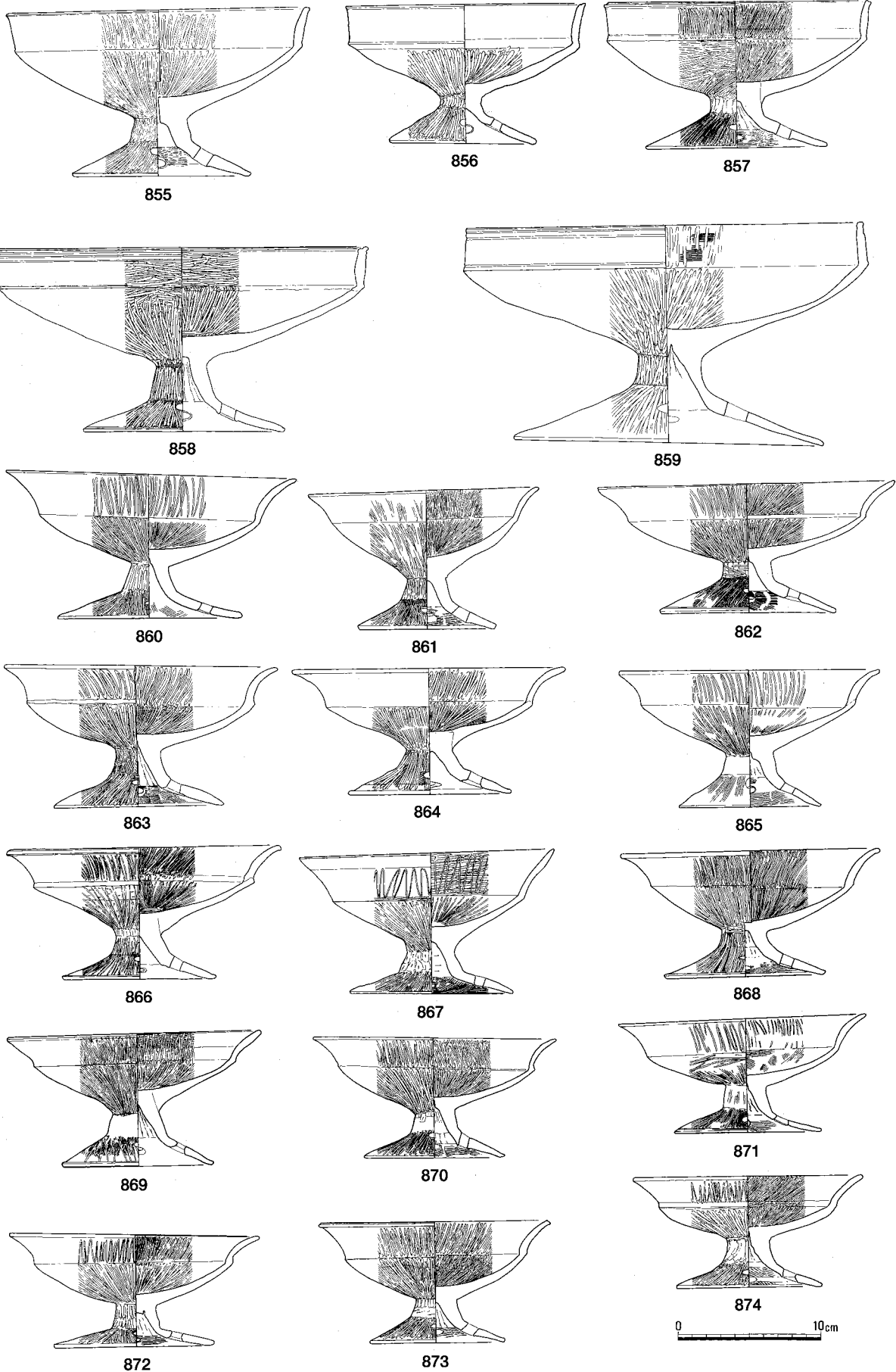
860~902は、脚部の小型化傾向を示すもので、口縁部外面の調整は前段階と同じく縦方向のヘラミガキ調整が施されているが全体のつくりが簡略化された感が強い。器種構成は大型が903の1点、中型が904の1点、他は小型である。器形には、口縁部を外反させるもの(860~880)、口縁部を上方に直線的に立ち上げるもの(882~887)、丸く内傾させ、小型の鉢形を呈するもの(889~902)の3種類がある。この中であつて879は砂質の胎土で全体につくりが粗い。口縁部内・外面ともに調整はハケメで仕上げがなされている。877・878は杯部が縮小し、口縁部が長く外方に伸びるものであるが口縁部外面の仕上げは縦方向の振幅によってヘラミガキが施されている。



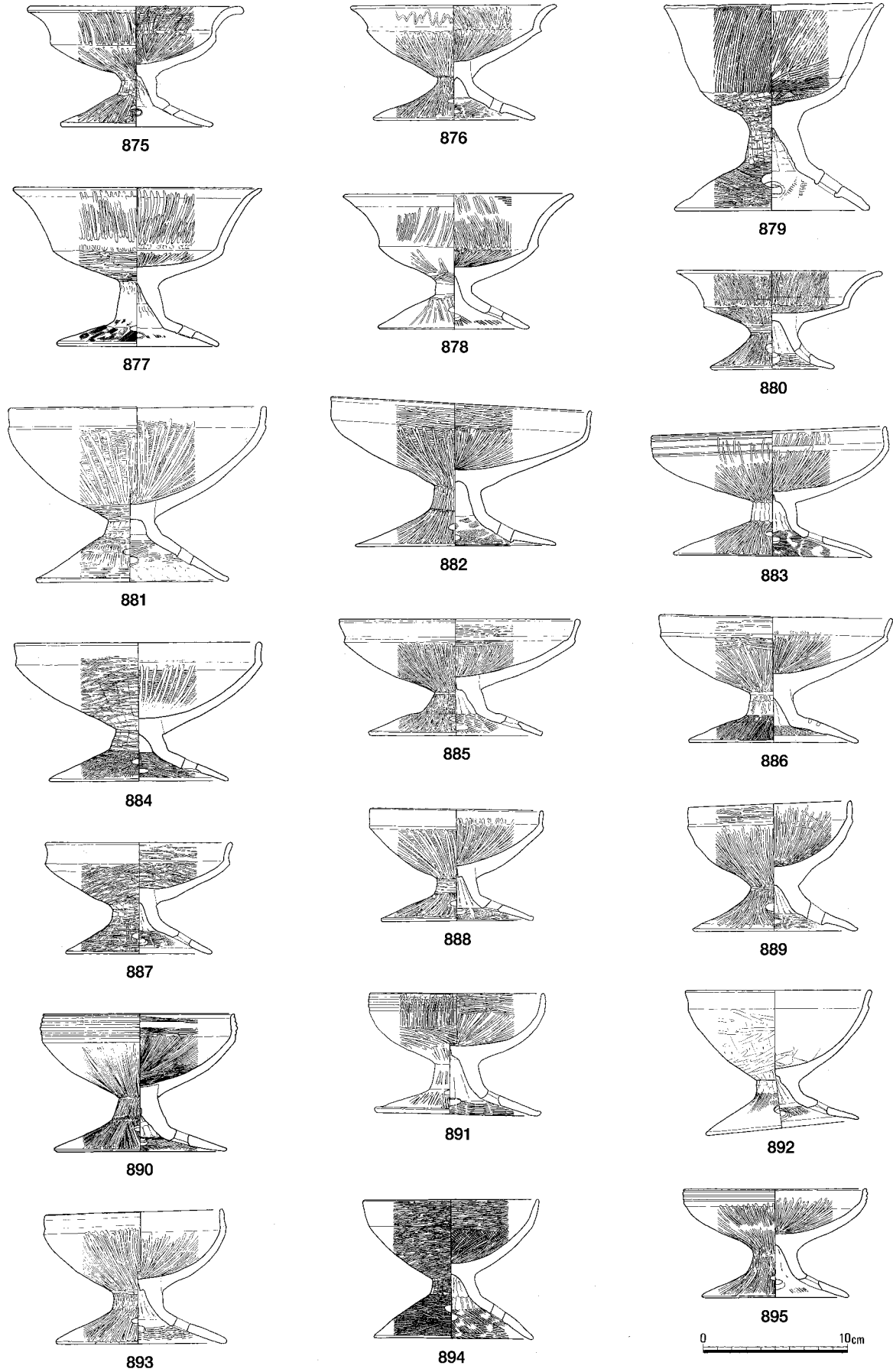
第241図 河道1出土土器④ (1/4)



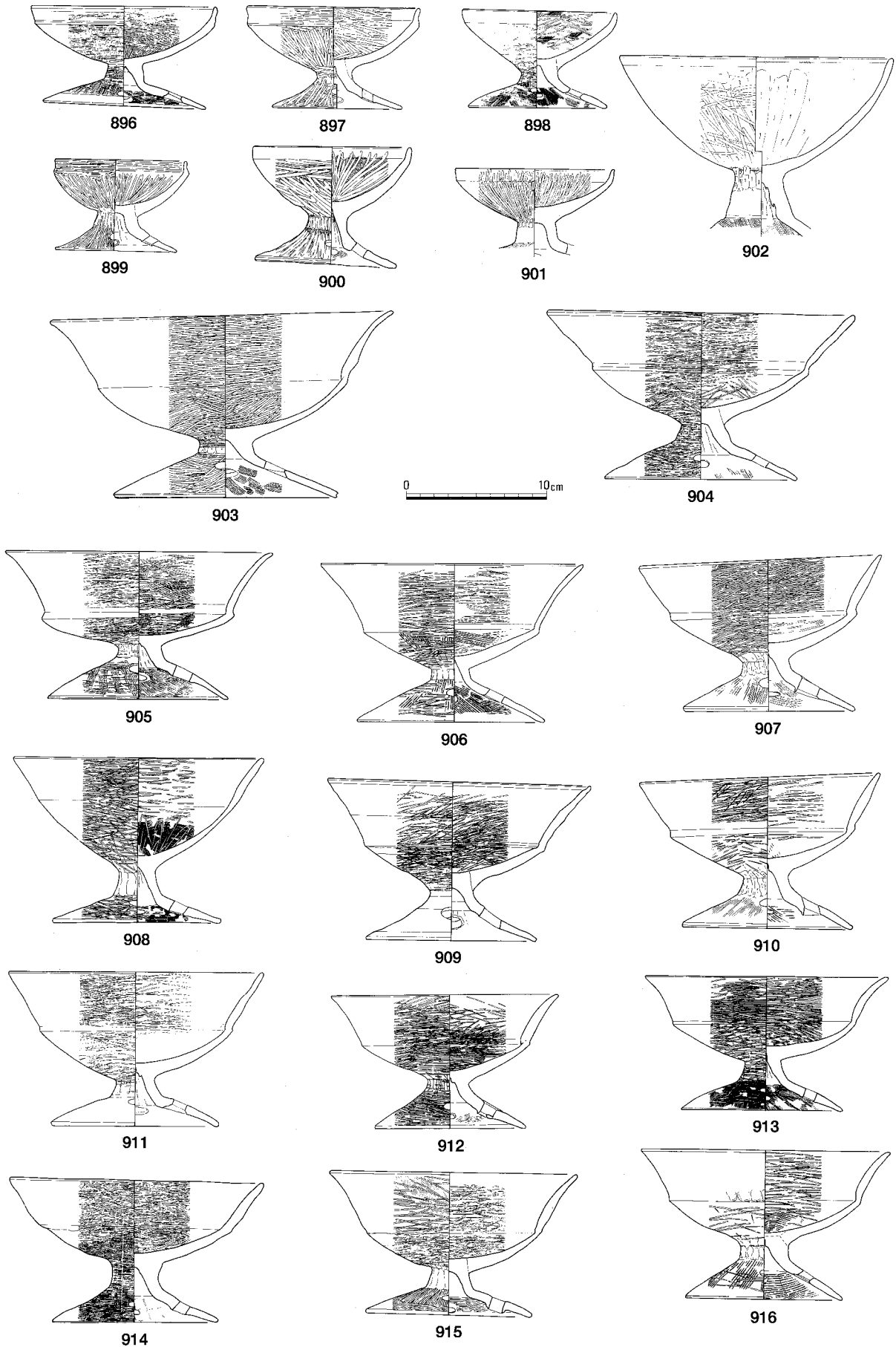
第242図 河道1出土土器④ (1/4)



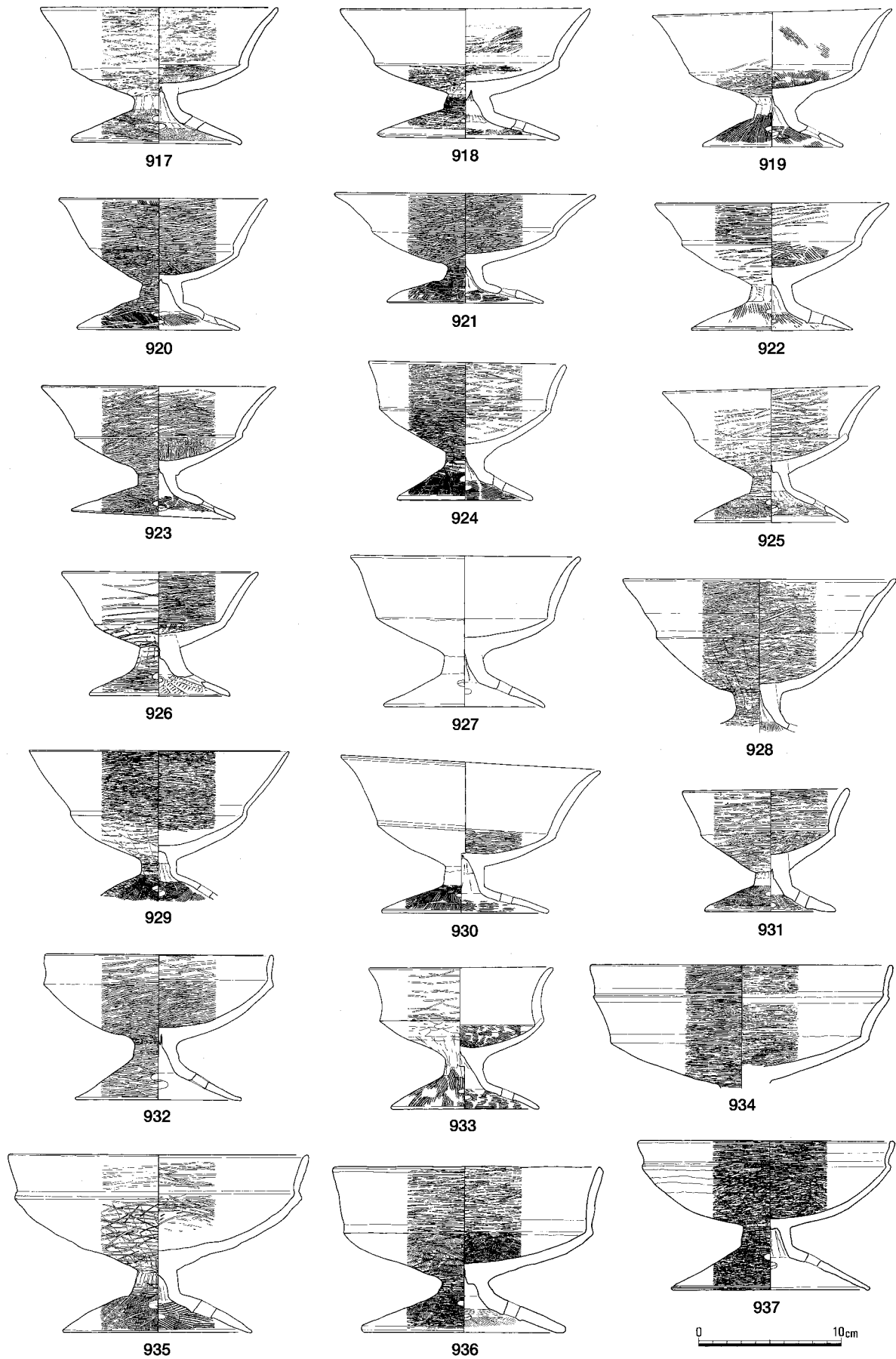
第243図 河道1出土土器④ (1/4)



第244図 河道1 出土土器④ (1/4)



第245図 河道1 出土土器④ (1/4)



第246図 河道1 出土土器④ (1/4)

903～937は、およそ杯部の縮小化に対する口縁部の伸長化傾向で理解される。また口縁部外面の調整も前二者が縦方向のヘラミガキであったのに対して杯部外面から口縁部の内・外面いずれも横方向のヘラミガキ調整と変化をみせる。また中には口縁部外面にヘラミガキがなされず、ヨコナデのみで終わるもの(918・919・927・930)がある。930の外面全体には煤が付着する。器種構成では、大型が903の1点、中型が904・934・935の3点である。器形には、口縁部を外反させるもの(905～933)、口縁部を上方に直線的に立ち上げるもの(935・936)、有段のもの(934)の3種類がある。

929は形態的には他のものと類似するが器壁が薄くつくられており、ヘラミガキ調整等丁寧なつくりのものである。932は砂質の多い胎土で、胎土中には角閃石が多く認められる。

なお、いずれもが保存状況が良好であるため、高杯の成形・調整技法、使用痕跡等が明瞭に認められる。成形で注目されるのが脚柱部内面にみられる刺突痕跡であろう。1本のものから2～3本のもので遺存する。掲載した高杯の中で829・830・833～838・840・842～844・847・848・852・854・855・859～863・865・869・871～875・878・883・886・888・890～893・896・897・902・905・907・911・912・916・917～923・925～927・930～934・937に認められた。また中にはこれをナデにより消したもの(903)も存在する。

外面に顔料を塗っているかどうかについては837・867・890・929等明らかに認められるものも存在するが、保存状態の良好さもあって明確な判断はできなかった。

また、ほとんどの高杯が保存状態が良かったために内・外面丁寧なヘラミガキ調整が調整時の状態を見せているが、さらにこれを消すかのように杯部内面と外面が磨滅により光沢をみせるものがほとんどの高杯に認められた。また、脚部内面の柱部と裾部の境付近にも手擦れによると思われる磨滅痕跡、あるいは光沢をみせるもの(830・836・838・839・840・845・848・854・861・862・866・868・872・875・883・889～891・894・905・913・917・918・920・921・923・925・932・935・937)が以上30点について認められた。高杯の実際の使用方法を考えるうえでこれら使用痕跡の確認は、貴重な知見を得ることができたと言えよう。(島崎)

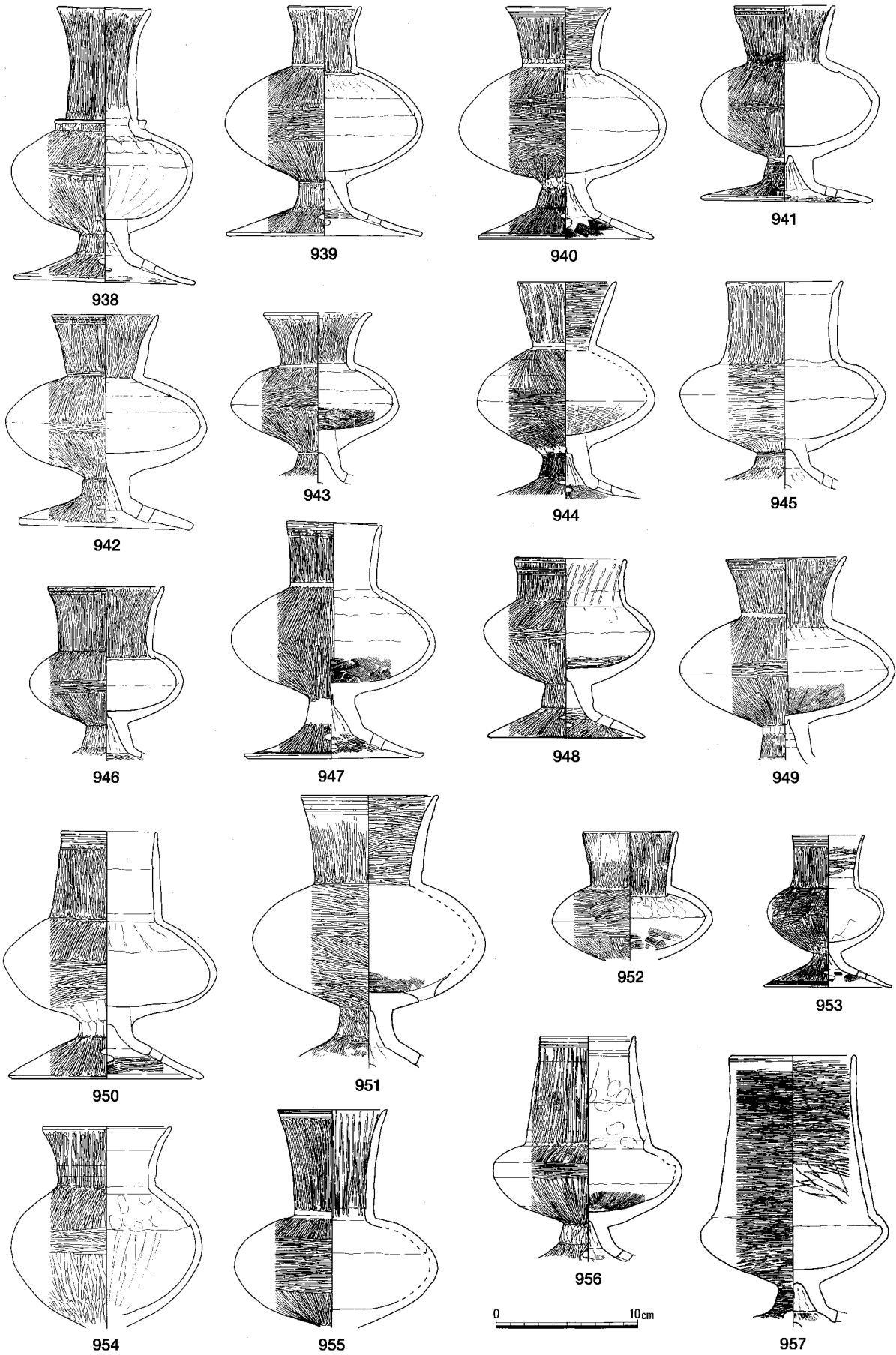
脚付直口壺・直口壺(第247・248図)

脚付直口壺には、口頸部と胴部、脚部等比率が均等なもの(938～956)、胴部の比率が縮小したものの(957～960)、胴部が無くなり受け部と口頸部が接合したものの(961～965)に分けられる。

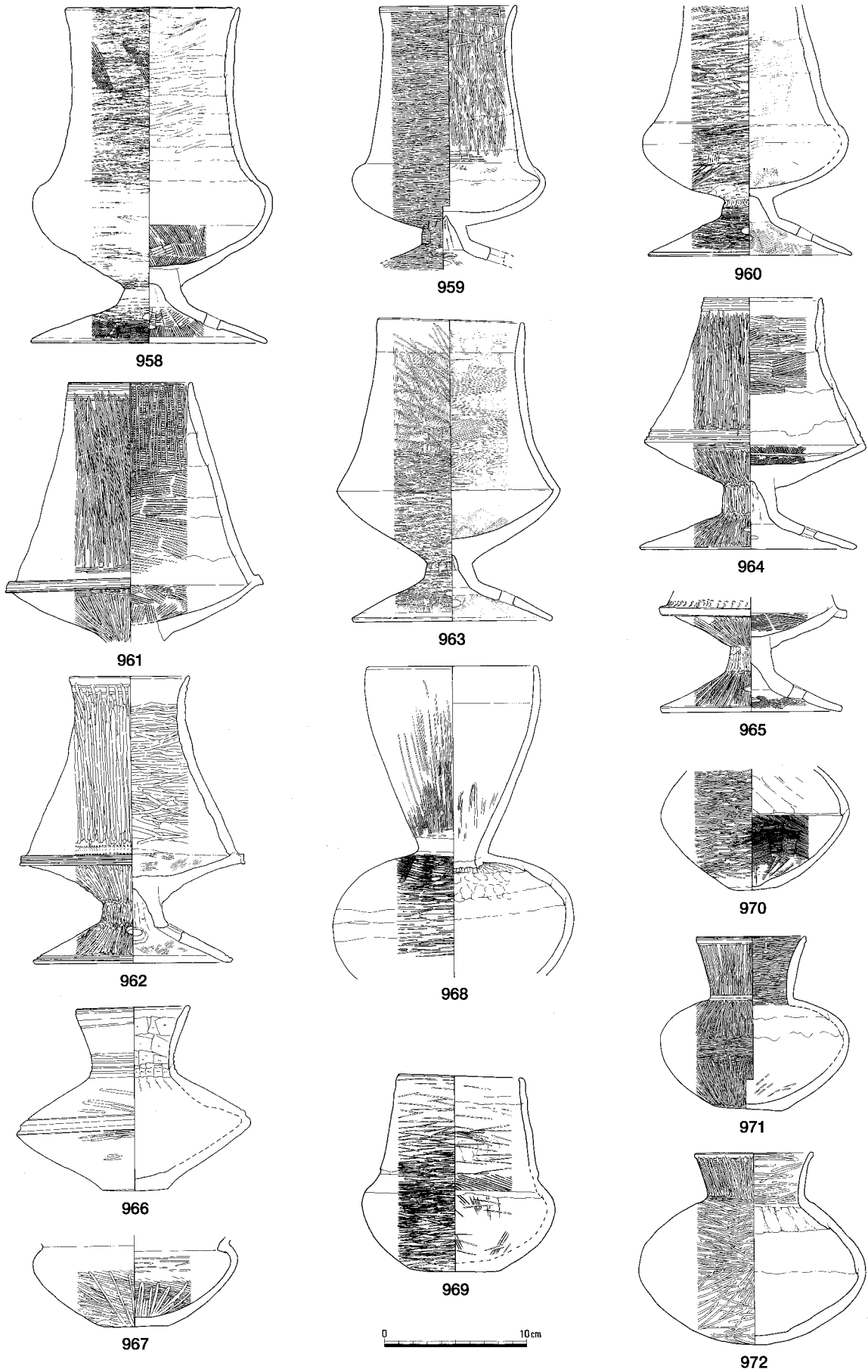
脚付直口壺は、高杯の脚部に碗状に成形した部分を高杯の碗部との接合同じ技法で取り付け、この乾燥を待った後、碗状部分に壺の肩部、口頸部と順に接合をさせながら完成させる。碗状の内面には高杯の調整とは異なり、ナデもしくはハケメが施されるのみでヘラミガキはなされない。肩部内面も丁寧な調整はなされず粘土紐の接合、接合を補強する指頭押圧等が認められるにすぎない。一方、外面から見ることでできる部分については丁寧にヘラミガキ調整が施される。胎土は、水こし粘土によるものと見られるが、保存状態の良さで明確に言及できない。

高杯と同じくこの脚付直口壺も保存状態が良好で、ヘラミガキ調整の痕跡等が明瞭に観察できる。そうした中、使用によって付いたと考えられる痕跡も少なくはない。すなわち、手擦れによって磨滅、あるいはその結果光沢をみせる箇所が存在するのである。また、脚部内面の脚柱部と裾部との境にも高杯で見られたのと同様の磨滅、光沢をみせる部分が938～942・946～948・950・965で認められる。

938は比較的長く立ち上がる口頸部に球形の胴部が付き、その境には断面方形の突帯が巡らされる。口頸部内面に使用痕が認められる。939・940・942は口頸部に対して胴部の比率が高い。943は大きく



第247図 河道1出土土器④ (1/4)



第248図 河道1出土土器⑦ (1/4)

外反する口頸部を有する。950・956はやや内傾気味に伸びる口頸部をもつ。953は小型の脚付直口壺である。954は外反する口頸部にほぼ球形の胴部が付く。

957はそれまでの球形を呈し胴部の大きさに重点があったものが、口頸部に移行していく過程を示すものである。すなわち、胴部の肩は短くなり、この結果胴部は矮小化し、逆に口頸部の長さは10cmを超え、径も口縁部で10cm前後を、胴部との境で12～15cmと一層規模を拡張したものである。この器種の外面のヘラミガキ調整は、938～956までが縦方向であったのに対して横方向で一致する。ところが胴部が無くなり杯部と口頸部が直結した結果、算盤玉状を呈する961・962・964・965になるとさらに縦方向に一変する。そしてその稜線部分には突帯もしくは沈線でその部分を飾る傾向がみられる。963は、その過程に位置づけられるものである。

直口壺は脚を付けないもので、算盤玉状に古相を呈する966から脚付直口壺の壺部分と同じ様相を呈するものがある。

(島崎)

鉢 (第249～259図)

口縁部の径と深さの比率、さらには内面調整にヘラミガキをほとんど例外なく施している点で鉢と認定できる。時期差はあるものの口径と深さの比率によってA～Gの7種類に分類可能である。

A. 最も大型である973は口径66cmを測り、内面には赤色粒の遺存が確認された。

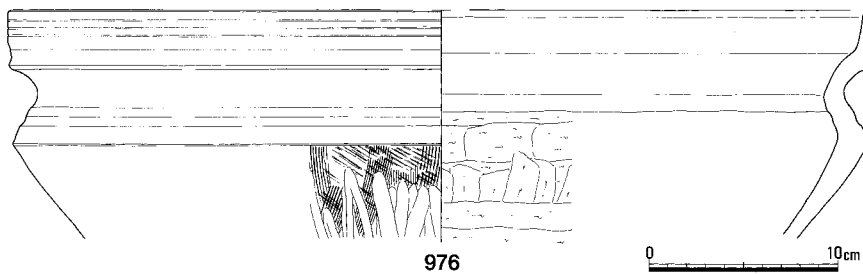
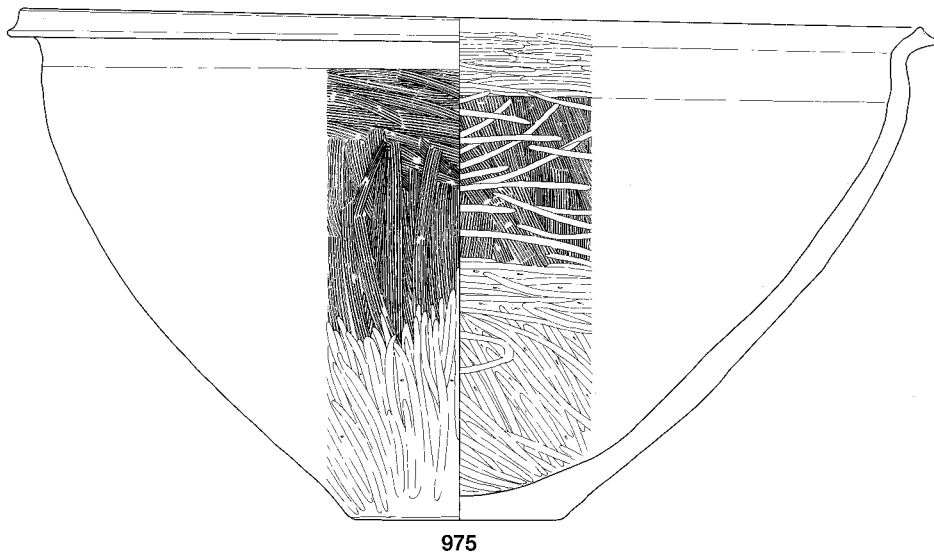
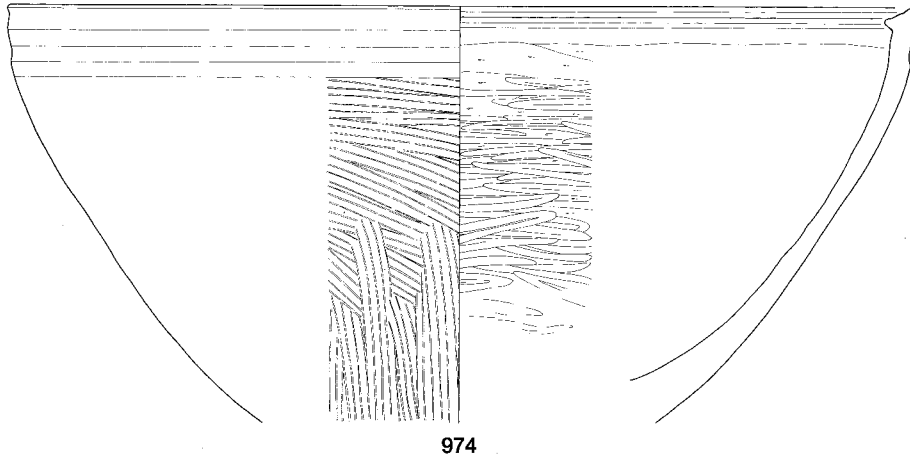
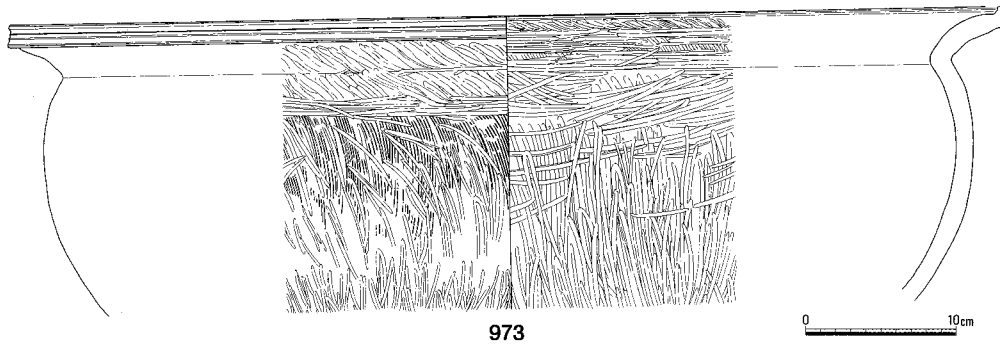
B. 口径42～48cm、深さ20～29cmのもので、974～977・1001・1009の6点である。974は後期前半で内面には975・1001と同じく煮沸された結果遺存した焦げ様炭化物を認める。975・977は後期Ⅱの段階を、1001・1009は後期Ⅲを示す。976は体部に特徴的な大きく張出す稜線をつくり備後地方のものとする。

C. 口径32～39cm、深さ18～27cmを測る。978・979・984・986～995・1002等10点である。後期Ⅱに比定されると考えられるものが978・979・984・986・987の5点で、992～995・1002は後期Ⅲと考えられる。後期Ⅳのものは確認されていない。978の内面全体には煤が、内面には炭化物が認められた。979の外面口縁部付近と胴部の一部に煤が、内面の底部には炭化物が見られる。986の内面には全体にわたって炭化物の遺存が認められる。987においては外面に煤と吹きこぼれ痕跡が、内面には炭化物の一部遺存が確認される。993では体部中央付近に内・外面に煤と炭化痕跡がそれぞれに認められる。994内面には赤色粒の遺存が認められた。1002は、外面に煤がみられた他、口縁部に補修痕跡が存在する。

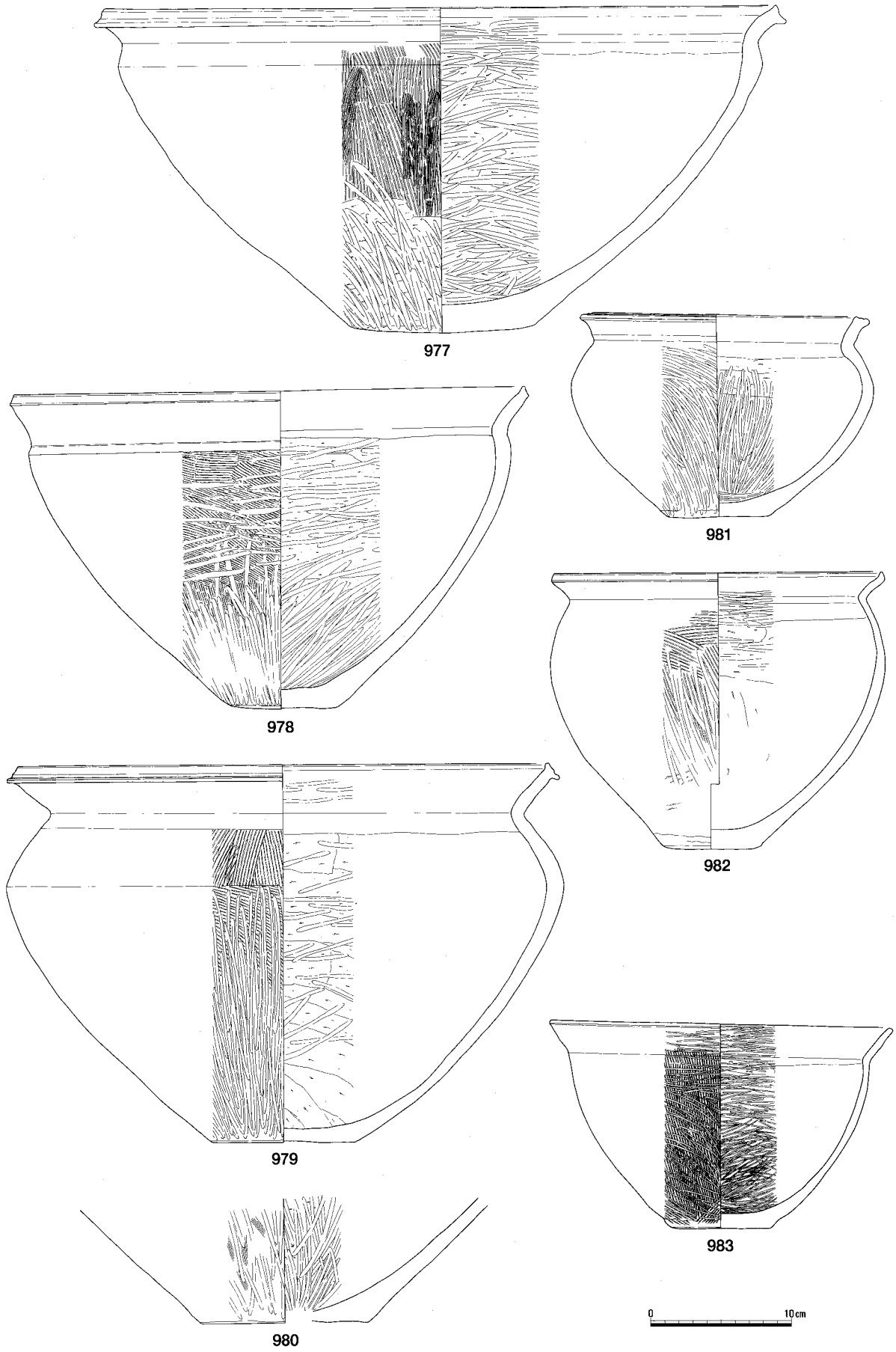
D. 口径22～29cm、深さ12～19cmを測る中型品で、982・983・985・1010～1013・1015～1018・1056・1057等13点にまとめられる。後期Ⅱには985が1点存在するのみで他の全ては口縁端部の拡張傾向にあり、後期Ⅲに位置づけられる。この中にあって983・1012・1013・1015・1017はほぼ同じ規格にあるといえる。982は外面の一部に煤の付着を認める。985は外面底部約7cm上から口縁部にかけてほぼ全面に煤が付着している。1015の内面には赤色粒が認められる。

E. 口径14～20cm、深さ14～28cmにあって、口径と深さの比率に近いもので、981・1014・1019・1020～1022・1024～1027・1029の11点である。時期的には、後期Ⅱが981の1点、後期Ⅲが1014・1019～1022・1024・1025～1027の9点、後期Ⅳが1029の1点と考える。981は口縁部断面が「コ」の字状を呈し、上面には擬凹線がめぐる。1021は内面に炭化物痕跡をみせる。

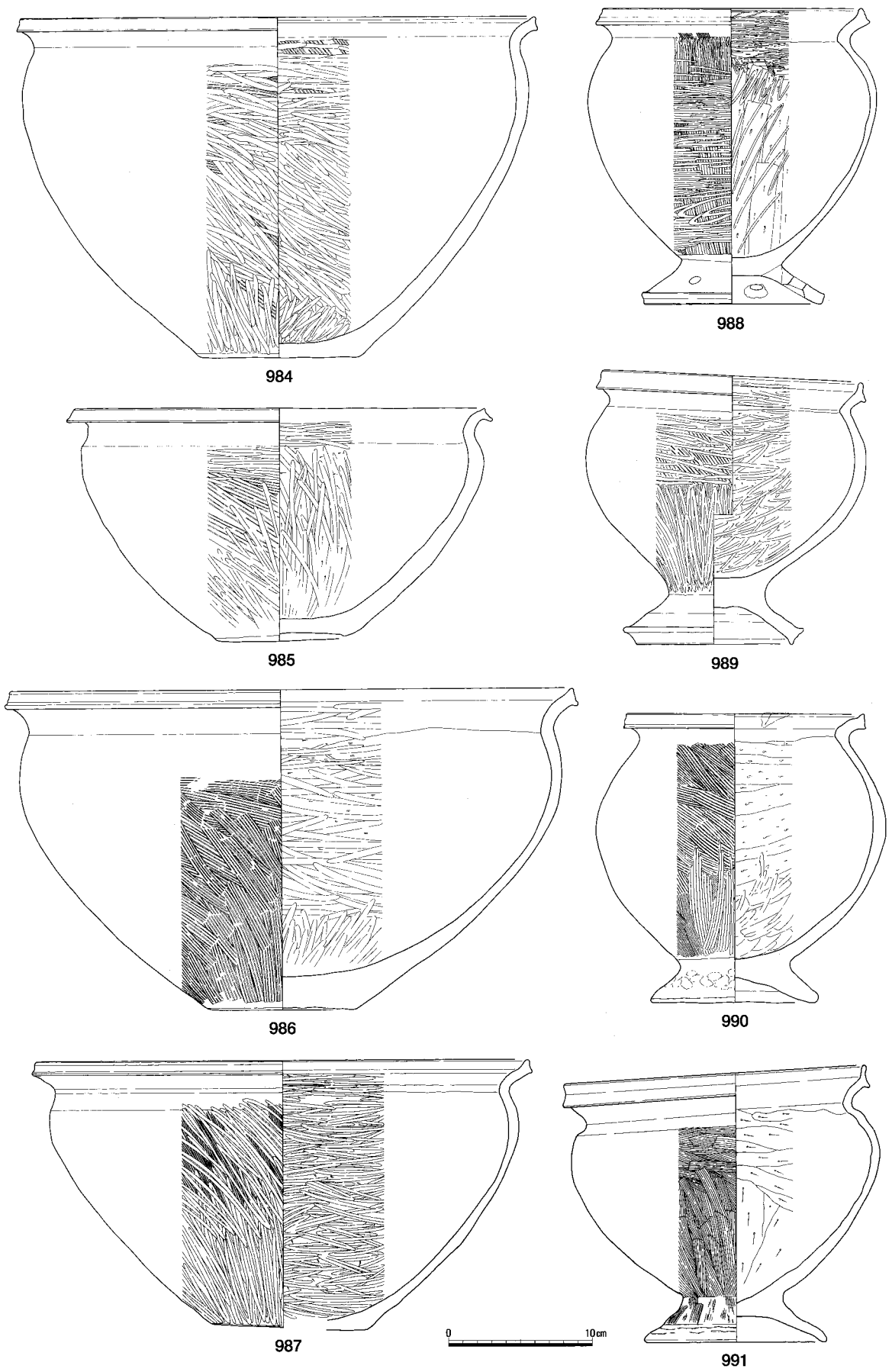
F. 口径13～18cm、深さ5～12cmと小型品で、1023・1034・1036・1038～1053・1059～1090・1094等52点と出土した鉢の中で最も数の多い器種である。形態的にはaは口縁部端部に面を持つもの



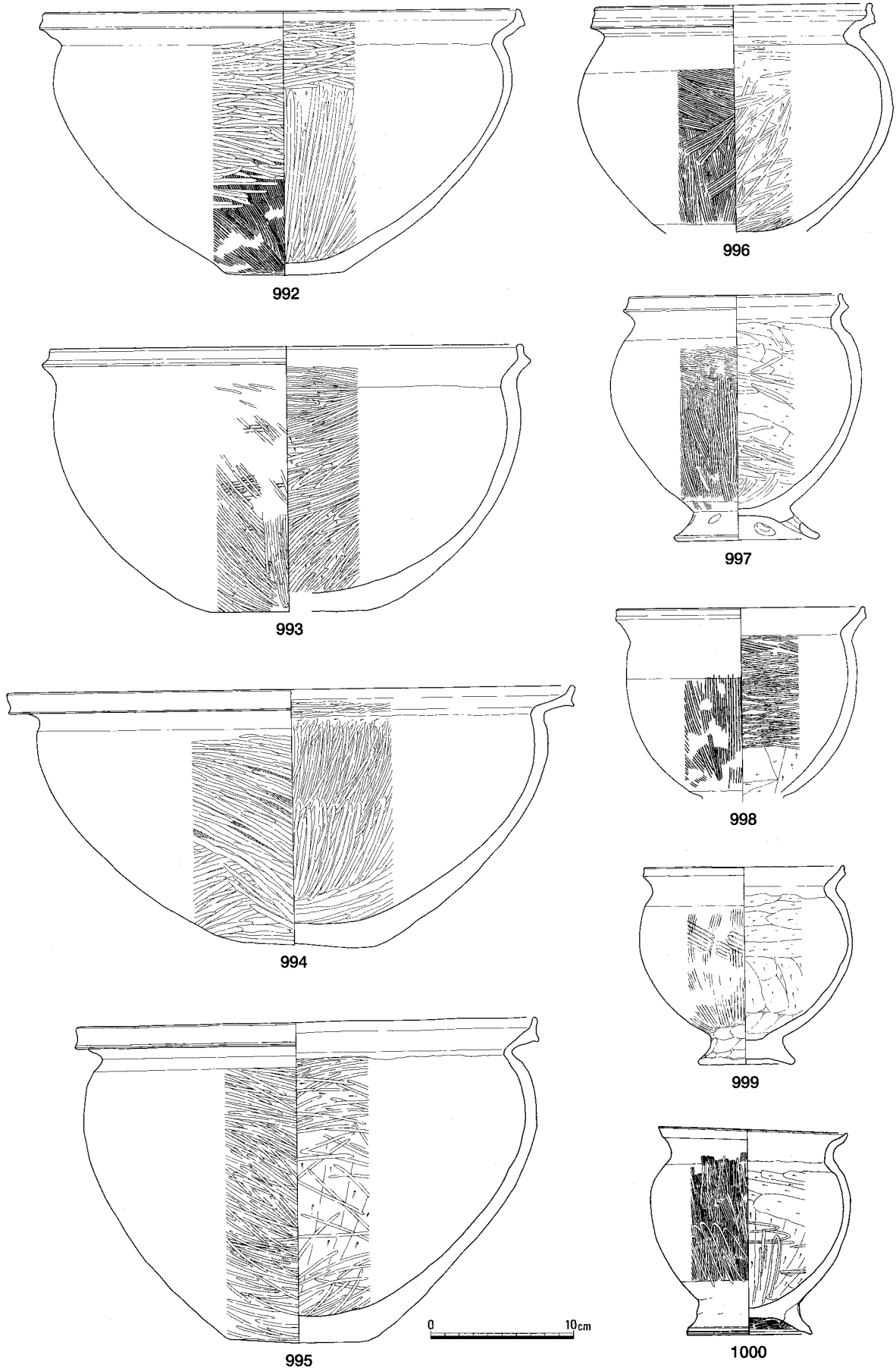
第249図 河道1出土土器④ (1/5・1/4)



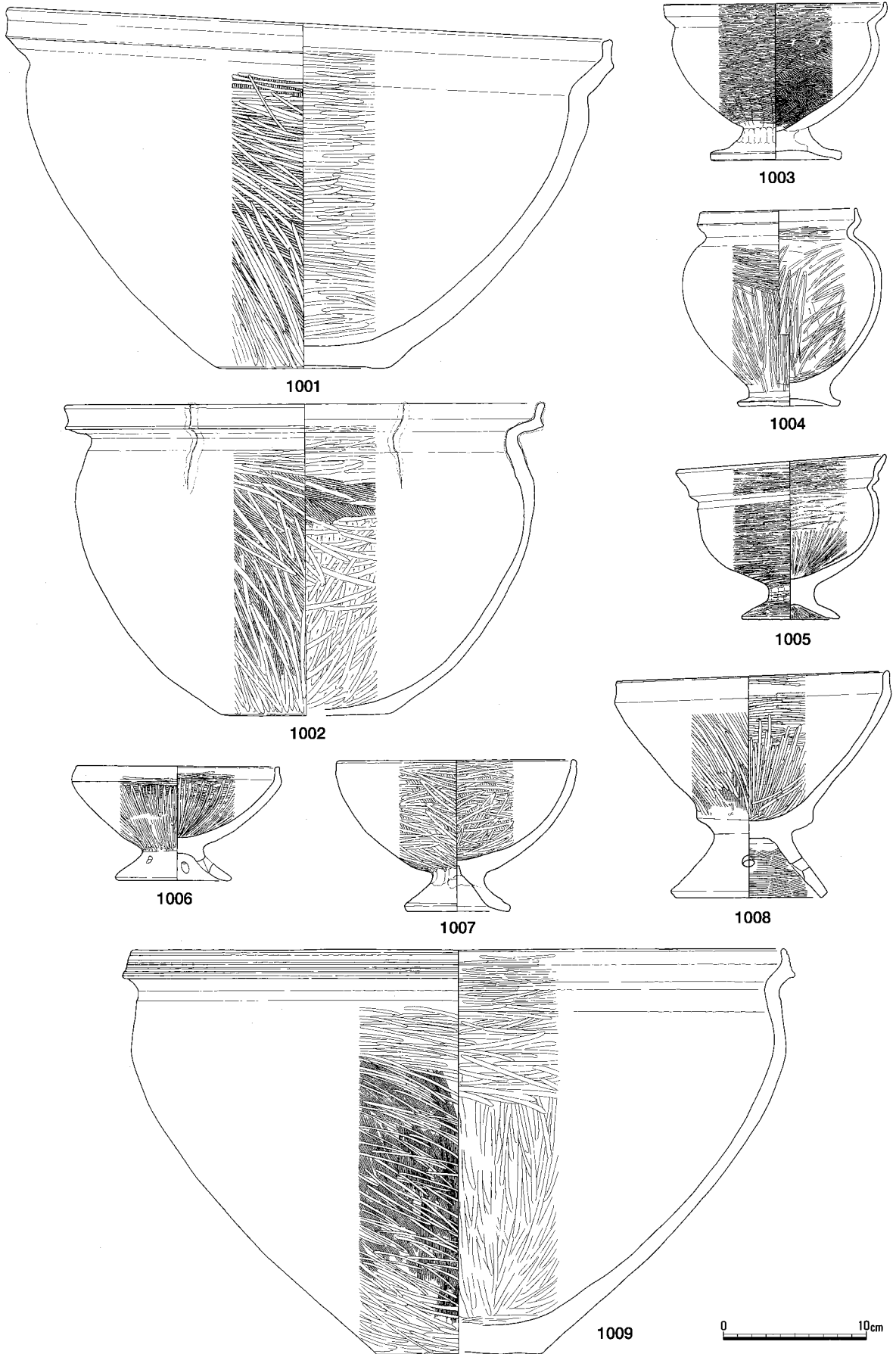
第250図 河道1 出土土器④ (1/4)



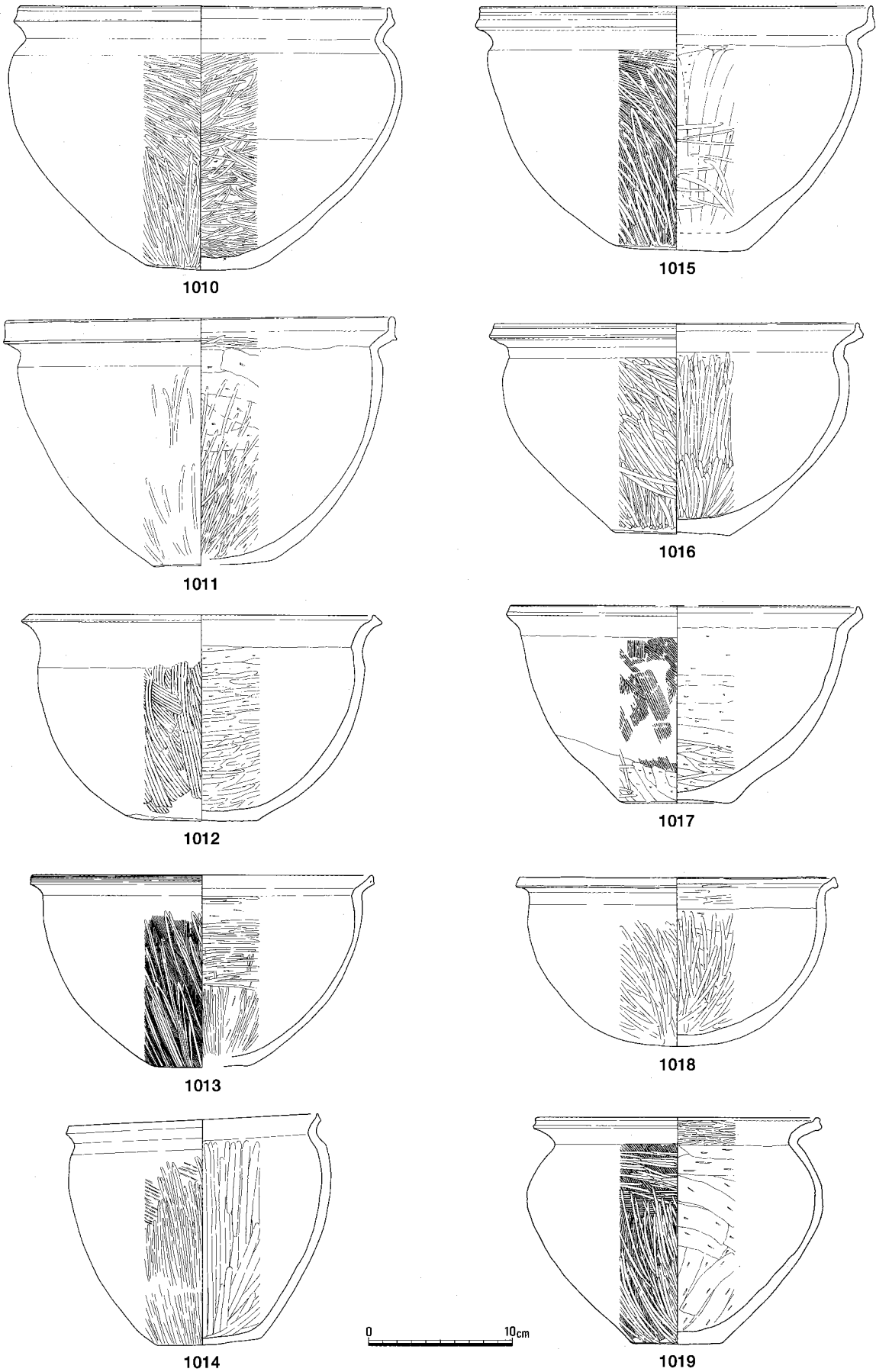
第251図 河道1 出土土器⑤ (1/4)



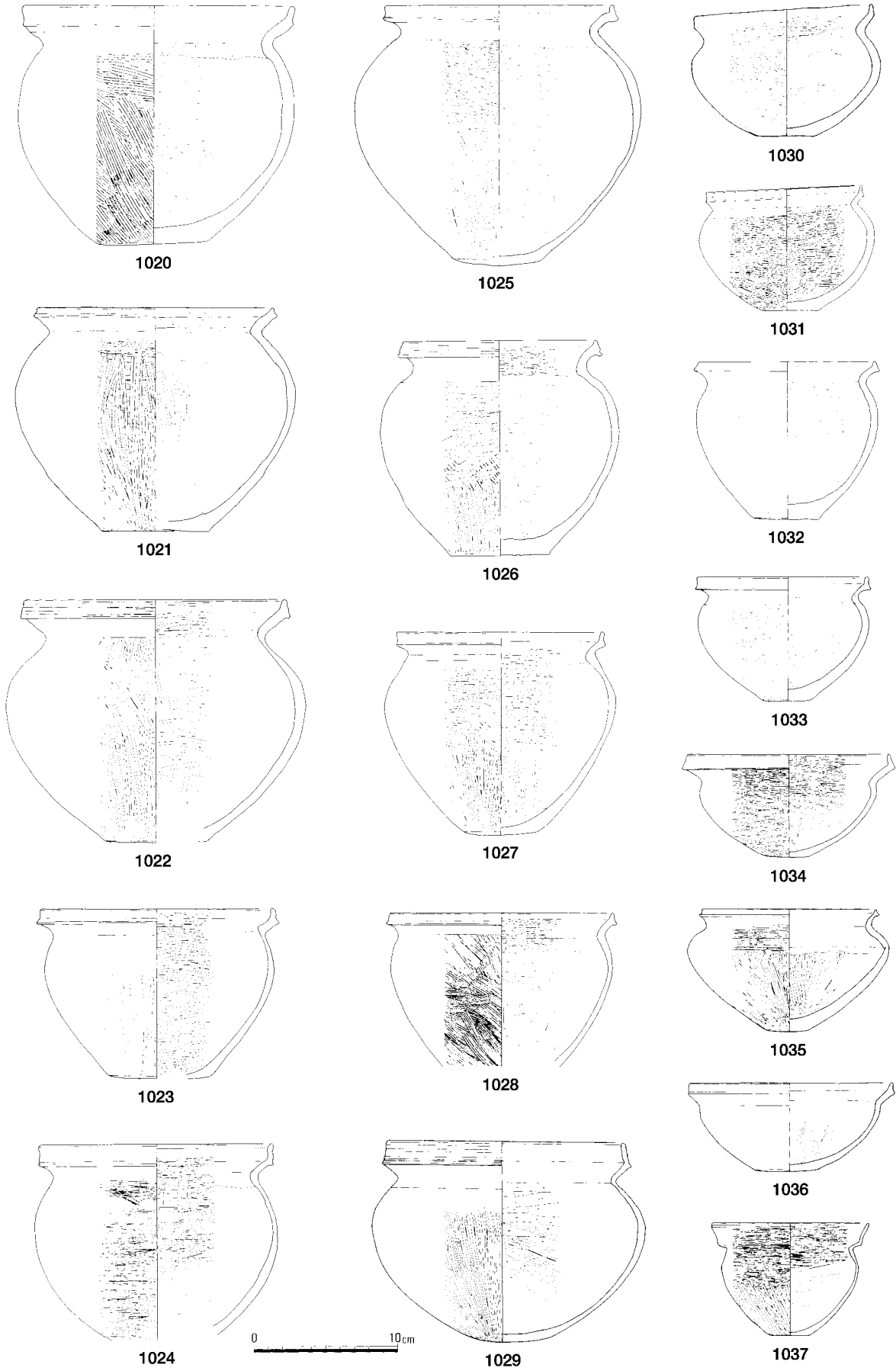
995
第252図 河道1 出土土器⑤ (1/4)



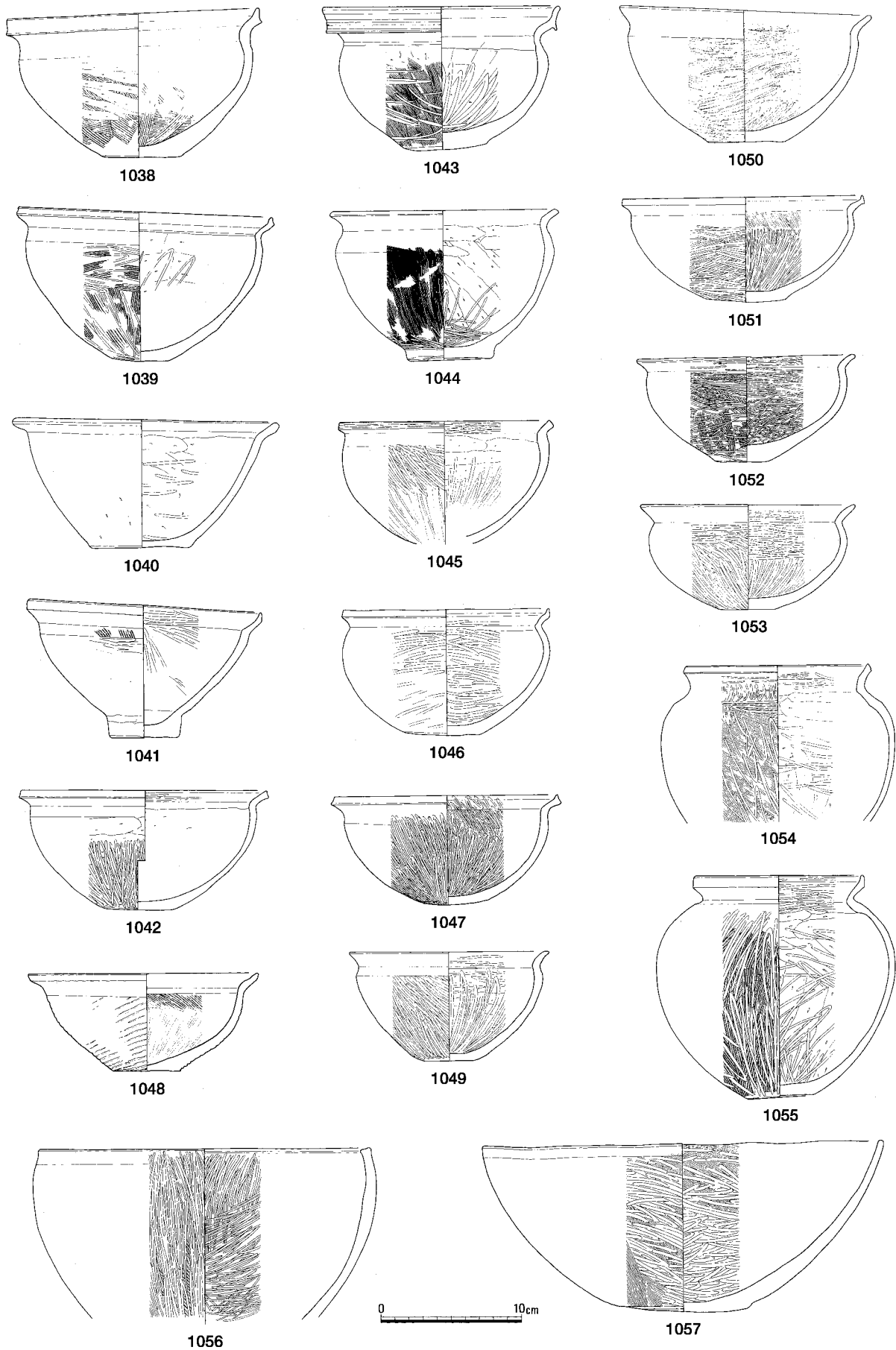
第253図 河道1 出土土器⑤ (1/4)



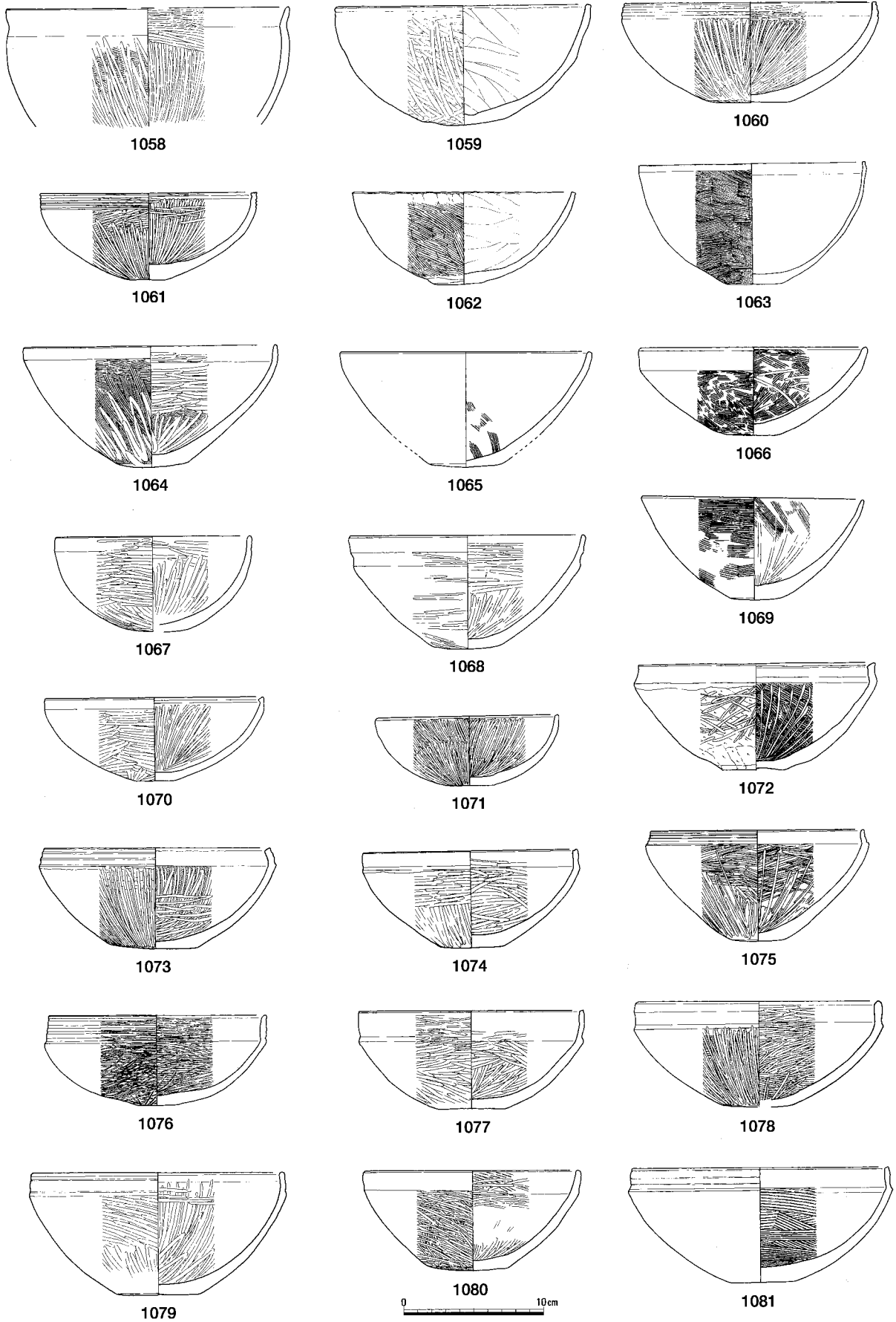
第254図 河道1出土土器⑤ (1/4)



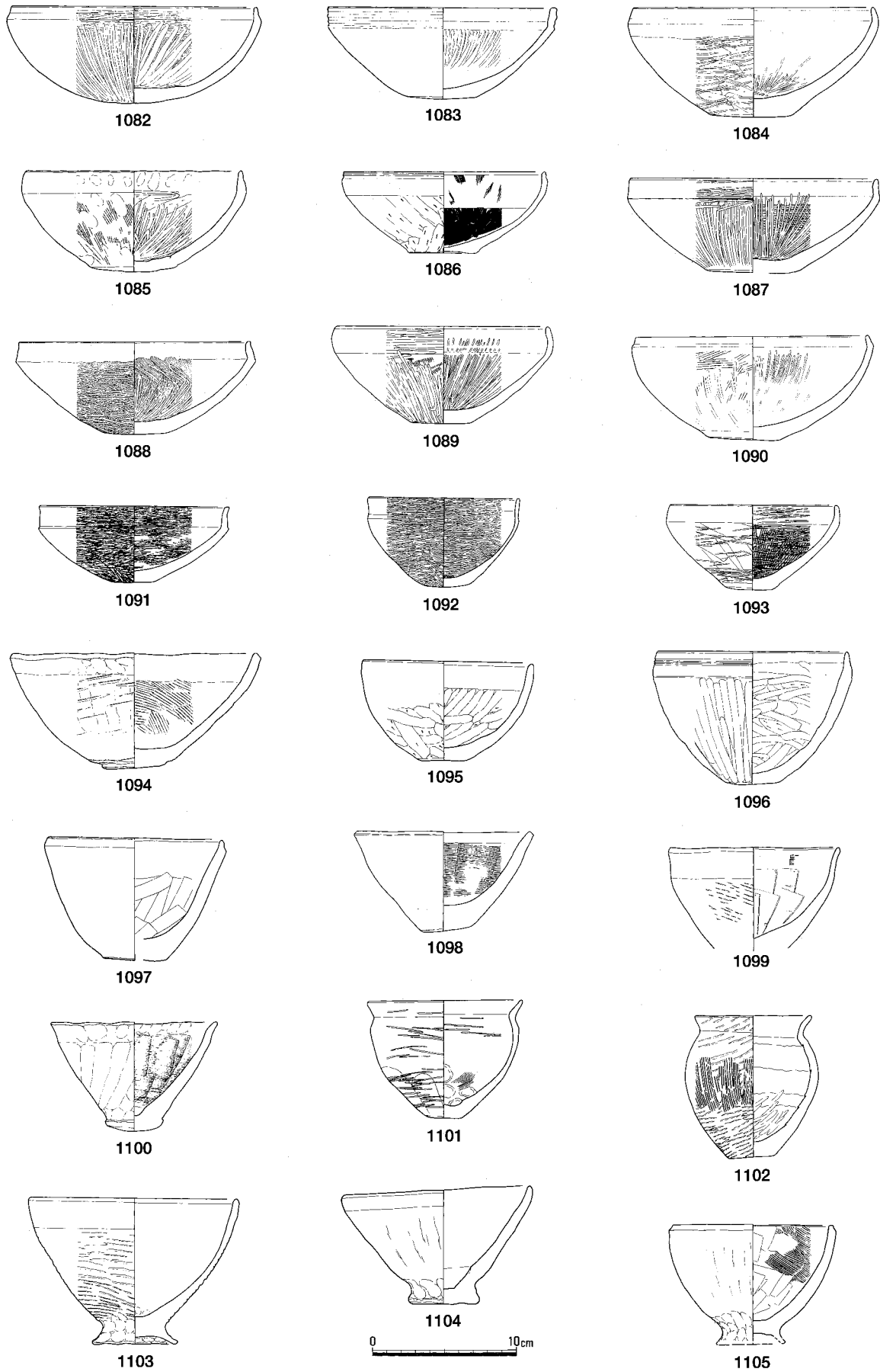
第255図 河道1出土土器⑤ (1/4)



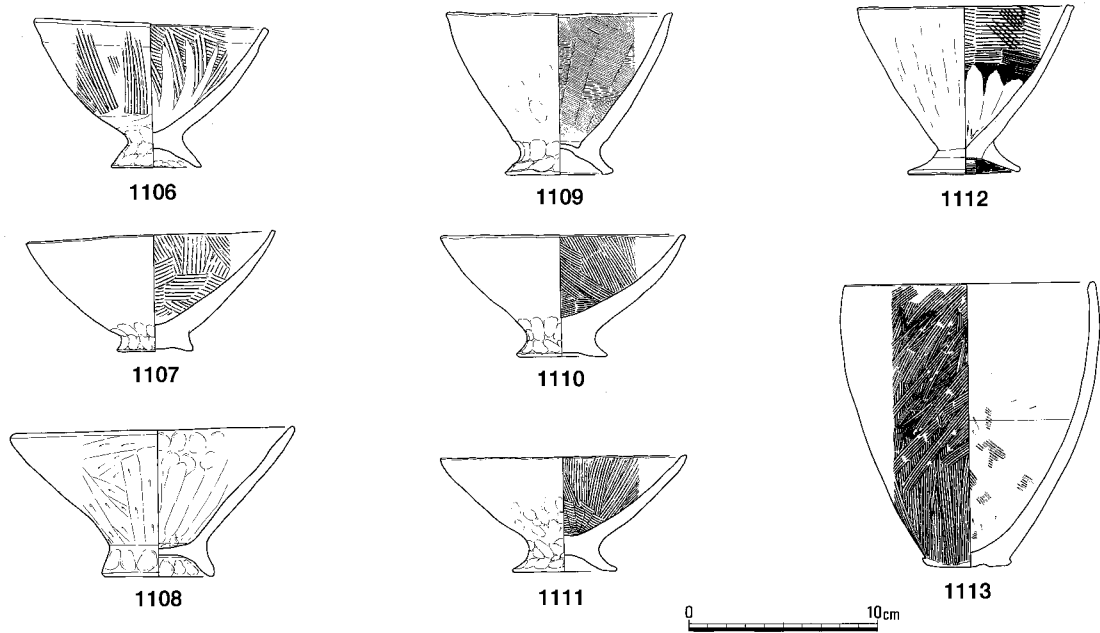
第256図 河道1出土土器⑤ (1/4)



第257図 河道1出土土器⑤ (1/4)



第258図 河道1出土土器⑤ (1/4)



第259図 河道1出土土器㊟ (1/4)

(1023・1034・1038・1039・1041～1047・1051)、bは口頸部断面が「く」の字状を呈するもの(1040・1048～1050・1052・1053)、cは内傾気味に立ち上がり稜線をもたないもの(1059・1062～1067・1069～1071・1080・1084～1086・1089・1094)、dは内傾の後ほぼ直立する口縁部の外面に稜線をつけるもの(1060・1061・1068・1072～1079・1081～1083・1087・1088)等に分類される。ただし時期的な詳細については明言できないがおそらくは形態・胎土等からみて後期Ⅲを中心とした時期に比定されるものと考えられる。aは断面「コ」の字状を基調とするものであるがいずれも端部がわずかに拡張されている。bの1048は成形が左下がりタタキメによりなされている。dはさらにその外面をヨコナデで調整するもの(1068・1072・1074・1077・1078・1079・1081・1087・1088)と擬凹線文を巡らすもの(1060・1061・1073・1075・1076)の二者が認められる。1023・1040・1046・1058・1063・1064・1086等外面には煤が、1063には内面に炭化物痕跡が認められ、何らかの煮沸行為があったものと推測される。1075には器壁に粉の圧痕が認められる。なお、1038・1058には内面に赤色粒の存在が確認される。

G. 口径10～13cm、深さ6～10cmと口径に対して深さの割合がさらに大きくなったものである。1092・1093・1095～1101の9点である。

また、この他に鉢部の底部に台を貼付したものも存在する。988～991・996～1000・1003～1008の15点である。上記の分類によれば、988～991・996～1000はEに、1003・1005～1008はFに比定される。989・991外面には煤が認められ、煮沸への使用が窺われた。990の口縁端部には補修痕跡を認める。1000・1003の底部鉢部との接合は明瞭である。

さらに明確な台の貼付は認めないまでも底部の端部を指頭などで捻り出して底部としたもの(1103～1112)がある。1108以外はいずれも上記の分類ではGになる。

1113は類例の少ない土器である。口縁部が不定形であるため明確ではないが約13cm、深さ15cmを測る砲弾形を呈するものである。底部付近には煤の付着を認める。(島崎)

器台・手焙り形・甌・蓋・ミニチュア・手捏ね（第260～262図）

弥生時代後期を中心とする河道1から出土した多量の土器のなかにあつて、器台は掲載分以外の破片を含めても十数点にすぎない。後述する特殊な器台がこれとほぼ同数にあり割合は約2～3%ときわめて低いことが知られる。

1114は、1115と同じく弥生時代中期末葉段階の口径20cm・底径19cmを測る中型の器台である。口縁部は拡張し、上面は凹線文と棒状浮文で飾られる。口縁部下も凹線文が施される。1115は脚柱部から裾部の部分で、内面はヘラケズリがなされている。外面は、柱部にヘラ先による沈線と裾部には凹線文が巡る。裾部の透かしはすべてではなく一部のみ内面まで達する段階のものである。1116は受部を欠損する底径33cmを測る大型の器台である。裾部に長方形を意識した透かし孔が穿たれる。脚端部には乾燥段階にヒビ割れが生じたようでその箇所粘土による補修痕跡が認められる。1117は図上による復元の結果口径31.6cm、底径36cm、器高約28cmを測る大型器台となった。鋸歯文等の装飾はなく、脚部に円形の透かしが上下2段にみられる。上半部内外は丁寧なヘラミガキが施される。1118は内面調整にヘラケズリとヘラミガキ調整がみられ、上・下逆の感もあるがここでは外面に付けられた鋸歯文を根拠に判断した。また鋸歯文下端には高さ1cm程の比較的長い突帯が1条巡る。1119は口径31cmの大型器台の口縁部である。上・下に拡張した面には5本の棒状浮文が貼付けられその間は鋸歯文で埋められる。また、上端部も面がつくられており鋸歯文で加飾される。接合は比較的明瞭である。1120は底径24cmを測る中型の器台である。粘土紐の接合は外傾接合となっており、成形の後に倒置したことが知られる。1121～1124は小型の器台である。1120～1124は丁寧なヘラミガキにより仕上げられており、1122と1123はさらに鋸歯文による装飾がなされる。1121は口縁部を上下に拡張したもので脚柱部内面はヘラケズリで調整されている。受部内面には初痕が残る。1123は受部を大きく拡張した装飾器台で、口径16.5cm、底径11.9cm、器高8.8cmを測る。受部と口縁部、脚部と裾部との境には突帯が巡る。1125は口径30cm、底径36.2cm、器高29.6cmを測る大型器台である。口縁部と脚柱部に鋸歯文が、裾部との境には半截された竹管文が巡る。1126は口径は明確ではないが約29cmの器台である。大型の壺の可能性もある。

手焙り形土器は1127と1128の2点がある。いずれも鉢として形成された後に覆いが付けられるものである。1128は鉢部を欠損するが覆部口縁部は拡張をみせない。1127は覆い口縁部をわずかに外方に折り曲げた程度のものである。

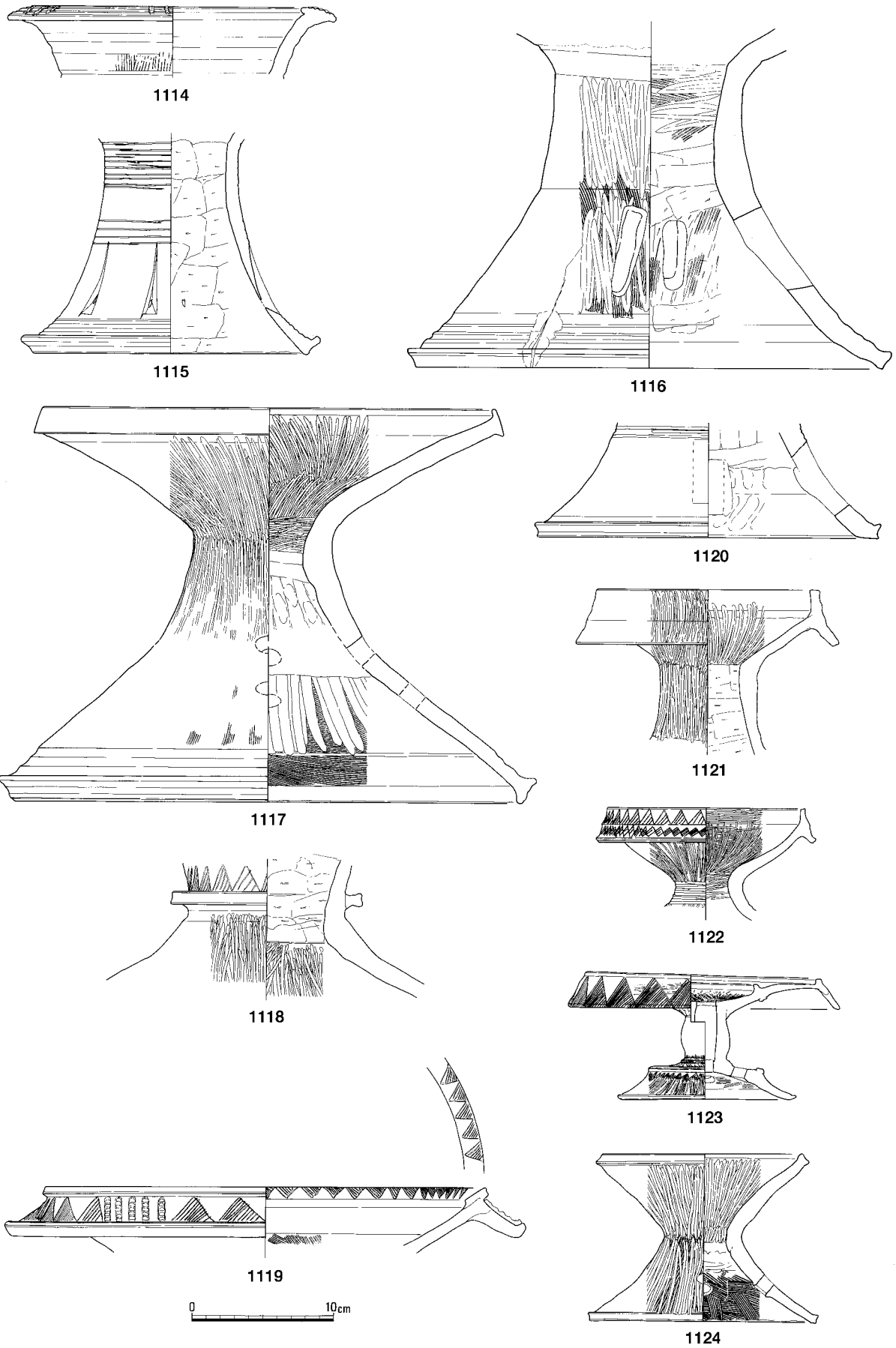
甌は1129・1130共に底部中央に焼成前に穿孔がなされる。1129の外面にはタタキメが、1130の胴部には粘土の接合痕跡がみられる。両者共に口径13～15cm、器高10cm前後の小型品である。

器種不明なものに1131と1132が存在する。1131は長さ9cmの取手状のものである。1132は外面が縦方向にヘラミガキ調整、内面は粘土紐接合時の押圧と横方向にハケメ調整されている。底部には接合面が2面比較的明瞭に認められる。

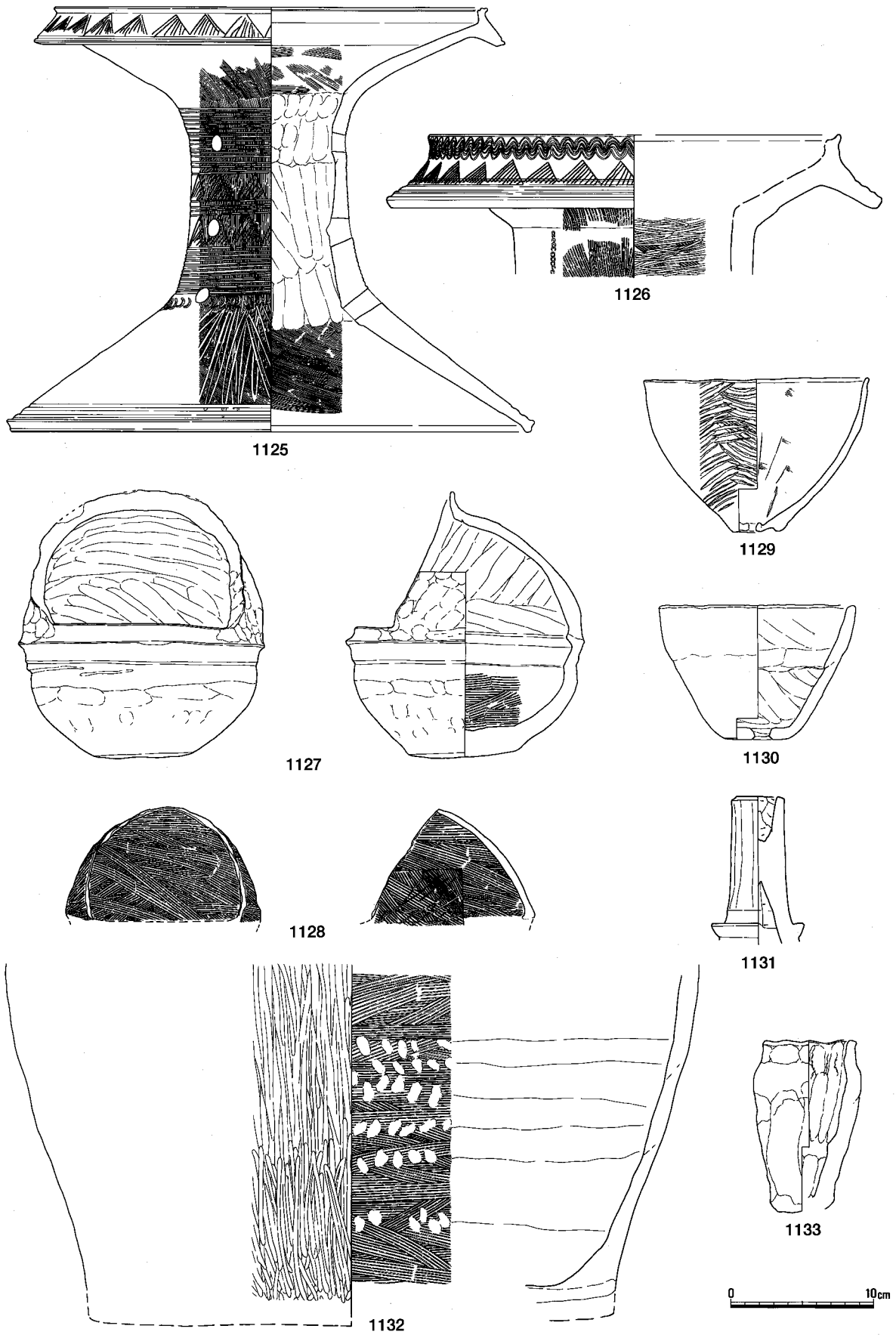
蓋は煤を内面および口縁部外面に付着させる1134、高杯を思わせる脚部をもつ1136等がある。1135は鉢に比較して深さが浅く蓋と判断した。

ミニチュア製品は、1137～1158である。比較的丁寧につくられ調整されたものが多い。1138～1141・1142は壺である。1138・1139は長頸壺を、1141・1142は直口壺を模倣したものである。1137は蓋、1143～1147・1150・1153～1158が鉢、1148・1149・1151が甕、1168・1169が高杯の模倣と考える。

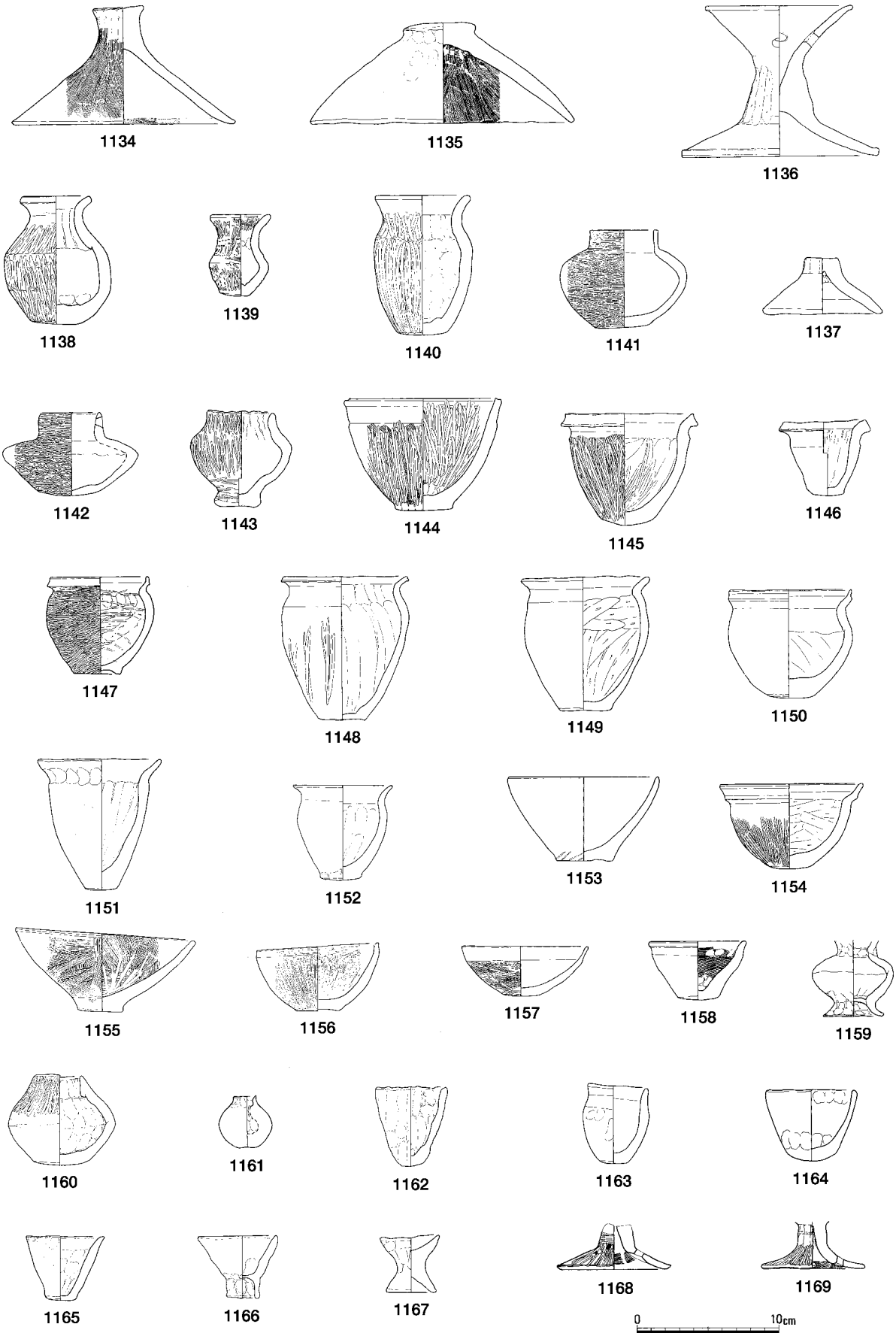
手捏ね土器は、1159～1167である。壺形（1160・1161）と鉢形（1162～1167）を呈する。（島崎）



第260図 河道1出土土器⑨ (1/4)



第261図 河道1 出土土器⑥ (1/4)



第262図 河道1出土土器⑥ (1/4)

特殊な壺・器台・特殊器台（第263～268図）

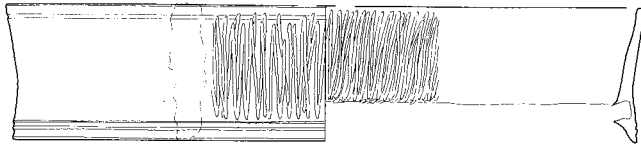
胎土・器形ともに日常土器と異なったあり方をみせる土器で器種には壺・器台等がある。

壺は少なくとも6個体は存在する。口縁部は1173を除いてはいずれも端部を長く上方へと拡張するもので、外面は鋸歯文・波状文等で装飾される。1173は本来は拡張した口縁部を複合させるものであろうが、擬口縁のままヘラミガキ調整され仕上げられていた。また、1173には成形工程での口縁部接合前段階の仕様に特徴がある。すなわち、器台1179～1185にも共通してみられる特徴で、頸部(胴部)と口縁部(受部)接合に限り、通常内傾接合で連続して接合・形成されるはずの接合がこの一連の土器のその部位に関してはわざわざ端部を鋭利な工具によって水平に削り揃えられ、乾燥後粘土を貼付け口縁部もしくは受部をつくっている点である。1175・1176の胴部には比較的細い突帯が2条巡らされ、その直上および突帯間には比較的粗い波状文が描かれる。また頸部と肩部との接点にも1条の突帯が巡る。壺の胴部内面は比較的丁寧にヨコ・ナナメ方向のヘラケズリが施され、特殊壺形土器を彷彿とさせる。壺1200は肩部と頸部の境に上面半截竹管文で飾る突帯を有し、上下に拡張した口縁部外面には粗い波状文が上下2段に、さらにその口唇部上面にも半截竹管文が巡るものである。胎土こそ違いますがこの特殊な壺・器台に共通した文様構成をみせる土器である。

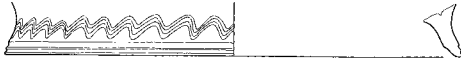
器台は口縁部・筒部突帯の有無、さらには胎土の違いによって大きく10個体以上の存在が考えられる。基本的な形は普通器台と同じ「ハ」の字状を呈する脚裾部に長く直立する径35cm前後と太い筒部が続き、これに対して大きく外反する短めの受部をつくり、その端部には上下に拡張した口縁部を貼付するものとする。脚部は1点のみの出土である。筒部は高さ2cmを超す突帯を2条一対で巡らすものと線刻文を2～3条一対で巡らすものの大きく2種類に分けられる。ただし、1186には突帯の剝離痕跡が存在する。1177・1178は、小片で明確ではないが径45～50cm近い大型の器台である。1178は垂下部を幅6cmの板状にあらかじめ加工した粘土帯を貼付け、外面には粗い櫛描沈線文と波状文が、端部は半截竹管文で飾る。1179は接合痕跡が明瞭に観察される。筒部との接合面は水平に整えられ、器表面には補修痕跡としての漆が付着する。状況から接合面を水平にしている1184もしくは1185が続くと考える。1180の接合面も水平に削られたもので、接合後内面には厚さの不均等を無くする目的で粘土を補充する。接合部直下には弧状に鋭利な工具で穿孔した透かし孔がみられる。巴形の可能性も否定できない。1181内面には壺等何らかの土器を支える(固定する)台が付設されている。器台と壺等何らかの器種が一体化した器台の存在が窺われる。突帯をみせない1184・1188は筒部外面に綾杉文と鋸歯文、さらには撥形文を刻んでいる。一方、後者の筒部に高さ2cmを超す突帯を巡らす1189～1195は、全面縦方向のヘラミガキの後ヘラ先により直線文を刻む。線刻文の組み合わせにより突帯と突帯の間はすべて鋸歯文風に埋められ、そこに三角形の透かし孔が穿たれる。ただし全体に丁寧な作りではなく粗雑な感が拭えない。1197は普通器台形を呈するが胎土は酷似する。透かし孔は三角で普通器台にあっては類例が少ない。器種が不明な1199は内・外面を押圧によって調整しており、内面には煤の付着が認められ一見中世の移動式のカマド庇部分を思わせる形状である。2205は調整等の観察によれば、本来上下縦方向にある器形で面をなし、一見古墳時代の盾形埴輪を想起させる。

特殊壺(1201)は、胎土中に多量の雲母を含み外面に赤色顔料が塗布され、内面はヘラケズリが施されていた。特殊器台(1202～1204)は、胎土中に多量の雲母を含む。いずれも小片であるが外面には向木見型特有の線刻文と透かし孔が、さらに赤色顔料が塗布され、内面はヘラケズリにより仕上げられていた。

(島崎)



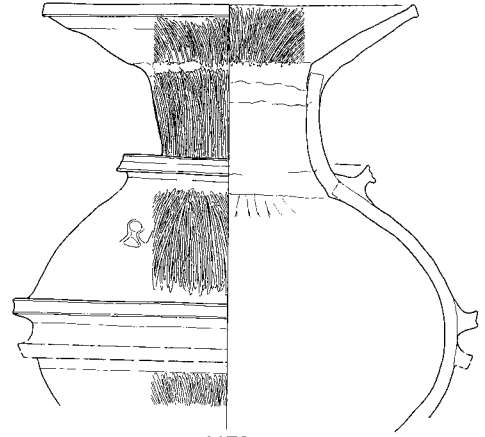
1170



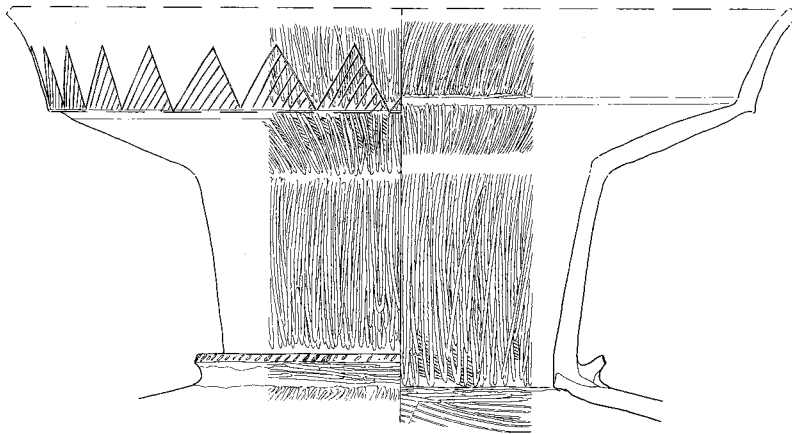
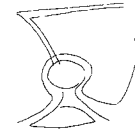
1171



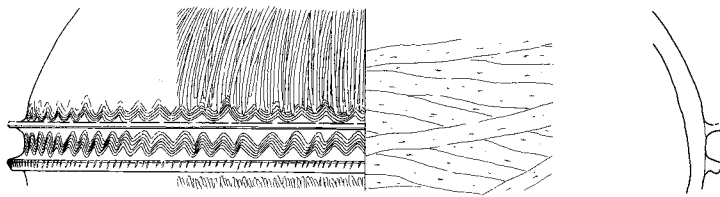
1172



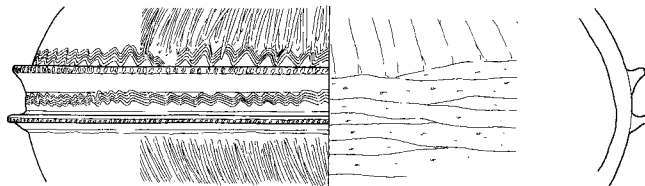
1173



1174



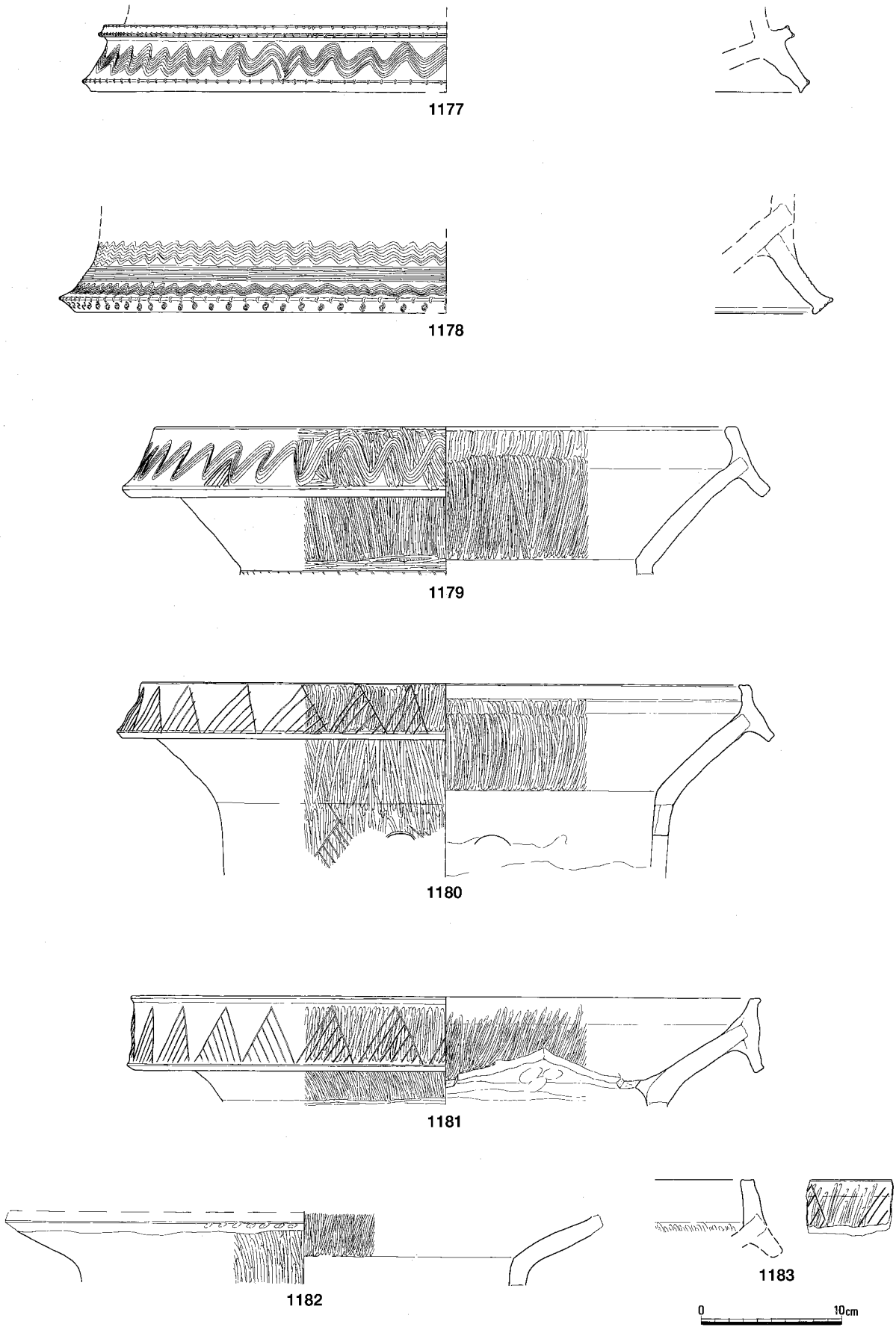
1175



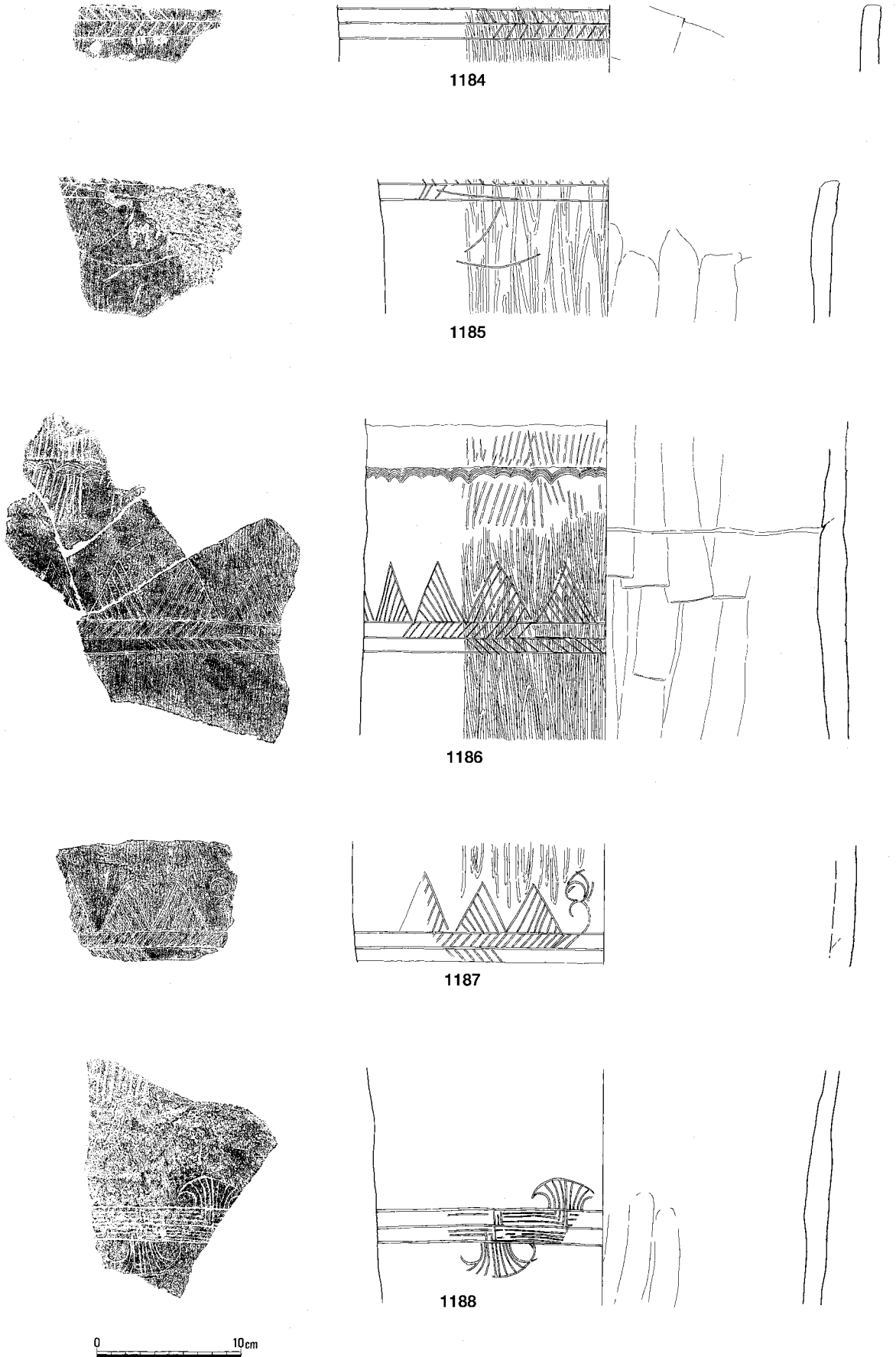
1176



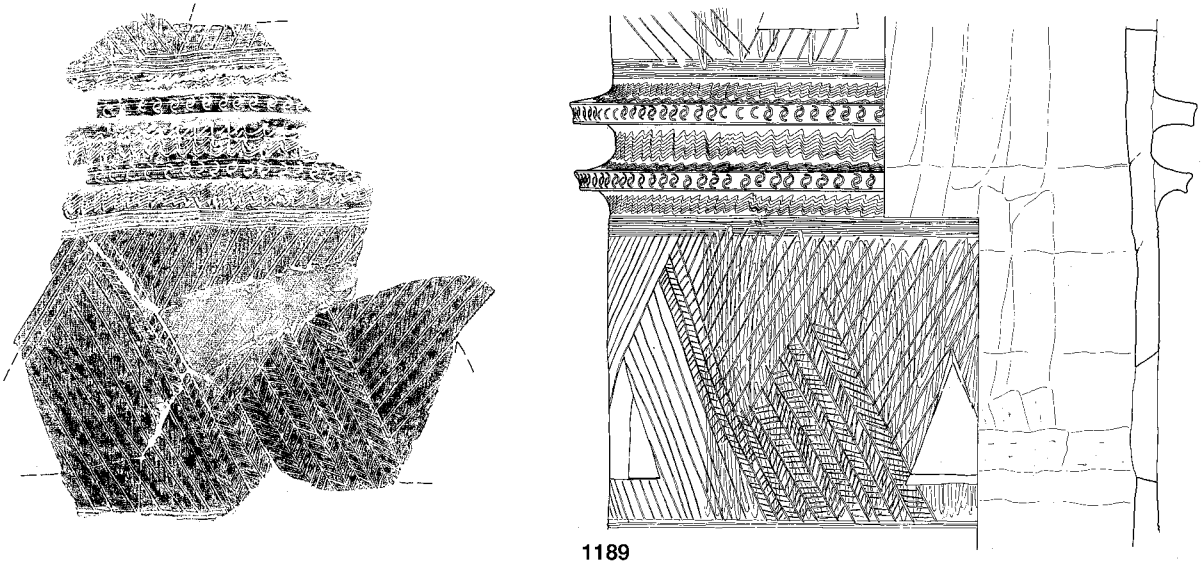
第263図 河道1 出土土器② (1/4・1/2)



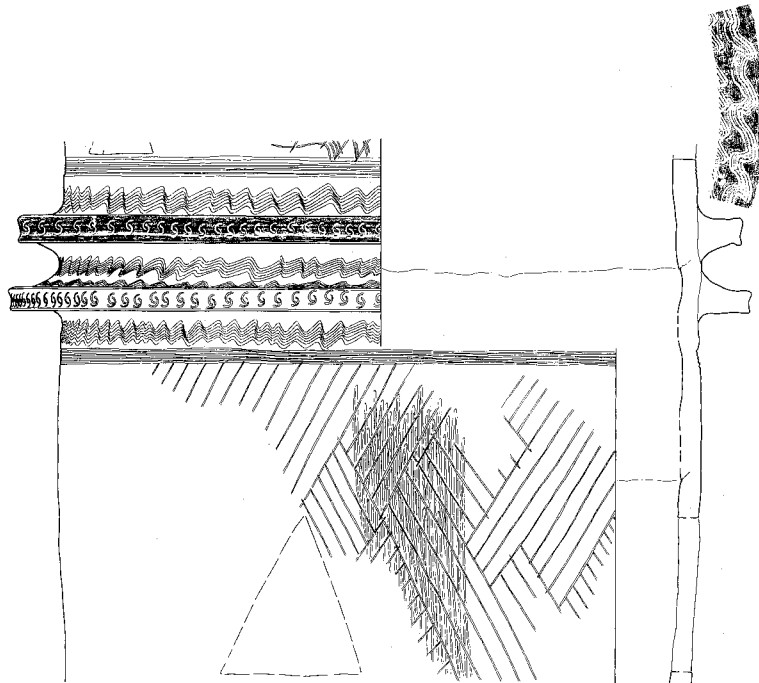
第264図 河道1出土土器⑥ (1/4)



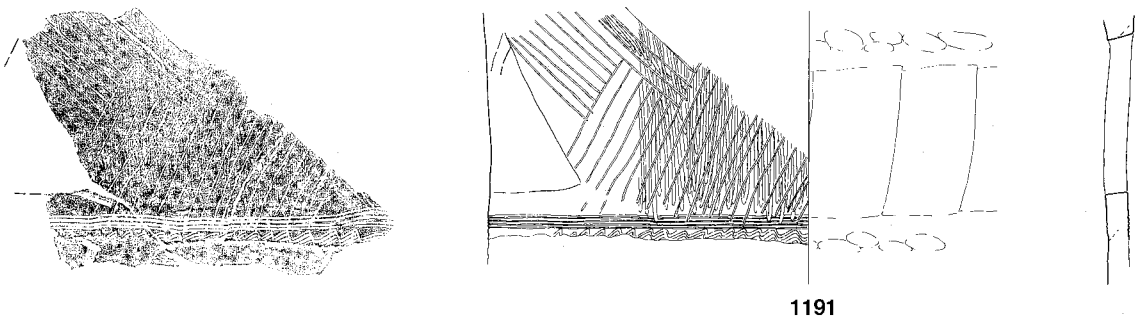
第265図 河道1出土土器⑥ (1/4)



1189



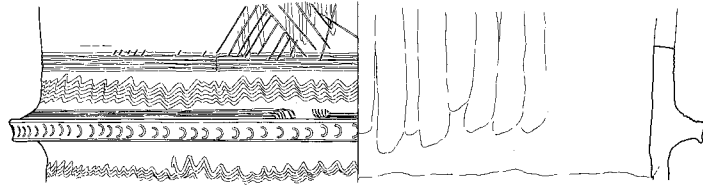
1190



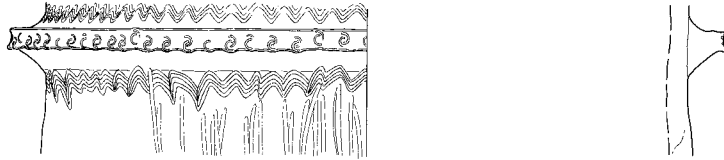
1191

0 10cm

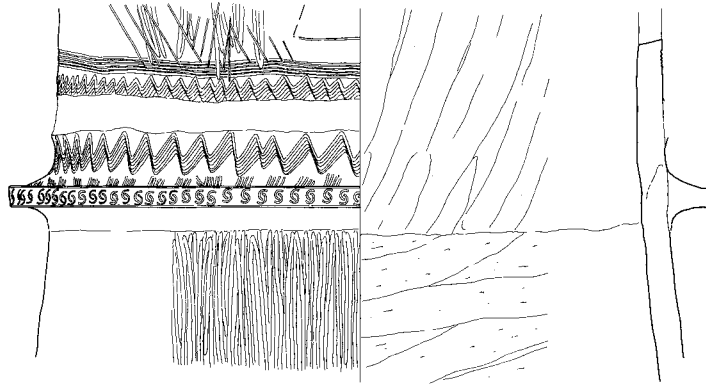
第266図 河道1出土土器⑥ (1/4)



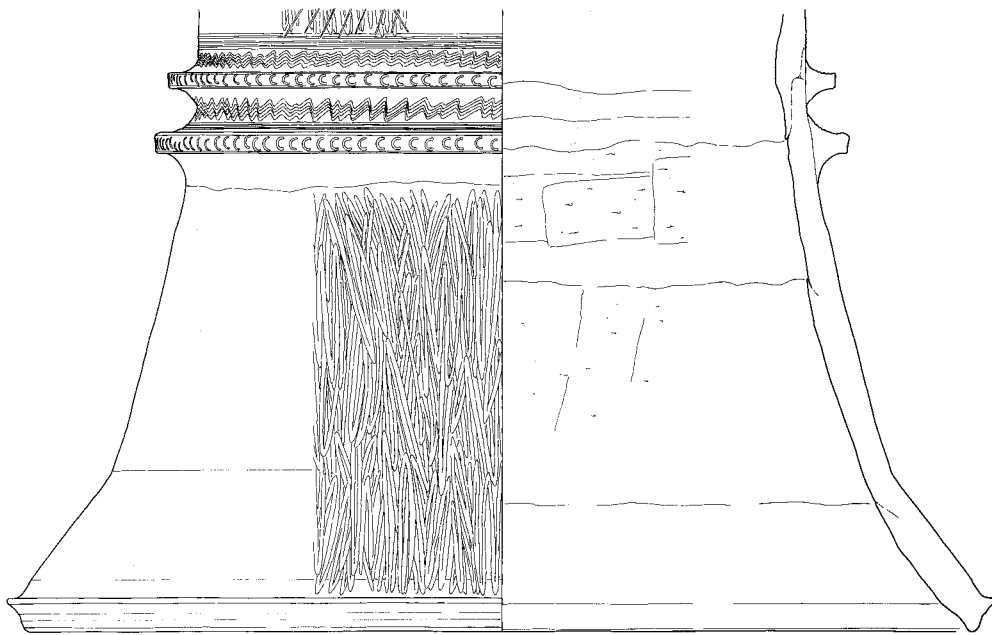
1192



1193



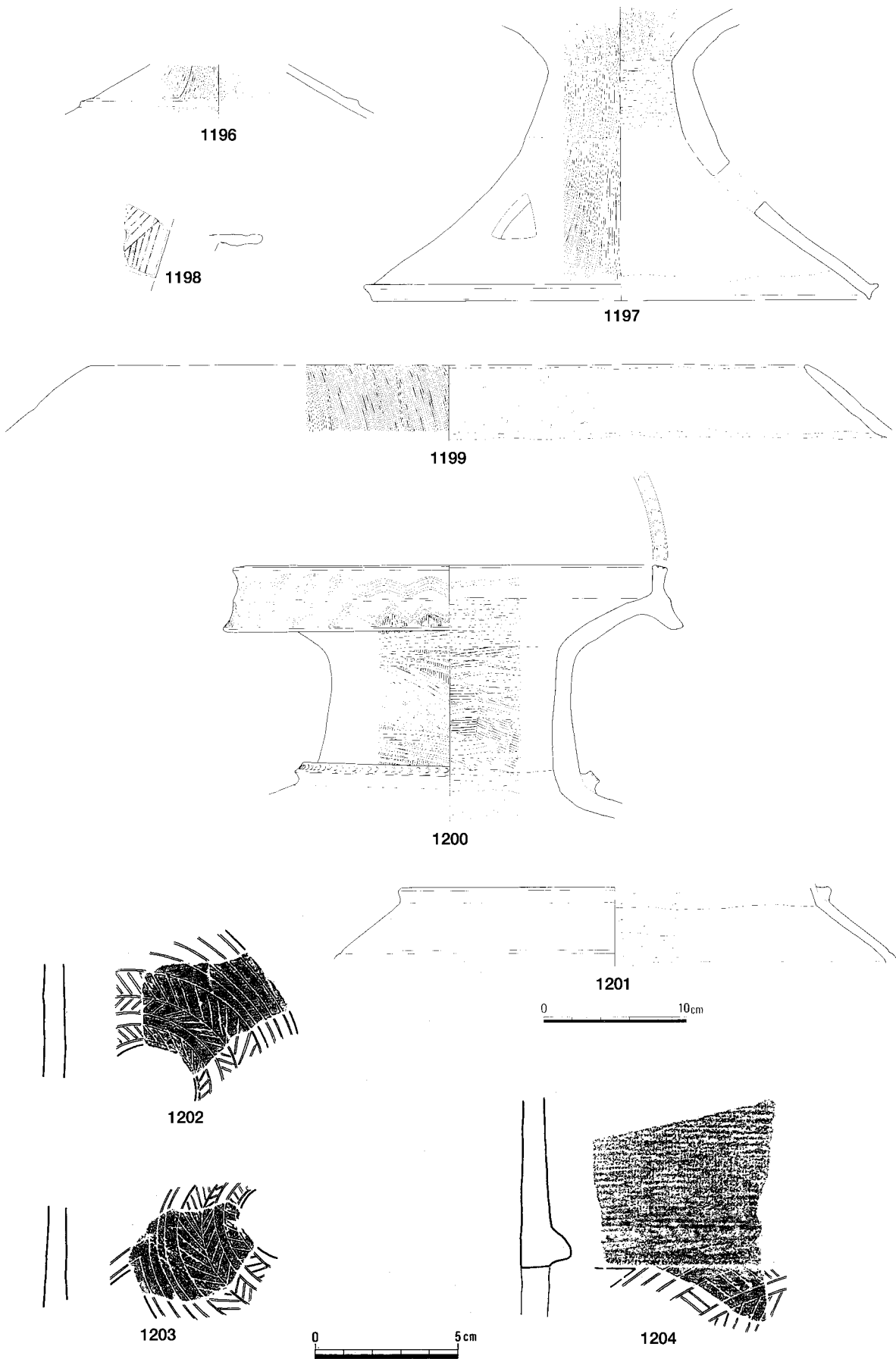
1194



1195



第267図 河道1 出土土器⑥ (1/4)



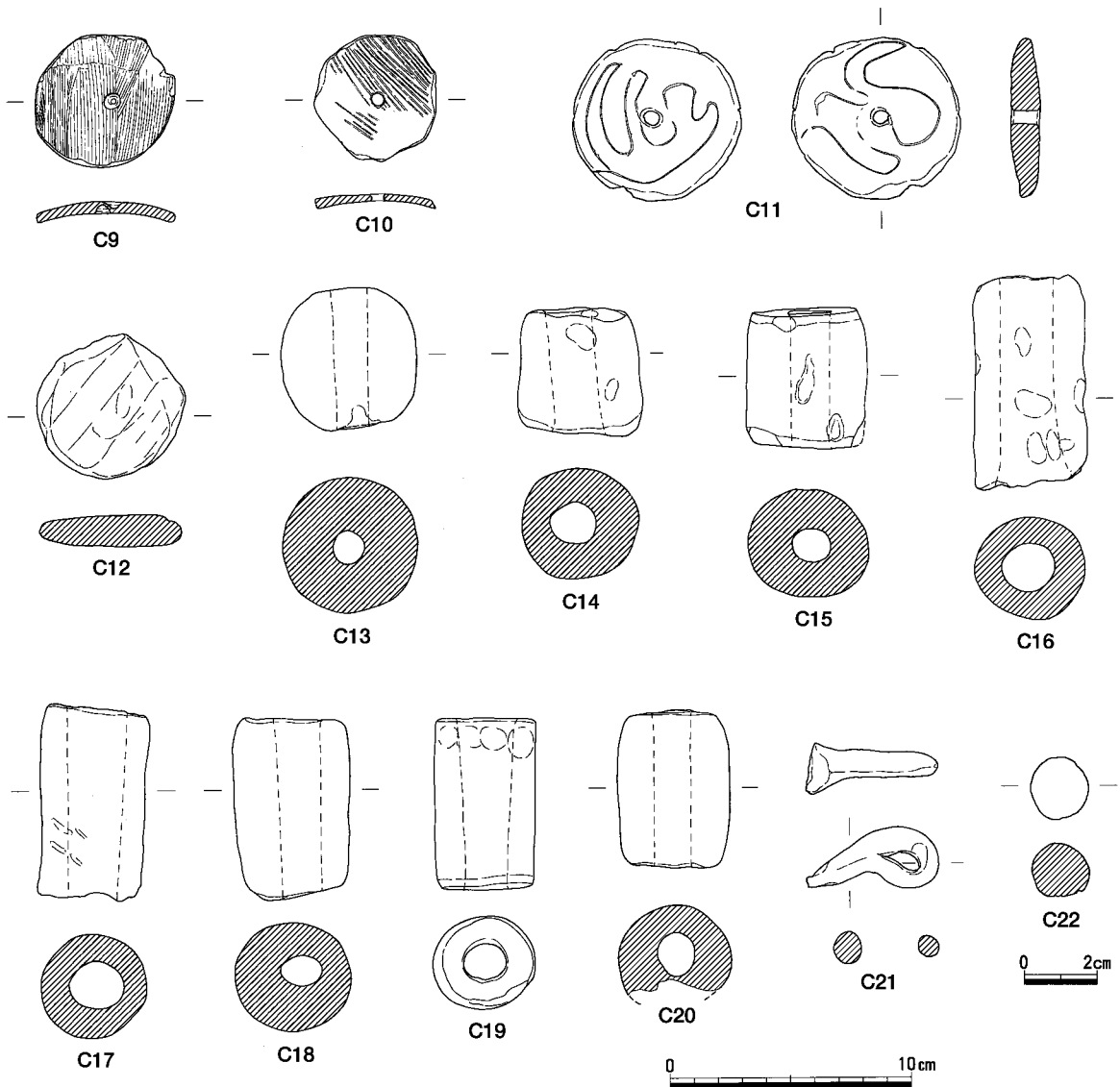
第268図 河道1 出土土器⑦ (1/4・1/2)

河道1 出土土製品・石器・鉄器・骨角器 (第269～276図、図版57・58)

ここでは河道1から出土した土器・木器以外の遺物をまとめて掲載する。出土層位は灰色粘質土、暗褐色土などさまざまに注記されているが、掲載順序は単純に器種ごとの配列とした。なお、河道自体の存続期間が長いので堆積土の時期区分が難しく、判断のつかない場合は弥生後期と見なして本項に掲載したことを断っておく。

C9・10は紡錘車で、どちらも甕の胴部破片の転用である。C11・12は土製円盤である。C11は建築部材に伴って出土したもので、両面に抽象的な文様が焼成前線刻されている。C12～20は、土錘である。C21は、粘土紐の先端を曲げて接着し、先端に環を作った形の土製品である。用途は不明で、実用品かどうかは疑わしい。C22は直径16mmを回る玉状の土製品である。

石器類は、概して現地で目に付きやすい大型品ばかりが目立つ傾向があり、小型の器種は堆積土の掘削作業の過程で見落とされた可能性があり、掲載遺物は本来の組成比を反映していないと思われる。

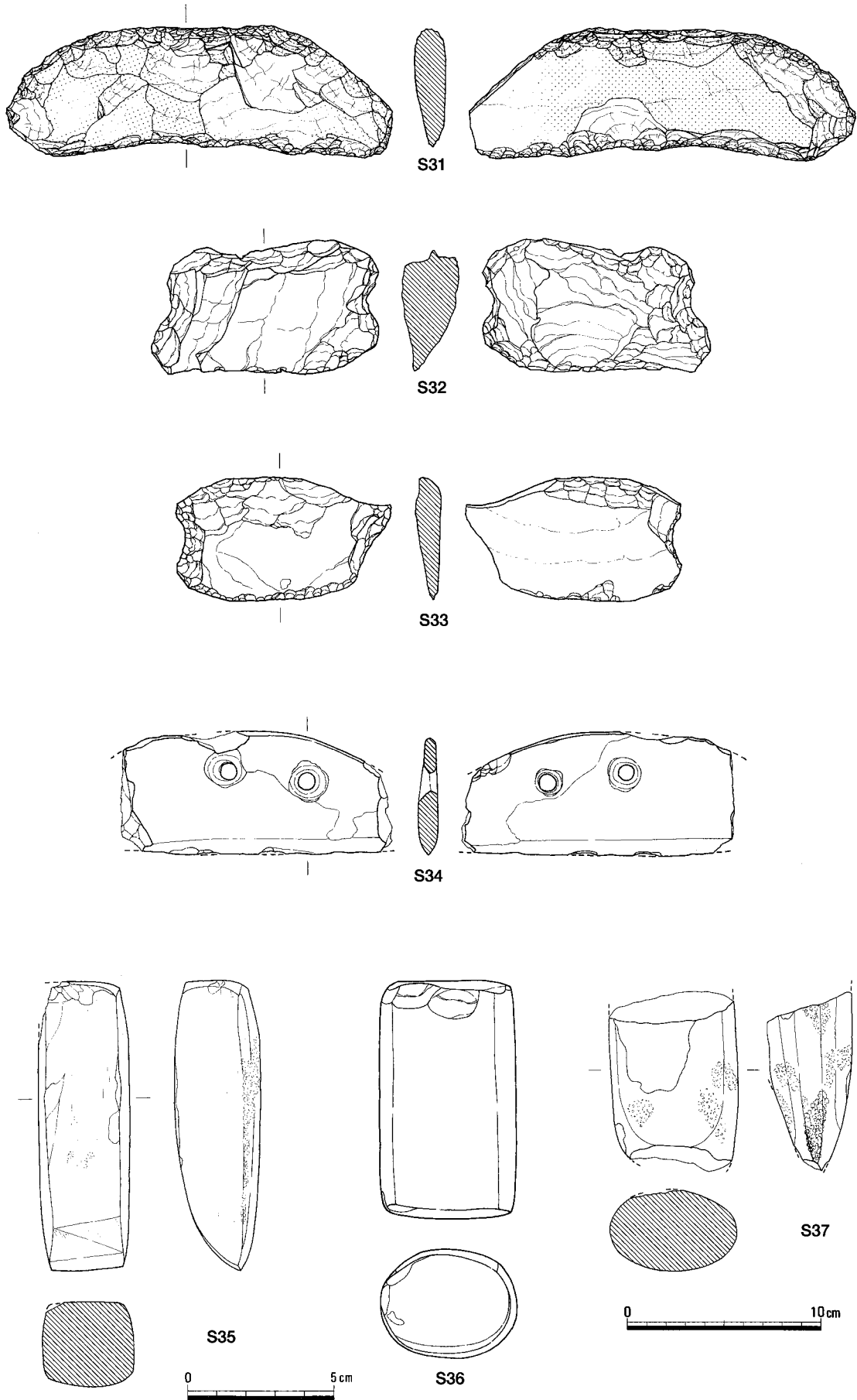


第269図 河道1 出土土製品 (1/3・1/2)

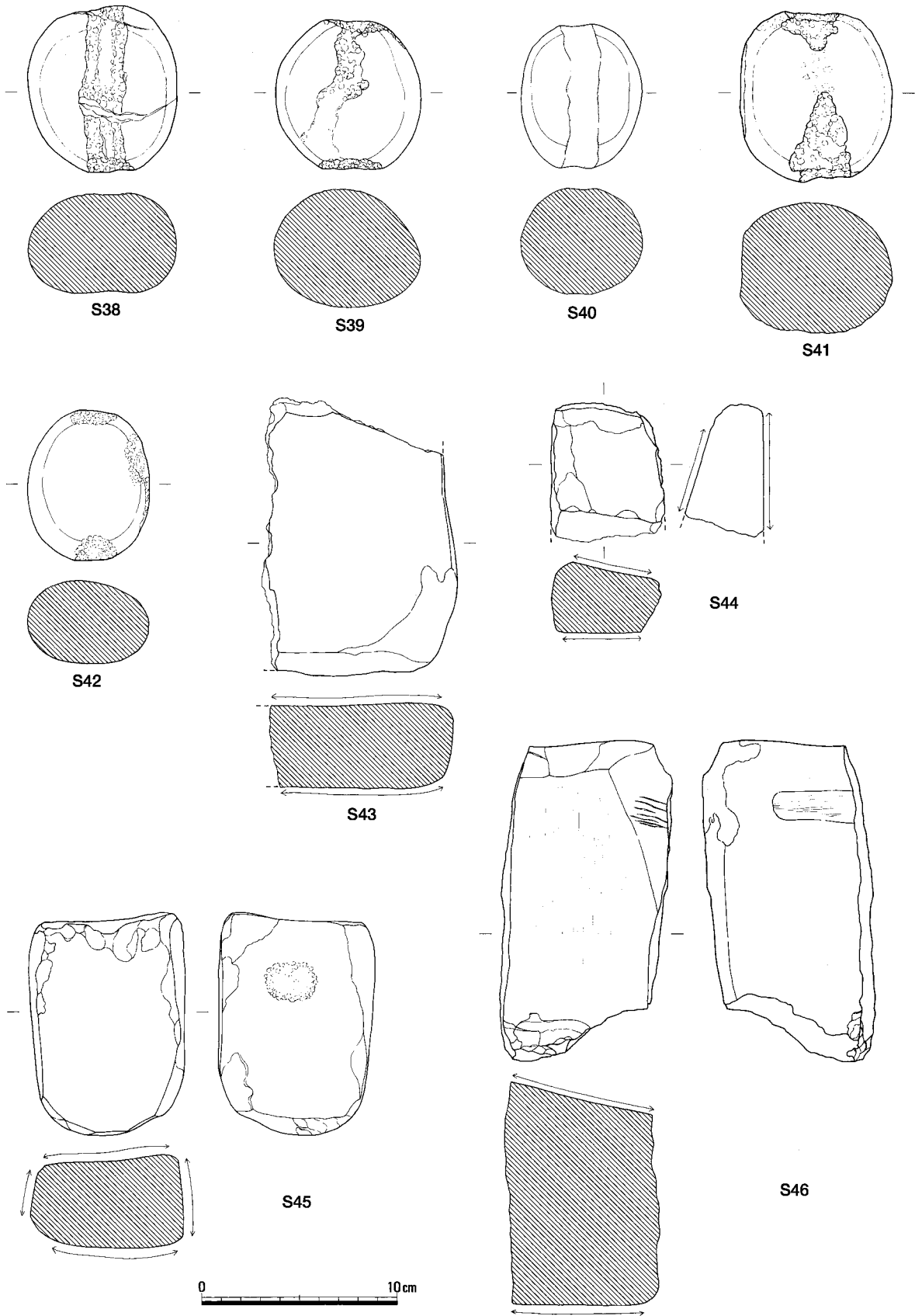
S31～33は打製石包丁、S34は流紋岩製の磨製石包丁である。S34はほぼ完形の柱状片刃石斧である。S35は円柱状を呈し、形態的にはいわゆる石杵を思わせるが断定はできない。S36は太形蛤刃石斧の欠損品である。S38～42は、円礫を利用した石錘である。S43～47・49～56は砥石で、大きさ・形態はさまざまであるが使用石材は流紋岩が最も多く、他に砂岩・頁岩・玢岩・泥岩製が確認される。S48はいわゆる石皿の破片と思われる。両面が使用のため若干磨滅している。S57～65は、叩き石と思われる。S66はサヌカイト製で、器種ははっきりしないが各辺に敲打痕が残る。

鉄器類は少量出土した。M9・10は鋤先である。M11は刀子を思わせるが小片のため確定できない。M12は暗褐色粘土中から出土した鑿状の鉄製品で、先端部を一部欠損する以外はほぼ完存する。以上の鉄器は、必ずしも弥生後期とは断定できず、古墳時代に降る可能性も考えられる。

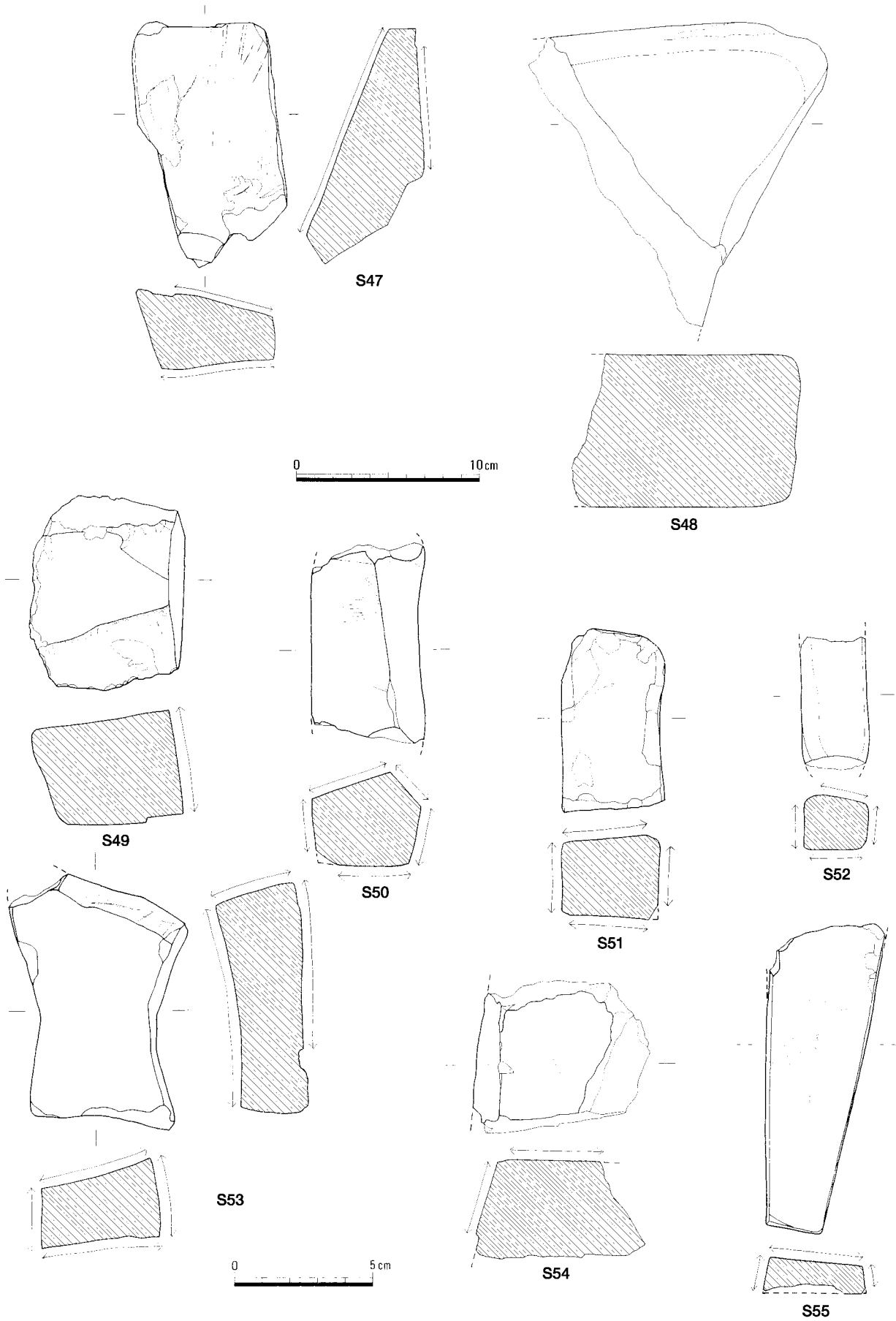
骨角器については、遺構に伴うものは当該遺構の項で掲載したので、それ以外の北岸部出土品をまとめた。B3～6は骨鏃で、北岸部の木製品集中部から出土した。素材は、B3～5が鹿角、B6が骨を用いている。いずれも有茎式で、角製の鏃は断面円形で身部と茎部の区別が明瞭なのに対し、B6は素材面の制約から薄手で身部と茎部は連続的である。B7はエイの尾棘を利用した刺突具で、両端部が欠損している。鋸歯状の棘は刺突の効果を狙ってそのまま残し、基部は柄に装着しやすいよう棘を除去し、細く削っている。B8は短剣の柄のような形態の製品であるが、削り込みが浅く茎が挿入しにくいと、実用品かどうか疑問がある。上部には目釘穴のような円孔が2対貫通し、布状のものが巻かれた痕跡がある。穴の位置は微妙にずれがあり、断面図では1個が外れて表示できていない。B9は管状の鹿角製品で、装身具の一種と思われる。鹿角を輪切りにし、髓を削り抜いて穿孔している。表面には刃物による切削痕が顕著で、研磨はなされていない。側面観は棗玉を思わせる形状である。B10は基部側および先端部が切断された鹿角で、表面の落が著しいため不明瞭ではあるが部分的に線刻が残っている。線刻は、長い方の枝に2本の横線を刻み、その間に3ないし4本の斜線を入れたもので、彫りがごく浅く本来全周していたかどうかは不明である。B11は、シカの左肩甲骨を用いた卜骨である。表面の調整は特になされた様子はなく、外側位の突起も除去されずに残っている。残存率が低いため、焼灼痕は矢印で示した内側位の破断部分にかかる形で辛うじて1か所のみ残存している。焼灼部は表面が剝離を起し、中心は黒褐色に変色している。B12～17は、エイ類の椎骨の中心に穿孔したいわゆる輪鼓状装身具で、耳飾と考えられる。円孔は大小あり、針で突いた程度のもは加工品か否かの判断が困難である。B15・17は孔が大きく、人為的穿孔であることが明らかである。B18は白色を呈する破片で、形状からは骨ではなく歯の一部と思われる。加工品か否か不明であるが、表面は平滑で一部に格子状の変色が認められる。B19～24は、刃物による切断痕の残る鹿角および骨である。脆弱化が著しく、内部に藍鉄鉱の析出が認められるものが多い。B19は基部で、角座はそのままであるが主軸・第1枝の両方が切断されている。B20は第1枝の分岐から第2枝にかけての部分と考えられる。主軸の両端および第2枝が切断されている。以上2点は表面の切削・研磨がなされず、顆粒状の凹凸が残っている。B21～23は各枝の先端ないしそれに近い部位である。いずれも各先端部が刃物で切断されている。B24は動物種未同定であるが、シカの肩甲骨の一部と思われる。これらの遺物に残された切断痕は、複数の方向から中心に向かい断面が多角形を呈するものが多く、現在の鋸のように対象物を固定して1方向から切るのではなく、対象物を回転させながら少しずつ切り込みを入れていく方法を使ったようである。このような遺物は、何らかの未製品または作業に伴って出た残欠と考えられ、集落内で骨角器製作が行われた可能性を示唆するものである。(岡本)



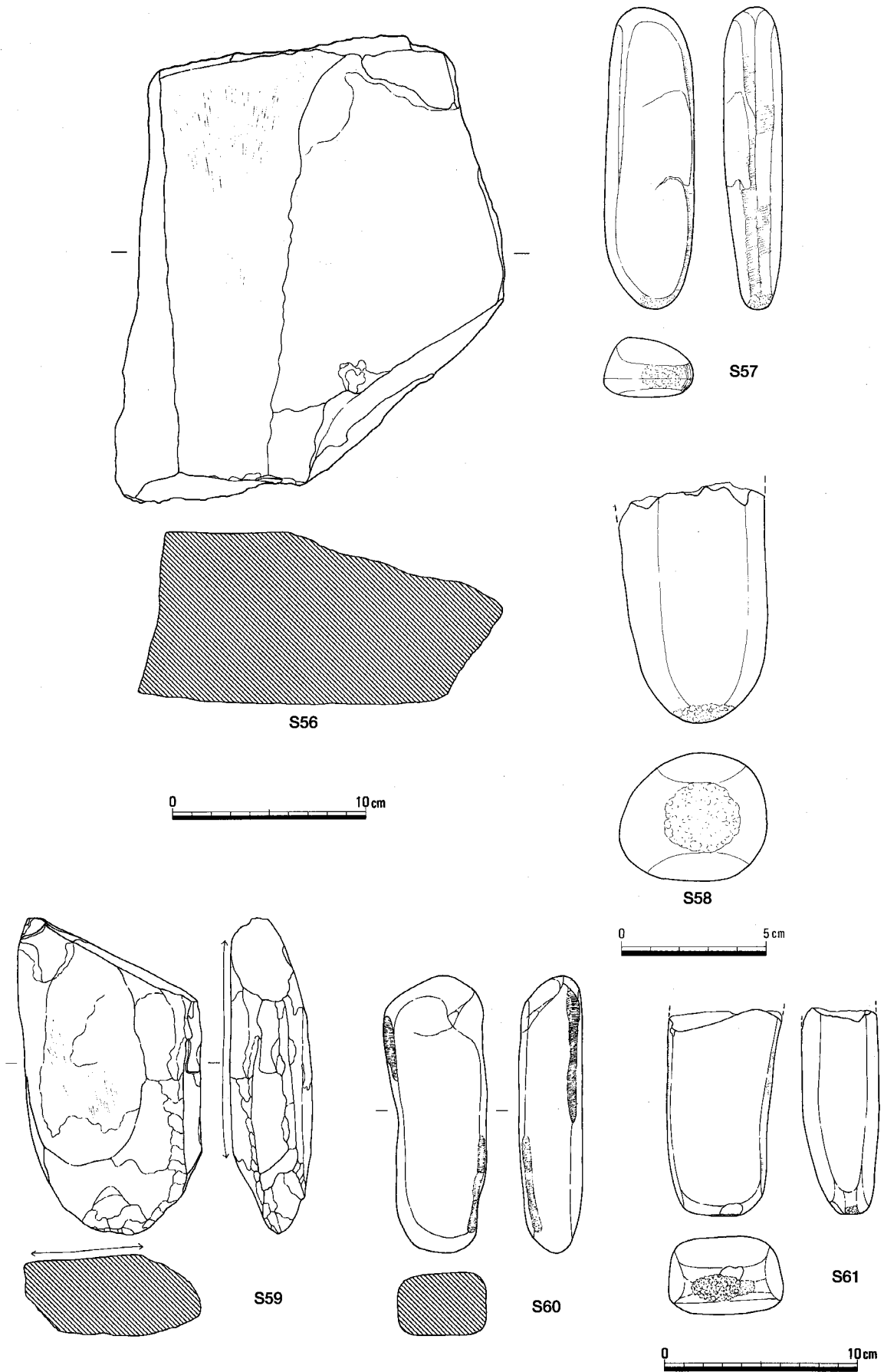
第270図 河道1出土石器① (1/2・1/3)



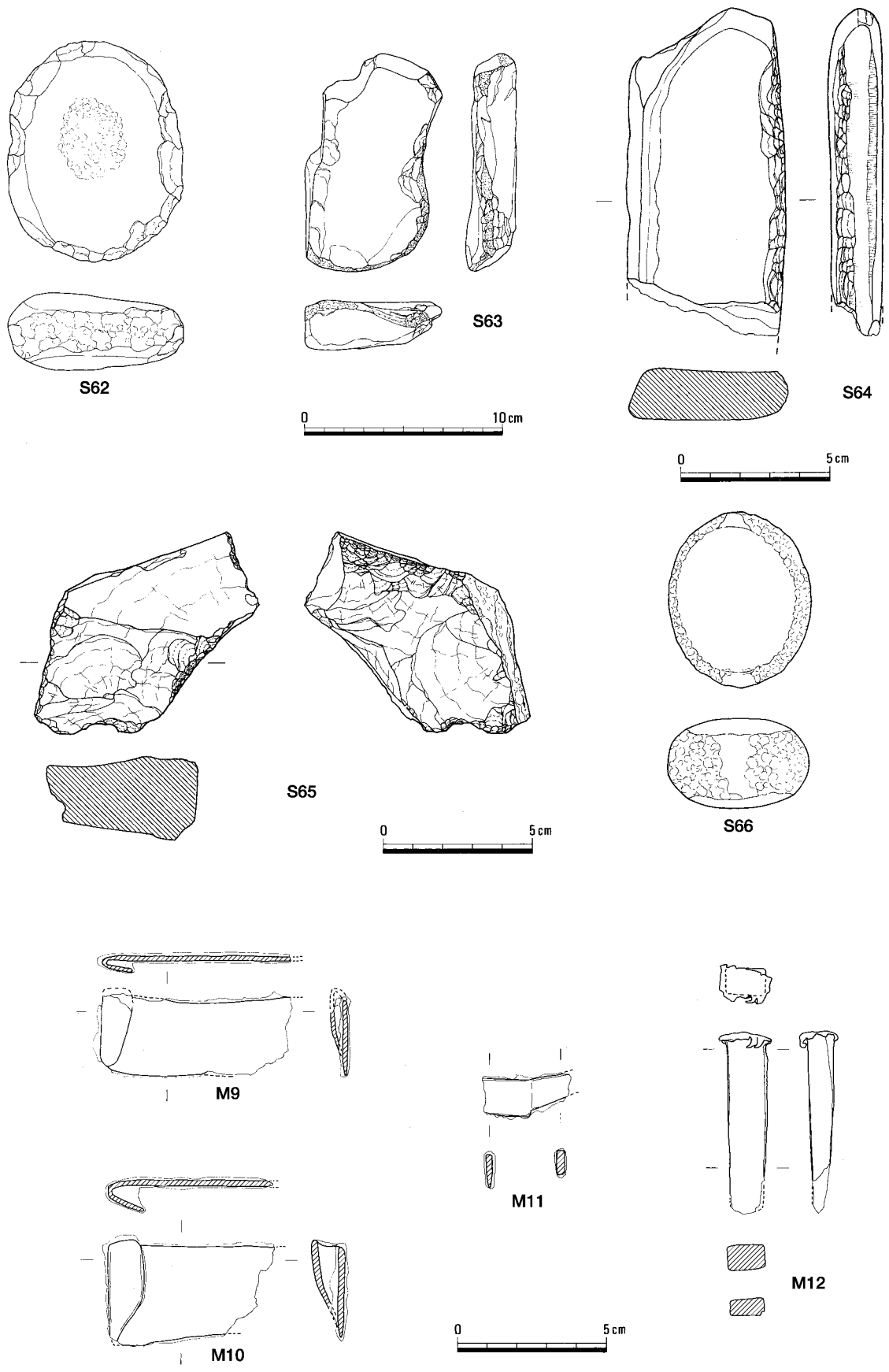
第271図 河道1 出土石器② (1/3)



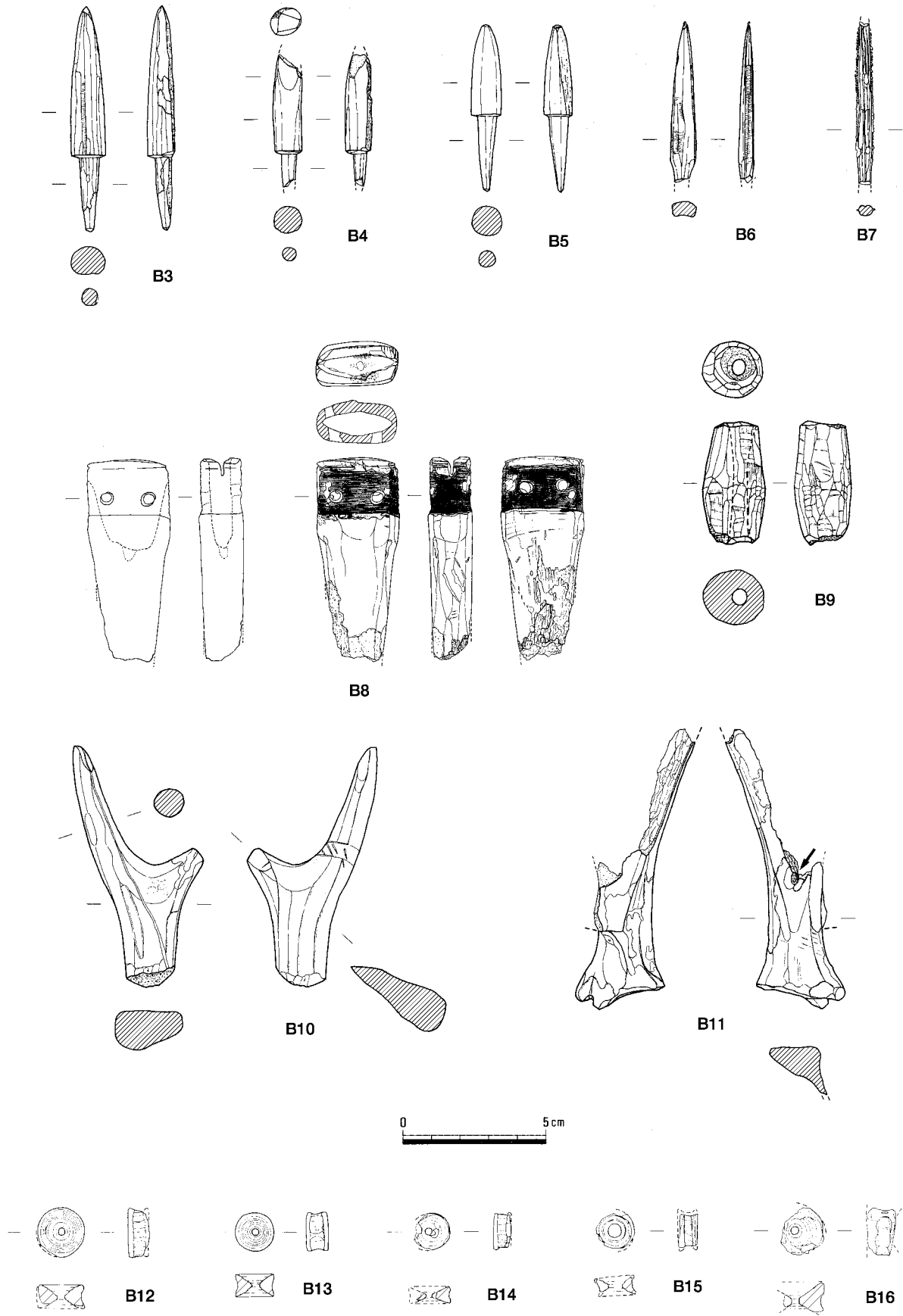
第272図 河道1出土石器③ (1/3・1/2)



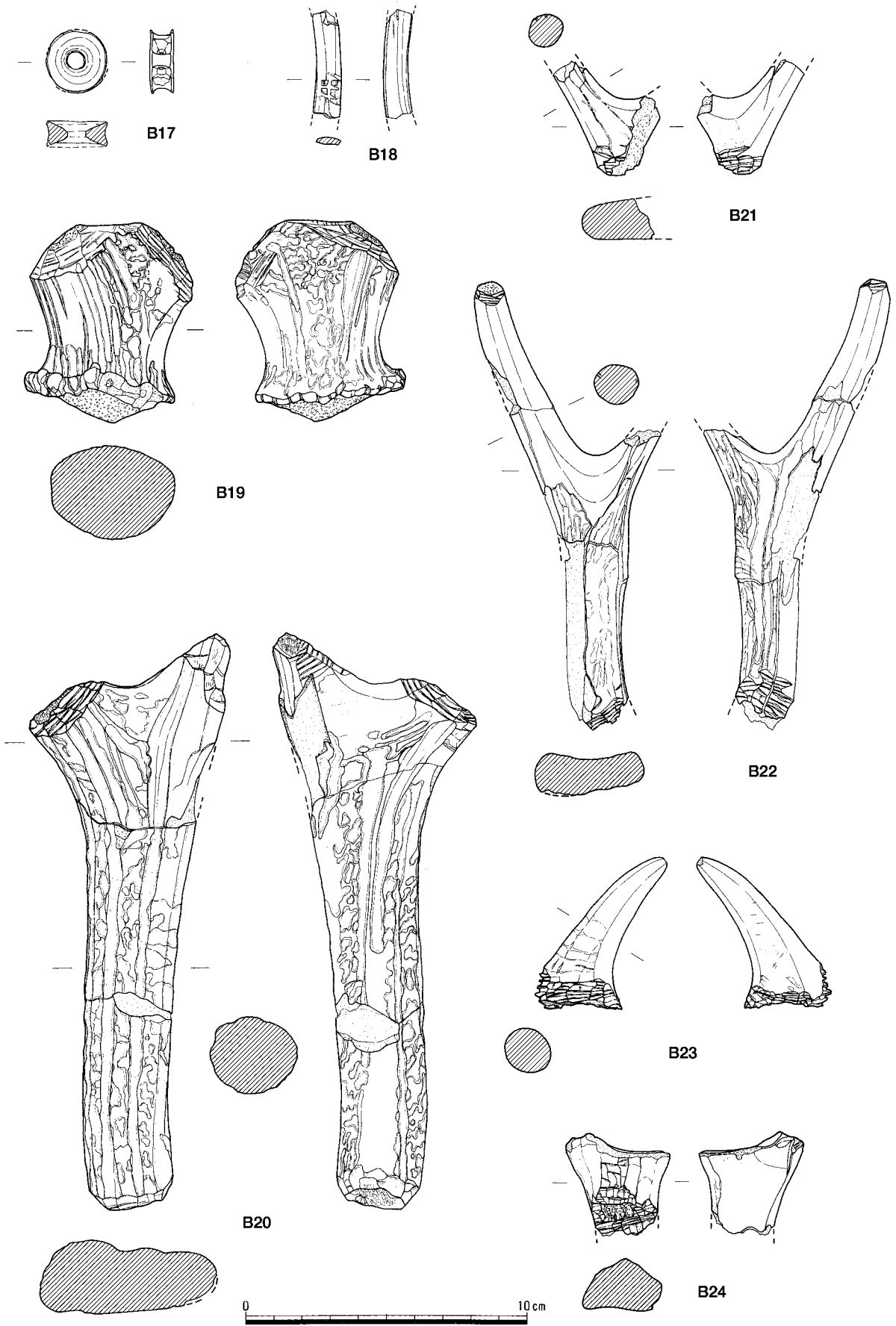
第273図 河道1出土石器④ (1/3・1/2)



第274図 河道1出土石器⑤・鉄器 (1/3・1/2)



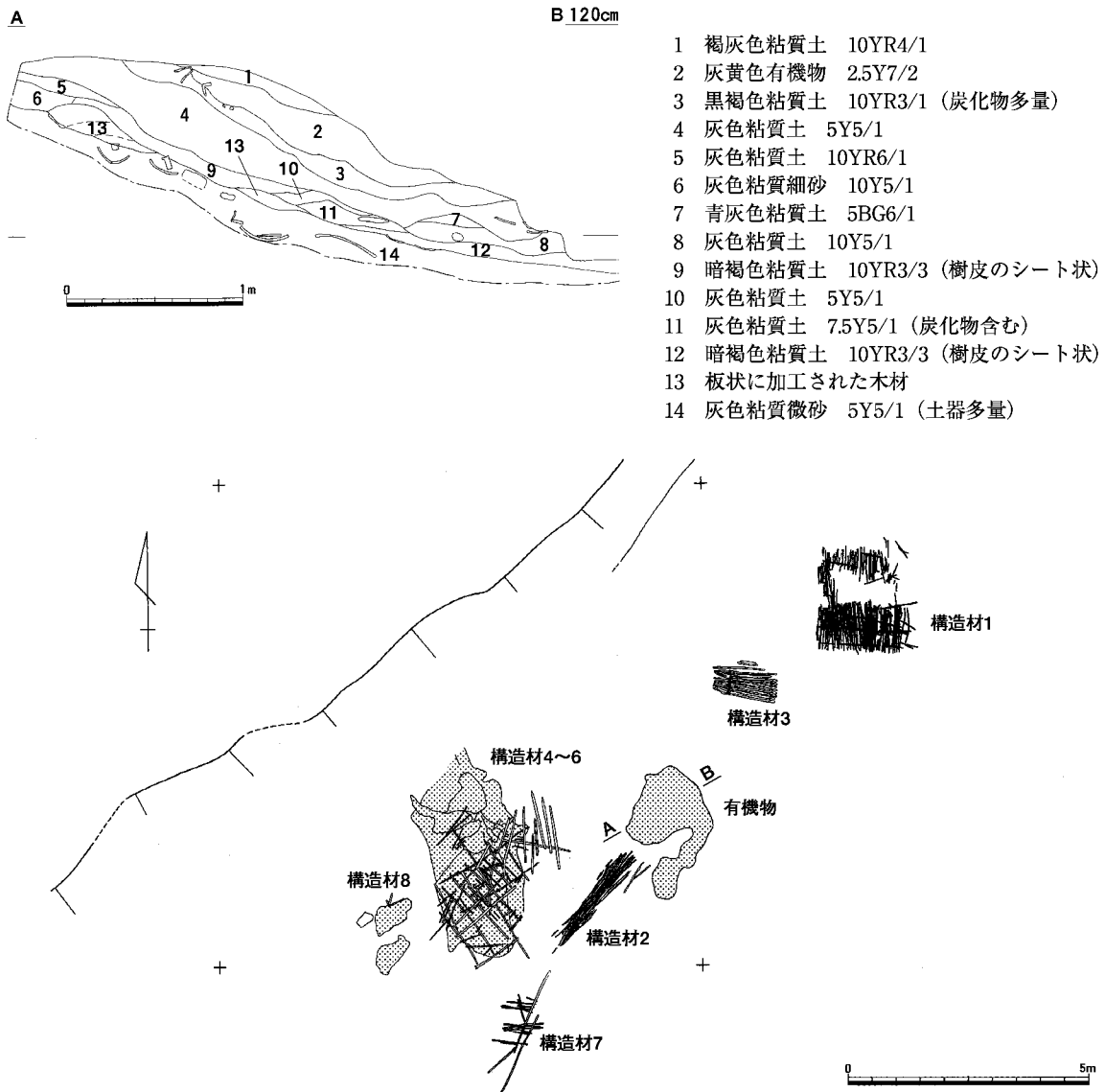
第275図 河道1出土骨角器① (1/2)



第276図 河道1出土骨角器② (1/2)

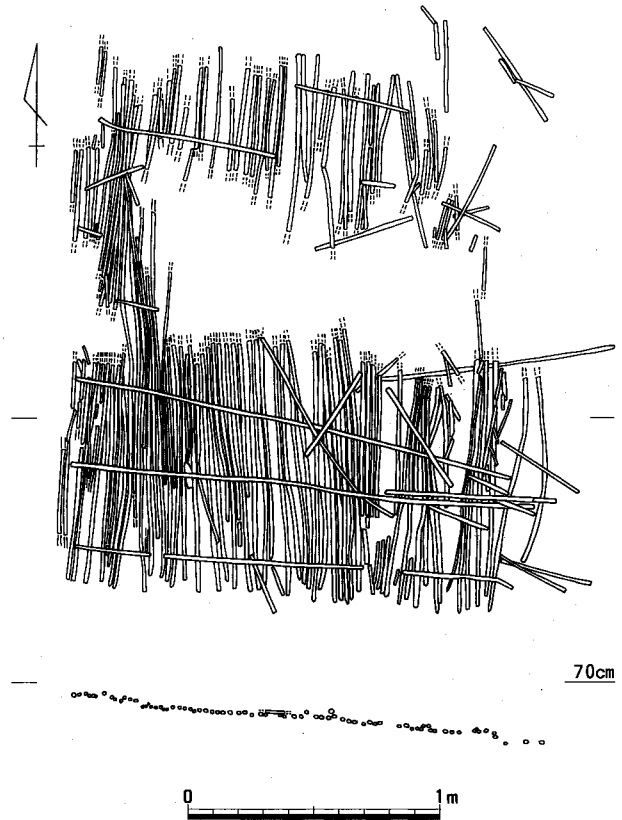
河道1 木製品（構造材など）（第277～287図、巻頭図版4、図版14・17～20）

河道1 北岸では遺物集積層に伴って、複数の木材を利用してつくられた構造材あるいは人為的に持ち込まれたと考えられる植物質有機物が多く出土した。構造材とは、発掘調査中において、蔓により緊縛して明らかに人為的に製作されたとわかるもののほかに、出土した部材の配置や木材の種類から人為的に製作された可能性の高いと判断されたものことである。調査における検討の結果、構造材については以下に述べる計8点のものを検出するに至った。また、植物質有機物は、遺物集積層のなかに多くみられたが、そのうち、植物質原体（茎等）が同一方向を向いているなど、人為的に加工されている可能性が高いものについてはその検出につとめた。植物質有機物の大部分は土圧により厚さ1cm以下に圧縮されていたり、散乱していたりして、すべてを取り上げることは不可能であったため、特に残存状況が良好であったものの有機物の範囲等を写真撮影および図面記入したのち、サンプルを採取した。これらのサンプルのうち、特に建築部材や構造材に伴って、あるいは近接して出土し、その関連性が推測できるものについては、建築部材や構造材との関連から灰像分析を行った。その詳細は巻末に分析報告を掲載している。



第277図 河道1 北岸構造材・有機物出土状況 (1/150)、有機物層断面図 (1/40)

構造材1は径2cm程度の細木を約215×180cmの範囲に縦横に並べたものである。中央部が欠損しているのは、この場所がちょうど調査区境の側溝の位置にあっていたため、この部分については破損してしましたが、その他の箇所は良好な状態で検出された。使用された細木は径約2cmを測るもので、基本的に樹皮の残る芯持材を使用しており、中には先端を尖らせているものもあった。縦に並べた細木は65本を数え、ちょうどスタレのように狭い間隔で並べられている。一方、横に並べた細木はおよそ6～7本が確認できる。これらは縦の細木と異なり、幅約30cmの間隔をあけて並べられている。横の細木はいずれも縦の細木の上に位置している。これらの縦と横の細木の緊縛方法であるが、構造材の数か所で蔓のような植物質原体を確認した。しかし、その蔓の残りは非常にわずかなものであり、この蔓がこの構造材1に伴う可能性が高いことは推測されるものの、その詳細な緊縛方法については不明といわざるを得ない。これらの細木のうち、縦木1点、横木2点について樹種鑑定を行った。その結果はいずれもスタジイであった。その他の細木については樹種鑑定を行っていないが、細木の形状などから同様の木材が使用された可能性が高い。この構造材1の用途であるが、屋根材、壁材等の一部と考えられる。その大きさや形状から屋根材の一部と考え、特に茅葺屋根に使用される屋根下地のような用途を想定しておきたい。なお、構造材1に伴う細木をC14年代測定した結果、1830±60年BPとの結果であった。

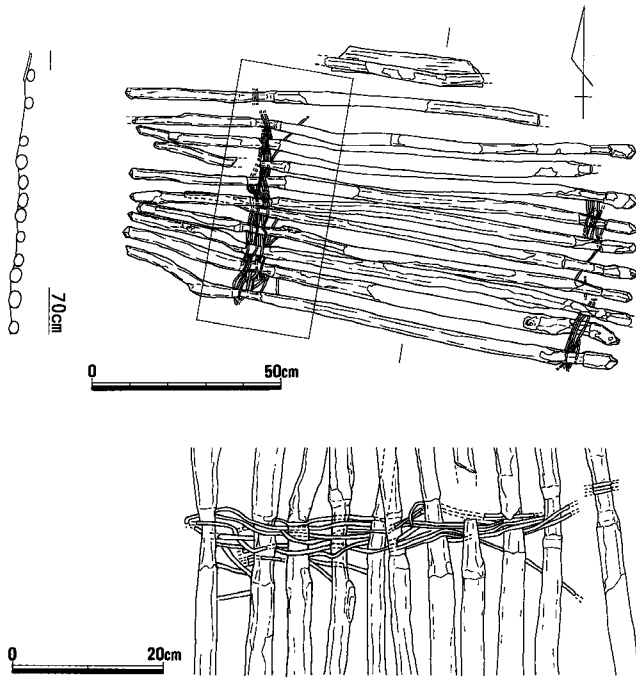


第278図 河道1北岸構造材1 (1/30)

構造材2は細木と藁のような植物繊維で構成されているものである。長さ約245cm、幅約50cmを測る。構造材2の残存状況は全体的に良好であるが、藁状の部材についてはあまり残りが良いとはいえない。細木は観察可能な範囲で約10本を数える。藁状の植物繊維はこれらの細木と同方向に付着して



第279図 河道1北岸構造材2 (1/20)

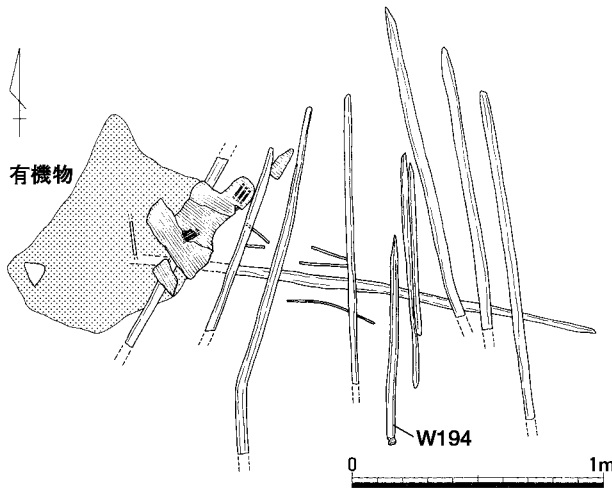


第280図 河道1北岸構造材3 (1/20)・部材緊縛状況 (1/10)

いた。構造材2は右側と中央部の2か所で蔓による緊縛痕跡が確認できた。蔓は細木を交互に絡ませていた。おそらくは全体を蔓で縛っていたと考えられる。

構造材3は構造材1の南で出土した。径約3cmの棒を横に11本並べたものである。構造材3の大きさは長さ約135cm、幅約70cmを測る。構造材の左右端部は若干欠損部分があるものの、おおむね残存している。下端部は緊縛している蔓の形状から、最下端の棒が構造材3の端部と判断できるが、上端はさらに上方に棒が連なっていた可能性が否定できない。棒の長さは完存しているもので約135cmを測る。加工痕跡以外の箇所では樹皮が残存している。いずれも丸太材を使用している。棒の右側の先端部分はいずれも頭部を作り出している。また、左から35cmほどの箇所では棒の周囲を削り、緊縛するための装置を作り出している。これらの2か所では両方ともに蔓による緊縛が行われていた。右側の緊縛は蔓が一部欠損していた。左側の緊縛では蔓を2本一組で棒に交互に絡ませて棒を固定していた様子がみられる。なお、使用された木材は下から3本目のものがブナ科、4本目のものがコナラ節に属するものであった。

構造材4は1本の横木と10本の縦方向の木材で構成される。これらの木材は互いに有機的な関係にあるのか不確実な部分もあるが、ここでは構造材として報告する。構造材4には180cm以上を測る横木に70~140cm以上の長さの縦木がみられる。木材は丸太材を使用したもので、中にはW194のように先端を加工した部材もみられた。また、構造材4と直接関係があるのか確証はないが、付近に植物質

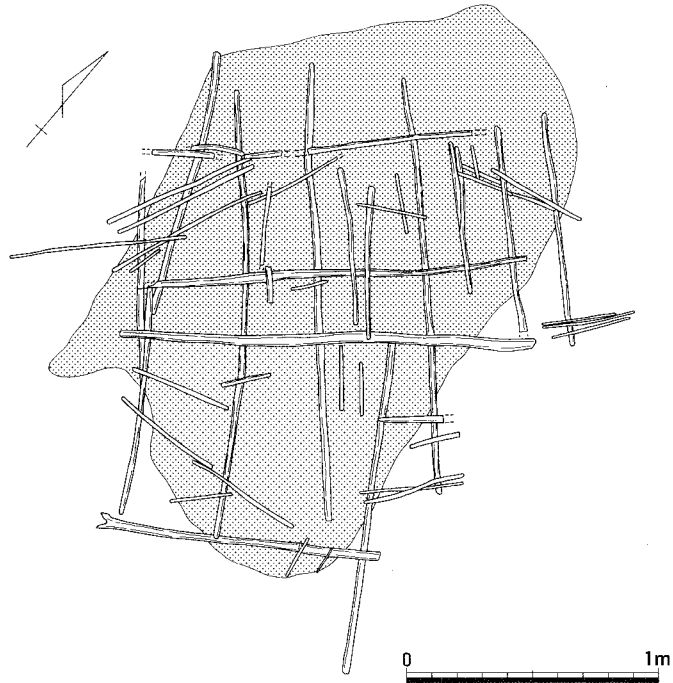


第281図 河道1北岸構造材4 (1/30)

の有機物が存在していた。有機物は藁状の植物繊維がブロック状にまとまったもので、茎も一定の方向に並んでいた。一部、編み込んでいるような部分もみられた。分析の結果、ヨシ属やススキ属の茎葉等に由来するものであった。この有機物の下には径約1cmの小枝が平行に並んでいた。これらの有機物は屋根や壁を構成していた植物である可能性も否定できない。

構造材5は層位順序では構造材4よりも下で、構造材6よりも上の位置で

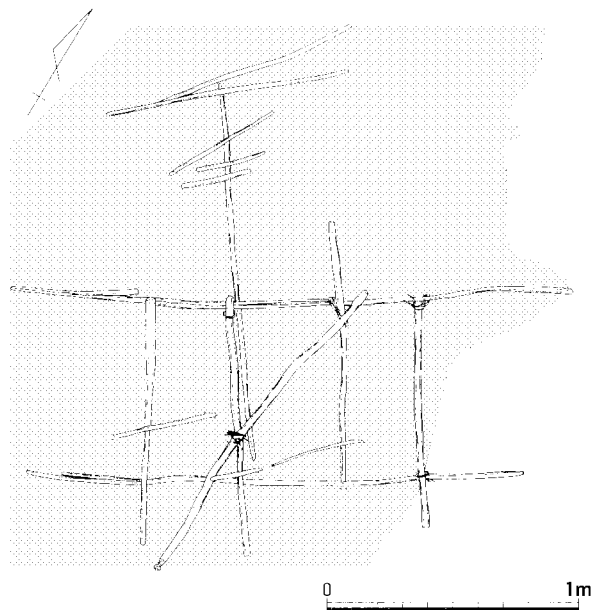
出土した。構造材5は長さ250cm、幅180cmの範囲に存在する。構造材5に使用されている木材はおおまかに分類すると径約2～5cmのやや太めの材木と、径約1～2cmのやや細めの材木に分類することができる。太めの部材は縦方向に6列、横方向に4列設置されている。その間隔は縦方向の部材間で約20～40cm、横方向の部材間で約25～80cmである。これらの部材は構造材5の骨格をなす主要な部材といえる。一方、やや細めの材木は、格子状に組まれた部材に付随して縦方向、あるいは横方向に断片的に設置されている。これら細めの材木の残存状況は良くなく、



第282図 河道1北岸構造材5 (1/30)

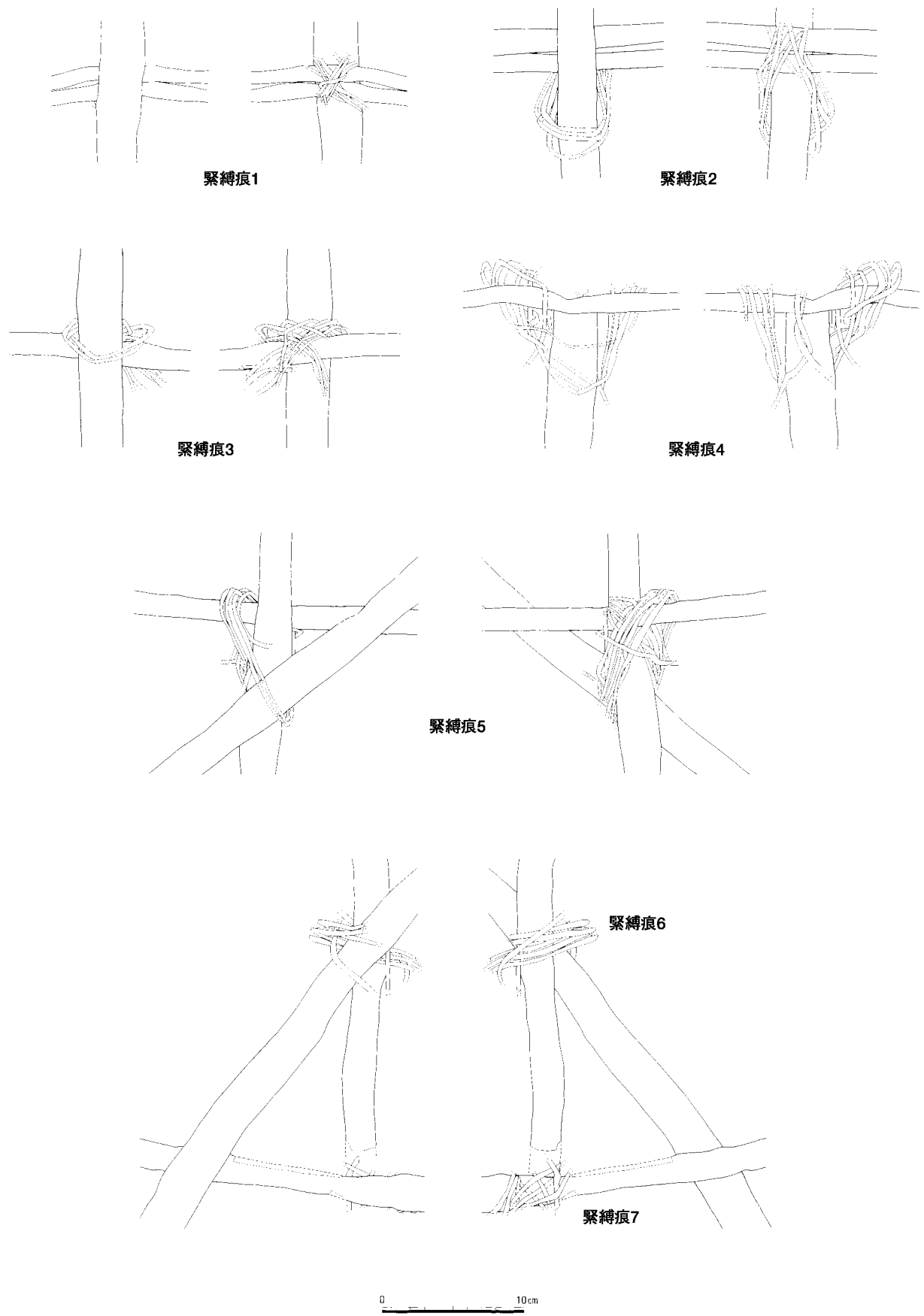
厳密にはこの構造材に伴うものであるかどうかも含めて検討を行う必要もある。このことを考慮した上で、材木の位置や特徴から、ここでは可能性のあるものを図示している。この細めの材木には、構造材1で使用されていたような細木に類似した材木もみられる。以下は推論であるが、構造材5は構造材1のような部材とあわせて使用された可能性もあながち否定できないのではなかろうか。また、構造材5が構造材1と大きさが近いことも、このことを傍証することができるのではなかろうか。

なお、構造材5では、部材同士を固定するための緊縛痕跡のようなものは検出されておらず、部材同士の固定方法は不明であるが、構造材6のように、部材の交差部分を蔓のようなもので縛って固定したものと推測される。また、構造材5の下位で約220×210cmの範囲で、シート状の植物質の有機物が検出された。構造材5を中心とする範囲でみられたが、構造材5に伴うものかは不明であるといわざるを得ない。灰像分析の結果、ススキ属の茎葉に由来する植物であることが判明しており、建物の屋根や壁を構成していた材料であった可能性が考えられる。なお、構造材5の材木をC14年代測定した結果、1790±60年BPとの結果を得た。



第283図 河道1北岸構造材6 (1/30)

構造材6は格子状に木材を組んだ部材である。構造材6は、構造材5



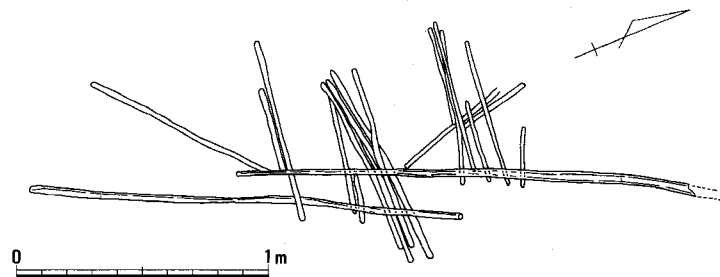
第284図 河道1北岸構造材6部材緊縛状況(1/4)

の下に位置し、河道1の遺物集積層の中でも最も下位で出土したものであり、良好な状態で残存していた。図示した構造材6のうち、上半部にのびる1本縦木とそれに伴う5本の横木は、構造材6に直接固定されていないため、これを構造材6として扱ってよいか疑問の余地もあるが、可能性を考慮して掲載しておく。その他の部材については蔓により緊縛されて固定されている。構造材6は図示したこの範囲で約230×220cmを測る。2本の横木に4列の木材が縦方向に取りつけられている。縦方向の部材は径2～3cmを測る丸太材を利用している。縦の部材の間隔は左から約35cm、約40cm、約30cmを測る。一方、横方向の部材は比較的細い木を利用しており、部分的には2本一組で構成されている。横木は縦方向の部材の下に位置している。横木の間隔は約70cmを測る。また、これらの部材の中央には筋違材(W136)が設けられており、2か所で緊縛されている。筋違材は横木の上位に位置しており、長さ約140cmを測る。この筋違材は先端を加工して頭部を作り出している。これらの部材のうち、4点について樹種鑑定を行った。その結果は、右から2本目の縦の部材がアカガシ亜属、右から3本目の縦の部材がスタジイ、上の横方向の部材がスタジイ、筋違材がアカガシ亜属の木材を使用していた。また、この部材の下からは植物性の有機質遺物がシート状になって出土した。構造材6に直接伴うものであるかどうかは不明であるがその範囲を図示しておく。

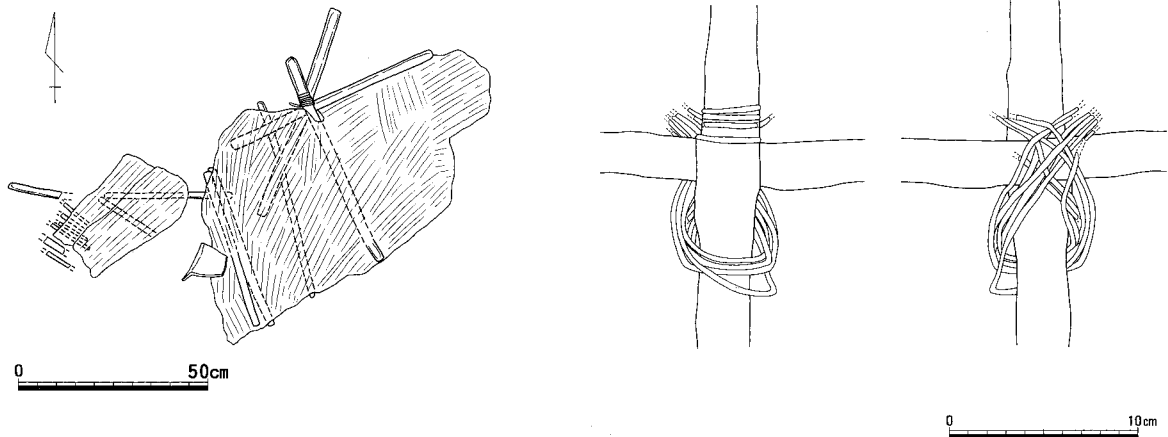
これらの部材は蔓による緊縛が行われており、その内のいくつかは良好な状態で検出された。蔓による緊縛が確認されたのは、横方向の部材2本と縦方向の部材4本が交差する部分の8か所と筋違材が縦方向の部材の交わる部分の1か所で計9か所であった。そのうち、2か所については残存状況が良くなく、良好な状態で取り上げることができなかった。また、残りの7か所については、その部分を木材から切断して取り上げ、裏面の土を取り払い、蔓の結び方を検討した。緊縛痕1は2本の横方向の部材と縦方向の部材を結んだものである。裏面では蔓が交差している部分が観察でき、最初に左上から右下に、次に右上から左下に縛り、最後に端部を蔓の下に潜らせて固定している。緊縛痕2は、緊縛痕1と同様に2本の横方向の部材と1本の縦方向の部材を固定している。上端部が欠損しているため、どのように蔓を部材に巻きつけているのか不明な点があるが、緊縛痕1とは異なった結び方である。緊縛痕3は裏面に土器片が存在しており、蔓が欠落した箇所があるが、蔓を「8」字状に交互に巻きつけている様子がうかがえる。緊縛痕4は「T」字状の部材を縛っているものと思われる。上半部が欠落しているため、詳細な緊縛方法は不明であるが、他の部材の緊縛にはみられない結び方である。緊縛痕5は筋違材の上端を固定したものである。上端部の裏面の保存状態が良く、3本の部材を縛っている。蔓を交差させて部材を固定している。緊縛痕6は筋違材と縦木を固定したものであり、部材を巻いただけの簡易な固定方法である。緊縛痕7では表面は大部分が欠損しているが、裏面では良好に検出できた。蔓は交互に巻かれており、緊縛痕3に類似した方法がとられているものと考えられる。

なお、この構造材6の部材のC14年代測定を行った結果、 1790 ± 60 年BPとの年代が明らかになった。

構造材7は河道1北岸の緩斜面で構造材2の南で出土した。構造材7は他のものに比べ低い



第285図 河道1北岸構造材7 (1/30)

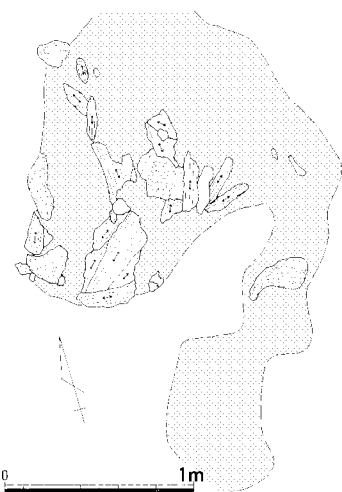


第286図 河道1北岸構造材8 (1/20)、緊縛状況 (1/4)

位置で出土しており、河道の流れの影響を受けているからか、残存状況はあまり良くない。2本の横木の下に直交する方向で、14本の縦木が伴う。構造材7の横木は長さ170~180cmを測る。縦木は長さ60~85cmを測る。径約2cmほどの細木である。これら14本の縦木はその大きさや特徴から、ちょうど構造材1で利用されていた細木と類似している印象を受けたため、これらの部材は何らかの有機的な関係を保っていると判断した。

構造材8は、構造材4~6の西側に位置する、「十」字状に組んだ材木を蔓で緊縛したものである。緊縛された部材は径3cmほどの丸太材であり、この交差箇所を蔓で縛っている。蔓は一部で欠損しているものの、おおむね緊縛方法が復元できる。蔓は裏面で交差しており、ちょうど「8」の字を描くように結ばれている。この構造材8の上部には植物質有機物がシートのように残存している。この有機物は灰像分析の結果、ススキ属の茎葉であることが判明した。植物の茎はある程度一定の方向に揃えられており、人為的に利用されたことをうかがわせる。建物の屋根等に利用されたのであろうか。また、構造材8西側の有機物の下には細木が平行に並んでおり、これらの有機物の部材に伴う材木である可能性が考えられる。

河道1北岸では植物質の有機物が多数出土した。これらの植物質遺物は脆弱であるため、すべてを



第287図 河道1植物質遺物出土状況 (1/50)

取り上げることはできなかったが、いくつかについては、サンプル採取し、記録した。植物質有機物は特に構造材4~6・8の部分で多く出土し、構造材に伴うと思われるものについては先述した。第277図の土層断面中にも多くの有機物が薄い層状に堆積していた。分析の結果、第2層から出土した白色有機物はイネ籾殻、第9層から出土した有機物はススキ属の茎葉に由来するものと判明した。また、第287図は約2.6×1.8mの範囲で藁のような植物繊維が集積している箇所がみられた。これらは一定のまとまりの中で繊維の方向が同じ向きでまとまっており、それとともに焼土が出土した。このように、河道1北岸では植物質の有機物が多く出土し、その一部は建物の屋根や壁に使用された植物材料である可能性も否定できない。これらは分析で判明した範囲ではススキ属やヨシ属の茎葉が多い。

河道1北岸出土木製品

河道1北岸の緩斜面上では多くの木製品が出土した。木製品は、先述した階段状遺構や護岸施設また構造材などが出土した層位と同じ層で検出され、これらとともに、農耕具や建築部材など様々な木製品が出土した。木製品の多くは破損または炭化しており、木製品をここに廃棄したものと思われ、全体的に雑多に廃棄された様相を呈する。しかしながら、廃棄行為のすべてが必ずしも無作為に行われたものではなく、その廃棄からはある程度の意図がうかがえるものもある。それは、北端で建築部材が集中して出土したり、ナスビ形農耕具（W19・20）が並んで出土したりしていることでも推察できる。いずれにしろ、この河道1北岸部は、基本的には日常で使用しなくなった農耕具・食事具・武具・建築部材などを廃棄した場であったと考えることができよう。

調査では、木製品のすべてを取り上げ、洗浄を行った。このうち、現地において、木に何らかの人為的な痕跡が認められたものについては遺物番号をつけ、出土位置を図面に記録して取り上げた。その数はおよそ900点にもおよんだ。その後、整理作業がすすみ、現地で木製品と確認できなかった木片の中にも製品が含まれていることが判明した。これらの製品を含めると表2に示したようにおよそ1,150点にもおよぶ木製品が出土した。それによると、木製品の大部分は杭などの土木用材や若干の加工を施した粗加工材、あるいは用途不明部材が大部分を占める。土木用材が多いのは河道1北岸の護岸施設に起因する部分が多い。その中で、農具や建築部材といった当時の生活を垣間見ることのできる資料も多く出土した。その他にも食事具や武器・武具類など様々な木製品が出土したが、祭祀具と考えられる遺物はわずかししか出土していない。

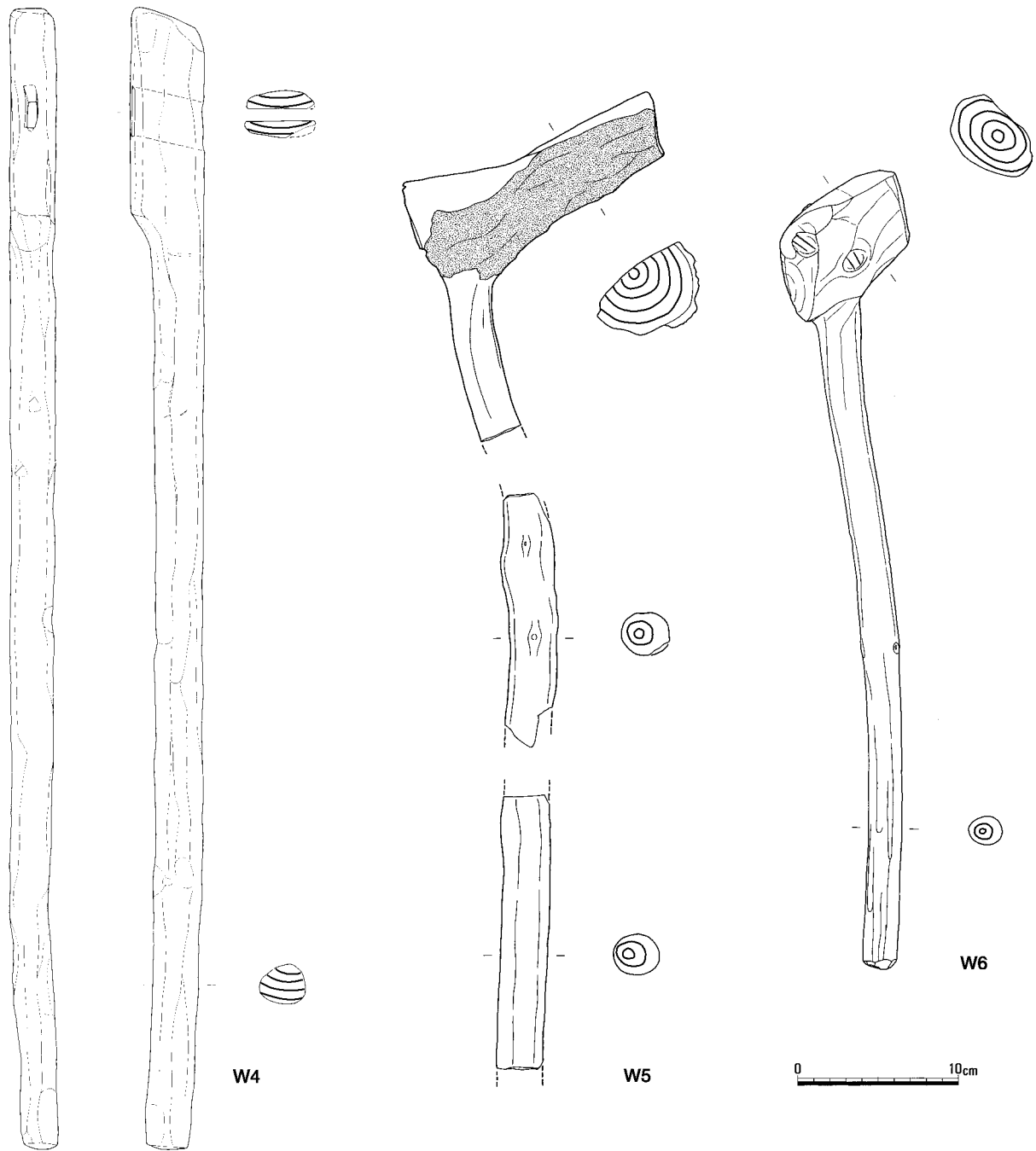
なお、河道1北岸で出土した木製品は、上面に3～4mにもおよぶ土砂が堆積していた。そのため、かなりの土圧を受けている。木製品の中には土圧により断面が押しつぶされ、変形していると思われる木製品も含まれる。以下、出土した木製品の形状にしたがって記述を進めるが、このような土中環境を考慮していただきたい。

木製品（第288～326図、巻頭図版7、図版63～72）

W4～11は斧柄である。河道1北岸では斧柄と考えられる木器が10点ほど出土しており、その内、直柄が1点で、その他はすべて膝柄である。W4は直柄の斧柄である。長さ70.7cmでほぼ完形である。木材にはクヌギ節に属する割材が利用されている。斧柄の握部は断面が径約3cmの円形に加工されているが、上から13cmの部分については断面が長方形に厚く削り残し、その中央にほぞ孔を設けている。ほぞ孔は長さ3cm、幅0.8cm、奥行き4.5cmを測る。ほぞ孔の中心軸は斧柄全体の中心線に対して、75°の方向に向いている。このほぞ孔には別に雇柄が装着されていたのか、あるいは、ほぞ孔の中に直接、板状鉄斧を装着していたのかについては不明である。W5～11は樹木の枝の分岐部分を利用したいわゆる膝柄の斧柄である。W5・6は比較的大型のものであり、W7～11は小型のものである。W5は未製品と考えられる。握部は欠損していたが、付近にW5と同一のものと思われる部材が出土しており、少なくとも、握部が42cm以上存在していたものと考えられる。斧台部は長さ16.5cm、幅7.1cmを測り、樹皮が部分的に残存している。装着部分は幹が半裁された状態のままでそれ以上の加工はなさ

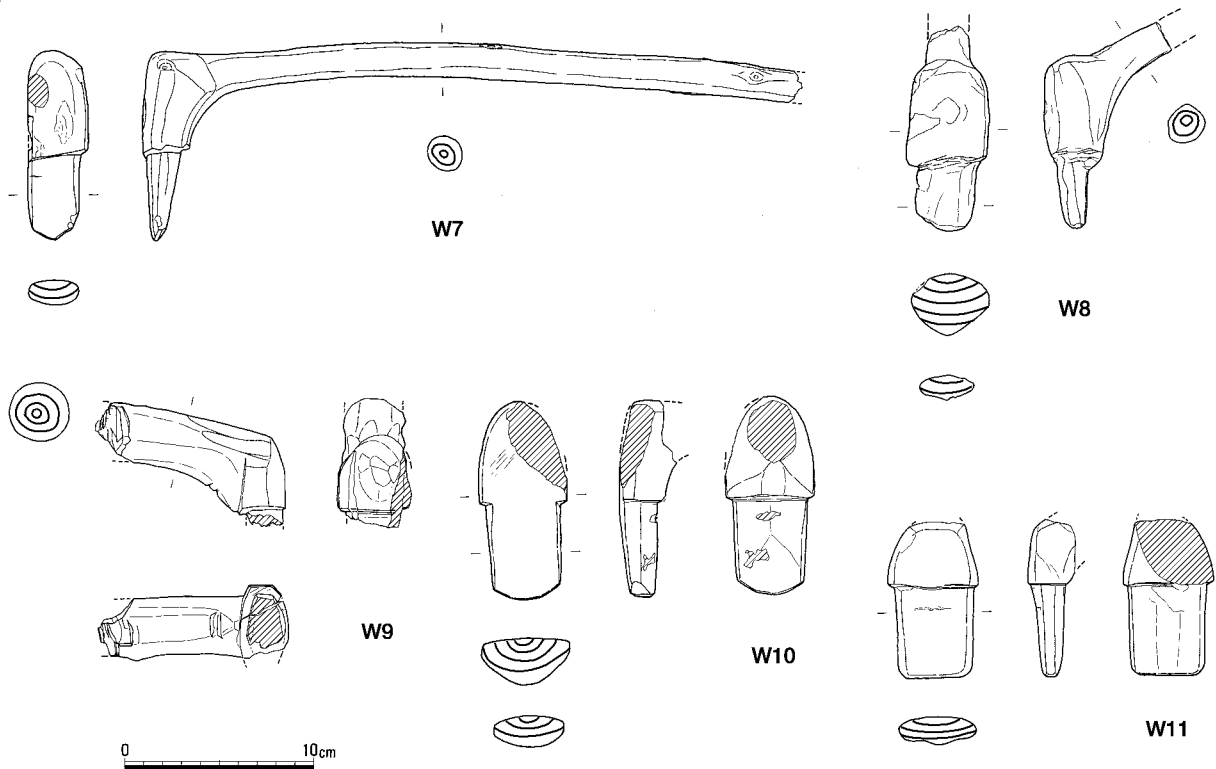
表2 河道1北岸出土木製品出土点数と割合

	北岸	割合(%)
工具	11	0.96
農具	81	7.04
漁具	8	0.70
武器・武具	21	1.83
容器	13	1.13
食事具	6	0.52
雑具他	24	2.09
用途不明部材	293	25.48
建築部材	77	6.70
土木用材	266	23.13
粗加工材	350	30.43
合計	1150	100.00



第288図 河道1北岸出土木器(斧柄)①(1/4)

れておらず、一部で火を受け、炭化している。斧台と握部の角度は約 105° を測る。これらの所見から、この木製品は未製品で、伐採後、若干の加工が施されたのち、廃棄されたものと考えられる。W6も膝柄の未製品と考えられるものである。完形であり、長さ49.6cmを測る。斧柄は全体的に加工が施されており、枝を切断した痕跡や幹の小枝を切断した際の工具痕が確認できる。斧の装着部は径約 6×4 cmを測り、両端を切断している。握部は径2.2cmを測り、一部で表面を削っている。幹と枝の角度は 115° である。W7は柄の一部が欠損しており、残存長34.9cmを測る。装着部は全長10cmを測り、下半部は上半部に比べひとまわり小さく、有袋鉄斧を装着したと考えられる。装着部と握部の角度は約 100° を測る。クヌギ節に属する木材を使用している。W8~11もいずれも有袋鉄斧を装着したと考えられる斧柄で、斧台のみが残存している。W8は柄を欠損している。柄と装着部の角度は 120°

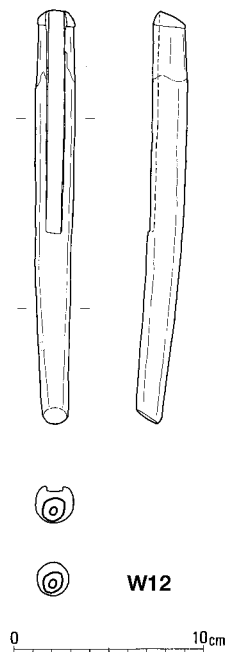


第289図 河道1北岸出土木器（斧柄）②（1/4）

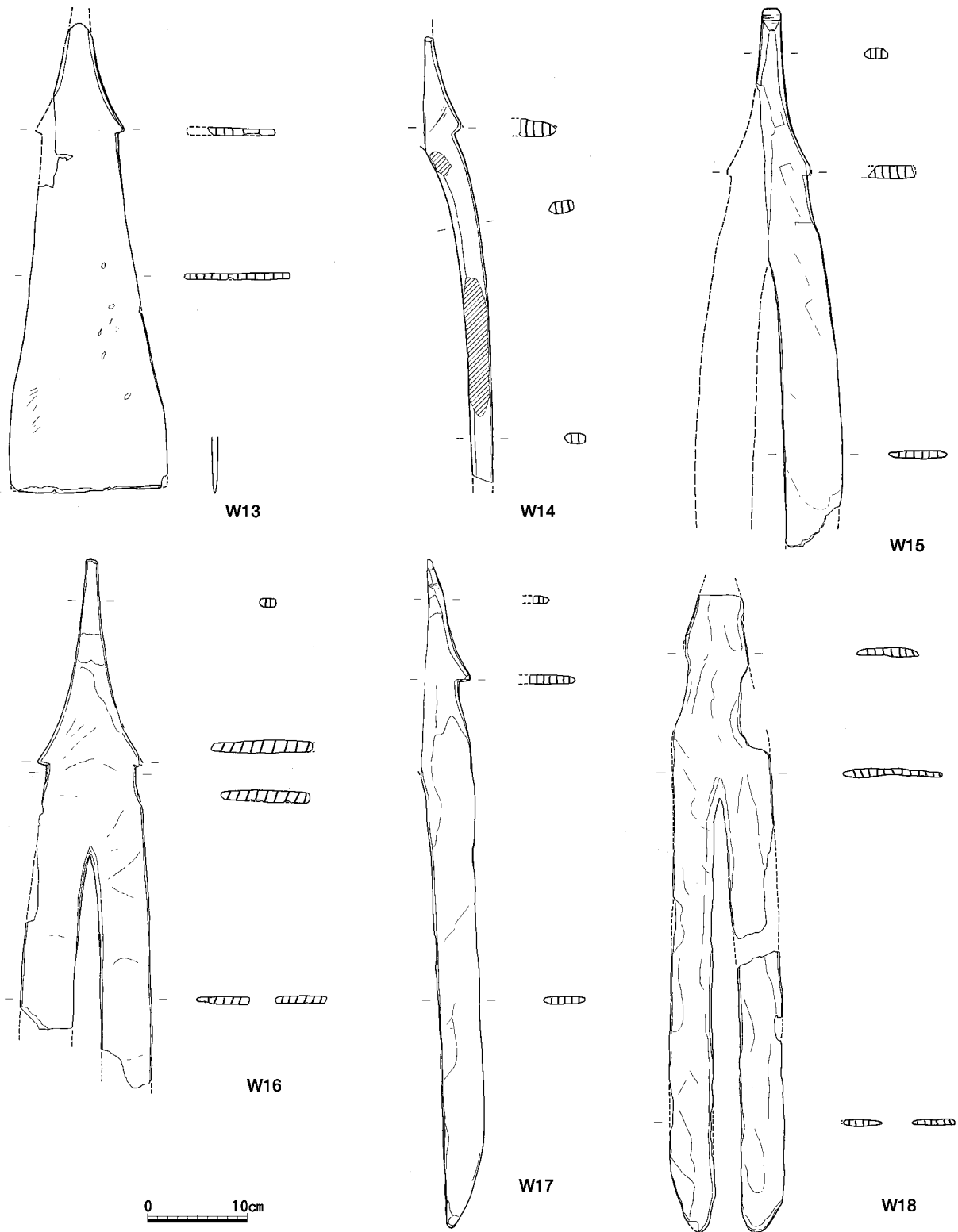
である。W9は装着部の先端部が失われている。柄の部分は人為的に切断された痕跡を残す。握部と装着部の角度は105°で、スギ材を使用して作成されている。W10とW11はともに握部がすべて失われている斧柄である。

W12は工具の柄と考えられる。柄は下端部に至るにつれ、幾分細くなっており、ゆるやかに反っている。柄の上端部は加工され、いわゆる有頭棒状の頭部が作り出されている。柄は中央に長さ11.6cm、幅0.9cm、深さ0.2cmの浅い溝が彫り込まれている。ヤリガンナ等を装着した工具の柄を想定している。材質はイヌマキの芯持材を利用している。

W13～22はナスビ形農耕具である。W13は平鍬、その他は又鍬である。W13は基部および笠部の一部が欠損している。残存長47.0cm、刃先は幅15.8cmを測り、形状は直線刃に近い。刃先には使用痕跡をしめす摩耗痕跡が少ないことから、あまり使用されないうちに廃棄されたものと推測される。材質はアカガシ亜属の柾目材を利用している。W14は又鍬である。又鍬先端部および基部が欠損し、また、左半部も欠損している。残存長44.4cmを測る。W14は他のナスビ形農耕具に比べ、厚みがあり、笠部で厚さ1.8cm、刃部で厚さ1.1cmを測る。刃部の断面は外側は平坦であるが、内側は「く」の字状に仕上げられている。W14は他の二又鍬と形態的に異なることから、三又鍬である可能性も考えられる。W15は二又鍬であり、刃先の先端と左半部を欠損している。残存長54.3cmを測る。基部では先端を斜め方向に切断した加工痕が残る。また、笠部の突起の下には蔓のような植物繊維で緊縛したような痕跡

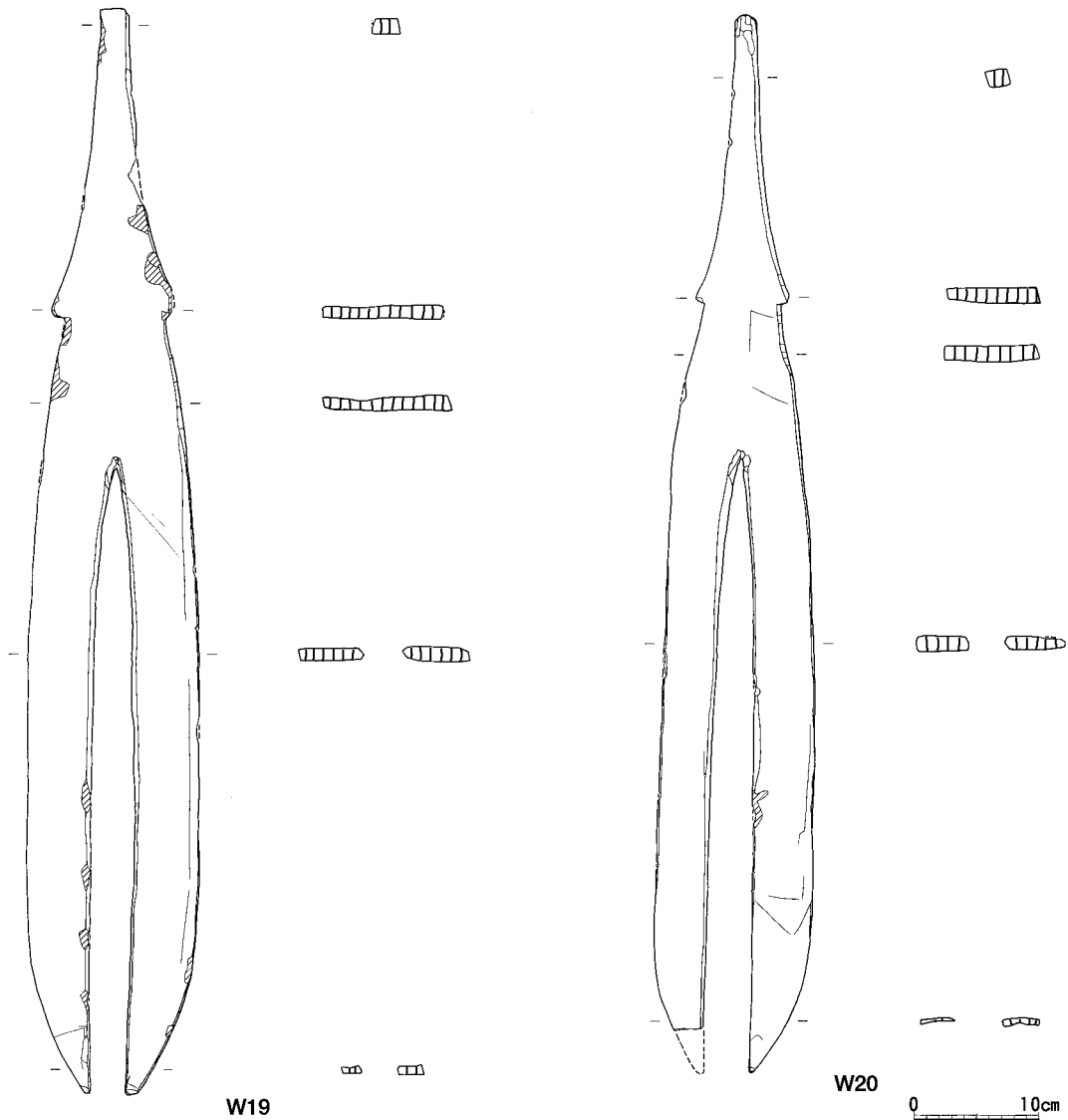


第290図 河道1北岸出土木器（柄）（1/4）



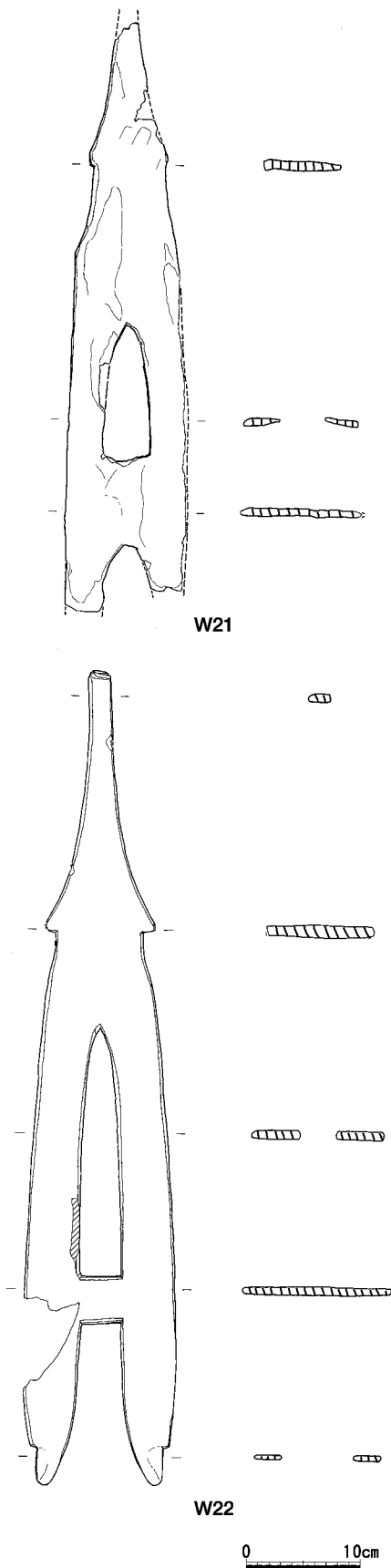
第291図 河道1北岸出土木器（ナスビ形農耕具）①（1/6）

が観察できる。W16は両方の刃先を欠損している。二又鋏で、残存長は52.8cmである。笠部の突起の下には緊縛痕跡が観察できる。材質はアカガシ亜属で、柾目材を使用している。W17も二又鋏と考えられる。残存長89.9cmを測る。基部の先端部が腐朽しているが、刃部は先端まで完存している。W18は全体的に腐朽し、残存状況はよくない。これは、W18が河道1の木製品の中でも高い位置にあった



第292図 河道1北岸出土木器（ナスビ形農耕具）②（1/6）

ため、地下水位の関係で、他の木製品に比べ腐朽しやすい環境にあったためと考えられる。残存長63.9cmを測る。W19・20はほぼ完形の二又鍬である。これらは河道1の北側斜面で並んで出土した。W19は一部欠損箇所があるものの、ほぼ完形で全長86.3cmを測る。W20は完形で全長84.1cmを測る。W19およびW20は両者とも使用された明確な痕跡がみられず、基部や刃部で使用による磨耗痕のようなものは認めにくい。また、笠部の下で通常は蔓で緊縛して使用する箇所についても製作当初の加工痕が残り、緊縛痕にみられる使用痕跡や磨耗痕跡は認めにくい。したがって、このナスビ形農耕具は製作されてまもなく廃棄されたものであると推測でき、ナスビ形農耕具製作直後の本来の姿を知ることができる資料といえる。材質はともにアカガシ亜属に属する柾目材が使用されている。W21とW22はいわゆる「透かし」をもつナスビ形農耕具である。W21は基部と刃先が欠損しており、残存長51.1cmを測る。透かしは二等辺三角形状を呈している。刃先の先端は欠損しているため、刃先の形状は不明である。W21は全体的に残存状況が良好でなく、表面の劣化が激しい。これはW18と同様に埋没後の土中環境によるものと考えられる。材質はアカガシ亜属である。W22は一部欠損している箇所があるものの、ほぼ全体を推測することができる。全長75.7cm、最大幅13cmを測る。刃先の先端には外側

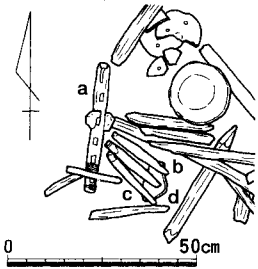


第293図 河道1北岸出土木器（ナスビ形農耕具）③ (1/6)

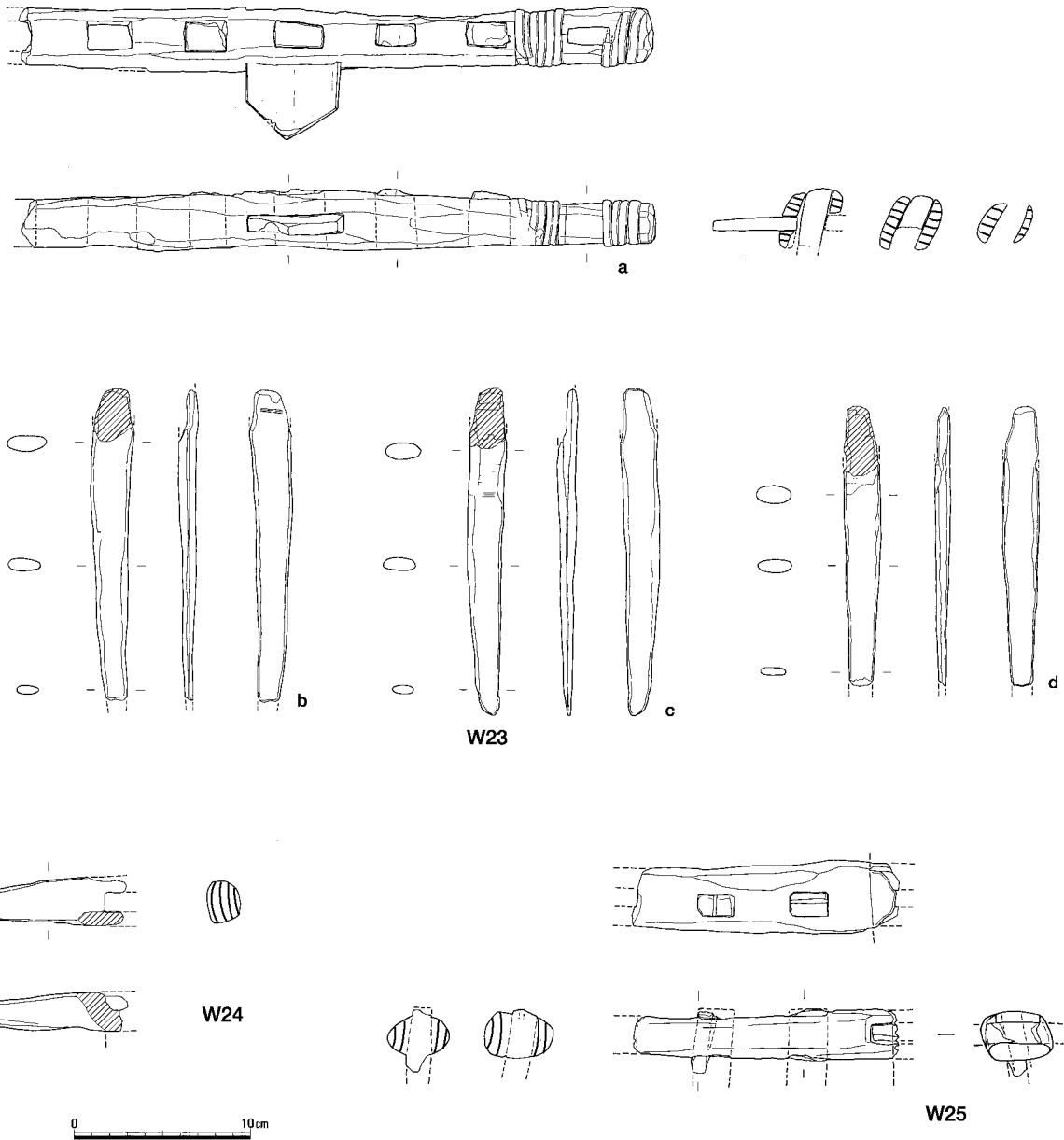
から内側へ一段彫り狭めている状況が両方の刃先で観察できる。これは鉄刃を装着した痕跡と考えられ、装着された鉄刃は、河道1が弥生時代後期後半に比定できることから、いわゆる長方形の鉄板の両端を折り曲げた方形板刃先であったと推測できる。これから、方形板刃先は長さ3cm以上、幅11.2cmのものが装着されていたことになる。W22は刃部の中央に二又の両刃をつなぐ橋のような構造をもち、その橋の上部には長さ21.3cm、幅3.6cmの細長い二等辺三角形の透かしが存在する。透かしは当初から透かしを意識して彫り込まれたというよりも、二又の刃先同士を連結したために生じたといった印象を受ける。鉄刃を装着したこともあり、土を掘削する際の衝撃に耐えられるように強度をつけるために設けられたものといえるかもしれない。W22は一部欠損しているものの、全体的に磨耗が少なく、それほど使い込まれている様子は認められない。W19とW20と同様に製作され、あまり使用されない段階で廃棄された可能性もあり、製作当初の姿をうかがい知ることのできる資料といえるかもしれない。アカガシ亜属の柎目材を使用している。なお、河道1の北岸では、この他にも5点のナスビ形農耕具と思われる又鋤の破片が出土している。

W23～25は直柄または鋤で一般に代掻きと称されているものである。W23は河道1北岸で台木と歯が分離した状態で出土した（第294図）。取り上げについては、W23の台木が出土した付近の木材を一括して取り上げ、W23aの台木に伴う可能性のある部材を個々に検討した結果、台木1本とそれに伴う歯を3本確認した。台木は残存長36.2cmで、幅3.3cm、厚さ3.5cmの割材を使用している。台木には歯を装着する箇所が7か所みられる。台木にはところどころにほぞ孔をあけるため事前に描いたと思われる割付線のような細線が観察できる。ほぞ孔には歯が4か所残存しており、その一部には歯が抜け落ちるの防止するためのくさびが打ち込まれていた。また、台木の右側では蔓による緊縛がみられ、破損した台木の補修を行ったものとみられる。柄は一部分だけ残存しており、先端部は三角形に仕上げられている。柄は台木中央の柄穴に差し込まれており、おそらく柄には方形のほぞ穴が穿たれており、上面から歯を差し込むことによって台木に固定されていたものと考えられる。

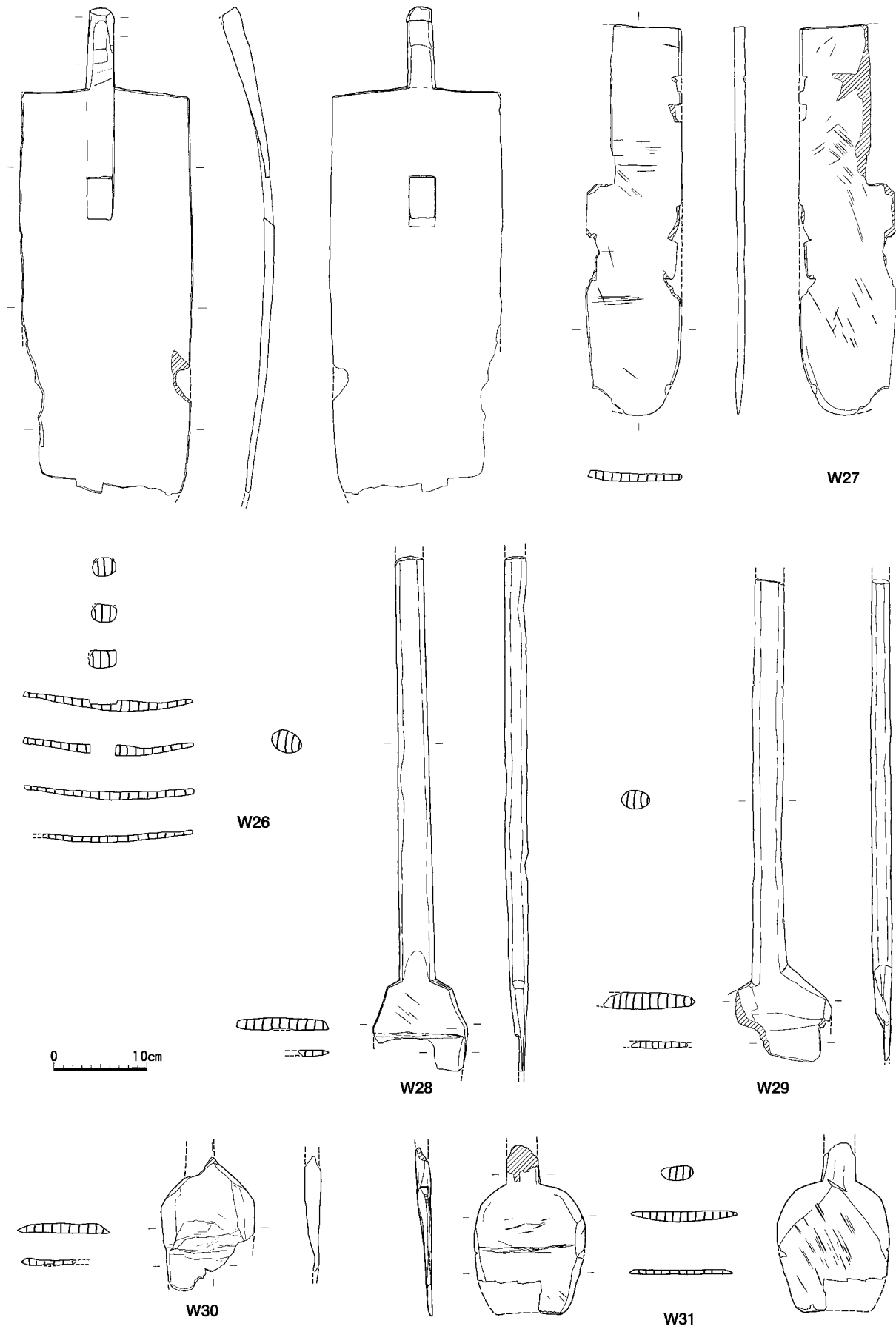
なお、台木についた柄と歯の装着角度は約100°を測る。歯は3本程度検出した。いずれも基部に相当する部分が磨耗している。大きさは全体がわかるもの(W23c)で長さ18.4cm、幅2.1cmを測る。横断面は楕円形をなす。使用により磨滅した感じを受ける。利用された材木は台木、柄、歯ともにアカガシ亜属であり、いずれも割材を使用している。W24は代掻き台部の端部と考えられる。残存長9cmを測る。台木は端部に至るにつれて、やや細くなっている。台木には1か所で歯を取りつけるほぞ穴が設けられているが、歯自体は残存していなかった。W25は残存長15.2cmを測り、代掻きの一部と考えられる。台木には2か所で方形のほぞ孔が穿たれている。左端部も欠損しているが、ほぞ穴の痕跡がみられる。また、右端部では歯が挿入されてほぞ穴と着柄のための柄穴がかろうじて観察できる。このことから、台木の右端部が本来



第294図 河道1北岸出土
代掻き検出状況
(1/20)



第295図 河道1北岸出土木器(代掻き)(1/4)



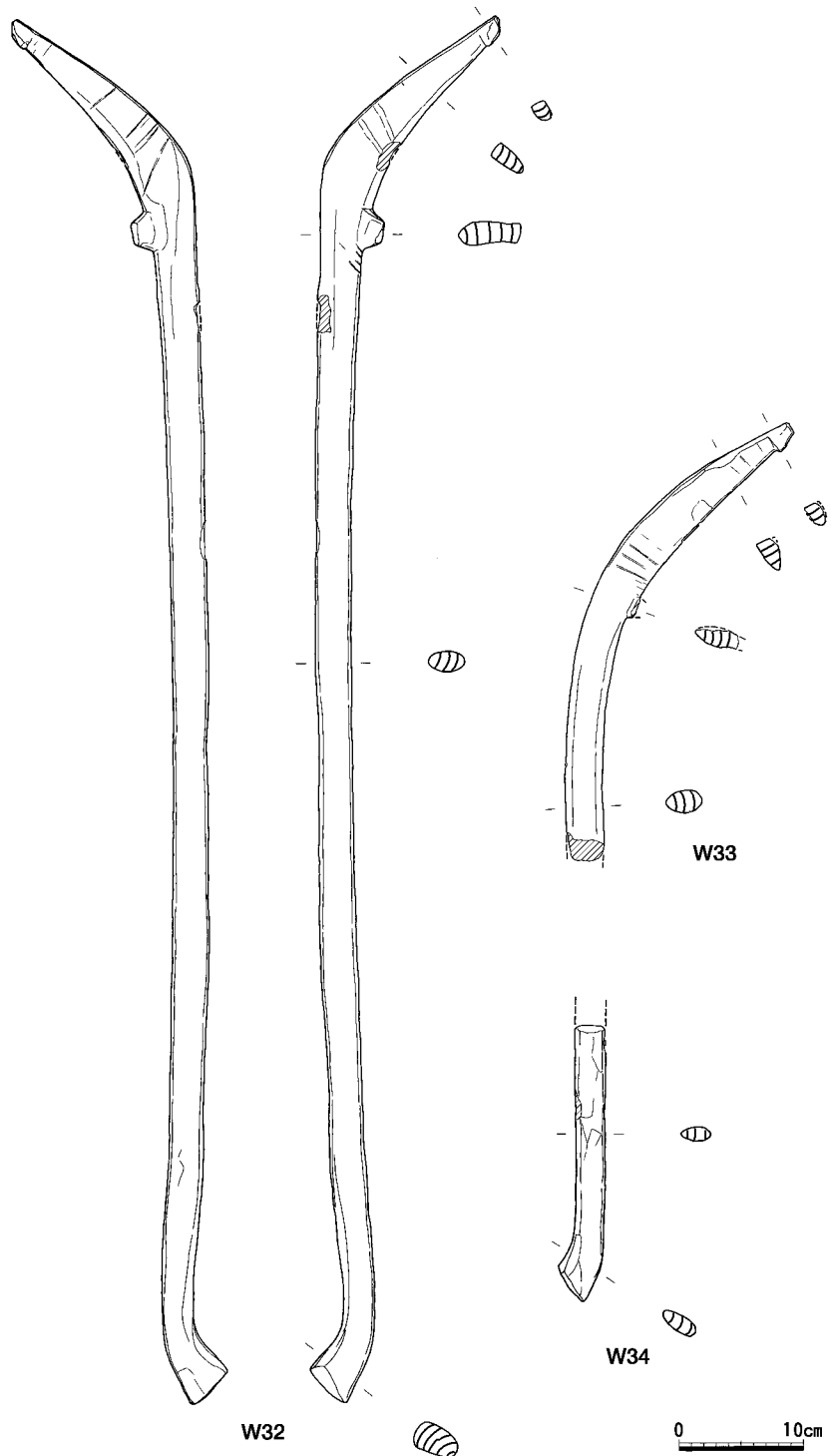
第296図 河道1北岸出土木器（鋤）（1/6）

は代掻きの中軸に相当すると考えられ、このことから復元すると、最低7本の歯が作り出されていたものと思われる。台木には歯を固定するため、くさびが複数打ち込まれている。歯と柄の角度は115°を測る。

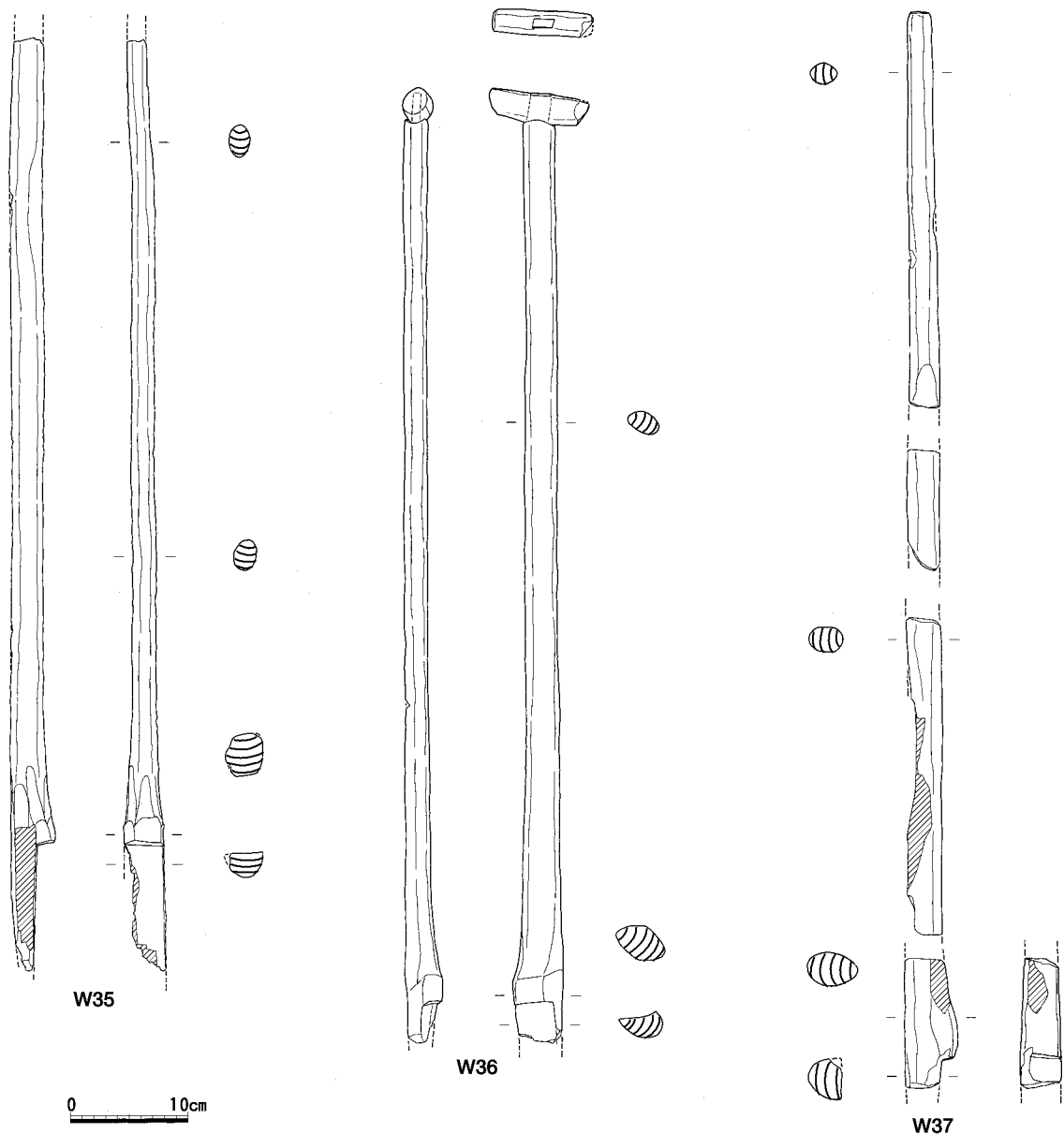
W26は組合式の鋤である。刃先が欠損しているが、残存長52.0cm、最大幅18.5cmを測る。鋤は軸から先端にいたるにつれ、ゆるやかに湾曲している。鋤の中央には柄を受けるために4.4×2.7cmの方形の柄孔が施されている。この孔から軸の方向に幅2.8cmの浅い溝（樋）が施されており、柄を装着するための装置と考えられる。

軸部は炭化しているが、軸の裏側は先端を加工し、軸頭を作り出している状況が観察できる。身は長さ43cm以上の大きなものであるが、刃先は欠損しており、倉敷市上東遺跡で発見された鋤のように、刃先に鉄刃を装着するタイプのものであったかどうかは不明である。柄にはW35～37にみられるような柄が利用され、軸部と柄を縛って使用したものと考えられる。アカガシ亜属の柾目材が利用されている。W27は全長41.8cm、残存幅10.2cm以上の板状の木製品である。表裏とも加工痕が残る。先端は「U」字形を呈し、刃を作り出している。したがって、この板状の木製品は先端に刃先をもつ農耕具のような製品の未製品である可能性が考えられる。柾目材を利用している。

W28～31は一木鋤でいわゆる掘棒と称されるものである。いずれのものも多少の相違はあるものの、類似した構造をもっている。柄



第297図 河道1 北岸出土木器（反柄）（1/6）



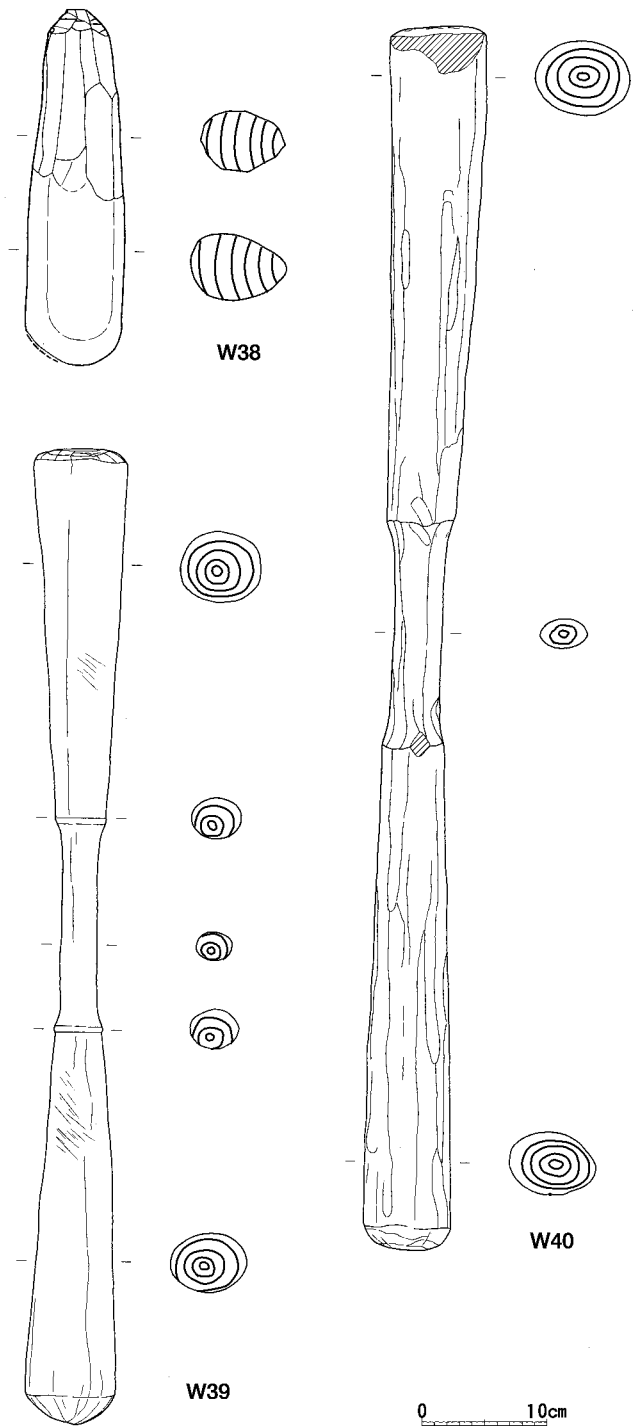
第298図 河道1 北岸出土木器（柄）（1/6）

が残存するものはW28とW29で、残存長でW28は55.0cm以上、W29で51.6cm以上を測る。ともに肩をはりだす身部をもつ。身部では両側の縁を斜めに加工し、刃を想起させる構造をもつ。身部は中ほどで段をなし、先端部が薄く仕上げられている。W28・29の先端部分は失われているものと考えられている。使用された木材はいずれもアカガシ亜属に属するもので、芯去材の割材を削り出している。W30とW31は柄の部分が失われている一本鋤の身部である。基本的な構造はW28・W29と類似している。W30は残存長14.4cm、W31は残存長18.0cmを測る。ともに柁目材が利用されている。W31はアカガシ亜属の木材を利用している。

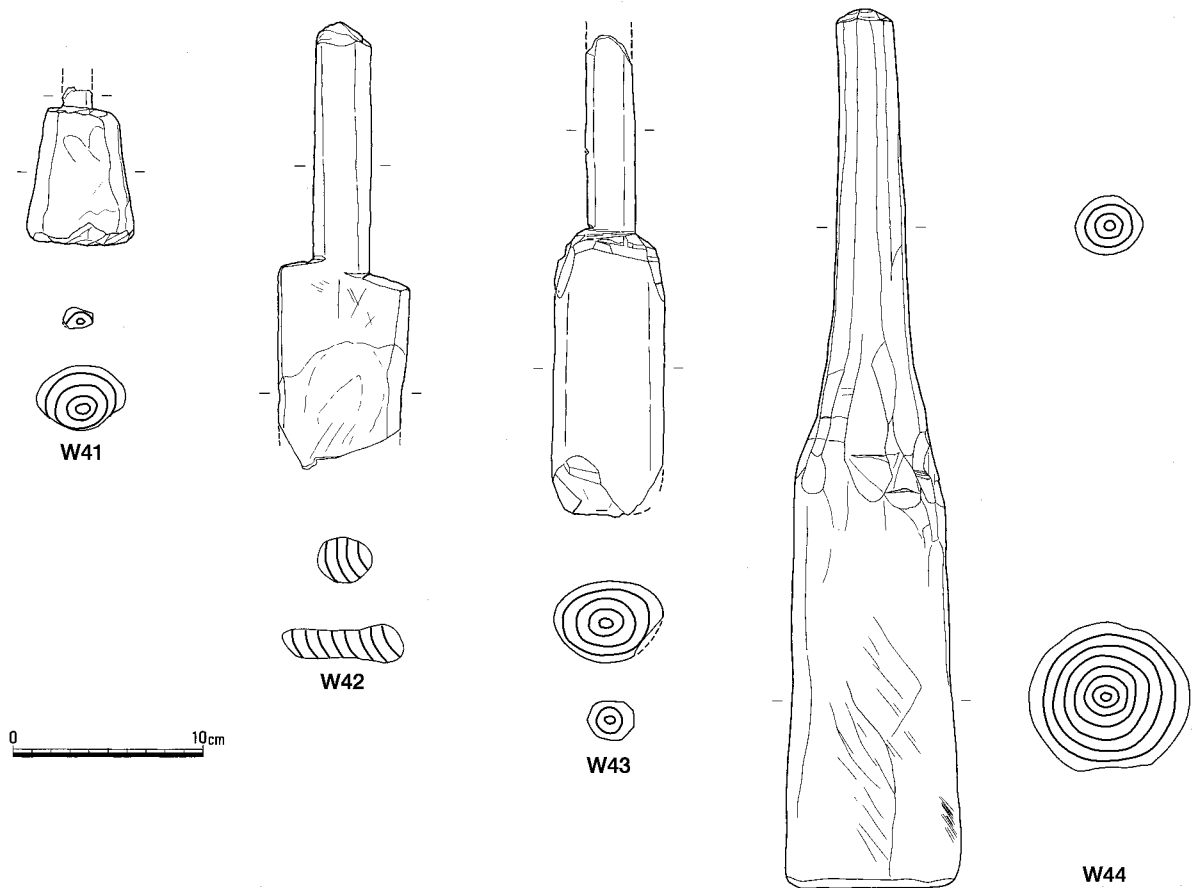
W32～34は反柄であり、いわゆるナスビ形農耕具と組み合わせて使用されたものと考えられる。W32は完形の反柄で、全長101.1cmを測る。材質はバラ科に属する木材を使用しており、樹木の湾曲した部分を利用したものである。反柄の鋤台部は、反りかえっており、その角度は約130°を測る。鋤台の上端部は先端部分がやや肥厚しており、鋤を固定するための紐かけを作り出している。また、握

部との境目に位置する箇所、台形状の突起が作り出されており、これも紐かけと考えることができる。鍬台の装着面は鍬台の先端部から約18cmにわたって削りだしており、平滑な面を作り出している。しかし、装着面は鍬台部の反りにしたがって、全体的に緩やかに湾曲しており、完全に平坦な装着面を形成していない。このように曲面を呈する装着面では鍬を着柄した時に緊縛以外に何か鍬本体を固定するための細工が必要ではないかとも感じられる。なお、鍬台部の側面にはわずかな痕跡ではあるが、紐による緊縛を示す圧痕が観察できる。紐の緊縛痕を参考にナスビ形鍬が装着されたと仮定すると、その装着角度はほぼ50°に復元できる。握部は長さ約96cmを測る。断面は楕円形で3×1.7cmを測る。なお、この断面形は土圧の影響で上下が圧縮されている可能性が否定できない。握り部の基部は「く」の字状に曲がる。握りにはとほころどころに使用による手ずれのような痕跡が観察できないわけではないが、微妙な凹凸のため、確定はできない。W33も反柄の鍬台部であるが、握部を欠損しており、残存長23.8cmを測る。鍬台は握りから緩やかに屈曲しており、鍬台部上端部には紐かけが存在する。また、装着面から反対側には下の紐かけに相当する突起が存在するが、突起自体は欠損している。装着面は鍬台の反りにしたがって、緩やかに湾曲しており、W32と同様にまっすぐな平坦面をもっているわけではない。鍬台側面には紐による緊縛痕がいくつか観察できる。この痕跡をもとに鍬との装着角度を復元すると約50°になろう。W34は反柄の握部の基部と考えている。W32と比較し、やや細めではあるが、W32と同様に端部が折れ曲がることから、反柄の一部と判断した。残存長21.9cm、握部は径2.4×1.1cmを測る。

W35～37はW26にみられるような組合鋤に装着されたと考えられる柄である。W35は残存長78.8cmを測る。一部炭化しているものの、残存状況は良好である。着柄部は柄の先端を削り、幅約3cmの平坦面をつくり、装着面としている。芯去材の割材を使用している。W36は残存長80.8cmを測る。先端



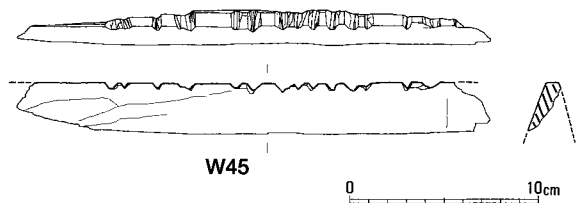
第299図 河道1北岸出土木器（竖杵）(1/6)



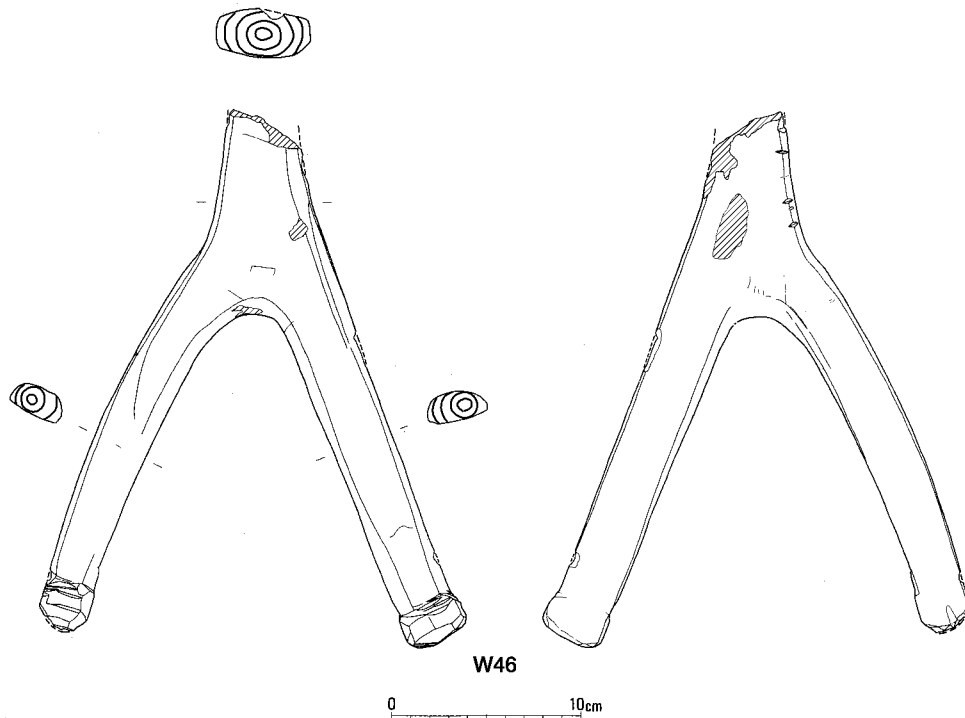
第300図 河道1北岸出土木器（横槌）（1/4）

に装着部をもつ。W36は柄に把手が作られている。把手は「T」字形をなし、棒状の先端を加工し、断面方形のほぞを作り出し、横木のほぞ穴に差し込んでいる。柄の着柄部の残存状況は良くないが、W35と同様の構造をしていたものと考えられる。材質は柄、横木ともにアカガシ亜属に属する割材が使用されている。W37はいずれも破片であるが同一個体と考えられ、最低81.5cm以上の柄が想定される。装着部はW35と同様に柄を削り、装着面を作っている。歪んでおり残存状況は良くない。芯去材の割材を使用している。

W38～40は堅杵である。W38は堅杵の転用品と考えられ、残存長28.1cmを測る。堅杵の搗き部は丸く、摩滅痕跡がみられる。W39は完形の堅杵であり、全長71.1cmを測る。残存状況は良好で、丁寧な仕上がりである。搗き部端部は上面部分がやや平坦になっているのに対し、他方は丸く仕上げられており、ともに摩滅痕跡がみられる。この形態の差は端部の機能による違いを反映している可能性が考えられる。搗き部と握り部の境には若干段をなし、削り出しによる低い突帯のようなものが巡っている。この部分には「けびき」線のような細線がみられる。材質は芯持材で、ツバキである。W40も完形の堅杵で長さ97.0cmを測る。W39と同様に両端近くで径が最大になるタイプの堅杵である。搗き部端部の上端は平坦で、下端はやや丸い。材質はツバキであり、芯持材を利用している。



W41～44は横槌である。W41は残存長8.4 第301図 河道1北岸出土木器（編台目盛板）（1/4）



第302図 河道1北岸出土木器（編台）（1/4）

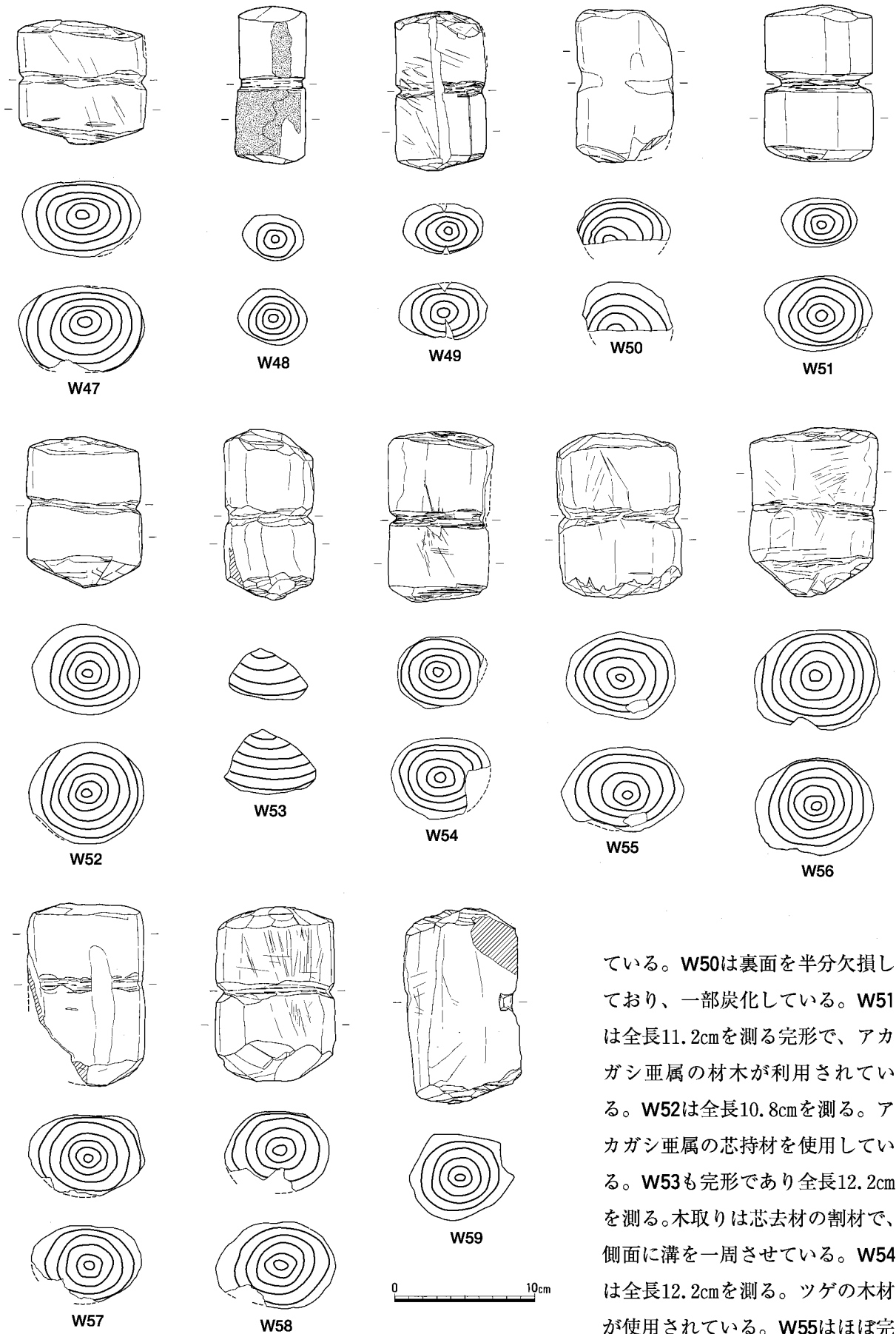
cmで、その形態から横槌としたが、横槌として何かを敲打するには小さく、その用途については不明である。W42は敲打部が一部欠損しているが、残存長23.5cmを測る羽子板状の木器である。敲打部では使用により摩滅した痕跡がみられる。W43は残存長25.4cmを測る横槌である。工具による加工痕がみられる。W44は全長46.4cmを測る完形品である。全体的に粗雑な印象をうけ、柄等に加工痕跡を残す。身の一部に擦痕を残しているが、全体的にそれほど使いこなされているとは思われない。芯持材を削り出している。

W45は編台目盛板と推測される木製品である。欠損しており、残存長25.1cmを測る。断面形は台形を呈し、上端幅で0.7cm、下端部は欠損しているが最低でも2.5cmを測る。上端部には長さ18cmの間に14か所の刻みがある。刻みは接している箇所もあるが、最も間隔のある場所で1.9cmを測る。刻みには使用痕や摩耗痕跡を明確には観察することができない。使用されている木材は割材を削り出したヒノキである。

W46は脚が二股に開いている木製品で、編台の可能性を考えた。編台は樹木の二股にわかれている箇所を利用しており、頭部に相当する部分が一部欠損しているものの、残存長28.4cm、幅22.6cmを測る。編台の脚の表面は自然面を利用して加工しているが、裏面は自然面を削り取り平坦面を作り出している。二股の先端部はいずれも突起の加工が施されている。ヤマグワを利用している。

W47～59は木錘である。大きさは長さ8.9～13.9cmを測る。すべて、円柱状に加工した木材の側面全体に細い溝を一周させるタイプの木錘である。木取りは大部分が芯持材を用いて加工しているが、中には芯をもたない割材を加工した木錘も存在する。木錘の樹種はすべてを鑑定することができなかったが、アカガシ亜属、ツゲ、ヤマグワ、イスノキなど多様な材木が使用されているようである。

W47はアカガシ亜属の芯持材を利用している。全長8.9cmを測り、全体に加工痕跡を残す。W48は全長11.3cmを測り、表面には一部に樹皮が残存している。W49は全長11.4cmを測る。一部に火を受け



ている。W50は裏面を半分欠損してあり、一部炭化している。W51は全長11.2cmを測る完形で、アカガシ亜属の材木が利用されている。W52は全長10.8cmを測る。アカガシ亜属の芯持材を使用している。W53も完形であり全長12.2cmを測る。木取りは芯去材の割材で、側面に溝を一周させている。W54は全長12.2cmを測る。ツゲの木材が使用されている。W55はほぼ完形の木錘であり、全長11.9cmを測

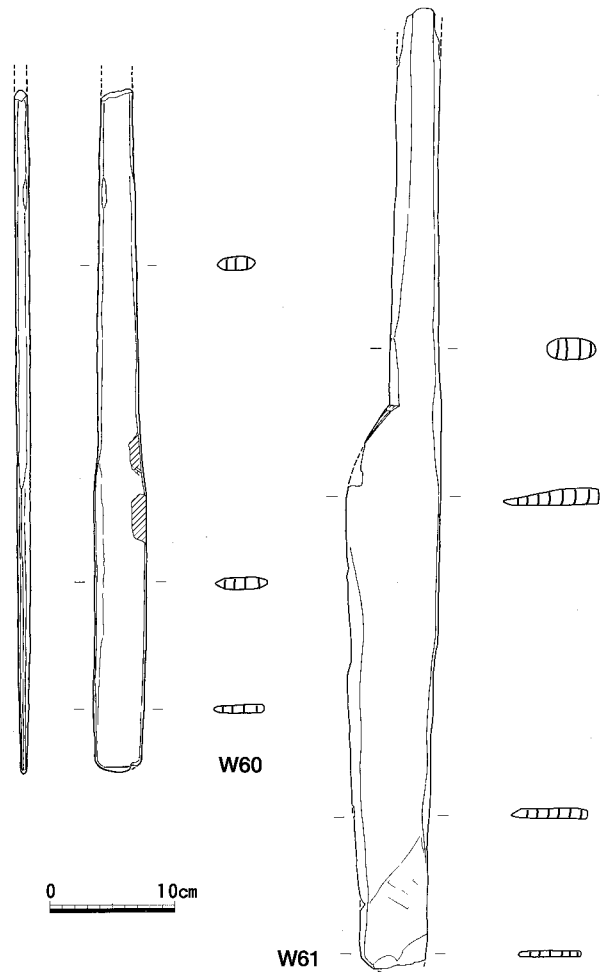
第303図 河道1北岸出土木器（木錘）（1/4）

る。横断面の中心よりやや下の位置に自然により形成された間隙が通っている。木材はヤマグワを利用している。W56も完形で全長12.1cmを測る。残存状況は良好で、イスノキを利用している。W57は一部欠損しているが、全長13.0cmを測る。W58は一部欠損しているが、全長11.2cmを測る。W59は完形で長さ13.9cmを測る。中央部に1か所だけ溝状のくぼみがみられる。通常、木錘には中央に溝が巡るのが一般的ではあるが、この木製品については溝が一部にしかみられない。木錘とは別の用途に使用された可能性が否定できないものの、ここでは木錘の未製品の可能性も考慮してここに掲載する。

W60・61は薄い身部に柄のついた木製品であり、ここでは漁具の櫂の可能性があるので、櫂として報告する。ただし、確実に櫂として使用されたとする根拠には乏しく、その他の用途に使用された可能性もあることを述べておく。W60は柄の一部を欠損しているが、残存長54.0cmを測る。身部分は長さ24cm、幅4.1cmを測る。身の部分の断面は左右両端が

薄くなっている箇所がみられ、刃を意識して作っているようであるが、身の一部にみられる程度で全体には作り出されていない。柄は断面が薄い楕円形を呈しており、幅約3cm、厚さ約1.1cmを測る。柄は土圧による影響で圧縮され薄くなっている可能性があるものの、当初から柄の断面形は楕円形に近いものであったと考えられる。アカガシ亜属に属する木材を利用して作られている。W61は柄と身部の先端を欠損しており、残存長75.9cmを測る。この木製品はちょうど片関の刀子を大きくしたような形状をもつ。柄から左側で幅を広げ身部に至る。身部の左側には刃が作り出されているが、右側については刃は作り出されていない。身部の最大幅は7.5cm、厚さ1.3cmを測る。なお、先端の形状は不明である。

W62～64は網枠である。W62は接合しないが、同一個体と考えられる。いずれも柁木で網を留めるための装置を削り出しており、穿孔が施されている。W62 aは残存長31.5cmで8か所の、W62 bは残存長19.3cmで5か所の、W62 cは残存長52.2cmで12か所に穿孔がみられる。W62 cは先端部でやや湾曲し、先端部は加工され、頭部を作り出している。W62 cの下端から1つ目の孔付近には網を緊縛したために生じたと思われる磨滅痕跡がみられる。芯持材の細木を利用している。W63も同様に柁木の縁を加工し、穿孔を施している。穿孔は残存している箇所では10か所施されている。穿孔は単孔のものが多いが、中には2つの孔が近接して設けられている箇所がある。芯持材を削り出して作られている。W64は先端から欠損しており、残存長約64.3cmを測る。網を装着したと思われる箇所は約50cmが残存

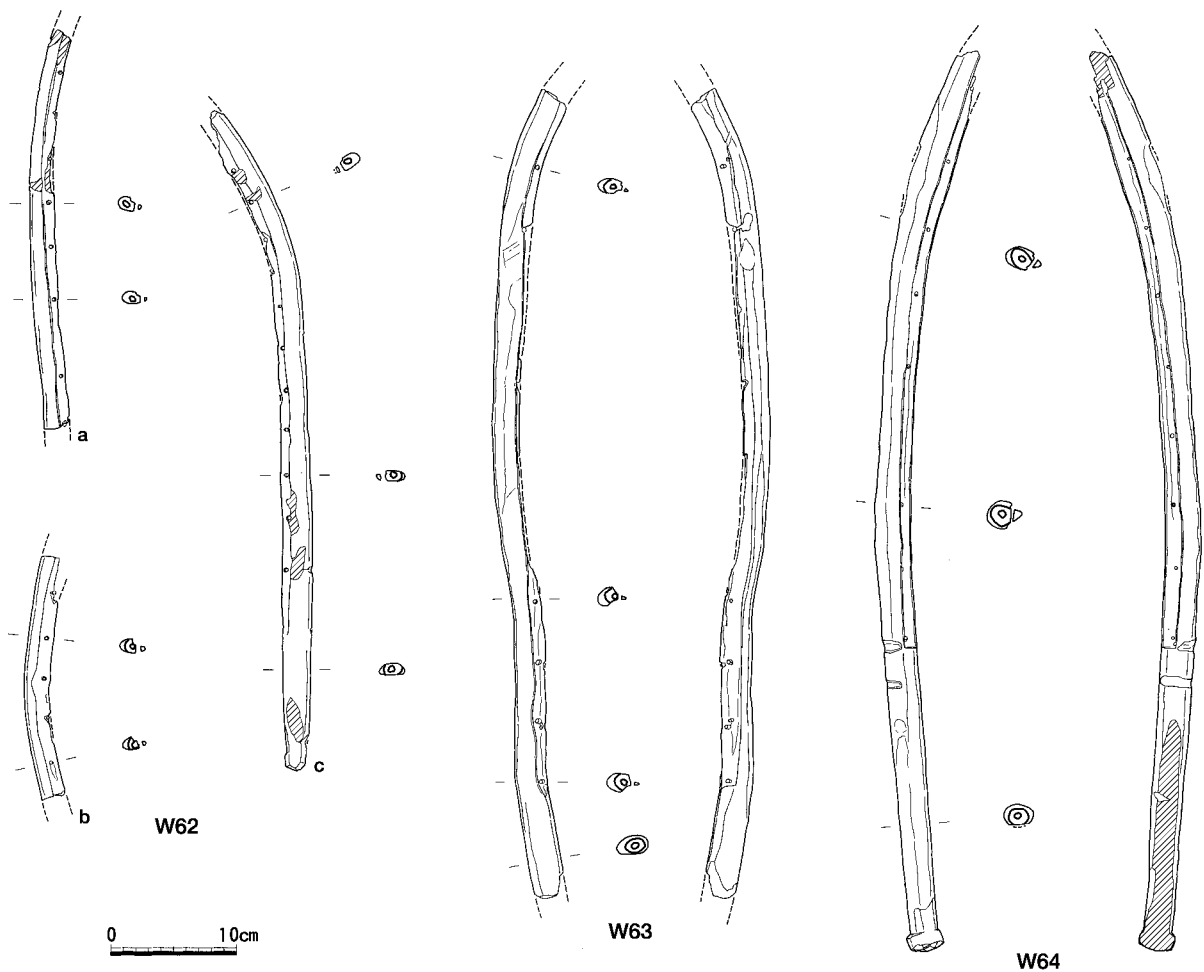


第304図 河道1北岸出土木器（櫂）(1/6)

しており、約5.5cmの間隔で穿孔が施されている。下端部は有頭状に削り出されている。下端部から21~24cmの間では、網を固定するための使用痕と考えられる磨耗痕跡がみられる。カヤの芯持材を使用している。

W65・66は把装具と推測できる。W65は把縁に相当する部分は欠損しているが、残存長6.6cmを測る。把は把間から大きく幅を増し、扇状に開き、最大幅4.2cm、最大厚1.7cmを測る。把には2か所に穿孔が施されている。1か所は柄の上部に位置する。この箇所は剣身を固定する装着部が、残存状況は良くないが観察できる。装着部は茎が挿入される部分を削り取っている。茎は上から差し込むように装着され、目釘で固定されたものと考えられる。二つ目の穿孔は把の中央部分に設けられている。孔は剣身の装着とは無関係で、紐のようなものを通していたのかもしれない。W65は全体が黒漆（未同定）で覆われていた。使用された木材はムクノキであり、芯持材を利用して製作されている。W66は用途不明であるが、W65と同様に把に相当する木製品ではないかと考えられる。柄は残存長2.8cmを測り、一部欠損している。把の中央と上端部の2か所に穿孔が施されている。W66は白木のままでW65のような漆等は施されていない。

W67は詳細な用途を特定できていないが、その形態から鞘装具の一種ではないかと考え、以下の記述を行う。W67は背部が割れて欠損していると思われる以外はほぼ完形で、全長32.5cm、最大幅3.9cmを測る。鞘口と鞘尻の箇所に対応する部分は鞘間に比べ、幅を増し、曲線による装飾が施されている



第305図 河道1北岸出土木器（網杵）(1/6)

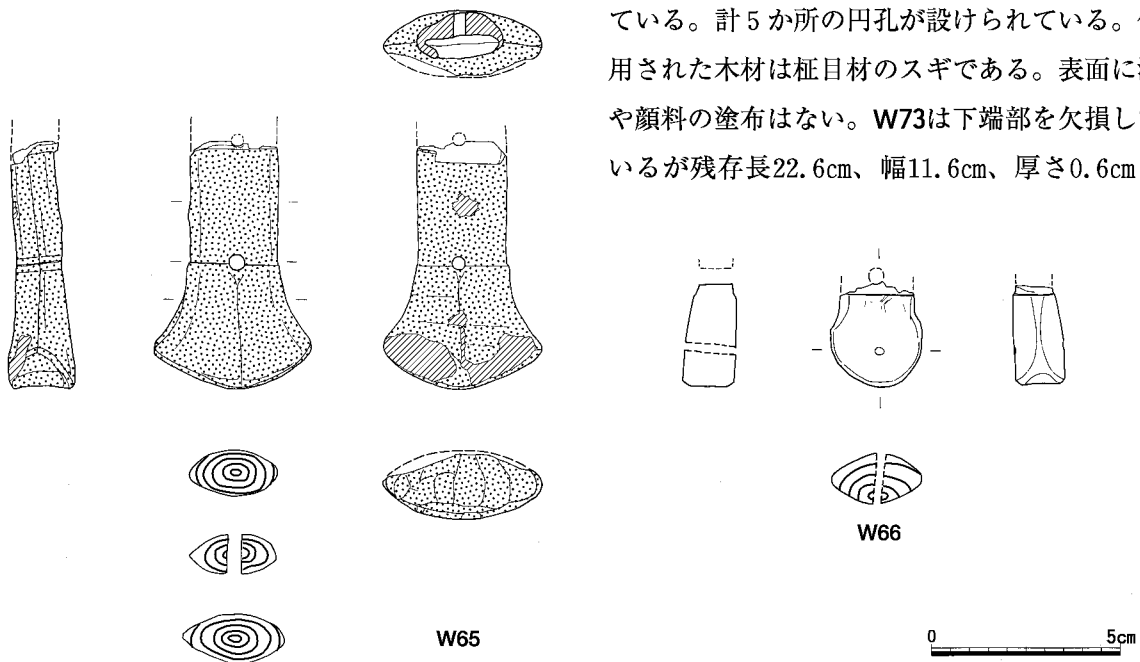
る。表面には若干の加工痕を残すものの、全体的に丁寧な仕上がりであるが、漆や顔料の痕跡は観察できていない。W67の断面は鞘尻付近では方形をなすものの、その他の付近では「く」の字状をなしており、「V」字状の溝が削り抜かれている。W67が鞘であるとするれば、この木製品は刃の片面を覆う部分のみで、背部を覆う箇所はまた別にあったものと推測せざるを得ない。仮に劍鞘を想定すれば長さ25cm以内の劍が想定できる。材質はヒノキであり、割材を削り出して製作されている。

W68は弓の弣部分^{ゆば}と考えられる木製品である。先端を薄く削り出して凸状の弣を設けており、残存長2.7cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmを測る。弓幹部分は径2.3×1.5cmの芯持材で、アカガシ亜属の木材が使用されている。

W69~71はいずれも棒状の製品であるが、表面に漆等が施されており、丁寧に仕上げられている。これらの木製品の用途は、単純な形態であり、不明といわざるを得ないが、弓の可能性を考えている。したがって、ここでは弓と仮定して記述を行う。W69は残存長13cm、径2.5×1.1cmを測る。芯去材を使用している。表面には漆が施されていたため、分析を依頼し、付載にその報告を掲載している。それによると、W69は全体にわたって均一な鉱物粒子が石目状に蒔かれ、朱漆が施されていた。W70は残存長39.1cm、径2.9×1.8cmを測る。材質は芯去材のマテバシイが利用されている。W70は下端から15cmのところ、漆状況が変わっており、この部分から下^{ゆば}を弣、上を弓幹部と仮定して記述を行う。この弓幹と弣部分に塗布された漆等については分析を依頼しており、付載にその報告を掲載している。それによると、W70の弣部分では石英主体の砂礫を全体に均一に蒔き、黒色漆、朱漆を塗って石目塗状にしている。また、弓幹部では木胎の上に2層の黒色漆が施されている。W71は残存長60.6cm、径2.5×1.8cmを測る棒状の木製品であり、全体に黒漆（未同定）の塗布がみられる。材質はスタジイの芯去材を利用している。

W72・73は板材に孔を設けた木製品である。詳細な用途は不明であるが、小札の可能性があり、以下、小札として記載を行う。W72は下部を欠損している。残存長10.8cm、幅5.1cmである。板状の木

製品の断面形は縁の部分が中央に比べ薄くなっている。計5か所の円孔が設けられている。使用された木材は柾目材のスギである。表面に漆や顔料の塗布はない。W73は下端部を欠損しているが残存長22.6cm、幅11.6cm、厚さ0.6cmを

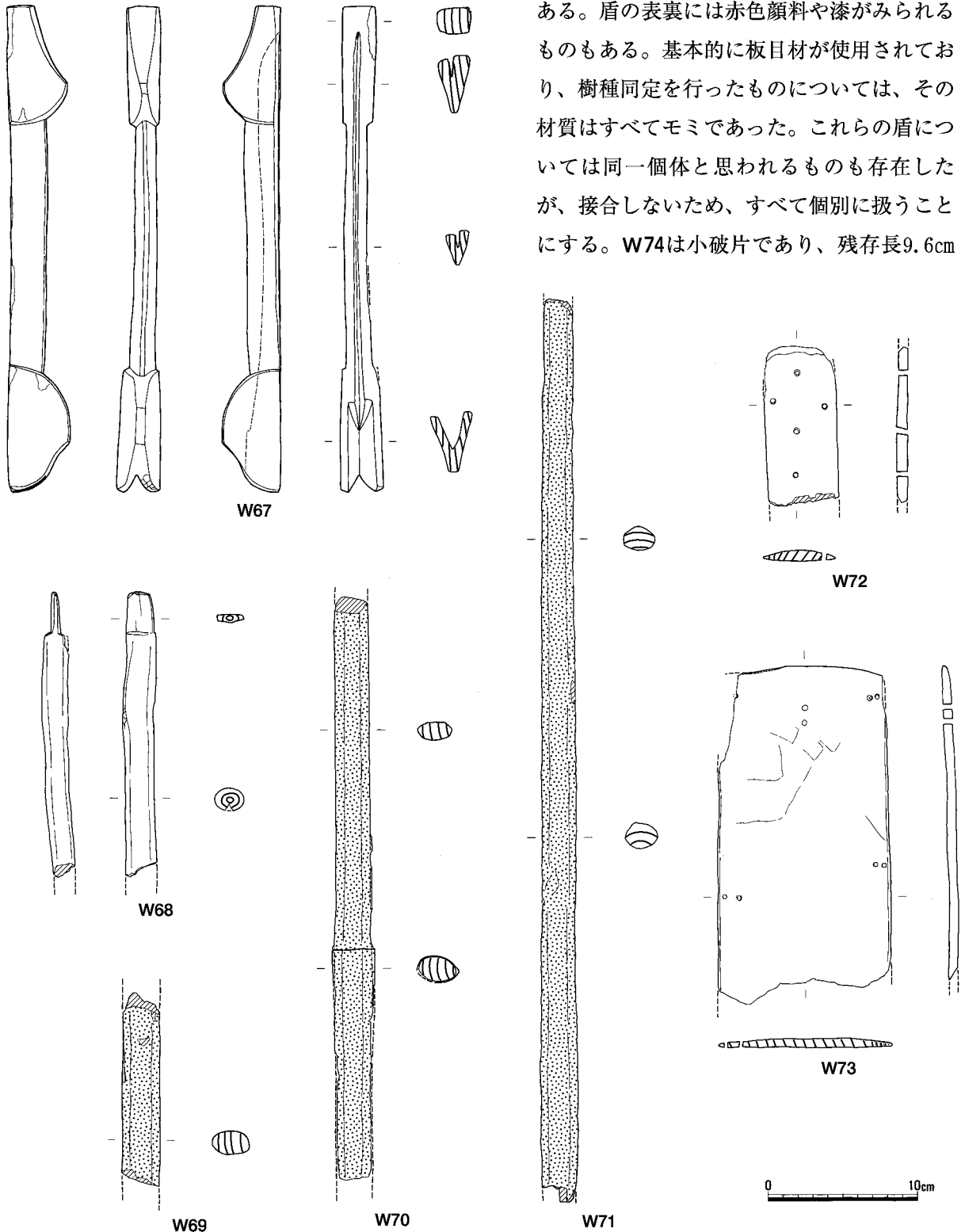


第306図 河道1北岸出土木器（柄頭）（1/2）

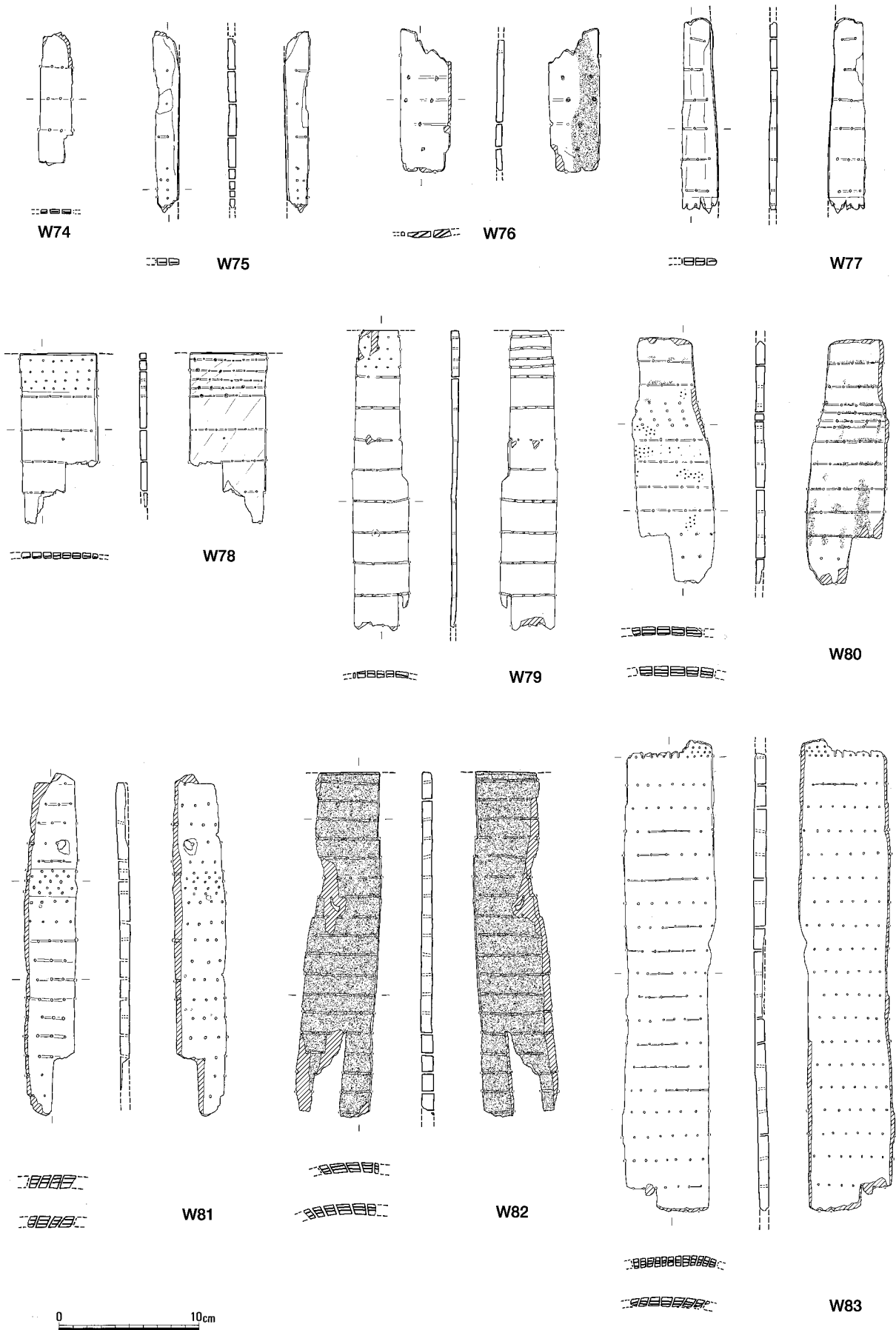
測る。材質はコナラ節に属する柎目材を利用しており、表面には孔が施されている。孔は二つの穿孔が一对となって、板材の周縁部に4か所（孔計8か所）と中央に1か所（孔計2か所）穿孔されている。漆や顔料の付着および紐等の装着痕跡は確認できなかった。

W74~83は木製の盾である。すべて板材で表裏に列をなして、多数の小孔がみられるタイプの木盾

で、いわゆる「紐列式木盾」に属するものである。盾の表裏には赤色顔料や漆がみられるものもある。基本的に板目材が使用されており、樹種同定を行ったものについては、その材質はすべてモミであった。これらの盾については同一個体と思われるものも存在したが、接合しないため、すべて個別に扱うことにする。W74は小破片であり、残存長9.6cm

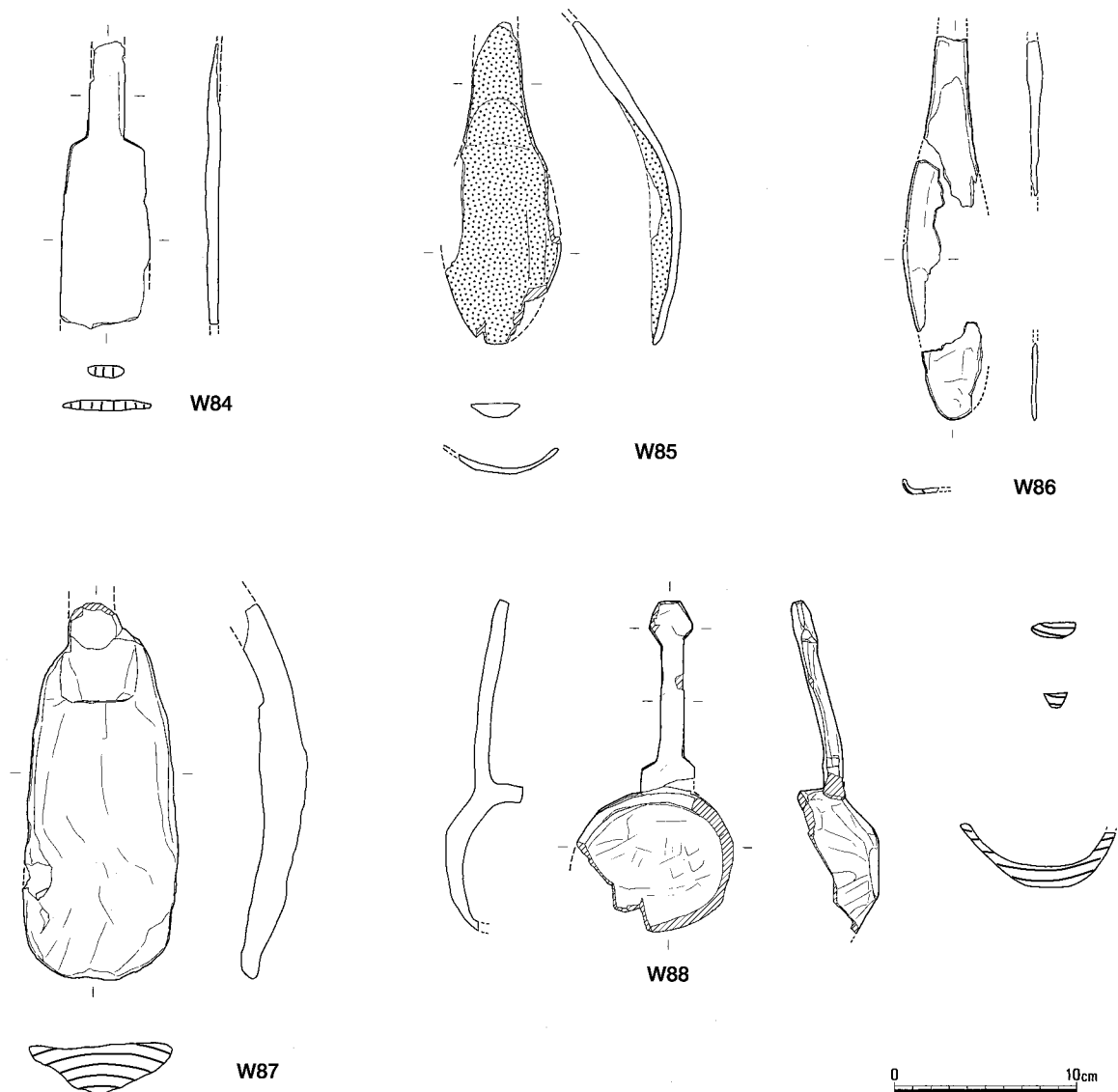


第307図 河道1北岸出土木器（武器・武具他）（1/4）

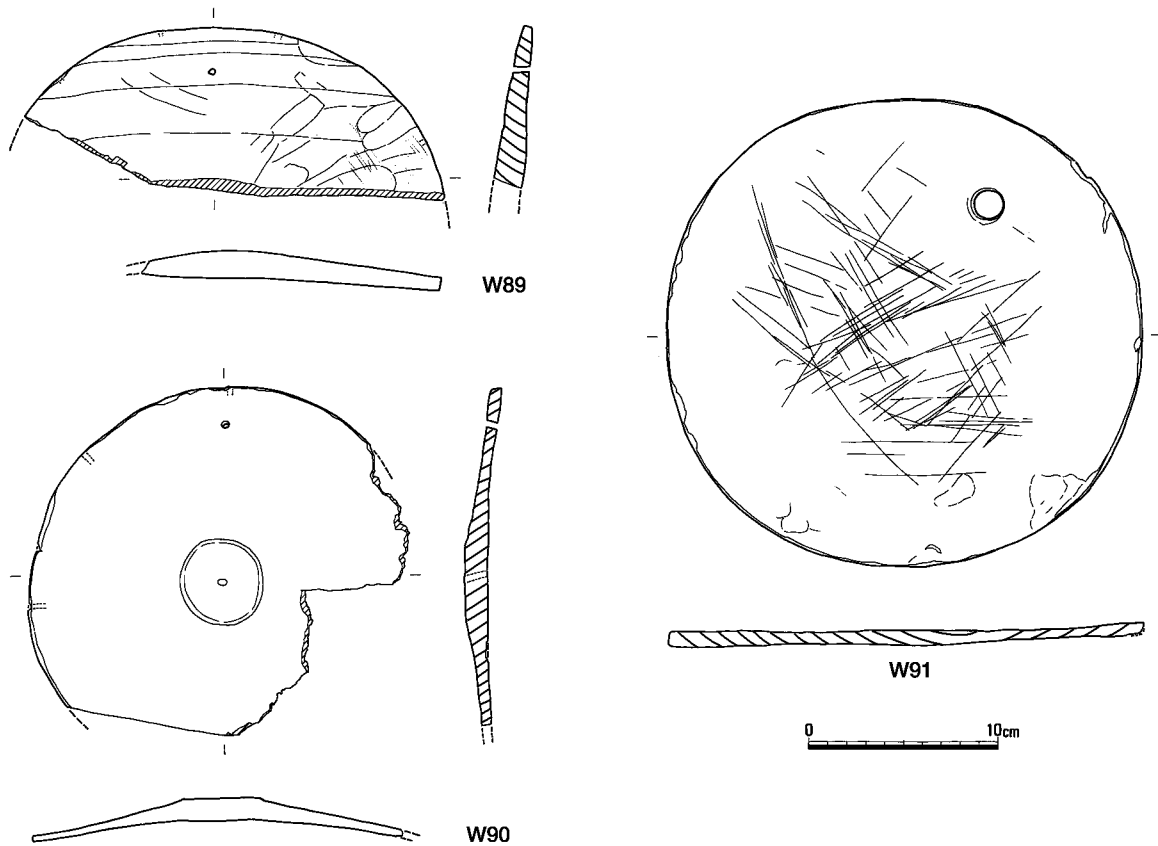


第308図 河道1北岸出土木器(盾)(1/4)

を測る。小孔間には横方向に鋭利な工具で線が入っており、いわゆるケビキのような痕跡がみられた。**W75**も小破片であり、残存長12.3cmを測る。表裏に小孔があり、下端部では特に孔が密集している。紐痕跡も観察できたが、紐痕跡は外縁にまで及んでいないことから、この破片は盾の縁に相当するものであると推測できる。**W76**は残存長10.3cmを測る。他のものに比べ、やや小孔の間隔が広い。紐痕跡がみられ、裏面にはわずかながら赤色顔料が付着している。**W77**は残存長13.4cmを測る。**W75**と木材の特徴がよく似ており、同一個体の可能性がある。下端で紐列が多くなっている。紐痕跡がみられるが、紐は縁にまでは達しておらず、**W77**は盾の縁に相当する位置にあたるものと思われる。赤色顔料が付着している。**W78**は残存長14.0cm、残存幅5.5cmを測る。上端部は残存しており、この部分から約3cmの幅で紐列が5列あり、密集している。上端から6cmのあたりに小孔が他のものとは離れて単独で設けられている。誤って小孔を穿ったものかもしれない。樹種はモミで板目材を使用している。**W79**は残存長21.5cmを測る。上端部は残存している。小孔間には表裏とも紐痕跡が残っている。上端部で小孔は幅約3cmの間で密集している。材質はモミで、板目材を使用している。**W80**は残存長17.6cm、最大幅5.5cmを測る。多数の小孔が穿孔されており、上端から4.7~7.5cmの幅約3cmの間で密集



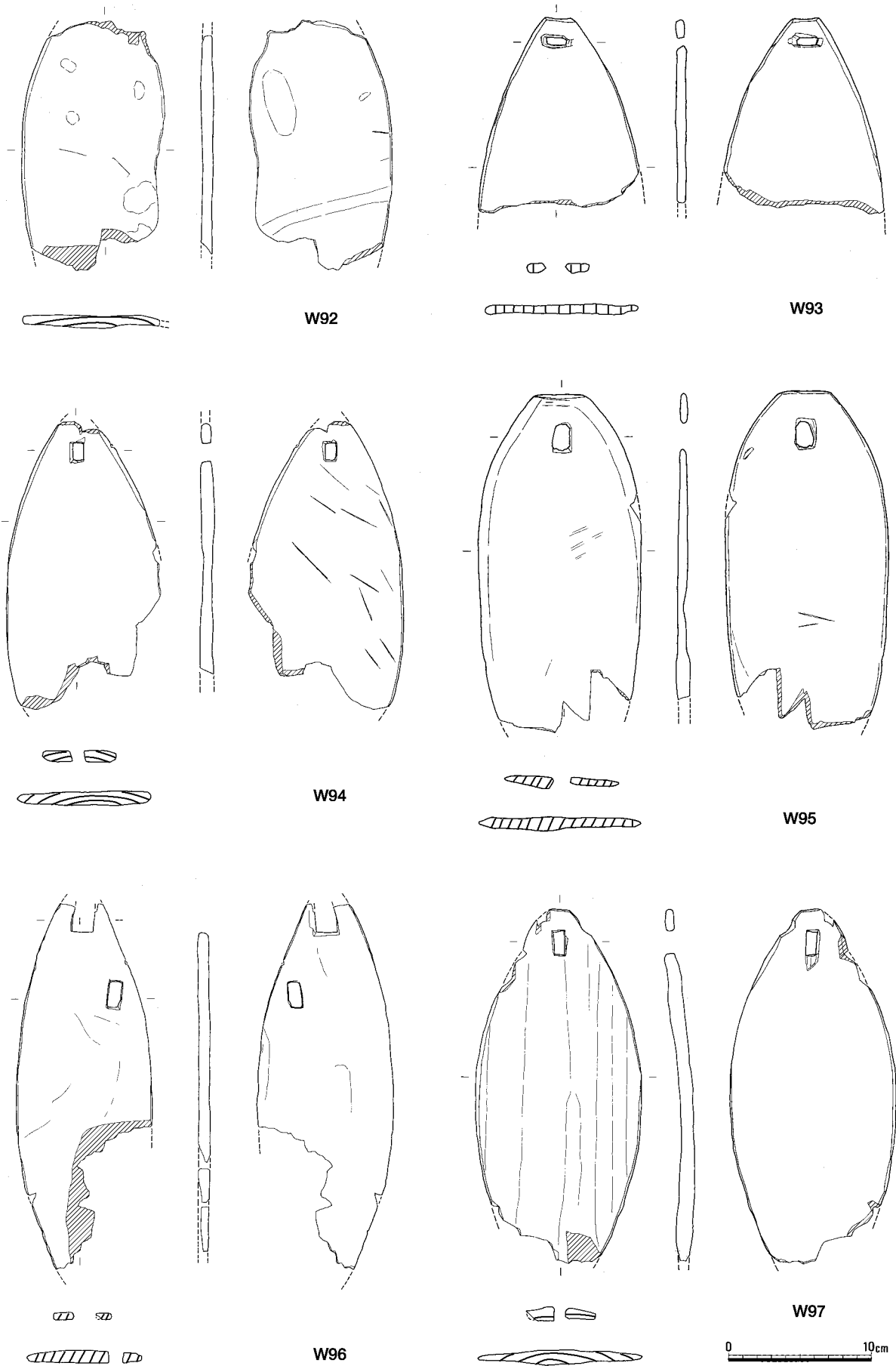
第309図 河道1北岸出土木器（食器具）（1/4）



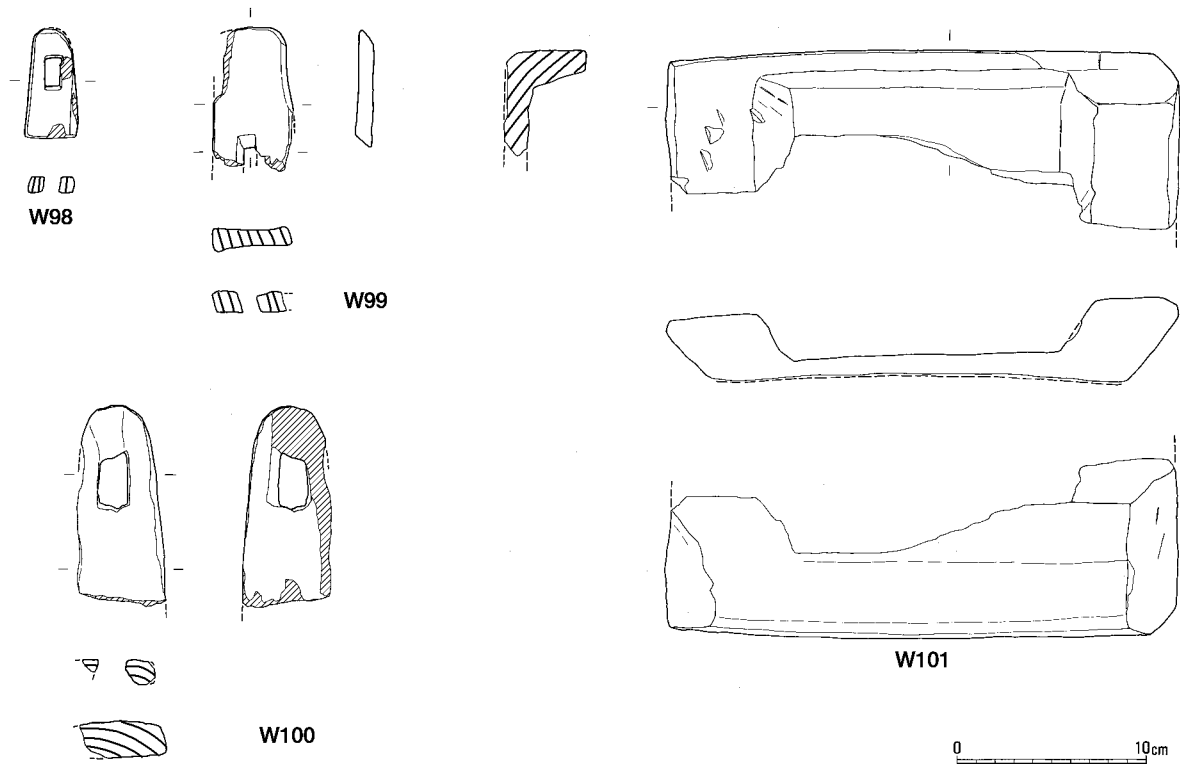
第310図 河道1北岸出土木器(容器)①(1/4)

する。表裏とも赤色顔料が施されているが、表面については黒漆(未同定)が付着していた。モミ材の板目材を使用している。W81は残存長24.4cmを測る。小孔が設けられており、特に上端から6.5~8.5cm下の幅約2cmの間で密集する。この紐孔が密集する部分の上下でケビキ線がみられた。表面については紐痕跡とともに赤色顔料が観察できるため、本来は全面に赤色顔料が塗布されていたものと思われる。しかし、裏面では赤色顔料は観察できなかった。紐孔は板面に対して垂直ではなく、やや斜めに穿孔されている箇所もある。モミの板目材を使用している。W82は残存長24.7cmを測る。紐孔が多数設けられている。表裏とも赤色顔料が塗布されている。小孔間には赤色顔料が薄くなっており、そのため、紐の痕跡が明瞭に観察できる。材質はモミである。W83は残存長33.8cmを測り、この遺跡で最も大きな盾の破片である。上端部分は小孔が密集している。ところどころにかすかに紐の痕跡が認められる。材質はモミであり、板目材を使用している。

W84は杓子形木器である。身と柄の一部が欠損しているが、残存長15.8cmを測る。身の平面形は長方形に近く、幅4.9cmを測る。柁目材を使用している。W85・86は匙である。W85は柄が欠損しており、残存長17.7cmを測る。身の部分は平面形が柄の軸方向に長い楕円形を呈しており、中央部が浅くくぼんでいる。全面を黒漆(未同定)によって覆われており、木取りは不明であるが、樹種はサカキである。W86は小破片であるが、おおよその形状は復元可能である。身は平面形が長楕円形を呈しており、中央が浅くくぼんでいる。W87は匙状を呈する木製品である。柄の部分は欠損している。W88は杓子である。身の一部が欠損しているが、残存長18.2cmを測る。身の平面形は円形に近く、中央が深くくぼんでいる。柄は身の上面よりも低い位置から取りついている。柄の先端は、幅を広げた五角形に近い突起を作り出している。材質はエノキである。



第311図 河道1北岸出土木器(容器)②(1/4)



第312図 河道1北岸出土木器(容器)③(1/4)

W89・90は容器の一部と考えられる木製品である。W89は3分の1程度しか残存していないが、中央がやや盛り上がった円盤状を呈している。推定の直径は約13cmである。小孔が1か所で観察できる。周囲には横方向から木釘が打ちつけられており、残存している範囲で4か所を数える。木材はヒノキ材が使用されている。W90も一部欠損しているが、直径約21.2cmの容器の一部である。中央がやや盛り上がり上がり、中心部では直径約4.5cmの円形の平坦面がみられる。その中心の位置には木釘が残っている。また、W89と同様に周縁部にも木釘が打ちつけられており、3か所で確認できる。また、蓋には円孔が施されている。裏面では赤色顔料が一部残存している。材質はヒノキを利用している。W91は容器の底板であろう。径25.2cmを測る完形品である。スギ材を利用している。表裏には細い切傷のような痕跡が観察できる。なお、板の穴は節穴であり、人為的なものではない。

W92～97は平面形が木の葉のような紡錘形を呈する木製品である。河道1北岸で6点出土した。いずれも薄い板を木の葉状に加工し、その尖った先端部付近に方形の孔を設けている。詳細な用途は不明であるが、ここでは容器の一部で、蓋に利用していた可能性を推測し、仮にこの木製品を木の葉形木製品と呼称しておく。W92は両端部が欠損しているが、木の葉形木製品と推測される。W93は下半部が欠損している。残存長13.7cmを測る。アカガシ亜属に属する柾目材を利用しており、三角形に尖った先端に横に長い方形孔を設けている。方形孔は2.0×0.9cmを測る。W94は残存長20.2cm、最大幅10.7cmを測る。上端には縦に長い1.3×1.0cmの方形孔が設けられている。スタジイの板目材を利用している。W95は残存長23.7cmを測る。上端には縦に長い2.0×1.3cmの方形の孔がある。スタジイの板目材を利用している。W96は残存長25.6cmを測る。上端部は欠損しているが、縦に長い方形孔がみられる。W96はこの他にも1か所で方形の孔がみられる。W97は残存長24.6cm、最大幅11.6cmを測る。平面形は紡錘形をなし、先端部に1.6×0.8cmの方形孔が設けられている。W97の縦断面はやや湾曲している。材質はコナラ節あるいはクヌギ節に属する木材を使用している。



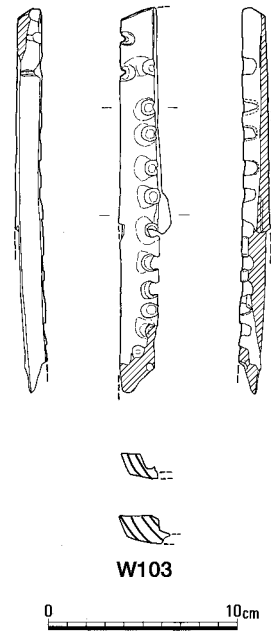
第313図 河道1北岸出土木器（裝飾板）（1/4）

W98~100は把手と考えられる木製品であり、いずれも方形のほぞ穴が設けられている。

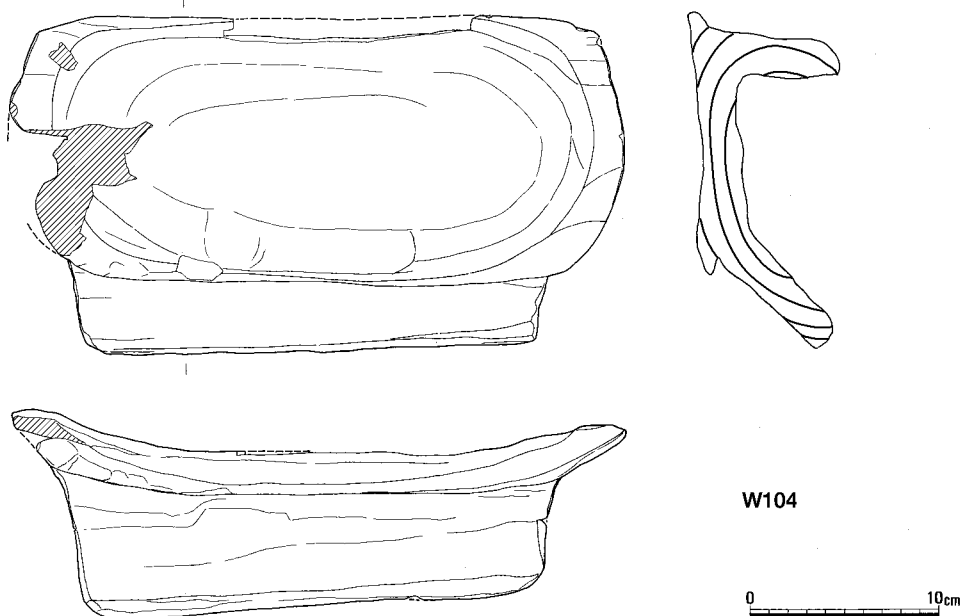
W101は槽である。約3分の1を欠損している。平面形は長方形であり、残存長27.1cmを測る。短辺側の口縁部は平坦な底部から斜めに立ち上がる。スダジイの芯去材を削り抜いた槽である。

W102は板材の両面に裝飾がなされているもので、裝飾板と仮称する。裝飾板は上下に二つに割れややずれた状態で検出された。裝飾板は河道1の木器堆積層の最下層で出土しており、河道1北半中の木製品の中で最も古い段階に属するものである。裝飾板は第313図の上図の面を上にして出土しており、以下、こちらの面を表面と記述する。裝飾板は残存長50.4cm、残存幅26.1cmを測り、最大厚で

約1.7cmを測る。木取りは板目材で、使用された樹木はクスノキであった。装飾板の表面の上端と右側縁部が残存しており、その他の縁は欠損していた。また、装飾板の中央部分に小孔が2か所穿たれていた。小孔は径約0.7cmを測る。これ以外に装飾板に小孔等は認められなかった。装飾板には表裏とも彫刻が施されていた。表面は全体的な印象として、凹凸に富み、念入りに仕上げられた様相がみえ浮彫的な表現がとられている。表面でまず目にとまるのは左右にみられる同心円状の文様である。同心円の中心部分は両方とも周囲より一段低く削っており、その周辺に環状に一段高くなった部分が存在し、その外縁は一段低くなった部分が再び環状に巡らされている。装飾板の上端と下端の中央部には半円形の装飾がそれぞれ彫刻されている。上端部のものは同心円の文様と同様に、中心部分が一段低くなっており、その周辺部が高く削り残され、再びその外縁が削り込まれている。一方、下端部の半円形の文様はいずれも沈線で構成されている。上下の半円形の文様は二つの同心円の文様を取り囲む沈線で結ばれている。その沈線の外側には、鋸歯紋を連想させる沈線が彫刻されている。その他、表面には文様を彫りこむ前の割付線のような細線の痕跡が数か所で確認できる。このように表面は凹凸に富み、彫刻も丁寧に施されており、完成度の高い意匠となっている。また、表面には赤色顔料がわずかではあるが、残存していた。一方、裏面は表面とは異なった文様構成をもつ。裏面はまず全体的な印象として、左側半分については、表面が磨耗しており、全体的に残存状況が良くないもの、表面と同様に凹凸に富み、丁寧に仕上げられている。それに対して、右側半分では特に小孔から右側においては凹凸に彫刻されることもなく、いずれも沈線を主体とするものである。中には割付線と思われる細線のみで構成されている箇所もあり、右側と左側で仕上がりの度合が大きく異なっている。これは推測であるが、裏面では文



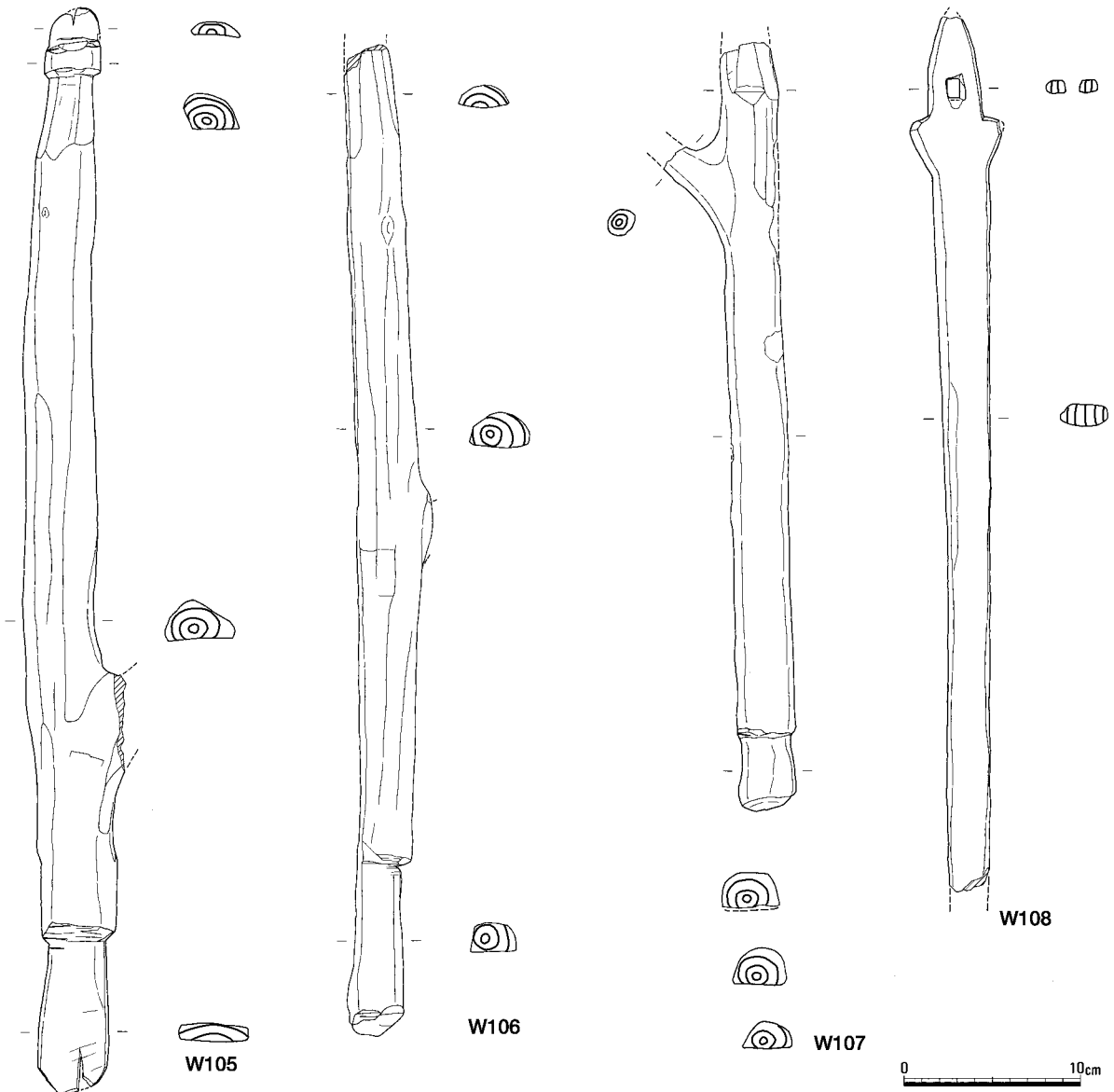
第314図 河道1北岸出土木器（発火具）(1/4)



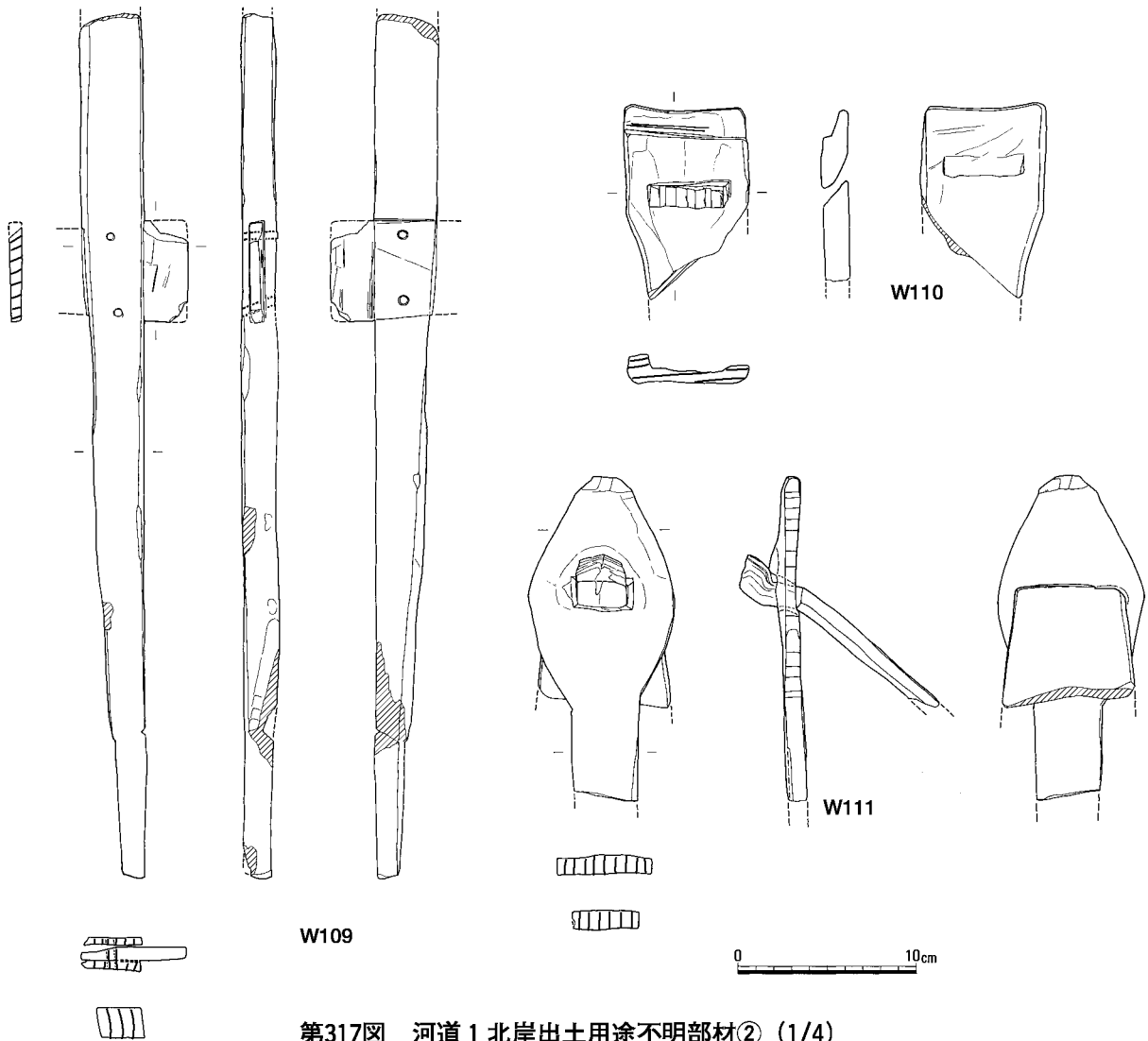
第315図 河道1北岸出土木器（腰掛）(1/4)

様の彫刻が途中で終了してしまい、完成には至っていないような印象を受ける。換言すればこの装飾板は厳密には未完成品であったといえる。裏面の文様はいわゆる弧帯文に属するもので、帯状の文様が折り重なっている状況が観察できる。裏面には、2か所に円形の文様が施されており、これを「U」字状に帯状の文様が結んでいる。また、左側の円形の文様から上下に帯状の文様が装飾板の端までのびている。また、装飾板の左側下端部から弧状に、牛の角を思わせるような文様が彫刻されている。板の左縁から中央にむけて、この文様につぶかるように帯状の文様が複数彫刻されている。このように、裏面では帯状の文様が多くみられるが、帯の構成は基本的に中央に沈線の入る幅広の帯に、幅の狭い縁が両方にとりついたものと理解することができ、いわゆる五線帯表現をとっている。そして、これらの文様は中央の帯が高く、狭い帯の部分は一段低く彫られているようで、基本的に浮彫的表現をとっているようである。なお、裏面には赤色顔料の付着はみられなかった。

W103は火きり白である。一部欠損しており、残存長20.4cmで、幅2.8cm、厚さ1.5cmを測る。火きり穴は本体の左側に2か所、右側に11か所設けられている。左側の下の穴以外はすべて使用痕の残る



第316図 河道1北岸出土用途不明部材① (1/4)



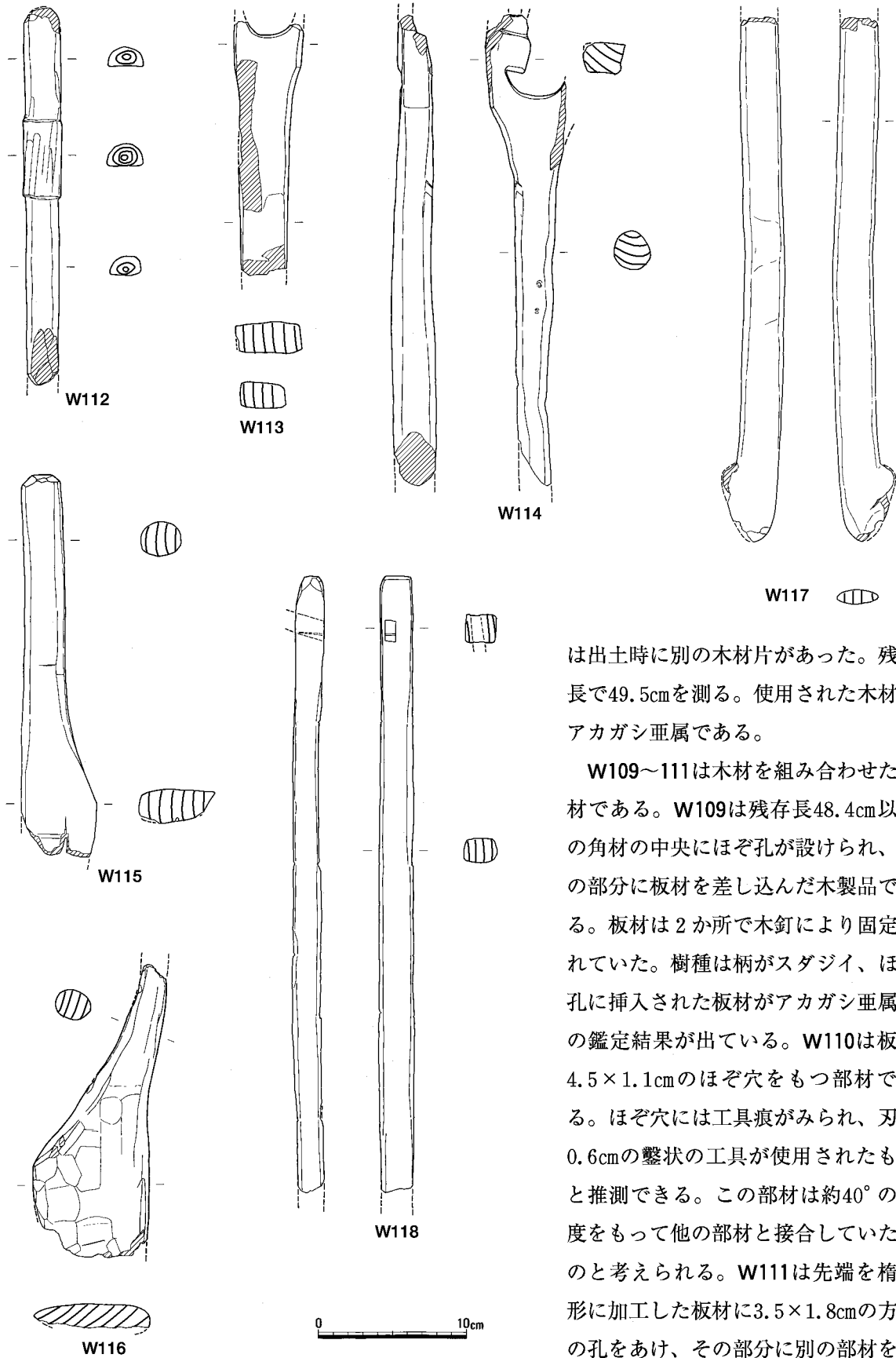
第317図 河道1北岸出土用途不明部材② (1/4)

火きり穴である。火きり穴の右側には左縁よりも一段低い部分が存在する。火きり穴が右側の高い段に位置することから、一段低くなった部分に火種となる木粉を集めたものと考えられる。木材にはヒメシヤラが使用されている。

W104はいわゆる腰掛と称される木製品である。座板と脚を一木で作出した刳物であり、横木取りで、座板の長辺（木目方向）に平行して二脚が設けられている。座板上面は少し中がくぼんでいる。大きさは長さ32.6cm、幅17.9cmを測る。脚は座板側面からやや内側に作り出されている。脚は横断面で見ると上方のものは座板に対して直角に設けられているが、下のものは外方に開いている。保存状態は良好で、材質はクスノキと報告されている。

W105～107は、背負子状木製品と称されるものである。分岐する枝をもち、裏面を平坦に加工していることなどが特徴である。W105は全長61.7cmを測る。下端は長さ8.8cmほどを板状に削り出している。上端から約37.5cmに枝が位置する。W106は先端と枝部分が欠如しているが残存長56.2cmを測る。下端に長さ約9.8cmの突起を作り出している。枝は上端から25.5cmの場所に位置する。W107は上端と枝の部分が欠損している。上端から5.5cmで分岐している。残存長で43.7cmを測る。

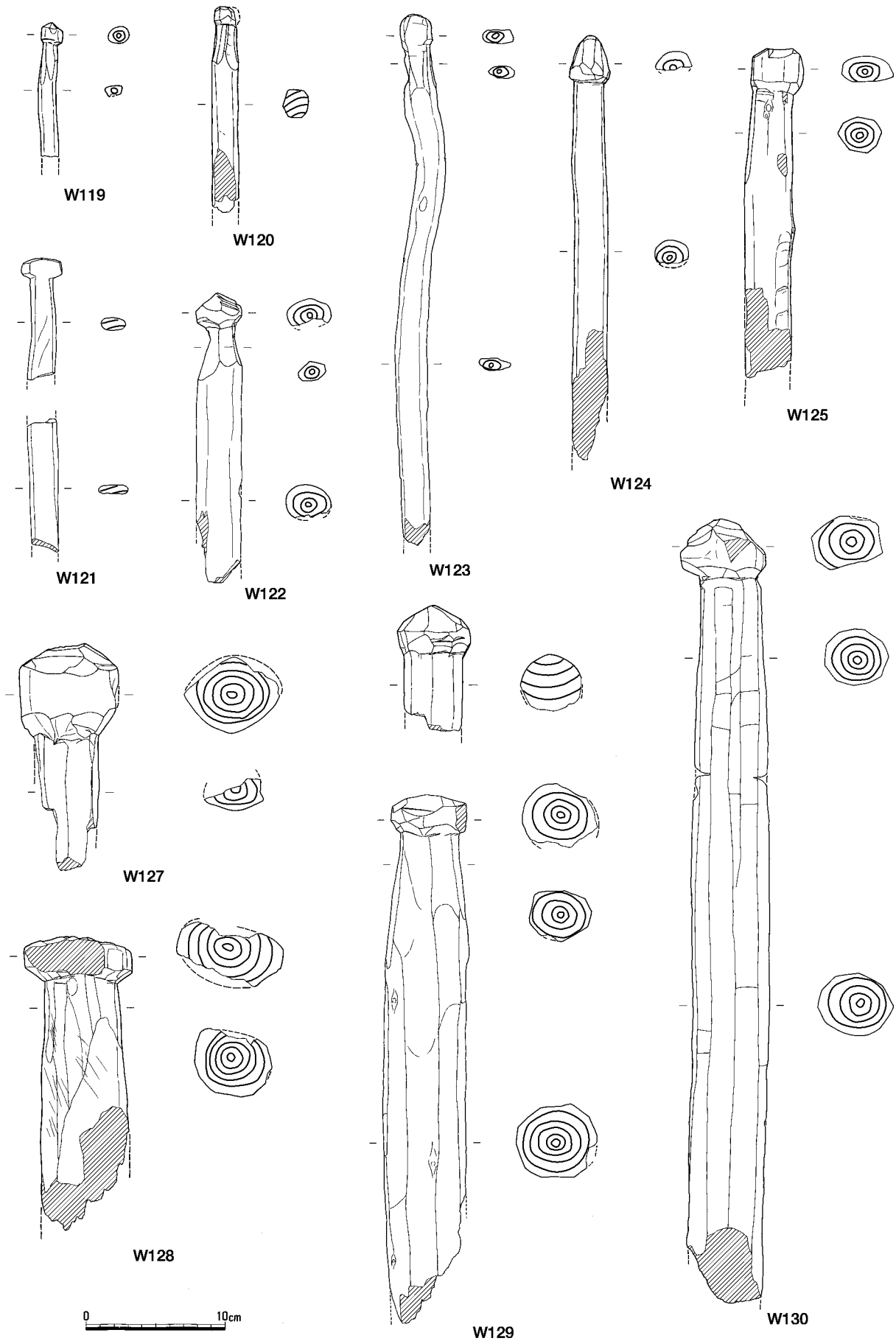
W108は用途不明の部材である。先端部分は長三角形状を呈し、方形孔が施されている。この孔に



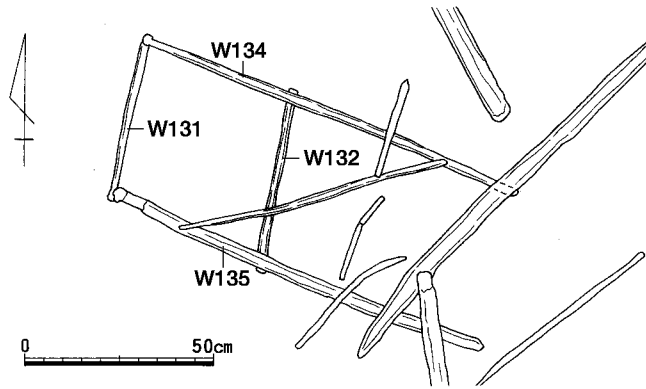
は出土時に別の木材片があった。残存長で49.5cmを測る。使用された木材はアカガシ亜属である。

W109～111は木材を組み合わせた部材である。W109は残存長48.4cm以上の角材の中央にほぞ孔が設けられ、その部分に板材を差し込んだ木製品である。板材は2か所で木釘により固定されていた。樹種は柄がスダジイ、ほぞ孔に挿入された板材がアカガシ亜属との鑑定結果が出ている。W110は板に4.5×1.1cmのほぞ穴をもつ部材である。ほぞ穴には工具痕がみられ、刃幅0.6cmの鑿状の工具が使用されたものと推測できる。この部材は約40°の角度をもって他の部材と接合していたものと考えられる。W111は先端を楕円形に加工した板材に3.5×1.8cmの方形の孔をあけ、その部分に別の部材を差し込んでいる。両部材の装着角度は50°を測る。使用された木材はアカガシ亜

第318図 河道1 北岸出土用途不明部材③ (1/4)



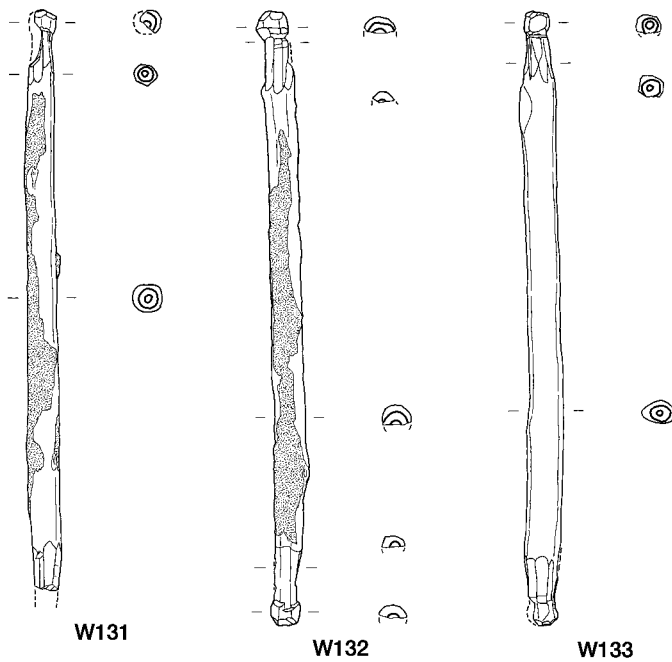
第319図 河道1北岸出土用途不明部材④ (1/4)



第320図 河道1北岸部材出土状況 (1/20)

ら先端にかけて幅がひろがる木製品である。W117は残存長35.3cmを測る。W118は残存長41.7cmの部材である。先端に1.5×0.8cmの方形の孔があり、その中に別部材が挿入され、くさびで固定されている。

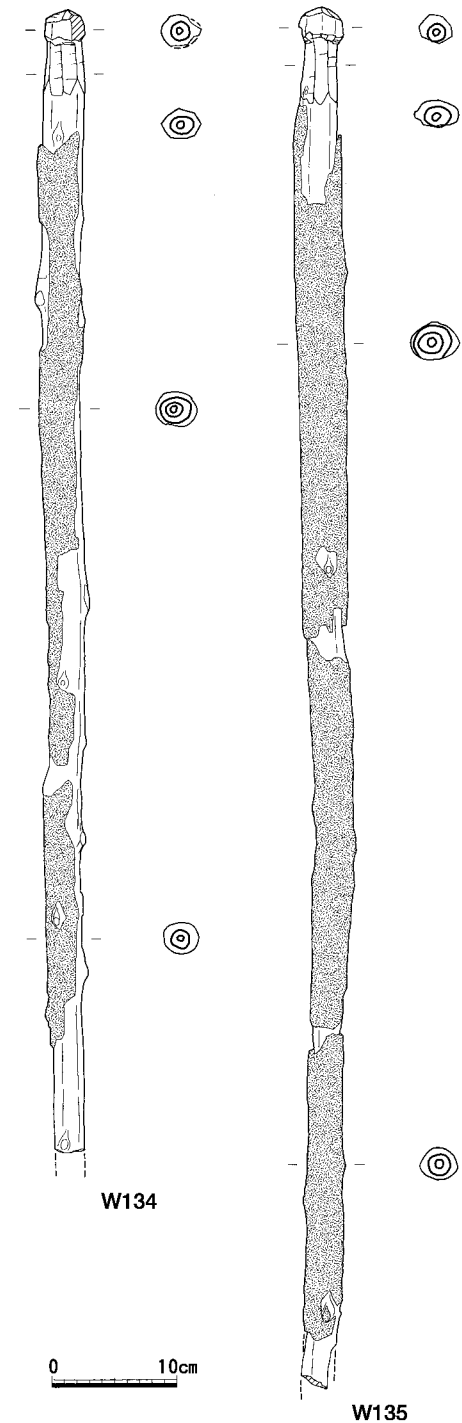
W119~138は先端を加工し、頭部を作り出した、いわゆる有頭棒状の木製品である。この有頭状の部材は数多く出土し、河道1北岸で検出したもので58点を数える。その形状は径が小さいものから大きいものなど様々である。また、



第321図 河道1北岸出土用途不明部材⑤ (1/6)

属である。

W112~118は棒状の用途不明品である。W112は残存長25.5cmの部材である。W113とW114は円形あるいは「きのこ」のような形状の透かしをもつ木製品である。W113は残存長17.1cm、芯去材を使用している。W114は残存長31.7cmを測る。W115とW116は柄か

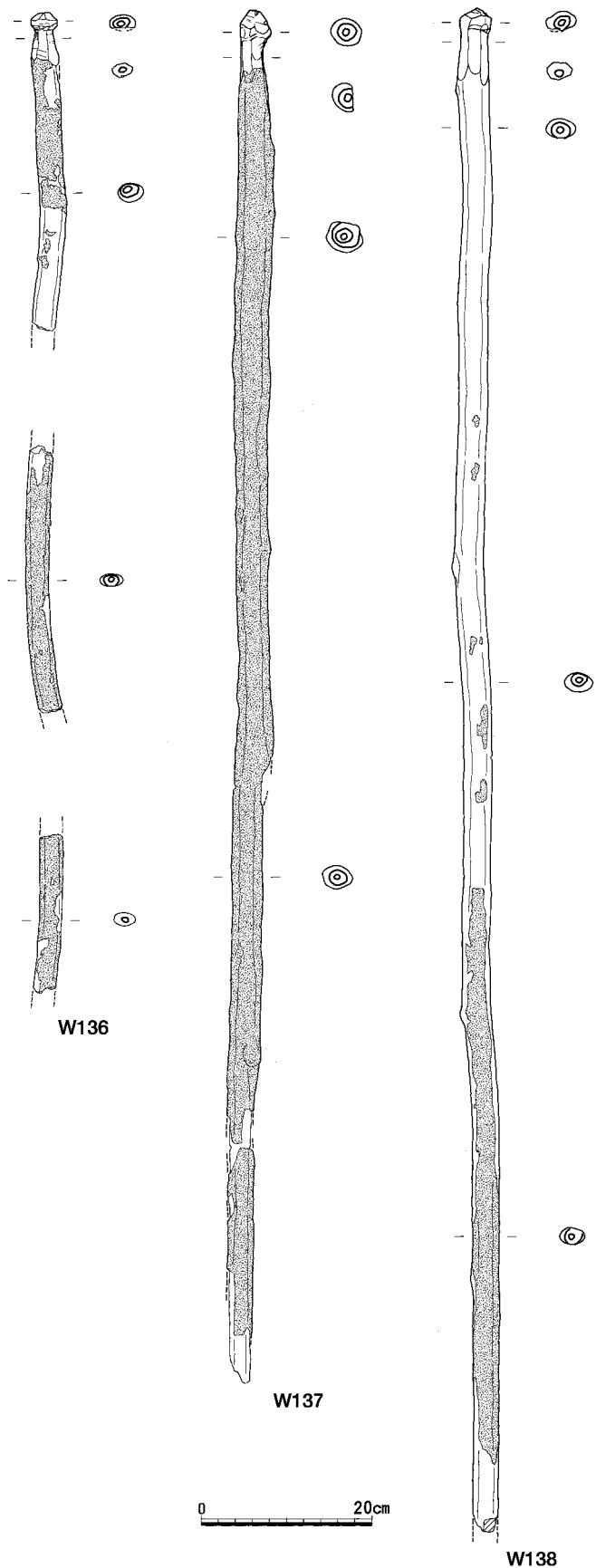


先端の作り出し方も、棒の頸部のみを削りとして頭部を形成するものと、頸部や身の周囲を削り出して頭部を削り残すものが確認できる。なお、この有頭状の部材には、先端を加工したのちに抉りを施して仕口を作り出しているものが見られるが、それについては建築部材の構造材として利用された可能性を考慮にいれ、別に掲載している。

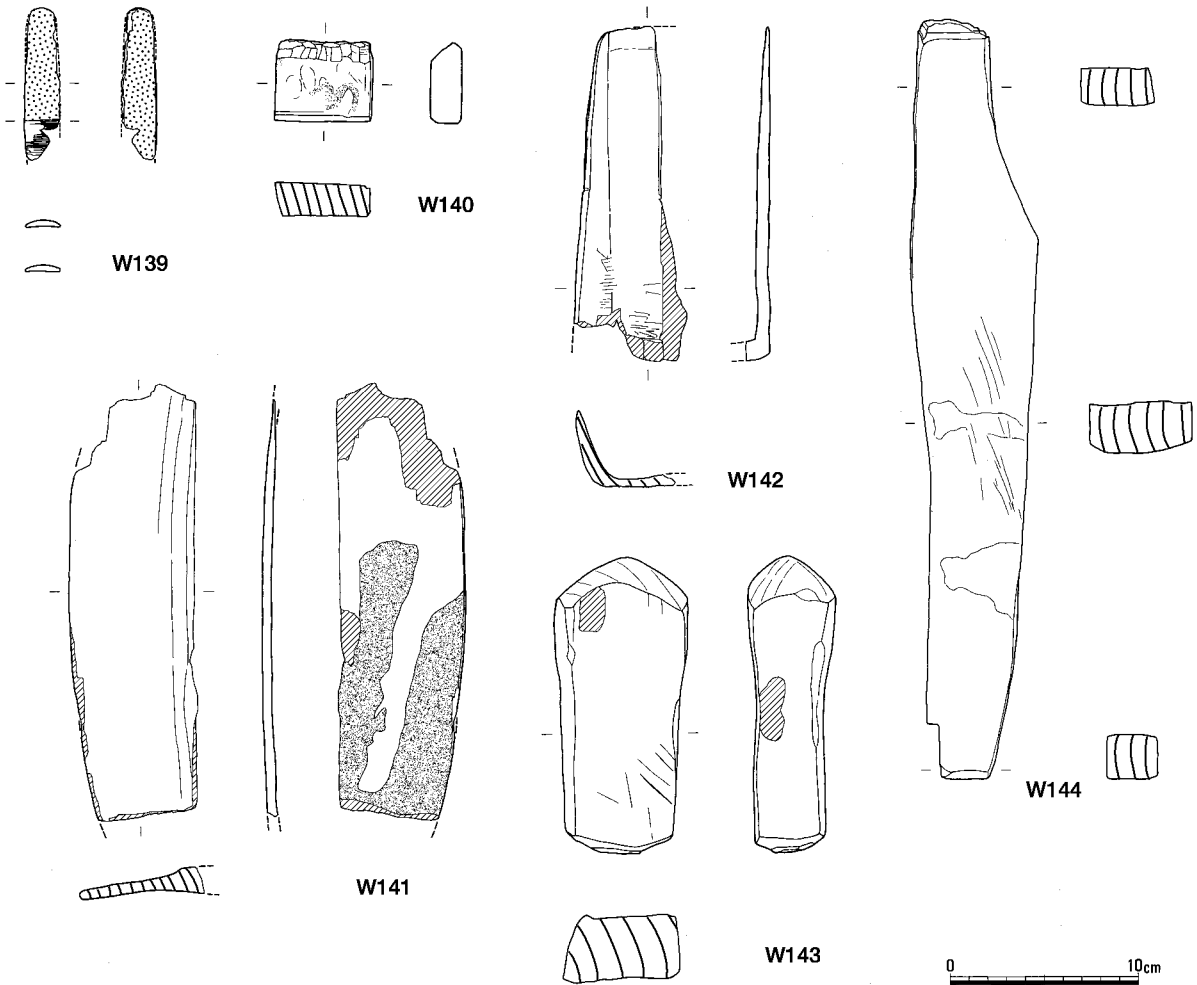
W119は最も細い先端加工材のひとつであり、径1.3cmを測る。W121は大部分が欠損しているが、芯去材の割材を削って作り出している。W123は径約2cmの細い樹木を利用したものである。W124は先端を三角形に加工している。芯持材であるが、頭部のみを削り残している。W127～130は比較的太い部材である。いずれも一端を欠損している。W126・128・130は一部が炭化しており、火を受けている。

W131～135は頭部を作り出した部材であるが、出土状況から使用時の状況を復元できる資料である。W131・132・134・135は第320図に示しているように、方形に組まれたように出土した。W134とW135を長辺に設置し、W131とW132を短辺に配置しており、少なくとも長さ約110cm以上、幅約50cm以上の部材を構成していたものと考えられる。これらの部材は、先端の加工部分を除いて、樹皮が全面を覆っていたものと推測される。なお、それぞれの部材が接合する箇所については、精査を行ったが、紐のような痕跡等は見られず、これらの部材の緊縛方法は不明であった。

W136は構造材6の筋違い材である。表面には樹皮が残り、先端部のみを加工している。2か所において蔓により緊縛



第322図 河道1北岸出土用途不明部材⑥ (1/8)

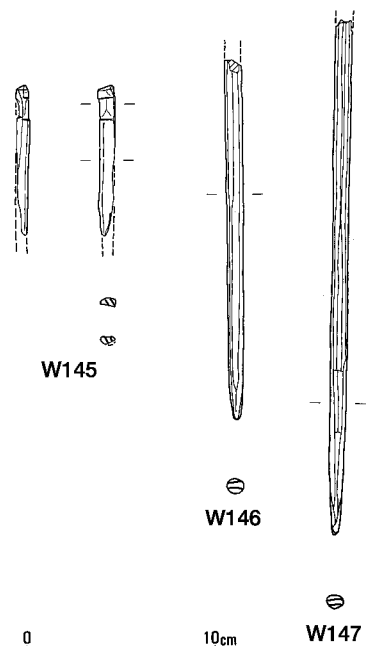


第323図 河道1北岸出土用途不明部材⑦ (1/4)

されていた。W136の蔓による緊縛部分は切断して取り上げたため、このような断片的な実測図となったが、長さは約140cmを測る。アカガシ亜属の木材である。

W137とW138は完形ではないが、それぞれ残存長160.9cmと178.7cmを測る。この河道1北岸で出土した先端加工部材の中で長い部類の木製品に属する。いずれも表面に樹皮を残し、先端部のみを加工したものである。

W139は薄い木製品であり、残存長8.3cm、残存幅1.8cmを測る。表面に黒漆（未同定）が施されている。下端部には糸痕跡がみられる。W140は長さ4.4cm、幅5.2cmの木片である。特に上端部では工具による加工痕が顕著である。この部材の表面には赤色顔料が塗布されている。W141は残存長23.2cm、残存幅6.6cmを測る部材である。一辺が残存しており、その形状は弧状になっている。また、この部材は縁から中心に至るにつれ厚くなっている。部材の表面には赤色顔料が残っている。W142は木材を薄く削り出した部材である。部材の下端部では鋭利な

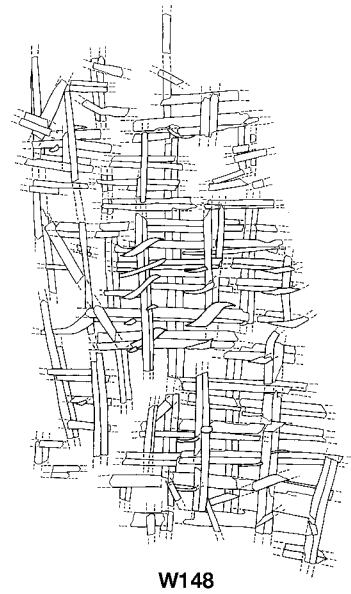


第324図 河道1北岸出土用途不明部材⑧ (1/4)

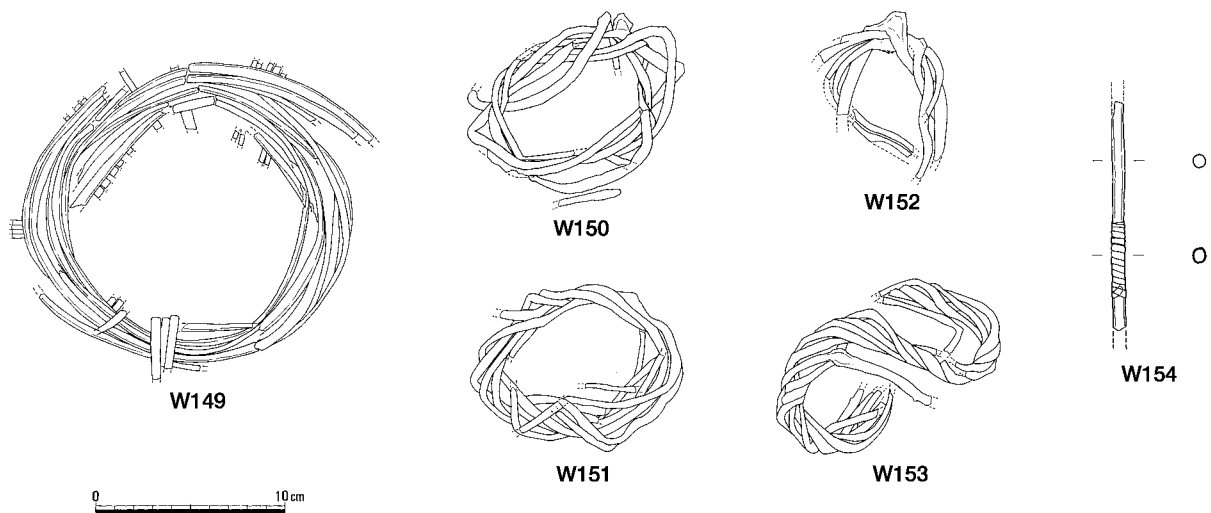
刃物による加工痕がみられる。箱のような形状をなしていたものと考えられるが、詳細は不明である。W143は断面が7.2×4.7cmを測る方形の部材である。中央付近がややへこんでいる。また、上端部が研磨されており、滑らかな表面となっている。W144は完形品で長さ40.3cmを測る。下端部ではほぞのような突起を削り出している。建築部材の一部とも考えられるが、用途は不明といわざるを得ない。W145はちょうど爪楊枝のような形状の部材である。頭部を加工している。W146とW147は箸のような形状をなす部材である。先端を尖らせている。出土した場所が近接しており、この両者は同一部材である可能性もある。

W148は編物である。残存状況はあまり良くなく、長さ27.5cm、幅16.5cmの部分が残存しているにすぎない。その形状から全体像を復元することは困難であるが、箕の一種と考えておきたい。箕は藁状の植物の茎（未同定）を利用している。茎は基本的に2本1組で使用されており、縦方向の繊維に対して、横方向の繊維が上下に交互に通っている。そして、すべての箇所を確認できてはいるが、横方向の繊維に別の繊維をからませて縦と横の植物原体を固定している。

W149・150はいずれも植物を束ねて作った製品である。W149は環である。径約19cmを測る。環は蔓のような植物繊維を束ねて作られている。これをコイル状に幅0.5cmほどの植物繊維で緊縛していたと考えられる。環はウレタンで固定して取り上げ、その後保存処置を行ったが、その過程で形状が崩れてしまった。そのため、ここに載せた実測図は調査中に撮影した写真と実物との比較検討の結果、作成したものである。W150は径約11.5cmを測る。W151は径約11.5cmを測る。W152は径8.8cmを測る。いずれも植物原体の同定は行っていないが、蔓のようなものを利用している。W153も同様に同定は行っていないが、蔓状の植物繊維で作られた製品である。複数の繊維を捩って束ねており、「8」の字状を呈する。W154は樹皮を巻いた棒状の製品である。径0.7cmの棒に長さ4cmにわたって樹皮を巻きつけている。上下で端部を樹皮の下に潜らせて固定している。



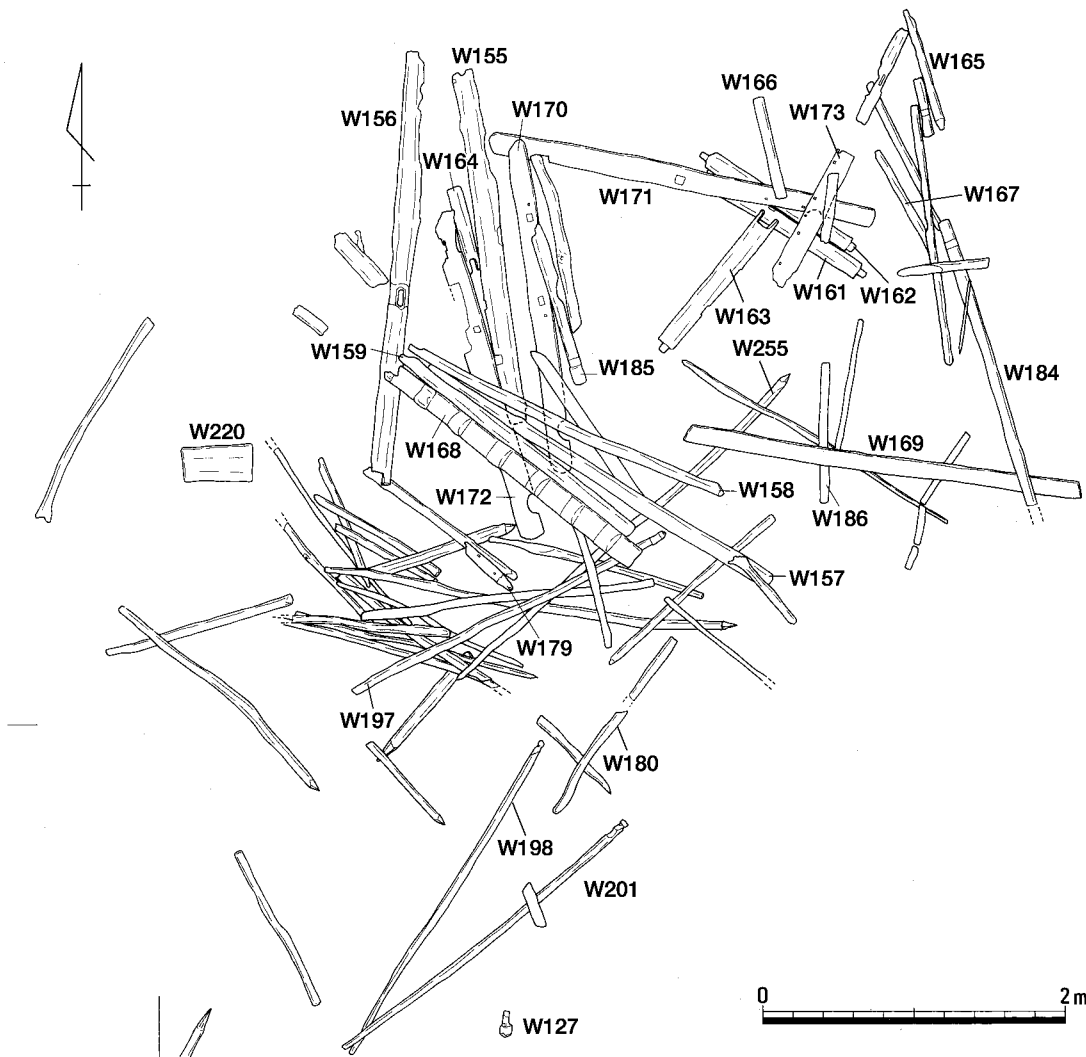
第325図 河道1北岸出土木器（編物）(1/4)



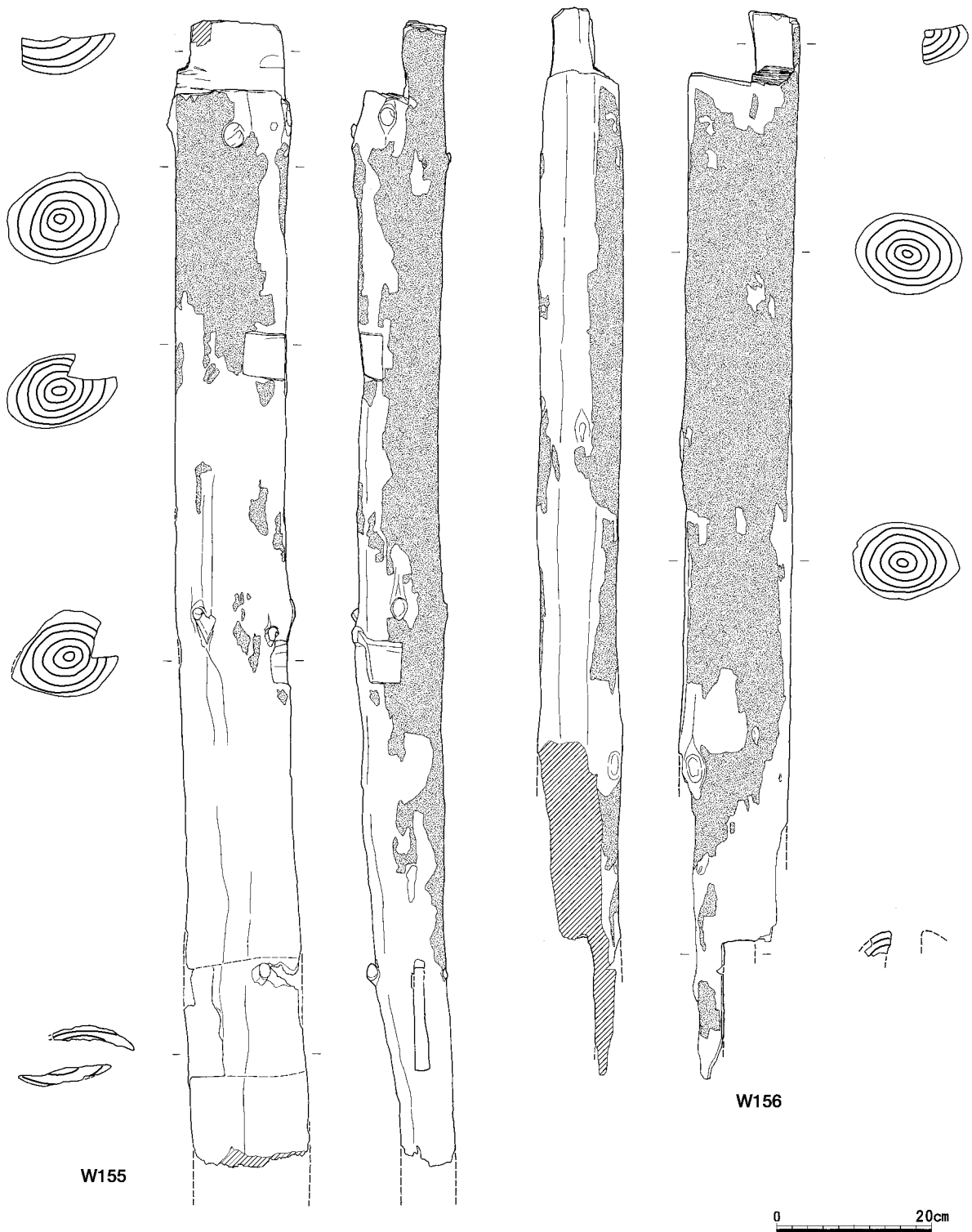
第326図 河道1北岸出土遺物（環・樹皮製品）(1/4)

河道1北岸出土建築部材（第327図、図版73～78）

河道1北岸では多数の木製品に混ざって、多くの建築部材が出土した。建築部材は調査した河道1の北半部に集中していた。建築部材は柱、支柱・梯子・構造材などを含め約70点出土した。建築部材は欠損しているものや、火を受け炭化しているものが存在したが、全体的に良好な状態で出土した。建築部材の多くは河道1北岸の1区と2区の境目に集中している。この付近は構造材1～8も出土しており、これらも建築部材の一部に含まれるかもしれない。第327図は建築部材の出土状況図である。中央に位置するのは梯子（W168）である。これに隣接して柱（W157～159）が並び、その北に柱や板材（W155・156・164・172）が存在した。また、第327図の北東部では支柱（W161～163）と板材（W171）が集中している。少し離れて板材（W169）も出土している。これらの建築部材は完全な形を保っているわけではないが、地下水位など土中環境による腐食あるいは土圧の影響を考慮すれば、比較的完全な状態で廃棄されたものが多いと推測できる。検出した当初は高床建物1棟分の建築部材が廃棄されているものと期待もしたが、建物1棟分を復元できるほどの量の建築部材は調査した範囲では確認できない。また、この付近には多くの弥生土器や木製品も廃棄されていることから、使用されなくなった建築部材が、選択的にこの場所に廃棄されたものと理解できる。



第327図 河道1北岸建築部材出土状況（1/50）

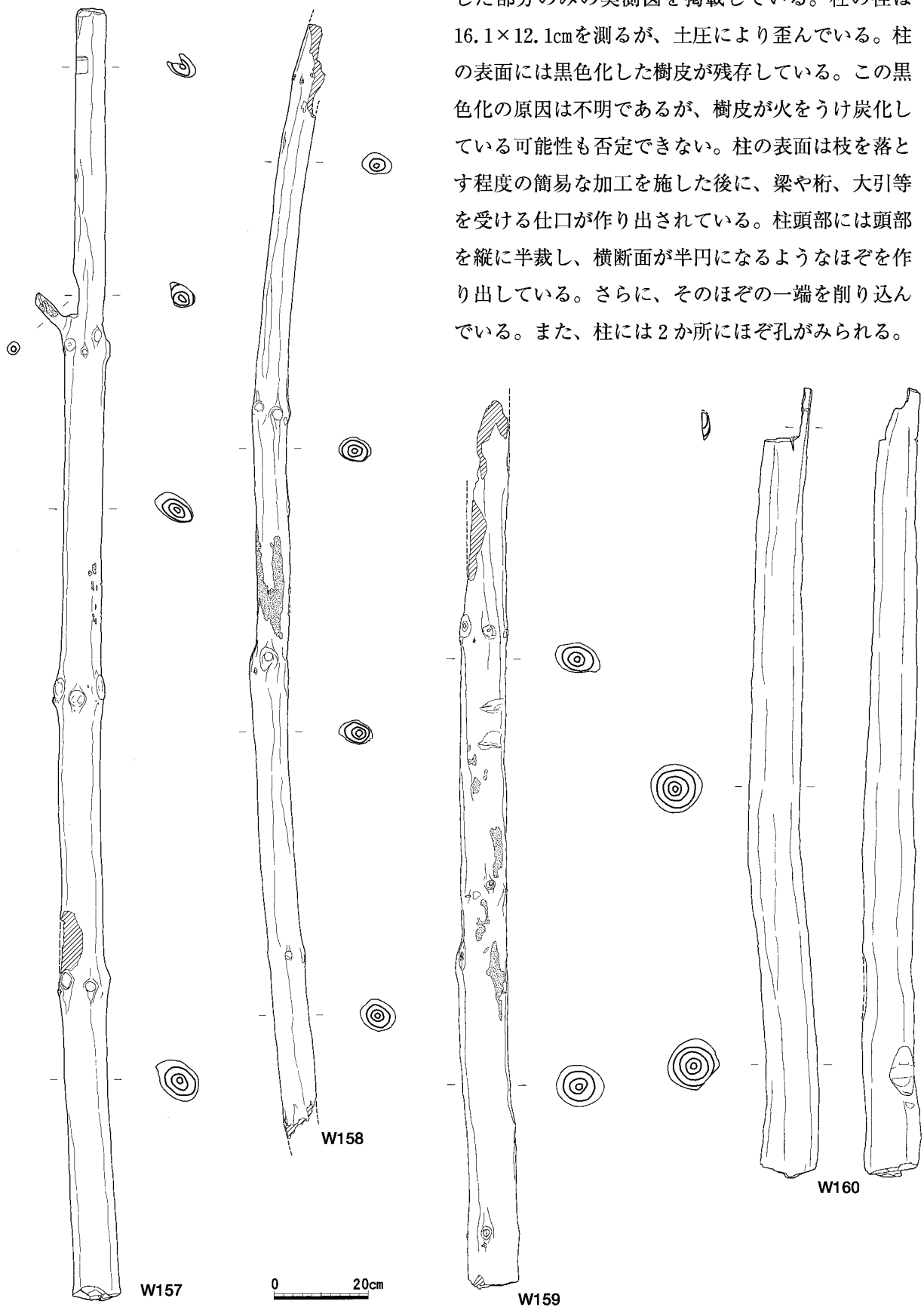


第328図 河道1北岸出土建築部材① (1/8)

W155～167は柱である。柱には通柱の構造をもつものと支柱の構造をもつものに大きく二つに分類できる。

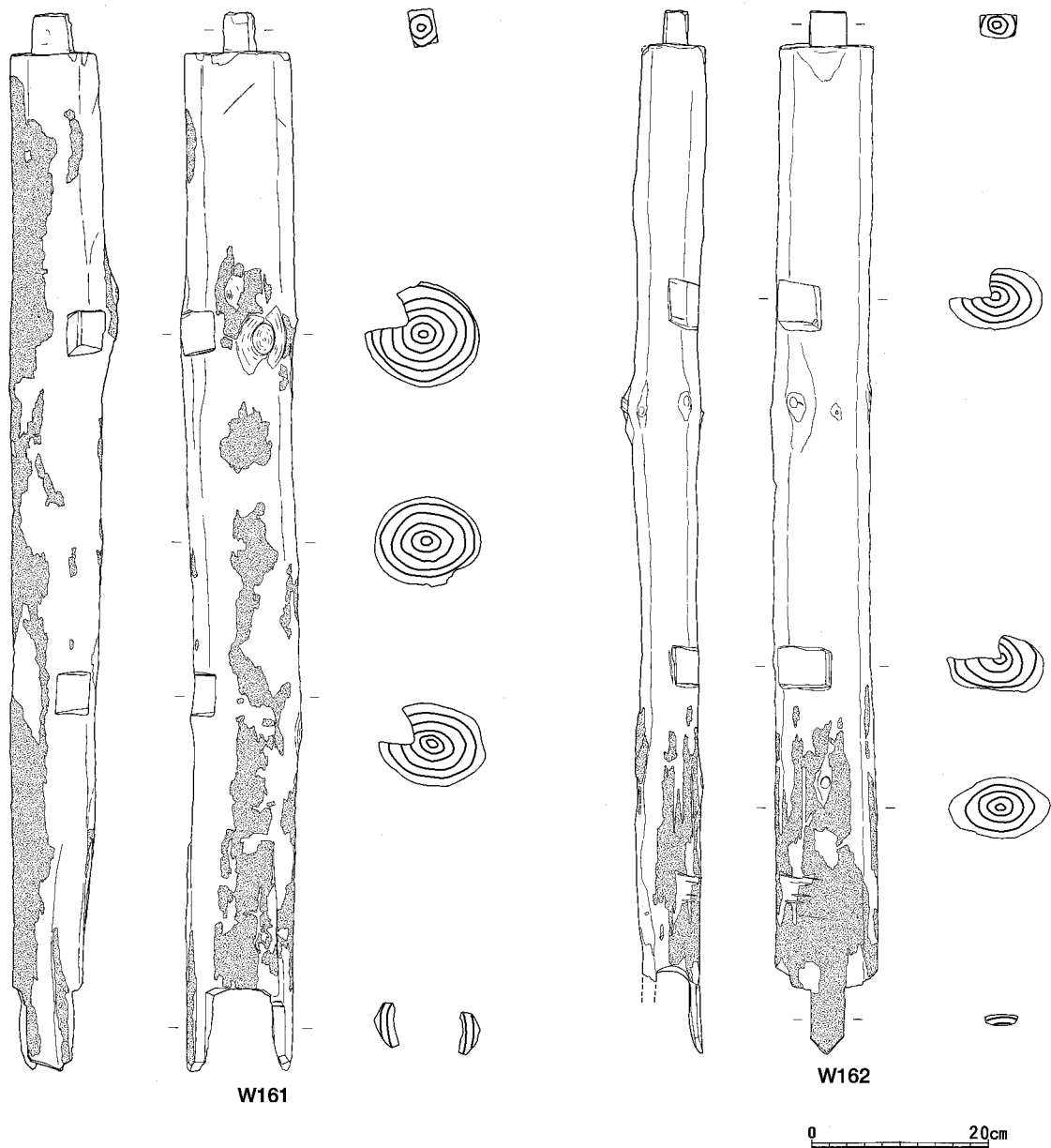
W155・156は通柱である。いずれも柱に貫穴をもついわゆる「大引貫式」の高床建物に使用された柱と考えられる。W155は柱下半部が欠損している。図示した柱の長さは149.3cmを測るが、検出時では柱の長さは約235cmを測った。これは、柱の下半部は残存状況が極めて悪く、取り上げることがで

きなかったためである。ここでは、取り上げに成功した部分のみの実測図を掲載している。柱の径は16.1×12.1cmを測るが、土圧により歪んでいる。柱の表面には黒色化した樹皮が残存している。この黒色化の原因は不明であるが、樹皮が火をうけ炭化している可能性も否定できない。柱の表面は枝を落とす程度の簡易な加工を施した後に、梁や桁、大引等を受ける仕口が作り出されている。柱頭部には頭部を縦に半裁し、横断面が半円になるようなほぞを作り出している。さらに、そのほぞの一端を削り込んでいる。また、柱には2か所にほぞ孔がみられる。



第329図 河道1北岸出土建築部材② (1/12)

上のもので縦6.5cm、横5.4cm、深さ4.2cm、下のもので縦5.6cm、横4.7cm、深さ4.4cmを測る。壁木舞を設置する際の間渡穴のような用途が考えられる。柱の下半部には貫穴が設けられている。この部分の残存状況は極めて悪く、また、土圧による変形や腐朽の著しい箇所である。貫穴は縦14.4cm、横1.9cmを測る。この貫穴の上面から柱頭のはぞ下部まで113cmを測り、上屋の高さを示しているものと考えられる。この柱は樹種鑑定の結果、針葉樹のあて材ということで、詳細な樹種まで絞り込むことはできなかった。W156もW155と同様、特に下半部の残存状況が悪く、取り上げることはできなかった。図示した大ききで、残存長146.2cm、径13.7×10.5cmを測るが、検出時では長さ285cmほどを確認している。柱の表面は枝を払った程度で、顕著な加工痕はなく、黒色化した樹皮が残存している。柱頭は柱を4分の1ほど残して削り込み、梁または桁を受ける仕口を作り出している。また、下半部には貫穴が設けられている。貫穴の形状は残存している箇所が少ないため、詳細は不明であるが、縦6.5cm以上、横4.2cmを測る大きさの長方形の孔を想定することができよう。この貫穴の上端から柱頭

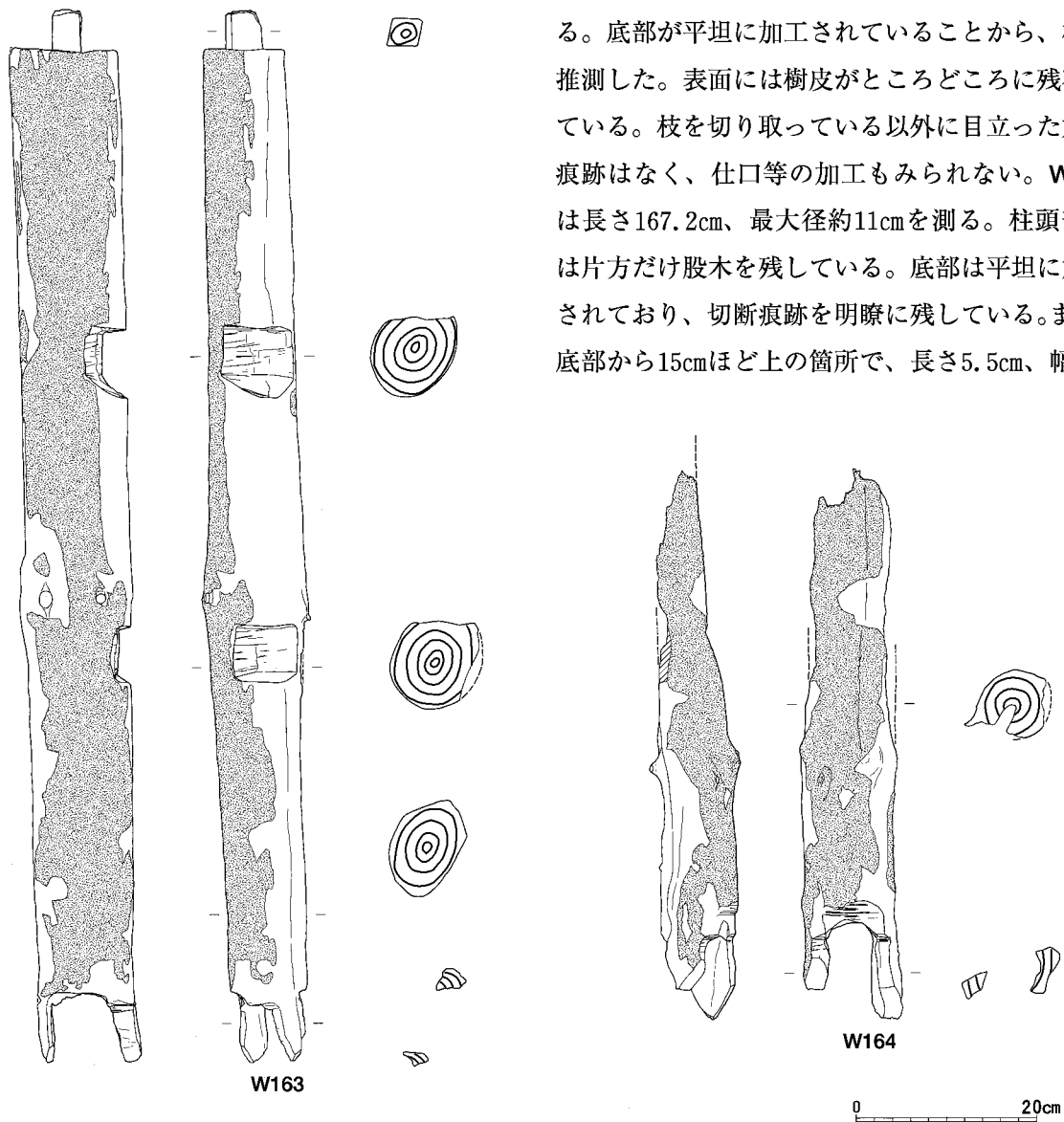


第330図 河道1北岸出土建築部材③ (1/8)

の仕口下端まで約120cmを測る。樹種は二葉松類に属するもので、その丸太材を利用している。

W157は完形の柱である。枝を利用して部材を支えるいわゆる「分枝式」高床建物に使用されたと考えられる柱である。長さ271.9cmを測る。柱の上部にはほぞ穴が1か所設けられている。ほぞ穴は縦3.6cm、横2.6cm、深さ2.0cmを測る。柱の上端から約65cmのところでは枝が分岐している。枝の分岐部分は欠込んで大引を受ける装置を作り出しており、この場所に大引等の部材を設置していたものと考えられる。分岐部分からは枝を払った程度で目立った加工痕跡はない。樹皮が一部で残存しており、本来は樹皮のついた柱であった可能性も考えられる。炭化等、火をうけた痕跡は認められず、残存状況は良好である。底部は平坦であり、切断の際の加工痕跡が明瞭に残る。木材は二葉松類に属する丸太材を使用している。W158はW157やW159と隣接して出土した。樹種鑑定は行っていないものの、材質がW157・159と類似していること、また、この部材が出土した付近は柱や梯子などの建築部材が集中していることを重視して、これを掲載する。W158は両端を欠損しており、残存長233.5cm、径約7cmを測る。やや湾曲している。枝を払った程度の加工しかみられない。樹皮が一部で残存する。

W159は残存長187.9cm、底部付近で径10.5cmを測る。底部が平坦に加工されていることから、柱と推測した。表面には樹皮がところどころに残存している。枝を切り取っている以外に目立った加工痕跡はなく、仕口等の加工もみられない。W160は長さ167.2cm、最大径約11cmを測る。柱頭部には片方だけ股木を残している。底部は平坦に加工されており、切断痕跡を明瞭に残している。また、底部から15cmほど上の箇所、長さ5.5cm、幅3.5



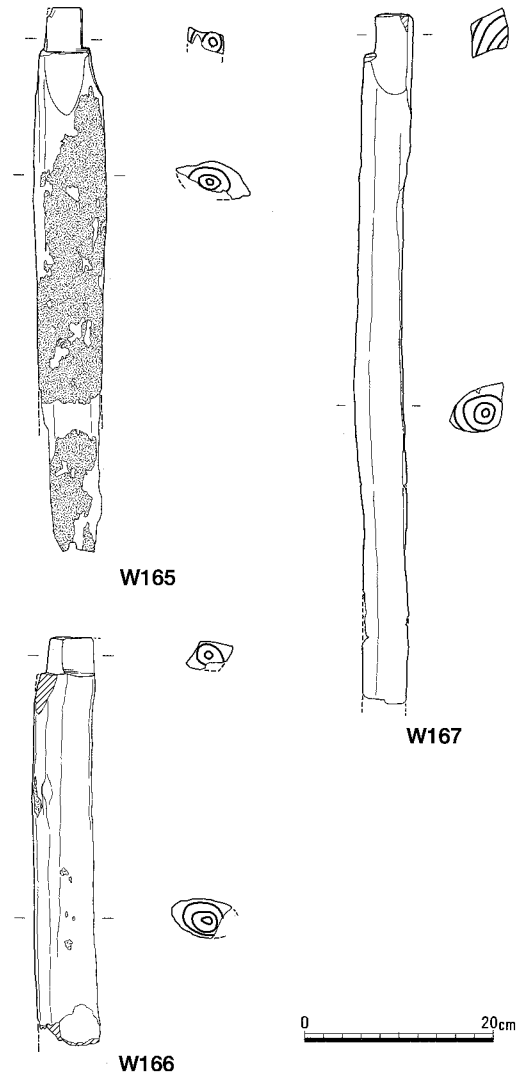
第331図 河道1北岸出土建築部材④ (1/8)

cmほどの抉りがみられる。他は目立った加工痕跡はみられない。表面には樹皮は残っていないが、自然面を残している。樹種はシャシャンボで、その丸太材を利用している。

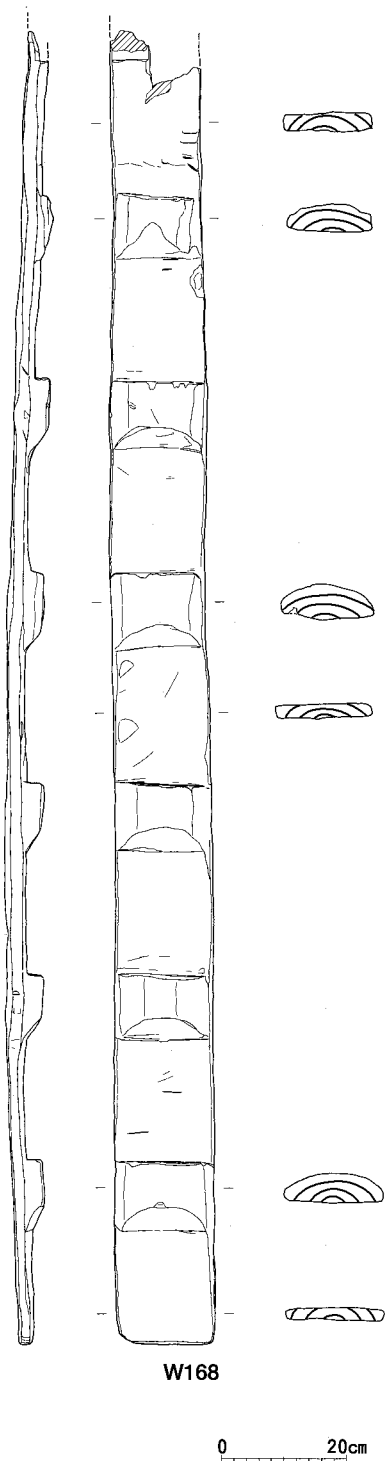
W161～164は支柱（束）である。W161は完形で長さ120cm、径約12cmを測る。頭部にはほぞが作り出されている。ほぞは断面方形で、長さ4.6cm、幅4.7cm、厚さ3.8cmを測る。柱には2か所で欠込み状のほぞ穴がみられる。いずれも形は方形で、木材横断面の約4分の1程度を彫り込んで作られている。上のもので縦5.0cm、横4.0cm、深さ4.0cm、下のもので縦5.0cm、横3.8cm、深さ4.0cmを測る。柱の下部は二股になっている。柱の芯部を削り取り左右に股木を残している。股木間は縦9.5cm、横6.4cmの空間がある。股木上端から上部のほぞ下端まで約106cmを測る。柱の表面には黒色化した樹皮の残痕が観察できる。上述した以外には、表面の枝を切断している程度で、目立った加工は施されていない。木材は二葉松類に属する丸太材を利用している。W162は一部欠損するものの、ほぼ全体を把握できる資料である。基本的な構造はW161と同様であるが、下部の股木の方向がW161に比べ90°異なっている。

W162は全長117.9cm。土圧による歪みが激しく、径11.5×9.0cmを測る。W162の柱頭には方形のほぞが作り出されている。ほぞの長さ4.1cm、幅4.2cm、厚

さ2.8cmを測る。柱には2か所でほぞ穴がみられ、上部は縦5.7cm、横4.8cm、深さ3.5cmを測る。下部で縦4.4cm、横6cm、深さ2.5cmを測る。下端部は二股状に加工されているが、片方の股木は欠損している。股木は幅3.7cmを測り、先端は尖っている。股木間には縦7.2cm、横3.7cmの空間が存在しているが、土圧による変形が激しいことを考慮すれば、もう少し広い空間が想定できる。なお、股木上端からほぞの下端まで約105cmを測る。この支柱の表面には黒色に変化した樹皮の残痕がみられる。木材はW161と同様に二葉松類に属する丸太材を利用している。W163もほぼ完形の支柱である。W161とW162と比較すると、柱に彫り込んだ欠込みの形状が異なる。W163は全長116.2cm、径10.8×9.9cmを測る。上端部は方形のほぞが作り出されており、長さ4.1cm、幅4.0cm、厚さ3.2cmを測る。柱には2か所で欠込みが施されており、上に位置するもので長さ7.6cm、深さ約3cm、下に位置するもので長さ6.5cm、深さ約1.5cmを測る。柱の下端部は二股状になっており、股木が作り出されている。股木の間には長さ7.9cm、幅6.2cmの空間が存在している。柱の表面には黒色化した樹皮の残痕が付着しており、本来は樹皮に覆われていた可能性が考えられる。木材は二葉松類に属する丸太材を使用している。W164は上半部が欠損している。柱の下半部の残存状況は良く、残存長61.2cmを測る。土圧等で



第332図 河道1北岸出土建築部材⑤ (1/8)



第333図 河道1北岸出土建築部材⑥
梯子 (1/12)

変形しているが、径約10.7×8.8cmを測る。下端部は二股状になっている。股木は左右で多少長さに違いがあるものの、先端部を尖らせている点などの形状は他の支柱と類似している。股木間は縦8cm、横4.5cmの空間が存在している。柱は、枝を取り払った痕跡以外には人為的な加工痕跡はみられない。表面には樹皮の残痕が観察でき、本来は全面が樹皮に覆われていた可能性が考えられる。

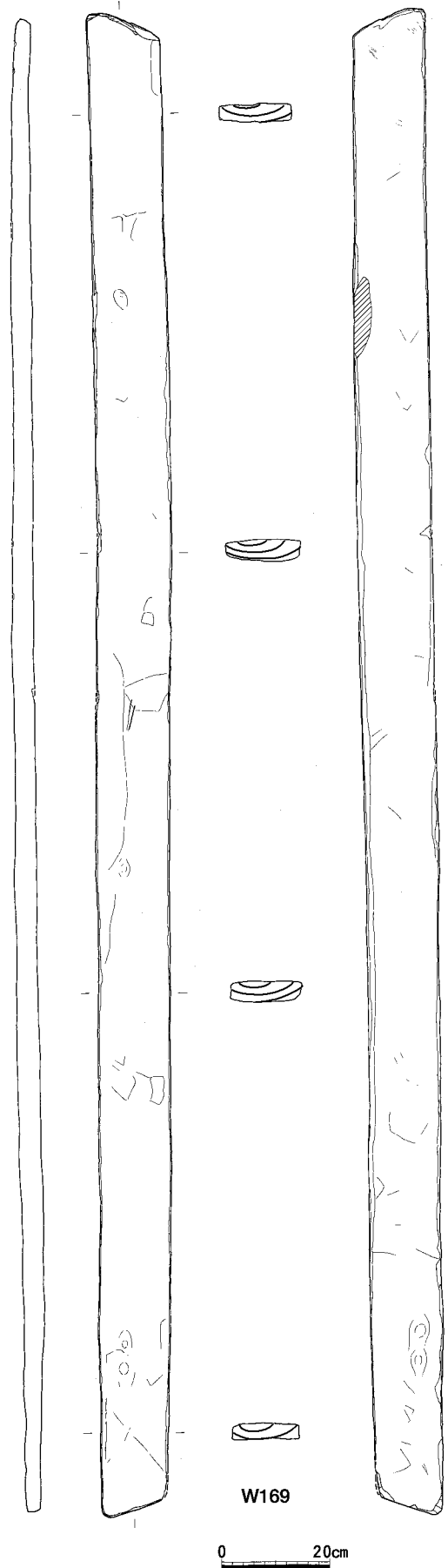
W165~167は頭部にほぞのついた柱である。いずれも第327図に示す河道1北岸の建築部材集中出土箇所の北端で出土した。W165は残存長57.8cmを測る。全体的に残存状況は良くない。柱の径も変形しているが、あえて復元すれば径7~8cmの柱であったといえる。柱の表面には樹皮の痕跡が残っている。柱の頭部にはほぞが設けられている。W166は残存長43.4cmを測る。ほぞは土圧等の影響で横断面形は菱形を呈しているが、本来は一辺3.5×3cmの方形の断面形をしていたものと考えられる。表面には一部で黒色化した樹皮の残痕が観察できる。W167は残存長73.3cmを測る。ほぞは歪んでいるが長さ4cmで、一辺が4cm四方の方形の横断面形をしていたものと考えられる。

W168は梯子である。河道1北岸で柱など他の建築部材と一緒に出土した。梯子は先端部分が欠けているものの、全体的に残存状況は良好である。梯子は芯持材を半裁して削り込んでおり、裏面を平坦に、表面に足掛けを作り出している一木梯子(板梯子)である。梯子は上部が欠損しているが、残存長201.7cm、幅15.9cmを測る。足掛けは計6か所設けられており、側面からみるといずれも上部を直角に、下部を斜めに切り込んでいる。足掛けの横断面は半円形状をなしている。足掛けが一番上部に位置するものが他のものと比べて残存状況が悪く、その原因は不明である。その他の足掛けは保存状態が良好である。足掛けの大きさは長さ10.2~12.5cm、足掛けの上端部の高さも1.7~2.8cmを測る。土圧の影響を考慮しても、足先をかける上端部が約3cm未満というのは、他の出土例に比べて低いといわざるを得ない。足掛けの間隔は14.0~20.6cmである。梯子の下端は直線的に終わっている。この箇所は接地面に相当すると考えられるが、特に磨滅しているといったような痕跡はない。梯子の表面にはわずかであるが加工痕跡や使用痕跡のようなものが観察できる。使用されている木材はクリであるとの鑑定結果を得ている。

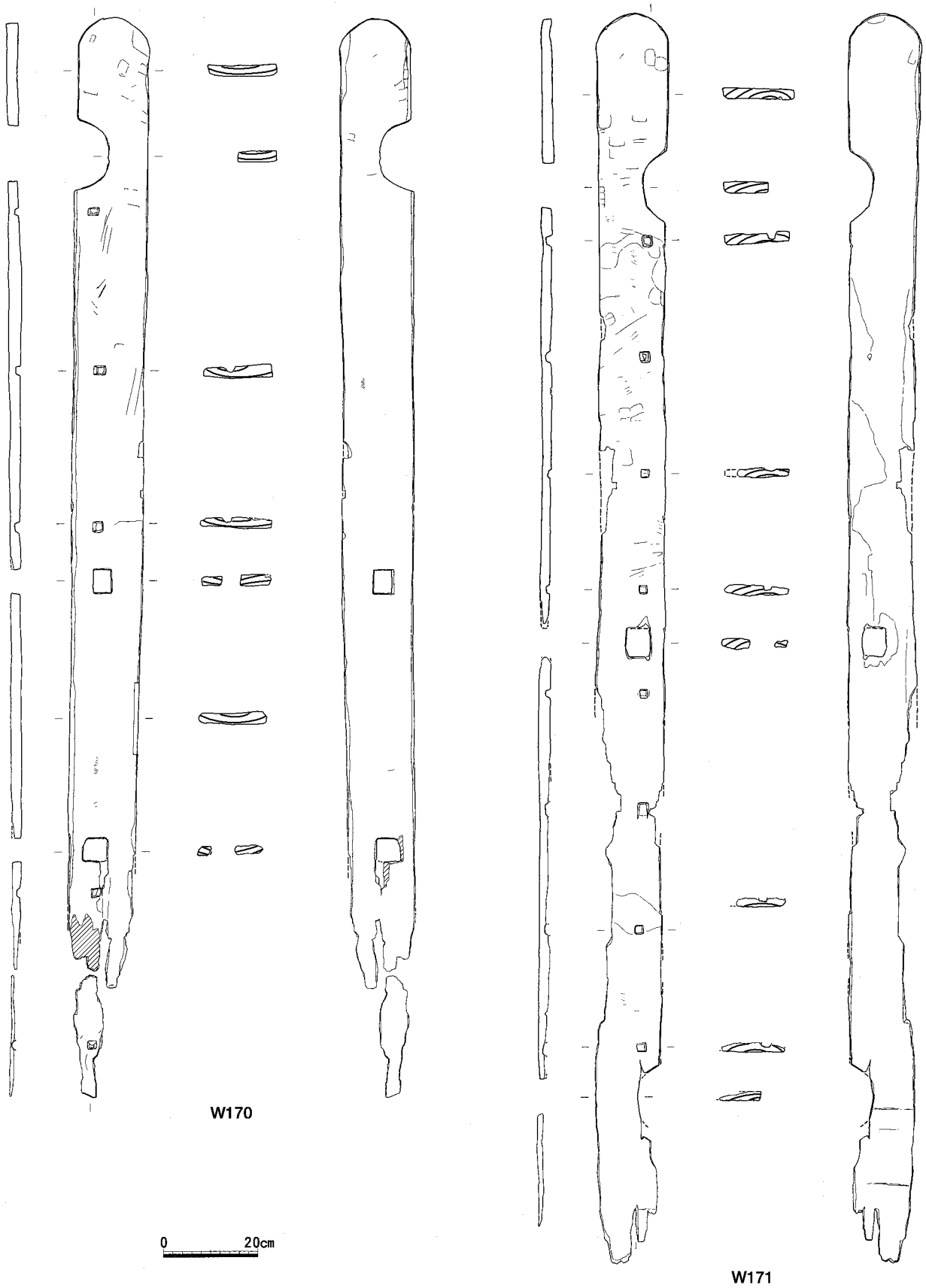
W169は完形の板材である。長さ248.5cm、幅13.7cm、厚さ4.0cmを測る。梯子や柱等とはややかけ離れた位置で出土した。W169はすべて一木であり、使用した木材は樹木の芯に近い箇所の材木を板

目取りにして製作している。使用された樹木はクリである。部材の両端は斜めに加工されている。また、部材の横断面には中央付近が端に比べてやや厚くなっている箇所もみられた。部材は重厚な作りであり、また、全体を丁寧に加工している印象を得た。この部材の用途については明確な答えがあるわけではないが、横断面の大きさが約13×4cmと、W155やW156でみられた貫穴の寸法に近いことから、通柱に通される大引材の可能性が考えられよう。

W170～173はいずれも板材で、半円形の抉りが設けられている部材である。この半円形の抉りは円柱と組み合わさるためのものと推測でき、これらの板材は柱と柱の間を連結した床材あるいは長押のような用途に使用された木材である可能性が考えられる。W170は一部欠損しているが、残存長201.8cm、幅14.9cmを測る。部材の下端部は腐朽のため残存状況は良くない。木材はコナラ節に属する材木を使用しており、木取りは板目取りである。板材の上端は丸く削られており、加工痕跡が顕著である。上端から30cm下の箇所は、半円形に抉りが設けられている。柱と連結するための仕口と考えられる。この形状から柱は直径約15cm程度の大きさのものが想定される。板材には方形のほぞ穴と、貫通していない方形の小孔であるいわゆるえつり穴がみられる。方形のほぞ穴は2か所に設けられており、上のもので5.5×4cm、下のもので4.8×4.8cmを測る。ほぞ穴の間は約50cm離れている。この間は建物の入り口に相当する可能性が考えられよう。このほぞ穴間の中央の右側側面には角を斜めに削りおとしている箇所がみられる。長さは15.2cmを測る。入り口に入るための何らかの施設（梯子等）を取りつけた装置である可能性も否定できない。えつり穴は上半部で3か所、下半部で2か所確認されている。上半部は約2.5cm前後の方形の小孔で、約33cmの間隔で設けられている。下半部のえつり穴も一辺約2cm前後を測る。W170の表面および裏面では加工痕、使用痕と思われる痕跡が観察できる。板材の表面は比較的、平滑な面をなしているのに対し、裏面は粗雑な印象をうけ

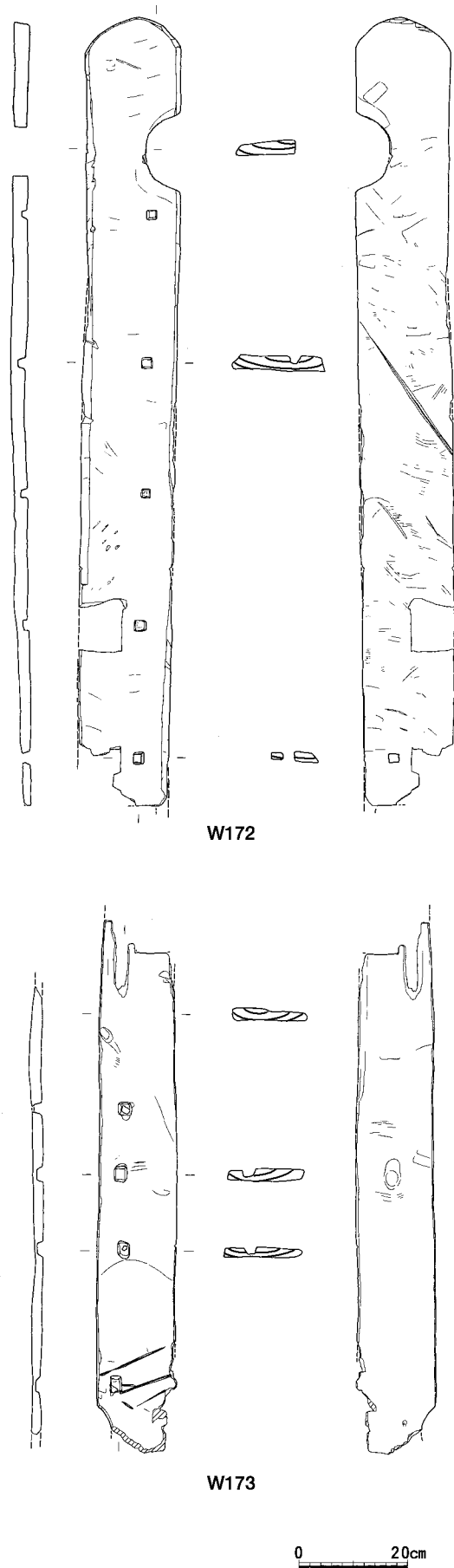


第334図 河道1北岸出土建築部材⑦ (1/12)



第335図 河道1北岸出土建築部材⑧ (1/12)

る。これは裏面では板材を分割したあと、あまり丁寧な仕上げを施していないことに起因するものと考えられる。逆に、表面は使用された結果、表面が磨耗し平滑になったのではないかと推定している。なお、この板材を2つのほぞ穴の中心線を対称にして復元すると、復元長約3mの板材に復元することができる。W171は残存長262.8cm、幅15.0cmを測る。上半部については保存状態が良いが、下半部に至るにつれ、腐朽が進み、残存状況は良くなく、板材の厚さも薄くなっている。板材の先端部は平面形が半円形になるように加工されている。上端から35cm下の箇所では、弧状の抉りがみられる。この箇所には建物の円柱が取りつくものと想定され、径14cmほどの柱が取りついていた可能性が考えられる。この抉り部分は丁寧に加工が施されており、工具痕跡も確認できる。なお、下半部にもこのような抉りが確認できる。残存状況は良くないが、径14cmほどの半円形の抉りがあったものと推定される。工具痕跡等は確認できない。また、板材の中央にはほぞ穴が1か所設けられている。ほぞ穴は6.0×5.3cmの方形を呈する。このほぞ穴から上下にえつり穴が4か所設けられている。えつり穴は約2cm四方を測る貫通しない小孔で、約22cm間隔で設けられている。板材の表面には加工痕跡や使用痕跡がみられた。表側の面は比較的滑らかであるのに対して、裏面は粗い感じを受けた。おそらく、表面を上にして使用したために、表面は磨耗して平滑になったものと推測することができる。W171は中央のほぞ穴を中心と考えるならば、全体の復元が可能である。それによると長さ約264cmに復元できる。なお、木材はコナラ節に属する材木を利用しており、木取りは板目である。W172は下半分が欠損している。残存長は143.8cm、幅17.4cmを測る。上端部は丸く加工されている。また、柱を組み入れるためと考えられる半円形の抉りがみられる。ともに、加工痕跡が明瞭に残る。抉り部分から下の箇所で、えつり穴が5か所で設けられているが、最下段に

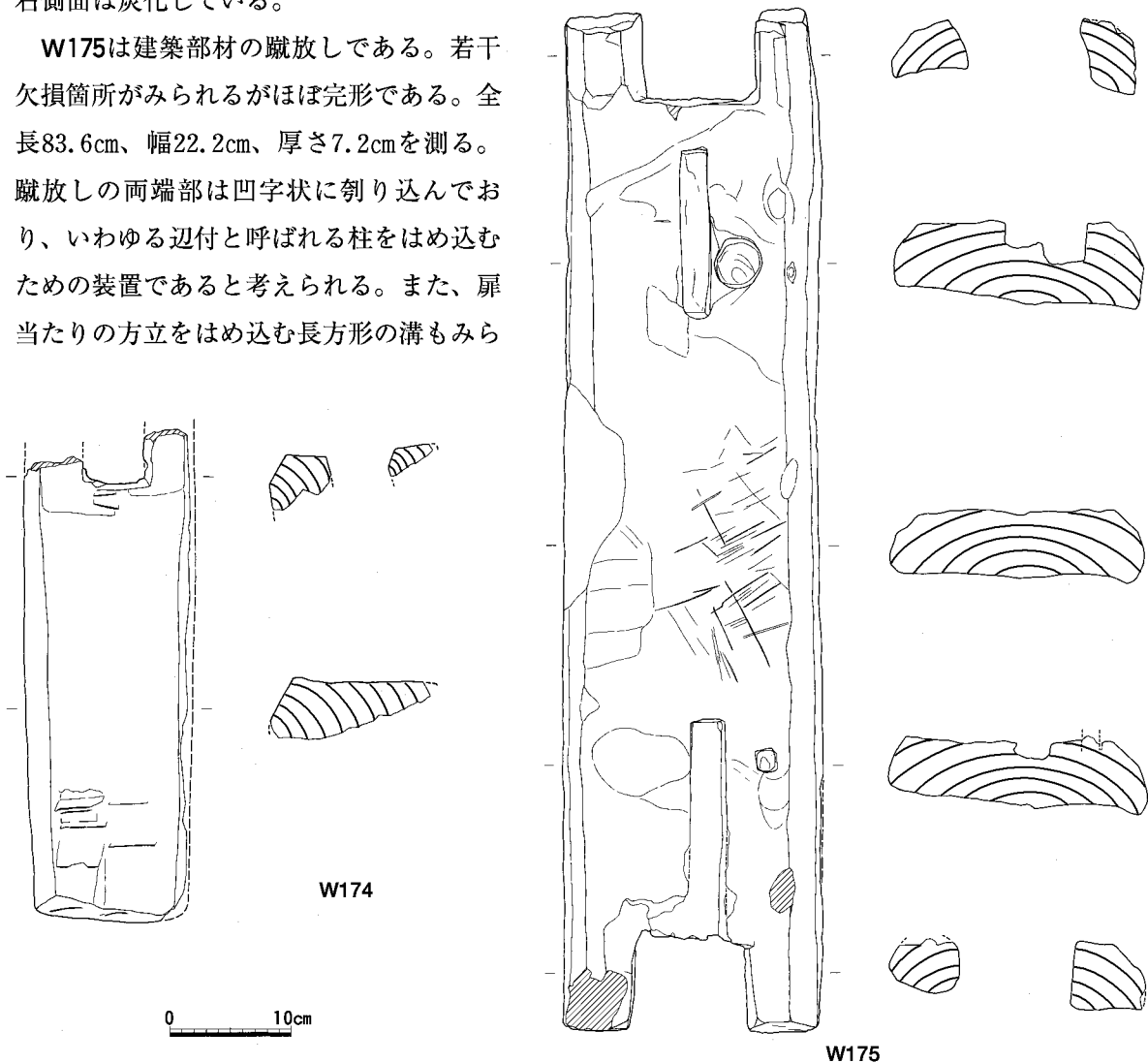


第336図 河道1北岸出土建築部材⑨ (1/12)

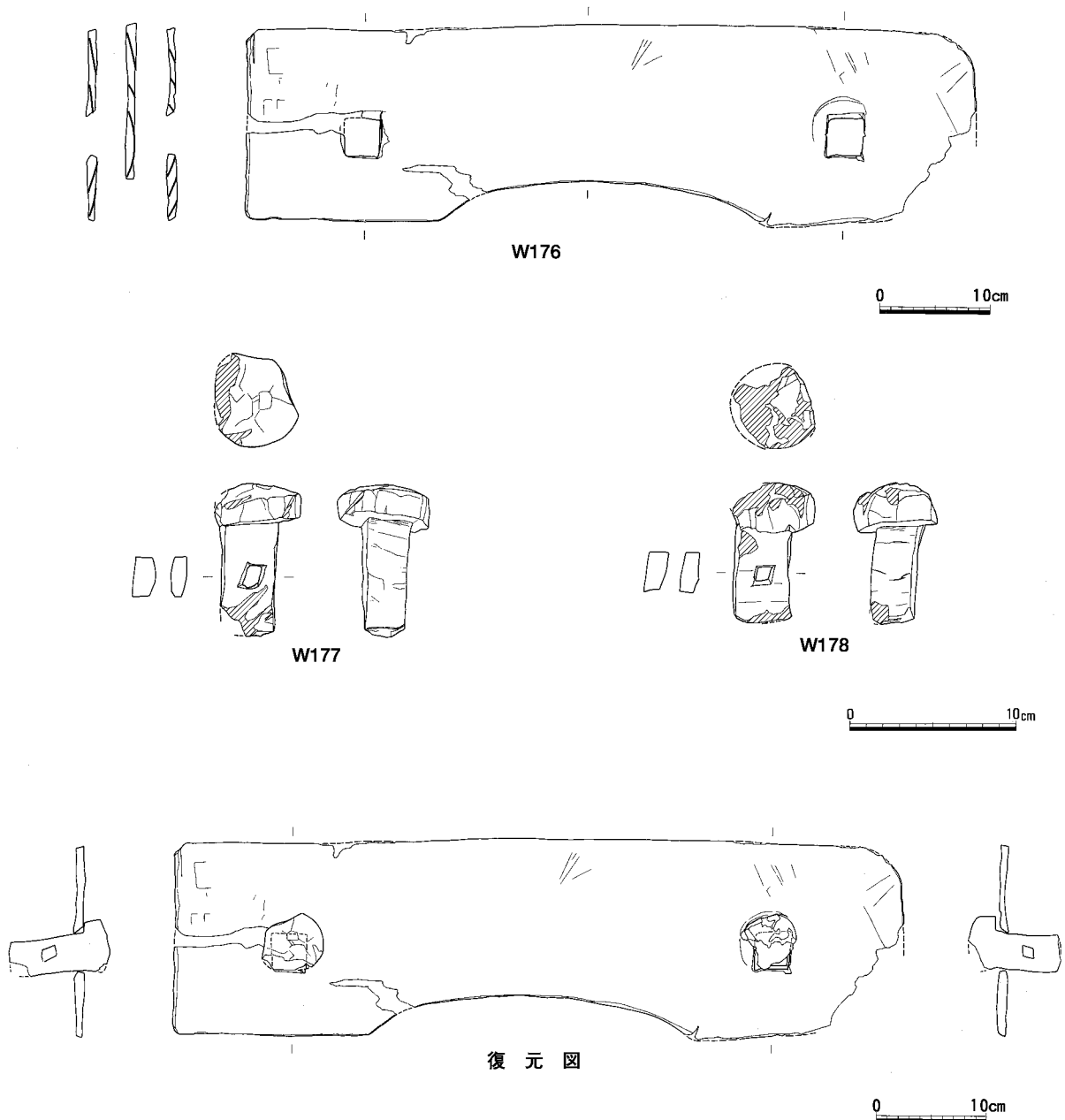
位置するえつり穴は貫通している。えつり穴は約22~25cmの間隔を測る。部材の下端部ではわずかではあるが、方形のほぞ穴の痕跡を確認できたが、その大きさは不明である。表裏面にわたって、加工痕跡等が観察できた。部材は表面が比較的平滑であるのに対し、裏面は粗雑で部材を荒割してあまり加工していないような印象をうけた。W172はスダジイの木材を利用した板目材である。なお、この部材については放射線炭素による年代測定を行った。その結果、1740±60年（BP）との分析結果が出ている。W173は、板材の一部分しか残存していないが、残存長97.7cm、幅14.4cmを測る。残存している上端部では方形のほぞ穴と考えられる痕跡を確認した。大きさは少なくとも一辺が5.5cm以上のものと考えられる。板材には3か所でえつり穴が施されていた。えつり穴の間隔は約10cmと約24cmの2種類を測る。他の部材のえつり穴間が20~30cmであることから考えると、上から二つ目のものはやや不規則な位置にあるといえる。板材の下端部では半円形の挟りの痕跡を確認した。W173に使用された木材はクリであり、クリの板目材を利用している。

W174は破損しているが、方形のほぞ穴をもつ部材である。ほぞ穴は少なくとも一辺が4.5cm以上の方形を呈していたものと思われる。表面には加工痕跡等がみられたが、裏面の荒割した部分にも加工痕跡がみられることから、建築部材として使用された後にも、何かに転用されている可能性がある。右側面は炭化している。

W175は建築部材の蹴放しである。若干欠損箇所がみられるがほぼ完形である。全長83.6cm、幅22.2cm、厚さ7.2cmを測る。蹴放しの両端部は凹字状に削り込んでおり、いわゆる辺付と呼ばれる柱をはめ込むための装置であると考えられる。また、扉当たりの方立をはめ込む長方形の溝もみら



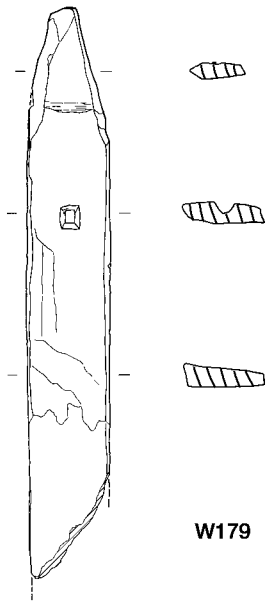
第337図 河道1北岸出土建築部材⑩ (1/6)



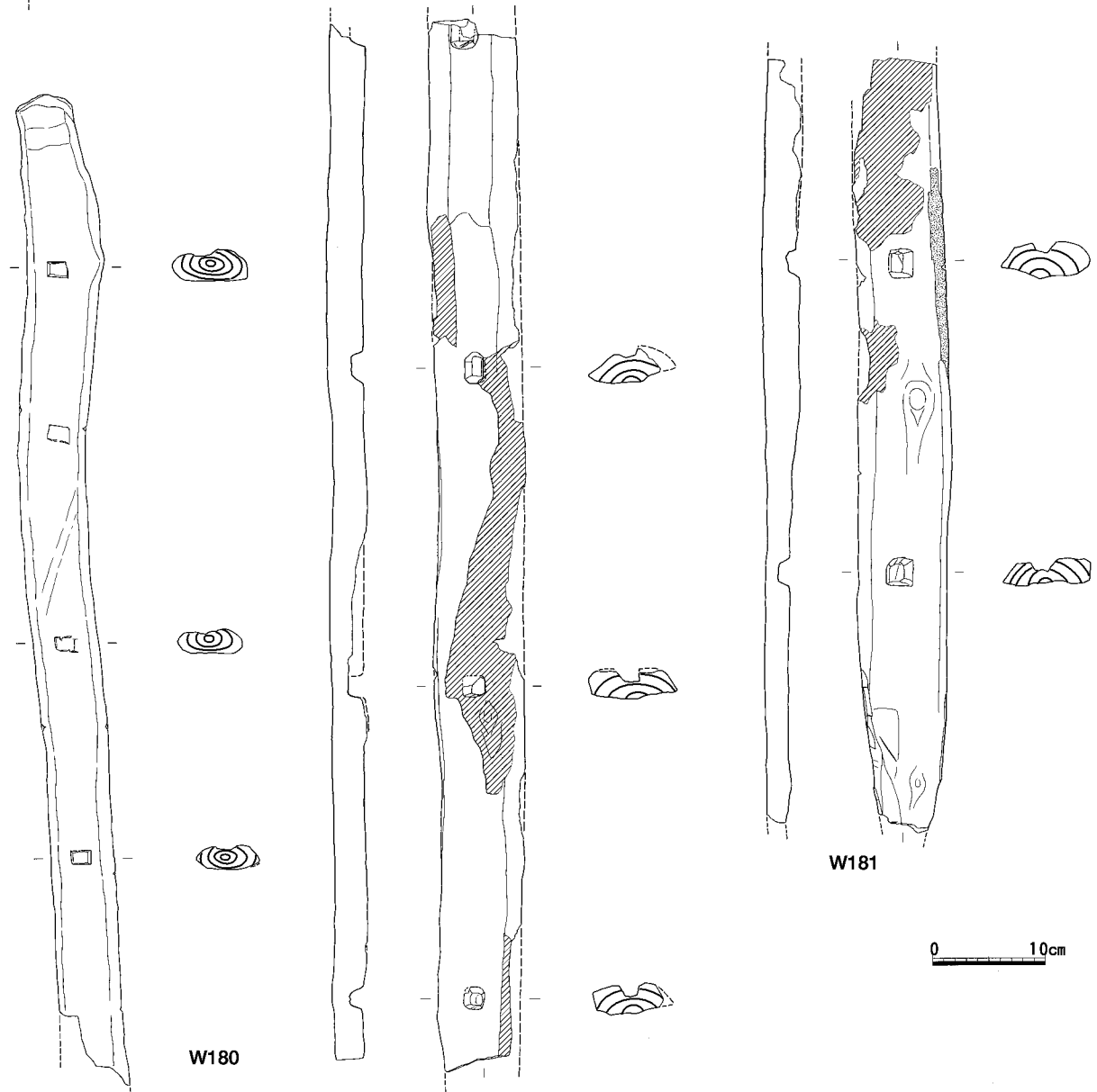
第338図 河道1北岸出土建築部材⑩ (1/4・1/6)

れる。上の溝に接して、扉の軸穴が存在する。軸穴は径約4cm、深さ3.2cmを測る。一方、下の方立をはめ込む溝の付近にも小孔が穿たれ、中に円柱形の木材が残存している。これは扉を固定するための木片と考えられ、猿と呼ばれる鍵の役割をするものである可能性が考えられる。このことから、この蹴放しは片開きである可能性が高く、猿が方立の溝より右側にあることなどから、図面の右側が家の内側に相当する可能性があり、内開きの扉であったと想定される。なお、使用された木材はツブライジで、木材を半裁し、芯に近い部分を利用して製作されている。表面には加工痕あるいは使用による磨滅痕跡がみられるが、裏面は木材を半裁したままのような状態で粗い仕上げとなっている。

W176は板材であり、W177・178の栓を伴っていた。W176は一部欠損しているものの長さ65.8cm、幅17.8cm、厚さ0.8cmを測る。スタジイの板目材を利用しており、上部の長辺は直線に仕上げられているのに対し、板材の下部には弧状のへこみがみられる。板材には2か所で方形のほぞ穴が設けられ



ている。右で3.3×3.2cm、左で3.3×3.1cmを測る。右側のほぞ穴の周辺には栓を装着したときの当たり痕跡がみられる。W177とW178は栓である。W177は左側のほぞ穴に挿入されていたもので長さ9.2cmを測る。笠部は径約5.5cmを測る。軸の中央にはほぞ穴が設けられている。一辺が1.2×0.7cmを測り、奥行き2.3cmを測る。材質はサカキである。W178は右側のほぞ穴に挿入されていたものである。長さ8.5cmを測る。笠部の大半は破損しているが、径約5cmに復元できよう。軸の中央にはほぞ穴があり、大きさは0.8×0.8cmで、奥行き2.2cmを測る。この栓も材質はサカキであった。先の板材（W176）と栓を出土した状況で復元したのが第338図である。これによると、板に栓を装着した際に、栓に設けられたほぞ穴は板材の長軸と同じ方向に開口する。板材と栓のほぞ穴との

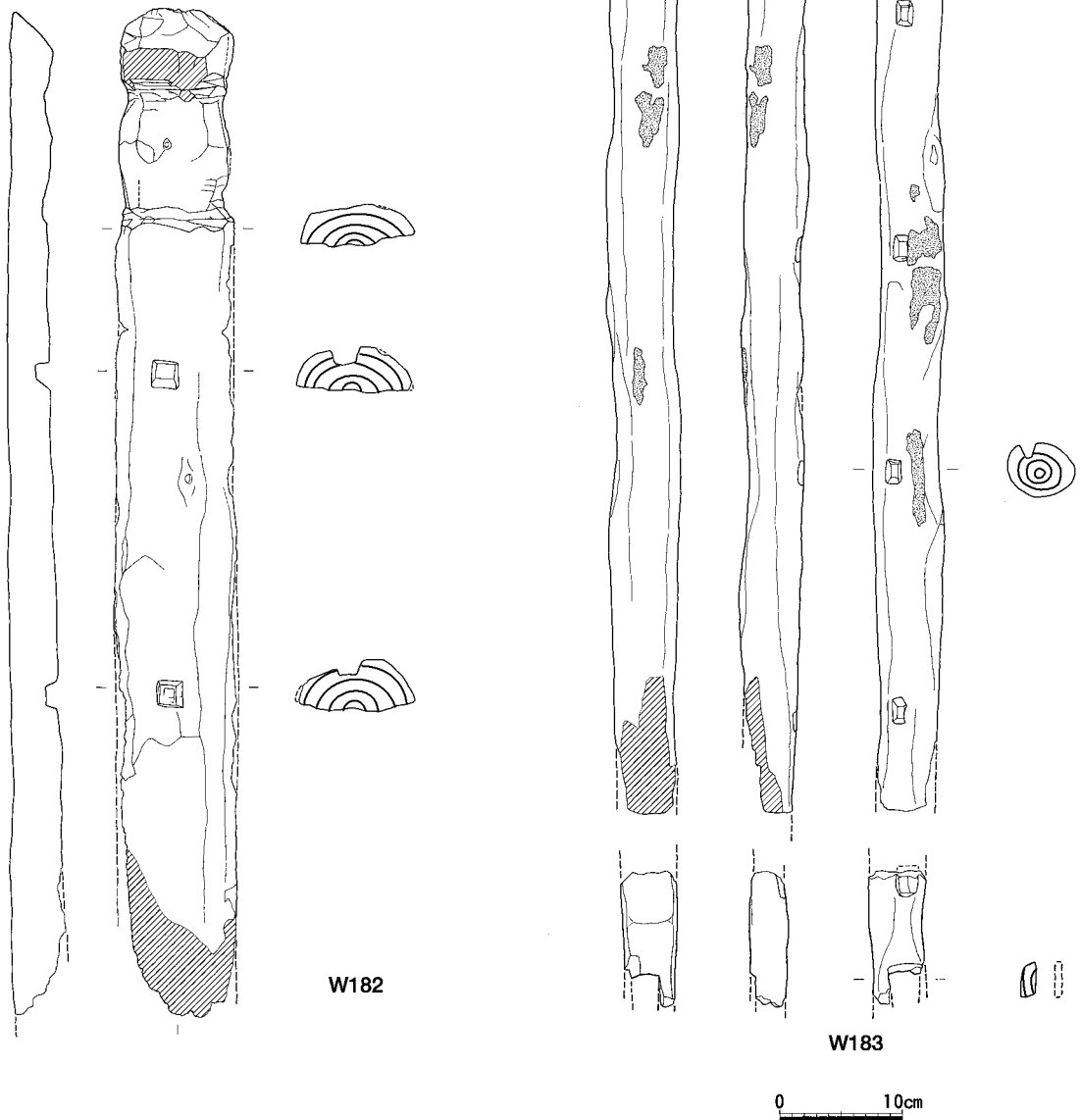


第339図 河道1北岸出土建築部材⑫ (1/6)

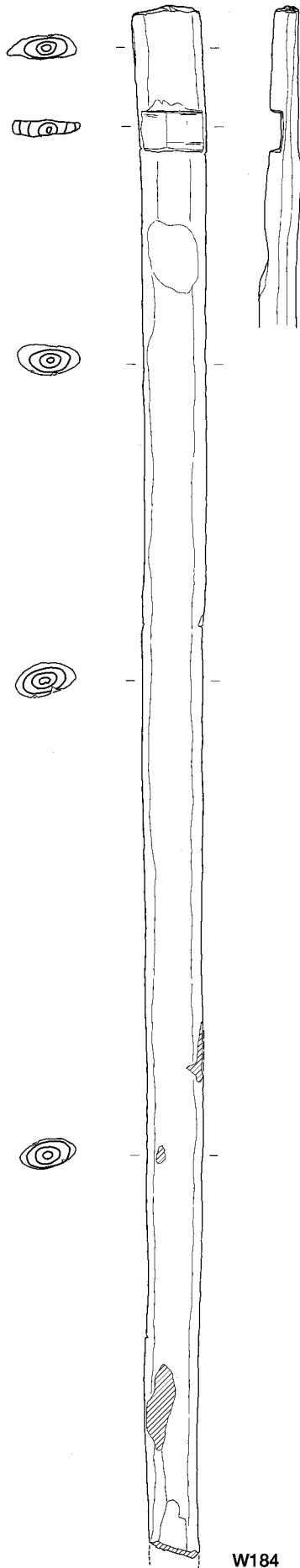
隙間は約1cm強を測り、これに相当する厚さの板材を栓で固定していたと考えられる。用途は推測するほかないが、板材の長辺が弧状を呈していることから、井戸枠など円形のもの周辺を四方から囲うような部材であった可能性も考えられる。

W179~183はいずれもえつり穴が設けられている部材であり、建物の構造材として使用された可能性があるため、建築部材として報告する。

W179は一部欠損しているが、残存長45.3cm、幅6.4cmを測る。先端部は細く尖っている。方形のえつり穴が1か所みられ、1.8×1.5cmを測

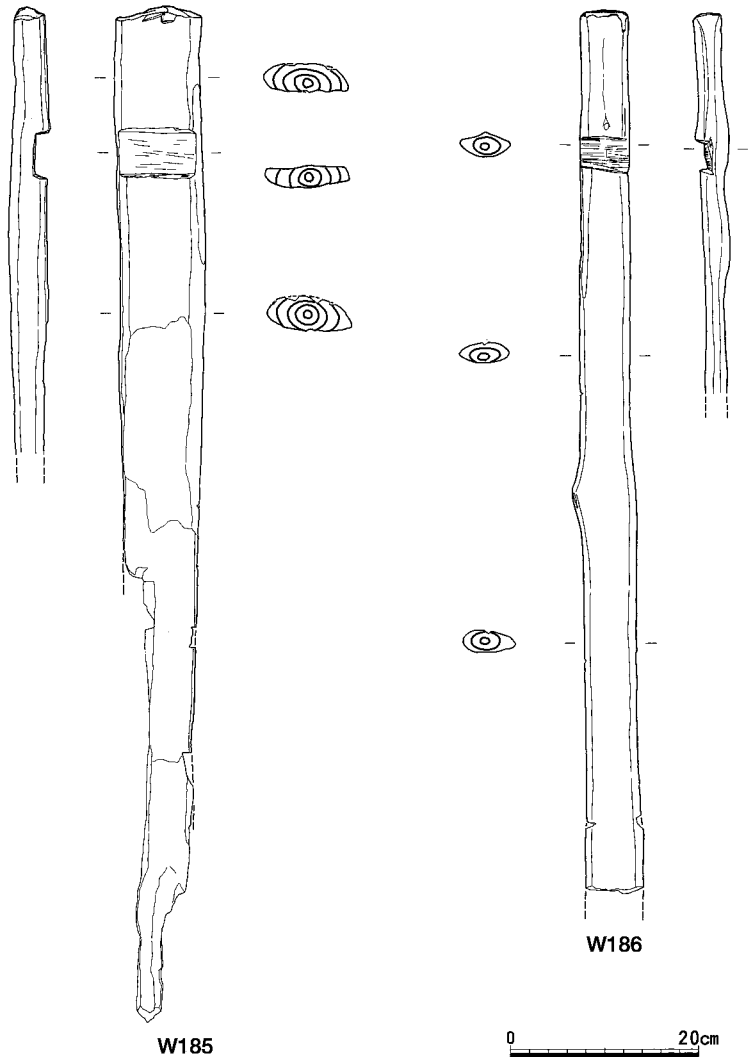


第340図 河道1北岸出土建築部材⑬ (1/6)



W184

る。部材は特に下半部で火を受けて炭化している。材質はクヌギ節またはコナラ節に属する木材の割材を使用している。第327図に掲げる建築部材集中箇所出土した。W180は残存長87.5cm、幅6.8cm、厚さ2.8cmを測る。表裏面は平坦であるが、縁は丸く加工されており、横断面形は扁平な楕円形をなす。えつり穴は4か所みられる。約1.7×1.2cmの大きさで、比較的浅い。えつり穴は約13~17cmの間隔で設けられている。部材の上端付近で1.5cmほどの幅で微妙な凹面がみられる。部材を固定する際の縛った跡とも考えられるがはっきりしない。使用された木材は丸太材で、コナラ節の可能性が考えられるが、断定はできない。W181は二つに分かれているが、出土地点が同じであることから同一個体と考えられる。部材は両者あわせて最低

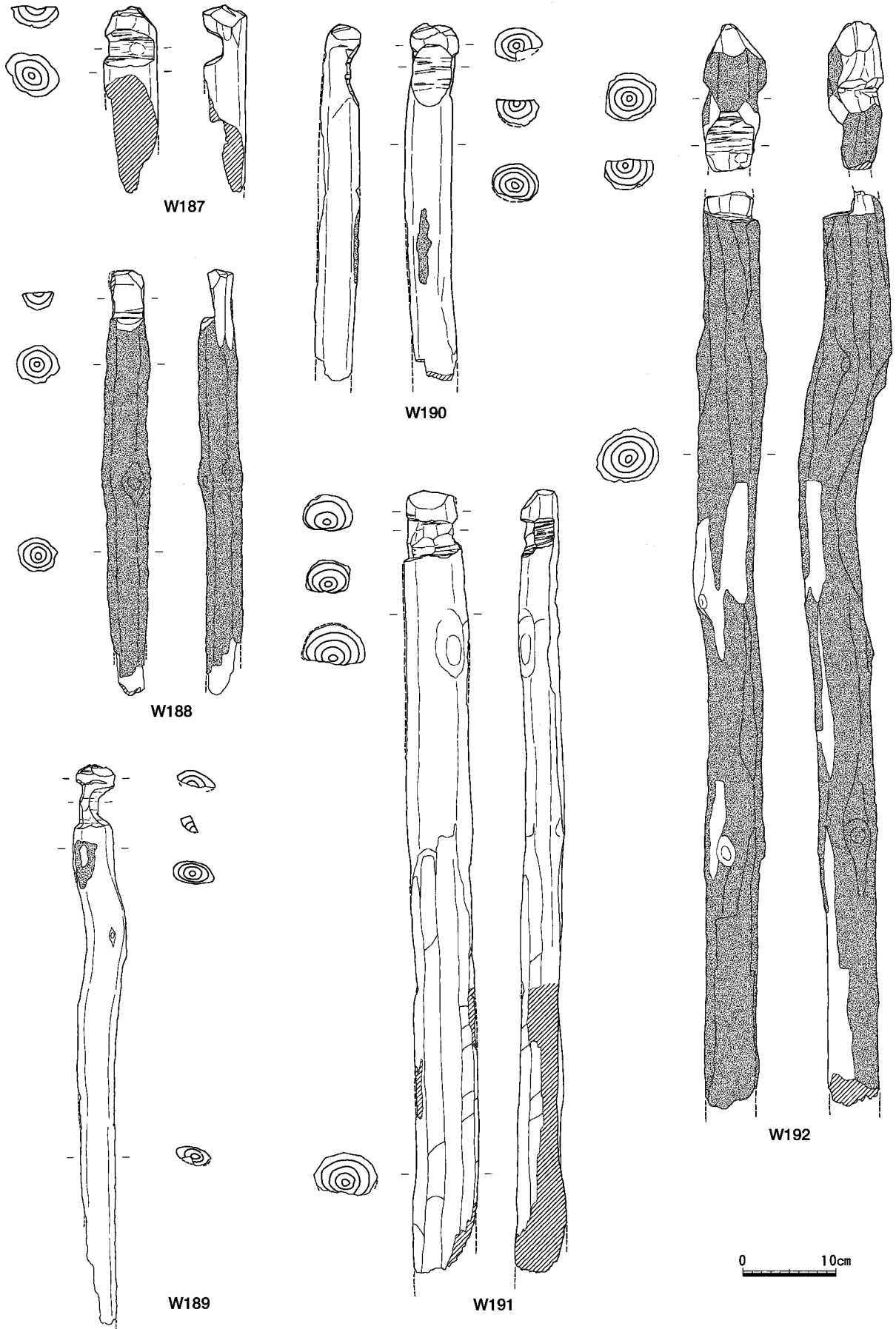


W185

W186

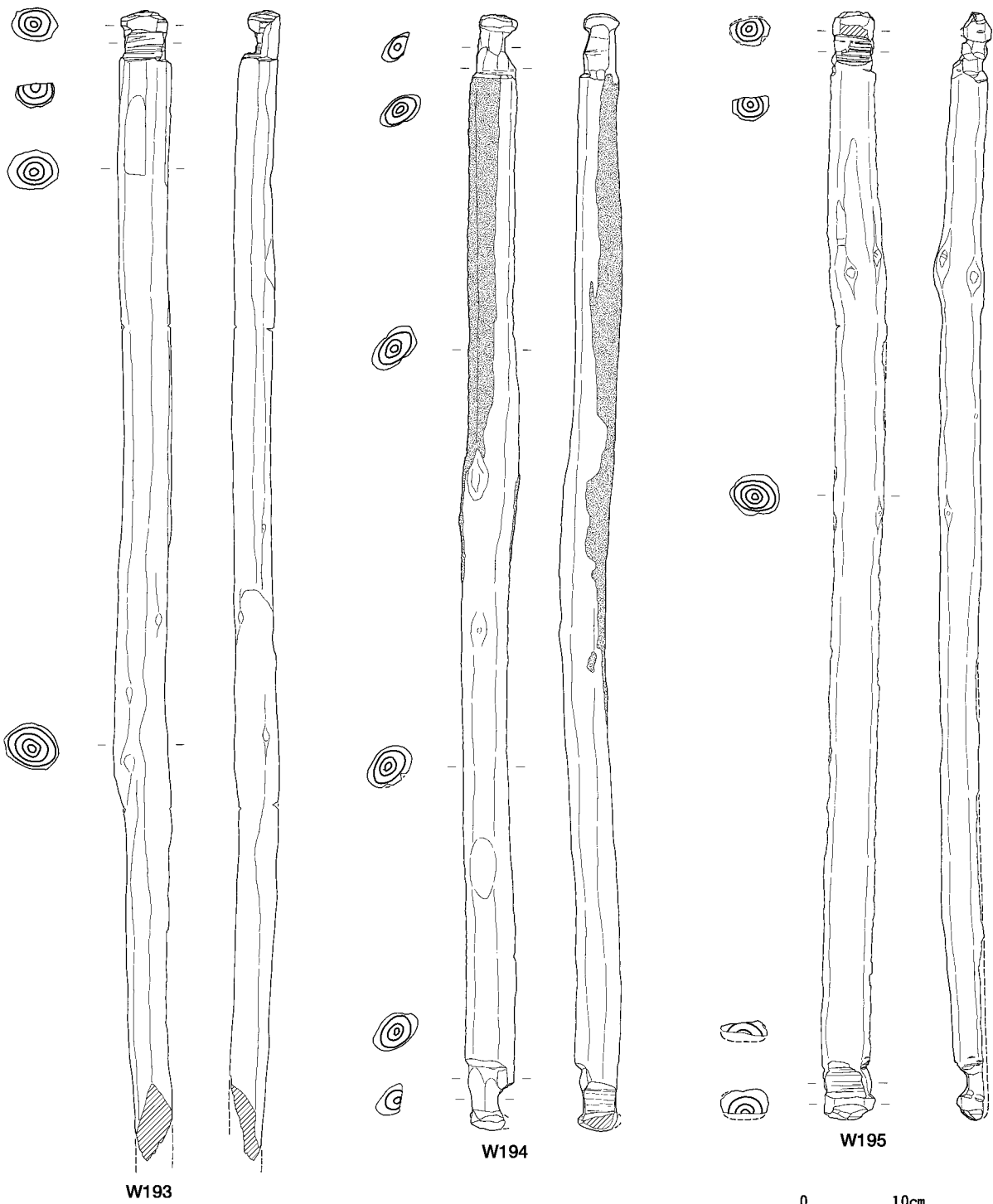
0 20cm

第341図 河道1北岸出土建築部材⑭ (1/8)



第342図 河道1北岸出土建築部材⑮ (1/6)

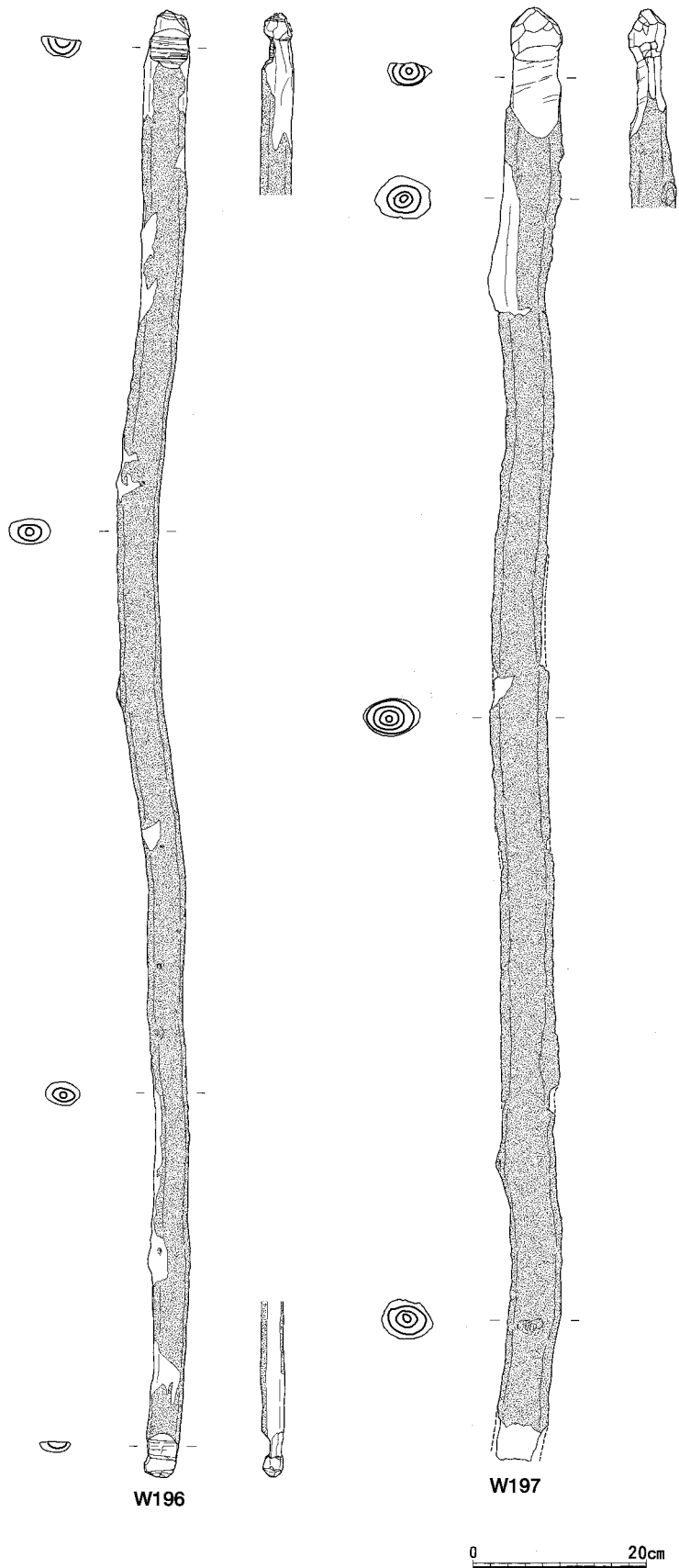
160cm以上あったものと考えられる。部材の表面は幾分欠損しているが、残存状況は良い。えつり穴は左側のもので4か所、右側のもので2か所みられる。えつり穴は約2~2.5cm四方で、25cm前後の間隔で設けられている。アカガシ亜属に属する木材を半裁して削り出している。裏面は割ったままの状態であったが、表面は工具で削っており、自然面を利用しながら、平坦面を整えている。部材は両者とも端部が欠損しているが、右側のものについてはやや先端が細くなっているようである。このこ



第343図 河道1北岸出土建築部材⑩ (1/6)

とから、W181の先端の状況はW179のように尖っていた可能性が考えられる。W182は残存長81.3cm、幅9.4cm、厚さ4.2cmを測る。クヌギ節に属する木材を半裁していることもあり、裏面は木材を荒削したままの状態を残している。先端部は2か所に切れ込みをいれ、円形の頭部と頸部を作り出している。えつり穴は2か所で確認できる。えつり穴はおよそ2cm四方で、約23cmの距離がある。W183は残存長125.5cm、径約5.5cmを測る棒状の部材である。芯持材を利用し、先端は頸部を削り込み頭部を作り出している。頭部は片方から挟られており、欠込みの仕口が施されている。その欠込みの仕口と反対の面にえつり穴が設けられている。えつり穴は計7か所が確認できる。約2×1cmの孔で、他の部材のえつり穴と比べやや長方形に近い。間隔は約16cm前後を測る。また、下端部ではほぞ穴が設けられている。このほぞ穴は半分ほど欠損しているが、縦2.5cm以上、横3.7cmの長方形を呈するほぞ穴である。部材の表面には樹皮の痕跡がみられ、本来は全体が樹皮に覆われていた可能性が考えられる。

W184～186は、長方形の欠込みをもつ棒状の部材である。いずれも第327図に掲げる河道1北岸の建築部材集中箇所、他の建築部材とともに出土してい



第344図 河道1北岸出土建築部材⑰ (1/8)



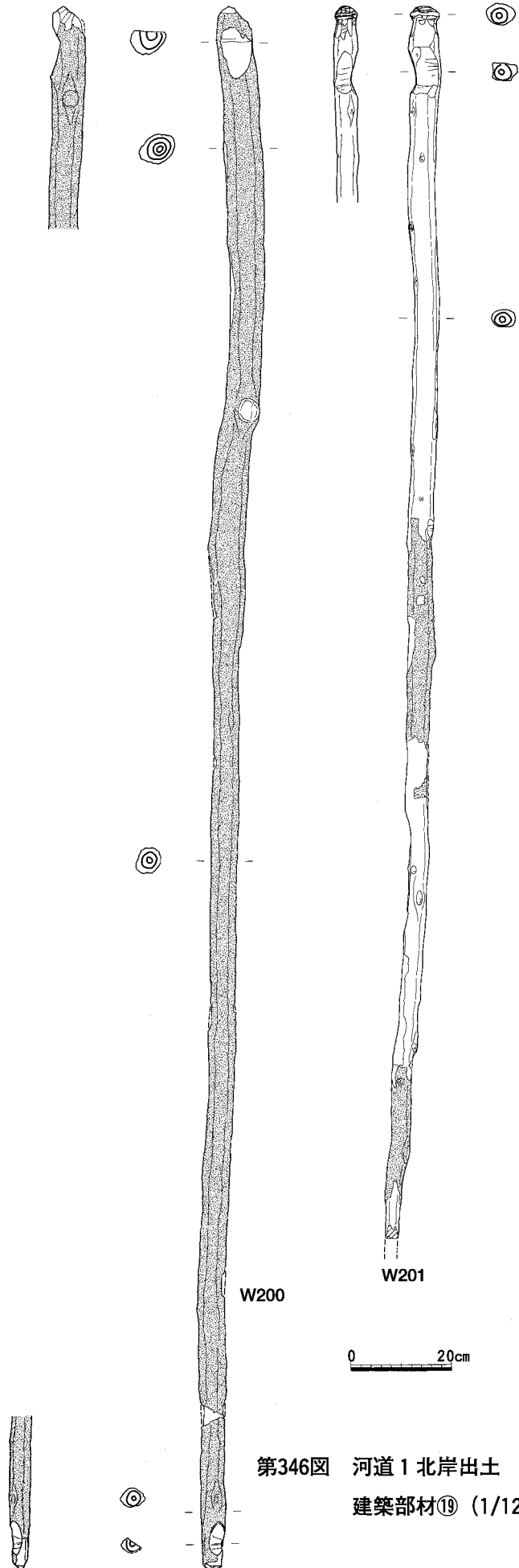
第345図 河道1北岸出土建築部材⑱ (1/8)

る。W184はその中で最も長いもので、残存長196.4cm、幅8.8cm、厚さ3.2cmを測る。横断面形は土圧の影響によるものか、楕円形を呈しているが、ヒサカキの芯持材を利用している。欠込み部は長さ5.2cm、幅7.5cm、深さ1.5cmを測り、上端から約15cmのところのところに設けられている。この欠込みは、側面からみると方形に成形されている。この欠込み部から下へ約15cmほどいった部位が若干くぼんでいるが、これがどのような理由でくぼんでいるのか詳細は不明であるが、部材同士の当たり痕跡である可能性も考えられる。W185は残存長107.7cm、幅8.9cm、厚さ3.1cmを測る。W184と同様にヒサカキの芯持ち材を利用して作られている。欠込みは先端から約15cmのところのところに存在し、長さ5cm、幅8cm、深さ1.5cmを測る。欠込み内は工具痕跡が多数残っており、縦断面が方形となるように丁寧に仕上げられている。W186は残存長93.5cm、幅5.6cmを測る。W184・185に比べて、やや細いものである。欠込みは上端部から15cmのところのところに設けられており、長さ3.7cm、幅5.3cm、深さ約1.2cmを測る。欠込み内には工具の加工痕跡が多数みられる。使用している木材はヒサカキの芯持ち材である。

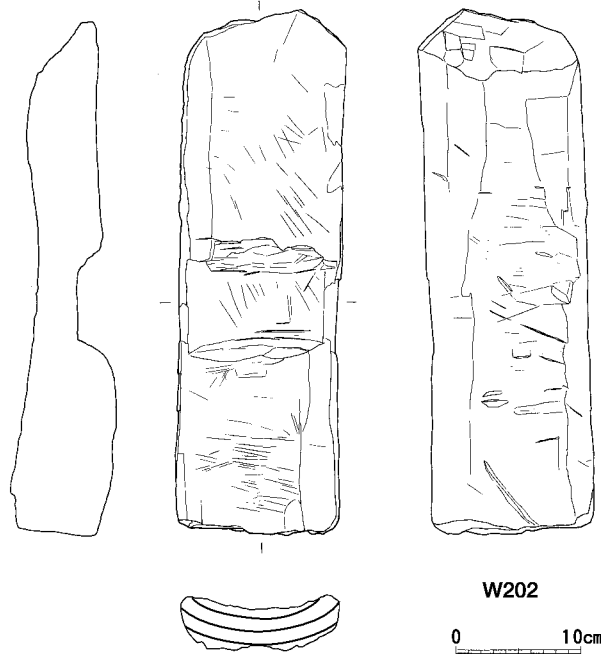
W187~201はいずれも先端部を加工し、さらに抉りを設けて、欠込みを思わせる仕口を有するものである。なお、これらの部材はすべてが建築に使用されたものという根拠はないが、形状から建築部材に使用された可能性が高いものとしてここに

掲載しておく。

W187は残存長19.9cm、径約5.7×4.6cmの部材である。芯持ち材の丸太材を抉って仕口を設けている。仕口は長さ4cmを測り、内部には工具による加工痕跡を多数残す。全体に炭化しており、残存状況は良好ではない。W188は残存長45.3cm、径約4.5cmを測る部材である。先端は周辺を削ったのちに、幹半分を削り取ってほぞのような仕口を作り出している。その他の部分は全面樹皮に覆われている。W189は残存長60.0cmを測る。若干屈曲している。上端部は頸部を細く削り取り頭部を作り出している。その後片方を丸く抉り取り、仕口を作り出している。丸太材を利用しており、幹には一部であるが樹皮が残っている。土圧の影響を受けている可能性があり、断面は楕円形を呈しており、径4.3×2.4cmを測る。W190は残存長38.1cm、径約4.5cmを測る。先端を加工して円形の突起を作り出した後に工具で抉っている。欠込みの内部には多数の工具痕がみられる。材木は丸太材を使用しており、部材には樹皮の痕跡が残っていることから、当初はこの部材の全体が樹皮に覆われていた可能性が考えられる。W191は残存長83.8cm、幅6.7cm、厚さ4.7cmを測る。先端から約3.5～7.0cm下の部分を帯状に削り取り、頸部とともに頭部を作り出している。その後、右側に浅い仕口であるが欠込みを施している。この部分には多数の工具痕跡がみられる。材木は丸太材を半裁したものを利用しているが、裏面は荒割をしたのみで丁寧な加工は行われていない。表面は丁寧に削っており、いたるところで工具によって削り出された加工面を観察することができる。部材は一部が炭化



第346図 河道1北岸出土
建築部材⑱ (1/12)



第347図 河道1北岸出土建築部材⑳ (1/6)

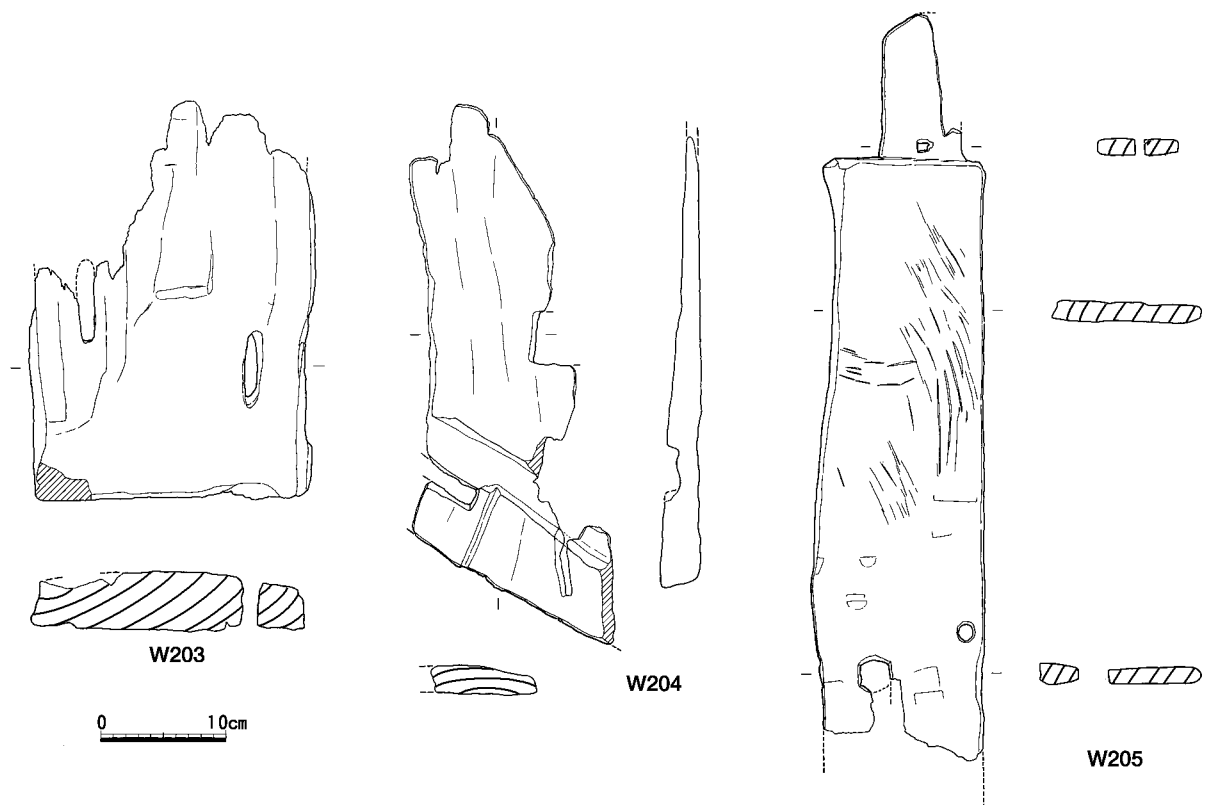
しており、火を受けた後に廃棄されたものと考えられる。W192はちょうど、仕口の部分で欠損している。残存長は163.8cm以上、径6.5×5.5cmのいくぶん屈曲した丸太材を使用している。仕口は先端から下約10cm以下の部分を削り、頸部を作り出した後に、欠込みを行っている。欠込みは長さ8cm以上、幅5cm以上を測る。幹の部分は枝を払った程度の加工しか施されておらず、樹皮が全面にわたって残っている。W193は残存長109.8cm、径5.2×4.4cmを測る丸太材を利用した部材である。部材は先端部から約2cmのところから長さ2.5cmにわたって彫りくぼめ、先端に突起部を作り出している。この先端部分には多数の工具痕跡がみられる。この木材は全体的に炭化し

ており、この部材が火を受けた後に廃棄されたことがわかる。W194は完形の部材である。部材は土圧等の影響でやや歪んでいるが、全長は107.3cm、径約4.2cmを測る。部材は両端を削り出して突起状の頭部を作り出した後に、右側から抉りを施して欠込みを作り出している。欠込みの芯心寸法は約1mを測る。部材はヒメシヤラの芯持ちの丸太材を利用している。表面には樹皮が残存している。W194は河道1北岸に位置する構造材4に伴う部材であり、他の棒状の部材とともに建物か何かを構成する部材であったと思われる。W195も完形で、残存長106.3cm、径約4.8×4.0cmを測る。部材の両端部には先端に円形の突起を作り出すとともに、その頸部付近を大きく抉って、欠込み状の仕口を作っている。木材はクヌギ節に属する木材の丸太材を利用していた。部材は全体が炭化しており、火を受けた状態であったが、一部で樹皮の痕跡が確認できた。欠込みの芯心寸法は約98cmを測る。W196も完形の部材で、全長169.9cmを測る。径は約4～5cmを測り、下にいたるにつれ、やや細くなっている。両端はいずれも先端からやや内側を削り取って、先端に円形の突起を作り出したのちに、大きく欠込みを施している。部材はやや屈曲している。スダジイの丸太材を使用しており、全面に樹皮を残している。欠込みの芯心寸法は約160cmである。W197は一部欠損しており、残存長168.8cm、径約6.8×5.0cmを測る。先端部は円形の突起を作り出しており、突起の下部に抉りを設けている。これ以外の部分ではすべて樹皮に覆われており、原木の先端のみを加工した部材であるといえる。第327図に掲げた北岸の建築部材集中箇所から出土しており、梯子の西端の下に横たわっていた。W198も一部欠損しているが残存長163.6cm、径約6.0×5.2cmを測る。部材は先端に円形の突起を作り出した後に、その基部付近に長さ10cmにわたるやや浅い抉りを設けている。部材はやや屈曲しているが、芯持ち材を利用しており、表面は先端部を除き、すべて樹皮に覆われている。原木の先端部のみを加工した部材といえる。北岸の建築部材集中箇所に近い部分で発見されている。W199は完形の部材で全長155.5cmを測る。上端部は先端部からやや下の部分を削り取り、先端に小さな突起を作り出している。その後、その一方から欠込みを施して仕口を作り出している。下端部は上端部のように突起を作り出すこ

となく、木材に直接欠込みを施している。部材はクヌギ節に属する木材の丸太材を使用しており、表面はそのほとんどが樹皮で覆われている。欠込みの芯心寸法は約147cmを測る。W200も両端に仕口を施した部材で、完形品では最長のものである。この部材は他の多くの部材にみられたように先端部に突起を作り出すことなく、原木に直接欠込みの仕口を施している。全長309.5cm、部材の径は7×6cmを測る。全体が樹皮に覆われている。欠込みの芯心寸法は約294cmを測る。図面の上が太いことから樹木の根元に近い部分と考えられる。W201は一部欠損しており、残存長242.3cm、径5.7×4.3cmを測る。先端部には円形の突起を削り出したのち、先端から約10cm付近を欠き込み、仕口を作り出している。欠込みは向きをかえて施されている。部材は芯持ちの丸太材を使用しており、部材のところどころに加工痕跡がみられ、また、一部で樹皮が残存しており、本来は全面が樹皮に覆われていた可能性も考えられる。河道1の建築部材集中箇所付近で検出されている。

なお、このように部材の先端に頭部を設け、幹を抉って欠込みの仕口を作り出す部材は河道1北岸からその他にも約30点が出土している。

W202は長さ41.8cm、最大幅12.8cm、最大厚8.4cmを測る角材であり、その中央を彫り込んでいる部材である。この部材は全面にわたって工具による加工痕跡がいたるところでみられ、全体の仕上がりも粗雑な印象をうけるが、完形である。部材の縦断面はやや反り気味の底部から上方に向けては斜めに立ち上がり、下の他の部分では直角に立ち上がっている。上面の中央部には長さ10cm、幅10.5cm、深さ3cmの削り込みがみられ、特に工具による加工痕跡が多く残っている。木取りは芯去材の割材を削り出している。この部材の用途であるが、当初は容器である槽あるいはその他に何かの未製品と考えられたが、岡山市雄町遺跡で、同様に中央に削り込みを施した木製品が柱穴の下部で出土しており、いわゆる礎板として利用されていたことがわかっている。この雄町遺跡で出土した礎板はここで報告

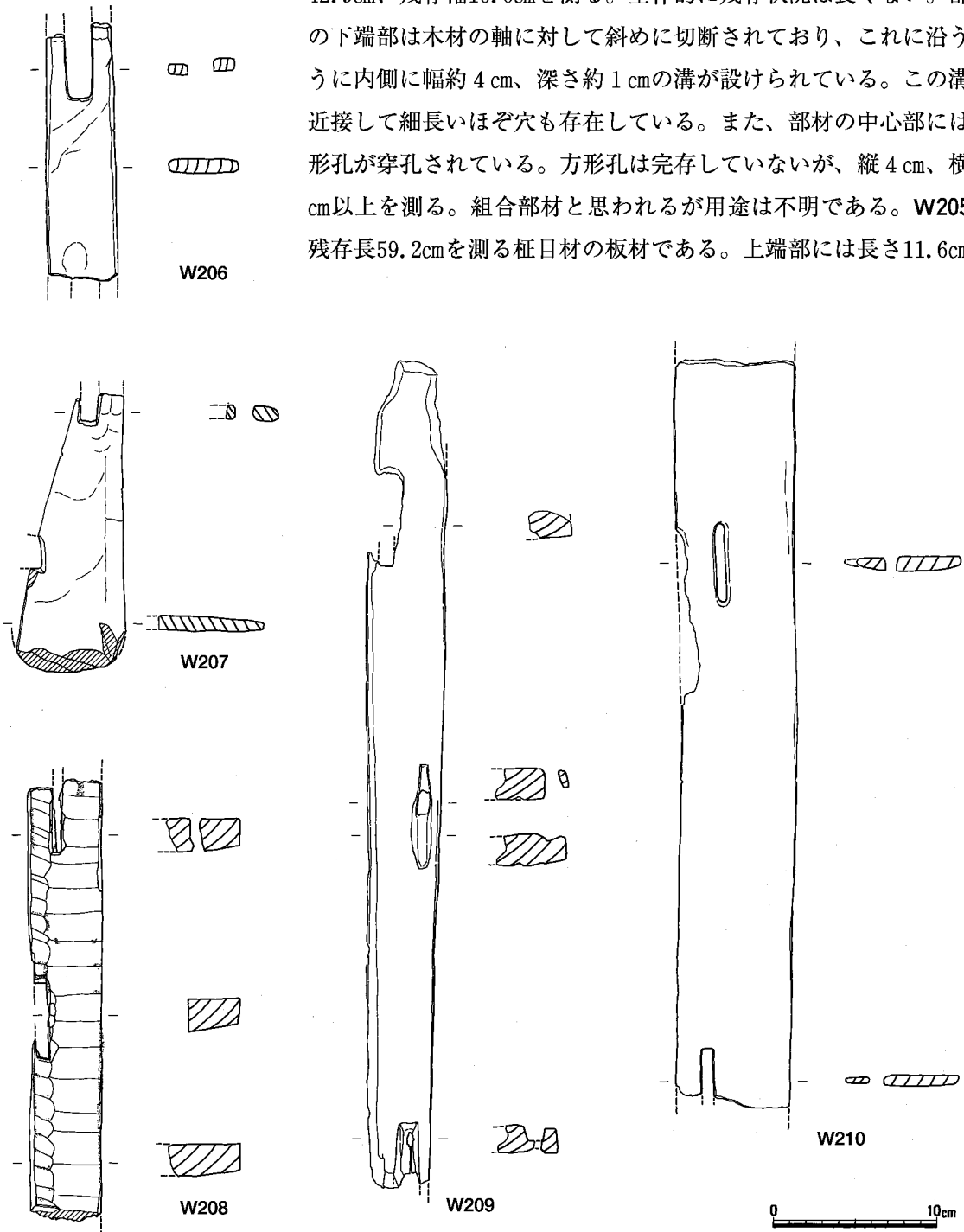


第348図 河道1北岸出土部材① (1/6)

する部材と比べ、全長および中央の凹部もひとまわり大きなものであるが、その形が類似していることから、ここではこの部材の礎板として考えておく。これが礎板であるとすれば、この上に径10cm程度の柱が設置されていた可能性が考えられる。

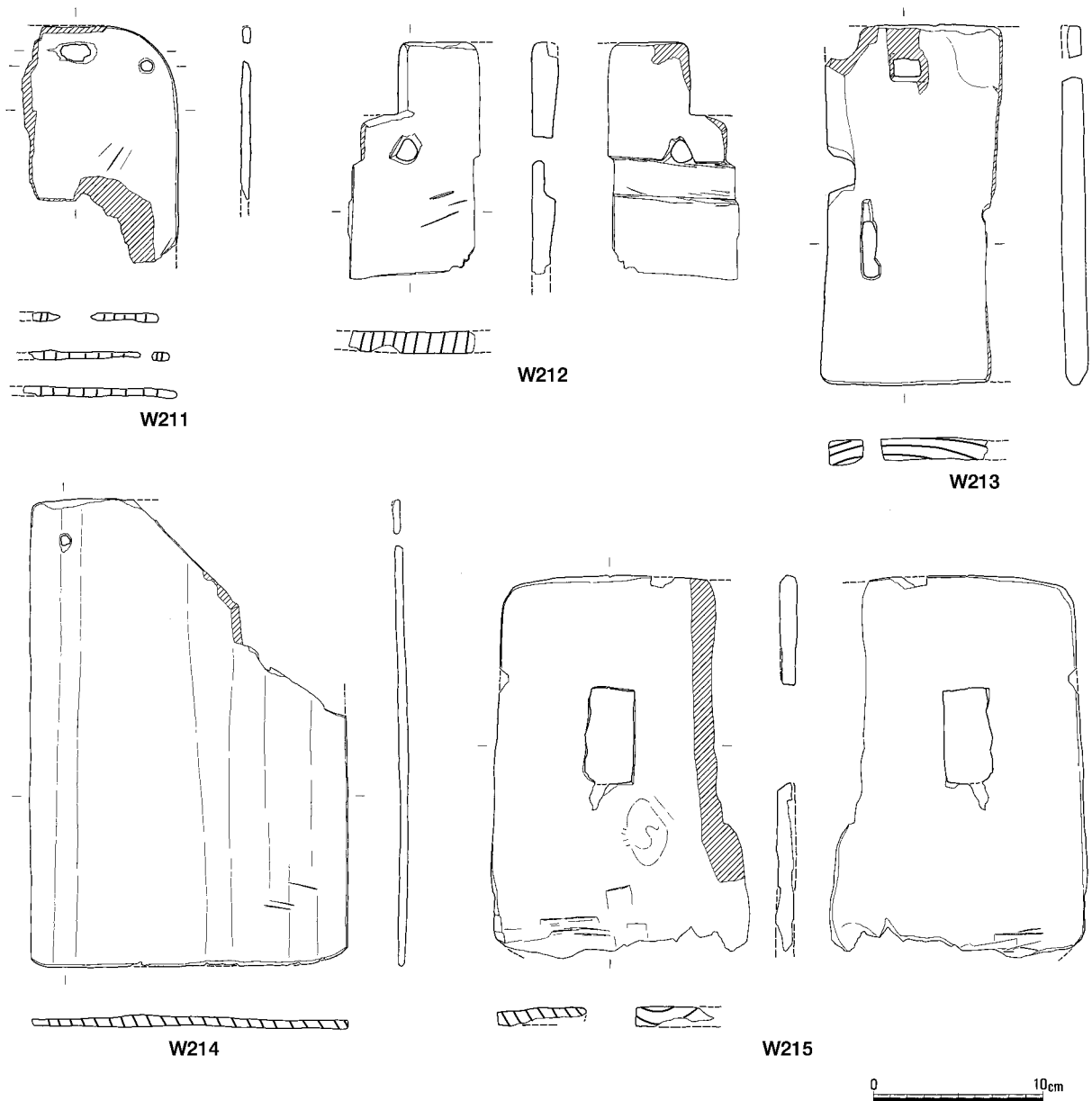
W203~215は穿孔あるいはほぞ穴が施された部材である。様々な形態があるが、用途は不明であるものが多い。W203は一部欠損しているが、残存長31.6cm、幅22.0cm、厚さ4.7cmを測る板材である。板材の下半部には細長い穿孔が施されている。穿孔は左側のものは欠損しているが長さ5.5cm以上、幅1.2cmを測る。右側のものは長さ6.1cm、幅1.4cmを測る。全体的に残りは良くない。W204は残存長

42.9cm、残存幅16.0cmを測る。全体的に残存状況は良くない。部材の下端部は木材の軸に対して斜めに切断されており、これに沿うように内側に幅約4cm、深さ約1cmの溝が設けられている。この溝に近接して細長いほぞ穴も存在している。また、部材の中心部には方形孔が穿孔されている。方形孔は完存していないが、縦4cm、横3cm以上を測る。組部品材と思われるが用途は不明である。W205は残存長59.2cmを測る柱目材の板材である。上端部には長さ11.6cm、



第349図 河道1北岸出土部材② (1/4)

幅6.5cmの板状の突起が作られている。その基部付近には一辺が1cm程度の方孔が設けられている。この突起と部材の体部との境目にはけびき線と思われる細線が見られる。体部は幅13.6cmを測る。体部の下端付近に2.6×2.2cmの方孔が設けられている。また、その横に円形の穿孔がみられるが、これは木材の節目である。部材の表面には工具痕跡がみられる。柁目材を利用している。W206は残存長15.9cm、幅4.3cmを測る柁目材の板材である。部材の上下に長方形のほぞ穴が設けられている。ほぞ穴は欠損しているが、幅1.4cm、長さ4.5cm以上を測る。W207は欠損箇所がみられるが、残存長17.2cm、残存幅6.8cmを測る。柁目材の板材で、残存している範囲で2か所にほぞ穴がみられる。上端のほぞ穴は幅1.0cm、長さ1.6cm以上を測る。下のものは長さ2.0cm、幅0.6cm以上を測る。W208は割材を削り出して製作した部材で、残存長27.1cm、幅4.5cm、厚さ2.0cmを測る。部材には長方形のほぞ穴が2か所設けられている。この木材は樹種鑑定を行っていないが、残存状況が極めて良好であり、表面には平坦面を作り出すための手斧痕跡が明確に確認できた。また、表面には赤色顔料と思われる



第350図 河道1北岸出土部材③ (1/4)

ものが付着しており、何か特別な用途に利用された可能性がある。W209は板目材の板材であり、残存長50.6cm、残存幅4.9cmを測る。先端付近は炭化しており3か所に穿孔がみられる。上の穿孔は炭化しているため、その形状は不明である。中央付近の穿孔は1.4×0.8cmを測る。下の穿孔は完存していない。これらの孔は、穿孔する以前に浅い溝を彫り込んで、そこから穿孔を施している。W210は柾目材の板材であり、残存長45.8cm、幅7.5cmを測る。2か所で細長い長方形の穿孔がみられる。上の穿孔は4.6×0.6cmを測る。下のものは完存していないが、幅0.6cm、長さ3cm以上を測る。部材は中央でやや厚く、端部ではやや薄くなっている。W211は欠損しているが、残存長14.0cm、残存幅9.2cmの柾目材の板材である。板材には穿孔が2か所で施されており、一つはやや方形に近いもので1.6×1.0cmを測るが粗雑なものである。もうひとつは円形で径0.7cmを測り、先の穿孔に比べると丁寧な作りである。W212は欠損箇所があるが、残存長14.0cm、残存幅7.4cm、厚さ1.3cmを測る柾目材である。板の中央では径1.2cmほどの円孔がみられるが、あまり丁寧な仕上がりではない。円孔に接して裏面で幅2.0cm、深さ0.6cmの溝が彫り込まれている。組部件材と考えられるが用途は不明である。W213は板目材の長方形の板材で、2か所の穿孔と左端部で削り込みがみられる。全長21.2cm、残存幅9.3cm、厚さ1.4cmを測る。穿孔は上のもので1.8×1.5cm、下のもので3.6×1.4cmを測る。W214は

一部欠損しているものの、全長27.5cm、幅18.7cm、厚さ0.6cmを測る長方形を呈する薄い板である。板の左上には穿孔がみられるが、無理やり穿孔したような形態で粗雑な印象を受ける。柾目材を利用している。表面にはわずかであるが、工具痕がみられる。W215は残存長22.5cm、残存幅15.2cm、厚さ1.0cmの長方形の部材である。板目材を利用し、中央に5.3×2.5cmの方形のほぞ穴を設けている。全体的に残存状況は良くないが、工具痕が観察できる。使用されている材木はアカガシ亜属に属する木材である。

W216～220は板材である。W216は職放し(W175)や栓のついた板(W176)に近い位置で出土した。完形の板材で全長92.7cm、幅25.7cm、厚さ2.5cmを測る。表裏ともに加工痕跡がみられ、板材の表面を平坦にするために使用された手斧の痕跡も確認することができた。部材はウリカエデの板目材を使用している。この板材には1か所で小孔が施されている。また、この板材には長辺側から約3cmの幅で、断面図では表現しきれないような

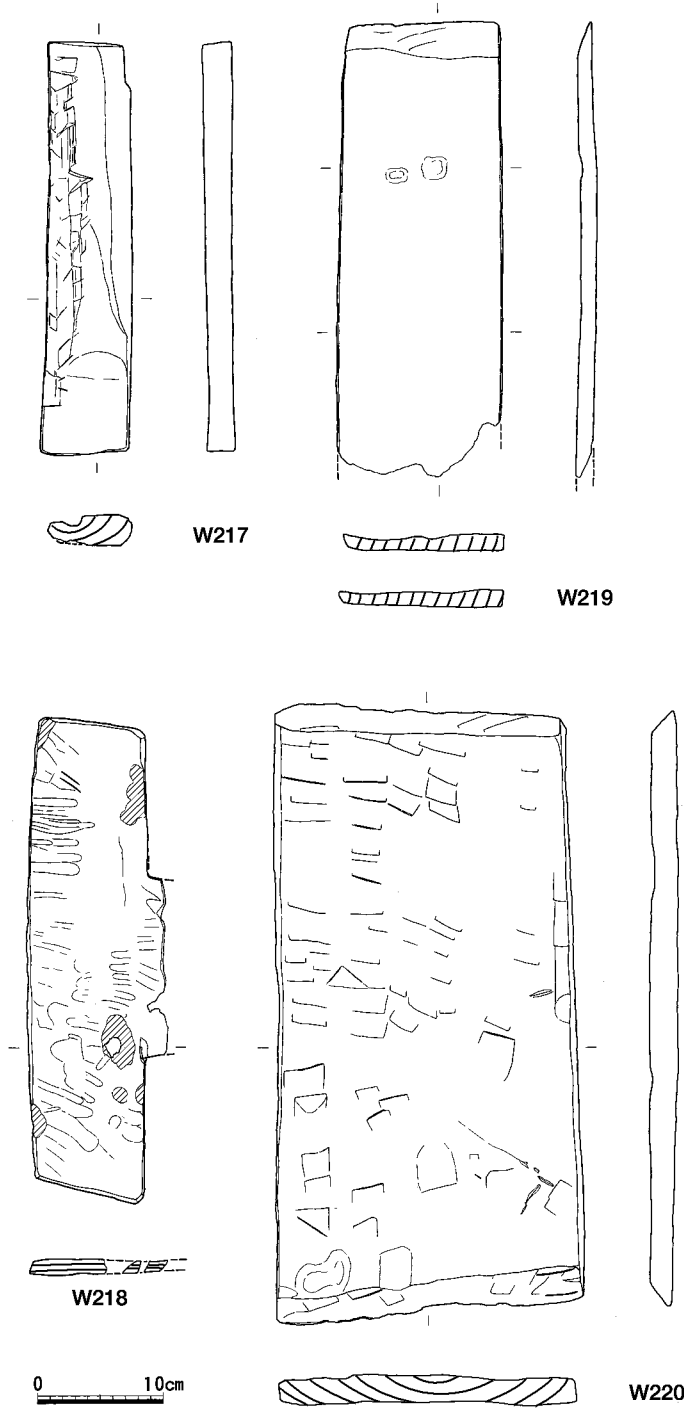


第351図 河道1北岸出土部材④(1/8)

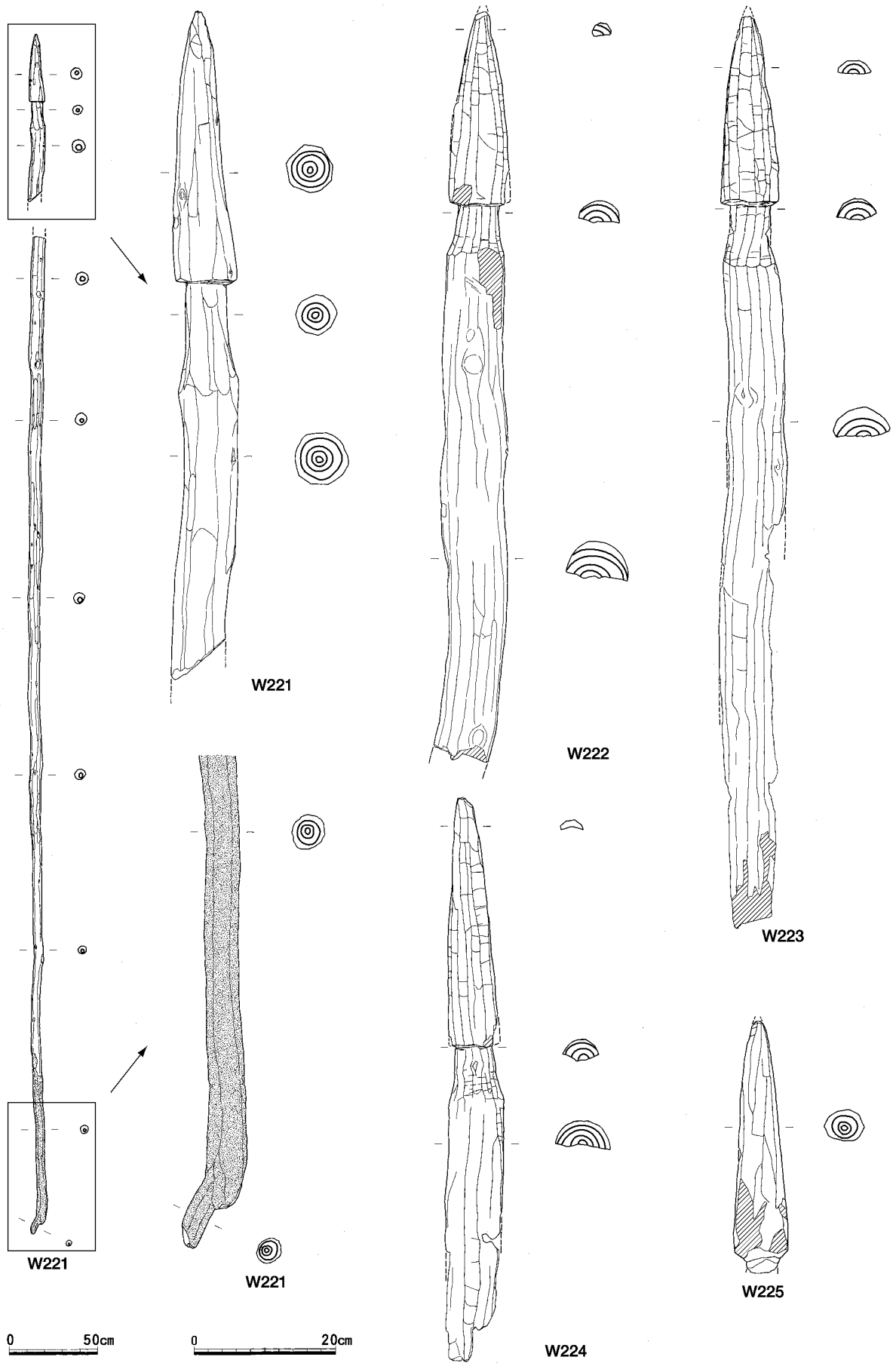
段が観察できる。板材同士を重ね合わせる、相じゃくりが行われていた可能性も考えられる。W217は全長32.7cm、幅7.0cm、厚さ2.4cmの板材である。この板材の表面の左側は右側に比べ、一段低くなっている。その低くなっている部分を削り取るためについたものであろうか、工具痕跡が多数観察できた。全体的に粗雑な印象を与える木材で何かの未製品である可能性も考えられる。残存状況は良好である。W218は板目材の板材で、全長38.6cm、残存幅11.1cmを測る。この部材は残存状態が良いとはいえ、部材の端部がオリジナルなものであるかどうかの判断に困難を極めた。その結果、この部材はやや傾いた平行四辺形のような形状をなしており、右側では幅約14.2cmにわたって凸部が設けられていたようである。表面には工具痕跡等が一部で観察できた。W219は柁目材の板材であり、残存長36.0cm、幅13.0cmを測る。板材の先端部は斜めに削り取られており、尖っている。部分的に工具痕跡が確認できるが、全体的に木材を荒割しただけの板材である。W220は完形の板材である。板目材を利用しており、全体に工具痕跡を残す。工具痕跡はほぼ全面にわたって認められ、手斧が使用されたと思われる。板材の上下端部は斜めに切断されており、尖っている。河道1北岸の建築部材集中箇所から少し離れた位置で出土している。

板材は河道1北岸で、ここに図示した以外に約90点が出土しているが、いずれも小片であり、その用途は不明である。

W221～225は、いずれも先端を槍先のように削り出した部材である。その詳細な用途は不明であるが、河道1北岸で5本出土している。W221は河道1北岸で出土し、ちょうど河道の流路と同じような方向で、約6.5mにわたって倒れていた木製品である。一部欠損している箇所があるが、残存長657.2cm、木材の径はもっとも太い箇所では径約8.8cmを測る。先端は約38.5cmにわたり円錐形に先を尖らせている。この先端部の下には長さ15cmにわ

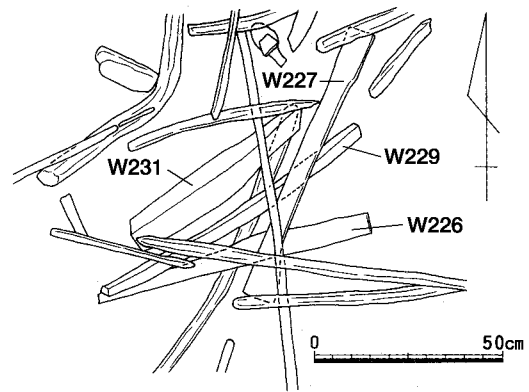


第352図 河道1北岸出土部材⑤ (1/6)



第353図 河道1北岸出土部材⑥ (1/32・1/8)

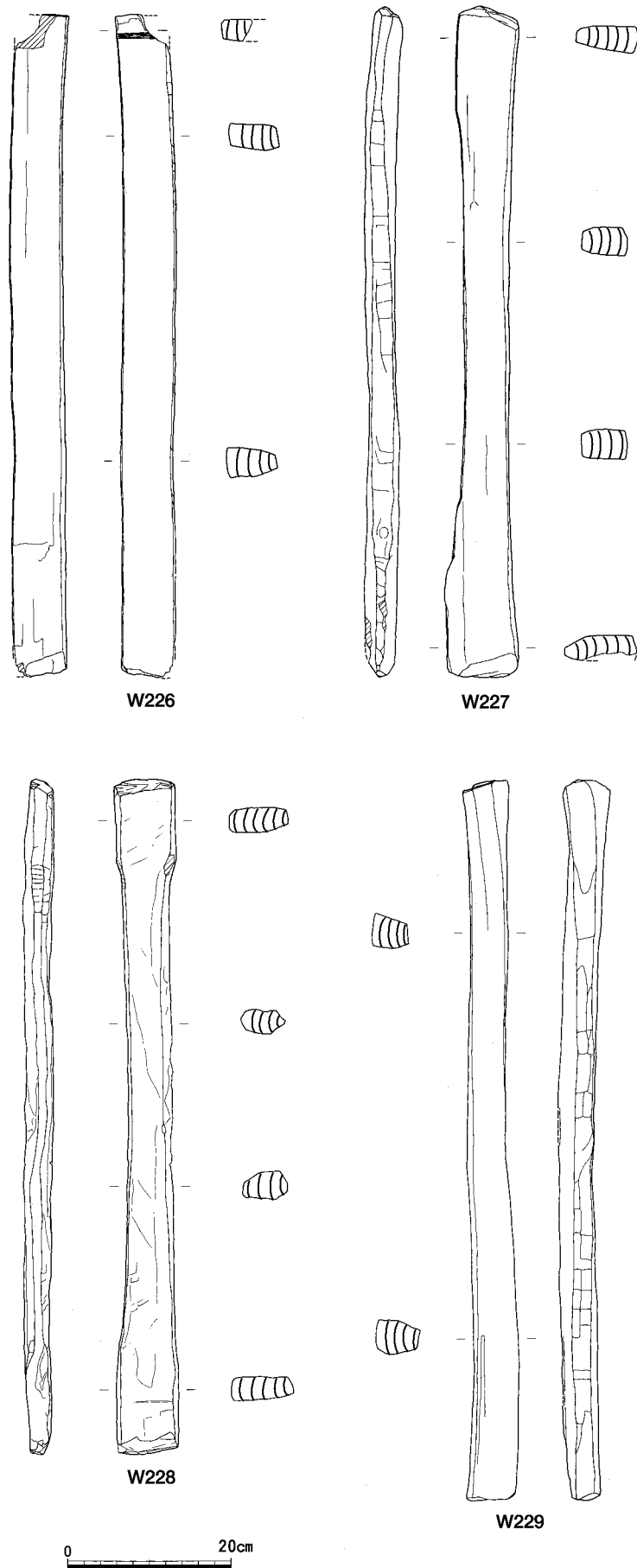
たるくびれ部が設けられている。これらの箇所では工具で表面を丁寧に削っている痕跡が確認でき、その横断面形はあたかも多角形状を呈する。くびれ部から下の部分についても、樹木の表面を削り取っており、表面にいくつもの加工痕が観察できるが、下に至るにつれて、だんだんと加工の度合が少なくなり、自然面が多くみられるようになる。そして、下端部から160cm上の付近では樹皮が幹全体を覆うようになってしまう。基部では柄が屈曲



第354図 河道1北岸部材出土状況 (1/20)

しているが、これはこの木材の本来の形状を反映している。この長大な木製品は、槍の先端に相当する部分が樹木での根元にあたる。クヌギ節に属する丸太材を利用していることが、鑑定で判明している。W222は残存長106.3cm、残存幅8.9cm、厚さ5.7cmを測る。河道1北岸の護岸施設に使用されていた杭のうちの1本である。部材はクヌギ節に属する木材を利用しており、その木材を半裁している。先端部は約27cmにわたって作られており、くびれ部ともに工具で丁寧に面取りがなされている。また、柄の部分でも工具による加工が施されている。若干、炭化している。W222とW223は、槍先の形状やくびれ部の状況が類似していたため、比較検討を行った結果、W222とW223は同じ木材から作られていることがわかった。すなわち、一つの丸太材から槍状の端部を作り出したのちに半裁されたものであるということである。W223は、先に述べたW222のもう片方である。河道1北岸の護岸施設中の杭列で利用されていた。発掘調査当初は杭との認識であったが、洗浄中にこのような槍を思わせる部材であることが判明した。W223は残存長129.0cmを測り、W222に比べると長い。若干炭化しているが残存状況は良好である。いずれも表面が丁寧に加工されている。W224は残存長79.7cmを測る。最大幅は7.7cmを測る。樹種鑑定の結果、クヌギ節に属する木材であることが判明し、この木材を半裁して加工している。先端部は長さ35cmを測り、表面は丁寧に加工が施されている。くびれ部あるいは柄の部分も同様の加工が施されている。しかし、裏面は木材を半裁したままの状況で、加工は施されていない。なお、この部材は一部炭化しており、火を受けていることがわかる。W225はくびれ部以下が欠損しているが、残存長35.6cm、最大幅7.7cmを測る。表面には欠損箇所が多数存在するが、丁寧に削って整えられていることがわかる。丸太材を利用している。

W226～229はみかん割りにした材木を加工し、整形した粗加工材である。これらの部材のいくつかは、第354図にみられるように、W226・227・229・231が河道1北岸斜面のほぼ中央付近にほぼ1か所にまとまって出土した。このことから、これらの部材は選択的にこの場所に廃棄されたものと考えられ、互いに有機的な関係がうかがえる。W226は全長81.5cm、幅6.4cmを測る。みかん割りにした部材を断面方形の部材に仕上げている。上端では一部に加工が施されている。W227とW228はそれぞれ、全長82.7cm、幅8.6cmと全長82.3cm、幅7.6cmで、両端が中央部に比べ幅が広くなるように加工された部材である。W227では中央部が幅5.5cmを測るのに対し、幅の最も広い下端部では8.6cmを測る。同様に、W228では中央部が幅5.4cmを測るのに対し、最大幅で7.6cmを測る。特にW228ではこのくびれ部で丁寧な加工痕がみられ、意図的に頭部を作り出していることがうかがえる。部材の側面には工具による加工痕がみられ、丁寧に加工されている。樹種はすべてを同定することができなかったが、W

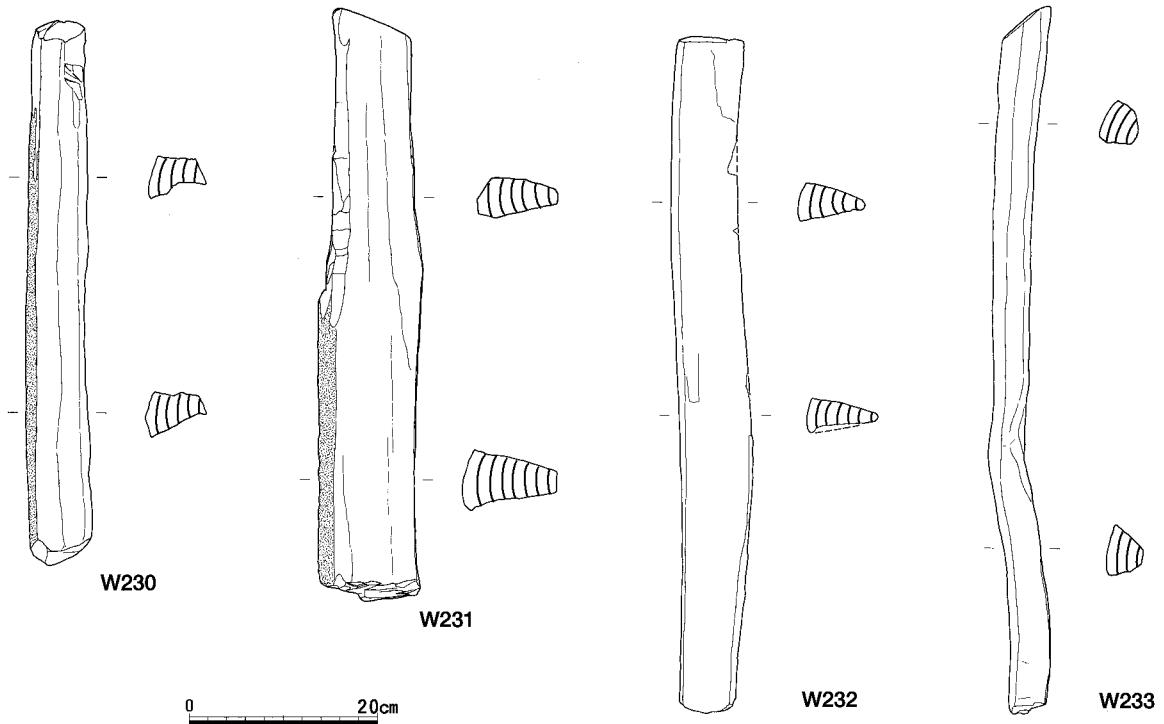


227についてはヤマグワとの同定結果を得ている。W229は全長88.8cm、幅5.8cmを測る。側面には加工痕跡がみられる。

W230～233は、みかん割材である。いずれも横断面が三角形あるいは台形を呈している。W230は全長57.9cm、幅6.8cmを測る。側面に樹皮を残す。W231は全長62.9cm、最大幅10.3cmを測る。底部は切断痕が明瞭に残る。また、上半部の外側は加工が施されており、一段細くなっている。側面に樹皮を残す。W232・233も完形のみかん割材である。W232で全長72.8cm、幅7.6cm、厚さ4.1cmを測る。W233で長さ75.0cm、幅4.1cm、厚さ4.6cmを測る。W233は若干屈曲している。河道1北岸ではここに紹介したみかん割材以外に、みかん割材と思われる部材が約80点出土している。

W234とW235は板材であるが、表面にはあまり丁寧な加工は施されていない。W234は上半部では腐朽が激しく、原状をとどめない。残存長66cmを測る。下半部では製作当時の状況がある程度観察することが可能であり、木材を割ったままの状態になっている。土に打ち付けて使用する矢板のような用途が推定される。W235は全長87.5cm、幅

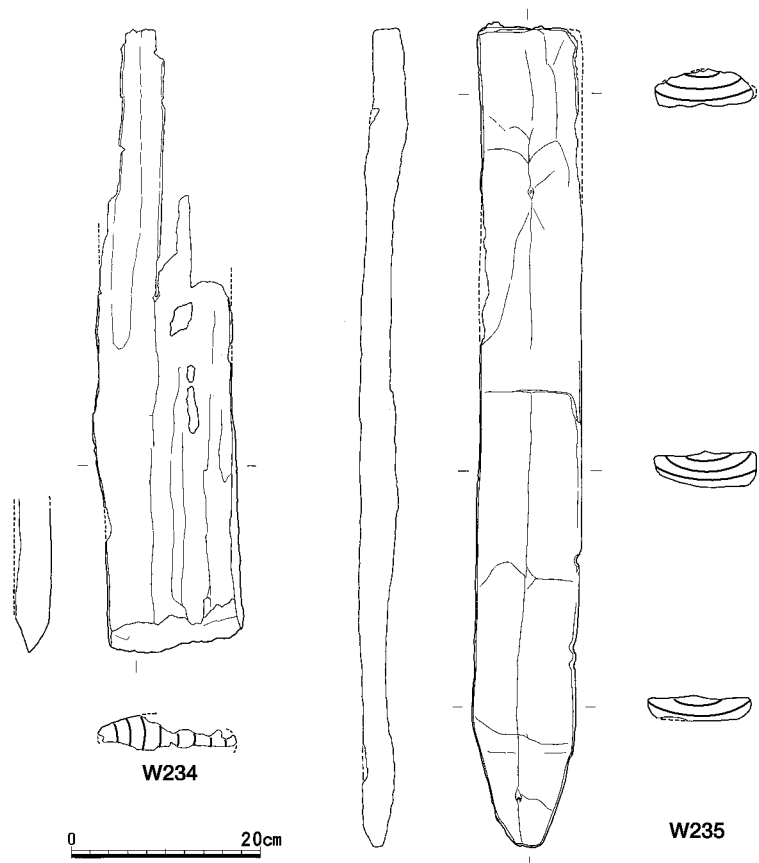
第355図 河道1北岸出土部材⑦ (1/8)



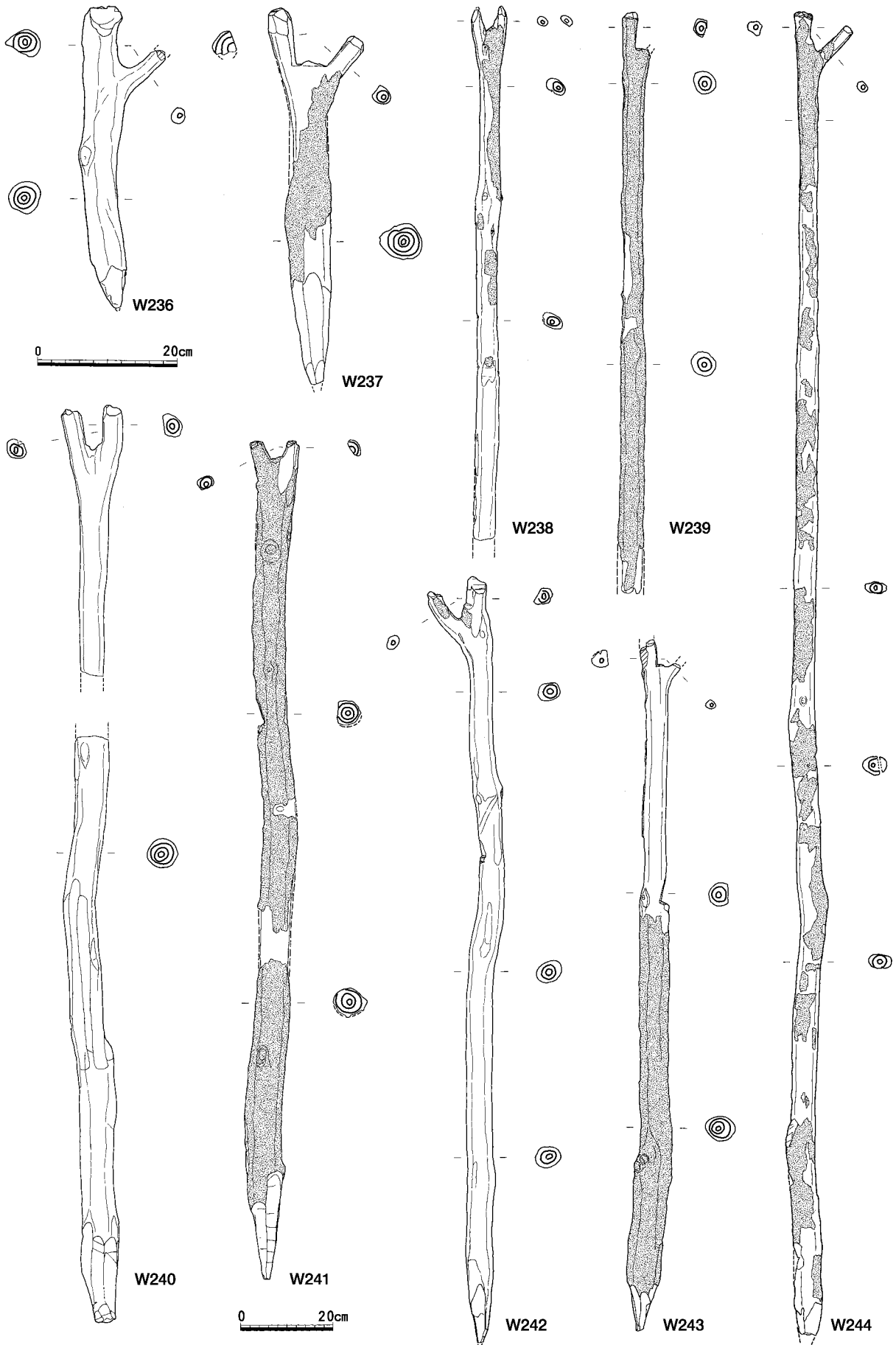
第356図 河道1北岸出土部材⑧ (1/8)

10.9cm、厚さ3.9cmを測るほぼ完形の板材である。板材は材木を半裁したのちに、若干の加工を施したものである。W235は先端に至るにつれて、厚さを減じながら、尖らせている。用途としては矢板のような使用が考えられるが確かではない。

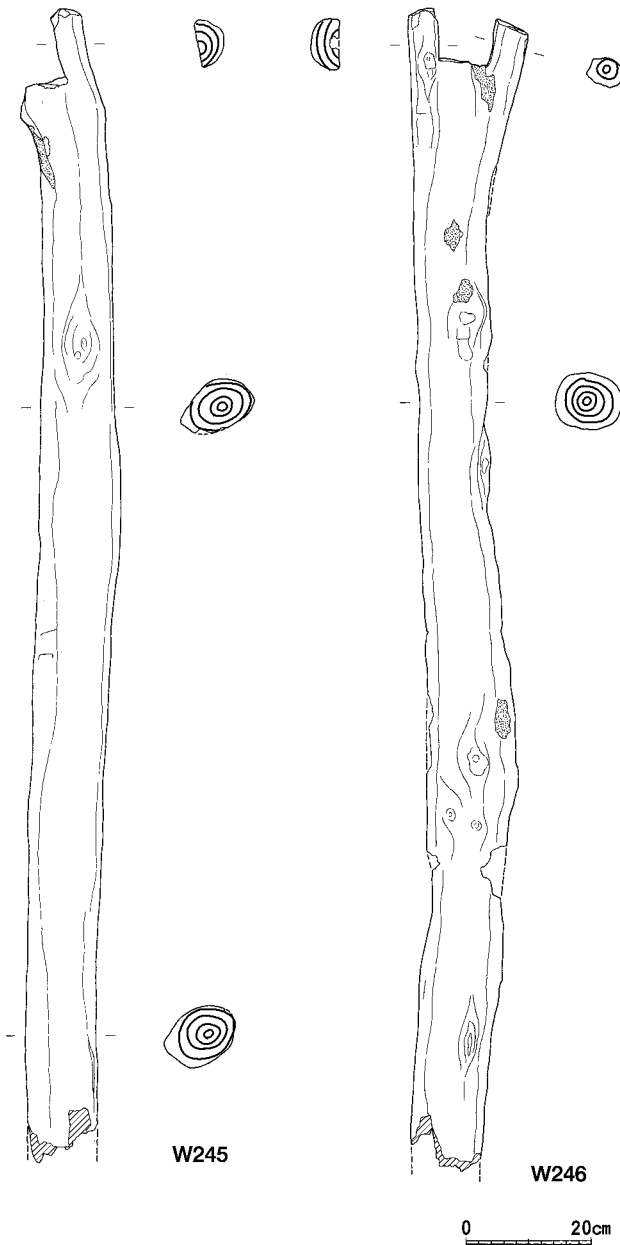
W236～246は、樹木の分岐部分を利用した部材である。W236・237は小さい二股杭である。全長はW236で23.3cm、W237で54.2cmを測る。W236には樹皮は残存していなかったが、W237では樹皮の痕跡がみられた。W238・239は一部欠損している。表面に樹皮を残す。W240も一部欠損しているが、ほぼ全体の様相が観察できる。残存長183.8cm



第357図 河道1北岸出土部材⑨ (1/8)



第358図 河道1北岸出土二股杭 (1/8・1/12)

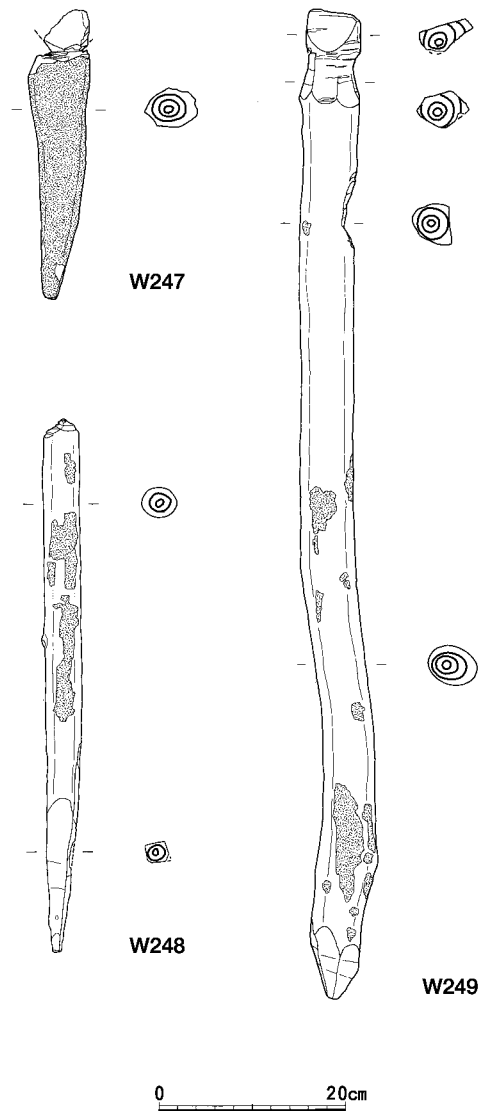


第359図 河道1北岸出土木製品（二股材）（1/12）

は「Y」字状になっており、幹の内側を削り出している。幹には部分的に樹皮がみられ、本来は全面樹皮に覆われていたものと推測できる。

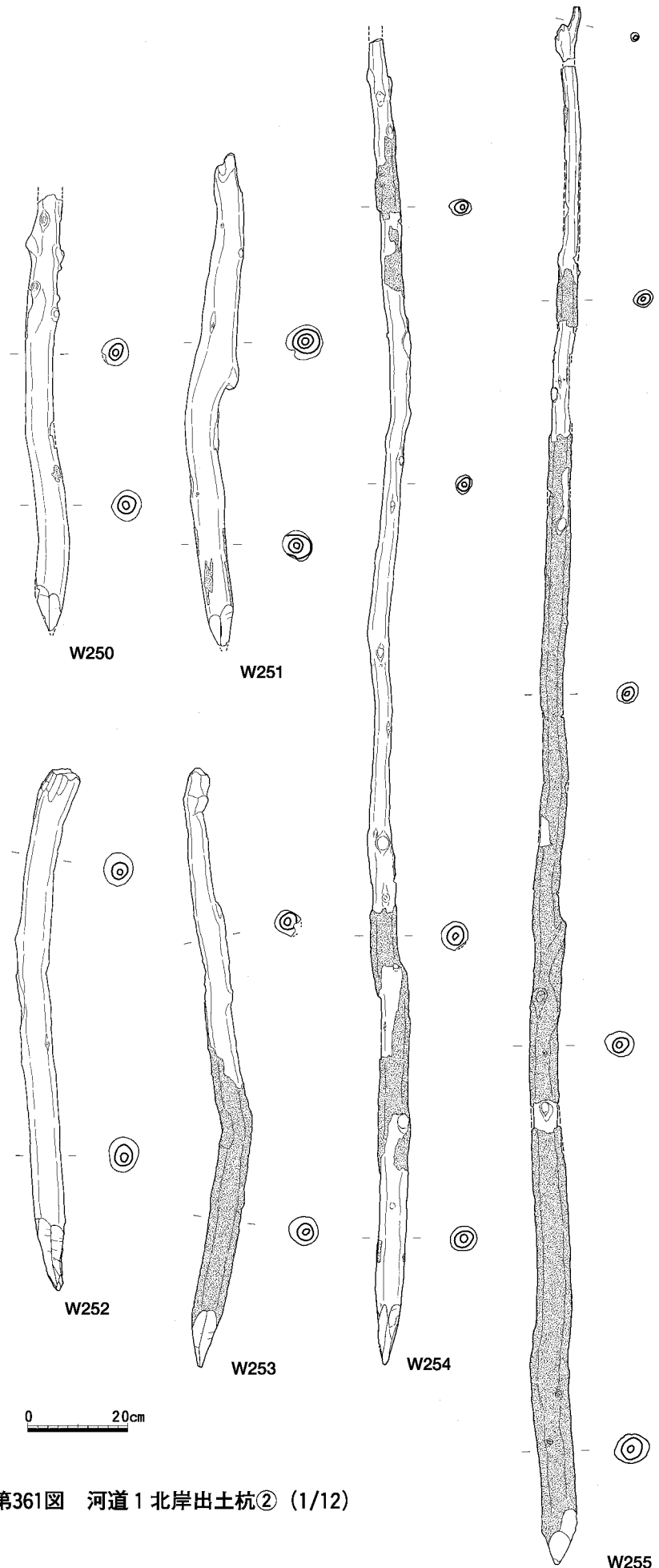
W247～255は杭である。W247は残存長30.7cmを測る杭であるが、上端部に切断痕跡が残る。この杭の切断作業は途中のままで終わっており、当時の木材の伐採技法を垣間見ることのできる資料といえる。切断面には鋭利な刃物の痕跡がみられる。W249は全長105.6cmを測る。上端部からやや下の箇所を削り取り、上端に突起を設けている。また、上端から約20cmの箇所には抉りが施され

を測り、先端はY字状に開く。樹皮はみられないが、部分的に加工痕跡を残す。W241は全長179.6cm、W242で全長144.5cm、W243で全長164.9cmを測る。いずれも完形である。W244で残存長283.4cmを測る。W241～243では二股杭の中央付近に削り込みがみられる。W245・246は径約10cm以上の丸太材を利用した二股材である。W245は残存長182.3cmを測る。頭部で分岐する枝は失われている。表面にはところどころで樹皮の残痕がみられる。W246は残存長184.1cmを測る。先端



第360図 河道1北岸出土杭①（1/8）

ている。W250・252・253はいずれも護岸施設に利用されていた杭である。いずれも丸太材を転用しており、表面にわずかであるが、樹皮の痕跡を残している。屈曲した木材が利用されている。W250で残存長86.8cm、W252で全長104.0cm、W253で全長119.4cmを測る。W254は残存長263.8cmを測る杭である。表面に樹皮が残り、丸太材を利用している。W255は一部欠損しているもの、ほぼ全体がわかる杭である。残存長306.6cmを測る。杭の上端は折れ曲がっており、二股ではない。全体が樹皮に覆われている。(金田)



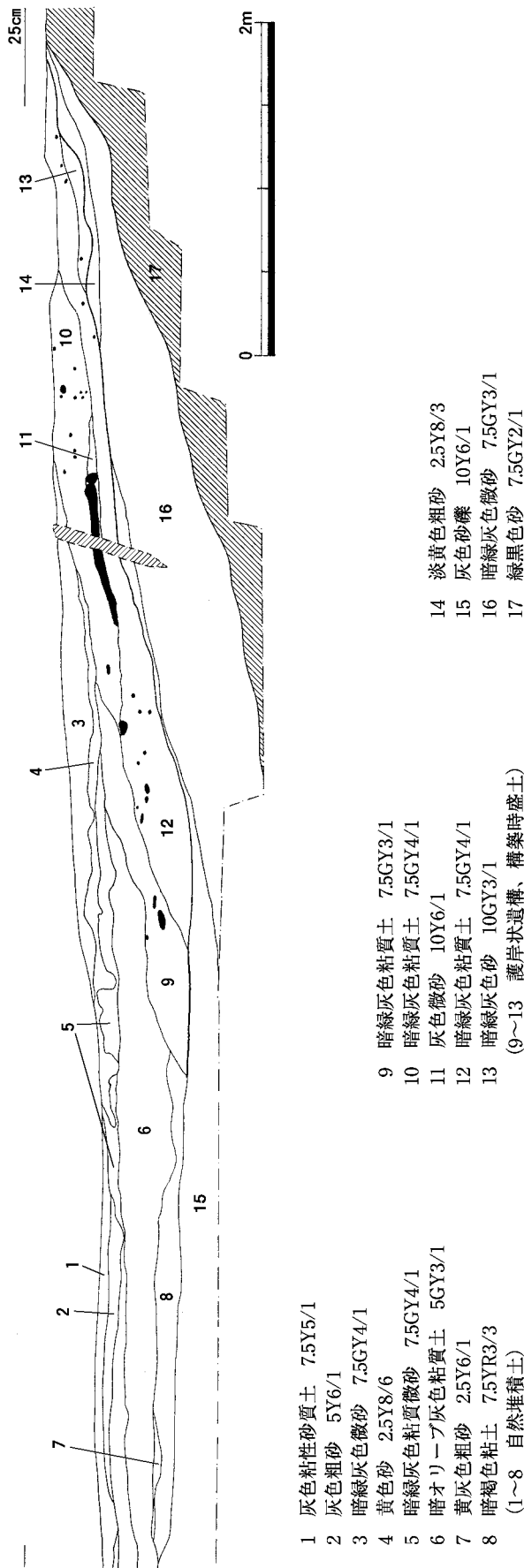
第361図 河道1北岸出土杭② (1/12)

南岸（第362～371図）

2区8P・Qにおいて、河道1の南岸を検出している。南岸では海拔高20cm前後で、幅3m、検出長約10mにわたって、護岸状遺構を検出している。この護岸状遺構は土層断面の観察から基底部から約50cmの盛土が残存していたものの、河道1および2が流路を次第に南に変えて流れるために、上部が削平を受けており、残存状況は良くない。このため北岸と比較して、土器・木製品等の出土点数は少ない。南岸での木器・木製品・杭の出土状況を観察すると土層断面の第9～13層にかけて出土していること、垂木・柱材と考えられる2m程度の長さを持つ部材が河道の岸の方向である北東-南西ラインに沿って多く検出されていること、またそれに直交するように長さ1～2m程度の部材が組まれていること、これらの部材中に杭が打ち込まれていることなどから、これらの部材は河道1に廃棄されたものが流れてきて堆積したのではなく、盛土を行いながら人為的に組み、構築した護岸状の遺構であると判断した。この護岸状遺構を構築する際に用いられた部材の多くは、後述する垂木などの建築部材のほか反柄や木鋤といった日用雑器であり、中には折れた堅杵なども出土していることなどから、集落内で不必要になったものを護岸状遺構を構築する際に転用したと考えられる。杭は先端を海拔マイナス70cm前後の基盤層より深く打ち込まれているものと、海拔約15cm前後の盛土中に打ち込まれているものが存在しており、盛土を行う以前に杭を打ち込んで基底部に部材を組み、その後に盛土を行う過程で盛土内に杭を打ち込みながら部材を組んだ状況が推測される。また、これらの盛土の中からは土器が多く出土している。これらの土器の多くは破片であり、部材と同様に不要となった土器を盛土するのに使用していると考えられるが、中には完形のミニチュア土器、手捏ね土器、完形の土器の体部に穿孔しているものなどがあり、これらは意図的に盛土中に入れられたものであると考えられ、護岸状遺構を構築する際に何らかの祭祀が行われた可能性を示唆するものであると考えている。土層断面の観察と出土遺物から判断すると、第1～8層については、河道1の古墳時代の堆積層であると考えられる。第9～13層が護岸状遺構の盛土であり、第14・15層を基盤として構築されることが考えられる。第14層以下では断ち割りの結果、土器の出土は見られなかった。以下、この護岸状遺構の盛土である第9～13層中から出土した、土器・骨角器・石製品および木製品などの遺物について述べていくこととする。

土器はコンテナにして約70箱分が、骨角器は2点、石製品は1点出土している。そのうち、図示しているのは、壺1205～1238、甕1239～1253、高杯1254～1278、鉢1279～1292、器台1293～1296、手焙形土器1297、ミニチュア土器・手捏ね土器1298～1322、骨角器B25・26、石製品S67である。

1205～1212は長頸壺で口縁端部にはいずれも沈線がみられ、頸部と体部の境に刺突文が一周している。1205は口縁端部を上方に摘み、頸部の調整が縦方向のハケメの後にヘラミガキを施している。1206～1212の頸部には縦方向のハケメの後に沈線が施され、1208・1209の沈線は螺旋状に施され、幅が太い。1206は口縁端部が上方へ拡張しており、口縁端部外面に5か所の刺突文が施されている。1212の出土位置は護岸状遺構の基盤層直上であり、体部に焼成後の穿孔が施されていることから、意図的な廃棄を想定させる。1213～1219は脚付直口壺である。1213～1215は高杯と同様の脚部をもつものである。1213は脚部に沈線を施し、体部下半にはヘラケズリを施している。1217～1219は「ハ」の字に内傾する長い口縁部をもつもので、1217・1218は口縁部と体部の境に断面が方形の突帯を巡らしている。1220・1221は短頸の壺であり、1220は直立する口縁を、1221は外反する口縁をもつ。1222～1225は複合口縁をもつもので、1223・1225には口縁部外面に擬凹線が施されている。1224には、鋸歯

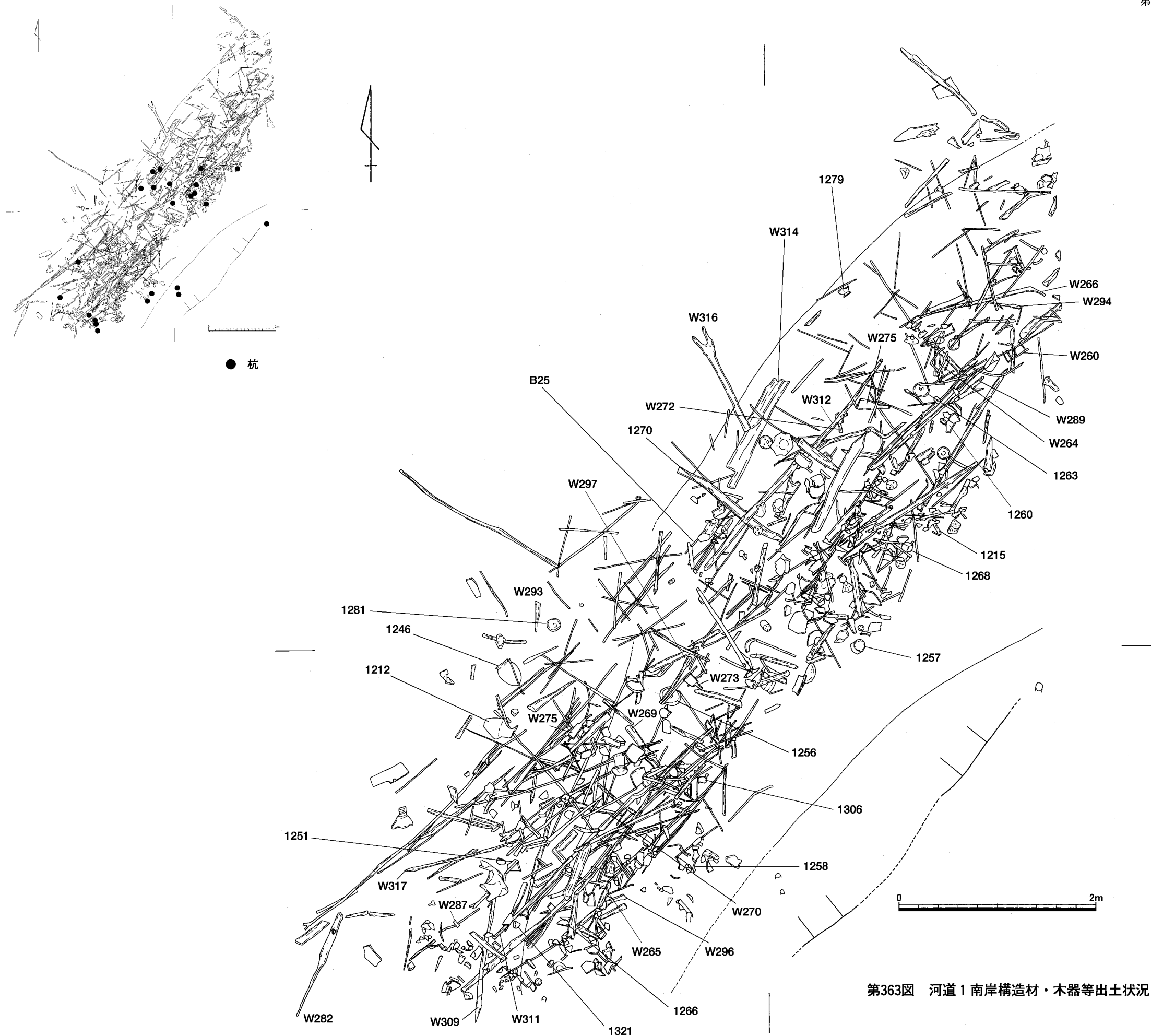


第362図 河道1南岸土層断面図 (1/40)

文が配される。1226~1233は外反する口縁で、端部を拡張して面をもつ。口縁端部に擬凹線文を施しているものと、ナデで終わらせるものがある。1234・1235は「く」の字に外反する口縁端部が上方に長く拡張し、ナデている。1236~1238は底部で、1238の底部外面の調整にはヘラミガキがみられる。

1239~1253は甕で、1239・1240の口縁は「く」の字に外反し、口縁端部は素直におさまる。1241は小型の甕である。1242~1245は口縁端部を上下に短く拡張し、端面はナデている。1245の体部は肩が張らず、砲弾形を呈する。1246~1248の口縁部は上下に拡張し、擬凹線文を施している。1249~1251は「く」の字に外反し、上方に拡張する口縁部をもつものである。1249・1250は口縁端面に擬凹線文を施しており、1251はナデている。1252・1253は底部であり、1253には焼成後の穿孔が施されている。

高杯は、脚部が短脚のものしか出土していない。1254は装飾高杯で、口縁部は「ハ」の字状に上下に拡張しており、上半には刻み目文を、下半には鋸歯文を、杯部内面には波状文を施しているものである。1255~1265は口縁部が外反するもので、杯部内面の稜が明瞭である1255~1262と、不明瞭な1263~1265がある。調整は、内外面ともに縦方向のヘラミガキを施すものが多いが、一部に横方向のヘラミガキを施すものもみられる。脚部内面の杯部との接合部分には、直径が1~2mm前後の軸孔の痕跡がみられるものが多く、1261などは杯部内面に達しているものを粘土で杯部側からふさいでいる様子が明瞭に観察できた。これら高杯の杯部の法量には、15cm前後のもの、20cm前



第363図 河道1南岸構造材・木器等出土状況(1/40)・杭位置図(1/120)

後のもの、30cmを超えるものと、おおよそ3法量のバラツキがみられる。1256・1261は杯部内面に煤が付着しており、蓋として使用したと考えられる。1266～1268は浅い杯部から、端部を上方に立ち上がらせるものである。1269は椀状の杯部をもつ。1270は浅い杯部で、口縁部が直立している。1271～1278は高杯の脚部で、1278のように底径が大きく、脚裾部の穿孔が6個以上と考えられるものも出土している。

1279～1292は鉢で、1279～1284は小型のものである、粗製のもの、1279・1281のようにヘラミガキを施し、胎土も精良な精製品がある。1279・1280は台付鉢で、浅い杯部に直立する口縁部をもつ。1279は杯部の内外面にヘラミガキを施し、1280は外面がナデ、内面に蜘蛛の巣状のハケメを施している。1281・1282は短く外反する口縁をもつ。1283・1284は、底部から口縁部に直線的にのびる体部をもつ。1285～1292は外反する口縁と、器高を上回る口径をもつものである。口縁端部の形状には素直に納まる1285・1286と、上下に拡張する1287～1290、上方に拡張する1291・1292がある。調整は外面がハケメの1286・1287の他は、ハケメ後ヘラミガキ、内面がヘラケズリの1287の他は、ヘラケズリ後にヘラミガキを施している。法量には16～44cmとバラツキがみられる。

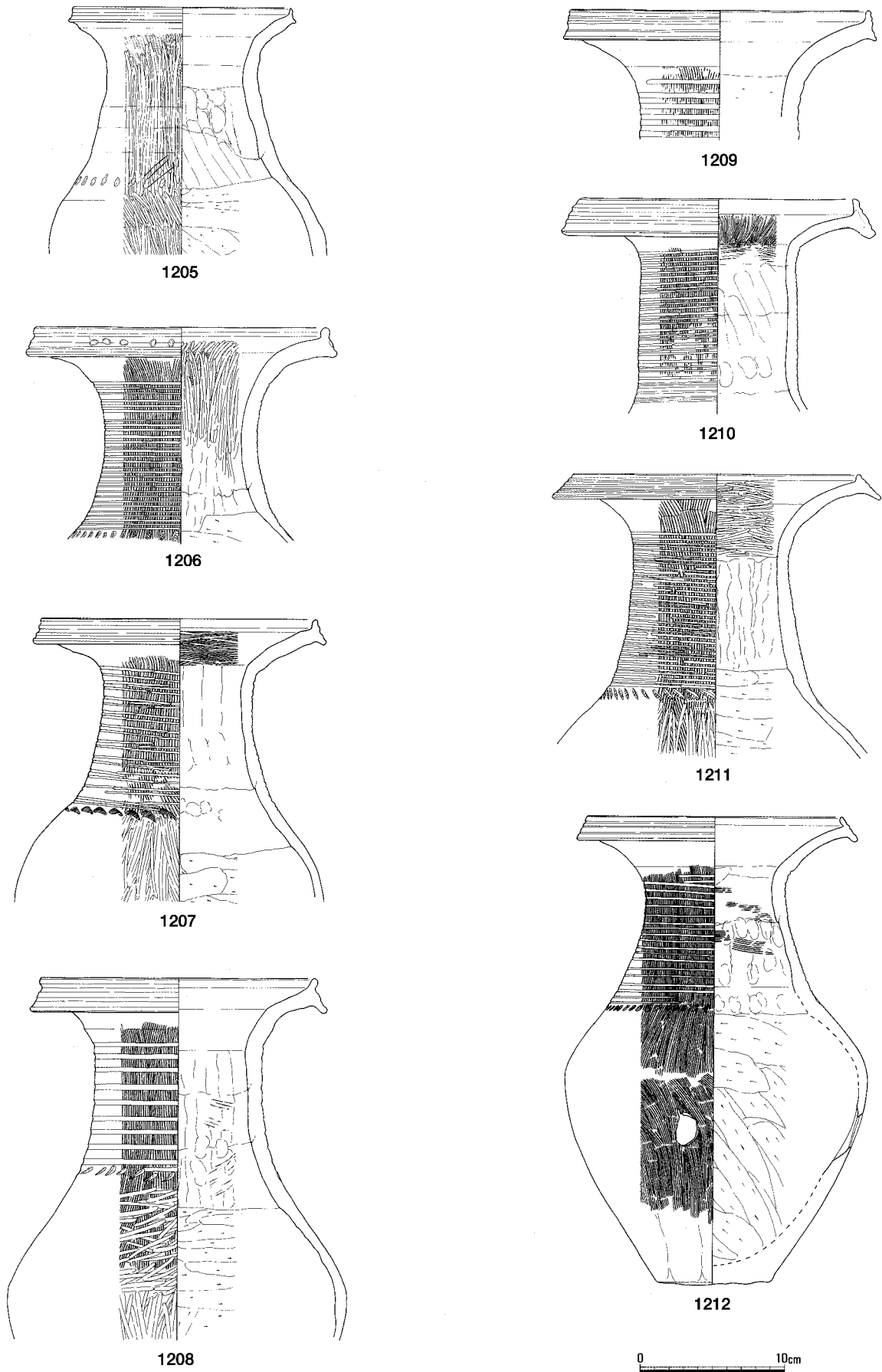
1293～1296は器台で、1293・1294・1296は口縁部・筒部に鋸歯文を加飾するものである。1294の口縁端部は、一旦作った後に粘土を継ぎ足して、口縁端部を拡張させている。1295の内外面には、粘土を貼り付けた補修痕跡がみられる。1296は筒部で、沈線と鋸歯文を交互に配している。

1297は手焙形土器である。鉢部と覆部を一体に作っており、底部は平底で、器壁は22mmと厚い。体部外面の調整はヨコナデで、体部内面の下半はケズリであるが、上半はナデで仕上げている。

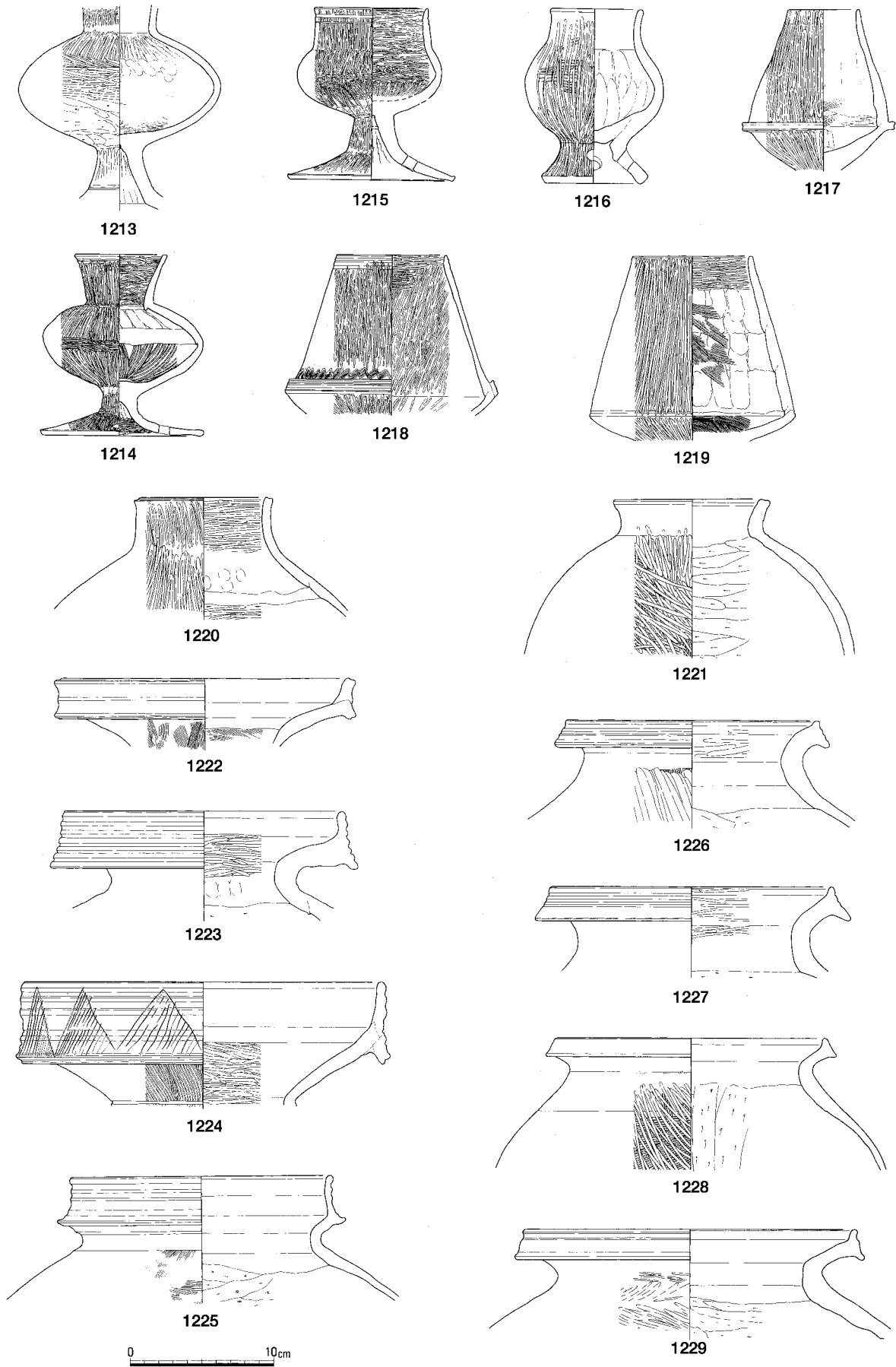
1298～1322のミニチュア土器・手捏ね土器は護岸状遺構の盛土を掘り下げる過程で、多く出土した。これらの中には、日常に使う土器を小さくして、成形・調整まで似せて作っているミニチュア土器と、粗雑なつくりの手捏ね土器がある。1298は壺で、二重口縁を呈している。1299・1300は脚付直口壺で、外面全体にヘラミガキを施すなど丁寧なつくりであるといえる。1301～1307は甕と考えられ、1302～1304は指オサエが明瞭で、器高が5cm以下と小さい。1305の外面にはタタキメがみられる。1308は高杯で調整は丁寧に施され、胎土も精良である。1309～1322は鉢で、1309～1312は内外面に指オサエ、ナデの痕跡を明瞭に残すもので、手捏ね土器である。1313～1322はミニチュア土器であり、内外面の調整にヘラミガキやハケメを施している。ミニチュア土器の中でも、1298・1299・1307・1308・1318・1322などは特に丁寧につくられている。

骨角器には、刻骨（B 25）・骨鏃（B 26）がある。B 25は鹿角製で、根本を切り離す際の切創が明瞭に残っている。全長22.5cm、最大幅6.1cmを測るもので、2本の枝角を残している。このように枝角を残すものは、弥生時代後期に比較的多く出土するという。刻み目は枝角を境に2か所に施されており、下半に22条、上半に6条で、刻み目の深さは最深長2.2mm、最浅長0.5mmである。下半の刻み目の左側部分にのみに磨滅痕跡がみられる。岡山県下では7例目の出土である。B 26は鹿角製である。残存長55mm、重さ2.1gを測り、有茎式で、円錐状の身をもつ。身の表面は円滑で光沢をもち、茎には面取りの痕跡がみられる。S 67は花崗岩製の石錘で、この護岸状遺構から唯一出土した石製品である。また、盛土掘り下げ中にガラス滓の小片が1点出土している。

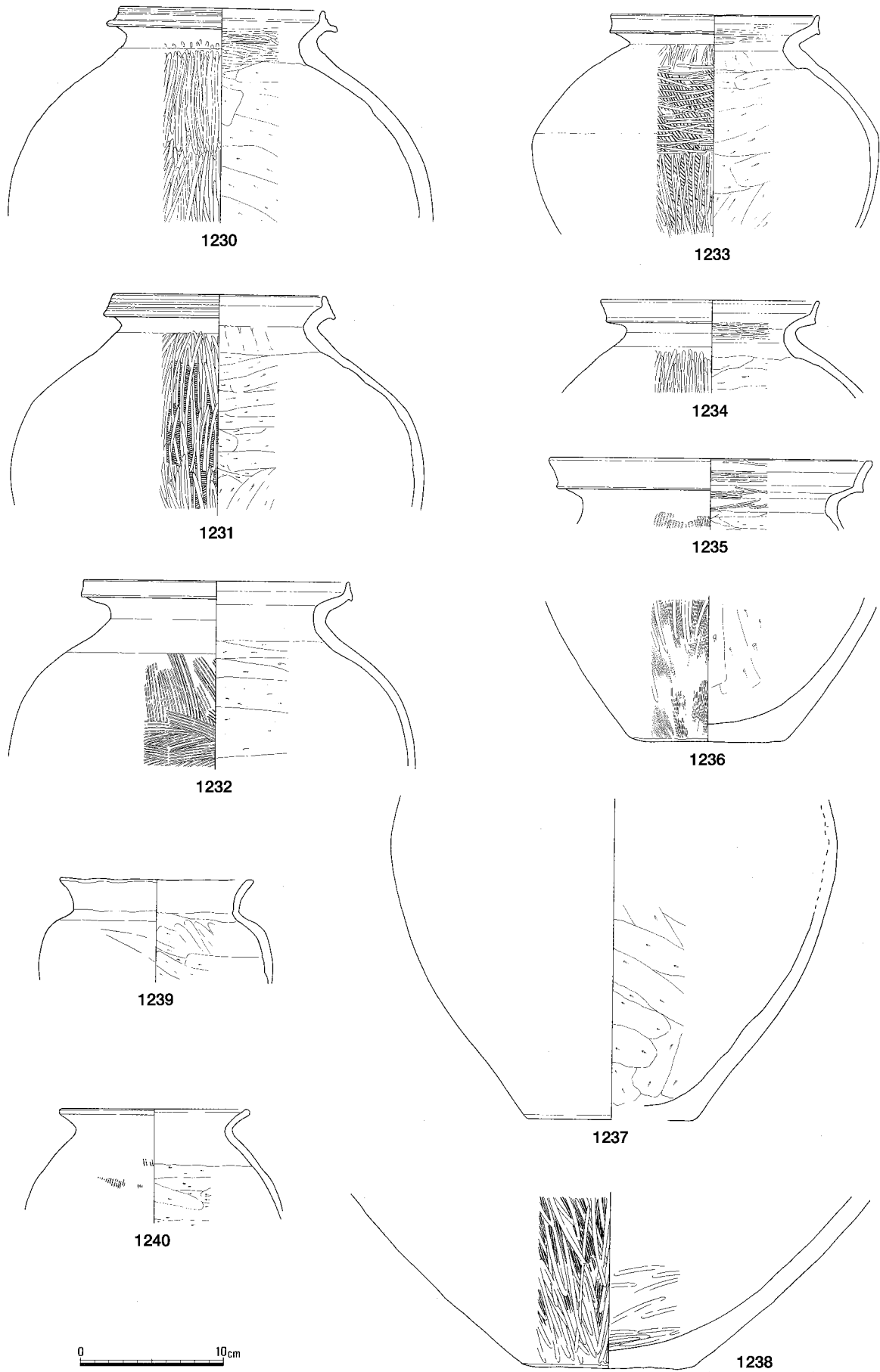
出土遺物の時期は弥・後・Ⅲの範疇に入るものであり、その中でも、主体は新段階のものである。南岸の護岸状遺構を構築した時期は、これらの土器の時期と同様に弥・後・Ⅲの新段階であると考えられる。また、盛土を削平している第8層に古墳時代前半の土器を含んでいたことから、古墳時代前



第364図 河道1南岸出土土器① (1/4)

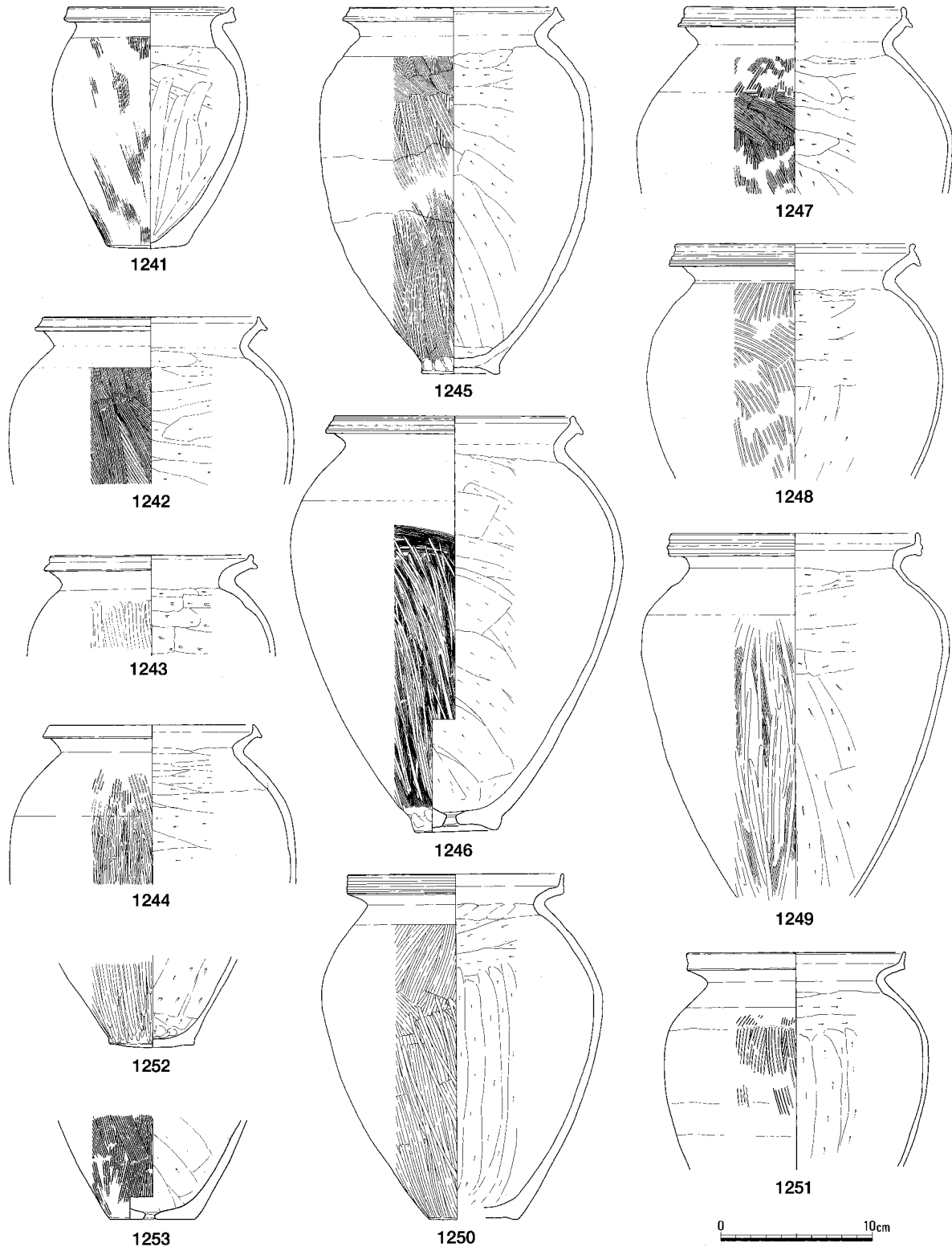


第365図 河道1南岸出土土器② (1/4)

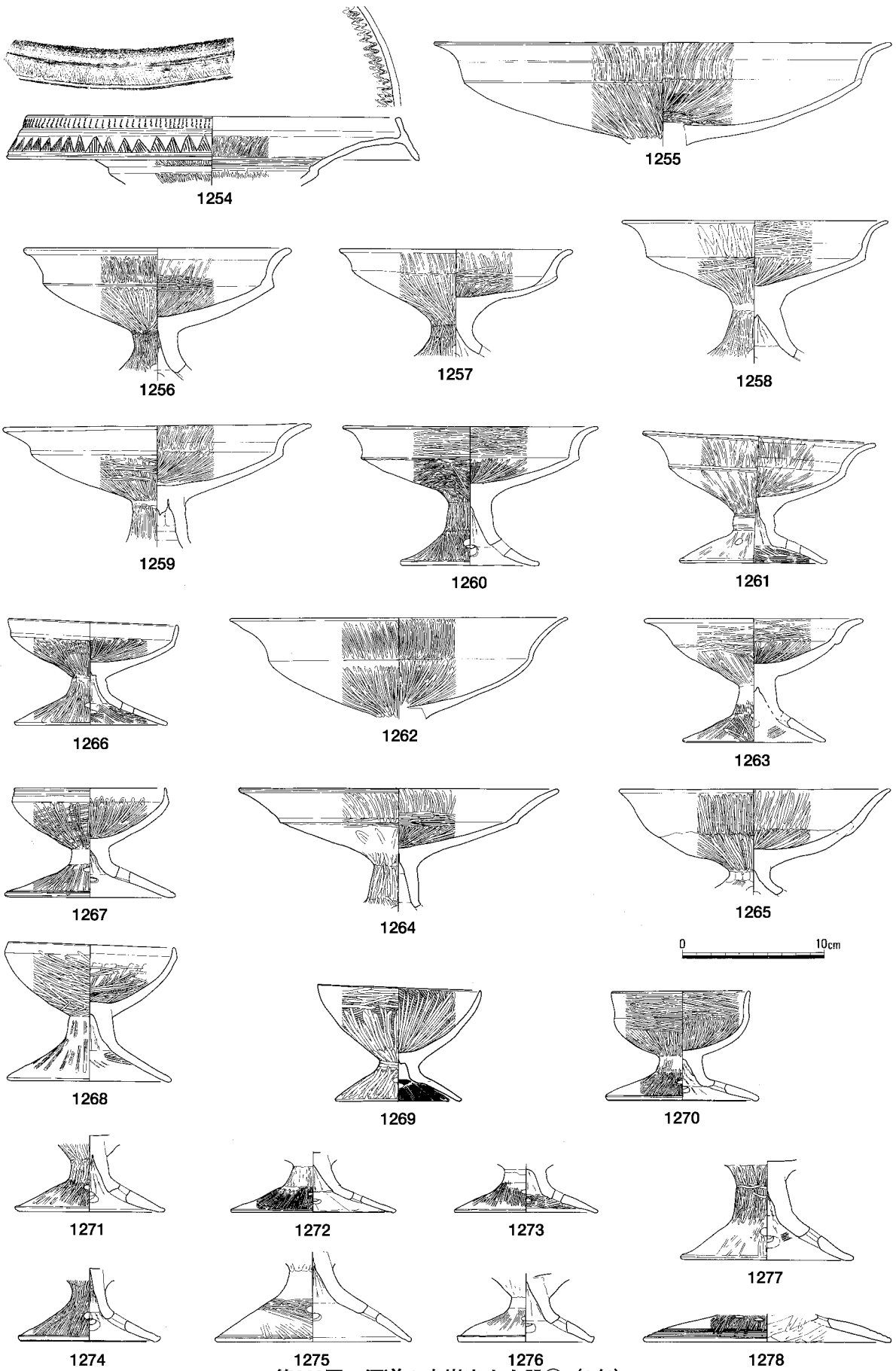


第366図 河道1南岸出土土器③ (1/4)

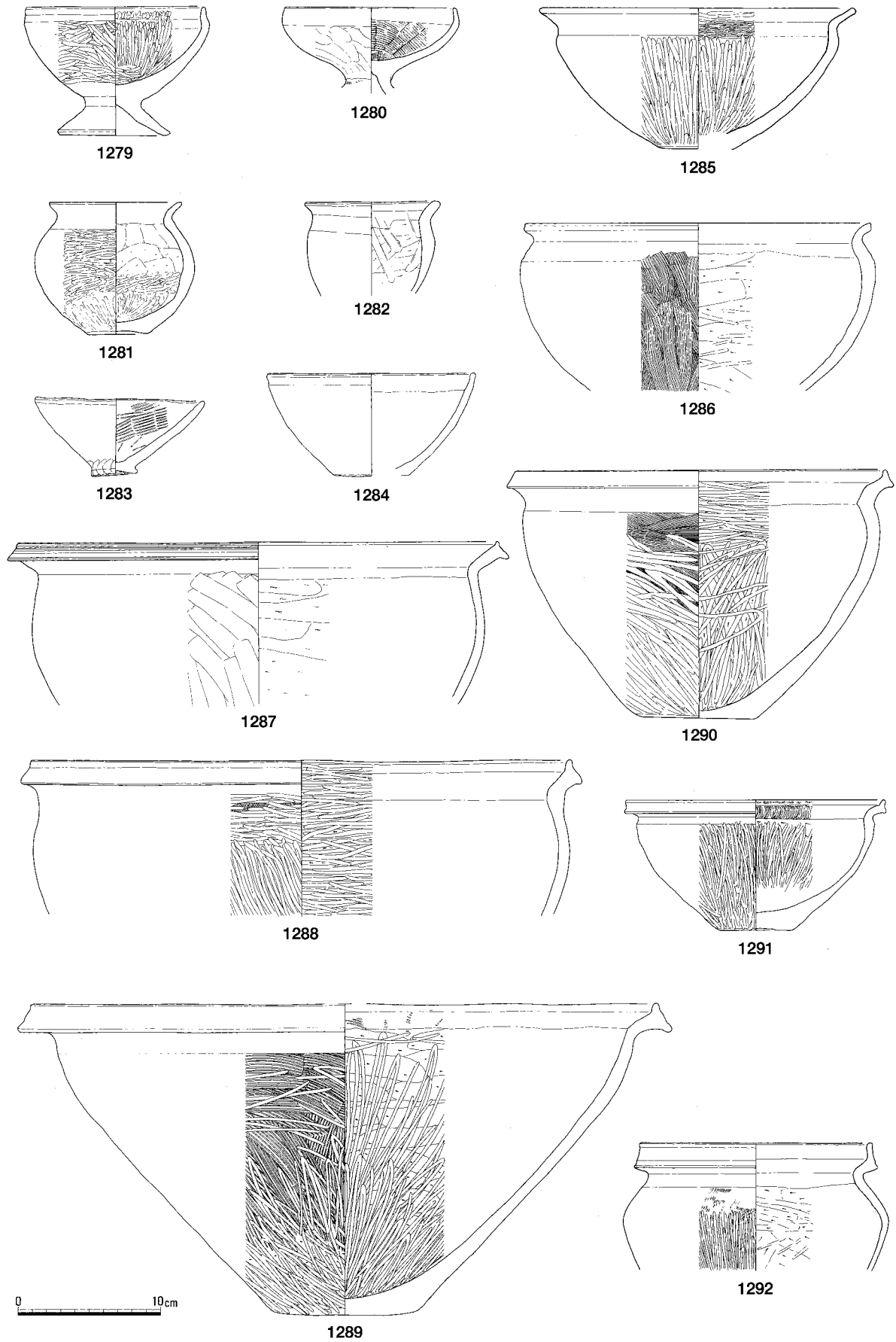
期には上面が河道1の流れによって削平を受けて、すでにこの護岸状遺構は機能していなかったと考えられる。(時實)



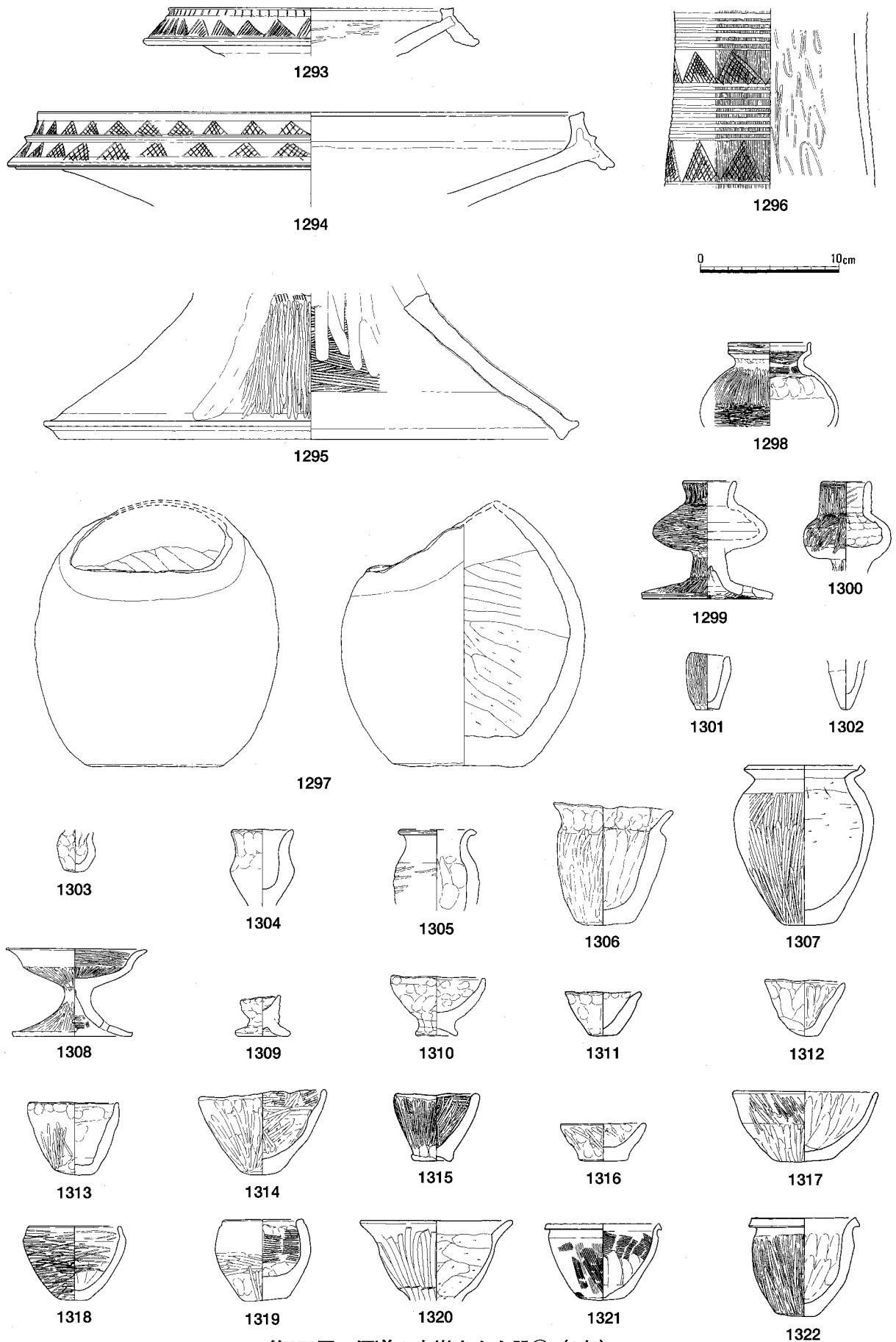
第367図 河道1南岸出土土器④ (1/4)



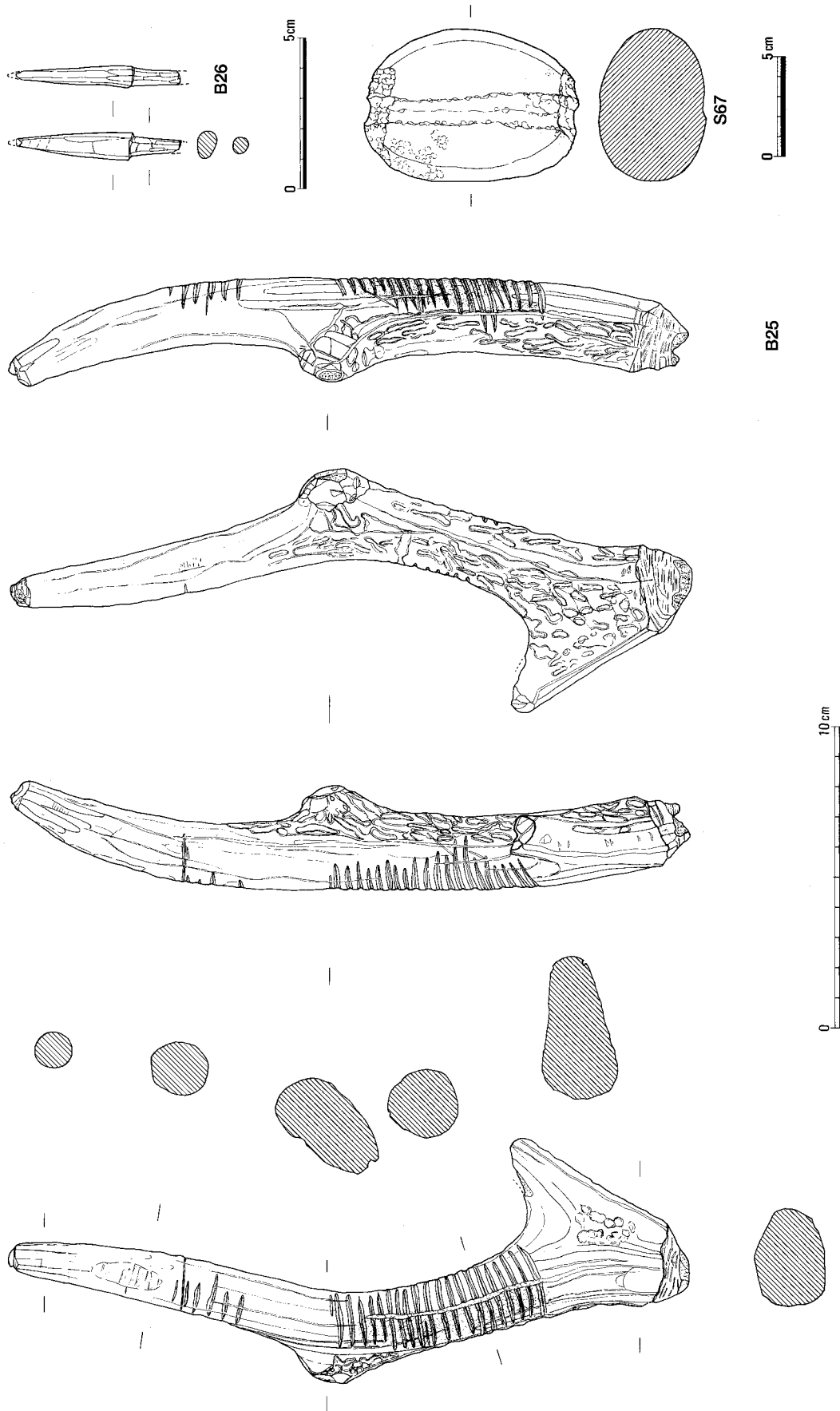
第368図 河道1南岸出土土器⑤ (1/4)



第369図 河道1南岸出土土器⑥ (1/4)



第370図 河道1南岸出土土器⑦ (1/4)



第371図 河道1南岸出土骨角器(1/2)・石器(1/3)

河道1 南岸出土木製品

河道1 南岸では東西約8 m、南北10mの範囲で木製品の集積を検出し、農具・食事具を初めとする数多くの木製品が出土した。出土した木製品の大半は原木や杭など、河道1 南岸の護岸施設に伴うものがほとんどであったが、農耕具等の木製品はこれらの護岸施設に交じり、散乱したような状態で出土した。調査では、木製品として認められるものを中心に持ち上げ、その結果、約138点の木製品を持ち上げた。その内訳は表3のとおりである。河道1 北岸ではすべての木材を持ち上げたが、南岸では現地で確認できた木材のみを持ち上げたため、若干持ち上げ方法が異なっている。そのため、北岸の出土状況と単純には比較できないが、河道1 南岸出土木製品についての所見を述べる。まず、農耕具と杭を含む土木用材がそれぞれ全体の約四分の一を占める。杭類が多いのは護岸施設に由来する。次に、用途不明部材が残りの大半を占め、以下、雑具等が続く。北岸の状況と比べ、建築部材の割合が極めて少ないこと、また、武器や武具が全く出土していないことが大きな相違点としてあげられる。しかし、南岸では、以下に説明を行う代掻き・横鋤・掘棒・反柄・櫛など北岸の農耕具等の資料を補填する貴重な木製品が数多く出土した。木製品の所属時期は、出土した土器から北岸よりもやや古い様相があり、弥生時代後期Ⅲに近い時期のものであると考えられる。

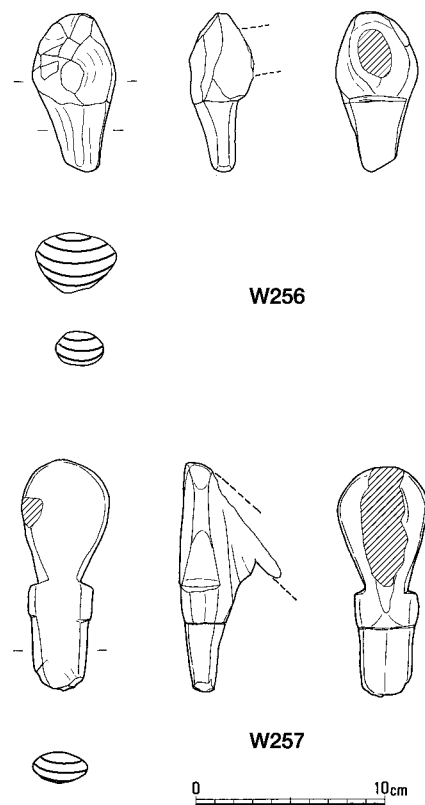
表3 河道1 南岸出土木製品の出土点数と割合

	南岸	割合(%)
工具	3	2.17
農具	33	23.91
漁具	1	0.72
武器・武具	0	0.00
容器	2	1.45
食事具	4	2.90
雑具他	17	12.32
用途不明部材	28	20.29
建築部材	4	2.80
土木用材	36	26.09
粗加工材	10	7.25
合計	138	100

木製品 (第372～393図、図版79～81)

W256とW257は、いずれも膝柄をもつタイプの斧柄であり、有袋鉄斧を装着するものである。いずれも、樹木の幹と枝との分岐部分を利用している。W256は握部が欠損しており、斧台のみが残存しており、長さ8.4cm、幅4.3cmを測る。斧の装着部分は若干周囲を削り取ることで作られており、約3.5×2.5cmほどの袋部をもつ有袋鉄斧が装着されていたものと考えられる。一部が炭化している。W257も握部が欠損している。長さ12.2cm、最大幅4.8cmを測る。斧台の装着部分は段をなして1段低くなっている箇所、袋部が3.0×2.5cmの有袋鉄斧が装着されていた可能性が高い。斧台には左右から挟りが設けられており、頭部状の膨らみをもつ。斧台と握部との装着角度は40°である。

W258とW259はナスビ形農耕具である。W258は柾目材を使用したもので、残存長33.5cm、残存幅5.3cm、厚さ1.1cmを測る。笠部の下を削り込んでくびれ部を作り出している。W259は残存長41.4cm、残存幅8.2cm、厚さ1.2cmを測る。柾目材を使用している。笠部の下には約3.5cmにわたってくびれの部が削り込まれている。くびれ部には鋏を装着するための緊縛痕跡がみられる。

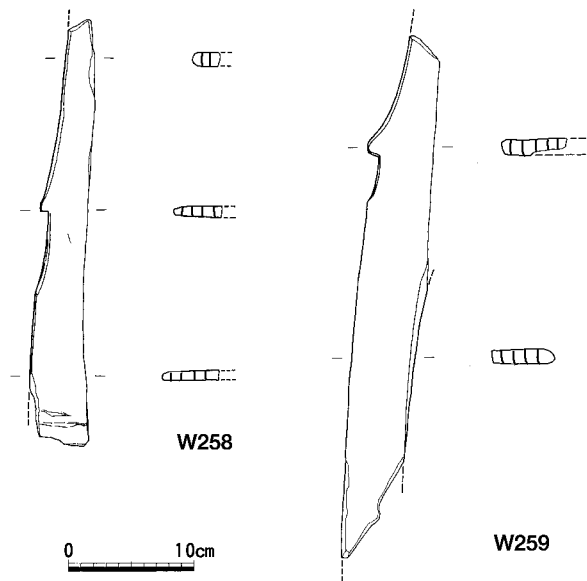


第372図 河道1 南岸出土木器 (斧柄) (1/4)

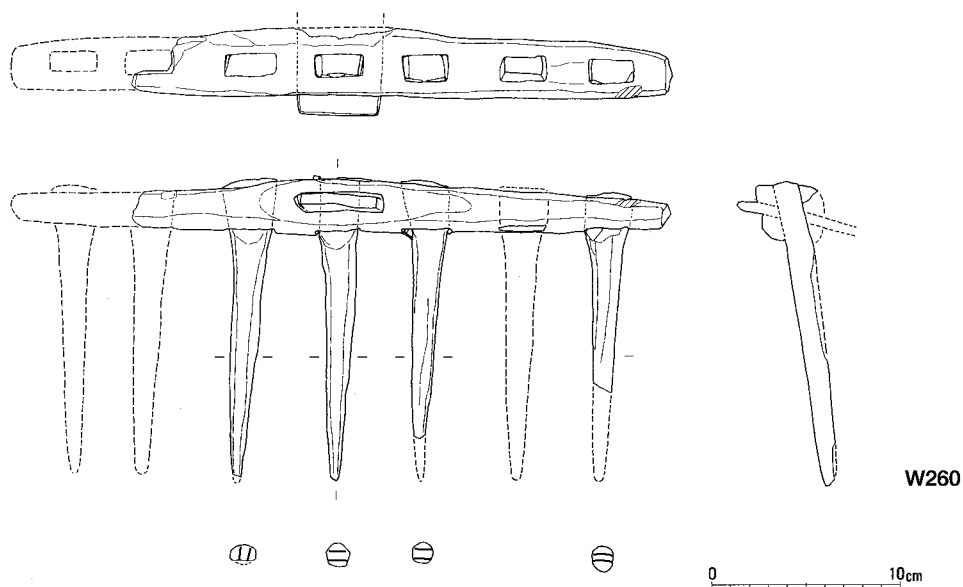
W260は代掻きである。代掻きは台木に柄の一部と、歯4本が装着された状態で発見された。台木はアカガシ亜属に属する割材を削り出して作られており、計6個のほぞ穴が観察できる。台木の右端部は完存しており、柄の存在する柄穴を中軸線と仮定すれば、台木には計7本のほぞ穴が存在していたと考えられ、この代掻きは7個の歯を備えていたものと復元できる。ほぞ穴は約2.5×1.2cmの長方形を呈する。ほぞ穴6個のうち、4か所で歯が遺存していた。歯は基部で最大幅を測り、先端にいたるにつれて細くなっている。完存しているもので長さ16cmを測り、そのうち、約3cmが台木に装着されている。歯の基部のほぞ穴内では、上面のみでなく、下面からも

木質のくさびが打ち込まれており、歯が抜けないように上下から固定されていたことがわかる。歯はいずれも割材を利用しており、そのうち1点については樹種鑑定を行い、アカガシ亜属に属する木材との鑑定結果を得ている。歯は4本のうち、3本は木目方向を横にとるのに対し、1本は木目方向が縦になるように装着されている。柄は幅4.2cm、厚さ0.6cmのアカガシ亜属に属する板材を利用している。柄の端部は平面形が方形をなすように加工されている。柄は、まず台木に柄を挿入し、その上から歯を差し込んで固定されている。したがって、柄には、観察することができないが、2.5×1.0cmの方形のほぞ穴が存在しているものと推測できる。台木との装着角度は約70°を測る。

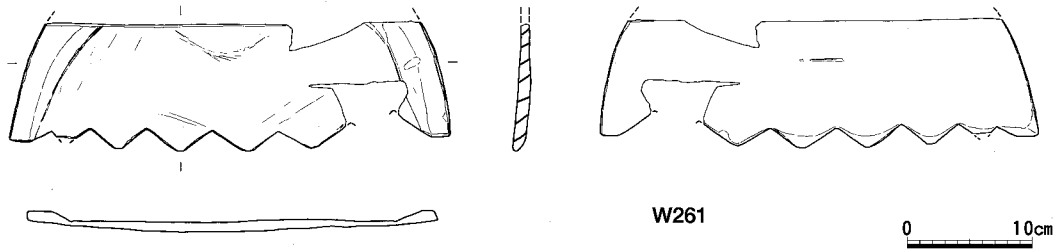
W261は横鋏でいわゆる「えぶり」と称されるものであり、幅34.9cmを測る。横鋏の下端には刃が設けられており、鋸歯状に加工されている。刃は右図上面の刃先がよく摩耗していることから、右図



第373図 河道1南岸出土木器（ナスビ形農耕具）(1/6)

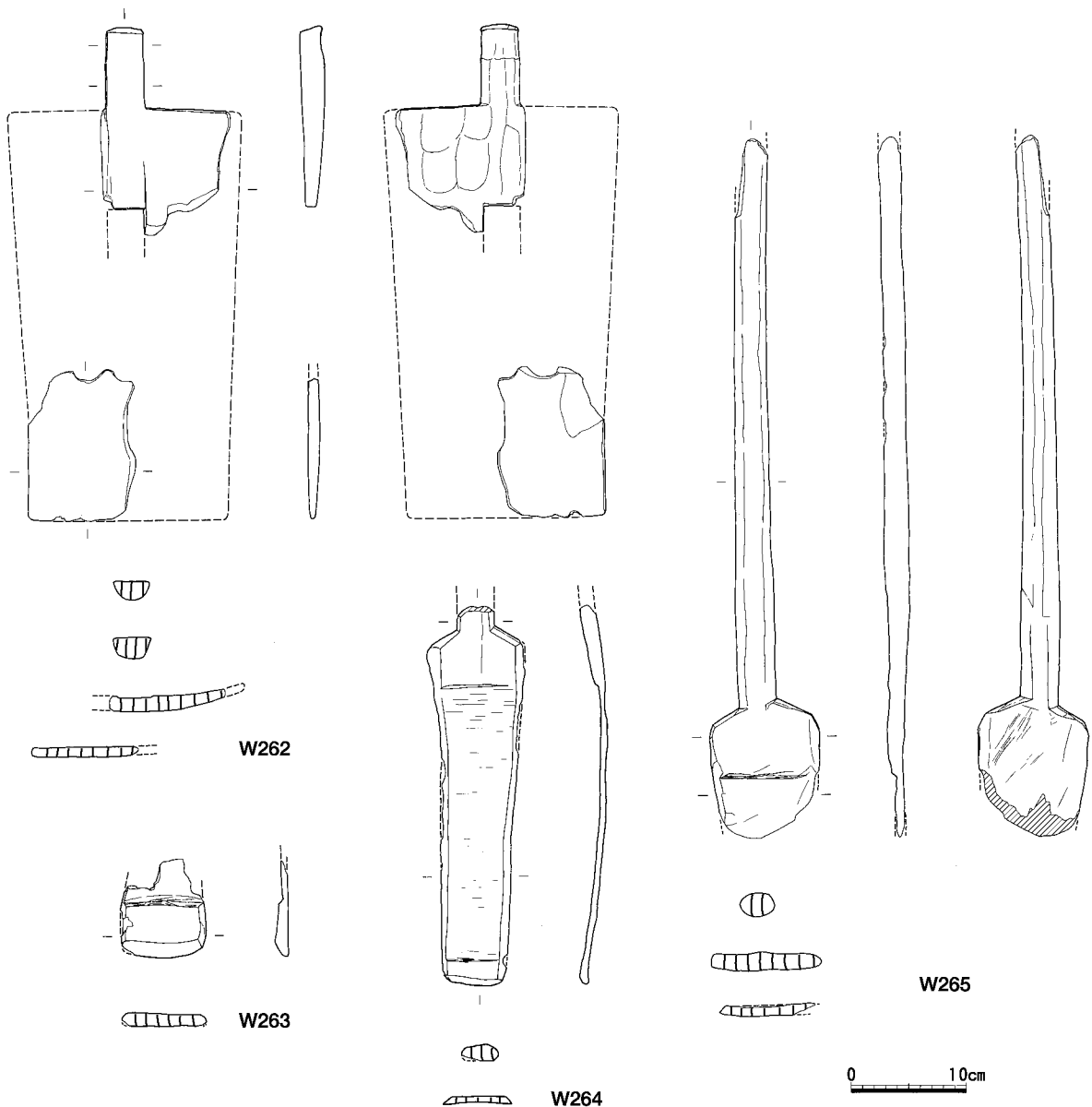


第374図 河道1南岸出土木器（代掻き）(1/4)



第375図 河道1南岸出土木器（横鋏）(1/6)

の上面が手前に装着されていたものと考えられる。横鋏の左右の縁は厚く削り出されている。柄の装着部分は欠損しており不明であるが、横鋏の上端中央部分には柄の装着部分を作り出した際についたと思われる工具痕が半円形状にみられることから、この付近に柄が装着されていたものと考えられる。使用された木材はアカガシ亜属に属する柁目材である。

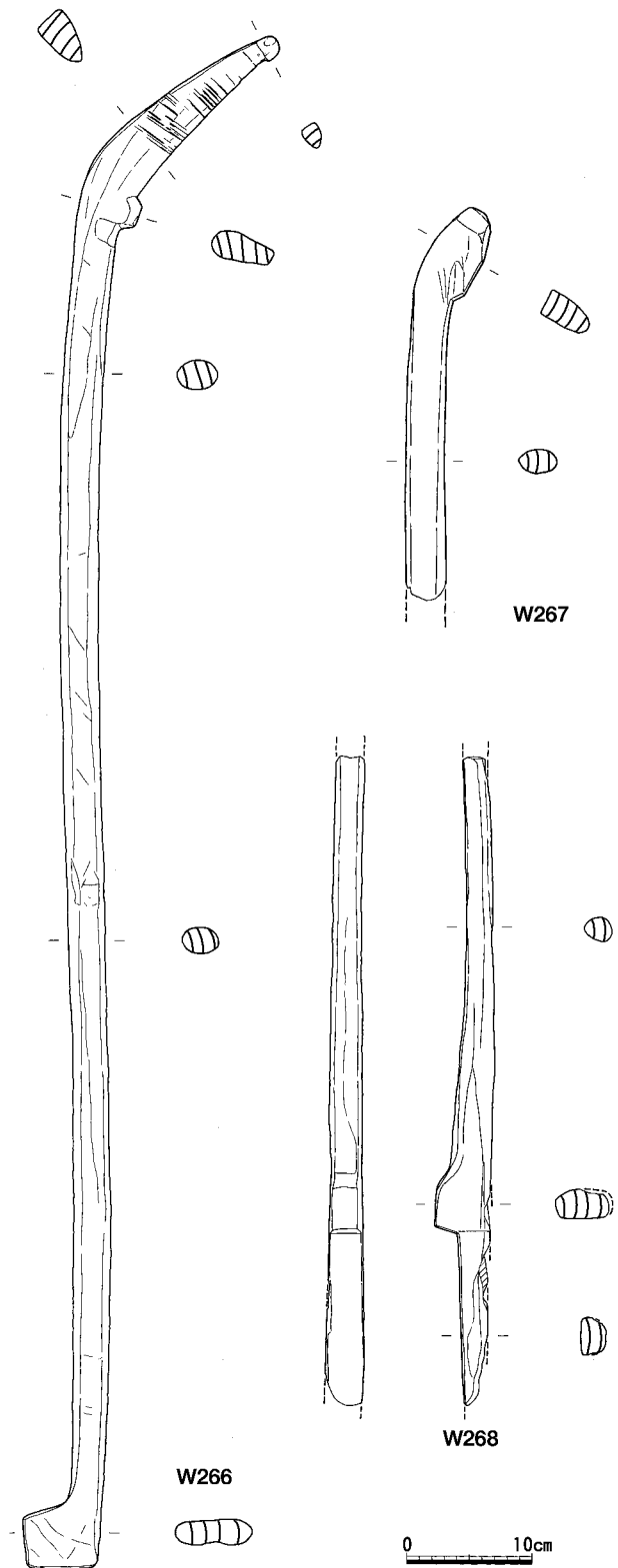


第376図 河道1南岸出土木器（鋤）(1/6)

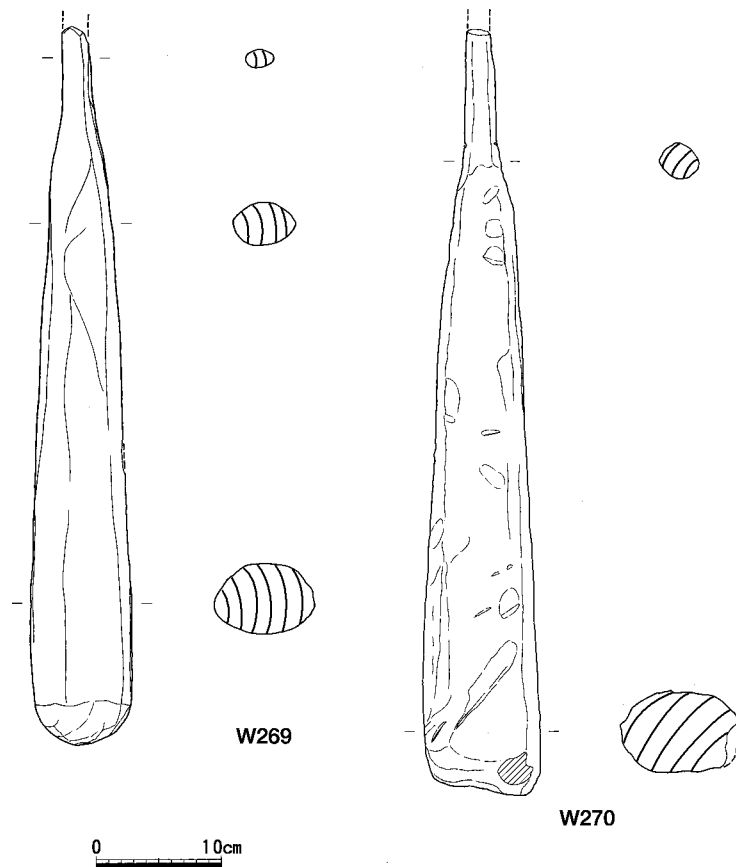
W262は組合せの鋤である。その大部分が失われており、部位のわかるものは軸部と刃先の部分しか存在しない。これらの破片は接合しないが、出土位置が近いことや、木材の特徴から同一個体である可能性が考えられる。鋤には柄を装着する長さ7.0cmの着柄軸が設けられている。先端には紐かけが設けられている。鋤身には柄を受ける柄穴がある。その大きさは不明であるが、少なくとも長さ2.2cm以上、幅3cm以上を測る。柄穴から上方には柄を支える浅い溝（樋）が彫り込まれている。一方、刃先に相当する破片は残存長12.9cm、残存幅9.2cmを測る。使用された木材はいずれも柾目材を加工している。

W263～265は一木鋤であり、掘棒と称されているものである。W264は柄の部分が欠損しているが、刃先すべてが完存しており、貴重な資料といえよう。残存長32.4cmを測る。刃先は肩部からやや湾曲しながら先端にいたる。肩部から下へ約7cmの間は身厚1.3cmと厚いが、それ以下は厚さ0.5cmと薄く作られている。先端部では再び厚さが増し、一段高くなって終わっている。刃の側面は上面から斜めに加工が施されており、刃が存在しているような印象を受ける。W264はアカガシ亜属に属する柾目材が使用されており、表面には工具痕跡が多数残存している。W263は小片であるが、W264にみられる掘棒の先端部分に位置するものと考えられる。残存長8.5cm、刃先幅7.2cm、厚さ1.1cmを測る。W265は刃先と柄が一部欠損している。残存長60.2cmを測る。身は肩部から長さ11.7cmが残存している。身と刃先の間には段が設けられており、刃先の部分が一段薄くなっている。柾目材を使用している。

W266・267は反柄であり、ナスビ形農耕具の柄と考えられる。W266は完形の反柄で、全長121.8cmを測る。木取りは詳細には観察できなかったが、樹木の湾曲した部分を使用したものと考えられる。樹種はクスギ節に属する木材を使用したことがわ



第377図 河道1南岸出土木器（反柄・柄）（1/6）



第378図 河道1南岸出土木器（竖杵）（1/6）

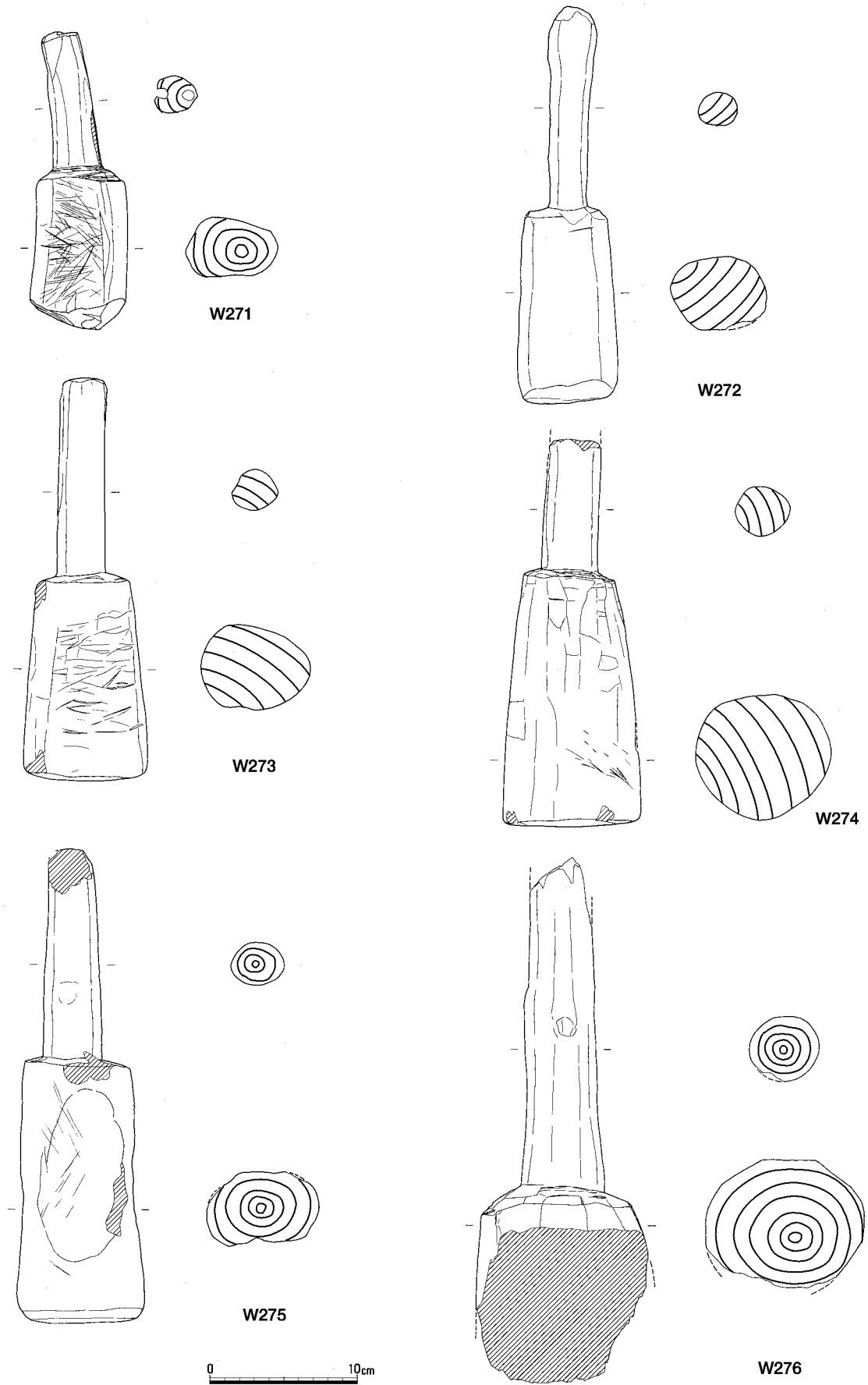
かっている。鍬台部は約19cmの長さを測り、先端部と台部と握部の境目に緊縛に使用する紐を固定するための紐かけが設けられている。上の紐かけは長さ1.4cmほどを削り残している。緊縛によるためか、やや磨耗している。下の紐かけは長さ2cm、幅1.2cmを測る方形状の突起である。この突起の下端部は若干窪んでおり、緊縛に起因する磨滅痕跡がみられる。この紐かけの間を詳細に観察した結果、鍬を固定した緊縛痕跡と考えられる紐の圧痕が多数観察できた。この紐の痕跡から鍬と柄の装着角度は約45°に復元できる。なお、この鍬台は平坦な装着面を形成しておらず、やや湾曲している。そのため、鍬本体を固定するためにはやや不安定で、鍬を完全に柄

に密着させるためには鍬自身を湾曲させるなど、他に何か工夫が必要であるような印象を受ける。握部に相当する柄は長さ106.5cmを測る。握部の基部は直角に折れ曲がっている。W267も反柄であるが、握部は失われている。鍬台に相当する先端部分は切断されており、この反柄は使用後に二次的な加工を受けている。反柄は割材を削り出しており、上の紐かけは残っていないが、下の紐かけは残存している。下の紐かけは段状に加工したのみであり、他の反柄のように突起を削り出してはいない。

W268は組合せ鍬の柄である。先端部および柄の一部が欠損している。残存長51.5cmを測る。柄は割材を利用しており、装着部付近で厚さを増し、装着面は木材を削りこみ、幅3cmの平坦面を作り出している。先端部分の形状は欠損しているため不明である。

W269とW270は竖杵である。いずれも半分が欠損している。W269は割材を削り出した竖杵である。残存長は56.6cmを測る。搦き部は下端に近い付近で最大となり、その最大径8cmを測る。先端部は丸く仕上げられており、使用による磨滅が激しい。搦き部と握部の境目は不明瞭であり、境界を示す段のようなものは認められない。握部は最も細い箇所を径約2cmを測る。W270も同様に割材を使用した竖杵であり、残存長は60.4cmを測る。竖杵の搦き部は下端で最大径を測り、径9.2cmである。下端部は平面をなしている。W270の搦き部は全体的に磨滅が激しく加工痕跡および使用痕跡は観察できない。さらに、搦き部の裏面は炭化しており、火にかけられたことがわかる。搦き部と握部の境目は明確でなく、漸移的に搦き部から握部へと至っている。

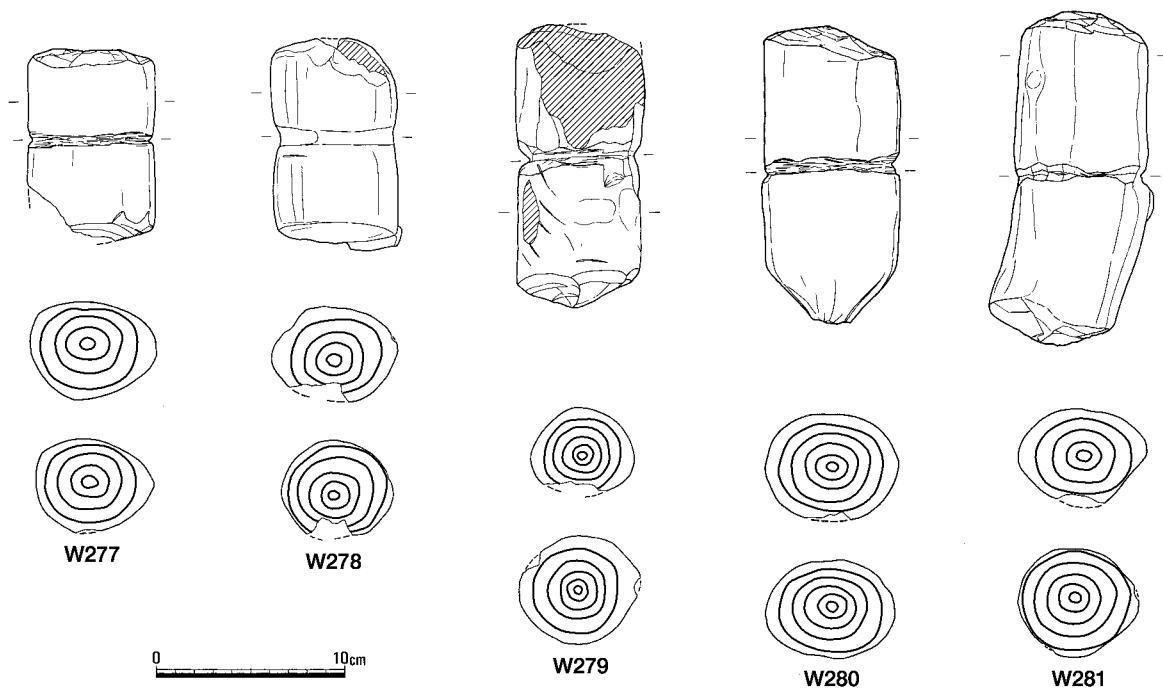
W271～276は横槌である。W271は柄の一部を欠損する。残存長20.1cmを測る。柄は径約3cmで表面には加工痕跡と使用痕跡が観察できる。敲打部は径約6.7cmを測る。表面には細い擦痕のような痕



第379図 河道1南岸出土木器（横槌）（1/4）

跡が多く観察できる。芯持材を削り出している。なお、柄から敲打部にかけて自然に形成されたと考えられる中空部分が存在している。W272は全体的に磨耗が激しく、表面の残存状況は良くないが完形である。長さ26.9cmを測る。柄は径約3cmを測る。敲打部は径6.8×5cmを測る。芯去材の割材を利用している。W273も完形の横槌で長さ27.3cmを測る。柄は径約3cmを測る。敲打部は下部に至るにつれやや太くなっており、最大径で約8.5cmを測る。敲打部では使用痕跡が多くみられた。芯去材の割材を削り出して製作されている。W274は柄の一部が欠損しているが、残存長26.3cmを測る。柄は残存長約9cm、径約3.8cmを測る。敲打部は下部が上部に比べてやや太くなっており、下端の最大径で約9.4cmを測る。敲打部は全体的に磨耗気味であるが、加工痕跡や使用痕跡がみられる。芯去材の割材が利用されている。W275は柄の先端が若干欠損しているもののほぼ完形の横槌であり、長さ32.4cmを測る。敲打部の中央部は使用に伴う磨滅でやせている。芯持材を削り出して製作している。W276は柄や敲打部が欠損しているが、残存長35.7cmを測る。形態が他の横槌に比べて大きいことから掛矢の可能性が考えられる。柄は径4～5cmを測る。敲打部は先端部分が火を受けて炭化しているが、残存した部分では加工痕跡がみられる。芯持材を加工して製作されている。

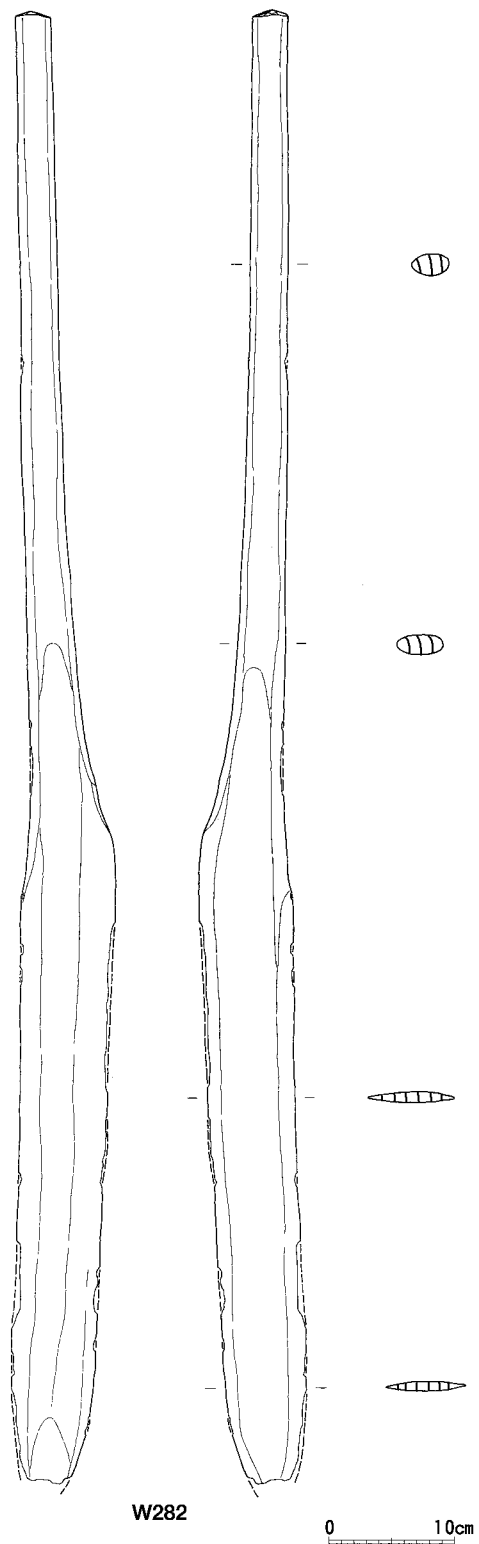
W277～281は木錘である。大きさは10.1～17.6cmを測る。いずれも芯持の丸太材の側面に細い溝を1周させて製作した木錘である。W277は残存長10.1cm、径6.7cmを測る。下端部が一部欠損している。W278は長さ12.5cm、径8.7cmを測る。全体が磨滅しており、工具痕や使用痕は観察できない。下端部に木塊を削り残している。W279は上端部が炭化して失われているが、残存長14.9cm、径6.0cmを測る。W280は完形であり、長さ15.7cm、径7.1cmを測る。若干、火を受けているが残存状況は良好である。この木錘の下端は細く尖り気味であるが、これは先がすぼんだ材木を使用したためと考えられる。W281は完形であり、長さ17.6cm、径約7cmを測る。屈曲しており、湾曲した芯持材を利用したためと考えられる。上下ともに切断痕跡が明瞭に確認できる。



第380図 河道1南岸出土木器（木錘）(1/4)

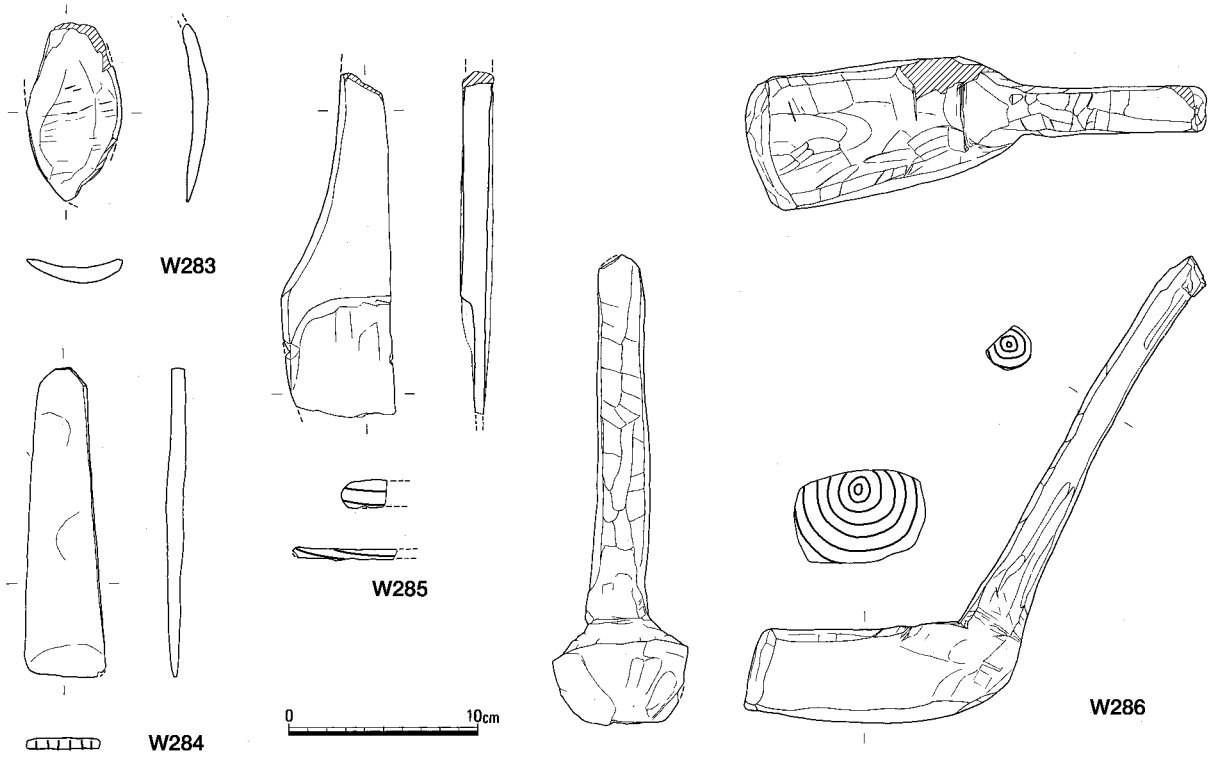
W282は柄に薄い刃のついた木製品である。漁具の櫂の可能性が考えられる。ほぼ完形で残存長116.6cmを測る。柄は土圧による影響も多少は考えられるが、横断面形が約3.5×1.5cmの楕円形を呈する。身は柄の先端から約50cm付近で徐々に幅を増し、厚さを減じながら刃部にいたる。身は最大幅で6.9cmを測る。身は薄くて最大でも約1cmほどしかない。身の横断面形は薄い紡錘形で、左右両方の端部には刃が設けられている。表面は使用による磨滅も一因であろうが、全体に平滑であり、加工痕跡は柄の先端部の切断痕以外は明瞭でない。使用された木材はアカガシ亜属に属する木材の柾目材を使用している。

W283は匙である。匙の身のみが残存しており、柄は欠損している。残存長9.4cm、幅5.1cmを測る。身は若干湾曲しており、中央部分が窪んでいる。表面には工具痕跡が多くみられる。W284は杓子形木器である。完形であり、全長16.4cm、幅4.3cm、厚さ0.6cmを測る。上部から下部に至るにつれ幅が広がっており、先端部分は刃部が設けられている。柾目材を使用している。W285は杓子形木器である。身の先端と柄が欠損している。残存長18.2cmを測る。柄から身に至るにつれ緩やかに幅が広がっており、身では下半部を一段深く彫りこんでいる。板目材を使用している。W286は匙の未製品と考えており、ほぼ完形である。欠損している箇所が部分的にあるものの、保存状況は極めて良好である。全長24.8cm、幅24.6cm、厚さ7.2cmを測る。W286はちょうど、幹と枝の分岐部分を利用しており、その角度は約115°である。身の部分は長さ14.7cm、幅7.2cm、厚さ5.2cmを測り、全体に工具による加工痕跡を多数観察することができる。柄は長さ23cmを測り、いずれの面も加工面を多数残している。柄の先端は先から約1.5cmほどを削り残して突起を作り出している。W287は容器の把手と考えられる。残存長9.0cm、幅5.8cm、厚さ2.3cmを測り、柾目材を利用して作り出されている。中央には1.7×1.5cmの方形の孔が開いている。下端部は欠損しているが、切り傷のような工具痕跡がみられる。W288は槽である。完形であり、長さ32.1cm、幅11.4cmを測る。丸太材を半裁した芯去材を加工している。底面は断面が浅い皿状に丸く整えられている。右側の短辺は底部から斜め方向に立ちあがっているのに対して、左側の短辺は「く」の字状になっている。いずれも加工痕跡が明瞭に残っていた。身の中央部には16.5

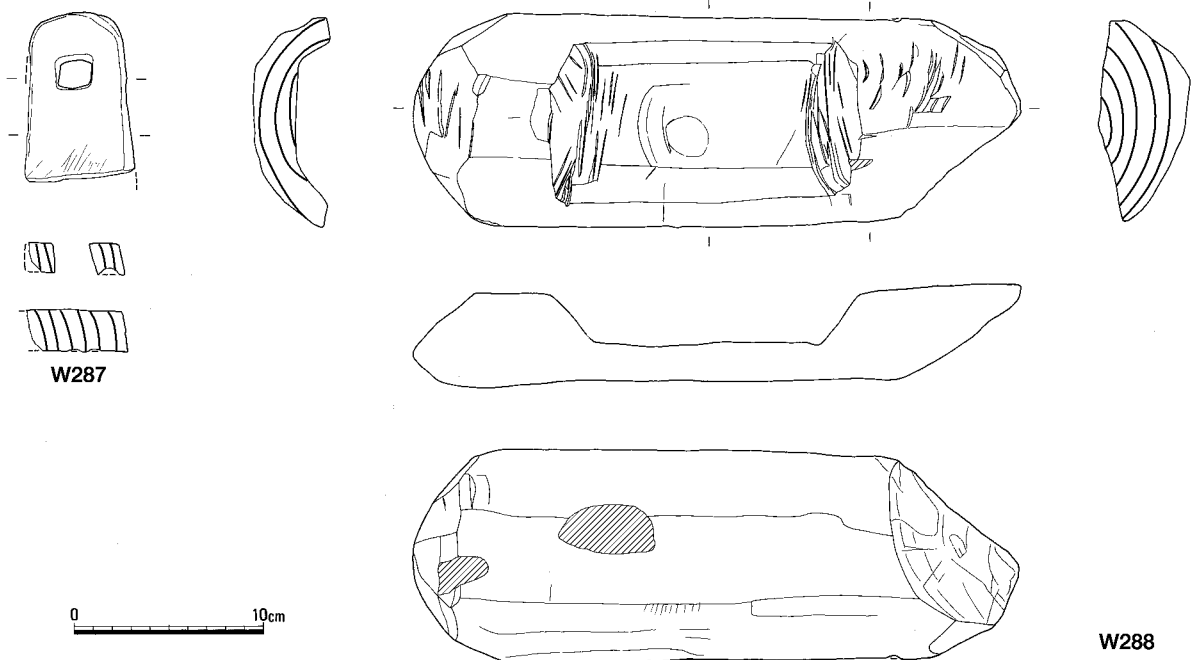


第381図 河道1南岸出土木器（櫂）(1/6)

W288は槽である。完形であり、長さ32.1cm、幅11.4cmを測る。丸太材を半裁した芯去材を加工している。底面は断面が浅い皿状に丸く整えられている。右側の短辺は底部から斜め方向に立ちあがっているのに対して、左側の短辺は「く」の字状になっている。いずれも加工痕跡が明瞭に残っていた。身の中央部には16.5



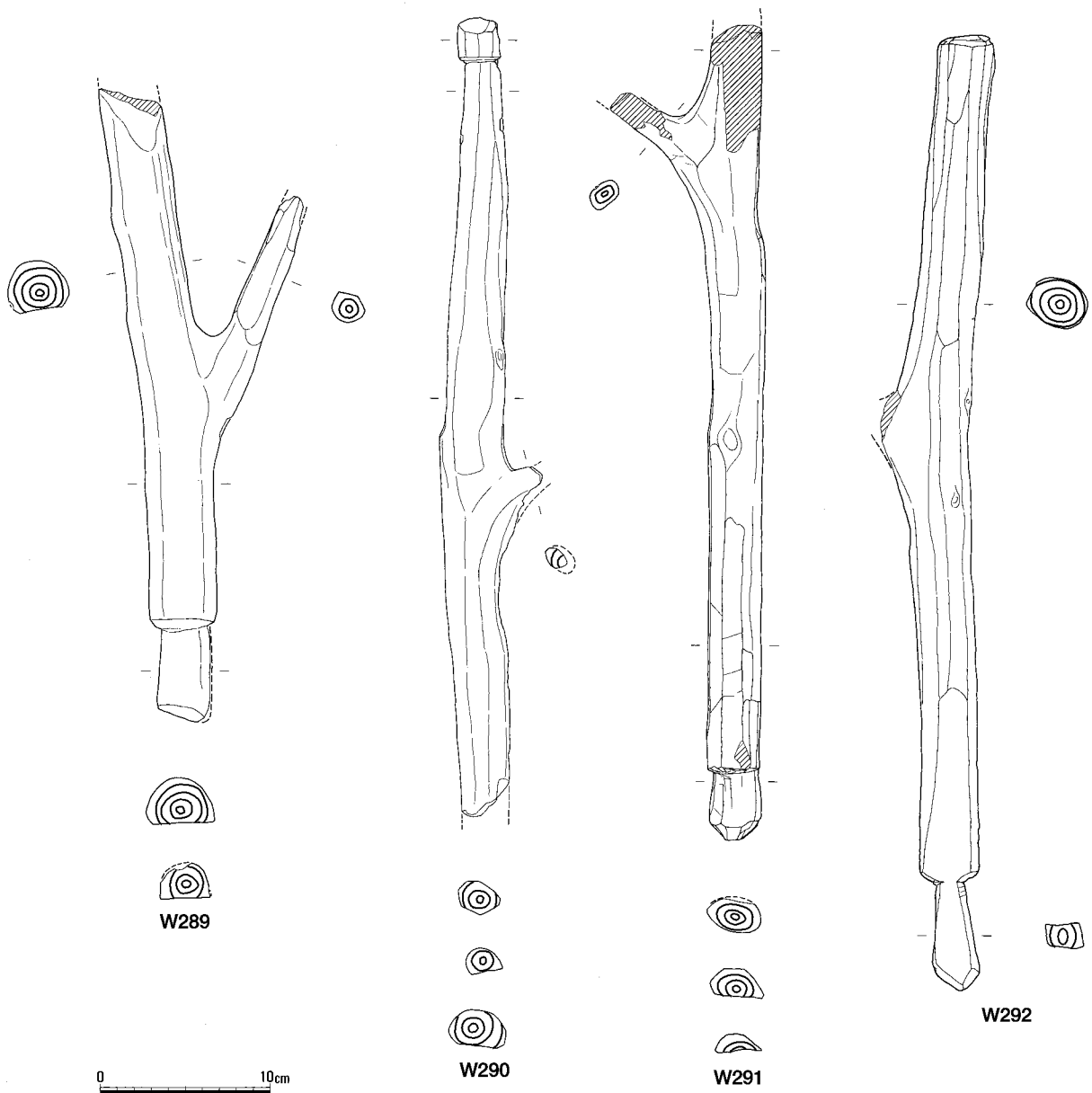
第382図 河道1南岸出土木器（食器具）（1/4）



第383図 河道1南岸出土木器（容器）（1/4）

×8.5cmにわたって凹部がみられる。凹部の長辺側は緩やかに下がっているのに対し、短辺側は急に落ちている。また、短辺側の面には工具痕跡が多数残存している。

W289～292はいわゆる背負子と称されるもので、枝の分岐部分を利用して作られているが、それぞれに形態が異なっている。W289は残存長37.2cmを測る。上端部から14.5cmの部位で分岐している。下端は一段細くなっており、長さ5.5cm、幅3cmの突起が設けられている。表面は自然面を利用した曲面であるが、裏面は平坦に加工されている。W290は下端部が欠損している。残存長41.0cmを測る。上端部は突起が作り出されている。枝は上から26.2cmの部位にある。裏面は平坦に加工されている。W291は、残存長47.1cmを測る。枝は上端から5.5cmにあり、他のものに比べると枝は上位に位置する。下端部には突起が作り出されている。裏面は平坦面を形成している。W292は枝の部分が欠損しているが上下端部は残存しており、全長56.3cmを測る。枝は上端から21cmで分岐しており、下端



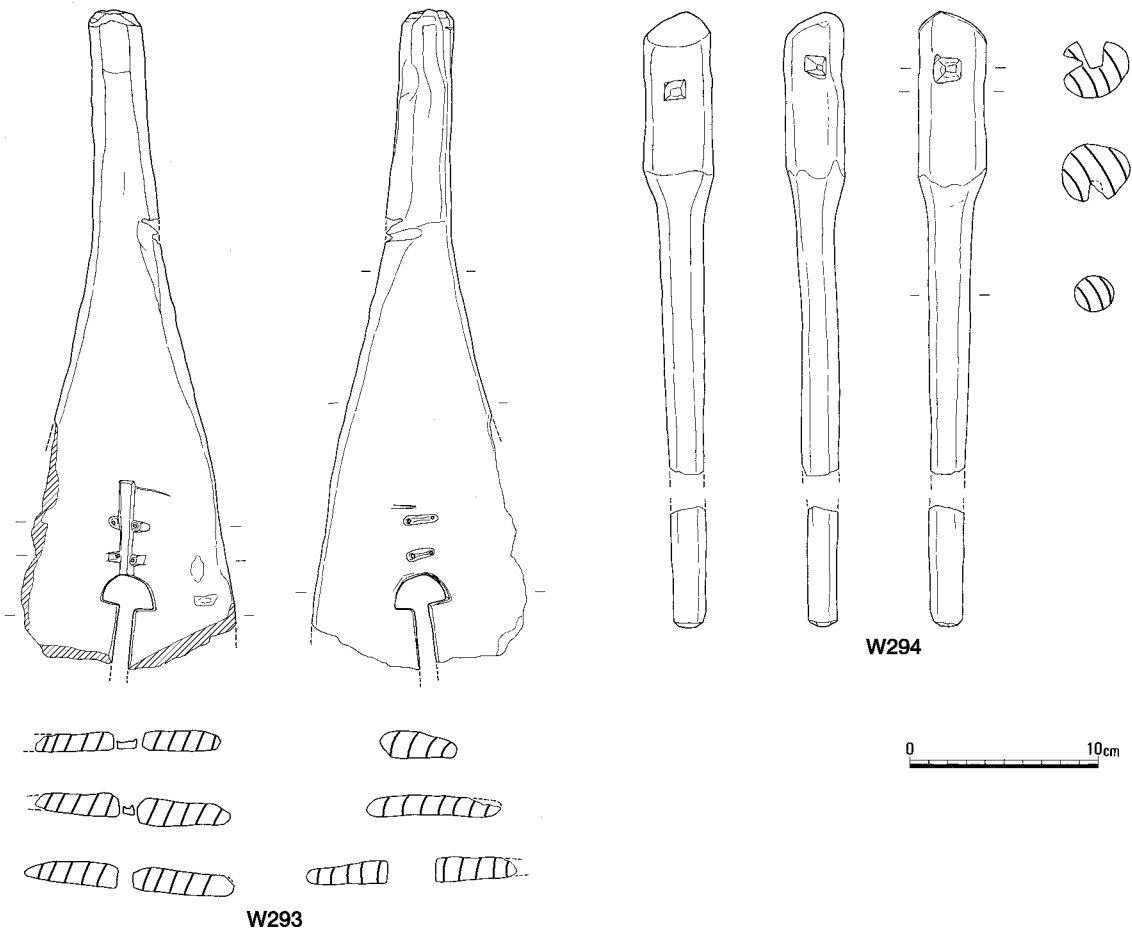
第384図 河道1南岸出土用途不明部材① (1/4)

部には断面方形の突起が長さ5.4cmにわたって削り出されている。部材の表面は丁寧に加工が施されているが、裏面は他の背負子状木製品にみられるような平坦面は削り出されていない。

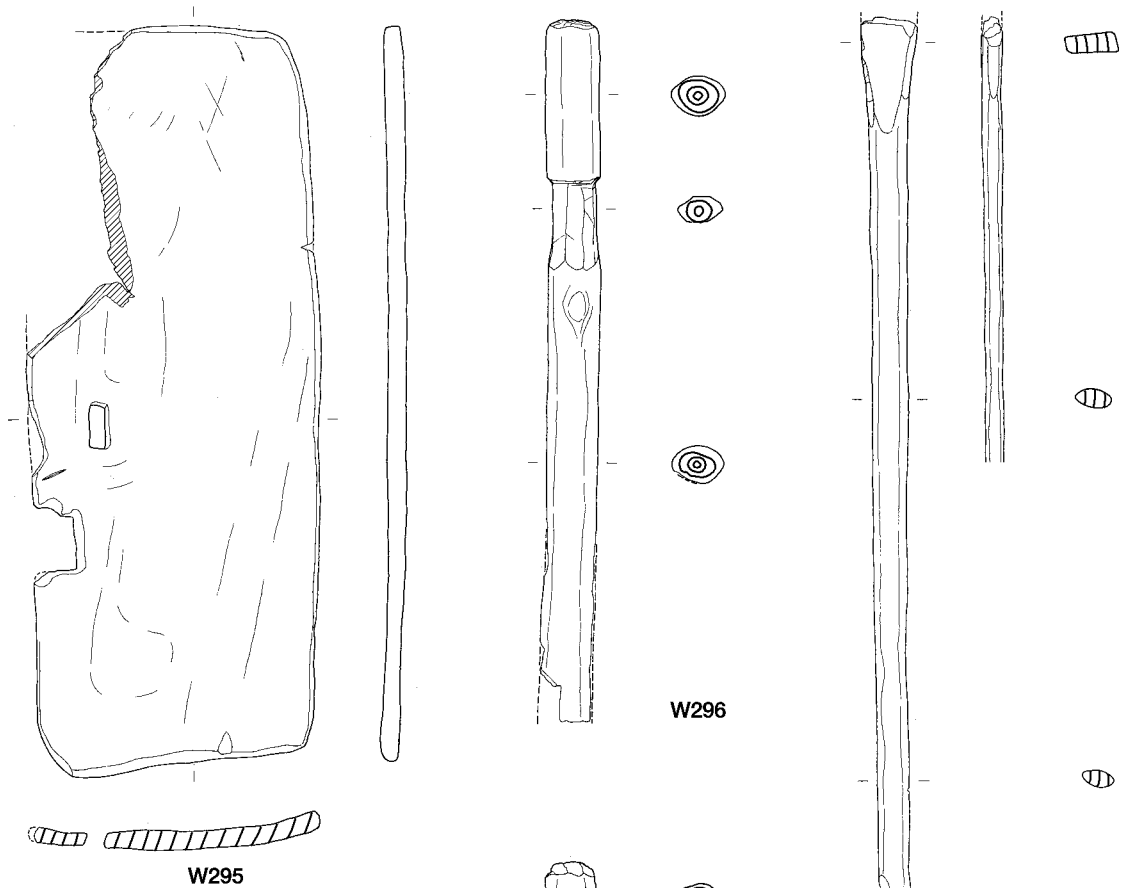
W293は一部が欠損しているが、残存長34.9cmを測る。上端の柄の部分から下にいたるにつれて徐々に幅が広くなり、ちょうど羽子板に似た形状を呈する。身部の中央には透かしが施されており、ちょうどキノコのような形をしている。表面ではこの透かしの上端から約5cmにわたって幅0.7cm、深さ0.6cmほどの溝が彫り込まれている。その両側に2孔一対で小孔が2か所で施されている。この小孔は表裏とも孔同士を結ぶ浅い溝が施されており、紐等による緊縛が行われていた可能性をうかがわせる。この木製品の縦方向に何か別部材を取りつけ、小孔に紐を通してこの別部材を固定していたのではないかと想定できる。部材は柁目材を利用して作られている。W294は棒状の部材の先端に穿孔が施されている木製品である。部材は一部欠損しているものの、残存長30.9cmを測る。部材は柄から上部にいたるにつれやや太くなり、上半部で1.5×1.2cmの方形の孔が3方向から穿たれている。孔はいずれも貫通していない。芯去材の割材を削り出して製作している。

W295はほぞ穴がみられる板材である。残存長32.9cm、残存幅15.7cm、厚さ1.1cmを測る。中心からやや左側で穿孔がなされ、2.5×1.0cmの方形孔が設けられている。板材はほぼ長方形であるが左端部で方形の抉りがみられる。柁目材を利用した板材であるが、使用用途は不明である。

W296とW297は棒状の製品であり、先端部を削り残して突起部を作り出している。W296は欠損しており、残存長55.4cm、径約4×3cmを測る。先端部から13~19cmの範囲を削りとり、先端部に長さ



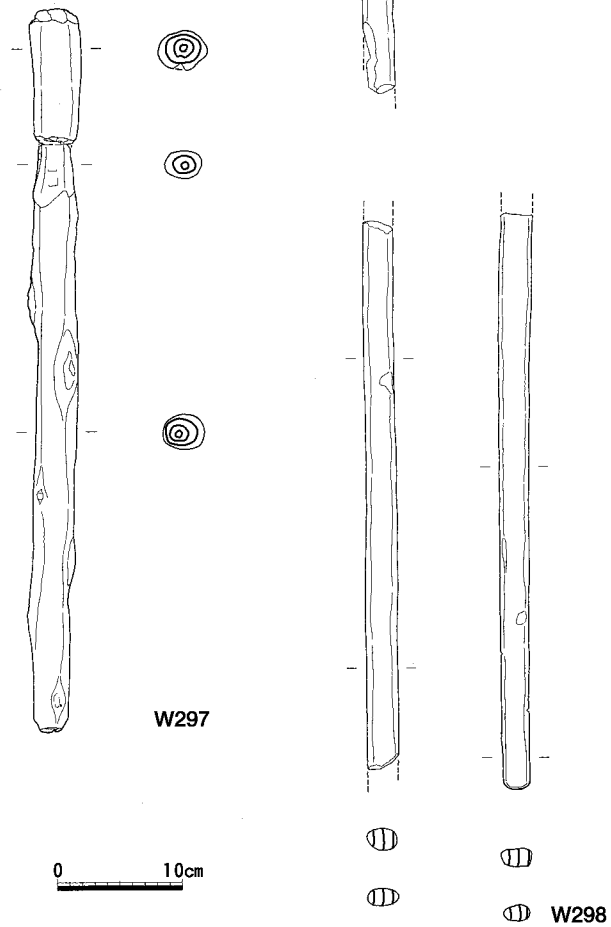
第385図 河道1南岸出土用途不明部材② (1/4)



第386図 河道1南岸出土
用途不明部材③ (1/4)

12.5cmの突起を作り出している。丸太材を利用している。W297は完形であり、長さ57.4cm、径約4cmを測る。部材の先端から10.5~15cmの部分を取り、先端には長さ10.5cmの有頭状の突起を作り出している。芯持ちの丸太材を使用している。

W298は棒状の木製品である。図示した3点は出土した位置等から、いずれも同一個体であると考えられ、すべてを合わせても最低163cm以上の部材であることが想定できる。先端部は欠損しているが、柄から断面方形の身のような部分を作り出している。いずれも芯去材の割材を加工している。



第387図 河道1南岸出土用途不明部材④ (1/6)

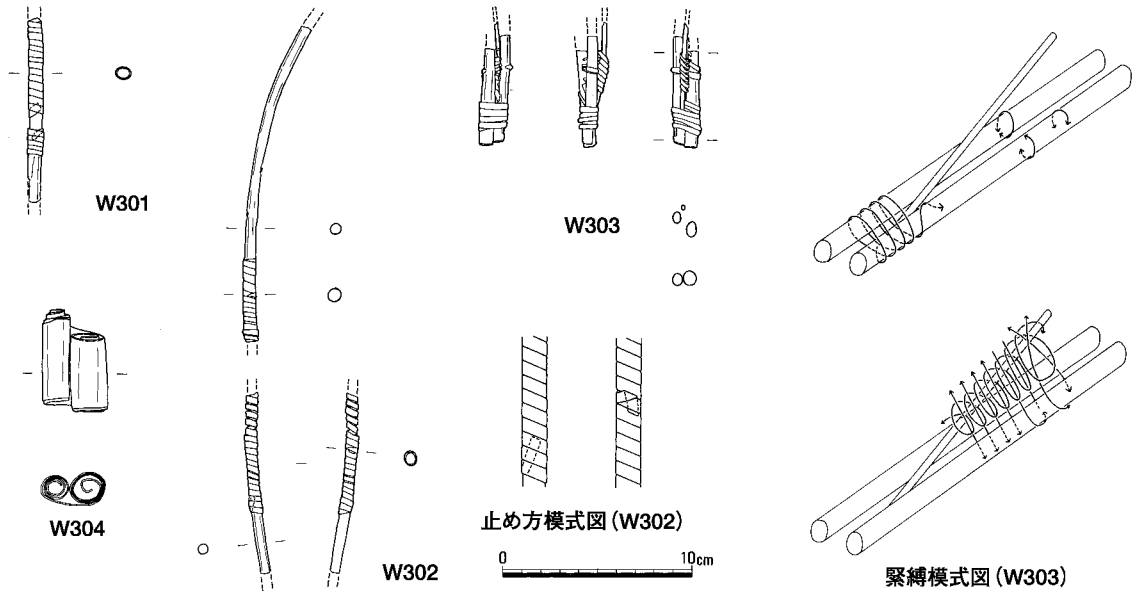


第388図 河道1南岸出土遺物(編物)(1/2)

W299は編物であるが、一部しか残存していないため、全体の形状を把握することは困難である。残存している範囲で8.1×4.3cmを測るが、残存状況は極めて良好である。縦方向に2本一組で植物原体が通っており、横に幅約0.8cmの幅の広い樹皮のようなものが2本越え、2本潜りて進んでいる。この横帯は、上端では右端で2本一組の原体を3回ほど巻いてから左側に向かっている。また、その下も右端部で縦の原体を3回ほど巻いてからまた左方向に向かっている。W300も編物である。約16×10cmの範囲で残存し

ている。使用されている原体は幅0.2~0.3cmの藁や茅の茎のような植物で、残存状況は良好である。編み方は、縦条と横条を交互に規則的に編んだものと、二つ越え一つ潜り一つ送りの二通りの編み方がみられる。その大部分は前者の編み方であるが、上端部では後者の編み方がみられる。この籠は土ごと取り上げているため、表面のみの観察であるが、編物の存在している面が複数存在しているようである。中央には幅4.5×4.5cmの部分が高い位置で残っている。また、下面のものも更に下に折れ曲がっているようであり、推測であるが、小袋のような形状をした製品である可能性が考えられる。

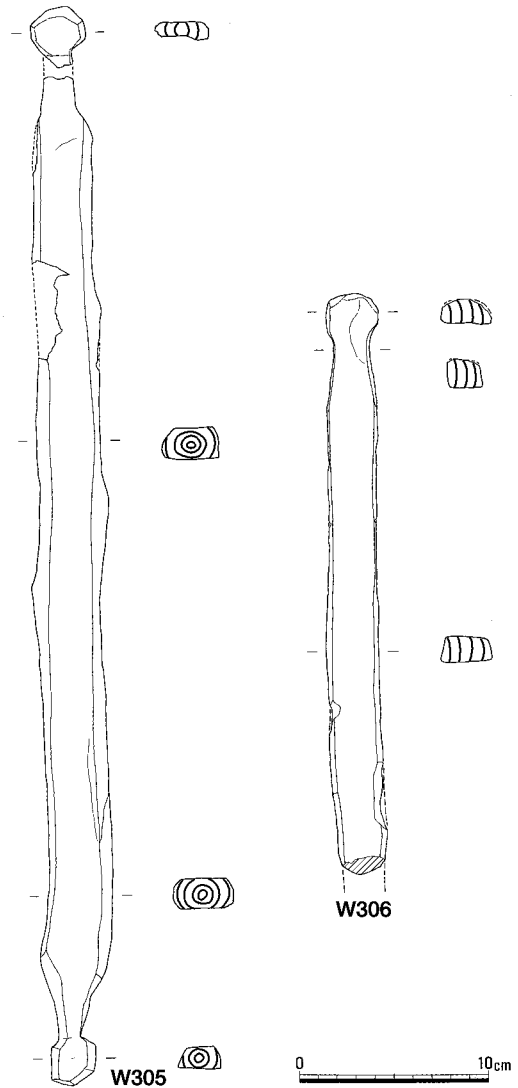
W301~303は棒に樹皮を巻いた製品である。W301は残存長9.9cmを測り、径0.8cmの棒に樹皮を巻きつけている。樹皮は幅0.8cmを測るもので、上下に2か所で巻かれている。いずれも棒の中央から上と下に向かって巻きつけられている。樹皮は端部を巻いた樹皮の下に潜らせて固定されている。棒の上下が欠損しているために、どれほどの範囲にまで樹皮が及んでいたかは不明である。W302は取り上げに失敗して二つに折れてしまったが、一連のものである。残存長16.7cmを測る。樹皮は長さ約10.5cmの範囲で観察できる。上下の部位は樹皮の端部を巻いた樹皮の下に潜らせて固定されている。上の巻き初めの部分から2cmの箇所まで樹皮がよじれて、表裏が逆転している。また、下の部材の巻き初めの部分から上に3.5cmの部位では、樹皮を継ぎ足したような痕跡が観察できる。W303は3本の棒を樹皮で緊縛したものである。3本の棒のうち、2本は径0.5~0.8cmを測る太いもので、残りの1本は径0.2cmの細いものである。この製品には2か所で緊縛が行われており、その一つは太い棒同士を結びつけるものであり、もう一つは太い棒と細い棒を結びつけるものである。前者は太い棒同士に巻きつけられている。端部を固定して、2本の棒同士を4回ほど巻いたのちに、片方のみを巻く形態に変わっている。また、後者の緊縛方法は欠損している箇所もあって詳細は不明であるが、図に示したような構造となっている。太い棒と細い棒を緊縛した後に別の樹皮を細い棒の周辺に巻きつけている様子がうかがえる。W304は幅4cm程度の樹皮を巻いたものである。用途は不明である。



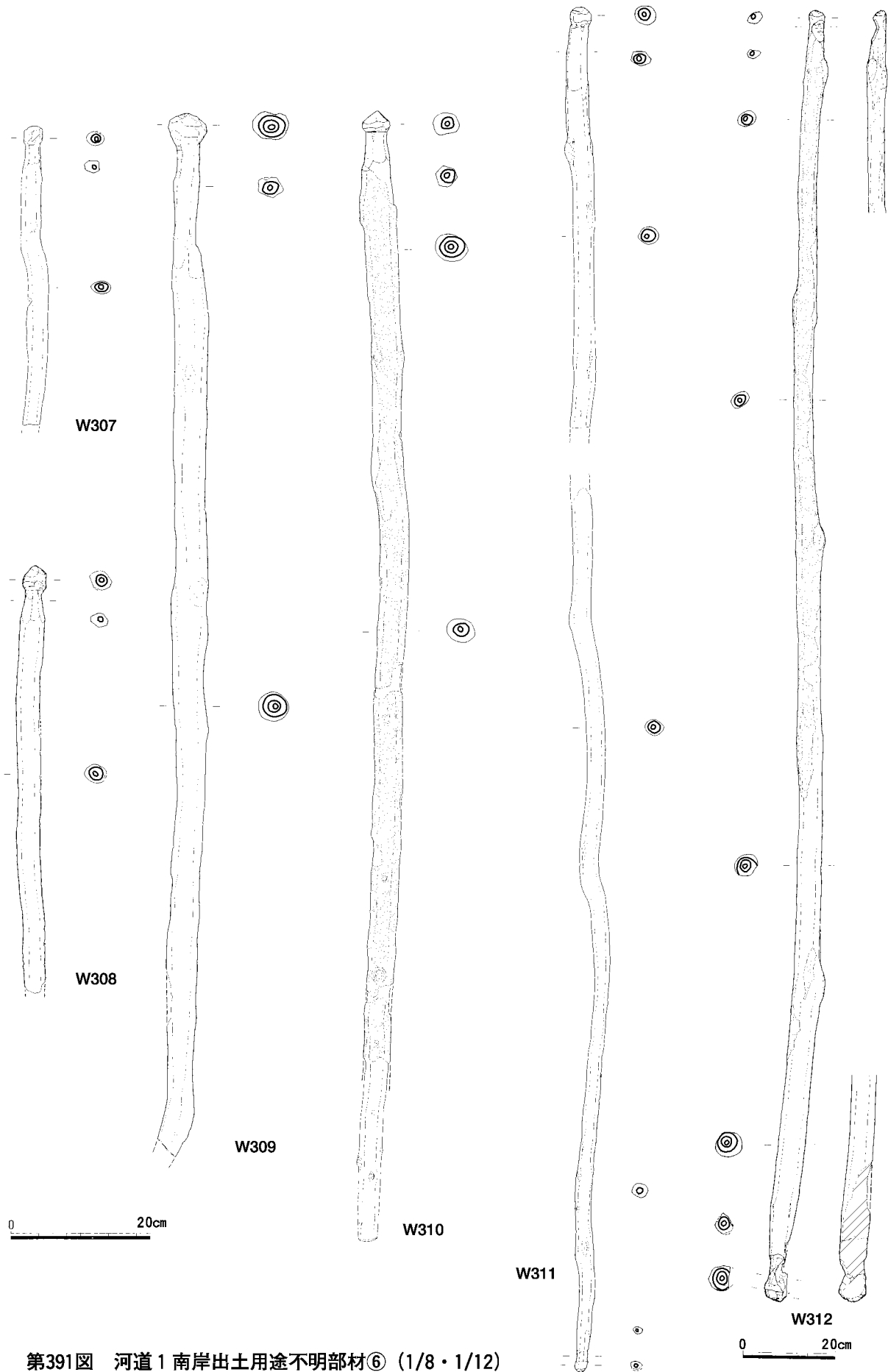
第389図 河道1南岸出土遺物（樹皮製品）（1/4）

W305とW306はともに先端を加工して頭部を作り出している部材である。W305は一部欠損しているが、残存長56.5cm、最大幅3.6cm、厚さ1.6cmを測る。部材は芯持材を削り出している。部材は表裏面を平坦に削り、左右を削り込んで頭部を両端に作り出している。W306も同様の部材であるが、芯去材の割材を加工し、角材状に加工した後に頭部を作っている。下半分は欠損しているが、残存長30.9cm、幅2.8cm、厚さ1.4cmを測る。

W307～311は先端を加工し頭部を作り出している部材である。W307は残存長42.8cm、径2.9×1.8cmを測る。丸太材を利用しているが樹皮は残っていないかった。W308は残存長62.8cm、径3.6×2.7cmを測る。丸太材を利用しているが樹皮は残存していない。W309は残存長150.2cm、径5.2×4.0cmを測る。頭部の下を長さ約18cmにわたり削っており、他のものに比べて長い頸部を有する。この頸部より下の部分は火を受けて炭化している。丸太材を利用している。W310は残存長162.6cm、径4.7×4.0cmを測り、先端が有頭状に加工されている。丸太材を利用し、樹皮がほぼ全面にわたって残存している。W311は残存長282.4cmを測る。2片に分かれているが同一個体であると考えられる。ともに先端部を加工し円形の頭部を作り出している。部材は両者とも丸太材を利用しているが、樹皮は残存して



第390図 河道1南岸出土用途不明部材⑤（1/4）

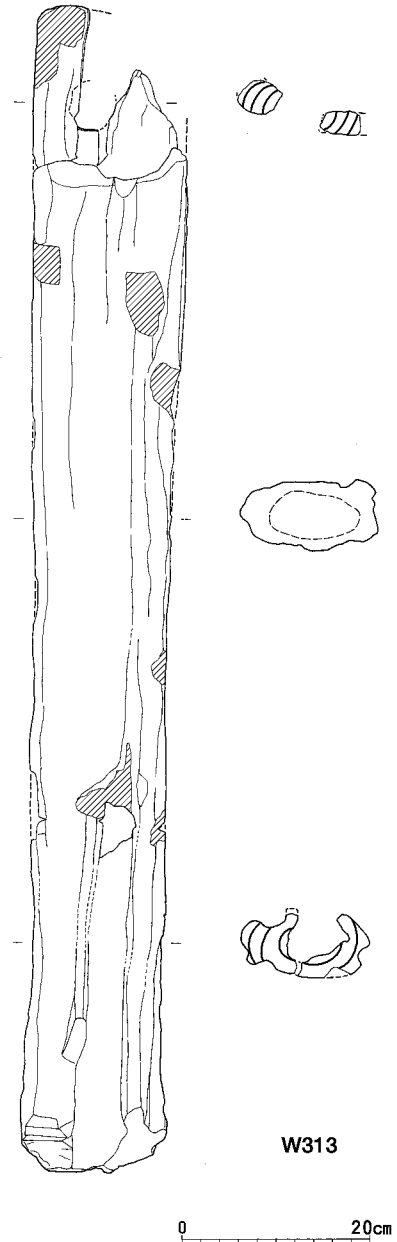


第391図 河道1南岸出土用途不明部材⑥ (1/8・1/12)

いない。河道1南岸で出土した部材の中でも長い部類に属する。W312は両端が残る完形の部材である。全長277.2cm、径約5.8×5.3cmを測る。部材の上端部は、頭部を作り出しており、その後、片面を浅く抉って、欠込み状の仕口のような構造を作っている。下端部も同様に、円形の頭部を作り出し、片面に抉りを入れて仕口のような構造を設けている。下端部では約80cmにわたり、炭化しているため、残存状況は良くない。建築部材の構造材の一部として使用された可能性が考えられる。河道1南岸では、この部材を含めても建築部材と考えられるものは少なく、後述する二股杭を除いて、目立った建築部材は出土していない。

W313は全長123.7cm、幅16cm、厚さ7.3cmを測る部材で、中央に径約7cm前後の空洞の部分が存在するものである。当初は中央が空洞化した自然木の残存したものと考えていたが、加工痕跡がみられたことから、人為的に使用されたものと判断し、その形状から導管として報告する。この部材は腐朽による損傷が激しく、表面も製作当初の面を残す箇所はわずかである。導管の上端部付近では穴のような痕跡が観察できる。穴は残存している部分のごくわずかであるため、円形であるかどうかは厳密には不明であり、確実にないが、仮に円形であるとすれば径約5cmに復元できる。導管の外面は腐朽により、人為的な加工痕跡はあまりみられず、むしろ腐朽による凹凸および変形が激しい。下端部では、上面で工具による加工痕跡がみられる。なお、この導管は自然に空洞になった部材を利用したものであると推測している。

W314～318はいずれも樹木の分岐部分を利用し、頭部に部材を受ける装置を作り出しているものであり、二股材あるいは二股杭と称する。W314は残存長43.3cm、径約7cmの丸太材を利用している。二股の枝部は欠損しているが、幹の部分で半割して、二股間に幅約8cmの空間をつくっている。W315は完形の二股杭である。長さ42.7cm、径3.6cmを測る。丸太材を使用しており、加工が施されている部分以外には樹皮が残存している。W316は「Y」字状をした二股杭である。完形で長さ120.9cm、径8.1cmを測る。丸太材を使用しており、全面に樹皮が残る。自然の枝の分岐を利用し、端部を切断しただけのもので、簡易な加工である。W317は長さ127cm、径4.7×3.9cmを測る。頭部は幹に相当する部分を若干削り取っている。丸太材を使用しており、ところどころで樹皮が残存している。W318は残存長211cmのやや大型の二股材である。二股部の枝部分は自然のままの状態を残しており、表面に樹皮が残存している。二股部の幹では約3分1ほどの部分を削り取り、二股間に広い空間を作り出している。部材の幹にはところどころに浅い抉りが施されている。部材の左側には7か所の抉りがみられ、抉りは長さ約6～15cmを測り、約7～

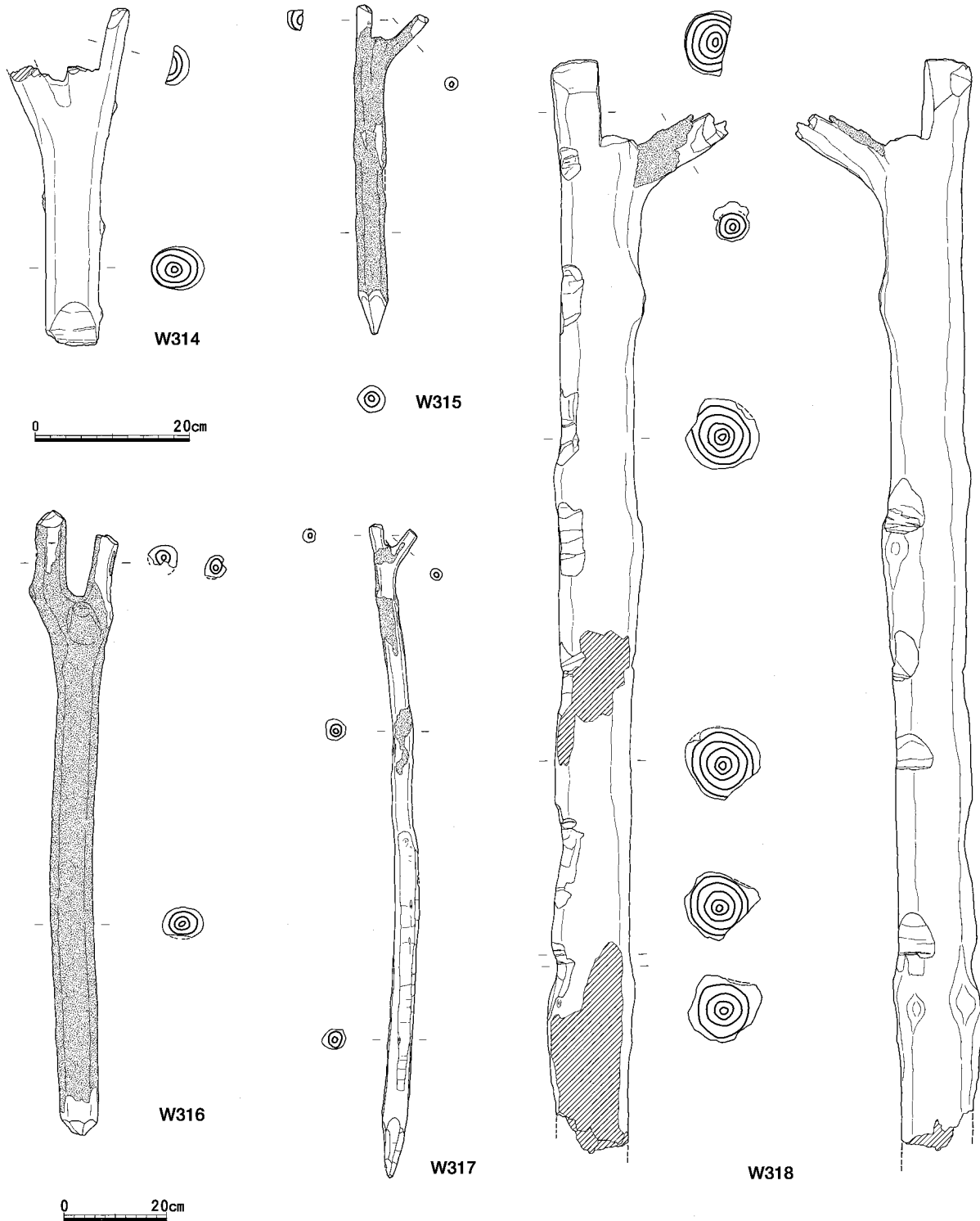


第392図 河道1南岸出土遺物
(導管) (1/8)

16cmの間隔で設けられている。また、右側の面では4か所の抉りがみられる。抉りは約10~28cmの間隔で設けられており、長さは約9~12cmを測り、左側のものに比べ、抉りの大きさはやや小さめである。いずれも浅く、梯子にみられるような足掛けのような用途も想定しにくいことから、その実用的な用途は不明である。

なお、図示していないが、河道1南岸では、護岸施設等に利用された杭も多数出土している。

(金田)



第393図 河道1南岸出土二股杭 (1/8・1/12)

7 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第394～396図）

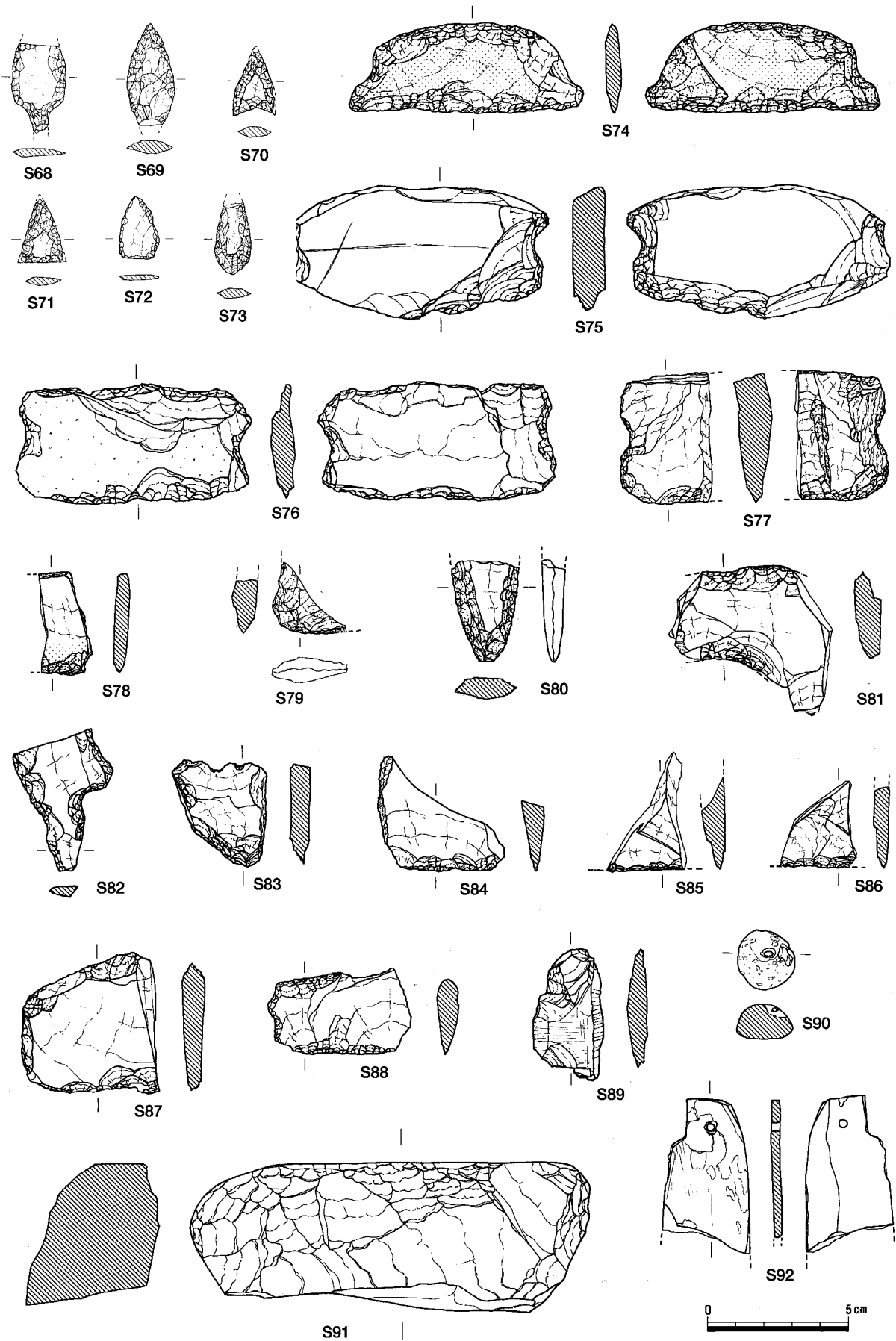
ここでは、包含層出土遺物、掘り下げ時の遊離遺物、他時期の遺構埋土に混入したと思われる遺物などの中から、主要な石器・土製品・鉄器を掲載する。この他に土器類も多数出土したが、スペースの都合で掲載は見送った。これらの遺物は、形態からの時期特定が困難なものが多く便宜的に本項に集めたのが実情であり、実際には他時期の遺物が多数含まれる可能性が高いことを断っておく。

石器類は調査区内各所から多数出土している。S68～73は石鎌である。S68は有茎式である。S73は古墳中期の竪穴住居63の埋土に混入していたものである。S74～78は打製石包丁で、S76が古銅輝石安山岩製である以外はサヌカイト製であった。S74は古墳前期の土壙67から出土した完形品で、表面の光沢（コーングロス）が顕著である。両端部は他の個体のように抉りを入れるのではなく、片方につまみを作り出したような特異な形態である。S75は両端に抉りが入っているが加工痕は少なく、刃部形成も不明瞭である。S78は小片ながら刃部に光沢があり、石包丁の破片と考えられる。S79・80は小片であるがサヌカイト製打製石剣の基部と推測される。部分的に光沢を有するため、当地で石剣の製作方法として一般的な石包丁の転用品と思われる。S81は石鎌の破片かとも思われるが判然としない。S82は表面に光沢を有し、石包丁転用の可能性がある石錐である。S83～89はスクレイパーおよび加工痕、使用痕のある剥片などである。石材はすべてサヌカイトである。S90は半球形を呈する軽石で、小さな穴が1か所斜めに貫通することから浮子と考えられる。S91は安山岩の原礫を荒割りした何らかの未製品である。S92は、3区11RのP533から出土した板状石製品で、石製模造品の一種かと思われる。表面は丁寧に研磨され、端に近い位置に円孔が1個みられる。厚さは3mm程度とごく薄い。

S93～95は、太形蛤刃石斧である。使用石材は、S93・94が玢岩、S95が安山岩である。S93は古墳時代前期に属す竪穴住居36の埋土から出土したもので、先端部を欠損している。S94・95は逆に基部を欠失している。S94・95には、側面に装着のためと思われる敲打痕が明瞭に認められる。S96～100は、砥石である。石材は、S96・97が流紋岩、S98が頁岩、S99が泥質片岩、S100が花崗岩である。いずれの砥石も複数の面が使用されている。S99の1面には細い溝状の窪みが数条認められるが、研磨作業の結果かどうかはよく分からない。S100は、重量3037.3gを測る大形品で、使用方法や用途が異なる可能性がある。S101～107は石錘で、楕円形でやや薄手の円礫を使用し、長軸方向に縄掛けの溝を刻み込むもの、長軸両端を打ち欠くもの、短軸両端を打ち欠くものの3種類がみられる。

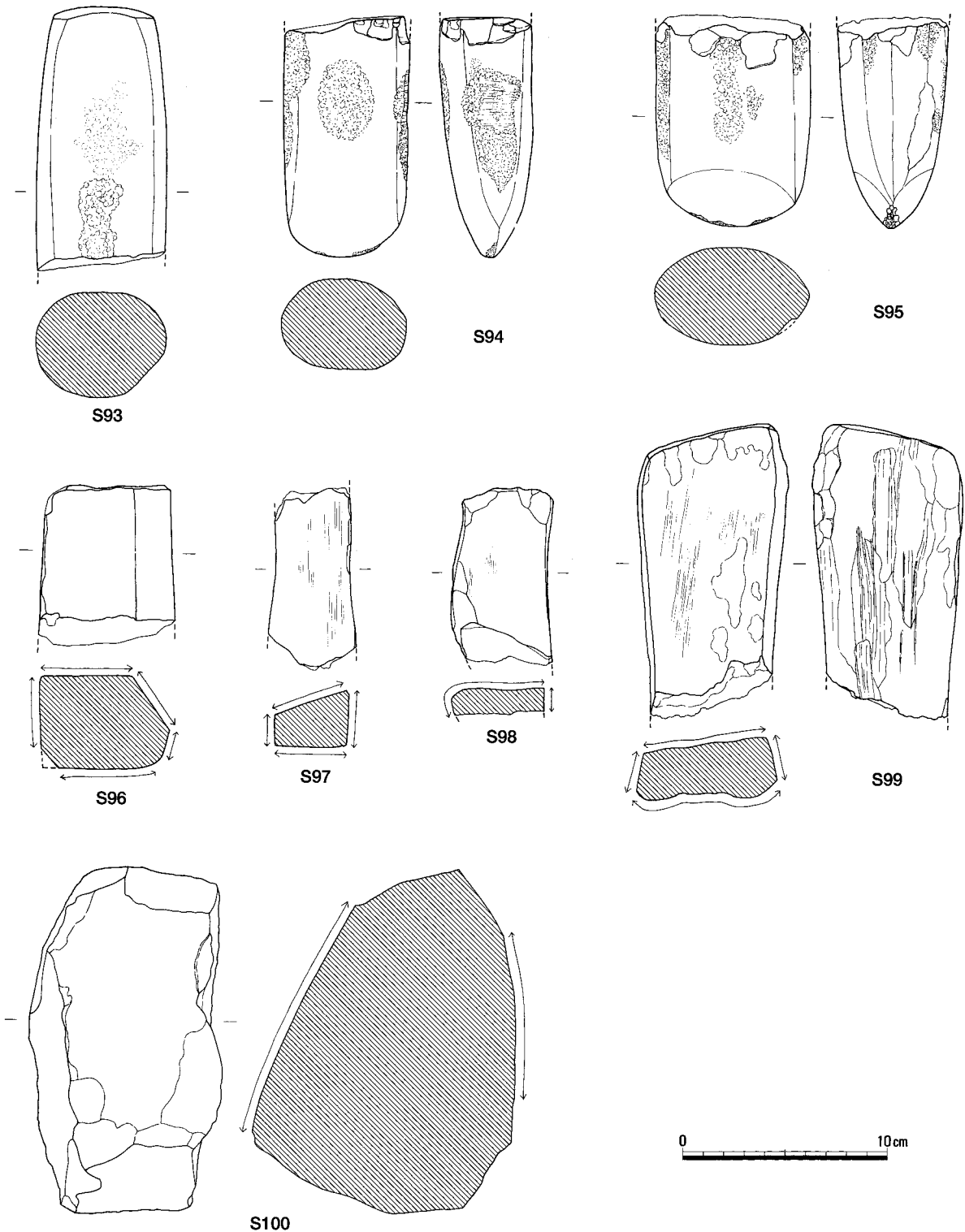
以上の石器のほかに、いわゆる「叩き石」も出土している。出土量が多数にのぼるため、全点について実測は行ったが掲載は見送った。形態的には細長い礫を用いたものが多く、その端部に敲打痕が形成されている例が多い。

土製品も多く出土しているが、古墳時代との区別が困難なものが多い。C23～25は土器片転用の紡錘車である。C23は穿孔が終了していない。C26～28は土器片を転用した円盤状土製品で、紡錘車未製品の可能性もあるが断定できない。C29は、土錘の破片である。C30は用途不明品である。ミニチュアの壺状を呈し、口縁部直下に4か所の円孔が開けられている。C31は最大径39mmを測る球形の土製品である。表面には工具の当たり痕と思われる筋が多数残っている。玉を思わせる形態であるが用途は不明である。

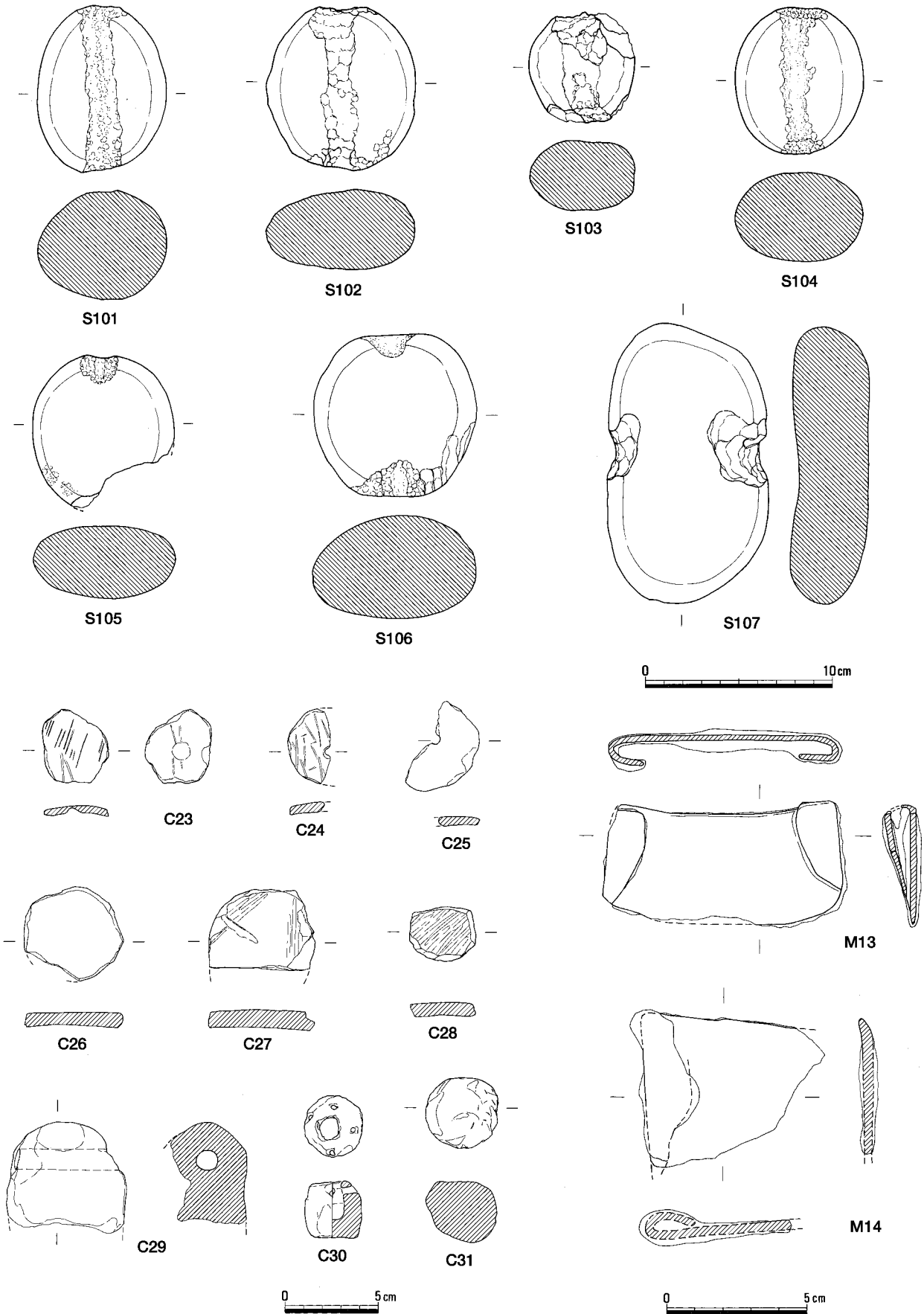


第394図 遺構に伴わない遺物① (1/2)

鉄器類については、鉄片はある程度出土しているものの器種特定、図示が可能な個体はごくわずかである。M13・14は鉄製の鋤先で、それぞれ3区の11R・12R区から出土した。包含層出土としているが、この両地区は弥生後期～古墳時代の竪穴住居が密集する地帯であるため、本来はそれらの住居に伴っていた可能性も高いと思われる。(岡本)



第395図 遺構に伴わない遺物② (1/3)



第396図 遺構に伴わない遺物③ (1/3・1/2)

第6節 古墳時代前期の遺構・遺物

1 古墳時代前期の概要

検出した遺構は、竪穴住居27軒、掘立柱建物1棟、井戸5基、土壙17基、溝3条、河道1条、貝塚1か所などがある。弥生時代後期から引き続いて、河道の両岸に集落が形成されており、弥生時代から古墳時代にかけての集落の様相を知る上での良好な資料であるといえる。

遺構に伴う土器の出土量も多く、掲載した遺物は、土器289点、土製品7点、鉄器11点、玉類6点、石製品7点にのぼる。しかし、弥生時代後期と同様に北岸側の微高地が後世の削平を受けており、遺構の残りは良くない。反対に南岸側の微高地では遺構の重複が著しく、そのため他の遺構に削平されているものが多いという制約は否めない。

竪穴住居の平面形は、弥生時代後期の円形のものから方形に変化しており、1軒のみが多角形を呈している。竪穴住居には、ベッド状の高まりや方形土壙、中央穴をもつもの、間仕切り状の溝をもつものなどを検出している。

井戸は北岸側に2基、南岸側に3基検出しており、井戸1においては底面で完形の甕が6点出土し、井戸の廃棄時における祭祀の一形態が看取される。

またこの時期になると、製塩土器が竪穴住居や土壙から多く出土しており、土壙68では使用された製塩土器が多量に廃棄されていた。河道の北岸べりにおいては弥生後期に引き続いて貝塚が形成されており、炭化米が充填された土壙67も検出されるなど、生産活動の痕跡がうかがい知れる資料を多く検出することができた。(時實)

2 竪穴住居

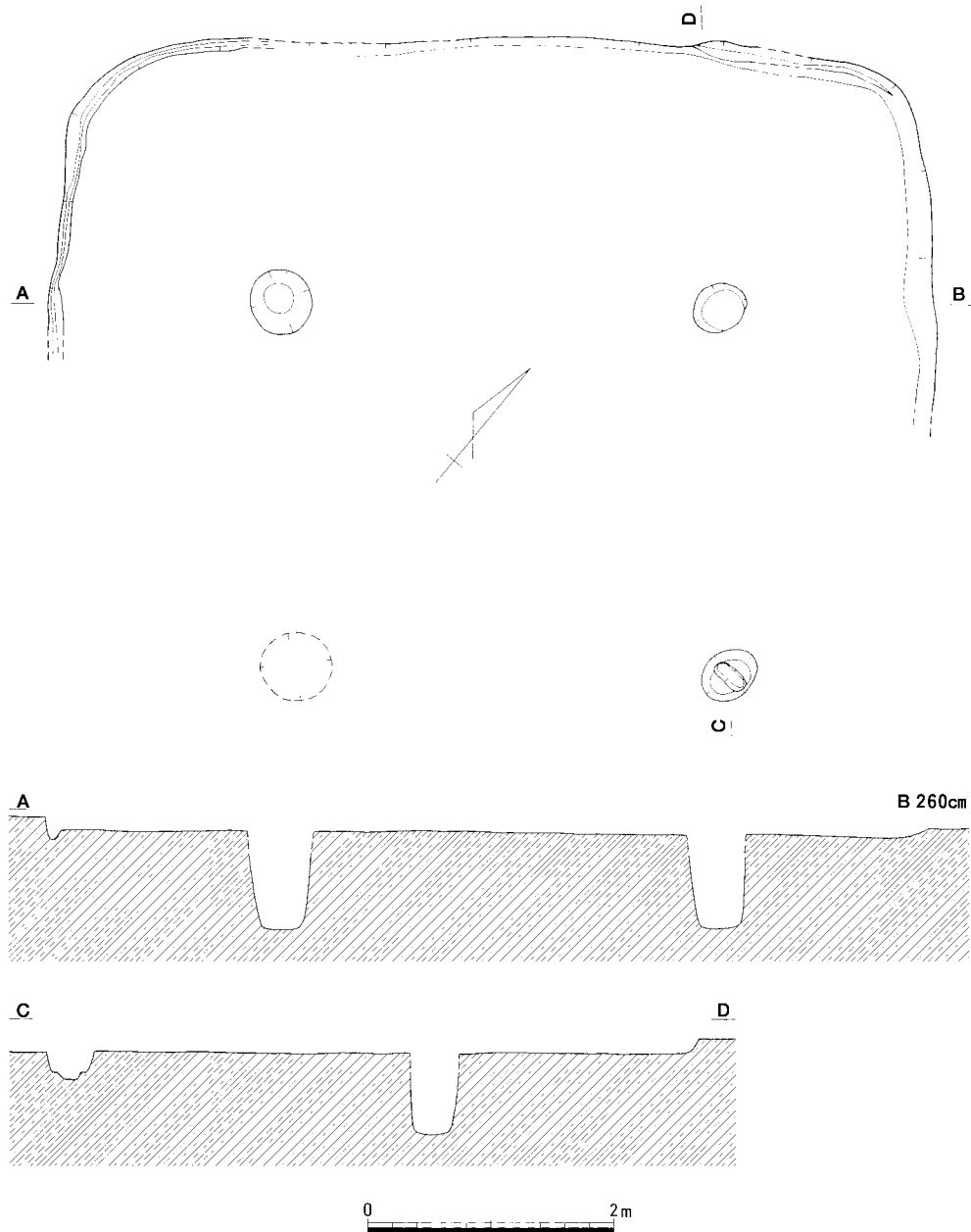
竪穴住居23 (第397・398図)

5Q区南東端に位置し、竪穴住居50が上層に位置する。竪穴住居50の下部で検出したが、この住居との間10cmには洪水の堆積土と思われる土が存在していた。検出面から床面までの深さは約6cmを測る。西側の壁体溝は部分的に10cmの深さで残っていたが、中央から東側では溝状には残っていなかった。床面には黄色の貼り床が観察されたが、図化できなかつた。この住居内では多くの柱穴が確認できたが、住居に属するものは断定しがたく、現状では図示したものが最も妥当と考えられる。おそらく4本柱で、柱間距離は300～350cmであろう。時期についてであるが、遺物がほとんどみられない。そのため断定はできないが、住居の形状と竪穴住居50との層位的関係から、古墳時代前期に属するものと考えられる。(氏平)

竪穴住居24 (第399・400図)

9Q区に所在する方形の竪穴住居である。すぐ南東側に竪穴住居25が隣接するが、間隔からみて同時存在は考えにくい。北側を河道2に切られるため残りは良好でないが、床面で検出された柱穴2基の位置を参考にとすると、本来の規模は一辺220cm程度になると思われる。柱穴の深さは約60cmを測る。

埋土中からは少量の土器片のほか、砥石S108が出土している。流紋岩製で重量261.1gを量り、3



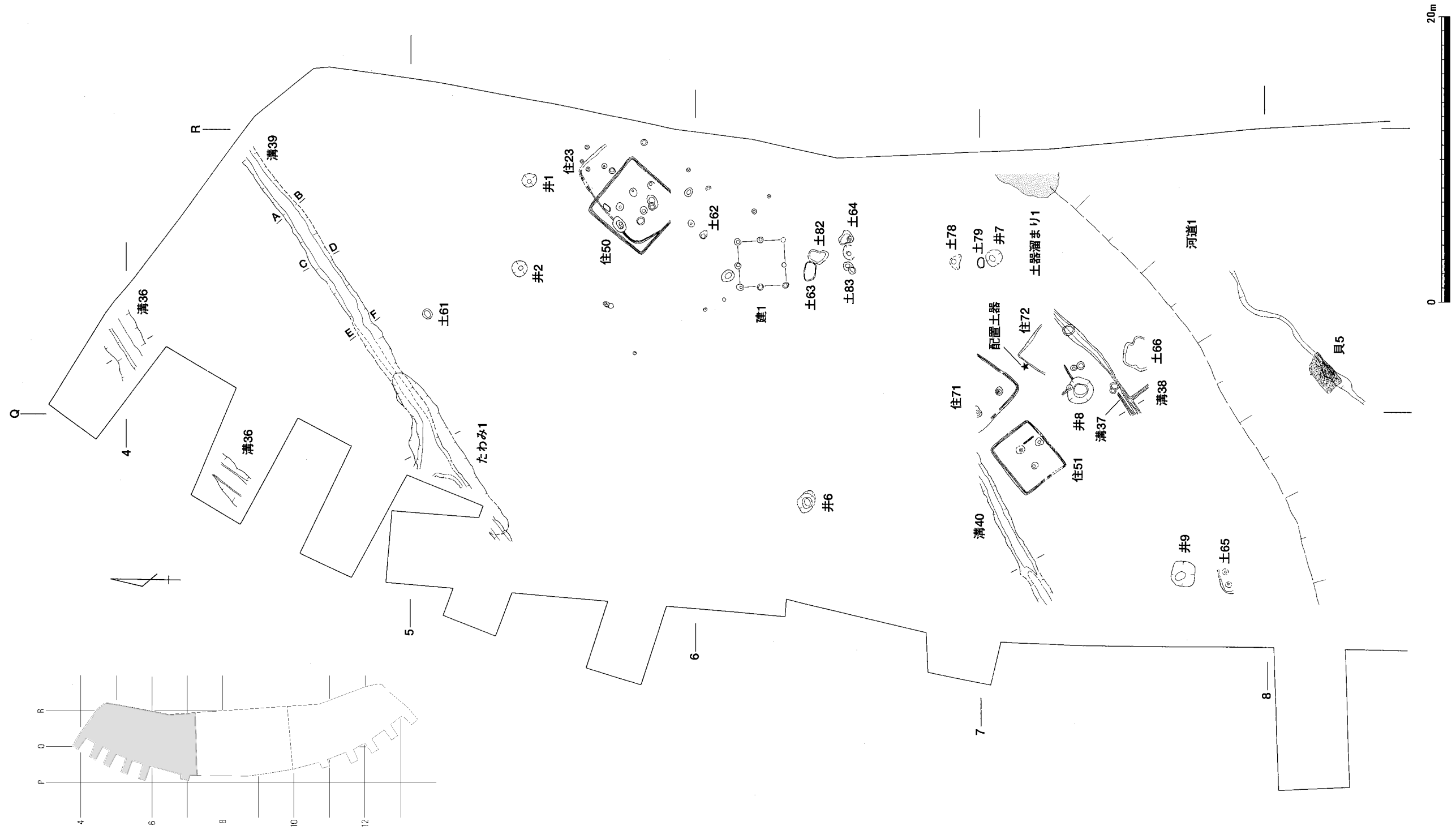
第397図 竪穴住居23 (1/60)

面に使用痕が残っている。

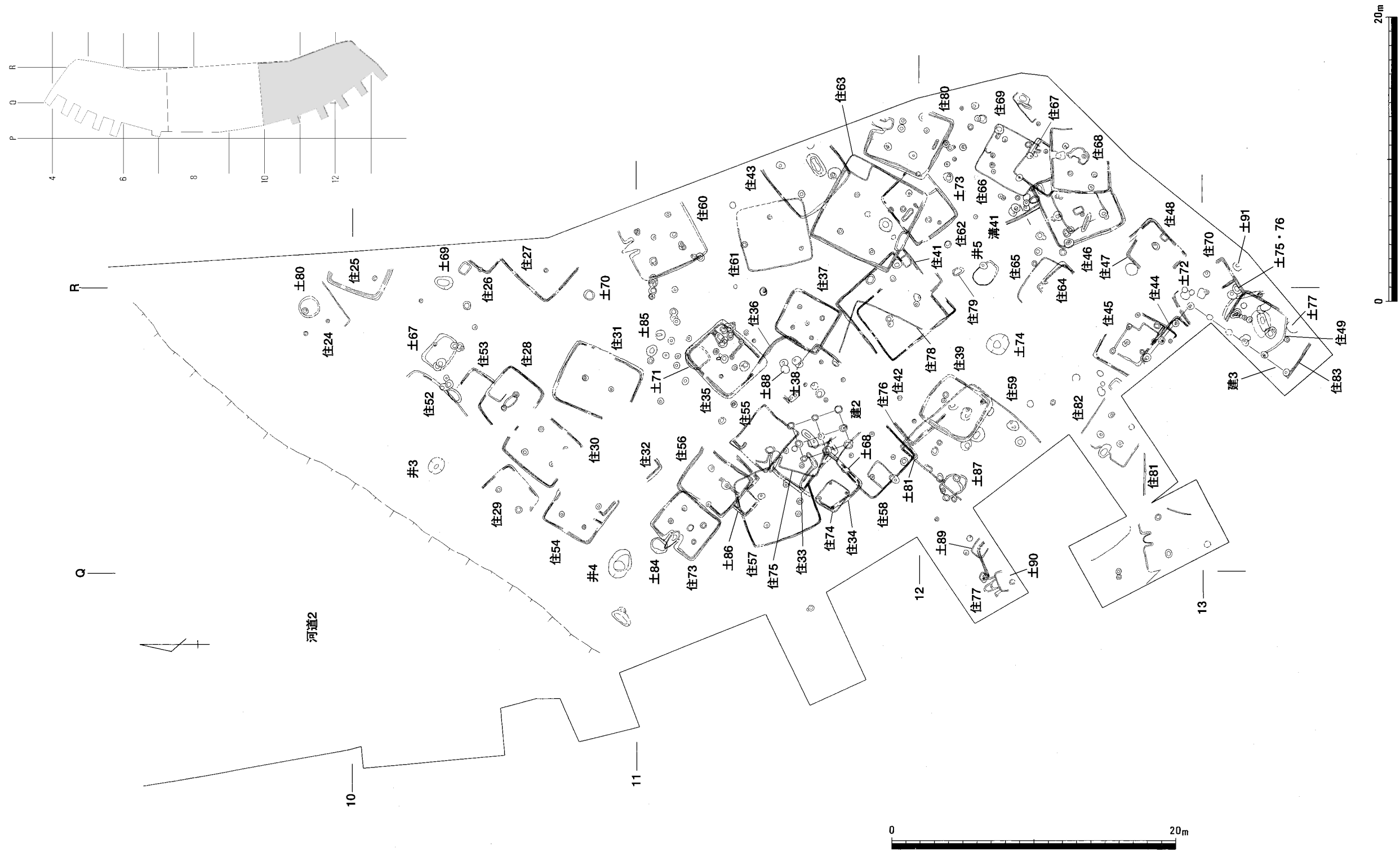
この住居の時期は、少量の出土遺物などから判断すると古墳時代前期の範囲におさまると思われるが、それ以上の特定は難しい。(岡本)

竪穴住居25 (第399・401図)

10R区に位置し、住居24の北西に隣接する方形の竪穴住居である。調査区の東端で検出されたため、東半分は調査区外になり、伴う柱穴も1本しか検出されていない。南北長は402cm、検出面から床面までの深さは約20cm残存し、床面の海拔高は約230cmを測る。柱穴は2本か4本か判断しがたいが、2本と仮定した場合、東西長は250cm程度の長方形住居となろう。柱穴は深さ36cmを測り、柱痕は確認できなかった。壁際には幅約20cm、深さ約15cmの壁体溝が巡る。



第398図 古墳時代遺構全体図①(1/300)

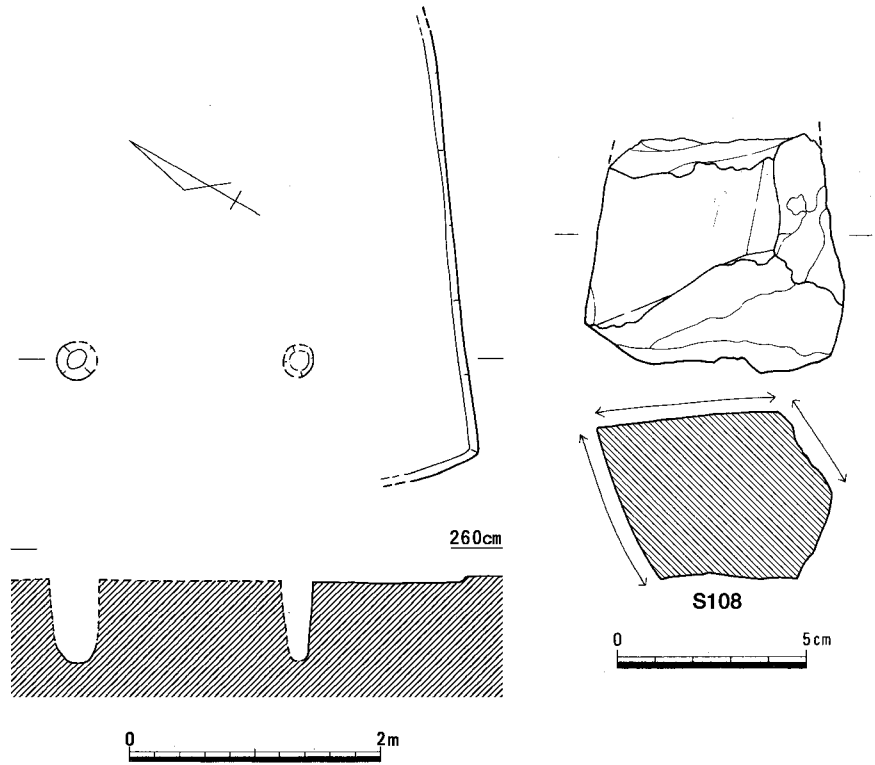


第399図 古墳時代遺構全体図②(1/300)

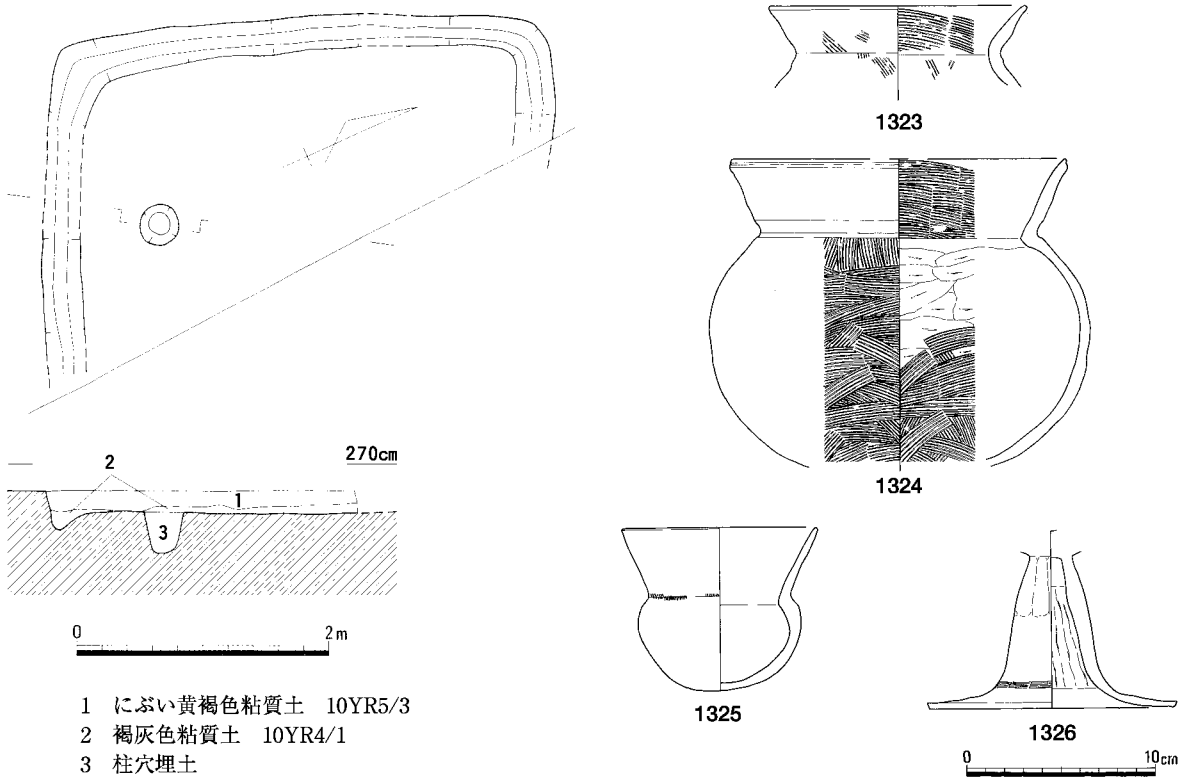
埋土中からは土師器
 が出土している。
 1323・1324は甕で、
 1324は体部がやや上下
 に扁平であり、内面下
 半部はヘラケズリ後ヨ
 コハケが施されてい
 る。1325の小型丸底壺
 は上下にやや扁平な形
 の体部に、直線的の開
 く口縁部が取り付く。
 1326の高杯は内面にシ
 ボリメが残存してい
 る。

なお、これらの遺物
 の他に、埋土中から微
 小な銅片の可能性のあ
 る青緑色の金属片が出
 土したが、銹化が著しく取り上げることはできなかった。

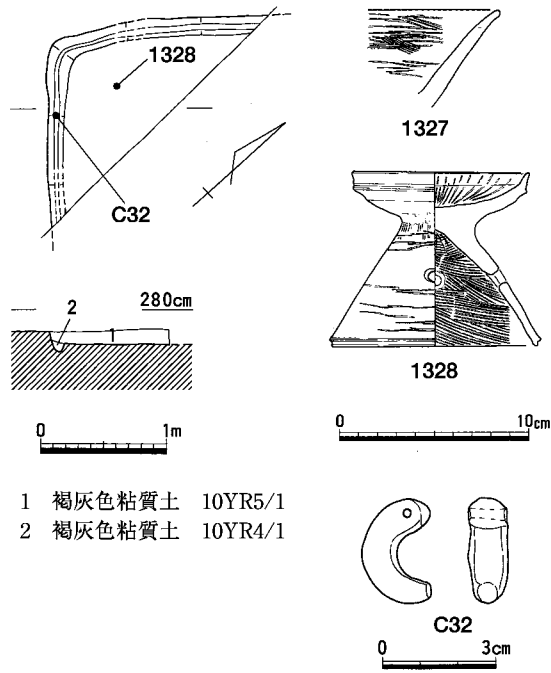
これらの出土遺物から判断して、この住居の時期は古・前・Ⅱに位置づけられよう。(岡本)



第400図 竪穴住居24 (1/60)・出土遺物 (1/2)



第401図 竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4)



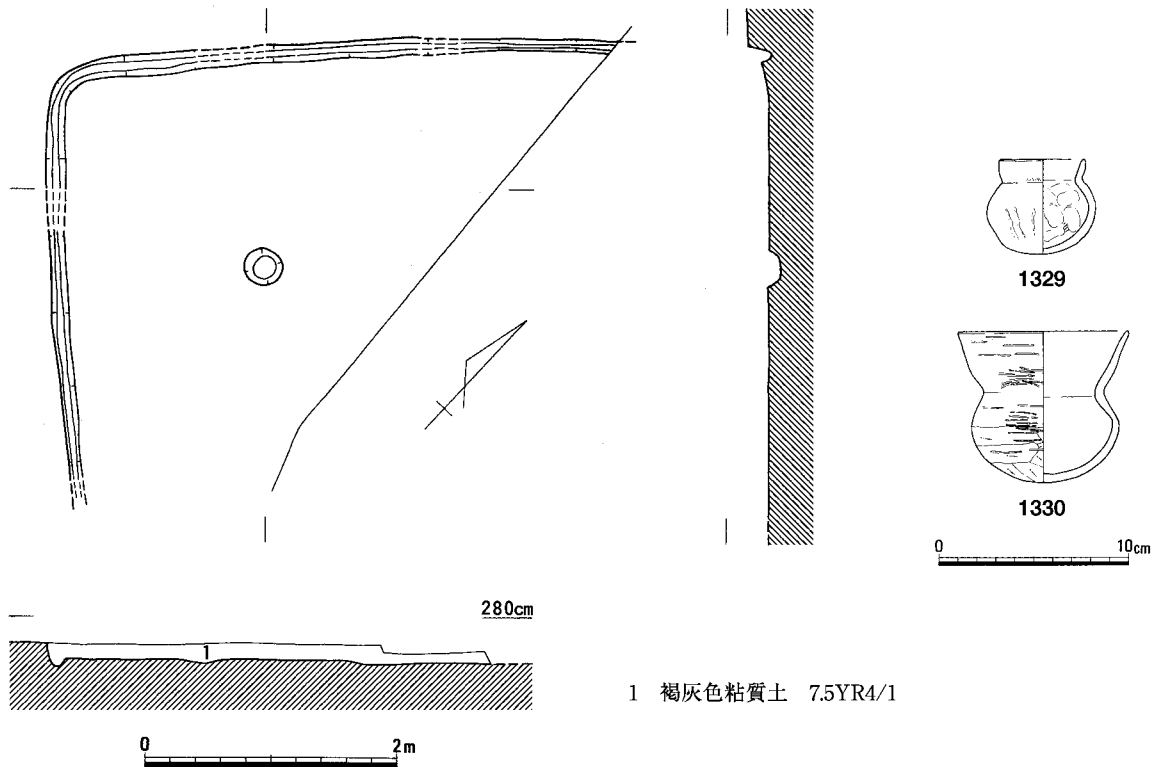
第402図 竪穴住居26 (1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

竪穴住居26 (第399・402図、図版59)

10R区の東側中央部に位置する。平面は方形を呈すと考えられるが、調査区内では一隅角部を検出したにすぎず、大半は調査区外へ続く。主軸はN-37°-E。遺構の深さは検出面から13cmである。壁面には壁体溝が巡っている。1327・1328は床面直上、C32は南壁壁体溝上面で出土した。また図示し得なかったが、南壁際床面直上から土器片が出土している。1327は高杯の口縁部である。1328は小型器台であり、皿状受け部は口縁部を上方へ拡張し、脚部は「ハ」の字状に開く。受け部内面には細かいヘラミガキが放射状に施されている。C32は土製勾玉である。孔は焼成前に穿たれ、腹部は大きく抉られている。住居の機能時期は1328から古・前・IIの新相と考えられる。(米田)

竪穴住居27 (第399・403図)

10R区に所在し、住居26のすぐ南側に接して位置する方形の竪穴住居である。住居26とは重複関係にあるが、切り合いが明瞭に検出できず先後関係は明らかでない。調査区の東端部に位置するため、東半分は調査区外になり、本来の規模は不明である。上面の削平が著しいため残存状態は悪く、検出



第403図 竪穴住居27 (1/60)・出土遺物 (1/4)

面から床面までの深さは最大でも10cm程度と浅い。床面の海拔高は約260cmを測る。床面を精査したところ北西部にあたる位置で柱穴が1本のみ検出されたが、深さが10cmとごく浅く、住居の主柱穴であるかは疑問が残る。壁際には、幅約15cm、床面からの深さ約5cmの壁体溝が巡るのが認められた。

図示可能な出土遺物としては、小型丸底壺1329・1330があり、いずれもほぼ完形である。1329は口径4.35cm、器高5.0cmを測る小型品で、内面に指頭圧痕を多く残すなど、むしろミニチュア土製品に近い特徴を有している。

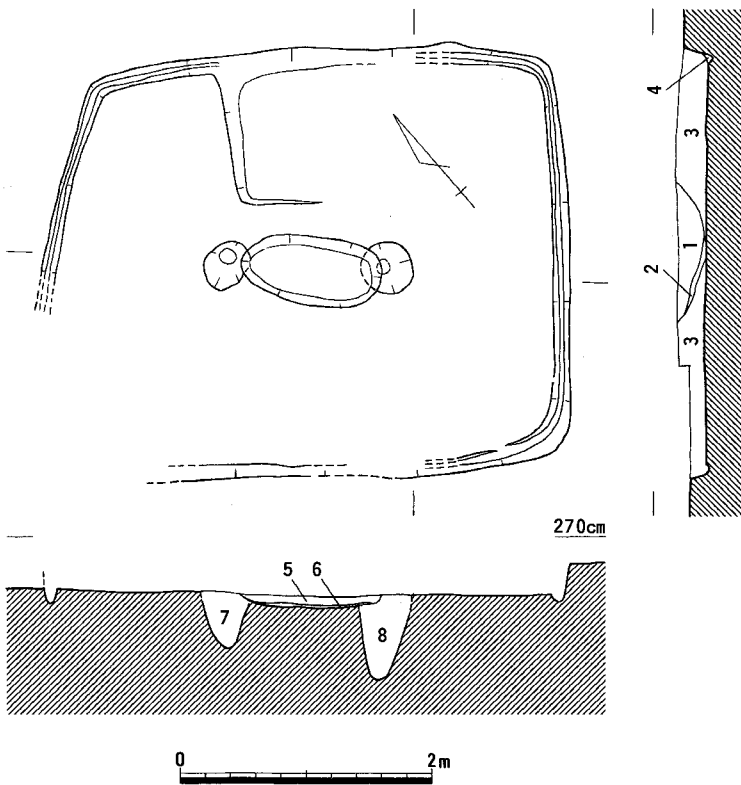
この住居の時期は、出土遺物から判断して古・前・Ⅱであろう。 (岡本)

竪穴住居28 (第399・404図、図版29)

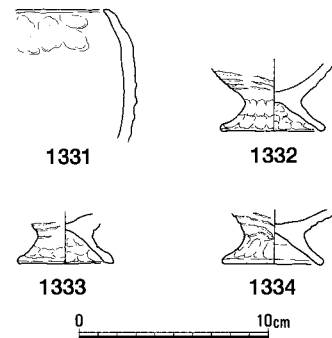
10Q区中央部に位置する。主軸はN-47°-Eである。規模は北壁で344cm、南壁で推定418cm、東壁は290cmであり、平面形は南辺が広がる台形を呈すと考えられるが、南西隅部は確認できなかった。床面積は約13.50㎡である。深さは検出面から約25cmを測る。住居の埋土は基本的に第3層のみであり、第1・2層は本住居には伴わない。床面中央では楕円形の中央穴を検出し、規模は長軸109cm、短軸54cm、深さは18cmで、底面には炭化物層が密着していた。柱穴は中央穴の長軸側両脇に2本確認し、主柱穴と考えられる。床面北東部では高床部を確認し、床面との比高差は最大で5cm程度であった。高床部は東側に顕著な段が認められたが、南側は床面へ緩やかに下がる傾斜を有していた。

出土遺物は床面直上では認められず、全て覆土からの出土である。1331~1334は脚台付き製塩土器であり、小型倒杯形を呈す。1331は口縁部から体部の部位である。1332~1334は脚台で、器壁は体部

よりも薄い。脚台の形状は「ハ」の字状を呈し、脚端部は外方へ広がる。脚台は内外面ともに指オサエを認め、体部外面には平行タタキが施されている。これらの遺物は古・前・Ⅱに属し、遺構の廃絶時期もこれと同様と考えられる。本住居からの出土遺物は製塩土器のみであるため、遺跡内の他の製塩関係遺構と深く結びついていることが想定される。 (米田)



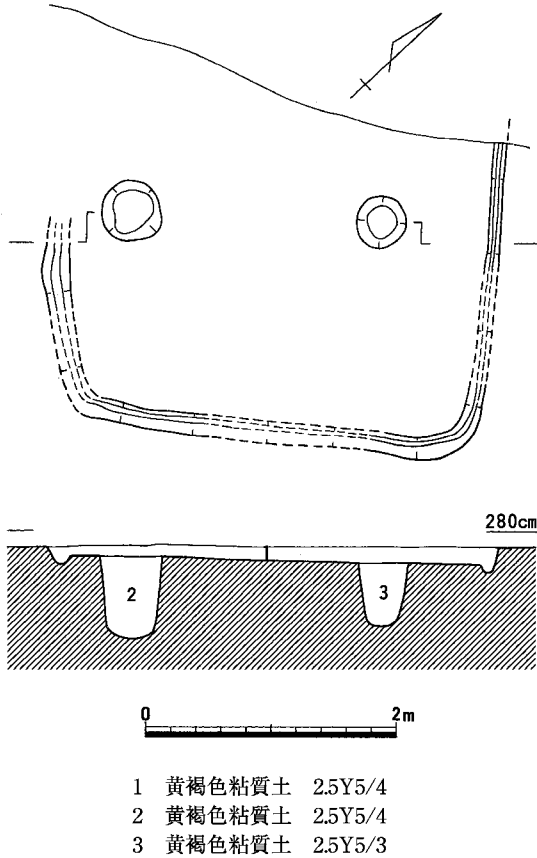
- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 | 5 黑色炭化物層 10YR4/1 |
| 2 黒褐色粘質土 7.5YR3/1 | 6 黑色炭化物層 10YR2/1 |
| 3 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 | 7 灰黄褐色粘質土 10YR4/1 |
| 4 褐灰色粘質土 10YR4/1 | 8 褐灰色粘質土 10YR4/1 |



第404図 竪穴住居28 (1/60)・出土遺物 (1/4)

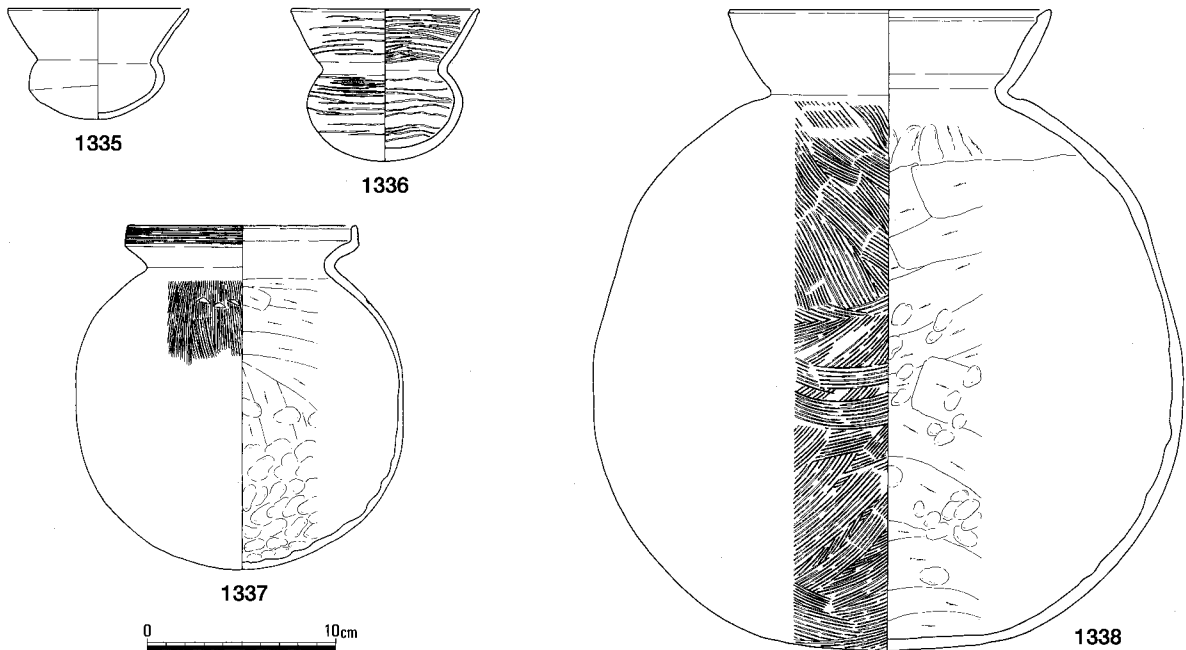
竪穴住居29 (第399・405図、図版29)

10Q区の中央部やや西寄りに位置し、住居の西半は河道2によって切られている。平面形は方形を呈し、一辺は359cm、深さは検出面から14cmを測る。主軸はN-42°-Wである。支柱穴は想定される4本のうち、2本を確認した。壁面には壁体溝が巡っている。



遺物は土師器が出土しているが、いずれも床面直上ではなく、覆土中からの出土である。1335・1336は小型丸底壺で、浅い体部に対して、口縁部が長く開く。1336は内外面ともにヘラミガキが施されており、丁寧に仕上げられている。1337は吉備型甕で、完形品である。口縁部はほぼ垂直に拡張し、櫛描き沈線文を施す。胴部の形状はほぼ球体に近い。外面調整はハケメ、内面下半は縦方向のヘラケズリ後の指オサエが顕著に残り、内面胴部上半は横方向のヘラケズリが認められる。また肩部には米粒状の刺突痕が3点確認できる。1338は大型の甕で、口縁部が「く」の字に外反し、口縁端部内面をわずかにつまむ。胴部はやや下膨れている。外面下半はヨコハケメ、上半はタテハケメによって調整している。内面は横方向のヘラケズリが行われ、下半には指オサエが散見される。

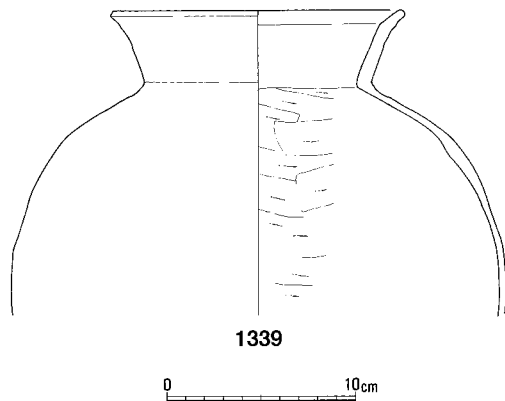
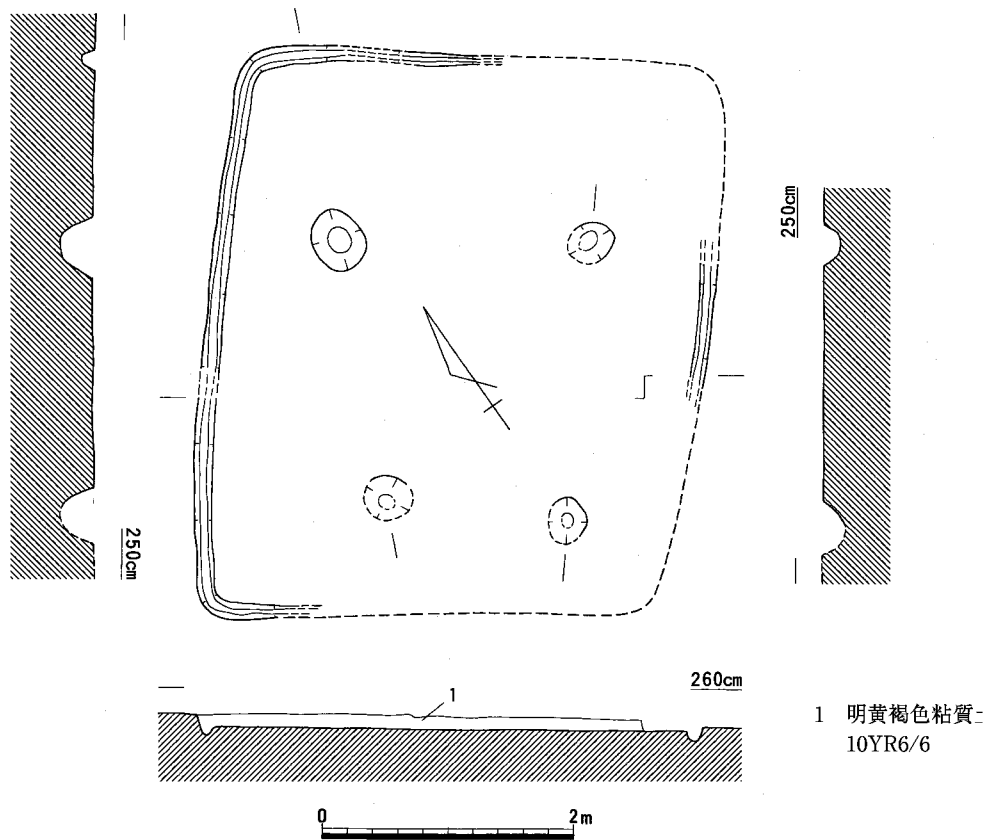
これらの土器より、住居の時期は古・前・Ⅱに比定できる。(米田)



第405図 竪穴住居29 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居30 (第399・406図、図版29)

10Q区の中央部やや南寄りに位置し、竪穴住居28の南西側に隣接するが、層位による新旧関係を明らかにすることはできなかった。平面形および規模は、方形を呈し、長辺452cm、短辺410cmを測る。深さは検出面から10cmほどである。主軸はN-40°-W。住居の南側は後世の攪乱を受けていた。北・西側の壁面を中心に壁体溝を確認しており、本来は全周していたと考えられる。床面では4本の柱穴を確認しているが、一部は深さが浅いため、実証性に欠ける。出土遺物は少なく、図示し得たのは、1339のみである。1339は土師器の甕であり、口縁部は「く」の字を呈し、端部をさらに外方へ摘み出している。内面は横方向のヘラケズリで調整されている。肩部の形状から胴部は球形に近いと考えられる。住居の時期は出土土器の特徴から古・前・Ⅱの新相に属する。(米田)



第406図 竪穴住居30 (1/60)・
出土遺物 (1/4)

竪穴住居31 (第399・407図、図版30)

10Q区に所在し、住居28の南に隣接する竪穴住居である。規模は547×454cmを測り、南北にやや細長い長方形を呈する。検出面から床面までの深さは最大で約35cm、床面の海拔高は約220cmであった。西側の床面は東側に比べ5cmほど高くなる部分がある。壁際には幅約15cm、床面からの深さ約10cmの壁体溝が巡る。主柱穴は南北に並んで2基が確認され、両柱穴とも柱痕が認められた。床面から柱穴底までの深さは約50cmを測る。

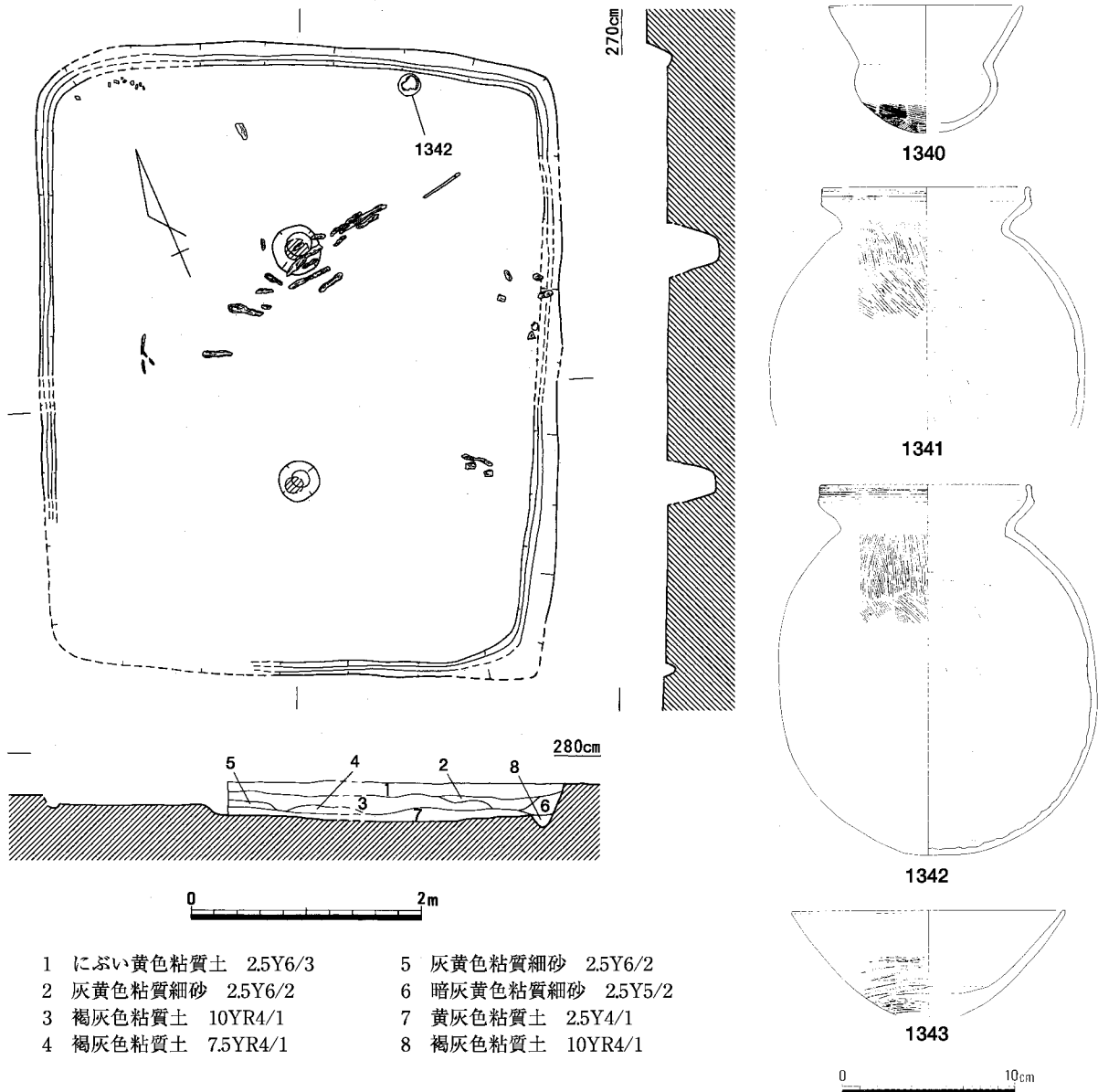
第3章 発掘調査の概要

この住居では、床面直上で部分的に炭化材の分布が認められた。炭化材は、北半部において北北東から西南西にかけて帯状に連なるほか、北西隅および東壁沿いの位置にも少量が残存する。脆弱で持ち帰ることはできなかったが、いずれも小破片で量も少なく、この状況だけからは焼失住居と断定できる確証はない。

遺物としては、土師器類が出土している。小型丸底壺1340は、扁平化した体部に直線的に開く口縁部が取り付く。外面はヘラケズリ後横方向のハケメを施している。1341・1342は甕である。1342は図示する通り北側の壁際からの出土であるが、床面からはやや浮いており住居内の原位置とは思われない。2点ともほぼ直立する口縁端面に櫛描き沈線を巡らし、体部はほぼ球形に近い。1342の外面には部分的に煤が付着している。1343は高杯で、杯部はわずかに内湾ぎみに開き、外面には横方向のヘラミガキが残っている。

この住居の時期は、出土遺物から判断して古・前・Ⅱに位置づけられる。

(岡本)

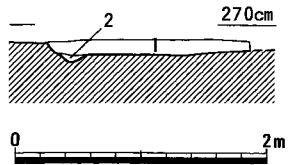
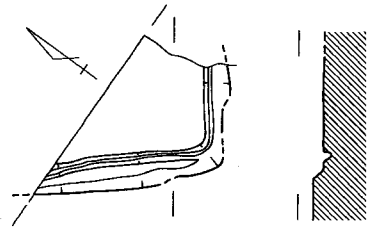


第407図 竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居32 (第399・408図)

3区11Qで検出した、方形を呈すると考えられる竪穴住居である。遺構の北側と東側を側溝および攪乱によって大幅な削平を受けているため、全体の規模などは不明であり、柱穴なども検出できない状況であった。残存長ではあるが、長辺156cm、短辺119cmを測るものであり、検出面からの深さは床面までは12cm、壁体溝の底面までは17cmを測る。南西辺で検出した壁体溝は上端と下端の途中で幅10cm程度の段が付き、壁体溝の下端の幅は約2cm程度と狭いものであった。埋土は2層に分層でき、壁体溝の底面と床面より上層とで分かれる。

時期についてであるが、出土遺物が細片で図示できないものの、その特徴から古墳時代前期の範疇に収まるものと考えている。(時實)

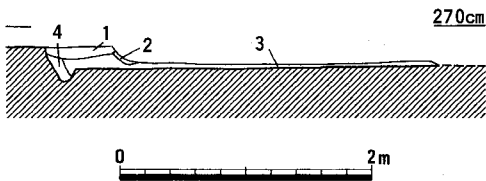
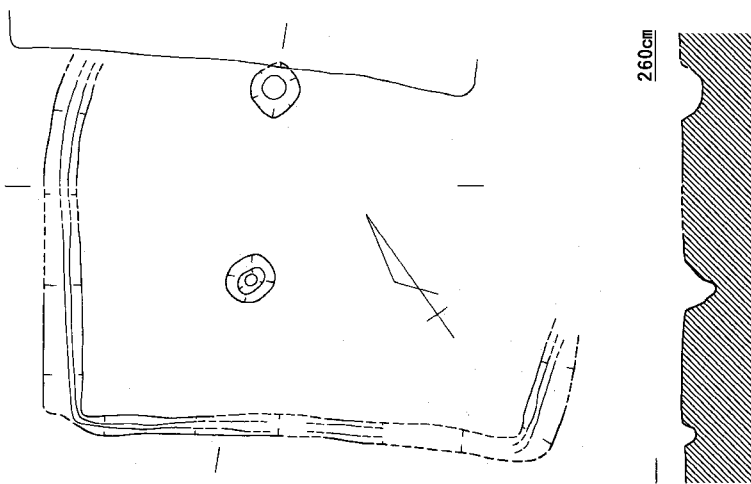


- 1 黄灰色細砂 2.5Y6/1
- 2 明灰黄色微砂 2.5Y5/2

第408図 竪穴住居32 (1/60)

竪穴住居33 (第399・409図)

3区11Qの中央部西側寄りに位置している方形の住居である。北西辺のみ全辺を検出しており、その規模は、残存している北西辺側で、一辺420cm、検出面からの深さ16cmを測るもので、床面の海拔高は236cmであった。柱穴は2本のみ確認したが、北西辺に偏っていることから本来は4本柱であったものと考えている。柱痕跡は認められなかった。壁体溝を有しており、幅24cm、検出面からの深さ28cmを測るものである。

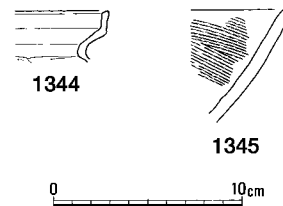


- 1 褐色粘性砂質土 7.5YR4/4
- 2 褐灰色粘性砂質土 7.5YR5/1
- 3 灰黄褐色粘性砂質土 10YR5/2
- 4 にぶい黄褐色粘性砂質土 10YR4/3

出土遺物であるが、出土量は少なく、図示できたものは2点で、甕1344・鉢1345がある。

1344は口縁部分である。口縁部外面はヨコナデであり、櫛描き沈線は見られない。1345は外面にヘラミガキ、内面にハケメを施し、色調はにぶい橙色を呈している。

これら遺物の特徴から、この住居の時期は古墳時代前期の範疇に収まるであろうと考えられる。(時實)



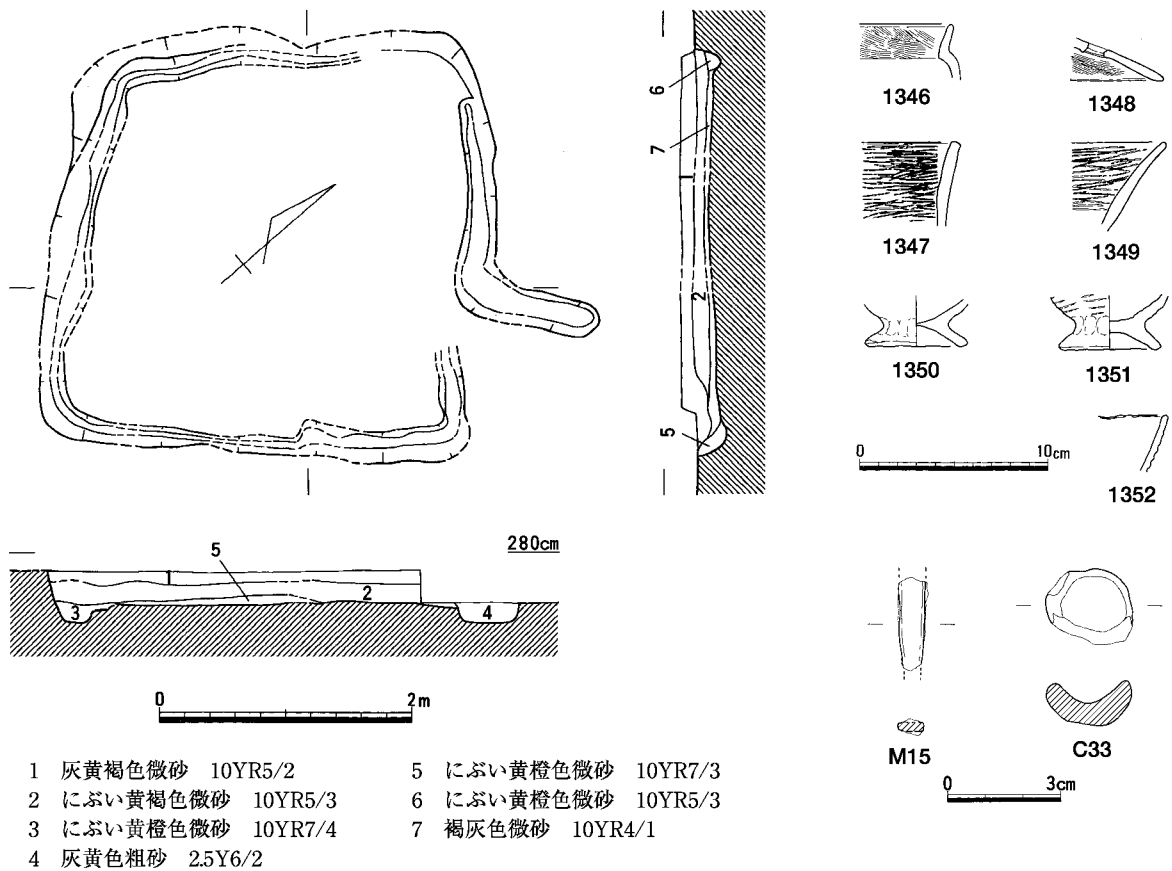
第409図 竪穴住居33 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居34 (第399・410図、図版30)

竪穴住居34は11Q区に位置する。竪穴住居の上面には竪穴住居74および土壙68が存在し、そのため、住居の残存状況は良いとはいえないが、特に住居の南半分については比較的良好的な状態で検出することができた。竪穴住居34は方形のプランを呈し、長さ354cm、幅340cmを測る。住居の周辺には壁体溝が巡る。この壁体溝は住居の北東付近で折れ曲がり、あたかも住居の外側に抜けるように続いていた。また、住居の南東隅部については精査を行ったが、壁体溝の状況を明らかにすることができなかった。住居内埋土からは遺物が出土しているが、いずれも破片で完形のものはない。1346は壺である。1347～1349は高杯である。1350～1352は製塩土器である。この製塩土器については、この竪穴住居34に隣接する土壙68のものが混入している可能性が否定できない。M15は鉄器である。C33は土製品である。これらの出土遺物からこの竪穴住居34は古・前・I頃に営まれたものである可能性が高いと考えられる。(金田)

竪穴住居35 (第399・411・412図、図版30)

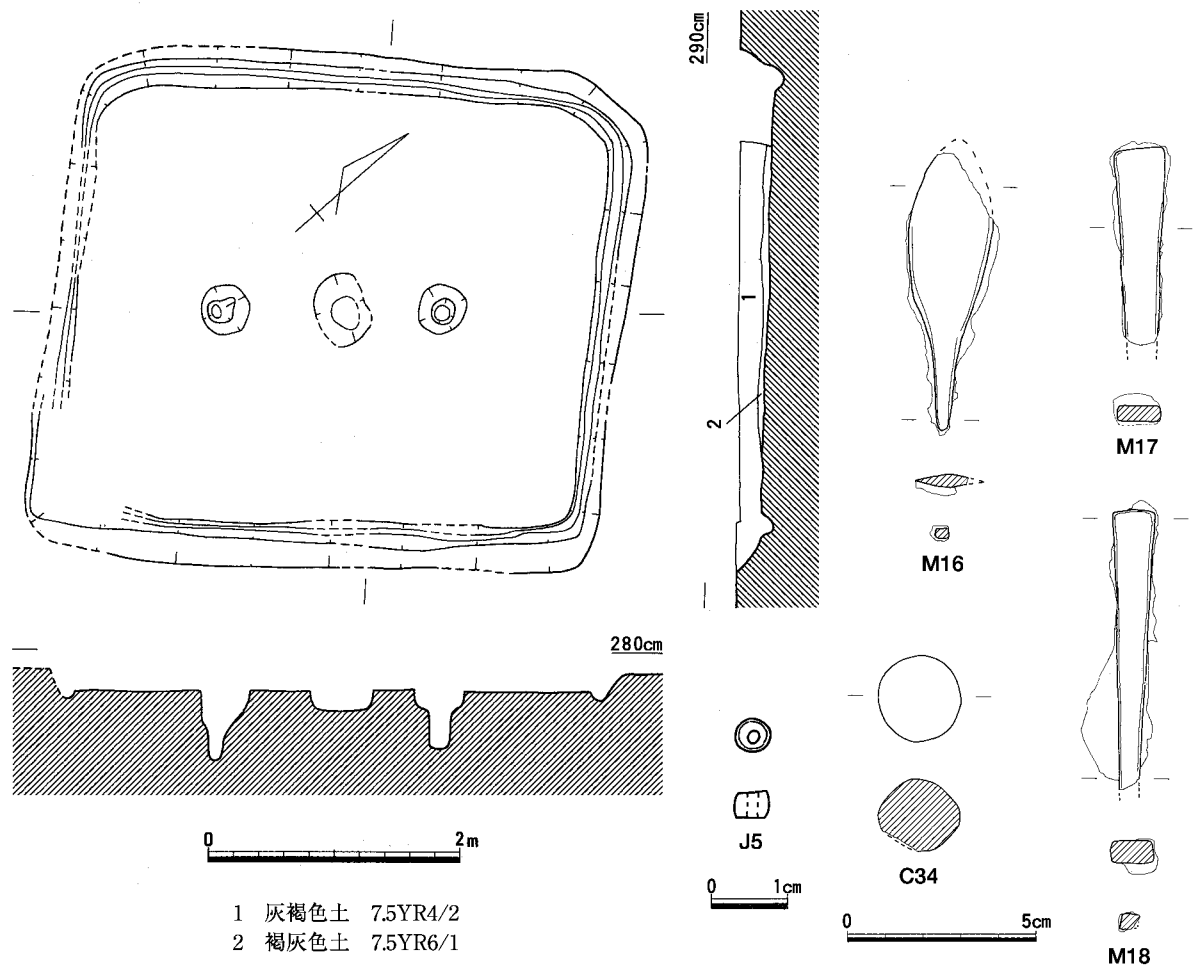
竪穴住居35は、3区の中央付近に位置する。これはグリッド名でいうと、11Qになる。住居の南側では、竪穴住居36と切り合い関係があり、北側では土壙71を切る形になる。この住居の規模は、長軸長455cm、短軸長410cmで、主軸はN-45°-Eになり、座標北に対しちょうど45°振れている。住居の床面は、標高250cm付近で水平になる。堆積土中の第2層は貼り床になるが、住居の中央付近にわずかに残るものの、住居内の全面には残らない。柱穴は2本で、中央穴が存在する。なお、この住居の床面積は、15.49㎡である。



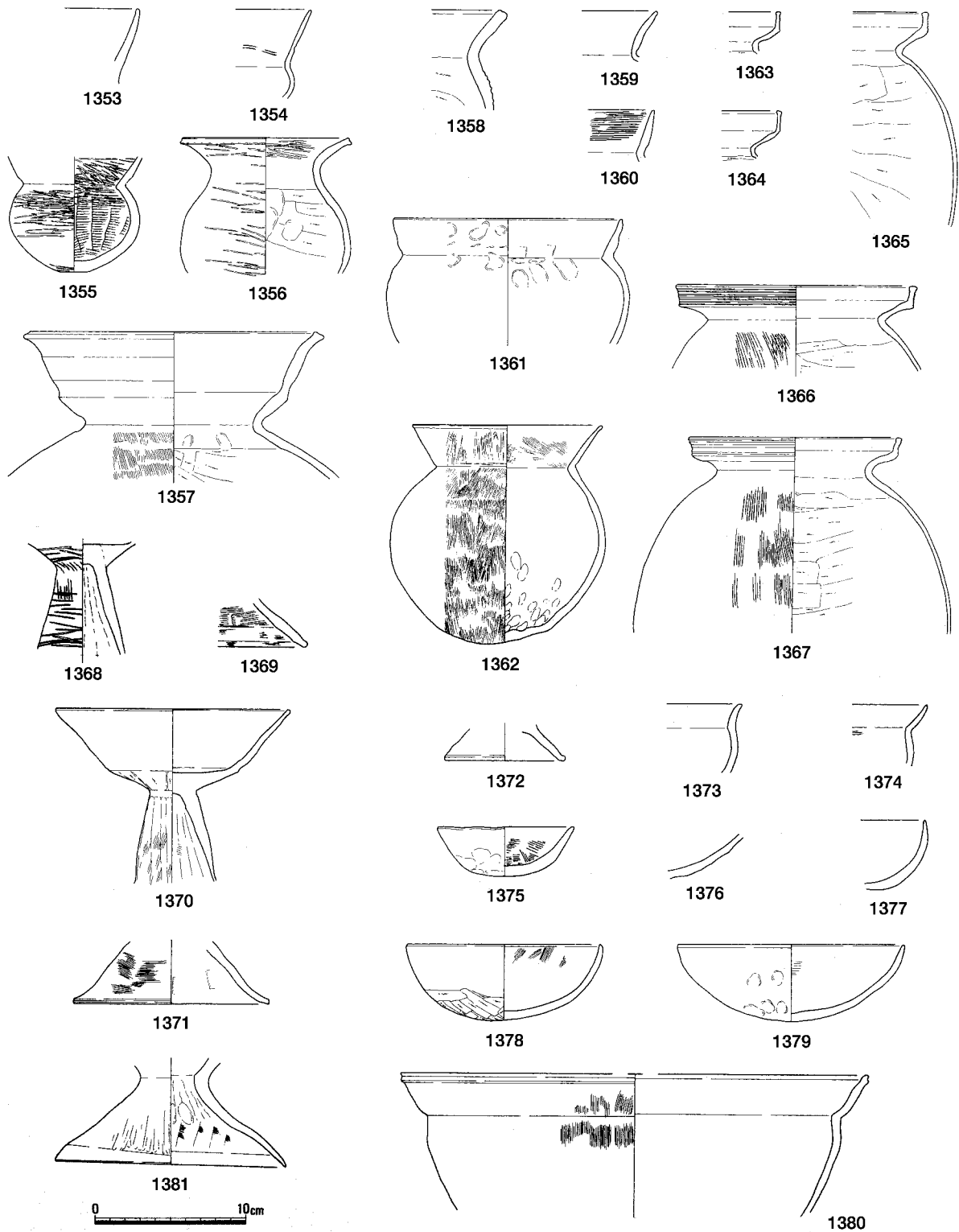
第410図 竪穴住居34 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

出土遺物には、鉄器・土製品・玉類・土器類がある。このうち鉄器は3点で、M16は、平根式の鉄鍬である。先端は折れていて形状を留めず、また鍬身関部もはっきりしない。鍬は両鍬造であり、茎部は断面方形である。M17・18はともに棒状品になる。M17の断面は比較的薄く、M18はM17より厚くなる。土製品はC34のみで、土玉になる。算盤玉の形状である。J5は、ガラス製の小玉である。

出土土器には1353～1380があり、これらは亀川上層式と呼ばれる古・前・Ⅱの段階になる。1355は小型の壺になる。外面と内面上半部はきれいにヘラミガキされる。底はほぼ丸底を呈する。1353・1354もおそらく同じ器種になるものと思われる。1356は中型の壺で、1357は大型の壺になる。1356は口縁部が「く」の字に立ち上がり、端面をもつ。外面と口縁内面はヘラミガキされる。1357の口縁部は段をなして外反する。段部分の稜線は前段階よりあまくなる。1358～1367は甕である。口縁部の形状は「く」の字になる1358～1362と、段をなして直上する1363～1367がある。「く」の字になるものには、やや直上気味の1360・1361と斜めになる1358・1359・1362がある。1358の外面調整はタタキである。段をなすタイプでは、段の部分の稜線が鈍いものが多い。ただし1363と1366の稜線は、他のものに比べればはっきりしている。1368～1371は、高杯である。このうち1368・1370の脚部は長脚になる。1371は端部が「ハ」の字に広がる。1370の杯部には稜線部にわずかに凹部があるものの、明瞭ではない。1372～1380は鉢である。このうち1373・1374・1380は、口縁部に段がある。1375・1377・1378・1379は、丸く収まる器形であり、1378・1379は器高が低い。1381は器台になる。 (小林)



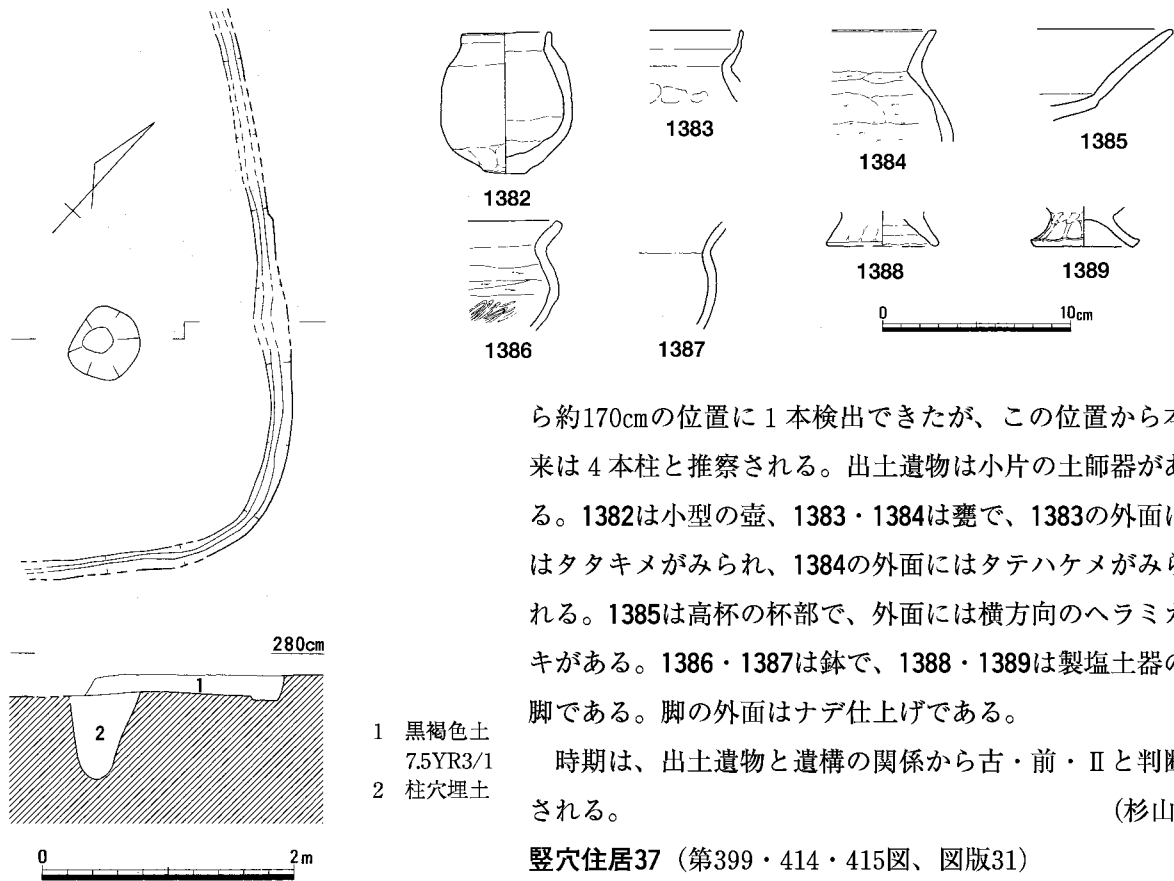
第411図 竪穴住居35 (1/60)・出土遺物① (1/1・1/2)



第412図 竪穴住居35出土遺物② (1/4)

竪穴住居36 (第399・413図、図版31)

11Q区に位置し、竪穴住居37に切られるが竪穴住居35との切り合いは判然としない。平面形は主軸をN-42°-Wにとる方形を呈する。北東隅のみを検出したが、壁際には幅20cm前後で深さ5cmほどの断面「U」字状の壁体溝が巡り、床面の海拔高は約250cmを測る。柱穴は北壁から約150cm、東壁か



第413図 竪穴住居36 (1/60)
・出土遺物 (1/4)

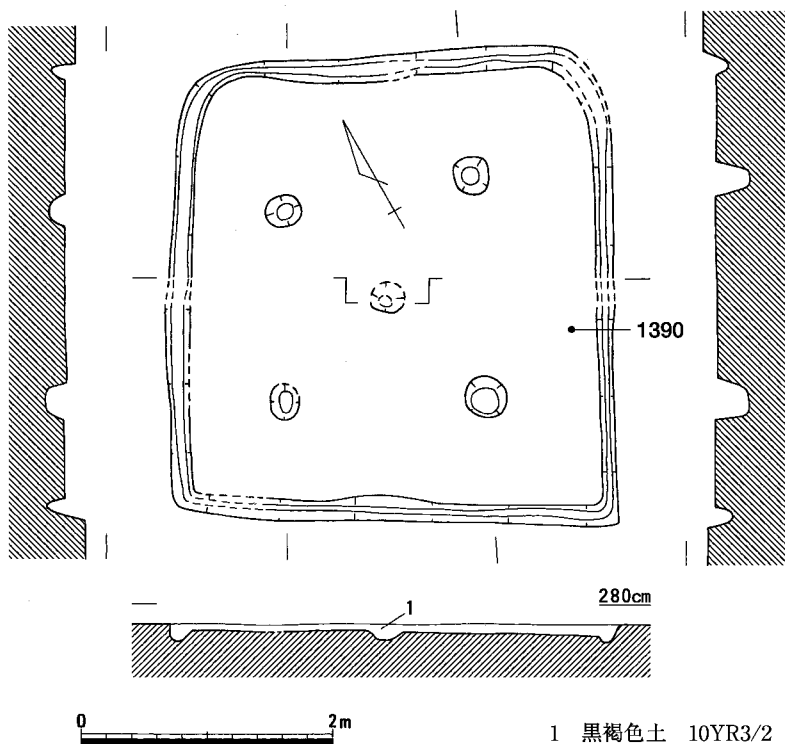
ら約170cmの位置に1本検出できたが、この位置から本来は4本柱と推察される。出土遺物は小片の土師器がある。1382は小型の壺、1383・1384は甕で、1383の外面上にはタタキメがみられ、1384の外面上にはタテハケメがみられる。1385は高杯の杯部で、外面上には横方向のヘラミガキがある。1386・1387は鉢で、1388・1389は製塩土器の脚である。脚の外表面はナデ仕上げである。

時期は、出土遺物と遺構の関係から古・前・Ⅱと判断される。(杉山)

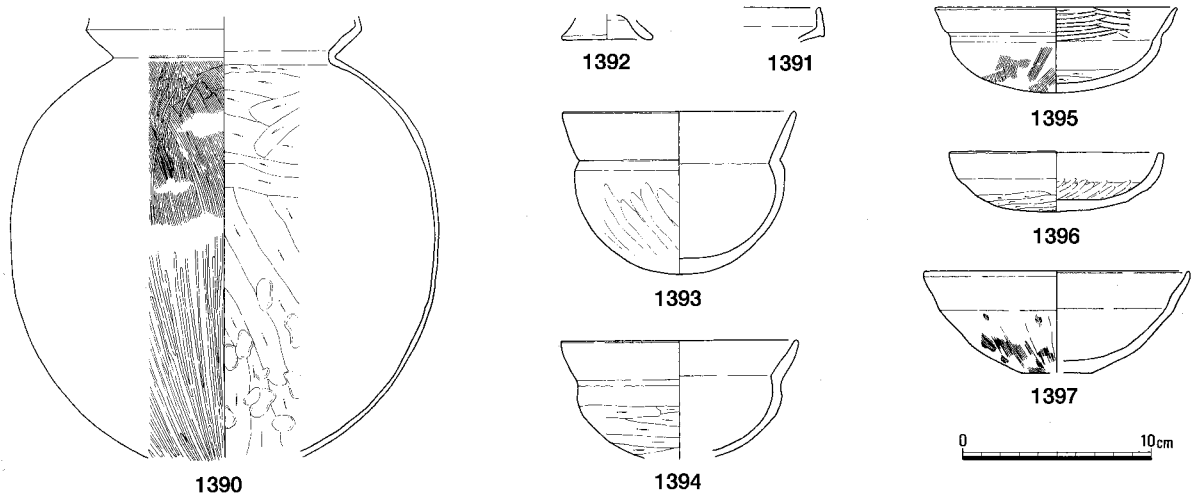
竪穴住居37 (第399・414・415図、図版31)

11Q区に位置し、竪穴住居36・38を切る。平面形は主軸をN-32°-Wにとり、380×356cmの方形を呈し、床

面の海拔高は約260cm、床面積は13.41㎡を測る。壁の周囲には幅約17cm、深さ10cm前後の壁体溝が巡り、支柱穴4本と28×25cmの円形の中央穴がある。1390の甕は体部が球形で、外面上にはハケメの後下半にヘラミガキ、内面はヘラケズリの後底部にオサエがみられる。1391の甕口縁部片には9条の櫛描き沈線が残る。1392は製塩土器の脚で、1393~1397は鉢で、体部外表面は1393がヘラミガキ、1394はヘラケズリである。1395は体部外表面をタテハケメで内底部にヘラケズリ、



第414図 竪穴住居37 (1/60)

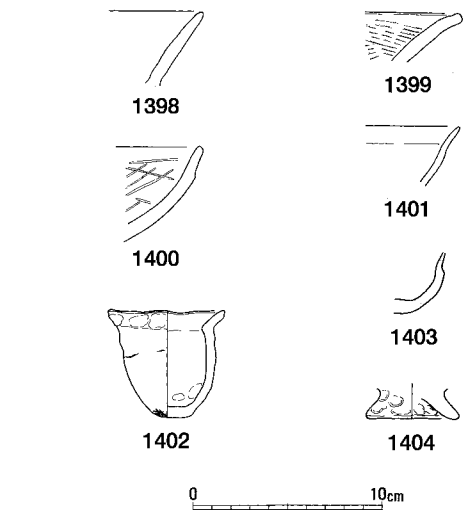
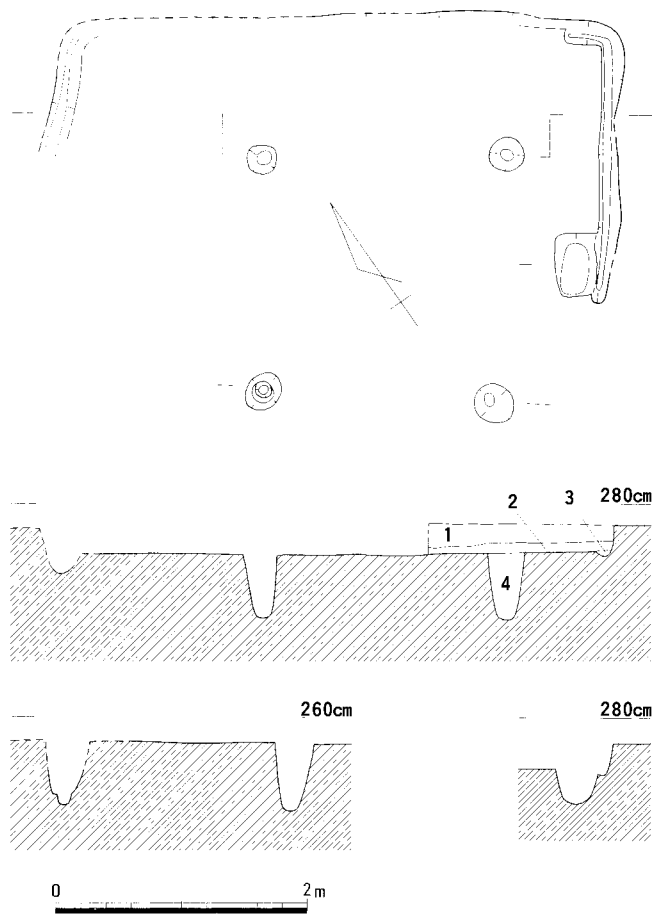


第415図 竪穴住居37出土遺物 (1/4)

口縁部内面に横方向のハケメがみられる。1396は口縁部を強くなでることにより外面に稜線が付き、外底部はヘラケズリ、内底部にはナデがみられる。1397も口縁部を強くなでて稜線が明瞭に残り、体部外面はハケ、内面は丁寧なナデを行う。時期は古・前・Iと判断される。(杉山)

竪穴住居38 (第399・416図)

11Q区に位置し、上面を建物の基礎によって攪乱されていたので、壁体溝の一部が検出できたのみである。平面形は主軸をN-55°-Wにとり、東西長450cmの方角を呈し、床面海拔高は約240cmを測る。西辺と北東辺で壁体溝が検出され、床面には支柱穴4本と東壁際に方形土壇がある。方形土壇



- 1 褐灰色土 5YR4/1 (土器含む)
- 2 褐灰色土 5YR4/1 (黄色土粒少量含む)
- 3 褐灰色土 5YR4/1
- 4 柱穴埋土

第416図 竪穴住居38 (1/60)・出土遺物 (1/4)

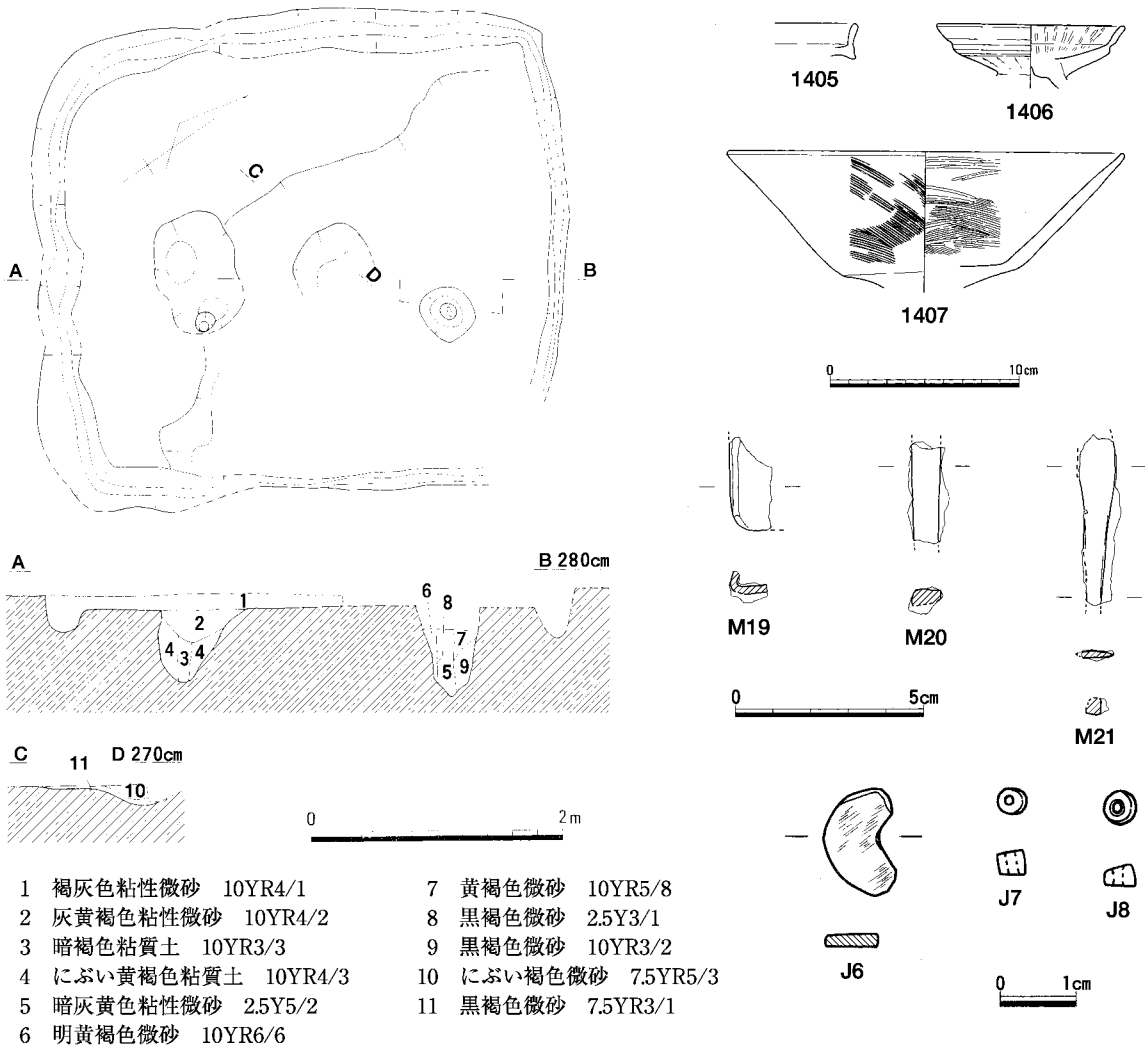
は平面50×46cm、深さ28cmを測り、埋土は単層で壁体溝の埋土を切って掘り込まれている。

遺物は、埋土中から土師器が少量出土しており、1398・1399は甕、1400・1401は鉢、1402・1403が手捏ね土器、1404が製塩土器の脚である。

時期は、出土遺物と竪穴住居37との切り合いから古・前・I～IIと判断される。 (杉山)

竪穴住居39 (第399・417図、図版31)

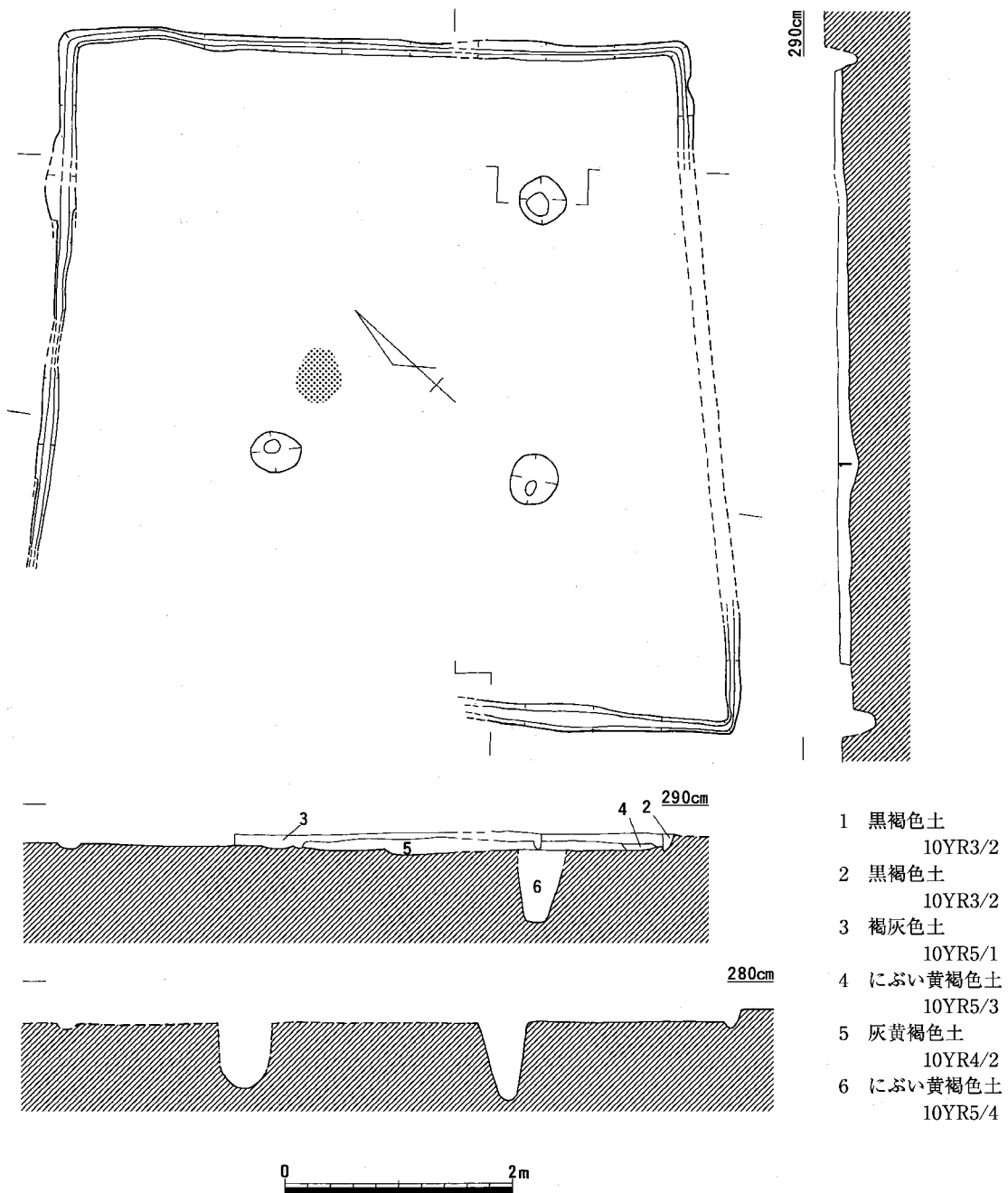
竪穴住居39は12Q区に位置する。平面形はほぼ方形を呈し、長さ417cm、幅383cmを測る。住居の周辺には壁体溝がめぐっている。住居内からは主柱穴2本と中央穴を検出した。いずれの柱穴からも柱痕跡と思われる土層を確認している。中央穴は、東半部については十分に検出することができなかったが、深さ約15cmを測る。竪穴住居39では床面に近い付近で、滑石製品を検出した。なお、住居床面下のいわゆる地山面は住居の東にいたるにつれて下がっており、住居を建て、床面を構築する以前に若干の整地を行っている可能性がある。住居内からは土師器、鉄器等が出土している。1405は甕である。1406は器台である。1407は高杯である。J6～8は滑石製品である。J6は勾玉であり、J7・8は滑石製小玉である。M19～21は鉄器である。M21は鉄鎌である。これらの出土遺物から竪穴住居39は古墳時代前期後半から中期前半にかけて営まれたものと考えられる。 (金田)



第417図 竪穴住居39 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2・1/1)

竪穴住居40（第399・418図、図版32）

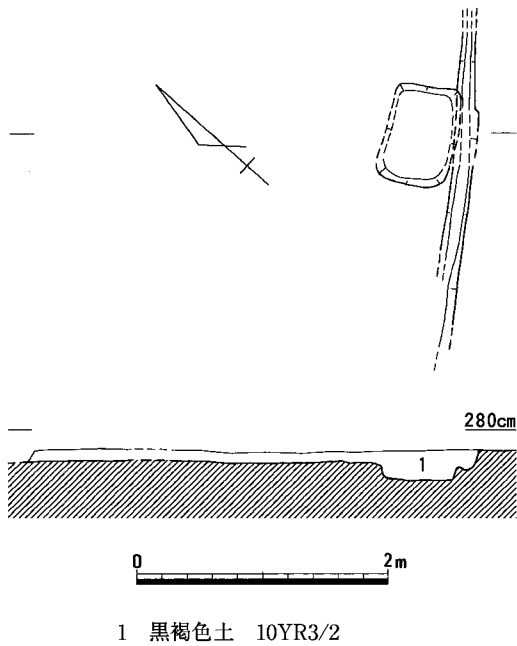
11Q区の南西隅に位置する。平面形は主軸をN-50°-Eにとり、599×555cmの方形を呈し、床面海拔高は約250cmでその面積は推定33.2㎡を測る。床面には壁の四方に幅10~20cm、深さ15cm前後の壁体溝が巡る。支柱穴は3本確認されたが、本来は4本あったと考えられる。また、ほぼ中央北寄りに浅く窪んだ被熱面がある。埋土中には鉄片など鍛冶に関連する遺物は含まれていなかったが、非常に高熱を受けた状態で一部白色化がみられる。この被熱面の下部にはピット状の掘り込みがあり、関連性があると考えられる。出土遺物は土師器小片で時期の詳細は不明だが、周辺の状況から古・I~II頃と推察される。(杉山)



第418図 竪穴住居40 (1/60)

竪穴住居41 (第399・419図、図版32)

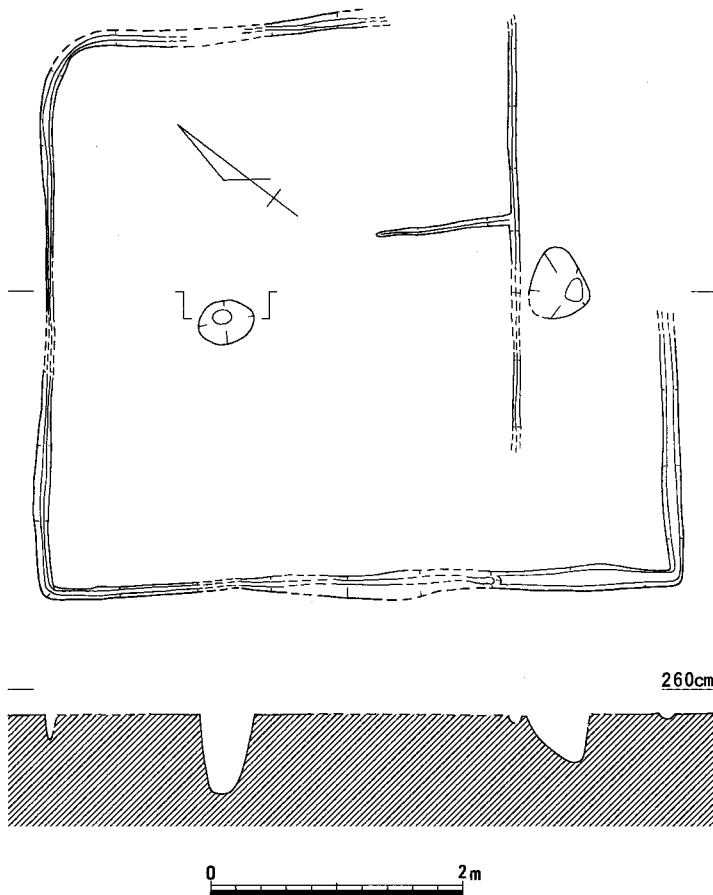
11R区南西隅に位置し、竪穴住居40に切られている。平面形は、南辺の一部のみの検出なので明確ではないが、主軸をN-50°-Eにとる方形と推察され、床面海拔高は約265cmを測る。床面では壁体溝とそれに沿って80×53cmで深さ24cmを測る方形土壙を検出した。壁体溝は幅約25cm、深さ約15cmを測る。方形土壙との関係は、土層堆積の観察の結果埋土には差違が認められず、一連で埋没したと判断される。出土遺物は、土師器小片であるため詳細な時期は不明だが、竪穴住居63にも切られていることから古・前期頃と推察される。(杉山)



第419図 竪穴住居41 (1/60)

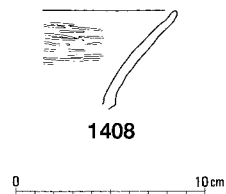
竪穴住居42 (第399・420図、図版32)

11Q区南西に位置し、竪穴住居40の床面で壁体溝のみを検出した。平面形は主軸をN-42°-Wにとり、514×464cmの方形を呈し、床面海拔高は約240cmを測る。床面積は東隅が不明だがおおよそ21.88㎡を測る。四方を巡る壁体溝の内側の床面には、中央やや南よりに支柱穴2本と間仕切りと考えられる溝2条を検出した。間仕切り溝は「T」字形に検出され、南北方向に長く、東西方向は110cmほどと短い。南北方向の溝が、壁体溝に接するかどうかは両端が他の遺構で切られていて明確ではないが、少なくとも南辺には接していない。溝の幅はいずれも約8cm、深さ5cm前後で断面「V」字状を呈する。壁体溝は、幅10~20cm、深さ5cm前後を主体とするが、西辺のものは部分的に幅5cm程度で深さも20cm近いとこ



第420図 竪穴住居42 (1/60)・出土遺物 (1/4)

中央やや南よりに支柱穴2本と間仕切りと考えられる溝2条を検出した。間仕切り溝は「T」字形に検出され、南北方向に長く、東西方向は110cmほどと短い。南北方向の溝が、壁体溝に接するかどうかは両端が他の遺構で切られていて明確ではないが、少なくとも南辺には接していない。溝の幅はいずれも約8cm、深さ5cm前後で断面「V」字状を呈する。壁体溝は、幅10~20cm、深さ5cm前後を主体とするが、西辺のものは部分的に幅5cm程度で深さも20cm近いとこ



ろがある。

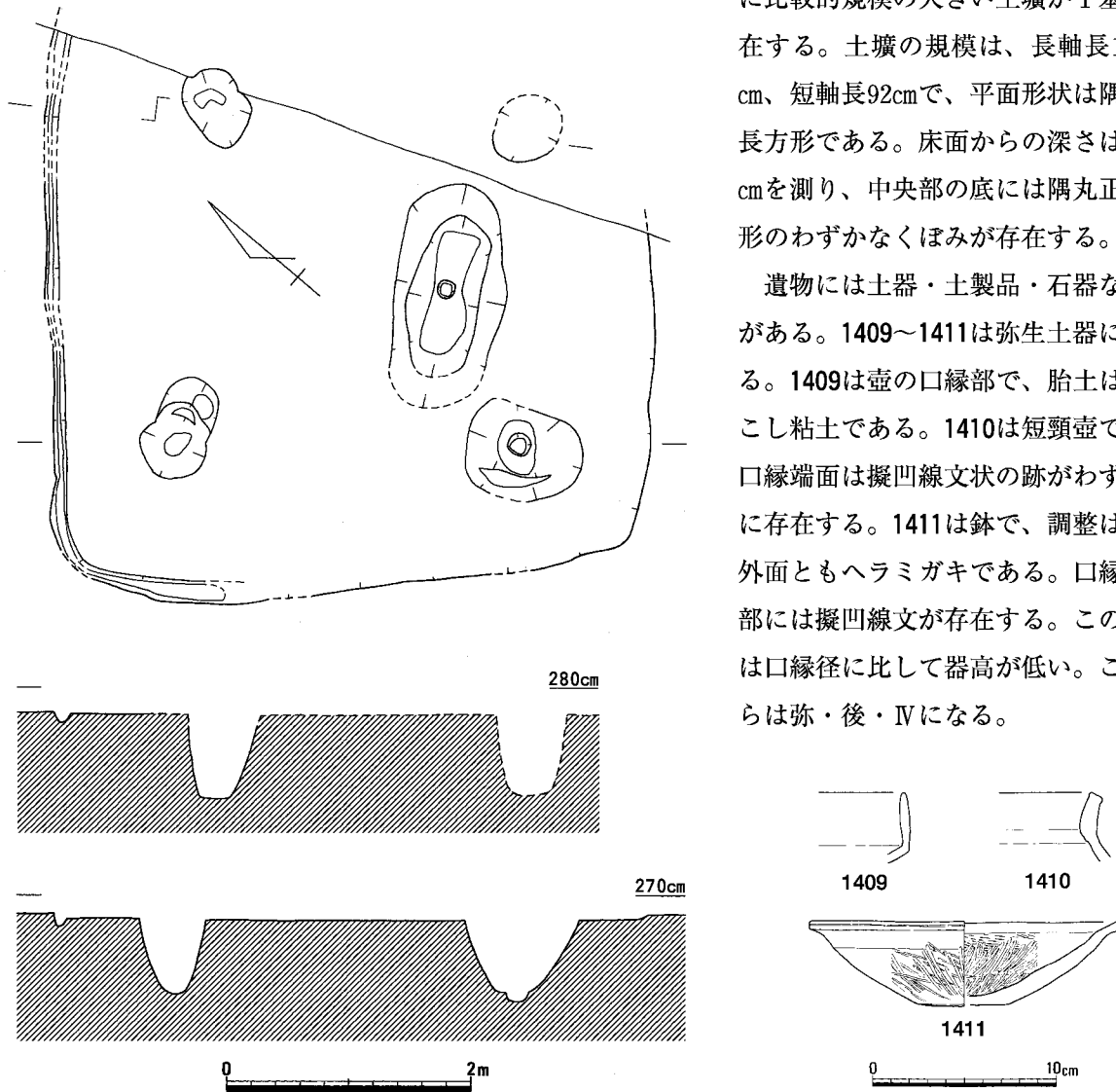
出土遺物は小片の土師器があるのみである。図示した1408は高杯口縁部で、内面に横方向のヘラミガキが残り、やや外反気味に伸びて端部がわずかに内傾する。

時期は、出土遺物と竪穴住居40に切られることから古・前期頃と推察される。 (杉山)

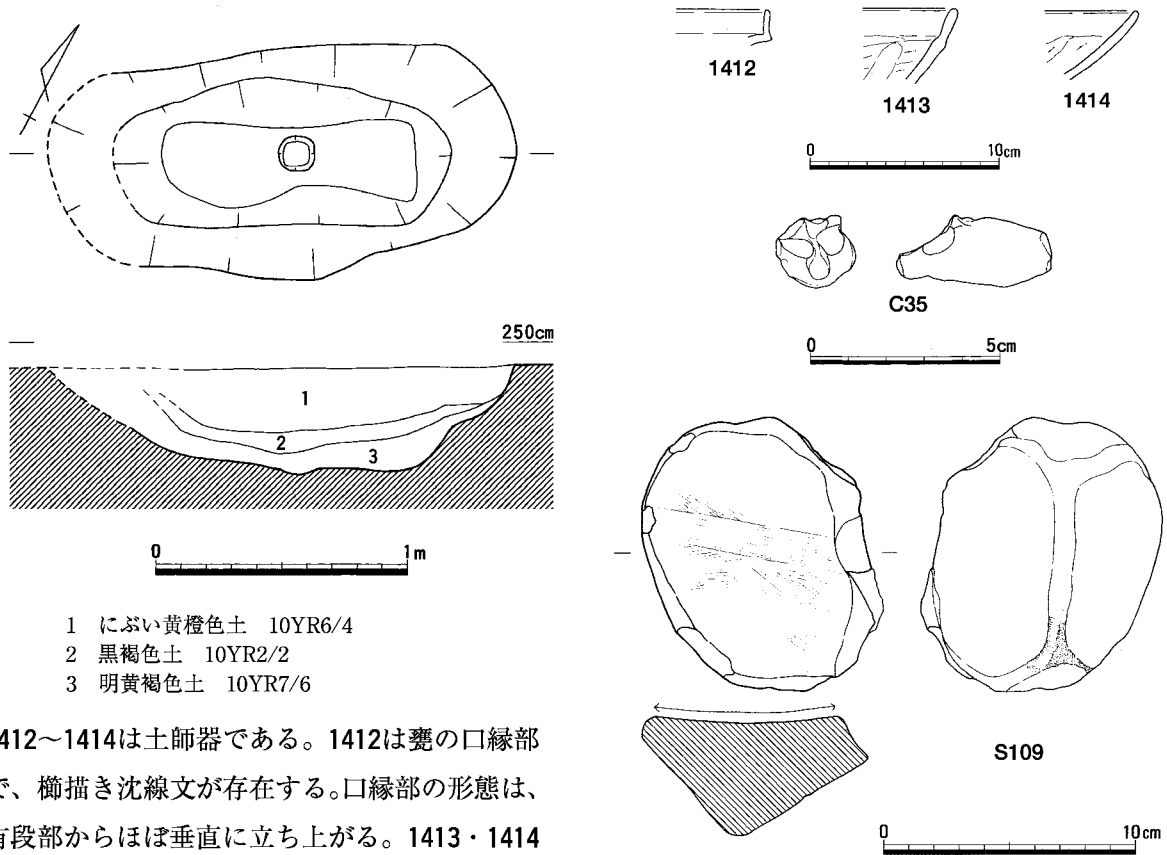
竪穴住居43(第399・421・422図、図版32)

竪穴住居43は、3区の東部中央に位置する。グリッド名でいうと、11Rになる。この住居の東側約1/4は、調査区外になるため調査をしていない。住居の北西側には竪穴住居61が、南西側には竪穴住居63があり、ともに切られている。住居の規模は、長軸長が490cmになり、平面形状は方形である。主軸はN-48°-Wで、座標北から48°振れており、これは竪穴住居35とほぼ同じ数値になる。床面の標高は、西側で約250cm、東側で約260cmになり、東側がやや高い。柱穴は4本存在し、深さは確認面からそれぞれ約70~80cm前後になる。南側にある1本は、柱穴の底に柱痕があり、丸形を呈する。壁体溝は、北側と西側の残りがよいが、南側にいくにつれ不明瞭になる。これは南側はかなり下で確認したためであり、かろうじて住居の掘り方が確認できたのみである。この住居の中央部よりやや南側に比較的規模の大きい土壇が1基存在する。土壇の規模は、長軸長156cm、短軸長92cmで、平面形状は隅丸長方形である。床面からの深さは41cmを測り、中央部の底には隅丸正方形のわずかなくぼみが存在する。

遺物には土器・土製品・石器などがある。1409~1411は弥生土器になる。1409は壺の口縁部で、胎土は水こし粘土である。1410は短頸壺で、口縁端面は擬凹線文状の跡がわずかに存在する。1411は鉢で、調整は内外面ともヘラミガキである。口縁端部には擬凹線文が存在する。この鉢は口縁径に比して器高が低い。これらは弥・後・Ⅳになる。



第421図 竪穴住居43 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- 1 にぶい黄橙色土 10YR6/4
- 2 黒褐色土 10YR2/2
- 3 明黄褐色土 10YR7/6

1412~1414は土師器である。1412は甕の口縁部で、櫛描き沈線文が存在する。口縁部の形態は、有段部からほぼ垂直に立ち上がる。1413・1414は鉢で、口縁部の形態は1413は段を有し、1414にはない。1414の内面調整は口縁部以外はヘラケズリである。破片であるが、丸底になると思われ、器高はあまり高くはならないであろう。これらの特徴から古・前・IIになると思われ、1412も古・前・IIになる。土器には幅があるが、この住居の時期は古・前・IIになる。C35は動物形の土製品である。耳と鼻と目が表現される。S109は砥石である。使用された面は1面のみである。(小林) 竪穴住居44 (第399・423図)

第422図 竪穴住居43中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

12Q区の調査区西端に位置するため、住居の大半が調査区外に延びる。平面形は主軸をN-50°-Wにとり、北辺が407cmの方形を呈する。床面海拔高は約260cmを測る。

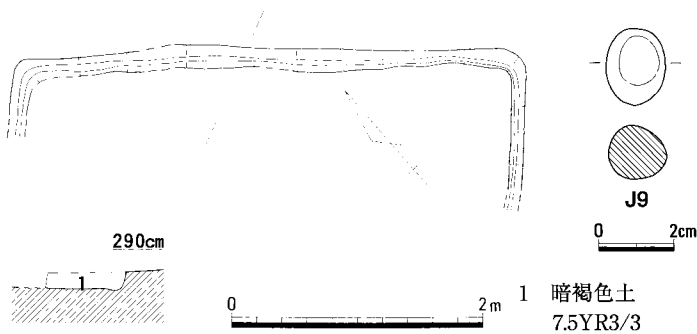
出土遺物は土師器小片と石英の20.5×15.5×14.5mmを測る玉J9がある。

時期は、竪穴住居45を切ることから古・前・II以降と推察される。

(杉山)

竪穴住居45 (第399・424図、図版33)

12Q区の調査区西端に位置し、竪穴住居44に切られる。平面は、主軸をN-29°-Wにとり、一辺447cm程度の方形を呈する。壁面の四方に壁体溝が巡り、段状に周囲が高くなり、中央が一段下がる。高床部の床面海拔高は約258cm、中央の床面が253cmを測る。この段が地山の削り出しか粘土の貼り付

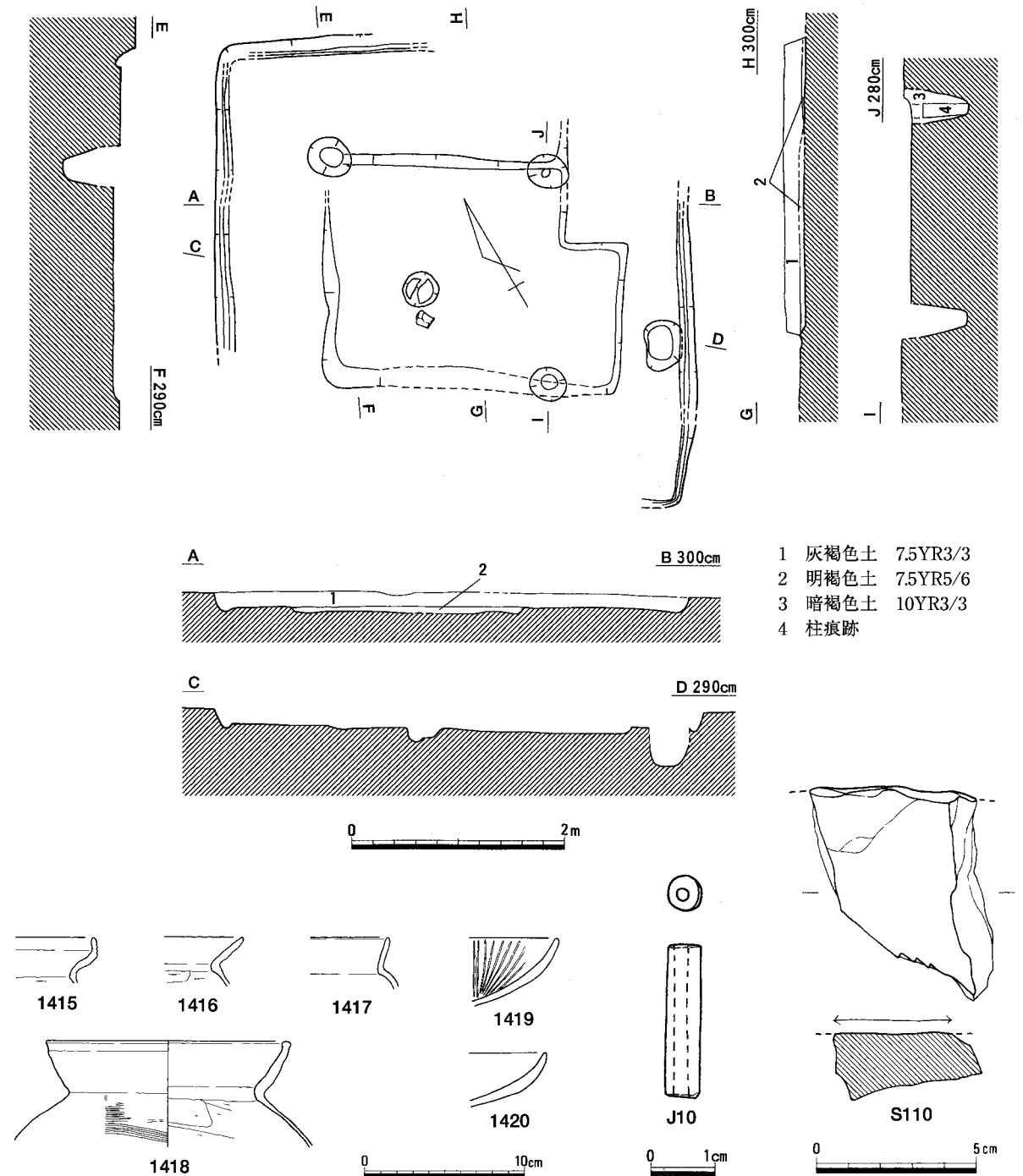


第423図 竪穴住居44 (1/60)・出土遺物 (1/2)

第3章 発掘調査の概要

けかは明確にできていないが、方形土壙が段を除去して検出できたことから粘土を貼り付けた可能性が高い。支柱穴は3本検出したが、西側の柱は不明である。中央の床面には浅いくぼみを持った赤化した被熱面があり、その脇に被熱した砥石S110がある。埋土と周辺を精査したが、鉄片などは確認されなかった。また、東辺の壁体溝に沿って50×35cm程度の方形土壙があり、埋土の色調の関係で段を除去後に検出できたが、本来は段の上から掘り込まれていたものと考えられる。

遺物は、埋土中から土師器の小片を主体として出土している。1415～1418は甕で、1415の口縁部外面には櫛描き沈線がみられる。1418は口縁部はナデを行い端部がわずかに内側に肥厚する。体部外面



第424図 竪穴住居45 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/1・1/2)

はヨコハケメののち一部ナデがみられ、内面はヘラケズリが明瞭に残る。1419・1420は皿形の鉢で、1419は体部外面がヘラケズリ後ナデ仕上げ、内面は放射状のヘラミガキがみられる。1420は体部外面がヘラケズリかナデを施す。J10は緑色凝灰岩製の管玉である。

時期は、出土土器から古・前・Ⅱと判断される。 (杉山)

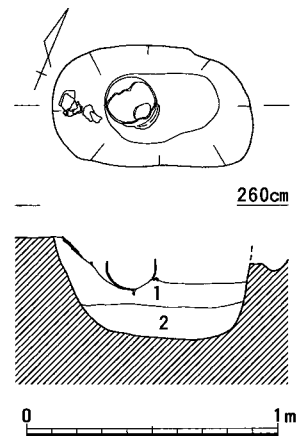
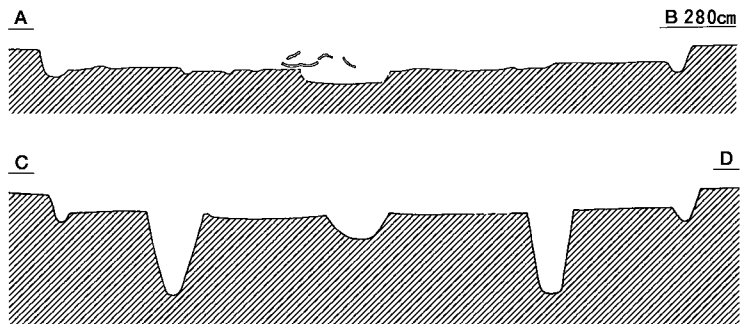
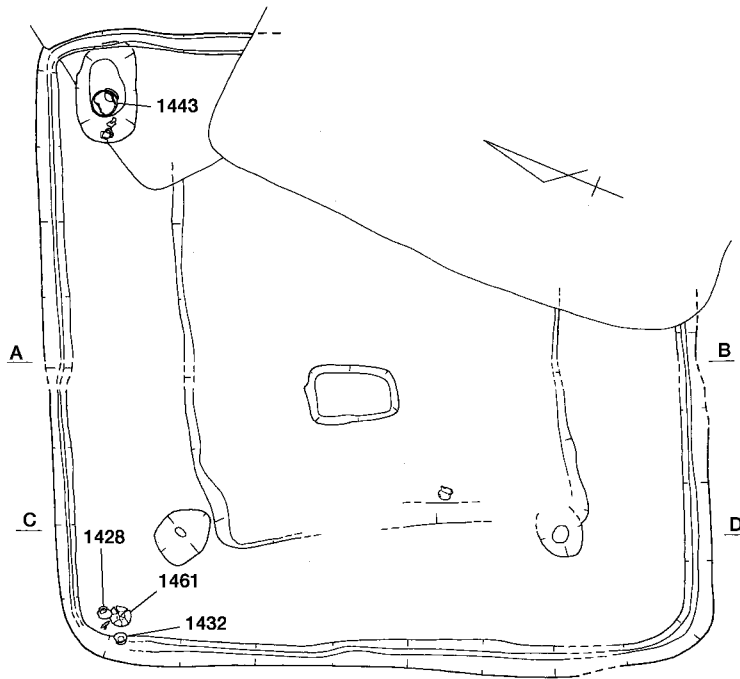
竪穴住居46 (第399・425～429図、図版33)

竪穴住居46は、3区の南側中央部に位置する。これはグリッド名でいうと12Rになる。この住居の北東側には竪穴住居67が、南東側には竪穴住居68が存在し、ともに切られる形になる。

住居の規模は、長軸長520cm、短軸長503cmで、平面形状は正方形に近くなる。主軸はN-20°-Eである。床は、壁体溝から約100cm内側までの外縁部が標高約250cm前後になり、それより内側はさらに5cmほど低くなる。外縁部の高まりは、現在残存する北・西・南辺の3辺とも存在している。柱穴は本来4本あったと思われるが、現存するのは西側の2本である。ただし南東側にあたると思われる1本は、竪穴住居68内に存在し、方形の柱痕をしている。現存する西側2本の柱穴は、床面から70～72cm前後になる。住居中央部よりやや西側に、中央穴が存在する。この中央穴は、長軸長73cm、短軸

長45cmで、平面形状は方形である。床面からの深さは、15cmを測る。この住居には、この中央穴以外に1基土壇が存在する。この土壇は住居の北東隅にあり、規模は長軸長79cm、短軸長48cmで平面形状は楕円形である。深さは39cmを測り、覆土中に1443などの土器が含まれる。

出土遺物には、土器類・金属器(銅器・鉄器)・石器などがある

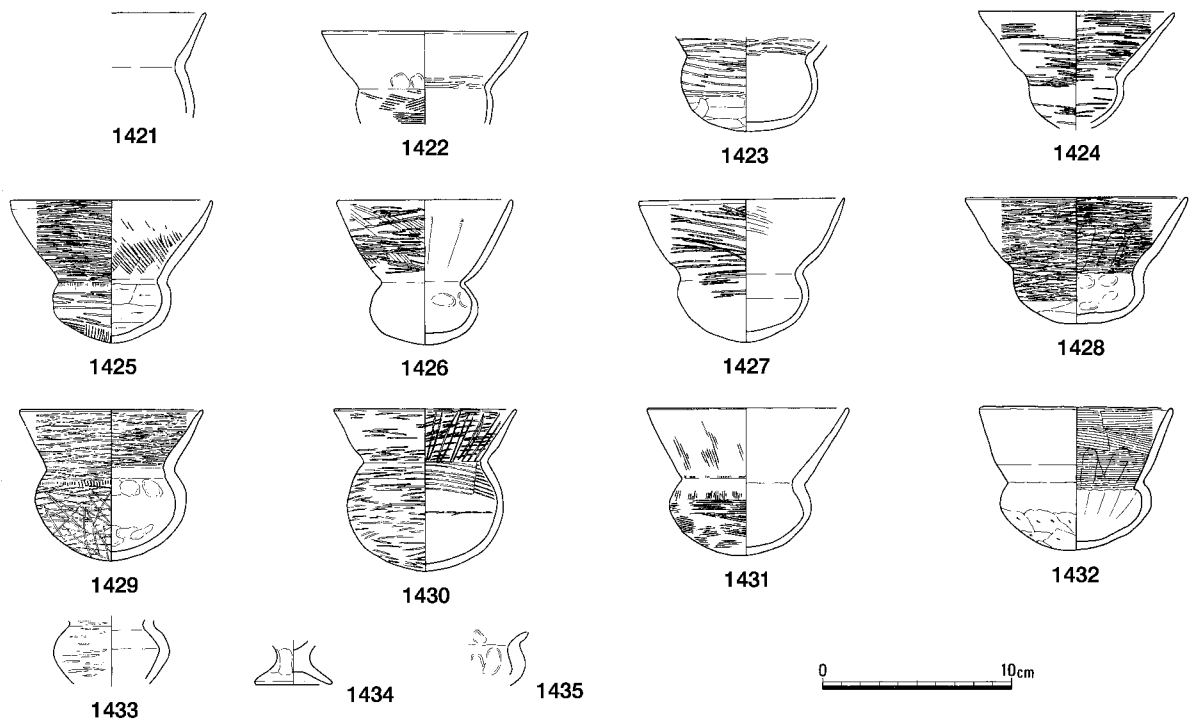


- 1 オリーブ褐色粘性砂質土 2.5Y4/4
- 2 にぶい黄褐色粘性砂質土 10YR5/4

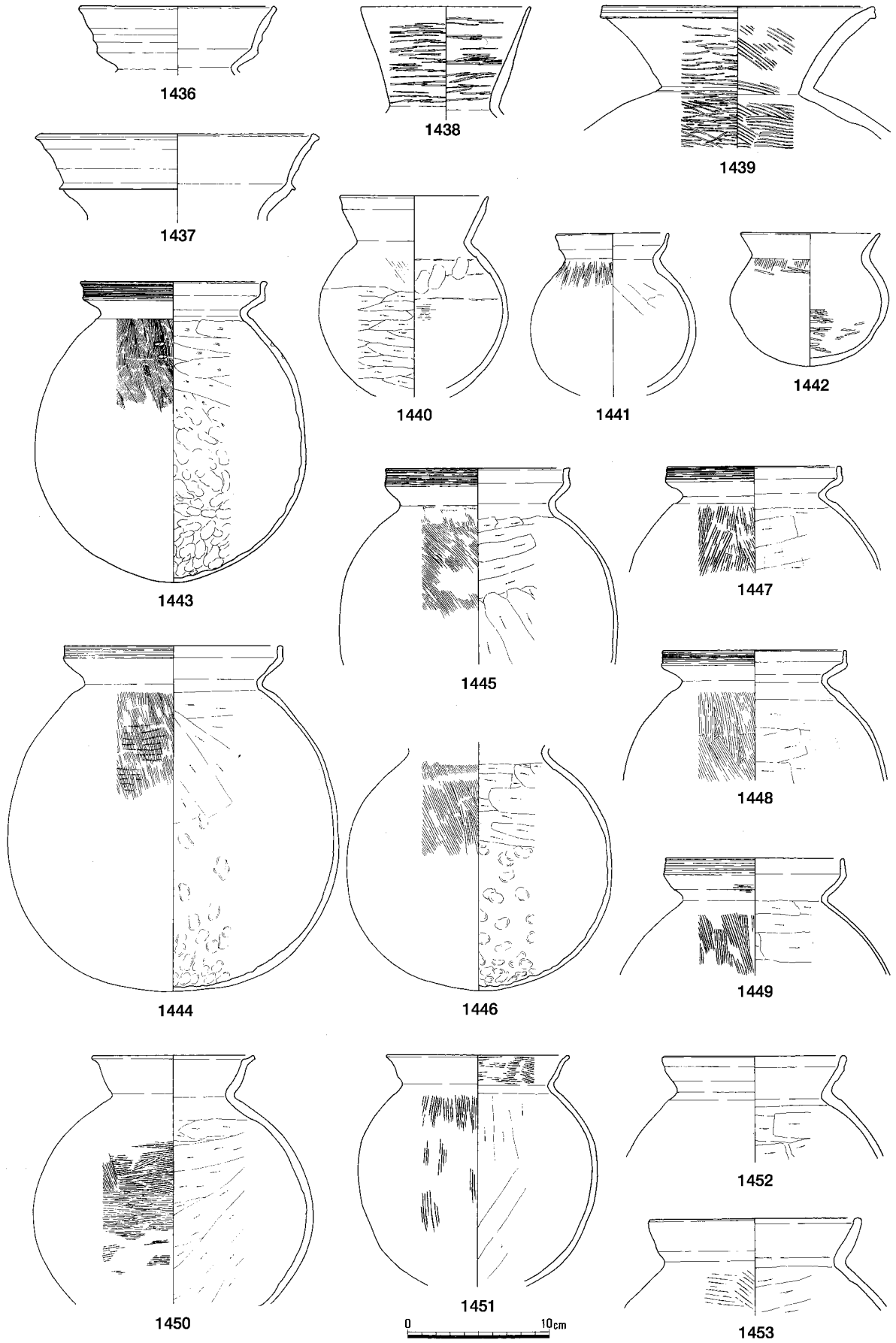
第425図 竪穴住居46 (1/60)・住居内土壇 (1/30)

る。これら出土遺物の大半は、住居の床面直上ではなく、覆土中から多量に出土するが、1428・1432・1461の3点は、住居の北西隅の床面直上から出土する。この3点は竪穴住居46が使用されていた時期に近い資料となることが考えられ、覆土中の資料は廃棄時期と考えてよいだろう。この3点の資料と覆土中出土の土器は、どちらにも亀川上層式と呼ばれる古・前・Ⅱの時期の土器が含まれる。ただし覆土中の土器の中には新出の土器、古・前・Ⅲが含まれている。このことから、住居の使用時期と廃棄の時期には若干の時期差があったと考えられる。

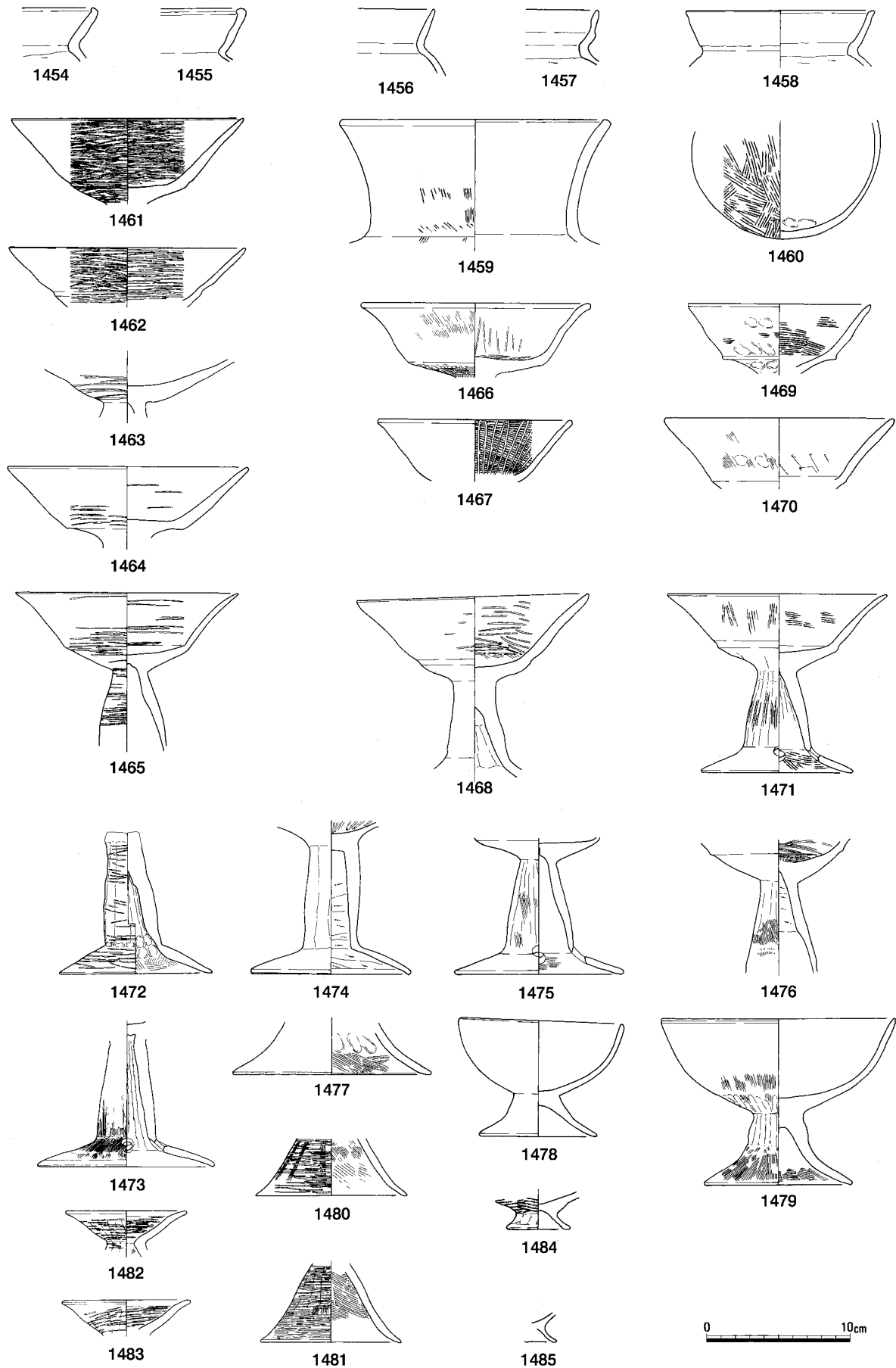
出土土器には以下のものがある。1423～1432は小型丸底壺である。このうち1424～1428・1431・1432は、口縁部が拡張したタイプであり、床面直上出土品もこれらにはいる。このタイプでも1424～1426は下半部が小さく、1427・1428・1431・1432はやや大きい。1429・1430は口縁部があまり発達しないタイプで、新出になる。1433～1435はミニチュア土器で、このうち1435は手捏ねによる成形である。1436～1442は壺である。1436・1437の口縁部は段をなし、1438は直行する。1439の口縁部は外反し、端部には面をもつ。四国系になるものと思われる。1443～1458は甕である。このうち1443～1449は、口縁部が直行し端部には櫛描き文がある。胴部の形態は、1443・1444のように最大径が下半にあり、下膨れしたようになる。1450～1458は、口縁部が「く」の字になる。端部が外反する1450・1451や、内側につまみ上げる1453・1454・1455などがある。これらは高橋編年でいうとⅪ期になる。1461～1481は高杯である。杯部は逆「ハ」の字になるものが多いが、1478・1479のように丸くおさまるものもある。逆「ハ」の字になるものの中には、屈曲部が下方に張り出す1469や、口縁端部の外反が顕著な1466などがあり、これらは新出になる。脚部は長脚になる1465・1468・1471～1473と、「ハ」の字になる1477～1481がある。長脚になるものは、大半が下半部で屈曲する。屈曲部の稜線は、はっきりしたものが多い。長脚になるものでも1474・1476は、内面がヘラケズリされる。このうち1474は直線的に立ち上がっている。1482・1483は器台である。どちらも小型であり、受部のみが残存する。両者



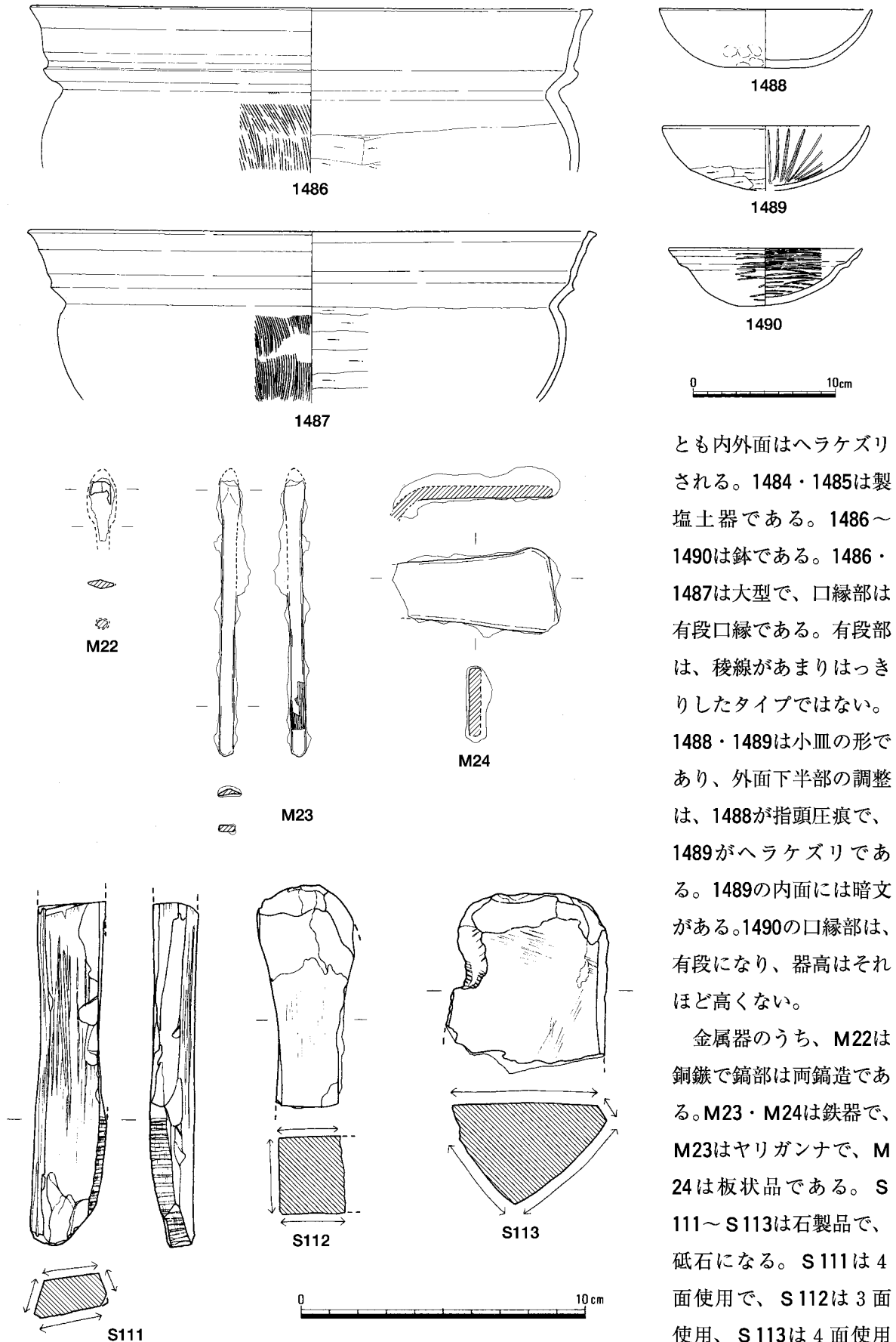
第426図 竪穴住居46出土遺物① (1/4)



第427図 豎穴住居46出土遺物② (1/4)



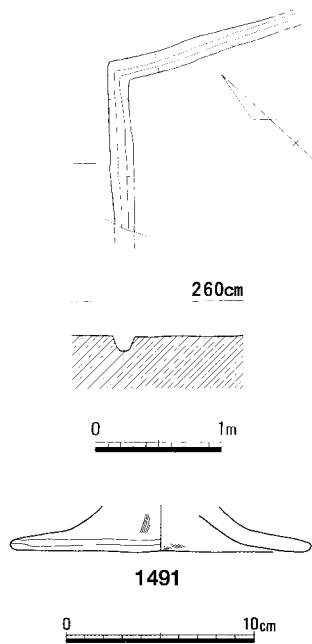
第428図 竪穴住居46出土遺物③ (1/4)



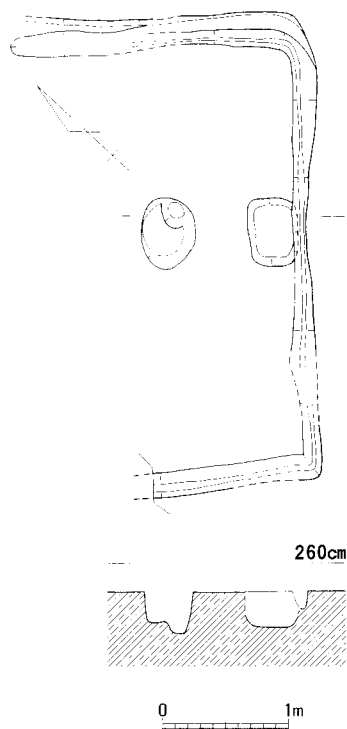
とも内外面はヘラケズリされる。1484・1485は製塩土器である。1486～1490は鉢である。1486・1487は大型で、口縁部は有段口縁である。有段部は、稜線があまりはっきりしたタイプではない。1488・1489は小皿の形であり、外面下半部の調整は、1488が指頭圧痕で、1489がヘラケズリである。1489の内面には暗文がある。1490の口縁部は、有段になり、器高はそれほど高くない。

金属器のうち、M22は銅鏃で鏃部は両鑄造である。M23・M24は鉄器で、M23はヤリガンナで、M24は板状品である。S111～S113は石製品で、砥石になる。S111は4面使用で、S112は3面使用、S113は4面使用になる。(小林)

第429図 竪穴住居46出土遺物④ (1/2・1/4)



第430図 竪穴住居47 (1/60)・
出土遺物 (1/4)



第431図 竪穴住居48 (1/60)・出土遺物 (1/4)

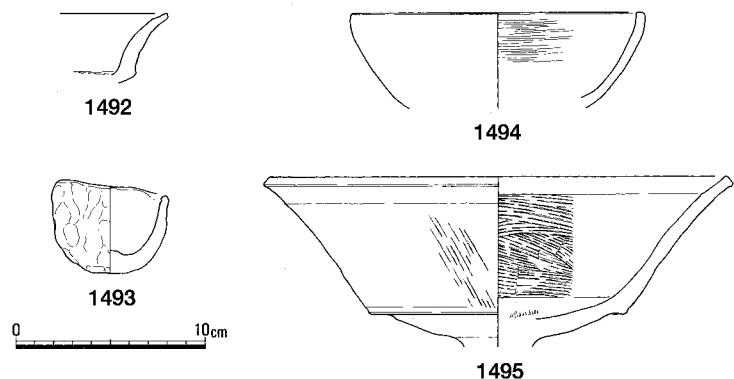
竪穴住居47 (第399・430図)

竪穴住居47は、3区の南側中央付近に位置する。グリッド名でいうと12Rになる。住居の残存状況は、北側隅の壁体溝のみが残る。住居47のすぐ南東側には竪穴住居48が近接する。住居の規模は、残存率が悪いため不明である。この住居の平面形状は、残された壁体溝から判断すると多角形を呈していたと思われる。壁体溝からは1491が出土し、古・前・Ⅲの高杯脚部になる。(小林)

竪穴住居48 (第399・431図)

竪穴住居48は、3区の南側中央付近に位置する。グリッド名でいうと12Rになる。住居の残存状況は、北西側の約2/3が失われる。この住居48のすぐ北西側には竪穴住居47が存在する。住居の規模は、長軸長が380cmを測り、平面形状は方形になるとと思われる。床面などはすでに失われており、壁体溝によりかろうじて規模が復元できる。住居の主軸はN-41°-Eになり、座標北から40~45°振れるグループに入る。柱穴は本来2本あったと考えられるが、現存するのは南東側の1本のみである。柱穴の深さは、確認面から約25cmを測る。住居の南東辺中央部には、壁体溝に接して方形土壌が存在する。この方形土壌の規模は、長軸長54cm、短軸長44cmで、深さは確認面から28cmを測る。

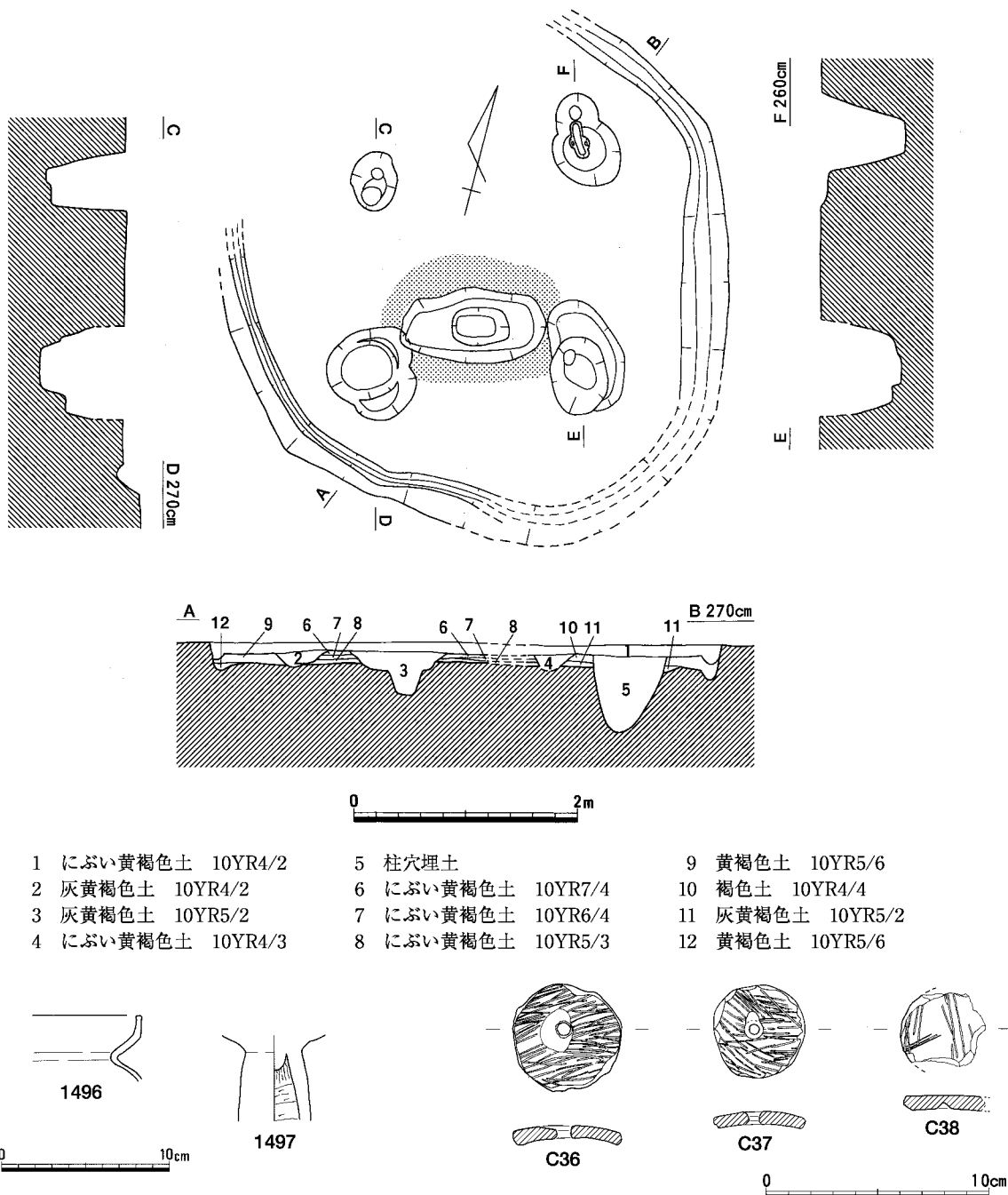
遺物は壁体溝からわずかに出土する。1494は鉢で、身が丸く収まり深くなる。時期は古・前・Ⅱになる。1495は、高杯の杯部であり、逆「ハ」の字に立ち上がり口縁端部は面をもつ。杯部の屈曲部分が下方に張り出す。時期は古・前・Ⅲになる。1493は手捏ね土器である。以上の土器から、廃棄時期は古・前・Ⅲになる。(小林)



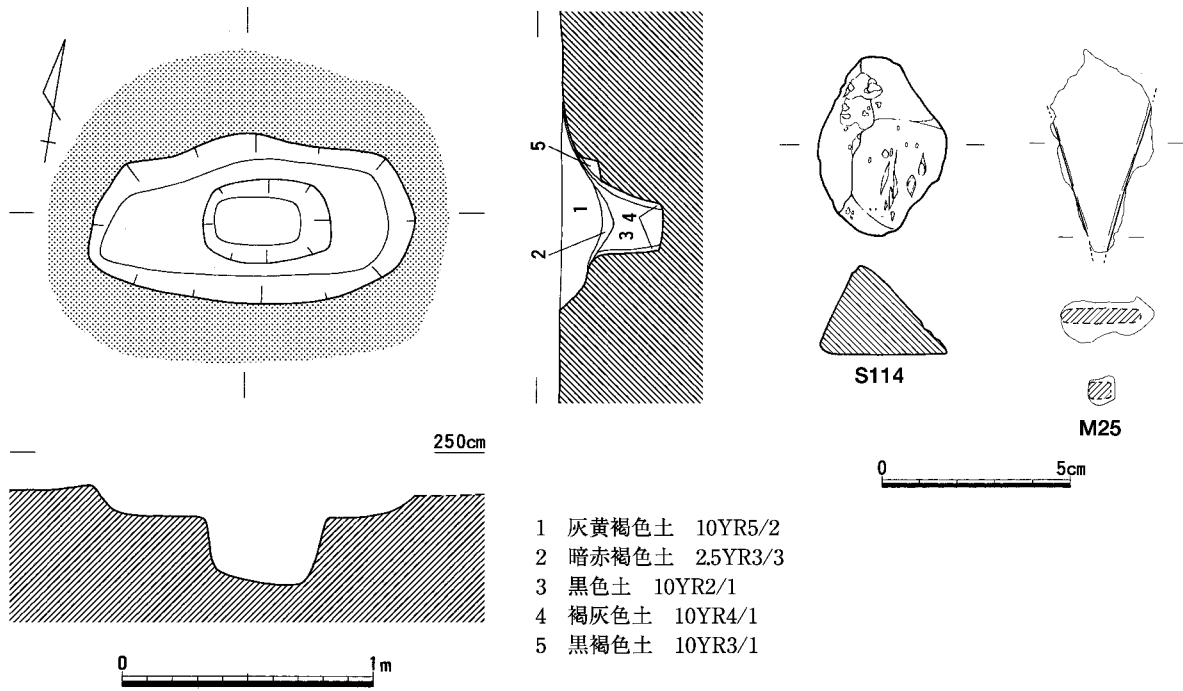
竪穴住居49 (第399・432・433図、図版33)

竪穴住居49は、3区の南側端部に位置する。これはグリッド名でいうと13Qになる。住居の残存状況は、北西側と南東側の一部が調査区外になるため確認できない。他遺構との切り合い関係は、竪穴

住居76・83に上半部の大半が切られる形になる。住居の規模は、長軸長が452cm、短軸長が約420cmで、平面形状は多角形である。主軸はN-14°-Wを測る。なお住居の床面積は、17.83㎡である。柱穴は4本で、北東側の底には礎板痕跡がある。床面は2面が確認されており、少なくとも1回は建て替えがあったと思われる。南側柱穴2本の間には、楕円形の中央穴が存在する。この中央穴は、中央部付近がさらに掘り下げられており、第3層になる覆土は炭化物で充満されていた。また、壁部になる第4層は焼かれた土の跡になる。これらからこの中央穴は炉としての機能を有していたと考えられる。なお中央穴は、上層の床面から掘り込まれており、本来は周りが土手状に高まっていた。出土遺物には土器片の他、土製紡錘車や鉄鏃があり、時期は古・前・IIになる。 (小林)

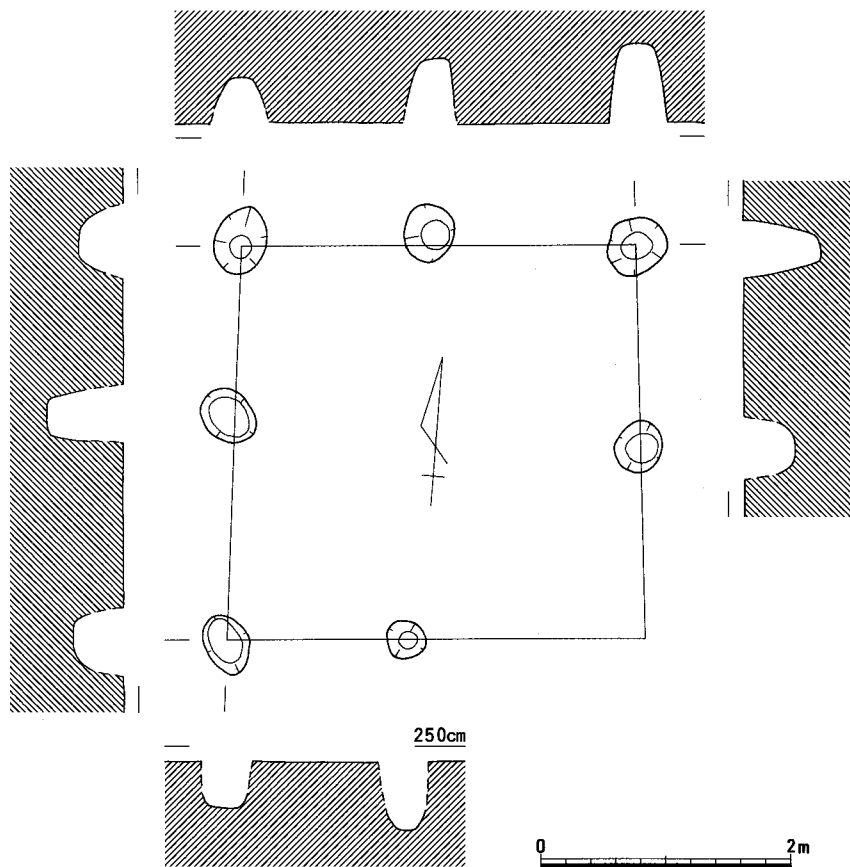


第432図 竪穴住居49 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)



第433図 竪穴住居49中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/2)

3 掘立柱建物



第434図 掘立柱建物1 (1/60)

掘立柱建物1 (第398・434図)

6Q区に位置する2×2間の掘立柱建物である。調査時には認識することができず、整理作業時に周辺の柱穴群を検討する過程で見出された。南東隅の柱穴を欠失するが、想定される規模は315cm×309cm、面積10.1㎡を測る。柱穴は円～楕円形を呈し、検出面からの深さは30～60cmを測った。柱痕は確認できていない。

遺物は土器小片のみであるが、一応古墳時代前期に属すと考えられる。(岡本)

4 井戸

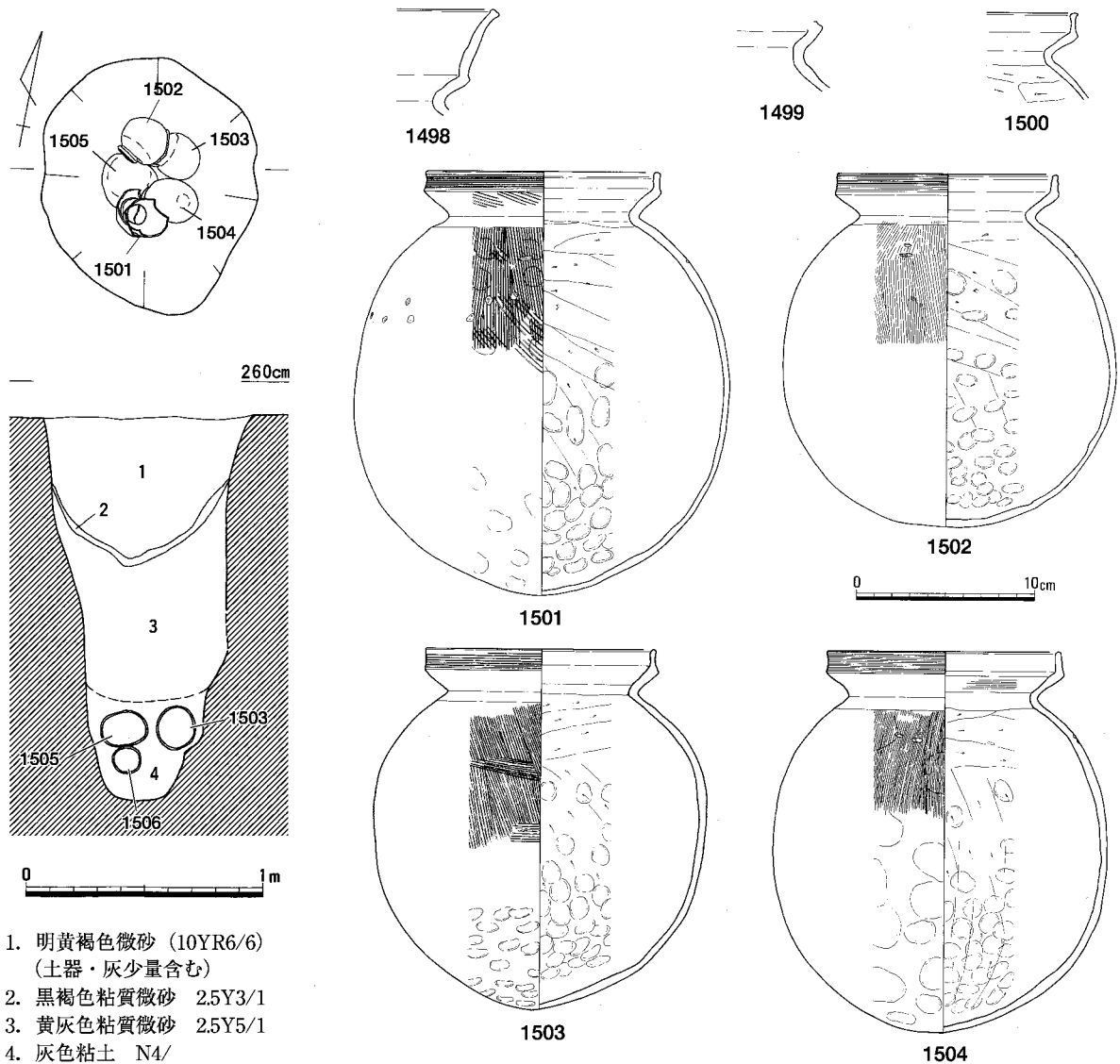
井戸1 (第398・435・436図、図版34図)

5 Q区の中央東側に位置し、後述する井戸2がこの井戸の西6mに位置する。検出面は標高245cmである。平面形は検出面ではやや楕円形で、南北が110cm、東西が89cmであり、検出面からの深さは159cmを測る。底面の海拔高は83cmであった。

埋土は大きく4層に分けられる。第1層は明黄褐色微砂に褐灰色微砂がブロック状に混ざった土、第2層は炭を多く含む層、第3層には角・円礫を含み、第4層は粘土である。第3層から第4層へは徐々に変化していくようすで、明瞭に区別することが困難であった。

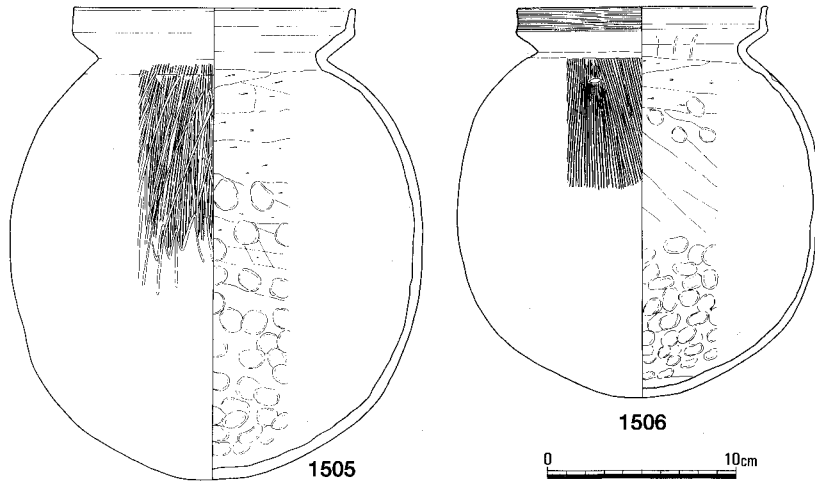
土層の観察から、第1・2層と第3・4層では埋没の時期が異なる可能性が考えられる。第3・4層が短期間で埋まり、時間の経過と共にそれらが落ち込んだ上に第1・2層が堆積したと思われる。

出土遺物は土器である。その中でも特に一括で埋設されたと思われる甕は、いずれも第4層中に合計6個体が存在した。配置は1501が最も上で、その東に接して1504、少し北側に1502、1502の下に



1. 明黄褐色微砂 (10YR6/6)
(土器・灰少量含む)
2. 黒褐色粘質微砂 2.5Y3/1
3. 黄灰色粘質微砂 2.5Y5/1
4. 灰色粘土 N4/

第435図 井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第436図 井戸1出土遺物② (1/4)

1503、その西に並んで1505があり、一番下に1506が口縁を東に向けて横たわっていた。1501の胴部が約1/5欠損するが、その他はほぼ完形の状態出土した。1501は外面に刺突が1つとそれとは区別できる工具当たり痕16か所が存在する。刺突は1501・1506で1個、1502・1504で2個が認められる。また、1501以外では外面に炭化物の付着があり、1502では内面下半分に炭化物の付着が見られる。1498～1500は破片で、1498が壺、それ以外は甕である。これらの土器の特徴から、この井戸は古・前・Ⅱに埋没したものといえよう。

(氏平)

井戸2 (第398・437図、図版34)

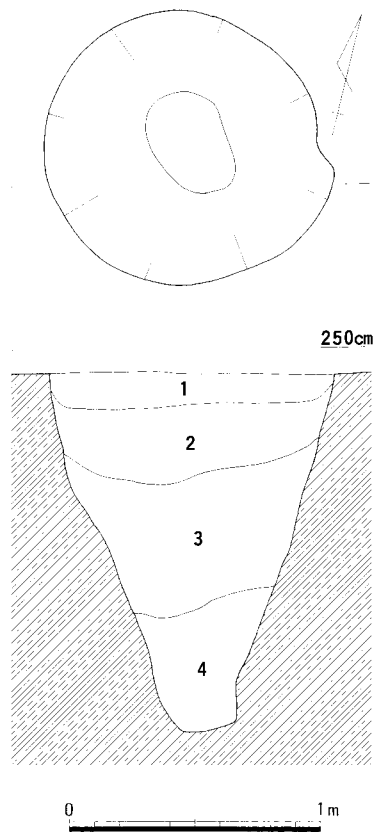
5Q区ほぼ中央に位置する井戸である。北側半分を溝56によって切られている。検出面は標高240cmである。平面形は、図ではややいびつに見えるが実際はほぼ円形である。直径約115cmで、深さは151cmを測る。底面の海拔高は97cmであった。断面形は逆三角形を呈する。土層は4層に分けられる。第1層は土器を含んでいて、均質な土質である。第2・3層は黒褐色シルトやにぶい黄橙色微砂をブロック状に含んでいる。第4層は粘土である。第2・3層にブロック状に含まれる土は、弥生前期水田層や弥生中期包含層と似ている。

この遺構の時期は、遺物からは明確にしがたいが、井戸1の近くに位置することなどから古墳時代前期と思われる。(氏平)

井戸3 (第399・438図、図版59)

10Q区の中央部やや北西寄りに位置し、河道2南岸のテラス上で検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形に近い。規模は長軸119cm、短軸98cm、深さは検出面から114cmを測る。底面海拔高は38cmである。基盤層の海拔高56cm以下では青灰色細砂(5B6/1)の堆積を確認したが、湧水は現時点では認められなかった。埋土は7層に分層でき、いずれも水平堆積に近く、掘り返しが行われている状況ではない。遺物は第1層からほぼ完形の1514のみ、第2層からは図示した大半の土器が完形に近い状態で出土している。第3層からは甕1513・1516、高杯1518・1519のほか、長さ約40cmの木片が出土したが、

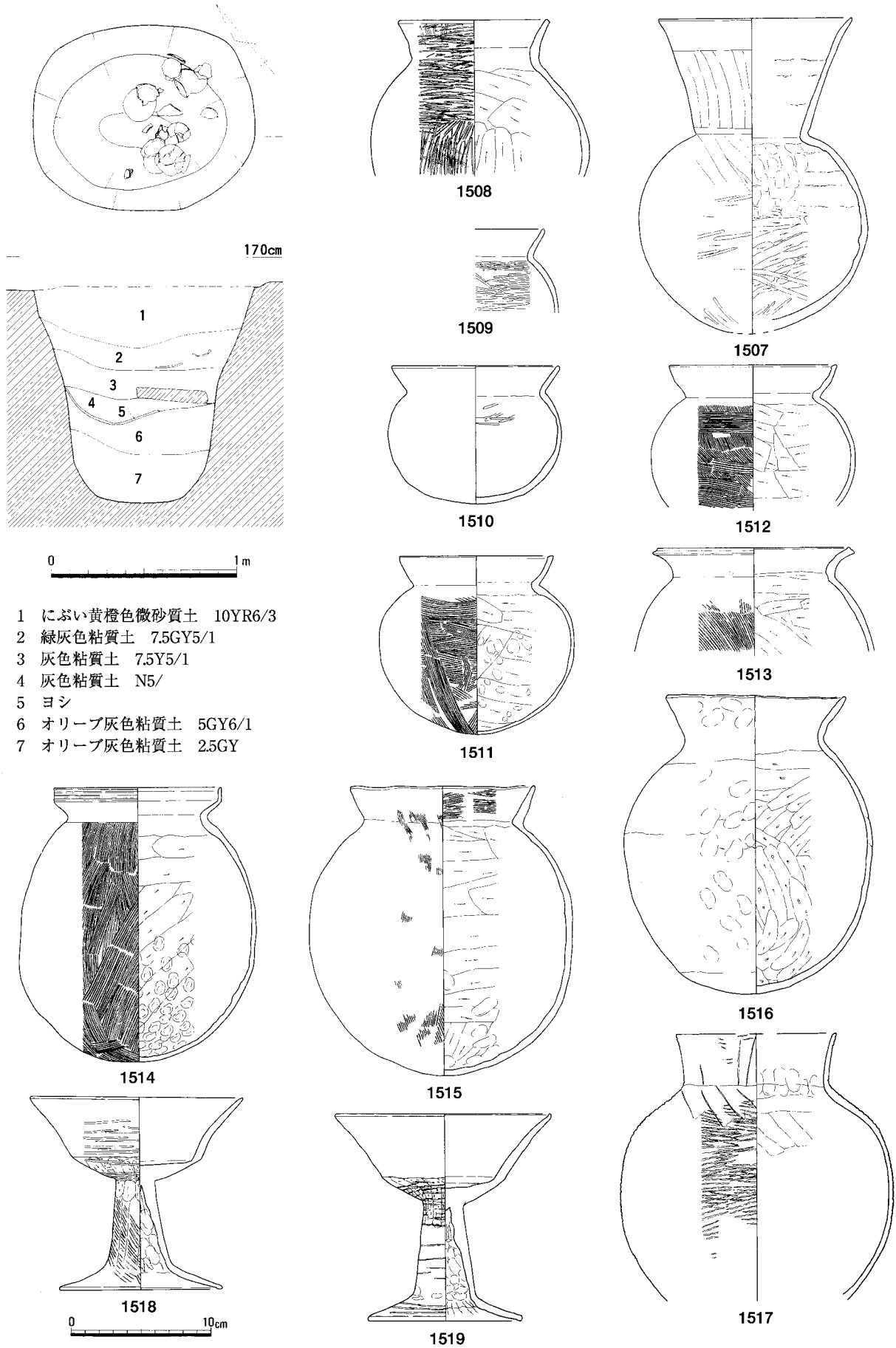
10Q区の中央部やや北西寄りに位置し、河道2南岸のテラス上で検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形に近い。規模は長軸119cm、短軸98cm、深さは検出面から114cmを測る。底面海拔高は38cmである。基盤層の海拔高56cm以下では青灰色細砂(5B6/1)の堆積を確認したが、湧水は現時点では認められなかった。埋土は7層に分層でき、いずれも水平堆積に近く、掘り返しが行われている状況ではない。遺物は第1層からほぼ完形の1514のみ、第2層からは図示した大半の土器が完形に近い状態で出土している。第3層からは甕1513・1516、高杯1518・1519のほか、長さ約40cmの木片が出土したが、



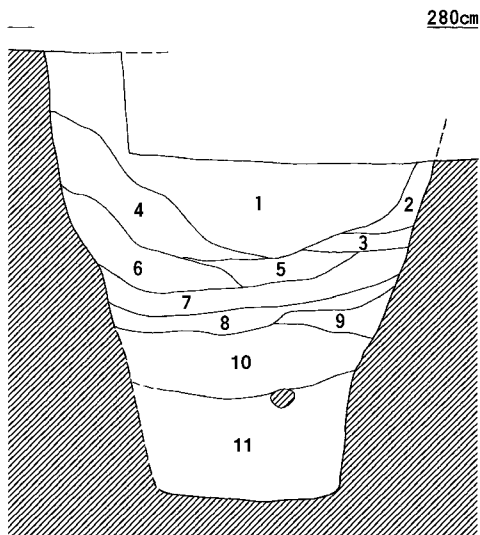
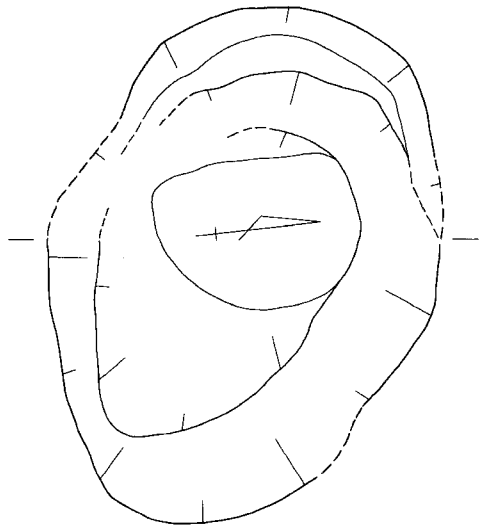
- 1 にぶい黄橙色微～細砂 10YR6/4
- 2 にぶい黄橙色砂～細砂 10YR6/3
- 3 褐灰色微砂 10YR5/1
- 4 灰色粘土 N4/

第437図 井戸2 (1/30)

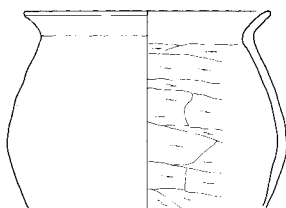
井戸3 (第399・438図、図版59)



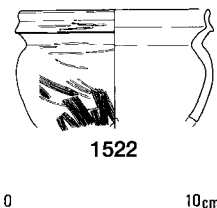
第438図 井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 黄灰色粘質細砂 2.5Y6/1
- 2 灰黄色粘質細砂 2.5Y6/2
- 3 におい黄褐色粘質土 2.5Y6/3
- 4 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2
- 5 灰色粘質土 7.5Y5/1
- 6 黒褐色粘質土 2.5Y3/1
- 7 灰色粘質土 5Y5/1
- 8 黒褐色粘質土 2.5Y3/2
- 9 オリーブ灰色細砂 2.5GY3/1
- 10 オリーブ灰色粘質細砂 5GY5/1
- 11 青灰色粘質細砂 5BG6/1



1521



1522



第439図 井戸4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

木には加工痕が認められなかった。第6層上面は葉・ヨシが密着し、面的に広がっていた。第6・7層では遺物は出土していない。

1507・1508は壺、1509～1517は甕、1518・1519は高杯である。1507は直口壺で、体部は球形を呈し、口縁部は長く逆「ハ」の字状に開く。口縁部外面は縦方向のナデが顕著に認められる。1508は短頸壺で、口縁部は単純に外反する。口縁部外面は横方向のヘラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキによって調整されている。胴部内面はヘラケズリが施されている。1509～1512は小型の甕であり、基本的に「く」の字状の口縁部をもつが、1509・1510は口縁端部を丸く収め、1511・1512は口縁端部を内側へ摘んでいる。体部はいずれも浅く、丸底を呈す。中型の甕は二重口縁の1514、口縁部が単純に外反する1515～1517がある。体部はいずれも球形を呈しており、重心は中央に位置する。底部は丸底である。1518・1519は高杯であり、杯部はやや内湾気味に外方へ開く。脚部は長く、裾部には透かし孔は施されていない。脚柱部は中空であり、内面は指オサエの痕跡が顕著に認められる。

出土土器の中には古・前・Iの特徴をもつものが存在するが、これらの土器の出土状況から、井戸の廃絶時期は古・前・IIと考えられる。(米田)

井戸4 (第399・439図)

10Q区の南西隅部に位置する。構造は素掘りである。平面形は不整形円で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸211cm、短軸147cm、深さは検出面から176cmを測る。底面海拔高は91cmである。埋土は11層に分けることができ、第1・2層は掘り返している可能性がある。第7層以下はグライ化している。遺物は少なく、まとまった状態では出土していない。第11層上面では木片を検出したが、人為的な加工痕などは認められなかった。底面の第11層下面からは特に遺物は出土していない。

出土遺物はいずれも土師器である。1520・1521は甕で、口縁部をわずかに外反させている。内面は両者ともにヘラケズリが行われている。

1521の胴部は屈曲する。1522は小型の鉢で、二重口縁をもち、体部は浅く、肩部が張る。外面はハケメによって調整されている。

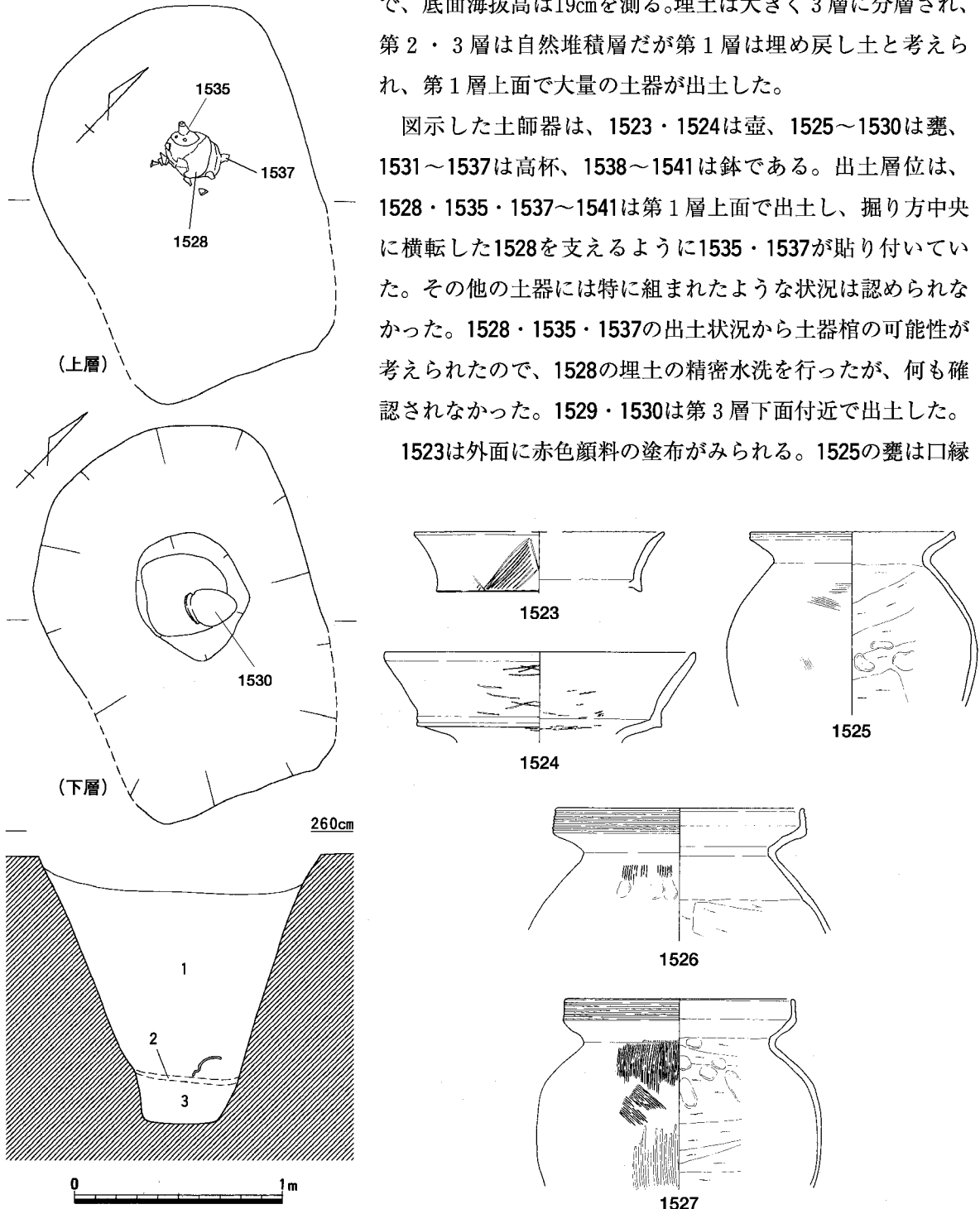
時期については、出土遺物が乏しいが、古・前・Iに比定しておく。(米田)

井戸5 (第399・440・441図、図版34)

12R区西で、竪穴住居40~42の南に位置する。平面は147×144cmの不整円形を呈し、深さは129cmで、底面海拔高は19cmを測る。埋土は大きく3層に分層され、第2・3層は自然堆積層だが第1層は埋め戻し土と考えられ、第1層上面で大量の土器が出土した。

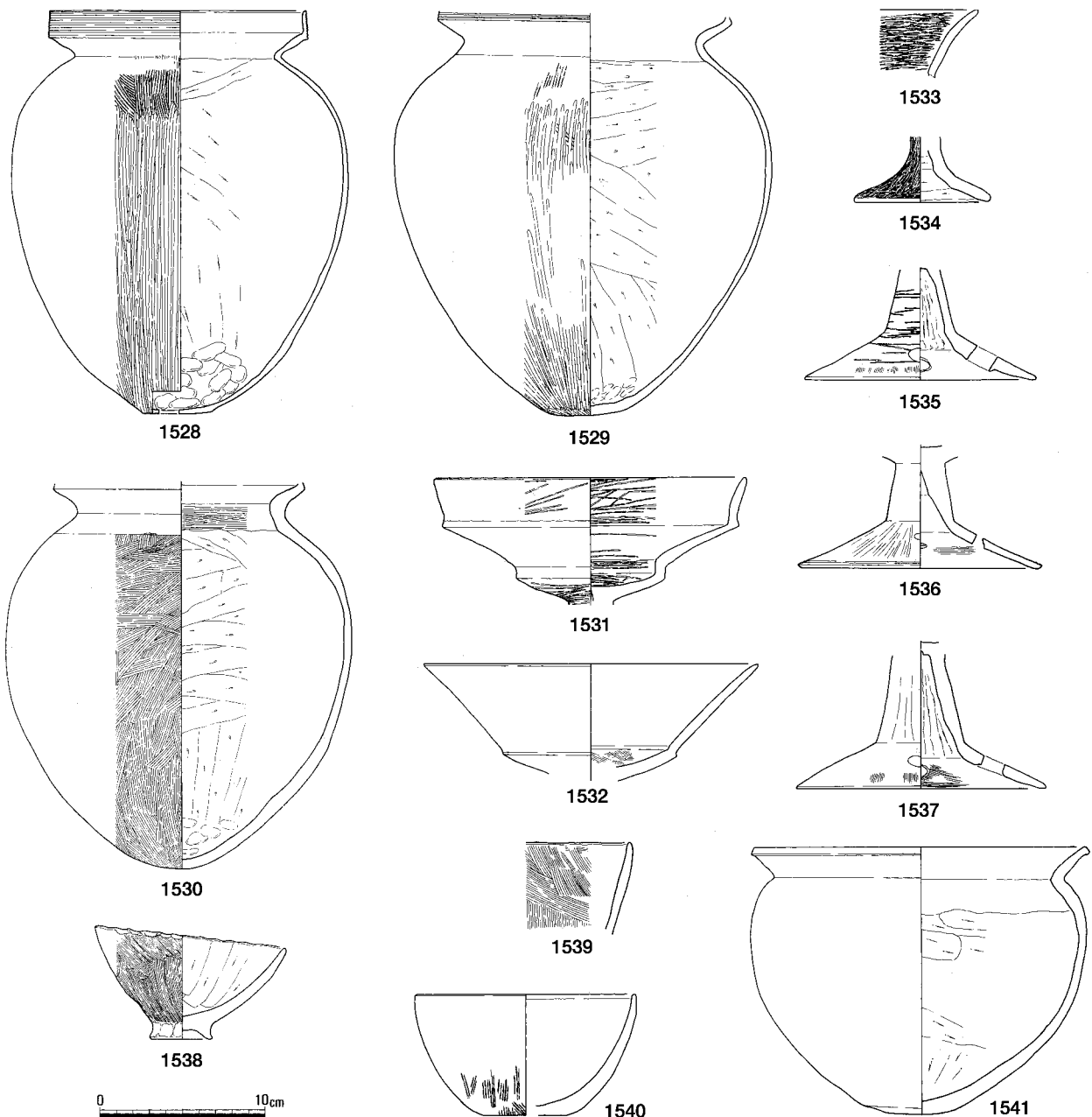
図示した土師器は、1523・1524は壺、1525~1530は甕、1531~1537は高杯、1538~1541は鉢である。出土層位は、1528・1535・1537~1541は第1層上面で出土し、掘り方中央に横転した1528を支えるように1535・1537が貼り付いていた。その他の土器には特に組まれたような状況は認められなかった。1528・1535・1537の出土状況から土器棺の可能性が考えられたので、1528の埋土の精密水洗を行ったが、何も確認されなかった。1529・1530は第3層下面付近で出土した。

1523は外面に赤色顔料の塗布がみられる。1525の甕は口縁



- 1 黒褐色土 10YR2/2
- 2 灰黄褐色砂質土 10YR4/2
- 3 黒色粘質土 10YR2/1

第440図 井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第441図 井戸5出土遺物② (1/4)

端部が肥厚せず、端部にナデによる面がみられる。1526～1529は口縁端部が上方に拡張され、1526で6条、1527・1528で10条の櫛描き沈線が巡る。体部外面の調整はハケメの後縦方向のヘラミガキで1529は非常に丁寧にヘラミガキを施す。1528の底部には焼成後の穿孔がある。1530は口縁端部がわずかにつまみ上げられており、外面全面がハケメで内面の頸部付近にもハケメがみられる。体部内面はハケメ、底部は指オサエとナデが看取される。1531の多段の高杯は内外とも横方向のヘラミガキで、1532は外面と口縁部内面はナデ、内底部にのみヘラミガキがみられる。1534は透かし孔はなく、外面はハケメで内面はヘラケズリの後ナデである。1535～1537は4個の透かし孔があり、脚端部外面にハケメ、内面はナデを主体にヘラミガキが残るものもある。1538は弥生土器の椀形の鉢で、指オサエの痕跡が明瞭である。1541も弥生土器の鉢で外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリである。

時期は、出土土師器から古・前・Iと判断される。

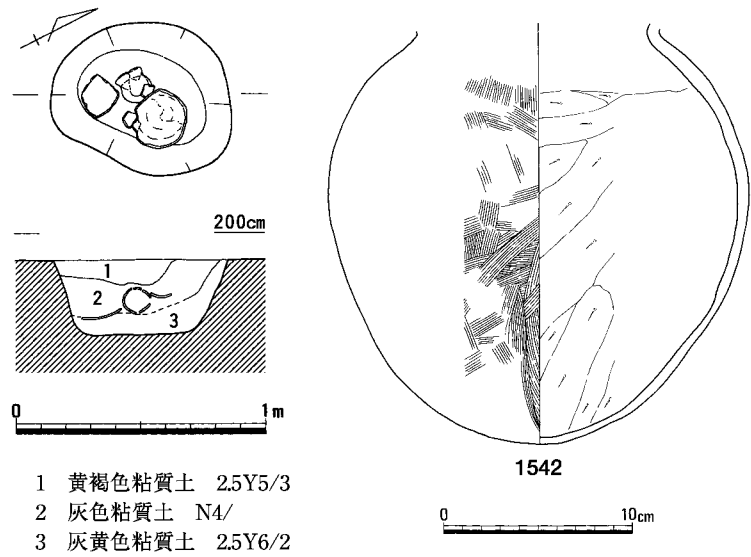
(杉山)

5 土壙

土壙61 (第398・442図)

5 Q区の北端部に位置する、不整な楕円形の土壙である。弥生時代前期水田面まで掘り下げた段階で存在に気付いたため、本来の規模は明らかでない。検出時の長径71cm、短径59cm、深さ30cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土中層から甕1542が出土している。口縁部を欠損し、体部はほぼ球形である。

この土壙の時期は、出土遺物から判断して古・前・Ⅱに属すと思われる。(岡本)



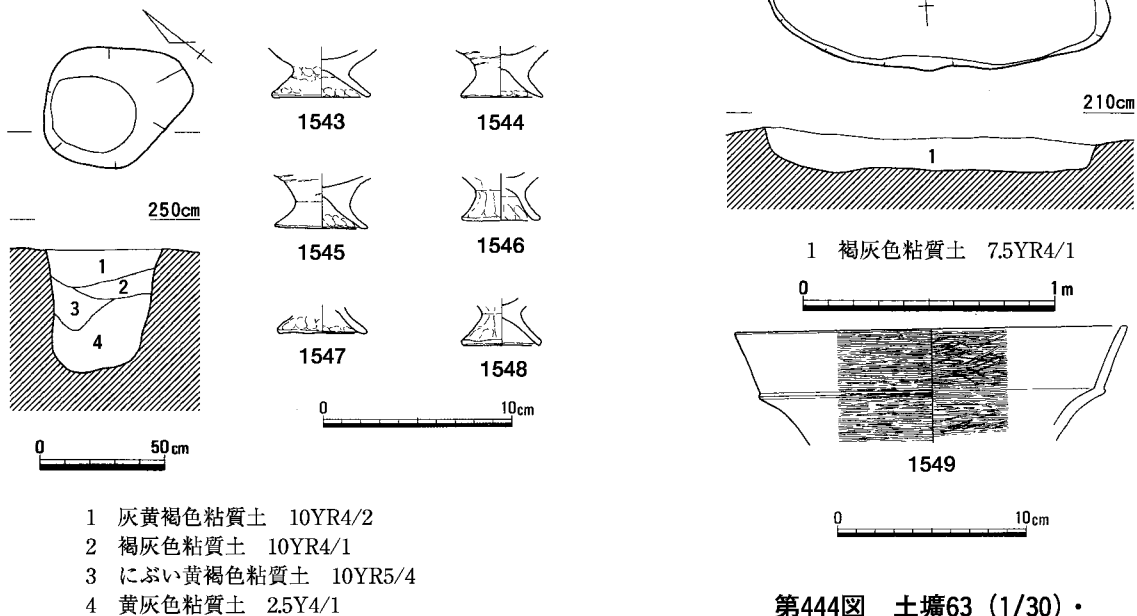
第442図 土壙61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙62 (第398・443図)

6 Q区の北東部に位置する。平面形は不整円形で、長軸62cm、短軸49cmを測る。断面形はA-b形で、深さは49cmである。壁面は垂直に立ち上がる。埋土中には炭化物・焼土は含まない。遺物は1543～1548の製塩土器以外には出土しておらず、廃棄土壙と考えられる。時期は古墳時代前期。(米田)

土壙63 (第398・444図)

6 Q区に位置する不整楕円形の土壙である。長さ138cm、幅81cm、深さ15cmを測る。埋土中から高杯1549が出土している。時期は古・前・Ⅰに比定される。(岡本)



第443図 土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第444図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌64 (第398・445図)

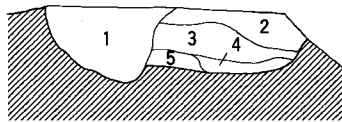
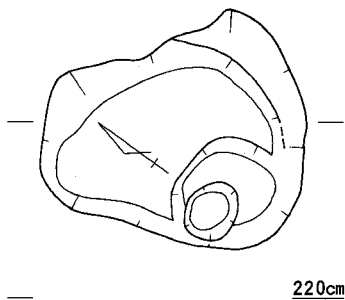
6 Q区で検出された土壌で、平面形は長径105cm、短径80cmの不整な四角形を呈する。深さは30cmを測り、底面南端部は柱穴状に深く掘り窪められている。少量の出土遺物や埋土から、古墳時代前期の遺構と判断している。(岡本)

土壌65 (第398・446図)

2区7Pで検出した、楕円形を呈すると考えられる土壌である。調査区によって切られているため、全体の検出は行うことができなかった。底面には凹凸があり、焼土塊が底面付近で出土している。時期は、出土遺物が細片ではあるが古墳時代前期であると考えられる。(時實)

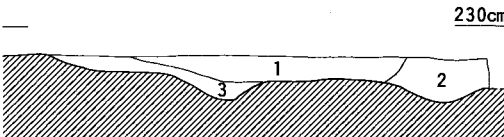
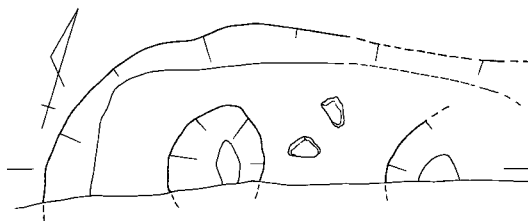
土壌66 (第398・447図)

2区7Qで検出した不整形の土壌で、南側は削平を受けている。北西辺部分に炭・焼土が集中して散布しており、壁面および底面には直径約50cmにわたって、弱い被熱痕跡が認められた。出土遺物には、甕1550・高杯1551・製塩土器1552などがある。これらの出土遺物の特徴から、この土壌の時期は古・前・Ⅲであると考えられる。(時實)



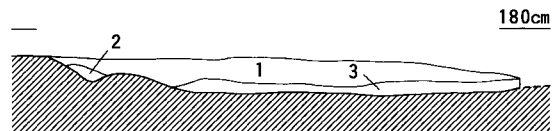
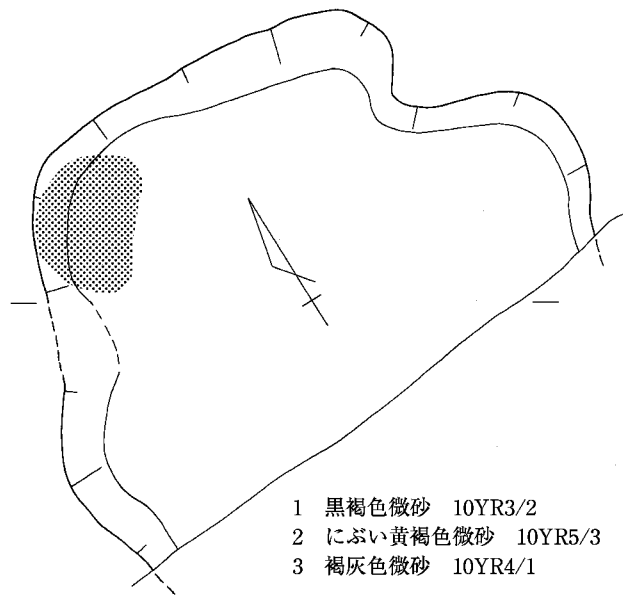
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- 2 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 5 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3

第445図 土壌64 (1/30)

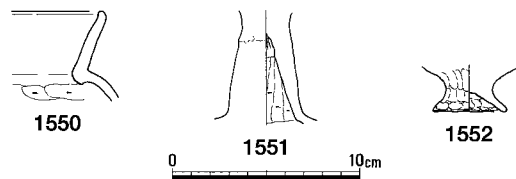


- 1 褐灰色粘性砂質土 7.5YR5/1
- 2 褐灰色粘性砂質土 7.5YR6/1
- 3 にぶい黄褐色微砂 10YR7/4

第446図 土壌65 (1/30)



- 1 黒褐色微砂 10YR3/2
- 2 にぶい黄褐色微砂 10YR5/3
- 3 褐灰色微砂 10YR4/1

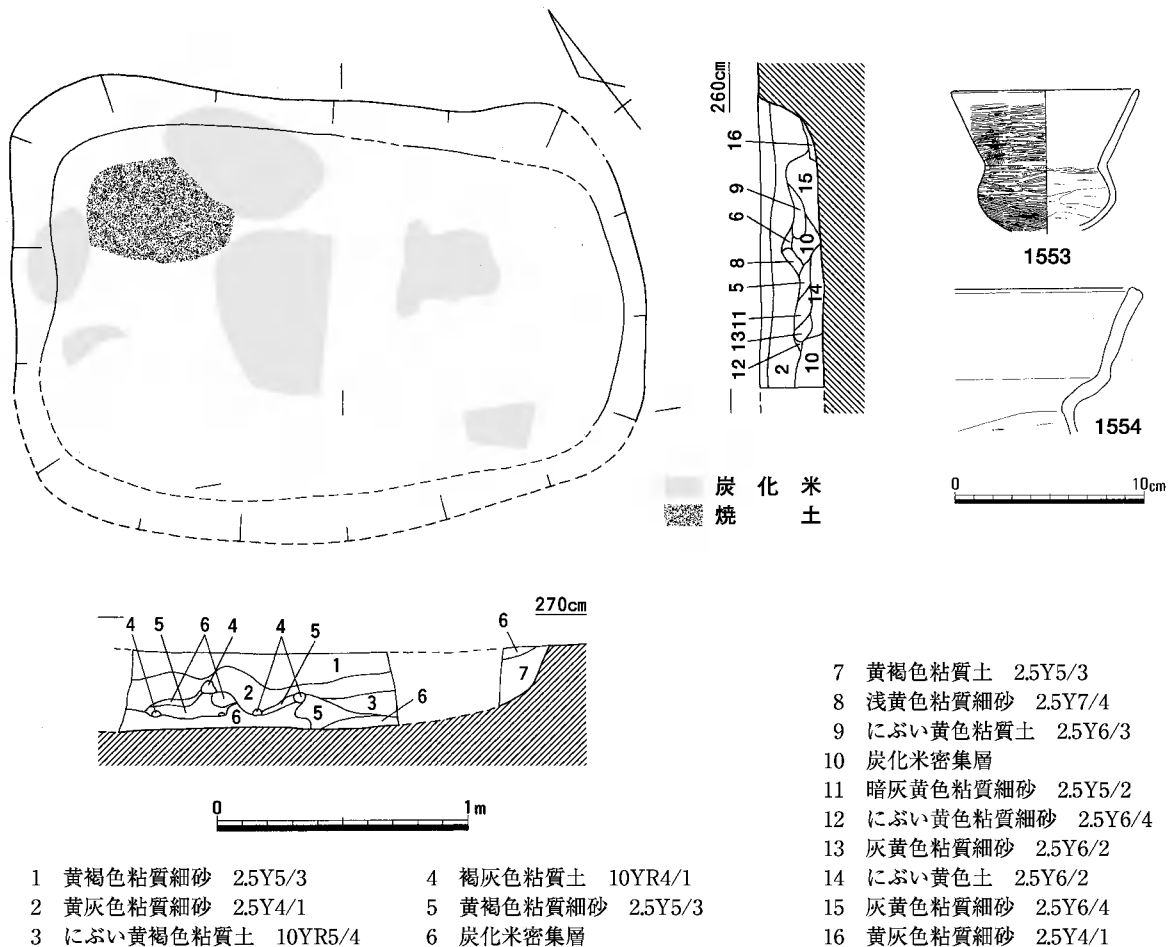


第447図 土壌66 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌67 (第399・448、図版35)

10Q区の中央部やや北東寄りに位置し、長さ約5mの古墳時代後期の溝に切られている。平面形は隅丸方形、長軸259cm、短軸は復元で174cm。断面形はA-a形、深さは32cmを測る。第1・2層は土壌全体を覆い、それぞれ炭化米が斑に散っており、底面に密集する炭化米を攪拌するかたちで瞬間的に埋没したと考えられる。塊状を呈す第4・5・8・13層や、炭化米密集部分の直上に部分的に堆積する第6・7・9・11層は炭化米を全く含まない。土壌底面直上には炭化米が密集している部分(第6・10層)が5~11cmの厚さで堆積しており、炭化米の上面は凹凸があり、箇所によって炭化米の密度に差がある。第3・14・15層は炭化米を多く含む。平面図のトーンは、炭化米密集部分(第6・10層)・炭化米が多い層(第3・14・15層)、焼土塊を多く含む層の上面の状況を表示したものである。炭化米密集部分は底面のほぼ全体にわたって存在するが、特に中央と西側が顕著である。炭化米密集範囲は約40~65cmの楕円形を呈し、少なくとも6単位に分かれる。土壌西側には長軸60cm、短軸40cmの楕円形の範囲に、焼土塊を密に含む層が炭化米直上に厚さ5cmほど堆積していた。

遺物として土師器の小型丸底壺1553、壺1554が出土し、古・前・Ⅱに属すが、本土壌に確実に伴うかは不明。覆土は全て水洗し、体積にして約16.6ℓの炭化米を得ることができた。乾燥重量は約8.1kgである。炭化米の一部をAMS法によって放射性炭素年代測定した結果(附編参照)、¹⁴C年代測定値は1980±40BPと計算され、出土土器の年代観と齟齬をきたしており、時期の特定には検討を要する。
(米田)

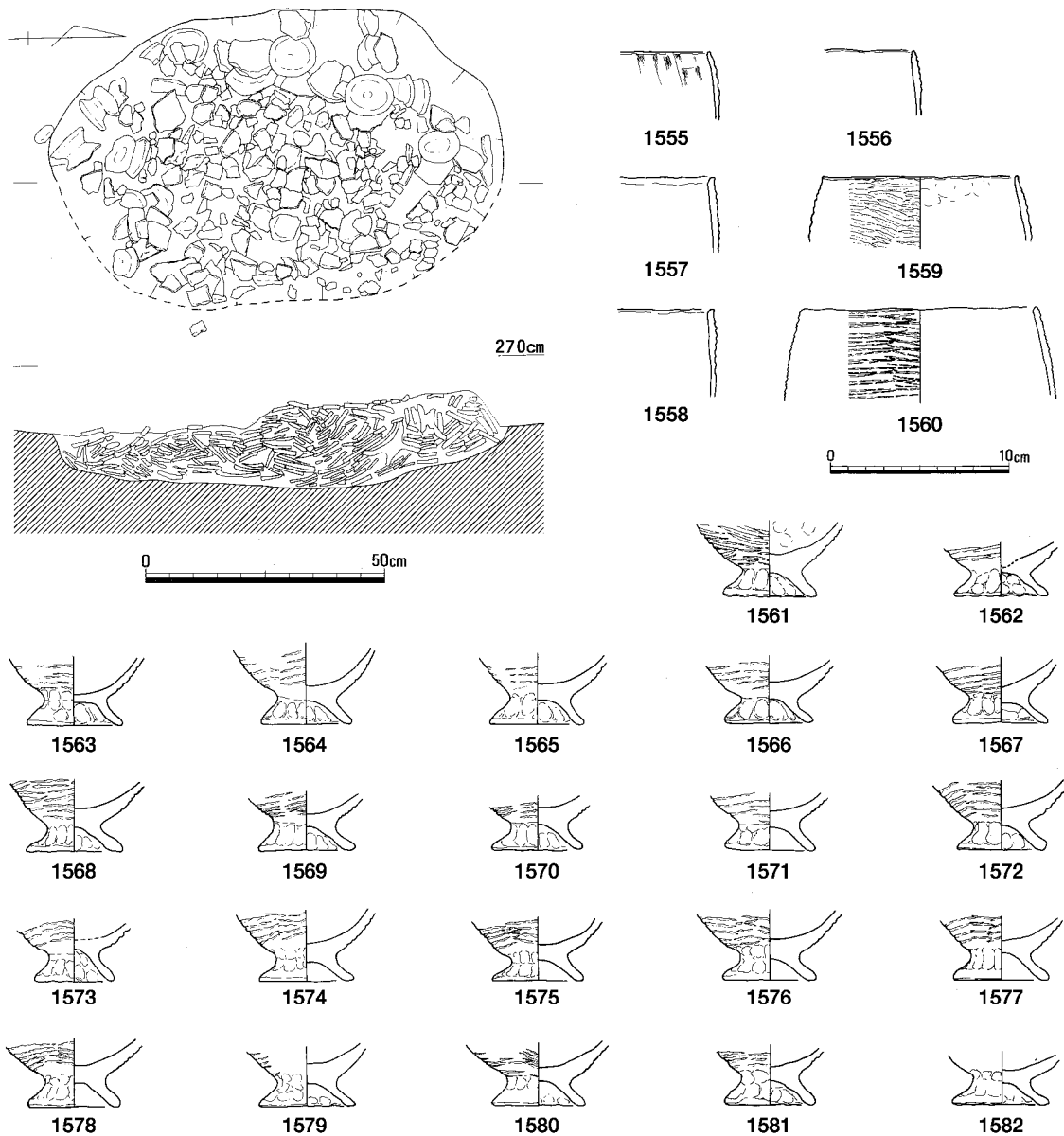


第448図 土壌67 (1/30)・出土遺物 (1/4)

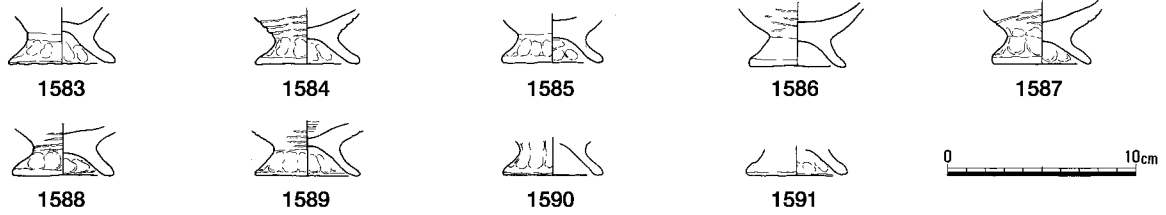
土壙68 (第399・449・450図、図版35)

土壙68は11Q区に位置する。竪穴住居34の上面に位置し、竪穴住居58より古い遺構である。土壙68は楕円形の平面形を呈し、長径57cm、短径37cm、検出面からの深さは約10cmを測る。土壙内から製塩土器がほぼ全面にわたって、隙間もないような状況で出土している。製塩土器は、完形のものはなく、いずれも破損した状態で出土した。出土した土器はいずれも製塩土器で、それ以外の器種の土器は検出されていない。また、土壙内が熱を被ったような痕跡も認められず、土壙68は破片になった製塩土器のみを廃棄するためにつくられた土壙と考えることができよう。1555～1560は製塩土器の口縁部である。いずれも破片であり、口径が復元できるもので、口径11～13cmを測る。外面にはタタキの痕跡がみられ、内面には指頭圧痕あるいは工具痕が観察できる。1561～1591は脚部である。いずれも、体部にはタタキの痕跡がみられ、脚部には指圧痕のような痕跡が見られる。底径は4.5～5.6cmを測る。

これらの出土遺物から、土壙68は古・前・Iに営まれたものであると判断できる。 (金田)



第449図 土壙68 (1/15)・出土遺物① (1/4)

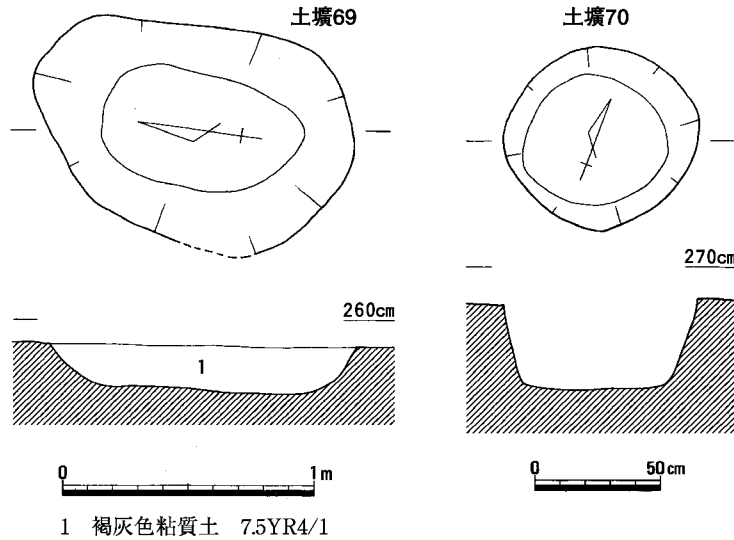


第450図 土壌68出土遺物② (1/4)

土壌69 (第399・451図)

10R区東部に所在し、竪穴住居26の北西側で検出された土壌である。平面形は不整な楕円形を呈し、長径130cm、短径85cm、深さ18cmを測る。出土した土器片から古墳前期の遺構と推定される。

(岡本)



第451図 土壌69・70 (1/30)

土壌70 (第399・451図)

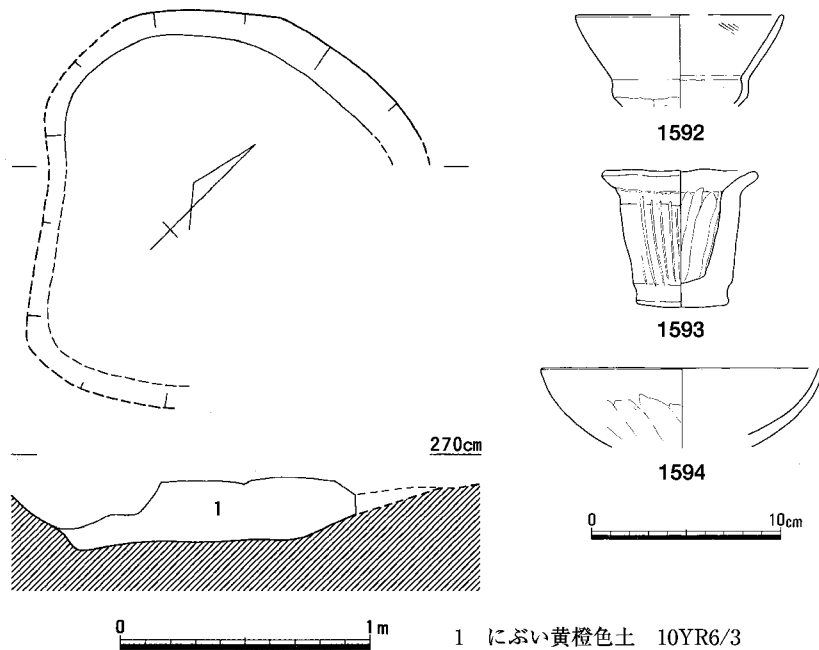
10Q区の南東部に位置する。平面形は円形を呈し、長軸78cm、短軸70cmを測る。断面形はA-a形で、深さは36cmである。遺物は皆無に近いが、時期は検出状況から、古・前・Ⅱに比定される。

(米田)

土壌71 (第399・452図)

3区の中央部よりやや北側に位置し、グリッド名では11Qになる。南側には竪穴住居35があり、大半がこれに切られる。残存状況が悪く規模は不明であるが、平面形状は不整形になる。確認面からの深さは18cmである。断面形状はA-cである。出土遺物は土器片のみで、1592は小型丸底壺になり、口縁部の拡張が顕著なタイプである。1594は鉢で、器高が低いタイプである。これらの土器は、古・前・Ⅱになる。

(小林)



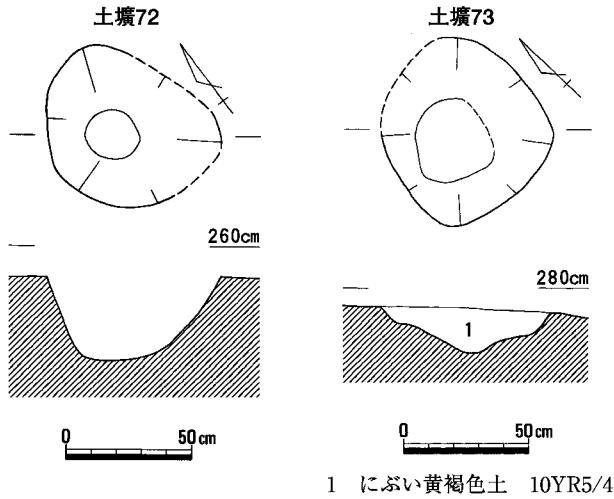
第452図 土壌71 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌72 (第399・453図)

土壌72は3区南東側に位置し、グリッド名では12Qになる。規模は長軸長68cm、短軸長58cmで、平面形状は不整形である。確認面からの深さは32cmを測り、断面形状はA-bである。(小林)

土壌73 (第399・453図)

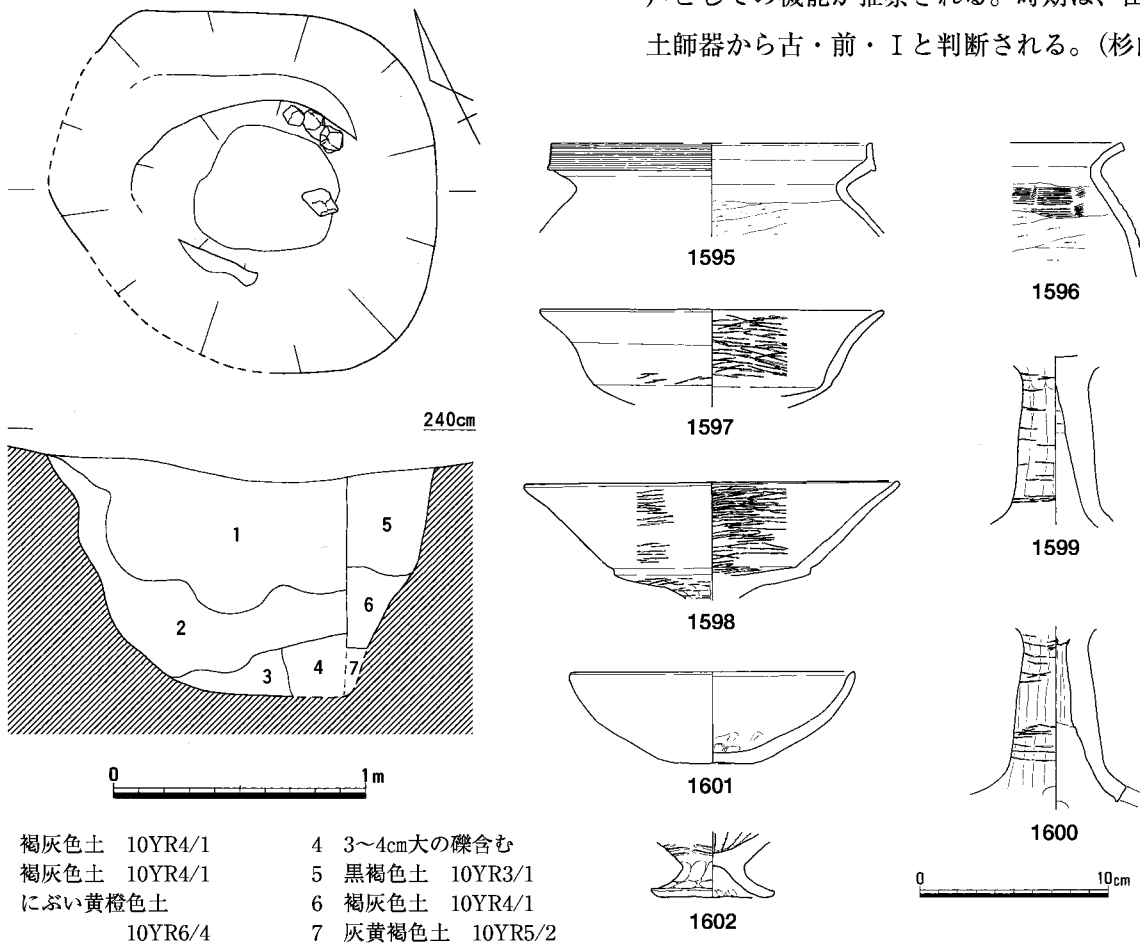
土壌73は3区南東側に位置し、グリッド名では12Rになる。規模は長軸長75cm、短軸長62cmで、平面形状は不整形である。確認面からの深さは18cmで、断面形状はA-bである。(小林)



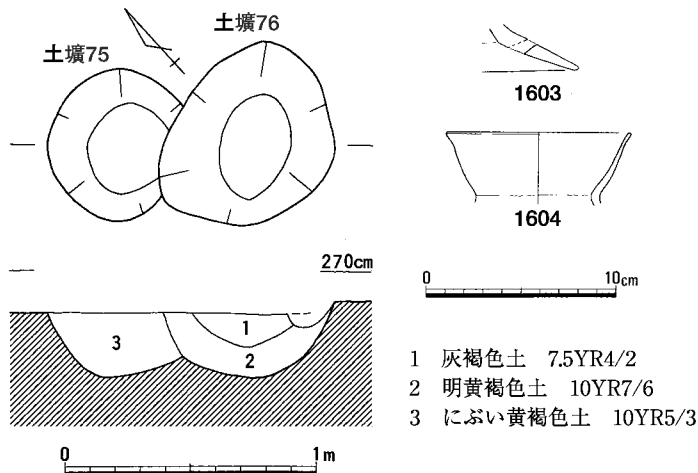
第453図 土壌72・73 (1/30)

土壌74 (第399・454図)

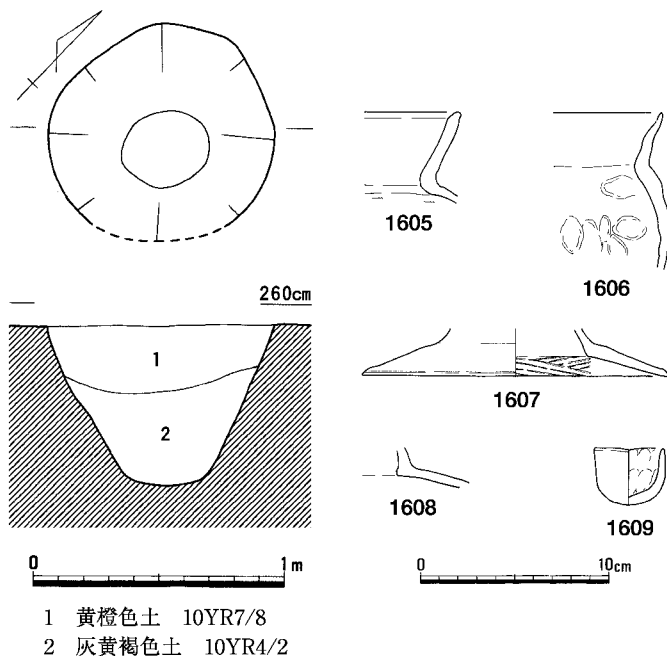
12Q区東端に位置し、平面は153×143cmの楕円形を呈する。掘り方は下位に段を持ち、中央で平らな底面に至るが、段の裾で底面に貼り付いた状態で角礫が3個並んでいる。土層観察では第1～4層と第5～7層では堆積状況が異なることから板状のものが立てられていて、角礫はその根石としての機能が考えられる。検出面からの深さが98cm、底面海拔高が134cmと他の土壌よりも深いことから井戸としての機能が推察される。時期は、出土土師器から古・前・Iと判断される。(杉山)



第454図 土壌74 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第455図 土壙75・76 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第456図 土壙77 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙75 (第399・455図)

土壙75は3区南側端部に位置し、グリッド名では13Qになる。南東側には土壙76があり、これに切られる。規模は長軸長60cmで、平面形状は円形である。深さは25cmで、断面形状はA-bである。(小林)

土壙76 (第399・455図)

土壙76は3区南側端部に位置し、グリッド名では13Qになる。北西側には土壙75があり、これを切る。規模は長軸長72cm、短軸長61cmで、平面形状は不整円形である。深さは25cmで、断面形状はA-bである。1604は小型丸底壺になり、時期は古・前・Ⅱになる。(小林)

土壙77 (第399・456図)

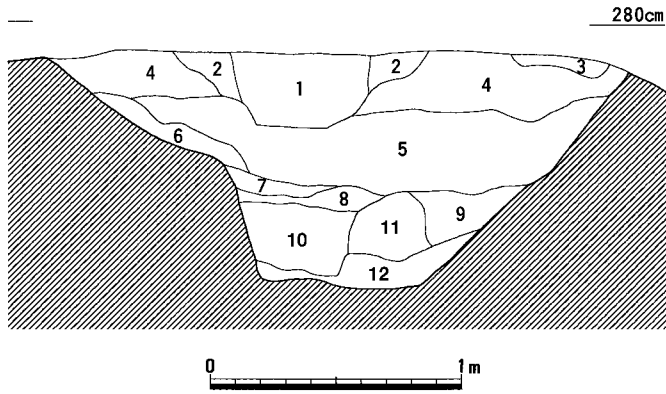
土壙77は3区南側端部に位置し、これはグリッド名でいうと13Qになる。北側には竪穴住居49が近接し、土壙の上面は竪穴住居83に切られている。土壙の規模は、長軸長91cmで、平面形状は円形である。確認面からの深さは63cmで、断面形状はA-bである。出土土器中、1605・1606は甕で、口縁部は「く」の字形になり、端部がやや内側を向く。1605は内側端部に面をもつ。

1607・1608は高杯の脚部で、屈曲部が稜線をもって折れ曲がる。1609はミニチュア土器である。これらは古・前・Ⅲの特徴をもつ。土壙の時期も同じである。(小林)

6 溝

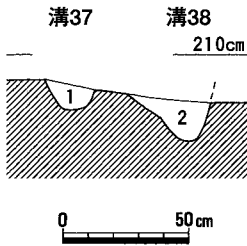
溝36 (第398・457図)

調査区の北端近く、3Q区から4P区にかけて検出された溝である。北東から南西に流下し、検出面での最大幅は2.7m、深さは最大で94cmを測り、断面形は逆台形を呈する。溝中央部は箱状に深く掘り込まれ、底面は平坦である。埋土の堆積状況は複雑で、何度かに分けて埋没したとみられる。遺物は土器小片のみで時期を決定しがたいが、古墳時代前期に属すると思われる。溝の用途としては用水路の可能性が考えられる。(岡本)



- 1 灰色砂質土 10Y4/1
- 2 黄灰色微砂質土 2.5Y5/1
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 灰黄色粘性微砂質土 2.5Y5/2
- 5 灰色粘質土 5Y5/1
- 6 灰色微砂質土 5Y5/1
- 7 オリーブ灰色粘質土 2.5GY5/
- 8 灰色粘性微砂質土 5Y5/1
- 9 灰色微砂質土 5Y6/1
- 10 灰色粘性微砂質土 N5/
- 11 灰オリーブ色粘質土 5Y6/2
(12をブロック状に含む)
- 12 暗灰色粘質土 N3/

第457図 溝36断面図 (1/30)



- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 褐灰色粘質土 7.5YR4/

第458図 溝37・38断面
図 (1/30)

溝37 (第398・458図)

7 P・Q区の境に位置し、北東から南西方向へ流走する。断面形はA-b形を呈し、深さは12cm。時期を特定するだけの遺物は出土していないが、検出面や溝の流走方向から古墳時代前期と考える。(米田)

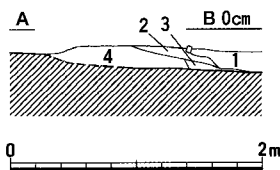
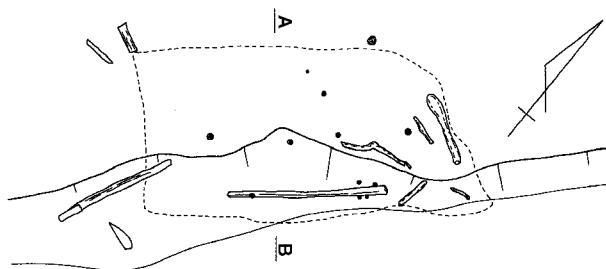
溝38 (第398・458図)

7 Q区の西側中央部を北東から南西方向へ流走し、溝37と並走する。断面形はA-b形を呈し、深さは15cmである。溝の南西側では南東方向へ走る溝へ分岐する。時期は溝37と同様に古墳時代前期か。(米田)

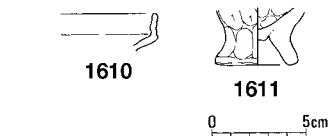
7 貝塚

貝塚5 (第398・459図)

河道1の右岸の海拔マイナス10cmで約280×140cmの範囲で貝の散布を確認した。貝層上面の西の陸側には杭が打たれ、東の川側にも杭と棒状の角材が横に組まれたような状況で検出された。このうち横木は第2層の貝層上面に置かれており、貝塚の区画と直接の関連はなく、杭も貝層に打ち込まれることから、この施設は貝塚形成当初からの施設ではなく、形成途中か形成後の施設と判断される。



- 1 オリーブ灰色粘性微砂 2.5GY5/1
- 2 混土貝層 貝密含
- 3 灰色粗砂礫層 N5/6
- 4 灰色粘質土 5Y4/1



第459図 貝塚5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

遺物は、貝層中から出土した口縁部に6条の櫛描き沈線がある土師器甕1610と製塩土器1611のみである。貝類にはヤマトシジミ・ハイガイなどがある。

時期は、古・前期頃と推察される。

(杉山)

第7節 古墳時代中期の遺構・遺物

1 古墳時代中期の概要

古墳時代中期の検出した遺構は、竪穴住居21軒、井戸4基、土壙4基、溝1条、河道1条などで、引き続き河道の両岸に集落は展開している。古・中・Iの遺構数は多く、遺構に伴う土器の量も多いことから、当該期の編年研究の視点から言えば、資料の増加という点において重要であると考えられる。

古・中・Iには河道の北岸において小型丸底壺や手捏ね土器の完形品を多く出土する土器溜まり1を検出している。土器溜まり1については、弥生時代後期の土器溜まりと同様に、川岸で何らかの祭祀が行われていたものと考えられるであろう。注目される遺物としては、井戸8で高杯の脚部をふいごの羽口に転用しているものが出土している。竪穴住居66でもふいごの羽口が、また遺構に伴わないものの鉄滓も出土していることから、周辺で鉄関連の遺構が存在した可能性が考えられる。竪穴住居ではカマドを造り付けたものがみられるようになり、カマドを付設する竪穴住居としては古相のものであるといえる。

古・中・IIの竪穴住居には、一般に見られるカマドの他にカマドの煙道を壁際に沿わせる、いわゆる「L」字形の煙道をもつ構造のもの、カマドを住居のコーナー部分に造り付けるものなどがある。今回の調査で「L」字形の煙道をもつカマドを付設する竪穴住居を3軒検出しているが、岡山県下では山陽町の門前池東方遺跡に次いで、2遺跡目の検出例になるものであった。(時實)

2 竪穴住居

竪穴住居50 (第398・460図)

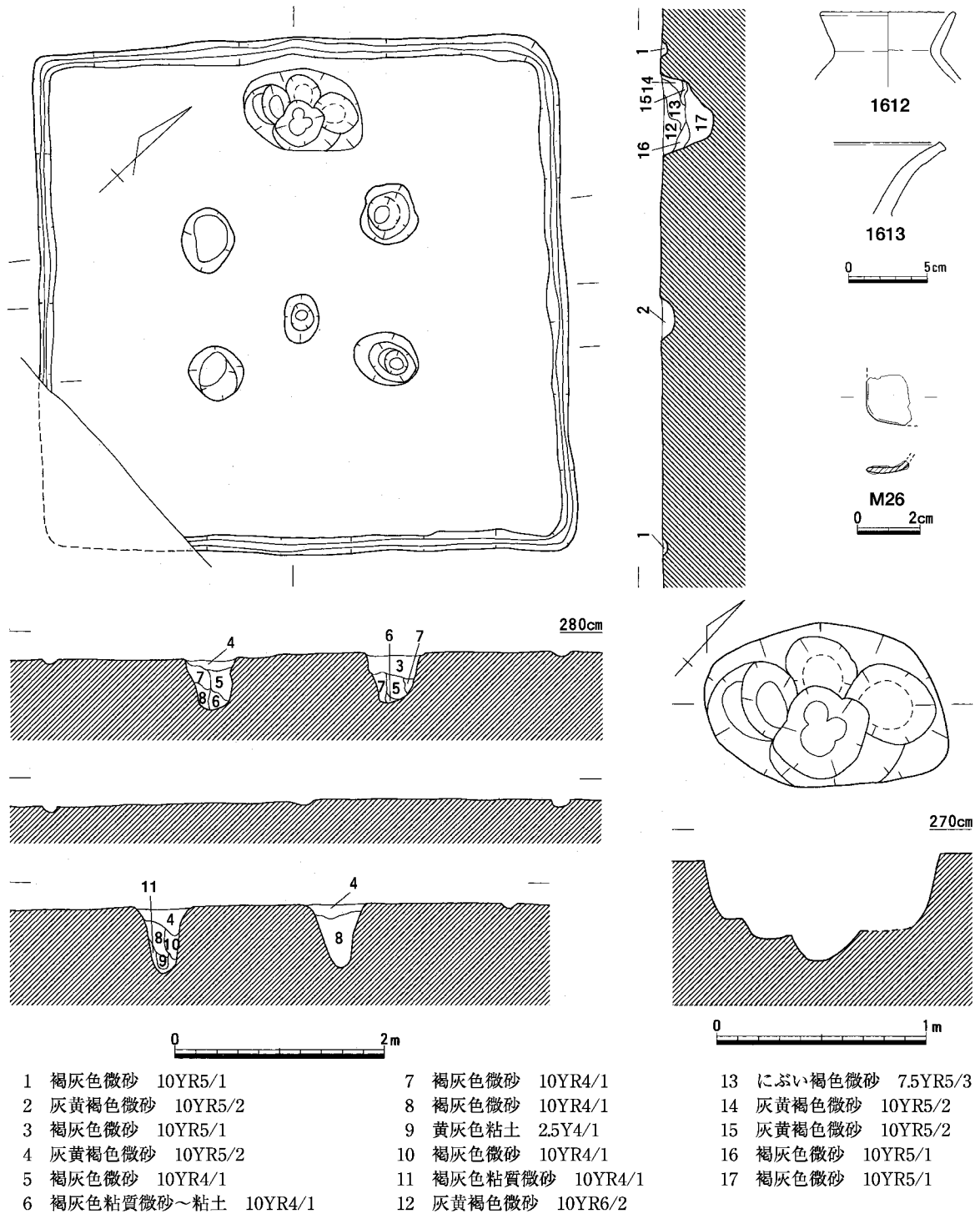
5Q区南東端に位置する。南隅の一部は調査区端の側溝にかかったため検出できなかった。検出面の最高所は標高260cmで、検出時にはすでに埋土と貼り床は残っていなかったものと思われる。

住居内には壁体溝、土壙1基と柱穴が4本、中央穴1基を検出した。壁体溝の深さは検出面から2～3cmである。土壙は底面に円形の凹凸が認められる。中央穴は柱穴に対して浅く、埋土に炭・土器片を少量含んでいるが、熱を受けた部分は確認できない。柱穴の内3本には、断面で柱痕(第5・6・8・9層)と柱の押しえ土(第7・8・10・11層)と考えられる層が観察できた。

出土した遺物は土器と鉄製品で、いずれもほとんど小片である。土器のうち図示できた1612は西の柱穴から、1613は東の柱穴から出土した。1612は甕、1613は壺である。図示していないが、住居内の土壙からも甕片がみられた。M26の鉄製品は板状の破片である。この住居の埋没時期は、出土した土器から古・中・Iに相当する。(氏平)

竪穴住居51 (第398・461図、図版35)

竪穴住居51は7P区の東側に位置する。平面形が方形を呈する竪穴住居で、大きさは420×367cmを測る。住居の周辺には壁体を設置したと考えられる溝が巡らされている。主柱穴は2本であり、径40～50cm、深さは検出面からの深さで75～80cmを測る。柱穴には土層観察の結果、柱痕跡がみられ、これを手がかりに掘り進めた結果、両者とも、柱穴の底に木製の柱が残存していることがわかった。柱は



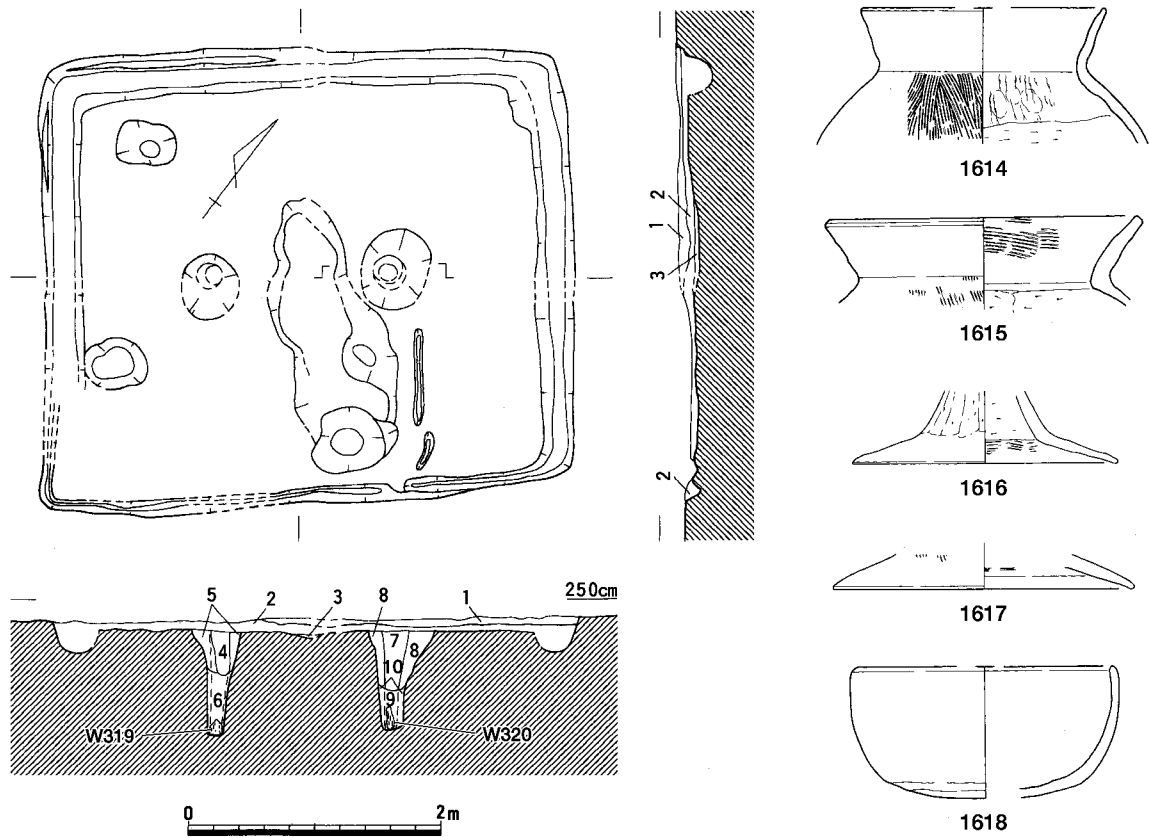
第460図 竪穴住居50 (1/60)・土壌 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

両者とも底面を工具状のもので削り平坦に仕上げていた。また、西側から出土した木材には樹皮が残されており、柱には樹皮を残した木材を利用していた可能性が高い。この柱は樹種鑑定の結果、W319でクヌギ節、W320でアカガシ垂属との報告を受けている。また、この竪穴住居51では2本の支柱穴間は周辺にくらべ若干低くなっており、南側に住居内の区画を示すかのような細い溝も検出された。また、竪穴住居の南辺中央部付近で、土壌が1基検出されている。住居内からは、土師器が出土している。いずれも破片である。1614・1615は「く」の字形の甕である。1616・1617は高杯の脚裾部であ

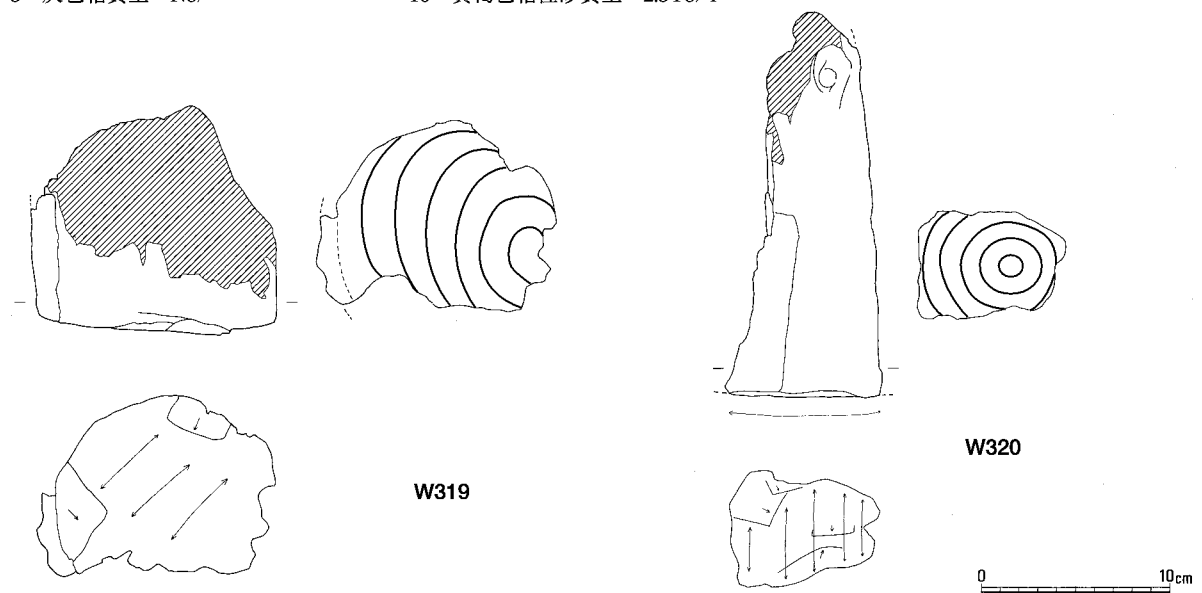
る。1618は鉢である。

これらの出土遺物から竪穴住居51は古・中・Iに比定できる。

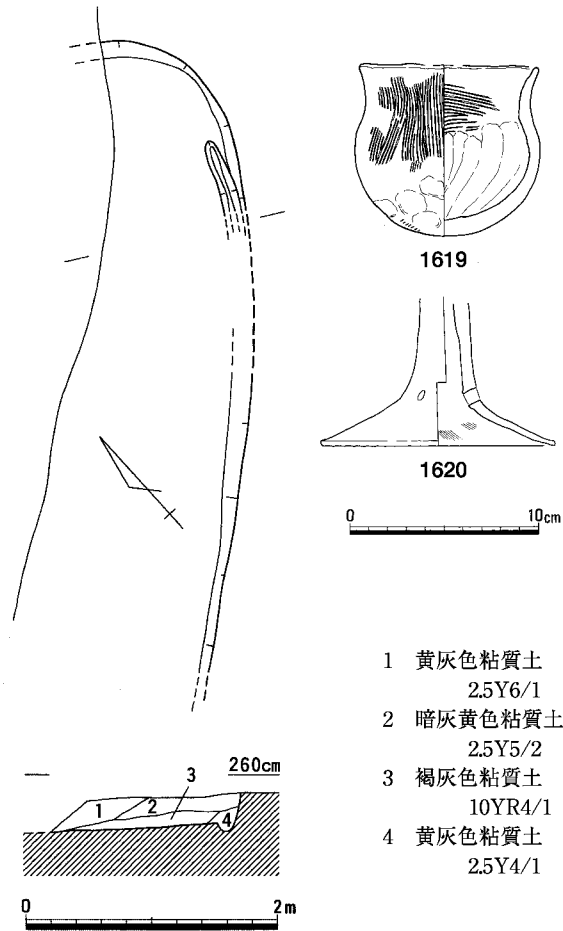
(金田)



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 にぶい橙色微砂 7.5YR7/4 | 6 にぶい黄橙色微砂 10YR6/4 |
| 2 褐灰色微砂 10YR5/1 | 7 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 |
| 3 にぶい褐色微砂 7.5YR5/3 | 8 灰色粘質土 N5/ |
| 4 褐灰色微砂 10YR4/1 | 9 暗灰黄色砂質土 2.5Y5/2 |
| 5 灰色粘質土 N5/ | 10 黄褐色粘性砂質土 2.5Y5/4 |



第461図 竪穴住居51 (1/60)・出土遺物 (1/4)



- 1 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 2 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 黄灰色粘質土 2.5Y4/1

第462図 竪穴住居52 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居52 (第399・462図)

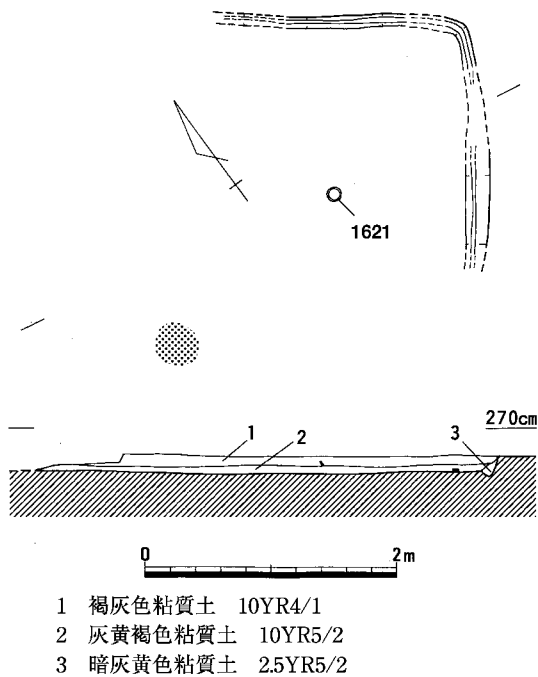
10Q区のほぼ中央で検出された。南隣の竪穴住居53と重複し、本住居のほうが新しいと思われる。大部分は古墳時代後期の河道2によって破壊されていたため、北東隅を含む東端部が残存していたのみで、全体の規模は不明である。残存部の形状からは方形の竪穴住居が想定されるが、床面や壁体溝を明瞭に検出することができず、住居であるかどうか自体も断定はできない。検出面から床面までの深さは約25cm、床面の海拔高は215cm前後を測り、西側に向かって緩く傾斜している。北東部の壁際には部分的に深さ10cm弱の溝状のくぼみがあり、壁体溝の可能性もある。柱穴については確認できなかった。

埋土中から土器が少量出土している。小型丸底壺1619の口縁部は短く、体部との境界は曖昧である。高杯1620は、脚柱部と脚裾部との境界に3個の円孔を有する。

この住居の時期は、以上の出土遺物から判断して古・中・Ⅱに比定される。(岡本)

竪穴住居53 (第399・463図)

10Q区のほぼ中央で検出された方形の竪穴住居である。北隣の竪穴住居52より古いと思われる。削平が著しく、北東隅の一部が残存するのみで全体の規模は不明である。検出面からの深さ約15cmを測り、床面の海拔高は約235cmでほぼ平坦であった。壁際には深さ約10cmの壁体溝が巡る。伴う柱穴は検出できていない。なお、南西部床面の一部に赤褐色を呈する円形の焼土面が認められた。遺物として、完形の須恵器杯蓋1621、土師器鉢1622が出土している。以上の遺物からみて、住居の時期は古・中・Ⅱに比定される。(岡本)



- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
- 3 暗灰黄色粘質土 2.5YR5/2

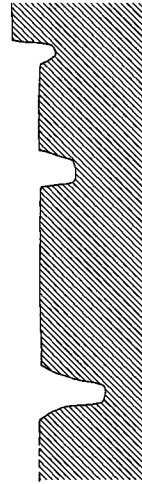
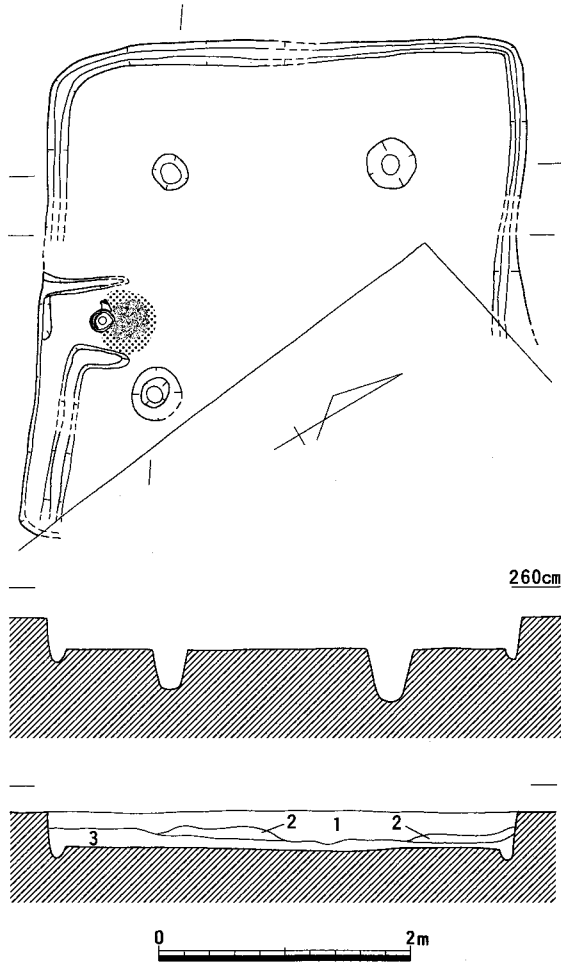
第463図 竪穴住居53 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居54（第399・464図、図版36）

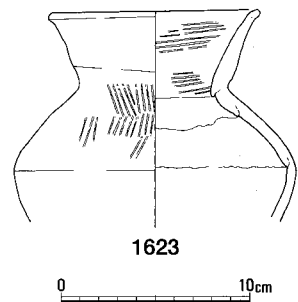
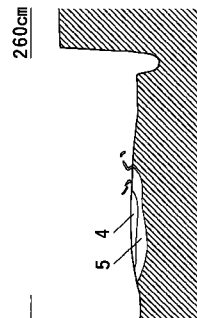
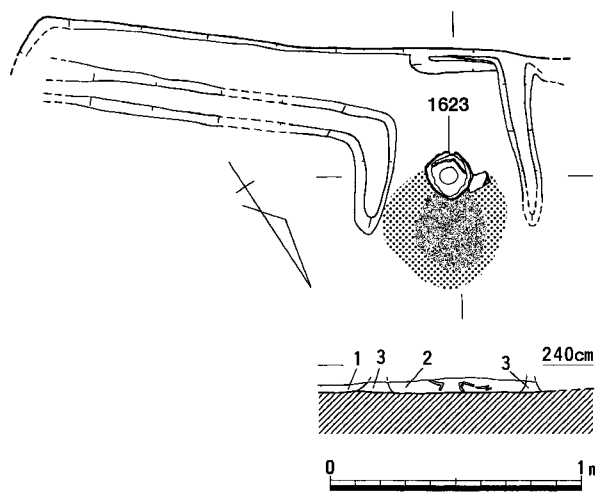
10Q区の南西部に位置する。住居東側は攪乱のために確認できなかったが、平面形は方形を呈す。規模は長軸393cm、短軸342cmを測る。深さは約30cm。床面積は14.24㎡と復元できる。主軸はN-55°-W。主柱穴は想定される4本のうち、3本検出した。壁体溝は住居の西半部で確認したが、南壁中央部で確実に途切れている。住居

覆土中からは特筆すべき遺物は出土していない。

南壁中央部から南東隅角部にかけては「L」字状の煙道をもつカマドを検出した。カマドは造り付けで、第3層を貼り付けて構築されている。検出面は床面より10cm高く、煙道の下部構造を確認した状況である。カマド・煙道内の埋土である第2層は炭化物や焼土塊を多く含む。燃焼部は南壁中央部に配置され、幅は52cm、燃焼部から奥壁までの奥行きは約70cmである。燃焼部奥壁・煙道南壁は住居壁に踏襲されている。袖部の東側は「L」字状に折れ曲がり、西



- 1 灰黄褐色微砂質土 10YR5/2
- 2 灰黄褐色微砂質土 2.5Y5/2
- 3 褐灰色微砂質土 10YR4/1



- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 暗褐色粘土 10YR3/3
- 3 にぶい黄褐色粘質細砂 10Y5/3
- 4 焼土面 橙色 5YR6/8
- 5 焼土面 明赤褐色 5YR5/6

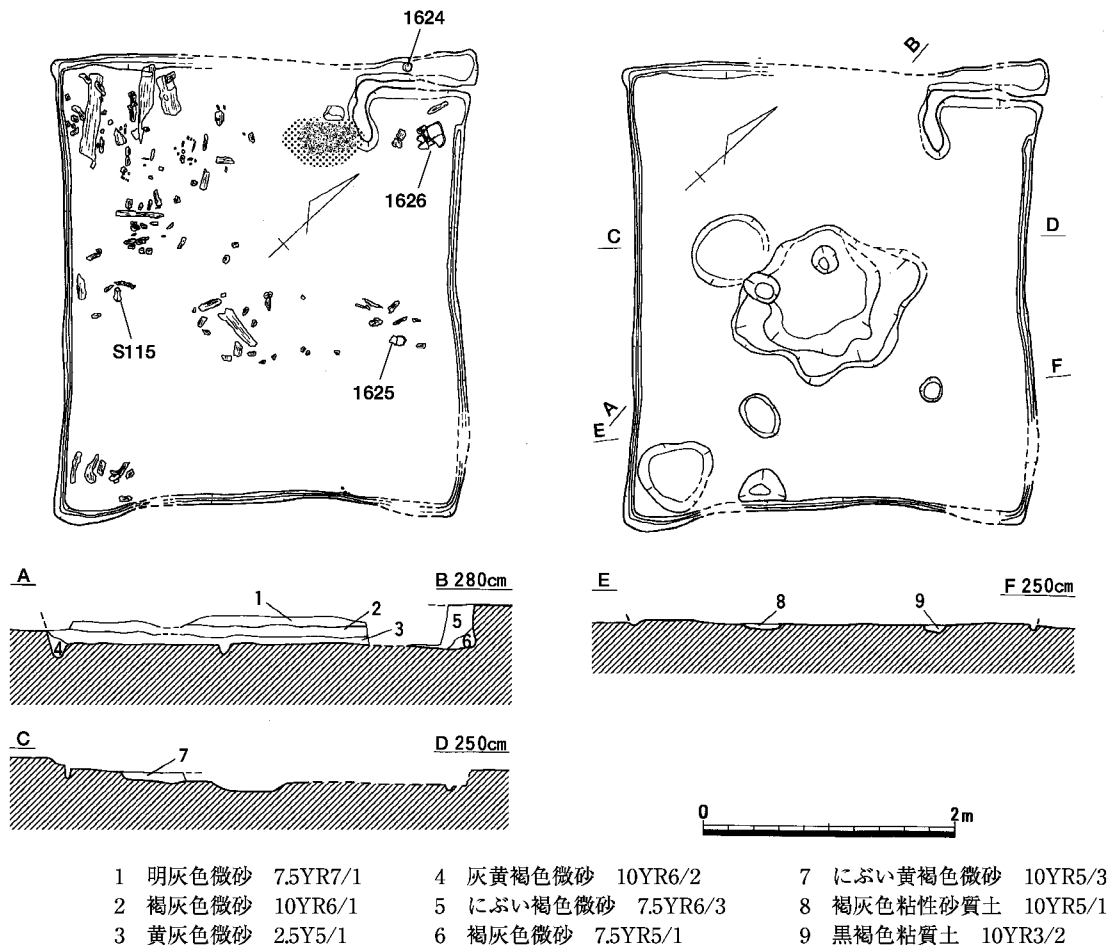
第464図 竪穴住居54 (1/60)・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)

側は南壁から直線的に延びる。焚き口付近には径50cm程度の被熱面が認められ、中央部は被熱が強く硬化している。また被熱は床下6cmまで及ぶ。燃焼部中央には土師器壺1623の上半部が口縁部を下にして据えられた状態で出土し、土器内部も被熱面と同様の痕跡が認められたことから、支柱に転用されていた可能性が高い。煙道は燃焼部から南壁東半に沿うように構築されている。煙道の幅は、燃焼部側で22cm、煙出し部で14cmを測り、燃焼部から煙出し部に向かうほど狭くなる。

出土遺物が乏しいが、住居の機能していた時期は1623から古・中・Ⅱに比定される。 (米田)

竪穴住居55 (第399・465・466図、図版37)

竪穴住居55は11Q区に位置する。竪穴住居は調査前に存在した建物の基礎で上面が掘削されており、残存状況は必ずしもよいとはいえないが、ほぼ全体を把握することができた。竪穴住居55は平面形が方形を呈する住居で、370×321cmの大きさを測り、周囲を壁体溝がめぐっている。竪穴住居の主軸はN-45°-Wである。住居はいわゆる焼失住居と考えられ、住居内に炭化した木材が比較的まとまって出土した。特に住居の北西隅では良好な状態で炭化材が出土した。この部分では、住居の北辺から南の方向に部材が平行に倒れた状態が観察でき、火災時に壁体が住居の内側に倒れこんできた様子を読み取ることが可能であろう。この付近には炭化材やそれに伴う炭が散乱した状態にあったが、その中に混じって骨片をいくつか検出した。骨は残存状況がきわめて脆弱であったため取り上げるにも困難な状態で、同定にまでは至らなかった。

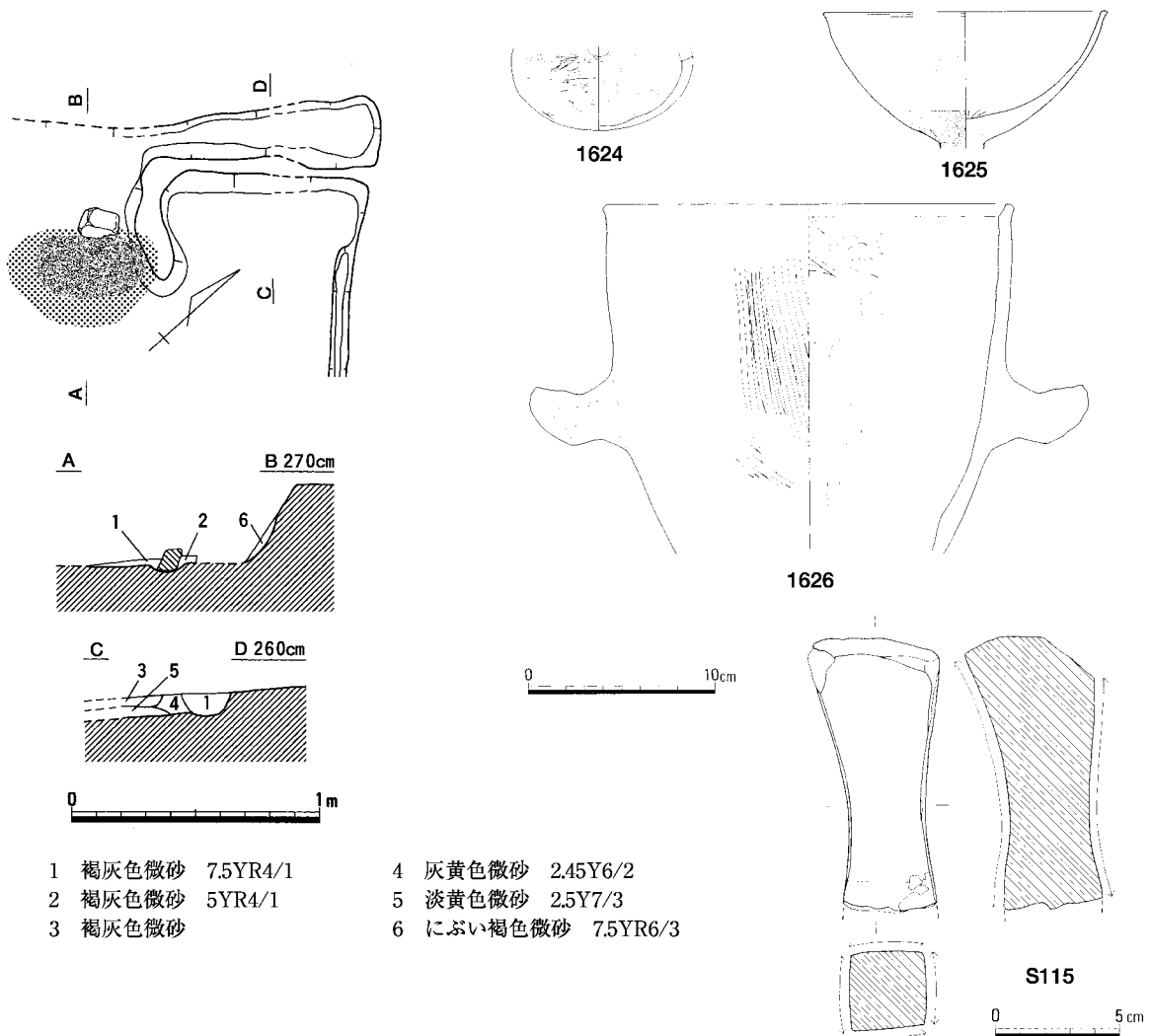


第465図 竪穴住居55 (1/60)

竪穴住居55の北隅にはカマドが存在していた。カマドは天井の部分が失われていたが、煙道が焚口から直角に折れ曲がるいわゆる「L」字カマドと称されるものであった。残念ながらカマドの右の袖部が建物の基礎により失われていたが、長さ60cm、幅は少なくとも50cm以上を測るものであろう。カマド周辺には炭や焼土が散乱しており、1624・1626にみられる土師器が残存していた。また、カマド内には石製の支柱が残されていた。煙道はこのカマドから北東方向へ直角に折れ曲がっており、煙道は長さ95cm、最大幅25cmを測る。煙道内はカマドにくらべて、被熱の影響は少なかったようである。煙道に設けた土層断面観察の結果、煙道の外側はいわゆる地山であったが、内側については土を盛り上げてつくられていた。なお、竪穴住居の主柱穴は精査したが、住居内にいくつかピットがみられたが、柱穴と断定するには至らなかった。また、住居の中央部は若干くぼんでいた。

竪穴住居55内からは若干の土師器や石器が出土したが、あまり多いとはいえず、土器はいずれも破片であり、完全に復元できるものはなかった。1624は土師器の甕である。煙道の内部から出土した。1625は高杯の杯部である。杯と脚部の間にハケメが観察できる。1626は甑である。外面には粗いハケメが施されている。カマド付近で出土した。S115は砥石である。一部欠損しているが、残存長11cmを測り、流紋岩製である。

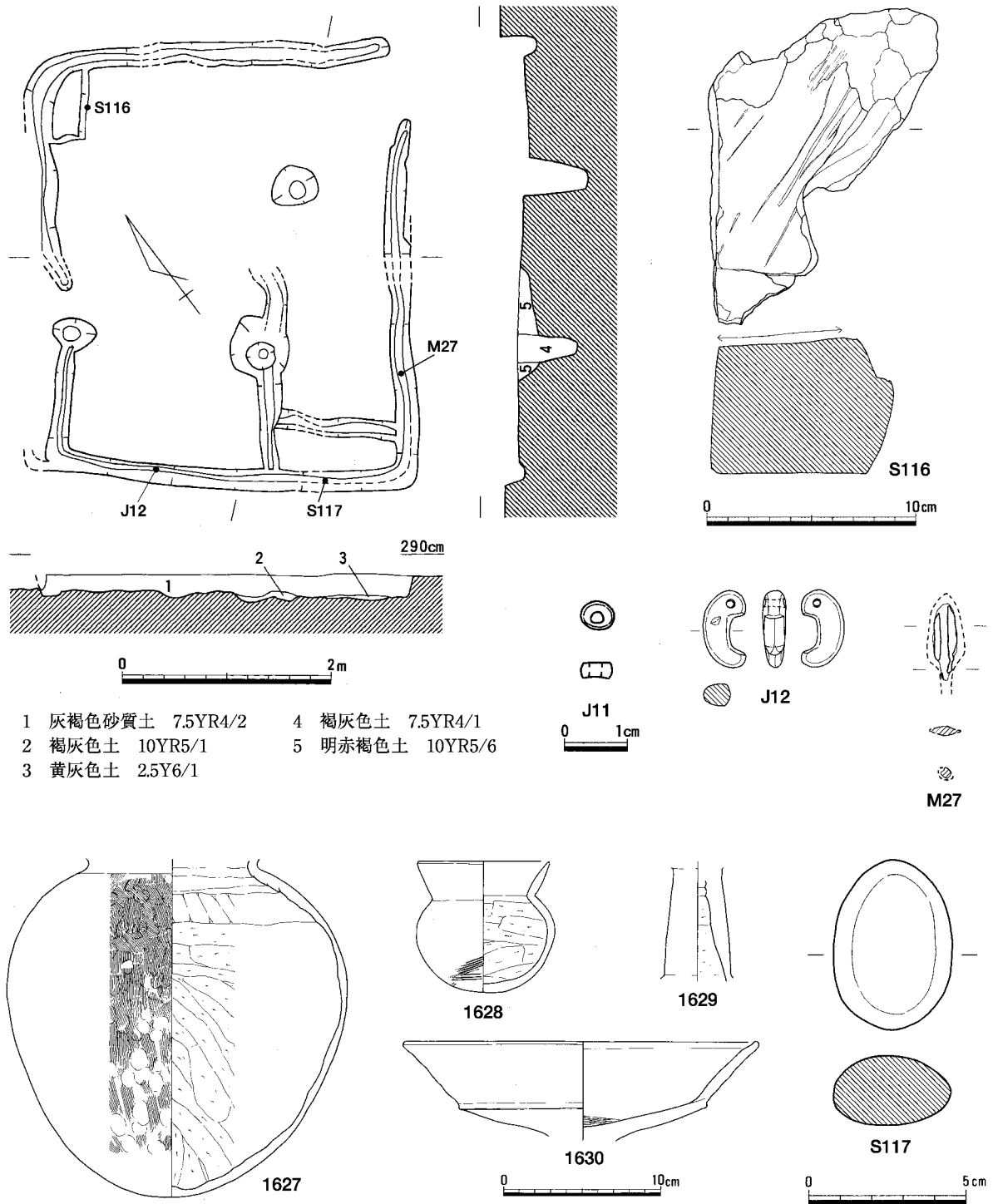
これらの出土遺物からこの竪穴住居55は古・中・Ⅱに営まれたものであると考えられる。（金田）



第466図 竪穴住居55カマド (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居56 (第399・467図、図版37)

11Q区に位置し、竪穴住居57に切られている。平面は主軸をN-38°-Wにとり、430×365cmの方形を呈し、床面積は13.99㎡を測る。壁面の周囲には壁体溝が巡り、海拔高240cmを測る床面には、南西部に間仕切り溝と機能不明の溝があり、北隅には高まり、中央付近に主柱穴2本がある。北西辺のピットの位置で壁体溝が切れているが、被熱面が確認されないことから、カマドは存在していないと考えられるが、床面にも被熱面は存在しない。図示した土器はすべて土師器で、1627が甕で、外面は



第467図 竪穴住居56 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/1・1/4・1/2)

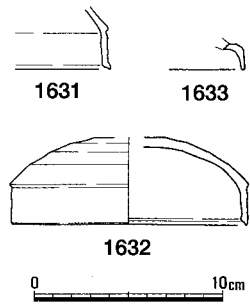
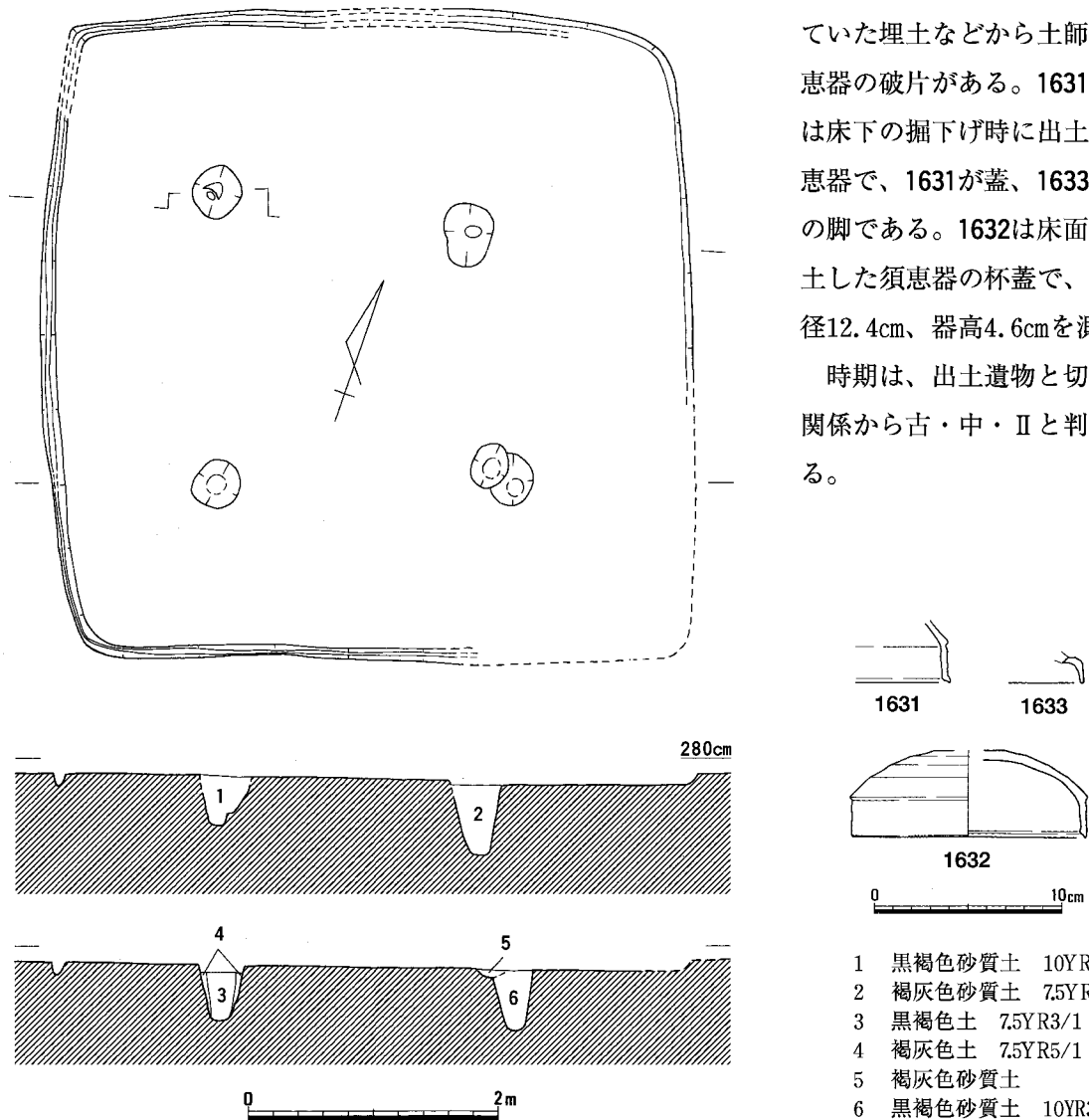
ハケの後一部ナデを行う。1628が小型丸底壺で外底部にハケがみられる。1629・1630は高杯で、1629の柱部外面はナデ、内面はヘラケズリを施す。1630は内底部にハケメがみられる以外はナデを行う。J11はガラス小玉で埋土中からの出土である。J12は滑石製の勾玉で南西辺中央の壁体溝中、S117も南西辺南隅近くの壁体溝中から出土した。S117のたまご石は加工はしていない自然の石英だが、出土状況から玉として扱った。M27の銅鏃は南東辺の壁体溝中で、切っ先を上にして刃部が壁体溝と直交するようにして出土した。S116は流紋岩製の砥石で、北隅にある高まりの東辺に貼り付き、床面直上から出土した。時期は、出土土器から、古・中・Iと判断される。(杉山)

竪穴住居57 (第399・468図、図版38)

11Q区に位置し、竪穴住居56を切り、竪穴住居75に切られる。埋土はほとんど削平を受けており、壁体溝と支柱穴4本、一部床面を確認したのみである。平面は主軸をN-22°-Eにとり、521×512cmの方形を呈し、床面海拔高は約260cmを測る。壁体溝は東側では確認できなかったが、床面積は推定で24.07㎡である。また、壁体溝の内側では被熱面は確認できていない。

出土遺物には、わずかに残っていた埋土などから土師器と須恵器の破片がある。1631・1633は床下の掘下げ時に出土した須恵器で、1631が蓋、1633が高杯の脚である。1632は床面上で出土した須恵器の杯蓋で、推定口径12.4cm、器高4.6cmを測る。

時期は、出土遺物と切り合い関係から古・中・IIと判断される。(杉山)

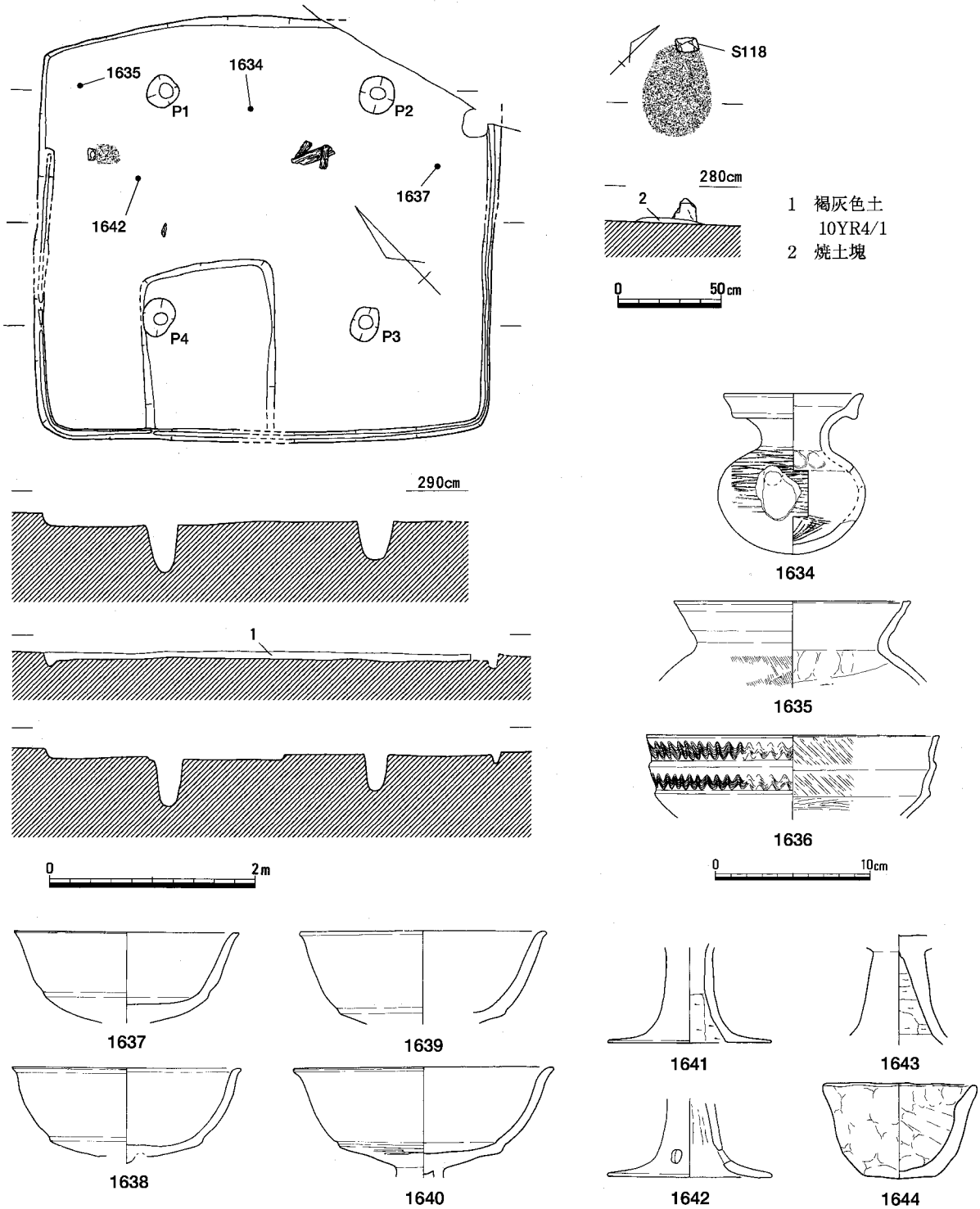


- 1 黒褐色砂質土 10YR3/2
- 2 褐灰色砂質土 7.5YR4/1
- 3 黒褐色土 7.5YR3/1
- 4 褐灰色土 7.5YR5/1
- 5 褐灰色砂質土
- 6 黒褐色砂質土 10YR3/2

第468図 竪穴住居57 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居58（第399・469・470図、図版38）

11Q区に位置し、竪穴住居59を切っている。平面は主軸をN-41°-Wにとり、446×410cmの方形を呈し、床面海拔高は約127cmを測る。床面の北西辺から南東辺の南半には壁体溝が巡り、南西辺の中央は一段低くなっている。床面の北西辺から約50cm内側にはS118の支柱石が立ち、その南側に被熱面がみられる。支柱石は床面に置かれただけで掘り方はない。また、支柱穴は4本で、P2近くに炭化材がまとまってみられる。



第469図 竪穴住居58 (1/60)・火処 (1/30)・出土遺物① (1/4)

出土した土器は土師器のみで、1634・1635・1637・1642・1643は床面で、1636は壁体溝から、1644は床下から出土した。1634はP1とP2の間で横転して出土した壺で、口径8.8cm、器高10.4cmを測り、体部には焼成後の穿孔がある。1637の高杯は外面にハケメ状工具による波状文を施し、内面はヘラミガキを行う。1637～1642は高杯で、杯部は内外ともナデで、1640の外底部にヘラミガキがみられる。脚部も外面はナデで、内面は1642にシボリ痕がみられ、1641・1643はヘラケズリがみられる。

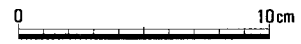
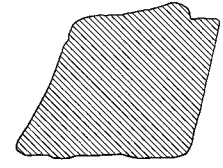
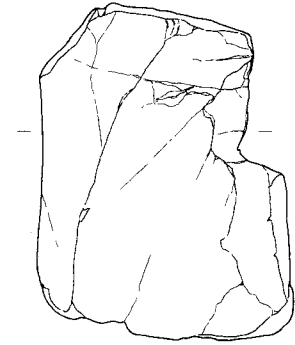
時期は、出土遺物から古・中・Iと判断される。(杉山)

竪穴住居59 (第399・471図、図版38)

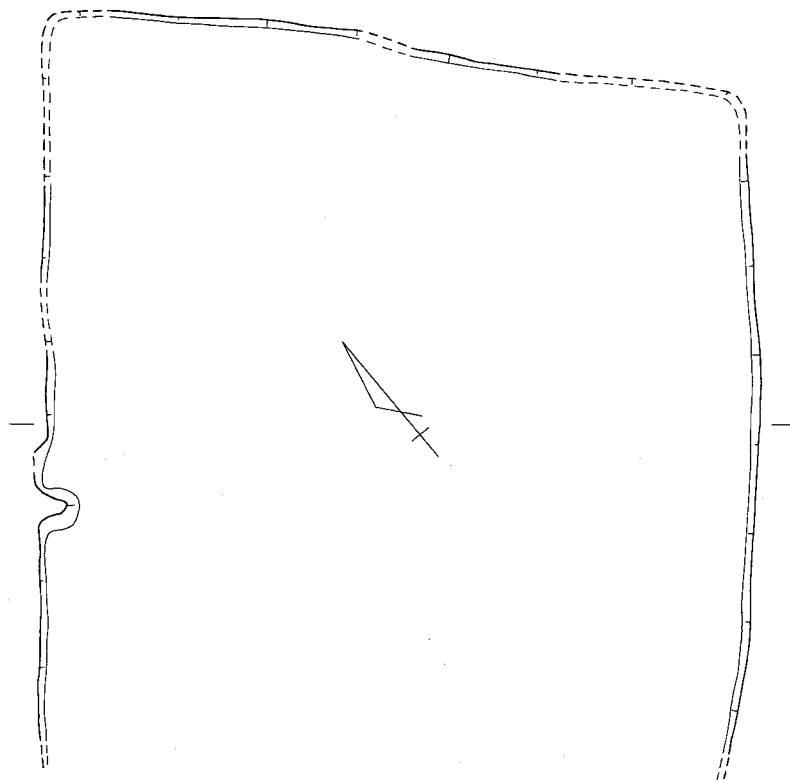
12Q区で調査区西端に位置する。平面は主軸をN-41°-Wにとり、577×約567cmの方形を呈し、床面海拔高は約265cmを測る。北西辺のほぼ中央に被熱面と袖状の張り出しがあり、カマドの痕跡と判断される。

出土遺物は少なく、1645の須恵器蓋、1646の須恵器高杯、1647の須恵器、1648の土師器甕がある。

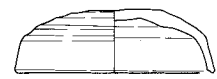
時期は、出土遺物から古・中・IIと判断される。(杉山)



第470図 竪穴住居58出土遺物② (1/3)



第471図 竪穴住居59 (1/60)・出土遺物 (1/4)



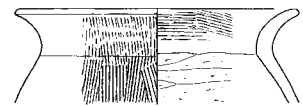
1645



1646



1647

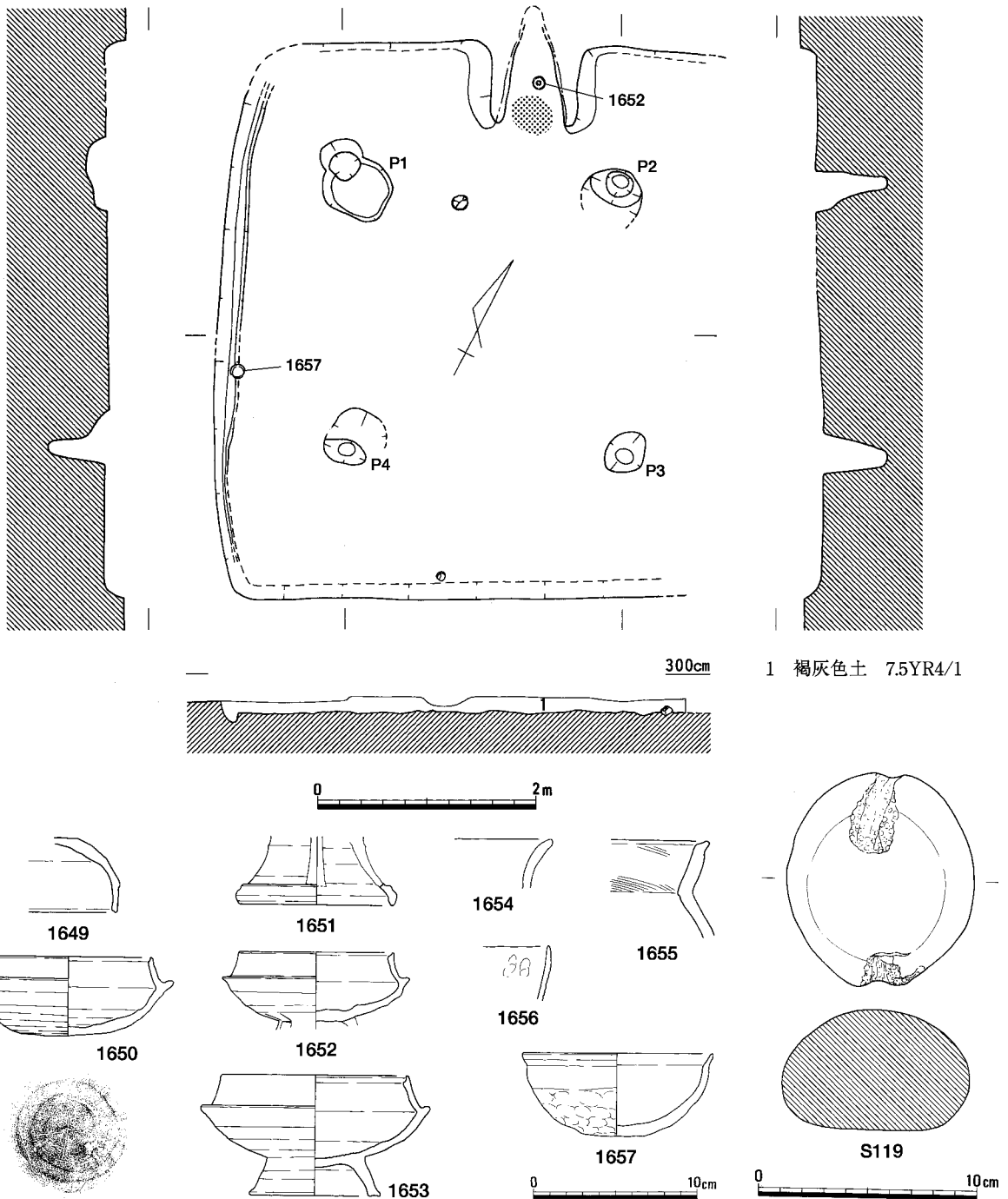


1648



竪穴住居60 (第399・472・473図、図版39)

11R区の調査区東端に位置する。平面は主軸をN-24°-Eにとり、南北509cmで、床面海拔高は約265cmを測る。床面には西辺でのみ壁体溝が確認でき、北辺中央にカマドが付く。支柱穴は4本で、P3以外の柱穴は2基が切り合っており、柱の抜き取り痕と考えられる。カマドは、煙道部先端を新しい時期のピットによって壊されている。焚き口から煙道にかけて段は有さず、緩やかな傾斜を持つ。燃焼部は袖の先端部付近にあり、この後ろに脚が欠損した有蓋高杯1652が倒立して置かれている。これは、支脚として使用された可能性があるが、須恵器には明瞭な被熱痕が看取されないことから別の

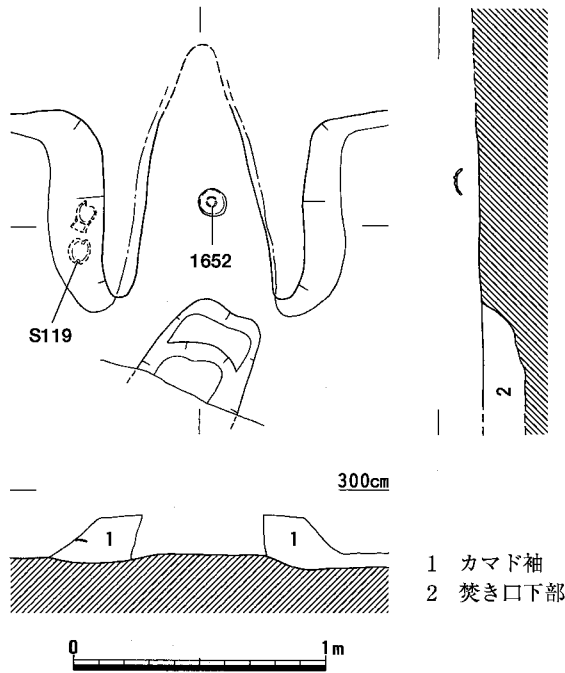


第472図 竪穴住居60 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

機能も考慮する必要があるかもしれない。また、焚き口のほぼ下部には構築時に掘られた土壌がある。

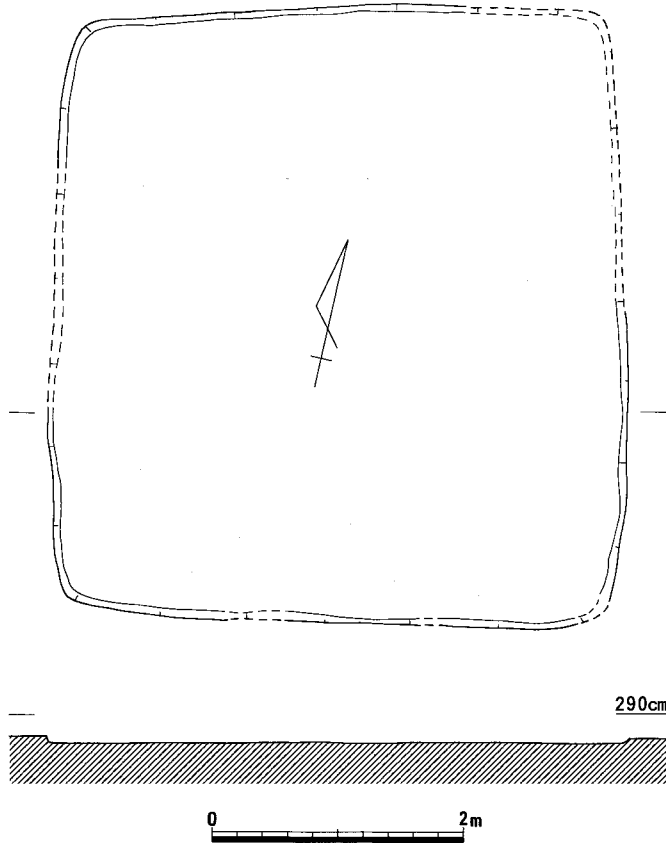
遺物は、1649・1650・1653の須恵器とS119の石錘がカマド袖の中から出土したが、須恵器は破砕した状態であった。1651・1652・1654・1655がカマド内から、1657が壁体溝上で上向きになって出土した。1649は須恵器杯蓋、1650は須恵器杯身で底部にヘラ記号がある。1651は須恵器高杯、1652・1653は須恵器有蓋高杯、1654・1655は土師器甕、1656は製塩土器である。1657は土師器鉢で、体部外面下半に指オサエが明瞭にみられるが、内面は丁寧にナデを行う。S119は有溝石錘で、花崗岩製である。

時期は、出土遺物から古・中・Ⅱと判断される。(杉山)



第473図 竪穴住居60カマド (1/30)

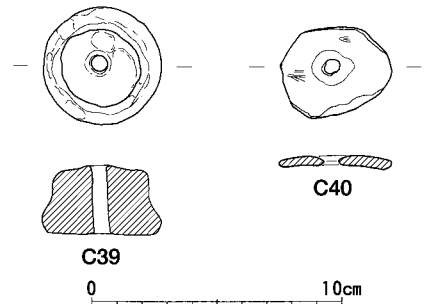
竪穴住居61 (第399・474・475図、図版39)



第474図 竪穴住居61 (1/60)・出土遺物① (1/3)

11R区に位置し、竪穴住居63と接する。平面は主軸をN-13°-Eにとり、487×461cmの方形で、床面海拔高は約270cm、床面積は19.83㎡を測る。床面には被熱痕はみられず、支柱穴も明確ではない。

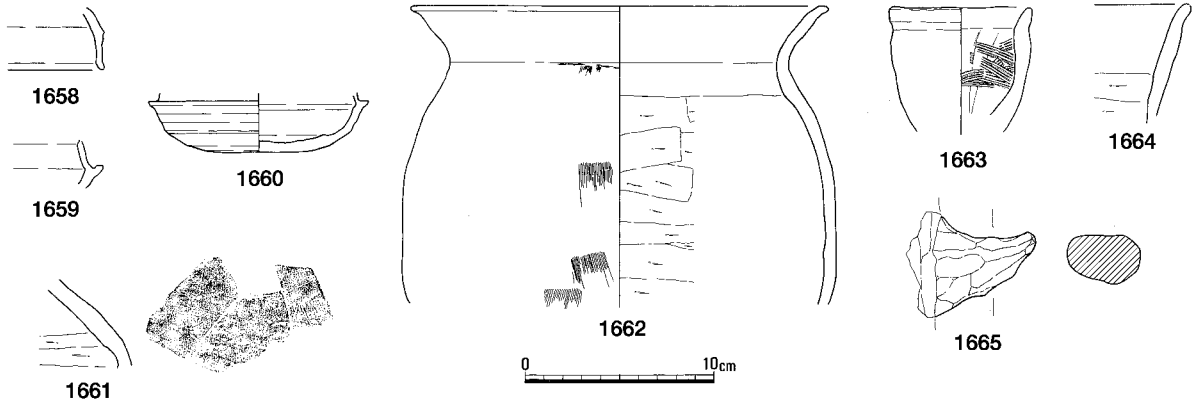
C39は土製紡錘車で、重量65.0g、C40は土師器片転用の紡錘車で重量7.1gである。1658は須恵器蓋、1659は床下出土の須恵器杯身、1660は須恵器杯身である。1661は住居近くで出土した土師器壺の肩部片で、外面に刺突と線刻がみられ



る。1662～1665は土師器で、1662はやや長胴の甕である。1663は住居近くで出土したミニチュアの甕で外面は指オサエとナデ、内面はナデの後ハケメを施す。1664・1665は埋土中出土の甕で1665の把手は、外面に面取り状にナデを施す。

時期は出土遺物から古・中・Ⅱと判断される。

(杉山)



第475図 竪穴住居61出土遺物② (1/4)

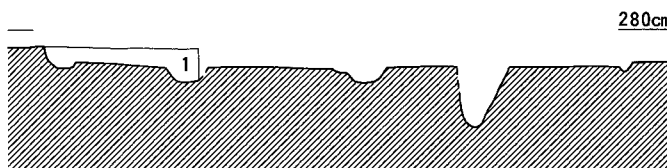
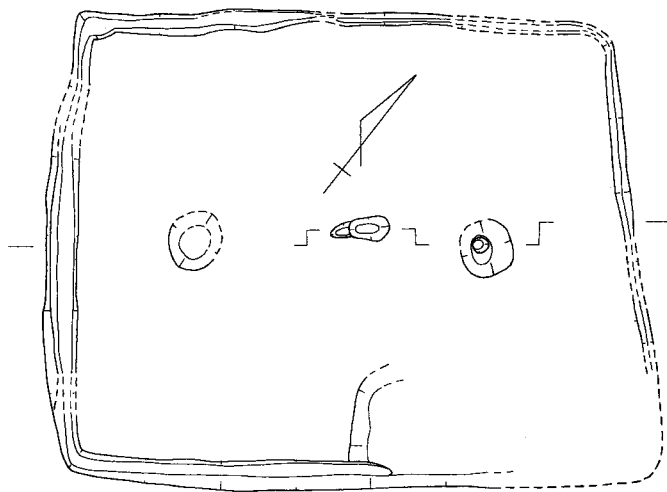
竪穴住居62 (第399・476図、図版40)

11R区に位置し、竪穴住居63に切られている。平面は主軸をN-52°-Eにとり、482×382cmの方形を呈し、床面海拔高は約255cmを測る。床面の中央に火処があり、それを挟んで2本の支柱穴がある。支柱穴は西側が非常に浅いが、他に該当する柱穴が存在しないので、本住居の柱と認定した。また、東隅が竪穴住居80によって切られて不明瞭だが、南東辺に方形土壙があり、壁体溝は四方を巡ると考えられる。

と考えられる。

遺物は小片の土器があるのみだが、方形土壙中から土師器甕1666が出土している。1666は口径約18cmに復元され、口縁端部は上面をナデにより平らに仕上げ、内面に凹線が巡り内側に肥厚したようになっている。

時期は、切り合い関係と出土遺物から古・中・Ⅰ頃と判断される。(杉山)



1 褐灰色土 10YR5/1



1666

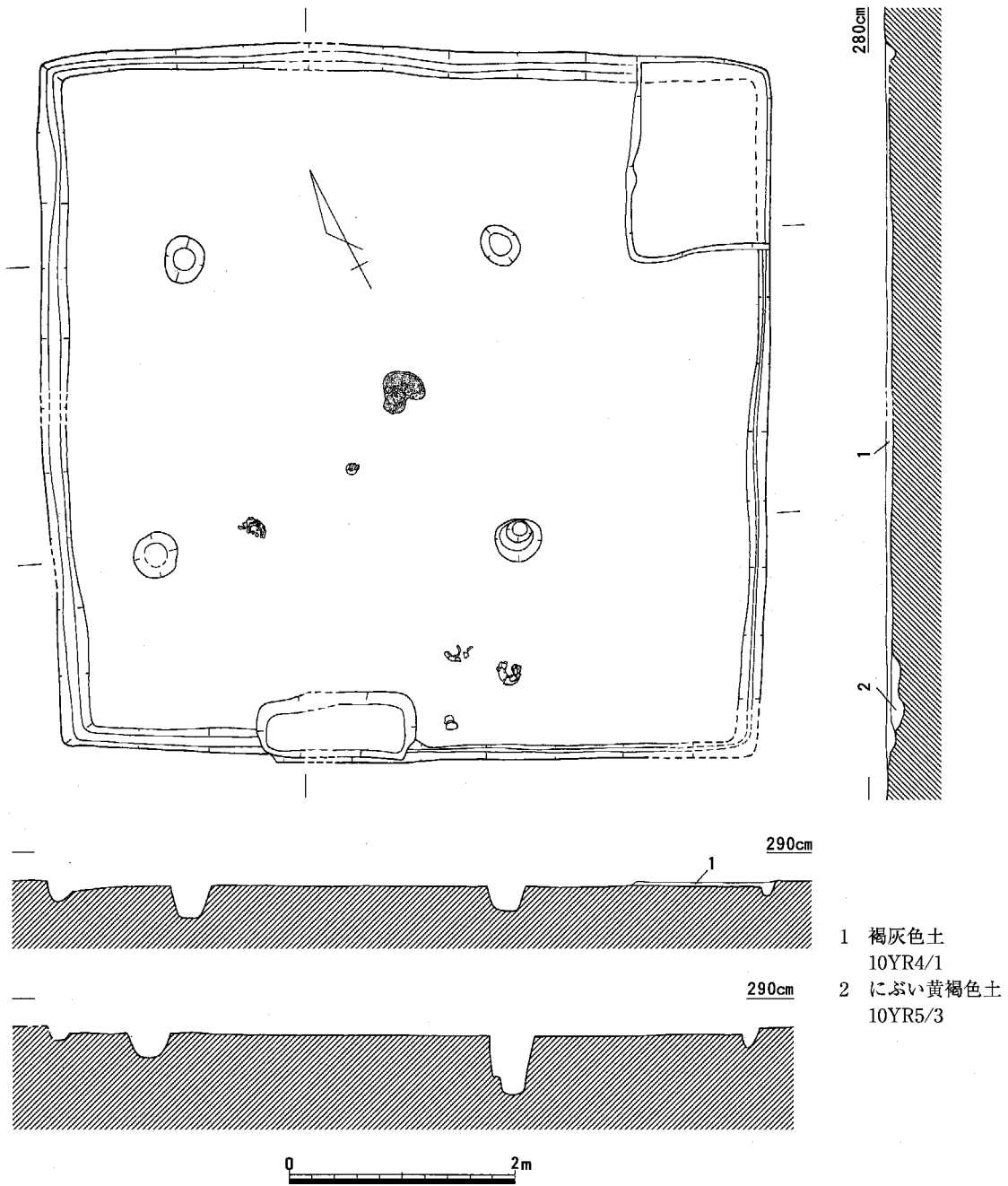


第476図 竪穴住居62 (1/60)・出土遺物 (1/4)

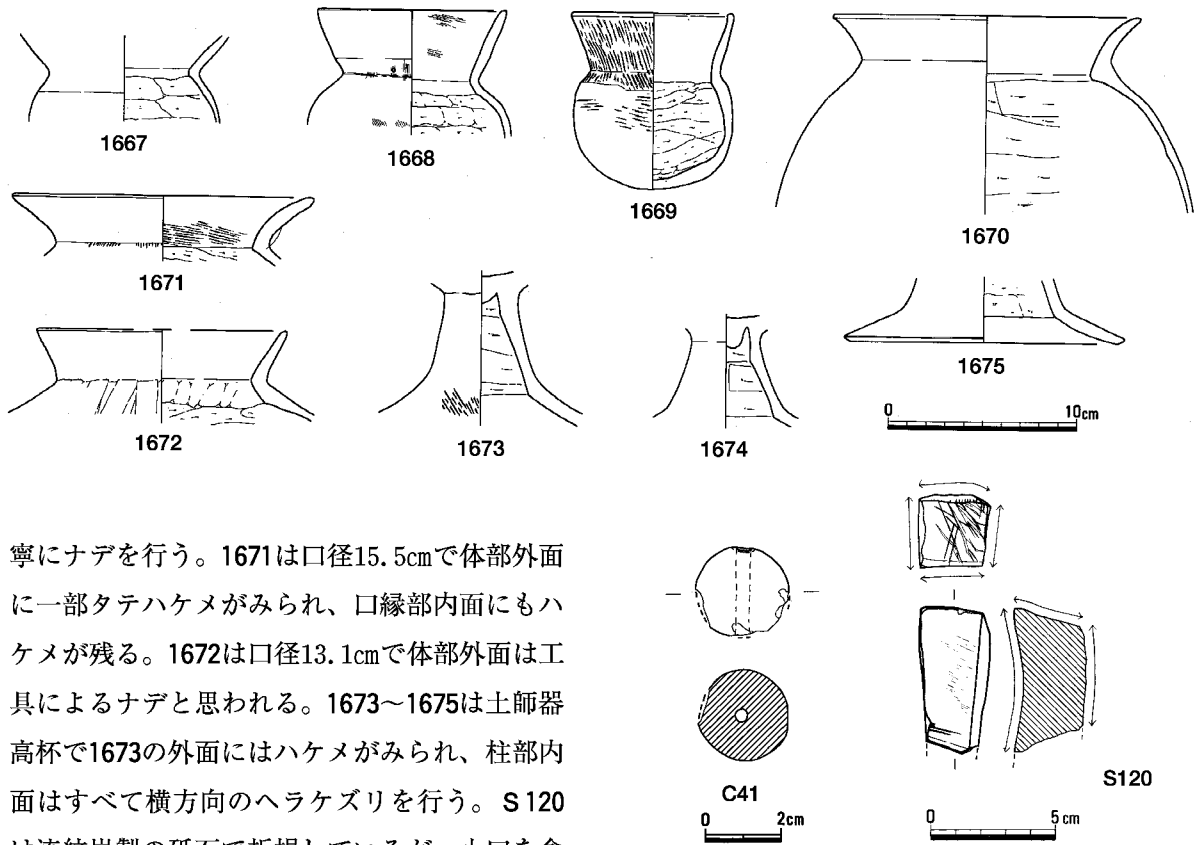
竪穴住居63（第399・477・478図、図版40）

11R区に位置し、竪穴住居62を切る。平面は主軸をN-59°-Eにとり、651×641cmの方形を呈し、床面海拔高は約260cm、床面積は36.34㎡を測る。支柱穴は4本で中央やや西よりにあり、その中心に非常に硬く被熱した面がある。また、東隅に床から約5cm高いベッド状の高まりがあるが、これは壁体溝の上に175×122cmの範囲に粘土を貼って造っており、壁際に幅5cm弱の板痕跡が確認された。南辺には42×59cmで深さ16cmの方形土壇がある。

出土遺物は床面付近の南半部で多くみられる。1667～1669は土師器小型丸底壺で、1667は外面ナデ、1668は口径9.9cmで外面ハケメの後ナデを行う。1669は口径8.4cm、器高9.4cmで外面はハケメで口縁部はハケメを残し、体部のみナデを行う。1670～1672は土師器甕で、1670は口径16.2cmの長胴で外面は丁



第477図 竪穴住居63 (1/60)



寧にナデを行う。1671は口径15.5cmで体部外面に一部タテハケメがみられ、口縁部内面にもハケメが残る。1672は口径13.1cmで体部外面は工具によるナデと思われる。1673~1675は土師器高杯で1673の外面にはハケメがみられ、柱部内面はすべて横方向のヘラケズリを行う。S120は流紋岩製の砥石で折損しているが、小口を含めて全面を使用しており、砥面に線状痕が明瞭に残る。C41は土製の玉で、現存重量13.7gである。

第478図 竪穴住居63出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

時期は、出土遺物から古・中・Ⅱと判断される。

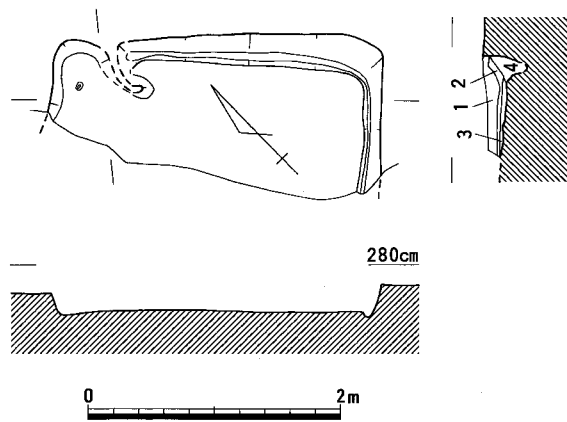
(杉山)

竪穴住居64 (第399・479・480図、図版40)

竪穴住居64は、3区の南側付近に位置する。これはグリッド名でいうと12Rになる。住居の南西側約2/3は攪乱をうけており、すでに存在しない。他の遺構との切り合い関係は、竪穴住居65に上半部を切られる形になる。現存する住居の長軸長は263cmで、平面形状は方形を呈していたものと思われる。住居の主軸はN-41°-Eになり、座標北から40~45°振れるグループに入る。

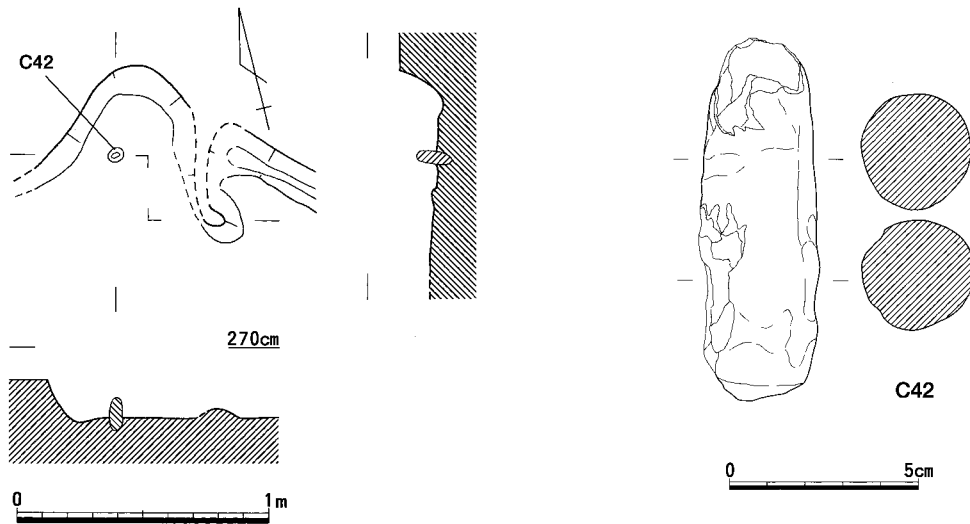
この住居は2つの特出点がある。1つは竪穴住居69と同じように、住居辺の隅にカマドをもつ点である。この住居では北側辺にカマドが存在し、竪穴住居69も同じである。このような位置にカマドがある例は、県内では他に岡山市高塚遺跡の竪穴住居153があげられる。高塚遺跡の例は、古・中・Ⅰの時期とされる。

2つ目は、カマドの中央部やや西側に土製の支柱が立てられていることである。こ



- 1 黒褐色土 10YR3/2
- 2 明黄褐色土 10YR7/6
- 3 黒褐色土 10YR3/1
- 4 におい黄褐色土 10YR6/

第479図 竪穴住居64 (1/60)



第480図 竪穴住居64カマド (1/30)・出土遺物 (1/2)

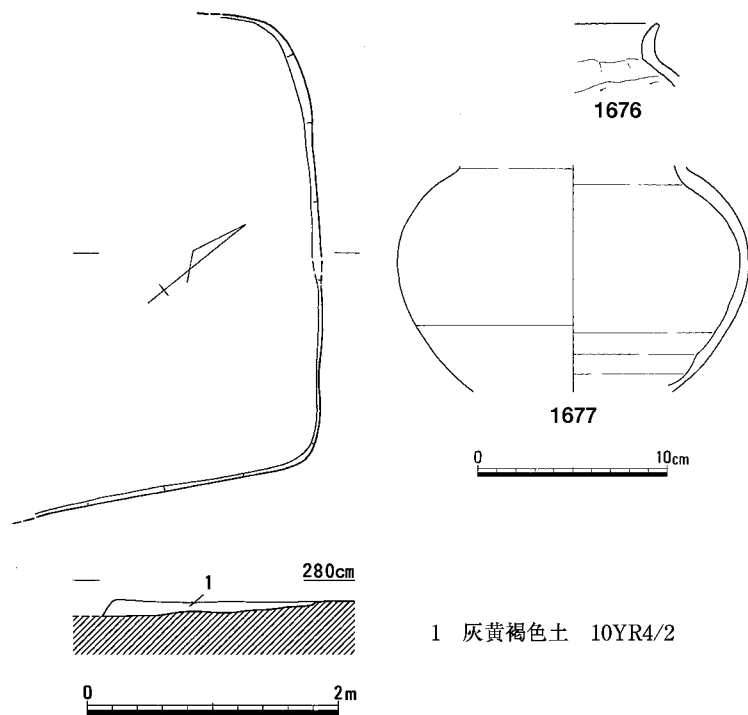
の土製支柱C42は、最大長が14.3cmで、重さは321.4gである。支柱の外表面は淡黄色、内表面は橙色をしており、被熱している。支柱は1本のみであったため、この住居のカマドは一つ掛であったと思われる。

この住居の時期は、他に出土遺物がないため不明であるが、古・中・Ⅱになる竪穴住居65に切られるため、古・中・Ⅱもしくはそれ以前であろう。なお同じタイプのカマドをもつ竪穴住居69も、古・中・Ⅱである。
(小林)

竪穴住居65 (第399・481図)

竪穴住居65は、3区南側部に位置する。これはグリッド名でいうと12Rである。この住居は南西側の約半分が攪乱をうけてすでにない。他の遺構との切り合い関係は、直下に竪穴住居64が存在し、これを切る形になる。住居の規模は、長軸長が363cmで平面形状は方形である。主軸はN-55°-Eを測る。確認面からの覆土はほとんど残存しておらず、深いところで10cm前後である。柱穴は1本も残存しておらず、本来は何本柱の住居であったか不明である。中央穴も存在せず、壁体溝も確認できなかった。

わずかに残った覆土から少しではあるが、土器片が出土する。1676は土師器の甕である。口縁部の形態は「く」の字になるが、立ち上がりは顕著ではない。1677は須恵器の壺になる。この2点から判断して、この住居の時期は古・中・Ⅱになる。またこの住居に切られる竪穴住居64は、古・中・Ⅱかそれ以前の住居になる。(小林)

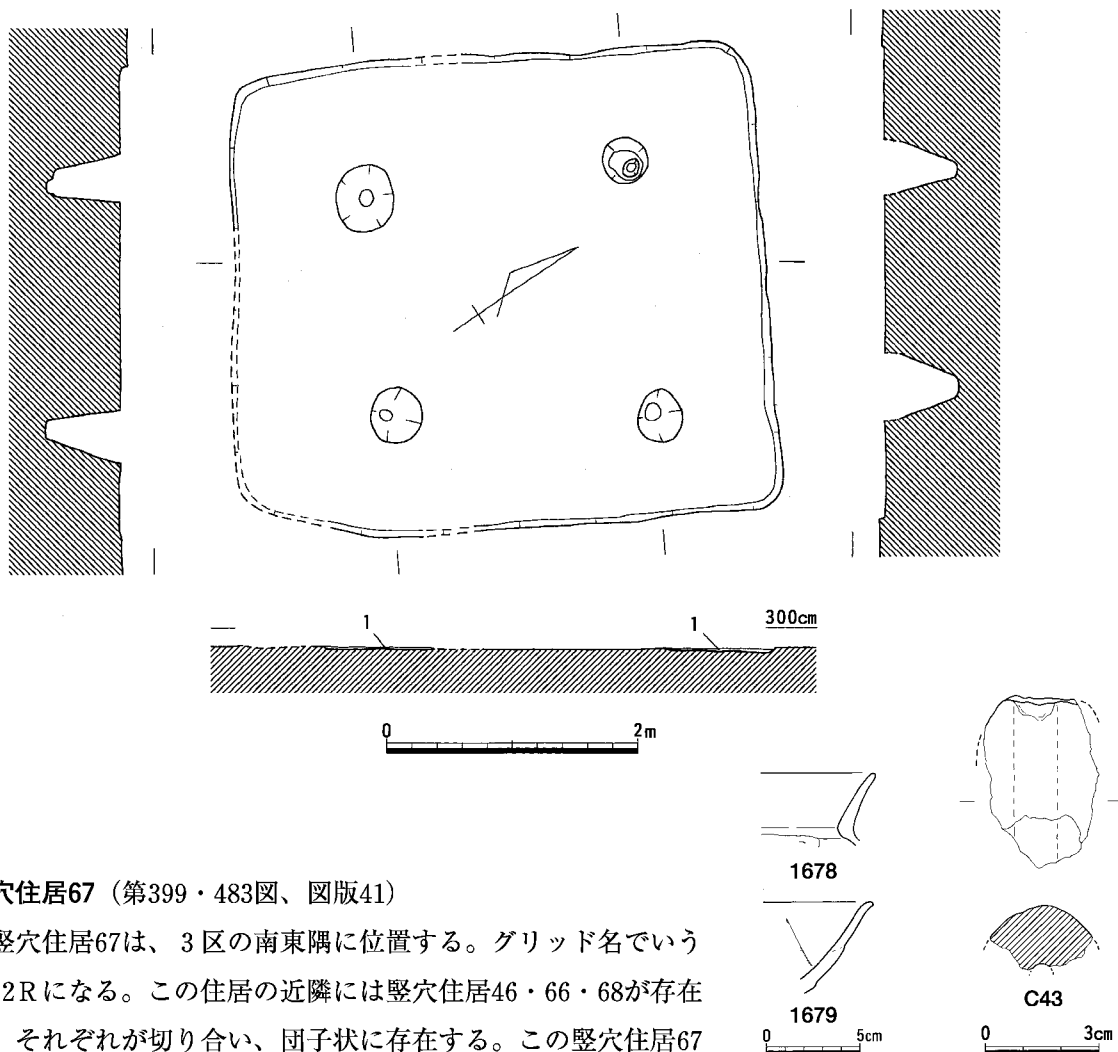


1 灰黄褐色土 10YR4/2

第481図 竪穴住居65 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居66 (第399・482図、図版41)

竪穴住居66は、3区の南東端部付近に位置する。これはグリッド名でいうと12Rになる。この住居は床面ぎりぎりのところで確認されたため、覆土の大半が失われている。他の遺構との切り合い関係は、竪穴住居67を切る形になる。この住居の規模は、長軸長420cm、短軸長371cmで、平面形状は方形である。主軸はN-31°-Wである。柱穴は4本柱で、北側の柱穴には丸形の柱痕が残っている。柱穴の深さは、どれも床面から40~45cm前後になる。中央穴は存在しない。出土遺物はわずかに存在するが、覆土がわずかしか残っておらず、紛れ込みの可能性が高い。1678・1679は土師器片である。1678は甕で、口縁部の形態は「く」の字であるがやや直口気味になる。1679は高杯で、口縁端部がわずかに外反する。古・中・Iの時期である。C43は土錘である。 (小林)



竪穴住居67 (第399・483図、図版41)

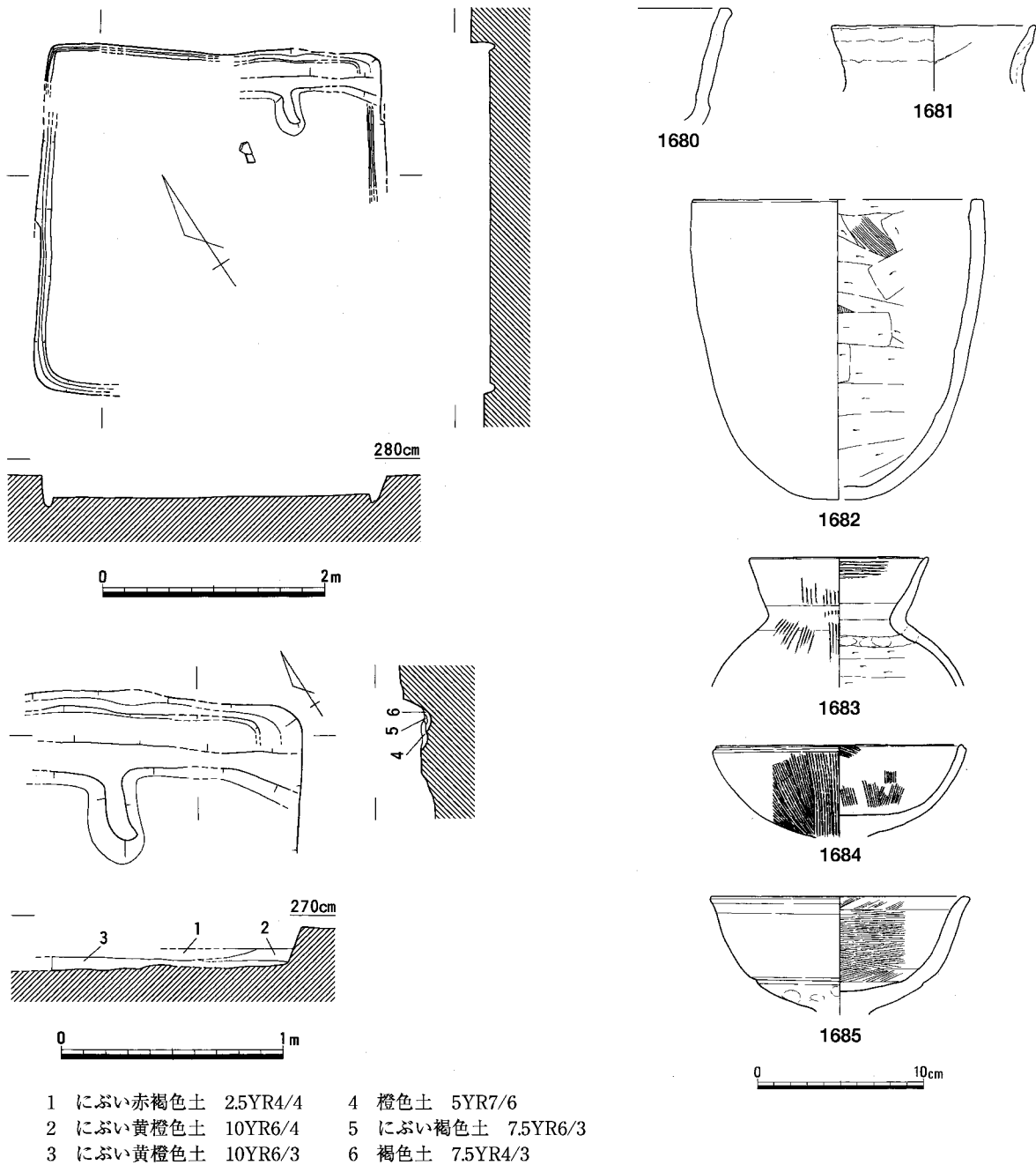
竪穴住居67は、3区の南東隅に位置する。グリッド名でいうと12Rになる。この住居の近隣には竪穴住居46・66・68が存在し、それぞれが切り合い、団子状に存在する。この竪穴住居67は、そのなかでも中央部に存在し、この4軒の住居のなかでは最も古い古・前・IIの竪穴住居46を切り、古・中・Iの竪穴住居66と古・中・IIの竪穴住居68に切られている。特に北側にあ

る竪穴住居66は、住居の覆土が浅く、この竪穴住居67との間にかなりの紛れ込みが想定される。この竪穴住居67の規模は、長軸長315cm、短軸長312cmで、平面形状は正方形に近くなる。主軸はN-36°-Wで、竪穴住居66に近い。柱穴は存在しないが壁体溝は全周存在する。この住居で特質すべ

第482図 竪穴住居66 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

きは、カマドの構造である。カマドの被熱部は北東辺の中央部付近に存在する。この被熱部をつなぐように、住居の壁裾には煙道が存在する。煙道に平行して袖が存在し、被熱部の東側にも「L」字状に存在している。このことから本来煙道は被熱部とつながり「L」字状に屈曲していたものと思われるが、竪穴住居66の柱穴により接続部が切られている。このような「L」字状の煙道をもつカマドは、この遺跡では他に竪穴住居54と55の2軒存在する。この住居の煙道は、住居内におさまるタイプである。また煙道の出口は、被熱を受けた2層（第483図左下）が壁に到達する前に立ち上がっており、本来の上面は削平されている。この住居からは1680～1685が出土し古・中・I～古・中・IIまで存在するが、切り合い関係などを考えると、この住居の時期は古・中・Iになると思われる。

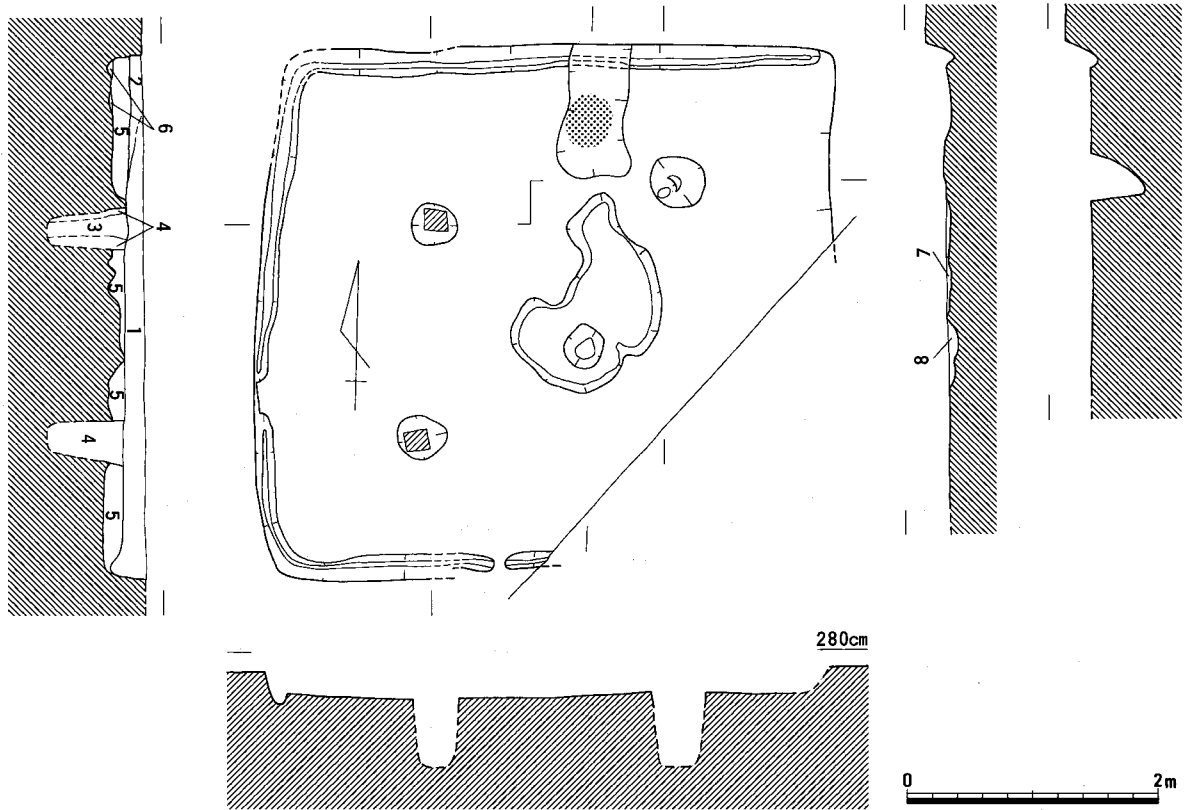
(小林)



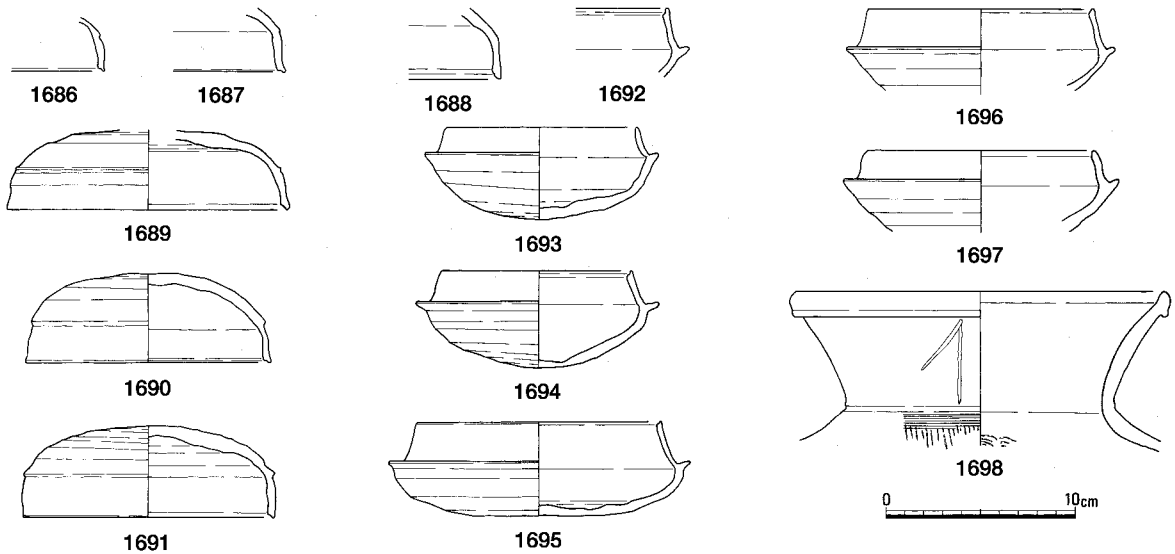
第483図 竪穴住居67 (1/60)・カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居68 (第399・484・485図、図版42・60)

竪穴住居68は、3区南側部のやや東よりに位置する。住居の残存状況は、南東側の一部が調査区外になり、確認していない。他の住居との切り合い関係は、北西側に近接する竪穴住居46と北東側に近接する竪穴住居67をともに切る形になる。住居の規模は、長軸長452cm、短軸長420cmで、平面形状は方形である。柱穴は本来は4本存在したと思われ、今回はそのうち3本を確認した。柱穴の深さは確



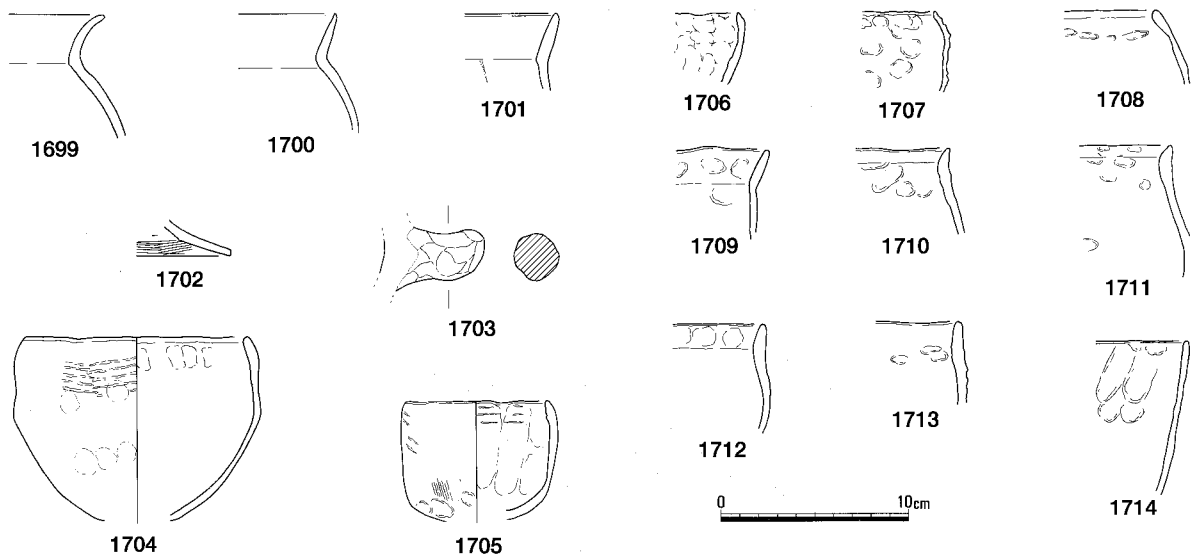
- | | | |
|-----------------|----------------|----------------|
| 1 灰黄褐色土 10YR4/2 | 4 暗褐色土 10YR3/3 | 7 褐灰色土 10YR6/1 |
| 2 褐灰色土 10YR5/1 | 5 暗灰色土 10YR6/1 | 8 褐色土 10YR4/4 |
| 3 灰黄褐色 10YR4/2 | 6 壁体溝・床面埋土 | |



第484図 竪穴住居68 (1/60)・出土遺物① (1/4)

認面から50～60cmを測る。3本の柱穴のうち、西側の2本では柱痕が残っており、形状は方形を呈する。カマドは北側辺の中央付近に存在する。このカマド付近から住居中央部にかけて炭化物が比較的多く堆積する浅いたわみが存在する。

出土遺物には須恵器・土師器・製塩土器などがあり、時期には若干の幅がある。1686～1697は須恵器の杯であるが、このうち1689・1695は古・後・Ⅰになり、他は古・中・Ⅱになる。1698は須恵器の甕で、口縁外面にヘラによる線刻が存在する。1699以降は土師器になり、1699～1701は甕の口縁部である。1702は高杯脚部で床面から出土した。時期は古・中・Ⅱである。1703は甑であり、把手は先端がやや上に向く。1704以降は製塩土器である。遺物の時期は先述したとおり幅があるが、床直で出土する1702などが古・中・Ⅱであることなどから、この住居の時期も古・中・Ⅱと考える。(小林)



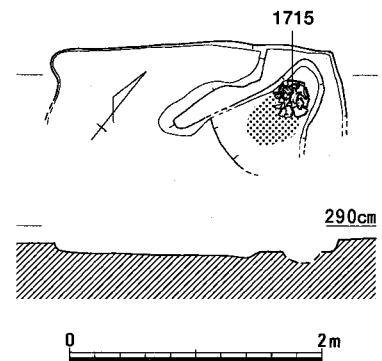
第485図 竪穴住居68出土遺物② (1/4)

竪穴住居69 (第399・486・487図、図版42)

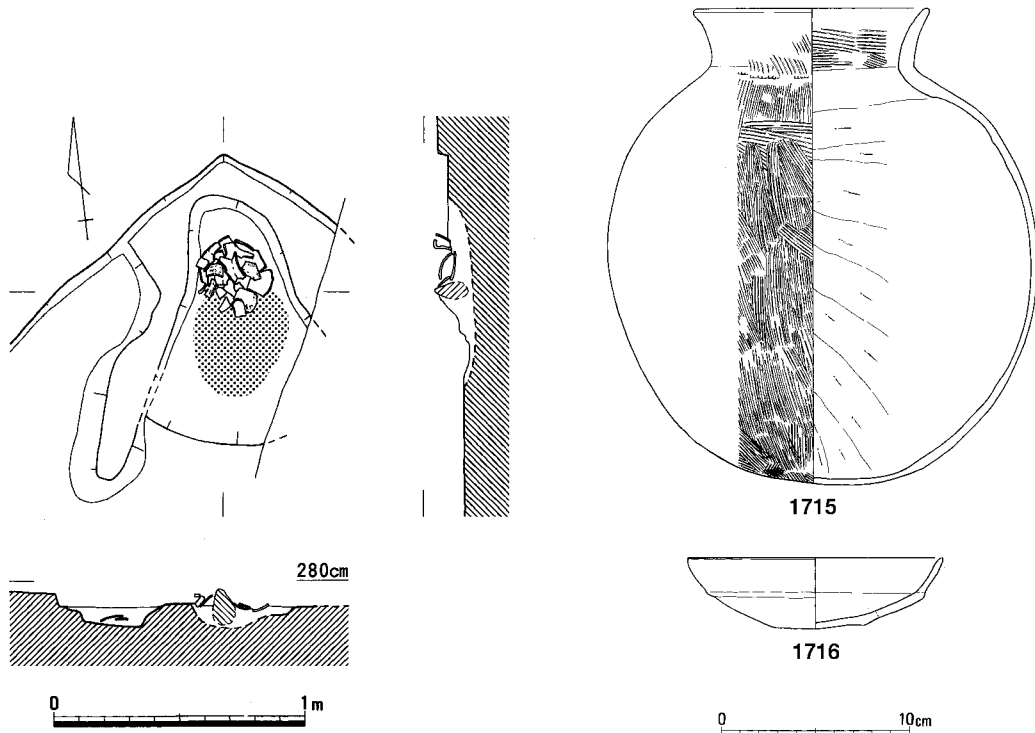
12R区で調査区東端に位置し、住居の南半は調査区外に延びる。平面は主軸をN-52°-Wにとり、東西230cmの小型の方形を呈する。壁体溝はなく、北隅にカマドがある。カマドは、壁に「U」字状に粘土を貼って袖を築いており、煙道は壁の外には延びていない。袖の長さは西側で約110cmを測り、住居の規模に対してしっかりしている。焚き口は袖の先端からやや中に入り、燃焼部には支柱石が立ったままの状態に残されており、支柱石を中心にして1715の甕が潰れて出土した。燃焼部の下部にはカマド築造時に掘られた土壌があり、除湿用と推察される。

出土遺物にはカマド内から土師器甕1715とカマド下の土壌から土師器鉢1716がある。1715の甕は口径12.5cm、器高25.1cmを測り、口縁部は短く外反し、胴部は球形を呈する。調整は口縁部が外面はタテハケメの後ナデ、内面はヨコハケメの後端部付近にナデを行う。胴部は外面全面ハケメ、内面はヘラケズリを行う。1716の鉢は口径13.5cm、器高3.8cm、底径4.7cmを測り、全面ナデを丁寧に行い体部中程に明瞭な稜線が巡る。

時期は、出土遺物から古・中・Ⅱと判断される。(杉山)



第486図 竪穴住居69 (1/60)

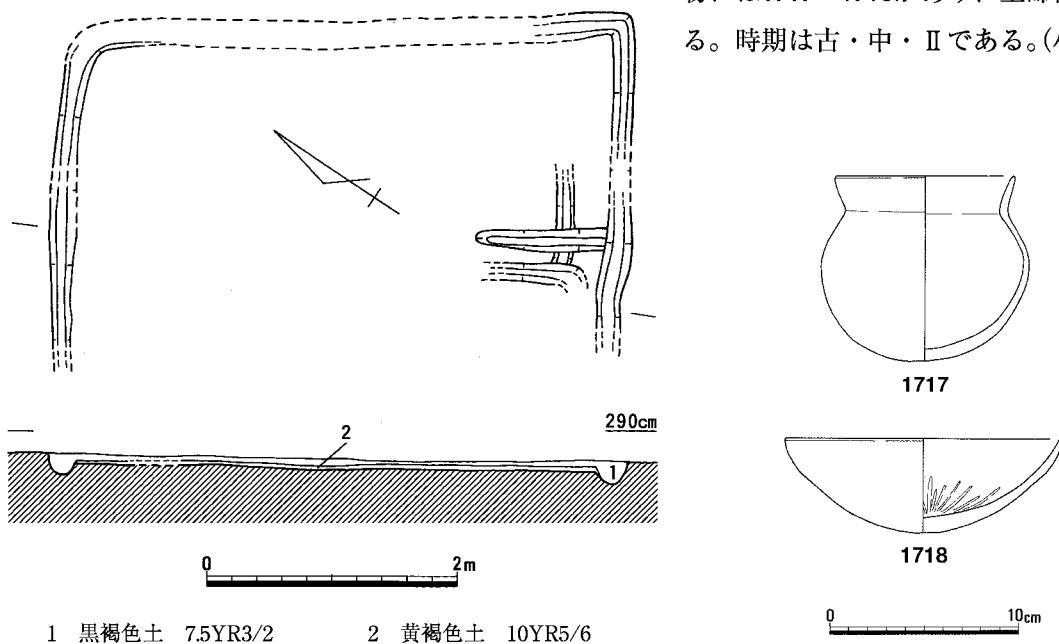


第487図 竪穴住居69カマド (1/30)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居70 (第399・488図、図版43)

竪穴住居70は、3区の南側端部に位置する。これはグリッド名でいうと13Rになる。この住居はかなり掘り下げられた時点で確認したため、東側部分のみ残存しており、西側は残っていない。住居の南西側には竪穴住居49と竪穴住居83が存在し、竪穴住居83に切られている。住居の規模は長軸長455cmで、平面形状は方形である。柱穴は確認できないが、壁体溝は残存部には存在する。南側辺付近には間仕切り溝が3条存在する。出土遺物には1717・1718があり、土師器になる。時期は古・中・IIである。(小林)

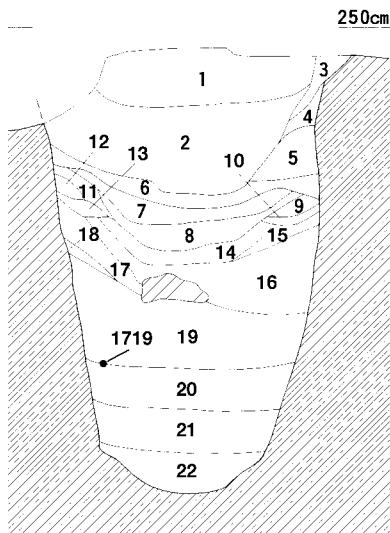
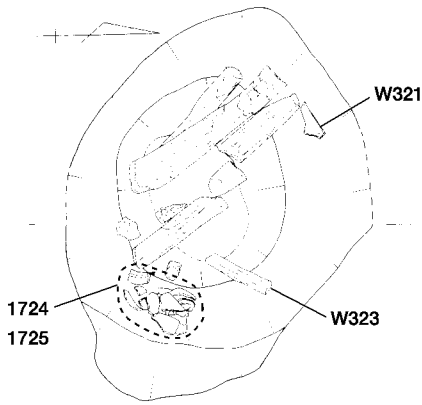
は間仕切り溝が3条存在する。出土遺物には1717・1718があり、土師器になる。時期は古・中・IIである。(小林)



1 黒褐色土 7.5YR3/2 2 黄褐色土 10YR5/6

第488図 竪穴住居70 (1/60)・出土遺物 (1/4)

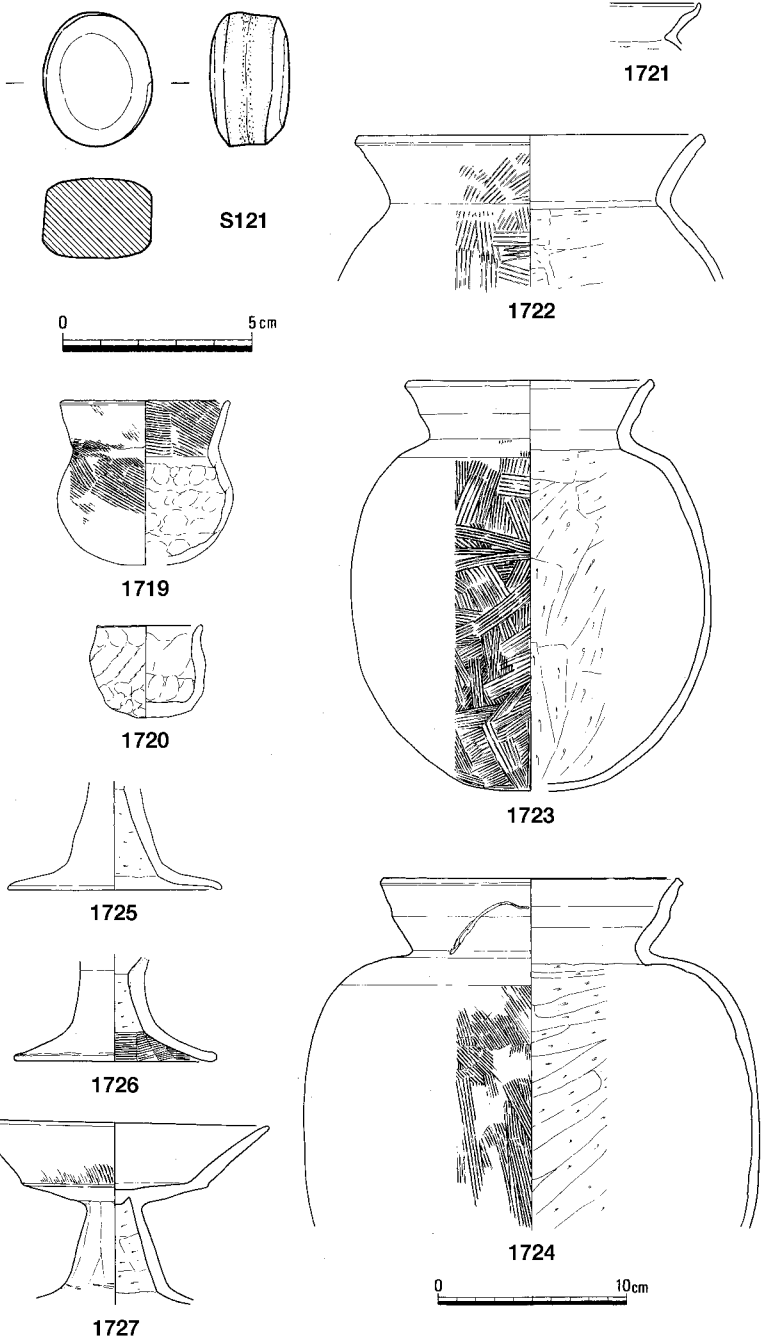
3 井戸



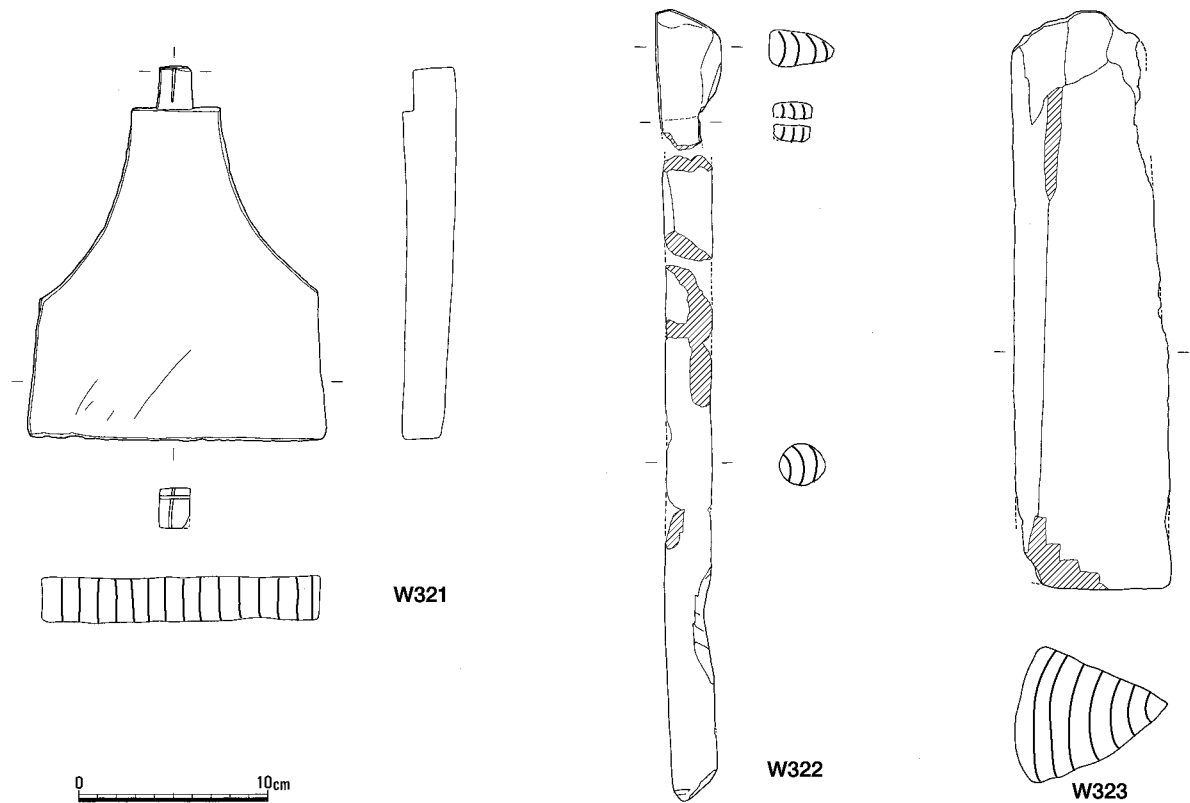
- 1 黄灰色粘性砂質土 2.5Y5/1
- 2 褐灰色粘性砂質土 10YR5/1
- 3 灰黄色粘性砂質土 2.5Y6/2
- 4 黄灰色粘性砂質土 2.5Y4/1
- 5 灰色粘性砂質土 5Y4/1
- 6 黄褐色粘性砂質土 2.5Y5/4
- 7 黄灰色微砂 2.5Y5/1
- 8 灰色粘質土 N4/
- 9 灰色微砂 N5/
- 10 明オリーブ灰色微砂 2.5GY7/1
- 11 灰色微砂 N5/
- 12 灰白色微砂 N7/
- 13 灰色粘質土 5Y4/1
- 14 灰色粘質土 N4/
- 15 青灰色粘質土 5PB5/1
- 16 暗灰色粘質土 N3/
- 17 灰色粘質土 N5/
- 18 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 19 暗青灰色粘性砂質土 5PB4/1
- 20 黒色粘性砂質土 5Y2/1
- 21 暗青灰色粘性砂質土 5PB4/1
- 22 黒色粘性砂質土 5Y2/1

井戸6 (第398・489・490図、図版43)

1区6Pで検出した井戸で、規模が長径163cm、短径121cm、検出面からの深さ174cmを測り、底面の海拔高は30cmである。断面の形状は底面にむかってすぼまり、底面は碗状を呈している。土層の状況であるが、下層の第19～22層は、ほぼ水平堆積をしており、自然堆積とも考えられる。遺物量は少ないものの、第19層の底面で、完形の手捏ね土器1719が出土している。第16～



第489図 井戸6 (1/30)・出土遺物① (1/2・1/4)



第490図 井戸6出土遺物② (1/4)

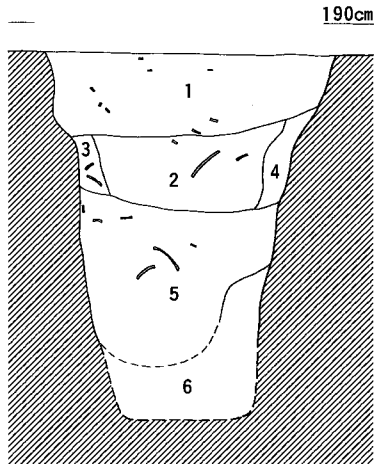
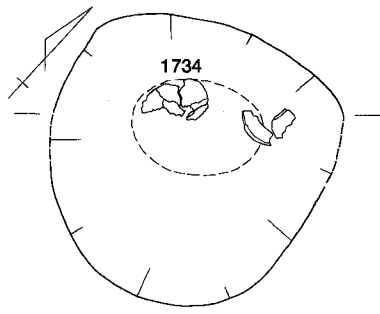
18層内では、炭化材・土器・木製品等が多く出土していることから、まとめて廃棄したものと考えられる。これより上層では掘り直しがなされ、土器などが捨てられて廃棄土壌として使用されていたと考えられる。

出土遺物には、石錘S121・壺1719・手捏ね土器1720・甕1721～1724・高杯1725～1727などがある。S121は流紋岩製で、表面を磨いており、丁寧な造りである。1719は埋土上面から出土している。高杯の脚部内面は横方向に削っているものである。甕は外面をハケメ、内面はヘラケズリを施している。口縁部は外反するものである。W321は脚部と考えられるもので、上部のはめ込み部分には楔が入っている。W322は柄であると考えられる。W323はミカン割材である。これらの遺物から、この井戸の廃棄された時期は古・中・Iであると考えられる。 (時實)

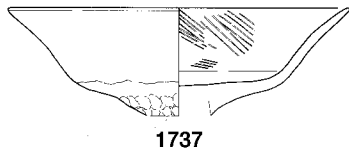
井戸7 (第398・491図、図版43・59)

7Q区の北側中央部に位置し、河道1の上層から掘削されている。平面形は楕円形を呈し、長軸117cm、短軸115cmを測る。断面形は逆台形を呈す。底面は特定できなかったが、少なくとも検出面から145cmの深さを有す。推定される底面海拔高は33cmであり、底面付近の基盤層は河道1の埋土である。井戸の埋土は基本的に6層に分けることができ、ほぼ水平に堆積し、掘り返しの状況は認められない。第2層以下はグライ化している。遺物は各層から散漫な状態で出土しているが、第1・2層は土器の破片が多い。第5層から甕1734、第6層から完形に近い小型丸底壺が出土した。

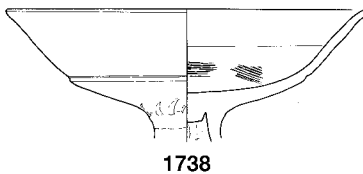
出土遺物のうち、土師器の小型丸底壺・甕・高杯・鉢・砥石を図示することができた。S122は流紋岩製の砥石である。形状は直方体を呈し、全面に擦痕が認められる。1728～1731は小型丸底壺で、球形の体部、逆「ハ」の字形の口縁部をもつ。1731の体部内面はヘラケズリによって調整されている。



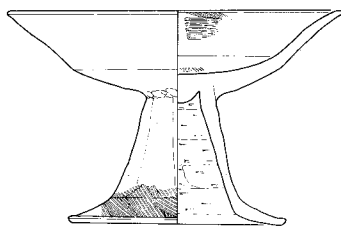
- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 2 灰色粘質土 N4/
- 3 灰色粘質土 10Y6/1
- 4 緑灰色粘質土 10GY6/1
+ 灰色粘質土 N5/
- 5 暗灰黄色粘質土 N3/
- 6 最下層埋土



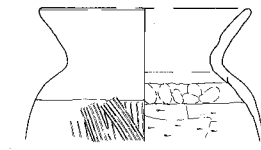
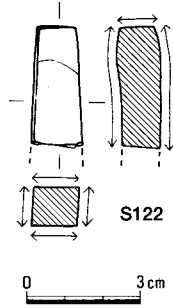
1737



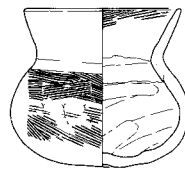
1738



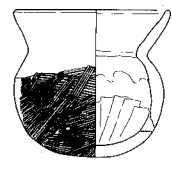
1739



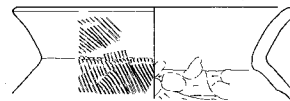
1732



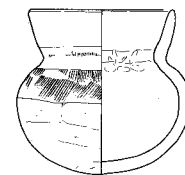
1728



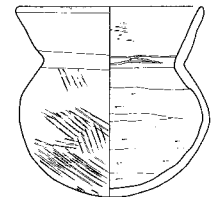
1729



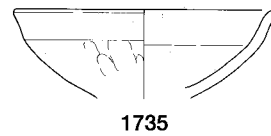
1733



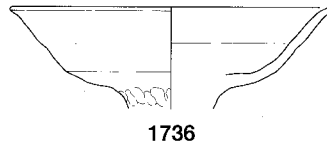
1730



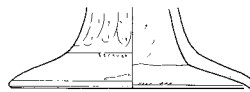
1731



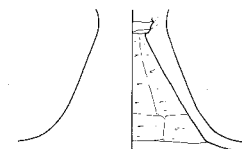
1735



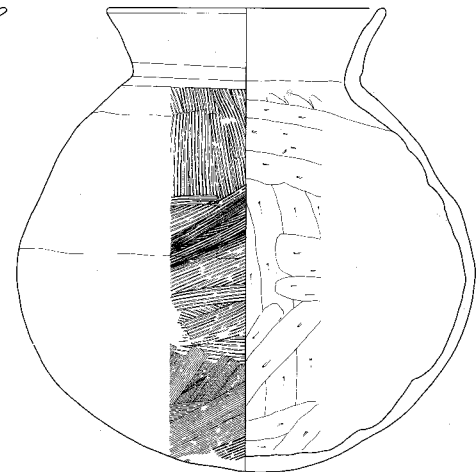
1736



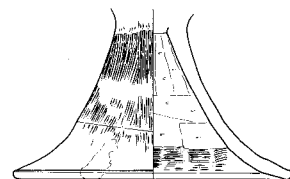
1740



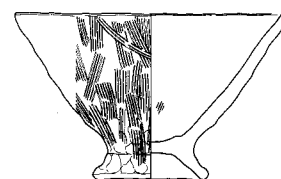
1741



1734



1742



1743

1732~1734は「く」の字形の口縁部をもつ甕である。口縁部は内傾しない。1734はやや下膨れの体部をもつ。1735~1742は高杯であり、杯部が腕形を呈すもの(1735)、逆「ハ」の字形に屈曲しながら開くもの(1736~1739)がある。また高杯の脚部は、比較的長い脚柱部をもち、裾部が鋭く外方へ開くもの(1739~1741)と緩やかに開くもの(1742)に分けられる。透かし孔はない。1743は脚台を有し、直線的に長く伸びる口縁部をもつ鉢である。時期は層位や出土土器から古・中・Iと考える。(米田)

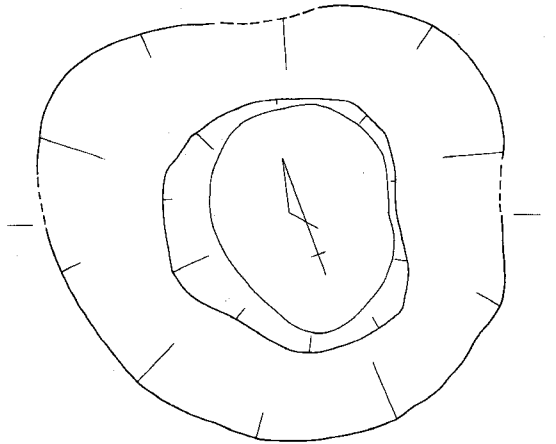
第491図 井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

井戸8 (第398・492・493図、図版44)

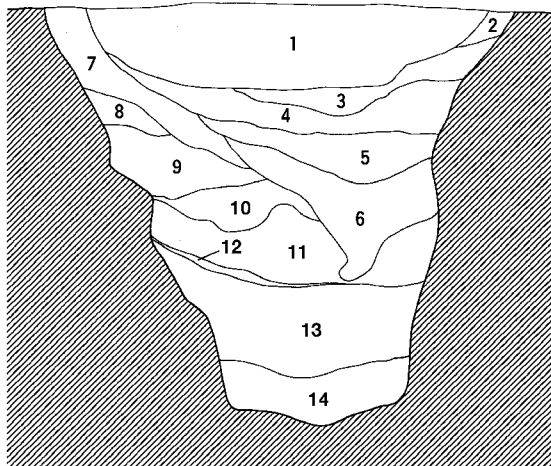
7Q区の東側中央部に位置し、河道1の上層を切って掘削されている。平面形は楕円形を呈し、長軸196cm、短軸170cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは検出面から166cmある。底面海拔高は61cmであり、井戸基盤層となる河道1埋土の海拔75cmより下層には灰色粗砂が堆積しており、当時の湧水層であった可能性がある。埋土は14層に分けられ、第1～6層は掘り返しの可能性がある。また第1～4層には土器細片とともに炭化物を多量に含んでいた。

出土遺物は土師器の壺・甕・高杯・ミニチュア土器など多種にわたり、量も多い。

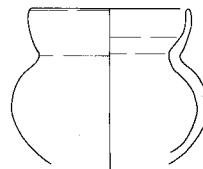
1744・1745は小型丸底壺である。1745は口縁部が直線的に逆「ハ」字形に延び、体部は球形ではなく、やや肩が張る。1746は壺形のミニチュア土器。1747～1754・1756・1757は甕であり、口縁部は基本的に「く」の字形を呈す。このうち1752～1754は口縁端部をわずかに内側へ摘んでいる。甕の体部は球形である。1755は退化した複合口縁を有す壺である。1758～1775は高杯である。高杯の杯部は、椀形を呈すもの(1761)、直線的に延びるもの(1760・1762～1766・1774)、逆「ハ」の字形に屈曲しながら開くもの(1759・1767・1768)に分けることができる。



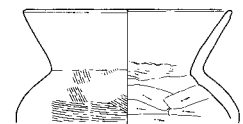
250cm



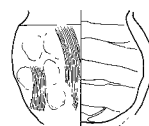
- 1 灰黄褐色微砂 10YR4/1
- 2 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 3 黄灰色粘質砂 2.5Y5/1
- 4 黒褐色粘質土 2.5Y3/1
- 5 灰色粘質土 5Y4/1
- 6 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2
- 7 にぶい黄橙色微砂 10YR6/3
- 8 明黄褐色微砂 2.5Y7/6
- 9 灰黄色粘性砂 2.5Y6/2
- 10 オリーブ黒色粘質土 5Y3/1
- 11 灰色粘質土 5Y5/1
- 12 灰色粘質土 7.5Y4/1
- 13 灰色粘質土 5Y5/1
- 14 灰色細砂 N5/



1744



1745



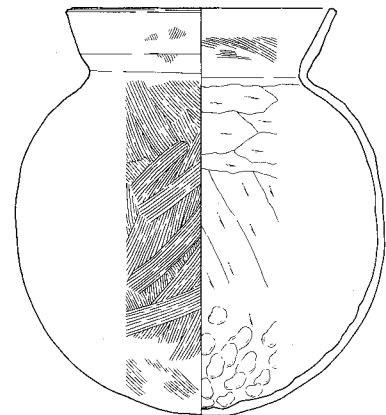
1746



1747



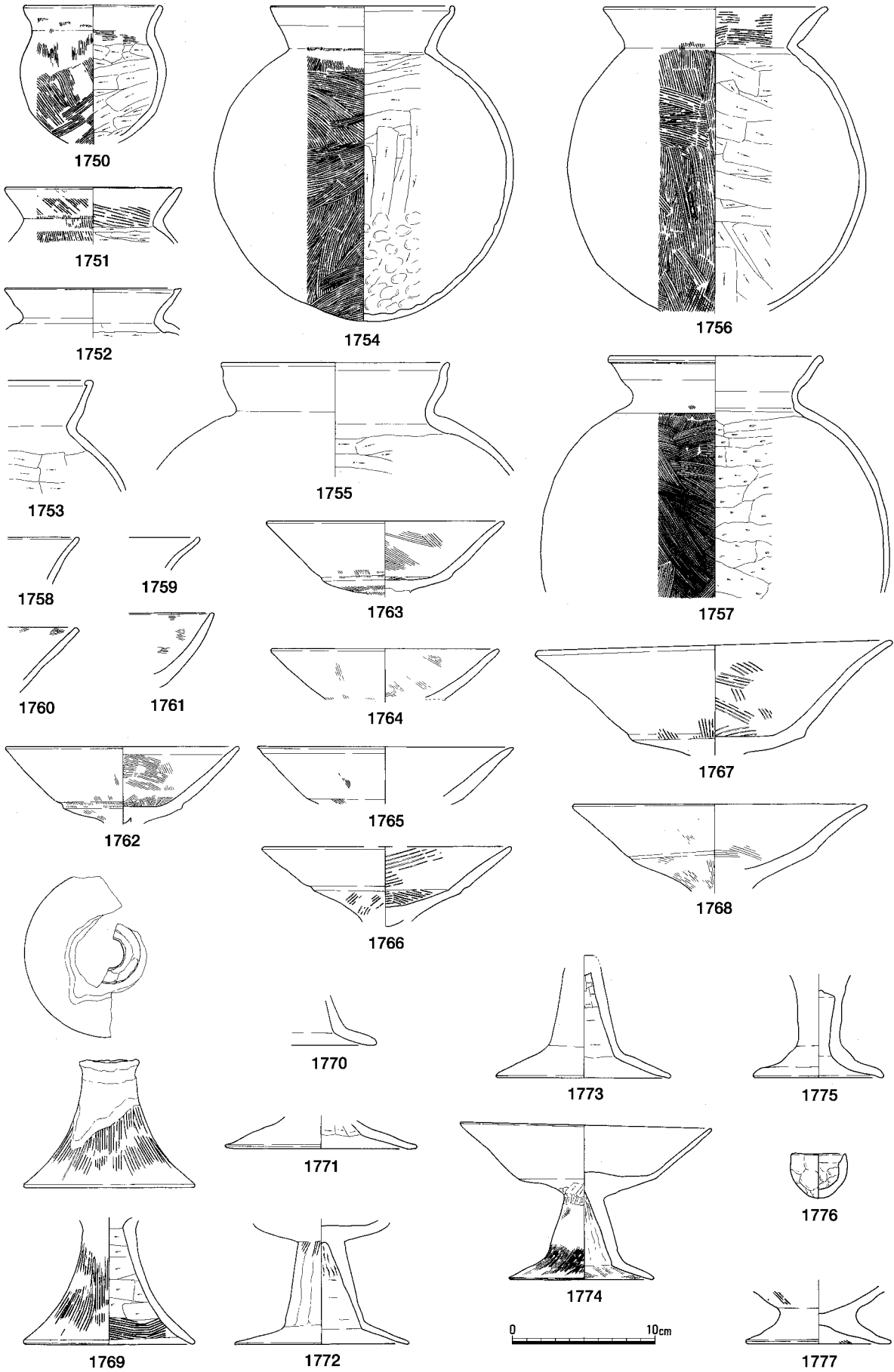
1748



1749



第492図 井戸8 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第493図 井戸8出土遺物② (1/4)

また杯内面をハケメで調整しているものが大半を占める。高杯の脚は、比較的長い脚柱部をもち、裾部が緩やかに広がるもの(1769)、裾が鋭く屈曲し外方へ開くもの(1770・1775)がある。裾部には透かし孔は施されていない。1769は羽口に転用されており、脚柱部上半は淡青灰色の還元色を呈する。1776は手捏ねによる鉢形のミニチュア土器、1777は脚台付きの鉢である。

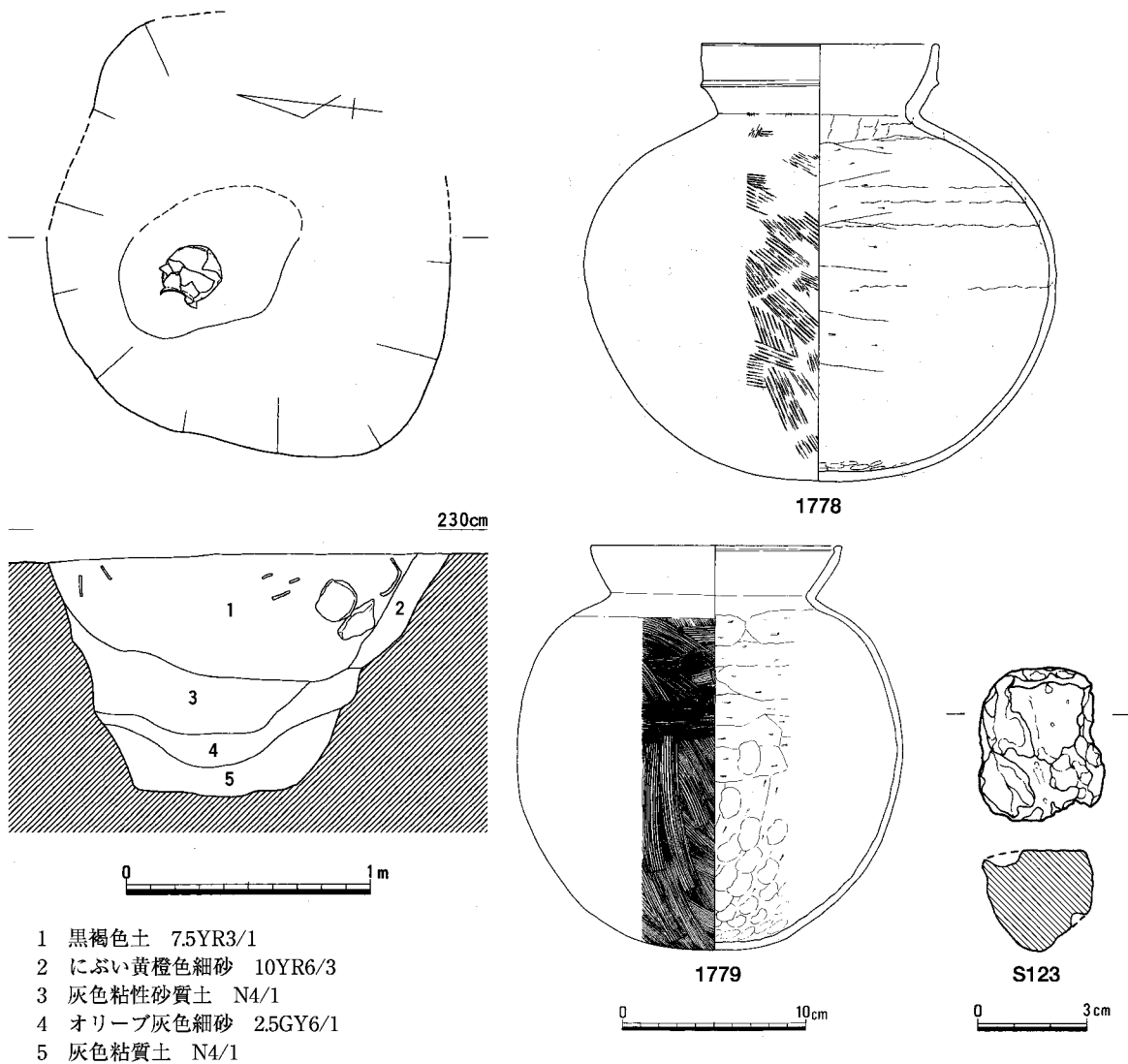
井戸の廃絶時期は、出土土器や検出面から、古・中・Iと考えられる。(米田)

井戸9(第398・494・495図、図版44)

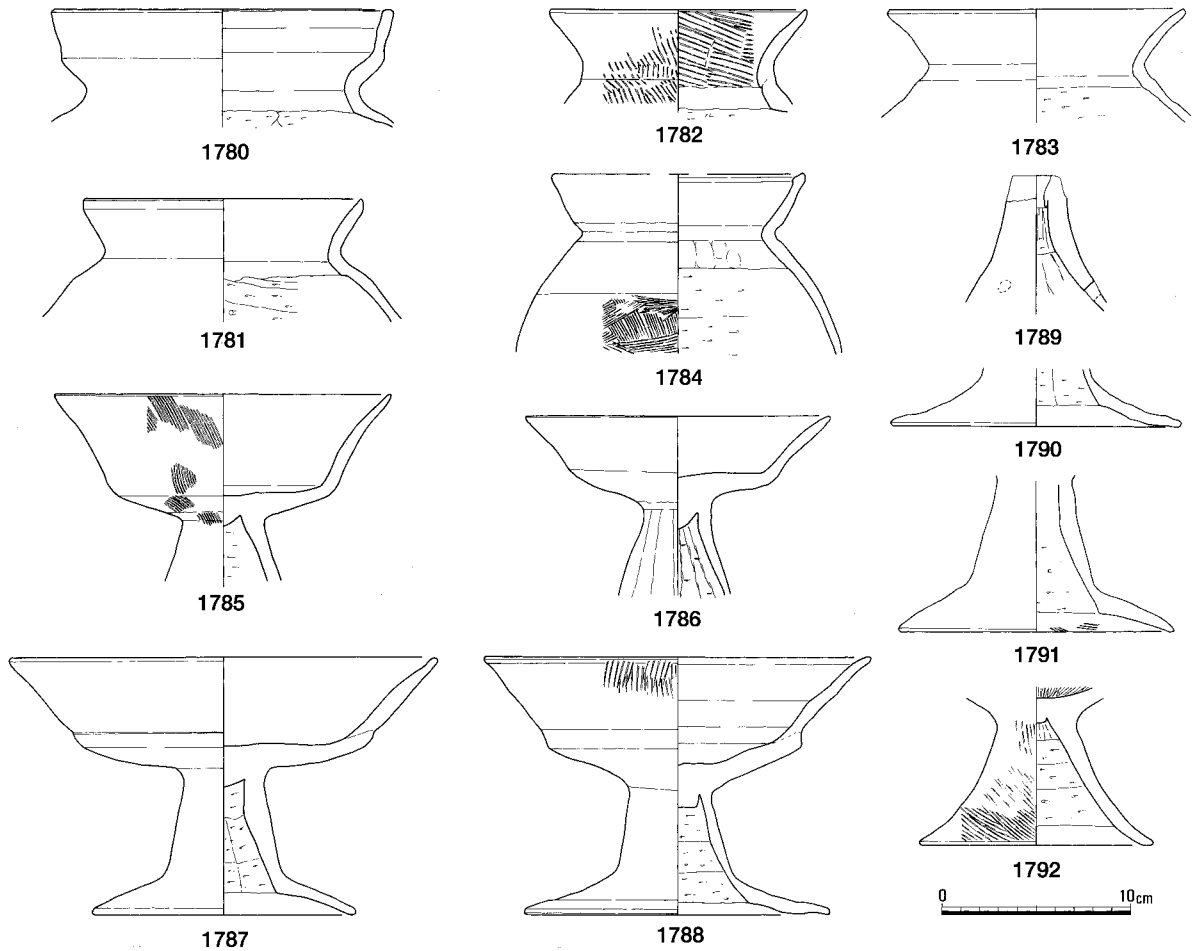
7P区で、河道右岸に位置する。平面は199×164cmの楕円形を呈し、底面海拔高は121cmを測る。埋土は5層に分層でき、遺物は第1層中に多く含まれる。埋土にはグライ化は認められず、第5層中には炭が比較的層をなしてみられることから、常時水が溜まっていたとは考えにくい。

1778~1780は第3層以下の出土土器で、1778は底面に横転して出土した。1781~1792の土師器は第1層中出土で、高杯の比率が高いことが特徴的である。1778~1780は壺で、1779は口縁端部がわずかに内側に肥厚する。1781~1784は甕、1785~1792は高杯で、1789には円孔があく。S123は42×34×28mmで現存重量13.1gの軽石で、浮子と考えられる。

時期は、出土遺物から古・中・Iと判断される。(杉山)



第494図 井戸9(1/30)・出土遺物①(1/4・1/2)



第495図 井戸9出土遺物② (1/4)

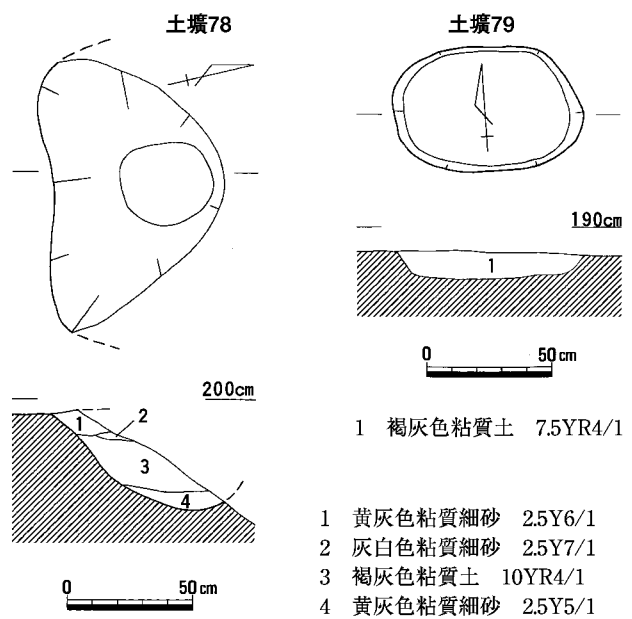
4 土壙

土壙78 (第398・496図)

6 Q区の南部で検出された。北半部は古代の溝によって破壊され、本来の規模・形状は不明であるが、残存部分から隅丸方形ないし不整な楕円形かと思われる。残存部の深さは最大40cmを測る。図示可能な遺物はないが、古墳時代中期の遺構と推定される。(岡本)

土壙79 (第398・496図)

6 Q区の南端部に位置する。平面形は長さ75cm、幅49cmの楕円形を呈し、深さは最大11cmを測った。図示可能な遺物はないが、古墳時代中期の遺構と推定している。(岡本)



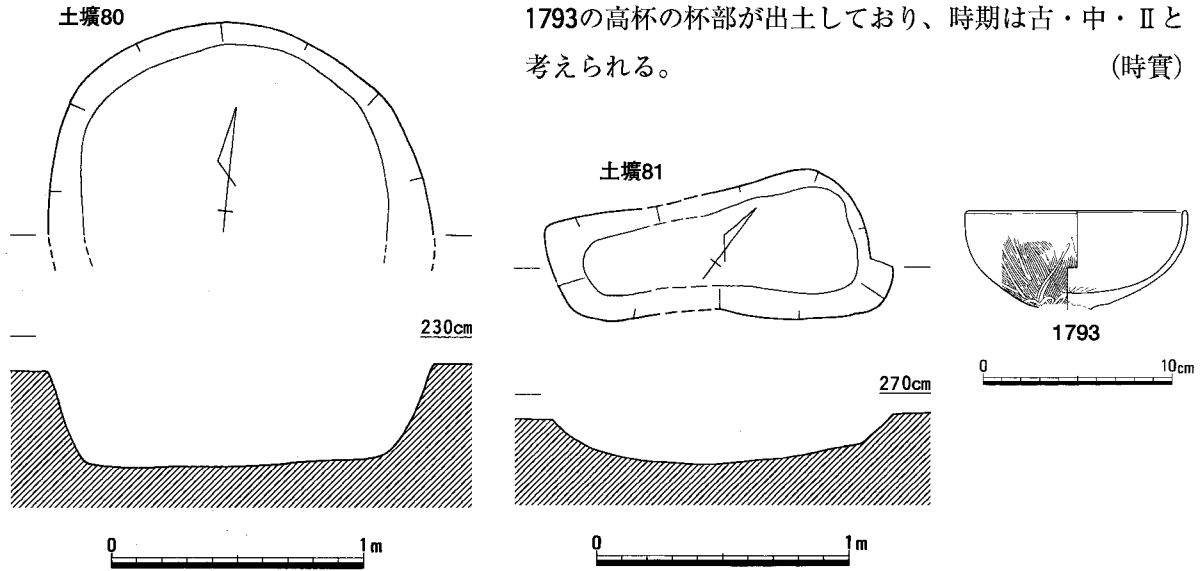
第496図 土壙78・79 (1/30)

土壙80 (第399・497図)

9 Q区の南東端部で検出された。南半部が現存しないが、円形の土壙と推定される。残存部の径152cm、深さ41cmを測る。遺物は土器小片のみであるが、古墳時代中期と推定される。(岡本)

土壙81 (第399・497図)

3区11Qに位置している、長方形の土壙である。規模は、長径139cm、短径42cm、深さ20cmを測るもので、断面形は浅いレンズ状を呈している。遺物は1793の高杯の杯部が出土しており、時期は古・中・Ⅱと考えられる。(時實)

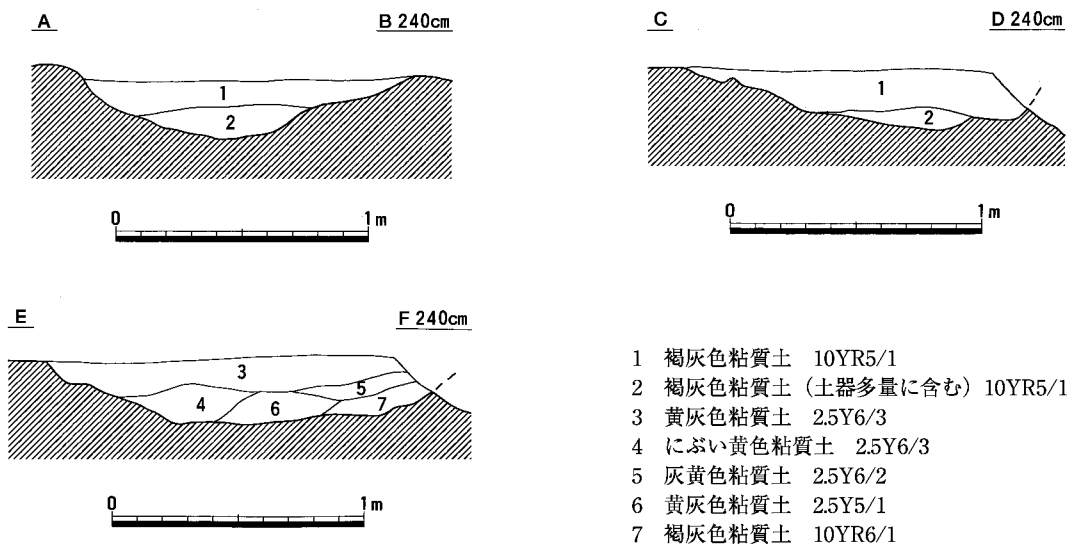


第497図 土壙80・81 (1/30)・土壙81出土遺物 (1/4)

5 溝

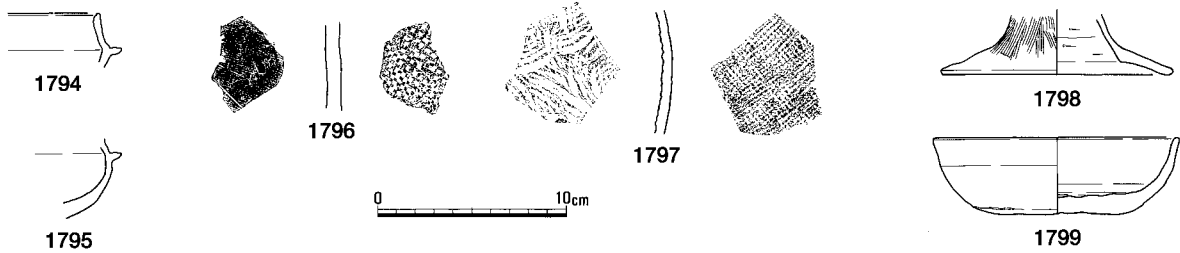
溝39 (第398・498・499図)

4 Q・5 P区で検出された、北東から南西方向に流下する溝である。壁の傾斜は緩く、深さは最大で25cm前後を測る。出土した須恵器・土師器からみて、古・中・Ⅱに位置づけられる。(岡本)



- 1 褐灰色粘質土 10YR5/1
- 2 褐灰色粘質土 (土器多量に含む) 10YR5/1
- 3 黄灰色粘質土 2.5Y6/3
- 4 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3
- 5 灰黄色粘質土 2.5Y6/2
- 6 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 7 褐灰色粘質土 10YR6/1

第498図 溝39断面図 (1/30)



第499図 溝39出土遺物 (1/4)

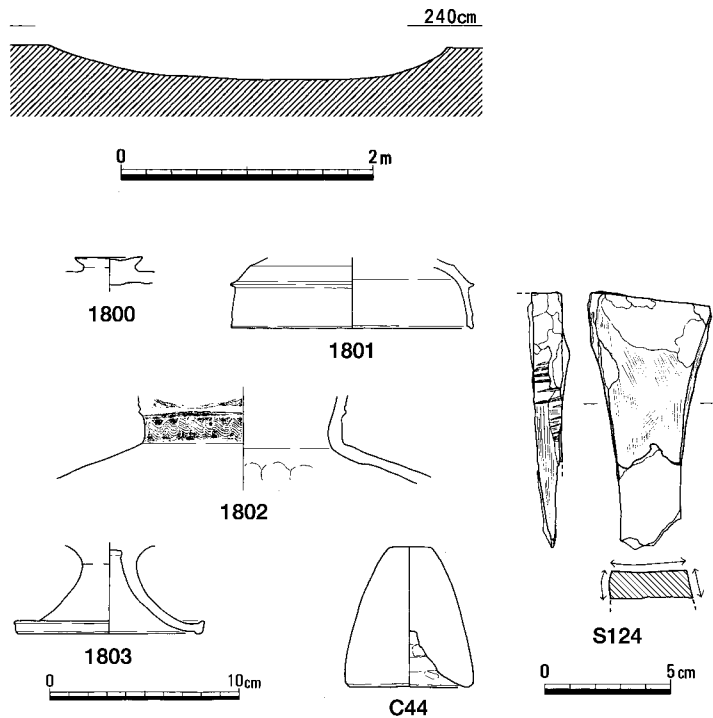
6 たわみ

たわみ 1 (第398・500図)

5 P 区の北東端部に位置し、溝39の上面で検出された浅いたわみである。形状は不定形で作為が感じられず、遺構というよりも溝39埋没の最終段階で生じた窪みと思われる。深さは最大で30cm程度を測り、断面形は浅い皿状である。

埋土中からは多量の土器片が出土したが、弥生土器など古い時期の遺物が大半を占め、本来伴うものは少数である。須恵器1800～1802は5世紀末～6世紀初頭の特徴を示している。高杯1803は時期が降り、上層部からの混入の可能性がある。C44は栓のような形をした用途不明の土製品である。S124は頁岩製の砥石で、各側面のほか端面にも使用痕が認められる。

たわみの完全に埋没した時期は、以上の遺物からみて古・中・Ⅲになると思われる。(岡本)

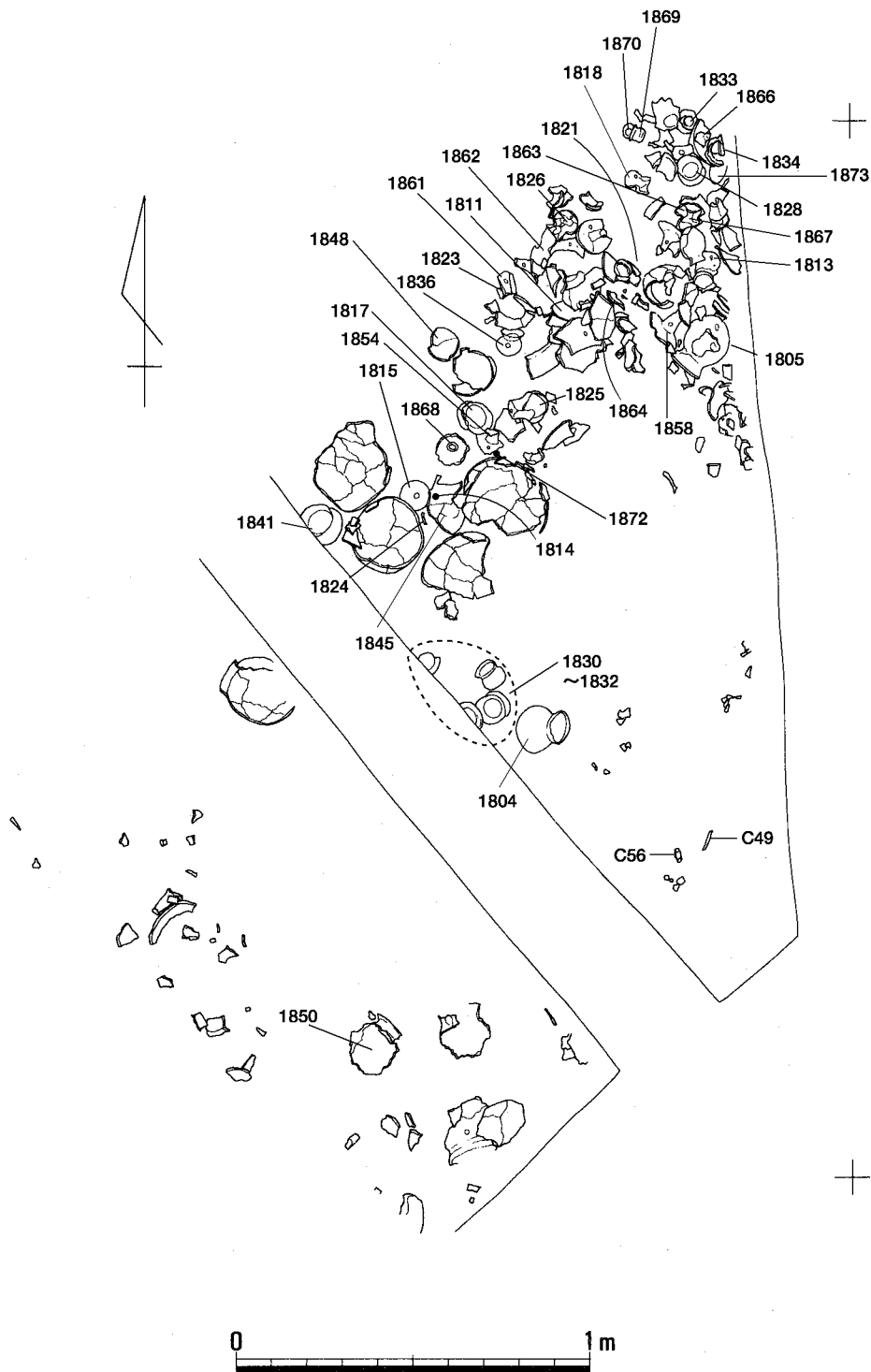


第500図 たわみ 1 断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

7 土器溜まり

土器溜まり 1 (第398・501～506図、図版44・45・60)

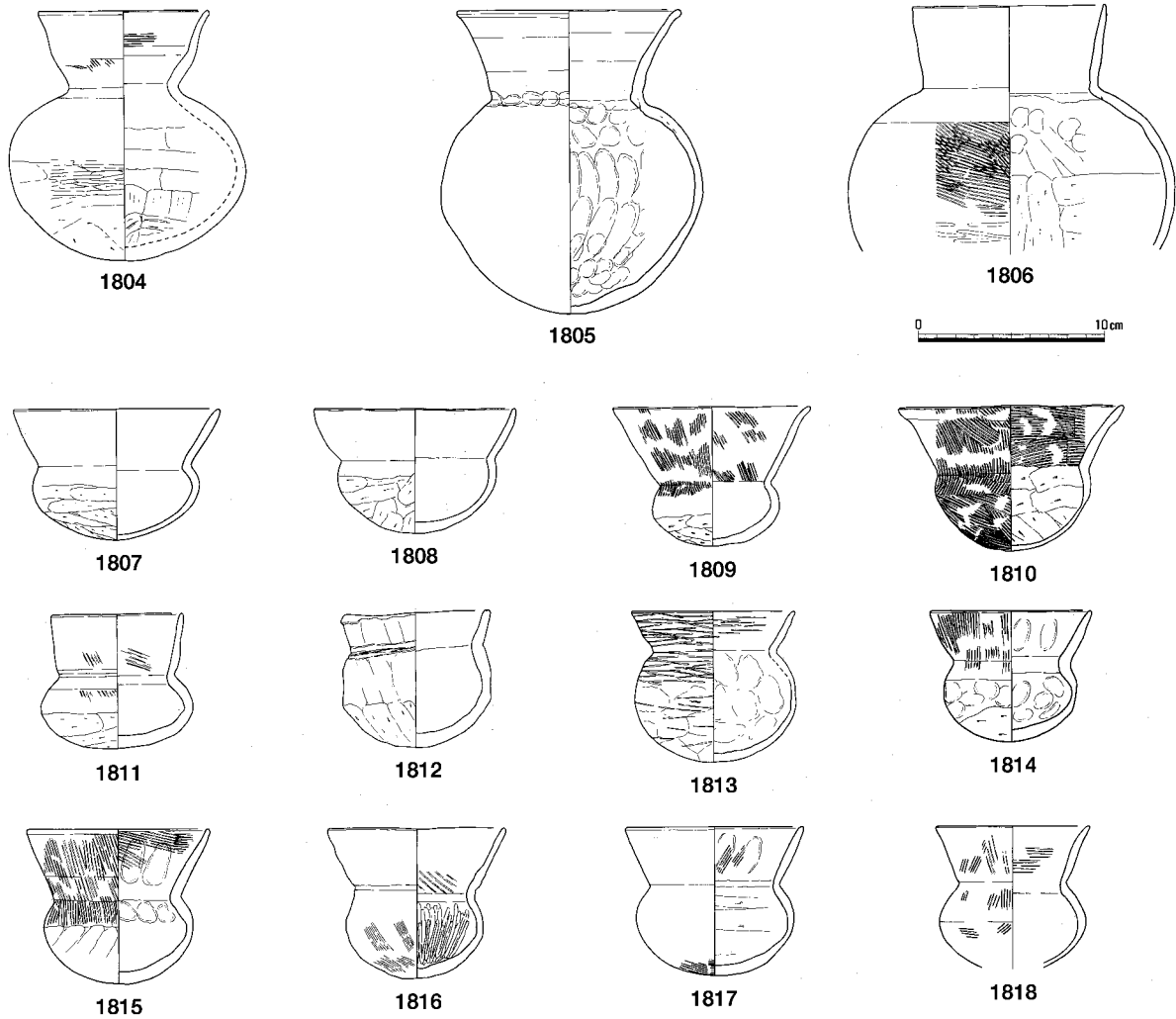
7 Q 区の北西部に位置し、河道1の北岸付近の上層で土器溜まりを検出した。土器溜まりの覆土は暗褐色粘質土であり、河道1の北岸付近がほとんど埋没し、土器溜まりが形成された時点は最上層において水が緩やかに流れていたと考えられる。土器密集部分は、東西280cm、南北180cmの範囲である。土器溜まりは、土器密集部分より南西部は散漫な土器の出土状況を示すが、東部ほど土器が密になるため、調査区外の東側には土器溜まりが続くことが予想される。土器溜まりの主軸はおおむねN-43°-Eであり、河道1の北肩口ラインにほぼ平行する。土器は海拔高150～160cmで検出し、各土器が上下



第501図 土器溜まり1 (1/20)

に重なることはなく、個々が平面的に広がりをもっていた。

土器の出土状況は、器種によって分布に偏りが見られる。土器密集部分の西半は、8個体以上の甕が集中しており、甕群の間に小型丸底壺(1815・1841)がある。特にミニチュア土器1868が甕の底部直上に内包されていた。また甕群の南側は、4個体の小型丸底壺(1830~1832)がまとまっていた。さらに土器密集部分の東半は、高杯と小型丸底壺がそれぞれ隣接するように認められ、その南には直口壺(1805)が高杯(1858)の両側に配置されているかのごとく出土した。北東部では高杯・小型丸

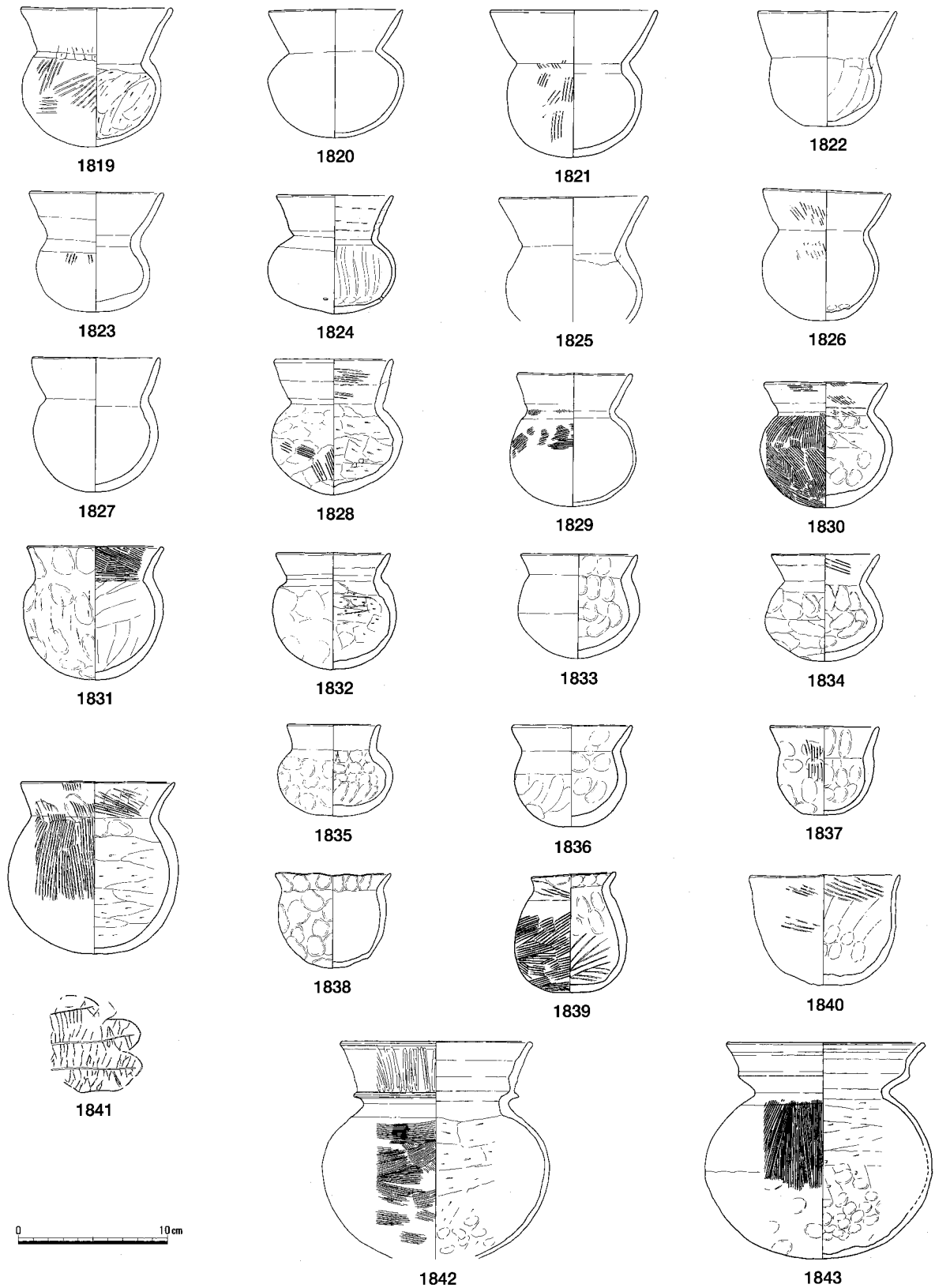


第502図 土器溜まり1出土遺物① (1/4)

底壺とともにミニチュア土器が多く認められた。特に器台形のミニチュア土器1867は小型丸底壺に内包された後、一回り大きい小型丸底壺1863に入れられた状態で出土した。そして1863の南側では、小型丸底壺1813のなかに一回り小さい小型丸底壺が「入れ子」になっていた。さらに最北東部では、壺形ミニチュア土器1834が小型丸底壺に内包され、ミニチュア高杯1866とともに、高杯の杯部にのせられた状態であったことを想起させるような出土状況を示していた。鉢形のミニチュア土器1869・1870は同型であり、出土状況から合口にされていた可能性がある。

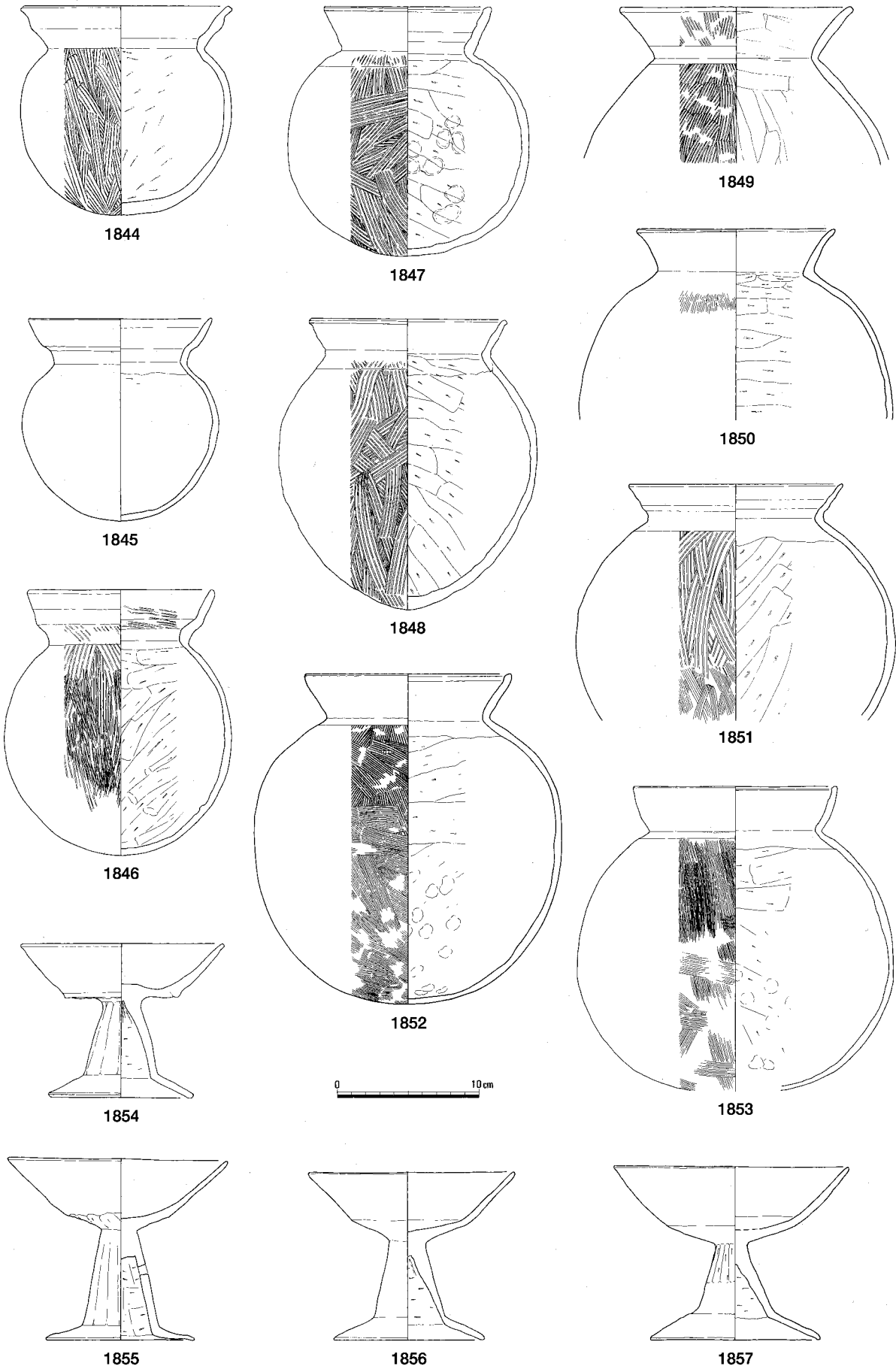
土器密集部分より南側では、土器群と同一層で土製勾玉・土錘・鏡形土製品が出土した。土製勾玉・土錘は土器密集部分より約1 m南側に散在しており、土製勾玉C20は腹部を上にした状態であった。土錘C49は土製勾玉C56に東接していた。鏡形土製品は個々の詳細な出土位置は明らかでないが、土器密集部分や土製勾玉・土錘の出土位置より南西側で認められた。

出土遺物は可能な限り図化したため、掲載した遺物の数は実際に出土した遺物の構成に極めて近い。土器の器種構成は、壺5点(1804~1806・1842・1843)、小型丸底壺34点(1807~1839・1841)、甕10点(1844~1853)、高杯9点(1854~1862)、鉢2点(1840・1863)、ミニチュア土器10点(1864~1873)であり、少なくとも計70点以上の土器が出土している。特に小型丸底壺が土器全体の約48.6%と過半数に近く、ミニチュア土器・高杯・甕は各14%前後の比率である。

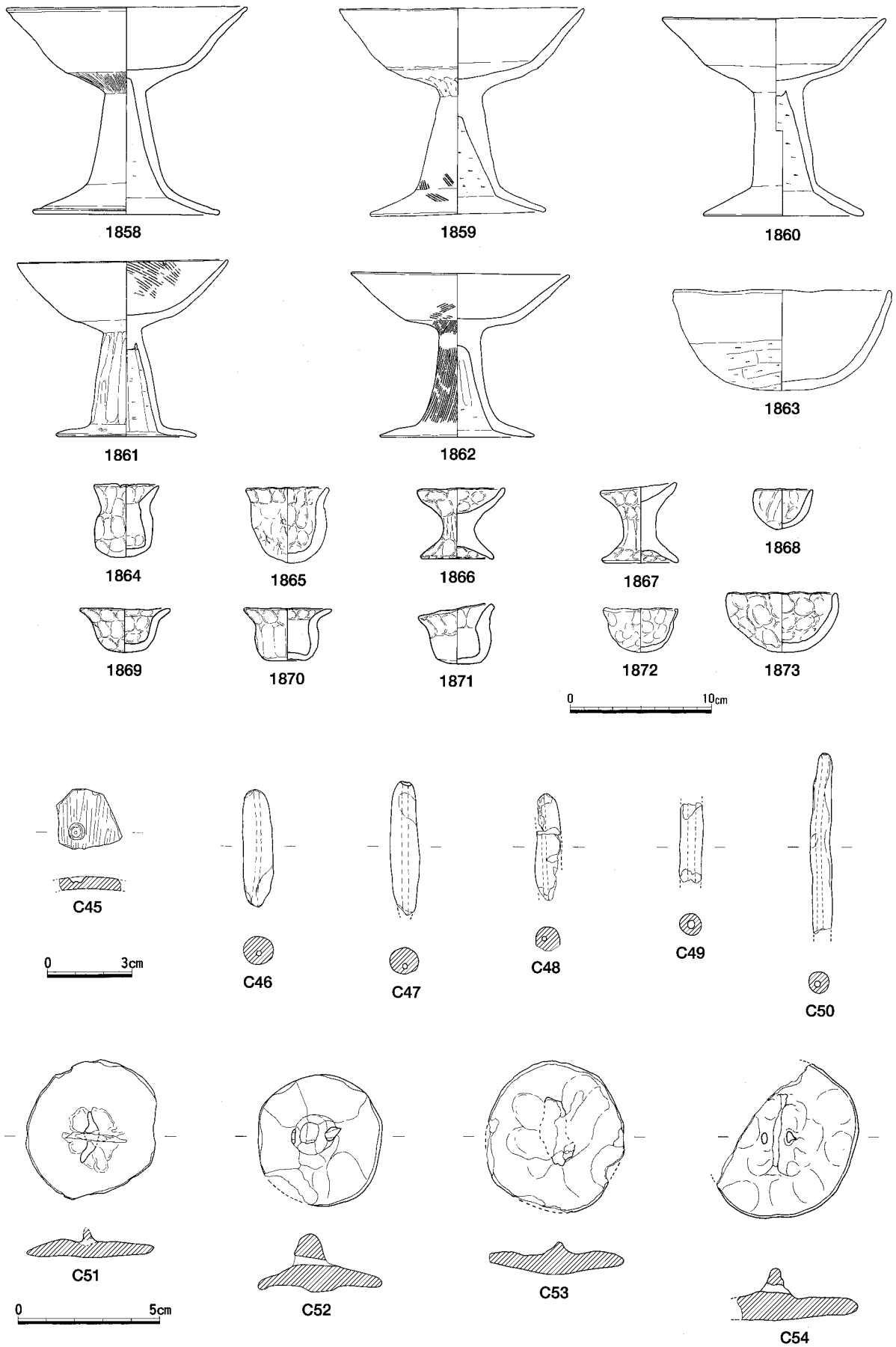


第503図 土器溜まり1出土遺物② (1/4)

出土土器は完形品または完形に近いものがほとんどであり、1806・1850・1851は下半部のみ失っている。壺は複合口縁をもつもの(1804・1842・1843)と直口のもの(1805・1806)に大別でき、複合口縁

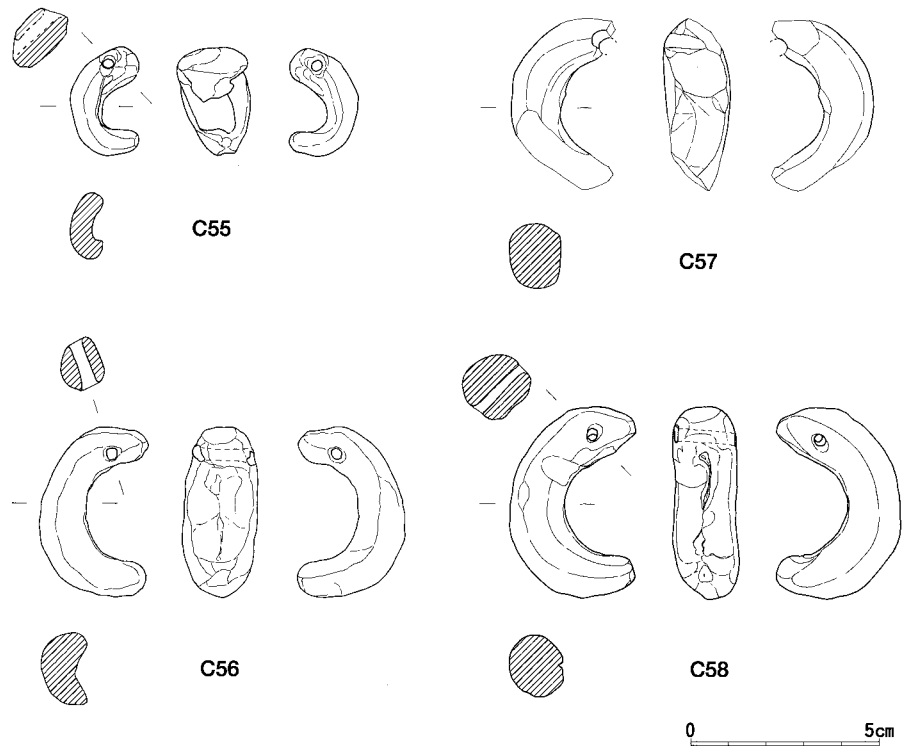


第504図 土器溜まり1出土遺物③ (1/4)



第505図 土器溜まり1出土遺物④ (1/4・1/2)

をもつものは退化傾向にあるもの(1804)、口縁部が長く延びるもの(1842)、強く屈曲するもの(1843)に細分可能である。小型丸底壺は精製品25点(1807~1830・1841)、粗製品9点(1831~1839)が出土している。形態は、体部と口縁高が等しいもの(1807・1808・1814~1818)、体部に対して口縁部が発達するもの(1809・1810)、口縁部が直立するもの(1811)、体部に対して口縁部が小



第506図 土器溜まり1出土遺物⑤(1/2)

さいもの(1812・1813・1819~1829)、口縁部がわずかに外反するもの(1830~1839・1841)に大別できる。1841の底部外面には、重なった3枚の葉の葉脈圧痕が認められ、焼成前に付いたと解される。甕は複合口縁をもつもの(1844~1846)、単純に外反するもの(1847~1853)に分けることができる。また1852・1853は口縁部が内湾気味に延び、端部を内面へわずかに摘んで平坦面を作出している。高杯は、杯部の口縁部がまっすぐ延び、長い脚柱部をもつものである。脚の裾部は大きく屈曲しており、透かし孔は施されていない。ただし、1855は脚柱部に円孔がある。1863は鉢である。ミニチュア土器は10点出土しており、いずれも内外面に指オサエの痕跡が顕著に残る。1864・1865は壺形、1866・1867は器台形と考えられる。1868~1873は鉢形で、1869~1871は口縁部が外反する。

土製品は土製円盤未成品1点、土錘5点、鏡形土製品4点、土製勾玉4点である。C45は土器片に途中まで孔が穿たれており、土製円盤の製作途中品と考えられる。C46~50は管状土錘である。C51~54は鏡形土製品で、鈕を摘み出しによって形成した後に、孔を穿っている。C55~58は土製勾玉で、腹部を大きく抉って断面形が「く」の字を呈するもの(C55・56)と、腹部を抉らずに断面形が円形を呈するもの(C57・58)がある。孔はいずれも焼成前に穿たれている。

これらの土器・土製模造品は河道1埋土中の出土資料であるが、同一層位かつ平面的に集中していることから一括遺物として捉えることができ、古・中・Iの特徴をもつ。

遺物の出土状況は前述したとおりであるが、土器が器種別によって出土位置に偏りが認められること、「入れ子」状態の土器が比較的多く出土していること、土器密集部分に南接して土製勾玉・土錘・鏡形土製品が散在していたことから、これらの遺物が意図的に廃棄されたことが看取でき、河道1北岸付近の最上層で執り行われた「水辺祭祀」に関わる行為を如実に物語る資料であるといえる。

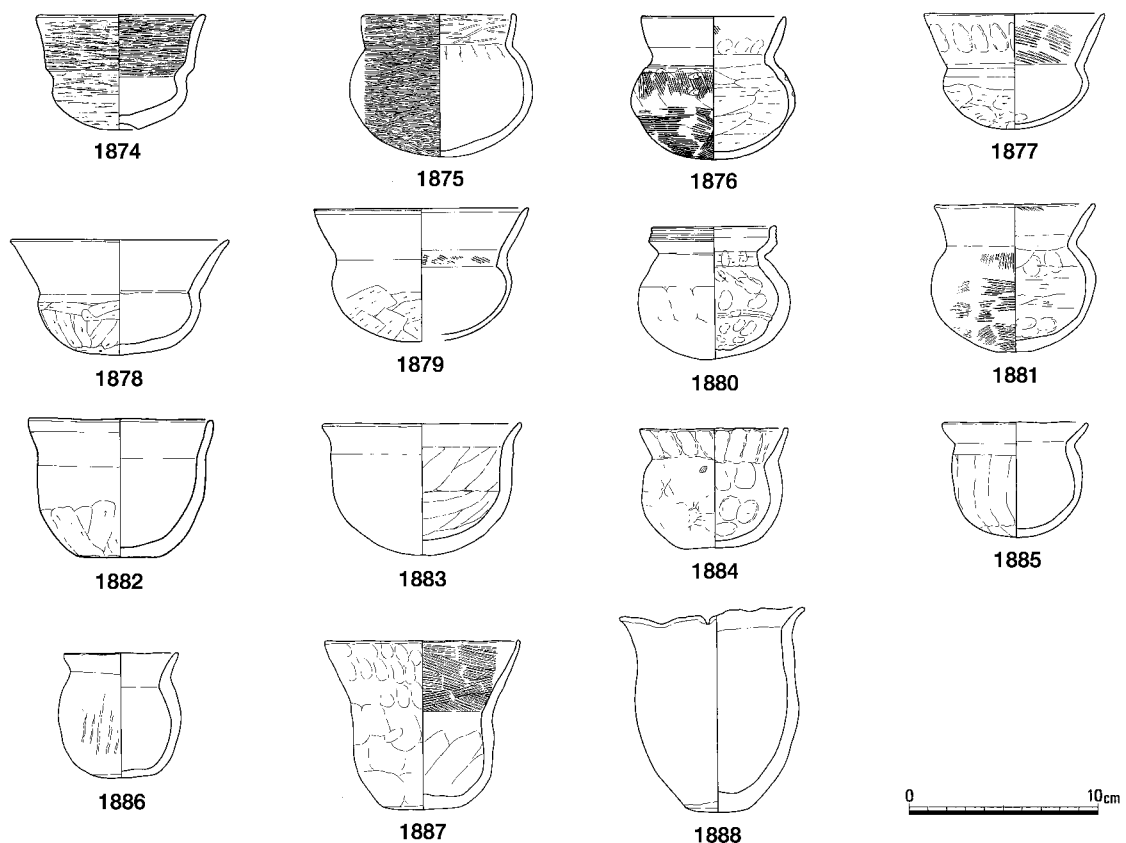
(米田)

8 河道

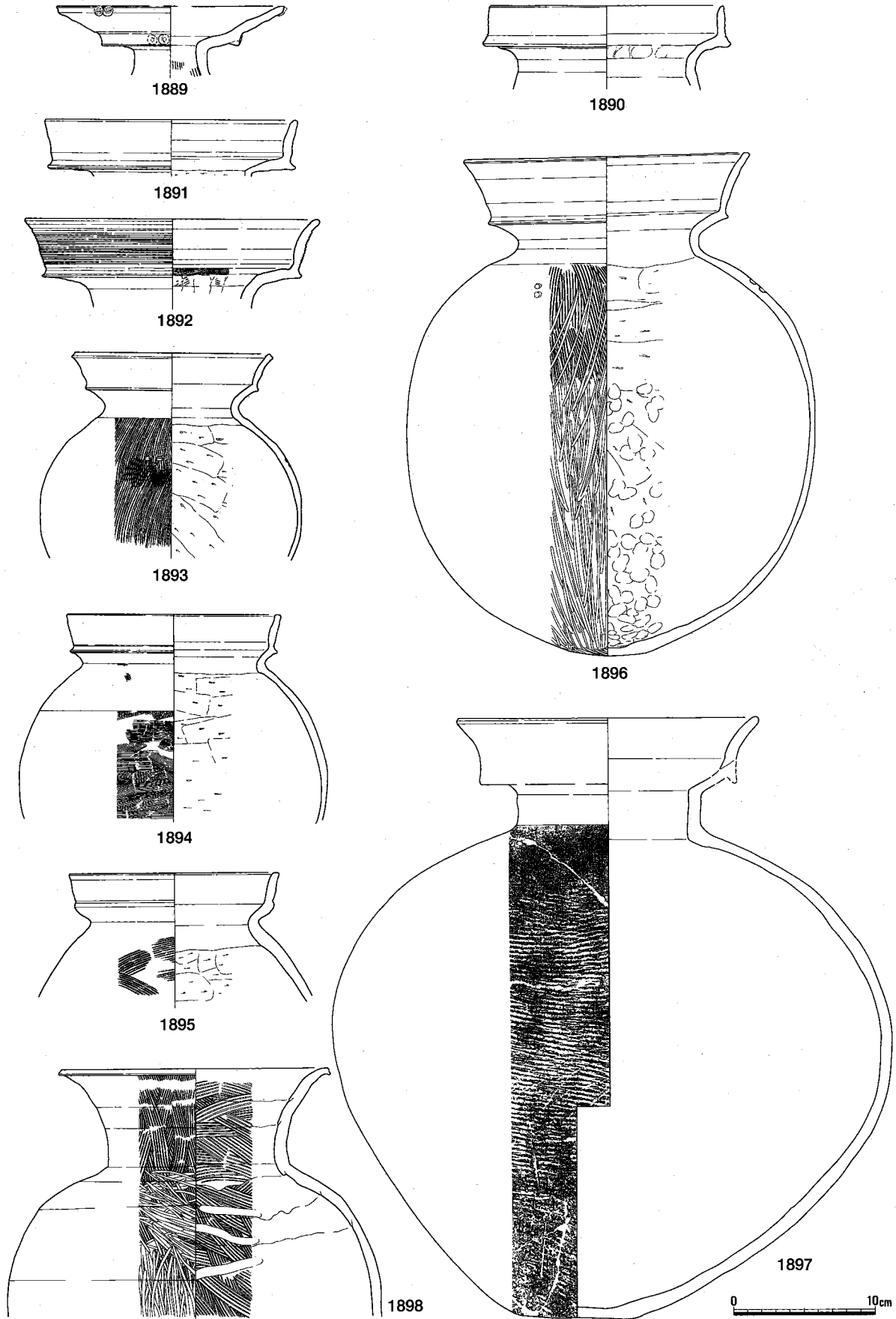
河道1 出土遺物 (第507～510図、巻頭図版4～8、図版14～28・55～58・63～82)

河道1は、木製品の多く出土した北岸上層の灰色粘土層、および河道の中央部分で弥生時代後期の堆積層直上にあたる砂礫層～暗褐色土から古墳時代前期～中期にかけての遺物が特に多く出土している。壺1874～1898、甕1899～1904、高杯1905～1912、鉢1913～1916、製塩土器1917、鼓形器系台1918・1919、甑1920、管玉J13がある。1874は二重口縁を呈して底部は凹んでいる。山陰系の小型丸底壺であると考えられる。1884～1888は指オサエが明瞭で、粗雑な造りであるといえる。1889は加飾二重口縁壺であり、口縁端部には円形浮文を施している。1890～1897は二重口縁の壺である。1898は外反する口縁部を持ち、外面にはハケメ後、ヘラミガキを施している。1889・1900はいわゆる吉備系甕である。1901～1904は口縁部を「く」の字に外反する口縁部を持ち、1901～1903の外面にはタタキの痕跡が明瞭に残る。1905は外反する口縁の上に直立する口縁部を持ち、内外面には横方向のヘラミガキを施す。胎土は精良である。1906の脚部内面はシボリで、内外面にもヘラミガキがみられる。1907～1912の脚部内面にはヘラケズリを施している。1912の脚部には穿孔がみられない。1913は椀状を呈しており、口縁部は丸く収めているものである。1914～1916は二重口縁を呈しており、底部は丸底になると考えられる。1917は全体の半分程度が残存し、被熱の程度は弱いものであった。1920は外面下半にタタキを施していることから、甑であると判断した。J13は碧玉製の管玉で、両面からの穿孔を行っている。

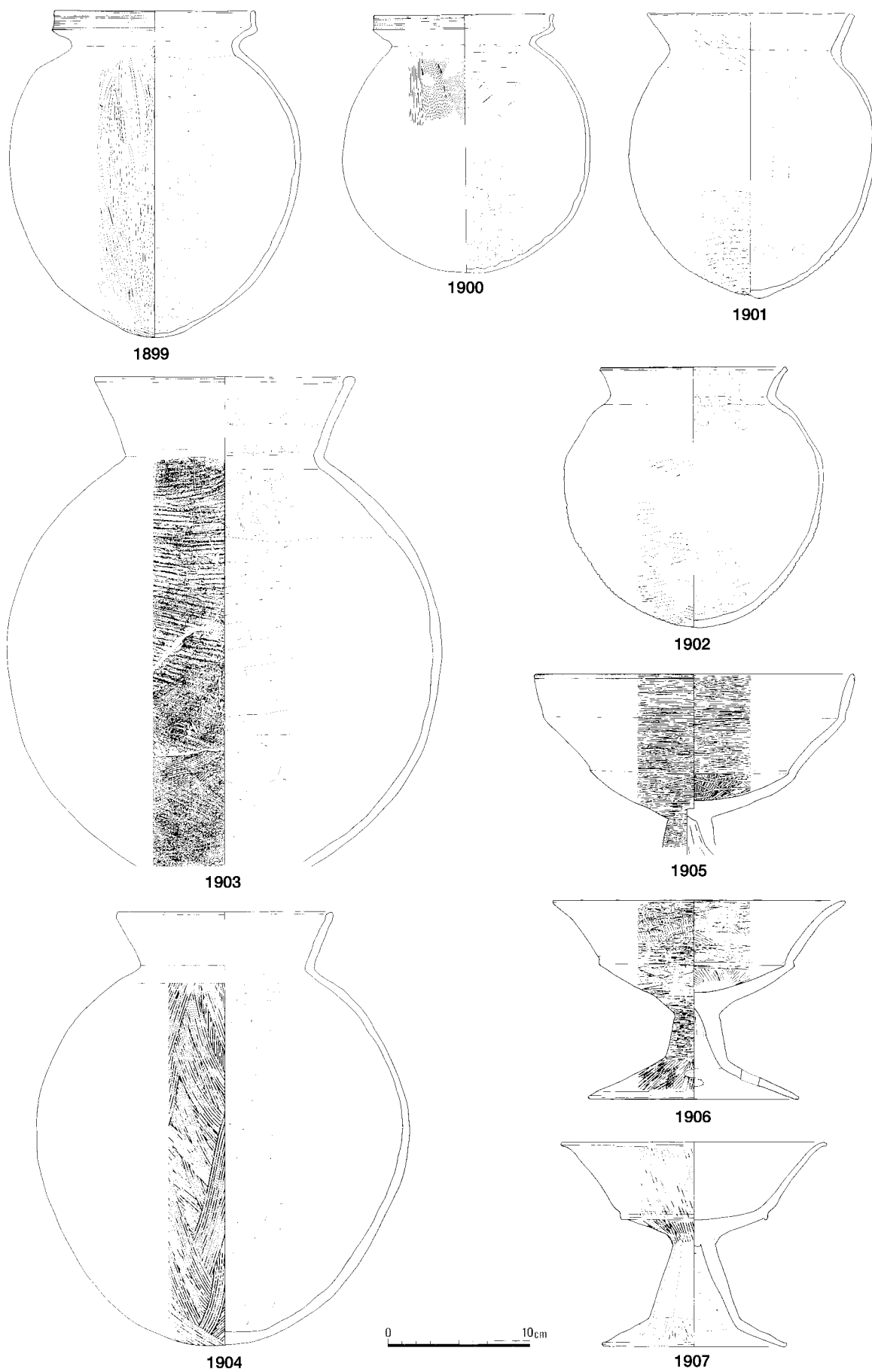
(時實)



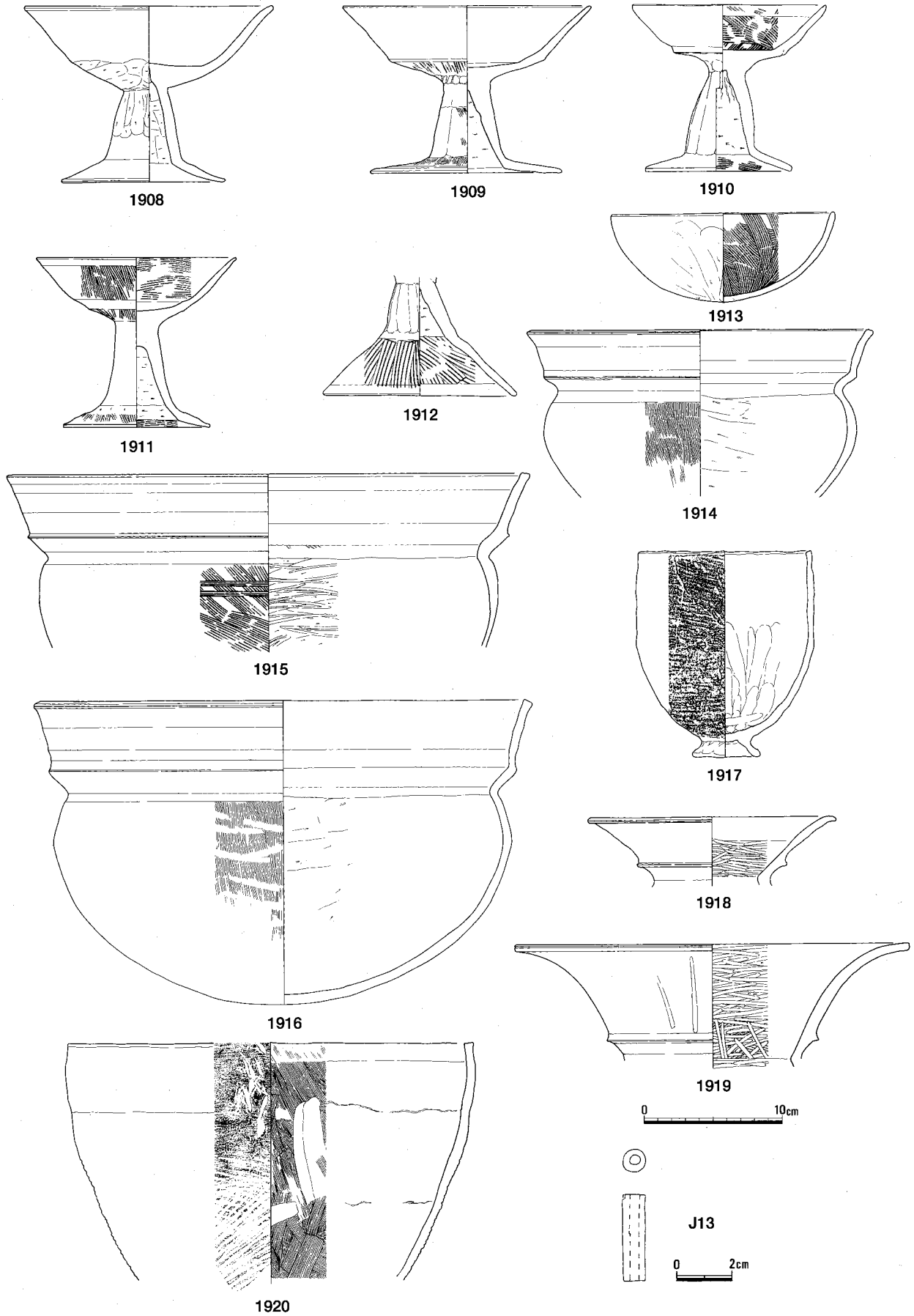
第507図 河道1 出土遺物① (1/4)



第508図 河道1出土遺物② (1/4)



第509図 河道1 出土遺物③ (1/4)



第510図 河道1出土遺物④ (1/4・1/2)

第8節 古墳時代後期の遺構・遺物

1 古墳時代後期の概要

古墳時代後期のおもな遺構は、竪穴住居13軒、掘立柱建物2棟、土壇10基、溝1条などを検出しており、前代から引き続いて、河道の両岸に集落がひろがっている状況が確認された。古墳時代前期・中期に比べると、竪穴住居をはじめとして遺構の検出数は少なくなり、古代には竪穴住居および掘立柱建物などが検出されなくなることから、この調査区において集落としての土地利用がなされるのは、古墳時代後期までであると考えられる。

竪穴住居には、中期と同様にカマドを付設する住居と付設しない住居があるが、カマドの位置はいずれも北辺の中心であり、「L」字形カマドもみられないことから、カマドの構造が同一のものへと変化しているのがわかる。カマドの廃棄方法も中期とは異なり、カマド本体を壊して廃棄するといった状況は観察できず、支脚が残されている例は検出されなかった。カマドで使用したであろう甕の破片などが、カマド内から出土している例が多くみられる。また、竪穴住居74のように、長辺が195cmという非常に小型の竪穴住居も検出しており、今までの類例からは古墳時代前期のものとも考えられるが伴う遺物に細片ながら須恵器が出土しているため、ここでは後期であると判断している。掘立柱建物のうちの1棟は、5×3間以上の規模を測る大型のものであった。

河道の北岸においては、須恵器の杯身・杯蓋を5個体重ねて配置している状況が検出された。これらは水辺における祭祀に関係するものと考えられる。このような祭祀は弥生時代から継続して、姿は変えながらも行われていることがわかった。(時實)

2 竪穴住居

竪穴住居71 (第398・511図)

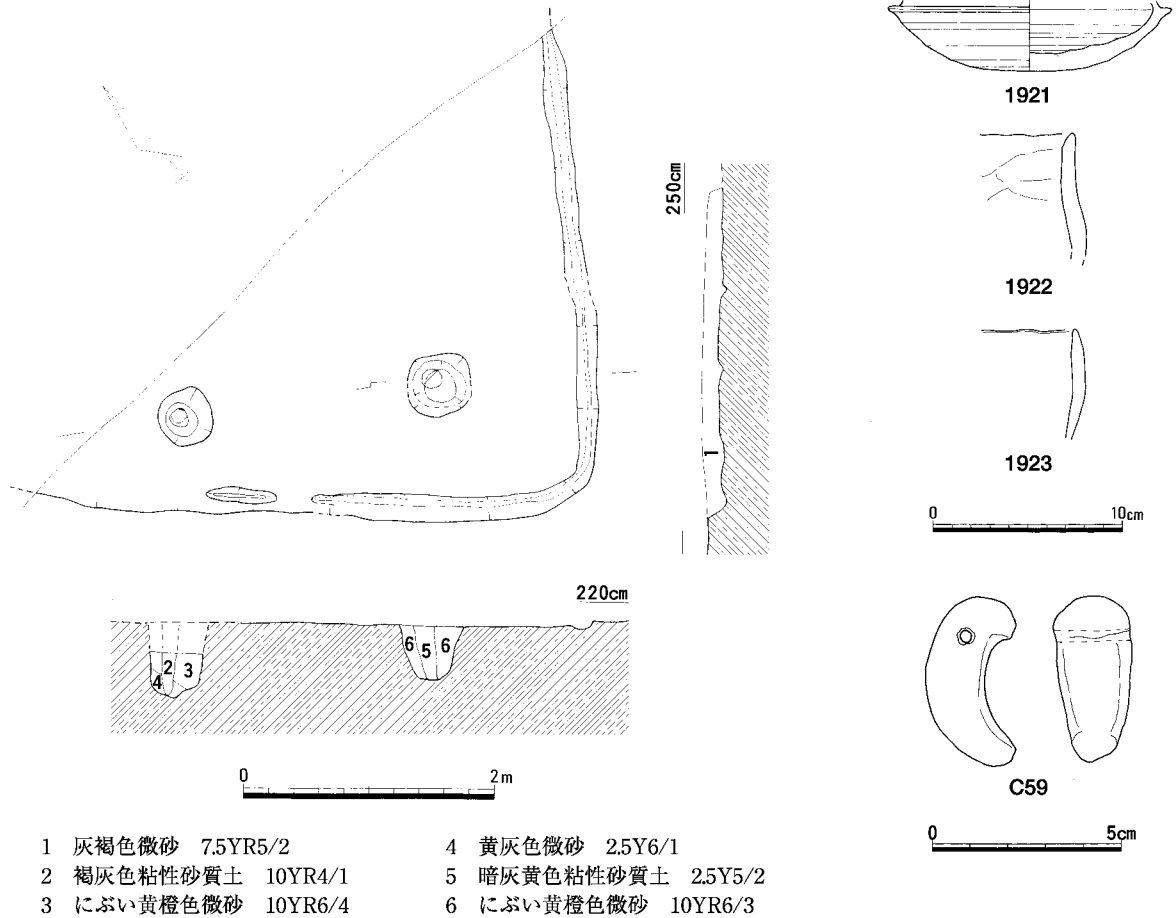
竪穴住居71は7Q区の北西隅に位置する。竪穴住居71はいわゆる条里溝(溝42)による削平を被っており、全体のほぼ半分をしめる部分については失われていた。そのため、全体の大きさの推測はできないが、ほぼ方形の竪穴住居で大きさが385×310cm以上を測る。住居の主軸はN-35°-Wである。竪穴住居71の周辺には壁体溝が掘削されていたものの、特に南西部については、隣接する弥生時代の竪穴住居1の埋土とこの竪穴住居71の埋土がよく似ていたため、明確に壁体溝を検出することができなかった。また、柱穴は2基を検出した。径約50cm、深さは検出面から40~60cmを測る。柱穴の検出状況からこの竪穴住居71は4本柱であったことが推測できよう。なお、調査をおこなった範囲ではカマドの痕跡を見つけることはできなかった。

住居内からは須恵器や土師器等が出土した。土器についてはいずれも破片であった。1921は須恵器杯身である。口縁端部が欠損している。1922・1923は製塩土器である。C59は土製品であり、勾玉を模倣している。長さ4.4cmで、精良な胎土である。

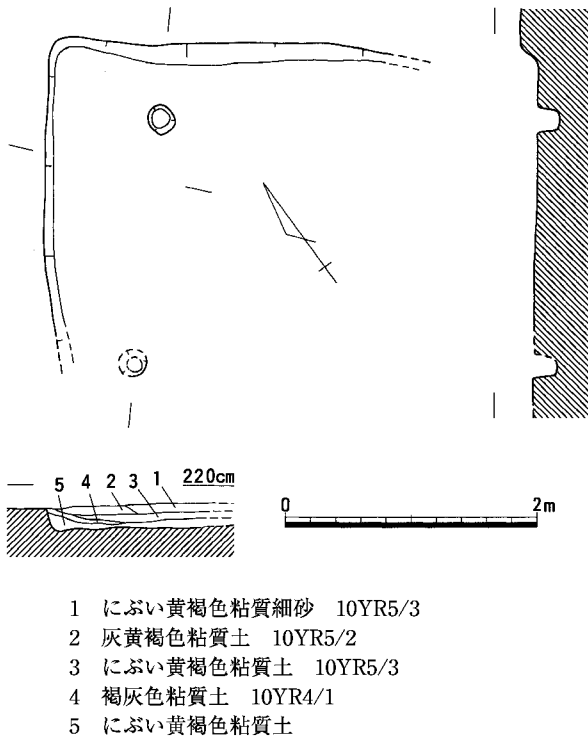
これらの出土遺物からこの竪穴住居71は6世紀後半に比定できる。(金田)

竪穴住居72 (第398・512図)

7Q区の北西部に位置し、竪穴住居の北西隅角部のみを検出した。住居の南東部は2区7Qの河道



第511図 竪穴住居71 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)



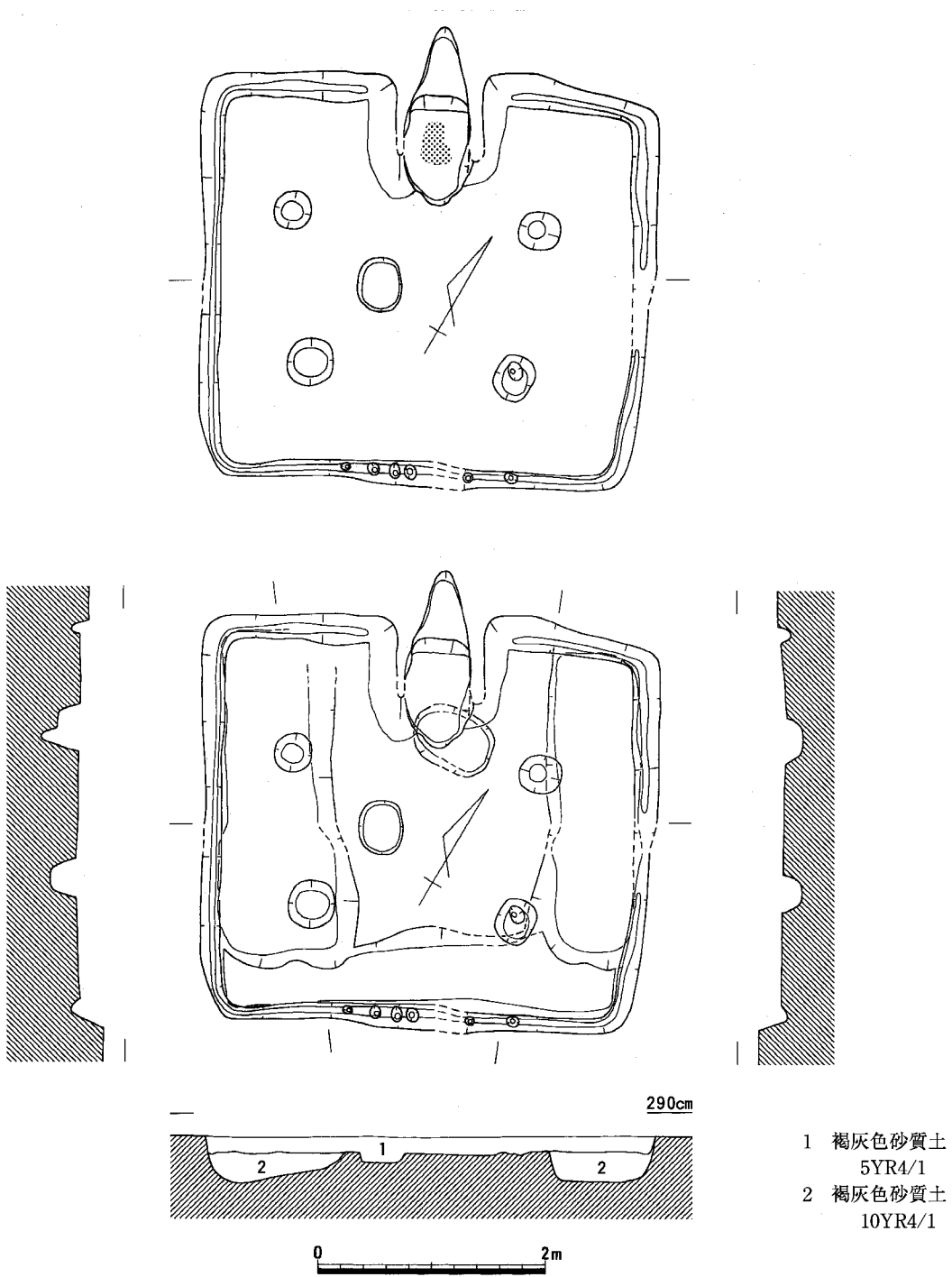
第512図 竪穴住居72 (1/60)

1北岸に立地し、氾濫によって最上層に溜まった灰色粘質土によって削平されていたために確認できなかった。平面形は方形を呈し、主軸はN-51°-Eである。規模は確認範囲が狭いために明らかでないが、少なくとも一辺240cm以上ある。深さは検出面から約15cm残存していた。壁面では壁体溝は確認できなかった。支柱穴は深さ20cm程度あり、現状では2本検出したが、本来は4本であったと考えられる。

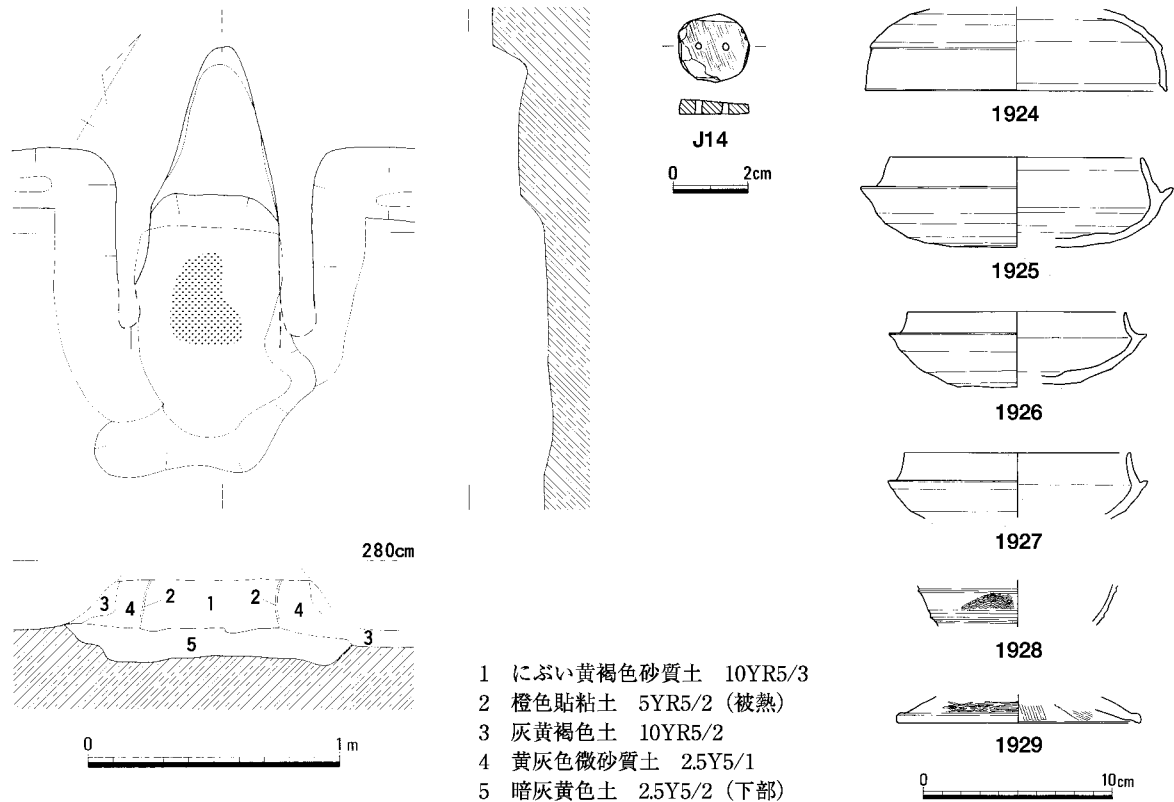
遺物は土師器の細片がわずかに出土したのみで、出土遺物から時期を特定することはできない。竪穴住居71と主軸をほぼ同じくしていることや、河道1北岸周辺に溜まった灰色粘質土の堆積より古いことから、古墳時代後期の範疇に収まると考えられる。(米田)

竪穴住居73 (第399・513・514図、図版45)

11Q区に位置し、竪穴住居56を切る。平面は主軸をN-30°-Wにとり、402×361cmの方形を呈し、北西辺にカマドが付く。床面海拔高は約255cmで、床面積は12.02㎡を測る。床面には4本の支柱穴と中央やや西よりに炭を伴う浅いピット1基がある。また壁体溝が周囲を巡り、南東辺の中央部では溝中に径10cm程度の杭状のピットがみられる。カマドは袖を粘土を貼って築いており、袖の先端部付近が焚き口になる。焚き口から燃焼部は浅い窪みになり、煙道には20cm程度の段を有し、ほとんど傾斜することもなく長さ50cmで煙出しになる。住居の床面を除去すると、カマド下部には73×55cmほどの



第513図 竪穴住居73 (1/60)



第514図 竪穴住居73カマド (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

楕円形の土壇があり、ほかの部分では「コ」の字形に溝状に下部構造の掘り方が存在する。掘り方は南西辺で幅約60cm、南東と北東辺で約50cmを測り、深さは床面から25cmほどで、除湿の機能が想定される。

遺物は埋土中と、下部構造内などから出土した。J14は石材不明の双孔円盤で、計量値は18.8×18×4mmで、孔径は1.6mm、重量は2gを測る。南東辺の壁体溝中から出土した。1924は床下出土の須恵器杯蓋で口径16cm、1925は壁体溝出土の須恵器杯身で口径13.3cm、1927は床下出土の須恵器有蓋高杯で口径11.6cmを測る。1928は須恵器高杯で、体部に櫛描き波状文が巡る。1929は土師器高杯で、外面にはヘラミガキ、内面にはハケメがみられ端部は面をもち、内面に段が付く。小片であり、形態的特徴からも混入品と考えられる。

時期は出土遺物から、古・後・Iと判断される。

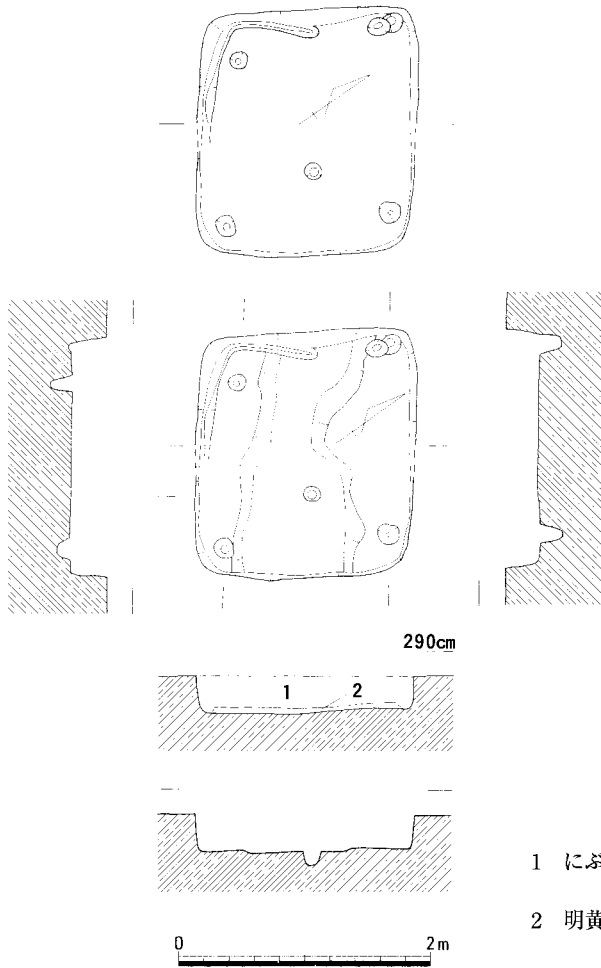
(杉山)

竪穴住居74 (第399・515図、図版45)

11Q区で竪穴住居75の西に位置し、平面は主軸をN-55°-Wにとり、195×175cmの方形を呈する。床面の海拔高は、貼り床上面で約245cm、貼り床除去後の掘り方底面で約240cmを測り、床面積は2.71㎡である。貼り床上面では掘り方の四隅とほぼ中央に柱穴があり、壁体溝は西隅でのみ平面的に検出できた。火処のような被熱面は確認されないが、柱穴のあり方から小型の住居と判断した。貼り床の粘質土を除去すると、中央が東西に約5cm低く、その両側がベッド状に高くなっているが、機能は明確ではない。

出土遺物は、土器の小片のみで時期が明確なものはない。したがって、住居の時期は、古・前・I期の竪穴住居34を切ることと周辺の状況から古・後頃と推察される。

(杉山)



第515図 竪穴住居74 (1/60)

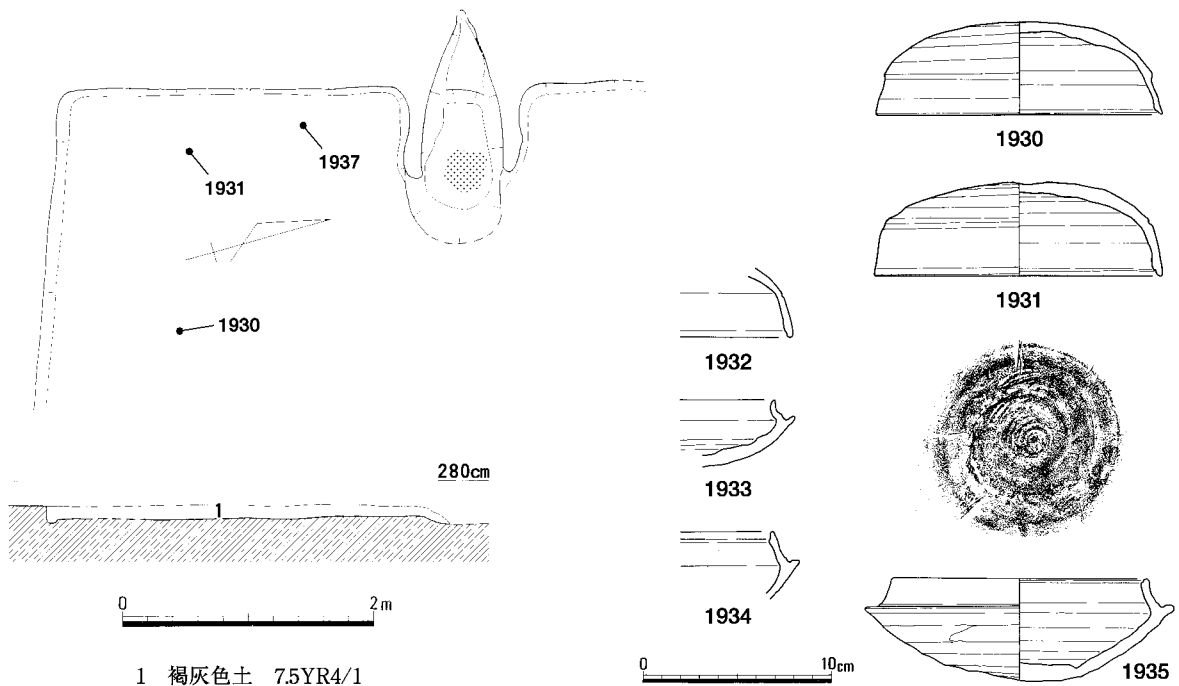
竪穴住居75 (第399・516・517図、図版46)

11Q区に位置し、東半と北側を建物の基礎によって大きく削平を受けている。平面は主軸をN-15°-Wにとる方形を呈し、床面海拔高は約250cmを測る。支柱穴は精査したが確認されず、また、壁体溝も土層断面では確認されるが、平面的には明確にできなかった。カマドは西辺に造られている。袖が粘土の貼り付けかどうかは不明瞭であったが、他の住居の状況から本住居のカマドの袖も粘土貼り付けと推察される。カマドは焚き口から燃焼部にかけて、浅い窪み状になり、袖の先端よりもやや住居内側に燃焼部がある。燃焼部から煙道にかけては13cmほどの段を有し、56cmほどの距離を緩やかに上って煙出しになる。カマド内の埋土は4層に分層でき、1935の須恵器や1936の土師器は第1層土に含まれてい

- 1 にぶい黄橙色土 10YR6/3
- 2 明黄褐色土 10YR6/6

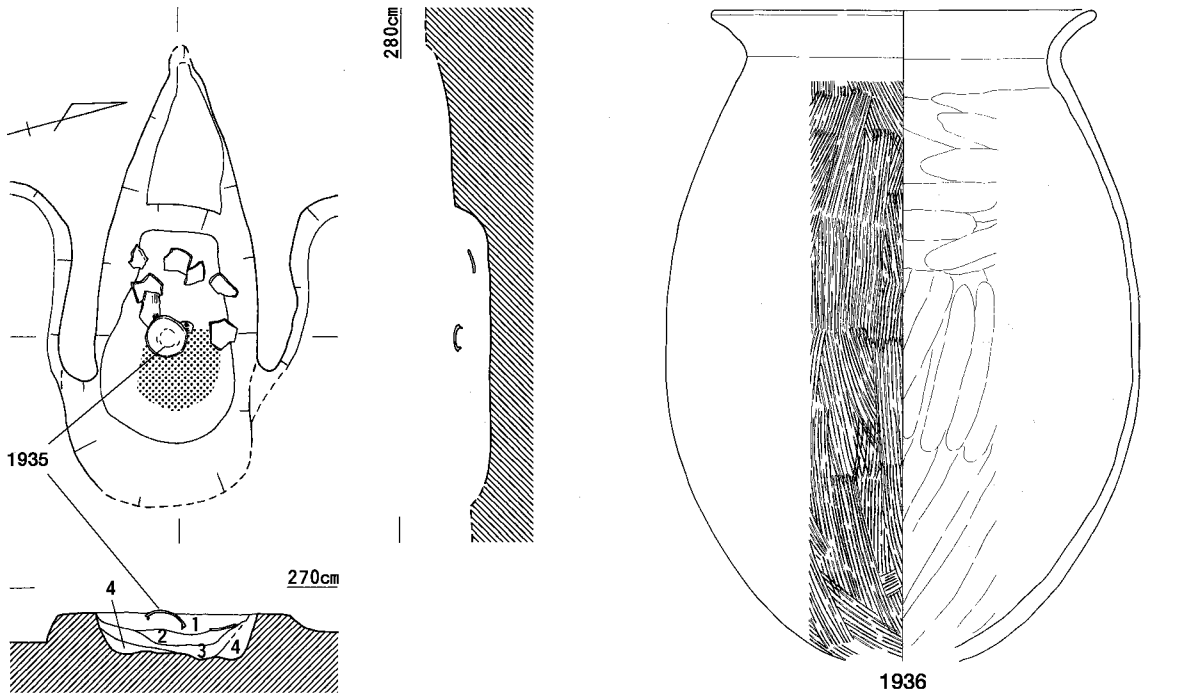
たが、1935は支脚として利用されていない。

1930・1931・1937・1940は床面直上、1935・1936がカマド内、1938・1939は床下出土である。



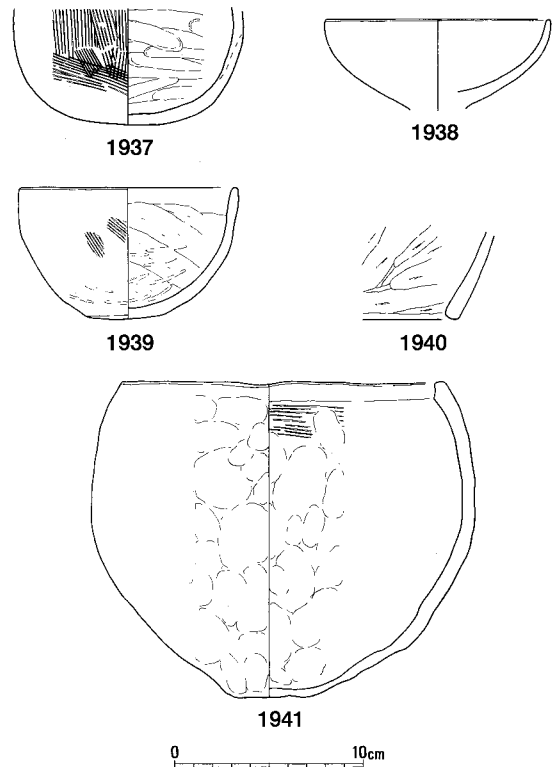
- 1 褐灰色土 7.5YR4/1

第516図 竪穴住居75 (1/60)・出土遺物① (1/4)



- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 褐灰色土 7.5YR5/1 | 3 褐灰色土 10YR4/1 |
| 2 褐灰色土 10YR4/1 | 4 暗褐色土 7.5YR3/4 |

1930～1932は須恵器杯蓋で、1930が口径15.1cm、器高4.8cm、1931が口径15cm、器高4.9cmである。1933～1935は須恵器杯身で、1935は口径13.4cm、器高5.4cmで内底面に同心円の当て具痕が残る。1936は土師器の長胴甕で口径20.4cm、器高約34.5cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は丸く収まる。胴部は外面がハケメ、内面は上半が横方向のヘラケズリ後ヨコナデ、下半がタテ方向のヘラケズリ後ナデアゲを行う。1937は土師器甕で、外面はハケメで内面はヨコナデである。1938は土師器高杯で、1939は土師器鉢、1940が土師器甌である。1939は底部外面もハケメを行い平底を意識している。1941は製塩土器で、内外とも指オサエが明瞭に残る。

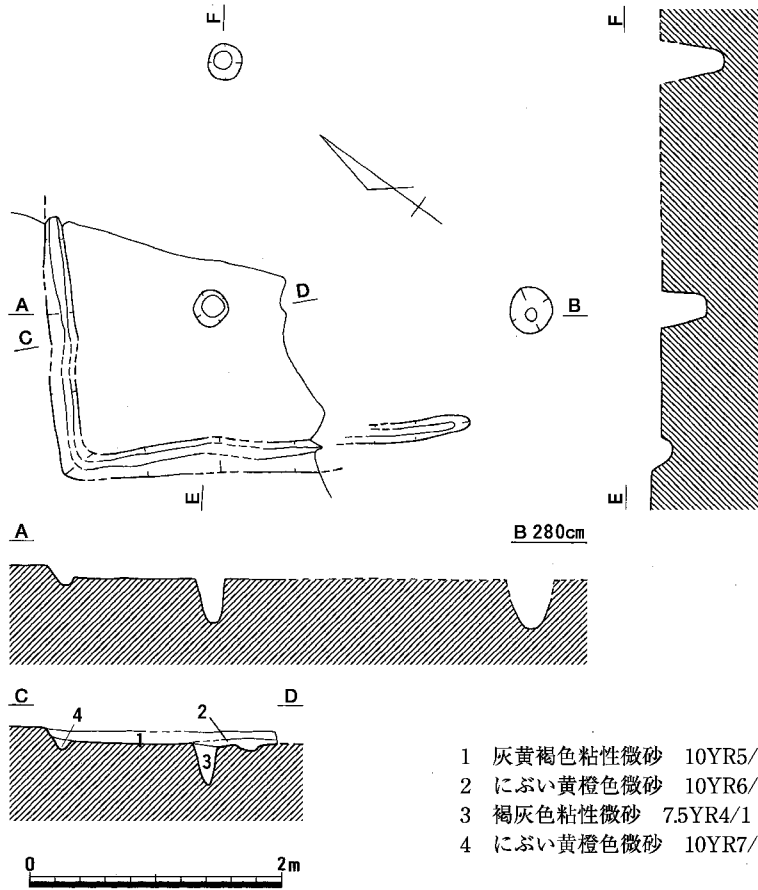


時期は、出土遺物から古・後・Iと判断される。 第517図 竪穴住居75カマド (1/30)・出土遺物 (杉山) ② (1/4)

竪穴住居76 (第399・518図)

3区11Qの中央部北端に位置している方形の住居である。削平を受けているために規模は不明であるものの残存する規模が残りの比較的良い北西辺は205cmで、柱穴間の距離から一辺の長さを推定すると約5m程度であると考えられる。

床面も、北西のコーナー部分で残存しているのみであり、検出面からの深さは約10cm、海拔高は



第518図 竪穴住居76 (1/60)

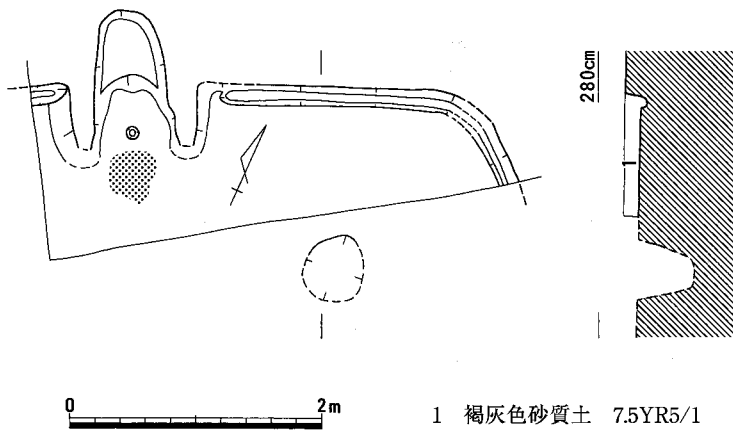
250cmであった。柱穴は東側の1本を除く3本を検出することができ、掘り方の直径は28~36cmであった。しかし柱痕跡などを検出できたものはなかった。

壁体溝を持っており、幅は広いところで26cm、狭いところで13cm、検出面からの深さは16cmを測るものである。埋土は基本的に微砂で、床面より上層は1層ないし2層であった。

出土遺物は、図示できるような大きさのものは出土していないが、須恵器片が出土していることなどから、この住居の時期については古墳時代後期のものであろうと推測される。(時實)

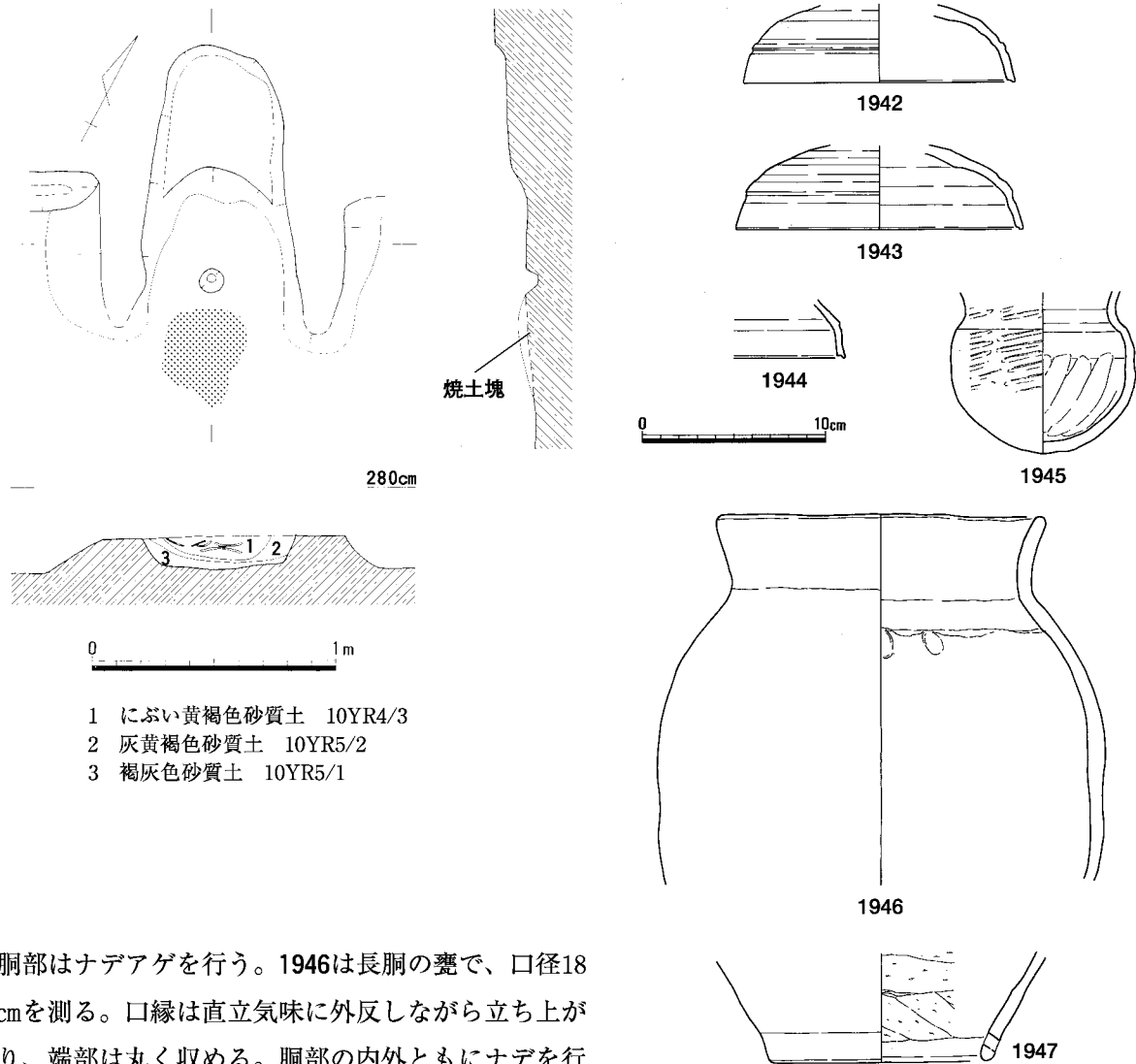
竪穴住居77 (第399・519・520図、図版46)

12Q区で調査区西端に位置し、住居の大半は調査区外に伸びており、規模の詳細は不明である。平面は主軸をN-67°-Wにとり、北側にカマドの付く方形を呈し、床面海拔高は約250cmを測る。主柱穴は1本だけが検出できたが、その位置から4本柱と推察される。カマドの燃焼部は袖の先端部よりやや内側にあり、燃焼部から煙道部にかけては約6cmの段を有し、緩やかに傾斜して長さ約45cmで煙出しになる。燃焼部のほぼ中央に径10cmのピットがあるが、支柱の据え付け痕と考えられ、住居の廃棄時に支柱を抜き取ったと推察される。



第519図 竪穴住居77 (1/60)

遺物は、主にカマド内の第1層中から出土している。1942~1944は須恵器の杯蓋で、1942の口径は14.7cm、1943の口径が15cmを測る。いずれも口縁端部に段を有す。1945~1947はカマド内出土の土師器である。1945は甕で最大胴径10cmを測る。口縁部から胴部には平行タタキがみられ、一部ナデを行う。内面は口縁部が丁寧なナデで、



- 1 におい黄褐色砂質土 10YR4/3
- 2 灰黄褐色砂質土 10YR5/2
- 3 褐灰色砂質土 10YR5/1

胴部はナデアゲを行う。1946は長胴の甕で、口径18cmを測る。口縁は直立気味に外反しながら立ち上がり、端部は丸く収める。胴部の内外ともにナデアゲを行う。1947は甑の底部で底径11.4cmを測り、端部近くに径6mmの円孔があく。

時期は、出土遺物から古・後・Ⅱと判断される。

(杉山)

竪穴住居78 (第399・521図)

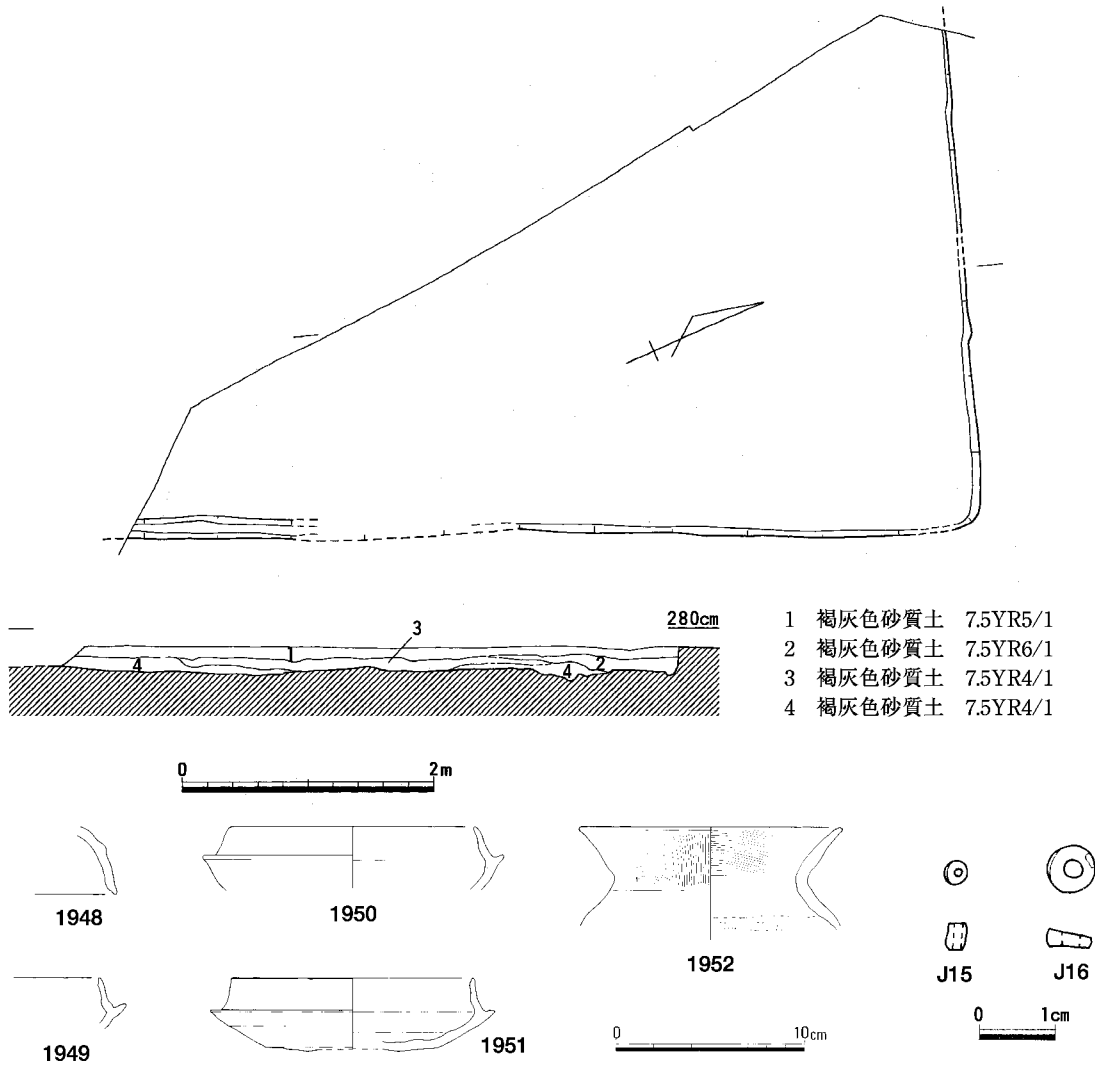
竪穴住居78は、3区の中央部に位置する。これはグリッド名でいうと11Qになる。この住居の残存状況は、西側部の半分以上が損失している。わずかに残る東側部には竪穴住居40・42が重なり、これらを切っている。住居の規模は、長軸長は残存部だけでも680cmを測る。平面形状は方形を呈し、主軸はN-23°-Wである。柱穴は1本も確認されず、また中央穴などもはっきりしない。壁体溝は全周にあったと思われるが、はっきりしない部分が多い。

出土遺物には、須恵器・土師器・玉類が存在する。このうち1948~1951は須恵器の杯である。径の復元できる1950・1951は15cm前後になり、古・後・Ⅱになると思われる。1952は土師器の甕で、口縁部の形態は、「く」の字形である。外面は縦ハケメで内面は横ハケメが残る。内面胴部は横ヘラケズリされている。玉類でJ15は、ガラス製の小玉である。色調は緑色である。J16は滑石製の白玉である。

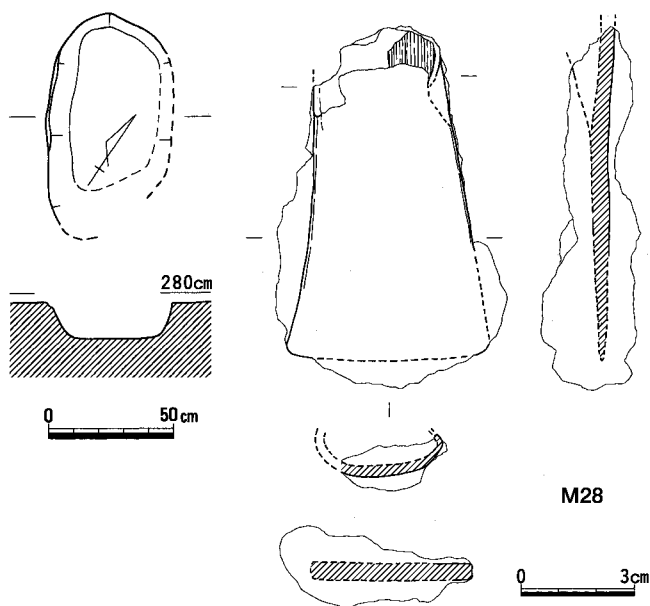
この住居の時期は古・後・Ⅱである。

(小林)

第520図 竪穴住居77カマド (1/30)・
出土遺物 (1/4)



第521図 竪穴住居78 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/1)



第522図 竪穴住居79カマド (1/30)・出土遺物 (1/2)

竪穴住居79 (第399・522図)

12R区に位置する焼土塊を伴う被熱面で、検出状況からカマドと判断した。しかしながら、これに伴う住居の掘り方や柱穴は検出できなかった。カマドの主軸はN-34°-Wである。被熱範囲は90×50cmで、被熱面の底面海拔高は約263cmを測る。

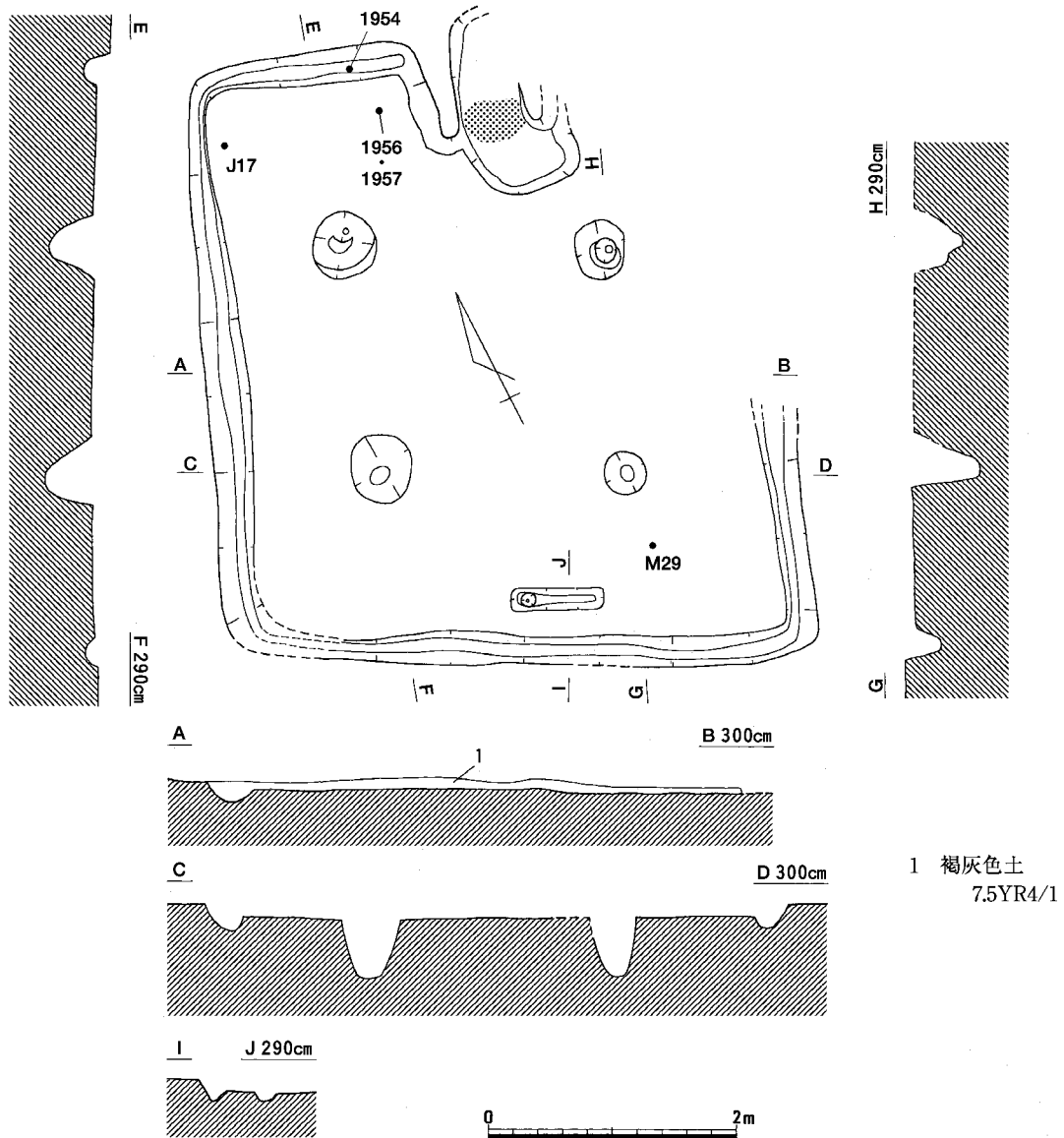
遺物は、埋土中から袋状鉄斧M28が出土した。現存長88mm、幅は刃部で55mm、袋部で35mmを測る。厚さは約4mmで側縁は撥形に開く。

時期は、検出状況や周辺の状況から古・後期と判断される。(杉山)

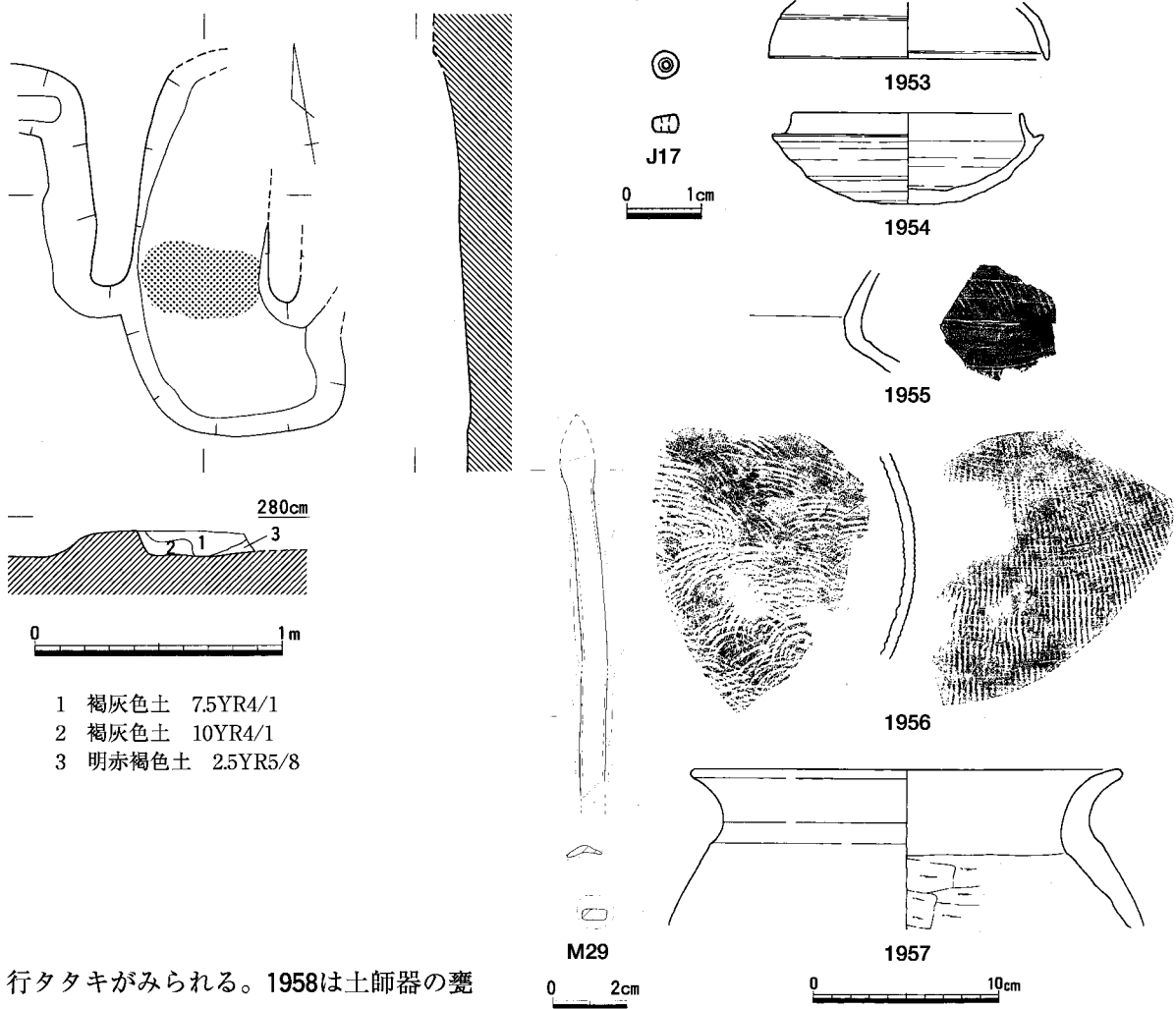
竪穴住居80 (第399・523・524図、図版47)

11R区の調査区東端で、住居の北西部は調査区外に延びる。平面は主軸をN-25°-Eにとり、501×474cmの方形を呈し、床面積は推定で22.68㎡を測る。床面海拔高は約260cmを測り、壁面の周囲には壁体溝が巡り、床面には支柱穴4本と、南壁から約45cm中に入った位置に75×18cmの溝状のピットがある。溝状ピットの中にはさらに杭状のピットがあり、壁際のほぼ中央付近に位置することから入り口に関連する施設の可能性がある。カマドは北辺に付き、焚き口はやや皿状に窪み、燃烧部はほぼ袖の先端部に位置する。燃烧部から煙道にかけては段を有さずに煙り出しに至る。

遺物はカマド周辺の埋土からの出土が目立った。J17は北西の壁際付近で出土したガラス小玉で、径約3.6mm、厚さ2.5mm、重量0.04gを測る。M29は鉄製のヤリガンナで柄の部分の厚みは6mmを測る。1953は須恵器の杯蓋で口径14.8cm、1954は須恵器杯身で口径12.4cm、器高4.9cmを測る。杯蓋1953の口縁内面には浅い段が巡り、外面の天井部と口縁部の境界の段もほとんど沈線により表現される。1955は須恵器壺の肩部片で、外面に平行タタキがみられる。1956は須恵器甕の胴部片で、外面には平



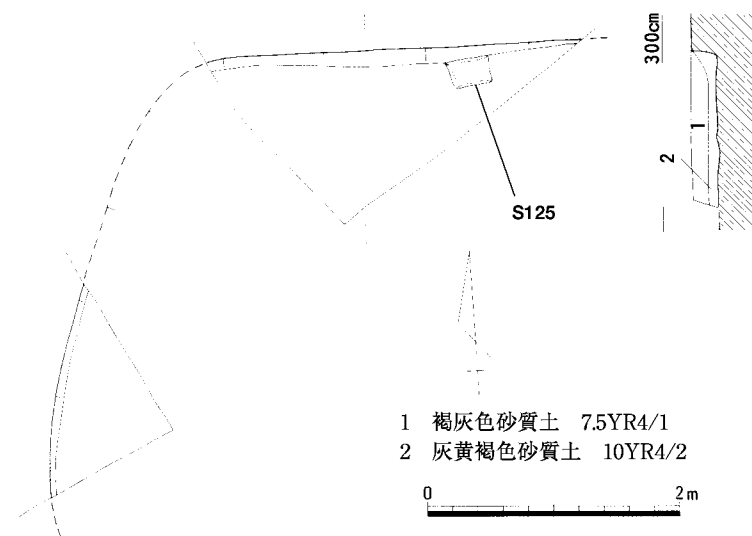
第523図 竪穴住居80 (1/60)



行タタキがみられる。1958は土師器の甕で、口径22.8cmを測る。

時期は、出土遺物から古・後・Iと判断される。(杉山)

第524図 竪穴住居80カマド (1/30)・出土遺物 (1/1・1/2・1/4)

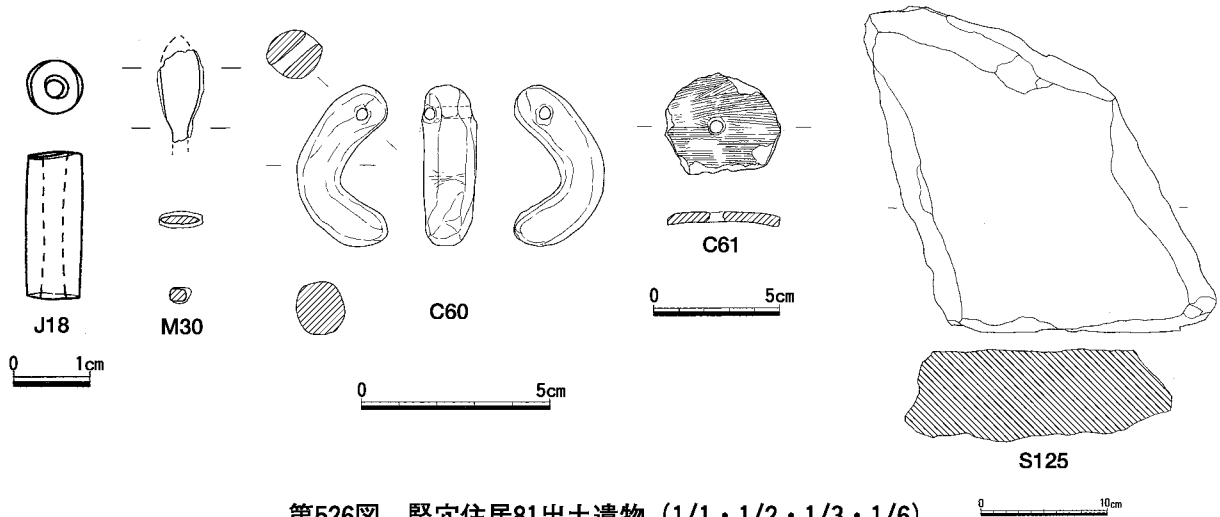


第525図 竪穴住居81 (1/60)

竪穴住居81 (第399・525・526図)

12Q区で調査区西端に位置し、西辺の壁は確認調査のT7で検出されている。

平面は主軸をN-88°-Eにとる不整形を呈すると思われるが、西と北壁の一部のみの調査であるため規模などは不明である。埋土は約20cm残っており、床面海拔高は約258cmを測る。壁体溝はなく、柱穴も確認



第526図 豎穴住居81出土遺物 (1/1・1/2・1/3・1/6)

できなかった。ほぼ垂直に立ち上がる壁面の北の壁際で床面直上よりわずかに浮いた状態で S125の台石が出土した。

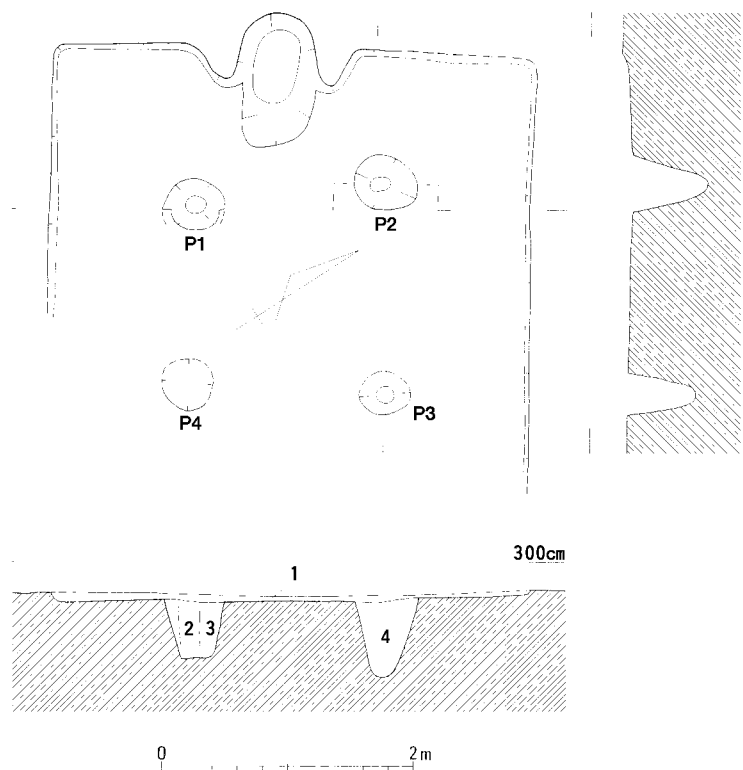
図示した遺物はこの台石近くで出土した。J18は碧玉製の管玉で、計測値は19.5×7.5mmで、孔径は2.5～3.5mmの両側穿孔である。M30は有茎の鉄鏃で、先端と茎部が欠損しているが、刃部の厚みは約2.5mm、現存重量約3.2gを測る。C60は土製勾玉で、計測値は43×24mm、厚さ14.5mm、孔径3mm、重量は10.3gである。C61は土師器甕を転用した紡錘車で、中央に5.5mmの穿孔があり、径は45×39mm、重量は10.8gを測る。S125は、計測値は260×279.5mmで、厚さ73mm、重量6500gを測る台石である。特に加工はしておらず、自然石をそのまま、もしくは荒割りするだけで使用している。石材は花崗岩である。

時期は、出土土器が小片のため詳細は不明だが、周辺の状況とT7の豎穴住居3との関係から5世紀末～6世紀初頭以前と推察される。(杉山)

豎穴住居82 (第399・527・528図、図版47)

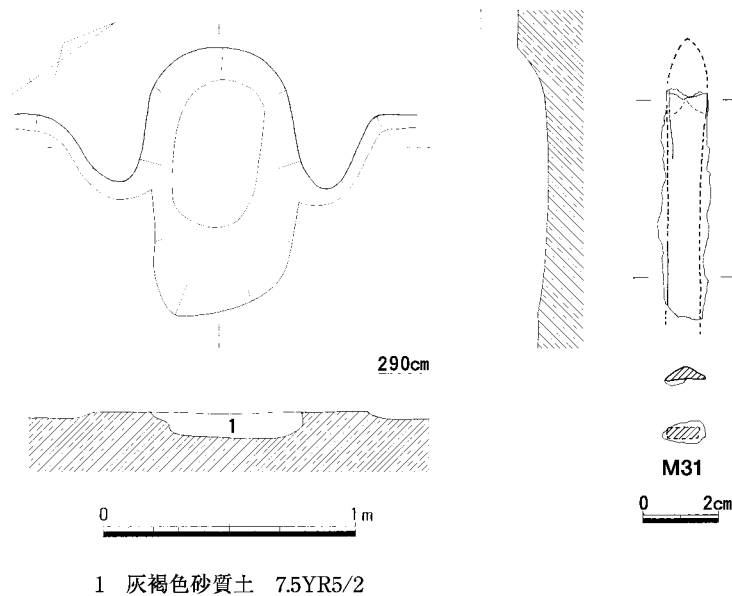
12Q区の調査区西端に位置し、住居の南東辺は調査区外に延びる。

平面は主軸をN-56°-Eにとり、381×推定335cmの方形を呈する。埋土は5cm程度しかなく、後



- | | |
|------------------|----------------|
| 1 褐灰色砂質土 10YR4/1 | 3 褐灰色土 10YR5/1 |
| 2 暗褐灰色土 10YR3/3 | 4 柱穴埋土 |

第527図 豎穴住居82 (1/60)



第528図 竪穴住居82カマド (1/30)・出土遺物 (1/2)

世の削平が著しかったことを示している。床面海拔高は約275cmを測り、床面には支柱穴が4本確認できたのみで、壁体溝と火処はない。柱穴はいずれも南西と北東の壁から115cm内側に40~50cmほどの円形の掘り方をもち、P1では径15cm程度の柱痕跡が土層断面で確認できる。柱間はP1-P2とP3-P4間が150cmで、P1-P4間が140cm、P2-P3間が165cmを測る。柱穴の深さは約45~60cmと深い。

カマドは北西辺に築かれている。焚き口と燃焼部は床面から約

10cmほど下がった窪みになっており、ほぼ袖の先端部に位置する。煙道部が残っていないので、燃焼部との間に段を有するかどうかは不明である。
遺物は、土師器と須恵器の小片などが出土しているが、図化できる大きさのものはない。M31はP2の埋土中から出土した鉄製のヤリガンナである。柄部の厚さは約7mmで刃部にはウラスキがあるが浅い。

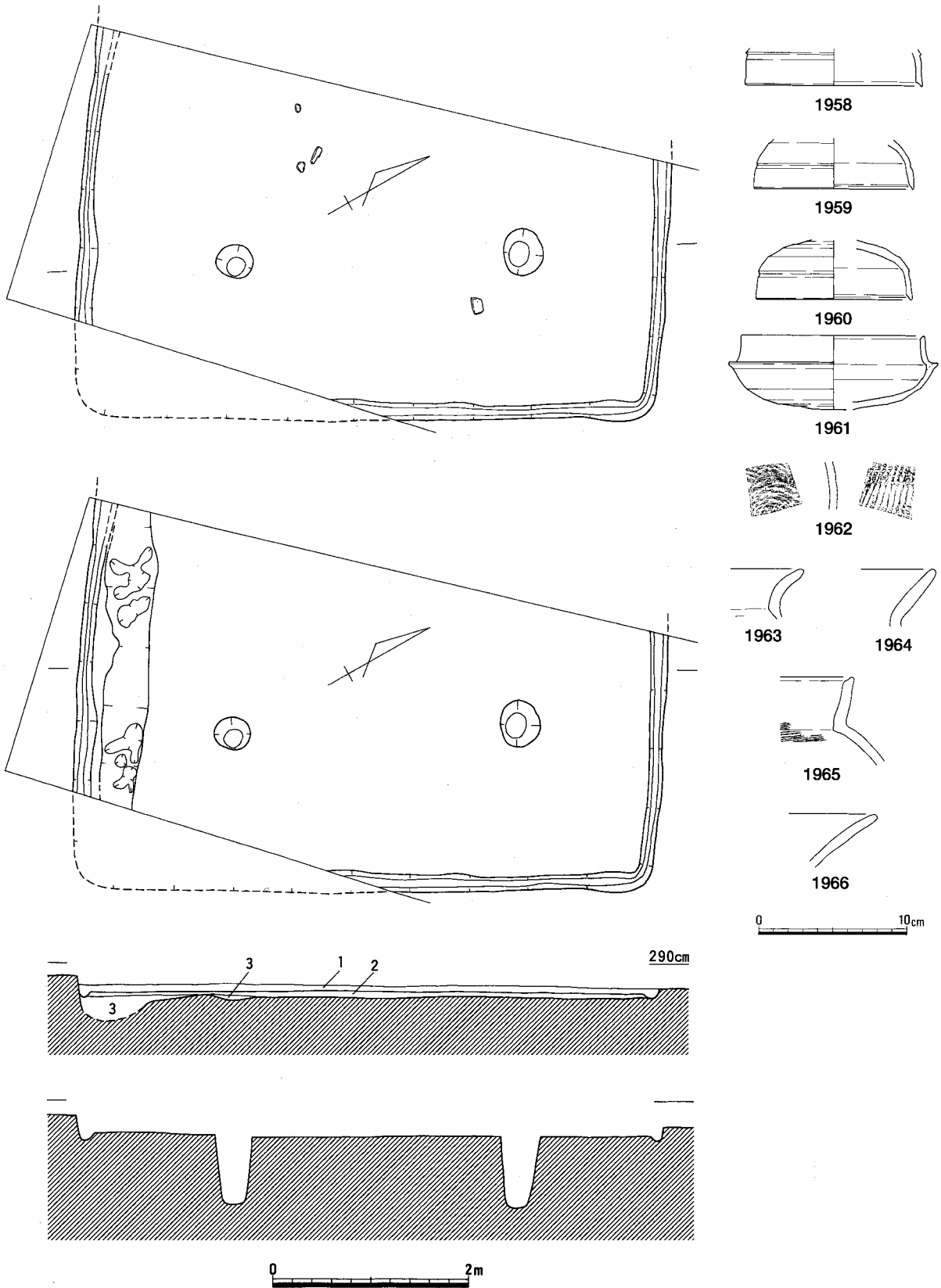
時期は、検出状況と周辺の状況から古・後期頃と推察される。(杉山)

竪穴住居83 (第399・529図、図版47)

竪穴住居83は、3区南側端部に位置する。これはグリッド名でいうと13Qになる。この住居の北西半分と南側の一部は調査区外のため明らかではない。他の遺構との切り合い関係は、竪穴住居49は切り、掘立柱建物3に切られる。住居の規模は一辺600cmであり、平面形状は方形である。主軸はN-31°-Wであり、座標北から約30°振れるグループに入る。柱穴は本来4本あったと思われるが、調査できたのは南東側の2本のみである。2本ある柱穴の規模は40~50cmと小さく、確認面からの深さは70~75cm前後になる。中央穴やカマドは、今回の調査区内からは確認できなかった。壁体溝は15~20cm前後の幅で、調査区内の全周に存在した。またこの住居の南西辺沿いには、幅約120cm前後の掘り方が存在する。この掘り方は深い箇所では床面下から約25cm前後掘られる。この幅は約70cm前後あり、底面の凹凸が激しい(第529図中段の左側)。また、この掘り方は住居の床を補強する目的があると思われ、県内には他にも例が存在する。

出土遺物には、須恵器と土師器がある。1958~1962は須恵器で、このうち1958~1960は杯蓋である。杯蓋のうち、1958は稜をもつ。1959・1960は稜の部分が凹線で表現される。杯身の1961は口径に比べて器高がまだ高いタイプである。1962は甕の破片である。1963・1966は土師器片で、1965は口縁部が直口気味である。これらの土器は多少の時期差はあるが、古・後・Iになる。

この住居の規模は先述のとおり一辺600cmであるが、これは古・後の時期では、今回の調査で検出された規模が確実な住居の中で最も大きくなる。(小林)



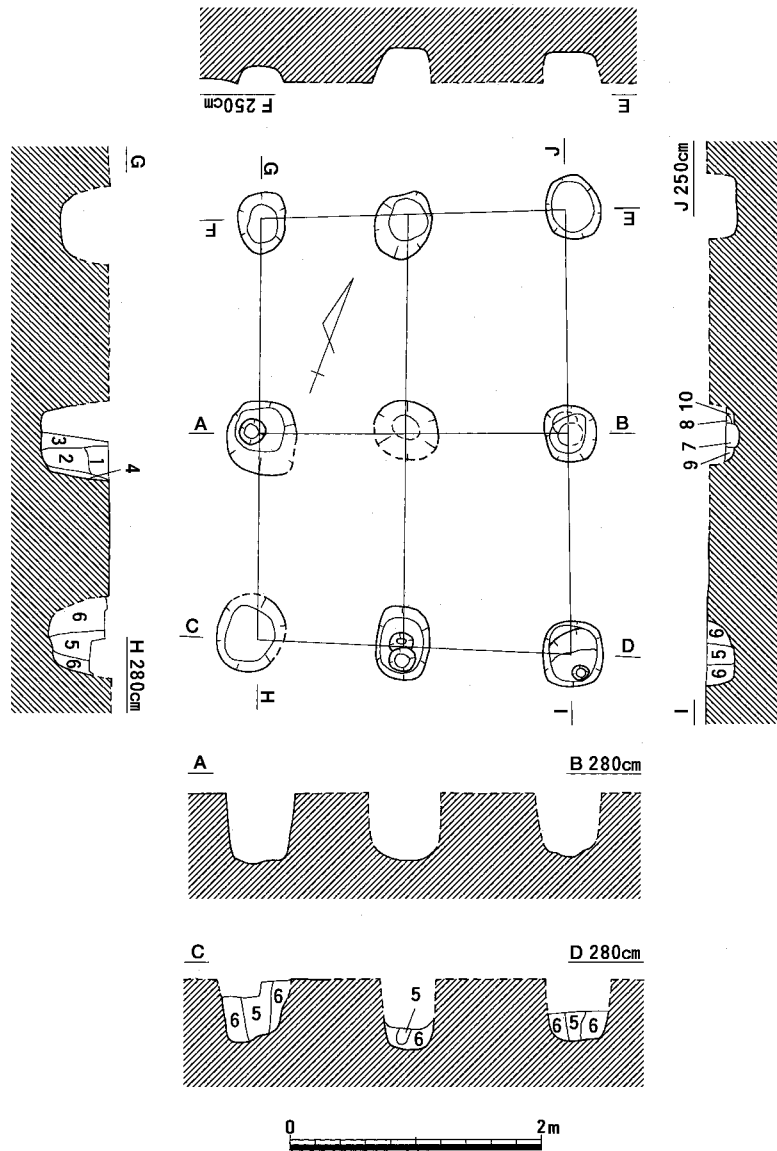
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1
- 2 褐灰色粘質土 7.5YR4/1
- 3 明黄褐色粘質土 2.5Y6/6

第529図 竪穴住居83 (1/60)・出土遺物 (1/4)

3 掘立柱建物

掘立柱建物2 (第399・530図、図版48)

11Q区に検出した掘立柱建物である。検出した柱穴から2×2間の総柱建物である。建物の規模は、桁行の全長が408cm、梁間の全長が249cmを測る。柱穴の平面形は円形を基本とするもので、長径60～45cmを測る。検出面からの深さは、最も深いもので約55cmを測る。検出時の観察では、竪穴住居55、同58の壁体溝を切断する状況がみられたことから、それらの竪穴住居よりは新しいことが分かる。建物の長軸の方向は、N-22°-Wを示している。建物の時期については、それを決定付ける遺物はないが、周辺の遺構との関係や、検出状況などから古・後・Ⅲに属するものと考えられる。(井上)



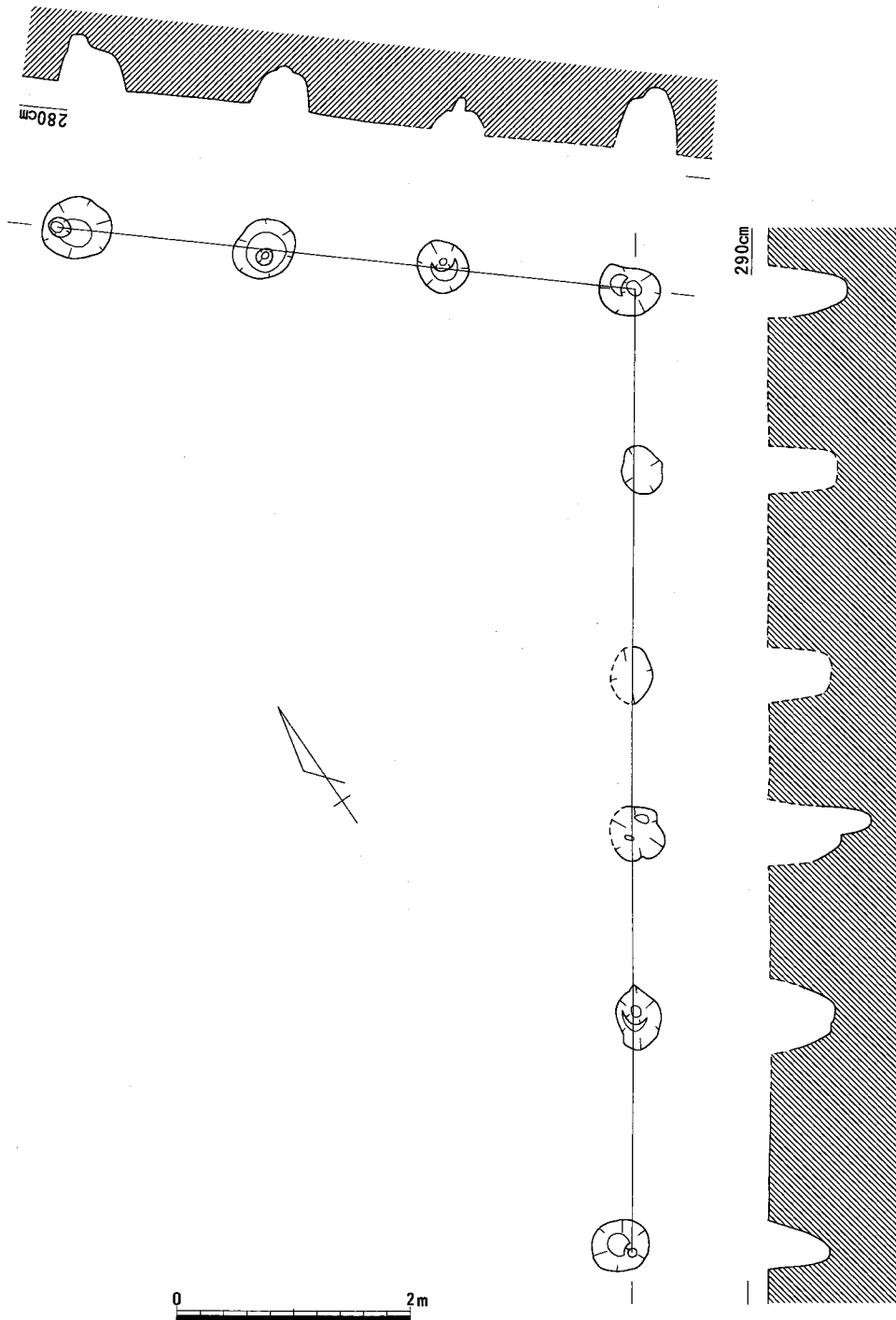
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 灰黄褐色微砂 10YR5/2 | 6 褐灰色粘性砂質土 7.5YR4/1 |
| 2 暗褐色粘質土 10YR3/3 | 7 褐灰色粘質土 10YR4/1 |
| 3 褐灰色粘性砂質土 10YR4/1 | 8 褐灰色粘性砂質土 10YR5/1 |
| 4 にぶい黄橙色粘質土 10YR6/4 | 9 褐灰色粘性砂質土 10YR3/1 |
| 5 黒褐色粘質土 7.5YR3/1 | 10 浅黄色粘性砂質土 2.5Y7/4 |

第530図 掘立柱建物2 (1/60)

掘立柱建物3 (第399・531図)

12Q区の調査区西端に位置し、建物本体は調査区外に広がるため、側柱のみを検出した。棟方向はN-34°-Eの5×3間の建物である。柱穴は円形で桁行846cm、梁間510cmで柱間距離は桁方向が150~180cm、梁方向が138~204cmとまちまちである。

時期は、出土遺物が土師器の小片のみで詳細は不明だが、柱穴が古・後・Iの竪穴住居83の埋土上面から掘り込まれていることから、古・後期後半と推察される。(杉山)

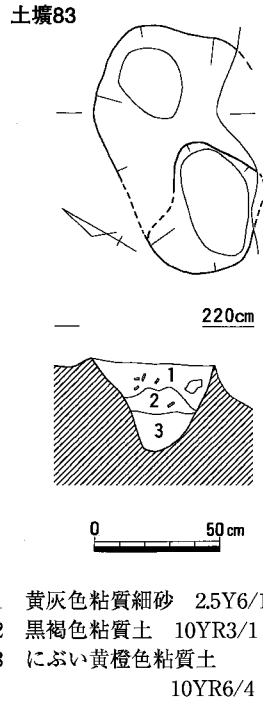
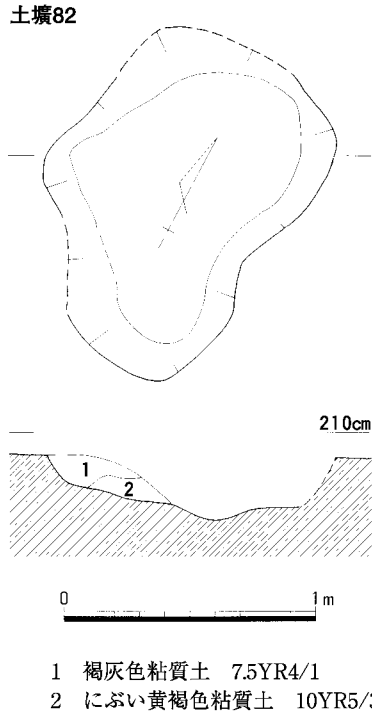


第531図 掘立柱建物3 (1/60)

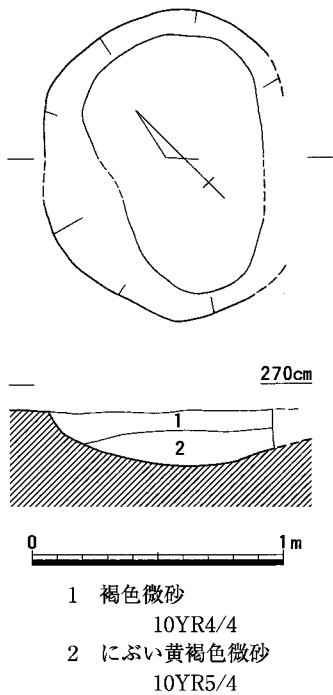
4 土壙

土壙82 (第398・532図)

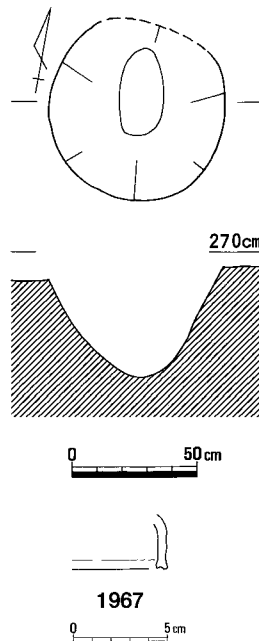
6 Q区のほぼ中央部に位置する不定形の土壙である。上面を中世の溝54によって削平されており、本来の規模・形状は不明である。残存部での長径140cm、短径85cm、深さ23cmを測り、底面には起伏



第532図 土壙82・83 (1/30)



第533図 土壙84 (1/30)



第534図 土壙85 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

がある。遺物は土器小片が出土したのみであるが、埋土等から判断すると古墳時代後期の遺構と推定される。(岡本)

土壙83 (第399・532図)

6 Q区のほぼ中央に位置する不整な楕円形の土壙である。南側は後世の削平を受けており、現状で長さ102cm、深さ35cmを測る。壁は急傾斜し、底面には柱穴状の窪みが認められる。遺物は土器片のみであるが、古墳時代後期の遺構と推定される。(岡本)

土壙84 (第399・533図)

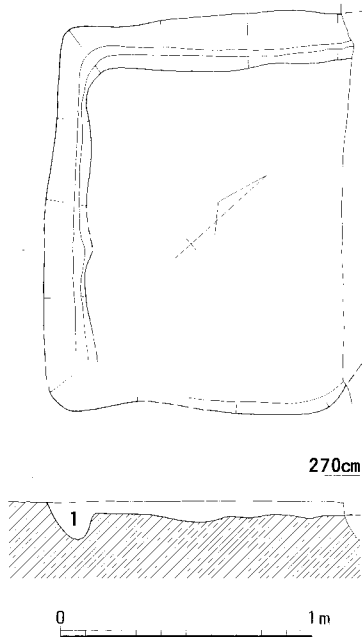
3区11Qに位置している楕円形の土壙である。規模は長径124cm、深さ22.5cmを測り、断面の形状は浅い碗状を呈すると考えられる。出土遺物は少量であったものの、時期は古墳時代後期であると考えられる。(時實)

土壙85 (第399・534図)

土壙85は、3区中央部のやや北側に位置する。グリッド名では11Qである。北西側には竪穴住居35、東側に竪穴住居60、南西側に竪穴住居35が存在する。規模は、長軸長74cm、短軸長70cmで平面形状は円形である。確認面からの深さは44cmで、断面形状はA-bである。1967は須恵器の杯蓋である。時期は古・後・Iである。(小林)

土壙86 (第399・535図)

土壙86は11Q区に位置する。堅穴住居57により上面を削平されている。土壙86は方形を呈し、一辺約160cm以上の大きさを測る。北辺と西辺には壁体溝を思わせるような溝が施されている。土壙86の周辺は堅穴住居が切り合って検出されており、これらの住居群と関連して掘削されたものであるかもしれない。時期は古墳時代後期に比定できよう。(金田)



1 明黄褐色土 10YR6/6

第535図 土壙86 (1/30)

土壙87 (第399・536図)

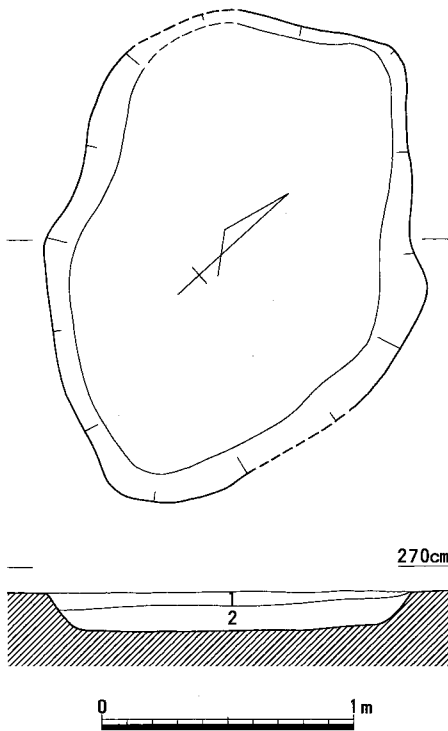
3区12Qで検出した不整形の土壙であり、規模は長径206cm、短径145cm、深さ16cmを測り、断面の形状は浅い皿状を呈しているものである。時期は、細片の出土遺物から、古墳時代後期であると判断した。(時實)

土壙88 (第399・537図)

11Q区の堅穴住居75の東に位置する。平面は62×57cmの円形を呈し、深さは24cmで底面海拔高は245cmを測る。土壙内には須恵器大甕の底部1968が埋め込まれているが、埋土は不明である。

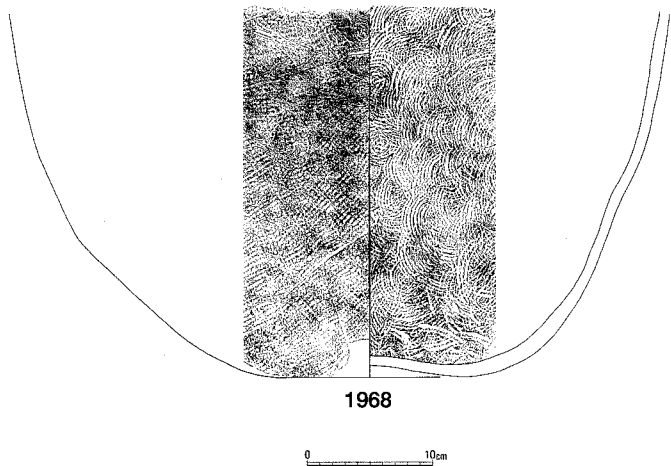
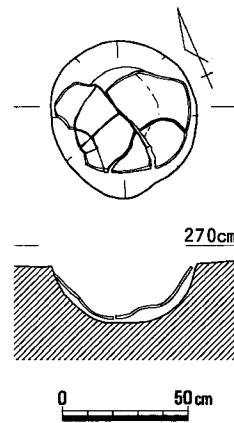
周辺の堅穴住居などの遺構の検出状況から上面は削平を受けていると考えられる。

時期は、出土遺物と周辺の状況から古・後期と判断される。(杉山)

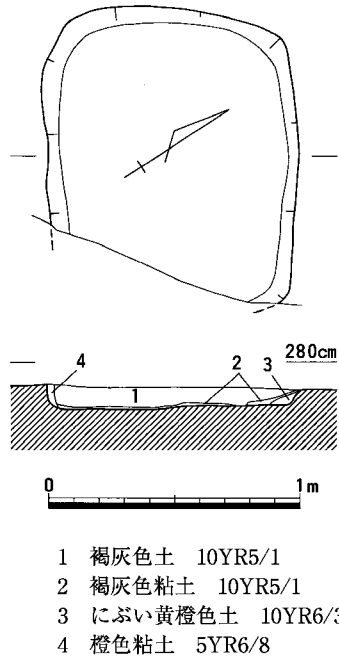


1 褐灰色細砂 10YR5/1
2 黒褐色粘性微砂 10YR3/1

第536図 土壙87 (1/30)



第537図 土壙88 (1/30)・
出土遺物 (1/6)



第538図 土壌89 (1/30)

土壌89 (第399・538図)

12R区で調査区西端に位置する。平面は南北100cmで東西長は推定130cmの隅丸方形を呈し、深さは検出面から9cm、底面海拔高は261cmを測る。埋土は4層に分層でき、第1層は埋め戻し土で炭を含んでいる。第2～4層は意図的に貼られた粘土と考えられ、被熱により赤化している。機能としては、高熱を伴う作業に関連する炉と考えられるが、出土遺物がないため詳細は不明である。

時期は、周辺の状態から古・後期頃と推察される。(杉山)

土壌90 (第399・539図)

12P区で調査区西端に位置し、竪穴住居77を切る。平面は東西長150cmの方形で、南側は調査区外に延びる。壁面は比較的垂直に掘り込まれており、深さは検出面から23cmで、底面海拔高は237cmを測る。底面は凹凸が顕著で、南へ向かって緩やかに下がる。

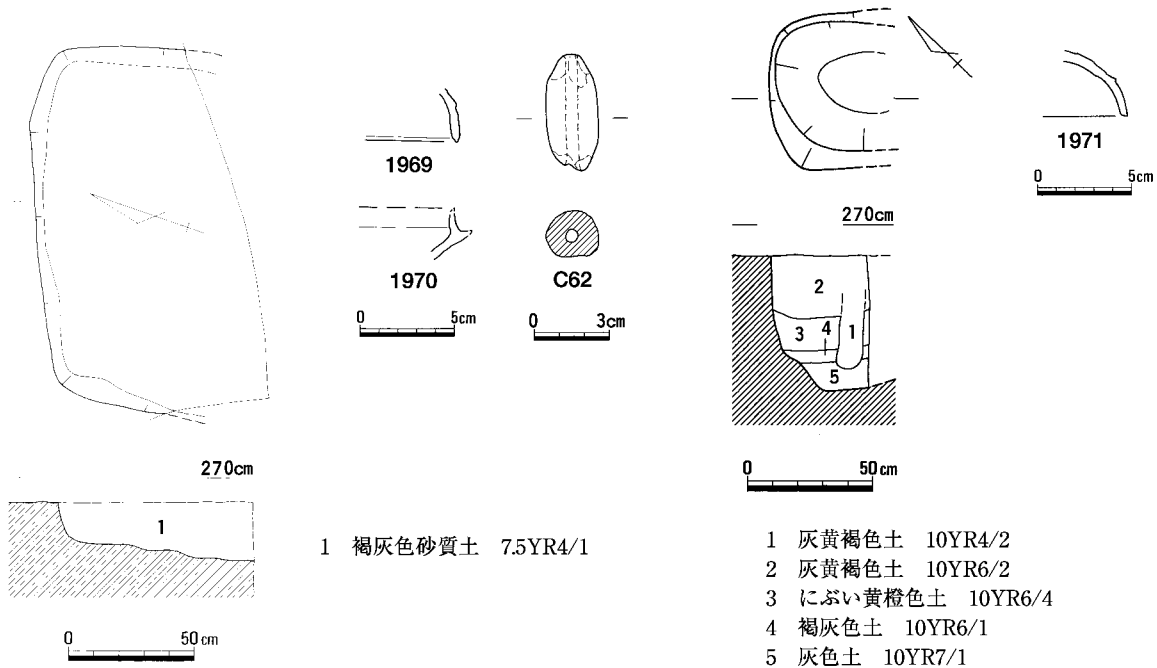
出土遺物は、須恵器杯蓋1969、須恵器杯身1970と土錘C62がある。

時期は、出土遺物と周辺の状態から古・後・Ⅲと判断される。

(杉山)

土壌91 (第399・540図)

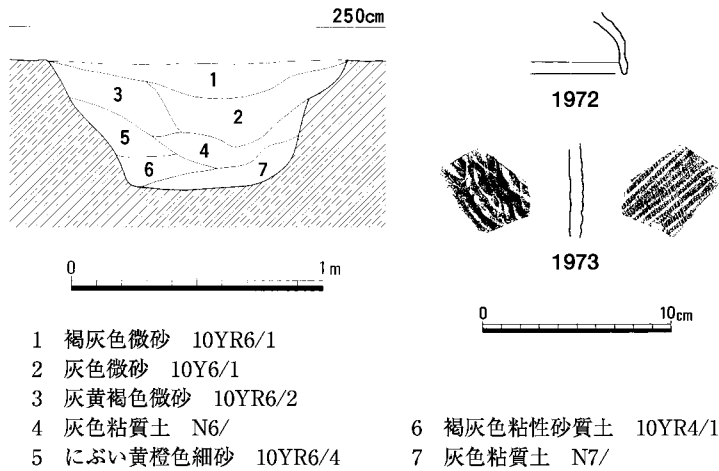
土壌91は、3区南側の端部に位置する。グリッド名では13Rになる。この土壌の南東側半分は、調査区外であり不明である。北西側には近接して竪穴住居70が存在する。土壌の規模は、長軸長61cmで、平面形状は楕円形になると思われる。確認面からの深さは53cmで、断面形状はA-bである。断面図を見ると第1層は柱痕跡になり、本来この土壌は柱穴であったと思われるが、この柱穴に対応する柱穴は今回の調査区では見つかっていない。1971は須恵器の杯蓋で、時期は古・後・Ⅲになる。(小林)



第539図 土壌90 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

第540図 土壌91 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 溝

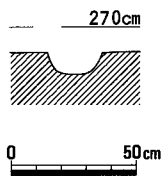


- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 褐灰色微砂 10YR6/1 | 6 褐灰色粘性砂質土 10YR4/1 |
| 2 灰色微砂 10Y6/1 | 7 灰色粘質土 N7/ |
| 3 灰黄褐色微砂 10YR6/2 | |
| 4 灰色粘質土 N6/ | |
| 5 にぶい黄橙色細砂 10YR6/4 | |

第541図 溝40断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝40 (第398・541図)

2区7Pで検出している、東北東から西南西の方向性を持つ溝であるが、北側を古代～中世の条里溝によって切られている。規模であるが、検出長11.2m、上端幅130cm、深さ49cmを測るもので、断面は逆台形を呈している。埋土の状況を観察すると、一度掘り直しが行われたと推測され、底面の第7層と掘り直しが行われた後の底面と考えられる第4層が粘質土であることから水が常時、滞水し



第542図 溝41断面図 (1/30)

ていたと考えられる。出土遺物には須恵器の杯蓋1972、甕1973などがあり、これらからこの溝の時期は、6世紀後半であると考えられる。(時實)

溝41 (第399・542図)

12R区にあって古墳時代の竪穴住居等を検出途中の海拔260cm付近で検出した。幅30cm、深さ10cmの小溝であるが280cmの直線に延びていた。時期は古・後と考えられるが性格については不明である。(島崎)

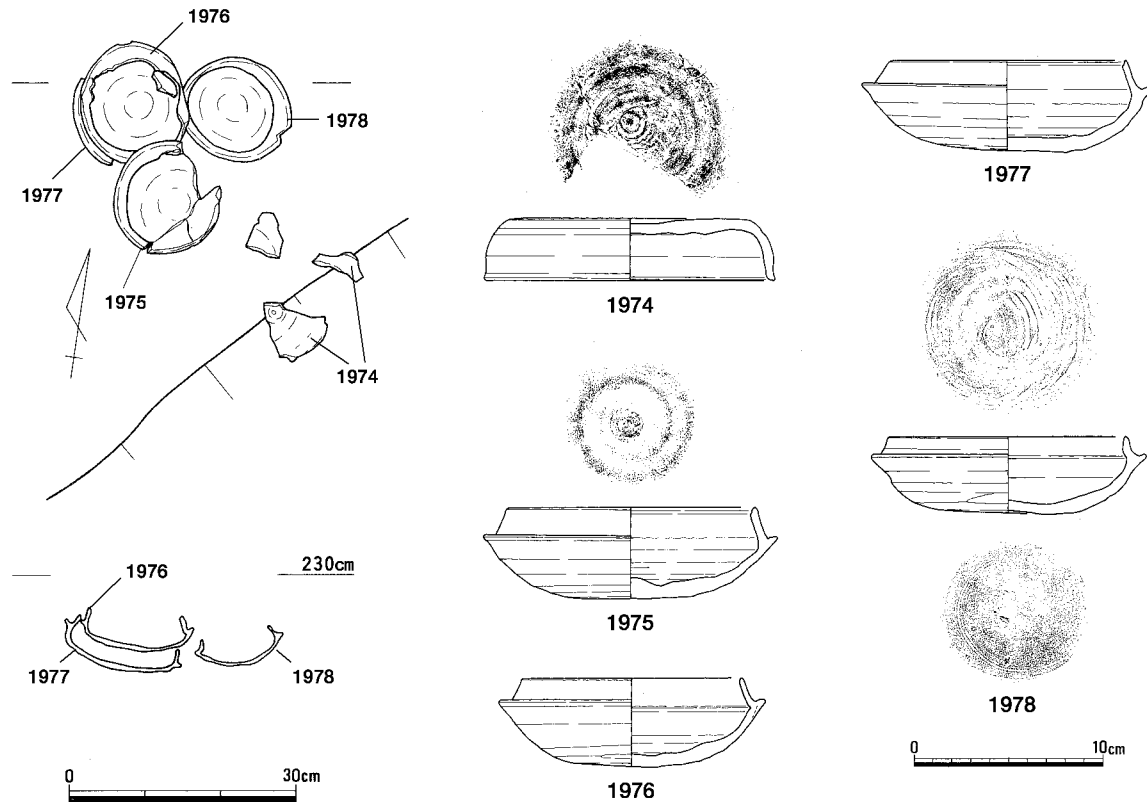
6 配置土器

配置土器1 (第398・543図、図版48・60)

7Q区の河道1北肩口に位置する。竪穴住居72を覆う、河道1の最上層のたまりである灰色粘質土の完掘後に検出した。配置土器は、平面プランが三角形になるように、須恵器の杯身を整然と配置したものである。杯身はすべてほぼ完形品で計4点あり、東側(1978)と南側(1975)は河道1北肩口ラインに平行するように1点ずつ並べられており、その北西側は1977の上に1976を重ねていた。いずれも正位置で、水平に置かれている。これらの杯身は中心部で接しており、その重なり状況から、1978→1977・1976→1975の順で配置されたことが復原できる。また杯身の配置土器の南東側では、内面が上に向けた状態で、須恵器の杯蓋片3点が杯身の配置土器と同一面に散在していた。3点の杯蓋片は同一個体で、本来は杯身の配置土器と同様に、意図的に配置されていた可能性が高い。

出土遺物は前述したとおり、須恵器の杯蓋1点、杯身4点である。1974は杯蓋で、口径15.3cm、器高3.4cmを測り、天井部が平坦である。1975～1978は杯身で、口径11.5～13.0cm、器高4.1～4.8cmを測る。1974・1975・1978の内面中央には、同心円文の当て具痕が残る。

これらの出土須恵器の型式はTK10に属し、古・後・Iの新相に比定される。意図的に整然と配置された須恵器の出土状況は、河道1の北岸で「水辺祭祀」が行われたことを彷彿させる。(米田)



第543図 配置土器 (1/10)・出土遺物 (1/4)

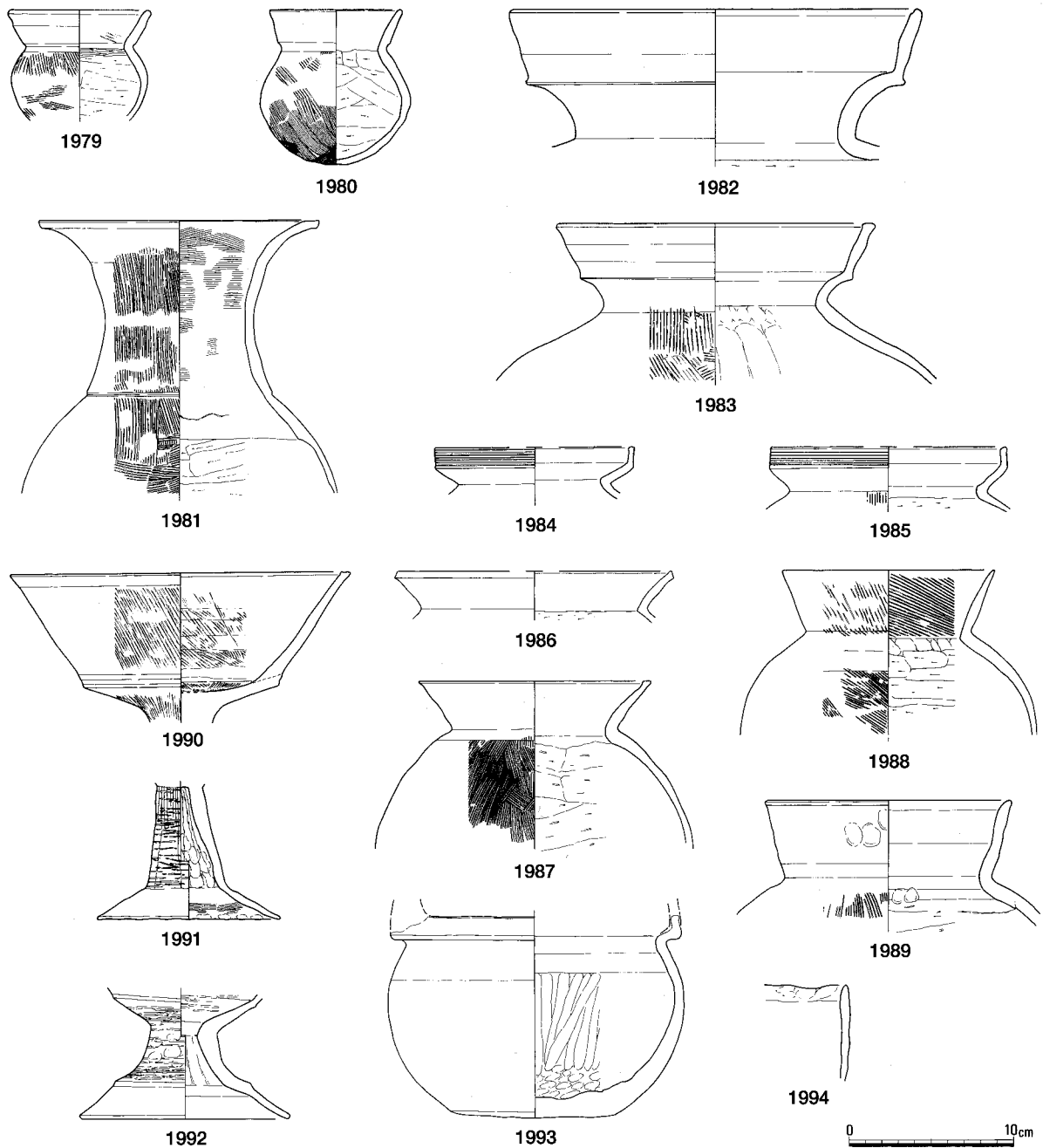
7 河道

河道2 (第398・399・544~547図・図版48)

11Q、10P・Q区に検出した河道の一部である。この河道は、北東から南西方向に流れていたと推定されるもので、その南東側の岸を含む一部を調査した。調査した範囲は、岸の部分を実長とする二等辺三角形を呈するような区画である。そのため、岸に近い部分においては、河道の壁に沿って掘り下げることができた。また、河道の幅は相当に広いと推定されるが、調査範囲の関係もあり、今回の調査においてはその一部しか調査できなかった。そのために、この調査区においては、河道の壁体部分は確認できたが、掘り下げることのできる限界もあって、底面は確認できなかった。河道2も長い時間で見ると、流れと埋没を繰り返し、その流路の変遷も幾多存在するものと考えられる。それだけに、この河道の上限がどこまで遡るかを究明することは、重要なことだと考える。しかし、限定された範囲からはそれは不可能に近い。そのような状況であるが、今回調査した周辺の遺構の状況を観察することにより、河道2の形成された時期を推測してみたい。

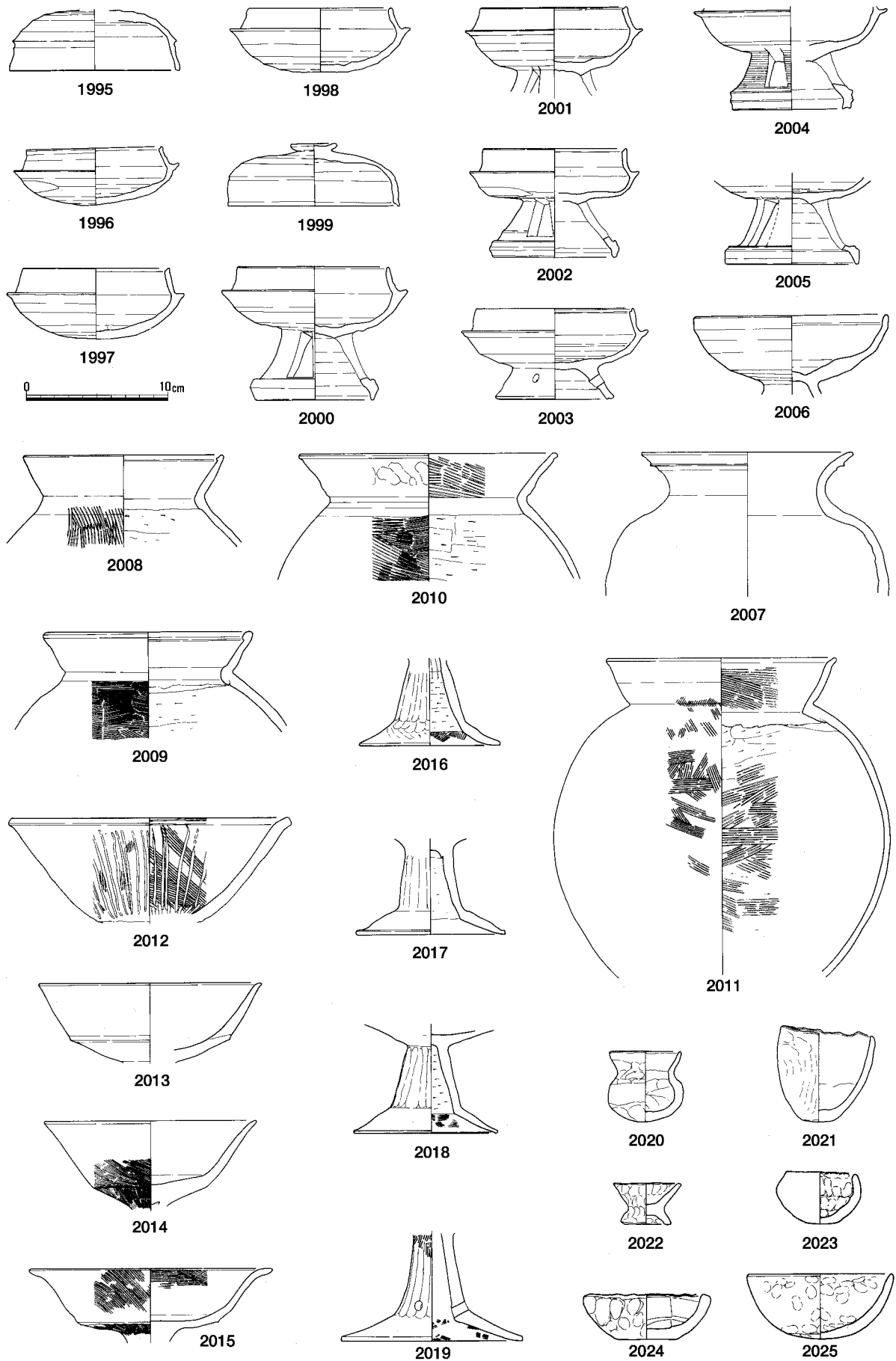
この調査区の古い段階では、弥生時代前期の水田域を押し流す河道がみられる。この河道は、平面的には、ほぼ同じ場所に位置するが、河道2に直接つながるものであるか否かは不明である。しかし、弥生時代前期におけるヒトと河道との関わりをみせる光景である。弥生時代中期については、遺構がないため不明である。しかし、弥生時代後期になると居住区としての広がりがみられ、その北西端部に位置する竪穴住居の並びをみると、河道の流れる方向とよく一致している。また、河道により切断される竪穴住居が存在しないことは、河道が存在するとしても、その岸はそれら竪穴住居よりはさら

に北西にあって、河道と竪穴住居群との間には一定の距離を置いていたものと推定される。弥生時代後期と古墳時代前期の竪穴住居の位置を重ねてみると、古墳時代前期の竪穴住居のほうがさらに北西方向に広がる様相を呈している。この時期の河道の位置、幅については知る由もないが、生活空間としての微高地はさらに広がっていたものと考えられる。しかし、これら竪穴住居の一部は、水の流れて洗われることになる。どの程度失われたものかは不明であるが、半壊状態の竪穴住居をみることができる。このときに形成された河道を、河道2として報告するものである。また、古・前・Ⅱ期の竪穴住居の一部が流失していることは、その時期よりも新しいことを物語っている。



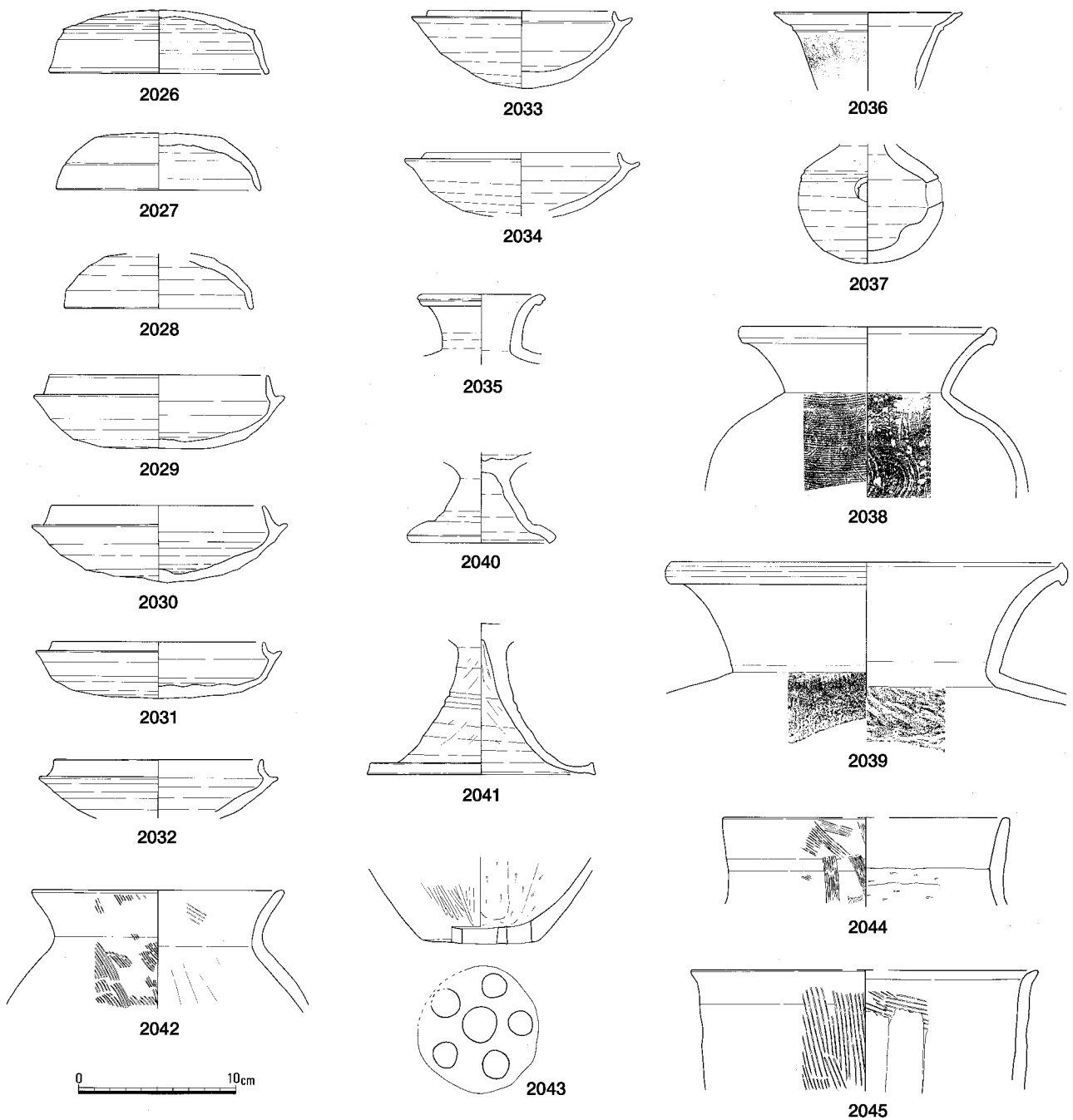
第544図 河道2出土遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要



第545図 河道2出土遺物② (1/4)

出土遺物としては、土師器や須恵器がある。1979・1980は、小型丸底壺である。1981は、長頸壺で、口縁部は大きく開く。1984～1989は、甕である。1990・1991は、高杯で杯部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦である。1992は器台、1993は手焙り形土器である。1994は、製塩土器である。1995～2007は、須恵器である。1995は、杯蓋で天井部は丸く、口縁部は少し開く。1996～1998は、杯身で底部は丸い。少し内傾する立ち上がり部で、端部は傾斜し段をもつ。2000～2006は、高杯である。短脚のものが多く、方形透かしや、円形透かしをもつ。2008～2011は、土師器の甕である。口縁部は、外反して立ち上がり、胴部は丸い。2012～2019は、土師器の高杯である。杯部の体部は直線的であるが、

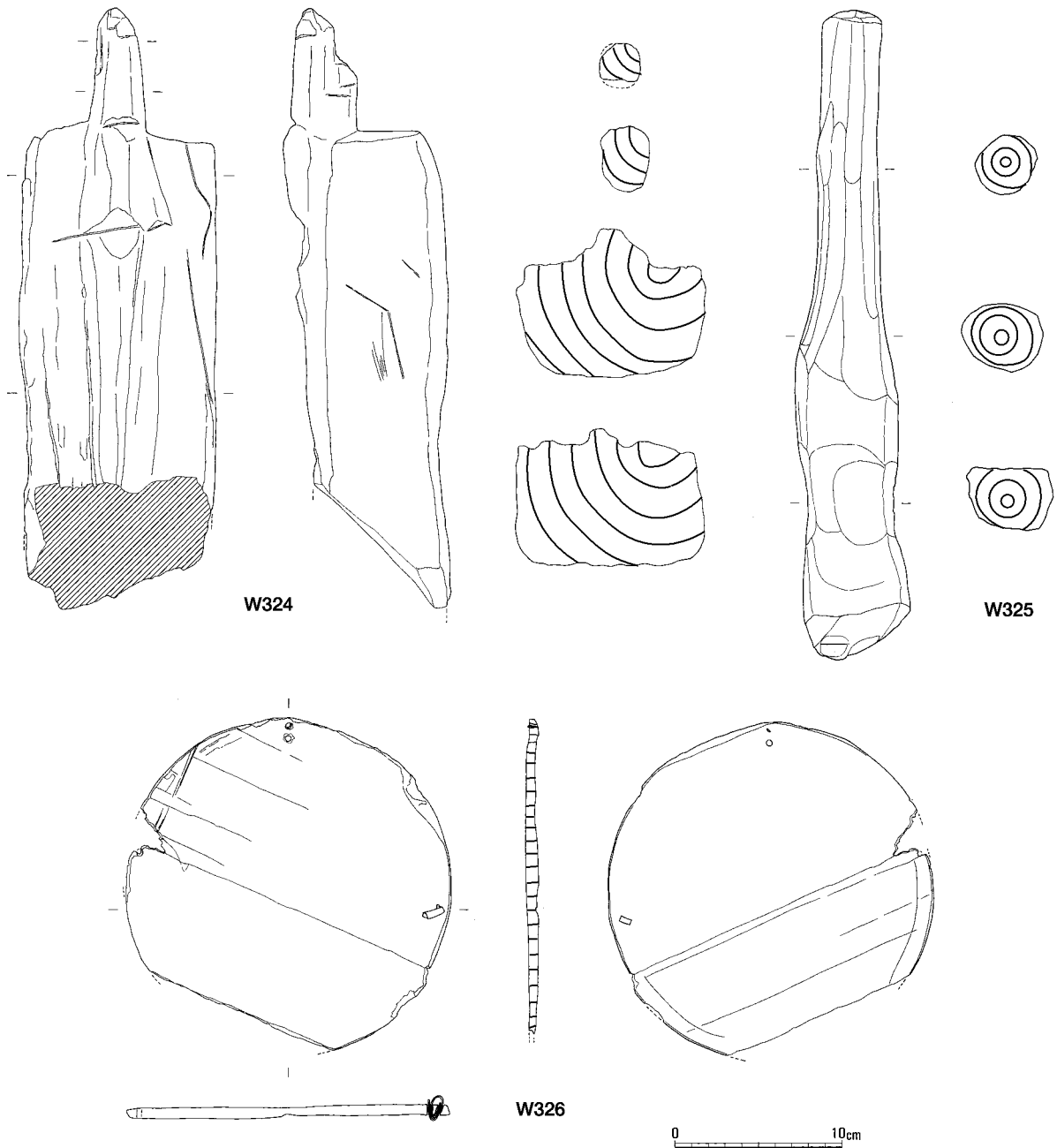


第546図 河道2出土遺物③ (1/4)

皿部は丸い。2020～2025は、手捏ね土器である。壺形や鉢形がある。2026～2041は、須恵器である。2026～2028は杯蓋である。2028は、全体的に丸く、口径も小さい。2029～2034は、杯身である。2042～2045は、土師器で、2043～2045は甑である。

木製品も数点出土している。W324は、木取り途中と考えられるものである。何かを作ろうとする意図はみえるが、何の未製品であるかは不明である。W325は、完形の横槌である。丸太を加工して作成したものである。取り手部分は、細く加工するもので、手に握れる太さに削り込み、その直径約39mmを測る。物を叩く頭部は、取り手部より大きく、ほぼ倍の太さがある。頭部中央の窪みは、使用することにより細くなったものである。W326は、曲げ物の蓋、もしくは底板と考えられるものである。現状で2か所に二対の小孔がみられるが、側板を綴じるためのものと考えられる。

河道2の時期は、遺構との位置関係や、出土遺物から、古墳時代後期後半と推定される。(井上)



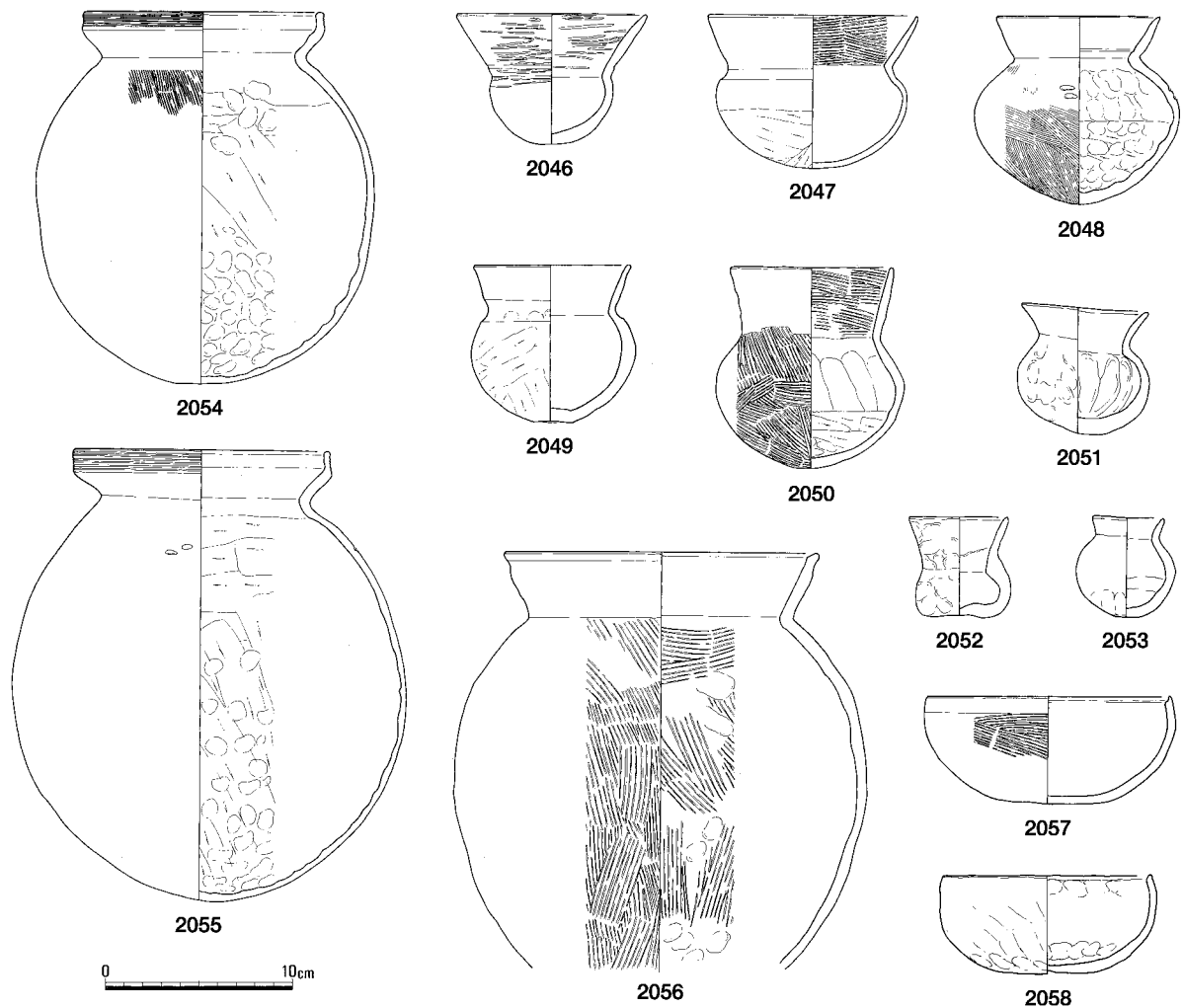
第547図 河道2出土遺物④ (1/4)

8 遺構に伴わない遺物

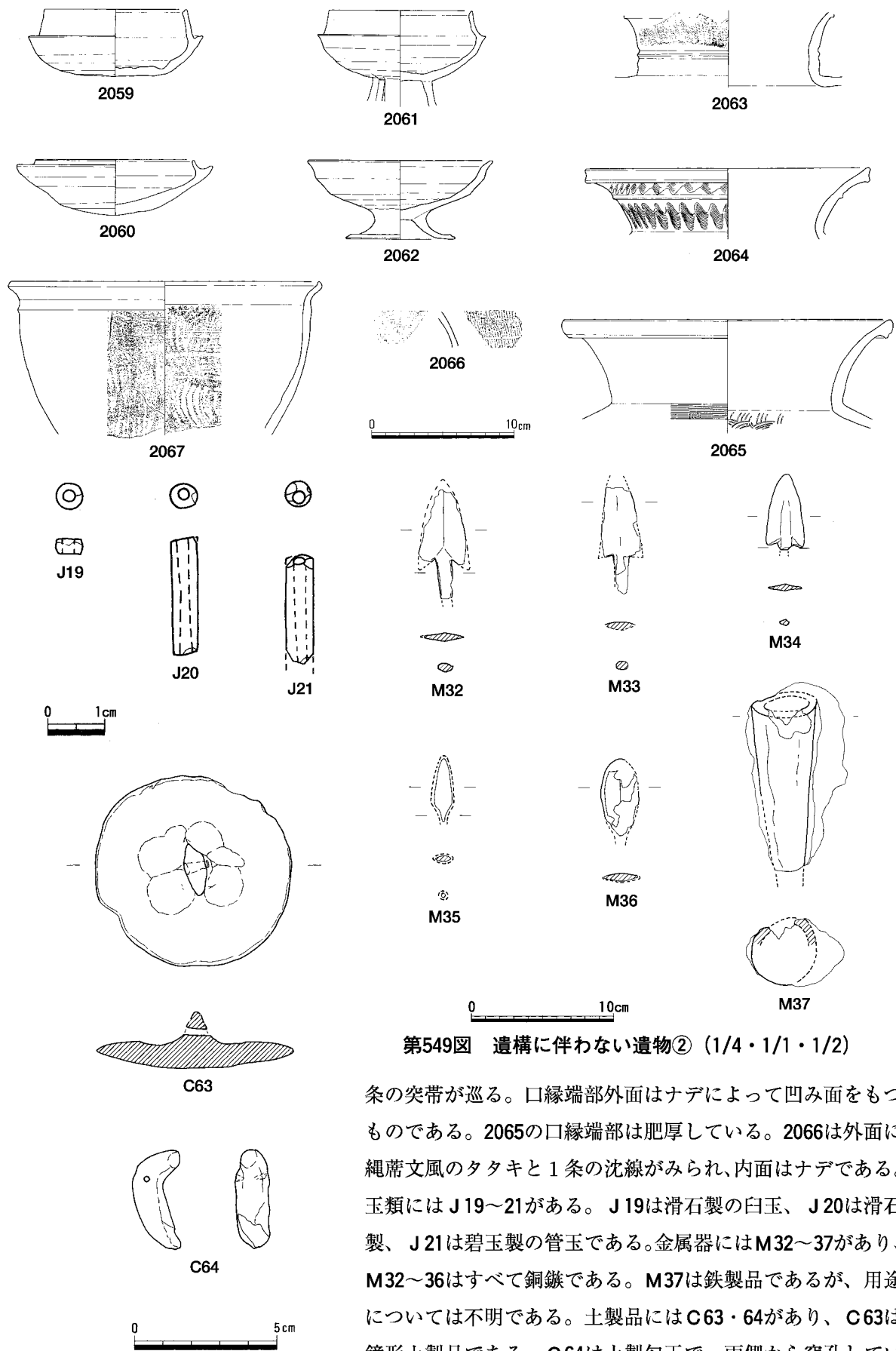
遺構に伴わない遺物（第548・549図）

ここで取り上げた遺物は遺構検出中に出土したもののほか、個別の遺構として取り上げるのできなかった柱穴などの遺構から出土した、前～後期にかけての比較的残りの良い遺物である。

土師器には、壺2046～2053、甕2054～2056、鉢2057・2058がある。壺は小型丸底壺で、2046は内外面の調整が横方向のヘラミガキで口径が器高を上回る。2047は体部外面下半にヘラケズリを施し、口縁部内面はハケメである。2048は肩部に楕円形の刺突文が2か所ある。2049は底部が平底を残す。2050は口縁部が直線的にのび、体部外面と口縁部内面に粗いハケメがみられる。2051～2053は外面に指オサエの痕跡が明瞭で、手捏ね土器である。2054・2055はいわゆる吉備型甕で、2055の肩部には2か所の刺突文が見られる。2056は口縁部が「く」の字に外反し、口縁端部を外方に摘んでいる。2057は口縁端部に段を持つ。2058の調整は内外面がナデと指オサエである。須恵器には、杯身2059・2060、高杯2061・2062、甕2063～2066、甗2067がある。2059は口縁端部に段を有している。2060は口縁部が短く内傾するもので、器壁は厚い。2061は脚部の透かしは1段で、3方向であると考えられる。2062は椀形の体部で口縁端部が外反している。脚部は短く、「ハ」の字に開いている。2063は口縁部下半が直立するもので、外面に沈線を2条と、波状文を施している。2064は口縁部が外反するもので、1



第548図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第549図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/1・1/2)

条の突帯が巡る。口縁端部外面はナデによって凹み面をもつものである。2065の口縁端部は肥厚している。2066は外面に縄蓆文風のタタキと1条の沈線がみられ、内面はナデである。玉類にはJ19～21がある。J19は滑石製の白玉、J20は滑石製、J21は碧玉製の管玉である。金属器にはM32～37があり、M32～36はすべて銅鑢である。M37は鉄製品であるが、用途については不明である。土製品にはC63・64があり、C63は鏡形土製品である。C64は土製勾玉で、両側から穿孔しているが、孔は貫通していない。(時實)

第9節 古代の遺構・遺物

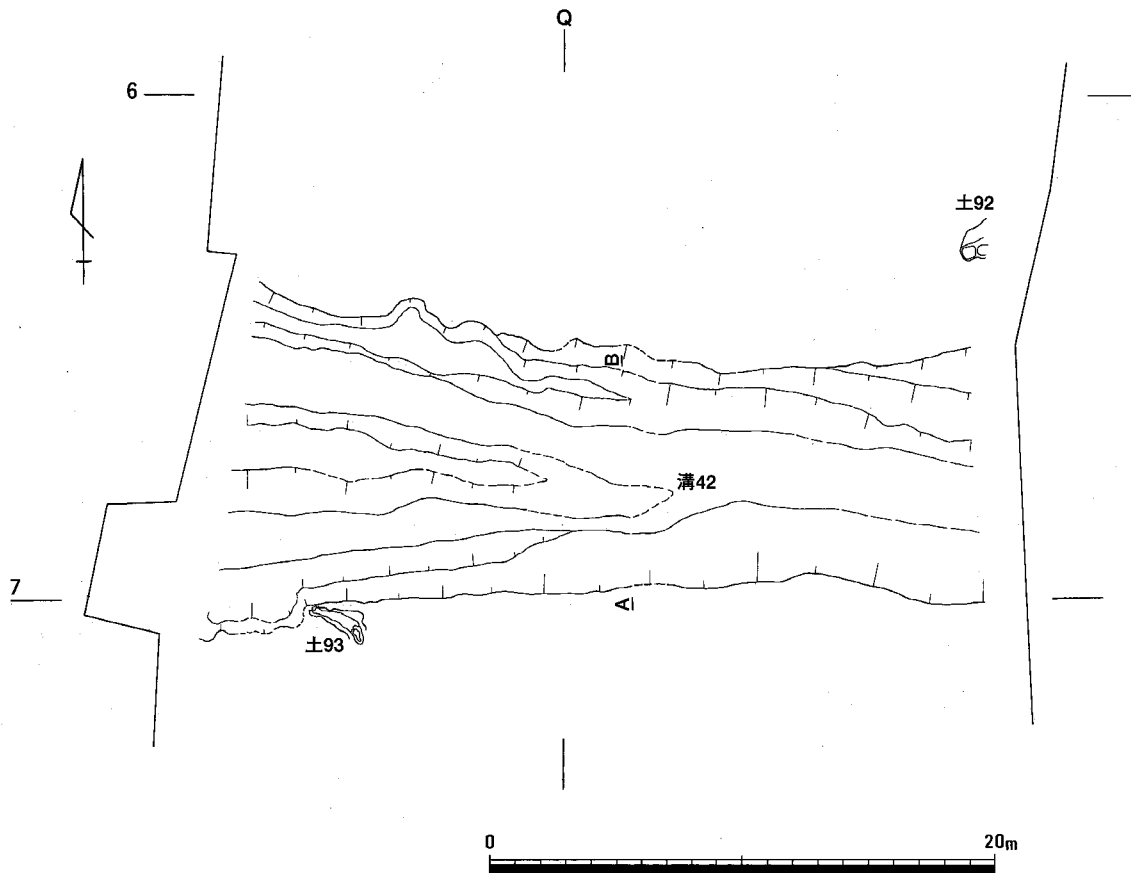
1 古代の概要

全調査区を通して検出されたのは溝9条・土壙3基、その他3区を中心として柱穴の存在があるにすぎない。1区では溝42が東の北方地蔵遺跡溝24と津島遺跡武道館確認調査検出の溝と一直線上にあり、条里制の津島郷と伊福郷の郷境溝と認識された。3区では、北西から南東に向けてのあるいはこれに直交した格子状を呈する直線溝およびこの周囲に柱穴を数多く確認したが掘立柱建物等の存在は明確にできなかった。4区からは、北東の北方下沼遺跡から延びてくるとされる溝22～24の続きの一部が検出されている。いずれも古代の末頃と考えられ、弥生時代から古墳時代に続いて存在していた微高地を一律削平した時期の一つ有力な候補である可能性が高いと考える。 (島崎)

2 土壙

土壙92 (第550・551図)

6Q区北東部に位置し、古墳時代後期以降の洪水で埋没した溝54の肩部を切って作られた楕円形の土壙である。埋土は灰色微砂からなり、底面には2か所のくぼみが認められる。 (高畑)



第550図 土壙92・93・溝42 (1/300)

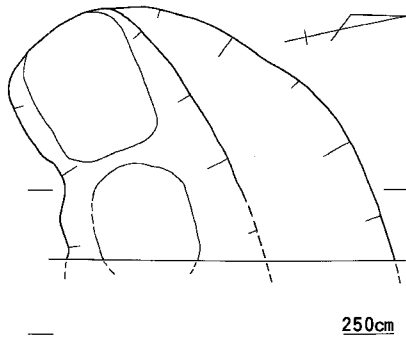
土壌93 (第550・552図)

2区7Pで検出した、平面形が不整形な土壌で、平面では確認できなかったが、溝40を切っていると考えられる。南側の楕円形の落ち込みは、深さ52cmを測るものである。時期は、7世紀代のものと考えられる。

(時實)

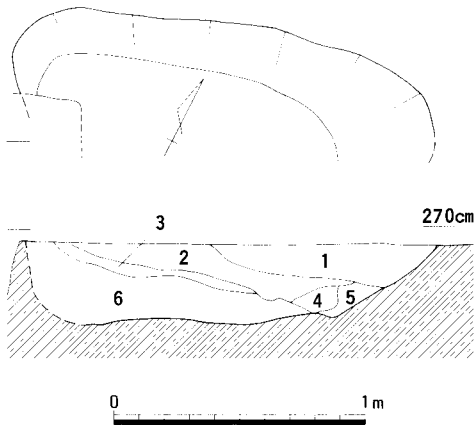
土壌94 (第553・554図)

3区11Rに位置している、南側を削平されているも



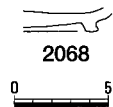
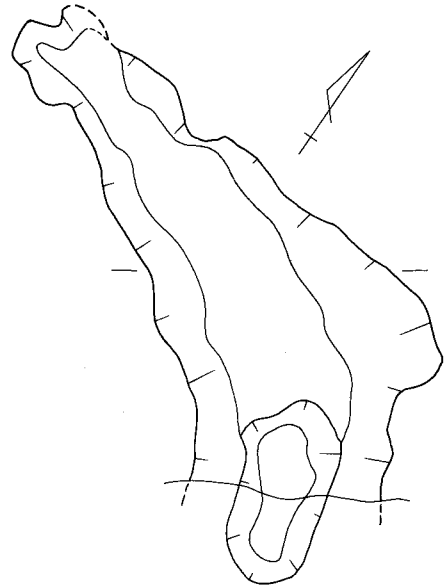
1 灰色微砂 (茶褐色土ブロック含む)

第551図 土壌92 (1/30)

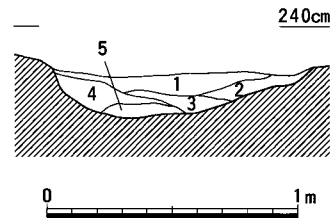


第553図 土壌94 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

- 1 黒褐色微砂 10YR3/2
- 2 褐灰色微砂 10YR5/1
- 3 褐灰色微砂 7.5YR5/1
- 4 灰黄褐色微砂 10YR4/2
- 5 にぶい黄色微砂 2.5Y6/3
- 6 にぶい黄橙色微砂 10YR6/4

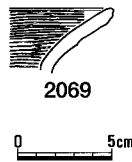


2068



- 1 灰白色微砂 N7/
- 2 灰白色粗砂 N7/
- 3 灰色粘性砂質土 N5/
- 4 灰白色微砂 N6/
- 5 灰色粘質土 N4/

第552図 土壌93 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



2069

この、平面形が楕円形を呈すると考えられる土壌である。規模は長径168cm、深さ32cmを測り、底面はやや凹凸があるが断面は皿状を呈している。

出土遺物には甕2069の口縁部分があり、外面はナデている。時期は、古代の範疇に入るものと考えられる。(時實)

3 溝

溝42 (第550・555～557図、図版49・62)

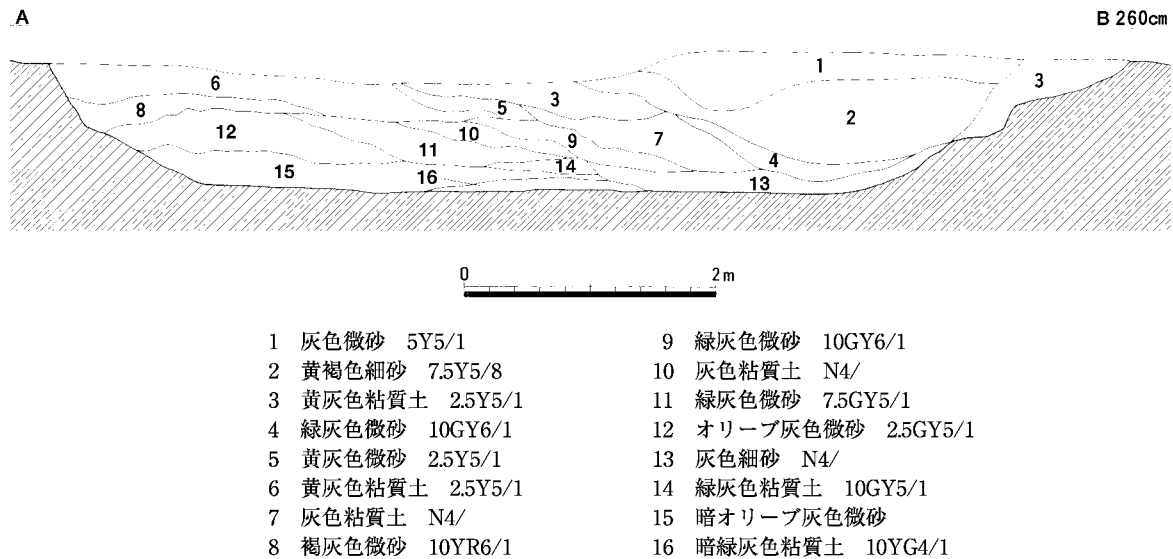
6P・Q区に検出した溝である。調査した溝の全長は、約30mを測る。調査中にも気付いていたが、この溝の南岸は、グリッドの東西方向線にほぼ正確に沿うものがみられた。このことは、東西方向を



第554図 古代遺構全体図（3区）（1/300）

強く意識していることを推測させる。北岸は、東半まではほぼ東西を示すものの、西に流れるに従い少し北に広がる傾向がみられる。そのため、溝の最大幅は東半では8.2~9.7mを測るが、西端では11.5mを測る。しかし、この広がりも溝の埋没による流路の変化の結果であって、本来の溝がそのような形状を呈していたものではない。そのことは、第555図の溝42断面からも窺える。

この溝を周辺の地形図に当てはめてみると、現在は途切れる溝を一直線に復元することができる。また、周辺地形にみられる条里遺構とされる溝や道によく一致する。そのことを加味すれば、条里の大溝の可能性も高い。溝の時期であるが、掘削した時期は不明であるが、遺物からみると9世紀には存在しており、中世前半には大溝としての役目は終わるが、用水としては残ると推定される。(井上)



第555図 溝42断面図 (1/60)

溝43 (第554・558図、図版49)

10Q区北東部・10R北西部に位置し、北西方向から南東方向に流走する。幅約30cm、深さ5cmを測る。断面形はA-b形。遺物はないが、埋土・検出状況・流走方向から時期は古代。(米田)

溝44 (第554・558図、図版49)

10Q区北東部、溝43の南西3.5mに位置し、溝43と並走する。幅約40cm、深さ7cmを測る。断面形はA-b形。遺物は出土していないが、時期は溝43と同様に古代に属すると考えられる。(米田)

溝45 (第554・558図、図版49)

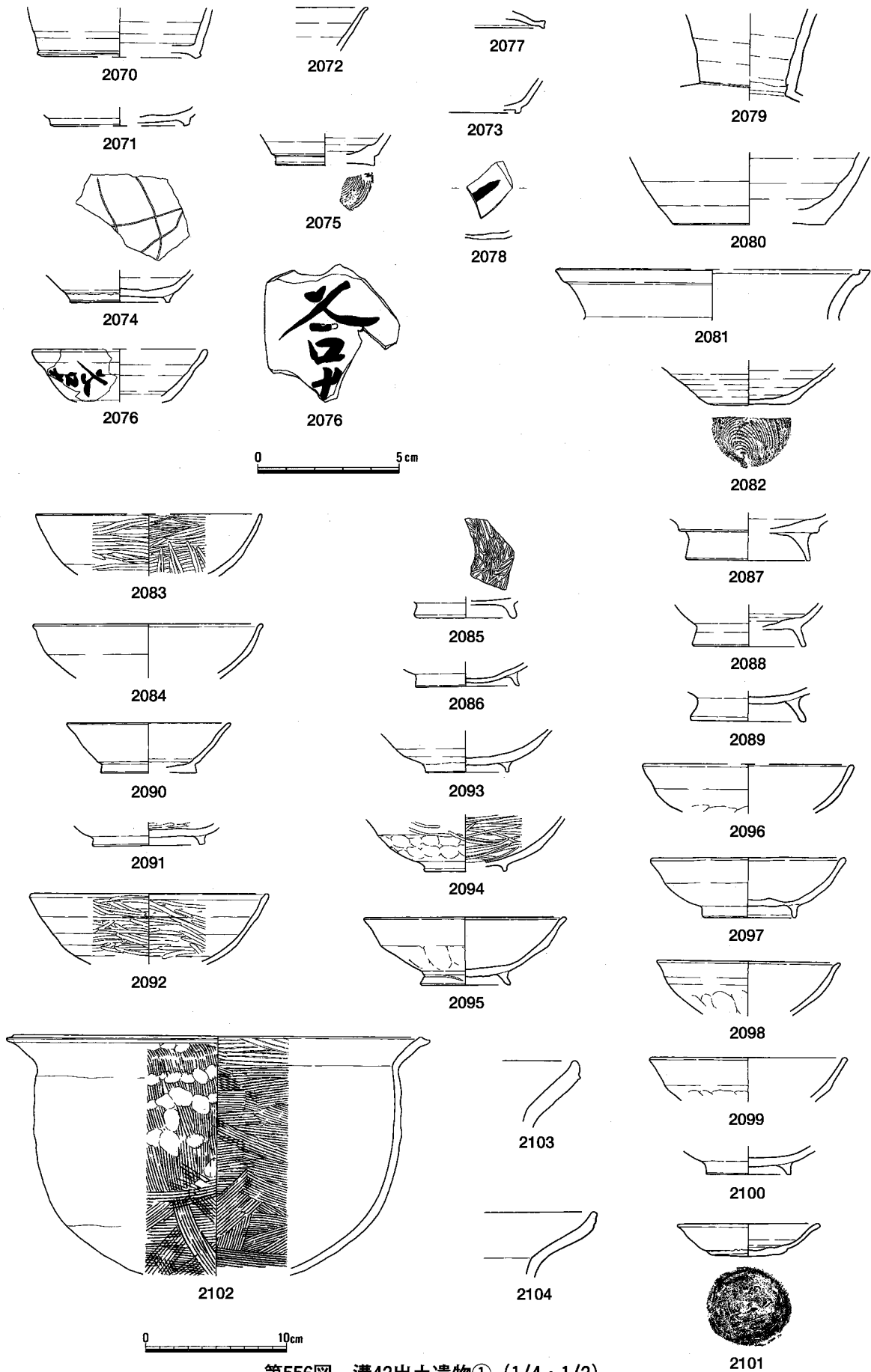
10Q区中央部西寄りに位置する。北東から南西方向に流走すると考えられ、溝43・44に直交する。幅約50cm、深さ5cmを測る。断面形はA-a形。埋土は溝43・44と同様で、時期は古代か。(米田)

溝46 (第554・558図、図版49)

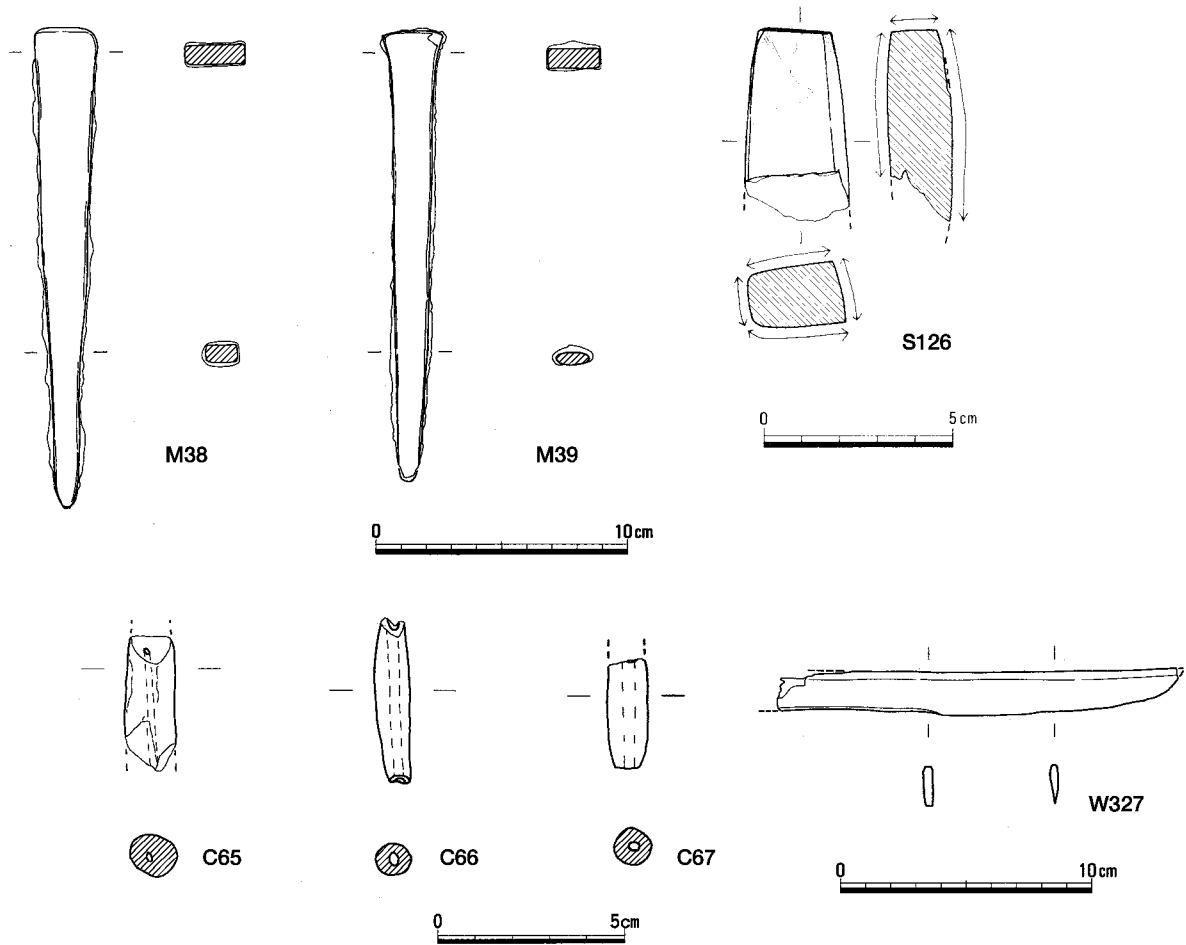
10Q区南東部・11R北西部に位置する。北西から南東方向に流走し、溝43・44と並走する。幅約50cm、深さ13cmを測る。断面形はA-b形。出土遺物はないが、時期は古代に比定できる。(米田)

溝47 (第554・558図、図版49)

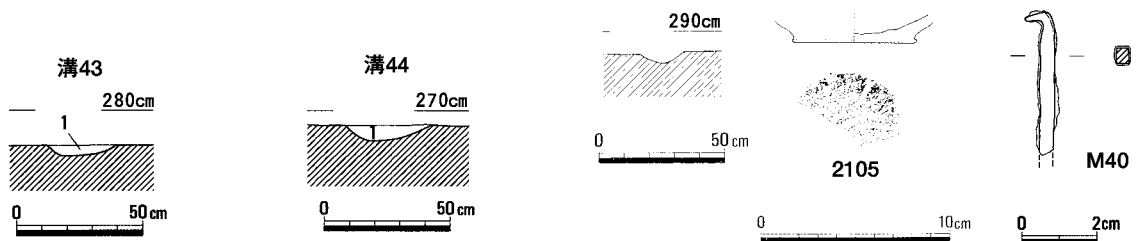
12Qから11R区にあって、竪穴住居82の覆土を切り、北東から南西に一直線に結ぶ幅35cm前後の明褐灰色砂質土で埋没した溝である。時期は周辺の溝との関係からおおむね古代末としてよい。(島崎)



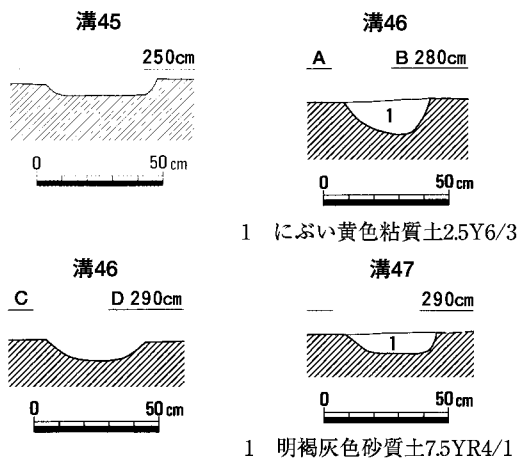
第556図 溝42出土遺物① (1/4・1/2)



第557図 溝42出土遺物② (1/3・1/2)



第559図 溝48断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



第558図 溝43～47断面図 (1/30)

溝48 (第554・559図、図版49)

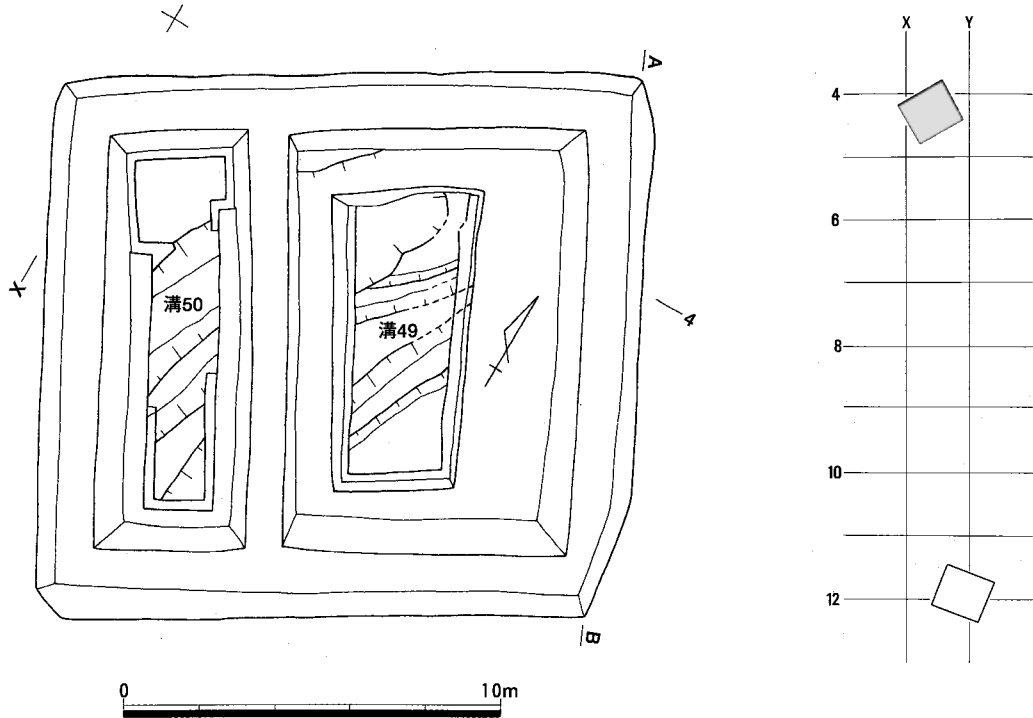
溝48は、3区中央部のやや北東側にあり、北西側から南東側に向かって流れる。グリッド名では10Q・11Rである。2105は須恵器の杯で底部には糸切り痕がある。時期は古代である。M40は鉄釘である。(小林)

溝49 (第560～562図、図版50)

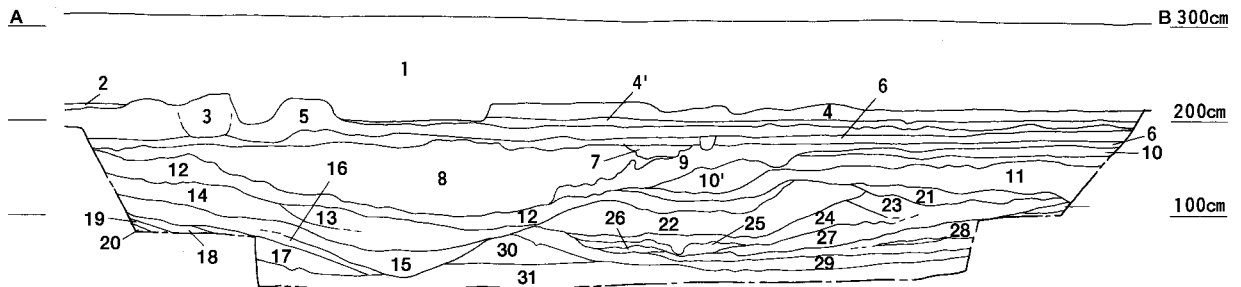
4区で検出された溝である。北方沼田遺跡の溝24もしくは溝22につながる可能性が高い。砂と粘質土の互層による堆積で底から上まで埋没している。遺物は多くないが古代末と考えてよい。(島崎)

溝50 (第563図、図版50)

溝49の埋没後、これを切って存在する上端推定幅7m、深さ150cmの溝である。溝49同様に砂と粘質土の互層による堆積で埋没を完了させている。遺物には、黒色土器2107~2110、土師器椀2108、皿2112~2114等があり、溝の時期についても古代末としてよい。(鳥崎)

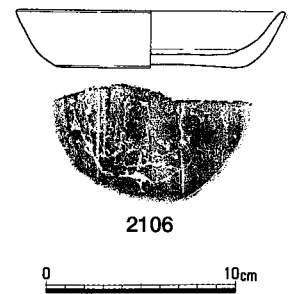


第560図 溝49・50 (1/20)

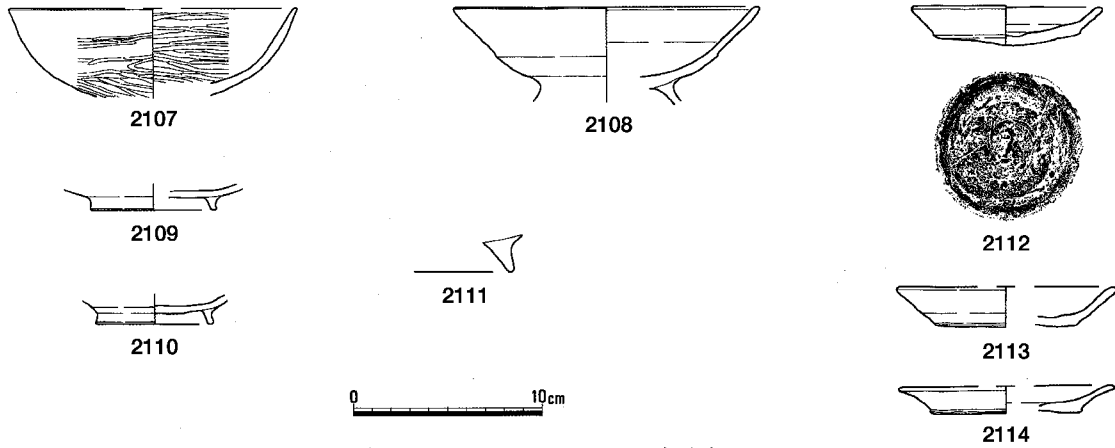


- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 グラウンド造成土 | 16 暗緑灰色粘質砂 10GY4/1 |
| 2 真砂土 | 17 緑灰色粗砂 10GY6/1 |
| 3 攪乱 | 18 灰色粘土 N5/ |
| 4 洪水砂 | 19 オリーブ灰色砂 2.5GY6/1 |
| 4' 明緑灰色粘質砂 7.5GY7/1 | 20 灰色砂 N6/1 |
| 5 灰黄色粘質土 | 21 オリーブ黄色粘質砂 5Y6/3 |
| 6 灰白色粘質土 5Y7/2 | 22 青灰色粘質砂 10B6/1 |
| 7 灰白色粘質土 | 23 青灰色粘質砂 5BG5/1 |
| 8 灰色粘質砂 5Y6/1 | 24 暗緑灰色粘質土 7.5GY4/1 |
| 9 灰色粘質土 10Y6/ | 25 暗緑灰色粘質土 7.5GY4/1 |
| 10 灰白色粘質砂 7.5Y7/2 | 26 灰色粗砂 10Y6/1 |
| 10' 灰白色細砂 7.5Y7/2 | 27 浅黄色細砂 7.5Y7/3 |
| 11 灰白色粘質細砂 5Y7/ | 28 灰色砂質土 10Y6/ |
| 12 灰色粘質細砂 N5/ | 29 明緑灰色粗砂 7.5GY7/1 |
| 13 オリーブ灰色粗砂 5GY6/1 | 30 灰色粘土 N4/ |
| 14 灰色粗砂 N6/ | 31 緑灰色粘質土 7.5GY5/1 |
| 15 緑灰色粗砂 10GY6/1 | 8~20 (溝50)、22~29 (溝49) |

第561図 溝49・50断面図 (1/80)



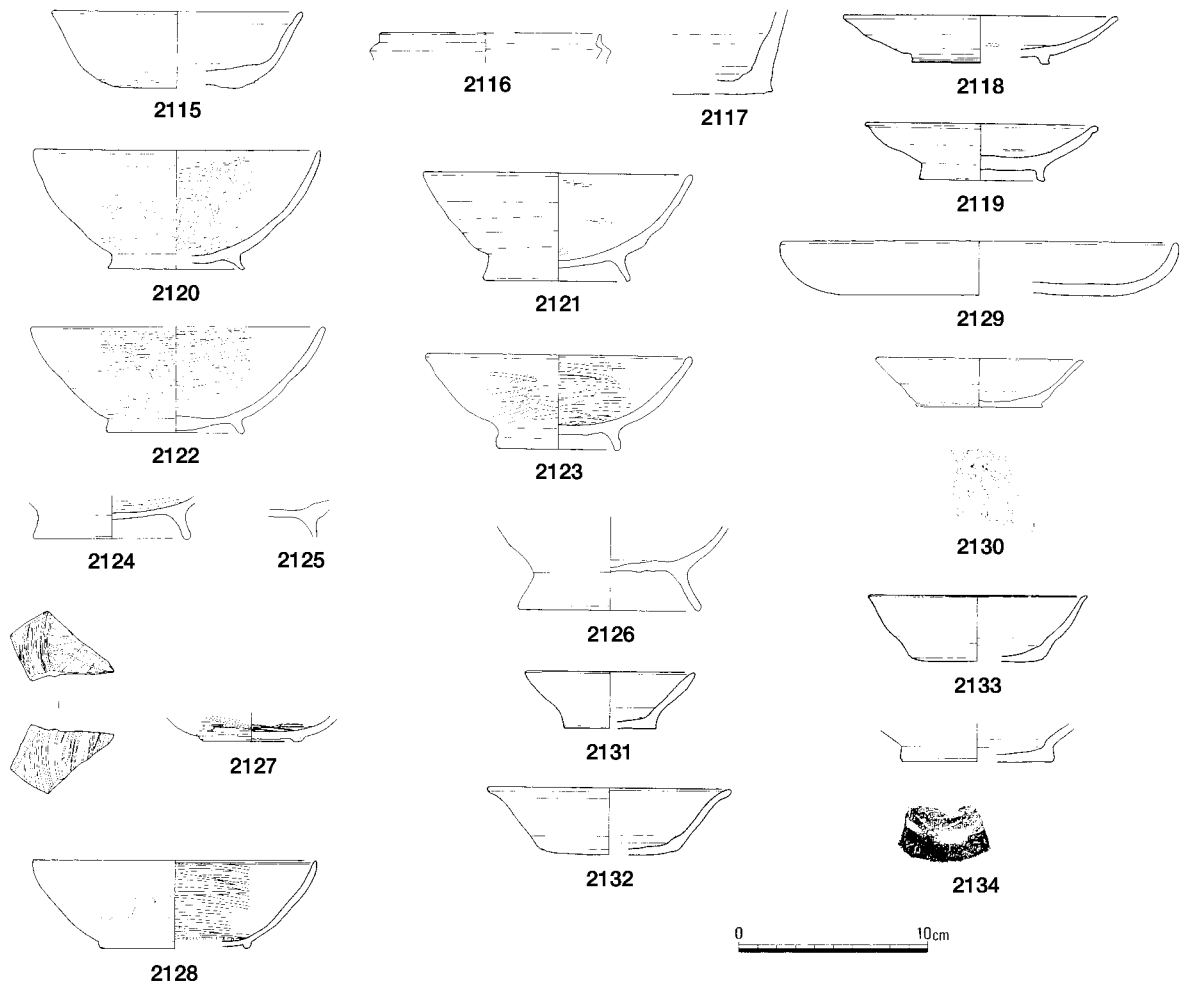
第562図 溝49出土遺物 (1/4)



第563図 溝50出土遺物 (1/4)

4 遺構に伴わない遺物

主に3区中央から北半部分を中心にして出土した遺物である。中には京都・近江産と考えられる緑釉陶器の皿2118・2119が含まれる。他は、黒色土器碗2120～2125・2127～2128・土師器碗2126・土師器皿2130～2134である。7～8世紀の須恵器もあるが古代末を中心にみられる。(島崎)



第564図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第10節 中世～近代の遺構・遺物

1 中世～近代の概要

全調査区を通して遺構が存在したのは1区と2区北端部分にかけてが最も多く、3区では中世の溝が3条検出できたのみで他の遺構は全く確認されなかった。

1区は、中世から近代までの溝を中心とした遺構の存在が知られる。溝は、時代によって流走方向に違いがあるようで、複数の溝の切り合いと時期差で整理できそうである。

中世は、溝42と溝51～55の6条が北東から南西方向を基調としていたようであるが、溝42は古代の条里の郷境溝が中世になっても踏襲されていたようで、埋土中からは中世日常土器も多く出土する。溝以外には遺構の存在は確認されなかった。なお、2区に存在した幅50mの旧河道部分の窪地には水田をはじめとする耕地が存在していたようである。

近世は、中世の溝を切って溝56・57が流路の向きを東西方向へと再び変えて開削されており、西端部分にあって南北方向の溝61に合流する。この溝57の南側に、また溝42の南側にも柱穴が多数存在したが掘立柱建物等その存在については確認できなかった。

近代は、調査区最北端において近代と幕末頃の溝が近世の溝を踏襲する状況で存在する。他は水田としての土地利用がなされていたようで、柱穴等は確認されなかった。 (島崎)

2 土壙

土壙95 (第570・565図)

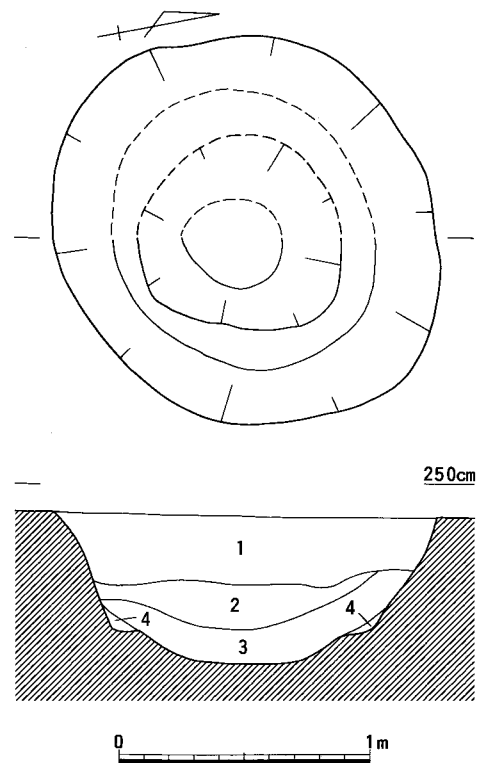
1区6Pの南西端に位置している、平面形は円形を呈する土壙である。

規模は長径155cm、短径145cm、検出面からの深さ59cmを測り、底面の海拔高は179cmである。土壙の西側半分については、調査時に底面を誤認して掘り下げたために、下端の形状は不明であるが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。断面の形状は碗状を呈しているものの、底面から約15cm上面では、底面がほぼ平坦を呈している幅が約10～18cm程度の段が付くような状況であった。

埋土の状況は、第2層と第3層がレンズ状に堆積し、第1層は水平堆積をなしている。

出土遺物には土器はなかった。しかし、図示していないものの、第3層の底面近くから木製の箸が一膳出土している。

時期については、埋土の状況から、近世の土壙であると判断した。 (時實)



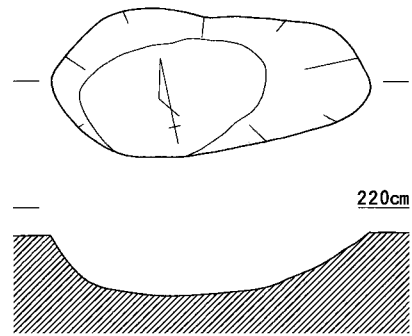
- 1 灰黄褐色粘質微砂 10YR5/2
- 2 橙色粘質土 7.5YR6/6
- 3 明青灰色粘質土 5PB7/1
- 4 褐灰色粘質土 7.5YR6/1

第565図 土壙95 (1/30)

土壌96 (第570・566図)

2区7Pに位置している、平面形が楕円形を呈する土壌である。規模は、長径127cm、短径57cm、検出面からの深さ14cm、底面海拔高185cmを測るものであった。断面形は浅い椀状を呈している。

時期については、遺物が出土していないものの、埋土の状況から、近世のものであると考えている。(時實)

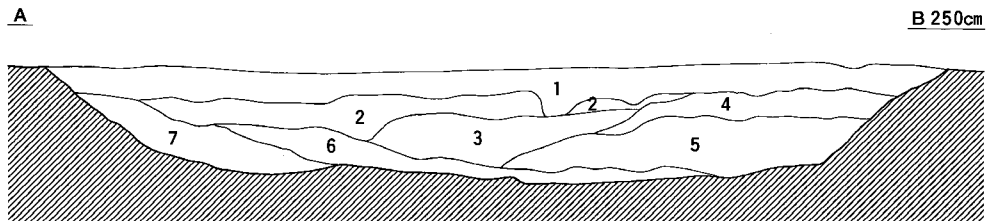


第566図 土壌96 (1/30)

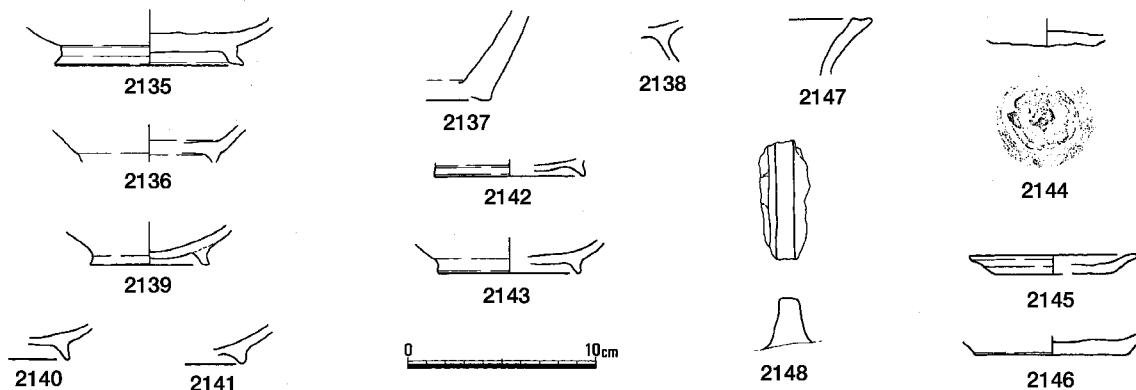
3 溝

溝51 (第570・567図)

4Qから5P区にかけて海拔235cmで検出された北東から南西方向に延びる溝で、弥生時代前期水田面を少し切った状態で幅350cm、深さ40cmで断面浅い逆台形に開削されていた。本来の肩口はもう少し上位にあったようであるが、具体的には明確ではない。南に隣接する溝52によって切られていた可能性が高いと考える。溝は、第6層が上流から流れてきた土器片を比較的多く含む堆積層となり、下層から中・上層にかけて途中粘質土の堆積をみるものの基本的には砂質土の堆積であり、最終的には洪水等による砂の堆積によって埋没している。ただし通常水の流れは頻繁であったようで、出土遺物についても土器は上流から流れてきた状況で小片が多く、その状況を如実に物語るものであった。



- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| 1 黄灰色微砂質土 2.5Y6/1 | 4 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 |
| 2 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 | 5 暗灰色砂質土 2.5Y5/2 |
| 3 灰黄褐色砂質土 10YR5/2 | 6 褐灰色粘質土 (下層部に土器多量) 10YR5/1 |
| 7 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 | |



第567図 溝51断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝からは小片ながら須恵器から土師器まで時期幅をもった土器が出土したが、溝の時期を示すものとしては、土師器碗2139～2143・小皿2144～2146等があげられる。これによると溝の時期は、おおむね13世紀前半頃として差し支えないと考える。(島崎)

溝52 (第568～570図)

溝51・53に先行する溝で、4 R区では溝53に完全に削られており、5 P・5 Q区において溝51・53の間で検出されたが、流路の底部が残るだけであり、第570図にも平面図を示していない。この状況からは、流路が溝51・53よりも東偏していたことが想定される。第568図の断面では、第10・11層が溝52にあたる。深さは40cm程度で、幅を確認できる箇所はないが、2 m程度はあったものと思われる。

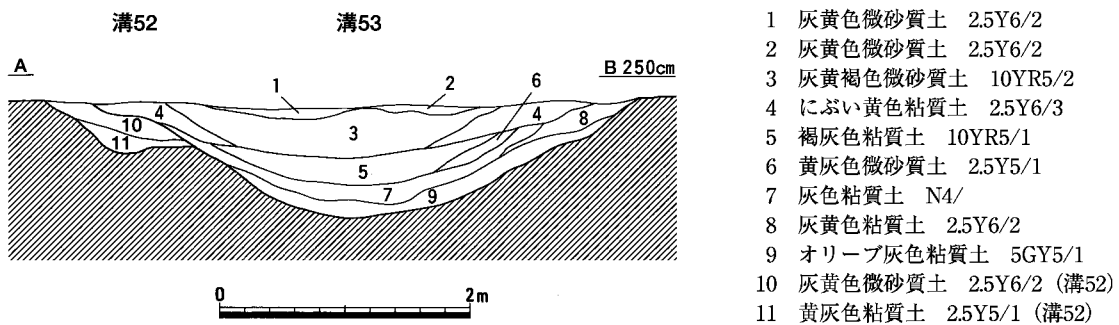
土師器の碗2149や黒色土器の碗2150など、少量の遺物が出土しており、溝51・53・55～57などの東西方向に流れる溝群の中では、早くに掘られたものである。(光永)

溝53 (第568・570・572・573図、図版62)

4 Rから5 P区にかけて海拔235cmで検出された、北東から南西方向に溝51の南肩口と北肩との間隔を20cm前後に保ちながら直線的に流走する溝である。北側に並行する隣接する3条の溝の切合いは、溝52が最も古く、次に溝51で、規模も順に拡大傾向にあったことが知られる。

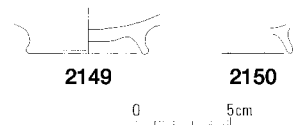
溝53は、検出面での幅400～450cm、深さ90～100cmを測り、断面はやや深い皿状を呈する。溝の埋積状況は、下層5・7・9層は遺物を比較的多く含んだ粘質層となっており水流の停滞を、上層の1～3層は微砂質土による堆積がみられ洪水等による埋没を物語る。ただし、埋没する前の状況は、壁の両斜面、溝底から20cmから上位に50cm間に残された鉄・マンガン粒の沈着によってある程度知ることができる。すなわち、水量が20cmから50cmの増減を繰り返しながら流れていたことが推測されるのである。

遺物は、主に下層3層からの出土で、土師器碗・皿・鍋・カマド等数多くの日常雑器が確認された。しかし、時期的に多少なりとも共伴が考えられる青磁・白磁の製品の存在は全く確認することができなく、周辺の村の性格をある程度物語るものかも知れない。土師器碗は、主には口径の大きさによっ



第568図 溝52・53断面図 (1/60)

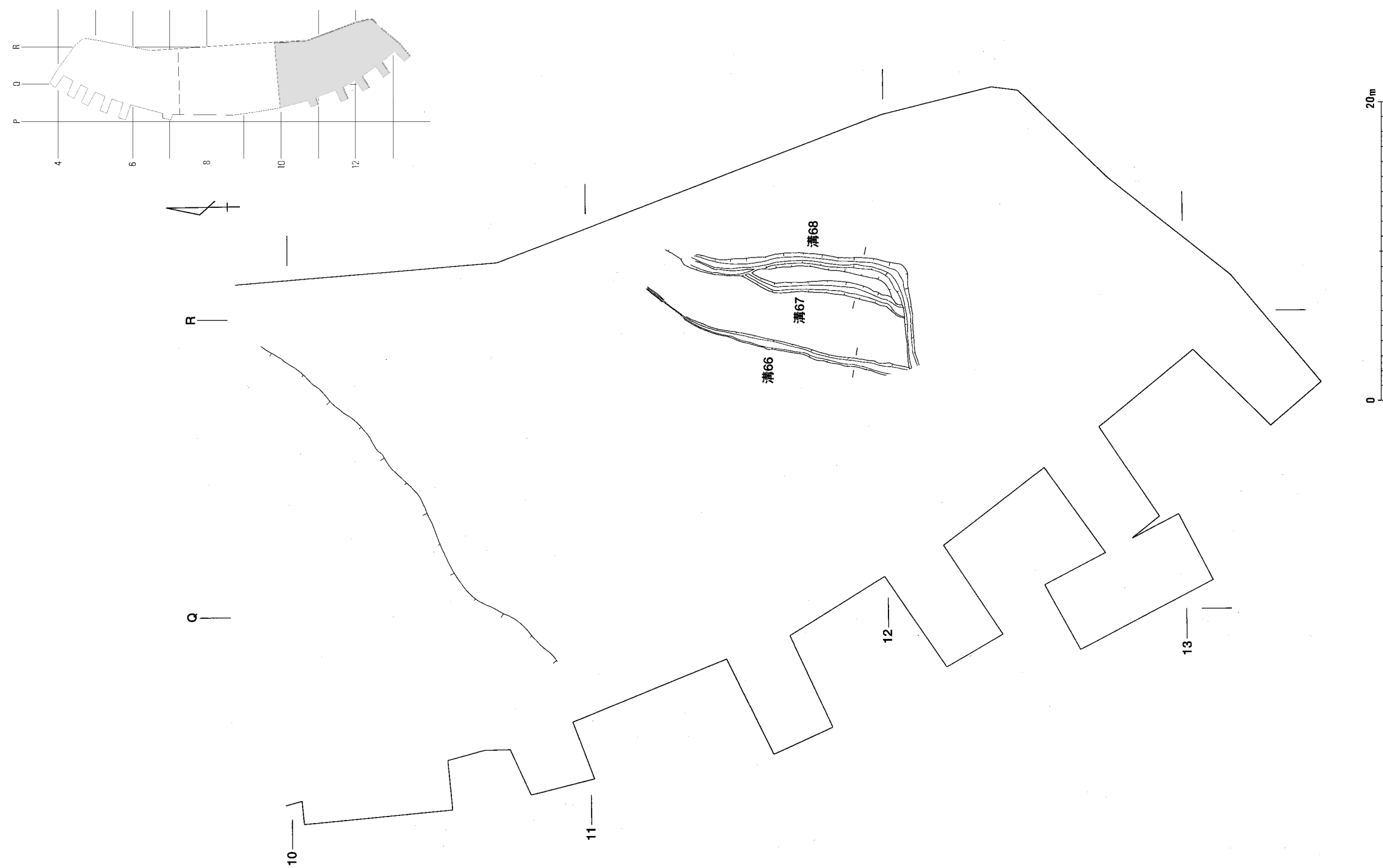
て2152～2157が13世紀前半に2158が13世紀後半に位置づけられる。また、他の器種についてもこの年代観で差し支えないものと考えられ、溝の存続時期もおおむね13世紀の範疇で理解されるものであろう。(島崎)



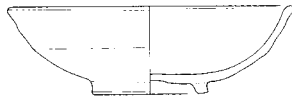
第569図 溝52出土遺物 (1/4)



第570図 中世～近代遺構全体図① (1/300)



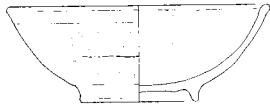
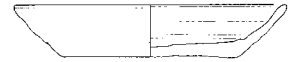
第571図 中世～近代遺構全体図② (1/300)



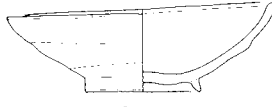
2152



2151



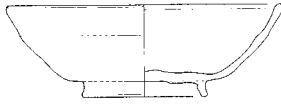
2153



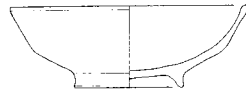
2157



2160



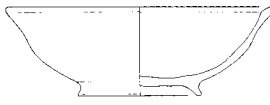
2154



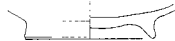
2158



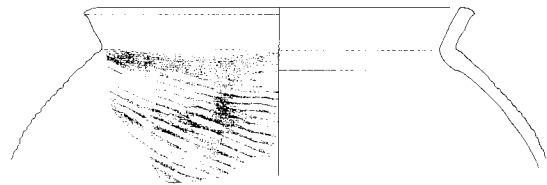
2161



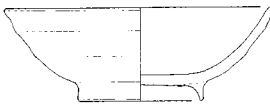
2155



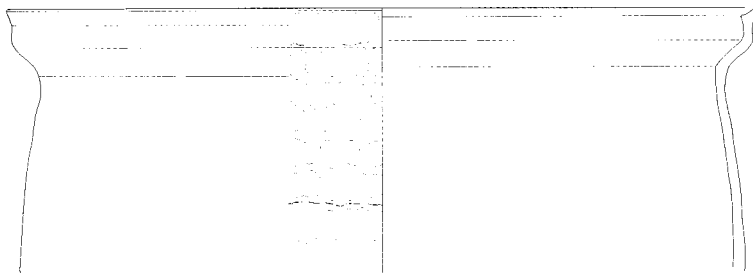
2159



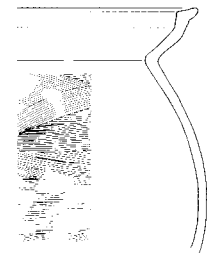
2162



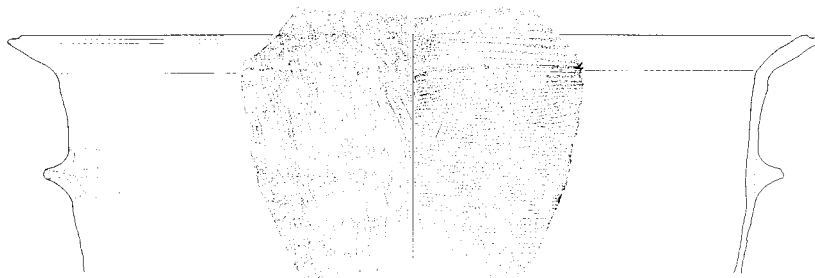
2156



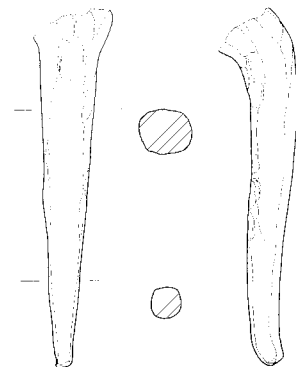
2163



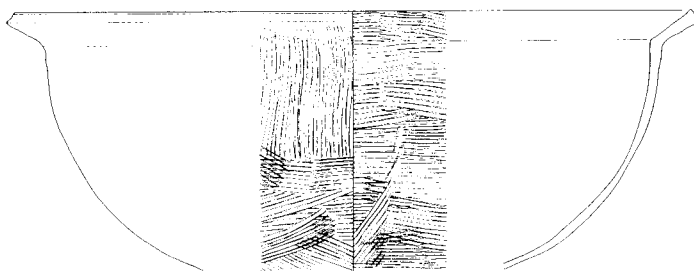
2164



2165



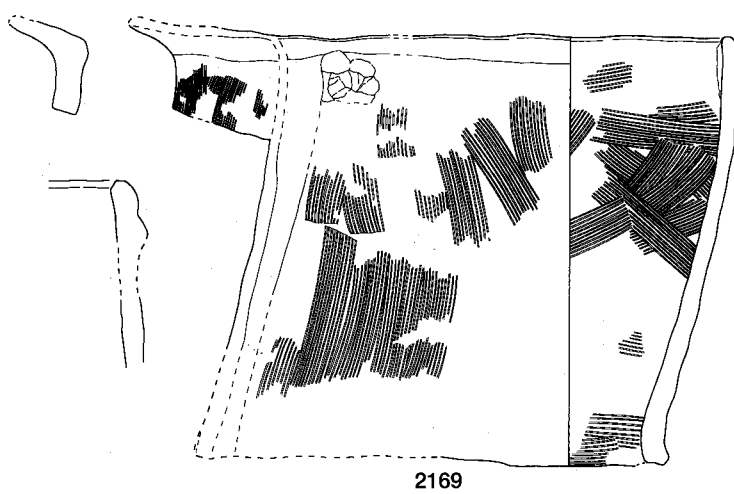
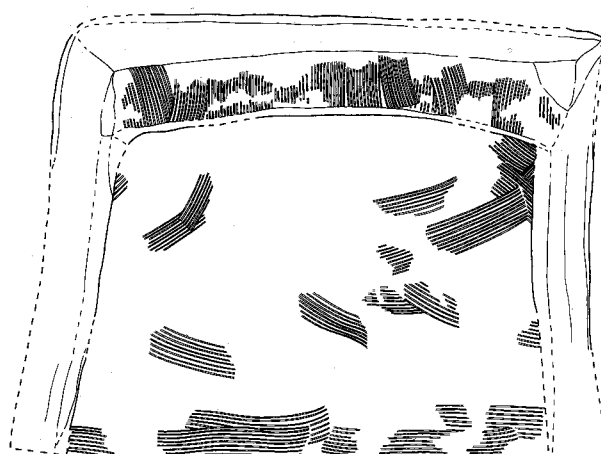
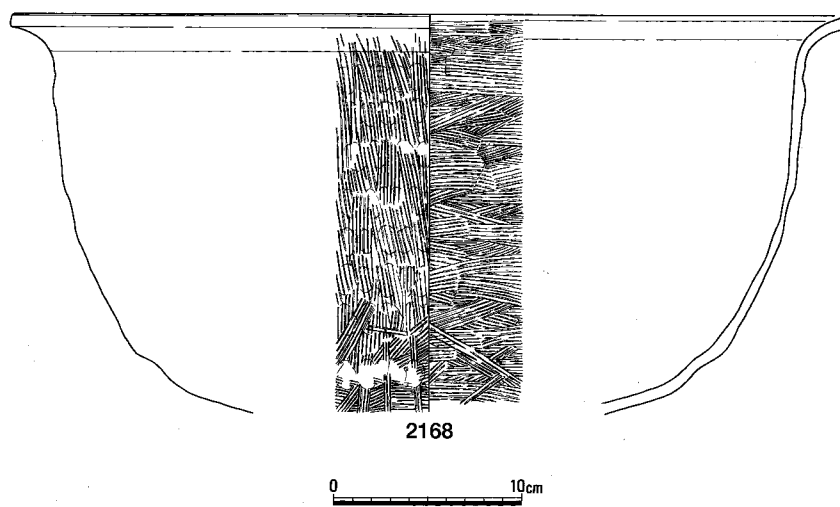
2167



2166



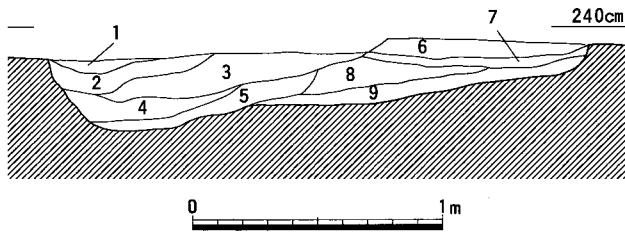
第572 溝53出土遺物① (1/4)



第573図 溝53出土遺物② (1/4・1/5)

溝54 (第570・574図)

6 Q区で検出された、北東から南西方向に流下する溝である。幅は2 m前後、深さは最大で約40cmを測る。時期を特定できる遺物はないが、埋土の色調・土質から中世頃の遺構と判断した。(岡本)

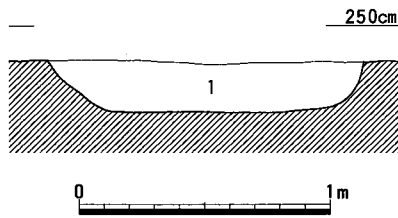


- 1 にぶい黄橙色粘質土 10YR6/4
- 2 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4
- 3 灰褐色粘質土 10YR5/4
- 4 褐灰色粘質土 7.5YR5/1
- 5 褐灰色粘質微砂 10YR5/1
- 6 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
- 7 黄灰色粘質土 2.5YR6/1
- 8 褐色粘質土 10YR4/4
- 9 褐灰色粘質細砂 10YR6/1

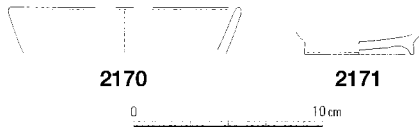
第574図 溝54断面図 (1/30)

溝55 (第570・575図)

5 Qから5 R区にかけて、溝53の南側で検出され、溝56・57に切られている。緩く弧を描く流路の東端は、調査区際で南北方向に検出された下がりにつながっており、調査区外の南北方向の溝から分流するものかもしれない。幅110～180cmで、深さ20cm前後と浅く、黄灰色細砂で一気に埋まっている。



- 1 黄灰色細砂 2.5Y6/1



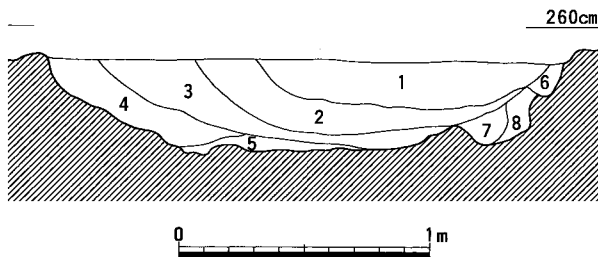
第575図 溝55断面図 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

青磁の碗2170や土師器の碗2171などが出土しており、鎌倉時代に比定される。(光永)

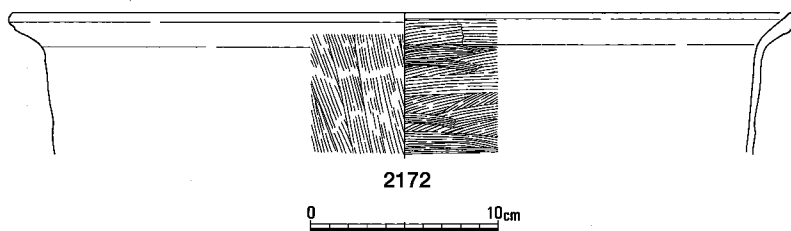
溝56 (第570・576図)

5 P～5 R区で検出された溝で、溝51～53・55・57を切り、溝58・61に切られている。

幅360cm前後、深さ40cm程度の規模で東西方向に直線的に掘られており、その流路は溝57と平行し、溝51・52とは約20°の角度をもつ。溝61の東では北岸に不整形な膨らみを示しながら南西方向へ曲がり、溝57と重なる付近で再



- 1 灰黄褐色微砂 10YR6/2
- 2 褐灰色微～細砂 10YR6/1
- 3 褐灰色微～細砂 (粗砂混じる) 10YR6/1
- 4 褐灰色微～細砂 10YR6/1
- 5 褐灰色微～粗砂 10YR6/1
- 6 褐灰色微砂 10YR6/1
- 7 褐灰色微砂 10YR6/1
- 8 褐灰色微～細砂 10YR6/1



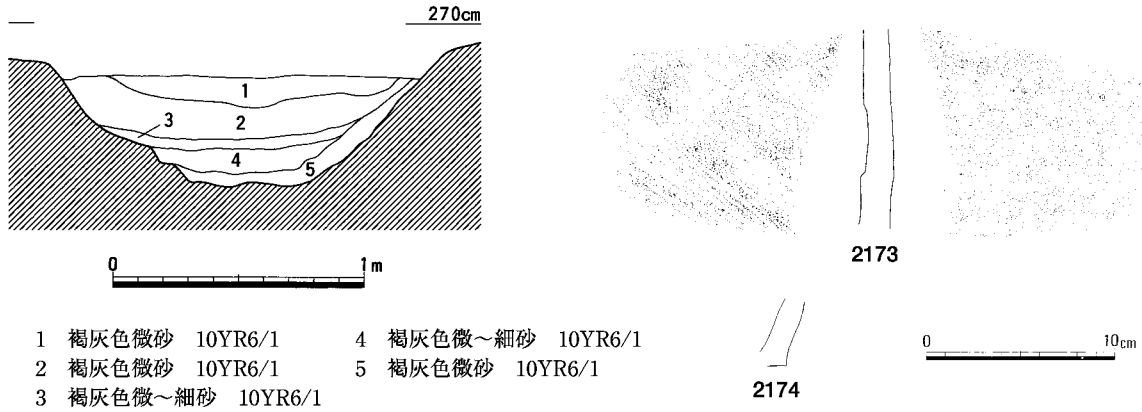
第576図 溝56断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

び西へ曲がっている。微砂ないし細砂からなる埋土からは、淀みない流れが想定される。

土師器の鍋2172などが出土しており、鎌倉～室町時代に比定されて、東西方向の溝群の中で最後に位置づけられる。 (光永)

溝57 (第570・577図)

5 P区から5 R区にかけて、溝56の南360cmに平行して位置し、溝53・55を切り、溝56・58・61に

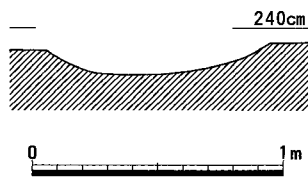


第577図 溝57断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

切られている。幅200cm、深さ50cm程度の規模で、第577図第3・4層段階での掘り直しがみられる。検出範囲の中程でやや流路を南西に振るが、溝58・61とはほぼ直交する。

出土遺物は、備前焼の甕2173、須恵器の壺2174など少量あり、鎌倉～室町時代に比定される。

(光永)



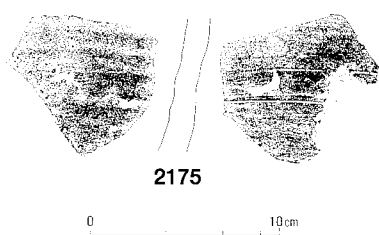
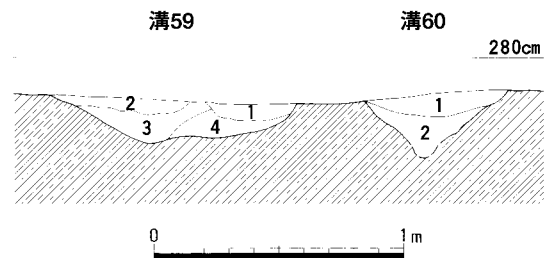
溝58 (第570・578図)

5 P区において、溝61の西に3 m以上離れて平行する。幅100cm、深さ10cm程度の浅い溝で、溝56・57を切り、延長方向に溝60が所在する。一連の南北方向の溝に近い時期と考えられる。 (光永)

第578図 溝58断面図 (1/30)

溝59 (第570・579図)

1区5 R～5 Pにかけて検出した溝で、ほぼ南北方向の、直線的な溝である。規模は、検出長420cm、幅100cm、深さ18cmで、断面の形状は浅い椀状を呈しているものである。



- 1 青灰色粘質土 5BG6/1
- 2 灰色粘質土 N6/
- 3 灰色粘質土 N6/
- 4 灰黄褐色微砂 10YR6/2

第579図 溝59・60断面図 (1/30)・溝59出土遺物 (1/4)

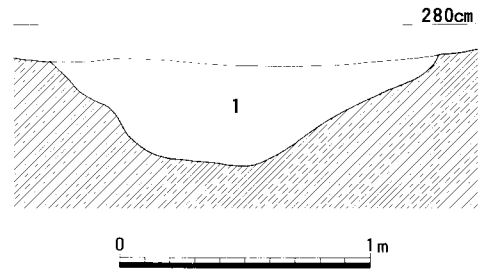
出土遺物には、備前焼の甕2175・器種の不明な土師質土器2176、瓦質の土鍋脚部2177などがある。2175は内外面をヨコナデしており、灰赤色を呈しているものである。

これらの遺物の特徴から考えて、この溝の時期は14世紀代のものであると考えられる。(時實)

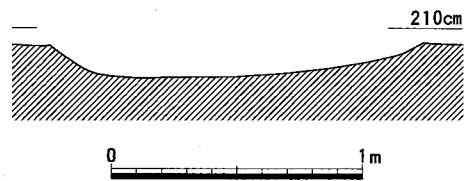
溝60 (第570・579図)

1区5P区で検出された、南北方向に延びる直線的な溝で、規模は検出長24.6m、幅50cm、深さ27cmを測るものである。断面の形状は逆台形であるが、底面の幅が12cmと狭いものであった。

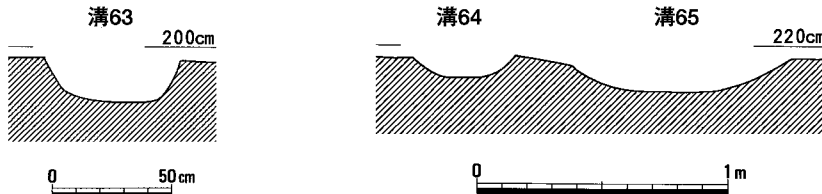
時期は出土遺物がないものの、青灰色の埋土の状況と、南北方向に直線的な溝であるということ、条里溝である溝42を切っていることなどから、近世の溝であると判断している。(時實)



1 青灰色粘質土 5BG5/1
第580図 溝61断面図 (1/30)



第581図 溝62断面図 (1/30)



第582図 溝63～65断面図 (1/30)

溝61 (第570・580図)

1区西端の4・5P区で検出された溝で、南に流下した後、5P区南端部で南西に方向を転ずる。『津島遺跡1』で報告したT10の溝8・9に相当する。深さは40～50cmを測る。今回は図示可能な遺物は出土していない。中世末から近世にかけての土地区画に関わる溝と考えられる。(岡本)

溝62 (第570・581図)

7P区に位置する東西方向の溝である。鎌倉時代の溝42の北側に接して検出され、切り合い関係から見て溝42の埋没後に流れていたとみられる。遺物は混入と思われる土器小片ばかりで直接遺構の年代を示すものはないが、埋土などから中世後期ないし近世の遺構と考えている。(岡本)

溝63 (第570・582図)

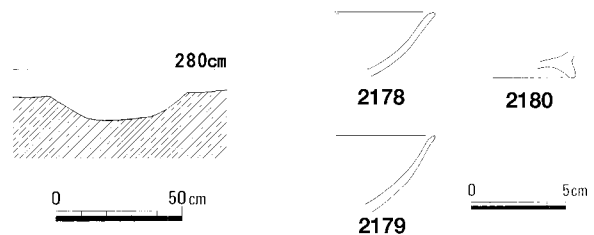
7Q区北東部に位置し、古代以降の条里制によって区画された方向に沿うように東から西方向に流走する。幅約50cm、深さ18cmを測る。時期は検出面・流走方向から中～近世に比定できる。(米田)

溝64 (第570・582図)

溝63と並走し、溝65に切られる。幅約50cm、深さ8cm。時期は中～近世か。(米田)

溝65 (第570・582図)

溝63・64と並走するが、溝64を切る。幅110cm、深さ14cm。時期は溝64より新。(米田)



第583図 溝66断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝66 (第571・583図)

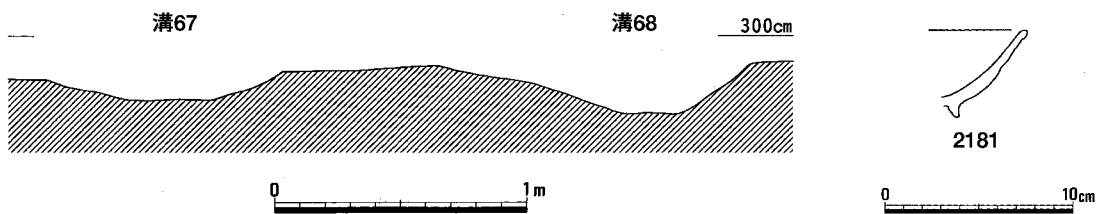
溝66は、3区11Qに位置し、北東方向から南西方向に向かってほぼ直線的に流れる。幅は90cmで深さは10cmである。断面形状はA-bである。 (小林)

溝67 (第571・584図)

溝67は、3区11Rに位置し、北東方向から南西方向に向かってほぼ直線的に流れる。溝66と溝68の間に位置する。幅は180cmで深さは10cmである。断面形状はA-bである。 (小林)

溝68 (第571・584図)

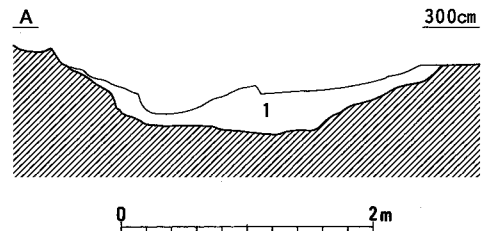
溝68は、3区11・12Qに位置し、北東方向から南西方向に向かってほぼ直線的に流れ、途中で西方向に屈曲する。溝67のすぐ東側に位置する。幅は90cmで深さは22cmである。断面形状はA-bである。2181は土師器の椀である。 (小林)



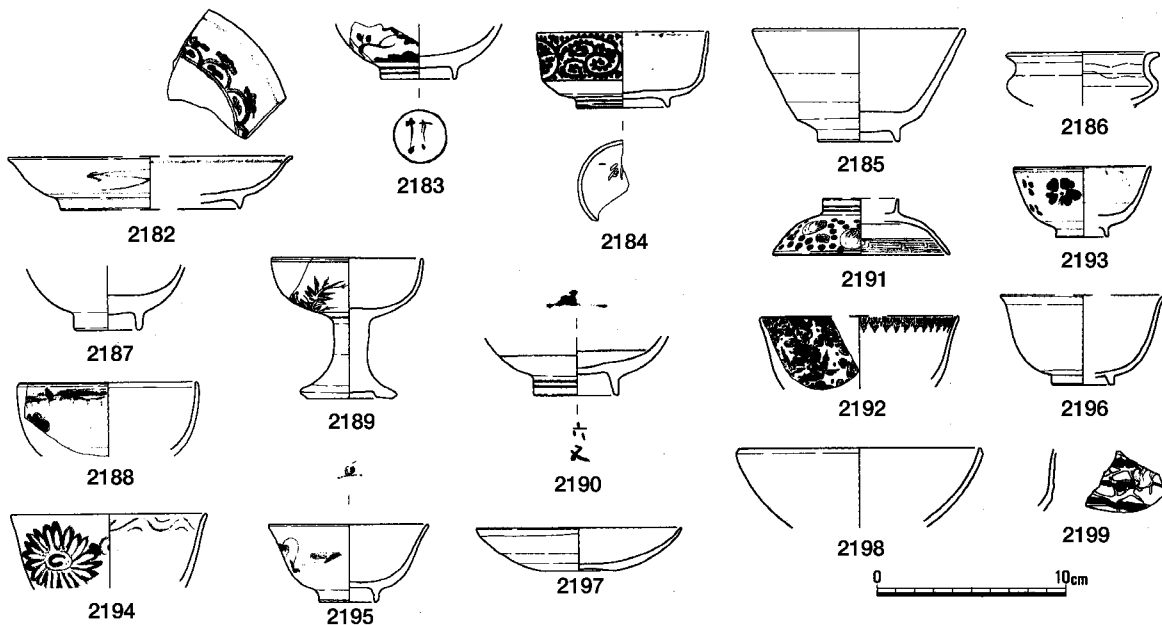
第584図 溝67・68断面図 (1/30)・溝67出土遺物 (1/4)

溝69 (第570・585図)

調査区の北端近くで検出された、北東から南西に流れる溝である。上面幅約300cm、深さ約70cmを測り、両側の斜面には杭が打ち込まれていた。出土遺物のうち、2192の肥前系の碗は明治～大正期に比定され、当地が練兵場として造成される直前まで機能していた溝であることが理解される。 (岡本)



1 黄灰色粘性微砂質土 2.5Y5/1



第585図 溝69断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第4章 まとめ

第1節 発掘調査成果の成果

発掘調査の対象となった調査区は、国指定史跡である津島遺跡の北東部約250mの地点に隣接して所在する。北東から南西に向けて緩やかに下がる地形のなかにあつて、当該地点からは調査の結果弥生時代前期以降近代に至る数多くの遺構・遺物の検出をみた。これによって津島遺跡の北東部における弥生時代前期以降近代までの実態が部分的ながら明らかになったといえる。

ところで、調査の結果検出した遺構のなかにあつて、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものは総じて残存状態が悪いことが分かった。なかでも堅穴住居は、検出面からの床面まで深くて20cm前後、なかには床面が既に存在しなくてわずかに壁体溝のみが残るものも存在した。そこで個々の遺構の本来の深さと生活面とを勘案した結果、生活面は既に1m近く後世の削平によって消滅していることが判明したのである。特に遺構密度の異なる1区と3区の遺構残存状況を比較した場合、弥・後・Ⅰの袋状土壇、弥・後・Ⅲから弥・後・Ⅳにかけての河道1での遺物の斜面堆積状況等から、1区的生活面の方が本来高かったことが推測された。

したがって、今回検出できた遺構が全てを物語るものではなく、消滅した遺構をも視野に置いた各時代相の復元が必要で、これを念頭に置きながら以下に年代を追って概観してみよう。

弥生時代前期は、弥生時代中・後期の河道と溝によって寸断される部分もあるが、全体の地形に合った在り方、すなわち調査区北東部の海拔約2.0mから南西部の海拔約1.7mに下がる地形のなかにあつて微高地・水田面が2面それぞれに時期差をもって面的に展開していた。水田は、こうした地形の在り方に即した造りとなっており、等高線に並行する部分が長い畦畔を、直交する部分が短い畦畔を有する長方形を基調とするものであった。また、1・2区調査区の中央部には用・排水路と考える溝が水田の形態に有機的に結びつき直線的な在り方を見せていた。微高地は調査区の北側にわずかに島状にみられ、これを中心に畦畔が放射状に派生する。面的には北東に隣接する北方下沼遺跡・北方横田遺跡（註1）から徐々に地形が下がりながらも繋がることが判明した。

ただし、これら水田と武道館予定地内で検出された集落との関係については、直線距離にして約250m離れており、またこの間は谷地形（註2）で寸断される等、直接つながる可能性は低いものと考えられる。

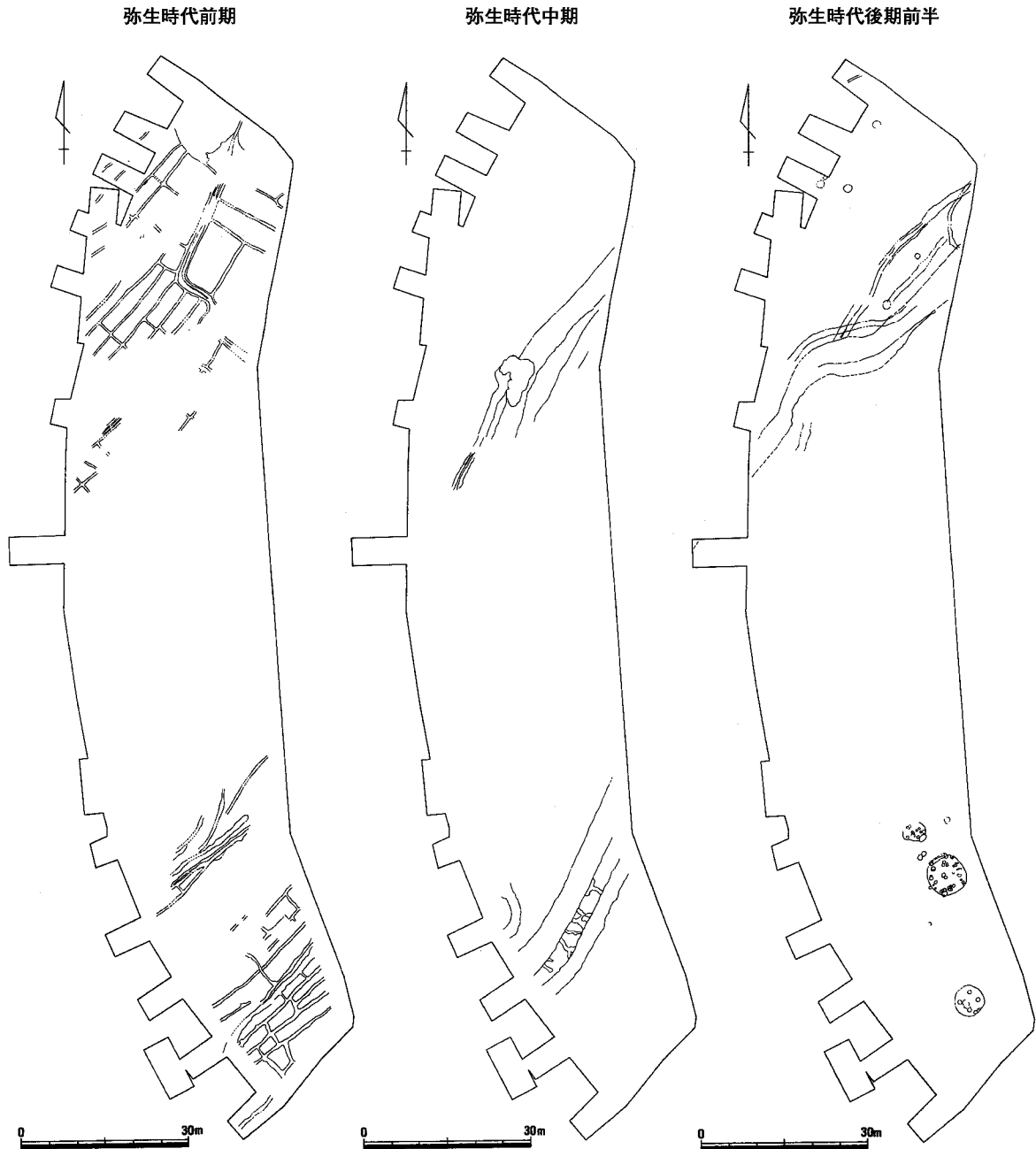
弥生時代中期は、前期水田が50cm以上の厚い黄色粘質土で埋没した後に溝が掘られていた。溝は、後葉から末葉にかけてのものと考えられ6条が北東上流から南西下流方向に直線的に伸び、途中分岐して流れを下流へと延ばしていた。一方、調査区中央部には池状の窪地が溝と切合った状況で存在しており、池状に掘られた窪地から始まる溝の存在から、湧水および天水等を溝によって下流へと流す施設の存在が知られた。なお、当該調査区からは堅穴住居・井戸等生活痕跡は全く確認されなかった。集落は、周辺の津島遺跡第二次確認調査の成果（註3）によれば、当調査区の南約30mの地点を北限として南北約150m東西約80mの範囲で後葉を中心とした堅穴住居・土壇等が確認されており、これ

が当該調査区に最も近い集落といえる。

弥生時代後期は、前半（弥・後・Ⅰ、弥・後・Ⅱ）から後半（弥・後・Ⅲ、弥・後・Ⅳ）にかけて徐々に集落規模を拡大する。

弥・後・Ⅰは、中期末葉まで集落が形成されなかった当調査区に初めて集落が形成された時期といえる。1区に袋状土壘が4基、北東から南西方向に流れる溝が中期からの踏襲を含め5条、3区には弥・後・Ⅰから弥・後・Ⅱにかけての竪穴住居が1軒、土壘が1基みられる。1区の袋状土壘が平均20cm遺存する程度であることから、土壘本来の深さが沖積平野で150cm前後にあるものと仮定した場合約130cmが消滅していることとなり、本来の生活面は海拔約3.7m付近に想定される。

弥・後・Ⅱは、1区に土壘が1基のみ、3区に竪穴住居が2軒、土壘が6基確認され、集落および後・Ⅲ以降存在が明確になる幅50mの河道も北東から南西に流れる溝33との切合いで判然としない点



第586図 時代別遺構変遷図① (1/1,200)

もあるが、集落編成の萌芽期であったことが遺物の出土状況等によって窺われる。ただし、ここでも1区をはじめ掘削されて消滅した遺構の存在も可能性として考えることも必要であろう。

弥・後・Ⅲは、1区には小規模な4条の溝と幅50mの河道が北東から南西方向に流路をみせて存在するのみで竪穴住居等集落の存在を物語る遺構は検出されなかった。ところが先述したように検出された溝・河道等の在り方には、本来の生活面が1m以上に亘って削平され、消滅した遺構の存在を示唆させるものが多く存在する。すなわち、河道1北側斜面に集中的に廃棄された土器のなかには当該期のもも半数近く含まれており、3区に所在する集落と同規模あるいはそれ以上の集落が存在した可能性が高いと考える。また、溝23~26の遺存状況は、あくまでも用排水に使用、溝さらえされた溝底部の在り方を示すものであり、本来の溝上面はやはり1m以上も上にあつたことを首肯させる。

3区においては弥・後・Ⅱに比較して竪穴住居が6軒、土壙19基等と遺構数が増加し、集落の拡大



第587図 時代別遺構変遷図② (1/1,200)

傾向が窺われる。

弥・後・Ⅳは、1区では弥・後・Ⅲから続く河道1と河道1の川岸に竪穴住居1が1軒存在した以外に遺構は確認されなかった。一方、3区では竪穴住居が7軒と土壇約13基が存在し、偏在した在り方をみせた。ただし7軒が同時に存在したのではなく、同時共存は多くて3軒と考えられ、それぞれが地点を大きく変更しないで建て替えによる拡張をみせるものであった。河道1の斜面堆積として1区側からの建築部材・土器・木器等数多くの遺物が廃棄され堆積が認められたが、これについては後期Ⅲを含め、検出された1軒の竪穴住居と溝5条の規模では考えられない状況といえる。当該期においても本来相当の集落が存在していた可能性が高いと思慮される。

古墳時代前期、河道1は浅く中央部分にわずかに流路が存在する規模にまでに流路を縮小していたようで、北斜面途中には貝を集積し周辺に小枝を打ち込んだ足場の存在が認められた。1区には竪穴



第588図 時代別遺構変遷図③ (1/1,200)

住居が1軒と掘立柱建物が1棟、井戸が竪穴住居周辺に2基存在した。ただし、これも竪穴住居の床面遺存状況からは消滅した遺構の存在も推測される。一方、南側3区では竪穴住居が25軒と井戸が3基、弥・後・Ⅳの数に比すれば4倍近い急激な増加傾向を示す。竪穴住居の平面形態は1軒が平面多角形を呈する以外は全て方形で、ほとんどが東西・南北方向を基調とする。

古墳時代中期の河道は、この時期川幅を狭め流路も南側に寄っていたことが土層断面によって知られる。河道を南側に見下ろす緩斜面には土器溜まりが形成され、川辺の祭祀を彷彿とさせる状況で数多くの土師器に手捏ね土器が土製勾玉・鏡等祭祀用具を伴って出土した。一方、1区には竪穴住居が2軒と井戸が4基、3区には竪穴住居が19軒、土壙2基が検出されたが井戸は皆無で、1区の竪穴住居数に対する井戸の占める割合にはとうてい及ばない。

竪穴住居の中には北側、西側壁寄りにカマド・煙道を「L」字状に造り付けた朝鮮半島系とされる構造を有するものが3軒認められたが供伴遺物には半島系のものは確認できなかった。また、遺物の中に高杯脚部を再利用したフイゴの羽口が確認されたが鍛冶関係遺構の存在は本来の生活面が大きく削平を受けていることから、例え存在したとしても既に消滅した可能性が高いと考える。

古墳時代後期には河道の位置・範囲に大きな差異は認められない。ただし、集落規模においては1区で竪穴住居が2軒と溝1条・土壙3基、3区では竪穴住居が13軒・土壙10基・溝1条とやや中期に比較して竪穴住居の数の減少する点に若干の変化を知ることができる。なお、井戸はこの調査区内では確認されていない。生活様式に何らかの変化があった可能性も窺われる。竪穴住居等遺構の希薄な北側1・2区河道2の北側斜面において水辺の祭祀を彷彿とさせる須恵器の杯身・杯蓋合計5点を供献用に並べた状態での発見がみられ、祭祀を司る集落が存在したことが窺われる。

古代と考えられる溝42は、東方900mの地点に所在する北方藪ノ内遺跡で検出された溝16および溝24（註4）と昭和44年の武道館調査区（註5）で検出された河道とを結ぶように直線上に位置し、地割り図に一致する。このことから溝42は、条里に伴う津島郷と伊福郷の郷境の溝と判明した。この時期周辺には北方藪ノ内遺跡に見られるような集落は存在せず水田景観にあったことが窺われた。

中世には集落の存在は認められなく、溝が北東から南西方向に掘られていた。溝の中からは日常雑器が出土したが青・白磁等輸入陶磁器は一切含まれていなかった。周辺状況を窺わせる事例の一つと考えられ、水田を中心とした景観であったと考える。

近世～近代は、中世とは溝の方向に変化が認められた程度で、土地利用は基本的には変わらない。水田を中心とした景観が広がっていたものとする。ところが明治40年には旧日本陸軍第17師団の編成に伴い練兵場として整備され、この結果水田の上には約1mの盛土が広い範囲で成された。ただし、造成は現在の総合グラウンド範囲内に限定されるものではなかったようである。（鳥崎）

註

- (1) 「北方下沼遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- (2) 「津島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 1999
- (3) 津島遺跡・第二次確認調査T15・16において弥生時代中期末葉の竪穴住居・土壙等が検出されている。
- (4) 「北方藪ノ内遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』149 岡山県教育委員会 2000
- (5) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000

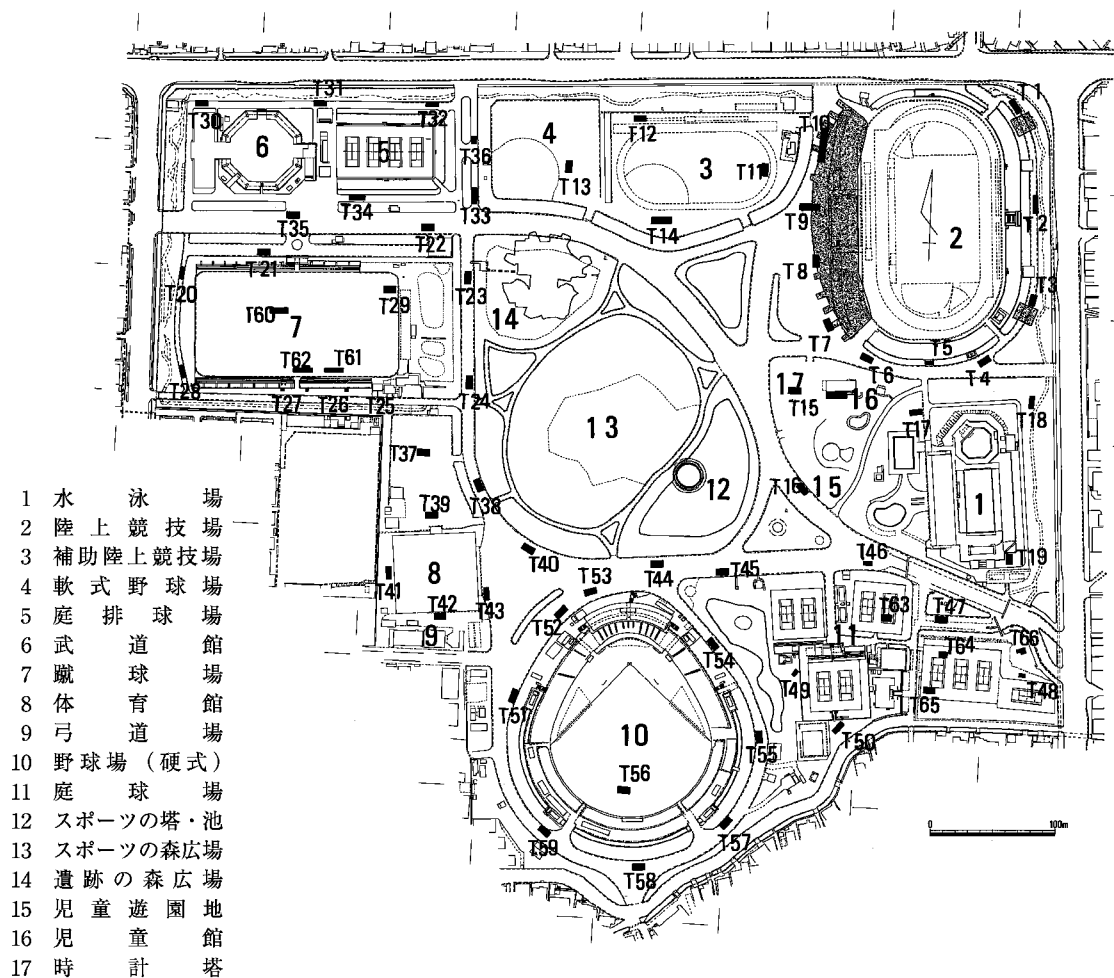
第2節 弥生時代前期の水田遺構

岡山県総合グラウンドの確認調査は平成9年度から開始され、平成14年度も継続をしている。

グラウンド内(346,393.71㎡)のほぼ全域に5×10mを基調とするトレンチを66か所設定し、発掘を実施した(第589図)。その結果、11か所のトレンチから小畦畔を伴う弥生時代前期の水田が検出された。それらの分布は、陸上球技場の周辺北側のT1・T2・T10・T11の4か所、蹴球場の周辺西側のT21・T28の2か所、スポーツの森広場周辺の南西側のT38・T39・T40の3か所、水泳場と庭球場間のT19・T46の2か所であり、水田がグラウンドの中央部(国指定史跡域)をおおよそ「U」の字状に囲む格好となる。その微高地高所部の海拔高は約230cmをはかり、北東から南西方向に緩やかに高さを減じている。水田面の海拔高についても北東から南西方向に微高地形状と同じく下降傾向を示している。すなわち、グラウンド内は河川の沖積作用により形成された微高地部に居住域があり、低位部には水田および河道が存在することが明らかになった。

今回の改修対象となった陸上競技場はグラウンド北東部に位置し、発掘調査を実施したメインスタンドの規模は南北190m、東西40m、面積5,850㎡をはかる。

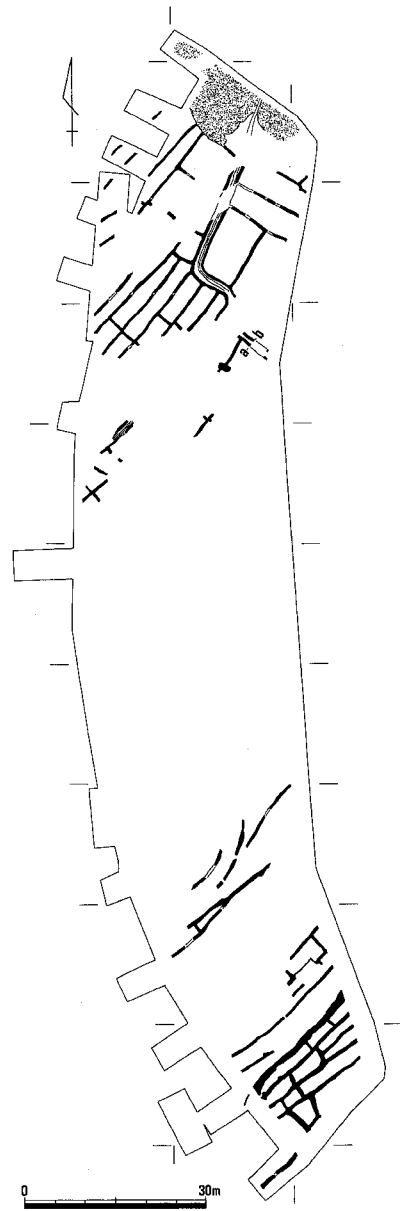
検出した水田遺構は現地表から約2m下にあり、後世の溝により掘削を受けているが、ほぼ全域に



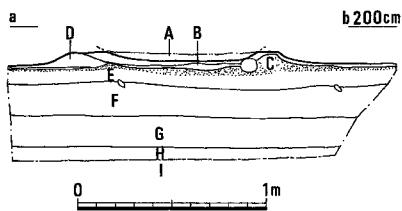
第589図 岡山県総合グラウンド調査区位置図 (1/6,000)

存在していたと思われる状況を呈していた。北東側が高く南西に向かって低くなる緩斜面に、微高地と上層・下層の水田が確認され、2面の水田遺構の存在が明らかとなった。上層水田（水田3・4）が灰色粘土、下層水田（水田1・2）が黒色粘土を水田層としている。比較的残りの良い下層水田（第590図）関連では、北側に微高地の高所を南流する水路、その水路から接続し、ほぼ直角に分岐して南西・南東に流れる畝畝状の溝、南側では水田の長辺に並行して設けられた畔路、そして、南・北側に水田を区画する小畦畔等の遺構が認められる。小畦畔で区画された水田は、北東から南西に向かう水の流走方向に長軸が一致し、短冊の形状を呈するものが大半である。これらには水口は見られず、掛け流しを主にした配水の可能性が考えられる。上層の水田も下層水田の形状を基本的には踏襲している。ちなみに、下層水田の北側田面の海拔高は170~200cm、南側田面の海拔高は120~145cmをはかり、約170mの間隔でおおよそ25~80cmの差が認められる。田面の面積は小規模なものが6.8㎡、大規模なものが70.5㎡であり、平均規模は23.5㎡位である。また、これらの田面直上の畔根付近には2~6cmの小円礫が多数検出されており、その形状及び出土状況から投弾の可能性も考えられる。さらに、下層水田では磨製石包丁1点、石鎌9点、石錐1点、土製紡錘車1点、縄文晩期・弥生前期土器の小片等が出土している。

また、弥生時代前期の水田層および関連土層を対象とした自然科学分析調査は、(株)パリノ・サーヴェイに植物珪酸体分析と珪藻分析を依頼した。試料採取地は1区の南東部に弥生時代中期末の溝12~15に破壊された畝畝状の溝2の



第590図 下層水田遺構全体図(1/1,250)



- A 暗褐色砂混じりシルト（堆積砂）
- B 黒褐色シルト質砂（下層水田溝の堆積土・上層水田の水路）
- C 暗褐色砂質シルト（下層水田畦畔・マンガン粒を多く含む）
- D 暗褐色砂質シルト（下層水田畦畔・下位層に鉄分を多く含む）
- E におい褐色粘質土
- F 暗オリーブ褐色砂質シルト
- G 灰黄褐色粘土
- H オリーブ褐色粘土質シルト
- I 灰オリーブ粘土

第591図 溝2 試料採取土層



写真1 溝2 試料採取土層断面

a b断面部分（第591図）であり、この付近の田面海拔高は約180cmをはかる。

珪酸体分析試料は、上層水田の溝を被覆する砂A、上層水田の畦畔・下層水田の溝B、下層水田の畦畔C、下層水田の畦畔D、下層水田下の基盤Eの5点である。イネ属は、短細胞珪酸体がA～Eすべての土層から検出され、機動細胞珪酸体がA・B・Dで、特に溝の堆積砂Aが他に比べて多く検出されている。下層水田の畦畔に相当するC・Dで、Dからはイネ属短細胞・機動細胞ともに検出されているが、Cからは機動細胞は検出されず短細胞珪酸体のみという場合もある。Bも両珪酸体が検出されているが、その出現率は低く5%以下である。ちなみに、現在の水田耕土におけるイネ属珪酸体の調査例では、16%の出現率が報告されている。ただし、3区の下層水田におけるイネ属珪酸体の出現率は5%以上であり、同一の水田土壌に含まれる珪酸体の量は、必ずしも均一した状況を示してはいないようである。ここでは、水田関連の土層と考えたA～Eすべての試料からイネ属の短細胞珪酸体が検出された事実に基づき、一応、自然科学と考古学分野の両面から水田遺構の存在が確認できたものと考ええる。

珪藻分析では下層水田より下位の土層で、人為的な作用が及んでいないと考えたE～Iの5点の試料で行った。IについてはGの下端から-40cmの採取である。報告によると、いずれの試料からもほとんど珪藻化石が検出されておらず、わずかに流水不定性種（止水域にも流水域にも生息する種）が産出している。海拔152～178cm間のE・Fから貧塩不定性種、海拔136～152cm間のGから海水生種・貧塩不明種、Hから貧塩不定性種・貧塩不明種が見られ、下位に向かって数量が減少し、海拔95cm地点のIでは珪藻化石は産出していない。これより、弥生時代前期以前における堆積環境については詳細な検討が不可能であること。しかし、流水不定性種などの水性珪藻が若干産出するため、堆積当時に何らかの水の影響を受けていた可能性が示された。

さて、水田の時期を想定する、上・下層水田遺構関連の出土遺物で図化ができた土器は壺・甕等の小片22点であった。1～4は微高地、5～8は下層水田、9～13は上層水田、14～16は溝1、17～22は遺構に伴わないものである。これらは縄文晩期の5～7を除けば、出土場所の違いに関係なく弥生時代前期の新しい様相を看取出来るものが多い。壺は断面三角形の粘土紐を貼り付けた突帯文様、甕は倒「L」字形の口縁下位に、細い平行ヘラ描き沈線の多条化（6～10条）が認められる。この特徴は備前1-3様式・備中1-4様式（註1）に当てはまるものであり、少なくとも上層水田の下限は弥生時代前期の後葉と考えられる。下層水田についても、上層水田が基本的には平面形を踏襲しており、前期前葉まで遡らせることは難しく、前期中葉以後の所産と考えておきたい。また、発掘区の北東約150mに位置する北方横田遺跡（註2）の水田層直上と洪水砂内からは、「く」の字状と倒「L」字状の口縁を持ち、平行ヘラ描き沈線の多条化（6～7条）した甕が見られる。同水田の大畔（畔路）の盛土内からはこれらより古相を呈する壺などが出土している。本遺跡の水田遺構とほぼ同様の検出状況を呈しており、同時期の水田が連綿と繋がっていたものと考えられる。（高畑）

註

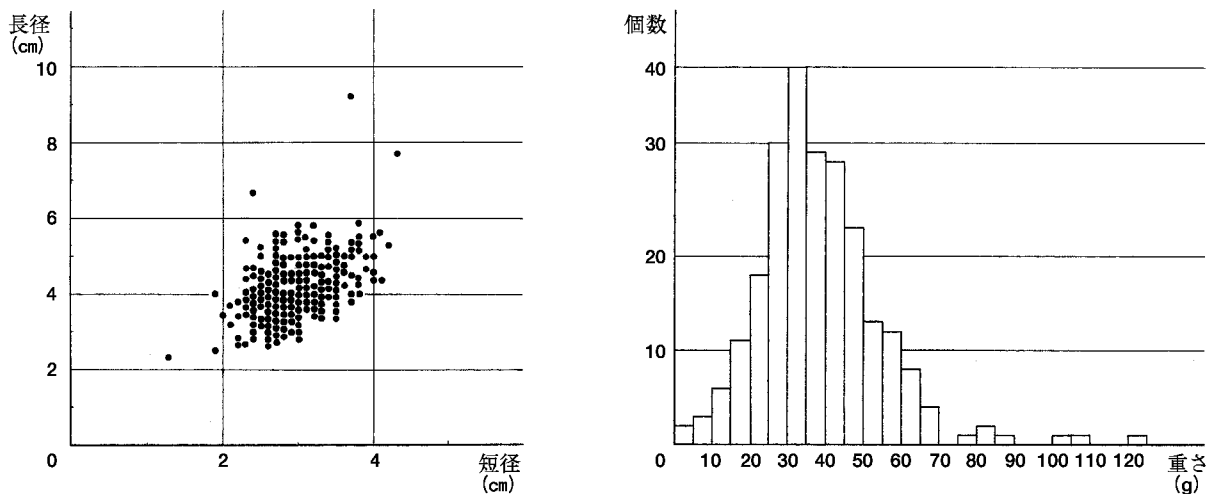
- (1) 正岡睦夫「備前地域」『弥生式土器の様式と編年』-山陽・山陰編- 木耳社 1992
 高畑知功「備中地域」『弥生式土器の様式と編年』-山陽・山陰編- 木耳社 1992
 (2) 岡田 博ほか「北方横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998

第3節 弥生時代前期水田から出土した円礫

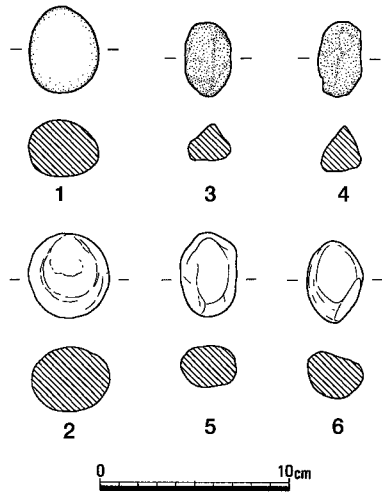
津島遺跡では弥生時代前期に属する水田層が検出されている。1区においてこの弥生前期水田を検出している際に、この水田層の中から長径4 cm前後の円礫が出土する例が相次いだ。このような円礫は、水田層の粘質土中に、そのほとんどが単独で存在しており、自然に流れて堆積したとしては不自然であり、明らかに人為的にもたらされたものと推測された。そのため、3区において、この弥生水田層を検出する際には、この円礫を遺物として取り上げると同時に、平面的な分布等を検討することにした。その結果、約850㎡の水田面から計240個におよぶ円礫を検出した。これは1㎡あたり0.28個出土するという計算になる。これらの円礫は水田層に含まれており、弥生時代前期に属するものと考えられる。なお、3区の弥生水田層は本報告では水田3・4の上下2層の水田として報告しているが、円礫については、水田面にめり込んでいたりしており、円礫を厳密に上下の水田層に区分することはできなかったため、一括して扱うこととする。

水田層から出土した石は、その大部分は表面が磨滅した滑らかな円礫である（第38図）。大きさは長径3～6 cm、短径2～4 cmの範囲に約93%の円礫が収まる。また、重さは20～60 gのものが大部分であり、この範囲に約86%の円礫が収まる。これらの分析から、円礫は大きさ、重さ等、極めて類似したものが選択的に弥生水田の中に持ち込まれているといえる。これらの円礫は、河原石が利用されていると考えられ、付近の河原で人為的に採集されたのちに、何らかの理由で弥生水田面に残存したのと考えられる。その円礫の水田面における分布は第37図に図示している。円礫は水田の大畦畔から北側に多く分布するという傾向がみられるものの、ほぼ水田面全域に分布している。特に集中して出土している箇所はなく、また、畦畔との位置的な関係も希薄である。

岡山県内で弥生水田は、弥生前期から後期のものまで数多く検出されているが、弥生水田面において、この津島遺跡のように円礫が出土したという報告は少ない。そのなかで、弥生時代前期水田と推定される水田については、円礫を伴うものがあつたと語る担当者もいることから、弥生時代前期水田では円礫が伴うものの類例が窺える。しかし、その他の時代の弥生水田に円礫が伴っていたか否かについては、弥生水田をすべて精査したわけではないこともあり、不明な点も多い。しかしながら、他



第592図 津島遺跡弥生時代前期水田出土の円礫の大きさと重さの分布



- 1 岡山県用木山遺跡
- 2 岡山県百間川今谷遺跡
- 3・4 大阪府池島福万寺遺跡
- 5・6 大阪府山賀遺跡

第593図 石製投弾出土例 (1/4)

県ではこのような例がいくつか報告されている。大阪府池島福万寺遺跡（大阪府文化財調査研究センター1998、2002）では弥生時代前期の水田層から円礫が出土している。大きさは3.5～5.2cmで、投弾と考えている。他方、大阪府山賀遺跡（大阪文化財センター1983）では弥生時代前期の溝や小穴などから自然礫が117点出土している。長径3.5～4.5cm、重さ20～50gと津島遺跡のもの比べるとほぼ同じような大きさであるといえる。このように水田に限らなければ、このような円礫が多数出土する例は各地にみられ、住居址から出土した事例も報告されており（八幡一郎編著1982）、その用途は石製投弾と考えられている。このことから、津島遺跡の弥生時代水田から出土した円礫も石製投弾の可能性が高いと考えられる。そして、これらの投弾が弥生時代水田に投げ入れられた理由としては、水田に群がった鳥獣を駆除あるいは捕獲する目的で投げ入れられたケース等が考えられるが想像の域をでない。

石製の投弾は岡山県においても集落でいくつか出土している。

赤磐郡山陽町用木山遺跡（山陽団地埋蔵文化財調査事務所1977）では21点の円礫が採集されている。大きさは2.7～6.2cmを測る。また、百間川今谷遺跡（岡山県教育委員会1982）でも発見されている。県内の遺跡をすべて調べたわけではないが、県内では弥生時代前期から中期頃にかけての石製投弾の報告例はあるものの、その数は少ない。とくに自然の円礫を利用した石製投弾は場合によっては自然礫とみなされ遺物として取り上げられにくいといったことも考えられよう。今回、津島遺跡の調査で240点にもおよぶ投弾を発見することができたということは、弥生時代前期において投弾がいかに日常的に存在した石器であったかを物語っているといえる。今後の資料の増加を期待したい。（金田）

参考文献

『山賀（その2）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（財）大阪文化財センター 1983
 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI』（財）大阪府文化財調査研究センター 1998
 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI』（財）大阪府文化財調査研究センター 2002
 「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会 1982
 「用木山遺跡」山陽団地埋蔵文化財調査事務所 1977
 八幡一郎編著『弾談義』六興出版 1982
 平井 勝『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 ニューサイエンス社 1991

第4節 津島遺跡出土の木製品

津島遺跡では河道1で多くの木製品が出土し、その点数は総数約1,288点を数える。これらの木製品は弥生時代後期後半期のものと位置付けることができ、その出土量は同時期の県内の遺跡では最大級である。この津島遺跡から出土した木製品の特徴として大きく次のことが指摘できる。①種類が豊富で、特に農耕具では多様な器種がみられ、当時の農耕具のセット関係を知る上で貴重な資料が得られたこと。②建築部材が多く出土したこと。特に、個々の部材、あるいは構造材など当時の建築技術を知る上で貴重な資料が得られたこと。③装飾板や刀装具などあまり類例の見られない資料が得られたことなどである。ここでは、この中の①と②についてその内容を整理し、今後の木器研究の一助としたい。

①農耕具

今回の津島遺跡の調査で河道1から弥生時代後期後半期の農耕具が出土したが、その点数は北岸で57点、南岸で19点、計76点を数える。これらの農耕具を既存の研究成果を参考にしながら分類すると次のようになるであろう（奈良国立文化財研究所1993）。1. ナスビ形農耕具（平鋏・又鋏・反柄）、2. 直柄又鋏（代掻き）、3. 横鋏（えぶり）、4. 組合鋏（鋏身・柄）、5. 一木鋏（掘棒）。第594・595図に掲げた図は津島遺跡で出土した木製品をもとに、復元を行ったものであり、点線の部分は推定復元を行ったものである。以下、それぞれの概要を述べる。

1. **ナスビ形農耕具**：ナスビ形農耕具とは基部がちょうどナスビのヘタのように突出するものである。津島遺跡では確実にナスビ形農耕具といえる木製品が13点出土している。その内、1点が平鋏で、又鋏は12点を数える。平鋏は基部から刃先にいたるにつれ幅が広がり、直線の刃をもつ。又鋏は二又鋏と可能性として三又鋏があげられる。この三又鋏は断片的な資料で、三又鋏として復元するには難があるかもしれない。この木製品は他のナスビ形農耕具と比較しても厚く、また刃も細いことから、他のナスビ形農耕具と形状のことなるタイプの農耕具を想定し、三又鋏の可能性を考えたまでのことであり、今後の類例の増加等に期待したい。二又鋏は津島遺跡では主流を占める農耕具である。そのうち、完形であるW19・W20は長さそれぞれ86.3、84.1cmを測るものであり、鋏として使用するにはやや長大な印象をもつ。二又鋏の中には透かしを持つものも存在する。その中には鉄刃を装着した痕跡をもつ二又鋏（W22）が存在する。県内において鉄刃を装着する農耕具は上東遺跡の組合鋏（岡山県教育委員会1974、岡山県教育委員会2001）にみられるが、二又鋏に装着痕跡を残すものはない。装着されていた鉄刃はいわゆる鉄板の両端を折り曲げた方形板刃先であると思われ、幅11.2cmの鉄製刃先が考えられよう。なお、二又鋏に装着痕跡を残すものは県外では宮城県中在家南遺跡（仙台市教育委員会1996）や長野県石川条里遺跡（長野県教育委員会1997）で類例が見られる。また、津島遺跡ではこれらのナスビ形農耕具を装着するための反柄が8点出土している。そのうち、2点はほぼ完形であり、長さが101.1cm（W32）と121.8cm（W266）を測る。反柄には紐かけの突起がみられ、鋏台部には緊縛痕跡がみられるものがある。ナスビ形農耕具の笠部の上下を蔓のようなもので縛って固定したものと考えられる。

2. **直柄又鋏（代掻き）**：代掻き、あるいは民俗例で「こまざらえ」と称されるものである。津島

平 鋤	又 鋤	二 又 鋤	二又鋤 (透し)	二又鋤 (透し)
W13	W14	W15 . W16 . W17 . W18 . W19 W20 . W258 . W259	W21	W22

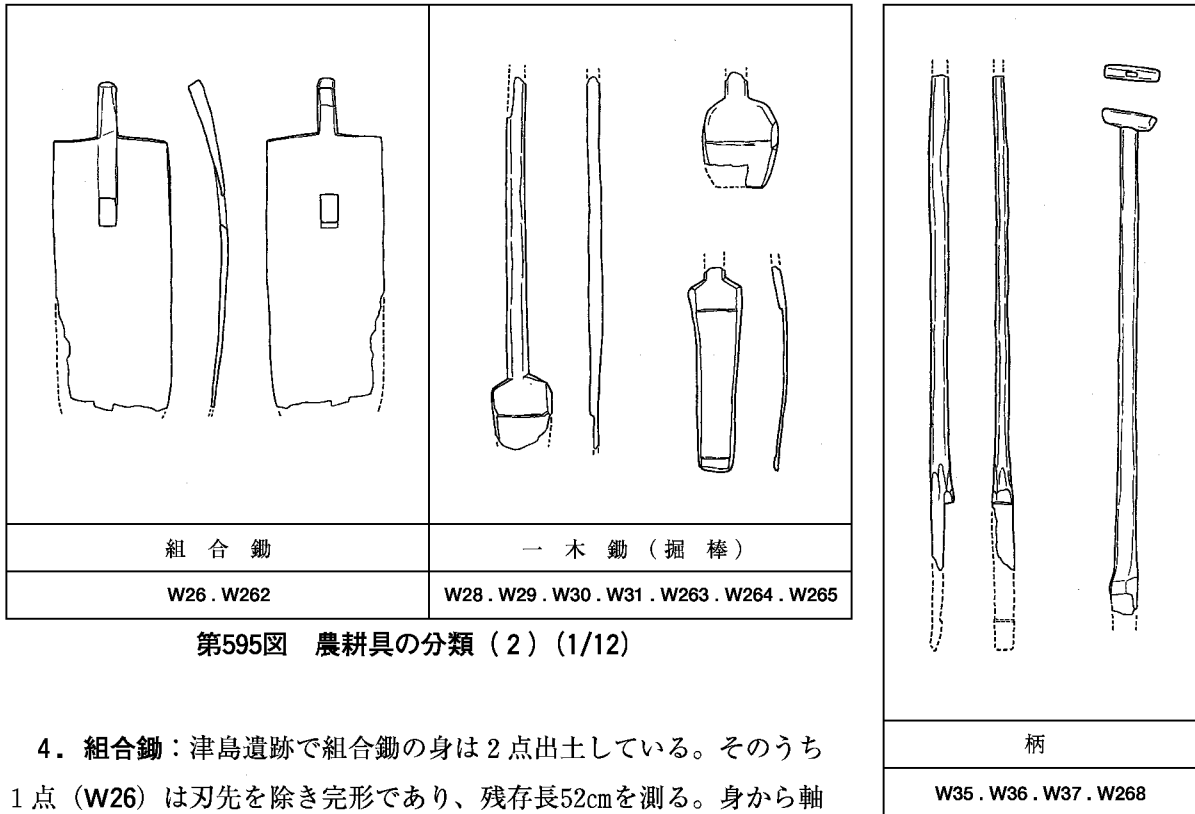
直柄又鋤 (代掻き)	横鋤 (えぶり)
W23 . W24 . W25 . W260	W261

反	柄
W32 . W33 . W34 . W266 . W267	

第594図 農耕具の分類 (1) (1/12)

遺跡で出土したものは、全体の様相がわかるものはすべて7本の歯をもつ構造であった。柄は台木の柄穴に挿入されたのちに、歯を装着することで固定されている。このような構造をもつ直柄又鋤は大阪府亀井遺跡（大阪文化財センター1980）や滋賀県斗西遺跡（能登川町教育委員会1993）など各地で見られるが、いずれも時期が津島遺跡のものより新しく、また歯も少なく5本のものが多い。津島遺跡ではこの直柄又鋤の破片が4点も出土していることから、直柄又鋤は弥生時代後期において主要な農耕具の一端を占めていたと考えられる。

3. 横鋤 (えぶり) : 刃を鋸歯状に加工してあるが、柄の装着部分は欠損していて不明である。津島遺跡では1点しか出土していないが、県内では雄町遺跡（埋蔵文化財研究会1983）や上東遺跡（岡山県教育委員会1974）など類例がある。当時一般に使用されていた農具と考えることができよう。



第595図 農耕具の分類 (2) (1/12)

4. 組合鋤：津島遺跡で組合鋤の身は2点出土している。そのうち1点 (W26) は刃先を除き完形であり、残存長52cmを測る。身から軸がのび、柄に装着する。県内では類例として上東遺跡 (岡山県教育委員会1974、2001) 等で組合鋤の類例がみられる。上東遺跡の組合鋤には鉄刃を装着した痕跡をもつものも存在するが、津島遺跡の組合鋤では刃先の残存している1点のみから判断すれば、鉄刃を装着していた可能性は低い。柄は完存しているものはないが、W35のように先端を細く削り取ったものが装着すると考えられる。装着方法は岡山市南方遺跡 (岡山市教育委員会1996) の組合鋤の例から先端を鋤身の柄穴に差し込み、鋤身の軸と柄を緊縛していたものと考えられる。柄には「T」字形に把手をもつもの (W36) がある。

5. 一木鋤 (掘棒)：津島遺跡で8点出土している。柄から肩を張りだし、身では一段低くなって刃先にいたる。一木鋤は刃先があまりのびないものと、先端が舌のようにのびるいわゆる「J」字状をなすものが存在する。前者のものについては県内で上東遺跡 (岡山県教育委員会2001) や窪木遺跡 (岡山県教育委員会1998) で類例がある。

このように、津島遺跡ではおおまかに計5種類にもおよぶ農耕具のセット関係が明らかにできた。中には全国的にも珍しい直柄又鍬等も存在するが、津島遺跡ではある程度点数があることから、ここで紹介した農耕具のすべてが、弥生時代後期後半期における岡山平野で使用されていた農耕具の主流を担っていたものと考えている。

②建築部材

今回の津島遺跡での調査で、河道1から多くの建築部材が出土した。その点数は約81点を数える。これらの建築部材は共伴した土器から弥生時代後期後半期のもものと位置付けることができる。建築部材には柱や梯子など多様な部材が存在した。ここでは津島遺跡で出土した建築部材のおおまかな分類と復元を試みる。なお、建築部材には柱や梯子など明らかに建築部材と認定できるものも存在するが、

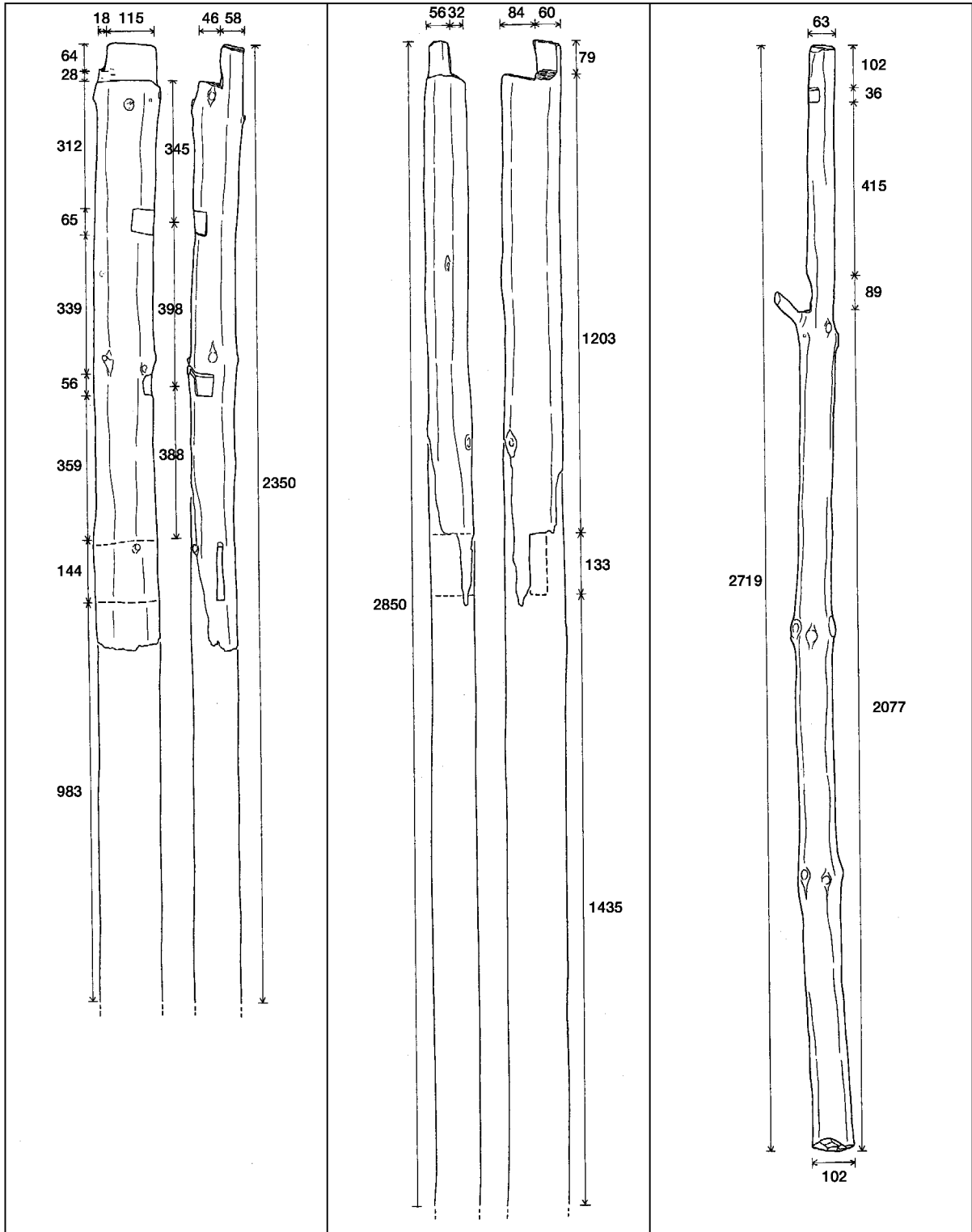
中には本当に建築部材として使用されたかどうか疑問があるものも存在する。逆に二股杭等のように、建築部材として使用されていた可能性も否定できないが、ここでは建築部材から除外しているものもあることを最初に断っておく。

これらのことを考慮したうえで、津島遺跡から出土した建築部材をおおまかに分類すると以下のようになろう。1. 柱・支柱、2. 梯子、3. 板材、4. 蹴放しおよび組部材、5. 部材、6. 礎板、7. 構造材、8. 植物質有機物。第596～599図は建築部材を分類し、出土した部材から可能な範囲で復元を試みたものである。以下、これらの概要を述べる。

1. 柱・支柱：柱や支柱と考えられる部材は計14点出土している。柱は床下から屋根までのびる通柱のことであり、これらは床を支える構造の違いで2つに分類できる（宮本1996）。一つは柱の中央に貫穴をもつ、いわゆる「大引貫式」高床建物に利用されるもので、もう一つは柱から分岐する枝で床を支えるいわゆる「分枝式」高床建物に利用されるものである。前者の大引貫式の柱（W155・W156）は、特に床下に相当する部分が腐朽しており、すべてを取り上げることはできなかったが、出土状況からおおまかに残存している長さを推定することができ、約235cm以上と約285cm以上を測る。柱の上端は加工が施されており、梁や桁を支えていたと思われる。貫穴は上端からW155は122.3cm、W156は128.2cmのところの位置し、貫穴から天井までの高さはW155で113.1cm、W156で120.3cmと考えられる。床上部分の柱には、壁間渡し穴と思われるほぞ穴が存在するものがあり、壁を構成する部材を支えていたと考えられる。一方、分枝式の柱は1本（W157）が完形品であった。上端部から分枝の部分までは約64.2cmを測る。上端部にはほぞ穴があり、この穴から下の床までの高さは分枝部分までで約50.4cmを測り、上屋の室内の高さを示すといえる。分枝式の建物の床から天井までの室内は大引貫式の建物よりも小さい。なお、これらの柱に使用された木材は1点が樹種の特定にまではいたらなかったものの、いずれも二葉松類であった。一方、支柱と考えられる部材は4点出土し、そのうち、3点が完形に復元できる。支柱は建物の上屋を支えていた束のような用途が考えられる。いずれも上部に方形ほぞを設け、下部に二股になった仕口を備えている。二股の上からほぞの下までの高さは104.2～105.9cmを測り、いずれも同一建物のものでと考えてよいほどの近似した数字である。しかし、これらの3本の支柱は形態に若干の差異があり、柱に設けられた間渡し穴の形状や間渡し穴と二股仕口の方向がそれぞれ異なっている。いずれも表面には樹皮の痕跡を残し、樹種鑑定の結果はいずれも二葉松類であった。なお、津島遺跡において古墳時代中期の堅穴住居51の柱穴内に柱根が残存していたが、この柱材はアカガシ亜属やクヌギ節に属する材木が利用されていた。

2. 梯子：梯子は1点出土している。先端が欠損している。6か所の足掛けをもつ。樹種はクリである。県内では窪木遺跡（岡山県教育委員会1997）、上東遺跡（岡山県教育委員会2001）がある。

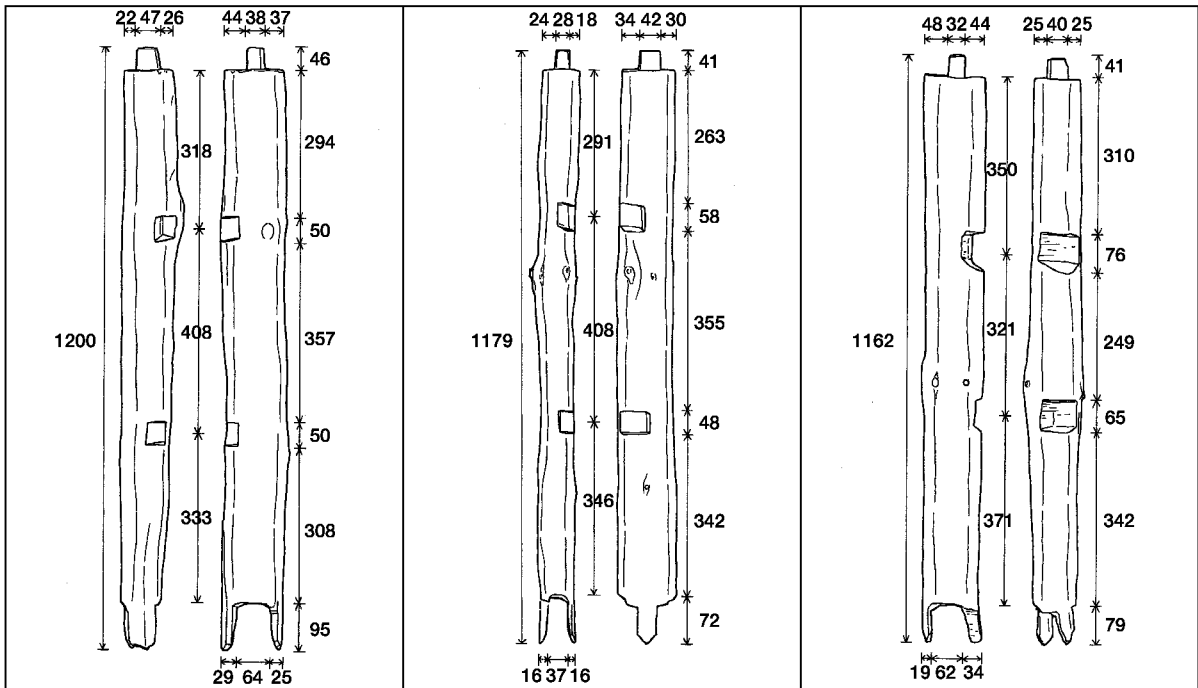
3. 板材：細長い板材であり、その形状から2種類に分類できる。一つは特に何も加工が施されていない細長い板材（W169）で、もう一つは板材の両端に円形の抉りが設けられ、えつり穴やほぞ穴を有するもの（W170～W173）である。前者は長さ248.5cm、幅13.7cm、厚さ4.0cmを測る。この幅の大きさはちょうど大引貫式の柱の貫穴に似た大きさであることから、これらの柱に伴う大引材である可能性が考えられよう。樹種はクリである。一方、後者の板材は様々な加工が施されているが、ほぞ穴の数等で細分することができる。W170はほぞ穴が2か所存在するものである。えつり穴が両方に3か所ずつ設けられている。二つのほぞ穴間はおそらく建物の入り口に相当すると考えられ、えつり穴が設けられておらず、また、梯子か何かを立て掛けるためであろうか、ほぞ穴間の板材の角を斜め



第596図 建築部材の分類 (1)

に切り落とした部分もみられる。また、ほぞ穴を一つ有するもの (W171) は両側にえつり穴が4か所みられる。また、W172は半分が欠損しているが、ほぞ穴が一つの板材として復元可能である。これらの板材は、柱間をつなぐ長押のような用途が考えられる。復元した板材の大きさから、この柱間の芯々間は192.0~244.0cmを測る。材木はコナラ節、スタジイ、クリの広葉樹材が使用されている。

4. 蹴放しおよび組部件材：蹴放し (W175) は1点出土している。蹴放しには扉の軸穴や方立や

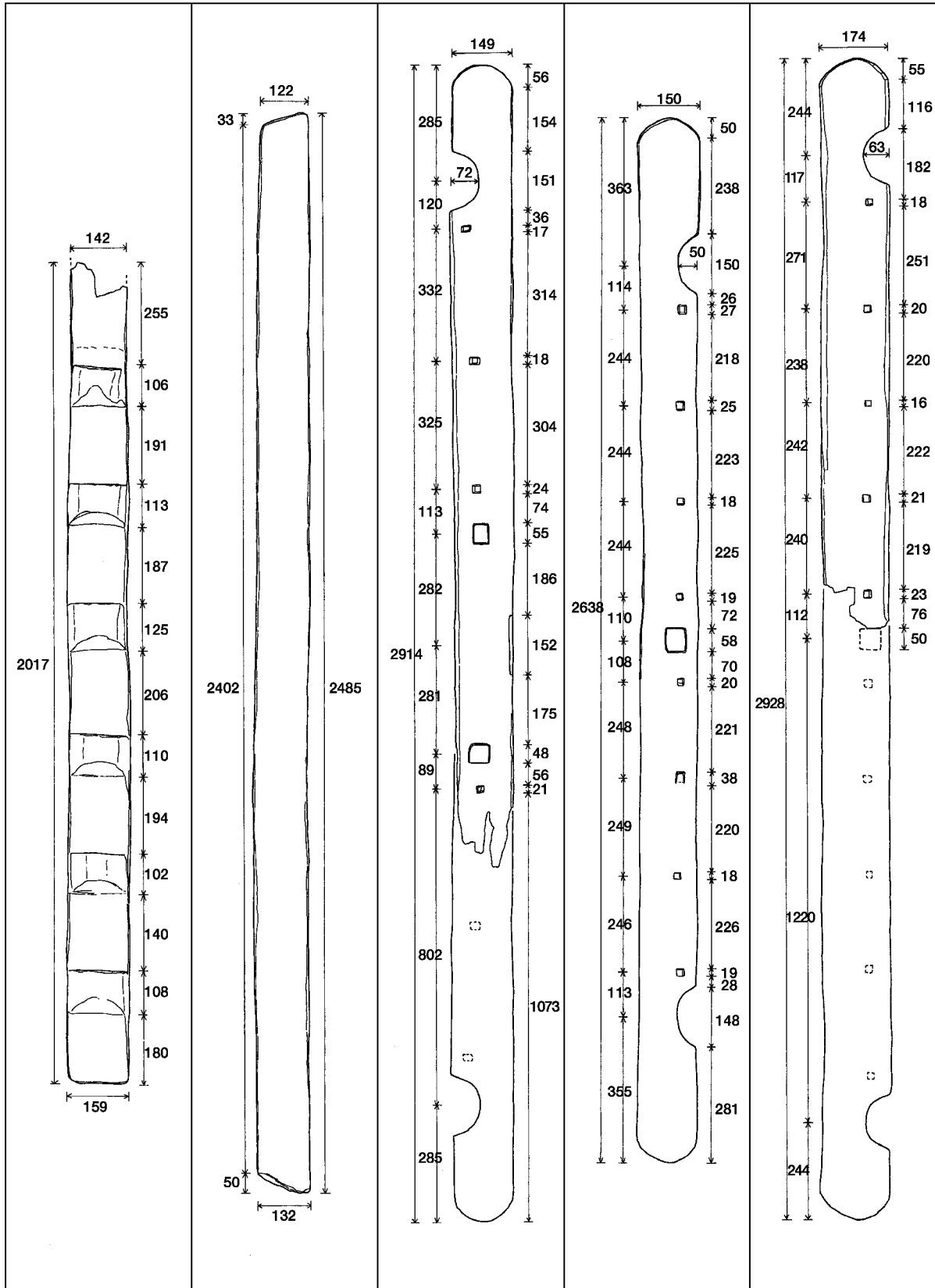


第597図 建築部材の分類（2）

刃付を設置する装置が付いている。また、鍵の役割をする猿といわれるものも残存していることから、片開きの構造が推測できる。ツブラジイを利用している。県内で扉構造の部材としては扉が百間川兼基遺跡（岡山県教育委員会1982）、百間川原尾島遺跡（岡山県古代吉備文化財センター2000）で、蹴放しでは百間川原尾島遺跡（岡山県教育委員会1984）、窪木遺跡（岡山県教育委員会1998）で類例がみられる。組部材として栓のついた板材（W176・W177・W178）がある。板材に栓をはめ込み、板材同士を連結したものと考えられる。板材はスダジイ、栓はサカキを利用している。

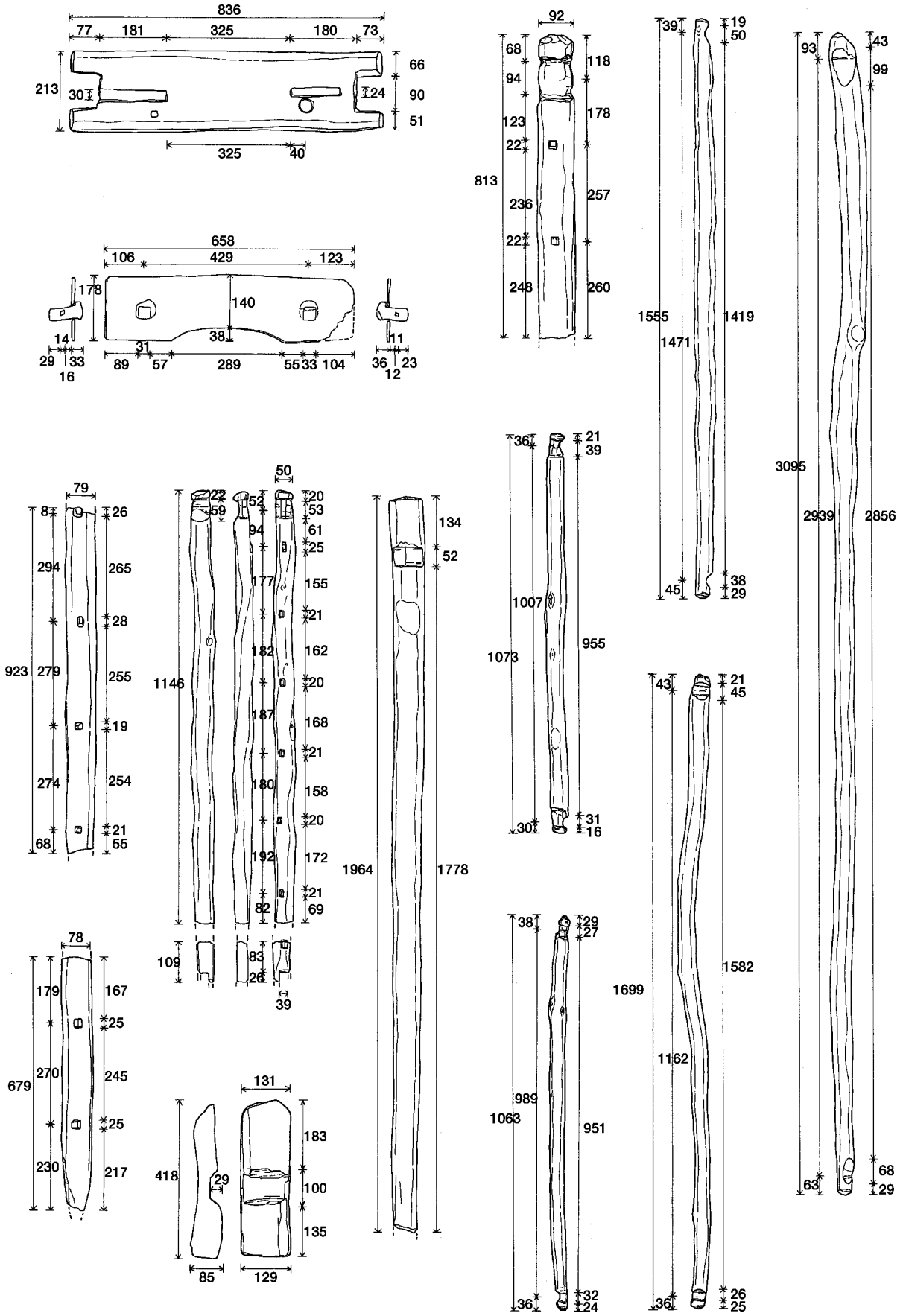
5. 部材：津島遺跡では必ずしも建築部材とは断定できないが、いわゆる有頭棒を含め、多くの部材が存在した。この棒状部材はえつり穴をもつものや仕口をもつものなど多様な形態をもつ。ここでは、部材にえつり穴や仕口がみられ、残存状態のよいものを中心に概観する。えつり穴をもつ部材は大きく2種類に分類することができ、一つは材木を半裁したものや割材にえつり穴を設けるもの。もう一つは棒状の丸太材にえつり穴を設けるものである。前者はW179・W181・W182があげられる。えつり穴間は芯々間で25.7～29.4cmを測る。後者はW180やW183があげられる。特にW183はほぞ穴および端部に仕口をもつ。えつり穴間は芯々間で14.5～19.2cmを測り、前者のものよりその間隔は狭い。一方、端部に仕口をもつ部材はおおきく2種類に分類できる。ひとつは縦断面が方形を示す欠込みの仕口を設けるもので、W184～W186がこれに該当する。この部材の樹種はいずれもヒサカキであった。もうひとつは端部に抉りを入れて仕口を設けるものである。抉りを入れる前に有頭状に加工しているものもある。これらの部材の中には両端部が残存しているものもあり、抉りの芯々間の距離が判明しているものがある。その長さは、W194とW195で約100.7、98.9cm、W196で約116.2cm、W199で約147.1cm、W200で約293.9cmを測る。

6. 礎板：1点出土している。礎板は雄町遺跡（岡山県教育委員会1972）で堅穴住居の柱穴から出土している。津島遺跡で出土したものも類似した形態をもつことからW202を礎板と判断した。県内の建物の柱穴に礎板自体やあるいは土質の違いから礎板痕跡がみられるものはいくつか報告されてい



第598図 建築部材の分類 (3)

る。津島遺跡では建物の柱穴に礎板自体は残存していなかったが、竪穴住居19などで礎板痕跡がみられた。しかし、これがここで出土したW20と同様の構造をもつかどうかは不明である。



第599図 建築部材の分類 (4)

7. **構造材**：津島遺跡では河道1北岸で複数の部材で構成された、いわゆる構造材が出土した。本書では8点について報告した。これらの構造材の多くは蔓により固定されており、建物や建物を構成する施設の一部に相当するものと考えられる。その中で、**構造材5・6**は棒状の部材が格子状に組み立てられており、建物の屋根や壁の骨組と考えられる。また、**構造材1**は細木をスタレのように組み合わせている。これについては、その大きさから建物の屋根に用いられた茅葺の屋根下地のような用途を想定している。また、**構造材3**は建物内部の棚や間仕切りに利用された可能性もある。これらの構造材にはスタジイ、アカガシ亜属等の広葉樹の材木が利用されている。

8. **植物質有機物**：津島遺跡の河道1内にはちょうど藁のような植物がブロック状に散乱していた。これらは繊維方向が一定の方向にそろっていることから人為的に利用されている可能性が考えられた。調査ではこれらの有機物のサンプルをいくつか採取し、分析を行った。植物質有機物はそのほとんどが土圧の影響を受けてシート状に圧縮されて薄くなっていたが、分析の結果、そのほとんどは樹皮あるいはススキ属やヨシ属の茎葉に由来するものであることが判明した。これらの有機物のいくつかは建物の部材として利用され、屋根や壁に利用されたものであると考えられる。

以上、津島遺跡から出土した建築部材についておおまかな分類とその概要を述べた。これらの分析から津島遺跡に存在した建物について以下のようなことが指摘できよう。①津島遺跡では高床建物の部材が出土し、「大引貫式」と「分枝式」の2種類の建物が存在していた可能性がある。②建物部材には仕口やほぞ、ほぞ穴、えつり穴などの構造が確認でき、様々な種類の部材が確認できた。③構造材などが良好な状態で残存しており、緊縛痕跡など貴重な資料が得られた。④河道から多くの植物質有機物がみられ、中には壁や屋根を構成していたものも含まれていると推測できる。

本稿の執筆に際しては、東北芸術工科大学 宮本長二郎氏、鳥取環境大学 浅川滋男氏、東京都立大学 山田昌久氏、愛知県埋蔵文化財センター 樋上 昇氏より、多大の御教示を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。 (金田)

参考文献

- 『亀井・城山遺跡』大阪文化財センター 1980
- 『雄町遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- 『上東遺跡』Ⅱ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会 1974
- 『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会 1982
- 『百間川原尾島遺跡2』『岡山県埋蔵文化財調査報告』56 岡山県教育委員会 1984
- 『窪木遺跡1』『岡山県埋蔵文化財調査報告』120 岡山県教育委員会 1997
- 『窪木遺跡2』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998
- 『下庄遺跡・上東遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 岡山県教育委員会 2001
- 『所報 吉備』第29号 岡山県古代吉備文化財センター 2000
- 『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度 岡山市教育委員会 1996
- 『中在家南遺跡他』『仙台市文化財調査報告書』第213集 仙台市教育委員会 1996
- 『石川条里遺跡』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』15 長野県教育委員会 1997
- 『木器集成図録』(近畿原始篇) 奈良国立文化財研究所 1993
- 『斗遺跡』『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第27集 能登川町教育委員会 1993
- 樋上 昇「3～5世紀の地域間交流－東海系曲柄鍬の波及と展開－」『日本考古学』第10号 日本考古学協会 2000
- 『木製農具について』第14回埋蔵文化財研究会 埋蔵文化財研究会 1983
- 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996

第5節 特殊な壺・器台形土器

弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて調査区を南北に分断する状況で幅約50mの河道が北東から南西方向へと流走する。この河道右岸の斜面からは弥生時代後期後葉から末葉を中心として土器、木器・木製品・建築部材等数多くの遺物が出土し、この中に交じってこれまで当該地域では類例が無い特異な胎土と特殊壺・特殊器台を思わせる形状の壺形土器・器台形土器（以下、壺・器台）等が確認された。

いずれも古墳時代の遺物を含まない灰色粘土、建築部材内、暗褐色粘土等の土層からの出土に限定され、河道1全出土遺物約1,000箱相当量中約3箱の量が確認された。土器の多くは小片で断面は割れ口が破碎時の状況をよく留めており、上流から漂着した状況ではなく、当該地で使用され廃棄されたことを窺わせるものであった。ただし、全体を復元するには絶対量が不足しており、全体像の復元が困難であった。

一瞥しただけで違いが分かるこれら土器の胎土中には長石・石英・雲母・角閃石・火山ガラス等が含まれており、日常使用される壺・甕等とどのような差異があるかを蛍光X線分析・実体顕微鏡観察等胎土分析を実施し検討を行った。この結果、これらの土器は壺・甕等日常的な土器と岩石・鉱物組成がほとんど同じであることが判明し、生産も遺跡周辺で行われた可能性が高いことが指摘されている（註1）。しかし分析データに現れない、肉眼的に最も顕著に日常土器と異なる次の点がこれら一連の土器を日常の土器から抽出する最大の要因となり得た。すなわち、比較的精製された良質粘土のなかであって顕著に認められる粉（殻）および藁材と考えられる炭化物の混和である。形態的に類似する特殊壺・特殊器台にみられるように雲母・角閃石等を多く含む胎土とも日常土器とも明らかに異なる胎土である。

また、これらの土器は形態的にも特異な形状をしており、特殊壺を思わせる胴部に突帯を2条めぐらした壺、多くは筒部に埴輪を思わせるタガ状突帯を2条一対に数段めぐらし、突帯間は線刻文によって全面埋めつくされた器台であった。

以上の特徴によって抽出された土器には、壺（1170～1176）・器台（1177～1197）、さらには器種の不明な土器（1198・1199）等がある。

壺は、およそ大小7個体分が確認されている。基本的な形状は、1173・1175・1176に見られるように球形を呈する胴部の最大径部分に2条一対の突帯が、肩部と頸部の境には1条の突帯が貼付され、長い頸が上方へと逆「ハ」の字状に、もしくは垂直気味に口縁部へと続くものとする。口縁部は1173を例外としていずれも端部を長く上方へと拡張するもので、外面は丁寧にヘラミガキされ鋸歯文・波状文等でも装飾される。この施文方式は器台の突帯付近の方式に共通する。また、製作技法上の特異な特徴も見られる。すなわち、後述の器台1179～1185とも共通する特徴であるが、頸部と口縁部接合部に通常内傾接合で連続して接合・形成される接合がこの土器に関しては鋭利な工具によって端部を水平に丁寧に削り揃えられ、乾燥工程を経て口縁部を接合している。日常土器の製作技法には見られない特殊な技法といえよう。

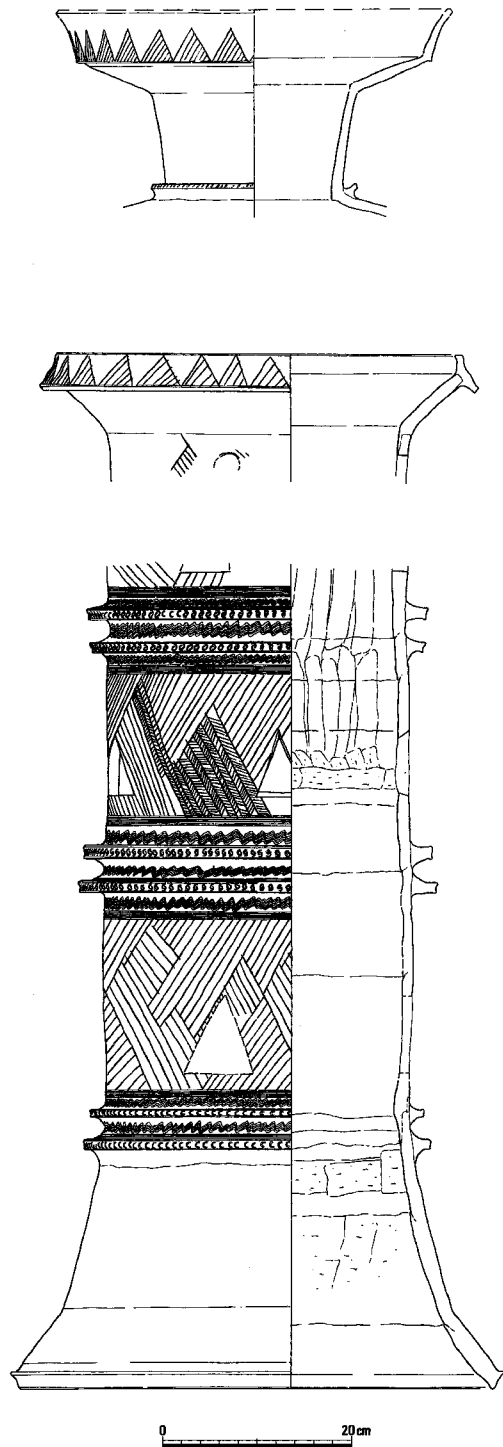
器台は、形態・胎土・色調・大きさ等の違いによって大きく10個体以上の存在が考えられる。基本的な形は、普通器台と同じく「ハ」の字状を呈する脚裾部に長く直立する径35cm前後の太さの筒部が

続き、これに対して大きく外反する短めの受部をつくり、その端部には上下に拡張した口縁部を貼付するものである。筒部には突帯をみせないものも存在するが、多くは20cm前後に1か所2条一对の突帯を廻らし、脚裾部を除く突帯と突帯との間には斜めを基調としたヘラ先による線刻文によって鋸歯文を意図したと考えられる文様帯を形成している。筒部は、約2～3段の文様帯で構成されていると考えるが段数は判然としない。仮に2段とした場合でも器高はおよそ1mを越え、特殊器台と呼称しても差し支えない規模となる。また、ここでも壺1173と同様な接合面を水平にし乾燥を待って接合させる技法が1179～1182・1184・1185等で見られ、両者は何らかの共通した意識で製作されていたことが理解される(註3)。さらに注目すべきは、器台1181である。これには口縁部内面に透かし孔をもあけた台、あるいは支え台と考えられる粘土板が受部に加工・貼付され、受部を基盤としてそこに壺を載せ一体化させるために付設されていることである。集落内での農耕祭祀に使用されるにしてもこれ程までに特殊性を帯びた大型祭器は他に類を見ないと言っても過言はないであろう。

また、この他にも類例のない興味深い器種不明大型土器が存在する。1199は、中世の移動式カマドの底部分に酷似したもので、器種が不明であることで実測図は正確性を欠く。内側には中世のカマドと同じく煤が付着する等実際に使用された痕跡を有する。これら一連の土器が農耕祭祀のための儀器として製作・使用されていたと想定した場合、1199は火を扱う何らかの祭祀およびこれに関わる行程のなかで実際に使用された可能性が高いと考える。

一方、これら壺と器台を特殊な土器とした大きな要素に挙げられるのに装飾がある。極めて突出度の高い突帯、ヘラ先による線刻文と板状工具による櫛描波状文等の多用、さらには透かし孔等は装飾効果を高めるために施された行為である。

突帯は、幅1.5cm前後、長さ2～3cmと特殊器台、古墳時代の埴輪等とも全く異なる規模を誇るものである。突帯端部には半裁竹管文が、或いはこの組み合わせによる「S」字



第600図 壺・器台形土器推定復元図 (1/8)

文様を連続させ、さらに上面には波状文もしくは直線文が密に刻まれる。

線刻文は、口縁部外面および突帯をもたない筒部外面に鋸歯文、あるいは1187・1188等横位直線文から派生させた撥形文が描かれ、特殊性を一層強調させている。一方、突帯間のほぼ全面に施された線刻文は結果的に上下双方起点の鋸歯文を構成しており、同様の文様構成は特殊器台の中にも散見することが出来る（註3）。

透かし孔は、器台のほとんどが三角形に穿孔されたものであるが、1例1180において一部分の残存で全体は不明ながら弧状に穿孔痕跡が認められ、特殊器台に頻繁に見られる巴形である可能性も否定できない。なお、普通器台形を呈する1197にあっては、当該期通常円形・方形・長方形がほとんどを占める中、三角形の透かし孔が認められ、特殊性の一端をここでも認めることができる。

ところで、これら一連の土器から時期・性格・意義等のようなことが考えられるのであろうか。

時期については、前述したように層序的には出土した層が灰色粘土、建築部材内、暗褐粘土層に限定されることから、大きくは弥生時代後期後葉から末葉の年代幅で理解される。では、これについて土器の形式的観点から見た場合の位置づけはどうであろうか。

この土器の場合、普通器台・特殊器台等に類例が存在しないことで明瞭な位置づけには言及はできない。しかしながら直接的な比較はできないまでも、成形・調整技法等においてももう少し具体的な編年観は導き出せないだろうか。すなわち、日常土器との部分的な共通点、例えば1195に見られる拡張をみせない脚端部の在り方、1174の口縁部に見られる縦方向に丁寧に施されたヘラミガキ調整、さらには外面にハケメ調整を残さない程にほぼ全面に施された丁寧なヘラミガキ調整等である。これらを参考とすれば一連の土器は後期Ⅳの在り方より後期Ⅲに近いとみて差し支えないのではなかろうか。

後期Ⅲは集落からの器台の出土は減少・消滅段階にあり、これは器台が集落内での農耕祭祀から墳墓での葬送儀礼祭祀へと役割を転換する時期とされ（註4）、本遺跡においてもこの器台の存在傾向は首肯される。このような時期、これらの特殊な壺・器台は本集落内で使用された祭祀用の土器であることは明白で、しかも土器自体精選された胎土中に粉（穀）を混和させるというこれまでの土器づくりに見られない、特別な意識のもとに製作された土器であると考えられる。おそらくは、粉（穀）を混和することによって穀霊に対する豊穰祈願をより深化・発展させたものと推測する。また、壺・器台自身これと相俟って特殊壺・特殊器台を彷彿とさせる形態・文様等も一般の器台とは比較にならない程に特殊性が強調されており、当該期岡山平野にあってこうした祭器を保有し、儀礼に使用していた津島遺跡の特異性を示唆させる重要な意味を持った資料といえよう。

この土器の系譜については、現時点確認されているのは本遺跡のみで、形態的にもこれまでに類例が無く明確ではない。いずれ資料の増加によって解明したい土器である。（島崎）

註

- (1) 白石 純（「津島遺跡出土土器の胎土分析」－文様のある特殊な壺、器台の分析－）「津島遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (2) 同様の接合は、明瞭ではないが楯築墳丘墓出土特殊器台断面図にも波線ながら描かれており注目される。近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』1992 図92
- (3) 落合町中山遺跡出土の特殊器台に類似した文様構成をみることができる。落合町教育委員会『中山遺跡』1978
- (4) 大橋雅也「器台形土器」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社 1992

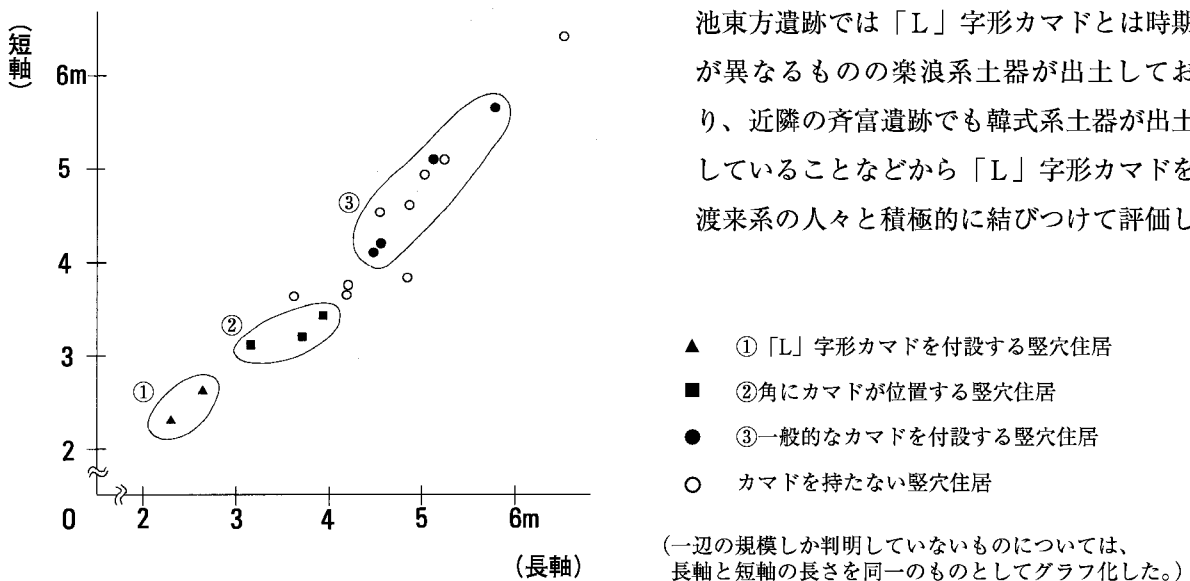
第6節 津島遺跡のカマドを付設する竪穴住居

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代後期にかけての集落を検出し、竪穴住居は総数83軒を検出した。このうち古墳時代の竪穴住居は61軒であり、古・中・Ⅰ～古・後・Ⅲの時期にわたってカマドを付設したものを15軒検出している。このうち古・中・Ⅰに1軒、古・中・Ⅱには8軒のカマドを付設する竪穴住居を検出しているが、このうちの3軒のカマドが「L」字形カマドであった。

「L」字形カマドの構造は、煙道が住居壁に沿って延びるものであり、4世紀初頭～10世紀の時期にかけて、九州から北陸・関東において40遺跡以上でみつかっており、特に北部九州と近畿地方において検出例が多い（註1）。県下では山陽町の門前池東方遺跡（註2）において1軒が検出されており、今回で2遺跡、4例目となるものであった。門前池東方遺跡例では、6世紀後半の竪穴住居の北壁に沿って幅20～31cm、深さ12～13cm、全長170cmを測る煙道部が検出されたが、攪乱により煙道部のみの検出であったので、今回のカマドの焚口から煙道部にかけての全体像が判明したのものとしては、県下では初例となった。このような「L」字形カマドの機能については、壁暖房施設を備えた厨房施設であると考えられている（註3）が、煙道の形態などから暖房機能については疑問視する向きもある。「L」字形カマドが検出される遺跡から韓式系土器が出土することなどから、渡来人との関係を積極的に評価している遺跡がある一方、「L」字形カマドは特異な例であり、強い規制の元に占有空間を制限された結果（註4）として、カマドの一形態としてのみ捉えるものがあり、この2点において問題は集約されているといえよう。

暖房という点で津島遺跡の「L」字形カマドを見ると、竪穴住居54のカマドの焚口は壁面の中央部分に位置し、煙道部の長さは150cmであるのに対して、竪穴住居55・67は壁面の中央部から偏って焚口が位置するため、煙道の長さは各々93cm、81cmと短いものであった。このような短い煙道では、暖房が効率的に行えたとは考え難く、これは壁暖房という本来の機能が喪失されて、煙道を屈曲させるという形式のみを取り入れた状況で作られたものであると考えられる。

渡来人との関係であるが、山陽町の門前池東方遺跡では「L」字形カマドとは時期が異なるものの楽浪系土器が出土しており、近隣の齊富遺跡でも韓式系土器が出土していることなどから「L」字形カマドを渡来系の人々と積極的に結びつけて評価し



第4表 中期の竪穴住居の規模

ている。津島遺跡では、韓式系土器の出土はみられないものの、河道1からTK73型式併行期と考えられる須恵器の甕や、外面に縄蓆文が見られる須恵器などが量的には少ないものの出土している。また、堅穴住居55・58から須恵器の高杯・甕を模倣した土師器が出土している。これらの遺物は渡来系の人々との関連を示唆するものであり、県内ではカマドの導入期にあたる古・中・Iの堅穴住居を検出していることから、津島遺跡で検出した「L」字形カマドは、古・中・IIにも引き続いて渡来系の人々との関係の中で成立したものと考えられる。

今回検出した中期のカマドは、その形態と付設位置から、①「L」字形カマド、②カマドが堅穴住居の角に位置するもの、③一般的な住居壁の中央に位置し、煙道が直線的にのびるもの、の3つに分類することができる。これらのカマドを付設する堅穴住居の一辺の規模を比較すると、①は312～393cm、②は230cm～263cm、③は410cm～509cmである。これから、カマドの形態・付設位置によって平面規模に差があり、堅穴住居の平面規模のバラツキは一辺が230～509cmと大きいことがわかる。①・②は一般的な③に比べると、平面規模が小さい。②の時期は、県下の検出例を見ると5世紀前半から6世紀初頭の時期までのものが多く、②は、柱がない、もしくは2本柱であるという共通点をもっている(註5)。規模については、高塚遺跡で検出された②の一辺の規模は331～443cmと津島遺跡例より大きいものの、他のカマドを付設する堅穴住居と比較すると小型であり(註6)、規模自体は必ずしも小さくはないものの、津島遺跡の状況と類似する。後期のカマドには①・②がみられず、③であり、カマドを付設する堅穴住居の平面規模は、一辺が361～501cmと、中期と比較して規模のバラツキが減少している。後期になると、カマドの形態・付設位置、また堅穴住居の規模が画一化されている状況が見られた。

「L」字形カマドが渡来系の人々との関連の中で成立したと考えるとき、このような中期のカマドの形態差および堅穴住居の規模の差が表すものは、集落内の集団差として捉えることができる。また、角にカマドを付設する堅穴住居についても検出される時期が相対的に古い時期であることから、「L」字形カマドと同様に渡来系の人々との関わりの中で理解されるものではないだろうか。さらに、これらの堅穴住居の柱が無い、もしくは2本であることから、「L」字形カマドと同様に、一般のカマドを付設し、4本柱の堅穴住居とは空間的な使用方法についても何らかの違いがあったとも考えられる。これは今後、床面の出土遺物の検討が必要であろう。後期になって、カマドが画一化されている状況は、集団差が解消されたことを示しており、それは渡来系の人々が在来の集落に吸収される状況をあらわすものと考えられるのである。(時實)

註

- (1) 松室孝樹「堅穴住居内に設置されるL字形カマドについて－日本国内検出例の集成－」『韓式系土器研究』VI 1996 韓式系土器研究会
望月精司「額見町遺跡とオンドル状遺構」『加能史料研究』第10号 石川県地域史研究振興会 1998
- (2) 則武忠直・岡秀昭・塩見真康「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第32集 九州古文化研究会 1994
- (3) 宮崎幹也「カマドの採用と普及－L字型カマドの復元－」『古代世界の諸相』1993 角田文衛先生傘寿記念
- (4) 小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会
- (5) 百間川原尾島遺跡丸田調査区(堅穴住居7)、津寺遺跡中屋調査区(堅穴住居122・327)、高塚遺跡(堅穴住居132・135・136・138・148・153・172)などがある。
- (6) 弘田和司「古墳時代の集落について」『高塚遺跡 三手遺跡2』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000 岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173

津島遺跡4

岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査
(第1分冊)

平成15年3月5日 印刷

平成15年3月24日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173

津島遺跡 4

岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査

(第2分冊)

2003

岡山県教育委員会

附編 自然科学的分野における分析・鑑定

岡山県陸上競技場改修に伴う調査の自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
津島遺跡の花粉分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
津島遺跡における灰像分析	株式会社 古環境研究所
津島遺跡における放射性炭素年代測定	株式会社 古環境研究所
津島遺跡出土の種実同定	株式会社 古環境研究所
津島遺跡出土木製品の樹種鑑定	元興寺文化財研究所
津島遺跡出土建築材の復原	東北芸術工科大学 宮本長二郎
津島遺跡出土の弥生時代歯の鑑別	岡山大学名誉教授 小田嶋梧郎
津島遺跡出土の動物遺存体の分析	岡山理科大学理学部 富岡 直人
津島遺跡出土炭化物の識別	東京総合研究博物館 松谷 暁子
津島遺跡出土炭化米のDNA分析	静岡大学農学部 佐藤洋一郎
岡山市津島遺跡出土漆塗木弓の科学的分析	漆器文化財科学研究所 四柳 嘉章
津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物	別府大学文学部 本田 光子 志賀 智史
津島遺跡出土土器の胎土分析 －文様のある特殊な壺、器台の分析－	岡山理科大学自然科学研究所 白石 純
津島遺跡出土のガラス滓	株式会社ニコン 木戸 一博

岡山県陸上競技場改修に伴う調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津島遺跡（岡山県岡山市いずみ町に所在）が位置する岡山平野は、笹ヶ瀬川、旭川、吉井川などをはじめとする河川の沖積作用により形成された平野である。遺跡近辺は、自然堤防状の微高地や後背湿地、埋没流路などが複雑に入り組む微地形が形成されている。

これまでも本遺跡では、縄文時代後・晩期以降の水田層を対象とした自然科学調査が実施されており、周辺の堆積環境の変遷や稲作の消長を含めた植生変遷に関する情報が蓄積されつつある。今回、弥生時代前期以前の堆積環境を検討するために珪藻分析を実施し、弥生時代前期頃の堆積物における栽培植物のイネ属の産状および周辺植生について検討するために植物珪酸体分析を実施した。その結果が得られたので報告する。

1. 試料

試料は、1区～4区から採取された（表1、図1～4）。以下、各区について試料を述べる。

1区では、溝1で弥生時代前期の水田層を覆う洪水性砂から1点（試料A）、弥生時代前期の水田層から3点（試料B～D）、およびその下位から5点（試料E～I）、計9点の試料が採取された。珪藻分析は、下位の試料E～Iの5点について実施する。植物珪酸体分析は、上位の試料A～Eの5点について実施する。

2区では、河道1中央トレンチ西壁の南端地山から採取された1点について珪藻分析を実施する。

3区では、西壁の第15～23層、第25層、第26層、第29層から層位試料12点（試料番号1～12）が採取された。第17層が洪水性堆積物、第18層と第19層が弥生時代前期の水田層とされている。珪藻分析は、第18層より下位から採取された9点について実施する。植物珪酸体分析は、採取された全点について実施する。

4区では、南壁の第5～21層より17点（試料番号1～17）の試料が採取された。第12層と第14層が弥生時代前期の水田層、第15層と第17層が縄文時代の可能性がある包含層とされている。珪藻分析は、第11～21層から採取された11点について実施する。植物珪酸体分析は、採取された全点について実施する。

2. 分析方法

珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に同定・計数する。種の同定は原口ほか（1998）、Krammer, K. (1992)、Krammer,

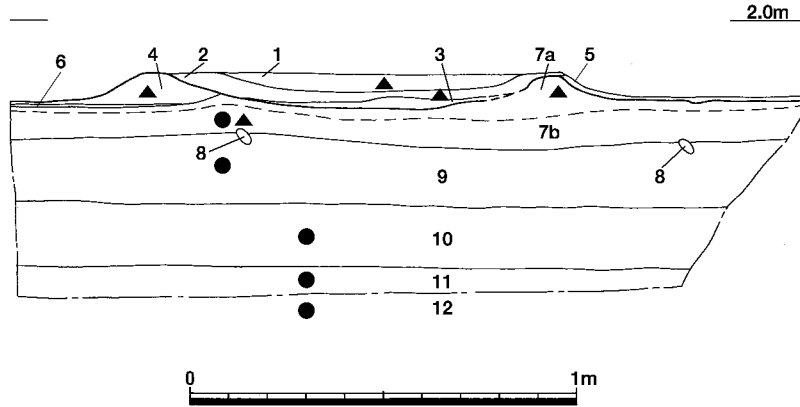
K. & Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991 a、b)などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率1～3%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、海水生種・海水～汽水生種・汽水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については Asai, K. & Watanabe, T. (1995) の環境指標種を参考とする。

表1 分析試料一覧

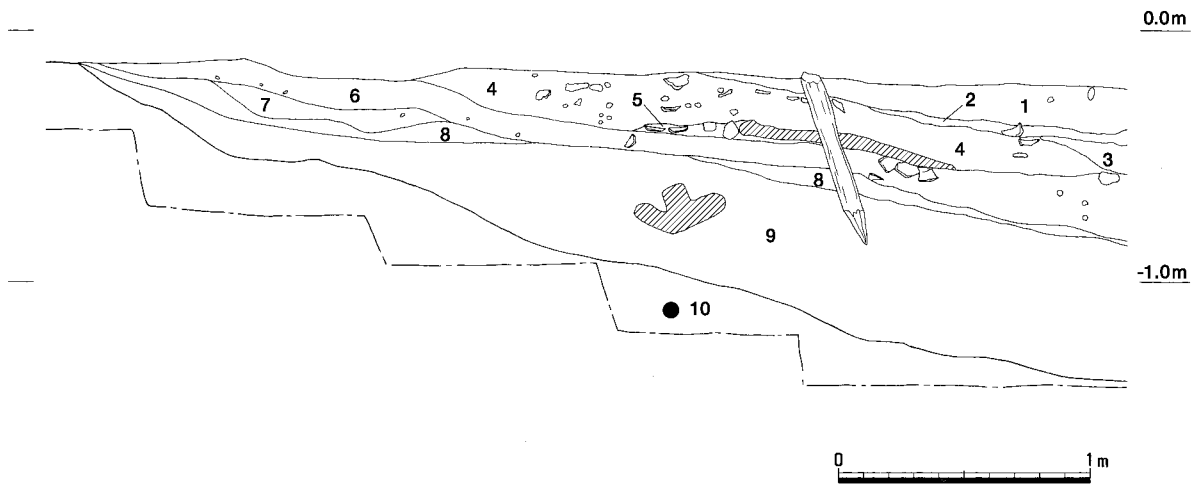
地点名	層名	番号等	土色	土質	珪藻分析試料	植物珪酸体分析試料	備考
1区溝1	第1層	A	10YR3/3 暗褐	砂混じりシルト		▲	上層水田を被覆する砂
	第2層	B	10YR3/2 黒褐	シルト質砂		▲	弥生前期水田 (上層)
	第7a層	C	2.5Y3/1 黒褐	シルト質砂		▲	弥生前期水田 (下層) 畦畔
	第4層	D	10YR3/3 暗褐	砂質シルト		▲	弥生前期水田 (下層) 畦畔
	第7b層	E	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	●	▲	
	第9層	F	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	砂質シルト	●		
	第10層	G	10YR4/2 灰黄褐	粘土	●		
	第11層	H	2.5Y4/3 オリーブ褐	粘土質シルト	●		
	第12層	I	5Y5/2 灰オリーブ	粘土	●		
2区河道1	第10層	地山	5Y3/2 オリーブ黒	シルト混じり砂	●		中央トレンチ西壁採取
3区西壁	第15層	1	10YR4/2 灰黄褐	砂		▲	
	第16層	2	10YR4/2 灰黄褐	砂質シルト		▲	
	第17層	3	2.5Y4/2 暗灰黄	粘土		▲	洪水砂
	第18層	4	10YR3/2 黒褐	砂混じりシルト質粘土	●	▲	弥生前期水田
	第19層	5	7.5YR3/1 黒褐	砂質粘土	●	▲	弥生前期水田
	第20層	6	2.5Y3/2 黒褐	粘土	●	▲	
	第21層	7	10YR4/2 灰黄褐	砂混じり粘土質シルト	●	▲	
	第22層	8	2.5Y3/2 黒褐	粘土	●	▲	
	第23層	9	2.5Y3/2 黒褐	砂混じりシルト	●	▲	
	第25層	10	2.5Y3/2 黒褐	粘土	●	▲	
	第26層	11	2.5Y4/2 暗灰黄	砂混じりシルト	●	▲	
	第29層	12	2.5Y3/1 黒褐	粘土	●	▲	
4区南壁	第5層	1	2.5Y4/2 暗灰黄	粘土		▲	
	第6層	2	2.5Y4/2 暗灰黄	粘土		▲	
	第7層	3	2.5YR4/1 赤灰	粘土		▲	
	第8層	4	10YR3/4 暗褐	シルト質粘土		▲	
	第9層	5	2.5Y4/2 暗灰黄	粘土		▲	
	第10層	6	10YR4/2 灰黄褐	シルト質粘土		▲	
	第11層	7	2.5Y4/2 暗灰黄	シルト質粘土	●	▲	
	第12層	8	2.5Y4/2 暗灰黄	砂混じりシルト	●	▲	弥生前期水田 (上層)
	第13層	9	10YR3/2 黒褐	砂混じりシルト	●	▲	
	第14層	10	5YR3/1 黒褐	シルト質粘土	●	▲	弥生前期水田 (下層)
	第15層	11	5Y3/1 オリーブ黒	シルト	●	▲	縄文晩期?
	第16層	12	10YR3/1 黒褐	砂混じりシルト	●	▲	
	第17層	13	2.5Y3/1 黒褐	砂混じりシルト	●	▲	縄文晩期?
	第18層	14	10YR3/2 黒褐	シルト質粘土	●	▲	
	第19層	15	2.5Y4/1 黄灰	粘土	●	▲	
	第20層	16	5Y3/1 オリーブ黒	シルト質粘土	●	▲	
	第21層	17	5Y3/1 オリーブ黒	シルト質粘土	●	▲	

*：土色・土質はパリオ・サーヴェイ株式会社によるものであり、調査時のものとは必ずしも一致していない。後出する試料採取地点土層断面図の土色・土質も同様である。



- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/4 | 7a にぶい褐色粘質土 (マンガン多量に含む) 7.5YR5/3 |
| 2 にぶい黄橙色粘質土 10YR6/4 | 7b にぶい褐色粘質土 7.5YR5/3 |
| 3 明赤褐色粘質土 5YR5/6 | 8 浅黄橙色粘質土 10YR8/4 |
| 4 にぶい橙色粘質土 7.5YR7/4 | 9 灰褐色粘質土 7.5YR |
| 5 明赤褐色粘質土 5YR5/8 | 10 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 |
| 6 明赤褐色粘質土 5YR5/6 | 11 明黄褐色粘質土 10YR7/6 |
| | 12 灰オリーブ色粘土 5Y5/2 |

図1 プラント・オパール抽出土層 (1)



- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1 暗緑灰色微砂 7.5GY4/1 | 6 暗緑灰粘質土 7.5GY4/1 |
| 2 黄色砂 2.5Y8/6 | 7 暗緑灰色砂 10GY3/1 |
| 3 暗緑灰色粘質土 7.5GY3/1 | 8 淡黄色粗砂 2.5Y8/3 |
| 4 暗緑灰色粘質土 7.5GY4/1 | 9 暗緑灰色微砂土 7.5GY2/1 |
| 5 灰色微砂土 10Y6/1 | 10 オリーブ黒色シルト混じり砂 5Y3/2 |

図2 プラント・オパール抽出土層 (2)

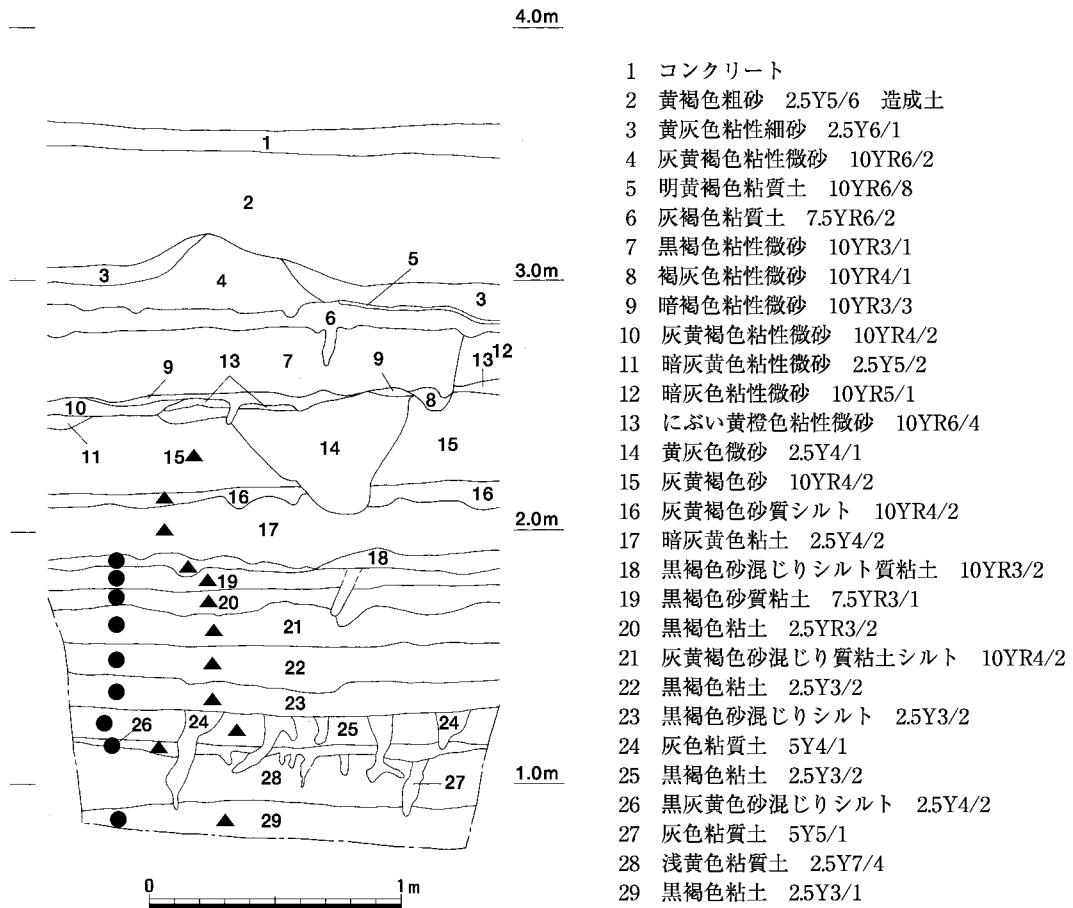


図3 プラント・オパール抽出土層 (3)

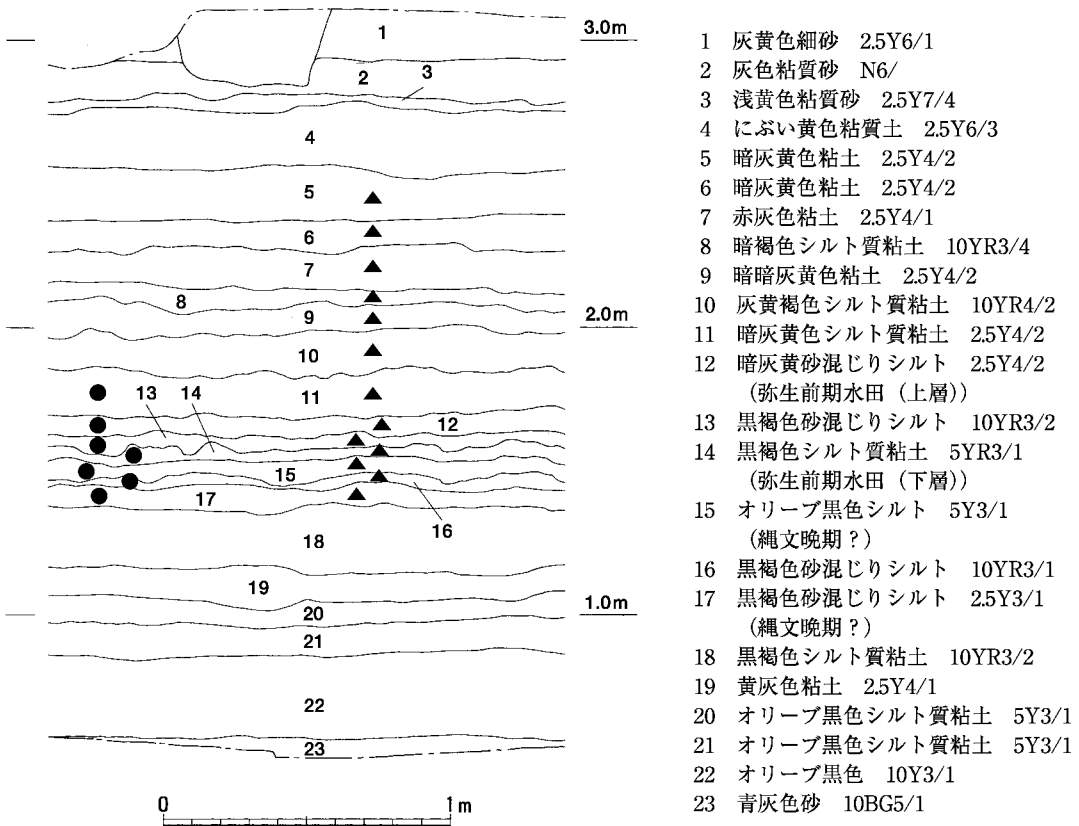


図4 プラント・オパール抽出土層 (4)

植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類と個数および乾土 1 g あたりに含まれる植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3. 結果

珪藻分析

結果を表 2～4、図 5・6 に示す。以下、地点別に珪藻化石群集の特徴を下位から述べる。

〈1 区溝 1 関連〉

試料番号 E～I は、いずれの試料においても、珪藻化石がほとんど検出されない。特に試料 I は、無化石である。わずかに産出する種類は、流水不定性種（止水域にも流水域にも生育する種）の *Fragilaria ulna* などの水生珪藻である。

〈2 区 河道 1 中央トレンチ西壁南端採取地山〉

珪藻化石の検出個数は 66 個体と少ない。主な産出種は、海水生種・内湾指標種（小杉、1988）の *Paralia sulcata*、海水～汽水生種・内湾指標種の *Cyclotella striata*-*C. stylorum* の 2 種が大部分を占める。内湾指標種とは、内湾水中を浮遊生活する種とされる。その他は、流水不定性種などの淡水生種が低率で産出する。

〈3 区西壁〉

試料番号 12～5 は、珪藻化石の検出個数が 0～16 個体と少ない。試料番号 4 は淡水生種が優占し、全体的には貧塩不定性種（少量の塩分があってもこれによく耐えることができる種）・好+真アルカリ性種（アルカリ性の水域に生育する種）・流水不定性種が多産する。特に優占する種がなく、好流水性種（流水域に特徴的であるが、止水域でも生育する種）の *Cocconeis placentula* var. *lineata*、流水不定性種の *Fragilaria ulna*、真止水性種（止水域で生育する種）・湖沼浮遊生種（安藤、1990）である *Cyclotella comta*、陸生珪藻 A 群（伊藤・堀内、1991）の *Hantzschia amphioxys* などが約 10% 産出する。湖沼浮遊生種とは、主に水深 1.5m 以上ある湖沼環境で生育する種とされる。陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する珪藻であり、中でも乾燥に耐性のある種が A 群とされる。

〈4 区南壁〉

珪藻化石群集は産出種の特徴から、試料番号 17・16、試料番号 15、試料番号 14～7 の 3 つに区分される。試料番号 17・16 は、海水生種・汽水生種・淡水～汽水生種などの、高い塩分濃度に適応する種が全体の 25～40% を占める。特に優占する種は見られないが、好流水性種の *Cocconeis placentula* var.

lineata、好止水性種（止水域に特徴的であるが、流水域でも生育する種）の *Achnanthes crenulata*、陸生珪藻B群の *Caloneis leptosoma* などが5～10%産出する。陸生珪藻B群とは、陸生珪藻A群に随伴し、湿った環境にも水中にも生育する種とされる。

表2 1区・2区珪藻分析結果

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	1 区					2区
	塩 分	pH	流 水		E	F	G	H	I	地山
Biddulphia spp.	Euh				-	-	-	-	-	1
Campyloneis spp.	Euh				-	-	1	-	-	-
Coccinodiscus spp.	Euh				-	-	1	-	-	-
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	-	-	-	-	18
Rhizosolenia styliformis Brightwell	Euh				-	-	-	-	-	1
Rhizosolenia spp.	Euh				-	-	-	-	-	1
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A、B	-	-	-	-	-	3
Cyclotella striata-C. stylum	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	21
Cyclotella stylum Brightwell	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	2
Diploneis bombus (Ehr.)Cleve	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	1
Diploneis smithii (Breb.)Cleve	Euh-Meh			E 2	-	-	-	-	-	1
Nitzschia cocconeiformis Grunow	Meh			E 1	-	-	-	-	-	1
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E 1	-	-	-	-	-	5
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E 2	-	-	-	-	-	3
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	-	-	1
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	2
Cyclotella comta (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	M、U	-	-	-	1	-	-
Cyclotella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	und	ind	T	-	-	-	-	-	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heureck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		2	3	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K、T	-	-	-	-	-	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA、U	1	1	-	-	-	-
Navicula menisculus Schumann	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	1
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-
Stephanodiscus cf.astraea (Ehr.)grunow	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	-	1	-	-	-	-
海水生種合計					0	0	2	0	0	24
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	25
汽水生種合計					0	0	0	0	0	9
淡水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
淡水生種合計					3	5	2	2	0	8
珪藻化石総数					3	5	4	2	0	66

凡例

- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------|
| H.R. : 塩分濃度に対する適応性 | pH : 水素イオン濃度に対する適応性 | C.R. : 流水に対する適応性 |
| Euh : 海水生種 | al-bi : 真アルカリ性種 | l-bi : 真正水性種 |
| Euh-Meh : 海水生種—汽水生種 | al-il : 好アルカリ性種 | l-ph : 好止水性種 |
| Meh : 汽水生種 | ind : pH不定性種 | ind : 流水不定性種 |
| Ogh-ind : 貧塩不定性種 | unk : pH不明種 | r-ph : 好流水性種 |
| Ogh-unk : 貧塩不明種 | | unk : 流水不明種 |

環境指標種群

- A : 外洋指標種、B : 内湾指標種、E 1 : 海水泥質干潟指標種、E 2 : 汽水泥質干潟指標種（以上は小杉、1988）
 K : 中～下流性河川指標種、M : 湖沼浮遊性種（以上は安藤、1990）
 U : 広域適応性種、T : 好清水性種（以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986）
 R : 陸生珪藻（RA : A群、伊藤・堀内、1991）

表3 3区珪藻分析結果

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	塩 分	pH	流 水										
Biddulphia spp.	Euh				-	-	-	1	-	-	-	1	-
Coscinodiscus spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
Grammatophora macilenta W.Smith	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	1
Melosira spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-	-
Thalassiosira spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1	1
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	13	1	3	2	-	-	-	-	3
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	2	1	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var.affinis (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Ceratoneis arcus var. hattoriana Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	J	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	17	1	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	18	1	1	-	-	-	-	-	-
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella comta (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	M、U	14	2	2	1	-	-	-	4	1
Cyclotella rhomboideo-elliptica	Ogh-hil	al-il	l-bi	M、S、U	6	-	1	-	-	-	-	-	-
Cyclotella stelligera Cleve & Crunow	Ogh-ind	al-bi	i-bi	M、U	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	1	4	-	-	-	1	2
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K、T	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	5	-	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella tumidula Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		3	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	-	-	-	-	-
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA、T	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-
Epithemia turgida var. westermanni (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia duplicoraphis H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	i-pi		-	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB、O、T	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		18	1	1	1	-	-	-	-	3
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K、T	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA、U	19	-	1	-	-	-	-	1	-
Hantzschia amphioxys var. capitata O. Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA、S	7	-	3	-	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W. Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	7	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1	-	-	-	-	1	1	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K、T	3	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus astraea (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	11	1	-	-	1	-	-	-	3
Stephanodiscus carconensis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-bi	M、T	2	1	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus cf. niagarae. Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	-	-	-	1	-	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	2	1	2
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種合計					203	10	15	13	2	0	1	7	14
珪藻化石総数					203	10	15	13	2	0	3	8	16

凡例

- | | | |
|--------------------|---------------------|------------------|
| H.R. : 塩分濃度に対する適応性 | pH : 水素イオン濃度に対する適応性 | C.R. : 流水に対する適応性 |
| Euh : 海水生種 | al-bi : 真アルカリ性種 | l-bi : 真止水性種 |
| Ogh-hil : 貧塩好塩性種 | al-il : 好アルカリ性種 | l-ph : 好止水性種 |
| Ogh-ind : 貧塩不定性種 | ind : pH不定性種 | ind : 流水不定性種 |
| Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 | ac-il : 好酸性種 | r-ph : 好流水性種 |
| Ogh-unk : 貧塩不明種 | unk : pH不明種 | r-bi : 真流水性種 |
| | | unk : 流水不明種 |

環境指標種群

- J : 上流性河川指標種、K : 中～下流性河川指標種、M : 湖沼浮遊性種、O : 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤、1990)
 S : 好汚濁性種、U : 広域適応性種、T : 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)
 R : 陸生珪藻 (RA : A群、伊藤・堀内、1991)

表 4 (1) 4 区珪藻分析結果 (1)

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	塩 分	pH	流 水												
Biddulphia spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Campylodiscus undulatus Greville	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Grammatophora macilenta W.Smith	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Grammatophora oceanica (Ehr.)Grunow	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Grammatophora spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Neodenticula kamschatica (Zabelina)Akiba & Yanagisawa	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia pandriformis Gregory	Euh			E 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A、B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4
Diploneis bombus (Ehr.)Cleve	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Diploneis smithii (Breb.)Cleve	Euh-Meh			E 2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia apiculata (Greg.)Grunow	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Achnanthes brevipes Agardh	Meh			D 1	-	-	-	-	-	-	-	-	7	2	3
Achnanthes brevipes var. angustata (Grev.)Cleve	Meh			D 1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	2
Achnanthes brevipes var. parvula (Kuetz.)Cleve	Meh			D 1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1
Achnanthes spp.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	3
Caloneis formosa (Greg.)Cleve	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
Caloneis rhombica H.Kobayashi	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1
Caloneis spp.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
Cocconeis disculoidea Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Dipioneis pseudovalis Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	9
Fragilaria fasciculata (Agardh)Lange-B.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4
Navicula elegans W.smith	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Navicula elegans fo. crowbillensis Foget	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula lundstronil fo. frieseana (Grun.)Cleve	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula peregrina (Ehr.)Kuetzing	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula yarrensis Grunow	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	8
Navicula spp.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Nitzschia cocconeiformis Grunow	Meh			E 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E 1	-	-	-	-	-	-	-	-	26	1	2
Nitzschia granulata var. hyalinum	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia punctata (W.Smith)Grunow	Meh			E 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia spp.	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pseudopodosira kosugii Tanimura et Sato	Meh			E 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
Rhopalodia musculus (Kuetz.)O.Muller	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Thalassiosira laeustris (Grun.)Hasle	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3
Navicula capitata var. hungarica (Geun.)Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula cincta (Ehr.)Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula integra (w.Smith)Ralfs	Ogh-Meh	al-il	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Navicula pusilla W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula pygmaea Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	2
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	2	7	9	3	2	-	2	5	9	6	7
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	1	1	4	-	-	-	-	-	2
Aulacoseira smibigus (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira distans (Ehr.)Simonsen	Ogh-hpb	ac-il	l-bi	N、U	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N、U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	94	97	36	-	1	1	-	-	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	9
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	3
Cocconeis pediculus Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	4	-	-	-	1	-	-	6	12
Cocconeis placentula var. lineata(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	7	5	2	-	-	-	8	5	8
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-
Cyclotella comta (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	M、U	9	11	10	15	5	-	-	6	18	7	4
Cyclotella ocellata Pantocsek	Ogh-ind	al-bi	l-bi		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Cyclotella rhomboideo-elliptica	Ogh-hil	al-il	l-bi	M、S、U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	3	-	1	-	1	-	-	-	1	1
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O、T	-	-	1	4	1	1	1	-	-	-	1
Cymbella heteropleura Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	8	5	6	-	-	-	4	4	10
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K、T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2
Cymbella turgidula var. nippnica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	2	1	-	-	-	4	4
Dialoma hyemalis var. mesodon (Ehr.)Kirchener	Ogh-ind	al-il	r-pi	K、T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis oblongella (Naegeli)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Diploneis ovalis (Hiles)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Diploneis cf. yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	2	-	-	-	5	2	3
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Epithemia turgida var. westermanni (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	3	-	-	-	-	1	-	1
Eunotia fallax A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O、T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-
Eunotia praenupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB、O、T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia praenupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB、O	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	4	6	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		3	12	10	13	19	3	8	-	1	7	6

表4(2) 4区の珪藻分析結果(2)

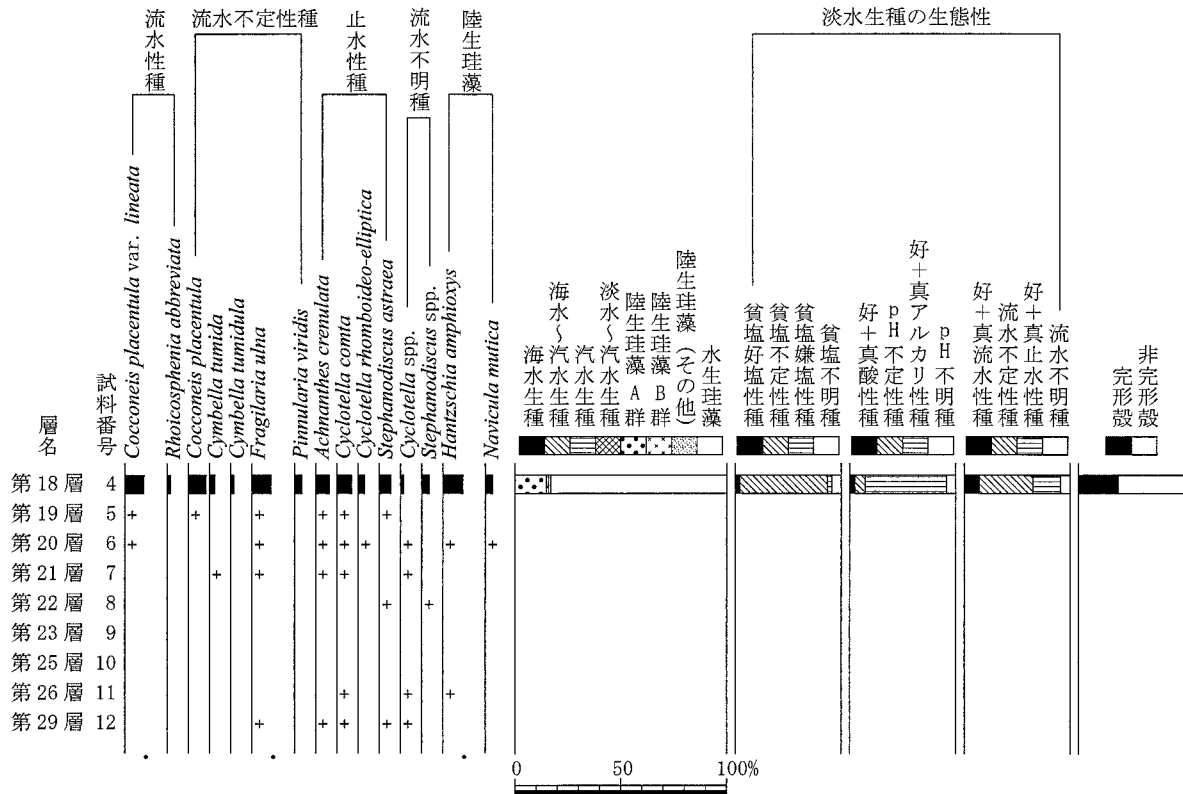
種類	生態性			環境指標種	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	塩分	pH	流水												
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia rhomboides (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	imd	l-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	-	-	4	4	9	-	1	-	3	5	3
Hantzschia vivax (W.Smith)M.Prealgallo	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Hantzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Melosira undulata (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Melosira spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula digitoradiata (Greg.)A.Schmidt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	-	-	1	1	3	-	-	1	-	-	1
Navicula muticoides Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata var.sumatrana Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W. Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	2	-	-	1	1	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	2	4	1	-	-	-	-	-	2
Pinnularia Schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
Pinnularis viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	8	3	-	1	-	-	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	3	5	9	8	-	5	-	-	6	-
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K, T	-	-	3	1	-	-	-	-	-	1	3
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis acuta W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	1	2	3	-	-	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron var.signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	1	4	2	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	5	1	4	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus astraea (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	4	3	4	5	3	1	1	1	3	5	2
Stephanodiscus carconensis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-bi	M, T	-	-	-	1	-	-	-	1	1	1	-
Stephanodiscus niagarae Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	-	-	-	-	-	-	3	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	16
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	6
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	42	19	53
淡水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	9
淡水生種合計					21	52	203	210	134	5	22	21	59	79	120
珪藻化石総数					21	52	203	210	134	5	22	21	106	107	204

凡例

- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------|
| H.R. : 塩分濃度に対する適応性 | pH : 水素イオン濃度に対する適応性 | C.R. : 流水に対する適応性 |
| Euh : 海水生種 | al-bi : 真アルカリ性種 | l-bi : 真止水性種 |
| Euh-Meh : 海水生種-汽水生種 | al-il : 好アルカリ性種 | l-ph : 好止水性種 |
| Meh : 汽水生種 | ind : pH不定性種 | ind : 流水不定性種 |
| Ogh-Meh : 淡水-汽水生種 | ac-il : 好酸性種 | r-ph : 好流水性種 |
| Ogh-hil : 貧塩好塩性種 | ac-bi : 真酸性種 | r-bi : 真流水性種 |
| Ogh-ind : 貧塩不定性種 | unk : pH不明種 | unk : 流水不明種 |
| Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 | | |
| Ogh-unk : 貧塩不明種 | | |

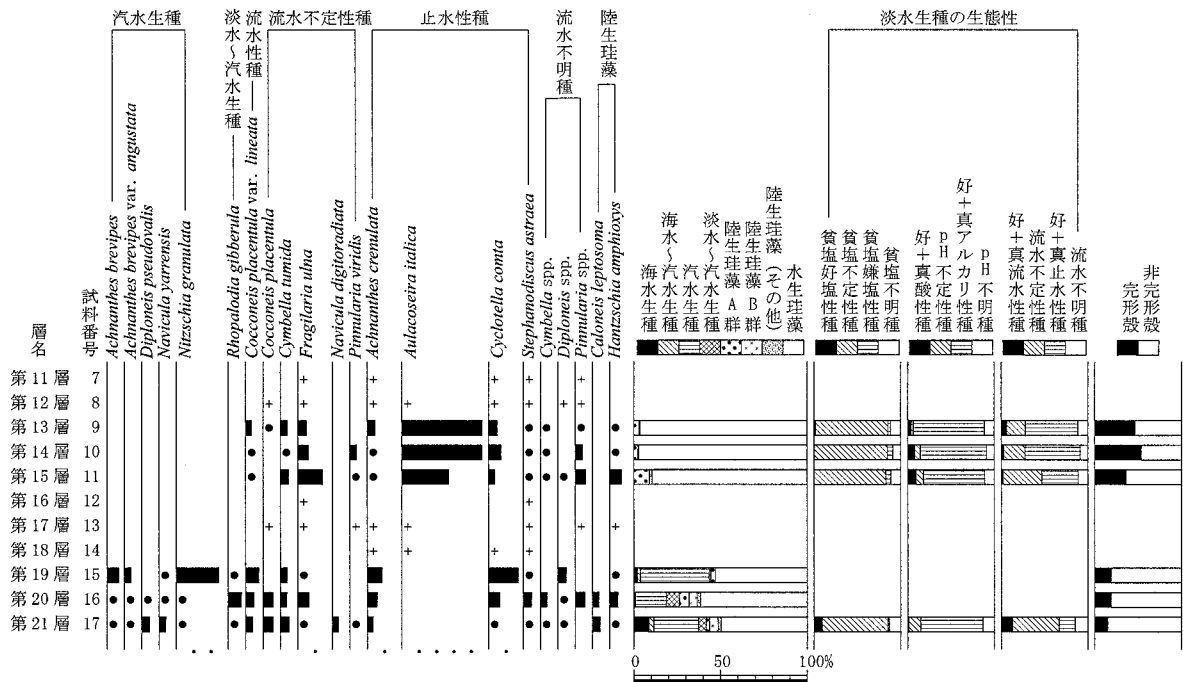
環境指標種群

- A : 外洋指標種、B : 内湾指標種、D 1 : 海水砂質干潟指標種、E 1 : 海水泥質干潟指標種、E 2 : 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉、1988)
 J : 上流性河川指標種、K : 中～下流性河川指標種、M : 湖沼浮遊性種、N : 湖沼沼沢湿地指標種、O : 沼沢湿地付着性種、P : 高層湿原指標種 (以上は安藤、1990)
 S : 好汚濁性種、U : 広域適応性種、T : 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)
 R : 陸生珪藻 (RA : A群, 伊藤・堀内, 1991)



淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図5 3区における主要珪藻化石群集の層位分布



汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図6 4区における主要珪藻化石群集の層位分布

試料番号15は、汽水生種が全体の約40%を占める。中でも、汽水生種・海水泥質干潟指標種（安藤，1990）の *Nitzsca granulata* が約25%、真止水性種・湖沼浮遊生種の *Cyclotella comta* が約15%産出する。海水泥質干潟指標種とは、塩分濃度が12%以上の水域の泥底に付着生活する種群であり、閉塞性の高い塩性湿地などに生育するとされる。

試料番号14～12は珪藻化石の検出個数が5～21個体と少ないが、海水生種・汽水生種・淡水～汽水生種などの、高い塩分濃度に適応する種がほとんど産出しない点で、群集の特徴は上位の試料番号11～9に類似する。

試料番号11～9は淡水生種が優占し、全体的には貧塩不定性種・好+真アルカリ性種・好+真止水性種（止水域で生育する種）が多産する。試料番号11は流水不定性種と好+真アルカリ性種がそれぞれ約40～50%を占める。中でも、好止水性種の *Aulacoseira italica* が約25～45%産出する。その他は、流水不定性種の *Fragilaria ulna* などが10%前後産出する。

試料番号8・7は珪藻化石の検出個数が21～52個体と少ないが、海水生種・汽水生種・淡水～汽水生種などの高い塩分濃度に適応する種がほとんど産出しない点で、群集の特徴は試料番号11～9に類似する。

植物珪酸体分析

結果を表5～7、図7～9に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点ごとに産状を述べる。

〈1区溝1関連〉

植物珪酸体含量は試料Cが約35,000個/gと少ないが、他が40,000～60,000個/g前後である。

イネ属は、短細胞珪酸体が全試料で検出され、機動細胞珪酸体が試料A・B・Dで検出される。特に試料Aは、他の試料と比べて多い。

また、いずれの試料もタケ亜科の産出が目立ち、特に試料A・Bで多い。この他に、ヨシ属、コブナグサ属・ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

〈3区西壁〉

植物珪酸体含量は、試料番号12が約5,000個/g、試料番号11～7が10,000～25,000個/g、試料番号6～4が30,000～40,000個/g、試料番号3が約10,000個/g、試料番号2・1が30,000～35,000個/gである。

イネ属は、試料番号6より上位で検出され、短細胞珪酸体の含量が概して多い。また、層位的な変化が認められ、試料番号5で多産するが、試料番号4・3で減少し、試料番号2・1で再び増加する。また、いずれもタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

表5 1区の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	A	B	C	D	E
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属		3	7	4	8	1
タケ亜科		257	270	110	181	151
ヨシ属		22	30	44	58	26
ウシクサ族コブナグサ属		-	7	-	3	1
ウシクサ族ススキ属		27	87	53	49	62
イチゴツナギ亜科		10	19	11	14	20
不明キビ型		67	132	69	83	55
不明ヒゲシバ型		55	54	43	68	50
不明ダンチク型		31	41	31	38	37
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属		40	2	-	7	-
タケ亜科		266	101	15	72	49
ヨシ属		17	11	-	5	4
ウシクサ族		32	10	1	18	20
不明		129	31	2	31	22
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		386	552	291	396	316
イネ科葉身機動細胞珪酸体		515	196	49	171	132
総計		901	748	340	567	448
堆積物1gあたりの個数		56,266	66,805	35,088	41,437	47,191

〈4区南壁〉

植物珪酸体含量は約7,000～85,000個/gまで変化するが、特に試料番号13～10で約50,000～85,000個/gと多い。イネ属は、試料番号12より上位で検出され、概して機動細胞珪酸体の含量が多い。また、層位的な変化がみられ、試料番号10で多産するが、試料番号9～7で減少し、試料番号6より上位になると再び増加する。

また、各試料ではタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。概して、タケ亜科の産出が目立つが、試料番号13～10ではタケ亜科と共にヨシ属やウシクサ族（コブナグサ属やススキ属を含む）などの含量も多い。

4. 考察

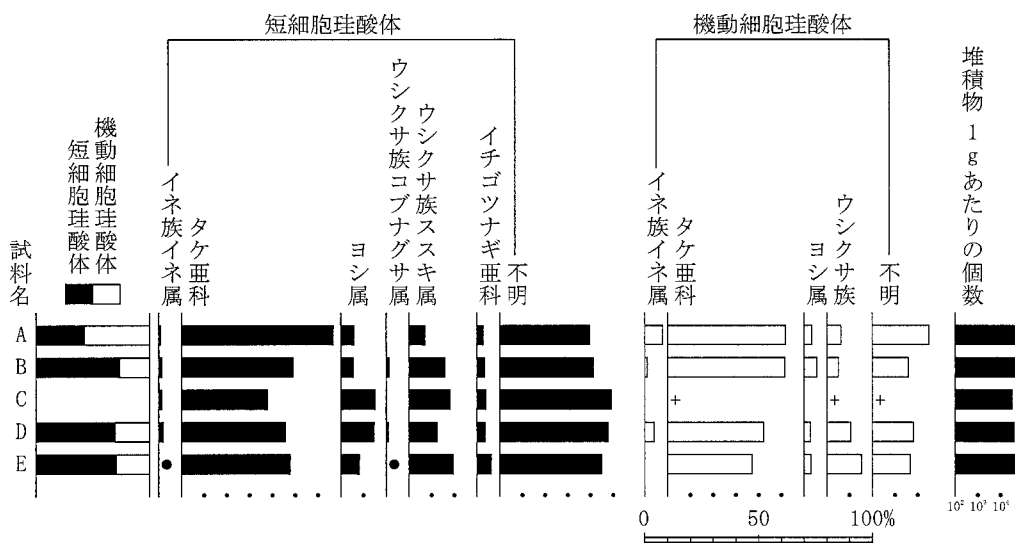
4-1. 堆積環境

(1) 1区溝1関連

珪藻化石がほとんど産出しないため、弥生時代前期以前の堆積環境については、詳細な検討が不可能である。ただし、流水不定性種などの水生珪藻が若干産出するため、堆積当時に何らかの水の影響を受けていた可能性がある。

(2) 2区 河道1中央トレンチ西壁南端採取地山

珪藻化石の検出個数は少ないが、産出種の中では内湾指標種が大部分を占め、淡水生種が稀に産出する。これは、内湾～河口干潟のような環境下での群集の可能性がある。他の調査区においても、標高+0.8m付近の層位が本地域における縄文海進の及んだ最上位の堆積物である可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表）。これらのことから、地山は内湾～河口干潟のような環境下での堆積物、あるいはそのような堆積物が河川作用などで再堆積したものと考えられる。試料が採取された層位についてより詳細な情報をもって改めて検討を加えたい。

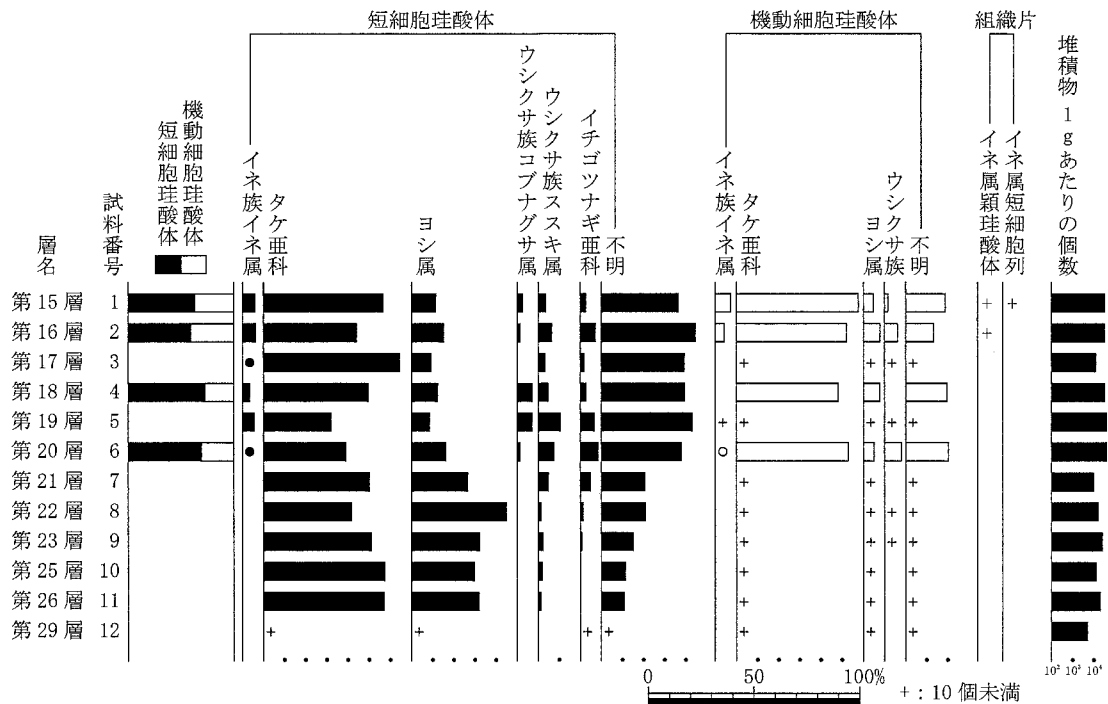


出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体ともに100未満の試料で検出された種類を示す。

図7 1区における植物珪酸体群集の層位分布

表6 3区の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属		19	15	1	9	20	1	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		183	105	77	132	114	120	83	64	114	122	132	18
ヨシ属		37	36	11	33	30	50	44	69	72	63	74	3
ウシクサ族コブナグサ属		8	3	-	19	25	4	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属		11	15	4	12	38	23	8	2	5	4	3	-
イチゴツナギ亜科		8	17	2	7	24	26	8	2	2	-	-	1
不明キビ型		57	46	22	51	102	79	16	9	22	14	12	1
不明ヒゲシバ型		42	33	14	29	26	20	11	23	9	8	7	2
不明ダンチク型		19	27	11	25	26	18	7	-	3	2	6	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属		14	7	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		110	86	57	49	21	73	6	43	27	9	59	15
ヨシ属		9	13	4	8	7	7	3	13	6	1	13	3
ウシクサ族		3	10	1	-	4	11	-	6	1	-	-	-
不明		36	22	14	20	25	28	1	22	8	3	16	10
合計													
イネ科葉部短細胞珪酸体		324	239	120	267	358	309	166	154	224	213	232	35
イネ科葉身機動細胞珪酸体		191	165	87	102	87	138	17	84	45	15	94	28
総計		515	404	207	369	445	447	183	238	269	228	326	63
堆積物 1gあたりの個数		31,641	34,403	11,904	29,567	40,788	35,495	10,861	15,173	24,641	13,479	19,143	5,569
組織片													
イネ属類珪酸体		2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

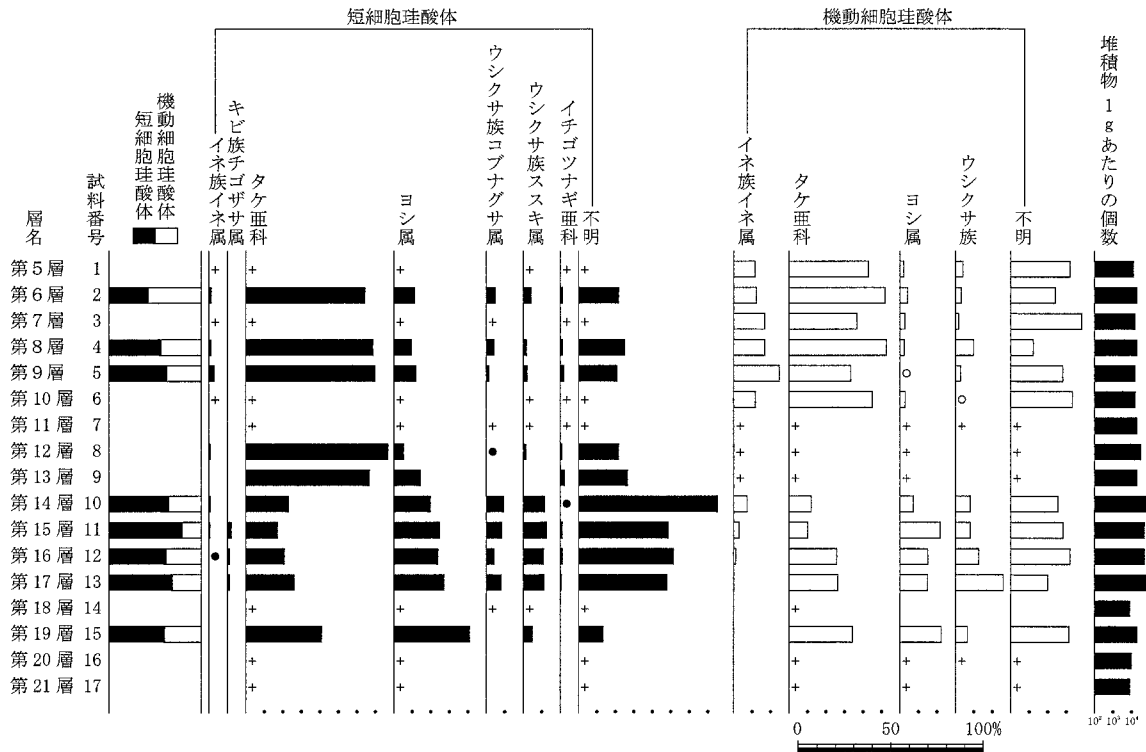


出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体ともに100個未満の試料で検出された種類を示す。また、細胞片の産状を検出個数により+の記号で示す。

図8 3区における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

表7 4区の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
イネ科葉部短細胞珪酸体																			
イネ族イネ属		3	2	1	2	6	2	-	2	-	2	3	1	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	3	6	-	-	-	-	-
タケ亜科		53	92	62	115	134	29	40	163	88	52	90	59	133	9	67	24	10	
ヨシ属		7	16	10	16	23	8	5	11	19	45	131	68	138	6	67	5	14	
ウシクサ族コブナグサ属		-	7	3	7	3	-	1	1	-	21	44	12	41	1	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属		3	6	-	3	4	1	3	3	-	26	66	31	57	2	8	-	-	
イチゴツナギ亜科		2	2	1	2	4	1	1	2	3	1	6	3	3	-	-	-	-	
不明キビ型		8	16	10	19	13	1	3	22	13	70	166	95	120	2	7	1	4	
不明ヒゲシバ型		5	6	11	15	15	4	5	17	14	51	50	27	94	-	9	2	1	
不明ダンチク型		11	9	7	8	12	7	1	7	8	50	40	24	31	2	6	3	2	
イネ科葉身機動細胞珪酸体																			
イネ族イネ属		17	24	32	22	28	13	2	1	1	9	4	2	-	-	-	-	-	
タケ亜科		63	101	70	69	38	50	50	8	1	15	14	45	62	13	37	34	11	
ヨシ属		3	8	5	3	1	3	10	3	3	9	30	26	35	-	24	4	2	
ウシクサ族		6	6	3	13	3	1	2	-	-	10	11	22	61	-	7	3	-	
不明		47	47	73	16	32	37	23	1	3	32	39	56	47	-	34	7	3	
合計																			
イネ科葉部短細胞珪酸体		77	143	90	168	192	48	60	212	132	227	528	284	511	34	164	46	45	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		147	195	190	131	114	111	88	20	16	125	138	175	236	15	108	51	18	
総計		224	338	280	299	306	159	148	232	148	352	666	459	747	49	272	97	63	
堆積物 1 gあたりの個数		11,567	18,255	15,991	20,081	16,443	17,751	17,950	28,353	19,707	84,922	49,937	52,278	79,950	7,605	21,085	11,016	8,473	



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体ともに100個未満の試料で検出された種類を示す。

図9 4区における植物珪酸体群集の層位分布

(3) 3区西壁

第29～19層では、珪藻化石の検出個数が少ないため、堆積環境の詳細は不明である。同一試料から植物珪酸体が産出するため、何らかの原因で珪藻化石が選択的に溶解消失したと思われる。第18層における珪藻化石の産状は優占する種がなく、流水性種・止水性種・陸生珪藻など、異なる生態性の種が低率で産出する。このような群集は混合群集と呼ばれ、洪水などの一過性の堆積物や水田のような攪乱を受けている堆積物中に認められるとされている（堀内ほか，1996）。したがって、本層準が堆積した頃、付近は基本的に湿潤な水域となっていたが、攪乱の影響や様々な水域で堆積した土壌が流れ込むなど、不安定な環境であったと考えられる。

(4) 4区南壁

第21～19層では海水生種・汽水生種・淡水～汽水生種などの、高い塩分濃度に適応する種が多産し、淡水生種も低率で産出する。特に第19層では汽水生種・海水泥質干潟指標種が比較的多く産出する。他の調査区においても、同様の珪藻群集からなる堆積物が認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。第21～19層は、淡水生種が比較的産することから、干潮河川域ないし河口干潟のような堆積環境下で形成された堆積物である可能性が高い。また、第21層から19層にかけて、海水生種が減少することから、堆積の進行に伴い陸水の影響を強く受けるようになってきたことが推定される。

第15～13層は好止水性種で偶来性浮遊性種の *Aulacoseira italica* が多産しており、これとともに *Cyclotella comta*、*Stephanodiscus astraea* などの湖沼浮遊性種を伴う。海水生種・汽水生種・淡水～汽水生種などの高い塩分濃度に適応する種が全く検出されない。また、僅かであるが上位で流水性種が微増する。したがって、ある程度水深がある池沼のような比較的安定した水域となっていたが、後に河川の流れ込みなどの影響を多少なりとも受けていた可能性がある。

4-2. 稲作について

(1) 1区溝1関連

栽培種であるイネ属は、第7b～1層全ての層準から検出された。第7b層では、イネ属は短細胞珪酸体のみ検出され、機動細胞珪酸体は検出されなかった。出現率は極めて低く、本層準の上位に弥生時代前期水田（下層）が確認されていることから、耕作に伴う攪乱等により、上位層から落ち込んだものに由来する可能性が高い。

第4層と第7b層は、弥生時代前期水田（下層）の畦畔に相当する。第4層からはイネ属短細胞・機動細胞ともに検出されるが、第7a層は短細胞珪酸体のみであった。また、出現率は低く、5%以下である。現在の水田耕土におけるイネ属珪酸体の出現率は、近藤（1988）の調査例によると稲藁堆肥連用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壌表層でイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示すと報告されている。今回のイネ属の出現率は、この現在の水田と比較しても明らかに低い値となっている。これは、両層が畦畔構成堆積物であるため、水田耕作土部分と異なり、イネ属の植物体を取り込まれる機会が少なかったことを示している可能性がある。また、堆積時、後の風化作用の影響の可能性もある。いずれにしても本時期の稲作の様態を明らかにする上で興味深い結果であり、今後水田面におけるイネ属の産状との比較が必要である。

第2層は弥生時代前期水田（上層）に相当する。本層準ではイネ属短細胞・機動細胞の両珪酸体が検出されるが、出現率は低い。この原因としては耕作期間が短かった、堆積後の分解、氾濫等の影響

による耕作土部分の流失などの可能性がある。弥生前期水田を覆う砂層に相当する第1層ではイネ属の両珪酸体が比較的多く検出されたが、これはこのような水田耕作土を削って堆積していることを示唆する。

(2) 3区西壁

植物珪酸体群集は、第29～21層と第20～15層で層位的に変化した。

第29～21層は植物珪酸体の含量が少なく、タケ亜科が卓越し、ヨシ属も多い群集が認められた。ヨシ属は比較的大型の抽水植物である。おそらく、29～20層が堆積した頃は、調査地点は河川の氾濫の影響を受ける後背湿地であり、比較的開けた乾燥した場所にはタケ亜科、幾分湿潤な場所にはヨシ属が分布していたと考えられる。

第20～15層では堆積物中に含まれる植物珪酸体の含量が増加する。また、ヨシ属が減少し、イネ属が見られる群集になる。このような一連の変化は、調査区内の地形的条件（土地の安定化）の変化や、それに伴う人間による耕作地の開発などを反映している可能性がある。いずれにしても、この時期にはヨシ属は分布を狭め、稲作地として利用されるようになったと推定される。特に第19・18層ではイネ属短細胞珪酸体がやや多く検出されており、本層準が弥生時代前期水田層に相当することと調和的である。本水田層の上位に堆積する洪水性堆積物（第17層）からもイネ属が出現するが出現率が低率であり、その上位の第16・15層で増加し、第18・19層と同様の出現率を示す。このような層位的な変化は氾濫後も調査地点において稲作が行われていたことを示唆する。

このように第20層以浅が堆積する頃には調査地点近辺で稲作が行われるようになったことが推定される。ただし、イネ属珪酸体の出現率が低率であったことから、先述したように耕作期間が短かった可能性や作土層の流亡した可能性が考えられる。

(3) 4区南壁

植物珪酸体群集は第18層と17層、第15層と第16層の間の層準を境として層位的に変化する。

第21～18層では植物珪酸体量は概して少ない。第19層ではタケ亜科・ヨシ属が多い群集が認められる。このような産状から、これらの層の堆積時期はヨシ属が分布する湿地であったとみられるが、堆積速度が比較的速く、堆積物中に取り込まれる植物珪酸体が少なかったことを示している可能性が高い。

第17～14層まで植物珪酸体含量が増加し、タケ亜科と共にヨシ属が多産し、コブナグサ属・ススキ属などウシクサ属も検出される。これらのことから、調査区は前時期に比較して安定した湿地となり、ヨシ属・コブナグサ属などのイネ科植物が分布域を拡げた可能性がある。

13層より上位になると植物珪酸体含量が再び少なくなり、タケ亜科を中心とした群集になる。このような変化は地理的条件の変化を示している可能性が高く、湿潤な場所が減少し、ヨシ属が分布を狭めたと推定される。

栽培種のイネ属は、第16層より上位の堆積物から断続的に検出される。これらの層の堆積期には、調査地点ないしその近辺で稲作が行われていたことが推定される。特に第14層および第12層が弥生時代前期の水田層とされている。これらの層準におけるイネ属の出現率は低率である。1区と同様に耕作期間や農耕形態、耕作土の浸食などに関係している可能性がある。また、弥生時代前期水田層上位の第9層より上位では、イネ属機動細胞珪酸体が比較的多く検出された。これらの層準でも調査地点で稲作が行われていたことが推定される。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘 (1998) 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527-600.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 (1996) 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－. 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, p.62-63.
- 近藤鍊三 (1988) 十二遺跡土壌の植物珪酸体分析. 「鑄師屋遺跡群 十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書－」, p.377-383. 御代田町教育委員会.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991 a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991 b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

津島遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津島遺跡は岡山県岡山市に所在し、岡山平野のほぼ中央部、旭川右岸に位置する。本遺跡では弥生時代前期～近世の各時代の遺構・遺物が検出されたが、集落が形成されたのは弥生時代後期以降とされている。今回の発掘調査区では、中央部において検出された河道の北岸と南岸から、弥生時代後期後半の木製品、および建築部材が多量に出土しており、注目されている。今回は、これらの木質遺物が廃棄あるいは流れ着いた時期の古植生推定を目的として、その包含層試料を用いて花粉分析を実施する。

1. 試料

試料が採取された津島2区河道1は、北東から南西方向に流れる河道であり、弥生時代後期～中世にかけて埋没したとされている。今回の分析試料は、弥生時代後期後半とされている河道内埋土1点である。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

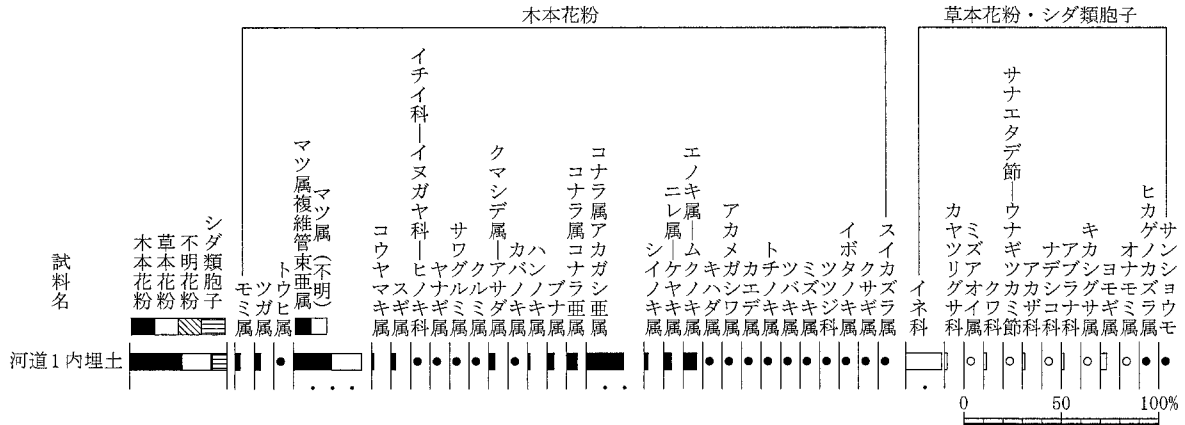
結果を表1・図1に示す。花粉化石・シダ類胞子の保存状態は比較的良く産出量も多い。木本花粉についてみると、マツ属

表1 花粉分析結果

種類	津島2区 河道1内埋土
木本花粉	7
モミ属	8
ツガ属	1
トウヒ属	49
マツ属複雑管束亜属	39
マツ属（不明）	3
コウヤマキ属	6
スギ属	2
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2
ヤナギ属	2
サワグルミ属	1
クルミ属	8
クマシラ属-アサダ属	1
カバノキ属	3
ハンノキ属	9
ブナ属	14
コナラ属コナラ亜属	49
コナラ属アカガシ亜属	5
シイノキ属	10
ニレ属-ケヤキ属	18
エノキ属-ムクノキ属	1
カラスザンショウ属	1
キハダ属	1
アカメガシワ属	2
カエデ属	2
トチノキ属	1
クロウメモドキ科	1
ツバキ属	1
ウコギ科	1
ミズキ属	1
ツツジ科	1
ハイノキ属	1
イボタノキ属	1
クサギ属	1
スイカズラ属	1
-----	-----
草本花粉	85
イネ科	6
カヤツリグサ科	1
ミズアオイ属	7
クワ科	2
ギンギン属	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	6
アカザ科	4
ナデシコ科	1
キンボウグ属	6
アブラナ科	1
キカシグサ属	1
セリ科	15
ヨモギ属	2
オナモミ属	1
キク亜科	1
不明花粉	7
-----	-----
シダ類胞子	
ヒカゲノカズラ属	1
イノモトツウ属	3
サンショウモ	1
他のシダ類胞子	65
合計	253
木本花粉	139
草本花粉	7
不明花粉	7
シダ類胞子	70
総計（不明を除く）	462

(特に複維管束亜属) とコナラ属アカガシ亜属が多く産出している。そのほかには、クマシデ属-アサダ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属-ムクノキ属などが認められる。また、特徴的なものとしては、アカメガシワ属・ツバキ属などがあげられる。

草本花粉ではイネ科が優占しており、そのほかではカヤツリグサ科・ヨモギ属・クワ科などが産出している。



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

図1 主要花粉化石群集の層位分布

4. 考察

今回の試料で検出された木本類のなかでは、マツ属とアカガシ亜属が多く認められている。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。このほかにも、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素であるシイノキ属も検出される。このことから、当時本遺跡周辺では、アカガシ亜属を中心とした照葉樹林が存在したことが推定される。これらとともに検出された、クマシデ属-アサダ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属-ムクノキ属なども、周辺地域に生育していたと考えられる。これらの種類の中で、クマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属-ムクノキ属などは、湿った場所に生育する種類を含むことから、この河道の集水域周辺の植生を反映している可能性がある。また、アカメガシワ属・クワ科などは林縁の植生を構成し、ツバキ属などは林床部の植生を構成していたと思われる。一方、草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が検出されることから、周辺地域にはこれらの草本類が生育していたと考えられる。

今回得られたアカガシ亜属を中心とした花粉化石群集は、周辺遺跡における既往の分析調査結果でも、百間川沢田遺跡などでアカガシ亜属が多産する類似した花粉化石群集が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993 a、b）。これらのことから、当時の岡山平野周辺には、アカガシ亜属を中心とした暖温帯性の広葉樹林が成立していたことが推定される。三好（1988）によると、このような照葉樹林は、後氷期の向暖化とともにその分布を拡大し、ごく最近まで優占していたと考えられている。

ところで、今回の調査結果では、アカガシ亜属よりもマツ属が多く認められている。複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）の増加は全国的に認められており、一般に森林伐採による二次林や植林といった植生干渉の結果として知られている（例えば波田，1987など）。岡山平野においては、江戸時

代もしくは明治時代以降の急激な森林乱伐により、アカマツ二次林が急増したとされている（三好、1988）。今のところ、本河道付近もしくはその集水域の局地的な要素などが原因として想定されるが、詳細は不明である。今後試料採取地点の基本土層について連続的に花粉分析を行い、本地点付近の古植生変遷を把握した上で、再検討することが望まれる。また、本遺跡では縄文時代晩期以降の花粉分析結果が蓄積されてきている。各地点の層序対比などを行った上で、局地性やマツ属の多産の原因などについても検討したい。

引用文献

波田善夫（1987）松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について－，資料集，p.41-49，日本自然保護協会。

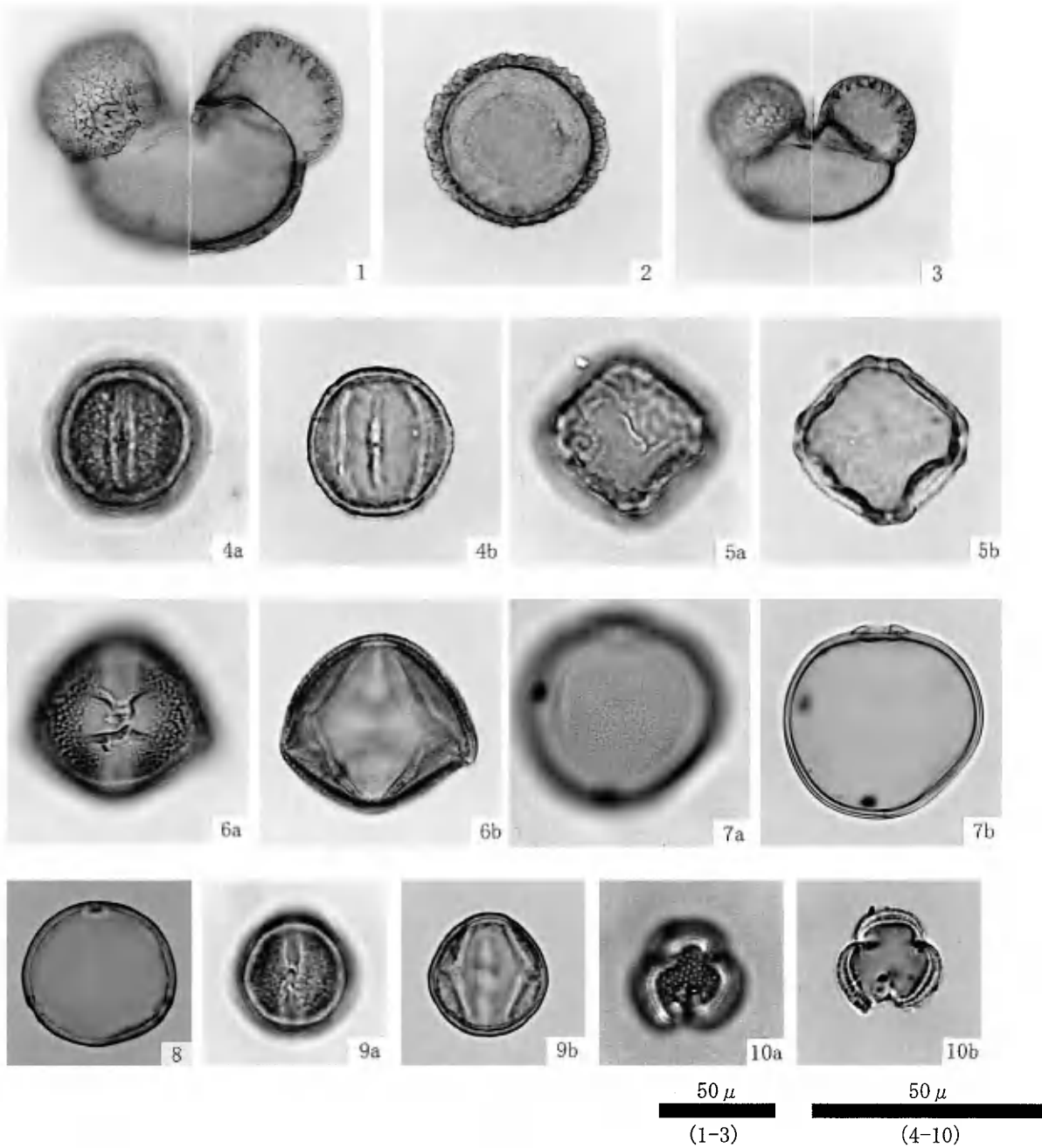
三好教夫（1988）岡山県の植生変遷史．岡植研，7，p.1-9.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993 a）植物化石分析報告．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡3

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文）」，p.405-417，岡山県文化財保護協会。

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993 b）自然科学分析．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡3 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文）」，p.418-426，岡山県文化財保護協会。

図版 花粉化石



- | | | | |
|---|---------------------------|----|---------------------------|
| 1 | モミ属 (津島2区; 河道1内埋土) | 2 | ツガ属 (津島2区; 河道1内埋土) |
| 3 | マツ属 (津島2区; 河道1内埋土) | 4 | コナラ属コナラ亜属 (津島2区; 河道1内埋土) |
| 5 | ニレ属—ケヤキ属 (津島2区; 河道1内埋土) | 6 | ツバキ属 (津島2区; 河道1内埋土) |
| 7 | イネ科 (津島2区; 河道1内埋土) | 8 | エノキ属—ムクノキ属 (津島2区; 河道1内埋土) |
| 9 | コナラ属アカガシ亜属 (津島2区; 河道1内埋土) | 10 | ヨモギ属 (津島2区; 河道1内埋土) |

津島遺跡における灰像分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

分析試料は、弥生時代後期後半とされる河道1（1区・2区）から採取された計11点である。試料の詳細を表1に示す。

2. 分析法

試料を洗浄後、電気炉灰化法（550℃・6時間）によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100～400倍の倍率で行った。なお、灰化物の内部を調べるために、植物組織の一部を破壊して観察を行った。

3. 分析結果

分析結果を表1に示し、各試料の灰像および植物珪酸体の顕微鏡写真を示す。

表1 津島遺跡河道1（1区・2区）から出土した植物遺物の灰像分析結果

No.	地点・試料	植物珪酸体・植物組織	給源植物の推定
1	1区、建築部材11	—	樹皮
2	1区、建築部材14	—	樹皮
3	2区、建築部材596	ススキ属>ネザサ節	ススキ属の茎葉>樹皮
4	2区、第2層白色有機物	イネ（穎）	イネ穎（粉穀）
5	2区、第9層樹皮	ススキ属	樹皮>ススキ属の茎葉
6	2区、第13層板状木材	—	木材（樹種同定の結果参照）
7	2区、屋根材 繊維状炭化物	ヨシ属>ススキ属	ヨシ属の茎葉>ススキ属の茎葉
8	2区、白色有機物	ススキ属>ムギ類（穎）	ススキ属の茎葉>ムギ類の穎
9	2区、紐付き屋根材下	ススキ属	樹皮>ススキ属の茎葉
10	2区、繊維状炭化物	ススキ属>イネ（穎）	樹皮>ススキ属の茎葉>イネ穎
11	2区、壺内の藁状炭化物	イネ>イネ（穎）	イネ藁

4. 考察

No.3（建築部材596）では、ススキ属に由来する植物珪酸体や植物組織片が多量に検出され、ネザサ節に由来する植物珪酸体なども少量検出された。このことから、同試料の給源植物はおもにススキ属の茎葉と推定される。

No.4（第2層白色有機物）では、イネの穎（粉穀）に由来する植物珪酸体が多量に検出された。このことから、同試料の給源植物はイネ穎（粉穀）と推定される。

No.7（屋根材、繊維状炭化物）では、ヨシ属に由来する植物珪酸体や植物組織片が多量に検出され、

ススキ属に由来する植物珪酸体なども検出された。このことから、同試料の給源植物はおもにヨシ属の茎葉と考えられ、ススキ属の茎葉なども含まれていると推定される。

No.8（白色有機物）では、ススキ属に由来する植物珪酸体や植物組織片が多量に検出され、ヨシ属に由来する植物珪酸体やムギ類の穎（籾殻）に由来する植物珪酸体も少量検出された。このことから、同試料の給源植物はおもにススキ属の茎葉と考えられ、ムギ類の穎なども含まれていると推定される。

No.11（壺内の藁状炭化物）では、イネに由来する植物珪酸体や植物組織片が多量に検出され、イネの穎（籾殻）に由来する植物珪酸体も検出された。このことから、同試料の給源植物はおもにイネ藁と推定される。

No.1（建築部材11）、No.2（建築部材14）、No.5（第9層樹皮）、No.9（紐付き屋根材下）、No.10（繊維状炭化物）は、おもに針葉樹（スギやヒノキなど）の樹皮が主体と考えられるが、樹皮については灰像による同定は困難である。なお、このうちNo.5、No.9、No.10にはススキ属の茎葉が含まれており、No.10にはイネの穎（籾殻）が含まれていると推定される。

文献

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村，F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.

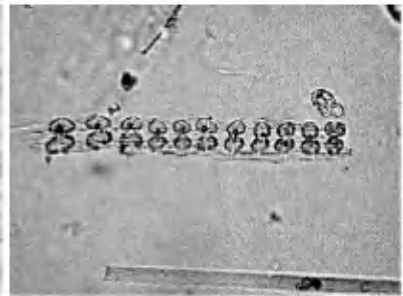
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.



イネ
No.11



イネの穎機動細胞組織
No.11



イネの短細胞組織
No.11



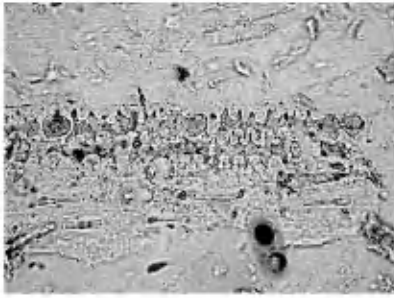
イネの穎（籾殻）の表皮細胞
No.4



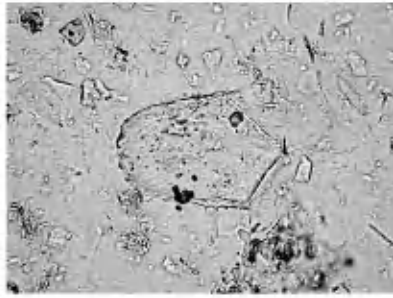
イネの穎（籾殻）の表皮細胞
No.4



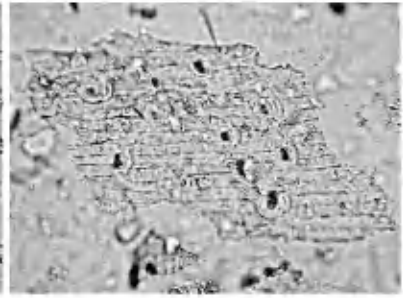
イネの穎（籾殻）の表皮細胞
No.4



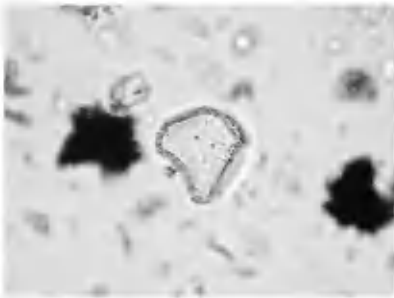
ムギ類の類 (表皮細胞)
No. 8



ヨシ属
No. 7



ヨシ属の表皮細胞組織片
No. 7



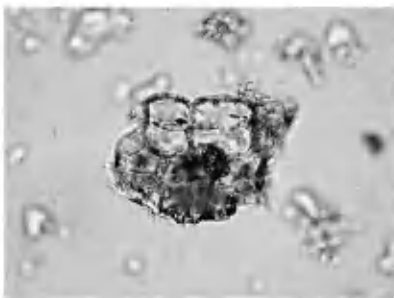
ススキ属
No. 3



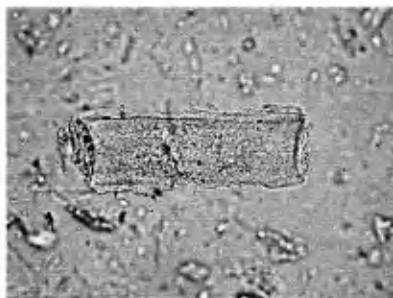
ススキ属
No. 9



ススキ属の機動細胞組織
No. 8



ススキ属の機動細胞組織
No. 9



ヨシ属の茎部起源
No. 7



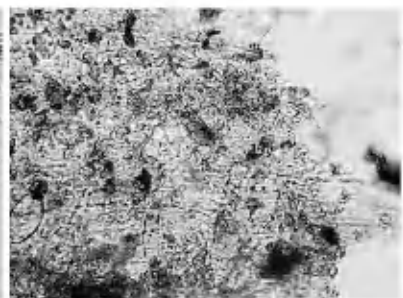
樹皮
No. 1



樹皮
No. 2



樹皮
No. 5



樹皮
No. 10

植物珪酸体の顕微鏡写真 ————— 50 μm

津島遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	水田 3	炭化物	酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.2	水田 3	炭化物	酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.3	水田 1	炭化物	酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.4	水田 1	炭化物	酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.5	土壌67	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No.7	1区井戸 6	木材	酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成	β -線計数法
No.8	1区河道 1 W172	木材	酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成	β -線計数法
No.9	1区河道 1 構造材 5	木材	酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成	β -線計数法
No.10	1区河道 1 構造材 6	木材	酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成	β -線計数法
No.11	1区河道 1 構造材 1	木材	酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成	β -線計数法

※No.6 は欠番

暦年代の交点とは、較正¹⁴C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率）・2 σ （95%確率）は、較正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

2. 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	2,860 \pm 60	-20.8	2,930 \pm 60	交点: Cal BC1120 1 σ : Cal BC1250~1020 2 σ : Cal BC1300~940	152,885
No.2	2,810 \pm 60	-20.6	2,880 \pm 60	交点: Cal BC1030 1 σ : Cal BC1130~970 2 σ : Cal BC1260~900	152,886
No.3	2,790 \pm 50	-17.5	2,910 \pm 50	交点: Cal BC1100 1 σ : Cal BC1190~1010 2 σ : Cal BC1270~940	152,887
No.4	2,840 \pm 50	-19.7	2,930 \pm 50	交点: Cal BC1120 1 σ : Cal BC1210~1030 2 σ : Cal BC1290~990	152,888
No.5	1,970 \pm 40	-24.5	1,980 \pm 40	交点: Cal AD30 1 σ : Cal BC 30~Cal AD 70 2 σ : Cal BC 50~Cal AD100	152,889
No.7	1,820 \pm 60	-28.4	1,770 \pm 60	交点: Cal AD 250 1 σ : Cal AD 220~350 2 σ : Cal AD 110~410	152,891
No.8	1,770 \pm 60	-27.3	1,740 \pm 60	交点: Cal AD 260、Cal AD 290、 Cal AD 320 1 σ : Cal AD 230~390 2 σ : Cal AD 130~420	152,892
No.9	1,860 \pm 60	-29.5	1,790 \pm 60	交点: Cal AD 240 1 σ : Cal AD 140~330 2 σ : Cal AD 90~400	152,893
No.10	1,850 \pm 60	-28.8	1,790 \pm 60	交点: Cal AD 240 1 σ : Cal AD 140~330 2 σ : Cal AD 90~400	152,894
No.11	1,880 \pm 70	-28.1	1,830 \pm 60	交点: Cal AD 220 1 σ : Cal AD 110~250 2 σ : Cal AD 60~350	152,895

※No.6 は欠番

津島遺跡出土の種実同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、津島遺跡1区で検出された井戸6の下層、池1の25・27層、池1の3箇所より採取された水洗選別済みの種実類である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態の特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

樹木6、草本7の計13が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

ハイノキ属 *Symplocos* Jacq. 果実 ハイノキ科

黒色で卵形を呈する。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 果実・穎 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

類は炭化しているため黒色である。扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。

アサ *Cannabis sativa* L. 種子 クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

カナムグラ *Humulus scandens* Merrill 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

キカラスウリ *Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* Kitam 種子 ウリ科

淡褐色で扁平楕円形を呈す。中央部がやや膨らみ、周辺はざらつく。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子・果皮 ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

果皮は木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。

藤下（1992）による長さ8.1mm以上の大粒種子（モモルディカ型）にあたる。

オナモミ *Xanthium strumarium* L. 果実 キク科

黒褐色で長楕円形を呈し、先端は2本の突起が伸びる。表面にかぎ状の突起が全体に分布する。

（2）種実群集の特徴

1) 井戸6下層

モモ、サクラ節サクラ属、カラスザンショウ、アサ、キカラスウリ、ヒョウタン類、ウリ類が検出された。また、魚骨が含まれていた。

2) 池1 25・27層

センダン、エゴノキ、ハイノキ属、カナムグラ、オナモミが検出された。

3) 池1

イネ、カナムグラ、ウリ類が検出された。イネは果実、穎共に炭化していた。

5. 所見

1) 井戸6下層

モモ、アサ、ヒョウタン類は栽培植物である。モモは中国原産で、日本では弥生時代以降の遺跡から普通に出土し、古くから栽培されていた果樹である。アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の畑作物である。茎皮の繊維は麻糸になり、種子は油を採ったり食用になる。ヒョウタン類は藤下がヒョウタン仲間とするもので、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。日本には縄文時代に伝播し、以後継続して出土する。

2) 池1 25・27層

エゴノキ属は、谷などの水際に生育する樹木である。センダンやハイノキ属は暖地の海岸沿いに生育する樹木である。カナムグラ、オナモミは、人為環境に生育する人里植物である。

3) 池1

イネ、ウリ類は栽培植物である。イネは炭化している状態で検出されたが、穎が残っていることから火を受けたとは考えにくい。ウリ類は縄文時代に伝播した外来の栽培植物であり、以後継続して出土する。

参考文献

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, p.494

南木睦彦 (1991) 栽培植物, 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.

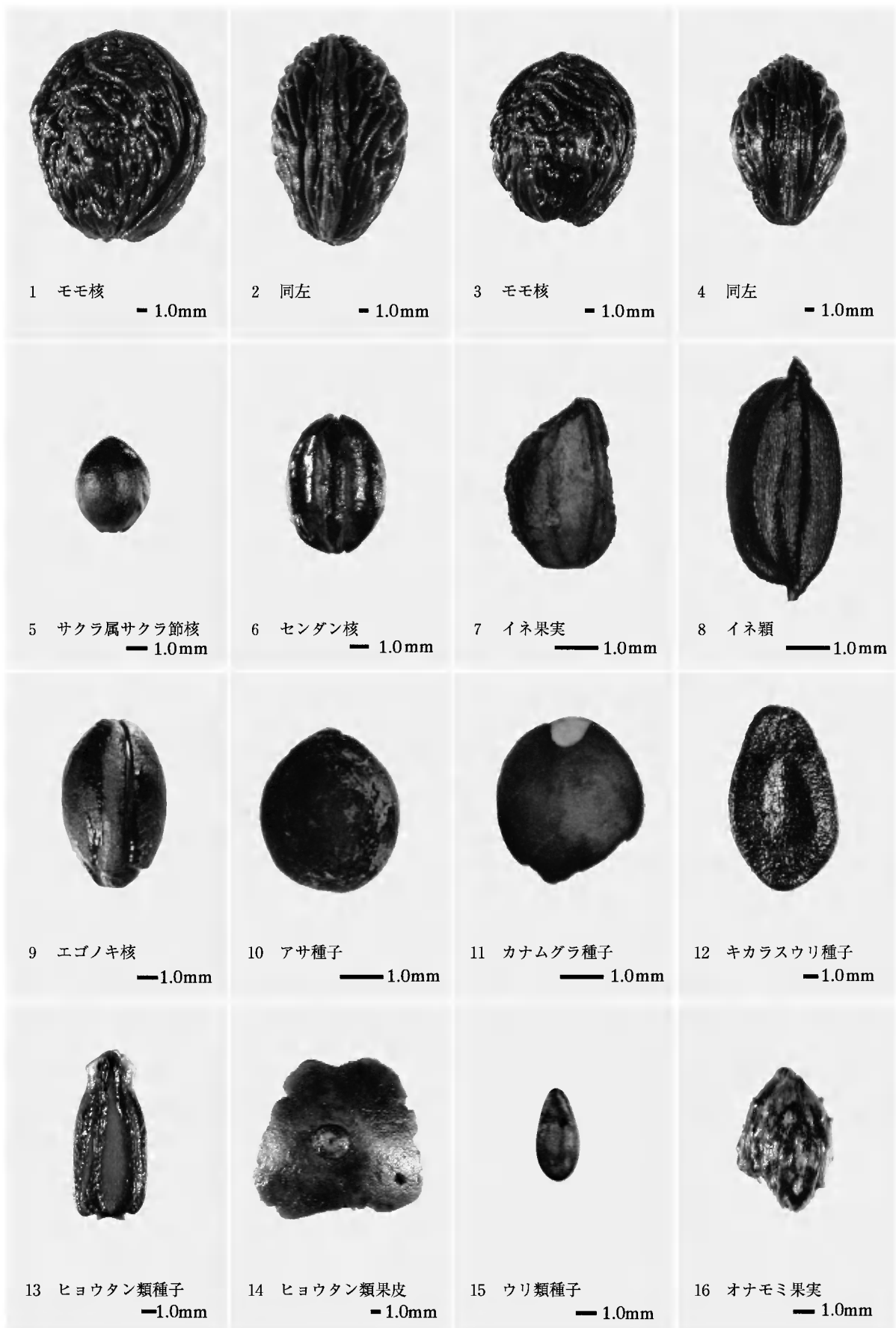
南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナルNo409, ニューサイエンス社, p.15-19.

表1 津島遺跡における種実同定結果

分類群		部位	1区		
学名	和名		井戸6下層	池125・27層	池1
Arbor	樹木				
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	5		
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i> .	サクラ属サクラ節	核	2		
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1		
<i>Melia azedarach</i> L. Var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	核		1	
<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	エゴノキ	核		1	
<i>Symplocos</i> Jacq.	ハイノキ属	果実		1	
Herb	草本				
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実			1
		穎			1
<i>Cannabis sativa</i> L.	アサ	種子	4		
<i>Humulus scandens</i> Merr.	カナムグラ	種子		8	1
<i>Trichosanthes Kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> Kitam	キカラスウリ	種子	2		
<i>Lagenaria siceraria</i> standl.	ヒョウタン類	種子	9		
		果皮	1		
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	5		6
<i>Xanthium strumarium</i> L.	オナモミ	果実		2	
Total	合計		29	11	9
Unknown	不明植物遺体		1	1	1
備考	魚骨		1	0	0

津島遺跡の種実



津島遺跡出土木製品の樹種鑑定

元興寺文化財研究所

樹種鑑定の概要

樹種の分類は、花、果実、葉など、種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は、種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する種を除き、同定できない場合がある。種の同定が困難な場合は、科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節（分類の大きい順）のいずれかで表した。

*科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節、種の分類は、主に原色日本植物図鑑（保育社）によった。

1. 切片作成

カミソリの刃で遺物をできるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柁目面（放射断面）の3方向の切片を正確に製作した。

2. 永久プレパラート製作

切片はサフランインで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（EUKITT）を用いて永久プレパラートを作成した。

3. 同定方法

針葉樹については、草材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し同定した。

4. 顕微鏡写真撮影

木口面は30倍、柁目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍、板目面は50倍で撮影した。

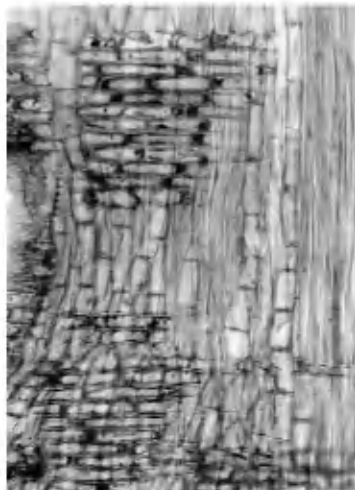
附編 自然科学的分野における分析・鑑定

掲載番号	鑑定番号	遺物名	出土遺構	時期	樹種名	備考
W 4	36	斧柄	河道1北岸	弥生後期	クスギ節	
W 7	18	斧柄	河道1北岸	弥生後期	クスギ節	クスギ節に属する樹種 クスギ、アベマキ等
W 9	24	斧柄	河道1北岸	弥生後期	スギ	
W12	45	柄	河道1北岸	弥生後期	イヌマキ	
W13	12	ナスビ形農耕具 (又鋏)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W16	102	鋏	河道1北岸	弥生後期	アカガシ	
W19	20	ナスビ形農耕具 (又鋏)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W20	19	ナスビ形農耕具 (又鋏)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W21	3	ナスビ形農耕具 (又鋏)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W22	30	ナスビ形農耕具 (又鋏)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W23	53-1	代掻き(台)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W23	53-2	代掻き(柄)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W23	53-3	代掻き(歯)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W26	38	鋤	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W28	39	掘棒	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W29	14	掘棒	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W31	10	掘棒	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W32	28	反柄	河道1北岸	弥生後期	バラ科	バラ科に属する樹種 カマツカ、ザイフリボク、オオウラジロノキ等
W36	15-1	柄	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W36	15-2	柄	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W39	13	堅杵	河道1北岸	弥生後期	ツバキ	
W40	42	堅杵	河道1北岸	弥生後期	ツバキ	
W45	9	編台目盛板	河道1北岸	弥生後期	ヒノキ	
W46	25	編台	河道1北岸	弥生後期	ヤマグワ	
W47	105	木錘	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W51	100	木錘	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W52	104	木錘	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W54	103	木錘	河道1北岸	弥生後期	ツゲ	
W55	106	木錘	河道1北岸	弥生後期	ヤマグワ	
W56	101	木錘	河道1北岸	弥生後期	イスノキ	
W60	41	櫛	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	
W63	79	網杵	河道1北岸	弥生後期	カヤ	
W65	1	把装具	河道1北岸	弥生後期	ムクノキ	
W67	2	鞘装具?	河道1北岸	弥生後期	ヒノキ	
W68	93	弓	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W70	5	弓?	河道1北岸	弥生後期	マテバシイ	
W71	60	弓?	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W72	46	小札	河道1北岸	弥生後期	スギ	
W73	86	小札	河道1北岸	弥生後期	コナラ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
W78	21	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W79	6	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W80	40	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W81	37	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W82	17	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W83	44	盾	河道1北岸	弥生後期	モミ	
W85	26	匙	河道1北岸	弥生後期	サカキ	
W88	35	杓子	河道1北岸	弥生後期	エノキ	
W89	98	容器	河道1北岸	弥生後期	ヒノキ	
W90	8	容器	河道1北岸	弥生後期	ヒノキ	
W91	7	容器	河道1北岸	弥生後期	スギ	
W93	29	木葉形木製品	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W94	31	木葉形木製品	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W95	23	木葉形木製品	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W97	16	木葉形木製品	河道1北岸	弥生後期	コナラ節またはクスギ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等 クスギ節に属する樹種 クスギ、アベマキ等
W101	34	槽	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W102	43	装飾板	河道1北岸	弥生後期	クスノキ	
W103	11	火きり白	河道1北岸	弥生後期	ヒメシヤラ	
W104	4	腰掛	河道1北岸	弥生後期	クスノキ	

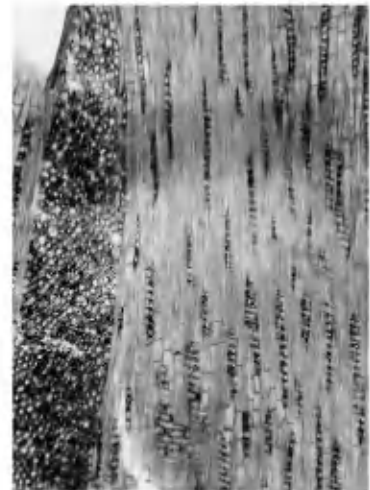
掲載番号	鑑定番号	遺物名	出土遺構	時期	樹種名	備考
W108	33	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W109	27-1	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W109	27-2	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W110	99	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W136	91	筋違い材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W155	66	柱	河道1北岸	弥生後期	針葉樹 (あて材)	傾斜地などで生育した木材で、偏心変更生長した部分があて材である。正常材と比べ構造が著しく異なり、樹種の識別は困難である。
W156	59	柱	河道1北岸	弥生後期	二葉松類	二葉松類に属する樹種 アカマツ、クロマツ等
W157	56	柱	河道1北岸	弥生後期	二葉松類	二葉松類に属する樹種 アカマツ、クロマツ等
W160	80	柱	河道1北岸	弥生後期	シャシャンボ	
W161	71	柱	河道1北岸	弥生後期	二葉松類	二葉松類に属する樹種 アカマツ、クロマツ等
W162	70	柱	河道1北岸	弥生後期	二葉松類	二葉松類に属する樹種 アカマツ、クロマツ等
W163	65	柱	河道1北岸	弥生後期	二葉松類	二葉松類に属する樹種 アカマツ、クロマツ等
W168	55	梯子	河道1北岸	弥生後期	クリ	
W169	62	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クリ	
W170	67	建築部材	河道1北岸	弥生後期	コナラ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
W171	69	建築部材	河道1北岸	弥生後期	コナラ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
W172	63	建築部材	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W173	57	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クリ	
W175	78	蹴放し	河道1北岸	弥生後期	ツブラジイ	
W176	81-1	栓付板(本体)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W177	81-2	栓付板(栓)	河道1北岸	弥生後期	サカキ	
W178	81-3	栓付板(栓)	河道1北岸	弥生後期	サカキ	
W179	54	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節またはコナラ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等 クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W180	72	建築部材	河道1北岸	弥生後期	コナラ節?	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
W181	87	建築部材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W182	73	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W184	61	建築部材	河道1北岸	弥生後期	ヒサカキ	
W185	58	建築部材	河道1北岸	弥生後期	ヒサカキ	
W186	68	建築部材	河道1北岸	弥生後期	ヒサカキ	
W194	84	建築部材	河道1北岸	弥生後期	ヒメシャラ	
W195	77	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W196	83	建築部材	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
W199	74	建築部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W215	32	建築部材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W216	22	建築部材	河道1北岸	弥生後期	ウリカエデ	
W221	85	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W222	75	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W224	76	用途不明部材	河道1北岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W227	82	粗加工材	河道1北岸	弥生後期	ヤマグワ	
W260	47-1	代掻き(本体)	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W260	47-2	代掻き(歯)	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W260	47-3	代掻き(柄)	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W262	52	鋤	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W265	48	掘棒	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W267	49	反柄	河道1南岸	弥生後期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W282	51	權	河道1南岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W319	96	柱	竪穴住居51	古墳中期	クヌギ節	クヌギ節に属する樹種 クヌギ、アベマキ等
W320	94	柱	竪穴住居51	古墳中期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
W321	95	支脚	井戸6	古墳中期	スギ	
構造材1	64-1	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
構造材1	64-2	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
構造材1	64-3	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
構造材2	97-1	構造材	河道1北岸	弥生後期	コナラ節	コナラ節に属する樹種 カシワ、ミズナラ、コナラ等
構造材2	97-2	構造材	河道1北岸	弥生後期	ブナ科	
構造材6	88	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
構造材6	89	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
構造材6	90	棒状(スダレ材)	河道1北岸	弥生後期	スダジイ	
構造材6	92	みかん割材	河道1北岸	弥生後期	アカガシ亜属	アカガシ亜属に属する樹種 アカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシ等
非掲載	50	把手付部材	河道1	古墳	イマヌキ?	



木口面 30倍

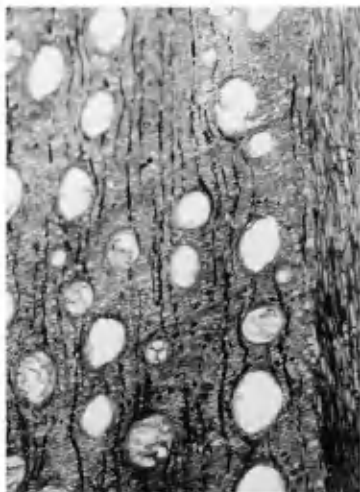


柁目面 100倍



板目面 50倍

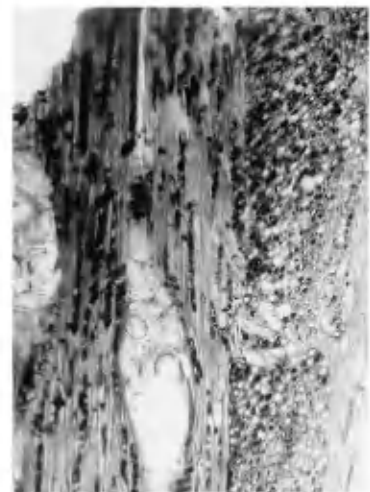
W 4 (36) 斧柄 クヌギ節



木口面 30倍

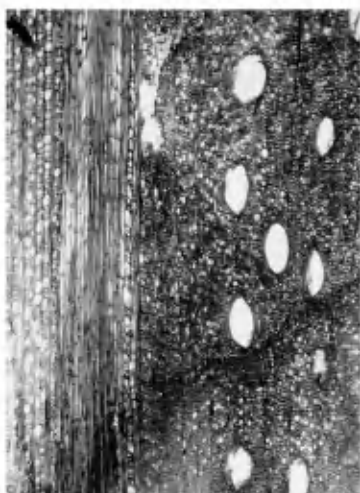


柁目面 100倍

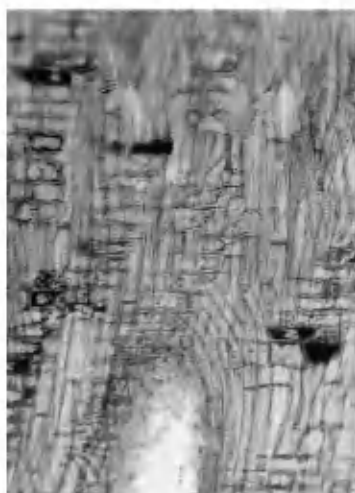


板目面 50倍

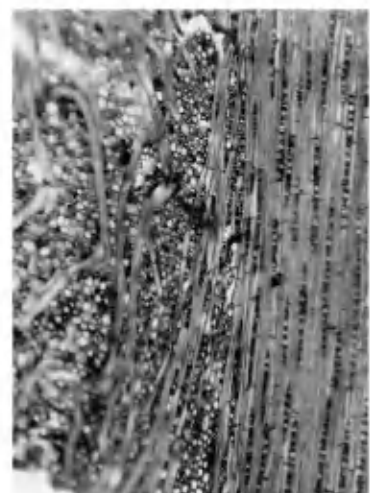
W13 (12) ナスビ形農耕具 (又鋏) アカガシ亜属



木口面 30倍

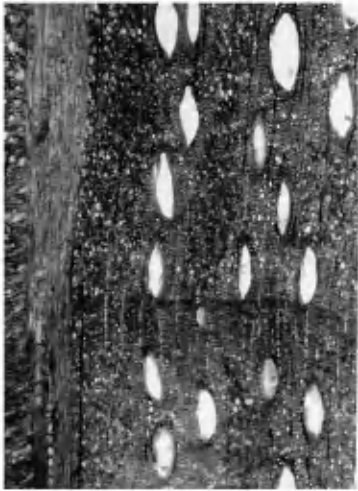


柁目面 100倍



板目面 50倍

W19 (20) ナスビ形農耕具 (又鋏) アカガシ亜属



木口面 30倍

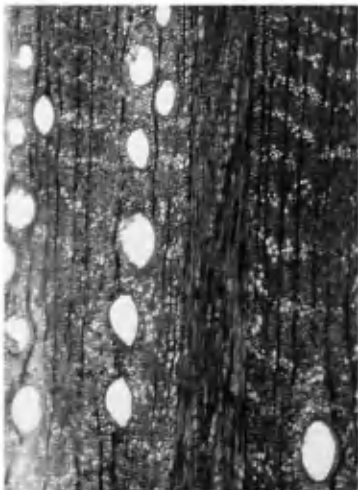


杵目面 100倍



板目面 50倍

W20 (19) ナスビ形農耕具 (又鍬) アカガシ亜属



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

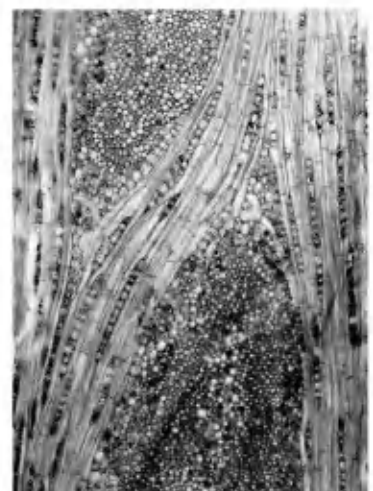
W22 (30) ナスビ形農耕具 (又鍬) アカガシ亜属



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

W23 (53-1) 代掻き (台) アカガシ亜属



木口面 30倍
W23 (53-2) 代掻き (柄)



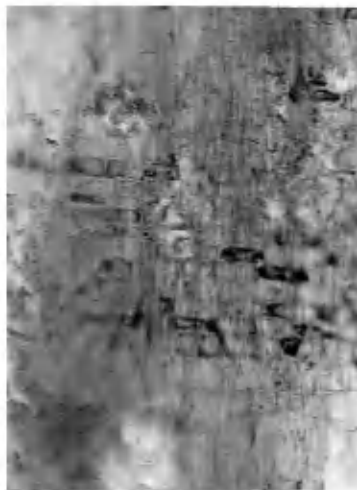
柁目面 100倍
アカガシ亜属



板目面 50倍



木口面 30倍
W23 (53-3) 代掻き (歯)



柁目面 100倍
アカガシ亜属



板目面 50倍



木口面 30倍
W26 (38) 鋤



柁目面 100倍
アカガシ亜属



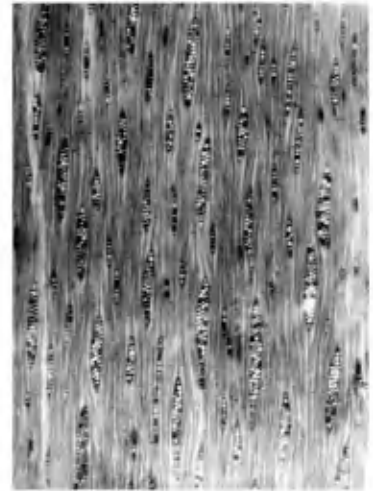
板目面 50倍



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

W32 (28) 反柄 バラ科



木口面 30倍



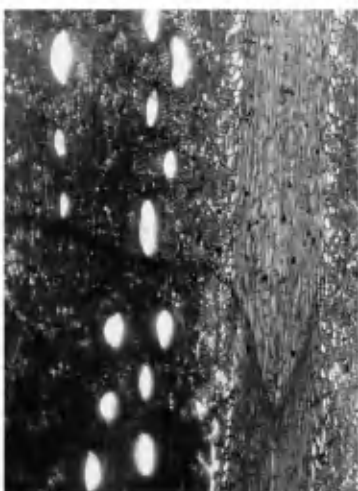
杵目面 200倍



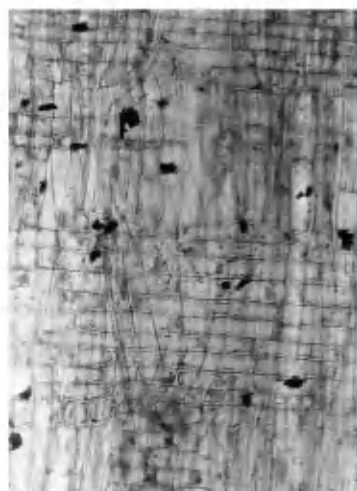
板目面 50倍

W45 (9) 編台目盛板

ヒノキ



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

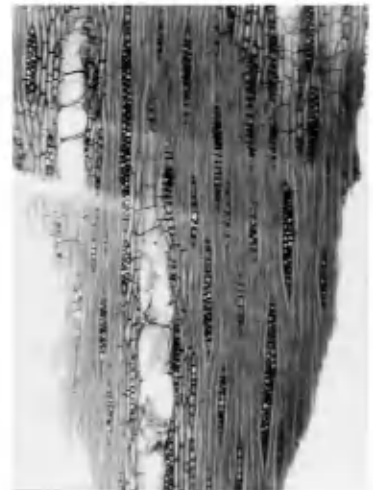
W60 (41) 襷 アカガシ亜属



木口面 30倍



柁目面 100倍



板目面 50倍

W65 (1) 把装具 ムクノキ



木口面 30倍

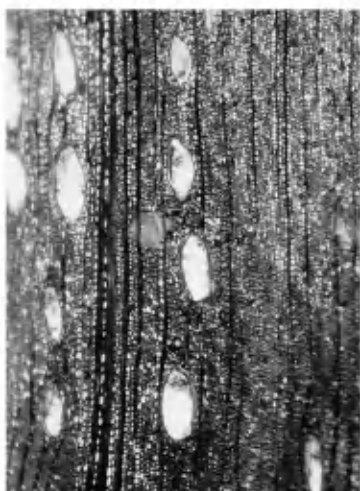


柁目面 200倍

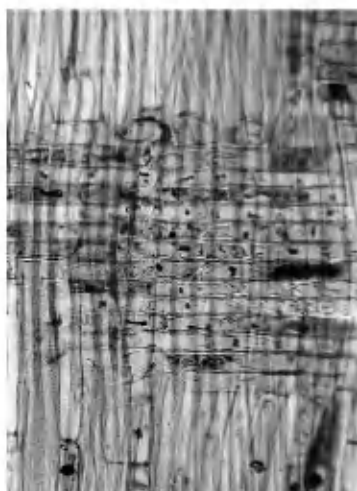


板目面 50倍

W67 (2) 鞘装具? ヒノキ



木口面 30倍



柁目面 100倍

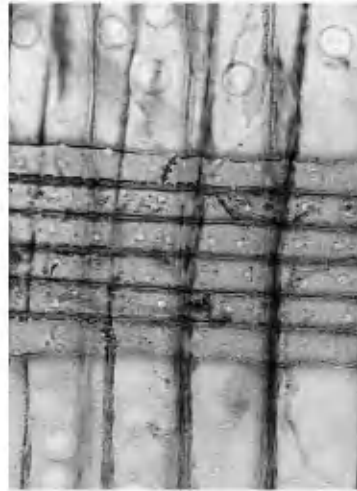


板目面 50倍

W70 (5) 弓? マテバシイ



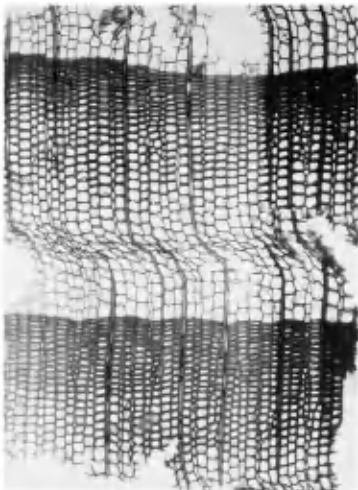
木口面 30倍
W80 (40) 盾 モミ



柁目面 200倍



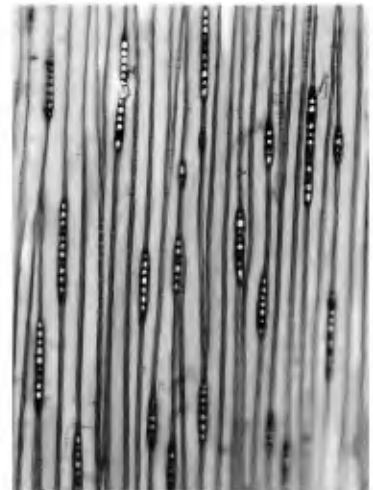
板目面 50倍



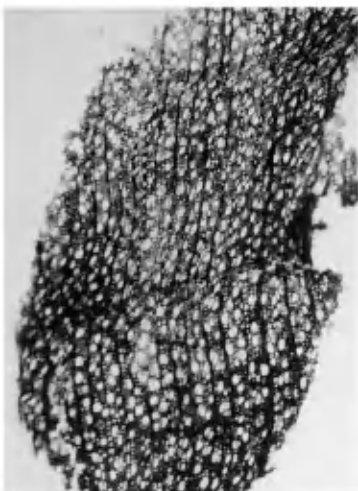
木口面 30倍
W82 (17) 盾 モミ



柁目面 200倍



板目面 50倍



木口面 30倍
W85 (26) 匙 サカキ



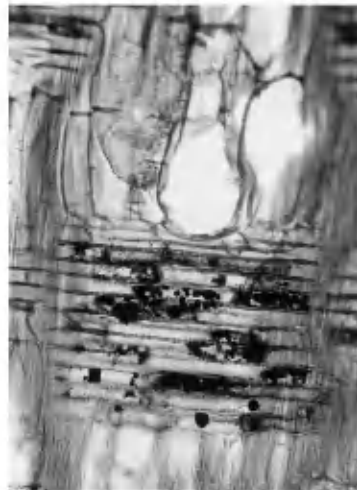
柁目面 100倍



板目面 50倍



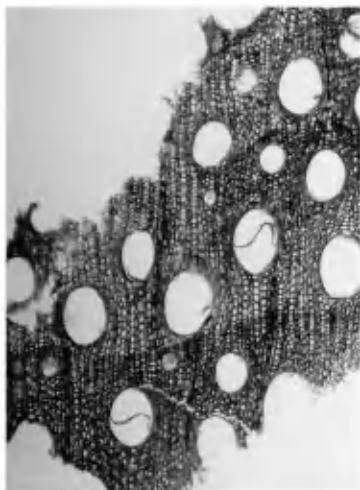
木口面 30倍
W102 (43) 装飾板



柁目面 100倍
クスノキ



板目面 50倍



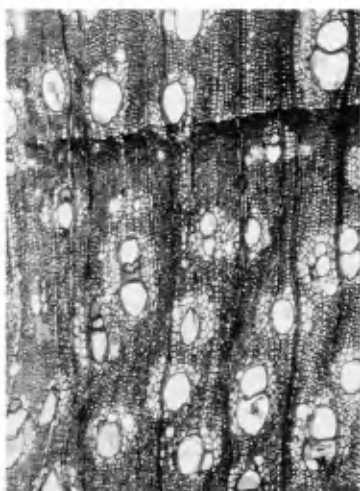
木口面 30倍
W103 (11) 火きり白



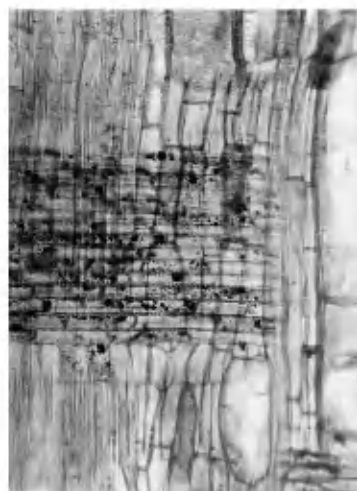
柁目面 100倍
ヒメシャラ



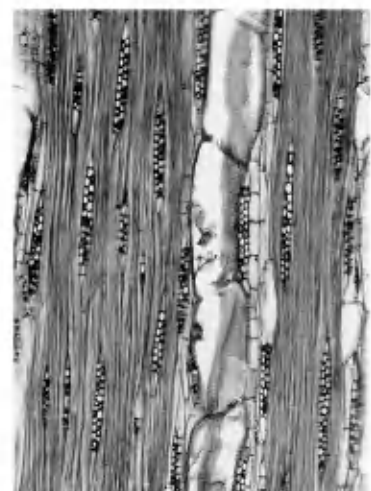
板目面 50倍



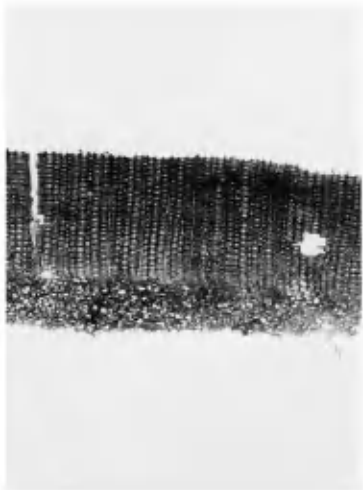
木口面 30倍
W104 (4) 腰掛



柁目面 100倍



板目面 50倍



木口面 30倍

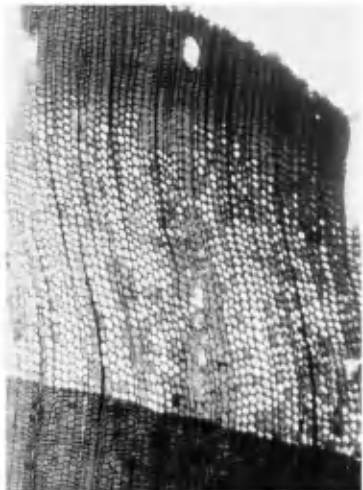


柁目面 200倍

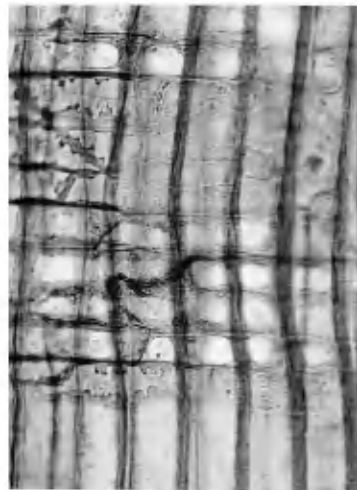


板目面 50倍

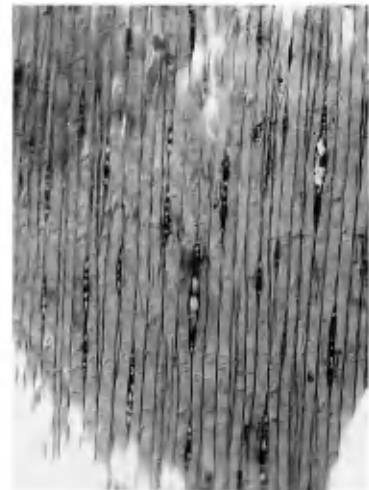
W155 (66) 柱 針葉樹 (あて材)



木口面 30倍

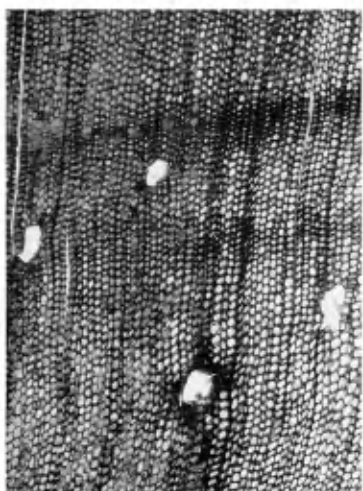


柁目面 200倍



板目面 50倍

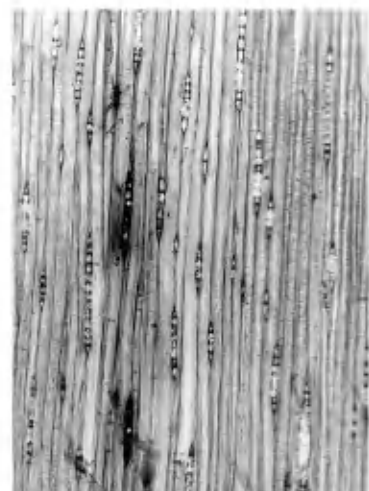
W156 (59) 柱 二葉松類



木口面 30倍

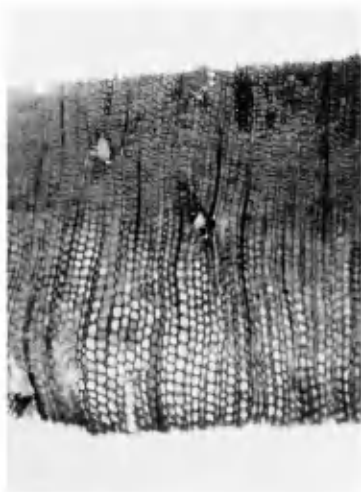


柁目面 200倍



板目面 50倍

W157 (56) 柱 二葉松類



木口面 30倍

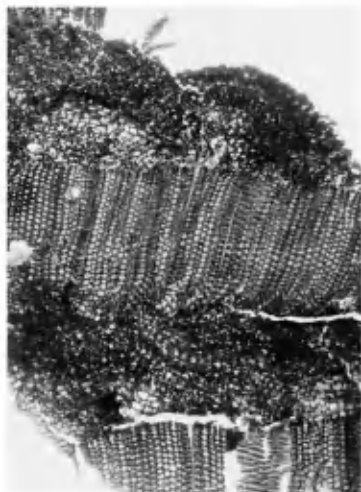


杙目面 200倍



板目面 50倍

W161 (71) 柱 二葉松類



木口面 30倍

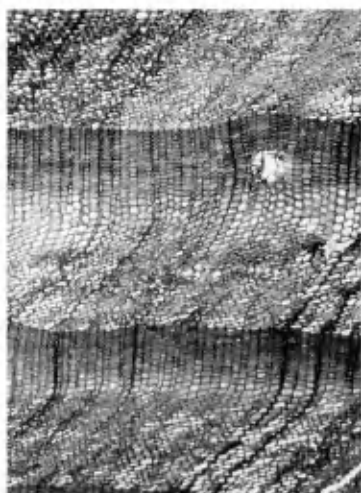


杙目面 200倍



板目面 50倍

W162 (70) 柱 二葉松類



木口面 30倍

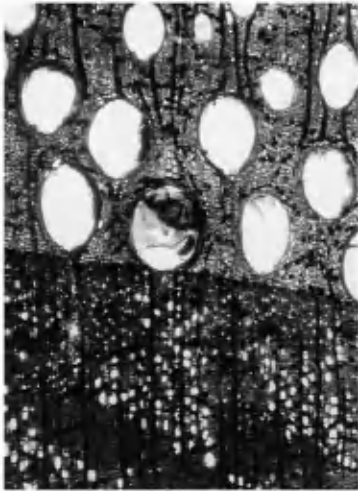


杙目面 200倍



板目面 50倍

W163 (65) 柱 二葉松類



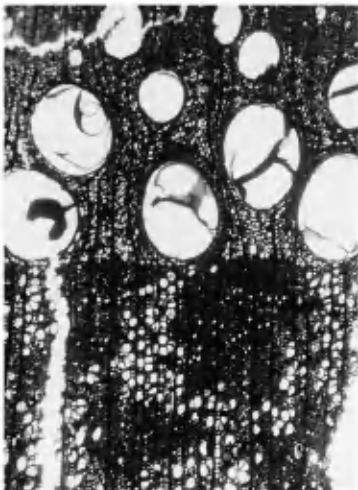
木口面 30倍
W168 (55) 梯子 クリ



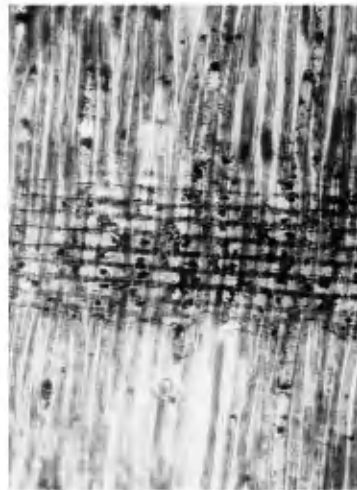
杙目面 100倍



板目面 50倍



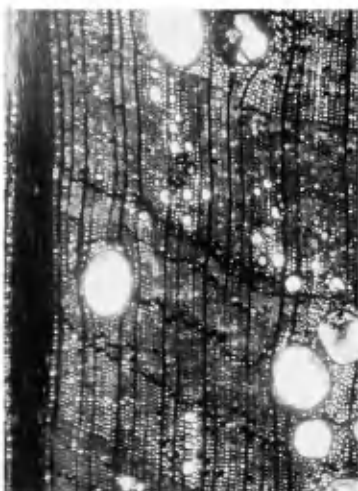
木口面 30倍
W169 (62) 建築部材



杙目面 100倍
クリ



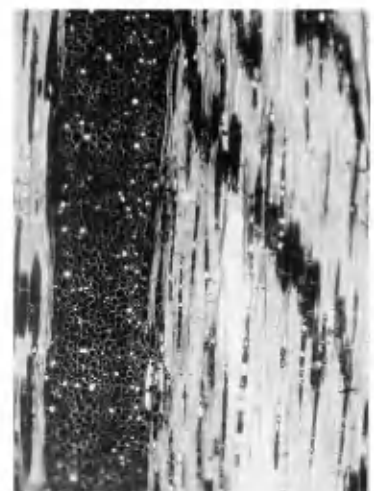
板目面 50倍



木口面 30倍
W170 (67) 建築部材



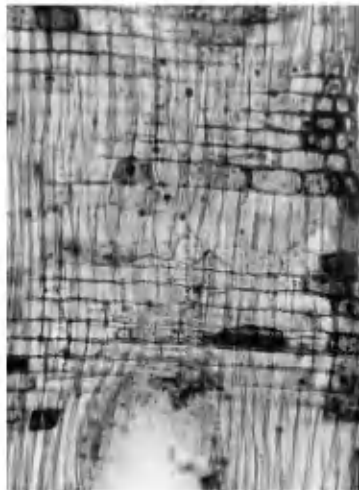
杙目面 100倍
クナラ節



板目面 50倍



木口面 30倍
W171 (69) 建築部材



柁目面 100倍
コナラ節



板目面 50倍



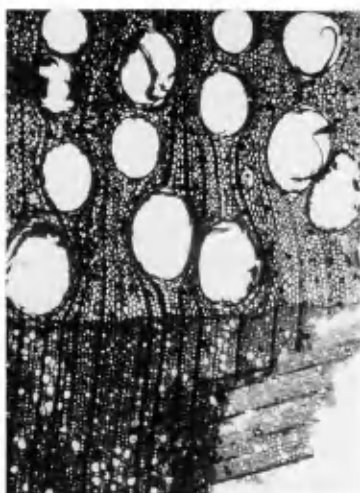
木口面 30倍
W172 (63) 建築部材



柁目面 100倍
スダジイ



板目面 50倍



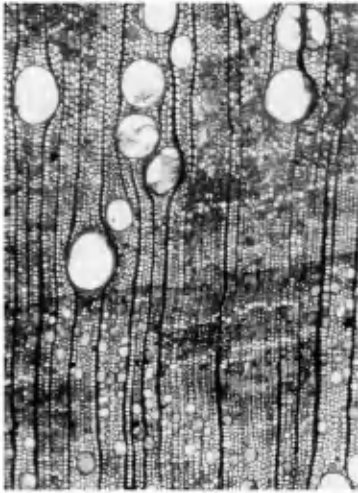
木口面 30倍
W173 (57) 建築部材



柁目面 100倍
クリ



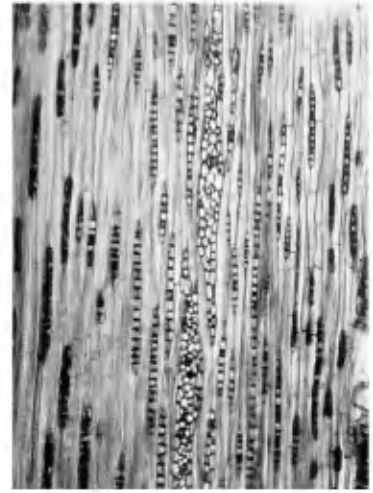
板目面 50倍



木口面 30倍

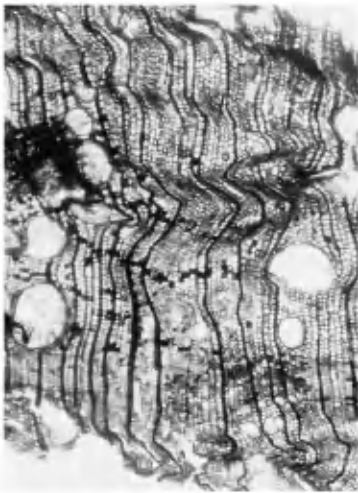


杵目面 100倍



板目面 50倍

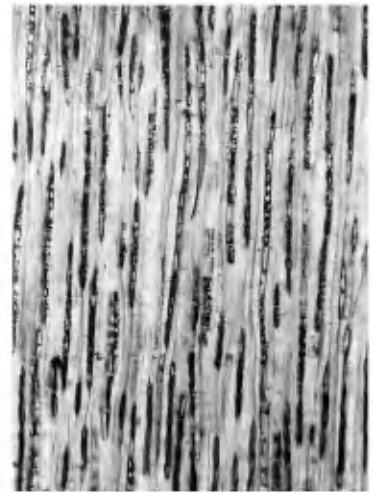
W175 (78) 蹴放し ツブラジイ



木口面 30倍

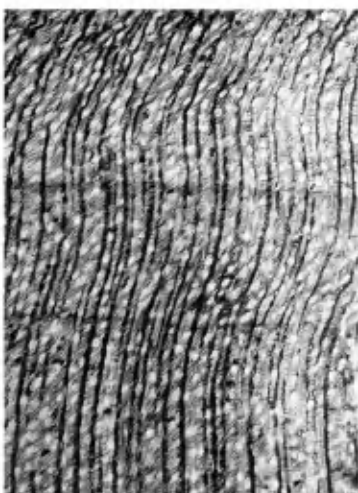


杵目面 100倍



板目面 50倍

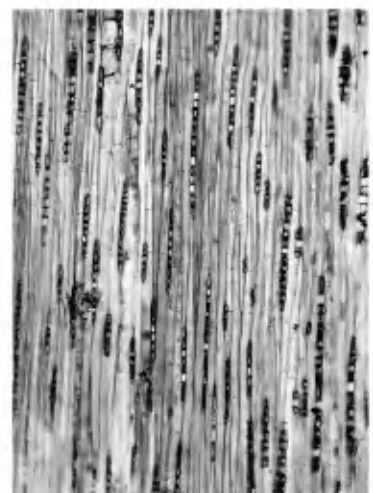
W176 (81-1) 栓付板 (本体) スダジイ



木口面 30倍

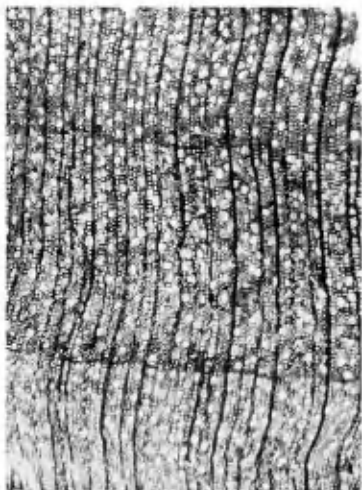


杵目面 100倍



板目面 50倍

W177 (81-2) 栓付板 (栓) サカキ



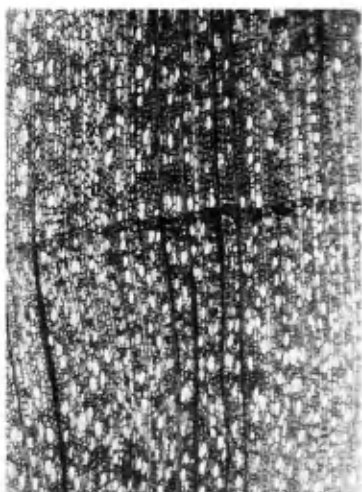
木口面 30倍
W178 (81-3) 栓付板 (栓)



柁目面 100倍
サカキ



板目面 50倍



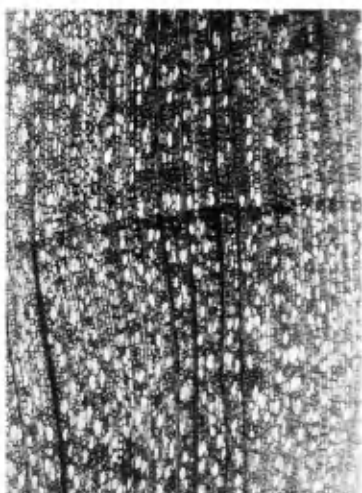
木口面 30倍
W184 (61) 建築部材



柁目面 100倍
ヒサカキ



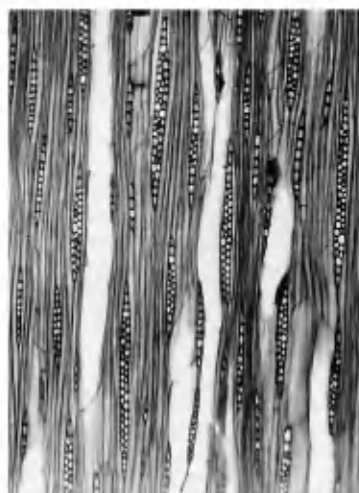
板目面 50倍



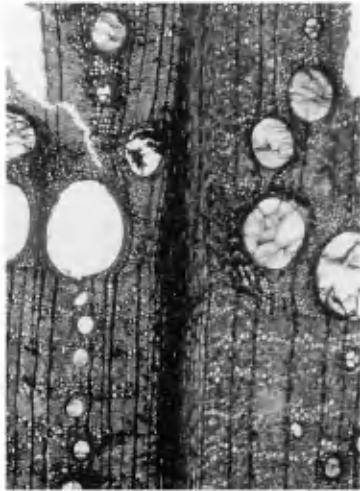
木口面 30倍
W216 (22) 建築部材



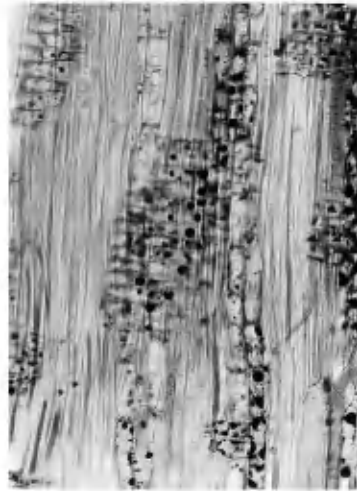
柁目面 100倍
ウリカエデ



板目面 50倍



木口面 30倍
W221 (85) 用途不明部材



杵目面 100倍
クヌギ節



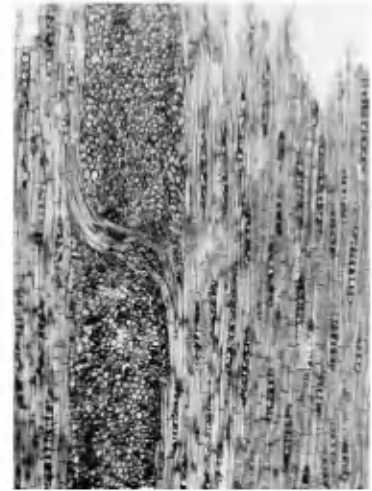
板目面 50倍



木口面 30倍
W222 (75) 用途不明部材



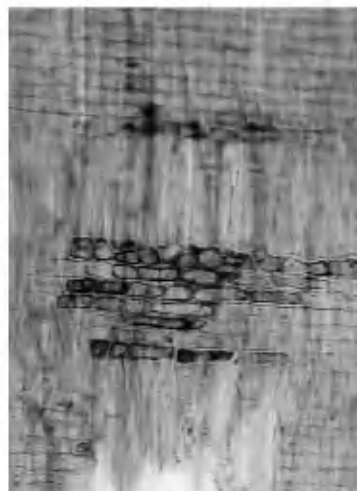
杵目面 100倍
クヌギ節



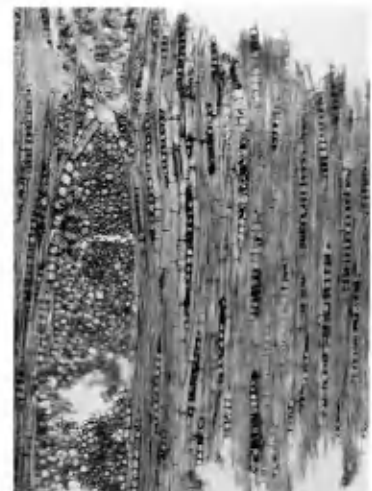
板目面 50倍



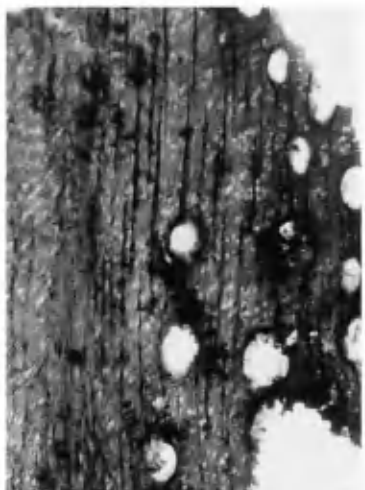
木口面 30倍
W260 (47-1) 代掻き (本体)



杵目面 100倍
アカガシ亜属



板目面 50倍



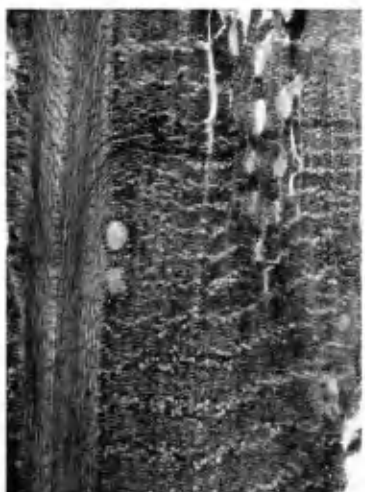
木口面 30倍
W260 (47-2) 代掻き (歯)



柁目面 100倍
アカガシ亜属



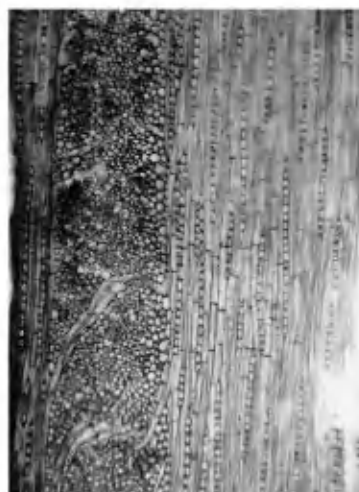
板目面 50倍



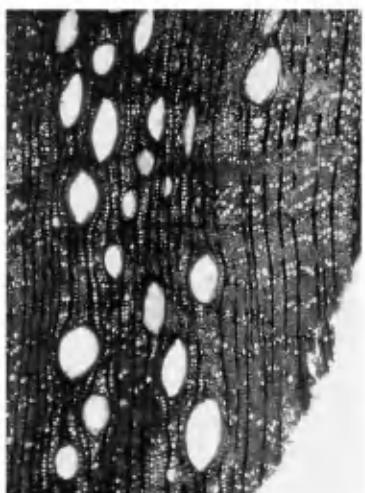
木口面 30倍
W260 (47-3) 代掻き (柄)



柁目面 100倍
アカガシ亜属



板目面 50倍



木口面 30倍
W262 (52) 鋤 アカガシ亜属



柁目面 100倍



板目面 50倍



木口面 30倍

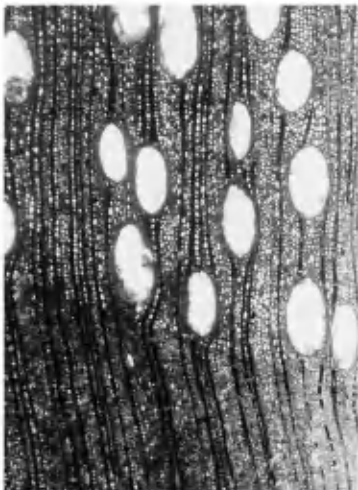


杙目面 100倍



板目面 50倍

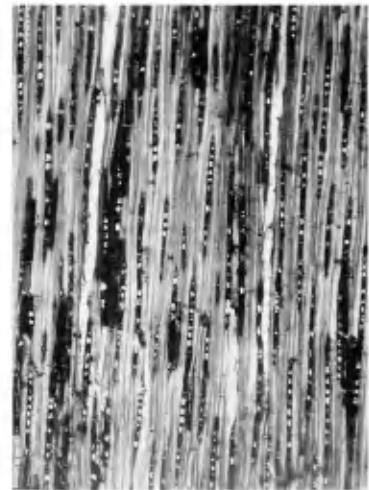
W265 (48) 掘棒 アカガシ亜属



木口面 30倍

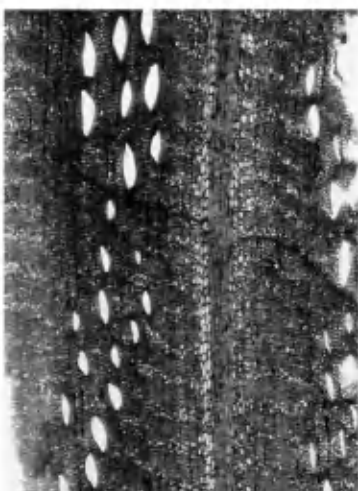


杙目面 100倍

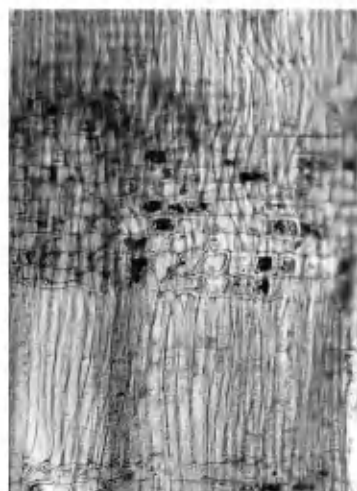


板目面 50倍

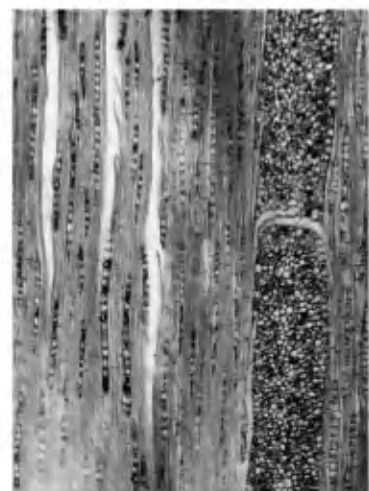
W267 (49) 反柄 クヌギ節



木口面 30倍



杙目面 100倍



板目面 50倍

W282 (51) 櫂 アカガシ亜属



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

構造材 1 (64-1) 棒状 (スダレ材) スダジイ



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

構造材 1 (64-2) 棒状 (スダレ材) スダジイ



木口面 30倍



杵目面 100倍



板目面 50倍

構造材 1 (64-3) 棒状 (スダレ材) スダジイ

津島遺跡出土建築材の復原

東北芸術工科大学 宮本 長二郎

1. はじめに

津島遺跡の弥生時代後期の旧河川跡から、多数の高床建築部材が出土した。柱・桁・梁・貫・台輪・蹴放・梯子・垂木・簾状材などがある。流失部材も多いが、同一建物と考えられる部材が多く、個々の部材を考察してのち、高床建築の復原を行う。

2. 柱材

柱材はW155～W167（以下Wを除く）の13例である。うち158・159は2 m前後の長材であるが、仕口のない折損材で、柱材でない可能性もある。164～167は長さ40～70cmの断片材で、貫穴や柱頭枘をもつことから柱材に含めたが説明は省略する。

155・156は柱頭の片側に寄せて角枘を造出し、柱頭から下方111cmに15×4 cmの貫穴をもつ点で共通することから両材は同一建物とみられるが、155は柱頭と貫穴間をほぼ3等分する位置に径約5 cmの角枘穴があり、156にはない。貫穴から下方は両材とも実測図では欠損しているが、遺構検出時の155材は230cm、156は290cmであったことから、155は地上高、156は掘立部を含めた柱長さであると想定できる。貫穴を床大引とみなすと、この建物は掘立深さ約60cm、床高約120cm、床上柱高110cmとなる。

大引貫穴の高14～15cm、幅3～4 cmは、169の断面と近似して、同材がこの柱材に伴う大引貫と考えられる。なお、155の枘穴は、後述の161・162と同様の形式から、隅柱の間渡仕口であることを示しているが、156には163のような隅柱枘穴と対応する間渡仕口がない。163は桁行中柱で、柱側面を欠込んで間渡を引通し、156は間渡材を柱側面に添えて引通す形式である。

157は全長約272cmで、下端から2 m余りに枝を残して、枝上部の柱側面を浅く繰り込んで、床大引受けの仕口とする分枝式高床建築の柱である。枝から上端部までは約65cmで、上端部から約10cm下方に155・161・162の間渡枘穴と同形式の枘穴がある。上端部には桁受けの仕口がないこと、および床上部の柱高が低いことから、柱頭部を切断したものと思われ、間渡枘穴を床上柱中央に設けたとすれば、床上柱高は1 m前後に想定される。157の柱径（約9 cm）は細く、床軸部の簡略な分枝式は、155・161材の貫大引式高床建築より格式の低い機能を示すものと思われる。161・162・163は155・156材と同形式の貫大引式高床建築の柱材で、3材ともに貫穴上端から柱頭までほぼ等しく1.04mであり、その側面2か所に設ける間渡枘穴間隔もほぼ等しいことから、これら3材は同一建物部材と認定できる。柱頭に角枘（方3～4 cm、高5 cm）を設けて桁を受ける。床大引貫穴の下端部から下は欠損する。161・163の貫穴幅は7 cm、162は4 cmと異なり、貫穴残存高は約9 cmである。

160は上端部が貫穴部で折損して、貫穴の一側面が残存する。柱径や貫穴幅は161・163と類似して同一建物の床下部柱と思われる。

155・161・162の床上部2か所の間渡仕口は枘穴ではなく、間渡材を外側から嵌め込む形式である。3材とも隅柱で、桁行中柱156・163は間渡を柱側面に添える形式である。間渡材と柱は縄で結えずに、台輪材からの想定では間渡材の外側に縦木舞と間柱を配して、間渡材を固定する形式である。

236～246・254・255は柱頭を又木として桁・梁を受ける又柱で、下端部は杭状の打込柱である。完

形材は全長145～180cm (241～243) と、260～307cm (244・254・255) に分かれ、竪穴住居の支柱のほか、後者はその高さから平屋建物の側柱や、妻側棟持柱の可能性はある。

3. 横架材一貫・台輪一

169は全長273.5cm、径13.7×4.0cmの完形板材で、155・156・160の貫穴と断面が一致することから大引貫材と認められる初めての出土例である。

170～172は同形式の板材で、3材とも一端部が折損する。側柱（円柱）の側面に添える形式の軸部材で、側面の半円線形を側柱に胴付きとする。材端部を円弧とする特異な形式で他に類例はなく、台輪材の異形式とした。

170は台輪中央に扉口方立柱の角柄穴2か所と、方立柱・側柱間に木舞穴3か所があり、折損端部側には2か所の木舞穴がある。扉口中央を柱間心とすると、柱間寸法は約240cmとなる。方立柱柄穴間の中央側面にある幅15cmの角欠きは梯子受けで、梯子材168の幅とも一致する。

172は残存長240cmであったが、実測図は材端部分から柱間中央の間柱柄穴の側面までの半分のみ示している。この間柱柄穴と側柱半円線形の心々間隔は120cmで、柱間寸法は240cmとなり、170材と対応する台輪材である。間柱と側柱の間は5か所に木舞穴がある。

171は2か所の半円線形（柱間190cm）間の中央に間柱柄穴と、8か所に木舞穴がある。171は柱間寸法が170・172より狭い桁行2間の台輪材で、170・172は梁行1間の妻側台輪材である。

台輪材の側柱・間柱・木舞仕口の位置関係から壁の形式を想定すると、木舞穴は外面を側柱外面と揃え、内面を間柱柄穴内面と揃えている。つまり、木舞の内側に間渡材を引通し、外側は間渡材の位置に、外側から縦木舞を挟み固定する押縁を配し、木舞外面より外に径の半分が張出す間柱は、押縁を引通すために外面を欠込み、押縁の端は隅柱外面で直交する押縁と結び合わせる。このような形式から、間柱径は柄穴径（6×5cm）と同径角材であったと考えられる。

但し、170の扉口柄穴（径5×4cm）は径が間柱より小さく、方立柱の柄穴である。蹴放材175は170より間口が広いが、同形式の蹴放を方立柱間に建込んだものと考えられる。方立柱径は175の輪竈込仕口径（約9cm）と同じであろう。

4. 扉口材

175は蹴放材で断面22.2×7.2cmの板目材である。両端部の欠込仕口は方立柱に輪竈込む形式を示し、方立柱内側には幅約18cm、厚3cmの小脇板を受ける板溝がある。小脇板間隔は約33cmで、一方の小脇板に接して扉軸穴と、他方の小脇板側に扉止めの猿穴がある。猿穴と小脇板溝の間隔約3cmは扉板厚を示し、片開扉板の幅は45cm程と推定される。

実測図からの判断であるが、小脇板を境にして軸穴側に工具痕が多いことと、軸穴の反対側中央に梯子受けと思われる荒れた部分があることから内開戸と認められる。したがって戸締具「猿」の存在は、屋内を人が使う空間であることを示している。

176は65.0×17.9×0.8cmの薄板材で、両端寄りに鼻栓孔付きの栓177・178を伴う角穴がある。角穴の内法間隔は40cm、栓頭と鼻栓孔の間隔は約2.5cmである。板材の一側面中央には幅3cmの浅い弧状線形がある。長さ65cmは175の方立柱内法間隔（68cm）と、栓外法間隔（46cm）は扉幅とほぼ等しいことから、176は扉口の上部または下部の小脇板に添えて栓で留めたものと考えられる。但し、この薄板厚を含めた鼻栓までの厚さは、175の小脇板厚と等しいことから、小脇板を欠込んで176を嵌め込み、表面を揃えたものと考えられる。

弧状線形は、上部材であれば下向きに、下部材であれば下向きに設置したものと考えられ、意匠的には上部材とみるのが妥当であるが、4～5世紀代の家形埴輪の出入口を表現する形式に、その下端中央を弧状に線る例が多いことから、下部材と考えられる。機能的には扉下部の隙間を防ぐ縦割を果たすが、その形状は家形埴輪が示すように豪族居館を象徴する装飾的役割をもつものと思われる。

5. 横架材一桁・根太一

179～182は木舞穴をもつ丸太材を転用した板材・半截材で、183は木舞穴付き丸太材である。径は5.4～9.4cmと細く、182・183材の端部は189～201と同様の頭部線形がある。181・182の木舞穴間隔は台輪材と一致することから、台輪と対応する桁材と考えられる。

184～186は端部寄りの底面に欠込仕口をもつ丸太材の上・下面を削って板材に転用したものである。梁材としては径が細過ぎること、欠込幅は大貫169の幅と等しいことから根太材と考えられる。

6. 壁材

構造材1～8は、棒状材の組み合わせから3種の形式に分かれる。1・7は棒を密に並べて横木と組合せたもの、3は棒を簾状に組合せたもの、4～6・8は格子状に組む草壁木舞とする形式が考えられる。

構造材1は、縦材の多くは分断されて残存するが、最長180cmあり、横木は180cm前後の長さで、30～35cm間隔に6～7本を配り、ほぼ正方形の壁面を造ったものと考えられる。

草壁木舞とした構造材も、8を除いて方180cm前後の壁面を形成し、木舞間隔は30～40cmである。

6・8材に用いている斜材は新潟県青田遺跡出土草壁材（縄文晩期末）にも認められるが（「川辺の縄文集落」新潟県教育委員会、2002年）、構造材としての筋交とは異なる性格をもつものと思われる。構造材3は、いわゆる有頭棒に造られ、187～201と同種のを簾状に転用したと思われ、建築材とは確定し難い。

構造材を建築材と仮定して、簀子壁と草壁の2種の壁体を想定したが、いずれもその高さから、高床建築ではなく平屋建物の壁体となる。但し、この2種ともに出土柱材や台輪材による高床建築の壁体に適用できる形式である。

7. 垂木材

有頭棒には頭部を両端に持つ例（194・195・196・199）と、一端部に頭線形とは別に近接して欠込みをもつ例（192・197・198・200・201）がある。前者は建築材ではなく、後者の欠込みは軒先の茅負を受ける垂木材と考えられる。但し、最長（309.5cm）の200は頭部線形がなく、両端部側面に欠込み仕口をもつ異形式で用途は明らかでない。

8. まとめ

以上の建築部材は、2～3棟分が集中して出土した状況を示し、全ての部材は揃わないが、高床建築の柱・台輪・貫・桁・梁・扉口材・垂木・壁材などの主要材が揃う。下図はこれらの部材の寸法・形状に倣って復元したものである。

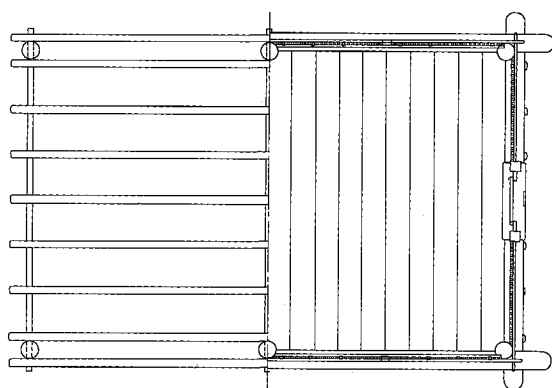
1棟分の建築部材がこれ程まとまって出土した例は他になく珍しいが、さらに、床を受ける軸部形式や壁木舞の形式が、柱や台輪の柄穴等から具体的に明らかになったことも稀有な例といえる。

特に注目すべき点は、台輪材と貫である。側柱に添える形式は台輪とは言えないが、壁や間柱・方立柱を受ける機能と、板状断面は弥生時代以後に一般的な台輪形式を踏襲している。貫の出土例としては2例目である。この貫は梁行に貫通して根太を受ける大引貫で、軸部形式としては柱・台輪との

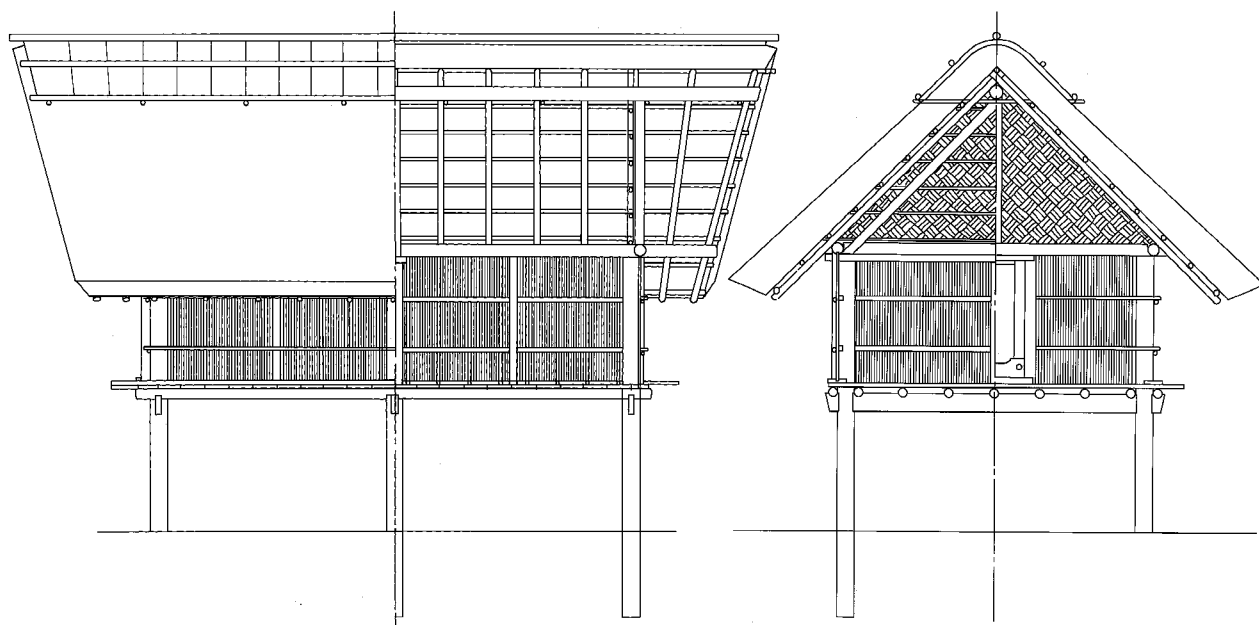
セット関係から、大引貫の存在を実証するはじめての出土例である。

壁材は高床建築に伴うものではないが、棒簀子壁・草壁の両形式とも出土台輪に適用可能で、前者を採用した。

復原した高床建築は、出入口の構えは格式高く、内側から施錠する形式は人が屋内に住むことを示す。草壁であれば日常的な住まいとなるが、棒簀子壁は特殊な用途又は夏向き住居が考えられる。いずれにしても、小規模ながら高度な建築技術を用いた形式は、拠点集落の首長に関わる住居・祭殿であった可能性を示している。



床伏図・上層平面図 (1/60)



桁行断面・側立面図 (1/60)

梁行断面・正立面図 (1/60)

津島遺跡出土の弥生時代歯の鑑別

岡山大学名誉教授 小田嶋 梧郎

平成13年7月17日、岡山県古代吉備文化財センターから、津島遺跡出土歯の検索鑑別依頼があり、同月26日、水洗後の歯種並びに歯列の鑑別を開始した結果を報告する。出土状態は墓壙並びに人骨の風化が著しいこともあったというが、歯の保存状態は比較的良好で、16個の個体永久歯が鑑別の対象となった。

検査資料の個体永久歯は、咬合臼磨運動による咬合面の咬耗が強度で、しかも歯冠部の計測値などから推測して40歳代の男性歯と予測した。

歯種、上下、順位、顎側などの判別ができたのは下表の歯列に属する16個の永久歯である。

右 側								左 側							
⑧	⑦	⑥	○	④	③	②	○	○	○	○	○	○	○	⑦	○
○	⑦	⑥	⑤	④	③	○	○	○	○	③	④	⑤	⑥	○	○

決め手になる各歯の特徴によって、推定できた歯の鑑別記録を記述すれば、

(1) 右上顎側切歯 (2)

歯冠の長さ(欠損部分を含めた推測値)は9.4mm、歯冠の幅7.4mm、歯冠の厚さ6.0mmで、歯冠の外形において、唇面を囲む4縁の彎曲が中切歯よりも著明で、遠心切縁隅角が特に鈍円化した隅角徴をしめし、歯冠全体が丸みを帯びている(図1)。唇面上に僅かに2本の縦溝(近心唇面溝・遠心唇面溝)と3本の隆線(近心唇面隆線・中央唇面隆線・遠心唇面隆線)がみられる。

歯冠の舌面観で、その外形は三角形をなし、辺縁稜の發育もよい。なお、切縁に3個の切縁結節が若年者にみられるのが基本型であるが、本例は切縁中央部の咬耗が著明で結節はみられない。

(2) 右・左下顎犬歯 (3)・(3)

下顎犬歯の外形は上顎犬歯とはほぼ同型であるが、詳細に観察すると差異がある。すなわち、上顎犬歯に比べて、歯冠の幅が短く(0.7mm)、歯冠の各隆線の發育が悪い点である。近心切縁は遠心切縁より短く、近・遠心切縁稜に囲まれた中央舌面隆線によって2分されるが、平坦であることなどから判別した(図2)。

(3) 右上顎犬歯 (3)

歯冠唇面2/3欠損と、尖頭および舌面咬耗強く、判別困難であるがため、下顎犬歯の鑑別後に計測した。歯冠の幅8.0mm、短い近心切縁と長い遠心切縁との傾斜は後者が前者より強いため、近心切縁隅角と遠心切縁隅角はともに鈍角をなすが、後者の角が大きく、丸みを帯びることなどから右上顎犬歯と判別した。

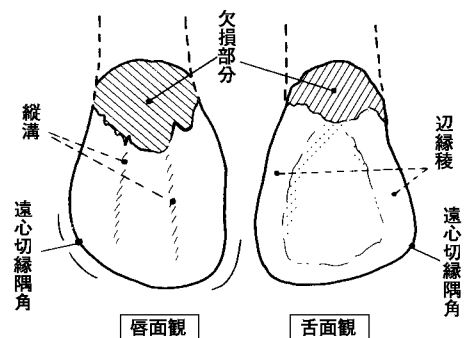


図1 右上顎側切歯 (2)

(4) 右上顎第一小白歯 (4)

頬側咬頭と舌側咬頭の2咬頭をもち、その咬頭間に咬頭間腔を作っている。解剖学的咬合面は頬側咬合縁、近心咬合縁、遠心咬合縁、舌側咬合縁の4縁に囲まれ、頬側咬合縁が最も長く、ほぼ直線を描きながらも、軽度に頬側へ凸彎して近心頬側咬合縁と遠心頬側咬合縁とが区別できる (図3)。

歯冠の厚さ10mm、歯冠の幅7.8mmで、かなり大きく、近心半部と遠心半部の咬合面外形はほぼ等しいが、遠心頬側隅角が近心頬側隅角よりも強く頬側に突出した形態的特徴から本例が右・上顎第一小白歯と確認できた。

(5) 右・左下顎第一小白歯 (4)・(4)

舌側咬頭の発育が弱く、かつ小さい特徴をもち、歯冠の長さ右側8.5mm、左側8.4mm、歯冠の幅は右側8.0mm、左側7.8mmと平均値より大きく、歯冠の厚さ右側8.0mm、左側7.8mmで、歯冠の外形が五角形の輪郭を示す (図4)。

咬合縁は山形で、頬側咬頭頂 (尖頭尖) が中央よりもやや近心に偏在するので、近心咬合縁が短くなり、近心縁に沿う近心辺縁稜 (近縁隆線) が短く、かつ高い位置にある (図5)。

舌側咬頭は小さく低く、歯冠結節をなし、その頂が舌側縁の中央より近心に偏在する。これらの咬頭頂から咬合面に向かう傾斜面の中央は高い隆線状をして頬側三角稜および舌側三角稜といい、前者が後者よりも著明に広い。この三角稜と辺縁稜との間に深くくぼんでいて、それぞれ近心小窩、遠心小窩とよび、これに合流する中央溝などを判別点とした (図4)。

(6) 右・左下顎第二小白歯 (5)・(5)

歯冠の舌側半部の発育が良好で、下顎大白歯に似てくることから、下顎第一小白歯と比べて極端な変化を示している点を考慮すれば判別は容易である。また、歯冠の長さを比べて、欠損あるいは頬側咬頭の咬耗のあるにもかかわらず、右側7.2mm、左側8.0mmと短い、歯冠の厚さは右側8.5mm、

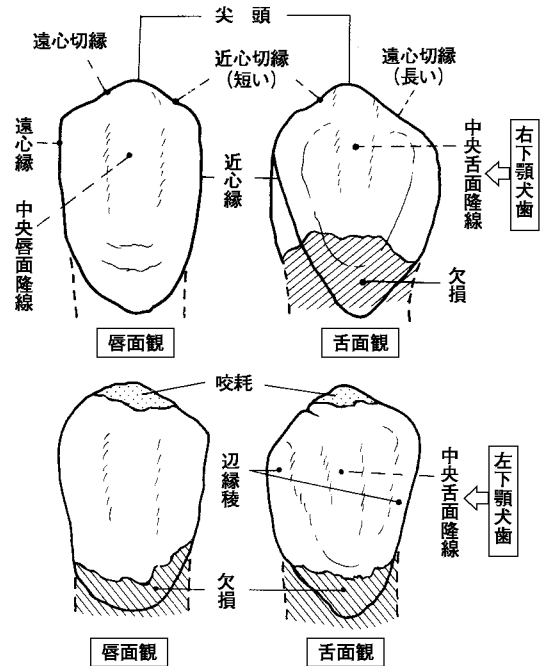


図2 右・左下顎犬歯 (3)・(3)

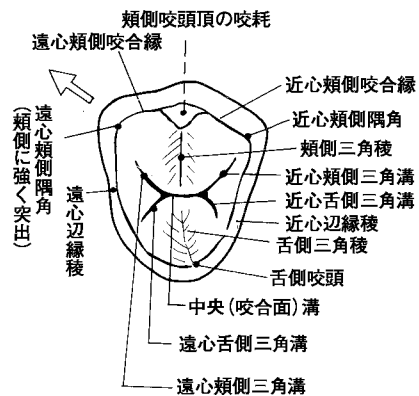


図3 右上顎第一小白歯 (4) の咬合面観

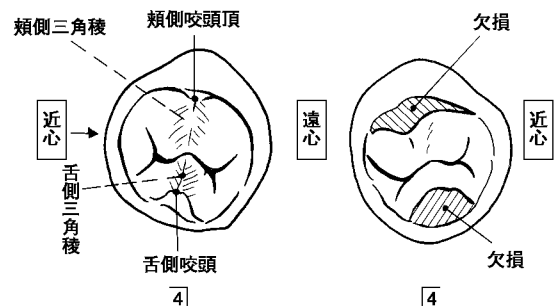


図4 右・左下顎第一小白歯 (4)・(4) の咬合面観

左側8.4mmと大きい。

舌側咬頭の発育が著しく良好で、しかも遠心舌側部に小結節、すなわち副咬頭を作って3咬頭化の傾向を示している。

咬合面の中央を走る中央溝（図6）の両端に、それぞれ近心小窩、遠心小窩を作り、頬側咬頭が舌側咬頭より大きいが、舌側咬頭の発育と位置、および遠心舌側隅角部の咬頭化など変異に富む特徴から右および左下顎第二小白歯の判別は容易である（図6）。

（7）右上顎第一大臼歯（6）

歯冠の長さ6.5mmであるが、歯冠の幅10.8mmと歯冠の厚さ11.3mmとが上顎歯のうちで最も大きく、本来の咬合面、すなわち解剖学的咬合面が4個の咬頭頂を結んだ縁に囲まれた平行四辺形であることで、本症例が右上顎第一大臼歯であると判別できる。なお、平行四辺形の咬合縁が頬側縁、舌側縁、近心縁、および遠心縁の4縁からなり、ほぼ直線を描き、頬側縁が最も長く、遠心縁が最も短い（図7）。4縁のなす角は、近心頬側隅角と遠心舌側隅角とが鋭角を示し、遠心頬側隅角と近心舌側隅角とが鈍角であるのは上顎第一大臼歯の大きな特徴である。

（8）右・左下顎第一大臼歯（6̄・6̄）

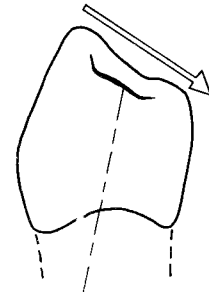
歯冠頬面の外形が咬合縁を最も長くした底辺とする逆台形で、咬合面観は隅角が丸みを帯びた不正五辺形をなし、上顎大白歯と比べて厚径よりも幅径が大きい。すなわち、右・下顎第一大臼歯の歯冠の長さ6.5mm、歯冠の幅13.0mmと大きく、歯冠の厚さ10.8mmであった。

咬耗のはげしい頬側半分を残した左・下顎第一大臼歯は、舌側半部および近心縁を欠損しているものの、仮に復原仮想したとき、右および左側歯の歯冠頬面が咬合面に向かって傾斜が著しい。これは上顎第一大臼歯の頬側咬頭との咬合接触によるもので、下顎臼歯の特徴である（図8）。

また、下顎第一大臼歯の大きな特徴は5咬頭で、そのうちの4咬頭、すなわち近心頬側咬頭、遠心頬側咬頭、近心舌側咬頭、および遠心舌側咬頭は、咬合面を十字形に4等分する配列で咬合面の各隅角部を占める。もう一つの咬頭、すなわち遠心咬頭は、遠心頬側咬頭と遠心舌側咬頭との間で頬側よりに位置し、退化傾向が強くあらわれ、本症例では咬耗と同時に小結節化し、もはや咬頭としての存在がなくなっている。

（9）右・左上顎第二大臼歯（7̄・7̄）

上顎第一大臼歯をやや小さくした形態で、歯冠の咬頭位置、溝などほとんど同じであるが、遠心半



近心縁に沿う近心辺縁後が短く、かつ高い位置にある

図5 右下顎第一小白歯（4）の近心辺縁後

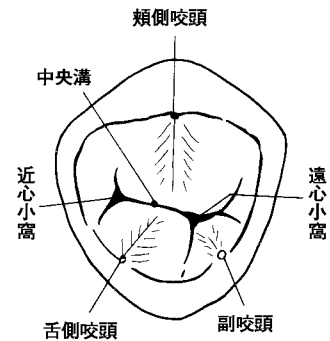


図6 右下顎第二小白歯（5）の咬合面

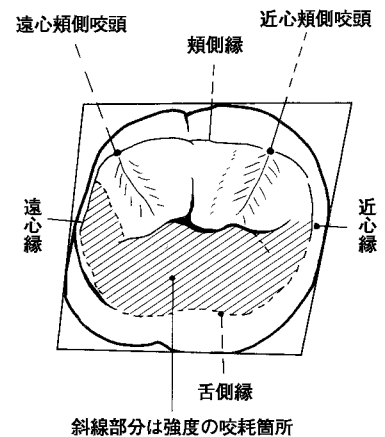


図7 右上顎第一大臼歯（6）の咬合面観

分、特に遠心舌側咬頭の退化現象が著明であることから、この歯の判別は容易である（図9）。

歯冠の長さ 右 (7) 6.9mm、左 (7) 6.8mm、歯冠の幅 右 (7) 10.0mm、左 (7) 10.0mm、
歯冠の厚さ 右 (7) 11.8mm、左 (7) 12.0mm

以上の上顎第二大臼歯の大きさと上顎第一大臼歯の平均値とを比較すれば、ほとんど同大であるが、歯冠の幅が小さいだけである。しかも、隅角部が鈍円化し、全体観が丸味を帯び、遠心半部の発育が悪くなり、前述の如く遠心舌側咬頭の退化傾向を示し、かつ個体歯であることから右および左上顎第二大臼歯と鑑別した。

(10) 右下顎第二大臼歯 (7)

下顎第一大臼歯の形態と大差ない下顎第二大臼歯を鑑別するとき、同一個体での比較から、咬頭、歯冠の咬合面の溝および窩の発現部位など、両者はほぼ一致している。ただし、大きさは小さくなり、隅角部の鈍円化、遠心咬頭の咬耗および近心部の欠損がなければ、この歯の判別はより確実であった（図10）。

遠心半部で計測した歯冠の長さ6.0mm、歯冠の幅は近心縁の欠損で計測不能、歯冠の厚さ10.9mmである。

(11) 右上顎第三大臼歯 (8)

上顎大臼歯群のうち、歯冠の近遠心的圧平が強く、咬合面の輪郭が不等辺四辺形で、遠心舌側咬頭が消失するため、解剖学的咬合面は三角形に近づくことから右上顎第三大臼歯と判別した。なお、咬合面像で中央溝が頬側に偏在し、各咬頭を境する溝は浅く、基本的溝がなく、最も大きな咬頭は近心舌側咬頭であるが、3咬頭性の咬頭で最も小さいのは遠心頬側咬頭である（図11）。

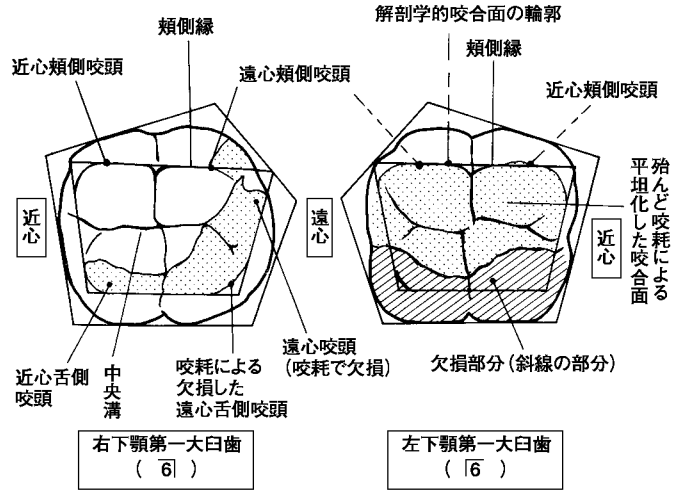


図8 右・左下顎第一大臼歯 (6)・(6)

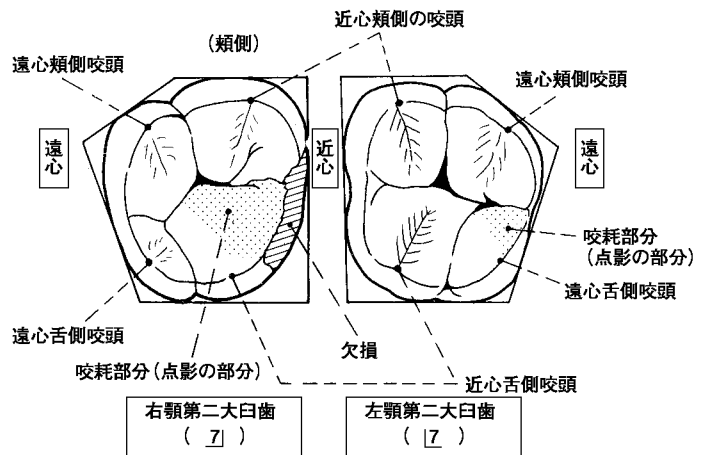


図9 右・左上顎第二大臼歯 (7)・(7)

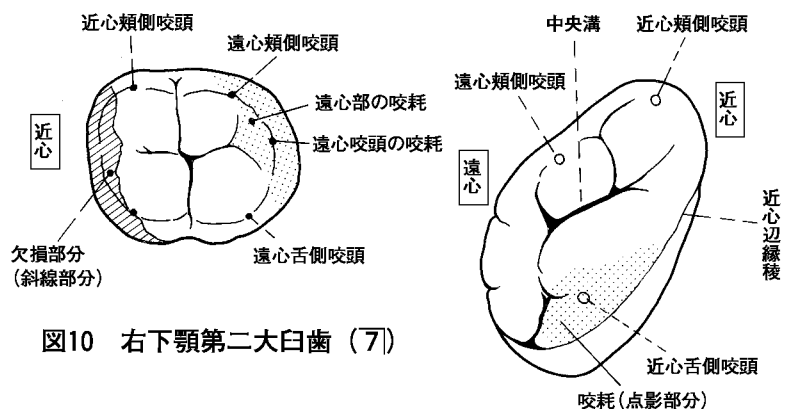


図10 右下顎第二大臼歯 (7)

図11 右上顎第三大臼歯 (8)

岡山県津島遺跡出土の動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部 生物化学科助教授 富岡直人

1 分析資料

岡山県岡山市津島遺跡は、旭川とその支流の形成した低平な岡山平野に所在する著名な弥生時代遺跡である。岡山県古代吉備文化財センターによって調査・発掘された地点より弥生時代後期後半・古墳時代・13世紀中世に属する河道、溝、住居跡が検出され、それに伴って数多くの動物遺存体が検出された。本報告は、この母集団から古代吉備文化財センターによって選択された標本約84件（総計103点）の動物遺存体について報告するものである。

多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄鉱（Vivianite : $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ））を析出し脆弱化している。また、一部は火を受け白色・黒色に変化している。

2 出土動物遺存体の特徴

津島遺跡出土動物遺存体資料を分類・同定し、個体数算定を行うとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡、生物顕微鏡、レーザー変位計で観察・測定し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施した。

第1表 津島遺跡出土動物遺存体種名表 List of the animal remains from Tsushima site, Okayama city

棘皮動物門	Echinodermata	ナミマガシワガイ	<i>Anomia chinensis</i> Philippi
ウニ綱	Echinoidea	脊椎動物門	Vertebrata
軟体動物門	Mollusca	軟骨魚綱	Chondrichthyes
腹足綱	Gastropoda	板鰓亜綱	Elasmobranchii
アクリガイ科	Muricidae	エイ目	Rajiformes fam. indet.
アカニシ	<i>Rapana venosa</i> (Valenciennes)	硬骨魚綱	Osteichthyes
リュウテンサザエ科	Turbinidae	ナマズ目	Siluriformes
スガイ	<i>Lumella coronata coreensis</i> (Rêcluz)	ギギ科	Bagridae
カワニナ科	Pleuroidae	ギギ	<i>Pelteobagrus mudiceps</i> (Sauvage)
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>	スズキ目	Perciformes
	<i>libertina</i> (Gould)	タイ科	Sparidae
チリメンカワニナ	<i>Semisulcospira</i>	マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)
	<i>libertina reiniana</i> (Brot)	ボラ科	Mugilidae gen. et sp. indet.
タニシ科	Viviparidae	両生綱	Amphibia
オタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (v. Martens)	無尾目 (カエル目)	Anura fam. indet.
ウミナナ科	Potamididae	爬虫綱	Reptilia
カワアイガイ	<i>Cerithidea djadjariensis</i> (Martin)	トカゲ目	Squamata
斧足綱	Bivalvia	ヘビ科	Colubridae gen. et sp. indet.
シジミガイ科	Corbiculidae	鳥綱	Aves
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime	キジ目	Galliformes
フネガイ科	Arcidae	キジ科	Phasianidae
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	キジ属	<i>Phasianidus</i> sp. indet.
サルボウガイ	<i>Scapharca kagoshimensis</i> (Tokunaga)	ガンカモ目	Anseriformes
イタボガキ科	Ostreidae	ガンカモ科	Anatidae
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)	カモ類 B タイプ	wild ducks B type
ナミマガシワガイ科	Anomidae		

哺乳綱	Mammalia	ウマ目	Perissodactyla
ウシ目 (偶蹄目)	Artiodactyla	ウマ科	Equidae
ウシ科	Bovidae	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin	ネコ目 (食肉目)	Carnivora
シカ科	Cervidae	イヌ科	Canidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck	イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
イノシシ科	Suidae	ネズミ目 (齧歯目)	Rodentia
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.	ネズミ科	Muridae gen. et sp. indet.

津島遺跡からは極めて多くの動物遺存体が出土した。検出された動物遺存体は、古代吉備文化財センターにおいて選別され、選択がなされた後に岡山理科大学に搬入された。残存状況の良好な資料と出土点数が少ないもの程、選択される傾向が見受けられる。これらのうち綱目科属種の分類が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

送付された資料の番号は件数に従ってつけられており、1件中複数個体が含まれた場合は補助番号を付した。その後整理番号を付している。出土資料の分析によって得られた属性の詳細(出土地区、帰属層位・遺構、所属時期、部分、部位、破損、風化、成長度、重量、計測値)を第3表に示す。

破損については、第2表に掲げる属性基準を設定し分類した。

第2表 破損分類基準 (アンダーラインが付された部分が分類名)

規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性		
Aタイプ 切断 (対象を完全に切断している切創： cut mark)		a 溝面が平滑あるいはゆるやかなカーブ (含：刃こぼれの傷) 切創・切削痕跡： cut or scrape mark
Bタイプ 切創 (5 mm以上の深さ)	1 線状に伸びた痕跡	b 溝片面が破断打撃叩切痕跡： chop or huck mark c 断面に多数の平行線状痕跡 鋸引痕跡： saw mark
Cタイプ 切創 (1～5 mmの深さ)	2 刺突状に止まった痕跡	
Dタイプ 切創 (1 mm未満の深さ)	3 水平様に刃器を滑らせた痕跡	
規則性の低い創傷：動物による損壊の可能性		
局所的かつ集中的にクレーター状や断面半円の孔・溝を生じる → イヌ等食肉目の嚙痕 → <u>イヌ嚙痕</u> (津島遺跡の場合は大きさからイヌと考えられる) 二条の溝が対になり、局所的に損壊される → ゲッ歯目の嚙痕 → <u>ネズミ嚙痕</u> (日本の多くの遺跡の場合は大きさからネズミ類と考えられる)		

1) 棘皮動物門 Echinodermata

ウニ綱 Echinoidea

弥生時代後期の河道1内貝塚1より棘(No44)が出土した。海底で生活するタイプの中でも棘が比較的大きい個体で、生殖腺が食用にされたものと考えられる。

2) 軟体動物門 Mollusca

すべて弥生時代後期の河道1内貝塚から出土している。イタボガキ科を除いて明確な損壊の痕跡は確認されていない。

a. 腹足綱 Gastropoda

アキキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa* (Valenciennes)

内湾泥底に生息する腹足綱で、岡山の縄文時代～近世の遺跡で普通にみられるものであるが、津島遺跡からは弥生時代後期の河道1内の貝塚1から殻軸のみの資料No.12が検出された。ピビアナイトの析出がわずかに認められる。保存状況が劣悪であったため、火を受けた痕跡や意図的損壊等は確認されなかった。

リュウテンサザエ科 Turbinidae

スガイ *Lunella coronata coreensis* (Rêcluz)

弥生時代後期後半の貝塚1で検出され、No.22の1点が同定された。変色はみられない。潮間帯に生息するタイプの腹足綱であり、食用等として搬入されたと考えられる。

カワニナ科 Pleuiceridae

カワニナ *Semisulcospira libertina libertina* (Gould)チリメンカワニナ *Semisulcospiralibertina reiniana* (Brot)

淡水に生息する腹足綱である。弥生時代後期後半の貝塚1で検出され、No.19～21の3個体が同定されている。殻質と殻皮が残存しており保存が良好である。カワニナとしたものは旭川に分布が確認されているクロダカワニナに似るが特定できなかった。チリメンカワニナは比較的流れのゆるやかな流域に生息することが知られている(紀平1990)。採集されて遺跡に持ち込まれた可能性以外にも、遺跡内河川に生息していた個体が堆積層に入り込んだ可能性も考えられる。

タニシ科 Viviparidae

オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (v. Martens)

淡水の川や池沼に生息する。採集されて遺跡内に含まれた可能性と、河川に生息していた可能性が考えられる。弥生時代後期後半の貝塚4で検出されたNo.13は殻高29.97mmで、やや小振りの個体である。殻質・殻皮とも残存して、保存状況は良好であった。

ウミナナ科 Potamididae

カワアイガイ *Cerithidea djadjariensis* (Martin)

泥の多い内湾の泥底に生息する腹足綱。ヘナタリガイと比較すると、カワアイガイの方がやや潮位が高い河川の影響のあるところに生息する特徴を持つ。弥生時代後期後半の貝塚1で検出され、No.14～18の5点が同定されている。

b. 斧足綱 Bivalvia

シジミガイ科 Corbiculidae

ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

汽水域に生息する斧足綱。旭川下流域では、本種を主体とする縄文～中世の貝塚がみられるが、本例もその一つといえる。弥生時代後期後半の貝塚1で検出され、No.39～43の5点が同定されている。同定点数が少ないので統計分析には馴染まないが、貝殻の形態を代表する殻長と殻高の相関は高いことがうかがわれる(第1図)。

フネガイ科 Arcidae

ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)

内湾潮間帯の砂泥質の干潟に生息する斧足綱。弥生時代後期後半の貝塚1で検出され、左殻が1点

(No.30) 右殻が3点 (No.31~33) 同定された。殻長30.66~51.84mmで、標準的な大きさの個体群であった。

弥生時代前期~中期の内陸の弥生遺跡である矢掛町清水谷遺跡では、貝類が一切検出されなかったが、土器や礫に付着した土壤にハイガイの圧痕が残され、殻質と殻皮は全く失われた状態で4点が検出された。用途が食用か不明であるが、弥生時代に内陸にまで搬入される貝類として、重要性が高かったのかもしれない。津島遺跡での出土量は現在不明であるが、発掘時の所見では本来は含量が多かった可能性がある。特に、ハイガイとマガキは火を与えて貝灰を製作し、道具や建築材として利用された可能性もある。

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis* (Tokunaga)

内湾砂底に生息する斧足綱。弥生時代後期後半の貝塚1で検出されたNo.28は右殻で、殻長42.92mmと標準的な大きさである。

イタボガキ科 *Ostreidae*

No.27は、種が特定されなかったが、イタボガキ *Ostrea denselamellosa deselamellosa* Lischke の可能性が考えられる。イタボガキならば、マガキよりもやや深度のある内湾深度10m程度の小石や岩に付着し生息する(波部他1983)。それ以外は以下に示すマガキと同定された。

マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)

内湾の砂泥底の干潟から砂底・礫底に固着して生息する斧足綱。マガキと推定された資料 (No.34~38) の全ては殻質の色調がやや黒色を帯びており、熱を受けている可能性が考えられる。

ナミマガシワガイ科 *Anomidae*

ナミマガシワガイ *Anomia chinensis* Philippi

海水域潮間帯付近の岩や礫に付着し生息する真珠光沢を持つ殻を有する斧足綱である。食用とされたものかは不明である。

3) 脊椎動物門 *Vertebrata*

a. 軟骨魚綱 *Chondrichthyes*

板鰓亜綱 *Elasmobranchii*

サメ類とエイ目が出土している。サメ類の椎骨は、ホホジロザメ等を含むネズミザメ科の可能性があるが特定できなかった。

エイ目 *Rajiformes* fam. indet.

海水域から汽水域にかけて生息する。いずれも弥生時代後期の河道1と河道内貝塚1・2とその周辺の土器だまりから検出された。刺突具に加工された尾棘 (No.51) と椎骨 (No.47~50) が出土した。中でも第1図版19 (No.50) は切断された鋭利な切創 (Aaタイプ) を残しており、弥生時代後期にエイ目をぶつ切りにした可能性をうかがわせる貴重な資料である。No.49, 50は中央に穿孔の様な孔を残していることから装飾品等の骨製品である可能性が考えられる。また、No.48は一部が受熱により黒色に変化している。

b. 硬骨魚綱 *Osteichthyes*

ナマズ目 *Siluriformes*

ギギ科 *Bagridae*

ギギ *Pelteobagrus nudiceps* (Sauvage)

淡水の湖沼・河川に生息する硬骨魚綱。胸鰭骨 (No.54) が 1 点のみ同定されている。

スズキ目 Perciformes

タイ科 Sparidae

マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)

海水域の岩礁域や砂礫の底層に生息する。岡山県の縄文時代～近世にかけての遺跡で普通にみられる硬骨魚綱である。左口蓋骨 (No.57) が 1 点のみ同定されている。

ボラ科 Mugilidae gen. et sp. indet.

海水～汽水域に生息する。左主鰓蓋骨 (No.56) が 1 点のみ同定されている。

c. 両生綱 Amphibia

無尾目 (カエル目) Anura fam. indet.

弥生時代後期の河道 1 内から比較的細身の個体の右大腿骨 (No.71) や右上腕骨 (No.70)、左肩甲骨 (No.69) が検出された。科以下の同定は困難であった。切創や受熱の痕跡はみられず、人為的に捕獲されたり食用に供されたものかは不明である。

d. 爬虫綱 Reptilia

トカゲ目 Squamata

ヘビ科 Colubridae gen. et sp. indet.

弥生時代後期の河道 1 内から完形の椎骨が 1 点検出されている (No.72)。属以下の特定や食用にされたか否かの判断は困難であった。

e. 鳥綱 Aves

キジ目 Galliformes

キジ科 Phasianidae

キジ属 *Phasianidus* sp. indet.

陸上の山野に生息する。縄文時代～近世にかけて広く出土がみられる鳥綱である。出土資料No.74は上腕骨で遠位端がスパイラル剥離によって失われているが、大きさから小～中型のキジ属と推定された。種の特定は困難であるが、形状と大きさからキジやヤマドリの可能性が考えられる。

ガンカモ目 Anseriformes

ガンカモ科 Anatidae

カモ類 B タイプ wild ducks B type

水域に飛来する渡鳥あるいは留鳥である。出土資料No.73は左尺骨で、出土資料の中では珍しく火を受けて白色を呈している。その大きさからカモ類の中で大～中程度の体躯の個体であったと推定される。生存時体躯の全長は約47cm程度と推定され、クロガモ、ヨシガモ等が対応する可能性が考えられる。

f. 哺乳綱 Mammalia

ウシ目 (偶蹄目) Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

13世紀に比定される中世の溝42から右上腕骨 (No.5) と右脛骨 (No.4) が検出された。いずれも切創などの人為的損壊は不明であった。

右上腕骨の計測値 SD : smallest diameter of body が32.22mmであったことを西中川 (1989) の研究事例と比較すると、体高110cm程度の雄の見島牛とほぼ同じ体格であり、小型在来牛と考えられる。岡山県内の類例としては13世紀に帰属する百間川米田遺跡河道 6 出土動物遺存体集中98-39のウシとほぼ同じ体格である。同じく中世に属する百間川遺跡出土ウシ (No.39、富岡2002) は体高110~120cmと推定されており、ほぼ同体格の資料といえよう。

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

弥生時代後期の層からのみ検出され、古墳時代や中世の資料は確認されていない。いずれも極めて小型の個体で、接合する資料も含まれている (No.94~107)。No.94下顎骨を除き、各資料は茶褐色を呈し、全て河道 1 から出土した。

イノシシ科 Suidae

イノシシ類 *Sus scrofa* subsp. indet.

野生イノシシか家畜ブタかの分類は出土資料のみでは困難であった。弥生時代後期 (No.90~93) と中世の資料 (No. 3) が検出されている。弥生時代後期の資料 (No.90~93) は、全て河道 1 から検出されている。

そのうちNo.90、92、93の資料には D1a タイプの人為的切創が確認され、骨に達する切創を残す行為がイノシシにおいて多く実施されていたことがうかがわれる。これは切創が不明あるいは「なし? (=切創がなかった可能性を示す)」と推定された同時期同遺構出土のイヌ資料 (No.79~89: 総数10点) や、Aa タイプが 1 点、C1a タイプが 1 点、D1a と D3a タイプが 1 点検出されたニホンジカ資料 (No. 94~107: 総数14点) と明らかな違いを示しており、弥生時代後期において哺乳動物の処理が種によって異なっていた可能性をうかがわせる結果となった。

ウマ目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

中世の溝42と溝62から基節骨 (No. 6)、上・下顎臼歯 (No. 7、8) が検出されている。切創等、意図的な損壊は確認できなかった。No. 6 基節骨の最大長72.96mmは西中川 (1989) による調査でのトカラウマやミサキウマの前・後肢の基節骨のレンジ70.7~85.6mmに含まれることから、体高120cm程度の小型在来馬とほぼ同じ体格と推定される。

ネコ目 (食肉目) Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris* Temminck

弥生時代の個体 (No.79~89) と中世の個体 (No. 1、2) が検出されている。中世のNo. 2 頭蓋後頭顆には切創がみられ、意図的に損壊されたものと考えられ、人間やワシタカ類などの食用に供された可能性が考えられる。頭蓋の化骨化の程度から若齢の個体と推定される。

弥生時代の資料であるNo.79、80には、一部の犬歯と臼歯に偏った咬耗と歯槽膿漏がみられ、粗放な飼育の様子がうかがわれる。また、No.81、82には歯槽膿漏が見られる。歯の萌出状況から、若~老齢の個体と推定される。

ネズミ目 (齧歯目) Rodentia

ネズミ科 Muridae gen. et sp. indet.

弥生時代後期の河道内の貝塚から上腕骨 (No.110) と肩甲骨 (No.109)、寛骨 (No.108)が検出された。いずれも茶褐色に変色し、火を受けた痕跡は見られず、また切創等意図的損壊もみられず、食用とされたか、混入したか、あるいは駆除されたものかは不明である。

3 津島遺跡における動物質資源の利用

弥生時代

津島遺跡の調査資料を総合してみた結果、動物遺存体の質的・量的豊富さが顕著となった。

このように豊富な動物遺存体を包含した例としては、県内では上東遺跡の例 (富岡 2001 b) が知られるが、旭川下流域での例は乏しく、津島遺跡の重要性があらためて明らかとなった。

出土した動物遺存体の種類は、淡水域から海水域、水域から陸上に及び、旭川下流域から瀬戸内海に面した旧児島湾内湾にかけて、さらに岡山平野とその周縁に広がる丘陵といった極めて広い環境の遷移帯 (eco-zone) を活かし、自給あるいは交易によって積極的な加工・消費活動を行っていたものと推定される。特に製塩活動での鹹水の確保を行ったであろう内湾域に生息する魚貝類が多く検出されたことは、津島遺跡の集団が製塩活動以外の生業や交易にも、この環境を活用していたことを示すものとして理解される。

自然に生息した動物質資源以外にも家畜の出土もみられた。家畜の一種であったイヌの中には歯周病を起し、歯槽膿漏を患った個体が確認された。特にNo.79・80の個体の切歯と犬歯の摩耗は極めて激しいもので、粗食を主として摂食していた様子がうかがわれる。従来上東遺跡でも歯牙の欠損したイヌは見られたが、これほど顕著な歯槽膿漏の痕跡を呈する個体は例がなかった。生前の生活ぶりや扱いがどのようなものであったのか、類例の増加を待って慎重に検討を要する資料といえる。

哺乳類の組成も特徴が見られた。県内の弥生時代前期後半から中期遺跡である矢掛町清水谷遺跡 (富岡2001 a) ではイノシシ類が多量に出土し、哺乳類の中で最も同定点数が多かったが、津島遺跡の場合は岡山県上東遺跡の場合 (富岡2001 b) と類似した比率を示し、ニホンジカに比してイノシシ類の同定点数が1/3程度であった (註1)。今後同時期の遺跡の分析を進めていく中で、動物遺存体を通して遺跡機能の問題にも言及できることが期待される。

古墳時代

竪穴住居39や竪穴住居82、ピット433内で、火を受けて白色を呈し損壊した資料が検出された。目以下が同定できた資料は検出されず、確定的な内容は把握できなかった。

中世

ウマ、ウシ、イヌといった家畜を中心とした動物遺存体が、溝53と溝42から検出された。

イノシシ類は家畜化されたいわゆる「ブタ」か、野生のイノシシかの分類は困難であった。イヌは弥生時代の資料と同じく、歯槽膿漏を起しており、生活・飼育環境の劣悪さがうかがわれた。ウシ、ウマはいずれも小型の個体であった。茶褐色を呈し、保存状況も良好ではなかったため、切創等の破損痕跡が明確な個体は少なく、イヌ頭蓋 (No.2) とイノシシ類頸椎 (No.3) に破壊力のある鋭利な刃物を利用したと推定される C1a タイプの切創が見られ、解体用刃器の推定に有効な資料と評価される。

謝 辞

岡山県立古代吉備文化財センターの各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析と資料抽出にあたっては 岡山理科大学宮本葵さん、藤原圭子さん、塩谷勇一郎君、太田謙君、上岡真帆さん、谷村彩さんに御助力頂いた。さらに、東北大学文学部考古学研究室須藤隆先生、奈良国立文化財研究所松井章先生、帯広畜産大学石黒直隆先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

註1 上東遺跡では弥生時代後期のニホンジカ同定点数64点に比してイノシシ20点であった。一方、津島遺跡ではニホンジカの同定点数が13点に比してイノシシ類が4点であった。

参考文献

- 阿部 永他 1994『日本の哺乳類』（東海大学出版局）
阿部宗明 1987『原色魚類大図鑑』（北隆館）
今泉吉典、岡田弥一郎 1983『学研生物図鑑 動物』（学研）
内田 亨 1979『新編日本動物図鑑』（北隆館）
内田 亨他 1972『谷津・内田 動物分類名辞典』（中山書店）
内田 亨 1979『新編日本動物図鑑』（北隆館）
大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13, pp. 51-74
大泰司紀之 1983「シカ」『縄文文化の研究 2 生業』pp. 122-135
大泰司紀之 1984「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」『古文化財の自然科学的研究』pp. 555-558
岡田 要（校閲） 今泉吉典（著） 1960『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）
岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965『新日本動物図鑑』下（北隆館）
金子浩昌、牛沢百合子 1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡』第6分冊・自然遺物編, pp. 9-32
金子浩昌 1984『貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかわり』考古学シリーズ⑩（東京美術）
金子浩昌 1995「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡 2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98： pp. 597-604
金子浩昌 1996「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡 3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104： pp. 282-285
蒲原稔治 1966『標準原色図鑑全集 第4巻 魚』（保育社）
紀平 肇 1990『琵琶湖淀川 淡水貝類』（たたら書房）
小池裕子、大泰司紀之 1984「遺跡出土ニホンシカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」『古文化財の自然科学的研究』： pp. 508-517
小池裕子、林 良博 1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』pp. 519-524
後藤仁敏、大泰司紀之編 1986『歯の比較解剖学』（医師薬出版株式会社）
進藤直作 1968『瀬戸内海の鯨の研究』（神戸市医師協同組合）
高野伸二 1982『フィールドガイド日本の野鳥』（日本野鳥の会）
常田邦彦 1982「イノシシの分布」『アニマ』118, p. 46
千葉徳爾 1964「日本列島における猪・鹿の生息状況とその変動」『地理学評論』37, pp. 575-592
富岡直人 1998「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告 岡山城二の丸跡』pp. 136-163
富岡直人 2000「新蔵町3丁目遺跡出土動物遺存体」『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31： pp. 427-438
富岡直人 2000「原尾島・沢田遺跡出土の動物遺存体分析『原尾島遺跡・沢田遺跡 一般国道2号線藤原交差点他改良に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財調査報告153（岡山県教育委員会）： pp. 55-56
富岡直人 2000「井手天原遺跡出土動物遺存体」『岡谷大溝散布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須島田遺跡、井手見延遺跡、井手天原遺跡 一般国道429号線改良に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156（岡山県教育委員会）： pp. 224-237
富岡直人 2001「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』（岡山県教育委員会）： pp. 89-121

富岡直人 2001「左古谷遺跡出土動物遺存体」『灘崎町埋蔵文化財発掘調査1 左古谷遺跡』（岡山県灘崎町教育委員会）： pp.69-74

富岡直人 2001 a 「矢掛町清水谷遺跡出土の動物遺存体」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告1 清水谷（一本木地区）』（矢掛町教育委員会） pp.228-236

富岡直人 2001 b 「上東遺跡出土動物遺存体と骨角製品」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 下庄遺跡、上東遺跡』（岡山県教育委員会）： pp.24-39

富岡直人 2002「百間川米田遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 百間川米田遺跡4』： pp.327-354

西中川 駿 1989『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）

西本豊弘 1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺存体」『下郡桑苗遺跡』 pp.114-132（大分県教育委員会）

西本豊弘 1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』50, pp.49-70

西本豊弘 1994「縄文時代のシカ・イノシシの大きさの変異」『動物考古学』第2号 pp.39-52

林 謙作 1986「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学 5 文化と地域性』 pp.93-124

林 良博 1983「イノシシ」『縄文文化の研究 2 生業』 pp.136-147

林 壽郎 1968『標準図鑑全集 動物Ⅰ』（保育社）

林 壽郎 1968『標準図鑑全集 動物Ⅱ』（保育社）

林田重幸、山内忠平 1954「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4)： pp.122-126

林田重幸、山内忠平 1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6：146-156

林田重幸 1957「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5)： pp.301-306

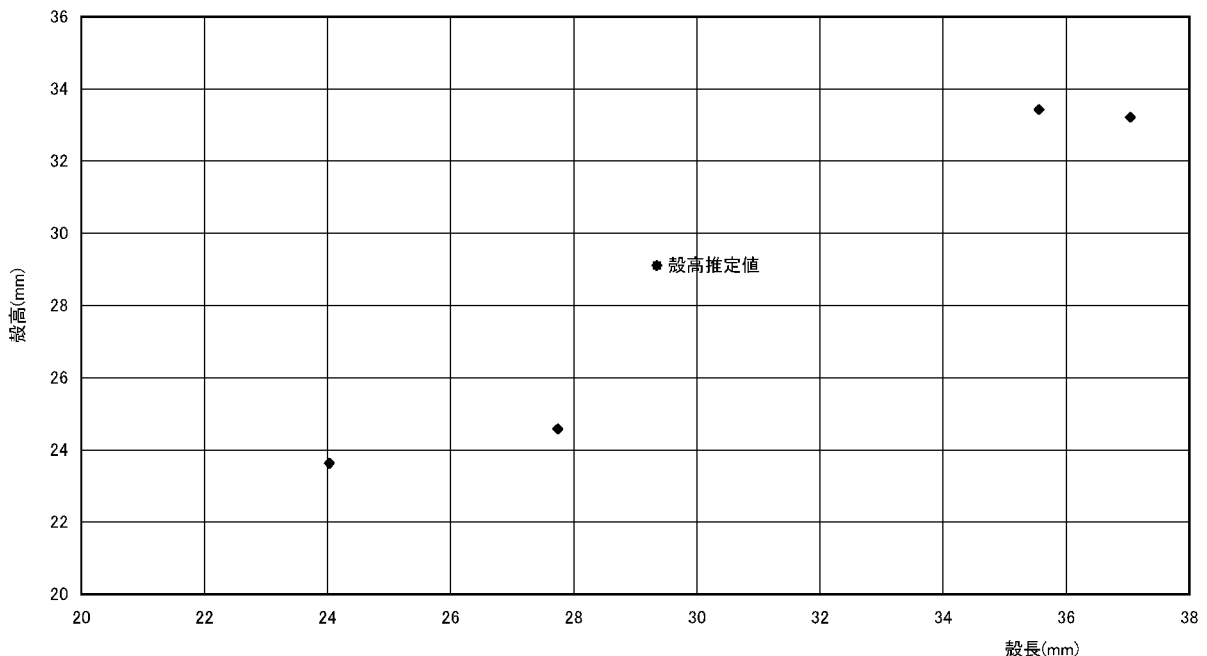
春成秀爾 1993「豚の下顎懸架－弥生時代における辟邪の習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』50, pp.71-140

藤田三郎編 1986『昭和59年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要4

丸山直樹 1981「ニホンジカの季節的移動と集合様式に関する研究」『東京農工大学農学部学術報告』23, pp.1-85

松井 章 1995「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61： pp.55-71

Angela von den Driesch 1976 “A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites” Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University



第1図 ヤマトシジミ貝殻形態

附編 自然科学的分野における分析・鑑定

整理番号	旧番号	遺 構 名	時 期	大分類	小分類	部 位	LR	部 分	成 長 度	破 損	色調・風化	計 測 値 (mm)	重 量 (g)	備 考
1	1	溝53	中世(13C)	哺乳綱	イヌ	頭蓋	R	前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨	af:若齢	なし?	茶褐色 viv	頭蓋最大幅:59.40、	14.50	
2		溝53	中世(13C)	哺乳綱	イヌ	頭蓋	L	前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨(後頭頂)	af:若齢	後頭頂cm (C3b):1.6mm深	茶褐色 viv	後頭頂間節最大横幅:34.11、後頭高最大幅18.34	22.96	
3	6	溝42最下層	中世(13C)	哺乳綱	イノシシ類	頸椎	M	完形(一部欠損)	f	棘突起cm (c1a)	茶褐色 viv	BFer:29.25	17.05	
4	3	溝42北側最下層	中世(13C)	哺乳綱	ウシ	脛骨	R	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	SD:30.46	161.69	
5	5	溝42最下層	中世(13C)	哺乳綱	ウシ	上腕骨	R	骨幹部	d、p:f	なし?	茶褐色 viv	SD:32.22	77.96	
6	4	溝42c	中世(13C)	哺乳綱	ウマ	基節骨	L	完形	d、p:f	なし?	茶褐色 viv	Gl:72.96、Glc:66.12、Pb:44.16、SD:29.62、Db:38.77	42.23	
7	7	溝42最下層	中世(13C)	哺乳綱	ウマ	臼歯(上顎)	L	歯冠部	咬耗開始	なし?	茶褐色 viv	歯冠最大長:32.30咬合面最大長:19.00	14.72	
8	13	溝62	中世	哺乳綱	ウマ	臼歯(下顎)	L	歯冠部	?	なし?	茶褐色 viv	-	14.30	
9	82	竅穴住居39	古墳(5~6C)	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	?	なし?	白色	-	0.03	
10	83	P433	古墳初頭	哺乳綱	目不明(小~中型)	不明	?	骨幹部	?	なし?	白色	-	0.33	
11	84	竅穴住居82カマド内骨	古墳(6C後半)	脊椎動物門	網不明	不明	?	骨幹部	?	不明	白色	-	457(土ごと)	
12	79	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	アカニシ	殻軸	-	破片	?	なし?	ノーマル、viv	-	31.16	
13	80	河道1内 貝塚4	弥生後期後半	腹足綱	オオタニシ	殻質+殻皮	-	完形	?	なし?	ノーマル	殻径:22.20、殻高:29.97		殻質が損壊した後溶滅した痕跡がみられる
14	75-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワアイガイ	殻質	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	-	1.53	
15	75-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワアイガイ	殻質	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:29.68	1.16	
16	75-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワアイガイ	殻質	-	完形(殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	殻高:30.66	1.05	
17	75-4	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワアイガイ	殻質	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	-	0.87	
18	75-5	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワアイガイ	殻質	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	-	0.80	
19	74-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:25.36	0.52	
20	74-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:27.08	0.50	
21	74-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	カワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:23.18	0.40	
22	78	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	スガイ	殻質	-	完形	?	なし?	ノーマル	殻径:20.78、殻高:18.33	1.63	
23	73-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	チリメンカワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:23.50	0.64	
24	73-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	チリメンカワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:21.56	0.53	
25	73-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	チリメンカワニナ	殻質+殻皮	-	完形(殻頂、殻唇一部欠損)	?	?	ノーマル	残存殻高:22.38	0.49	
26	77	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	腹足綱	ナミマガシワガイ	殻質	L	完形(腹縁一部欠損)	?	なし?	黄色	殻長:37.26	3.80	
27	76	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	イタボガキ科	殻質	L	完形(腹縁一部欠損)	?	なし?	黄色	殻高:(69.62)、殻長:(71.77)	23.34	火を受けて黒色変化イタボガキに似る。
28	81	河道1内 貝塚5	弥生後期後半	斧足綱	サルボウ	殻質	R	完形(腹縁一部欠損)	?	?	ノーマル	殻長:42.92、殻高:(33.33)	4.00	殻質に穿孔生物食痕あり
29	70-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ハイガイ	殻質	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:40.50、殻高:34.33、殻厚:16.02	7.08	
30	70-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ハイガイ	殻質	L	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:42.50、殻高:35.02、殻厚:16.54	7.38	
31	70-5	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ハイガイ	殻質	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:30.66、殻高:26.82、殻厚:12.34	4.30	
32	70-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ハイガイ	殻質+殻皮	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:51.84、殻高:44.86、殻厚:21.12	17.98	
33	70-4	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ハイガイ	殻質+殻皮	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:36.98、殻高:33.24、殻厚:12.34	9.97	
34	71-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	マガキ	殻質	L	完形(腹縁一部欠損)	?	打割?	黄色	殻高:61.42	7.65	
35	71-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	マガキ	殻質	L	完形(腹縁一部欠損)	?	打割?	黒色	殻高:54.50	12.27	
36	71-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	マガキ	殻質	L	完形(腹縁一部欠損)	?	打割?	黄色	殻高:49.86	5.24	
37	71-4	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	マガキ	殻質	L	完形	?	なし?	黒色	殻高:55.66	7.88	
38	71-5	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	マガキ	殻質	L	完形	?	なし?	黒色	殻高:41.48	4.21	
39	72-1	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質+殻皮	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:37.04、殻高:33.22、殻厚:11.02	4.77	
40	72-2	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質+殻皮	R	完形(前側縁一部欠損)	?	なし?	ノーマル	殻長:35.56、殻高:33.43、殻厚:10.32	3.97	
41	72-3	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質+殻皮	L	完形(前側縁一部欠損)	?	なし?	ノーマル	殻長:29.35、殻高:(29.11)、殻厚:9.80	3.03	
42	72-4	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質+殻皮	R	完形	?	なし?	ノーマル	殻長:27.74、殻高:24.58、殻厚:8.56	2.79	
43	72-5	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	斧足綱	ヤマトシジミ	殻質+殻皮	R	完形(腹縁一部欠損)	?	なし?	ノーマル	殻長:24.03、殻高:23.63、殻厚:7.92	1.68	
44	54	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	棘皮動物門	ウニ綱	棘	-	破片	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.04	
45	39	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	脊椎動物門	網不明	不明	?	骨端部+骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.02	
46	50	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	脊椎動物門	網不明	頭骨	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.01	
47	9	河道1土器溜まり	弥生後期後半	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	完形	?	イヌ嚙痕	茶褐色 viv	BFer:25.03	5.42	
48	22	河道1灰色粘質土	弥生後期後半	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	破片	?	なし?	茶褐色 viv	関節最大径:12.32	0.44	一部受熱により黒色変化
49	41	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	完形	?	?	茶褐色 viv	-	1.36	中央に穿孔状の穴があることから、骨製品も可能性あり
50	68	河道1内 貝塚2	弥生後期後半	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	完形	?	椎体cm (Aa長さ8.64)	茶褐色 viv	BFer:14.27	1.10	中央に穿孔状の穴があることから、骨製品も可能性あり

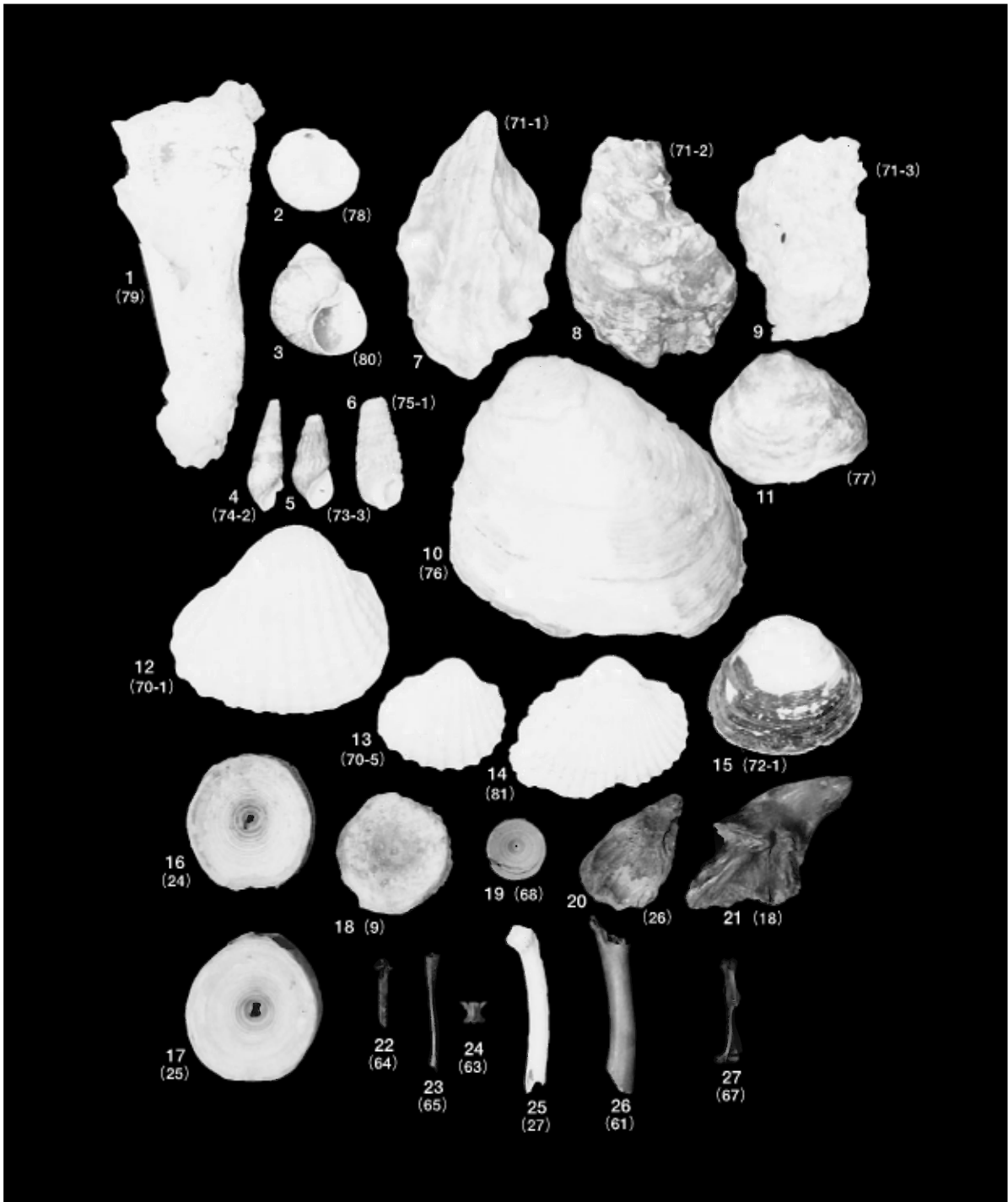
岡山県津島遺跡出土の動物遺存体の分析

整理番号	旧番号	遺 構 名	時 期	大分類	小分類	部 位	LR	部 分	成 長 度	破 損	色調・風化	計 測 値 (mm)	重 量 (g)	備 考
51	33	河道1	弥生後期後半	軟骨魚綱	エイ目	尾棘	M	完形	?	近位端; cm (C3a)	茶褐色 viv	-	1.26	
52	24	河道1 灰色粘質土	弥生後期後半	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	Bf cr : 29.64	7.25	
53	25	河道1 灰色粘質土	弥生後期後半	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	Bf cr : 30.45	7.51	
54	64	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	ギギ	胸鰭棘	R	完形 (遠位端欠損)	?	なし?	茶褐色 viv	近位関節最大幅: 3.91	0.10	
55	57	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	スズキ目	主鰭蓋	R	骨幹部、破片	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.21	
56	26	河道1 灰色粘質土	弥生後期後半	硬骨魚綱	ボラ科	主鰭蓋骨	L	関節部	?	なし?	茶褐色 viv	-	2.33	
57	18	河道1 骨⑥	弥生後期後半	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	L	完形 (下位一部欠損)	?	?	茶褐色 viv	最大長: 48.20	1.77	
58	66	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.16	
59	47	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部+骨端部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.02	
60	58	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	鱗	?	破片	?	なし?	茶褐色 viv	-	-	
61	49	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	鱗	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.12	
62	51	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	骨幹部	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.24	
63	43	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	背腎鰭棘	M	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.03	
64	46	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	背腎鰭棘	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.05	
65	62	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	背腎鰭棘	M	近位端+骨幹部	?	?	茶褐色 viv	-	0.01	複数あり
66	52	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	鰭棘	?	近位端+骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.02	
67	42	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	腹椎	M	椎体	?	?	茶褐色 viv	-	0.53	
68	53	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部+骨端部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.12	
69	55	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	両生綱	カエル目	肩甲骨	L	完形	?	なし?	茶褐色 viv	全長: 22.15	0.37	
70	44	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	両生綱	カエル目	上腕骨	R	骨幹部+遠位端	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.06	
71	65	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	両生綱	カエル目	大腿骨	R	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.15	
72	40	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	Bter : 1.18mm	0.02	
73	27	河道1 暗褐色粘質土	弥生後期後半	鳥綱	カモ類Bタイプ	尺骨	L	骨幹部+遠位端	d, p : f	なし?	白色	-	0.75	
74	61	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	鳥綱	キジ属	上腕骨	R	近位端+骨幹部	?	sp (骨幹部)	茶褐色 viv	-	0.73	小~中型
75	48	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	脊椎動物門	網不明	不明	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.10	
76	56	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	-	0.06	
77	63	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	?	なし?	茶褐色 viv	Bter : 1.86	0.04	
78	60	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	爬虫綱	ヘビ科	肋骨	?	近位端+骨幹部	?	?	茶褐色 viv	-	最大 0.01	
79	16-1	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	L	完形 (I ×、I2 ×、I3 ×、C ×、P2 ●、P3 ○、P4 ○、M1 ○、M2 ○、M3 ○)	M1 類側激しく咬耗、C 激しく咬耗、老齢	P4 損壊後治療	茶褐色 viv	M1 歯冠最大長: 18.49、 M1 歯冠最大幅: 7.19、 C 歯冠最大長: 8.32、 C 歯冠最大幅: 5.39、 全長: 105.87	18.14	16-2、3、4、5、6、7と同一個体、M2 歯槽膿漏、切歯と犬歯が著しく摩耗している
80	16-2	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	R	I ×、I2 ○、I3 ○、I4 ○、C ○、P2 ×、P3 ○、P4 ○、M1 ○、M2 ○、M3 ●	老齢	なし?	茶褐色 viv	M1 歯冠最大長: 18.66、 M1 歯冠最大幅: 7.26、 M2 歯冠最大長: 7.12、 M2 歯冠最大幅: 6.96、 P3 歯冠最大長: 7.65、 P3 歯冠最大幅: 4.16、 P4 歯冠最大長: 9.26、 P4 歯冠最大幅: 5.02、全長: 108.22	18.20	16-1、3、4、5、6、7と同一個体、切歯と犬歯が著しく摩耗している
81	36	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	R	完形 (角突起一部欠損) I1 ×、L2 ×、I3 ×、C ○、P1 ○、P2 ○、P3 ○、P4 ○、M1 ○、M2 ○、M3 ×	M1 先端部咬耗開始、成~老齢	なし?	茶褐色 viv	-	28.59	P3P4M1 歯槽膿漏、歯頸部露出
82	37	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	L	完形 (角突起一部欠損) I1 ×、L2 ×、I3 ×、C ○、P1 ○、P2 ○、P3 ○、P4 ○、M1 ○、M2 ○、M3 ×	M1 先端部咬耗開始、成~老齢	下顎体偽切創+なし?	茶褐色 viv	P1-P2 (歯冠部): 58.20、 P2-M2 (歯冠部): 54.30、 P3-M2 (歯冠部): 46.00、 P4-M2 (歯冠部): 35.94、 M1-M2 (歯冠部): 26.77、 P1-M3 (歯冠部): 62.045、 M1-M3 (歯冠部): 30.02、 M1-M2 (歯冠部): 26.76、 P1 歯冠長: 3.91、P1 歯冠幅: 3.04、 P2 歯冠長: 7.46、P2 歯冠幅: 3.63、 P3 歯冠長: 8.96、P3 歯冠幅: 4.20、 P4 歯冠長: 10.43、P4 歯冠幅: 5.30、 M1 歯冠長: 19.96、M1 歯冠幅: 7.70、 M2 歯冠長: 7.25、M2 歯冠幅: 6.00、 C 歯冠長: 8.75、C 歯冠幅: 5.31、 関節突起最大幅: 22.33、 下顎体 M1 高: 21.58、 下顎体 M2 高: 21.13	27.94	P3P4 歯槽膿漏、歯頸部露出、P4とM1の重なりが大きい
83	16-5	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	第1頸椎	M	完形 (横突起一部欠損)	f	なし?	茶褐色 viv	Bf cr: 31.60、 最大高 (前位): 21.42、 後位関節最大長: 21.10	5.18	16-1、2、3、4、6、7と同一個体
84	16-6	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	頭蓋骨	L	前頭骨	uf?	なし?	茶褐色 viv	-	3.20	16-1、2、3、4、5、7と同一個体
85	34	河道1	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	肋骨 (第4)	R	近位端+骨幹部	p : f	なし?	茶褐色 viv	Pb : 5.38	2.12	
86	16-3	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	頭蓋	R	上顎骨、頬骨、I1 ×、I2 ×、I3 ×、C ○、P2 ○、P3 ○、P4 ○、M1 ●	P4 端部咬耗	?	茶褐色 viv	C 最大長: 32.48、 C 歯冠最大長: 8.03	11.30	16-1、2、4、5、6、7と同一個体
87	16-4	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	頭蓋	LR	側頭骨、後頭骨 (顆)	f	?	茶褐色 viv	後頭頭関節最大横幅: 29.68、 後頭高最大幅: 15.37	6.79	16-1、2、3、5、6、7と同一個体
88	16-7	河道1 灰色粘質土 骨②	弥生後期後半	哺乳綱	イヌ	頭蓋	L	骨幹部破片、側頭骨若用部	?	?	茶褐色 viv	-	合計 6.72	16-1、2、3、4、5、6と同一個体

附編 自然科学的分野における分析・鑑定

整理番号	旧番号	遺構名	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調・風化	計測値(mm)	重量(g)	備考
89	35	河道1内 貝塚	弥生後期後半	哺乳類	イヌ	頭蓋	LR	完形(鼻骨、前頭骨、頬骨、側頭骨、後頭骨、頭頂骨、上顎骨) L: I1 ×、I2 ×、I3 ○、C ○、P1 ●、P2 △、P3 ○、P4 ○、M1 ○、M2 ○ R: I1 ×、I2 ×、I3 ○、C ×、P1 ×、P2 △、P3 ●、P4 ○、M1 ○、M2 ×	P4先端部咬耗開始	なし?	茶褐色 viv	後頭額最大幅:30.96、後頭高最大幅:36.22、L:158.82、2:148.92、L;P3-M2歯冠長:40.62、P4-M2歯冠長:31.28、M1-M2歯冠長:17.38、P3歯冠長:19.02、P3歯冠幅:4.18、P4歯冠長:16.41、P4歯冠幅:8.54、M1歯冠長:12.94、M1歯冠幅:14.00、M2歯冠長:5.82、M2歯冠幅:8.90、cet-cet:(42.63)、ent-ent:37.76、頭蓋最大幅:57.66、P1-P1(歯槽部):29.32、C-C(歯槽部):(30.70)	91.39	
90	14	河道1 骨①	弥生後期後半	哺乳類	イノシシ類	寛骨	R	寛骨白	d、p:f	恥骨cm(D1a)3条以上)SPイヌ嚙痕	茶褐色 viv	CL:34.89	46.45	
91	21	河道1 骨⑩	弥生後期後半	哺乳類	イノシシ類	犬歯	R	歯冠部+先端部	全面腐	SP(遠位端)	茶褐色 viv	-	21.92	
92	19	河道1 骨⑦	弥生後期後半	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	R	骨幹部+遠位端	d:f	遠位端滑車cm(D1a)sp(d1a)	茶褐色 viv	Db:43.00、Dd:41.13	47.25	
93	32	河道1	弥生後期後半	哺乳類	イノシシ類	肋骨	L	骨幹部	?	骨幹部内側・外側cm(D1a)多数	茶褐色 viv	-	7.42	
94	8	河道1	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	L	下顎体M3○、M2○、頰側	M3萌出	?	ノーマル	M3咬合面長:(25.45)	208.45(土ごと)	
95	11	河道1 拡張	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	L	P2○、P3○、P4○、M1○、M2○、M3○、I1×、I2×、I3×、I4×、完形(下顎角関節突起一部欠損)	M1:小窩連結	筋突起、関節突起cm(Aa)、頰側下顎体(偽切削)	茶褐色 viv	M1-3咬合面長:50.43、M1-3歯槽長:52.46、M1咬合面長:14.18、M1咬合面幅:9.82、M1歯冠幅:10.13、M2咬合面長:16.78、M2咬合面幅:9.70、M2歯冠幅:11.06、M3咬合面長:21.15、M3咬合面幅:9.08、M3歯冠幅:11.15	77.56	
96	31	河道1	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	基節骨	r	完形	d、p:f	イヌ嚙痕	茶褐色 viv	PH:18.60、GL:47.56、Pb:15.36、Db:13.16	6.75	
97	17	河道1 部材内 骨④	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	距骨	R	完形	f	なし?	茶褐色 viv	GI:36.85、Glc:34.36、Gw:26.52	14.20	
98	10	河道1 土器溜まり3	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	遠位端+骨幹部	M1:小窩独立	骨幹部cm(C1a)	茶褐色 viv	Db:35.05	18.35	
99	20-1	河道1	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	上顎骨	L	dm3○、M1○、M2○、M3×、P2▽、P3▽、P4▽	M1:小窩独立	なし?	茶褐色 viv	M1-2咬合面長:33.00、M1咬合面長:16.38、M1咬合面幅:11.45、M1歯冠部:14.72、M2咬合面長:18.14、M2咬合面幅:11.72、M2歯冠部:13.74	32.56	100と同一個体(接合)
100	20-2	河道1 灰色粘質土	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	上顎骨	R	dm1○、dm2○、dm3○、M1○、M2○、M3×	M1小窩独立	なし?	茶褐色 viv	dm1-dm3咬合面長:32.92	33.48	99と同一個体(接合)
101	69	河道1内 貝塚3	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	遠位端	d:f	イヌ嚙痕:骨幹部	茶褐色 viv	Db:40.66	21.16	
102	15	河道1 骨③	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨	R	骨幹部	?	?	茶褐色 viv	SD:18.34	36.58	
103	12	河道1 建築部材直上	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	R	近位端+骨幹部	p:f	骨幹部に押圧剥離(剥離幅5-10mm)、イヌ嚙痕(近位端)	茶褐色 viv	PD:26.58	18.88	
104	23	河道1 灰色粘質土	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	角	R	角幹部	若齢	なし?	茶褐色 viv	Sd:19.94	6.16	落角
105	28	河道1 (砂礫層下まで)	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	L	骨幹部	?	なし?	茶褐色 viv	-	15.92	
106	30	河道1 中央トレンチ掘下中	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	R	骨幹部+近位端(一部欠損)	p:f	一部欠損	茶褐色 viv	-	8.73	
107	29	河道1 中央トレンチ掘下中	弥生後期後半	哺乳類	ニホンジカ	肋骨(第一)	L	骨幹部+近位端	p:f	骨幹部内側cm(D1a、D3a)	茶褐色 viv	-	4.17	
108	38	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳類	ネズミ科	寛骨	L	腸骨、坐骨、恥骨、寛骨白	f	なし?	茶褐色 viv	-	0.03	
109	59	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳類	ネズミ科	肩甲骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	なし?	茶褐色 viv	前位最大高:4.96、脛部最大高:3.16	0.08	
110	67	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳類	ネズミ科	上腕骨	R	骨幹部+遠位端	d:f	なし?	茶褐色 viv	Db:6.71、SD:2.17	0.21	
111	45	河道1内 貝塚1	弥生後期後半	哺乳類	小型	尾椎	M	完形	f	なし?	茶褐色 viv	-	0.02	

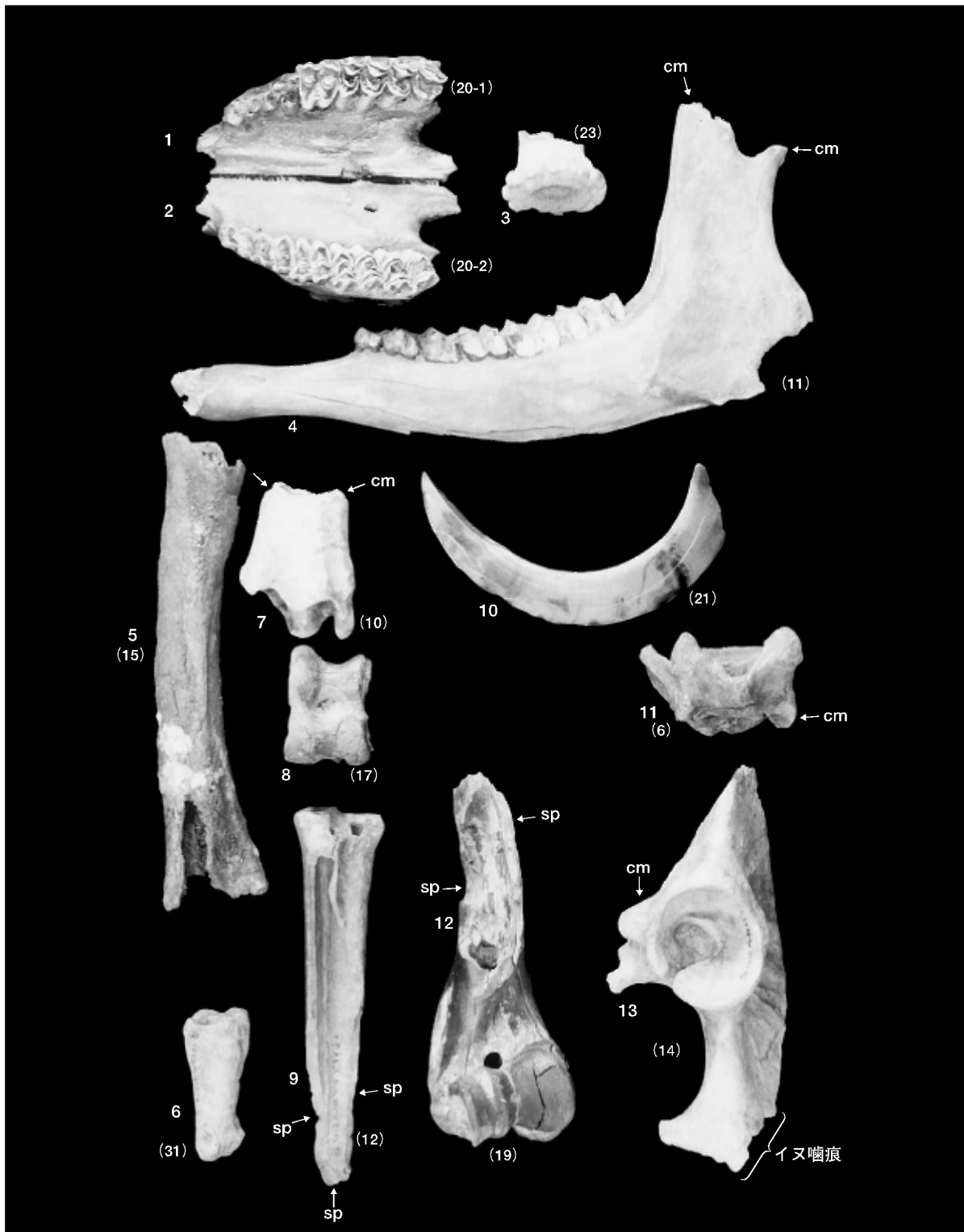
計測部分の略称は Driesch (1976) に従う。
色調・風化欄の viv は藍鉄鉱の析出を示す。



第1図版

出土動物遺体 (Scale : 70%)

1 - 2. アカニシ (1. 殻軸 2. 殻質) 3. オオタニシ (殻質+殻皮) 4. カワニナ (殻質+殻皮) 5. チリメン
 カワニナ (殻質+殻皮) 6. カワアイガイ (殻質) 7 - 9. マガキ (7. 殻質 8. 殻質 9. 殻質) 10. イタボガ
 キ科 (殻質) 11. ナミマガシワガイ (殻質) 12-13. ハイガイ (12. 殻質+殻皮 13. 殻質) 14. サルボウガイ (殻
 質) 15. ヤマトシジミ (殻質+殻皮) 16-17. サメ類 (椎骨) 18-19. エイ目 (椎骨) 20. ボラ科 (主鰓蓋骨)
 21. マダイ (口蓋骨) 22. ギギ (胸鰭棘) 23. カエル目 (大腿骨) 24. ヘビ科 (椎骨) 25. カモBタイプ 16.
 キジ属 (上腕骨) 17. ネズミ科 (上腕骨)



第2図版

出土動物遺体 (Scale : 66%)

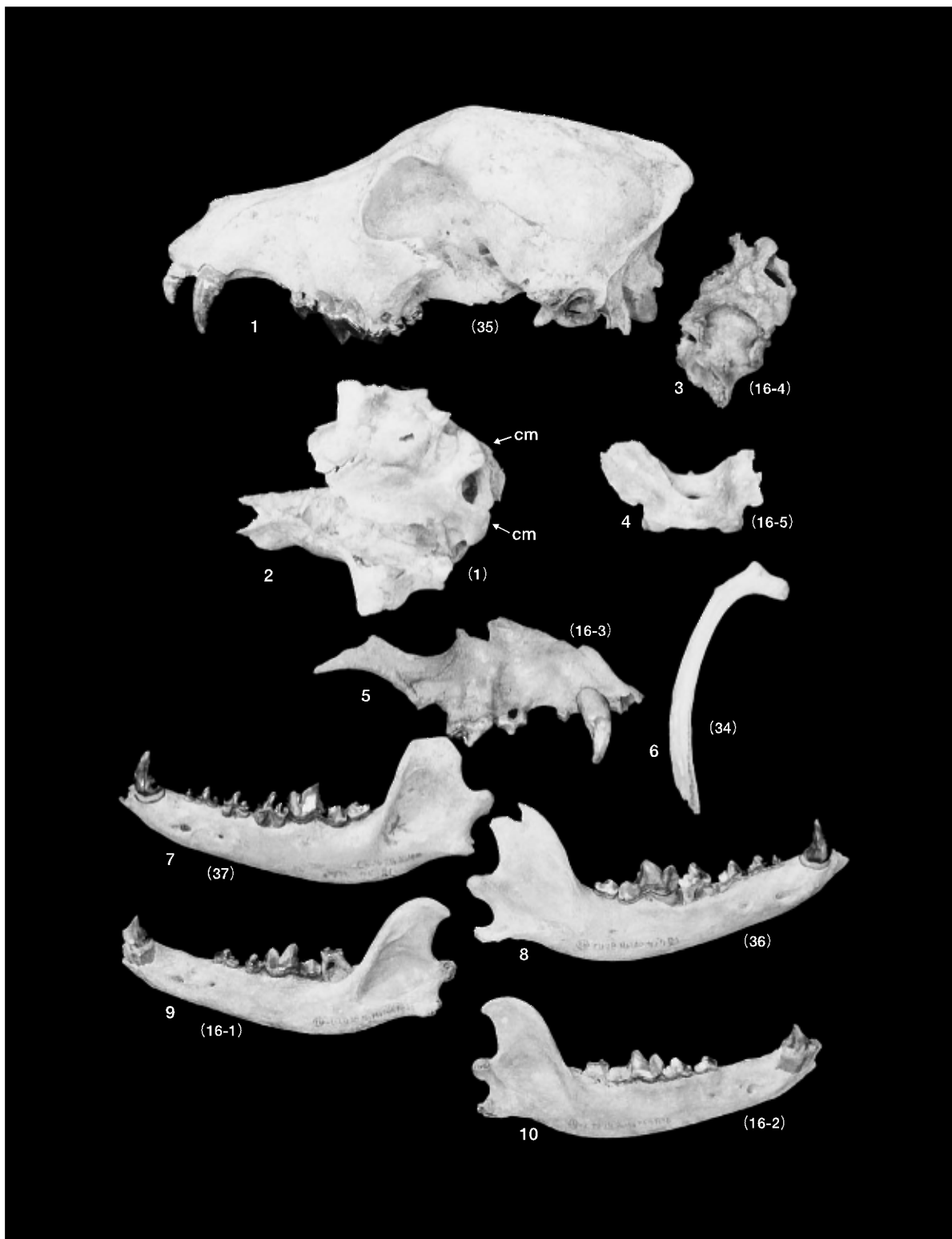
1-9 : ニホンジカ (1-2. 上腕骨 3. 角 4. 下顎骨 5. 大腿骨 6. 基節骨 7. 脛骨 8. 距骨 9. 中手骨) 10-13. イノシシ類 (10. 犬歯 11. 頸椎 12. 上腕骨 13. 寛骨)



第3図版

出土動物遺体 (Scale : 66%)

1 - 4. ニホンジカ (1. 上腕骨 2. 肋骨 (第1) 3. 肋骨 4. 肋骨) 5. イノシシ類肋骨 6 - 7. ウシ (6 : 脛骨 7 : 上腕骨) 8 - 10. ウマ (8. 臼歯 (上顎) 9. 臼歯 (下顎) 10. 中節骨)



第4図版

出土動物遺体 (Scale : 70%)

1-10. イヌ (1. 頭蓋 (左側面) 2. 頭蓋 (頭蓋底) 3. 頭蓋 (側頭骨・後頭骨) 4. 第1頸椎 5. 頭蓋) 6. 肋骨R (第4) 7. 下顎骨L 8. 下顎骨R 9. 下顎骨L 10. 下顎骨R)

津島遺跡出土炭化物の識別

東京大学総合研究博物館 松谷 暁子

はじめに

岡山市津島遺跡の弥生後期の河道1から出土した炭化物の識別を依頼され、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡での観察を行った。炭化物は2種類あり、一つは弥生土器に交じって出土した米粒大種子の塊状炭化物であり、もう一つは、弥生土器の内面に付着した炭化物である。

I 塊状炭化物

米粒大の粒が塊状になった炭化物は2点見いだされ、その中の一つが送付され、識別を試みた。送付された塊の大きさは、長さ約5.5cm、幅が約5cm。厚みが約3cmくらいである。

肉眼での観察で、米粒大の粒が多数癒着したものがほとんどと見られるが、茎状の炭化物も認められる。米粒状の粒がはたしてイネであり、その他の穀類などが混在していないものかどうか、また茎状のものが何かということの識別を依頼されたものである。

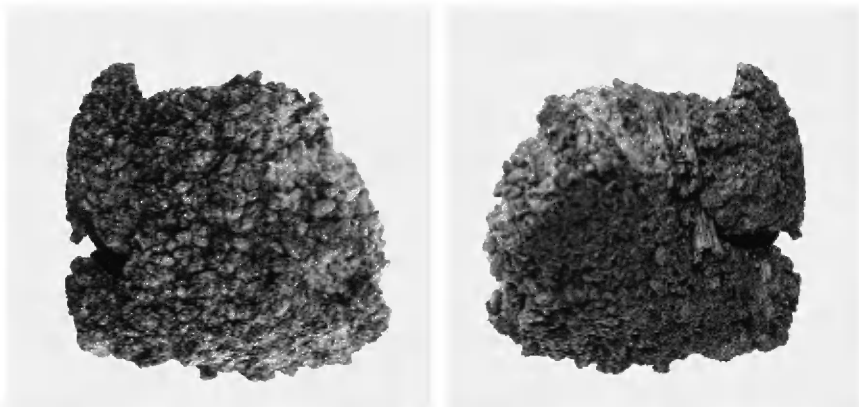
方法

実体顕微鏡による観察を主としたが、茎状の組織構造や粒の一部などについて、走査型電子顕微鏡(SEM)による観察を行った。

実体顕微鏡による観察

最初に塊を分割し、各方向から実体顕微鏡による観察を行った。

塊を小さくくずした時、表面や断面に観察される粒は、様々な方向を向いており、正確な大きさを計測するのは困難であるが、長さが約4mm、幅が2.5mmくらいと判断される。外形は卵形に近く、中央には穎を除去した状態のイネ粒に見られるような、上下方向に2本のすじが認められる粒があり、大きさや外形からイネ粒と推察される。表面が壊れている粒も多く、方向も様々であるが、大きさや原形が同じと推定され、オオムギ、コムギ、あるいはより小さなヒエ、アワ、キビなど、イネ以外の



塊状炭化物

粒と判断されるものは認められなかった。従って、粒状の炭化物は、どれもイネと考えても差し支えないと考えられるが、イネの穎、すなわち籾殻は見出されなかった。胚の存在の有無もはっきりしない（写真1～3）。

塊に混在している莖状炭化物の長さは12～15mm、幅は5mmくらいのもので、所々に散在しているが、数量はそれほど多くない。塊から剥がしたものの横断面を観察すると、実体顕微鏡下でも小さな導管の存在が認められたので、イネ藁などではなく、樹木である。樹種はわからないが、針葉樹ではなく、広葉樹の一種と判断される（写真4～6）。写真に示したものの以外の他の莖状炭化物も類似の構造を示していた。

走査型電子顕微鏡での観察

莖状炭化物の一つを走査型電子顕微鏡で観察したところ、横断面は明瞭な像が観察できなかったが、接線断面が観察され、放射組織はほとんど単列で、2列放射組織も存在し、導管は単穿孔であった（写真7～10）。実体顕微鏡で横断面の小導管の配列が火炎状に配列しているように見えたため、大きな導管の部分は含まれていないが、ブナ科のクリまたはシイ、またはコナラなどの一部ではないかと推定していたが、ごく若い小枝ということもあり、樹種をはっきりさせることはできなかった（写真7、8）。

塊から剥がれた粒についても走査型電子顕微鏡での観察を行ったところ、粒の表面と思われる構造や、胚の部分が残っていた（写真11～14）。

結 論

多数のイネ粒と少数の細かい樹木破片（広葉樹）から構成されていると判断される。

イネ粒には、穎は全く観察されなかったが、胚が残っている粒が観察され、玄米の状態と判断される。イネ粒と樹木片以外の夾雑物の存在は認められなかった。

考 察

筆者がこれまで報告した他遺跡出土炭化粒の塊について述べると、岡山県の試料では、久田原遺跡から出土した炭化物がある（未刊行）。時代は津島遺跡より新しく、7世紀の、棺材と考えられる板状の炭化物に付着した粒の塊で、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察を行い、イネ粒の塊が炭化したと推定した。塊のおおよその大きさは、長さ5cm、幅2.5cm、厚さ2cmくらいであり、津島遺跡の試料とほぼ同じくらいである。

神奈川県大塚遺跡では弥生後期の複数の住居址から炭化した種子塊が出土しているが、どの塊もイネ粒だけから構成されていて、穎すなわち籾殻が残存していた（松谷 1994）。

神奈川県本郷遺跡でも、掘立柱建物址など、奈良・平安時代の複数の遺構から、イネ粒だけから構成された塊が出土し、この場合もイネ粒には穎が残存していた（松谷 1991b）。

このように、イネ粒が炭化して塊状になったものが見いだされる場合には、穎が残存している場合と残存していない場合があり、前者の場合は、収穫後、籾を付着した状態で貯蔵されていたと推定することができる。しかし、後者の場合、つまり、籾が除去された状態は、生の状態だったのか、あるいは煮炊きされた後の状態だったのだろうか。茨城県弥生時代の十王台遺跡から出土したイネ粒は、塊状ではなく、一つ一つの粒の形態も生のイネ粒の形態とは異なり、熱による変形を受けた状態を示していると考えられる（鈴木・松谷・片平 1999）。茨城県武田西塙遺跡の平安時代の住居址から出土したおにぎり状の炭化物から遊離した玄米粒も細長い形態をしており、煮炊きされた状態を示して

いるように思われる（松谷 1993 b）。それらに比べると津島遺跡から出土した塊状のイネ粒は煮炊きされてはいない状態であったと考えられるが、塊のところどころに、細い樹木片が混在している。この状況は、何を意味するのだろうか。樹木由来の破片の周辺の粒は、形態がつぶれているように見受けられるが、粒が集まっている部分の粒は、比較的原形をとどめているように思われる。いずれにせよ、類例が増えるのを待つべきなのであろう。

II 土器付着炭化物

炭化した付着物が認められる弥生後期土器が出土し、付着物の識別を依頼された。破片を中心として送付された試料は以下の10点である（写真51～62）。炭化物が付着した土器破片の数は試料により異なり、1破片のみの試料が5点、2～5破片が接合したものが3点、13片、あるいは15片と多いものが2点あった。

試料番号	破片の数	底部と口縁部の有無		肉眼で観察される付着状況
		底部	口縁部	
No.1	1	○	×	棒状の炭化物
No.2	2片接合	×	×	繊維状
No.3	1	×	×	
No.4	3片接合	○	×	繊維状
No.5	5片が接合して2破片	○	×	繊維状
No.6	1	○	×	
No.7	15片	○	○	繊維状
No.8	13片	○	○	
No.9	1	○	×	
No.10	1	○	×	

土器の種類はすべて鉢とのことである。底部を含まないものは2点だけで、底部を含むものが圧倒的に多い。付着物の部位は底部から5～8cmくらいの高さのところが多いが、No.5の付着物は、底部の中心に認められた。

肉眼で観察される付着物は、きわめて薄い炭化物が一面に付着しているものが多い。No.5やNo.7の付着物はやや厚いが、それでも一番厚くて2mmぐらいである。付着物の色は黒色が多いが、白い部分も存在する。付着物の形態は、肉眼で細長い繊維状あるいは、棒状の外形が認められるものが存在するが、穀粒状の外形を示すものは認められない。

No.8の試料は、未洗浄で送付されたので、静かに泥を洗い流し、水洗後の浮遊炭化物も金網にガーゼを敷いたもので漉し、自然乾燥させた。

方 法

最初に実体顕微鏡で付着物の観察を行い、その後、付着物の一部を剥がして、試料台に接着し、走査型電子顕微鏡で観察と撮影を行った。

実体顕微鏡観察の結果

実体顕微鏡（ライツ社ウイルド）で付着物の部分の観察と撮影を行った。

肉眼で認められた棒状や繊維状の炭化物の他に、連続した大きな乳頭突起が特徴的な、イネの粉片と考えられる細片が比較的多く見いだされた（写真15～21、23）。イネの粉片と考えられる破片が見いだされたのは、No.1、No.2、No.4、No.5、No.6、No.7、No.8であり、破片数が15片と多いNo.7では、約半数の破片で粉片が観察された。

No.2の付着物のイネ粉は、No.5やNo.7に比べると多いとはいえないが、No.4やNo.7ではイネ粉が非常に多く、繊維状に丸まったものもイネ粉と予想されるものが多い。No.7とNo.8の口縁部にも、イネ粉片が観察された。

走査型電子顕微鏡の結果

実体顕微鏡で粉片と考えられるもの、繊維状、茎状などの付着物を剥がして、アルミの試料台に接着し、白金バナジウムを蒸着後、走査型電子顕微鏡（日立S-4500）で、観察と撮影を行った。

実体顕微鏡で粉片と予想された、乳頭突起が特徴的な破片はイネの粉の特徴を示し（写真27～37、41）、裏側になった状態のものも観察された（写真39～40）。

一方、試料5では、一見イネ粉に似ているが、イネではなくアワの穎が観察された（写真45～48）。ヒエやキビと異なり、イネの穎やアワの穎には乳頭突起が存在するが、大きさや形態は異なる。また、乳頭突起の配列が、アワでは横方向、イネでは縦方向に観察される。イネ穎には、大きな毛が存在し、毛が消失しても、円形の毛の跡が存在する（写真28、31、37）。No.5の付着部の他の場所を剥がして、再びSEM観察を行った結果もアワの穎の組織が観察された（写真49～50）。さらにアワでは、通常外穎に覆われている内穎で、乳頭突起のない部位が認められるが、その構造も別の付着破片で観察された（写真50）。従って、No.5で最初に観察されたアワ穎は、たまたま紛れ込んだのではなく、土器に付着していたもの、つまり付着物の正体であると考えられる。しかし、アワとイネの乳頭突起の識別は困難な場合があり、薄い付着物のNo.10から検出された乳頭突起は、アワの穎なのかイネの穎なのか判断が難しい（写真38）。

No.1、No.7、No.10で認められた茎状の組織は、刺毛細胞が少々存在するが、ほとんど長い細胞から構成されている（写真42～44）。イネの葉や茎、あるいはアワの葉や茎に相当する形態は認められない。識別の手がかりが少ないが、イネ粉と共存することが多いので、小穂の一部の可能性が考えられる。そこで、現生イネ（秩父神社伝来赤米）の小穂の各部分について比較を行ったところ、ノゲの組織がもっとも類似することが判明した。

実体顕微鏡による再観察

走査型電子顕微鏡（SEM）による観察の結果、No.5では予想外にアワ穎の組織が数多く認められた。これは肉眼や実体顕微鏡による観察では予想されなかったことである。また、棒状の炭化物の観察もSEMによる観察がなくては困難である。このように、炭化物に対してはSEM観察の効果がきわめて大きいことは明らかである。

しかし、SEMでの観察は準備にも観察にも時間を要し、一度に観察できる範囲も限定される。従って、広範囲に、また数多くの試料を観察するには、実体顕微鏡での観察を活用することが必要である。そこで、再び実体顕微鏡での観察を行った。

まず、問題となるのは、アワやイネの穎だけが付着していたのかである。しかし、実体顕微鏡での観察結果、アワやイネの穎だけが密集していたわけではなく、穎に包まれた穎果が存在した可能性がきわめて大きい。しかし、熱に強い珪酸の多い穎の表皮細胞と異なり、粒、すなわち穎果の表皮細胞

を、加熱や圧力を受けた後に明瞭な形態で観察するのは、たとえ SEM 観察を実施したとしても困難であることが予想され、むしろ、実体顕微鏡での観察によって何らかの痕跡を認めることができる可能性が大きい。

そこで、アワの穎が見いだされたNa.5について、アワの存在の可能性を念頭に置いて注意深く観察した。その結果、アワの穎破片の他、アワ穎果に相当する大きさの粒の存在を示す像を見つけることができた（写真24の中央）。

次に問題とすべきは、アワとイネが同じ土器破片で共存している可能性である。

SEMでアワ穎が検出されたNa.5の土器片も、イネ粉と思われる破片が実体顕微鏡では観察されていた。アワ穎をイネ粉と見間違えた疑いも考えられるので、あらためてNa.5の破片を再観察したところ、少ないながらイネ粉も存在することが、実体顕微鏡で再確認された（写真23）。

そうすると、イネ粉が観察された他の試料でもアワ穎が存在している可能性も考えなくてはならない。そこで、イネ粉の存在がSEMで確認された他の試料でのアワの存在の可能性を求めて、実体顕微鏡での観察を再び行った。その結果、少なくともNa.7で、アワ穎の存在が可能と推定される（写真22）。Na.2、Na.4などでも、アワ穎の存在が可能と推定される。

Na.10で観察された乳頭突起は、イネかアワかのどちらか確認するのは困難であるが、ノゲに類似する構造が認められ、少なくともイネの存在は確かで、アワの存在も可能性が考えられる。しかし、Na.1やNa.6では不確実であり、Na.3、Na.8、Na.9でも、アワの存在を確認することはできなかった。

以上のことから、少なくとも一つの土器では、部分的にせよ穎が残存したアワとイネが、土器の中で共存していて、加熱による炭化で土器の内面に付着したことが推定される。しかし、アワに比べて粒の大きいイネについては、比較的多くの穎が認められる土器片が認められるものの、イネ粒の存在を確認するのは困難であった。

結 論

土器に付着した炭化物には、イネの穎の破片が識別されたものが多く、10試料のうち、Na.1、Na.2、Na.4、Na.5、Na.6、Na.7、Na.8、Na.10の8試料で観察された。

Na.5試料では、アワの穎の存在も確認された。アワは穎だけが存在していたのではなく、粒の存在が推定された。

棒状の炭化物には、茎状のものが観察されるが、イネの葉や茎ではなく、ノゲと考えられる。従って、ノゲのある品種の籾殻が付着していたということになる。

材の構造を示す付着物は認められなかった。

底部より5～10cmくらい上の部分に厚い付着物が多く、識別されたものもその中に多かった。しかし口縁部のある、Na.7、Na.8の付着物でもイネ粉片が認められた。また、Na.5では、底部中心部に付着物が多く認められた。

考 察

津島遺跡の河道から検出された穀粒の塊状炭化物は、元来土器に入っていたものが、塊の状態を外に脱落したのではないかと考えられているが、顕微鏡による観察の結果、イネ粒の塊に小枝破片が混在していることが明らかになり、イネ粒には穎の残存が全く認められなかった。

ところが、同じ河道から出土した土器に付着した炭化物のほうは、観察した試料数が10試料で、塊状炭化物に比べて数が多いという点で差異があるかもしれないが、粒の外形は明瞭ではないものの、

イネ籾破片が残存している土器片が8試料、しかもノゲの存在もほぼ確実である。アワ類が検出された試料が1試料あり、しかも、この試料では、イネ籾とアワ類の両方が認められた。このことはどのように解釈できるだろうか。土器によって違うというのが最も簡単な説明と言えるかもしれない。

さて、津島遺跡の土器付着物の観察より前、弥生後期の倉敷市上東遺跡から出土した、外形が穀粒状の炭化物が観察された土器付着物の識別を依頼され、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察を行った結果、付着物の正体は、イネ粒と多分アワ粒と考えられる雑穀粒であり、イネと雑穀粒が同じ土器片に混在している痕跡が認められた(松谷 2001)。

上東遺跡と津島遺跡とは、同じ岡山県弥生時代後期で、地域も時代もほぼ同じであり、イネ粒と雑穀粒(アワ)が付着していたという点が共通している。しかし、付着物の残り方は大いに異なっている。倉敷市上東遺跡では、イネや雑穀粒の外形がはっきりしているのに穎の組織がほとんど観察されなかったため識別に苦労したが、今回観察した津島遺跡の土器付着物は、イネもアワも穎の保存がきわめて良く、外見から予想されたよりは、多くの穎が検出された。しかも、実体顕微鏡で観察したときは、イネ籾ばかりが目立っていたが、走査型電子顕微鏡でアワの穎が観察され、あらためて実体顕微鏡で付着物を広範囲に観察したところ、この試料では意外にアワが多く含まれており、しかもイネ穎も観察された。上東遺跡の土器付着物でも、一つの土器にイネとアワが共存して検出されていたが、津島遺跡でも少なくとも一つの土器(No.5)で、アワとイネが同じ土器に付着していることを確認することができた。

さて、アワ、ヒエ、キビなどの小さな穀粒、いわゆる雑穀粒が遺跡から検出され、識別される例は、イネに比べるときわめて少ない。

弥生時代の福岡県立岩遺跡からはじめてアワが識別されたのは、日本の遺跡試料に灰像法を適用した故渡邊直経氏による(Watanabe 1970, 渡邊 1981)。

その後、縄文晩期の佐賀県菜畑遺跡(笠原 1982)、弥生中期の福岡県瑞穂遺跡(松本 1980)、弥生前期の山口県綾羅木郷台地遺跡(松谷 1981)など、九州やその近辺でイネとアワが共存している報告例が多い。

近畿地方でも弥生中期の鬼虎川遺跡でイネと共に炭化アワが識別されている(笠原1984)。しかし、土器付着物や土器の中からアワが検出された例は、これまでに上東遺跡と津島遺跡だけと思われる。大阪府の美園遺跡から出土した弥生土器片には、白や黒の灰が付着していたのを光学顕微鏡で観察したところ、イネの籾殻の灰像が検出された(松谷 1985)。

関東の遺跡試料でも、千葉県中郷谷遺跡では、弥生後期の住居跡から出土した土器の中から見いだされた炭化粒の塊には穎が残存しており、イネとキビの2種類の穀物が識別されている(松谷 1993 a)。この場合、量的にはイネが少なく、キビが多かった。

茨城県武田遺跡の古墳時代の土器から検出された炭化物の塊の場合も、穎が残存しており、中郷谷遺跡と同じく、同じ土器からイネとキビが識別されている(松谷 1991 a、松谷 1993 b)。これらのイネやキビも、珪酸の多い穎が残存していたために、識別が比較的容易であった。

以上の例から考えると、弥生時代や古墳時代には、イネだけ、あるいはアワやキビなどの雑穀が単独で煮炊きされただけでなく、混合された状態で煮炊きあるいは、保存された場合も多かったことを示している。今後、このような点に注目して、出土穀類を調べる必要があるであろう。

さて、縄文土器の付着物で識別されているのは、ニワトコの種子(笠原・藤原 1986、松谷 1999)

やユリ科の球根類（松谷 1989他）など、野生植物が多いのに対し、弥生時代の土器付着物は、上東遺跡や津島遺跡の例に見るように、イネや雑穀など栽培植物の存在が多くなる。土器に残された炭化物が何に由来するかを知ることは、土器の用途を知るためばかりではなく、土器が利用された時代に、どのような植物がどのように利用されたのかを知るためにもきわめて興味深いと思われる。もちろん土器の利用は植物に限られるわけではないが、植物の存在が予想される場合に一つの方法として、顕微鏡による観察を行って植物の組織の一部を検出することができ、その形態的特徴によって植物の種類を識別あるいは推定することができれば、その時代にどのような植物が利用されたかを知ること大いに役立つことが示されたと言えよう。

引用文献

- 笠原安夫 1982 菜畑遺跡の埋蔵種実の分析・同定研究－古代農耕と植生の復元。「菜畑遺跡 分析・考察編」 唐津市教育委員会、354-379。
- 笠原安夫 1984 鬼虎川遺跡の第7次発掘における植物種実の検出と炭化アワ、カブ種子の出土について。「鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3－遺構編－」 財団法人東大阪市文化財協会、49-54、図版61-62。
- 笠原安夫・藤沢浅 1986 米子市目久美遺跡の土器片の植物同定。「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、96-97。
- 松谷暁子 1981 綾羅木郷台地遺跡の灰像分析。「綾羅木郷台地遺跡Ⅰ」、554-556、下関市教育委員会
- 松谷暁子 1989 水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について。「花鳥山・水呑場北遺跡」山梨県教育委員会、143-145。
- 松谷暁子 1991 a 武田遺跡群出土の植物遺残の識別。「武田Ⅳ－1990年度武田遺跡群発掘調査の成果－」、勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告書5、109-113。
- 松谷暁子 1991 b 海老名本郷遺跡出土炭化植物遺残の識別。「海老名本郷（Ⅷ）」、288-293、本郷遺跡調査団。
- 松谷暁子 1993 a 中郷谷遺跡出土炭化粒について。(財)君津郡市文化財センター 年報10、66-71。
- 松谷暁子 1993 b 武田西埜遺跡(1992)出土植物遺残について。「武田Ⅵ－1992年度武田遺跡群発掘調査の成果－」(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告8、108-117。
- 松谷暁子 1994 大塚遺跡出土炭化種子について。「大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ－遺物編」、451-456、(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター。
- 松谷暁子 1999 是川中居遺跡出土の植物遺残について。「是川中居遺跡－八戸市縄文学習館建設に伴う発掘調査報告書」 八戸市教育委員会、63-67。
- 松谷暁子 2001 上東遺跡出土土器付着炭化植物遺残の識別。「下庄遺跡・上東遺跡 第2分冊」 岡山県教育委員会、7-23。
- 松谷暁子 未刊 久田原遺跡出土炭化種子の識別。岡山県教育委員会。
- 松本豪 1980 瑞穂遺跡の出土の種子類について。「瑞穂 福岡市比恵台地遺跡」日本住宅公団九州支社。183-220。
- 鈴木素行・松谷暁子・片平雅俊 1999 十王台のコメ。十王台民俗資料館紀要8、1-33。
- 渡邊直経 1970 A Spodographic analysis of millet from prehistoric Japan. 東京大学理学部紀要V-3類、357-379。
- 渡邊直経 1981 遺跡の灰から穀物を探る－灰像による鑑別。「考古学のための化学10章」(馬淵久夫・富永健編)、東京大学出版会、201-219。

写真図版説明

図版Ⅰ 塊状炭化物の実体顕微鏡写真

- 1 炭化粒塊の一部：比較的外形の保存が良い部分。
- 2 炭化粒塊の一部：粒の表面の保存が良くないが、大きさや外形は推定できる粒が観察される。
- 3 炭化粒塊の一部：粒の表面の保存が良くないが、大きさや外形は推定できる粒が観察される別の部分。
- 4 茎状炭化物が認められる部分。
- 5 茎状炭化物が認められる別の部分。
- 6 茎状炭化物横断面の拡大写真。

図版Ⅱ 塊状炭化物の走査型電子顕微鏡写真

- 7 茎状炭化物破片の一部。
- 8 写真7の中央部拡大：少し斜めの横断面。

- 9 写真7の右部分拡大：接線断面での細い導管や放射組織が観察され、放射組織は単列が多いが2列のものも存在し、いずれも同性と思われる。
10 写真9の中央上部拡大：導管が単穿孔であることが示され、側壁の壁孔が観察される。
11 塊から剥離した一部。 12 写真11の右下部拡大写真。
13 塊から遊離した粒の胚に相当する部分。 14 写真13の中央下部拡大写真。

図版Ⅲ 土器付着物の実体顕微鏡写真

- 15 No.2：左中央部にイネ粉片が認められる。 16 No.4：右中央部にイネ粉片が認められる。
17 No.6：中央部にイネ粉片が認められる。 18 No.8：中央部左寄りにイネ粉片が認められる。
19 No.7口縁部破片：中央左寄りにイネ粉片が観察される。
20 No.8口縁部破片：中央部にイネ粉片が認められる。

図版Ⅳ 土器付着物の実体顕微鏡写真

- 21 No.7：中央上部と下部にイネ粉片が認められる。
22 No.7：中央右寄りにアワ穎と推定される破片が認められる。
23 No.5：中央上部にイネ粉が認められる。
24 No.5：中央にアワ穎果、その左寄りにアワ穎の残存が認められる。
25 No.1：下方にイネ粉片が観察される。 26 No.10：粉片などははっきりしない。

図版Ⅴ 土器付着物の走査型電子顕微鏡写真（1）

- 27 No.1の付着物の一部。イネ粉片の乳頭突起が観察された。
28 写真27の左部分の拡大。 29 写真28の左下部の拡大。
30 No.2の付着物の一部。イネ粉片に特徴的な乳頭突起の配列が認められた。
31 No.2の別の付着部に認められたイネ粉片組織。中央下部に毛の脱落跡が認められる。
32 写真31の左部拡大。 33 No.8の付着物で観察されたイネ粉片組織。
34 写真33の中央下部の拡大。
35 写真33の中央部の拡大。
36 No.7の付着部で観察されたイネ粉片組織。
37 写真36の左下部の拡大。
38 No.10の付着物の一部。乳頭突起が観察されたが、イネかアワか不明。

図版Ⅵ 土器付着物の走査型電子顕微鏡写真（2）

- 39 No.4から観察されたイネ粉片組織の裏側からの観察像。
40 写真39の拡大写真。
41 No.6から観察されたイネ粉乳頭突起。
42 No.6から観察されたイネ粉のノゲに類似の組織像。
43 No.10から観察されたイネ粉のノゲに類似の組織像。
44 No.1から観察されたイネ粉のノゲに類似の組織像。
45 No.5から観察されたアワ外穎破片。しわ状の乳頭突起の配列が認められる。
46 写真45の左下拡大。左側に横方向から見た乳頭突起と、裏側の破片が認められる。
47 写真46の左部拡大。 48 写真45の上部、乳頭突起の拡大。
49 No.5の別の付着部。
50 写真49の中央上部の拡大。アワ内穎で乳頭突起の存在しない部分が観察された。

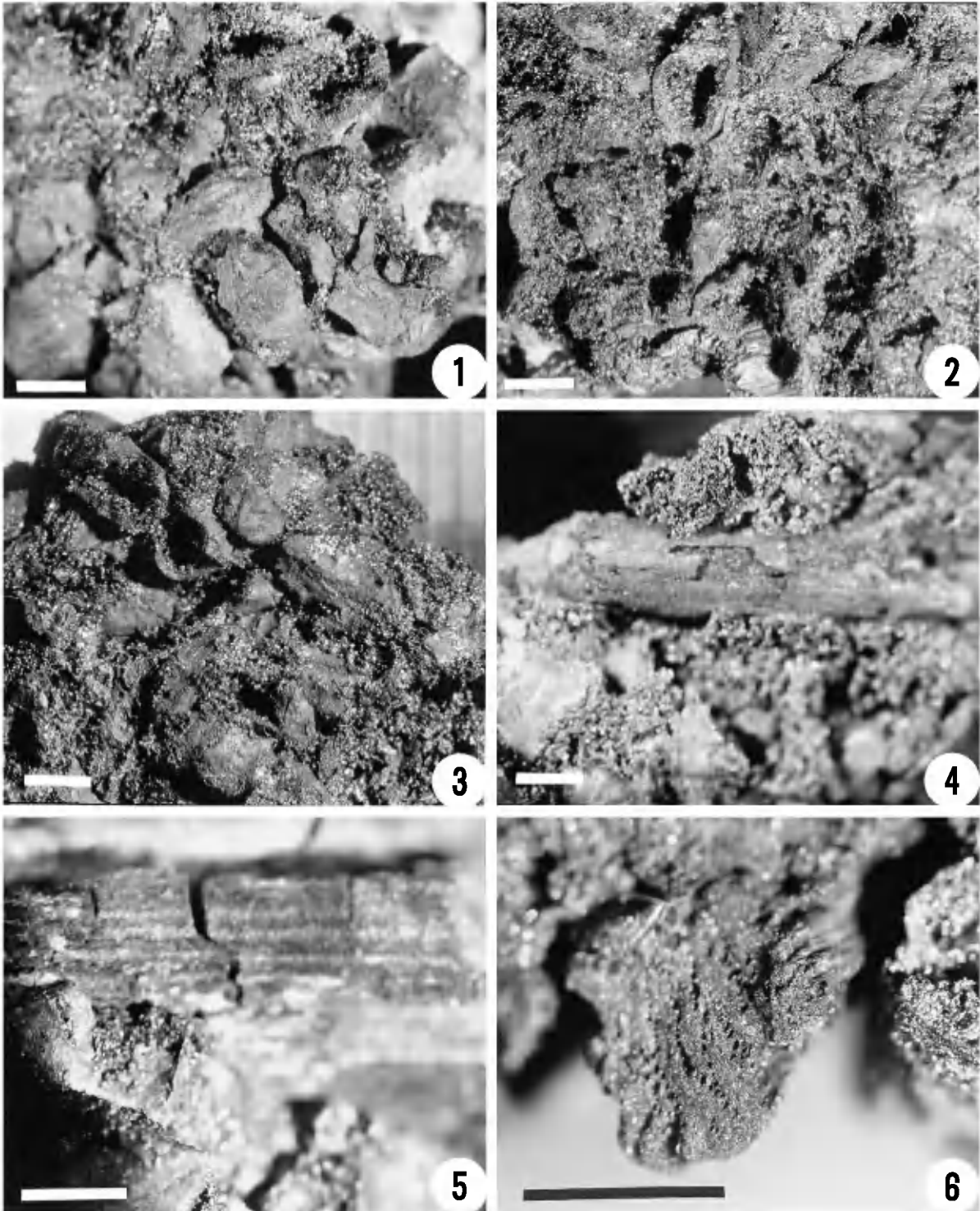
図版Ⅶ 土器片の付着状態（1）

- 51 No.1の付着部。 52 No.2の付着部。
53 No.4の付着部。 54 No.5の付着部。
55 No.7の1土器片の付着部。 56 No.7の口縁部破片の付着部。

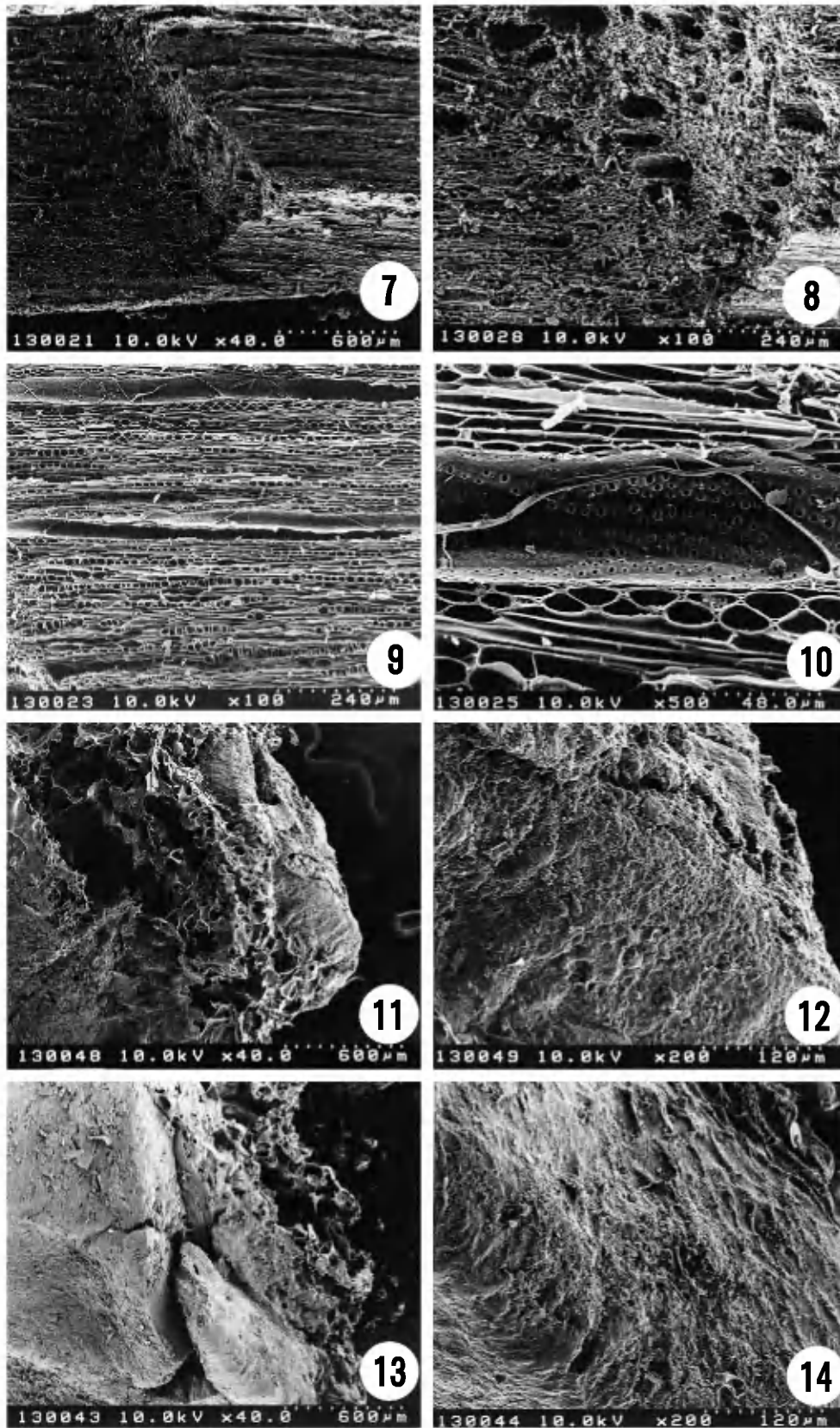
図版Ⅷ 土器片の付着状態（2）

- 57 No.8の土器片の一つの付着部。 58 No.8の口縁部の付着部。
59 No.3の付着部。 60 No.6の付着部。
61 No.9の付着部。 62 No.10の付着部。

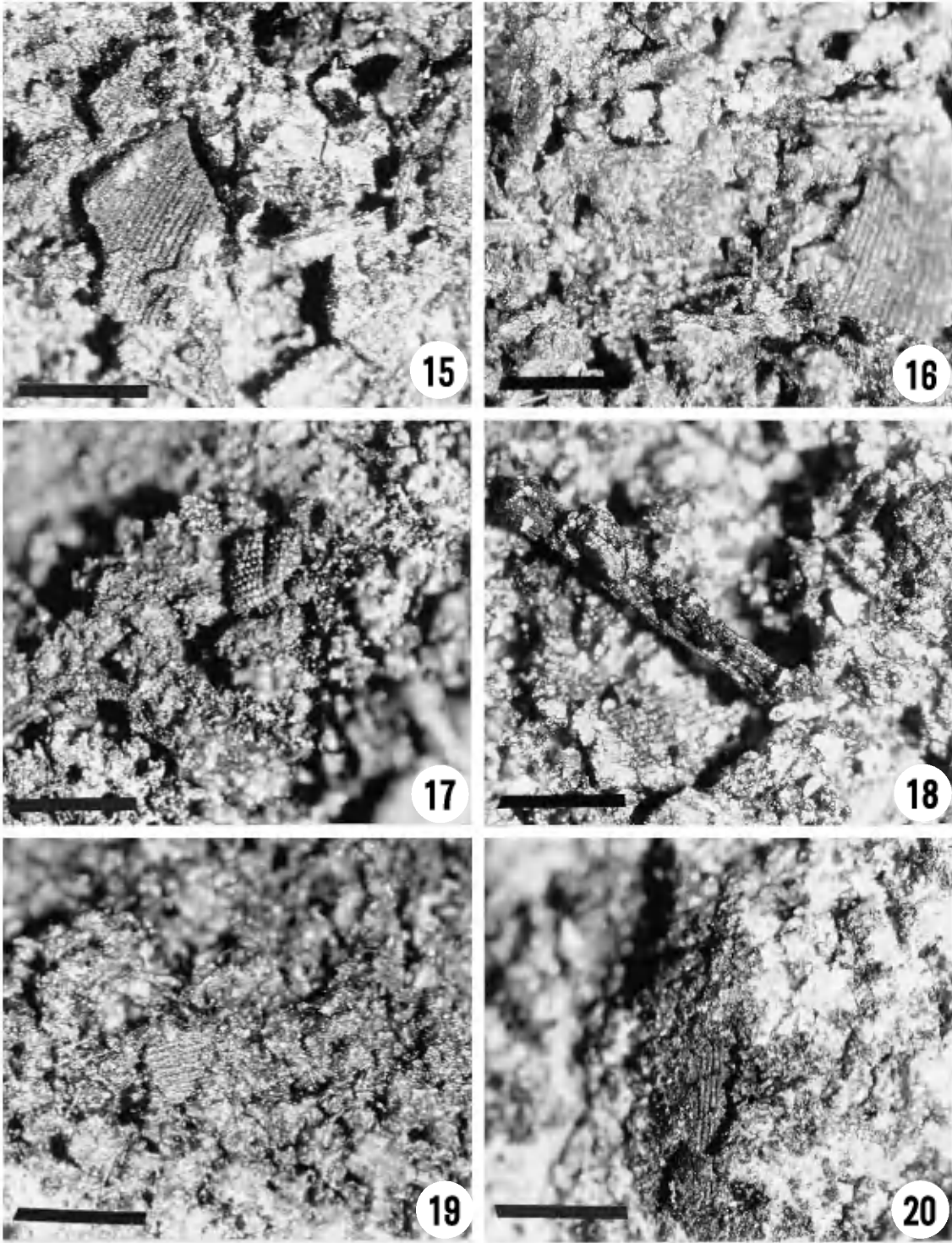
図版 I



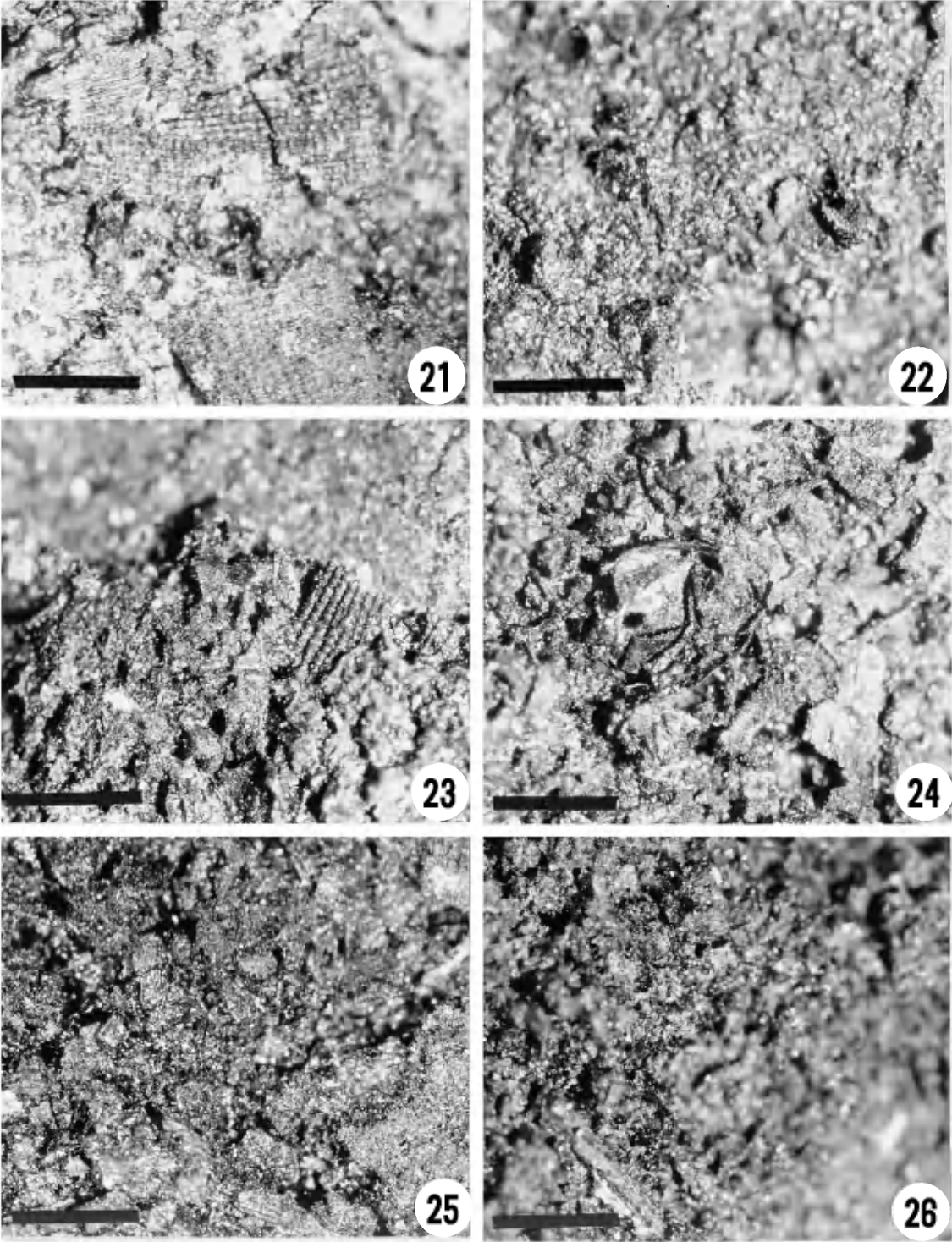
図版Ⅱ



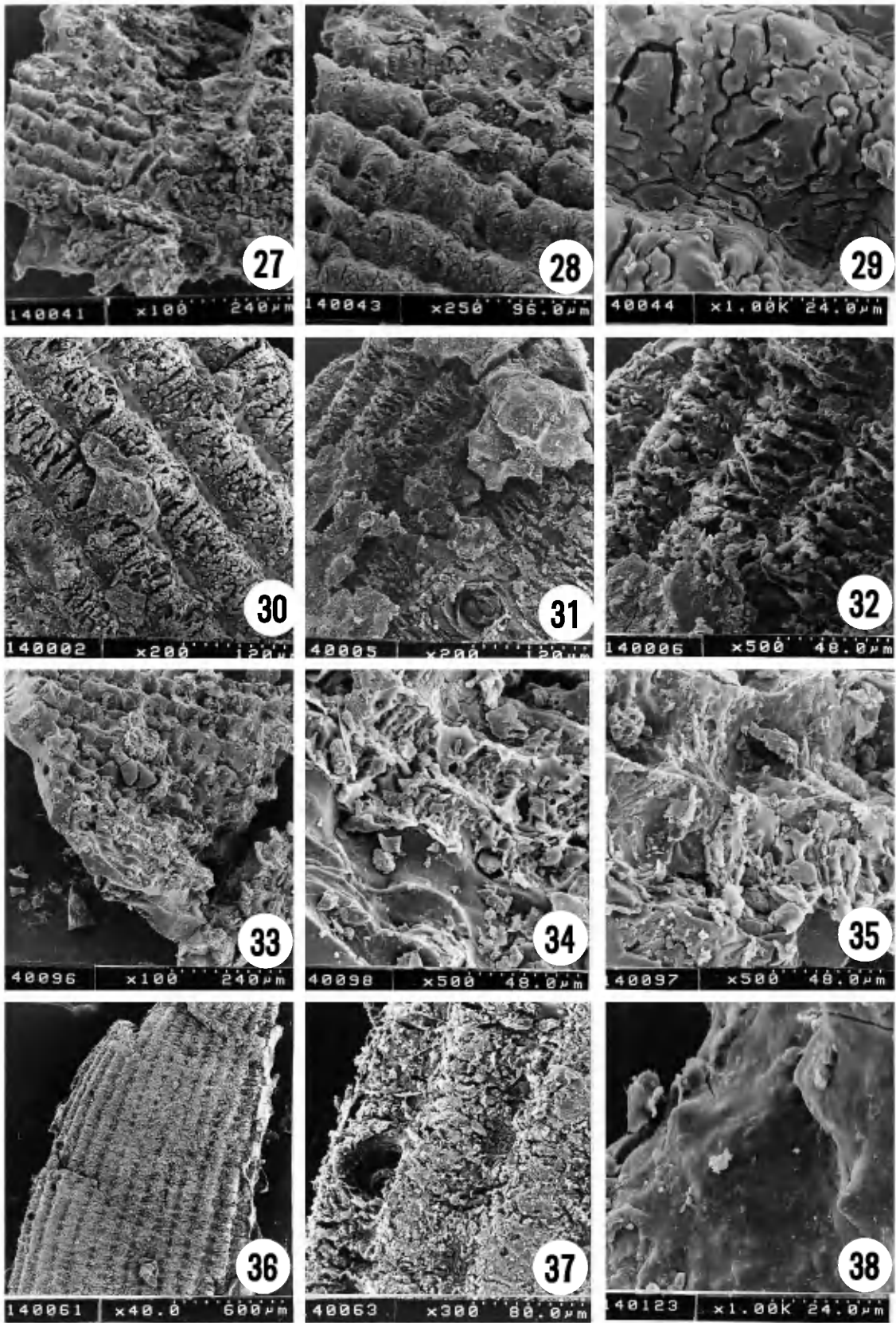
図版Ⅲ



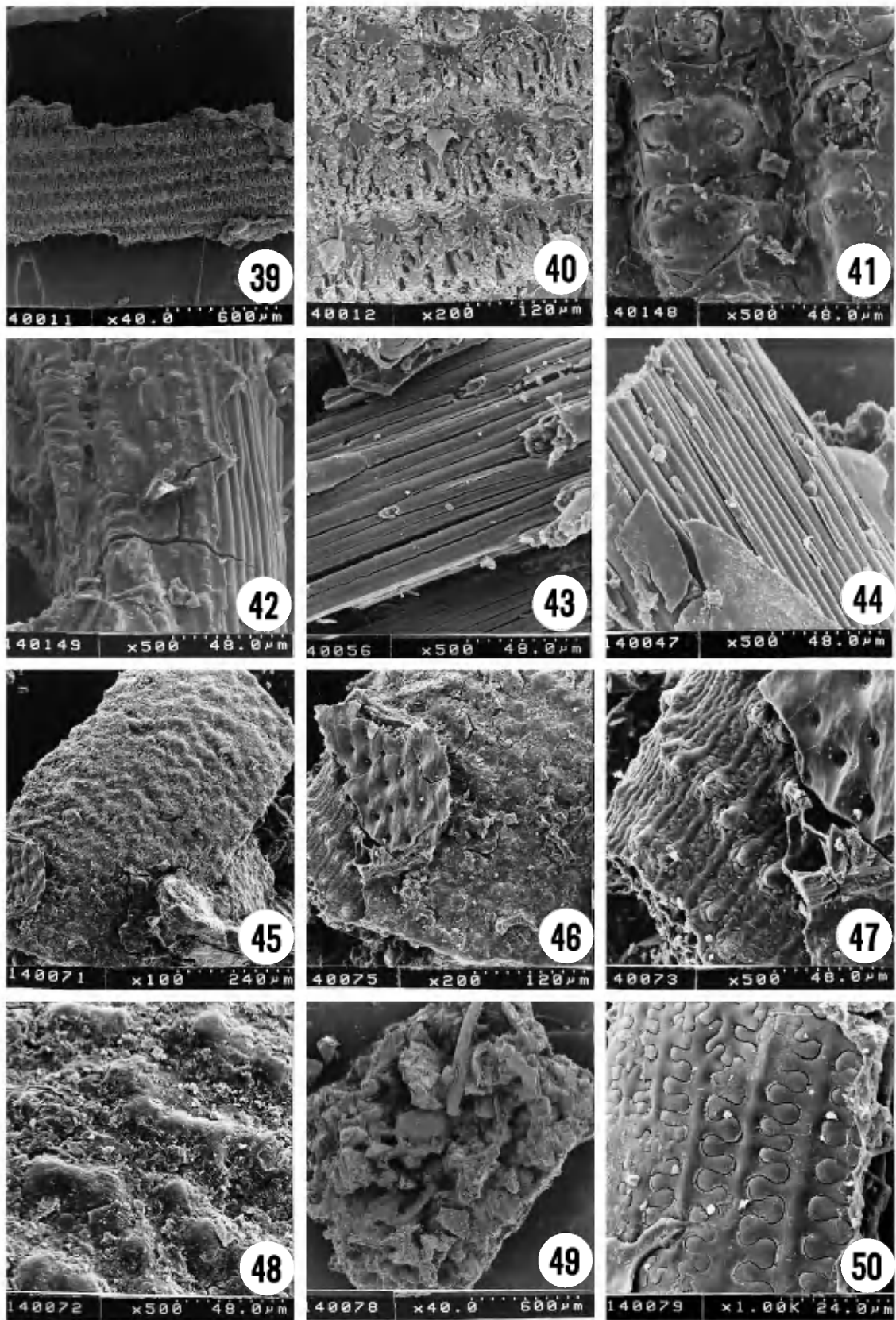
図版Ⅳ



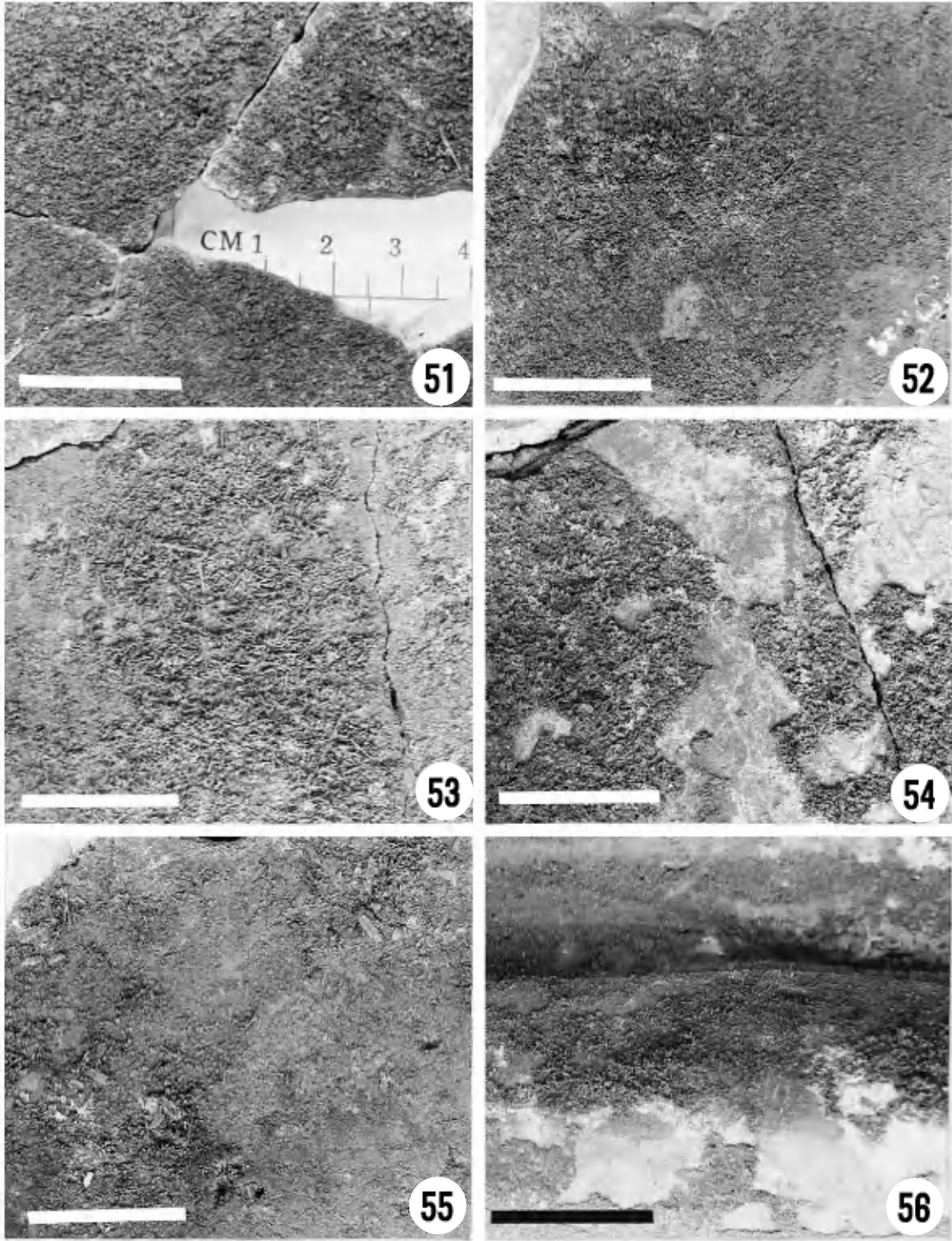
図版 V



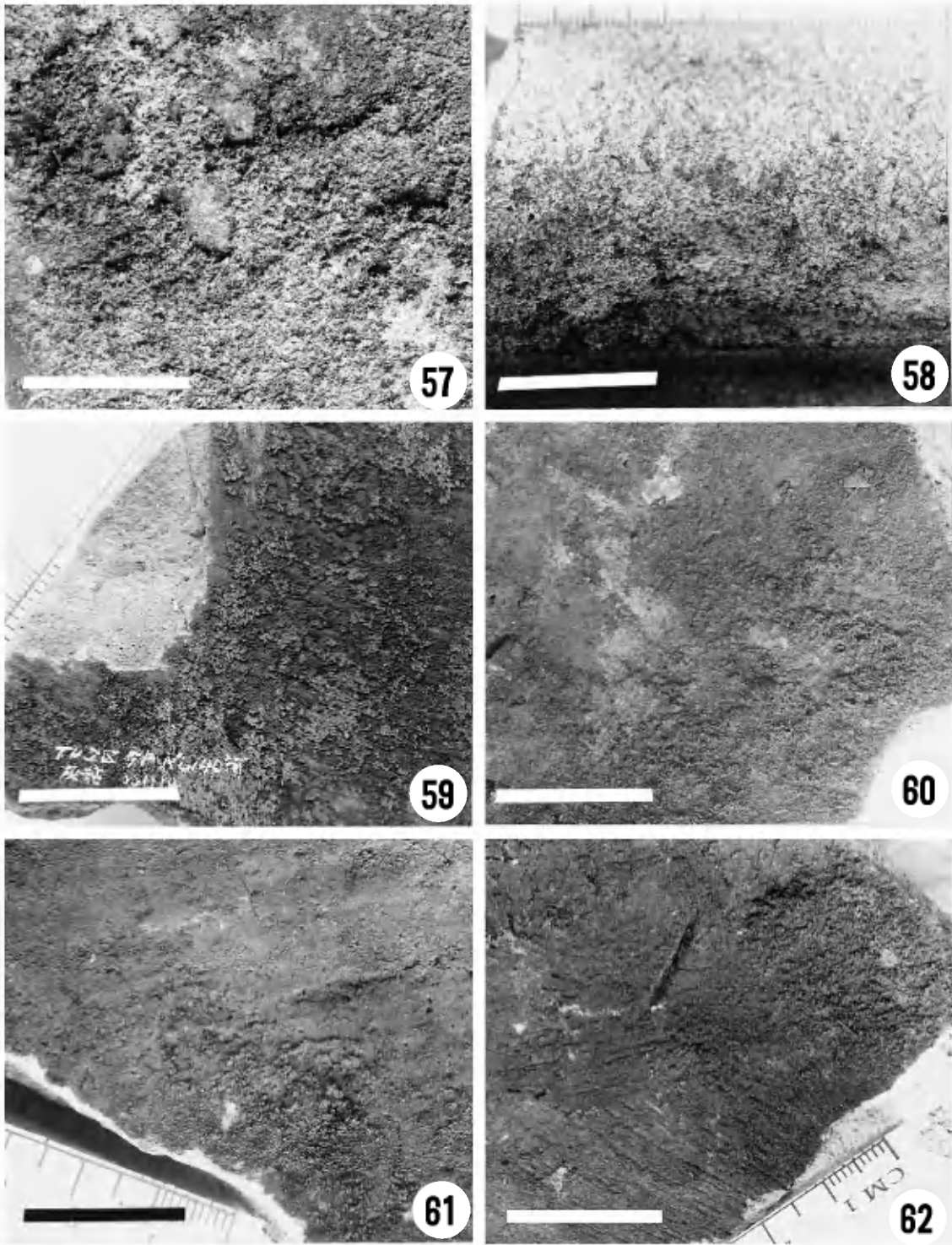
図版VI



図版Ⅶ



図版Ⅷ



津島遺跡出土炭化米のDNA分析

静岡大学農学部 佐藤 洋一郎

1. 分析材料

岡山市、津島遺跡から出土したイネ種子のDNA分析の結果について述べる。

同遺跡より出土したイネ種子5サンプルを用いた。なおサンプル1から3については出土種子1粒ずつ、サンプル4については2粒の混成、さらにサンプル5については6つの炭化米断片の混成とした。

2. DNA分析の方法

DNA分析では米粒なら1粒の単位でDNAを抽出して品種を特定することが可能である。またDNAは遺伝子の本体物質で、その解析によって得られた結果は他の分析法での結果に比べてより直接的である。とくにイネの場合、品種群の判別にもみの形や大きさが用いられることが多いが、それによる判定の信頼度は60%をわずかに超える程度に過ぎない。その意味では、可能である限りDNA分析に頼るのがよいと思われる。

ただし、今回のサンプルについては埋蔵中やや乾燥を受けたとも考えられDNAの残存状態に疑問が残るため、サンプル4および5のように混成のサンプルを設けた。

具体的な方法は次のようである。

今回分析に用いたサンプルは全部で5点とした。抽出は、炭化米からDNAを抽出するために改変



出土炭化米

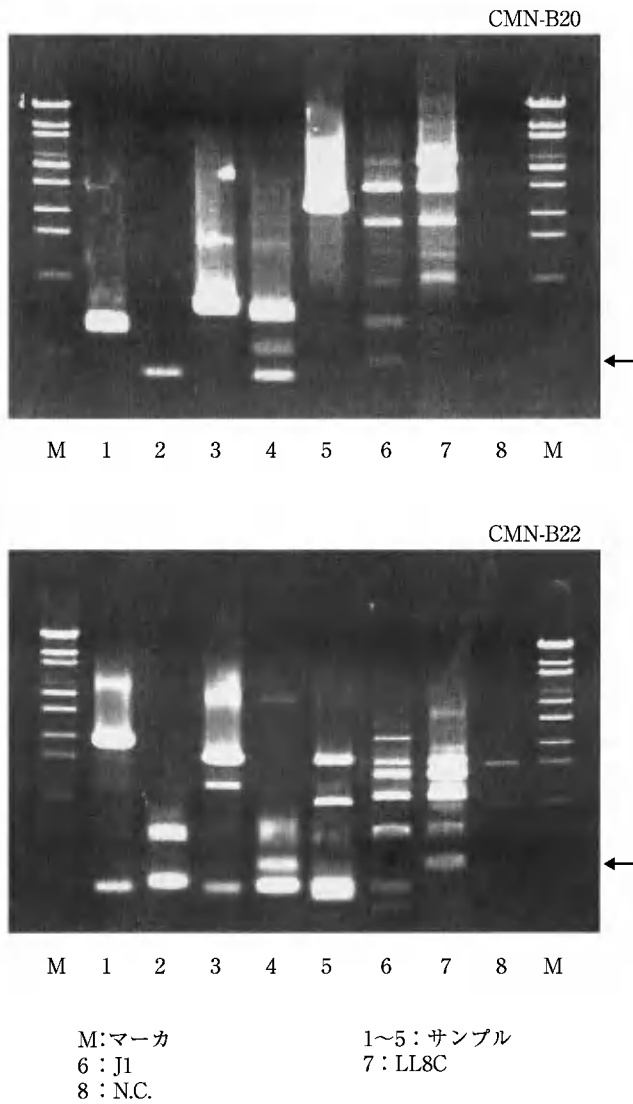


図1 泳動写真

バンドは、レーン6の品種J1（北海道産在来品種）がそうであるように温帯 *japonica* 品種に固有のバンドであることが分かっている。しかしこの位置には5サンプルのどれにもバンドがなかった。これら5サンプルについては、DNAの抽出ができなかったか、または温帯 *japonica* ではないと考えられる。

図1（下）はプライマーCMN-B22によるPCRの結果を示したもので、熱帯 *japonica* 品種の多くのもの（例えばレーン7のLL8C＝ラオスの陸稲のモチ品種）が図中の矢印の位置にバンドをもつ。5サンプルのうちサンプル4が同じ位置のバンドを持っており、このサンプルが熱帯 *japonica* であった可能性は高いと考えられる。

このように、津島遺跡出土の炭化米のサンプル5点のうち、1点が熱帯 *japonica* のものと見られたが、サンプル4は2粒の混成でありそのどちらか（または両方）が熱帯 *japonica* であったのであろう。なお今回の分析ではDNAが抽出できたサンプル数が少なく、全サンプル中の熱帯 *japonica* の割合に言及することは差し控えたい。

したアルカリSDS法を用いた。抽出法の詳細の説明はここでは割愛するが、必要があれば後述の参考文献を参照抽出されたい。抽出したDNAは、温帯 *japonica* か熱帯 *japonica* かを判別するプライマーによってPCR増幅させた。PCR増幅とは、DNA合成酵素の活性を利用して、DNAの特定の部分だけを増幅させる実験手法である。プライマーとはDNAの増幅にあたり、その始点と終点を決めるごく短いDNA断片である。遺物に残されたDNAはごく微量であるため、PCR法以外の方法はまだ開発されていない。

3. 分析の結果とそれに対する考察

5つのサンプルを写真1～5に示す。写真のようにサンプルはすべていわゆる炭化米で初つきのもは認められなかった。また胚の部分が大きくえぐられたものが多かった。

DNA分析の結果を図1に示す。図1（上）はプライマーCMN-B20によるもので、図中矢印の位置に現れた

4. 日本のイネ品種について

弥生時代の稲品種についての研究は佐藤敏也氏による膨大な研究（『日本の古代米』、佐藤1971）を別とすればまとまったものがない。ときに、発掘報告書などに *indica* の記載が散見されることがあるが、筆者が知る限りそれらは、籾や玄米の形がやや細長いことだけを根拠としたものであり報告者の無知または誤解によるものでしかない。というのも、稲の籾型は *indica*、*japonica* を区別するには不適當なマーカーでしかなく（佐藤、1991）、籾型による *indica*、*japonica* の誤判定率は40%にも達するからである。それにも関わらずわが国では長く、*japonica* = 短粒種、*indica* = 長粒種という「俗説」が通用してきたのは不幸というより他ない。*japonica* 種の中には、主に陸稲地域で栽培される熱帯 *japonica* の種類があり、これらは水稻である温帯 *japonica* に比べて細長い粒をもつ。もし日本の考古遺跡から出土する米粒中に長粒に属する（たとえば籾でいうと長／幅比が2.0を越えるようなもの）ものがあれば、それは熱帯 *japonica* である可能性が高い。最近のプラントオパール分析結果によれば、イネは縄文時代の中期には日本に渡来していたと考えられる（外山、1999）。ただし縄文時代には、その晩期後半の一時期を別とすれば水田遺構はなく、縄文時代に稲作があったとすれば水田稲作以外の稲作、たとえば焼畑稲作のような稲作のスタイルを考えるのが自然である。焼畑の稲作の類例は、東南アジア山岳部などに今でも認められる。焼畑は基本的には栽培と休耕を繰り返す一種の循環農法であり、ある場所の耕作期間は休耕期間の数分の1から10分の1程度である。開墾は火入れによるのが普通で、これによって植物が固定した窒素を可利用な形に変えるほか、害虫、雑草などを駆除することができる。しかし2、3年の耕作によって地力が低下した雑草などが戻ってくると、その土地は再度休耕される。

日本の縄文時代にもこうした焼畑による稲作があったと考えるのがよいであろう。ただし開墾され畑に開かれた土地は必ずしも山の斜面とは限らず、むしろ中小河川の後背湿地のような湿潤環境が好まれたかもしれない。

この場合、適応するイネ品種は熱帯 *japonica* であり水田に広く栽培される温帯 *japonica* はまともな収量をあげることさえ容易ではない。こうしたことを考えると縄文時代にあったイネは熱帯 *japonica* に属するものと考えるのが妥当である。

弥生時代に入ると列島各地には各地から水田址や遺物としてのイネ種子、プラントオパールなどが検出される。しかし多くの遺跡、遺構からは高い頻度で熱帯 *japonica* が検出され（佐藤、1999）、「縄文稲作」が弥生時代にまでその影響を残していたとも考えられる。つまり弥生時代の急速な稲作の広まりの背景に、縄文文化の積極的な関与を認めざるを得ないというのが稲を通してみた時代変遷像であることを指摘しておきたい。とくに津島遺跡は、縄文時代の前、中期から稲作が行われていたことが明らかな地域にあり、そこでの熱帯 *japonica* の存在もまた、こうした大きな流れに符合したものでいえよう。

文献

- D'Andrea, Crawford, G. W., Yoshizaki, M. and Kudo, T. (1995) LateJomon cultigen in northeastern Japan. *Antiquity* 69 :146-152
- 藤原宏志・佐藤洋一郎・甲斐玉浩明・宇田津徹朗 (1990) プラント・オパール分析（形状解析法）によるイネ系統の歴史の変遷に関する研究. *考古学雑誌*75 : 93-102
- 佐藤洋一郎 (1999) 古代米の遺伝的特性(1)-2つの *japonica* の混在-日本文化財科学会第16回大会研究要旨集, p. 8-9.

附編 自然科学的分野における分析・鑑定

- 佐藤洋一郎（1997）静岡市・曲金北遺跡水田遺構の土壌分析結果. 『曲金北遺跡（遺物・遺物編）』、p.257-269. (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐藤敏也（1971）『日本の古代米』. 雄山閣出版、p.91
- 佐藤洋一郎（1991）アジア栽培イネのインド型・日本型品種群における籾形の差異. 育種学雑誌41：121-134.
- 外山秀一（1999）歴史九州89：2-7.

岡山市津島遺跡出土漆塗木弓の科学分析

漆器文化財科学研究所 四 柳 嘉 章

I. 分析の方法

漆器には階層や価格、あるいは機能や各種行事に対応したさまざまな製品が生産された。その品質の解明が所有階層や流通を探る手がかりとなる。この品質差を特定するために、以下の方法を用いた。

- ①塗膜分析 光学顕微鏡（偏光・金属・実体）により塗装工程や下地材料を同定する。
- ②赤外分光分析 フーリエ変換赤外分光分析装置（FT-IR）により塗料の膠着液を同定する。
- ③蛍光X線分析 エネルギー分散型蛍光X線分析装置により、赤色顔料や下地鉱物粒子を同定する。

（各方法の原理については後述）

なお本稿で用いる用語のうち、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

- ①赤色漆 赤色の主な顔料である朱（ HgS ）やベンガラ（ Fe_2O_3 ）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定済みの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。
- ②黒色漆と黒色系漆 上塗漆が黒色の場合、黒色顔料の有無によって2種類に分けられる。炭素粒子（油煙・松煙）や鉄系化合物粒子などの黒色顔料を含むものを「黒色漆」、黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。黒色系漆においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見える。筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、品質の判別や材料科学の上からも両者の区別が必要である。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含む）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。
- ③下地の分類 粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ（鏝）漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ（鏝）膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

II. 分析結果

塗膜分析は1資料につき、各4点の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。遺物は芯去り材（広葉樹）の木弓の弓幹で、折れているため9Aと9Bに区別されている。9Aが拵（握）で9Bはその一部と弓幹全体の漆塗り部分である。以下、木胎（木地）から順に番号（①～）を付して説明する。

塗膜分析

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し実体顕微鏡で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（#100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的地域的な塗装工程の特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる¹⁾。

◇9 A（図版1・2） 拵

器形・表面観察

直線状に伸びる芯去り材で断面は楕円形を呈する。現存長130mm、幅23.5～25mm、厚さ15～16mm。全体にわたって均一な鉾物粒子が石目状に蒔かれ朱漆が施されている。特に鉾物粒子の多くは黒色（黒色顔料による）で、粒子間の凹凸が著しいため、その窪みに残る朱漆とのバランスが美しい。

塗膜分析

①鉾物粒子を含む黒色漆層。層厚74～200 μm 。黒色粒子（油煙・松煙）は全体に分散しているが、多くは下層に沈殿（5～15 μm ）している。鉾物粒子は石英を主体に斜長石、角閃石など。サイズは長方形で短径107×長径220 μm 、五角形粒子では短径171×長径196 μm 程度で、全体に均一な粒子が多い。石英粒子の全てに黒色顔料が付着している。肉眼では一見鉄鉾物のようにみえるが、研磨していくと本来の白色となる。粘土鉾物が含まれていないので、石英の多い砂礫から均一なものを選択した可能性がある。②朱漆層。層厚5～30 μm 。鉾物粒子全体を覆っておらず、粒子間の窪みに沈殿している。このため黒と朱の美しい斑紋に仕上がっている。

◇9 B（図版1・2） 拵（握）の一部と弓幹

器形・表面観察

直線状に伸びる上述の拵（握）の一部と漆塗りの弓幹。拵部分がやや太く、漆塗りは拵の端8mmほどから施されている。漆塗り部分は麗しい光沢をとどめるが、下地がないので木胎の縦方向にヤセが見られる。拵部分の石目の状態は基本的には9 Aと同じだが、拵の端にあたるせいか朱色はみられず、そのかわり石英や長石の反射がキラキラとしている。芯去り材。断面楕円形。現存長290mm、幅は拵で平均26.5mm、厚さ16.5mm。漆塗り部分で平均22.5mm、厚さ14mmほどである。

塗膜分析

拵部分

①鉾物粒子を含む黒色漆層。層厚171～220 μm 。黒色顔料の沈殿は見られないが、層全体に黒色顔料が分散している。僅かだが小さな針葉樹片も含まれている。石英を主とした鉾物粒子が分散しているが、大きなものは方形で短径200×長径245 μm ほどである。全体に粒子は均一。研ぎは見られない。石英粒子は全てに黒色粒子が付着している。薄く研磨すれば白色となることは9 Aと同じ。②黒色漆層。層厚7～29 μm 。黒色顔料は上2層に比べれば少ない。③黒色漆層。層厚29 μm 前後。④黒色漆層。層厚5～10 μm 。この層がない部分もあるし、表層の変質部分と見られることもできる。①～④層の黒色顔料は0.5 μm 以下の微細なもので、均一に分散している（9 Aも同様）。なおここでは①層の上に朱漆は施されていない。

弓幹漆塗り部分

木胎の56 μm まで漆が浸透しており、十分な木固めがなされている。①黒色漆層。層厚10~37 μm 。表層に研ぎ工程が施された可能性がある。②黒色漆層。層厚10~20 μm 。表層5 μm が透けている部分もある。附部分の④黒色漆層に対応する。したがって塗りは基本的には2層と思われる。黒色顔料の特色も附部分と同じである。

赤外分光分析

分光学 (Spectroscopy) は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」²⁾と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法 (Infrared Absorption Spectroscopy) という³⁾。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法 (Fourier Transform Infrared Spectroscopy FT-IR) を用いた。赤外光は近赤外 (波数14000~4000 cm^{-1} 、波長700nm~2.5 μm)、普通赤外 (波数4000~400 cm^{-1} 、波長2.5~25 μm)、遠赤外 (波数400~10 cm^{-1} 、波長25 μm ~1mm) に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は1cm当たりの波の数で、振動数を光速で割ったものであり、波長の逆数である。

FT-IRは普通赤外の場合は波数4000~400 cm^{-1} の光を2つの光束に分割し、1つは固定し(固定鏡、ミラーA)、他方の光路長は可動ミラー(可動鏡、ミラーB)を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節し、光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる⁴⁾。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準スペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

分析用試料は1~2mgを採取しKBr(臭化カリウム)100mgとともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた(錠剤法)。条件は分解能4 cm^{-1} 、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図1・2(ノーマライズ)に掲載した。縦軸は吸光度(Abs)、横軸は波数(カイザー)である(赤外分光光度計は日本分光製FT-IR420)。

図1は基準データとして現在の漆塗膜(岩手県浄法寺産、1992年作製)と岡山県倉敷市上東遺跡(弥生時代後期後半)⁵⁾の祭祀用ミニチュア壺に収められた漆塗膜の吸収を重ね合わせたものである。後者は1718 cm^{-1} (C=O伸縮によるカルボン酸)付近の吸収が微小であることと、1070~1030 cm^{-1} (ゴム質・多糖)にやや増大が見られる以外は、現在の漆塗膜とほぼ同じ吸収を示しており、劣化の少ない良好な遺存状態といえる。図2は図1の基準データに、津島遺跡木弓の附部分(④朱漆)と弓幹(③)の漆塗膜の吸収を重ねたものである。④は表層からの採取であるため、朱や石英・長石などの鉱物粒子の吸収が顕著である。③は塗膜からの採取であるが、漆塗の基準データとは異なる吸収がある。その由来の1つは黒色顔料の油煙であるが、まだ特定できない吸収もある。しかし1650~1630 cm^{-1} (糖タンパク)、1280~1270 cm^{-1} (フェノール)、1070~1030 cm^{-1} (ゴム質・多糖)が一致し、顕微鏡観察の

所見を総合すれば漆液であるとみて大過ない。

蛍光X線分析

津島遺跡木弓の拵部分・赤色顔料の同定と鉱物粒子の特徴をつかむために蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線（特性X線ないし固有X線）が発生（放出）する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法である（分析条件は下記）。

使用機器：PHILIPS/PW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

使用管球：Rh ターゲット 9 W。

検出器：高分解能電子冷却 Si 半導体検出器。

測定条件：30kV、4 μ A、フィルター Kapton、50sec。

測定室雰囲気：大気。試料のサイズは2～0.5cm四方程度で、そのままサンプルカップに入れて測定。

図3は励起条件を幅広く設定しているのので、エネルギーの弱い軽元素の感度は低く、鉱物粒子や漆から重元素であるFeのピークが強く出ているので、図3右上段の半定量値を主に参照願いたい。上塗漆の赤色顔料は朱であり、鉱物粒子からはFe、Ti、Si、Sの順に多いことが知られる。

Ⅲ. 小 結

以上、津島遺跡河道出土の漆塗り弓（弓幹と拵、弥生時代後期後半）について報告してきた。その特徴を再掲すると、弓幹全体は木胎の上に黒色漆（黒色顔料を含む漆）が基本的には2層施され、拵部分だけに異なる技法が見られる。つまり拵部分は0.1～0.2mmほどの石英主体の砂礫を全体に均一に蒔き、黒色漆、朱漆を塗って石目塗状⁶⁾になっている。特に石英粒子には黒色顔料が強く付着していることと、朱漆層が薄いため凹凸著しい粒子間に溜まり、朱色と黒色のバランスが美しく絶妙の仕上がりである。この技法は使用に際しての滑り止めかと思われるが、美的な意識も見られ決して実用一辺倒ではない。

弓幹全体は木胎の上に2層の黒色漆が施されているが、福岡市雀居遺跡の木製盾（弥生時代後期後半）では、木胎→黒色漆層→漆層、滋賀県彦根市松原内湖遺跡の木製短甲（4世紀）では木胎→黒色漆層→黒色漆層と報告されており⁷⁾、後者が津島例と同じ塗装工程である。こうした黒色顔料（油煙・松煙）を塗り重ねる技法は漢代の漆器に広くみられ、わが国では弥生時代以降も継承される。とくに中世漆器では上質漆器に不可欠な工程として意識された⁸⁾。

とまれ黒色漆塗りされた弓幹と拵部分を石目塗状に塗装した漆塗木弓例は報告されておらず、弥生時代武具の漆工技術を探る上で貴重なデータが追加された。また漆工的装飾のすばらしさからも、そこには弓によせる弥生人の精神世界が凝縮されているように思える。

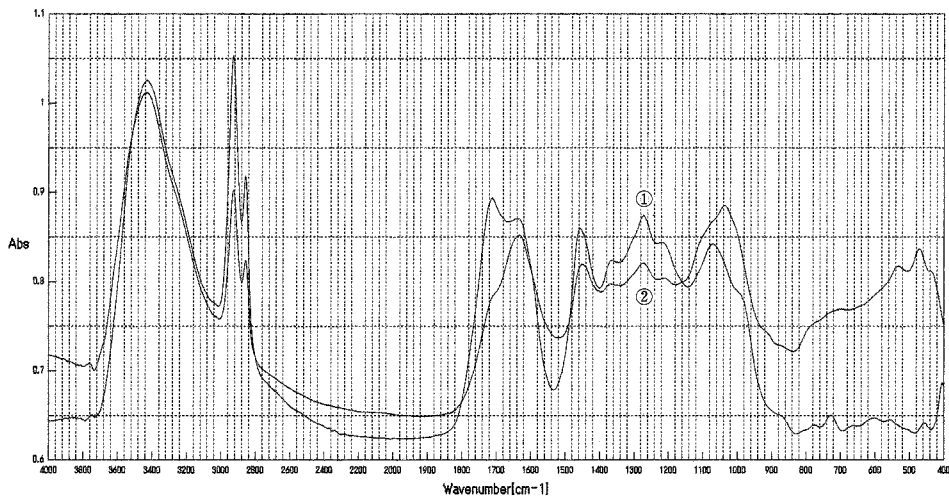
末筆ながら分析調査にあたっては、岡山県古代吉備文化財センター金田善敬・岡本泰典氏にお世話になった。記して御礼申し上げたい。

註

1) 四柳嘉章「漆器考古学の方法と中世漆器」『考古学ジャーナル』第401号、1996

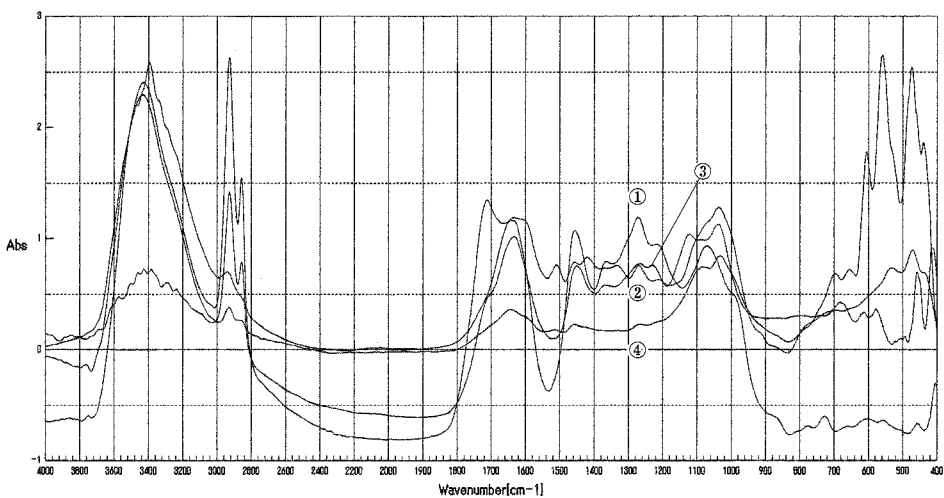
四柳嘉章「概説 北陸の漆器考古学」『第10回北陸中世土器研究会記念特集号 北陸の漆器考古学－中世とその前後』北陸中世土器研究会、1997

- 2) 尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書、1997
- 3) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 4) SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法 - MS、IR、NMRの併用 第6版』東京化学同人、1999
- 5) 四柳嘉章「上東遺跡出土の土器内固形物分析」『下庄遺跡・上東遺跡 - 主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査2』岡山県教育委員会、2001
- 6) 近代の石地塗では乾漆粉の粉末、石目塗では蠟炭の粉末を用いる。両者の差異については、「石地塗の乾漆粉は一粒ずつ表面に表れその間隙が低くなるのに比し、石目塗は炭粉の微粉が先ず漆に付着して高くなると共に、その周囲を低くして高低を生ずるの相違がある」と説明されている。沢口悟一『日本漆工の研究』美術出版社、1966
- 7) 岡田文男『古代出土漆器の研究』京都書院、1995
- 8) 四柳嘉章「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」新潟県埋蔵文化財調査事業団、1996
四柳嘉章「新潟県中条町下町・坊城遺跡C地点出土漆器の科学分析」『下町・坊城遺跡V』新潟県中条町教育委員会、2001



サンプル名 漆 積算回数 16 ①精製漆 (岩手県浄法寺産、1992年作製)
分解能 4cm⁻¹ アポタイゼーション Cosine ②岡山県倉敷市上東遺跡生漆 (弥生後期)

図1 漆塗膜の赤外線吸収スペクトル



サンプル名 漆 ①精製漆 (岩手県浄法寺産、1992年作製)
分解能 4cm⁻¹ ②岡山県倉敷市上東遺跡生漆 (弥生後期)
積算回数 16 ③上東遺跡木弓漆塗膜 (9B)
アポタイゼーション Cosine ④上東遺跡木弓朱漆塗膜 (9A)

図2 上東遺跡漆塗木弓の赤外線吸収スペクトル

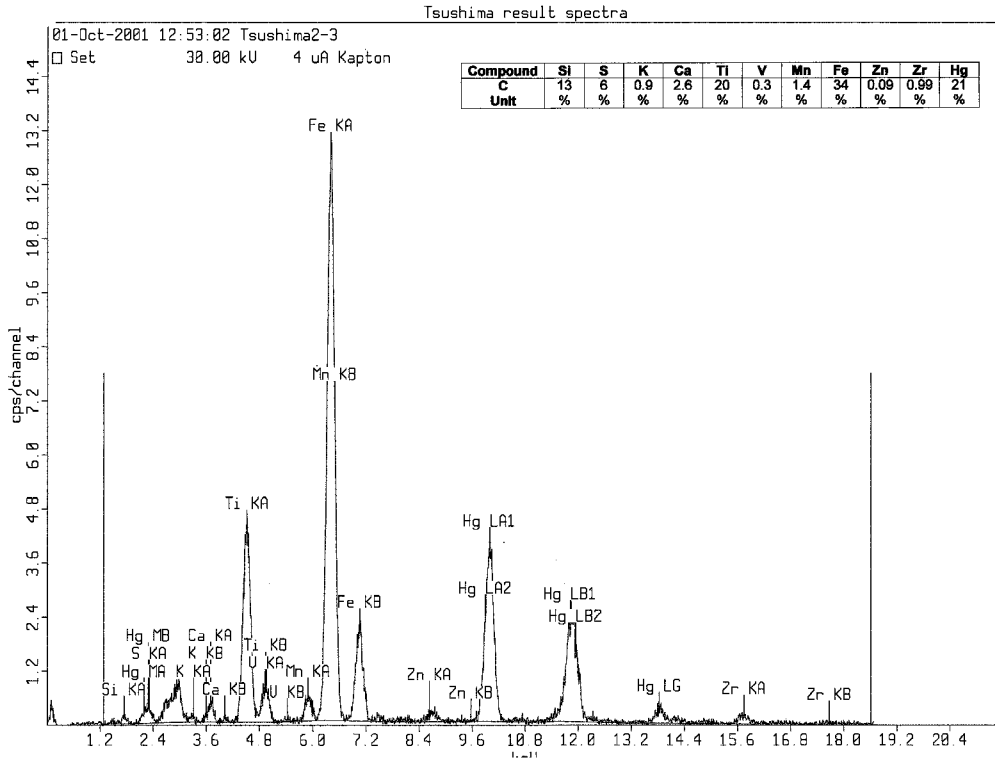


図3 上東遺跡漆塗木弓・附部分の蛍光X線定性分析スペクトル

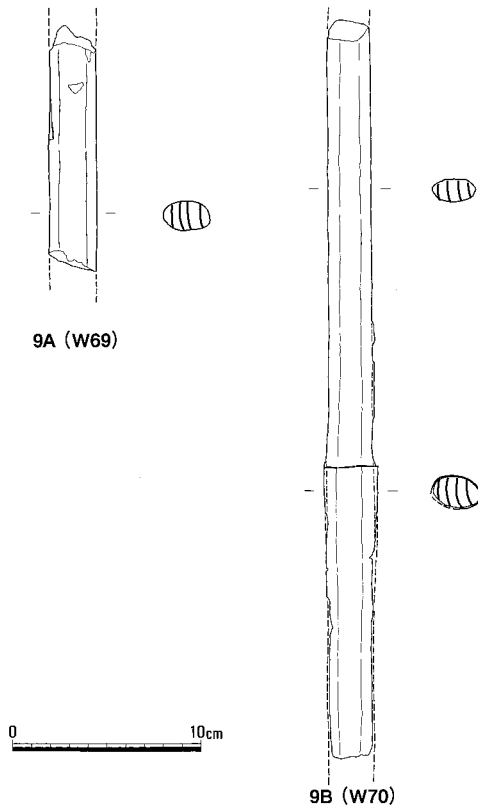


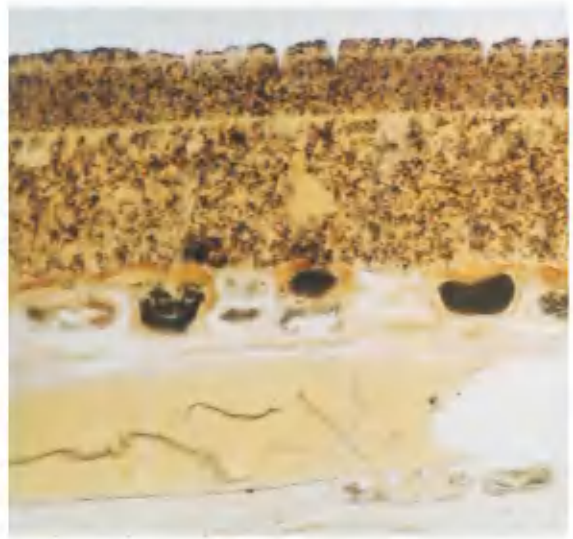
図4 津島遺跡出土漆塗木弓（1/4）

図版1 漆塗木弓塗膜断面の光学顕微鏡写真



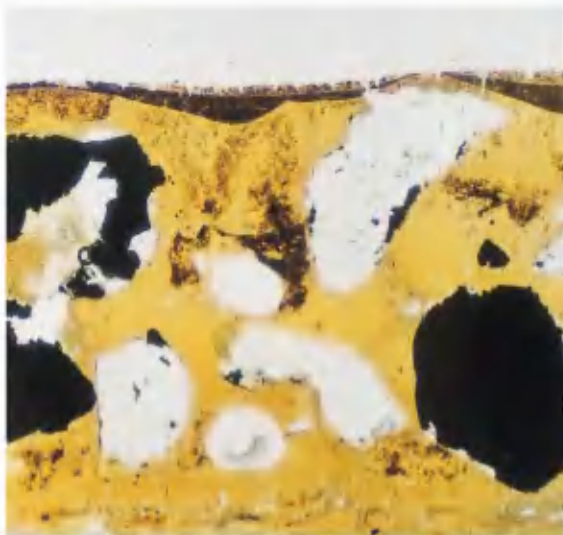
弓幹 (9B)

×260



弓幹 (9B) 拡大

×520



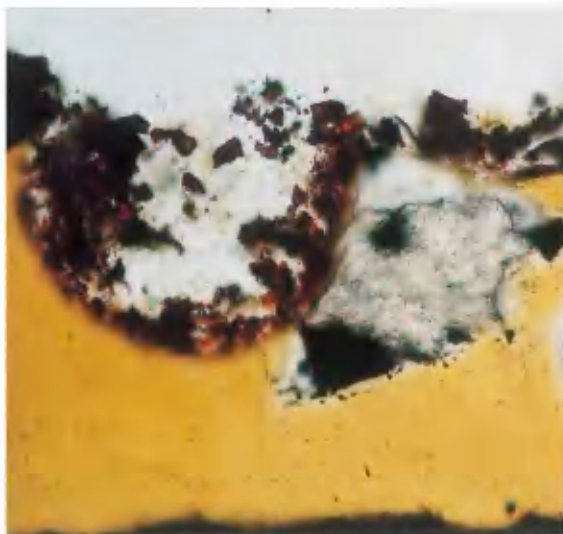
附 (9A)

×130



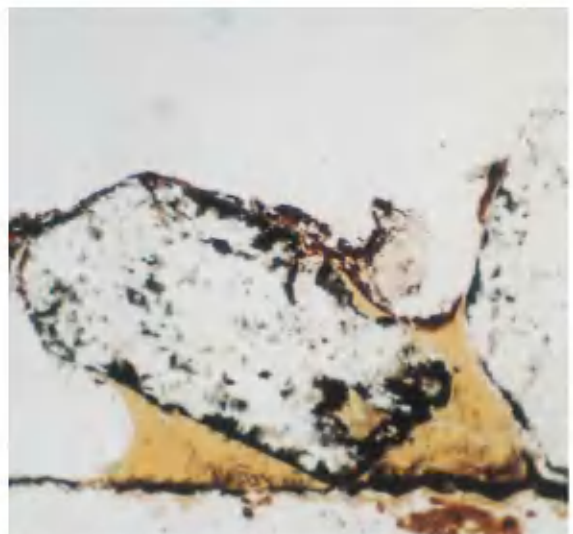
附 (9A)

×130



附 (9A)

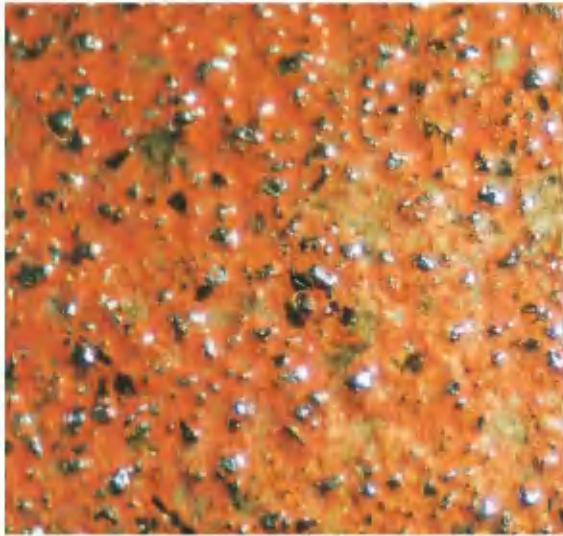
×520



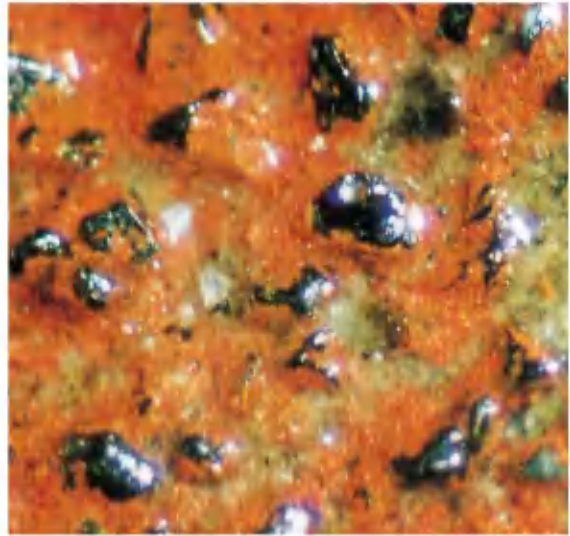
附 (9A)

×260

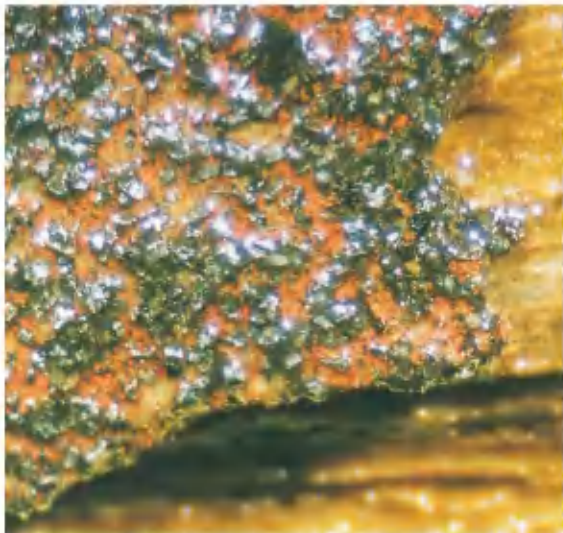
図版 2 漆塗木弓表面の実体顕微鏡写真



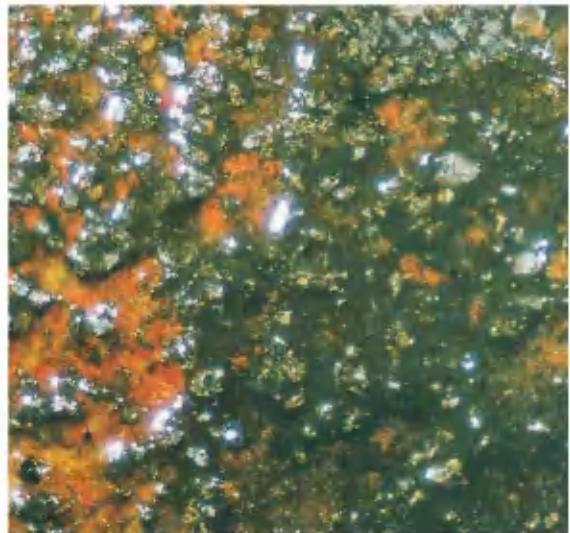
附 (9 B) ×13



附 (9 A) 拡大 ×52



附 (9 B) ×13



附 (9 B) 端部 ×13



弓幹漆塗膜 (9 B) ×13

津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物

別府大学 志賀智史・本田光子

1. はじめに

岡山県岡山市津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物について、付着残存する赤色物が考古学的遺物としての「赤色顔料」であるか否かを判断する事も含めて、調査を行う機会を得たので、その方法と結果を報告したい。

現在までの知見によれば、出土顔料は赤色を呈するものがほとんどで、その他黒色や白色のものが知られている。赤色顔料には主として酸化第二鉄 (Fe_2O_3) を主成分とするベンガラと、赤色の硫化水銀 (HgS) を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛 (Pb_3O_4) を主成分とする鉛丹がある。黒色顔料としては、炭粉、煤やマンガンが用いられている。

分析依頼を受けた津島遺跡出土資料への赤色顔料の付着は、土器の場合と木器の場合で異なる。

一般に土器に赤色顔料が付着している場合、その由来は土器焼成前に塗布したものと焼成後に塗布あるいは付着したものに大きく分けられる。前者は赤色顔料単体、ないしはこれに粘土を混和したものや焼成で明るく発色する粘土（いわゆるスリップ）を土器に塗布し、焼くことによって器壁に赤色顔料を固着させたものである。これらは丹塗土器、丹塗磨研土器と言われるものが該当する。後者には、赤色顔料などを混和した漆を土器の口縁部や外面に塗るといように塗彩を目的としたもの、赤色顔料や赤色顔料混和漆の貯蔵容器、内面朱付着土器と呼ばれる朱を用いる何らかの所作に用いられた容器、塗彩用のパレット等、多種多様なものが知られている。しかし、それらの本来的な用途についてははっきりしないものが多く、分類も難しい部分がある。

赤色顔料の塗布が、土器焼成前か焼成後のどちらに行われたのかは、表面観察による経験的な判断による部分が多い。特に土器焼成後に赤色顔料が付着した試料については、明瞭な層が残っていれば漆の利用は明らかではあるが、それ以外ではどのような膠着剤が用いられたのか、また用いられていないのか、よく分からない部分が多いのが実状である。

木器の場合は、赤色・黒色顔料混和漆や透明漆を塗布するものが知られており、下地の作り方や漆の塗布回数等が時期や地域によって異なる。膠着剤の種類は漆等の樹液や膠が考えられている。漆は酸に非常に強く、一般的な遺跡でも残りやすいため、塗膜断面の観察から層として認められる場合には、漆の利用は明らかである。しかし、これ以外の場合は明確な層として残らないので、どのような膠着剤が用いられたのかは不明である。また、今回の分析試料にもあるような楯に塗布された赤色顔料は、明瞭な塗膜が認められない場合がほとんどであり、どのような膠着材が用いられたのかは不明である。

以上を念頭におき分析調査を実施した。

2. 試料

試料は土器 8 点と木器 9 点の合計 17 点から採取したもので、全て弥生時代後期後半に属する。資料

の器面の全面ないしは一部に赤色や黒色を呈する部分が認められる。木器については資料観察時の所見と試料採集部分を記録した用紙を紛失中のため、各資料中での具体的なサンプリング位置ははっきりしない。記録用紙が見つければ、何らかの機会に報告したい。

なお木器の資料は他に漆塗りの弓があり、本書別項に四柳嘉章氏による分析報告が行われている。

3. 方法

表面観察：残存する資料の表面を裸眼と実体顕微鏡で観察し、顔料の付着状況や付着箇所を確認する。漆の塗布が明らかな場合は、器形や塗布範囲(全面か部分的か、文様、色による塗り分け)等を確認する。粉状に赤色顔料が残っている場合は光学顕微鏡および電子顕微鏡用の試料を作成するために針先に付く程度の赤色部分をサンプリングする。

断面観察：資料から剥落、あるいは直接採取した赤色顔料等付着部分を、エポキシ樹脂に包埋し、厚さ数 μm になるまで研磨する。完成した試料を透過光及び反射光により光学顕微鏡で観察し、膠着剤の有無、下地や上塗りの状況、その回数、厚さ、顔料の種類等を確認する。赤色顔料についてはその形状から朱かベンガラかを経験的に判別した。

赤色顔料の分析：上記観察の所見より判断したが、特にベンガラの場合は、粒子形態を知るために、PHILIPS社製走査型電子顕微鏡XL20を用い観察した。また、赤色顔料の主成分元素の同定を目的に、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製MESA500と電子顕微鏡に付属のEDAX社製のもの)を用い、塗布あるいは付着部分を直接ないしは顔料粒子自体の測定を行った。赤色の由来となる主成分元素としてHgが検出されたものは朱、Feはベンガラと考えた。ただし、土砂にも鉄分(Fe)が含まれているので、実体、生物顕微鏡など光学顕微鏡での観察と判断は必須である。

4. 結果

①土器試料(第1表)

土器試料1は焼成前の赤色顔料の塗布、土器試料2～8は焼成後の塗布あるいは付着であった。

土器試料1(写真1)は、高杯の内外面に、赤色顔料と粘土を混和したスリップをかけ、焼成している。このスリップは粘土と赤色顔料の塊、及びこれらが完全には混和していない部分が認められ、混和状態は均一ではない(写真2～4)。また外面はスリップが剥げ、内面ほど残りがよくない。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は大きさが不揃いの顆粒状のものが認められた(写真5)。

土器試料2(写真6)は、残存する鉢の内側の全面に幅約3mmの黒色のラインと、粉状に残る赤色顔料が認められる(写真7)。黒色のラインは拡大するとシワや気泡が認められる(写真8)。断面から、黒色のラインは黄色透明の漆層であり、厚さは不均一ではあるが8 μm 以下である(写真10)。その上に部分的に粉状に残る赤色顔料が認められた(写真10)。また、外面の一部にも部分的ではあるが粉状の赤色顔料が認められた(写真9)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子はふぞろいな大きさの円柱状のものが認められた(写真11)。土器の底部を、おそらく割れた後にパレットとして転用したと思われる。

土器試料3、7、8(写真12、24、27)は、鉢の内面の凹み部分を中心に赤色顔料が認められる(写真13、24、28)。特に土器試料3には赤色顔料とともに茶褐色の部分が認められる(写真13)。断面では、凝集した赤色顔料と透過光において「黄色透明に見える部分」が認められるが、層状ではない

(写真14、25、29)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は角のある顆粒状の粒子が認められた(写真15、26、30)。これら透過光において「黄色透明に見える部分」が膠着剤かどうかは現時点では不明である。

土器試料4～6(写真16、18、20)は、鉢の内面に赤色顔料が認められるが、土器のクラック内にはほとんど認められない(写真16、18、21)。チョーク状のもの(例えば朱墨など)で擦り付けたように観察できる。断面では、赤色顔料とともに透過光において「黄色透明に見える部分」が認められるが、層状ではない(写真17、19、22)。これらの透過光において「黄色透明に見える部分」が膠着剤かどうかは現時点では不明である。赤色顔料の種類は朱で、粒子は直径1 μm と非常に小さい(写真23)。いわゆる内面朱付着土器と呼ばれるものである。

②木器試料(第2表)

木器試料1は、表面は黒色を呈する(写真31)。断面では、木体の上に黒色顔料混和漆を20 μm 前後の厚さで直接塗布し、その上に厚さ7 μm 前後のやや茶褐色を呈する透明漆のみを塗布した層が2層認められる(写真32)。黒色顔料は直径1 μm 以下と非常に微粒のため、煤と想定される。

木器試料2は、内面は赤色(写真33)、外面は黒色(写真35)を呈する。内面の断面は、赤色顔料を木体の上に直接塗布している。赤色顔料は木体の繊維の中に入り込んでおり、表層としては確認できない。赤色顔料の種類は朱で、粒子は直径1 μm 以下のものが主体をなすが、これは木の繊維に入り込んだものがほとんどであり、表面には粒子の大きいものが含まれていた可能性もある。外面の断面は、黒色顔料混和漆を木体の上に直接塗布している。黒色顔料は木炭粉で、粒子は直径5 μm 前後で角張っている。

木器試料3は、層状ではない赤色顔料が認められるが、サンプリングを行っていない(写真37、57)。

木器試料4は、内外面に赤色顔料の塗布が確認される(写真38、39、40)。濡れた状態では内面がオレンジ色(写真39左)、外面は暗赤色(写真39右)を呈するが、乾いた状態では区分はやや難しい(写真40)。断面では層状でない(写真41、42)。赤色顔料の種類は朱で、粒子の大きさには内外面で違いがある。外面には直径20 μm 程度のもも存在し、外面のほうが内面に比べ粒径範囲が大きい。この粒度の差が、結果として表面からは同じ赤色でも色調の差として見えていると思われる。

木器試料5～9は赤色顔料の塗布が確認できる(写真43、46、49、53、55)。特に、木器試料5と8には表面では層状に残るが(写真43、53)、断面では層としては確認できない(写真44、54)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は木器試料5と6が円柱状、木器試料7がふぞろいな顆粒状のものを主体に、パイプ状や針状のもの、栗の実状のものが認められる。木器試料8と9は採取試料微量のため、確認できなかった。

木器試料2の内面と木器試料3～9の赤色顔料の塗彩に用いられた膠着剤は、残存しておらず確認できないのか、もともと無いのか、残存しているが微量のため確認できないのか、現時点では不明である。

5. まとめ

今回の試料から得られた今後の問題点をまとめ、終わりとしたい。

- 土器試料4～6の内面朱付着土器に認められた特徴は、土器内面の朱がクラック内には入らず、表面に付着するのみであり、外面に染み出しは認められない。例えば朱墨のような朱を練り固めたも

ので内面に朱が擦り付けられたように観察された。また、外面には煤の付着は認められず、土器自体は非常に硬質であった。このような特徴は、一般的な内面朱付着土器の特徴とは異なっており、今後、内面朱付着土器の一類型として注目する必要がある。

○土器試料3、7、8には内面にベンガラが付着していた。ベンガラは凝集した状態であり、透過光において「黄色透明に見える部分」が認められたが、これが漆であるのかどうかは現状ではよくわからない。

○楯である木器試料2～4に認められる赤色顔料には、明瞭な塗膜層が確認できなかった。このような試料はこれまで漆かどうかの判断が難しく、「不明膠着物」と記され、膠の使用が想定される場合があった。しかし、今回の調査では膠着剤が存在するかどうかさえはっきりしなかった。膠着剤の使用と不使用、またどのような膠着剤を用いたのかは、今後の課題ではあるが、赤色顔料を塗布するにあたって下地を作らない点、赤色顔料が革紐を通す穿孔部分の中程まで認められる点、および木器試料4にみる内外面での色調の差が、膠着物を同定する上で間接的な証拠となるものと考えられる。

今回調査の機会を戴きました岡山県古代吉備文化財センター岡本泰典、金田善敬氏に感謝いたします。

第1表 土器試料観察表

試料No	報告No	器種	出土地点	時期	内/外面	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類	備考
1	-	鉢	2区 7Q 河道1 灰色粘質土	弥生時代 後期後半	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成前に塗彩
					外面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成前に塗彩
2	-	◇	2区 7Q 河道1 灰色粘質土	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着 パレット(線状に残る黒色部は漆)
					外面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
3	-	◇	2区 河道1 灰色粘質土(部材)	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
4	-	◇	2区 河道1 中央トレンチ 砂礫層	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
5	-	◇	2区 河道1 東トレンチ 暗褐色粘質土	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
6	-	◇	2区 河道1 東トレンチ暗褐色粘土中(弥生)	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
7	-	◇	2区 東壁 河道1	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
8	-	◇	2区 河道1 灰色粘質土 部材	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	

第2表 木器試料観察表

試料No	報告No	JHNo	器種	木体	時期	部位	顔料の顕微鏡観察	蛍光X線分析	塗彩の工程	備考
1	W71	K29	弓	スタジイ	弥生時代 後期後半		煤	Fe	木体→漆+煤→漆2回	
2	W80	W171	盾	モミ	◇	内面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
						外面	木炭粉	Fe	木体→漆+木炭粉	
3	W81	W155	盾	モミ	◇	外面	?	?	木体→赤色顔料(+膠着剤?)	サンプリングせず。
4	W82	W91	盾	モミ	◇	外面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
						内面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
5	W90	W17	容器	ヒノキ	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
6	W102	W191	装飾板	クスノキ	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
7	W140	W195	用途不明品	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
8	W141	W70	用途不明品	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
9	W208	K623	部材	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	

津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物

別府大学 志賀智史・本田光子

1. はじめに

岡山県岡山市津島遺跡出土の赤色顔料等付着遺物について、付着残存する赤色物が考古学的遺物としての「赤色顔料」であるか否かを判断する事も含めて、調査を行う機会を得たので、その方法と結果を報告したい。

現在までの知見によれば、出土顔料は赤色を呈するものがほとんどで、その他黒色や白色のものが知られている。赤色顔料には主として酸化第二鉄 (Fe_2O_3) を主成分とするベンガラと、赤色の硫化水銀 (HgS) を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛 (Pb_3O_4) を主成分とする鉛丹がある。黒色顔料としては、炭粉、煤やマンガンが用いられている。

分析依頼を受けた津島遺跡出土資料への赤色顔料の付着は、土器の場合と木器の場合で異なる。

一般に土器に赤色顔料が付着している場合、その由来は土器焼成前に塗布したものと焼成後に塗布あるいは付着したものに大きく分けられる。前者は赤色顔料単体、ないしはこれに粘土を混和したものや焼成で明るく発色する粘土（いわゆるスリップ）を土器に塗布し、焼くことによって器壁に赤色顔料を固着させたものである。これらは丹塗土器、丹塗磨研土器と言われるものが該当する。後者には、赤色顔料などを混和した漆を土器の口縁部や外面に塗るといように塗彩を目的としたもの、赤色顔料や赤色顔料混和漆の貯蔵容器、内面朱付着土器と呼ばれる朱を用いる何らかの所作に用いられた容器、塗彩用のパレット等、多種多様なものが知られている。しかし、それらの本来的な用途についてははっきりしないものが多く、分類も難しい部分がある。

赤色顔料の塗布が、土器焼成前か焼成後のどちらに行われたのかは、表面観察による経験的な判断による部分が多い。特に土器焼成後に赤色顔料が付着した試料については、明瞭な層が残っていれば漆の利用は明らかではあるが、それ以外ではどのような膠着剤が用いられたのか、また用いられていないのか、よく分からない部分が多いのが実状である。

木器の場合は、赤色・黒色顔料混和漆や透明漆を塗布するものが知られており、下地の作り方や漆の塗布回数等が時期や地域によって異なる。膠着剤の種類は漆等の樹液や膠が考えられている。漆は酸に非常に強く、一般的な遺跡でも残りやすいため、塗膜断面の観察から層として認められる場合には、漆の利用は明らかである。しかし、これ以外の場合は明確な層として残らないので、どのような膠着剤が用いられたのかは不明である。また、今回の分析試料にもあるような楯に塗布された赤色顔料は、明瞭な塗膜が認められない場合がほとんどであり、どのような膠着材が用いられたのかは不明である。

以上を念頭におき分析調査を実施した。

2. 試料

試料は土器 8 点と木器 9 点の合計 17 点から採取したもので、全て弥生時代後期後半に属する。資料

の器面の全面ないしは一部に赤色や黒色を呈する部分が認められる。木器については資料観察時の所見と試料採集部分を記録した用紙を紛失中のため、各資料中での具体的なサンプリング位置ははっきりしない。記録用紙が見つければ、何らかの機会に報告したい。

なお木器の資料は他に漆塗りの弓があり、本書別項に四柳嘉章氏による分析報告が行われている。

3. 方法

表面観察：残存する資料の表面を裸眼と実体顕微鏡で観察し、顔料の付着状況や付着箇所を確認する。漆の塗布が明らかな場合は、器形や塗布範囲(全面か部分的か、文様、色による塗り分け)等を確認する。粉状に赤色顔料が残っている場合は光学顕微鏡および電子顕微鏡用の試料を作成するために針先に付く程度の赤色部分をサンプリングする。

断面観察：資料から剥落、あるいは直接採取した赤色顔料等付着部分を、エポキシ樹脂に包埋し、厚さ数 μm になるまで研磨する。完成した試料を透過光及び反射光により光学顕微鏡で観察し、膠着剤の有無、下地や上塗りの状況、その回数、厚さ、顔料の種類等を確認する。赤色顔料についてはその形状から朱かベンガラかを経験的に判別した。

赤色顔料の分析：上記観察の所見より判断したが、特にベンガラの場合は、粒子形態を知るために、PHILIPS社製走査型電子顕微鏡XL20を用い観察した。また、赤色顔料の主成分元素の同定を目的に、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製MESA500と電子顕微鏡に付属のEDAX社製のもの)を用い、塗布あるいは付着部分を直接ないしは顔料粒子自体の測定を行った。赤色の由来となる主成分元素としてHgが検出されたものは朱、Feはベンガラと考えた。ただし、土砂にも鉄分(Fe)が含まれているので、実体、生物顕微鏡など光学顕微鏡での観察と判断は必須である。

4. 結果

①土器試料(第1表)

土器試料1は焼成前の赤色顔料の塗布、土器試料2～8は焼成後の塗布あるいは付着であった。

土器試料1(写真1)は、高杯の内外面に、赤色顔料と粘土を混和したスリップをかけ、焼成している。このスリップは粘土と赤色顔料の塊、及びこれらが完全には混和していない部分が認められ、混和状態は均一ではない(写真2～4)。また外面はスリップが剥げ、内面ほど残りがよくない。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は大きさが不揃いの顆粒状のものが認められた(写真5)。

土器試料2(写真6)は、残存する鉢の内側の全面に幅約3mmの黒色のラインと、粉状に残る赤色顔料が認められる(写真7)。黒色のラインは拡大するとシワや気泡が認められる(写真8)。断面から、黒色のラインは黄色透明の漆層であり、厚さは不均一ではあるが8 μm 以下である(写真10)。その上に部分的に粉状に残る赤色顔料が認められた(写真10)。また、外面の一部にも部分的ではあるが粉状の赤色顔料が認められた(写真9)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子はふぞろいな大きさの円柱状のものが認められた(写真11)。土器の底部を、おそらく割れた後にパレットとして転用したものと思われる。

土器試料3、7、8(写真12、24、27)は、鉢の内面の凹み部分を中心に赤色顔料が認められる(写真13、24、28)。特に土器試料3には赤色顔料とともに茶褐色の部分が認められる(写真13)。断面では、凝集した赤色顔料と透過光において「黄色透明に見える部分」が認められるが、層状ではない

(写真14、25、29)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は角のある顆粒状の粒子が認められた(写真15、26、30)。これら透過光において「黄色透明に見える部分」が膠着剤かどうかは現時点では不明である。

土器試料4～6(写真16、18、20)は、鉢の内面に赤色顔料が認められるが、土器のクラック内にはほとんど認められない(写真16、18、21)。チョーク状のもの(例えば朱墨など)で擦り付けたように観察できる。断面では、赤色顔料とともに透過光において「黄色透明に見える部分」が認められるが、層状ではない(写真17、19、22)。これらの透過光において「黄色透明に見える部分」が膠着剤かどうかは現時点では不明である。赤色顔料の種類は朱で、粒子は直径1 μm と非常に小さい(写真23)。いわゆる内面朱付着土器と呼ばれるものである。

②木器試料(第2表)

木器試料1は、表面は黒色を呈する(写真31)。断面では、木体の上に黒色顔料混和漆を20 μm 前後の厚さで直接塗布し、その上に厚さ7 μm 前後のやや茶褐色を呈する透明漆のみを塗布した層が2層認められる(写真32)。黒色顔料は直径1 μm 以下と非常に微粒のため、煤と想定される。

木器試料2は、内面は赤色(写真33)、外面は黒色(写真35)を呈する。内面の断面は、赤色顔料を木体の上に直接塗布している。赤色顔料は木体の繊維の中に入り込んでおり、表層としては確認できない。赤色顔料の種類は朱で、粒子は直径1 μm 以下のものが主体をなすが、これは木の繊維に入り込んだものがほとんどであり、表面には粒子の大きいものが含まれていた可能性もある。外面の断面は、黒色顔料混和漆を木体の上に直接塗布している。黒色顔料は木炭粉で、粒子は直径5 μm 前後で角張っている。

木器試料3は、層状ではない赤色顔料が認められるが、サンプリングを行っていない(写真37、57)。

木器試料4は、内外面に赤色顔料の塗布が確認される(写真38、39、40)。濡れた状態では内面がオレンジ色(写真39左)、外面は暗赤色(写真39右)を呈するが、乾いた状態では区分はやや難しい(写真40)。断面では層状でない(写真41、42)。赤色顔料の種類は朱で、粒子の大きさには内外面で違いがある。外面には直径20 μm 程度のもも存在し、外面のほうが内面に比べ粒径範囲が大きい。この粒度の差が、結果として表面からは同じ赤色でも色調の差として見えていると思われる。

木器試料5～9は赤色顔料の塗布が確認できる(写真43、46、49、53、55)。特に、木器試料5と8には表面では層状に残るが(写真43、53)、断面では層としては確認できない(写真44、54)。赤色顔料の種類はベンガラで、粒子は木器試料5と6が円柱状、木器試料7がふぞろいな顆粒状のものを主体に、パイプ状や針状のもの、栗の実状のものが認められる。木器試料8と9は採取試料微量のため、確認できなかった。

木器試料2の内面と木器試料3～9の赤色顔料の塗彩に用いられた膠着剤は、残存しておらず確認できないのか、もともと無いのか、残存しているが微量のため確認できないのか、現時点では不明である。

5. まとめ

今回の試料から得られた今後の問題点をまとめ、終わりとしたい。

- 土器試料4～6の内面朱付着土器に認められた特徴は、土器内面の朱がクラック内には入らず、表面に付着するのみであり、外面に染み出しは認められない。例えば朱墨のような朱を練り固めたも

ので内面に朱が擦り付けられたように観察された。また、外面には煤の付着は認められず、土器自体は非常に硬質であった。このような特徴は、一般的な内面朱付着土器の特徴とは異なっており、今後、内面朱付着土器の一類型として注目する必要がある。

○土器試料3、7、8には内面にベンガラが付着していた。ベンガラは凝集した状態であり、透過光において「黄色透明に見える部分」が認められたが、これが漆であるのかどうかは現状ではよくわからない。

○楯である木器試料2～4に認められる赤色顔料には、明瞭な塗膜層が確認できなかった。このような試料はこれまで漆かどうかの判断が難しく、「不明膠着物」と記され、膠の使用が想定される場合があった。しかし、今回の調査では膠着剤が存在するかどうかさえはっきりしなかった。膠着剤の使用と不使用、またどのような膠着剤を用いたのかは、今後の課題ではあるが、赤色顔料を塗布するにあたって下地を作らない点、赤色顔料が革紐を通す穿孔部分の中程まで認められる点、および木器試料4にみる内外面での色調の差が、膠着物を同定する上で間接的な証拠となるものと考えられる。

今回調査の機会を戴きました岡山県古代吉備文化財センター岡本泰典、金田善敬氏に感謝いたします。

第1表 土器試料観察表

試料No	報告No	器種	出土地点	時期	内/外面	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類	備考
1	-	鉢	2区 7Q 河道1 灰色粘質土	弥生時代 後期後半	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成前に塗彩
					外面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成前に塗彩
2	-	◇	2区 7Q 河道1 灰色粘質土	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着 パレット(線状に残る黒色部は漆)
					外面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
3	-	◇	2区 河道1 灰色粘質土(部材)	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
4	-	◇	2区 河道1 中央トレンチ 砂礫層	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
5	-	◇	2区 河道1 東トレンチ 暗褐色粘質土	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
6	-	◇	2区 河道1 東トレンチ暗褐色粘土中(弥生)	◇	内面	朱	Hg, Fe	朱	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
7	-	◇	2区 東壁 河道1	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	
8	-	◇	2区 河道1 灰色粘質土 部材	◇	内面	ベンガラ	Fe	ベンガラ	顔料は焼成後に塗彩/付着
					外面	確認できず	Fe	なし	

第2表 木器試料観察表

試料No	報告No	JHNo	器種	木体	時期	部位	顔料の顕微鏡観察	蛍光X線分析	塗彩の工程	備考
1	W71	K29	弓	スタジイ	弥生時代 後期後半		煤	Fe	木体→漆+煤→漆2回	
2	W80	W171	盾	モミ	◇	内面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
						外面	木炭粉	Fe	木体→漆+木炭粉	
3	W81	W155	盾	モミ	◇	外面	?	?	木体→赤色顔料(+膠着剤?)	サンプリングせず。
4	W82	W91	盾	モミ	◇	外面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
						内面	朱	Hg, Fe	木体→朱(+膠着剤?)	
5	W90	W17	容器	ヒノキ	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
6	W102	W191	装飾板	クスノキ	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
7	W140	W195	用途不明品	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
8	W141	W70	用途不明品	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	
9	W208	K623	部材	-	◇		ベンガラ	Fe	木体→ベンガラ(+膠着剤?)	

津島遺跡出土土器の胎土分析

－ 文様のある特殊な器台、壺の分析 －

岡山理科大学 白石 純

1. はじめに

弥生時代後期の河道1から出土した文様のある特殊な器台および壺の胎土が、肉眼観察では、他の土器（同じ遺跡から出土している日常的に使用されている土器）と差異が認められた。そこで理化学的な胎土分析により、胎土に違いがみられるか。また、どの地域の胎土に類似しているか調べた。

分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分(元素)の量を測定し、実体顕微鏡観察では肉眼観察により土器表面の砂粒の種類を、偏光顕微鏡観察では胎土中の岩石・鉱物の同定をそれぞれ実施し、胎土の差異について検討した。

2. 分析結果

分析した土器は、表1に示した河道および住居内から出土した弥生時代後期、古墳時代前期の器台、壺、甕、高杯など合計58点である。また、形態的な特徴から讃岐産と考えられる土器（番号12、13）も2点含まれている。

【蛍光X線分析法による胎土分析】

この分析で測定した元素は、主要元素であるSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pの10元素と、微量元素であるRb、Sr、Zrの3元素である。このうち、現在までの分析で胎土に違いがみられる元素としてSi、Ti、Al、Fe、Ca、Kなどの元素があげられる。ここでは、K、Caの元素を用いてX-Y散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

その結果、第1図K-Ca散布図から文様のある特殊な器台・壺と、その他の土器の胎土について比較してみた。すると、散布図に示しているように器台・壺とその他の土器は、胎土的に差異はみられなかった。そして、特殊器台との胎土比較でも胎土は一致せず、異なっていた。また、形態的に讃岐産土器と判断されている12と13の甕は、いずれも讃岐産土器の分布領域に分布した。

【実体顕微鏡による胎土観察】

実体顕微鏡により、10倍～30倍で土器表面の砂粒観察(岩石・鉱物)を行った。

この結果、今回観察した土器には石英、長石、雲母、角閃石、片岩、火山ガラスなどの砂粒が含まれていた。

器台（番号4、写真1）

0.5mm～1mmの石英、長石を多く含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）、角閃石（0.5mm以下）、片岩（0.5mm～1mm）、火山ガラス（0.5mm以下）がみられる。

器台（番号5、写真2）

0.5mm～1mmの石英、長石を多く含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）、角閃石（0.5mm以下）、片岩（0.5mm～1mm）、火山ガラス（0.5mm以下）がみられる。また、この器台の表面には厚さ数ミリの赤褐色の化粧土が施されていることがわかった（番号5、写真3）。その他の器台破片にも同様に化粧土

が観察された（番号4、写真1）。

甕（番号7、写真4）

0.5mm～1mmの石英、長石を多く含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）、角閃石（0.5mm以下）、片岩（0.5mm～1mm）を含み、火山ガラス（0.5mm以下）は器台に比べやや多く含まれている。また、これ以外の土器にも同様な砂粒が含まれていた。

【偏光顕微鏡による砂粒観察】

偏光顕微鏡による胎土中に含まれている岩石、鉱物の同定を行った。

この結果、器台、壺、甕、高杯、鉢の各器種とも石英、斜長石、カリ長石と少量の黒雲母、角閃石、砂質片岩、片岩、火山ガラスが含まれていた（写真5、6、7、8）。

また、実体顕微鏡で器台の表面に赤褐色の化粧土が観察されたことから、この分析でも調べたところ、写真7のように厚さ約0.5mmの明らかに異なる粘土が表面に塗られていることが判明した。この化粧粘土には、微細な0.3mm以下の石英、長石が観察された。また、蛍光X線分析により、この化粧粘土を分析したが、分析値では胎土に差異はなかった。

3. まとめ

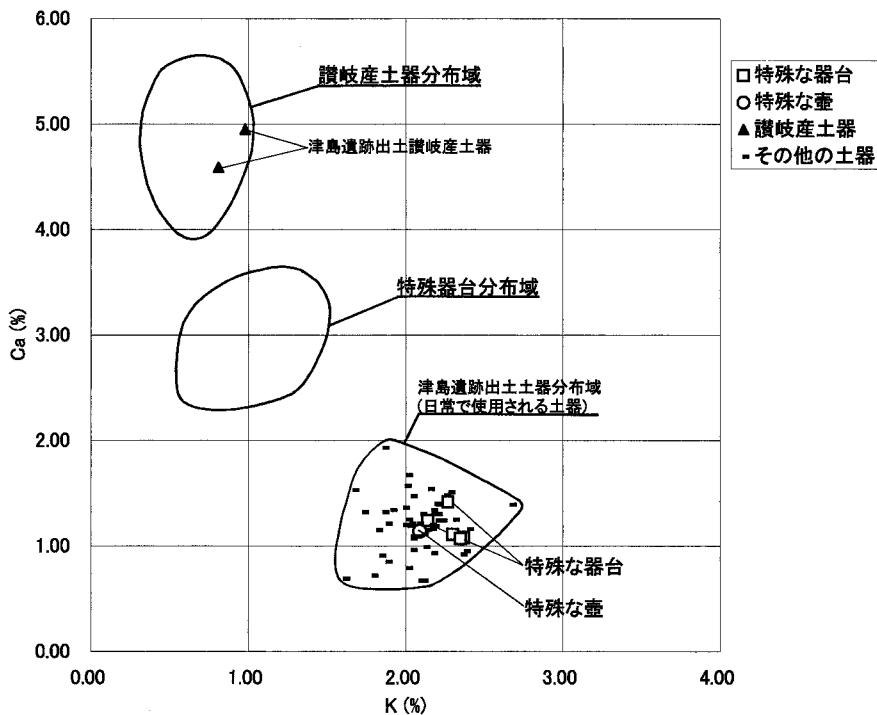
津島遺跡の河道内より出土した文様のある特殊な器台・壺が、日常で使用されている土器と胎土的に差異があるかどうか、複数の胎土分析法により検討したところ、以下のようにまとめられる。

- (1) 蛍光X線分析法による胎土の比較では、器台・壺とその他の土器には差がみられず胎土的には同じであった。また、実体顕微鏡、偏光顕微鏡による岩石・鉱物の同定では、両方の分析結果とも、ほぼ同じ岩石・鉱物が確認され、器台・壺とその他の土器は、ほぼ同じ岩石、鉱物で構成されていることがわかった。
- (2) 今回分析した土器の粘土が、どの地域のものを使用しているか検討した。比較した粘土は、津島遺跡の河道および岡山大学構内遺跡の河道から採取した粘土、砂粒である。その結果、津島および岡山大学構内の河道から採取した砂粒構成と一致した。つまり、これらの土器は遺跡周辺の粘土を使用し製作されたと考えられる。
- (3) 器台の表面に赤褐色の化粧粘土が塗られていたことが、今回の分析で確認された。この化粧粘土は、色調が異なる以外はその下の素地土と成分、胎土的に差異はないことが分析で判明した。ただ、砂粒の大きさがことなり、やや精製された粘土が使用されているようである。また、色調が特殊器台などに使用されている粘土とやや似ている点があげられ、特殊器台を意識した化粧粘土とも考えられる。

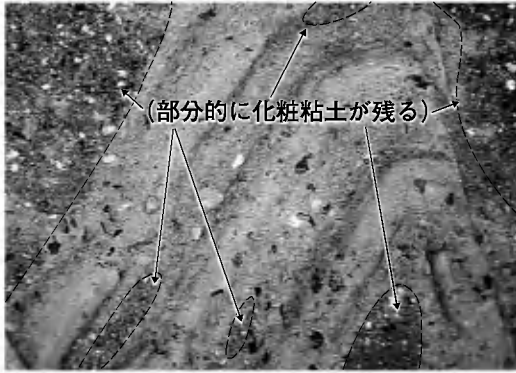
この分析を実施する機会を与えていただいた、高畑知功、島崎 東、岡本泰典の各氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろお世話になった。また、粘土、砂礫の採取では岡山大学埋蔵文化財調査研究センターにお世話になった。記して感謝致します。

表1 津島遺跡出土土器胎土分析一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zr はppm.

番号	器種	出土遺構	掲載番号	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時期
1	器台	河道1		66.36	0.92	18.21	5.31	0.07	1.92	1.11	3.07	2.30	0.51	179	186	215	弥・後
2	器台	河道1	1179	65.38	0.93	17.99	6.08	0.12	1.79	1.24	2.56	2.14	1.48	149	234	246	弥・後
3	器台	河道1	1192	67.91	0.98	18.34	4.88	0.07	1.88	1.08	2.29	2.37	0.04	168	171	213	弥・後
4	器台	河道1		66.97	0.93	18.49	4.79	0.06	1.99	1.07	3.15	2.35	0.02	201	152	205	弥・後
5	器台	河道1	1195	66.46	0.84	18.13	4.45	0.10	1.84	1.42	2.57	2.27	1.57	193	261	266	弥・後
6	壺	河道1	1173	66.05	0.87	18.31	5.64	0.09	1.67	1.14	2.80	2.09	1.10	153	207	298	弥・後
7	壺	河道1	773	72.95	1.09	14.59	3.73	0.06	1.55	0.99	2.39	2.12	0.26	148	169	355	弥・後
8	壺	河道1	767	71.37	0.79	16.40	3.97	0.12	1.63	0.95	2.09	2.38	0.11	167	118	268	弥・後
9	壺	河道1	1251	68.95	0.92	16.74	4.49	0.08	1.85	1.24	3.09	2.20	0.26	153	196	227	弥・後
10	壺	河道1	528	64.91	0.83	18.97	6.91	0.10	1.78	1.93	2.52	1.86	0.03	161	202	276	弥・後
11	壺	河道1		67.33	0.80	17.32	5.17	0.08	1.71	1.54	2.52	2.15	1.14	155	238	262	弥・後
12	壺	河道1	793	56.78	1.22	19.35	10.82	0.21	2.57	4.59	2.56	0.81	0.85	40	298	159	弥・後
13	壺	河道1	789	56.79	1.13	18.23	10.56	0.19	2.65	4.95	2.18	0.98	2.03	70	311	142	弥・後
14	壺	河道1	761	71.82	1.08	13.85	4.79	0.09	1.53	1.21	1.95	2.08	1.28	162	233	414	弥・後
15	壺	河道1	765	67.54	0.76	18.21	5.24	0.08	1.83	0.96	2.15	2.04	0.84	148	170	227	弥・後
16	壺	河道1	609	66.47	1.01	17.24	6.05	0.09	1.81	1.51	2.00	2.28	1.21	229	270	300	弥・後
17	壺	河道1	1017	68.54	0.85	17.14	4.38	0.08	1.81	1.25	2.20	2.31	1.13	169	241	233	弥・後
18	壺	河道1		67.39	0.98	17.61	5.66	0.10	1.92	1.19	2.40	2.18	0.37	174	193	245	弥・後
19	壺	河道1	668	66.66	0.90	17.72	5.98	0.10	1.78	1.15	1.89	2.13	1.44	172	237	220	弥・後
20	脚付直口壺	河道1	958	63.09	0.86	18.62	7.25	0.11	2.01	1.20	3.65	1.99	0.86	174	212	256	弥・後
21	高杯	河道1		67.57	0.86	17.41	5.45	0.07	1.79	1.16	3.19	2.16	0.13	144	174	266	弥・後
22	高杯	河道1	896	65.00	0.97	17.64	7.49	0.11	1.83	1.34	2.73	1.91	0.75	168	212	250	弥・後
23	高杯	河道1	835	66.61	0.92	17.62	6.27	0.07	1.74	1.11	3.15	2.11	0.22	154	165	258	弥・後
24	鉢	河道1		67.67	0.99	17.26	4.97	0.08	1.68	1.47	2.73	2.04	0.88	158	250	266	弥・後
25	鉢	河道1	1024	67.02	0.80	17.41	5.13	0.08	1.77	1.24	2.73	2.23	1.11	157	230	231	弥・後
26	壺	竪穴住居46	1443	65.38	0.91	19.52	4.87	0.07	2.02	0.85	2.89	1.88	1.37	206	187	201	古・前
27	壺	竪穴住居46	1444	66.98	0.73	21.87	2.88	0.04	1.72	0.72	3.01	1.79	0.13	189	113	235	古・前
28	高杯	竪穴住居46	1475	66.22	0.91	17.76	7.20	0.07	1.72	0.93	2.58	2.17	0.16	192	170	294	古・前
29	鉢	竪穴住居46	1487	65.45	0.99	20.20	4.86	0.06	1.90	0.91	2.72	1.84	0.87	189	177	207	古・前
30	壺	河道2		66.17	0.81	20.33	4.43	0.07	1.68	1.53	1.92	1.67	1.07	147	217	172	古・前
31	壺	河道1		70.10	0.79	16.28	4.35	0.07	1.83	1.34	2.77	2.17	0.11	171	214	243	弥・後
32	壺	河道1		66.74	0.83	18.13	5.29	0.09	1.84	1.30	2.41	2.10	0.95	162	221	225	弥・後
33	壺	河道1		66.38	0.95	18.23	5.16	0.08	1.82	1.30	2.37	2.20	1.21	167	237	243	弥・後
34	壺	河道1		66.73	0.92	17.82	5.69	0.08	1.89	1.20	2.65	2.16	0.68	195	191	242	弥・後
35	壺	河道1		68.45	0.98	15.71	6.60	0.10	1.76	1.32	2.29	1.73	0.89	123	164	338	弥・後
36	壺	河道1		67.28	0.58	16.98	4.57	0.09	1.72	1.39	2.51	2.67	1.79	234	230	299	弥・後
37	壺	河道1		69.88	0.79	16.46	4.08	0.09	1.83	1.48	2.69	2.25	0.22	165	234	239	弥・後
38	壺	河道1		68.65	0.84	16.45	4.19	0.08	1.79	1.39	3.24	2.20	0.86	166	233	262	弥・後
39	壺	河道1		70.81	0.76	15.50	4.44	0.06	1.86	1.25	2.70	2.01	0.45	157	177	315	弥・後
40	壺	河道1		67.72	0.91	16.93	5.48	0.10	1.80	1.30	2.68	2.17	0.76	178	213	261	弥・後
41	壺	河道1		65.70	0.82	19.26	3.93	0.06	1.77	1.32	2.04	1.86	2.83	138	247	239	古・前
42	壺	河道1		64.76	0.89	20.30	4.01	0.07	1.89	1.15	2.14	1.82	2.74	184	237	203	古・前
43	壺	河道1		68.13	0.84	18.27	3.03	0.06	1.69	1.09	1.98	2.04	2.64	214	236	222	古・前
44	壺	河道1		70.40	0.65	18.12	3.46	0.04	1.66	0.67	2.46	2.11	0.23	140	112	186	古・前
45	壺	河道1		68.57	0.77	17.80	4.78	0.05	1.83	0.67	3.16	2.09	0.11	194	100	221	古・前
46	壺	河道1		67.41	0.85	17.02	4.65	0.10	1.79	1.40	2.81	2.19	1.57	156	247	224	古・前
47	高杯	河道1		65.06	0.87	18.90	6.58	0.09	1.75	1.21	2.12	1.88	1.29	177	212	319	弥・後
48	高杯	河道1		69.65	0.90	17.02	4.99	0.08	1.79	0.69	2.55	1.61	0.49	167	109	360	弥・後
49	高杯	河道1		65.39	0.71	18.59	6.06	0.10	1.73	1.36	2.26	1.99	1.35	179	244	315	弥・後
50	高杯	河道1		68.55	0.55	17.07	4.55	0.08	1.61	1.16	2.74	2.40	0.82	171	190	367	弥・後
51	高杯	河道1		65.01	0.91	17.69	7.61	0.12	1.88	1.21	2.61	2.03	0.70	203	225	238	弥・後
52	高杯	河道1		66.48	0.82	19.31	6.09	0.07	1.72	0.79	2.45	2.01	0.09	176	119	345	弥・後
53	高杯	河道1		62.96	0.83	18.28	5.72	0.13	1.84	1.57	3.13	2.00	2.98	136	366	264	弥・後
54	高杯	河道1		65.55	0.99	19.31	5.75	0.08	1.91	1.07	2.78	2.04	0.34	173	186	271	弥・後
55	高杯	河道1		62.34	0.87	18.22	9.89	0.11	1.78	0.92	3.16	2.36	0.15	203	135	237	弥・後
56	高杯	河道1		63.44	0.82	18.04	8.57	0.11	1.98	1.19	2.86	2.02	0.59	166	205	257	弥・後
57	高杯	河道1		62.12	0.82	18.06	5.99	0.11	1.74	1.67	2.17	2.01	4.56	154	438	266	弥・後
58	高杯	河道1		62.36	0.89	18.30	10.31	0.10	1.95	1.09	2.64	2.07	0.13	191	138	228	弥・後



第1図 津島遺跡出土土器の胎土比較 K - Ca 散布図



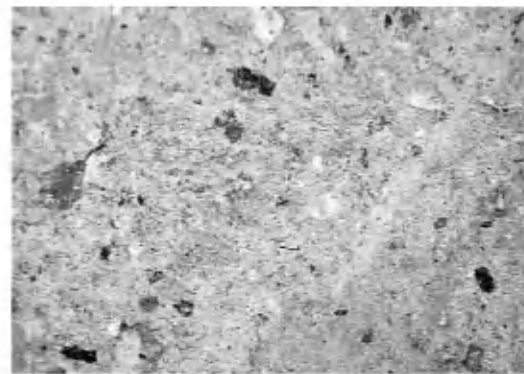
1. 器台 (番号4) の砂礫観察



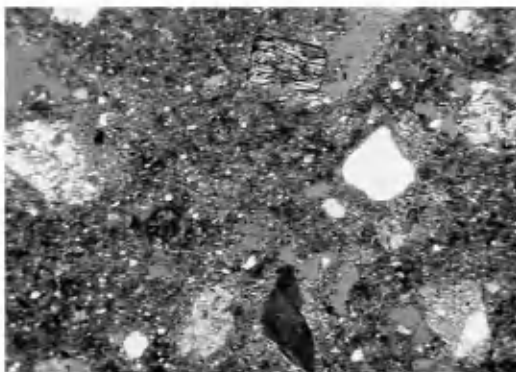
2. 器台 (番号5) の砂礫観察



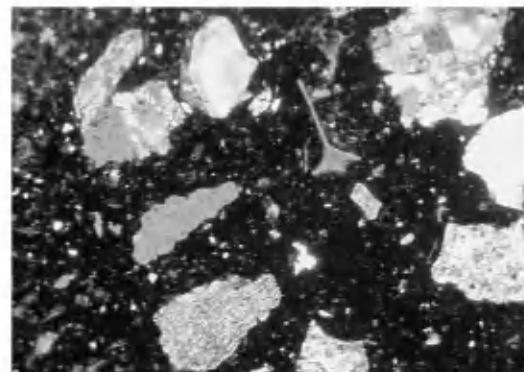
3. 器台 (番号5) の断面観察 (化粧粘土)



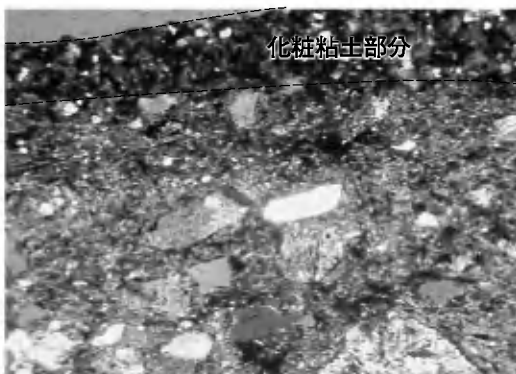
4. 甕 (番号7) の砂礫観察



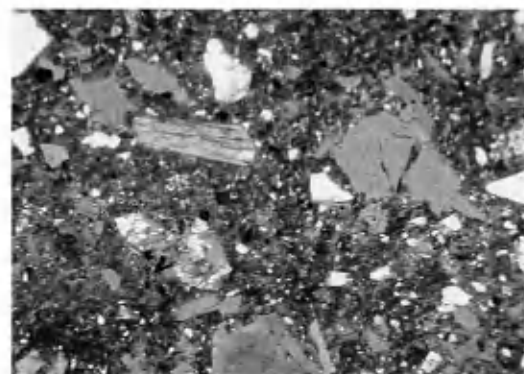
5. 器台 (番号4) 直交ニコル



6. 器台 (番号5) 直交ニコル



7. 器台 (番号5) の断面観察 (化粧粘土部分がやや暗く見える) 直交ニコル



8. 甕 (番号7) 直交ニコル

実体 (1~4) ×10倍、偏光顕微鏡写真 (5~8) ×32倍

津島遺跡出土のガラス滓

株式会社ニコン 木戸一博

1 試料及び実体顕微鏡観察結果

試料は岡山県津島遺跡3区10Q 土壙10の炭化米をフローテーションした後に検出されたガラス滓である。表1に試料の表面組成分析結果を示す。

出土したガラス滓はほとんどが薄茶色多孔質焼結体であり、一部に肉眼観察においてもガラスと認められる部位が存在する。実体顕微鏡観察によればガラス滓1及び3の表面には茶色のガラス部分が認められ、ガラス部分内部には多量の泡と未溶融物が多い。また、ガラス滓1のガラス部分表面に無数の擦傷が確認できるが、方向に規則性はなく、生じた過程を推測することは難しい。全体に百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土及び津島遺跡(W区、No41井戸)出土のガラス滓における焼結体部分と同類である^{1)・6)}。

2 分析結果

試料をエネルギー分散型X線分析装置(EDAX DX-4)により分析した。分析は安立伸夫氏(株式会社ニコン)に依頼した。分析結果を表1に示す。本分析法では、試料表面下約1 μ mまでの組成を分析している。試料が埋蔵中に水と接触してアルカリ金属元素等の可溶成分が溶出し、表面組成が内部組成と異なっている可能性がある。そこで、ガラス滓1の茶色ガラス部分を破断し、内部組成の分析も行ったが、大きな組成の違いは認められなかった。

また、ガラス滓は部位による組成差が大きいため、ガラス滓1～2は4部位、ガラス滓3～6は3部位を分析し、その平均値と標準偏差を示した。

表1 津島遺跡出土ガラス滓の表面組成分析結果

試料	ガラス滓1	ガラス滓2	ガラス滓3	ガラス滓4	ガラス滓5	ガラス滓6	
重量 (mg)	31.55	39.50	37.01	1.78	13.39	4.71	
組成 (wt%)	SiO ₂	50.5 \pm 4.2	63.0 \pm 5.7	52.5 \pm 8.7	62.0 \pm 3.1	66.1 \pm 5.5	57.0 \pm 1.4
	Na ₂ O	1.0 \pm 0.1	14.6 \pm 4.6	1.5 \pm 0.4	8.6 \pm 1.2	7.1 \pm 1.0	4.1 \pm 4.7
	K ₂ O	1.8 \pm 0.7	0.3 \pm 0.7	1.4 \pm 0.4	2.1 \pm 0.1	1.6 \pm 0.1	2.1 \pm 0.3
	MgO	1.4 \pm 0.1	5.3 \pm 0.7	1.9 \pm 0.5	4.2 \pm 1.2	4.1 \pm 0.5	2.6 \pm 0.6
	CaO	3.5 \pm 1.4	0.3 \pm 0.6	6.2 \pm 4.3	2.8 \pm 0.6	2.8 \pm 0.3	3.2 \pm 0.9
	Al ₂ O ₃	30.7 \pm 5.5	12.9 \pm 2.2	22.4 \pm 2.2	12.6 \pm 5.6	11.8 \pm 4.0	20.8 \pm 6.2
	TiO ₂	2.0 \pm 0.6		1.3 \pm 0.2			1.3 \pm 0.2
	Fe ₂ O ₃	9.2 \pm 3.3	2.9 \pm 4.3	12.8 \pm 7.0	7.7 \pm 3.8	6.5 \pm 2.4	8.8 \pm 2.0
P ₂ O ₅		0.8 \pm 1.7					

3 考察

ガラス滓1～6の平均組成と百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土及び津島遺跡（W区、No41井戸）出土のガラス滓組成を比較し表2に示す。ガラス滓毎及び部位毎の組成バラツキを考慮すると、他の遺跡出土のガラス滓と顕著な差は認められない。各成分とも類似しており、出発物質は土と砂と植物灰を出発物質としている可能性が高い。

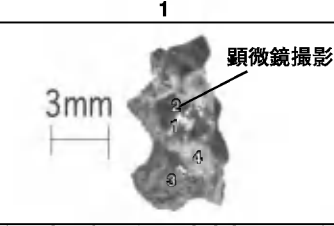
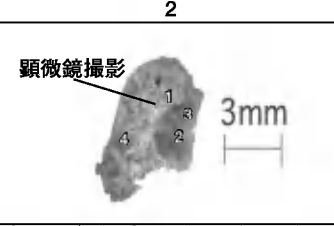
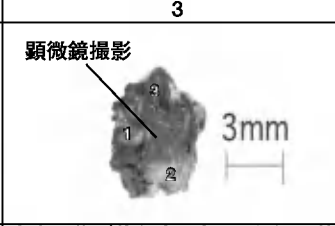
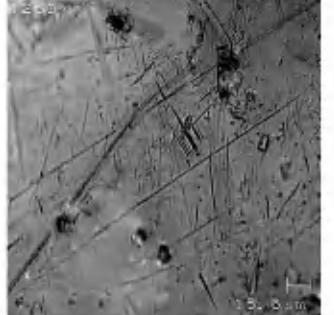
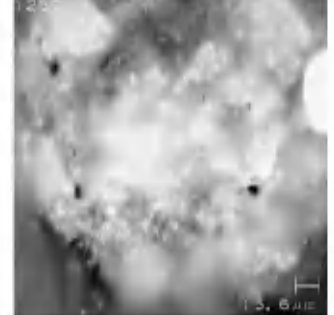
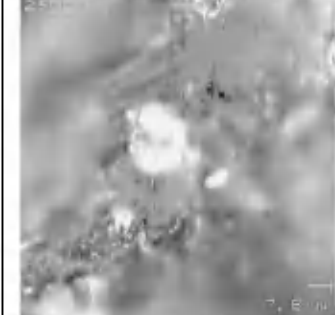
表2 津島遺跡出土ガラス滓の表面組成分析結果と他の遺跡出土ガラス滓平均組成⁶⁾の比較

試料	ガラス滓 1.6平均	百間川 原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川 今谷遺跡	津寺遺跡	津島遺跡 (W区、No41井戸)	
組成 (wt%)	SiO ₂	58.3±7.4	50.6	60.7	62.6	54.1	60.0
	Na ₂ O	6.3±5.6	2.5	9.4	11.5	1.9	7.7
	K ₂ O	1.5±0.8	1.5	2.0	1.3	1.9	2.3
	MgO	3.3±1.6	3.3	5.7	4.9	5.2	3.9
	CaO	3.0±2.4	2.3	3.6	2.6	5.3	2.2
	Al ₂ O ₃	18.9±8.3	20.8	9.7	9.5	27.1	12.1
	TiO ₂	0.8±0.9					0.8
	Fe ₂ O ₃	7.8±4.7	14.7	5.1	4.2	5.9	9.7
	P ₂ O ₅	0.2±0.7					0.8
	S						0.5
	Cl						1.3
	MnO						0.5

参考

- 1) 三浦定俊、荻谷道郎 岡山大学構内遺跡発掘報告第3冊 鹿田遺跡I、p.463
- 2) 荻谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡3、p.301 (1996)
- 3) 荻谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 百間川原尾島遺跡3、p.316 (1994)
- 4) 荻谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾島遺跡4、p.283 (1995)
- 5) 荻谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 百間川原尾島遺跡5、p.238 (1996)
- 6) 荻谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145 津島遺跡、p.19 (1999)

津島 3区 10Q 土壌10 (炭化米) フローテーション後 ガラス滓

ガラス滓番号	1	2	3									
全体写真												
備考	金属光沢部分あり。中央部分に大きな茶色のガラス部分があり、泡、熔け残りがある。また、表面には筋状の傷が多数ある。	右下のくぼみ部分が薄灰緑のガラス状である。ただし透明感は少なく、光沢のみ。	中央の焦げ茶色光沢部分がガラス状。マトリックスに線状に埋没しており、泡を多く含む。									
顕微鏡写真												
重量	31.55mg	39.50mg	37.01mg									
エネルギー分散型X線分析装置 (EDAX DX-4) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)												
測定部位 (全体写真)	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	
成分 (重量%)	SiO ₂	45.7	54.6	48.2	53.3	60.4	70.4	57.1	64.0	44.8	50.8	62.0
	Na ₂ O	1.1	0.9	1.0	1.1	10.8	12.9	21.3	13.3	1.7	1.7	1.0
	K ₂ O	1.4	2.8	1.1	1.9	0.0	0.0	0.0	1.3	1.1	1.2	1.9
	MgO	1.4	1.5	1.4	1.4	5.1	5.6	5.9	4.4	1.8	2.5	1.5
	CaO	3.8	5.2	3.0	2.0	0.0	0.0	0.0	1.2	9.0	8.3	1.3
	Al ₂ O ₃	30.8	22.9	35.2	33.8	11.3	11.1	15.7	13.4	20.0	22.8	24.3
	TiO ₂	2.8	2.0	1.7	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	1.2	1.5
	Fe ₂ O ₃	13.0	10.1	8.4	5.2	9.1	0.0	0.0	2.4	20.3	11.5	6.5
	P ₂ O ₅	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	S											
	Cl											
MnO												
成分 (重量%)		平均	標準偏差		平均	標準偏差		平均	標準偏差		標準偏差	
	SiO ₂		50.5	4.2	63.0	5.7	52.5	8.7				
	Na ₂ O		1.0	0.1	14.6	4.6	1.5	0.4				
	K ₂ O		1.8	0.7	0.3	0.7	1.4	0.4				
	MgO		1.4	0.1	5.3	0.7	1.9	0.5				
	CaO		3.5	1.4	0.3	0.6	6.2	4.3				
	Al ₂ O ₃		30.7	5.5	12.9	2.2	22.4	2.2				
	TiO ₂		2.0	0.6	0.0	0.0	1.3	0.2				
	Fe ₂ O ₃		9.2	3.3	2.9	4.3	12.8	7.0				
	P ₂ O ₅		0.0	0.0	0.8	1.7	0.0	0.0				
	S											
Cl												
MnO												

ガラス滓番号	1断面	
成分 (重量%)	SiO ₂	45.7
	Na ₂ O	1.1
	K ₂ O	1.4
	MgO	1.4
	CaO	3.8
	Al ₂ O ₃	30.8
	TiO ₂	2.8
	Fe ₂ O ₃	13.0
	P ₂ O ₅	0.0
	S	
	Cl	
MnO		

全データ集計	1~6平均	1~6偏差	
成分 (重量%)	SiO ₂	58.3	7.4
	Na ₂ O	6.3	5.6
	K ₂ O	1.5	0.8
	MgO	3.3	1.6
	CaO	3.0	2.4
	Al ₂ O ₃	18.9	8.3
	TiO ₂	0.8	0.9
	Fe ₂ O ₃	7.8	4.7
	P ₂ O ₅	0.2	0.7
	S		
	Cl		
MnO			

津島 3区 10Q 土壌10 (炭化米) フローテーション後 ガラス滓

ガラス滓番号	4	5	6				
全体写真							
備考	顕微鏡で観察しないとガラスと認識できない。 全体に微小なガラスがちりばめられているような状態。	顕微鏡で観察しないとガラスと認識できない。 全体にガラスがまぶされているような状態。	全体に鈍い光沢あり。 ガラス部分の球状突起が特徴的。				
顕微鏡写真	全体に点状の光沢が微小にあるのみで特徴的な箇所はない。						
重量	1.78mg	13.39mg	4.71mg				
エネルギー分散型X線分析装置 (EDAX DX-4) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)							
測定部位 (全体写真)	1 2 3	1 2 3	1 2 3				
成分 (重量%)	SiO ₂	65.5 60.2 60.2	70.8 60.1 67.5	55.4 57.7 58.0			
	Na ₂ O	9.6 7.3 8.8	8.2 6.2 6.9	0.7 9.4 2.2			
	K ₂ O	2.1 2.2 2.1	1.5 1.6 1.7	2.5 2.0 1.9			
	MgO	5.2 4.5 2.8	4.0 4.6 3.7	2.1 3.3 2.4			
	CaO	2.8 3.4 2.2	3.1 2.5 2.8	3.3 4.0 2.2			
	Al ₂ O ₃	8.6 10.3 19.0	7.9 15.9 11.5	23.6 13.7 25.2			
	TiO ₂	0.0 0.0 0.0	0.0 0.0 0.0	1.5 1.4 1.1			
	Fe ₂ O ₃	6.2 12.1 4.9	4.5 9.1 5.9	10.9 8.5 7.0			
	P ₂ O ₅	0.0 0.0 0.0	0.0 0.0 0.0	0.0 0.0 0.0			
	S						
	Cl						
MnO							
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
成分 (重量%)	SiO ₂	62.0	3.1	66.1	5.5	57.0	1.4
	Na ₂ O	8.6	1.2	7.1	1.0	4.1	4.7
	K ₂ O	2.1	0.1	1.6	0.1	2.1	0.3
	MgO	4.2	1.2	4.1	0.5	2.6	0.6
	CaO	2.8	0.6	2.8	0.3	3.2	0.9
	Al ₂ O ₃	12.6	5.6	11.8	4.0	20.8	6.2
	TiO ₂	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.2
	Fe ₂ O ₃	7.7	3.8	6.5	2.4	8.8	2.0
	P ₂ O ₅	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	S						
	Cl						
MnO							

試料	ガラス滓 1	ガラス滓 2	ガラス滓 3	ガラス滓 4	ガラス滓 5	ガラス滓 6	ガラス滓 1~6平均	百間川原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川今谷遺跡	津寺遺跡	津島遺跡 (W区 No.41井戸)	
重量 (mg)	31.55	39.50	37.01	1.78	13.39	4.71							
成分 (重量%)	SiO ₂	50.5±4.2	63.0±5.7	52.5±8.7	62.0±3.1	66.1±5.5	57.0±1.4	58.3±7.4	50.6	60.7	62.6	54.1	60.0
	Na ₂ O	1.0±0.1	14.6±4.6	1.5±0.4	8.6±1.2	7.1±1.0	4.1±4.7	6.3±5.6	2.5	9.4	11.5	1.9	7.7
	K ₂ O	1.8±0.7	0.3±0.7	1.4±0.4	2.1±0.1	1.6±0.1	2.1±0.3	1.5±0.8	1.5	2.0	1.3	1.9	2.3
	MgO	1.4±0.1	5.3±0.7	1.9±0.5	4.2±1.2	4.1±0.5	2.6±0.6	3.3±1.6	3.3	5.7	4.9	5.2	3.9
	CaO	3.5±1.4	0.3±0.6	6.2±4.3	2.8±0.6	2.8±0.3	3.2±0.9	3.0±2.4	2.3	3.6	2.6	5.3	2.2
	Al ₂ O ₃	30.7±5.5	12.9±2.2	22.4±2.2	12.6±5.6	11.8±4.0	20.8±6.2	18.9±8.3	20.8	9.7	9.5	27.1	12.1
	TiO ₂	2.0±0.6		1.3±0.2			1.3±0.2	0.8±0.9					0.8
	Fe ₂ O ₃	9.2±3.3	2.9±4.3	12.8±7.0	7.7±3.8	6.5±2.4	8.8±2.0	7.8±4.7	14.7	5.1	4.2	5.9	9.7
	P ₂ O ₅		0.8±1.7					0.2±0.7					0.8
	S												0.5
	Cl												1.3
MnO												0.5	

遺 構 一 覽 表

遺 物 觀 察 表

遺構名称新旧对照表

遺構一覧・遺物観察表凡例

1 遺構一覧表

竪穴住居

- ・平面形は、床面の形状を表す。
- ・規模は、対向する上端間の最大距離を記載する。()は残存長で表す。
- ・主軸は、国土座標の北を基準としたときの竪穴の主軸方位を表示した。
- ・面積は、竪穴底面で囲まれた面積を表示した。少ない残存面積でも推測できるものは()で表す。
- ・主柱B/Aは、住居本来の本数をA、検出した本数をBとして表した。
- ・高床部は、設けられた辺の数を記載する。
- ・焼土面は、中央穴とカマドを除く被熱箇所の数に記した。

掘立柱建物

- ・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行総長、梁間総長をそれぞれ表す。
- ・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。
- ・面積は、建坪の面積を表す。
- ・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

井戸・袋状土壇・土壇墓・土壇・溝

- ・規模は、検出面での長さ・幅・深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・断面形は、壁面形態(上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC)と底面形態(平らなものをa、窪むものをb、盛り上がるものをc)を組み合わせて表した。

2 遺物観察表

土器・陶磁器

- ・法量のうち()は、残存値を表す。口径項目中の()は、その残存率が1/6以下であることを表す。
- ・色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用した。
- ・胎土は、含まれる砂粒の粒径が2.0mm以上を砂礫、2.0~1.0mmを細砂、1.0~0.5mmを微砂、0.5mm以下を精良として表す。
- ・胎土に含まれる鉱物は、石英を「英」、長石を「長」、雲母を「雲」、角閃石を「角」、赤色酸化土粒を「赤」、鉱物名不詳の白色砂粒を「白」として表した。

石器・石製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。()は残存値であることを表す。
- ・胎土・色調は、土器に準ずる。
- ・材質の鑑定は、妹尾 護氏による。

土製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。()は残存値であることを表す。
- ・胎土・色調は、土器に準ずる。

玉類

- ・法量は、長さ(高さ)・幅(直径)・厚さ・孔径の最大値を表す。
- ・材質の鑑定は、妹尾 護氏による。

金属製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さの最大値を表す。()は残存値であることを表す。
- ・重量のうち()は、残存重量であることを表す。

竪穴住居一覽表

遺構名	地区	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主 軸	床面積 (㎡)	主柱 柱数	中央穴 (cm)			方形土壇 (cm)			土壁	土階	カマド 有無	カマド 位置	時 期	備 考		
								形状	長×短	深さ	長×短	深さ	土壇							土壇	土壇
竪穴住居1	1区7P	円形	(500)	-	-	-	(2/5)	楕円	82×55	45	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅳ		
竪穴住居2	3区10Q	円形	392	344	N-8°-E	(10.78)	4/4	円	67×(50)	53	-	-	×	×	×	×	無	-	弥・後・Ⅰ		
竪穴住居3	3区11Q	円形	(500)	(450)	-	-	(14.02)	なし	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・中葉		
竪穴住居4	3区11Q	円形	-	-	N-10°-W	-	4/5	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・中葉		
竪穴住居5	3区11Q	円形	742	713	N-10°-W	38.91	6/6	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	弥・後・中葉		
竪穴住居6	3区11Q	円形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・後半	焼失住居	
竪穴住居7	3区11Q	円形	414	390	N-36°-W	(12.54)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・後半		
竪穴住居8	3区11Q	円形	462	460	N-36°-W	(14.75)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・後半		
竪穴住居9	3区11Q	円形	(700)	-	N-13°-E	-	5/5	不整形	100×73	65	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居10	3区11Q	円形	330	315	N-13°-W	9.46	4/4	不整形	33×19	15	-	-	1	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居11	3区11R	円形	350	-	N-51°-E	8.62	2/2	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	弥・後・後半		
竪穴住居12	3区11R	円形	550	470	N-32°-W	-	4/4	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居13	3区11R	円形	502	-	N-13°-E	(21.96)	5/5	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居14	3区11R	円形	647	(400)	N-13°-W	(33.55)	5/5	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居15	3区11R	円形	-	-	N-18°-W	-	6/6	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅳ		
竪穴住居16	3区11R	円形	758	724	-	23.04	6/6	楕円	66×46	52	-	-	2	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅳ		
竪穴住居17	3区11R	円形	-	-	-	-	なし	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅳ		
竪穴住居18	3区12R	円形	(530)	(510)	N-51°-W	19.30	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居19	3区12Q	円形	745	-	N-25°-W	-	6/6	不整形	79×166	50	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ～Ⅳ	主柱穴に礎石痕跡	
竪穴住居20	3区12Q	円形	-	-	N-13°-E	-	6/6	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後・Ⅲ		
竪穴住居21	3区12Q	円形	559	-	-	(21.91)	なし	-	-	-	-	-	×	○	×	1	無	-	弥・後・後半	T7、竪穴住居3の跡	
竪穴住居22	3区12Q	円形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	弥・後		
竪穴住居23	1区5Q	方形	721	(292)	N-42°-W	-	(3/4)	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前		
竪穴住居24	3区9Q	方形	(338)	(64)	N-30°-W	-	(2/4)	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	古・前		
竪穴住居25	3区10R	方形	402	(250)	N-20°-E	-	(1/2)	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居26	3区10R	方形	-	-	N-37°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居27	3区10R	方形	-	-	N-43°-E	-	(1/4)	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居28	3区10Q	方形	418	344	N-47°-E	(13.50)	2/2	楕円	109×54	18	-	-	×	○	1	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居29	3区10Q	方形	359	(256)	N-42°-W	-	2/2	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居30	3区10Q	方形	452	410	N-40°-W	(17.28)	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居31	3区10Q	方形	547	454	N-24°-E	(20.84)	2/2	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ	炭化材出土	
竪穴住居32	3区11Q	方形	-	-	N-42°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前		
竪穴住居33	3区11Q	方形	420	(279)	N-41°-E	-	(2/4)	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前		
竪穴住居34	3区11Q	方形	354	340	N-45°-W	13.96	なし	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅰ		
竪穴住居35	3区11Q	方形	455	410	N-45°-E	15.49	2/2	楕円	58×44	17	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居36	3区11Q	方形	-	-	N-42°-W	-	(1/4)	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居37	3区11Q	方形	380	356	N-32°-W	13.41	4/4	円	28×25	7	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅰ		
竪穴住居38	3区11Q	方形	450	-	N-55°-W	-	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	1	無	-	古・前		
竪穴住居39	3区12Q	方形	417	383	N-32°-E	(13.83)	2/2	円	53×	19	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前～中		
竪穴住居40	3区11Q	方形	599	555	N-50°-E	(33.20)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅰ～Ⅱ		
竪穴住居41	3区11R (方形)	(218)	-	-	N-50°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	1	無	-	古・前		
竪穴住居42	3区11Q	方形	514	464	N-42°-W	(21.88)	2/2	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前		
竪穴住居43	3区12Q	方形	490	-	N-48°-W	-	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	1	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居44	3区12Q	方形	407	(109)	N-50°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居45	3区12Q	方形	447	(285)	N-29°-W	(18.67)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	4	1	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居46	3区12R	方形	520	503	N-20°-E	(24.44)	2/4	-	-	-	-	-	79×48	39	×	2	2	無	-	古・前・Ⅱ	
竪穴住居47	3区12R	方形	(138)	(127)	N-57°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・前・Ⅲ		
竪穴住居48	3区12R	方形	380	(234)	N-41°-E	-	(1/2)	-	-	-	-	-	54×44	28	×	×	1	無	-	古・前・Ⅲ	
竪穴住居49	3区13Q	多角形	452	(420)	N-14°-W	(17.83)	4/4	楕円	129×63	41	-	-	×	○	×	1	無	-	古・前・Ⅱ		
竪穴住居50	1区5Q	方形	503	493	N-41°-W	(23.44)	4/4	楕円	45×33	13	110×80	39	×	○	×	1	無	-	古・中・Ⅰ		
竪穴住居51	2区7P	方形	420	387	N-49°-E	15.05	2/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・中葉	柱根残存	
竪穴住居52	3区10Q	方形	(497)	(101)	N-50°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居53	3区10Q	方形	(185)	(182)	N-49°-E	-	-	-	-	-	-	-	1	○	×	×	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居54	3区10Q	方形	393	(342)	N-55°-W	(14.24)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	南西	古・中・Ⅱ	[L]字形カマド	
竪穴住居55	3区11Q	方形	370	321	N-45°-W	17.36	-	-	-	-	-	-	3	○	×	×	無	北西	古・中・Ⅱ	[L]字形カマド	
竪穴住居56	3区11Q	方形	430	365	N-38°-W	13.99	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・Ⅰ		
竪穴住居57	3区11Q	方形	521	512	N-22°-E	(24.07)	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居58	3区11Q	方形	446	410	N-41°-W	(16.89)	4/4	-	-	-	-	-	4	○	3	×	有	北東	古・中・Ⅰ		
竪穴住居59	3区12Q	方形	(577)	567	N-41°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	北西	古・中・Ⅱ		
竪穴住居60	3区11R	方形	509	(392)	N-24°-E	-	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北西	古・中・Ⅱ		
竪穴住居61	3区11R	方形	487	461	N-13°-E	19.83	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居62	3区11R	方形	482	382	N-52°-E	(16.42)	2/2	楕円	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・Ⅰ		
竪穴住居63	3区11R	方形	651	641	N-59°-E	36.34	4/4	円	-	-	42×59	16	1	○	1	1	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居64	3区12R	方形	263	(122)	N-41°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	北	古・中・Ⅱ	カマド位置、角	
竪穴住居65	3区12R	方形	363	(223)	N-55°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	北	古・中・Ⅱ		
竪穴住居66	3区12R	方形	420	371	N-31°-W	15.60	4/4	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	北	古・中・Ⅰ		
竪穴住居67	3区12R	方形	315	312	N-36°-W	(9.07)	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北東	古・中・Ⅱ	[L]字形カマド	
竪穴住居68	3区12R	方形	452	420	N-5°-E	(17.83)	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北	古・中・Ⅱ	方形の柱痕跡	
竪穴住居69	3区12R	方形	230	(53)	N-52°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	北	古・中・Ⅱ	カマド位置、角	
竪穴住居70	3区13R	方形	455	(260)	N-34°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・中・Ⅱ		
竪穴住居71	1区7Q	方形	(385)	(310)	N-35°-W	-	2/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	6c後半		
竪穴住居72	1区7Q	方形	(240)	-	N-51°-E	-	2/4	-	-	-	-	-	×	×	×	×	無	-	古・後		
竪穴住居73	3区11Q	方形	402	361	N-30°-W	12.02	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北西	古・後・Ⅰ		
竪穴住居74	3区11Q	方形	195	175	N-55°-W	2.71	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・後		
竪穴住居75	3区11Q	方形	(446)	(233)	N-15°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	北西	古・後・Ⅰ		
竪穴住居76	3区11Q	方形	(205)	(202)	N-34°-E	-	3/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	-	古・後		
竪穴住居77	3区12Q	方形	(366)	(76)	N-67°-W	-	1/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北西	古・後・Ⅱ		
竪穴住居78	3区11Q	方形	(680)	(387)	N-23°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	×	無	-	古・後・Ⅱ		
竪穴住居79	3区12R	-	-	-	N-34°-W	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	北東	古・後		
竪穴住居80	3区11R	方形	501	474	N-25°-E	(22.68)	4/4	-	-	-	-	-	×	○	×	×	有	北西	古・後・Ⅰ		
竪穴住居81	3区12Q	方形	(415)	(351)	N-88°-E	-	-	-	-	-	-	-	×	×	×	×	有	-	古・後	T7の竪穴住居の跡	

遺構一覽表

掘立柱建物一覽表

遺構名	地区	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱掘り方	時期	備考
			桁	梁							
掘立柱建物 1	1区6Q	2×2	137~175	142~159	315	309	(10.06)	N-6°-W	円形	古・前	整理時に発見
掘立柱建物 2	3区11Q	2×2	164~180	106~133	408	249	8.45	N-22°-W	円形・楕円形	古・後・Ⅲ	
掘立柱建物 3	3区12Q	(5×3)	150~180	138~204	(846)	(510)	(41.17)	N-34°-E	円形	古・後	

井戸一覽表

遺構名	地区	構造	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	時期	備考
井戸 1	1区5Q	素掘り	円形	116	109	151	97	古・前・Ⅱ	最下層から完形甕
井戸 2	1区5Q	素掘り	楕円形	110	89	159	83	古・前	
井戸 3	3区10Q	素掘り	楕円形	119	98	114	38	古・前・Ⅱ	
井戸 4	3区10P・Q	素掘り	不整形	211	147	176	91	古・前・Ⅰ	
井戸 5	3区12R	素掘り	不整形	147	144	129	19	古・前・Ⅰ	
井戸 6	1区6P	素掘り	不整形	163	121	174	68	古・中・Ⅰ	木製品出土
井戸 7	1区7Q	素掘り	楕円形	117	115	145	33	古・中・Ⅰ	
井戸 8	2区7Q	素掘り	楕円形	196	170	166	61	古・中・Ⅰ	
井戸 9	2区7P	素掘り	楕円形	199	164	98	121	古・中・Ⅰ	

袋状土壙一覽表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	時期	備考
袋状土壙 1	1区4Q	円形	C-a	140	133	14	220	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙 2	1区4P	なし	C-a	-	-	24	181	弥・後・Ⅰ~Ⅱ	断面のみ確認
袋状土壙 3	1区4P	不整形	C-a	140	118	28	192	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙 4	1区4Q	円形	B-a	136	128	28	193	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙 5	1区5Q	円形	C-a	134	130	22	197	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙 6	3区10Q	楕円形	C-a	115	-	43	156	弥・後・Ⅲ	

土壙墓一覽表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	主軸	副葬品	時期	備考
土壙墓 1	2区	長方形	B-a	176	40	21	159	N-150°-W	-	弥・中	40代男性

土壙一覽表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
土壙 1	1区5Q	方形	C-a	90	70	39	207	弥・後	
土壙 2	1区5Q	(楕円形)	A-a	-	90	30	199	弥・後・Ⅱ	
土壙 3	3区10Q	(円形)	A-a	110	-	38	235	弥・後・Ⅳ	
土壙 4	3区10Q	楕円形	A-a	252	187	31	219	弥・後・Ⅲ	
土壙 5	3区10Q	楕円形	A-a	116	76	26	231	弥・後	
土壙 6	3区10Q	円形	A-a	76	68	15	249	弥・後・Ⅳ	
土壙 7	3区10Q	不整形	A-a	100	82	27	238	弥・後・Ⅳ	
土壙 8	3区10Q	楕円形	A-a	198	163	28	175	弥・後・Ⅲ	
土壙 9	3区10Q	楕円形	A-c	130	105	51	214	弥・後・Ⅳ	
土壙 10	3区10Q	不整形	A-a	324	160	31	235	弥・後・Ⅲ	炭化米出土
土壙 11	3区10Q	方形	A-b	158	143	34	210	弥・後・Ⅳ	
土壙 12	3区10Q	不整形	B-b	282	131	53	198	弥・後・Ⅳ	
土壙 13	3区10Q	円形	A-a	90	84	33	214	弥・後・Ⅲ	
土壙 14	3区10Q	楕円形	B-a	95	-	27	237	弥・後・後半	
土壙 15	3区10Q	不整形	A-c	228	162	36	212	弥・後・Ⅳ	
土壙 16	3区10Q	楕円形	A-b	-	-	53	193	弥・後・Ⅱ	
土壙 17	3区10Q	楕円形	A-b	76	-	56	197	弥・後・Ⅱ	
土壙 18	3区10Q	溝状	A-a	373	77	25	200	弥・後・Ⅱ	
土壙 19	3区11Q	楕円形	A-b	77	-	13	218	弥・後・Ⅲ	
土壙 20	3区11Q	不整形	B-a	221	149	60	198	弥・後	
土壙 21	3区11Q	不整形	A-b	163	144	65	162	弥・後	
土壙 22	3区11Q	不整形	A-b	125	103	36	204	弥・後	
土壙 23	3区11Q	隅丸方形	A-c	-	73	21	245	弥・後・後半	
土壙 24	3区11P	不整形	A-a	220	152	10	238	弥・後	
土壙 25	3区11Q	楕円形	A-a	215	132	25	230	弥・後・後半	
土壙 26	3区11Q	方形	A-b	263	211	49	220	弥・後・後半	
土壙 27	3区11Q	不整形	A-b	126	-	20	230	弥・後・Ⅳ	
土壙 28	3区11Q	(楕円形)	A-a	69	-	23	239	弥・後・中葉	
土壙 29	3区11Q	方形	A-a	73	66	60	227	弥・後	
土壙 30	3区11R	不整形	A-a	148	66	8	251	弥・後	
土壙 31	3区11Q	不整形	A-b	98	83	28	237	弥・後・Ⅱ~Ⅲ	
土壙 32	3区11R	楕円形	A-c	144	58	13	237	弥・後・中葉	
土壙 33	3区11R	楕円形	A-b	127	57	15	250	弥・後・中葉	
土壙 34	3区11R	(円形)	A-b	105	-	75	178	弥・後・Ⅳ	

遺構一覽表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
土塚35	3区11R	楕円形	A-b	200	150	53	200	弥・後・Ⅲ	
土塚36	3区11R	楕円形	A-a	126	89	42	210	弥・後	
土塚37	3区11R	楕円形	A-a	140	124	42	210	弥・後	
土塚38	3区11R	円形	B-a	108	97	41	212	弥・後	
土塚39	3区11R	楕円形	A-b	121	87	43	213	弥・後	
土塚40	3区11R	(円形)	A-b	178	-	16	239	弥・後	
土塚41	3区11Q	不整形	A-b	117	-	26	230	弥・後・Ⅲ	
土塚42	3区11Q	方形	A-a	99	60	24	203	弥・後・Ⅲ	
土塚43	3区11Q	円形	A-a	94	90	16	240	弥・後	
土塚44	3区12P	(方形)	A-b	-	-	16	265	弥・後・Ⅲ	
土塚45	3区12P	(方形)	A-b	-	-	30	243	弥・後	
土塚46	3区12Q	(楕円形)	A-c	193	-	34	237	弥・後・中葉	
土塚47	3区12Q	隅丸方形	B-a	139	98	29	245	弥・後・Ⅲ	
土塚48	3区12Q	不整形	A-a	245	153	22	243	弥・後・後葉	
土塚49	3区12Q	楕円形	B-b	168	120	77	178	弥・後・Ⅲ	
土塚50	3区11R	円形	A-b	90	82	15	229	弥・後	
土塚51	3区12R	円形	A-a	194	168	44	233	弥・後・Ⅳ	
土塚52	3区11R	(楕円形)	A-a	112	-	23	233	弥・後・後葉	
土塚53	3区12R	楕円形	A-b	112	61	23	238	弥・後	
土塚54	3区12R	楕円形	A-a	103	91	33	228	弥・後	
土塚55	3区12R	隅丸方形	A-a	141	66	24	239	弥・後	
土塚56	3区12R	方形	B-a	126	82	36	204	弥・後・Ⅳ	
土塚57	3区12R	不整形	A-b	330	160	64	187	弥・後・Ⅳ	
土塚58	3区12R	楕円形	A-a	107	88	20	240	弥・後・Ⅲ	
土塚59	3区12R	方形	B-a	180	162	40	203	弥・後	
土塚60	3区12R	不整形	A-c	125	-	14	239	弥・後	
土塚61	1区5Q	楕円形	A-a	71	59	30	160	古・前・Ⅱ	
土塚62	1区6Q	不整形	A-b	62	49	49	189	古・前	
土塚63	1区6Q	不整形	A-c	138	81	15	187	古・前・Ⅰ	
土塚64	1区6Q	不整形	A-b	105	80	30	184	古・前	
土塚65	2区7P	不整形	A-b	-	-	19	199	古・前	
土塚66	2区7Q	不整形	A-b	244	-	16	153	古・前・Ⅲ	
土塚67	3区10Q	隅丸方形	A-a	259	-	32	224	古・前・Ⅱ	炭化米出土
土塚68	3区11Q	楕円形	A-b	57	37	10	244	古・前・Ⅰ	製塩土器廃棄
土塚69	3区10R	楕円形	A-a	130	85	18	236	古・前	
土塚70	3区10Q	円形	A-a	78	70	36	221	古・前・Ⅱ	
土塚71	3区11Q	不整形	A-c	-	-	18	241	古・前・Ⅱ	
土塚72	3区12Q	不整形	A-b	68	58	32	216	古・前	
土塚73	3区12R	不整形	A-b	75	62	18	254	古・前	
土塚74	3区12Q	楕円形	A-a	153	143	98	134	古・前・Ⅰ	
土塚75	3区13Q	円形	A-b	60	-	25	228	古・前	
土塚76	3区13Q	不整形	A-b	72	61	25	228	古・前・Ⅱ	
土塚77	3区13Q	円形	A-b	91	-	63	72	古・前・Ⅲ	
土塚78	1区6Q	不整形	A-b	105	-	38	157	古・中	
土塚79	2区7Q	楕円形	A-a	75	49	11	169	古・中	
土塚80	2区9Q	円形	A-a	152	-	41	178	古・中	
土塚81	3区11Q	長方形	A-b	139	42	20	242	古・中・Ⅱ	
土塚82	1区6Q	不整形	A-b	140	85	23	175	古・後	
土塚83	1区6Q	不整形	A-b	102	-	35	171	古・後	
土塚84	3区11Q	楕円形	A-b	124	-	22	237	古・後	
土塚85	3区11Q	円形	A-b	74	70	44	220	古・後・Ⅰ	
土塚86	3区11Q	(方形)	A-a	160	-	15	245	古・後	壁体溝あり
土塚87	3区12Q	不整形	A-a	206	145	16	244	古・後	
土塚88	3区11Q	円形	A-b	62	57	24	244	古・後	須恵器甕設置
土塚89	3区12R	隅丸方形	A-a	-	100	9	261	古・後	壁面被熱痕跡
土塚90	3区12P	(方形)	A-b	150	-	23	237	古・後・Ⅲ	
土塚91	3区13R	(楕円形)	A-b	61	-	53	205	古・後・Ⅲ	柱穴か
土塚92	1区6Q	不整形	A-b	130	-	17	219	古代	
土塚93	2区7P	不整形	A-b	-	99	17	204	古代	
土塚94	3区11R	(楕円形)	A-b	168	-	32	232	古代	
土塚95	1区6P	円形	A-b	155	145	59	179	近世	
土塚96	2区7P	楕円形	A-b	127	57	14	185	近世	

溝一覽表

遺構名	地区	断面形	上端幅 (m)	深さ (m)	方向	時期	備考
溝1	4~6Q、7P	A-b	1.5	0.16	北東→南西	弥・前	水田1に伴う溝
溝2	6Q	A-b	1.0	0.08	北東→南西	弥・前	水田1に伴う溝
溝3	10・11Q	A-b	1.3	0.05	北東→南西	弥・前	水田2に伴う溝
溝4	10・11Q	A-b	0.9	0.06	北東→南西	弥・前	水田2に伴う溝
溝5	11R~12Q	A-b	0.6	0.03	北西→南東	弥・前	水田2に伴う溝
溝6	11R~12Q	A-b	0.8	0.07	北東→南西	弥・前	水田2に伴う溝
溝7	4Q	A-b	1.4	0.08	東北東→西南西	弥・前	水田3に伴う溝
溝8	10Q	A-b	0.7	0.04	北→南	弥・前	水田4に伴う溝
溝9	10Q	A-b	0.6	0.06	北→南	弥・前	水田4に伴う溝
溝10	10Q	A-b	0.9	0.05	北東→南西	弥・前	水田4に伴う溝
溝11	10Q	A-b	0.3	0.04	北東→南西	弥・前	水田4に伴う溝
溝12	5Q~7P	A-b	5.2	1.06	北東→南西	弥・中	池1に伴う溝
溝13	6P	A-b	2.6	0.52	北東→南西	弥・中	
溝14	6P	A-b	5.4	0.67	北東→南西	弥・中	
溝15	6Q	A-b	2.9	1.00	北東→南西	弥・中	
溝16	11Q	A-b	1.6	0.18	北→南	弥・中	
溝17	10・11Q	A-b	4.1	1.30	北東→南西	弥・中	
溝18	11R~12Q	A-b	2.3	0.28	北東→南西	弥・中	
溝19	11Q	A-b	0.6	0.15	北西→南東	弥・中	溝17・18間の溝
溝20	11Q	A-b	0.9	0.29	北西→南東	弥・中	溝17・18間の溝
溝21	11Q	A-b	0.7	0.18	北西→南東	弥・中	溝17・18間の溝
溝22	3Q	A-b	0.25	0.20	北東→南西	弥・後・Ⅱ	
溝23	4P	A-a	0.9	0.45	北東→南西	弥・後	
溝24	4Q~5P	A-b	2.2	0.30	北東→南西	弥・後・Ⅲ	T10の溝4と同一
溝25	4Q~5P	A-b	2.2	0.50	北東→南西	弥・後・Ⅲ	T10の溝5と同一
溝26	4Q~5P	A-a	0.9~1.0	0.75	北東→南西	弥・後・Ⅱ	

遺構一覽表

遺構名	地区	断面形	上端幅 (m)	深さ (m)	方向	時期	備考
溝27	4 R~6 Q	A-b	1.6	0.37	北東→南西	弥・後・I	
溝28	4 R	A-b	0.7	0.33	北東→南西	弥・後	
溝29	4 R~5 R	A-b	1.2	0.35	北東→南西	弥・後	
溝30	5 Q	A-b	0.8~1.3	0.23~0.29	北東→南西	弥・後	
溝31	5・6 Q	A-a	1.3	0.19	北東→南西	弥・後	
溝32	6 P・Q	A-a	1.2	0.35	北東→南西	弥・後・前半	
溝33	5 Q~7 P	A-b	3.0~6.5	1.00	北東→南西	弥・後・Ⅲ	中期の溝12を踏襲
溝34	12R	A-a	0.8	0.11	北→南	弥・後・前半	
溝35	12R	A-b	0.6	0.18	北西→南東	弥・後・前半	
溝36	3 Q~4 P	A-a	2.7	0.94	北東→南西	古・前	
溝37	7 P・Q	A-b	0.2	0.12	北東→南西	古・前	
溝38	7 P・Q	A-b	0.3	0.15	北東→南西	古・前	
溝39	4 Q~5 P	A-b	1.3	0.28	北東→南西	古・中・Ⅱ	
溝40	7 P	A-a	1.3	0.49	東北東→西南西	6 c後半	
溝41	12R	A-a	0.3	0.10	北西→南東	古・後	
溝42	7 P・Q	A-a	8.6	1.00	東→西	古代	条里溝
溝43	12Q	A-b	0.3	0.05	北西→南東	古代	
溝44	10Q	A-b	0.4	0.07	北西→南東	古代	
溝45	10Q	A-a	0.5	0.05	北東→南西	古代	
溝46	10Q・11R	A-b	0.5	0.14	北西→南東	古代	
溝47	11R・12Q	A-a	0.4	0.09	北東→南西	古代	
溝48	10Q・11R	A-b	0.3	0.04	北西→南東	古代	
溝49	4区	A-b	6.8	1.28	北東→南西	古代	
溝50	4区	A-b	6.4	1.04	北東→南西	古代	
溝51	4 Q~5 P	A-b	3.7	0.45	北東→南西	中世	
溝52	4 Q~5 P	A-b	1.5	0.39	北東→南西	中世	
溝53	4 R~5 P	A-b	4.6	0.87	北東→南西	中世	
溝54	5 P・6 Q	A-b	2.2	0.28	北東→南西	中世	
溝55	5 R~5 P	A-a	1.5	0.20	北→南	中世	
溝56	5 P~5 R	A-b	2.0	0.38	東北東→西南西	中世	T10の溝7の一部か
溝57	5 P~5 R	A-b	1.8	0.51	東北東→西南西	中世	T10の溝7の一部か
溝58	5 R~5 P	A-b	0.9	0.08	北→南	中世	
溝59	5 R~5 P	A-b	1.0	0.18	北→南	中世	
溝60	5 P	A-b	0.5	0.27	北→南	近世	
溝61	4・5 P	A-b	1.5	0.41	北→南	中世末~近世	T10の溝8・9と同一
溝62	7 P	A-b	1.6	0.12	東北東→西南西	中世	
溝63	6・7 P	A-b	0.5	0.18	東→西	中近世	
溝64	6 Q	A-b	0.5	0.08	東→西	中近世	
溝65	7 Q	A-b	1.1	0.14	東→西	中世	
溝66	11Q	A-b	0.9	0.10	北東→南西	中世	
溝67	11R	A-b	0.9	0.10	北東→南西	中世	
溝68	11・12Q	A-b	0.9	0.22	北東→南西	中世	
溝69	4 Q	A-b	3.0	0.70	北東→南西	近代	

土器観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1	微高地	弥生土器	壺	-	-	-	-	内外面：不明 ヘラミガキ?	細砂 白	にぶい橙色			
2	微高地	弥生土器	壺	-	-	-	-	外面：縦方向ハケメ	細砂 白	にぶい橙色			
3	微高地	弥生土器	鉢	-	-	-	(7.6)	体部外面：横方向ヘラミガキ	砂礫 英・長・雲	灰黄褐色			
4	微高地	弥生土器	壺	-	-	-	-	底部：ヘラケズリ	細砂～砂礫 白	明褐色			
5	水田2	縄文土器	鉢	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤附着
6	水田2	縄文土器	鉢	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	浅黄褐色			
7	水田2	縄文土器	鉢	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	灰黄褐色			
8	水田2	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部内外面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
9	水田3	弥生土器	壺	14.2	-	-	-	口縁部：ヘラミガキ	雲・英・長	にぶい赤褐色			
10	水田3	弥生土器	鉢	-	-	-	-	体部内面：横方向ヘラミガキ	細砂 白	にぶい黄褐色			
11	水田3	弥生土器	甕	(15.5)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	灰白色			
12	水田3	弥生土器	甕	(25.5)	-	-	-	体部内面：ナデ後一部ヘラミガキか	細砂 長・英	灰白色			
13	水田4	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部内外面：ヘラミガキか?	長・英	浅黄褐色			
14	溝1	弥生土器	壺	-	-	-	(8.4)	体部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	褐色			
15	溝1	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部内面：ナデ	雲・英・長	にぶい黄褐色			
16	溝1	弥生土器	甕	-	-	-	-	外面：ヨコナデ後沈線	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤附着
17	包含層	弥生土器	壺	(15.0)	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	砂礫 長・英	にぶい黄褐色			
18	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	10.0	底部外面：工具によるナデ	細砂 長・英	灰黄褐色			
19	包含層	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・角	にぶい黄褐色			外面煤附着
20	包含層	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・雲	灰黄褐色			
21	包含層	弥生土器	鉢	-	-	-	-	内面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 長・英	にぶい橙色			
22	包含層	弥生土器	甕	-	-	-	-	外面：ナデ ヘラ描き沈線3条	砂礫 長・英	灰黄褐色			外面煤附着
23	溝12	弥生土器	壺	10.2	-	-	-	頸部内面：シボリ後横方向ナデ	精良 長・英	にぶい黄褐色			
24	溝13	弥生土器	壺	-	-	32.3	9.9	体部内面：ハケメ ヘラケズリ	細砂 長・英・角	灰白色			
25	溝13	弥生土器	甕	(15.5)	-	-	-	外面：タタキ 縦方向ハケメ	細砂 長・英	灰黄褐色			外面煤附着
26	溝13	弥生土器	甕	22.1	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 雲・角	にぶい黄褐色			
27	溝13	弥生土器	甕	-	-	-	9.0	底部外面：指オサエ後ナデ	精良 長・英・角	にぶい橙色			
28	溝13	弥生土器	甕	19.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長・英	にぶい黄褐色			
29	溝13	弥生土器	甕	-	-	-	6.0	体部内面：ハケメ ヘラケズリ	砂礫 英・長	灰白色			外面煤附着
30	溝13	弥生土器	甕	22.4	-	-	-	内面：指オサエ ハケ状工具によるナデ?	精良 長・英・角	灰白色			
31	溝13	弥生土器	甕	-	-	-	10.0	底部外面：指オサエ後ナデ	微砂 長・雲	灰白色			
32	溝13	弥生土器	高杯	14.6	-	-	-	内面：ハケ 状工具でのナデ後ナデ	微砂 長・雲・角	灰黄色			外面煤附着
33	溝13	弥生土器	高杯	14.8	-	-	-	内面：指オサエ及びナデ	微砂 赤	にぶい黄褐色			外面煤附着
34	溝13	弥生土器	高杯	-	-	-	10.6	脚柱部外面：ナデ ハケメ ヨコナデ	砂礫 英・長	にぶい黄褐色			
35	溝13	弥生土器	高杯	-	-	-	10.9	脚柱部外面：ヘラミガキ ヨコナデ	精良 長・英・雲	灰白色			
36	溝13	弥生土器	器台	-	-	-	8.2	外面：ヨコナデ	砂礫 英・長	にぶい黄褐色			
37	溝13	弥生土器	甕	-	-	-	11.3	脚裾部外面：ヨコナデ	微砂 長・英	灰白色			
38	溝13	弥生土器	甕	-	-	-	(20.8)	脚裾部外面：凹線文	長・英	にぶい黄褐色			
39	溝14	弥生土器	壺	14.5	-	-	-	内面：指オサエ ヘラミガキ?	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
40	溝14	弥生土器	壺	14.5	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	浅黄褐色			
41	溝14	弥生土器	壺	-	-	17.4	5.8	体部内面：指オサエ ハケメ	細砂 長・英	明褐色			
42	溝14	弥生土器	壺	-	-	-	6.4	内面：板状工具によるナデか?	微砂 長・英	褐色			
43	溝14	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	-	内面：指オサエ後ナデ	細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
44	溝14	弥生土器	甕	(14.0)	-	-	-	内面：工具によるナデ?	精良 雲	灰黄褐色			外面煤附着
45	溝14	弥生土器	甕	(20.1)	-	-	-	内面：指オサエ後横・斜め方向ハケメ	細砂 長・英	灰白色			外面煤附着
46	溝14	弥生土器	甕	(23.9)	-	-	-	肩部内面：指オサエ後ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
47	溝14	弥生土器	甕	13.4	-	-	-	内面：工具によるナデ?	精良 長・英	灰黄色			外面煤附着
48	溝14	弥生土器	甕	(15.9)	-	-	-	内面：指オサエ後ハケメ	細砂 長・英	灰白色			
49	溝14	弥生土器	甕	-	-	-	6.8	底部外面：指ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡
50	溝14	弥生土器	高杯	(15.1)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長・英	灰色			
51	池1	弥生土器	壺	-	-	14.9	6.5	体部内面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・角	灰黄褐色			
52	池1	弥生土器	甕	11.2	18.3	14.2	4.6	体部内面：指ナデ後ハケメ ヘラケズリ	微砂 長・英・雲	灰黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡
53	池1	弥生土器	甕	(13.0)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂	にぶい橙色			
54	池1	弥生土器	甕	(13.0)	-	-	-	内面：指オサエ後ナデ	微砂 長	灰黄褐色			
55	池1	弥生土器	甕	14.7	-	-	8.0	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	灰黄褐色			外面煤附着
56	池1	弥生土器	甕	(17.0)	-	-	-	体部内面：指オサエ及びナデ	微砂 長・英	浅黄褐色			外面煤附着
57	池1	弥生土器	甕	16.9	-	-	-	肩部内面：指オサエ後ナデ	精良 長・英	にぶい黄褐色			
58	池1	弥生土器	甕	19.4	-	-	-	体部内面：指オサエ ハケメ	砂礫 長・角	浅黄褐色			外面煤附着
59	池1	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部内面：ヘラケズリ?	微砂 長・英	にぶい黄褐色			外面煤附着
60	池1	弥生土器	甕	24.7	-	35.2	-	体部内面：指オサエ ヘラケズリ	細砂 長・雲	灰黄色			外面煤附着
61	池1	弥生土器	甕	-	-	-	9.7	底部外面：指オサエ及びナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
62	池1	弥生土器	甕	-	-	-	6.8	底部外面：ナデ	微砂 長・英	褐色			外面煤・内面炭化痕跡
63	池1	弥生土器	甕	-	-	-	5.2	底部外面：ナデ	微砂 長・英	褐色			
64	池1	弥生土器	甕	-	-	-	6.1	底部外面：ヘラミガキ	精良 英・雲	灰褐色			
65	池1	弥生土器	甕	14.7	-	-	8.0	口縁部：ヨコナデ	精良 長・英	灰黄褐色			外面煤附着
66	池1	弥生土器	高杯	12.4	-	-	-	内面：指オサエ ハケメ	精良 長・英	にぶい褐色			外面煤附着
67	池1	弥生土器	高杯	21.6	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	精良 長・英	灰黄褐色			
68	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	9.3	脚柱部外面：ナデ ハケメ	砂礫 長・英・雲	灰黄色			
69	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	10.7	脚柱部外面：ナデ ハケメ	細砂 長・英	灰白色			
70	池1	弥生土器	壺	(18.1)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ 端部に刻目	細砂 英・長	黄灰色			
71	池1	弥生土器	壺	-	-	12.9	5.9	体部内面：ナデ? 口縁部：打ち欠き	細砂 長・英	灰黄色			
72	池1	弥生土器	壺	-	-	15.2	5.5	体部内面：指オサエ ハケメ ナデ	微砂 長・英・角・雲	褐色			
73	池1	弥生土器	壺	10.2	27.8	20.4	5.6	体部内面：指オサエ ハケメ ヘラケズリ	微砂 長・英	灰黄色			
74	池1	弥生土器	壺	7.9	-	-	-	肩部内面：指オサエ後ナデ	微砂 英・長	灰黄色			
75	池1	弥生土器	甕	14.1	-	-	-	口縁部：ヨコナデ 端部に刻目	微砂 雲・角	にぶい黄褐色			外面煤附着
76	池1	弥生土器	甕	(14.0)	-	-	-	体部内面：指オサエ ハケメ	精良 長・英	灰白色			外面煤附着
77	池1	弥生土器	甕	(14.0)	-	-	-	体部内面：指オサエ ナデ ヘラケズリ	精良 角・雲	灰白色			外面煤附着
78	池1	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	-	体部内面：上半ハケメ 指オサエ	精良 長・英	褐色			外面煤・内面炭化痕跡
79	池1	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	-	体部内面：指オサエ ナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			外面煤附着
80	池1	弥生土器	甕	(15.8)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	黄灰色			
81	池1	弥生土器	甕	(16.1)	-	(22.0)	8.0	体部内面：指オサエ ナデ ヘラケズリ	微砂 長・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化痕跡
82	池1	弥生土器	甕	16.5	22.1	20.8	7.6	体部内面：指オサエ ハケメ ヘラケズリ	精良 長・英・雲	灰黄色			外面煤附着
83	池1	弥生土器	甕	14.5	-	-	17.8	体部内面：ナデ ヘラミガキ	砂礫 英・長	にぶい黄褐色			外面煤・吹きこぼれ痕
84	池1	弥生土器	甕	13.6	-	-	-	肩部内面：ナデ ハケ状工具によるナデ	微砂 長・英	灰白色			
85	池1	弥生土器	甕	-	-	-	(5.9)	底部外面：ヘラミガキ ナデ	精良 長・英・角・雲	灰白色			
86	池1	弥生土器	甕	13.9	-	-	-	内面：ナデ	微砂 長・英・雲	褐色			外面煤附着
87	池1	弥生土器	高杯	(20.3)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長・英	灰褐色			
88	池1	弥生土器	高杯	23.4	17.8	-	11.1	脚柱部外面：縦方向工具ナデ	精良	灰黄色			
89	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	浅黄褐色			
90	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	8.5	脚柱部内面：シボリ 工具によるナデ	微砂 長・英・雲	灰白色			
91	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	8.3	脚柱部内面：シボリ ヨコナデ	微砂 長・英	灰白色			
92	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	9.7	脚柱部内面：指ナデ 工具ナデ	精良 長・英・角	黒褐色			
93	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	11.6	脚部外面：面取り ナデ 縦ハケメ	砂礫 長・英	灰黄色			
94	池1	弥生土器	鉢	-	-	-	7.7	脚部：ヨコナデ	微砂 長・英	灰白色			
95	池1	弥生土器	鉢	13.4	22.2	15.8	10.2	鉢部内面：指オサエ ハケメ ヨコナデ	細砂 長・英	灰黄色			外面煤附着
96	池1	弥生土器	鉢	-	-	-	-	肩部外面：ハケメ	精良 長・英・雲	灰黄色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量尺 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	底径						
97	池1	弥生土器	高杯	-	-	-	脚柱部外面：縦方向ナデ	微砂 長・英・雲	灰黄色			
98	池1	弥生土器	甕	31.2	-	49.1	体部内面：ハケメ後ヘラケズリ	長・英	灰黄色			
99	住居2	弥生土器	壺	17.4	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂～砂礫 角・長・英	橙色			
100	住居2	弥生土器	鉢	17.4	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	橙色			
101	住居2	弥生土器	鉢	(10.0)	6.4	-	体部外面：ヘラケズリ	細砂～砂礫 長・英	浅黄褐色			
102	住居3	弥生土器	鉢	18.3	-	-	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	細砂 白	にぶい黄褐色			
103	住居3	弥生土器	甕	14.5	-	-	体部外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 白	にぶい橙色			
104	住居3	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂 白・黒	橙色			
105	住居3	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部内面：ナデ	微砂 雲 白	橙色			
106	住居3	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 雲 白	にぶい黄褐色			
107	住居3	弥生土器	高杯	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 白	橙色			
108	住居3	弥生土器	ミニチュア	8.7	-	8.9	外面：縦方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良 白・角・雲・赤	にぶい黄褐色			
109	住居3	弥生土器	壺	-	-	-	体部外面：ヘラケズリ	微砂 白	にぶい黄褐色			
110	住居3	弥生土器	鉢	-	-	-	脚部：指オサエ ナデ	粗い粘土	にぶい橙色			
111	住居9	弥生土器	甕	12.3	-	-	口縁部外面：ヘラミガキ	細砂 英・赤・雲・角	にぶい橙色			
112	住居9	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	細砂 長・英・雲・角	灰褐色			
113	住居9	弥生土器	高杯	18.6	-	-	口縁部内面：斜め方向ヘラミガキ	微砂 英・赤・雲・角	にぶい橙色			
114	住居9	弥生土器	高杯	17.8	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ後ヘラミガキ	微砂 長・英・赤・角・雲	橙色			
115	住居9	弥生土器	高杯	-	-	14.9	脚部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 赤・雲	にぶい橙色			
116	住居9	弥生土器	鉢	12.8	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂 英・長・雲	にぶい橙色			
117	住居9	弥生土器	鉢	8.8	-	9.8	口縁部外面：ヘラミガキ	精良 英・角・雲	橙色			
118	住居9	弥生土器	鉢	-	-	-	脚部外面：縦方向ヘラミガキ	精良 長・英・角・雲	にぶい橙色			
119	住居9	弥生土器	ミニチュア	-	-	-	口縁部：ヨコナデ後ヘラミガキ	微砂 角・雲・長	にぶい橙色			
120	住居9	弥生土器	不明	-	-	-	体部内外面：ナデ	精良	にぶい黄褐色			線刻
121	住居10	弥生土器	高杯	18.4	-	-	口縁部外面：ヘラミガキ	細砂 長・赤	明赤褐色			
122	住居10	弥生土器	高杯	-	-	10.6	脚柱部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 雲	橙色			
123	住居10	弥生土器	高杯	-	-	11.4	外面：面取り痕	長・雲	橙色			
124	住居10	弥生土器	鉢	13.8	5.8	5.2	内外面：ヘラミガキ	長・赤・角・雲	にぶい橙色			
125	住居13	弥生土器	鉢	12.5	7.4	3.8	体部内面：ヘラケズリ後工具の当たり痕	砂礫 長・英	にぶい橙色			
126	住居16	弥生土器	壺	19.8	-	-	内外面：ヨコナデ	長・英・雲	橙色			
127	住居16	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 英・雲	にぶい黄褐色			
128	住居16	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部外面：横方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい橙色			
129	住居16	弥生土器	壺	-	-	9.7	底部外面：ヘラミガキ	長・雲・赤・角	灰黄褐色			
130	住居16	弥生土器	甕	14.0	-	4.6	体部外面：縦方向ハケメ 指オサエ	細砂～砂礫 長・英	にぶい赤褐色			
131	住居16	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長	橙色			
132	住居16	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	にぶい橙色			
133	住居16	弥生土器	ミニチュア	(4.0)	-	-	外面：ヘラミガキ	微砂 雲	灰褐色			
134	住居16	弥生土器	壺	9.7	17.1	11.6	体部外面：ハケメ 内面：ヨコナデ	長・英・赤・角	浅黄褐色			
135	住居16	弥生土器	高杯	17.2	-	-	内面：ハケメ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	橙色			
136	住居16	弥生土器	高杯	-	-	-	杯部外面：横方向ヘラミガキ	微砂	橙色			
137	住居16	弥生土器	高杯	-	-	11.3	脚柱部外面：ヘラミガキ	精良 微砂 赤	橙色			
138	住居16	弥生土器	高杯	-	-	-	脚柱部内面：シボリ	微砂～細砂 赤	橙色			
139	住居16	弥生土器	高杯	-	-	12.0	外面：ハケメ後横方向ヘラミガキ	微砂 雲・赤	橙色			
140	住居16	弥生土器	ミニチュア	-	-	(8.0)	内面：ヘラケズリ	微砂 雲	橙色			
141	住居16	弥生土器	鉢	-	-	-	内外面：ヨコナデ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			
142	住居16	弥生土器	ミニチュア	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂 雲	橙色			
143	住居16	弥生土器	鉢	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい橙色			外面煤付着
144	住居16	弥生土器	鉢	15.2	5.5	5.5	体部外面：ヘラケズリ	精良 長・英	橙色			
145	住居16	弥生土器	鉢	-	-	-	体部外面：縦方向細かいハケメ	微砂 赤	橙色			
146	住居16	弥生土器	鉢	-	-	9.8	内面：縦方向ヘラミガキ	微砂 白・赤・雲	にぶい橙色			
147	住居16	弥生土器	壺	-	-	-	外面：刺突文 鋸歯文	微砂 長・英・角	にぶい赤褐色			
148	住居17	弥生土器	高杯	12.5	-	-	口縁部：横方向ヘラミガキ	細砂 長・英	橙色			
149	住居17	弥生土器	台付鉢	-	-	-	外面：ナデ	砂礫 長・英・赤	にぶい黄褐色			
150	住居18	弥生土器	壺	-	-	-	杯部外面：縦方向ヘラミガキ ヨコナデ	細砂 白	にぶい黄褐色			外面赤色顔料
151	住居18	弥生土器	甕	13.6	-	-	外面：ハケメ後ナデ	微砂～細砂 長・英・雲	にぶい褐色			
152	住居18	弥生土器	高杯	-	-	11.8	脚柱部外面：ヘラミガキ シボリ	微砂 白・赤	橙色			
153	住居18	弥生土器	高杯	17.6	-	-	脚柱部内面：ナデ 中央シボリ痕	精良～微砂 白	にぶい褐色			内外面煤付着
154	住居18	弥生土器	鉢	15.8	8.0	-	体部内外面：横方向ヘラミガキ	微砂 白	にぶい褐色			
155	住居19	弥生土器	甕	12.8	15.2	13.6	底部外面：同一方向ハケメ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
156	住居19	弥生土器	高杯	19.0	9.2	9.8	脚部：透かし	水こし粘土	にぶい赤褐色			
157	住居19	弥生土器	高杯	18.6	-	-	内外面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
158	住居19	弥生土器	高杯	16.5	-	-	内外面：ヘラミガキ	精良 赤・長・英	にぶい黄褐色			
159	住居19	弥生土器	高杯	16.8	-	-	内外面：ヘラミガキ?	微砂 長・英	橙色			
160	住居19	弥生土器	高杯	-	-	-	内面：ヘラミガキ	精良～微砂 長・英 水こし	橙色			
161	住居19	弥生土器	高杯	-	-	11.8	脚柱部内面：ハケメ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
162	住居19	弥生土器	高杯	-	-	10.4	杯部内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	明赤褐色			
163	住居19	弥生土器	手捏ね	4.0	-	5.2	内外面：指オサエ	長・英・雲	灰黄色			完形
164	住居20	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	英・長	橙色			
165	住居20	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 英・長	明赤褐色			
166	住居20	弥生土器	鉢	16.0	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 縦横方向ハケメ	長・英・赤	にぶい褐色			
167	袋状土壘1	弥生土器	壺	9.7	26.0	21.6	頸部内面：ヨコナデ シボリ	砂礫 長・英・雲	にぶい褐色			頸部竹管3個
168	袋状土壘1	弥生土器	壺	12.5	25.8	20.9	体部内面：指オサエ ヘラケズリ ナデ	砂礫 長・英・角	にぶい褐色			
169	袋状土壘1	弥生土器	壺	7.5	18.5	12.5	体部内面：指オサエ ナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			完形 外面一部煤付着
170	袋状土壘1	弥生土器	壺	12.5	22.6	16.9	底部外面：工具によるナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい褐色			
171	袋状土壘1	弥生土器	壺	12.4	21.5	17.4	底部外面：ナデ	砂礫 長・英	にぶい褐色			外面煤付着
172	袋状土壘1	弥生土器	壺	12.1	-	17.9	外面：ハケメ ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい褐色			
173	袋状土壘1	弥生土器	壺	11.4	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	細砂 雲・赤	橙色			
174	袋状土壘1	弥生土器	壺	13.4	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 雲・英・長	にぶい褐色			
175	袋状土壘1	弥生土器	甕	14.2	30.6	23.3	体部内面：ヘラケズリ 丁寧なナデ	砂礫 長・英	橙色			
176	袋状土壘1	弥生土器	甕	14.6	-	-	口縁部：擬凹線	細砂 英・雲・長	にぶい褐色			
177	袋状土壘1	弥生土器	甕	-	-	5.8	体部外面：ハケメ	砂礫 英・雲	褐色			外面煤付着
178	袋状土壘1	弥生土器	甕	17.2	33.6	29.0	底部外面：ナデ後ヘラミガキ	砂礫 長・英	明褐色			外面・内面文化物付着
179	袋状土壘1	弥生土器	高杯	25.3	25.1	14.9	杯部内外面：ヘラミガキ	砂礫 長・英・角	橙色			完形
180	袋状土壘1	弥生土器	高杯	-	-	-	脚柱部内面：工具ナデ及びヘラケズリ	砂礫 長・英	橙色			
181	袋状土壘1	弥生土器	高杯	-	-	9.2	頸部内面：シボリ ヘラケズリ	砂礫 長・英	にぶい黄褐色			
182	袋状土壘1	弥生土器	高杯	-	-	19.0	内面：ヘラケズリ	砂礫 長・英	橙色			
183	袋状土壘1	弥生土器	鉢	11.8	10.3	5.3	底部外面：ナデ	砂礫 長・英	にぶい褐色			
184	袋状土壘2	弥生土器	甕	-	-	-	体部外面：横方向ヘラミガキ	細砂	にぶい黄褐色			
185	袋状土壘3	弥生土器	高杯	21.3	-	-	体部外面：縦横方向ヘラミガキ	細砂 雲・白	にぶい黄褐色			
186	袋状土壘5	弥生土器	壺	10.3	25.3	17.0	底部外面：ナデ	砂礫 雲・英	橙色			
187	袋状土壘5	弥生土器	甕	-	-	6.5	底部外面：ナデ	細砂 白・赤	にぶい褐色			外面煤付着
188	袋状土壘5	弥生土器	器台	23.6	22.5	24.6	胴部内面：ヘラケズリ後ナデ	砂礫 雲・英・長	にぶい褐色			
189	袋状土壘5	弥生土器	器台	26.0	25.8	23.9	脚柱部内面：ヘラケズリ	砂礫 長・英・角	にぶい黄褐色			
190	袋状土壘6	弥生土器	高杯	20.5	-	-	口縁部内外面：ヘラミガキ	細砂 長・英	にぶい褐色			口縁部煤付着
191	土壘2	弥生土器	壺	14.8	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂	灰黄褐色			
192	土壘2	弥生土器	壺	11.4	25.4	20.5	底部外面：指オサエ後ナデ	砂礫 長・英・角	にぶい黄褐色			外面煤付着

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
193	土壇3	弥生土器	甕	14.5	-	14.0	-	体部外面: タタキ 工具ナデ	長・英	にぶい橙色			外面煤付着
194	土壇3	弥生土器	甕	-	-	-	6.0	底部外面: ヘラケズリ	砂礫 長・英・雲	にぶい橙色			
195	土壇3	弥生土器	高杯	-	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	細砂 長・英・雲・赤・角	にぶい赤褐色			
196	土壇3	弥生土器	鉢	12.4	-	12.5	-	内外面: ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	褐色			
197	土壇4	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部内面: ヘラミガキ	細砂 長・英・赤	褐色			
198	土壇4	弥生土器	高杯	-	-	-	12.1	脚柱部: 横方向ヘラミガキ	砂礫 長・赤	褐色			
199	土壇4	弥生土器	鉢	11.0	-	-	-	口縁部外面: 指オサエ後ナデ	細砂 長・雲・チャート	にぶい黄褐色			
200	土壇6	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚柱部外面: 竹管文 刺突	砂礫 長・英・雲・チャート	にぶい橙色			
201	土壇6	弥生土器	高杯	14.2	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			
202	土壇7	弥生土器	甕	15.6	-	22.4	-	体部外面: ヨコナデ ヘラミガキ	精良～砂礫 長・英	灰褐色			
203	土壇7	弥生土器	高杯	15.4	10.1	-	10.7	内外面: ヘラミガキ	微砂 長・赤	浅黄褐色			
204	土壇7	弥生土器	高杯	-	-	-	16.0	脚柱部外面: 面取り痕	長・赤	明褐色			
205	土壇7	弥生土器	高杯	-	-	-	-	杯部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良～微砂 長・英	明赤褐色			
206	土壇7	弥生土器	手捏ね	-	-	-	-	外面: ナデ 指オサエ ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい橙色			
207	土壇8	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
208	土壇8	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚柱部外面: 面取り後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
209	土壇8	弥生土器	高杯	18.9	-	-	-	口縁部内外面: 横方向ヘラミガキ	英・長・雲	明赤褐色			
210	土壇10	弥生土器	壺	19.0	-	-	-	頸部外面: 縦方向ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色			
211	土壇10	弥生土器	壺	-	-	-	11.6	口縁部外面: ハケメ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色			
212	土壇10	弥生土器	甕	-	-	-	5.2	底部外面: ナデ	精良～微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
213	土壇10	弥生土器	高杯	-	-	-	10.4	外面: ヘラミガキ	精良～微砂 長・英	にぶい褐色			
214	土壇10	弥生土器	高杯	(21.2)	-	-	-	口縁部外面: ヨコナデ後ヘラミガキ	長・英・赤・雲	にぶい赤褐色			
215	土壇10	弥生土器	高杯	(18.8)	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	長・英・赤・雲	褐色			
216	土壇10	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部内外面: ヘラミガキ	精良～微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
217	土壇10	弥生土器	鉢	-	-	-	-	体部外面: ナデ	微砂～細砂 長・英	褐色			
218	土壇10	弥生土器	鉢	41.0	-	-	-	体部外面: ナデ 横・斜め方向ハケメ	砂礫 長・英・雲	浅黄褐色			
219	土壇11	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部外面: ヨコナデ	精良～微砂 長・英	にぶい黄褐色			
220	土壇11	弥生土器	甕	13.0	-	-	-	体部外面: タタキ後ナデ	微砂～細砂 長・英・赤	褐色			
221	土壇11	弥生土器	甕	15.0	24.7	19.8	6.5	体部外面: ハケメ ナデ	細砂 長・英	灰褐色			外面煤付着
222	土壇11	弥生土器	高杯	-	-	-	-	内外面: ヘラミガキ?	細砂 長・英	褐色			
223	土壇11	弥生土器	高杯	-	-	-	10.5	脚柱部内面: シボリ痕 ナデ	水こし粘土	褐色			
224	土壇11	弥生土器	高杯	16.8	-	-	-	内外面: ヘラミガキ?	細砂 長・英	褐色			
225	土壇11	弥生土器	鉢	12.3	5.5	-	4.6	体部外面: ナデ	長・英・雲	褐色			
226	土壇11	弥生土器	鉢	37.6	-	-	-	体部内面: ケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
227	土壇12	弥生土器	甕	15.7	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	細砂 長・英	褐色			
228	土壇12	弥生土器	高杯	-	-	-	9.4	脚柱部外面: 粘土貼り付け	細砂 長・英・雲・赤	褐色			
229	土壇14	弥生土器	壺	21.2	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	褐色			
230	土壇14	弥生土器	甕	19.8	-	-	-	体部内面: ナデ 指オサエ	微砂～細砂 長・英・雲	にぶい褐色			
231	土壇14	弥生土器	甕	-	-	-	5.6	底部内面: ヘラケズリ	角・長・英	褐色			讃岐産
232	土壇14	弥生土器	甕	-	-	-	5.0	体部外面: 縦方向ハケメ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい赤褐色			
233	土壇14	弥生土器	鉢	14.6	7.1	-	5.6	体部内面: ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
234	土壇14	弥生土器	鉢	13.4	6.8	-	4.4	体部内面: 横方向ヘラミガキ ハケメ	長・英	褐色			
235	土壇15	弥生土器	壺	12.8	-	-	-	外面: ヘラケズリ後ハケメ	細砂～砂礫 長・英	褐色			
236	土壇15	弥生土器	鉢	11.2	5.8	-	4.8	内外面: 指オサエ	微砂～細砂 長・英	にぶい黄褐色			
237	土壇17	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚柱部内面: シボリ	精良 長	にぶい黄褐色			
238	土壇17	弥生土器	高杯	17.8	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
239	土壇16	弥生土器	甕	-	-	-	4.8	底部外面: ヘラケズリ後ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
240	土壇17	弥生土器	ミニチュア	6.6	3.7	-	1.6	体部内面: 指オサエ後ハケメ後ナデ	精良 長・雲	にぶい黄褐色			
241	土壇16	弥生土器	鉢	19.6	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	細砂 長・英	にぶい褐色			
242	土壇16	弥生土器	鉢	17.0	17.1	19.1	7.5	体部内外面: ヘラミガキ	微砂 長・雲	にぶい黄褐色			
243	土壇16	弥生土器	鉢	19.5	18.8	20.8	7.3	体部外面: 下半ヘラケズリ後ナデ	精良～細砂 長・英	褐色			
244	土壇18	弥生土器	壺	15.2	-	-	-	頸部外面: ヨコナデ 沈線7条	長・英・雲	にぶい黄褐色			
245	土壇18	弥生土器	壺	14.0	-	-	-	頸部内面: シボリ ヘラミガキ	長・英	褐色			
246	土壇18	弥生土器	壺	17.0	35.3	29.4	8.4	体部内面: ヘラケズリ後指オサエ ナデアゲ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			
247	土壇18	弥生土器	甕	20.0	-	-	-	体部外面: 縦・横方向ハケメ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			
248	土壇18	弥生土器	甕	(18.4)	31.0	(30.2)	(10.0)	底部外面: ヘラミガキ	長・英・雲	褐色			
249	土壇18	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	体部外面: ナデ	砂礫 長・英・雲・角	褐色			外面煤付着
250	土壇18	弥生土器	甕	14.8	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英・雲・角	褐色			外面煤付着
251	土壇18	弥生土器	高杯	21.6	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい褐色			
252	土壇18	弥生土器	鉢	10.9	7.8	-	4.8	体部内面: ナデアゲ	長・英・雲	にぶい褐色			
253	土壇18	弥生土器	器台	-	-	-	30.4	脚柱部外面: 沈線文	長・英・雲	褐色			
254	土壇19	弥生土器	壺	16.6	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	砂礫 白	浅黄褐色			
255	土壇19	弥生土器	甕	15.7	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	長・英	褐色			
256	土壇19	弥生土器	甕	13.3	20.4	20.0	6.4	体部外面: ハケ後ヘラミガキ	砂礫 白	にぶい褐色			
257	土壇19	弥生土器	甕	-	-	-	5.3	底部外面: ナデ	砂礫 白	にぶい黄褐色			
258	土壇19	弥生土器	鉢	19.0	6.6	-	5.4	外面: ヨコナデ 斜め方向ハケメ	長・英・雲	灰黄褐色			
259	土壇19	弥生土器	鉢	14.6	-	-	-	口縁部外面: 沈線5条	細砂 白	褐色			
260	土壇19	弥生土器	高杯	16.9	-	-	-	口縁部外面: ヘラミガキ	長・雲・赤	明赤褐色			
261	土壇19	弥生土器	高杯	20.0	19.8	-	12.2	脚柱部外面: 沈線1条	砂礫 白	褐色			
262	土壇19	弥生土器	高杯	-	-	-	11.6	杯部外面: ヘラケズリ 放射状ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
263	土壇19	弥生土器	高杯	-	-	-	11.6	脚柱部外面: ヘラケズリ ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
264	土壇23	弥生土器	鉢	14.2	-	-	-	外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	明赤褐色			
265	土壇25	弥生土器	甕	15.6	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	雲・長・角	にぶい褐色			
266	土壇25	弥生土器	甕	16.1	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	長・雲・角	浅黄褐色			
267	土壇25	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	精良～細砂 長	褐色			
268	土壇25	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	精良～細砂 長・英	にぶい褐色			
269	土壇25	弥生土器	高杯	20.6	-	-	-	口縁部: ヘラミガキ	精良～微砂 長・英	褐色			
270	土壇25	弥生土器	高杯	-	-	-	-	外面: ヘラミガキ	雲・長	褐色			
271	土壇25	弥生土器	高杯	-	-	-	13.9	外面: ヘラミガキ	精良～細砂 赤・長	褐色			
272	土壇26	弥生土器	壺	15.4	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
273	土壇26	弥生土器	壺	6.5	-	14.5	-	内面: ハケメ	精良～微砂 長・英・雲	褐色			
274	土壇26	弥生土器	甕	15.8	-	-	-	体部外面: タタキ後ヨコナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
275	土壇26	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	口縁部: ヨコナデ	長・英・雲	明赤褐色			
276	土壇26	弥生土器	甕	15.8	-	-	-	外面: ハケメ後ナデ	長・英・雲	にぶい褐色			
277	土壇26	弥生土器	甕	14.1	-	-	5.6	底部外面: ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい褐色			
278	土壇26	弥生土器	甕	15.7	-	-	-	体部外面: ハケメ後ヘラミガキ	細砂 長	灰白色			
279	土壇26	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部外面: タタキ後ハケメ	長・角・雲	にぶい黄褐色			
280	土壇26	弥生土器	高杯	21.2	10.9	-	12.2	杯脚部内面: ハケメ	微砂 長・英・角・赤	淡褐色			
281	土壇26	弥生土器	高杯	22.0	11.3	-	13.4	杯部内外面: ヘラミガキ?	水こし粘土	褐色			外面煤付着
282	土壇26	弥生土器	高杯	15.4	7.8	-	10.0	杯部内外面: 縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英	褐色			
283	土壇26	弥生土器	高杯	15.9	10.0	-	12.8	杯部外面: ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	褐色			
284	土壇26	弥生土器	高杯	13.4	7.0	-	7.9	脚柱部内面: シボリ痕	水こし粘土	褐色			
285	土壇26	弥生土器	高杯	13.8	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	微砂 長・英・角	灰褐色			
286	土壇26	弥生土器	高杯	14.8	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	精良～微砂 長・赤	褐色			
287	土壇26	弥生土器	高杯	14.6	-	-	-	杯部内外面: ヘラミガキ	水こし粘土	明赤褐色			
288	土壇26	弥生土器	高杯	-	-	-	10.2	杯部内面: 放射状ヘラミガキ	長	灰黄褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径						
289	土壇26	弥生土器	高杯	-	-	-	外面：ヘラミガキ	精良 長・英・赤	橙色			
290	土壇26	弥生土器	高杯	-	-	-	外面：ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			
291	土壇26	弥生土器	鉢	28.7	-	-	体部内面：ヘラミガキ	細砂～砂礫 長・英	におい黄橙色			
292	土壇26	弥生土器	鉢	13.1	-	-	外面：ヘラケズリ後縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英	黄褐色			
293	土壇26	弥生土器	鉢	15.6	-	18.2	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	細砂～砂礫 長・英	におい黄橙色			外面麻・内面炭化痕跡
294	土壇26	弥生土器	鉢	-	-	-	外面：ナデ ハケメ	微砂～細砂 長	におい橙色			
295	土壇27	弥生土器	壺	17.6	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 白	橙色			
296	土壇28	弥生土器	甕	13.9	19.0	4.9	底部外面：ヘラケズリ?	細砂 白	におい黄橙色			外面煤付着
297	土壇28	弥生土器	高杯	18.6	-	-	杯部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			
298	土壇28	弥生土器	鉢	9.2	-	-	内外面：ヘラミガキ	細砂 白	におい橙色			
299	土壇28	弥生土器	手捏ね	6.8	-	-	内外面：指オサエ ナデ	微砂 白	におい黄橙色			
300	土壇31	弥生土器	壺	-	-	-	胴部外面：棒状浮文	微砂 赤・角	橙色			
301	土壇31	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良 角・長・雲	灰褐色			
302	土壇31	弥生土器	壺	15.0	-	-	口縁部内面：ナデ 指オサエ	微砂～砂礫 長・雲・角	におい黄橙色			
303	土壇31	弥生土器	高杯	20.7	-	-	口縁部外面：縦・横方向ヘラミガキ	微砂 赤	橙色			
304	土壇31	弥生土器	高杯	-	-	-	脚部外面：指オサエ ハケメ ナデ	微砂 長・英・雲・角	におい黄橙色			
305	土壇31	弥生土器	鉢	-	-	3.8	2.6	底部内外面：ナデ 指オサエ	微砂 長・雲・角	におい橙色		
306	土壇32	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長・雲・角	灰黄褐色			
307	土壇33	弥生土器	壺	15.4	-	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲	橙色			外面煤付着
308	土壇34	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲	灰色			
309	土壇34	弥生土器	甕	-	-	-	4.5	外面：タタキ後縦方向ハケメ	砂礫 長・英・雲	におい橙色		外面麻・内面炭化痕跡
310	土壇35	弥生土器	高杯	15.4	-	-	口縁部内外面：縦方向ヘラミガキ	精良 長・英・赤	橙色			
311	土壇35	弥生土器	高杯	13.2	-	-	内外面：ヘラミガキ	精良 長・英	黄褐色			
312	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	杯部外面：ヨコナデ	精良	浅黄褐色			
313	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	杯部外面：縦方向ヘラケズリ	微砂 長・英・雲	橙色			
314	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	11.0	外面：縦方向ヘラミガキ	精良～微砂 長・英・赤	橙色		
315	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	13.1	脚裾部内面：ハケメ	精良 長	橙色		
316	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	11.6	内外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	黄褐色		
317	土壇35	弥生土器	高杯	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			
318	土壇35	弥生土器	鉢	12.2	-	-	体部外面：ナデ	微砂 長・英・雲・角	におい橙色			
319	土壇35	弥生土器	鉢	-	-	-	体部外面：ヨコナデ	精良～細砂 長・英	浅黄色			
320	土壇35	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部外面：3条沈線	微砂 長・英・赤	橙色			
321	土壇35	弥生土器	鉢	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂 長・英	橙色			
322	土壇35	弥生土器	製塩土器	-	-	-	4.3	外面：指オサエ	微砂～細砂 長・英	におい橙色		
323	土壇35	弥生土器	手捏ね	-	-	-	(2.1)	外面：ナデ 指オサエ	精良 長・英・角	橙色		
324	土壇41	弥生土器	高杯	30.4	-	20.0	-	口縁部外面：ヘラミガキ	細砂 英・角・雲	におい橙色		
325	土壇41	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚裾部外面：指オサエ	精良 長・英・雲	橙色		
326	土壇41	弥生土器	鉢	16.0	6.2	16.4	4.4	体部内外面：ヘラミガキ	精良 長・英・角・雲	におい黄褐色		
327	土壇42	弥生土器	甕	15.8	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 白・黒	におい橙色		
328	土壇42	弥生土器	甕	19.8	-	26.4	-	外面：縦方向ハケメ後縦方向ヘラミガキ	細砂 長・英	におい黄褐色		
329	土壇42	弥生土器	甕	16.4	25.9	21.2	4.9	外面：ハケメ後一部ナデ	微砂 長・英	におい橙色		
330	土壇42	弥生土器	甕	14.6	22.1	17.4	4.8	外面：縦方向ハケメ 縦方向ナデ	微砂～砂礫 長・英	におい赤褐色		
331	土壇42	弥生土器	甕	15.8	21.4	16.7	4.6	体部外面：ハケメ 一部ナデ	長・英・雲	におい黄褐色		
332	土壇42	弥生土器	甕	14.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	におい橙色		
333	土壇42	弥生土器	甕	14.7	-	13.9	-	体部外面：ナデ	細砂 長・英	におい橙色		
334	土壇42	弥生土器	甕	14.2	-	14.8	-	外面：ハケメ	微砂 長・英	におい橙色		
335	土壇74	弥生土器	甕	16.1	7.2	-	2.6	内外面：ハケメ	細砂～砂礫 白	におい黄褐色		
336	土壇42	弥生土器	高杯	-	-	-	-	外面：ヘラミガキ	精良 白	橙色		
337	土壇42	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部：ナデ ヘラミガキ	微砂 赤・角	橙色		
338	土壇44	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	英・長・雲	橙色		
339	土壇44	弥生土器	高杯	-	-	10.9	-	内外面：ハケメ	長・雲・赤	橙色		
340	土壇46	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部内面：ヘラミガキ	微砂 白	におい褐色		
341	土壇46	弥生土器	壺	19.3	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 鋸歯文	雲・英	におい橙色		
342	土壇46	弥生土器	壺	23.0	-	-	-	口縁部内面：縦方向ヘラミガキ	精良～微砂 白	におい褐色		
343	土壇46	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	雲・角・長・英	におい黄褐色		
344	土壇46	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部外面：ハケメ	微細 雲	におい赤褐色		
345	土壇46	弥生土器	壺	7.1	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ後ヘラミガキ	微細 雲	橙色		
346	土壇46	弥生土器	甕	13.6	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	雲・英・長	におい黄褐色		
347	土壇46	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 白	におい褐色		
348	土壇46	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	雲・角・長	におい黄褐色		
349	土壇46	弥生土器	鉢	15.8	-	-	-	内外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 白	橙色		
350	土壇46	弥生土器	鉢	-	-	-	-	口縁部内面：ナデ	雲・英・長・赤	におい褐色		
351	土壇46	弥生土器	甕	10.6	-	-	4.8	底部外面：ナデ	長・英・雲	におい黄褐色		
352	土壇48	弥生土器	壺	25.0	-	41.2	14.3	口縁部：ヨコナデ 底部外面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	におい褐色		
353	土壇48	弥生土器	壺	25.0	-	-	-	頸部外面：横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	におい褐色		
354	土壇48	弥生土器	壺	27.8	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英・赤	におい褐色		
355	土壇48	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：ヘラケズリ	精良～微砂 長・英	におい黄褐色		
356	土壇48	弥生土器	甕	(18.9)	-	-	-	内面：ヘラケズリ	精良 長・雲	橙色		
357	土壇48	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	褐色		
358	土壇48	弥生土器	高杯	18.4	-	-	-	杯部外面：ハケメ後ヘラミガキ	精良 長・雲・赤	明赤褐色		
359	土壇48	弥生土器	高杯	20.9	-	-	-	杯部内面：縦方向ハケメ後縦方向ヘラミガキ	水こし粘土	橙色		
360	土壇48	弥生土器	鉢	-	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	英・長・雲・赤	明赤褐色		
361	土壇48	弥生土器	鉢	27.8	23.5	31.0	7.4	外面：縦方向ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	におい褐色		
362	土壇48	弥生土器	鉢	32.6	23.7	33.3	11.2	底部外面：ナデ	長・角・雲	におい黄褐色		
363	土壇48	弥生土器	鉢	33.5	24.0	-	11.4	底部外面：ハケメ	細砂 長・英	褐色		
364	土壇48	弥生土器	手捏ね	5.2	6.4	5.5	2.8	内外面：指オサエ	精良～細砂 長・英	におい褐色		
365	土壇49	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 白	褐色		
366	土壇49	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚裾部外：縦方向ハケメ ヘラミガキ	微砂	褐色		
367	土壇49	弥生土器	高杯	-	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂 白	褐色		
368	土壇52	弥生土器	器台	-	-	-	-	脚裾部内面：横方向ハケメ	微砂 赤・白	褐色		
369	土壇56	弥生土器	壺	19.8	-	-	-	口縁部内外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 白	におい黄褐色		
370	土壇56	弥生土器	高杯	17.8	-	-	-	口縁部内外面：ヘラミガキ	水こし粘土(?)	におい褐色		
371	土壇56	弥生土器	高杯	-	-	-	9.6	脚裾部：ナデ	精良 白	褐色		
372	土壇57	弥生土器	壺	16.8	36.5	29.7	6.6	底部外面：ナデ後一部ヘラミガキ	微砂 角・長・英	明赤褐色		
373	土壇57	弥生土器	壺	25.2	-	35.0	-	口縁部：ヨコナデ ヘラミガキ	細砂～砂礫 長・英	におい褐色		
374	土壇57	弥生土器	壺	14.6	29.1	26.4	7.8	内外面：ヘラミガキ	長・英	におい褐色		
375	土壇57	弥生土器	壺	9.2	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	精良～微砂 白・赤	浅黄褐色		
376	土壇57	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：ナデ	精良 雲	におい褐色		
377	土壇57	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面：指オサエ ナデ	細砂 長・英	におい褐色		
378	土壇57	弥生土器	甕	15.8	-	-	-	体部外面：工具によるナデ	精良～微砂	におい褐色		
379	土壇57	弥生土器	甕	15.8	-	-	-	体部外面：ナデ	長・英・雲	におい黄褐色		
380	土壇57	弥生土器	甕	12.9	-	17.5	-	外面：ナデ後縦方向ヘラミガキ	微砂～砂礫 長・英	明赤褐色		
381	土壇57	弥生土器	甕	13.1	-	-	-	体部外面：ナデ	微砂～細砂 雲・長	褐色		
382	土壇57	弥生土器	甕	14.3	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良～細砂 長・英	褐色		
383	土壇57	弥生土器	甕	14.1	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	褐色		
384	土壇57	弥生土器	甕	14.6	-	-	-	外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 長・英	におい褐色		

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径						
385	土壇57	弥生土器	甕	10.8	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	精良～細砂 長・英	にぶい橙色			
386	土壇57	弥生土器	甕	8.5	12.1	11.4	2.8	外面：縦・横方向ヘラミガキ	微砂～細砂 白・長・英	にぶい橙色		外面煤付着
387	土壇57	弥生土器	甕	12.6	-	-	-	外面：ハケメ	微砂～細砂 白	明褐色		
388	土壇57	弥生土器	高杯	16.7	9.3	-	10.5	口縁部外面：ナデ	長・英・雲・赤	橙色		
389	土壇57	弥生土器	高杯	15.0	-	-	-	口縁部外面：横方向ヘラミガキ	微砂 長・赤	浅黄褐色		
390	土壇57	弥生土器	高杯	19.0	10.7	-	12.2	杯部内外面：縦方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい褐色		
391	土壇57	弥生土器	高杯	14.6	-	-	-	外面：ヘラミガキ	微砂 白	橙色		
392	土壇57	弥生土器	高杯	18.6	10.0	-	12.0	外面：縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英・白	橙色		
393	土壇57	弥生土器	高杯	-	-	-	14.0	外面：横方向ヘラミガキ	微砂 長・英	明赤褐色		
394	土壇57	弥生土器	高杯	-	-	-	12.0	外面：横方向ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい橙色		
395	土壇57	弥生土器	高杯	-	-	-	12.0	脚縁部外面：縦方向放射状ヘラミガキ	微砂 白	橙色		
396	土壇57	弥生土器	鉢	14.6	16.4	17.7	5.7	外面：ハケメ後横方向ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい褐色		
397	土壇57	弥生土器	鉢	22.4	18.4	-	7.4	底部外面：同一方向ヘラケズリ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色		
398	土壇57	弥生土器	鉢	10.8	7.6	-	4.0	内面：ハケメ後工具ナデ	細砂 白・赤	にぶい黄褐色		
399	土壇57	弥生土器	鉢	14.6	6.6	-	-	底部：ハケメ後ナデ後ヘラミガキ	精良 長・英	橙色		底部葉脈痕
400	土壇57	弥生土器	鉢	15.5	7.9	-	-	内面：ヘラケズリ	微砂 長・英	橙色		
401	土壇57	弥生土器	鉢	12.0	-	-	-	体部内面：ハケメ後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色		
402	土壇57	弥生土器	鉢	-	-	-	-	体部内外面：横方向粗いヘラミガキ	微砂 白	明赤褐色		
403	土壇57	弥生土器	鉢	28.6	-	-	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲	にぶい褐色		
404	土壇57	弥生土器	鉢	35.8	-	-	-	内面：ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	微砂 白・長・英	にぶい褐色		内面炭化物付着
405	土壇57	弥生土器	鉢	43.8	27.4	-	15.7	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色		体部補修痕
406	土壇58	弥生土器	壺	15.8	-	-	-	頸部内面：押圧 ナデ ハケメ	微砂 白	にぶい黄褐色		
407	土壇58	弥生土器	壺	12.0	-	-	-	頸部外面：ヘラ描き沈線	微砂 長・英	にぶい黄褐色		
408	土壇58	弥生土器	壺	20.8	-	-	-	-	水こし粘土	褐色		
409	土壇58	弥生土器	甕	13.9	22.8	19.6	5.3	底部外面：ヘラミガキ	微砂 白	にぶい褐色		外面煤付着
410	土壇58	弥生土器	甕	19.4	-	22.8	-	体部外面：ヨコナデ ナデアゲ	砂礫 長・英・雲・角	浅黄褐色		外面煤付着
411	土壇58	弥生土器	甕	14.2	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	褐色		
412	土壇58	弥生土器	甕	12.8	-	-	-	外面：ナデ 縦方向ハケメ	精良～微砂 雲	にぶい赤褐色		
413	土壇58	弥生土器	高杯	18.2	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	明赤褐色		
414	土壇58	弥生土器	高杯	-	-	-	11.4	内面：ヘラミガキ	水こし粘土	褐色		
415	土壇58	弥生土器	鉢	14.3	10.9	-	4.9	外面：ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色		
416	土壇58	弥生土器	鉢	18.4	-	-	-	体部外面：縦方向ハケメ	長・英・雲	にぶい褐色		
417	土壇58	弥生土器	鉢	41.6	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 白	にぶい黄褐色		
418	溝22	弥生土器	高杯	14.2	-	-	-	口縁部内面：横方向ヘラミガキ	英・長・雲・赤	褐色		
419	溝24	弥生土器	壺	17.6	-	32.8	-	体部外面：ハケメ	微砂 白	褐色		
420	溝24	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部内面：ヘラミガキ	微砂 角・赤・雲	にぶい黄褐色		
421	溝24	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ後沈線	細砂 長・英・雲	褐色		
422	溝24	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 雲・赤・白	にぶい黄褐色		
423	溝24	弥生土器	甕	-	-	-	(5.3)	底部外面：ナデ	微砂 雲・白	にぶい黄褐色		外面煤付着
424	溝24	弥生土器	甕	17.4	-	-	-	体部内面：ヘラケズリ	英・長・雲	明赤褐色		
425	溝24	弥生土器	高杯	-	-	-	(13.4)	脚部外面：ヘラミガキ	微砂 雲・赤	褐色		
426	溝24	弥生土器	高杯	-	-	-	10.2	脚部外面：縦方向ヘラミガキ	英・長・雲・赤	褐色		
427	溝24	弥生土器	高杯	-	-	-	-	脚部外面：刺突	微砂 雲	褐色		
428	溝24	弥生土器	鉢	9.1	-	11.6	-	体部外面：横方向ヘラミガキ	細砂 白	褐色		
429	溝24	弥生土器	手捏ね	-	-	-	(5.1)	底部内外面：指オサエ	雲・英・長	灰黄色		
430	溝26	弥生土器	甕	20.0	-	-	-	口縁部：ナデ	微砂 白	にぶい黄褐色		
431	溝26	弥生土器	甕	20.0	-	-	-	頸部内面：指オサエ	雲・赤・英・長	浅黄褐色		
432	溝26	弥生土器	甕	15.2	-	-	-	体部外面：ハケメ	微砂 雲・白	褐色		
433	溝26	弥生土器	甕	(12.8)	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	褐色		
434	溝26	弥生土器	甕	-	-	-	(4.8)	体部外面：ヘラミガキ	微砂 英・雲・白	灰黄色		
435	溝26	弥生土器	甕	-	-	-	4.2	底部外面：縦方向ハケメ後ヘラミガキ	微砂 雲・白	にぶい褐色		外面煤付着
436	溝26	弥生土器	甕	-	-	-	5.6	底部外面：ヘラミガキ	微砂 雲・白	にぶい黄色		
437	溝26	弥生土器	手捏ね	-	-	-	-	指オサエ	細砂 白	にぶい黄褐色		
438	溝26	弥生土器	鉢	(15)	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ後指オサエ	微砂 英・雲	黒色		
439	溝32	弥生土器	壺	13.8	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 長・英	褐色		
440	溝32	弥生土器	高杯	-	-	-	-	外面：ヘラミガキ後沈線	微砂 長・英	浅黄褐色		
441	溝32	弥生土器	高杯	-	-	-	-	杯部内面：ハケメ?	微砂 長	浅黄褐色		
442	溝32	弥生土器	鉢	-	-	-	9.8	内面：シボリ ヘラケズリ	細砂 長	浅黄褐色		
443	溝33	弥生土器	壺	12.4	-	-	-	頸部内外面：指オサエ ナデ	砂礫 長・英	にぶい褐色		
444	溝33	弥生土器	壺	11.9	-	-	-	頸部内面：シボリ ナデ	微砂 英・角	灰黄色		
445	溝33	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部外面：横方向ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色		
446	溝33	弥生土器	壺	-	-	36.0	11.8	底部外面：ヘラケズリ後ナデか?	砂礫 英・長	にぶい黄褐色		外面煤付着
447	溝33	弥生土器	甕	12.9	-	-	-	肩部内面：ヘラケズリ	細砂 英・長	灰黄色		外面煤付着
448	溝33	弥生土器	甕	16.5	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・角	褐色		外面煤付着
449	溝33	弥生土器	甕	13.9	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	微砂 長・英	灰白色		
450	溝33	弥生土器	甕	(21.6)	-	30.8	-	体部内面：指オサエ ナデ ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい黄褐色		
451	溝33	弥生土器	甕	-	-	-	7.3	底部外面：指オサエ後横・斜め方向ハケメ	砂礫 英・長	にぶい黄褐色		
452	溝33	弥生土器	鉢	15.6	-	22.3	-	体部外面：ヘラミガキ	細砂 英・角	灰黄色		
453	溝33	弥生土器	高杯	23.2	-	-	-	内外面：ヨコナデ ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい黄褐色		
454	溝33	弥生土器	高杯	(21.4)	-	-	-	口縁部：ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい赤褐色		
455	溝33	弥生土器	高杯	23.1	-	-	-	内外面：ヨコナデ	細砂 長	にぶい黄褐色		
456	溝33	弥生土器	高杯	-	-	-	10.2	内面：ヘラケズリ	砂礫 英・長	にぶい褐色		
457	溝33	弥生土器	鉢	-	-	-	-	外面：ヨコナデ	精良 長・角・雲	褐色		
458	溝33	弥生土器	鉢	-	-	-	10.4	外面：ハケメ 横方向ナデ	砂礫 長・英	褐色		
459	河道1	縄文土器	鉢	-	-	-	-	内面：縄文 外面：ヘラ描き沈線	砂礫 長・英	灰黄色		
460	河道1	縄文土器	鉢	-	-	-	-	外面：縄文 沈線	細砂 雲・英	灰黄褐色		
461	河道1北岸	弥生土器	壺	15.7	33.8	29.5	13.6	底部外面：一定方向のハケメ	微砂～砂礫 長・英・雲	灰黄色		
462	河道1北岸	弥生土器	壺	13.6	-	-	-	体部外面：タタキ 縦方向ハケメ	長・英	赤褐色		
463	河道1北岸	弥生土器	高杯	26.8	6.2	-	-	杯部外面：縦方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂～砂礫 長・英・雲	褐色		
464	河道1北岸	弥生土器	高杯	26.5	13.9	-	-	脚柱部外面：縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英	灰黄色		
465	河道1北岸	弥生土器	高杯	27.8	15.3	-	-	脚柱部外面：沈線5～6条	微砂～細砂 長・英・赤	にぶい黄褐色		
466	河道1北岸	弥生土器	高杯	24.7	14.0	-	-	脚柱部内面：シボリ	長・英	にぶい黄褐色		
467	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.8	-	-	-	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色		
468	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.3	10.7	17.0	9.0	体部内面：指オサエ ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい褐色		
469	河道1北岸	弥生土器	鉢	28.0	9.8	27.0	9.4	-	長・英・角	にぶい黄褐色		
470	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.6	13.8	17.2	6.4	底面外面：ナデ 指オサエ	長・英・雲	灰黄色		
471	河道1北岸	弥生土器	高杯	35.0	6.1	-	-	口縁部外面：ナデか?	長・英	にぶい褐色		
472	河道1北岸	弥生土器	壺	17.1	-	-	-	頸部内面：ナデ	長・英・雲・赤	灰黄色		
473	河道1北岸	弥生土器	甕	14.2	-	18.8	-	体部外面：ナデ タタキ	砂礫 長・英・雲	灰白色		外面煤付着
474	河道1北岸	弥生土器	甕	13.4	22.7	17.7	(4.4)	体部外面：ヨコナデ ハケメ	精良 長	灰黄褐色		
475	河道1北岸	弥生土器	甕	16.4	26.0	21.0	5.8	底面外面：ヘラケズリ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい黄褐色		外面煤・内面炭化痕跡
476	河道1北岸	弥生土器	高杯	23.5	11.3	-	12.9	口縁部外面：ヘラミガキ	精良 長・英	にぶい褐色		
477	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.2	10.2	-	-	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良	浅黄褐色		
478	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.7	14.6	-	12.1	杯部外面：ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色		内面煤付着
479	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.6	9.2	-	11.2	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	にぶい褐色		
480	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.8	11.9	-	14.1	杯部外面：ヘラケズリ	水こし粘土?	にぶい黄褐色		

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
481	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.0	10.0	-	(11.4)	杯部外面:横方向ヘラミガキ 面取り	水こし粘土	にぶい黄橙色			
482	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.1	10.7	-	13.4	杯部外面:ヘラケズリ 横方向ヘラミガキ	水こし粘土	灰黄褐色			
483	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.7	12.7	-	13.5	杯部内外面:ヘラミガキ?	水こし粘土	にぶい褐色			
484	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.2	10.7	-	10.9	口縁部内外面:ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい橙色			
485	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.8	-	20.0	-	体部外面:縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	灰黄褐色			外面煤付着
486	河道1北岸	弥生土器	鉢	20.0	-	25.6	-	体部外面:ハケメ	英	灰白色			外面煤付着
487	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.0	12.8	13.7	3.9	底面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
488	河道1北岸	弥生土器	甕	11.5	11.4	12.0	4.4	体部外面:ヨコナデ ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	灰白色			外面煤・底面煤減後穿孔
489	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.8	-	16.1	-	内外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
490	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.7	8.0	14.3	3.0	体部内面:ハケメ 放射状ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
491	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.6	9.6	16.2	(1.8)	体部内面:ヘラケズリ 横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
492	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.1	8.6	-	4.0	底面外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲・赤	にぶい橙色			
493	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.1	7.7	-	3.8	底面:ナデ	長・雲・赤	灰黄色			
494	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.9	7.4	-	5.1	内外面:ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい橙色			
495	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	(7.9)	7.9	(8.2)	3.2	体部外面:ナデ後ヘラミガキ	長・雲・赤	灰黄色			
496	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.2	9.0	-	6.6	台部:ヨコナデ	精良 角・赤	褐色			
497	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.8	7.4	-	3.9	外面:ナデ	長・雲	にぶい黄褐色			
498	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.2	7.6	-	5.3	体部外面:ナデ	微砂	褐色			
499	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.3	-	-	-	体部内面:工具ナデ	長・英・雲	褐色			
500	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.1	5.9	-	3.9	内外面:ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
501	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.7	7.0	-	3.8	体部外面:指オサエ	長・英・雲・赤	灰白色			
502	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	11.4	12.1	10.4	5.2	体部内面:縦方向ナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			内面赤色顔料
503	河道1北岸	弥生土器	高杯	-	-	-	32.2	脚部外面:ヨコナデ	長・角	にぶい黄褐色			
504	河道1貝塚1	弥生土器	壺	19.8	-	-	-	頸部内面:シボリ 締め方向ヘラケズリ	精良 長・雲	褐色			外面煤付着
505	河道1貝塚1	弥生土器	壺	18.1	-	-	-	頸部内面:シボリ 縦方向ヘラミガキ	雲	にぶい黄褐色			
506	河道1貝塚1	弥生土器	壺	18.4	-	-	-	頸部内面:シボリ 押圧 ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤付着
507	河道1貝塚1	弥生土器	壺	17.2	-	22.1	-	頸部内面:シボリ ナデ	長・英・雲・赤	灰黄色			頸部内面 光沢
508	河道1貝塚1	弥生土器	壺	18.4	-	-	-	頸部外面:一部ヘラミガキ	微砂 長・雲	にぶい黄褐色			
509	河道1貝塚1	弥生土器	壺	17.4	(32.6)	18.3	7.1	頸部内面:シボリ ヘラミガキ	長	灰白色			
510	河道1貝塚1	弥生土器	器台	23.2	-	-	-	口縁部内面:ヘラミガキ	長・英	褐色			
511	河道1貝塚1	弥生土器	壺	18.8	-	-	-	頸部内面:ナデアゲ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄色			外面煤付着
512	河道1貝塚1	弥生土器	壺	18.8	-	-	-	頸部内面:横方向ヘラミガキ	微砂~砂礫 長・英・雲	褐色			
513	河道1貝塚1	弥生土器	壺	11.4	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
514	河道1貝塚1	弥生土器	壺	16.8	-	-	-	口縁部内面:ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	長・英・赤・雲	灰黄色			
515	河道1貝塚1	弥生土器	壺	17.6	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
516	河道1貝塚1	弥生土器	壺	22.0	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	長・角・雲	明赤褐色			
517	河道1貝塚1	弥生土器	壺	13.2	-	-	-	肩部内面:指オサエ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
518	河道1貝塚1	弥生土器	甕	16.8	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	雲・角	褐色			外面煤付着
519	河道1貝塚1	弥生土器	壺	16.1	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい赤褐色			
520	河道1貝塚1	弥生土器	甕	20.4	-	-	-	肩部外面:ヨコナデ	長・英・雲・角	にぶい褐色			
521	河道1貝塚1	弥生土器	甕	15.5	-	-	-	肩部外面:横方向工具ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤付着・吹きこぼれ痕
522	河道1貝塚1	弥生土器	甕	13.7	-	-	-	肩部外面:ヨコナデ	長	灰白色			
523	河道1貝塚1	弥生土器	甕	12.8	-	-	-	肩部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
524	河道1貝塚1	弥生土器	甕	13.0	-	-	-	体部外面:縦方向ハケメ	長・英・雲	にぶい褐色			外面煤付着
525	河道1貝塚1	弥生土器	甕	15.8	-	17.1	-	-	長・赤・角	にぶい褐色			
526	河道1貝塚1	弥生土器	甕	10.7	14.2	12.4	3.6	底部外面:ナデ	微砂 長・雲・角・赤	灰黄色			外面煤付着
527	河道1貝塚1	弥生土器	甕	10.3	13.5	10.9	4.5	体部内面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・雲	にぶい褐色			完形 外面煤・内面炭化痕跡
528	河道1貝塚1	弥生土器	甕	14.2	-	21.3	-	口縁部外面:ヨコナデ	長・英・雲・赤	灰黄褐色			外面煤付着
529	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	18.7	11.4	-	10.4	杯部外面:ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲	灰黄色			
530	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	-	-	-	15.6	脚柱部内面:ヨコナデ後ヘラケズリ	長・英・雲	灰黄色			
531	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	20.8	-	-	-	杯部外面:ケズリ ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	褐色			
532	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	-	-	-	12.9	脚部内面:沈線6条	精良 長・角・雲	明赤褐色			外面煤付着
533	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	17.0	-	-	-	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色			
534	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	-	-	-	11.8	胴部内面:ハケメ	水こし粘土	にぶい赤褐色			
535	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	16.6	-	-	-	杯部外面:ハケメ 放射状ヘラミガキ	水こし粘土	浅黄褐色			
536	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	20.8	9.3	-	12.1	脚柱部外面:ナデ	水こし粘土	にぶい褐色			
537	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	-	-	-	12.1	脚部内面:ヨコナデ ハケメ	細砂 長・英・雲・赤・角	明褐色			
538	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	22.5	-	-	-	杯部外面:ヘラケズリ ヘラミガキ	精良 長	にぶい黄褐色			
539	河道1貝塚1	弥生土器	高杯	20.9	9.8	-	12.4	杯部外面:ヘラケズリ ヘラミガキ	長・雲	褐色			
540	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	-	-	-	-	内外面:ヘラミガキ	長・英	にぶい黄褐色			
541	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	43.1	-	41.2	-	体部内面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・赤・雲・角	にぶい黄褐色			外面補修痕
542	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	18.0	-	-	-	体部内面:ヘラケズリ 横方向ヘラミガキ	雲・角	にぶい黄褐色			
543	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	-	-	-	-	体部外面:工具ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
544	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	14.9	-	17.9	-	体部内面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい褐色			内外面煤付着
545	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	9.8	-	10.0	-	内外面:ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色			
546	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	21.0	-	21.9	-	内外面:ハケメ後ヘラミガキ	精良~細砂 長・英	灰黄褐色			外面煤付着
547	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	14.8	7.5	15.6	5.2	底部外面:同一方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
548	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	11.1	5.7	11.0	2.7	杯部内面:ハケメ後ナデアゲ	精良 長・英・雲・赤	灰黄色			
549	河道1貝塚1	弥生土器	鉢	-	-	-	11.8	内外面:ヨコナデ	精良~微砂 長・英・角	にぶい褐色			
550	河道1貝塚1	弥生土器	壺	8.4	-	-	-	口縁部内面:ヘラミガキ	精良 長・英	にぶい褐色			
551	河道1貝塚1	弥生土器	壺	-	-	13.4	-	胴部内面:工具ナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			脚内面光沢
552	河道1貝塚1	弥生土器	壺	7.6	-	-	-	口縁部内面:シボリ ナデ	細砂 長・英・雲・赤	にぶい赤褐色			
553	河道1貝塚1	弥生土器	壺	-	-	-	-	胴部内面:ナデアゲ	細砂 長・英・雲	にぶい褐色			
554	河道1貝塚1	弥生土器	蓋	-	-	-	-	蓋部外面:ナデか?	長・英・雲・角	にぶい褐色			
555	河道1貝塚2	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ	長・雲	灰褐色			
556	河道1貝塚2	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	長・角・雲・英	灰黄褐色			
557	河道1貝塚3	弥生土器	高杯	-	-	-	-	内外面:ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい赤褐色			
558	河道1貝塚3	弥生土器	台付鉢	-	-	-	4.4	脚部外面:指オサエ	長・英・雲	にぶい赤褐色			製壺土器
559	河道1貝塚4	弥生土器	甕	15.0	-	-	-	口縁部内面:ヨコナデ	長・英・雲・角	褐色			外面煤付着
560	河道1貝塚4	弥生土器	甕	12.6	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ	長・英・雲	褐灰色			外面煤付着
561	河道1貝塚4	弥生土器	壺	12.4	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ	長	灰黄褐色			
562	河道1貝塚4	弥生土器	甕	14.2	-	15.0	-	口縁部外面:ヨコナデ	長	灰白色			外面煤付着
563	河道1貝塚4	弥生土器	甕	17.0	-	-	-	肩部外面:煤付着のため調整不明瞭	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤付着
564	河道1貝塚4	弥生土器	高杯	19.6	-	-	-	内外面:ヘラミガキ	雲	灰褐色			
565	河道1北岸	弥生土器	壺	13.1	-	-	-	頸部内面:横方向ナデ 横方向ハケメ	細砂 長・英・雲・赤	にぶい褐色			
566	河道1北岸	弥生土器	壺	21.0	38.3	25.3	9.6	底部外面:ナデ一部ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
567	河道1北岸	弥生土器	壺	17.7	-	21.3	-	口縁部内面:ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	長	淡黄色			
568	河道1北岸	弥生土器	壺	18.7	-	-	-	頸部内面:ハケメ 押圧 シボリ	精良 雲・長	浅黄褐色			
569	河道1北岸	弥生土器	壺	17.7	31.3	22.5	8.4	底部外面:ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
570	河道1北岸	弥生土器	壺	21.7	(39.5)	27.0	7.0	外面:縦方向ハケメ後ヘラミガキ	細砂 長・英・雲・赤・角	にぶい黄色			
571	河道1北岸	弥生土器	壺	17.8	-	18.9	-	頸部内面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄色			
572	河道1北岸	弥生土器	壺	15.9	29.6	20.2	7.5	頸部内面:シボリ ヘラミガキ	長・英・赤	淡黄色			外面煤付着
573	河道1北岸	弥生土器	壺	18.8	-	20.5	-	頸部内面:シボリ 指オサエナデ	長・英・雲・赤・角	灰黄色			
574	河道1北岸	弥生土器	壺	19.0	-	-	-	頸部内面:シボリ ハケメ ヘラミガキ	微砂 長・英・雲	浅黄色			
575	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.7	14.8	13.9	3.9	体部内面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化痕跡
576	河道1北岸	弥生土器	壺	18.7	33.6	20.8	7.5	頸部内面:シボリ ハケメ ナデ	長・英・雲	にぶい黄色			外面煤付着

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
577	河道1北岸	弥生土器	壺	14.2	26.6	19.1	6.3	底部外面：ナデ	精良 長・雲・角	にぶい橙色			
578	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	21.2	8.1	底部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
579	河道1北岸	弥生土器	壺	20.0	38.1	24.0	8.6	底部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
580	河道1北岸	弥生土器	壺	19.6	30.9	20.2	7.0	底部外面：ヘラケズリ 一部光沢ある	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			外面煤付着
581	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	19.8	7.0	底部外面：ヘラケズリ ナデ	長・英・雲	浅黄色			外面煤付着 光沢
582	河道1北岸	弥生土器	壺	17.5	36.3	21.5	8.4	底部外面：同一方向ヘラミガキ	精良 長	浅黄褐色			底部突起1つ
583	河道1北岸	弥生土器	壺	17.5	-	-	-	内面：ヘラミガキ シボリ痕	長・英・雲	灰黄色			
584	河道1北岸	弥生土器	壺	19.1	33.4	22.0	9.0	頸部内面：ナデ ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤付着
585	河道1北岸	弥生土器	壺	18.5	30.1	23.4	7.8	頸部内面：シボリ ナデ ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色			
586	河道1北岸	弥生土器	壺	17.5	29.6	20.1	7.0	頸部外面：シボリ ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			外面一部煤付着
587	河道1北岸	弥生土器	壺	16.8	30.3	19.8	6.3	底部外面：ヘラケズリ	長	浅黄色			完形
588	河道1北岸	弥生土器	壺	19.0	-	23.6	-	頸部内面：ハケメ ナデ ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
589	河道1北岸	弥生土器	壺	16.2	34.2	23.0	6.0	底部外面：ヘラミガキ	長	にぶい黄色			肩部内面からの焼成後穿孔
590	河道1北岸	弥生土器	壺	(16.4)	-	(19.8)	-	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	浅黄色			
591	河道1北岸	弥生土器	壺	22.2	35.1	22.2	8.3	頸部内面：シボリ ヘラケズリ 底部外面：ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
592	河道1北岸	弥生土器	壺	18.0	32.0	20.1	6.7	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	灰白色			
593	河道1北岸	弥生土器	壺	17.7	-	-	-	頸部内面：ナデ後ヘラミガキ	長・英	にぶい黄褐色			
594	河道1北岸	弥生土器	壺	15.4	-	-	-	頸部内面：指オサエ ナデ ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄色			
595	河道1北岸	弥生土器	壺	17.4	-	21.9	-	頸部内面：横方向丁寧なナデ シボリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
596	河道1北岸	弥生土器	壺	16.6	30.9	20.8	5.0	底部外面：ナデ	長・英・雲	灰黄色			完形
597	河道1北岸	弥生土器	壺	20.5	-	-	-	頸部内面：シボリ 指オサエ	長・英・雲	にぶい黄色			刺突文5個
598	河道1北岸	弥生土器	壺	19.5	33.4	22.3	7.3	底部：ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
599	河道1北岸	弥生土器	壺	13.5	-	19.7	-	頸部内面：ヘラケズリ後ナデ シボリ痕	長・英・雲	にぶい黄褐色			
600	河道1北岸	弥生土器	壺	17.8	29.8	19.8	8.5	頸部内面：シボリ ナデ	長・英・雲	灰黄色			
601	河道1北岸	弥生土器	壺	18.0	33.2	21.2	7.6	底部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
602	河道1北岸	弥生土器	壺	18.6	29.2	17.8	6.4	底部外面：ヘラミガキ？	砂礫 長・英・雲・角	浅黄色			
603	河道1北岸	弥生土器	壺	20.2	32.1	20.9	5.6	底部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	雲・長	浅黄色			
604	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	18.8	7.1	底部外面：ヘラミガキ	精良 長・雲	浅黄色			
605	河道1北岸	弥生土器	壺	16.7	-	18.5	-	頸部内面：シボリ (光沢あり)	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
606	河道1北岸	弥生土器	壺	17.3	30.2	19.9	7.2	底部外面：ナデ	長・英・雲	にぶい黄色			外面煤付着
607	河道1北岸	弥生土器	壺	18.2	28.5	19.4	7.6	底部外面：ヘラミガキ	精良 長・英・雲	にぶい黄褐色			
608	河道1北岸	弥生土器	壺	18.9	-	-	-	頸部内面：シボリ ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲	浅黄褐色			
609	河道1北岸	弥生土器	壺	20.8	-	22.4	-	頸部内面：ナデ 一部にハケメ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			
610	河道1北岸	弥生土器	壺	19.0	-	-	-	頸部内面：シボリ ナデ	長・英	浅黄褐色			
611	河道1北岸	弥生土器	壺	14.0	-	14.6	-	頸部内面：シボリ 指オサエ	長・英	にぶい黄褐色			外面煤付着
612	河道1北岸	弥生土器	壺	18.5	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 縦方向ハケメ	長・英・雲	浅黄褐色			
613	河道1北岸	弥生土器	壺	20.8	-	-	-	頸部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
614	河道1北岸	弥生土器	壺	17.0	-	26.7	-	外面：縦方向ハケメ 横方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
615	河道1北岸	弥生土器	壺	19.8	-	-	-	頸部内面：ナデ 黒い光沢をもつ ヘラケズリ	長・英・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化物痕跡
616	河道1北岸	弥生土器	壺	(24)	-	-	-	外面：横方向ヘラミガキ 刺突文	長・英・雲	灰黄褐色			
617	河道1北岸	弥生土器	壺	22.4	-	-	-	頸部内面：ナデ ヘラケズリ ハケメ	長・英・雲	にぶい黄色			
618	河道1北岸	弥生土器	壺	23.5	-	-	-	頸部内面：シボリ 指オサエ	長・雲	浅黄褐色			カゴ目
619	河道1北岸	弥生土器	壺	22.6	-	-	-	縦口縁明瞭	精良 長・雲・角	にぶい黄褐色			カゴ目
620	河道1北岸	弥生土器	壺	23.2	36.1	29.1	12.6	頸部内面：横方向ナデ	長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色			
621	河道1北岸	弥生土器	壺	26.4	-	27.6	-	体部外面：ハケメ後ミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			口縁部内外面煤付着
622	河道1北岸	弥生土器	壺	21.7	35.5	30.9	9.0	頸部内面：ナデ 底面：ナデ	長・英・雲	浅黄色			
623	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	30.3	9.5	底部外面：同一方向ハケメ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
624	河道1北岸	弥生土器	壺	22.0	43.3	25.7	8.7	外面：縦方向ハケメ後ヘラミガキ	細砂 長・英・雲・角	褐灰色			外面黒斑
625	河道1北岸	弥生土器	壺	19.4	44.2	(33.9)	12.4	口縁部外面：竹管文	砂礫 長・英・雲・赤	灰黄色			カゴ目
626	河道1北岸	弥生土器	壺	13.2	20.9	13.6	5.0	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			カゴ目
627	河道1北岸	弥生土器	壺	19.8	37.8	33.2	10.8	口縁部：縦凹線	細砂 長・英	灰黄色			
628	河道1北岸	弥生土器	壺	10.3	13.2	14.1	4.5	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			体部穿孔
629	河道1北岸	弥生土器	壺	11.5	11.7	15.2	3.9	体部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲	橙色			
630	河道1北岸	弥生土器	壺	18.5	38.3	36.6	9.9	体部外面：ハケ後ヘラミガキ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
631	河道1北岸	弥生土器	壺	14.6	16.4	27.5	-	体部外面：ヘラミガキ	微砂 長・英	橙色			
632	河道1北岸	弥生土器	壺	20.0	-	28.1	-	口縁部内面：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
633	河道1北岸	弥生土器	壺	24.2	-	30.4	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤	灰黄褐色			
634	河道1北岸	弥生土器	壺	18.5	46.0	40.4	12.1	口縁部：凹線4条	砂礫・細砂 長・英・赤	にぶい黄褐色			
635	河道1北岸	弥生土器	壺	19.4	44.2	(33.9)	12.4	口縁部外面：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・赤	灰黄色			
636	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	24.2	7.4	底部外面：ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
637	河道1北岸	弥生土器	壺	17.6	47.6	40.4	9.1	口縁部：凹線7条	砂礫・細砂 長・英	にぶい黄褐色			
638	河道1北岸	弥生土器	壺	27.5	46.8	31.7	10.4	口縁部外面：ヨコナデ 接合部にハケメ認め	細砂・砂礫 長・英	にぶい黄褐色			カゴ目
639	河道1北岸	弥生土器	壺	19.9	42.0	27.1	9.8	頸部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	浅黄色			
640	河道1北岸	弥生土器	壺	10.8	30.3	31.2	8.2	底部外面：ヘラケズリ？	長・英・雲	にぶい黄褐色			
641	河道1北岸	弥生土器	壺	15.2	29.9	28.6	9.8	体部外面：ハケメ ヘラミガキ	砂礫 長・英	浅黄褐色			体部下半穿孔 外面煤
642	河道1北岸	弥生土器	壺	14.8	-	28.8	-	口縁部内面：ヨコナデ	長・英・雲	浅黄色			
643	河道1北岸	弥生土器	壺	16.5	31.7	29.9	10.3	体部外面：ヘラミガキ	精良・微砂 長	浅黄褐色			
644	河道1北岸	弥生土器	壺	13.8	24.8	23.5	8.0	底部外面：ヘラケズリ後ナデ	微砂・細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
645	河道1北岸	弥生土器	壺	13.7	32.4	33.2	9.5	底部外面：ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
646	河道1北岸	弥生土器	壺	18.4	37.1	35.9	8.4	底部外面：同一方向ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色			
647	河道1北岸	弥生土器	壺	17.0	42.3	37.3	12.2	底部外面：ヘラケズリ	微砂・砂礫 長・英	橙色			
648	河道1北岸	弥生土器	壺	8.1	19.6	22.7	6.6	底部外面：ヘラミガキ	微砂・細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
649	河道1北岸	弥生土器	壺	11.0	23.2	26.7	9.0	頸部内面：シボリ ナデ	長・英・雲	灰黄色			
650	河道1北岸	弥生土器	壺	9.2	22.2	24.2	5.6	外面：ハケメ ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			穿孔3か所
651	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	26.5	7.5	体部外面：タタキ 工具ナデ	細砂 長・英・雲	灰黄色			
652	河道1北岸	弥生土器	壺	22.5	-	-	-	頸部内面：ナデ	長・英・雲	橙色			
653	河道1北岸	弥生土器	壺	19.2	42.2	35.6	12.2	外面：使用による磨減あり	砂礫 長・英	淡褐色			カゴ目
654	河道1北岸	弥生土器	壺	18.5	27.3	22.3	7.3	内面：上半ハケメ下半ヘラケズリ後ナデ	微砂 雲・赤・白	にぶい黄褐色			
655	河道1北岸	弥生土器	壺	17.1	28.8	21.9	7.3	頸部内面：横方向ハケメ 体部：穿孔あり	長・英・雲	にぶい黄色			外面煤付着
656	河道1北岸	弥生土器	壺	17.7	33.0	25.9	8.1	底部外面：ハケメ (使用により磨耗)	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化物痕跡
657	河道1北岸	弥生土器	壺	22.6	37.7	31.4	8.4	底部外面：ナデ？	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
658	河道1北岸	弥生土器	壺	16.3	-	25.9	-	体部内面：ナデ 指オサエ ヘラケズリ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
659	河道1北岸	弥生土器	壺	24.9	-	34.3	-	頸部内面：シボリ	砂礫 長・英	赤褐色			二次焼成
660	河道1北岸	弥生土器	壺	16.0	33.6	29.6	9.2	体部外面：斜め・縦方向ハケメ ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄色			内面一部外面赤色顔料
661	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	30.0	-	口縁部内外面：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・角	橙色			
662	河道1北岸	弥生土器	壺	19.7	38.2	28.8	8.6	口縁部内面：ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	精良 長・英・雲・	にぶい黄色			
663	河道1北岸	弥生土器	壺	17.2	34.0	31.5	10.4	底部外面：縦・斜め方向ハケメ	砂礫 長・英	にぶい黄色			外面煤付着
664	河道1北岸	弥生土器	壺	16.6	25.5	22.8	6.2	体部内面：ナデ	長・英・雲	にぶい黄色			外面煤・内面炭化物痕跡
665	河道1北岸	弥生土器	壺	18.7	31.9	27.0	8.8	底部外面：同一方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化物痕跡
666	河道1北岸	弥生土器	壺	(15.2)	34.1	(20.6)	9.5	底面：一部に光沢 ヘラミガキ？	長・英・雲	にぶい黄褐色			
667	河道1北岸	弥生土器	壺	14.6	27.8	24.6	7.2	口縁部内面：ヨコナデ 横方向ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	橙色			
668	河道1北岸	弥生土器	壺	17.2	-	27.2	-	内面：ヘラケズリ後ナデ 一部ヘラミガキ	長・英・雲・角	浅黄色			底部補修痕
669	河道1北岸	弥生土器	壺	15.8	30.7	25.7	8.3	体部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色			
670	河道1北岸	弥生土器	壺	14.2	-	27.0	-	口縁部外面：ヨコナデ ヘラミガキ	精良 長・英・雲・赤	浅黄褐色			外面煤付着
671	河道1北岸	弥生土器	壺	16.4	-	33.0	-	内面：ヨコナデ 指オサエ ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄色			
672	河道1北岸	弥生土器	壺	17.0	-	32.1	-	内面：横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	浅黄褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺物種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
673	河道1北岸	弥生土器	壺	19.3	32.1	31.3	6.5	肩部内面：シボリ	精良 長・英	浅黄褐色			外面煤付着
674	河道1北岸	弥生土器	壺	27.0	-	-	-	頸部内面：横方向ハケメ ナデ	長・英・雲	にぶい褐色			
675	河道1北岸	弥生土器	壺	26.9	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ後ヘラミガキ ハケメ	長・英・雲	にぶい褐色			
676	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：ハケメ ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
677	河道1北岸	弥生土器	壺	18.8	34.5	31.6	10.0	体部外面：ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
678	河道1北岸	弥生土器	壺	16.6	32.6	27.7	5.6	体部外面：ハケメ	精良～微砂 長・英	浅黄褐色			初庄痕
679	河道1北岸	弥生土器	壺	16.3	-	30.0	9.4	底部外面：条痕を持つヘラミガキ	長・英	浅黄色			
680	河道1北岸	弥生土器	壺	20.7	32.0	31	9.2	底部外面：ヘラケズリ	細砂	にぶい褐色			
681	河道1北岸	弥生土器	壺	11.5	20.9	16.4	3.3	体部内面：ヘラケズリ 押圧	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
682	河道1北岸	弥生土器	壺	11.3	15.9	-	6.0	内外面：丁寧なヘラミガキ	長	褐色			外面煤付着
683	河道1北岸	弥生土器	壺	(11.5)	17.8	19.7	-	底部外面：ナデ	長・英・雲	にぶい褐色			
684	河道1北岸	弥生土器	壺	17.2	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	微砂 長・英・雲	にぶい褐色			
685	河道1北岸	弥生土器	壺	20.5	-	-	-	頸部内面：剥落して不明	長・英	明褐色			
686	河道1北岸	弥生土器	壺	16.0	-	-	-	体部外面：ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色			
687	河道1北岸	弥生土器	壺	20.4	-	-	-	口縁部外面：鋸歯文 沈線	長・雲・角・英	にぶい黄褐色			線刻
688	河道1北岸	弥生土器	壺	(24.8)	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ ハケメ	長・英・雲・赤	灰黄褐色			内外面煤付着
689	河道1北岸	弥生土器	壺	31.1	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ後線刻文	細砂	にぶい黄褐色			
690	河道1北岸	弥生土器	壺	29.0	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂 長・英	灰黄色			線刻
691	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：ヘラケズリ	長・雲	浅黄色			
692	河道1北岸	弥生土器	壺	(34.4)	-	-	-	口縁部外面：ハケメ後ヨコナデ	長・英	浅黄色			補修痕
693	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	肩部内面：ナデ 指オサエ	微砂 長・英	にぶい褐色			接合部明瞭
694	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	-	-	-			
695	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部外面：ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・角	にぶい赤褐色			人形の線刻
696	河道1北岸	弥生土器	壺	25.6	-	-	-	口縁部内外面：ヘラミガキ 頸部内面：ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			カゴ目
697	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
698	河道1北岸	弥生土器	壺	34.0	-	-	-	頸部内面：指オサエ ハケメ ナデ 接合痕	長・英・雲	灰黄色			
699	河道1北岸	弥生土器	壺	23.4	-	-	-	口縁部：ヨコナデ後ハケメ後ヘラミガキ	微砂 雲	褐色			
700	河道1北岸	弥生土器	壺	30.2	-	36.6	-	頸部内面：ハケメ ヘラケズリ	砂礫 長・英	浅黄色			
701	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	27.0	8.8	体部外面：タタキ後ハケ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
702	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	24.8	-	内面：ナデ後指オサエ ハケメ後工具ナデ	長・英・雲	浅黄色			
703	河道1北岸	弥生土器	壺	21.5	-	27.8	-	体部外面：ハケメ タタキ	砂礫 長・英・赤	浅黄褐色			
704	河道1北岸	弥生土器	壺	15.9	30.0	25.3	4.5	体部内面：ナデアゲ	細砂～砂礫 長	灰白色			
705	河道1北岸	弥生土器	壺	22.6	-	28.4	-	体部内面：押圧 ハケメ ヘラケズリ	精良 長・英	灰黄色			
706	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部内面：横方向ハケメ ナデ	長・英・雲・角	灰黄褐色			
707	河道1北岸	弥生土器	壺	17.6	-	21.8	-	体部内面：ハケメ後ナデ 指オサエ	長・英・雲	灰黄色			外面煤付着
708	河道1北岸	弥生土器	壺	23.2	-	-	-	口縁部外面：波状文	長・英・雲	浅黄褐色			
709	河道1北岸	弥生土器	壺	14.2	-	-	-	内面：ヘラケズリ後ナデ一部指オサエ	長・英・雲	にぶい黄褐色			接合痕明瞭
710	河道1北岸	弥生土器	壺	(17.2)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ後ヘラミガキ	長・英・雲・角	浅黄色			
711	河道1北岸	弥生土器	壺	(14.4)	25.8	19.9	5.6	底部外面：ハケメ	英・長・雲	褐色			
712	河道1北岸	弥生土器	壺	19.5	-	-	-	口縁部外面：竹管文 波状文 ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
713	河道1北岸	弥生土器	壺	28.3	-	-	-	頸部内面：横方向ハケメ	長・英・雲	褐色			
714	河道1北岸	弥生土器	壺	18.9	-	-	-	口縁部外面：刺突 竹管文 横方向ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい褐色			
715	河道1北岸	弥生土器	壺	15.4	22.1	17.7	5.0	体部外面：ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡
716	河道1北岸	弥生土器	壺	14.8	28.9	21.2	5.6	底部外面：ナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤付着・補修痕
717	河道1北岸	弥生土器	壺	11.6	17.2	14.4	4.7	底部外面：ナデ	長・雲・角・赤	淡黄色			
718	河道1北岸	弥生土器	壺	12.3	15.3	13.6	4.0	体部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・赤・雲	にぶい黄褐色			完形
719	河道1北岸	弥生土器	壺	14.5	24.2	18.3	6.0	底部外面：同一方向ハケメ	長・英・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化痕跡
720	河道1北岸	弥生土器	壺	13.2	19.3	15.0	5.1	底部外面：ハケメ	細砂～砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			
721	河道1北岸	弥生土器	壺	13.6	-	17.5	-	口縁部外面：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤付着
722	河道1北岸	弥生土器	壺	13.4	18.1	15.2	4.9	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲・赤	暗黄褐色			
723	河道1北岸	弥生土器	壺	16.5	21.1	18.7	6.0	体部外面：縦方向工具ナデ	長・英・雲・角	灰黄褐色			
724	河道1北岸	弥生土器	壺	15.6	20.2	18.9	6.4	底部外面：ナデ	長・英・雲・角	褐色			外面煤・内面炭化痕跡
725	河道1北岸	弥生土器	壺	14.5	23.4	18.5	7.2	体部外面：ハケメ	細砂 長・英	にぶい褐色			外面煤付着
726	河道1北岸	弥生土器	壺	14.2	17.9	16.2	4.6	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			底部穿孔
727	河道1北岸	弥生土器	壺	13.3	20.4	20.1	6.4	底部：ヘラケズリ	細砂	にぶい褐色			口縁部一部欠損
728	河道1北岸	弥生土器	壺	13.3	21.6	19.7	6.9	底部外面：ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	灰黄色			
729	河道1北岸	弥生土器	壺	14.7	20.2	20.3	6.9	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			内面炭化物付着
730	河道1北岸	弥生土器	壺	13.0	20.8	19.6	5.4	口縁部内面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色			
731	河道1北岸	弥生土器	壺	16.3	25.9	19.8	4.6	底部外面：ハケメ(多方向)	長・雲	にぶい褐色			外面煤・内面炭化痕跡
732	河道1北岸	弥生土器	壺	16.4	24.9	19.5	5.6	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	褐色			外面煤・内面炭化痕跡
733	河道1北岸	弥生土器	壺	14.8	-	16.9	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			外面煤吹きこぼれあり
734	河道1北岸	弥生土器	壺	16.1	-	22.1	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長	褐色			外面煤付着
735	河道1北岸	弥生土器	壺	15.8	27.3	20.9	5.2	底部外面：ヘラミガキ? 穿孔	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化物付着
736	河道1北岸	弥生土器	壺	15.6	23.9	19.1	6.4	底部外面：ナデ 同一方向ハケメ	微砂 長・英・雲	にぶい褐色			
737	河道1北岸	弥生土器	壺	15.5	26.1	20.4	5.3	体部外面：ハケメ後工具ナデ	長・英・角	にぶい褐色			内面黒色釉・外面煤付着
738	河道1北岸	弥生土器	壺	16.2	-	22.7	-	外面：ナデ?	長・英・雲	にぶい黄色			外面煤・内面炭化痕跡
739	河道1北岸	弥生土器	壺	17.6	30.7	25.4	7.3	体部外面：ヨコナデ ハケメ	精良 長	にぶい褐色			
740	河道1北岸	弥生土器	壺	12.5	17.9	15.4	4.8	底部外面：ヨコナデ ハケメ	精良 長	灰褐色			外面煤付着
741	河道1北岸	弥生土器	壺	11.6	14.6	13.4	4.1	外面：ナデアゲ 底部外面：ヘラケズリ	長・英	浅黄褐色			完形 外面煤付着
742	河道1北岸	弥生土器	壺	14.2	-	19.6	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
743	河道1北岸	弥生土器	壺	12.7	18.1	14.4	3.5	体部外面：工具ナデ	英・雲・赤	灰黄色			外面煤付着
744	河道1北岸	弥生土器	壺	15.3	22.4	17.5	5.1	底部外面：ナデ	長・英・雲・赤	灰白色			
745	河道1北岸	弥生土器	壺	11.4	18.6	16.2	4.8	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			外面煤付着
746	河道1北岸	弥生土器	壺	11.6	23.6	7.9	6.0	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長・英	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡
747	河道1北岸	弥生土器	壺	13.3	22.2	18.4	5.8	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長・英	にぶい黄褐色			
748	河道1北岸	弥生土器	壺	18.0	30.6	23.9	6.6	体部外面：工具ナデ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			カゴ目
749	河道1北岸	弥生土器	壺	15.4	26.3	20.8	4.7	底部外面：同一方向ハケメ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい黄褐色			内外面煤付着
750	河道1北岸	弥生土器	壺	15.6	23.7	18.2	4.9	体部外面：縦方向工具ナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			外面煤・内面炭化痕跡
751	河道1北岸	弥生土器	壺	18.1	31.7	28.1	8.4	体部外面：ヨコナデ ハケメ	角・雲・長	浅黄色			外面煤・内面炭化痕跡
752	河道1北岸	弥生土器	壺	14.0	25.3	20.0	6.2	底部外面：ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい黄褐色			外面煤付着
753	河道1北岸	弥生土器	壺	15.0	24.0	21.0	6.4	底部：ヘラミガキ	長・英	にぶい褐色			外面煤付着
754	河道1北岸	弥生土器	壺	13.8	25.8	21.1	5.4	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長	褐色			外面煤付着
755	河道1北岸	弥生土器	壺	14.8	-	22.8	-	体部外面：ヨコナデ ヘラミガキ	長・雲	にぶい黄褐色			
756	河道1北岸	弥生土器	壺	13.8	-	20.5	-	外面：ハケメ後縦方向ヘラミガキ	長・英	にぶい黄色			
757	河道1北岸	弥生土器	壺	(17.0)	25.6	(22.2)	(4.2)	外面：上半ハケメ下半ヘラミガキ	微砂 雲	にぶい褐色			
758	河道1北岸	弥生土器	壺	14.9	27.7	21.4	5.6	底部外面：一定方向ヘラミガキ	細砂	にぶい褐色			
759	河道1北岸	弥生土器	壺	15.5	27.9	21.7	5.4	底部：焼成後穿孔	長・英・雲・赤	灰白色			外面煤・内面炭化痕跡
760	河道1北岸	弥生土器	壺	16.4	28.0	22.6	6.6	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長・雲・赤	にぶい褐色			外面煤付着
761	河道1北岸	弥生土器	壺	21.3	37.5	31.3	8.5	底部外面：同一方向ヘラミガキ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			
762	河道1北岸	弥生土器	壺	13.8	24.9	19.2	5.6	底部外面：同一方向ヘラミガキか? 磨耗	長・英・雲	にぶい褐色			外面煤付着
763	河道1北岸	弥生土器	壺	15.9	24.1	19.4	5.6	底部外面：ヘラミガキ	精良 雲・角	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡
764	河道1北岸	弥生土器	壺	19.0	-	-	-	体部外面：ヨコナデ ハケメ ヘラミガキ	英・長	浅黄褐色			内面炭化物付着
765	河道1北岸	弥生土器	壺	16.6	-	29.9	-	体部外面：ハケメ ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
766	河道1北岸	弥生土器	壺	15.5	24.4	19.0	5.6	底部外面：一定方向ヘラミガキ	長・英・赤	明褐色			外面煤・内面炭化痕跡
767	河道1北岸	弥生土器	壺	15.8	24.0	20.8	5.8	底部外面：同一方向ヘラミガキ	長・英	黒褐色			
768	河道1北岸	弥生土器	壺	15.0	-	21.0	-	体部外面：ヘラミガキ 刺突文	長・英・雲	褐色			外面煤・吹きこぼれ痕

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径	底径							
769	河道1北岸	弥生土器	甕	16.2	-	20.2	-	体部外面：横方向ナデ	微砂 長・英	にぶい橙色				
770	河道1北岸	弥生土器	甕	16.9	26.3	21.9	6.3	体部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			外面煤附着	
771	河道1北岸	弥生土器	甕	15.2	20.1	23.9	6.5	体部外面：ハケム後ヘラミガキ	長・赤	灰黄褐色				
772	河道1北岸	弥生土器	甕	14.2	-	19.1	-	体部外面：ハケム後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい橙色			外面煤附着	
773	河道1北岸	弥生土器	甕	16.6	(24.2)	21.5	(7.6)	体部外面：ヘラミガキ	砂礫 雲・赤	灰褐色			外面煤附着	
774	河道1北岸	弥生土器	甕	15.4	25.6	21.0	6.4	体部外面：ヘラミガキ	長・英・角	にぶい黄褐色			外面煤附着	
775	河道1北岸	弥生土器	甕	16.0	26.6	21.6	-	体部外面：ヘラミガキ	微砂 長・雲	浅黄褐色			外面煤附着	
776	河道1北岸	弥生土器	甕	14.6	25.3	19.4	6.6	体部外面：ハケム	微砂 長・雲	橙色				
777	河道1北岸	弥生土器	甕	13.0	(22.8)	20.8	4.9	体部外面：ハケム	微砂 雲	灰黄色			外面煤附着	
778	河道1北岸	弥生土器	甕	15.6	21.1	18.8	5.8	体部外面：縦方向ハケム	長・英	黒褐色			外面煤附着	
779	河道1北岸	弥生土器	甕	(12.5)	18.9	(15.2)	4.2	体部外面：ハケム	細砂 白	にぶい褐色			外面煤附着	
780	河道1北岸	弥生土器	甕	14.2	22.6	(17.4)	5.4	体部上面：ハケム	細砂 長・英	橙色			外面煤附着	
781	河道1北岸	弥生土器	甕	13.6	18.6	21.0	-	体部外面：ナデ 刺突文(3個)	長・英・雲	褐色				
782	河道1北岸	弥生土器	甕	17.4	(26.7)	-	3.6	体部外面：縦方向ハケム	微砂 白	にぶい橙色			外面煤附着	
783	河道1北岸	弥生土器	甕	(16.4)	20.4	(17.3)	4.9	体部外面：ハケム	微砂 長・英・雲・角	にぶい褐色				
784	河道1北岸	弥生土器	甕	15.6	20.9	(16.7)	5.3	体部外面：ハケム	細砂 長・英・雲・赤	灰白色			外面煤附着	
785	河道1北岸	弥生土器	甕	(13.9)	17.5	14.9	4.5	体部外面：ハケム	微砂～砂礫 長・英・雲・角	灰白色			外面煤附着	
786	河道1北岸	弥生土器	甕	13.9	17.0	14.5	3.1	体部外面：ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤附着	
787	河道1北岸	弥生土器	甕	11.1	15.6	(13.0)	4.5	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英	灰黄色			外面煤附着	
788	河道1北岸	弥生土器	甕	11.6	-	12.4	-	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲・角	にぶい褐色			外面煤附着	
789	河道1北岸	弥生土器	甕	14.0	27.5	19.8	-	体部内面：ヘラケズリ 指オサエ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			外面煤附着 讃岐産	
790	河道1北岸	弥生土器	甕	14.2	24.0	21.9	5.4	体部内面：ヘラケズリ 指オサエ	長・英・雲・角	灰黄色			四国系	
791	河道1北岸	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	内面：押圧	長・英・角	赤褐色				
792	河道1北岸	弥生土器	甕	(13.6)	-	(19.3)	-	体部：縦方向ハケム	雲	黒色			外面煤附着 讃岐産	
793	河道1北岸	弥生土器	甕	14.5	-	19.2	-	内面：指オサエ	ヘラケズリ後ナデ	長・雲・チャート	にぶい黄褐色			
794	河道1北岸	弥生土器	甕	12.3	19.8	18.3	4.1	体部内面：押圧	ヘラケズリ	精良 雲	灰黄褐色			外面煤附着
795	河道1北岸	弥生土器	甕	13.4	22.8	17.8	3.3	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤附着	
796	河道1北岸	弥生土器	甕	16.0	25.2	23.0	(6.3)	体部外面：タタキ後ヘラミガキ	英・長・雲	褐色				
797	河道1北岸	弥生土器	甕	15.0	25.1	20.5	1.8	体部外面：タタキ ナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			外面煤附着	
798	河道1北岸	弥生土器	甕	14.7	-	17.0	-	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	浅黄色			外面煤附着	
799	河道1北岸	弥生土器	甕	15.9	-	17.9	-	体部外面：タタキ	微砂 英・雲	暗褐色			外面煤附着	
800	河道1北岸	弥生土器	甕	16.6	-	-	-	内面：ハケム	長・英	にぶい黄色			外面煤・底部焼成後穿孔	
801	河道1北岸	弥生土器	甕	12.8	23.9	18.3	4.0	体部外面：タタキ後ハケム	微砂 長・角・雲	にぶい赤褐色				
802	河道1北岸	弥生土器	甕	16.0	-	19.3	-	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			外面煤・内面炭化痕跡	
803	河道1北岸	弥生土器	甕	14.2	21.9	18.1	3.1	底部：同一方向ハケム	細砂	明赤褐色				
804	河道1北岸	弥生土器	甕	15.1	-	18.8	-	体部内面：斜め方向ハケム	微砂～細砂 長・雲	淡赤褐色				
805	河道1北岸	弥生土器	甕	14.3	21.9	17.4	2.3	底部外面：ナデ	細砂 赤	にぶい褐色			内外面煤附着	
806	河道1北岸	弥生土器	甕	16.2	-	19.9	-	体部内面：ハケム ナデアゲ	砂礫 英・雲	灰褐色			外面煤附着	
807	河道1北岸	弥生土器	甕	14.0	-	16.6	-	体部内面：ハケム ナデアゲ	微砂 長・雲・角	にぶい黄褐色			外面煤附着	
808	河道1北岸	弥生土器	甕	14.9	-	20.5	-	体部外面：タタキ後縦方向ナデ	微砂 長・英・雲	褐色			外面煤・内面炭化痕跡	
809	河道1北岸	弥生土器	甕	15.2	17.7	16.5	3.2	体部内面：ヘラケズリ ナデアゲ	長・英・雲	灰褐色			外面煤附着	
810	河道1北岸	弥生土器	甕	11.8	18.2	12.6	4.7	外面：タタキ ハケム 内面：ハケム	長・英	にぶい褐色				
811	河道1北岸	弥生土器	甕	12.5	15.4	14.0	3.5	内面：ナデアゲ	長・英	灰黄褐色			外面煤附着	
812	河道1北岸	弥生土器	甕	(13.0)	16.8	(13.0)	2.9	外面：上半タタキ後ハケム下半タタキ	微砂 長・英・雲	灰黄褐色				
813	河道1北岸	弥生土器	甕	15.5	-	17.7	4.4	外面：タタキ後縦方向ハケム	長・雲・赤	にぶい黄褐色			内外面黒斑	
814	河道1北岸	弥生土器	甕	12.5	20.3	16.4	3.6	体部内面：ナデアゲ 縦方向ヘラケズリ	精良 長	褐色			外面煤・内面炭化痕跡	
815	河道1北岸	弥生土器	甕	14.5	21.7	18.4	2.5	体部外面：タタキ後ハケム	長・英・雲	明赤褐色				
816	河道1北岸	弥生土器	甕	13.0	19.9	16.1	5.0	体部外面：タタキ ハケム	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤・内面炭化痕跡	
817	河道1北岸	弥生土器	甕	15.5	17.8	16.0	3.3	内面：ナデアゲ ヘラケズリ ナデ	砂礫 長・雲	褐色			外面煤附着	
818	河道1北岸	弥生土器	甕	12.2	17.0	14.4	4.5	内面：ヘラケズリ ハケム ナデアゲ	長・英・雲・角	灰白色				
819	河道1北岸	弥生土器	甕	12.0	15.6	13.8	4.3	内面：ナデアゲ シボリ 押圧	ヘラケズリ	長・英・雲・角	褐色			外面煤附着
820	河道1北岸	弥生土器	甕	11.4	(17.5)	14.5	2.9	体部外面：タタキ後縦方向ヘラケズリ	長・英	灰黄色				
821	河道1北岸	弥生土器	甕	(12.5)	13.1	12.6	3.4	底部外面：ヘラミガキ	長・英・雲	黄灰色			赤色顔料	
822	河道1北岸	弥生土器	高杯	23.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・角	赤色				
823	河道1北岸	弥生土器	高杯	-	-	-	17.0	胴部内面：ヘラケズリ	細砂 長・角	にぶい褐色			補修痕跡	
824	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.6	-	-	-	杯部外面：下部ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・赤	赤褐色			外面赤色顔料	
825	河道1北岸	弥生土器	高杯	-	-	-	16.4	胴部外面：縦方向ヘラミガキ ヨコナデ	微砂 雲	赤褐色				
826	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.6	15.0	-	15.2	脚部外面：補修痕跡あり	長・英・雲・角	浅黄色				
827	河道1北岸	弥生土器	高杯	-	-	-	20.2	胴部外面：縦方向ハケム ヘラミガキ 洗線	長・英	浅黄褐色				
828	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.8	13.3	-	14.3	脚部内面：ヘラケズリ 横方向工具ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色				
829	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.7	12.4	-	13.7	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	褐色				
830	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.6	10.4	-	11.4	杯部外面：ヘラケズリ 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色				
831	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.3	13.2	-	12.4	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂～砂礫	にぶい褐色				
832	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.4	9.5	-	10.8	脚柱部外面：ヘラケズリ	精良 長	にぶい黄褐色			脚部内外面煤附着	
833	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.8	10.8	-	12.0	脚柱部内面：横方向ハケム シボリ	精良 長・英	にぶい褐色				
834	河道1北岸	弥生土器	高杯	29.0	19.0	-	12.2	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色				
835	河道1北岸	弥生土器	高杯	-	8.4	-	(10.0)	内外面：ヘラミガキ	長	褐色				
836	河道1北岸	弥生土器	高杯	21.0	10.0	-	11.7	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲・英・角	褐色				
837	河道1北岸	弥生土器	高杯	(21.0)	11.1	-	(12.6)	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土 長	褐色				
838	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.0	10.5	-	12.5	内外面：丁寧なヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色				
839	河道1北岸	弥生土器	高杯	25.8	12.7	-	13.6	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土 長・英・雲・赤	褐色				
840	河道1北岸	弥生土器	高杯	25.4	12.4	-	16.0	脚柱部内面：ハケム ヨコナデ	水こし粘土	褐色				
841	河道1北岸	弥生土器	高杯	23.8	-	-	-	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色				
842	河道1北岸	弥生土器	高杯	22.0	11.9	-	13.0	口縁脚部外面：面取り	水こし粘土 長・英・雲・赤	褐色			内外面黒斑	
843	河道1北岸	弥生土器	高杯	23.8	10.5	-	12.8	杯部内外面：丁寧なヘラミガキ	微砂 長・英・赤	浅黄色				
844	河道1北岸	弥生土器	高杯	(25.1)	11.0	-	13.4	内外面：摩擦のため不明瞭	水こし粘土	にぶい褐色				
845	河道1北岸	弥生土器	高杯	21.0	(10.6)	-	13.0	杯部外面：ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色				
846	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.8	10.4	-	10.4	杯部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色				
847	河道1北岸	弥生土器	高杯	(20.6)	(9.6)	-	(11.9)	杯部外面：ヘラケズリ 縦方向ヘラミガキ	精良～砂礫 長・英・雲・赤	にぶい褐色			全体に使用による摩滅	
848	河道1北岸	弥生土器	高杯	26.0	11.7	-	14.3	脚部内面：光沢をもつ	水こし粘土	にぶい黄褐色			外面煤・吹きこぼれ痕	
849	河道1北岸	弥生土器	高杯	22.6	11.6	-	15.0	杯部外面：縦方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色				
850	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.4	8.0	-	10.7	杯部外面：ヘラミガキ	水こし粘土	浅黄褐色				
851	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.9	9.8	-	12.4	杯部外面：横・縦方向ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			内外面煤附着	
852	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.0	12.1	-	14.5	杯部内面：ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲	浅黄色			脚部内面一部煤附着	
853	河道1北岸	弥生土器	高杯	14.5	9.1	-	11.5	杯部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	細砂 長・英・角	褐色				
854	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.6	12.0	-	14.2	杯部外面：ヘラケズリ 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	浅黄色				
855	河道1北岸	弥生土器	高杯	21.1	11.6	-	12.0	内外面：丁寧なヘラミガキ	長・雲・赤	褐色				
856	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.5	9.7	-	10.0	口縁部：ヨコナデ	微砂 雲・長	褐色				
857	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.0	10.2	-	12.4	内外面：ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・赤・角	にぶい褐色				
858	河道1北岸	弥生土器	高杯	25.6	12.9	-	13.9	脚部内面：シボリ ナデ	水こし粘土	にぶい褐色				
859	河道1北岸	弥生土器	高杯	27.5	15.2	-	21.5	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土?	にぶい黄色				
860	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.2	10.1	-	12.8	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色				
861	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.1	9.8	-	9.4	杯部外面：ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色				
862	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.7	9.0	-	12.1	杯部外面：ハケム後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色				
863	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.0	9.9	-	11.8	杯部外面：縦方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			完形	
864	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.8	8.8	-	11.0	杯部外面：縦方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色				

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量尺 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	成存状況	備考		
				口径	器高	最大径	底径								
865	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.1	9.6	-	9.9	杯部外面:横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土?	橙色					
866	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.7	9.2	-	10.6	杯部外面:ヘラケズリ 縦方向ヘラミガキ	細砂 長・英・雲・赤・角	にぶい橙色					
867	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.8	9.8	-	11.4	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英・角	橙色					
868	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.0	8.8	-	11.0	杯部外面:横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土?	橙色			底部内面光沢		
869	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.5	9.2	-	10.3	内外面:ヘラミガキ	微砂 長・英	橙色					
870	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.7	8.4	-	9.4	杯部外面:ヘラケズリ後縦方向ヘラミガキ	精良 長・英	にぶい橙色					
871	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.4	8.2	-	11.1	杯部外面:ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	水こし粘土?	橙色					
872	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.3	7.8	-	11.0	杯部内外面:ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			完形		
873	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.8	8.5	-	(9.2)	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良 長・英	橙色					
874	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.7	7.8	-	10.0	杯部外面:ヘラケズリ後縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	橙色					
875	河道1北岸	弥生土器	高杯	14.4	8.3	-	10.4	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・赤	灰黄色					
876	河道1北岸	弥生土器	高杯	13.9	8.0	-	11.0	内外面:ヘラミガキ	精良~砂礫 長・雲・角	橙色					
877	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.0	11.0	-	11.0	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色					
878	河道1北岸	弥生土器	高杯	(15.6)	9.4	-	(10.1)	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	細砂 長	明赤褐色					
879	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.0	14.3	-	13.2	杯部-一部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	にぶい橙色					
880	河道1北岸	弥生土器	高杯	14.0	6.8	-	8.2	内外面:ヘラミガキ	細砂 長・英・雲・赤	橙色					
881	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.6	12.1	-	13.0	脚部内面:横方向ハケメ 指オサエ	長・英・雲・赤	にぶい黄橙色					
882	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.8	9.9	-	13.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
883	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.1	8.7	-	13.7	内外面:丁寧なヘラミガキ	水こし粘土?	にぶい橙色					
884	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.8	9.6	-	12.1	杯部外面:横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長	にぶい黄橙色					
885	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.3	8.1	-	11.8	口縁部内外面:横方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	浅黄色					
886	河道1北岸	弥生土器	高杯	(16.0)	8.8	-	11.7	脚部外面:一部補修跡あり	砂礫 雲・赤	橙色			穿孔途中		
887	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.7	7.7	-	9.8	杯部外面:ヘラケズリ	水こし粘土	にぶい黄色					
888	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.8	7.8	-	10.4	杯部内外面:ハケメ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい橙色					
889	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.1	8.8	-	11.0	杯部外面:横方向ヘラケズリ後縦方向ヘラミガキ	長・雲・赤	橙色					
890	河道1北岸	弥生土器	高杯	13.1	9.5	-	11.6	内外面:丁寧なヘラミガキ	微砂 赤	橙色					
891	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.0	8.4	-	11.0	内外面:丁寧なヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色					
892	河道1北岸	弥生土器	高杯	(12.6)	(9.6)	-	10.4	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良~砂礫 長・英	にぶい橙色					
893	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.0	9.1	-	11.6	内外面:丁寧なヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色					
894	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.9	6.4	-	10.8	内外面:丁寧なヘラミガキ	長・雲	にぶい橙色					
895	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.6	7.4	-	9.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	明赤褐色					
896	河道1北岸	弥生土器	高杯	13.2	7.1	-	11.5	杯部外面:ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	水こし粘土	灰黄褐色					
897	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.0	7.2	-	8.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土 長・英・雲・赤	にぶい黄橙色					
898	河道1北岸	弥生土器	高杯	10.8	6.9	-	9.8	杯部内外面:ヘラミガキ	水こし粘土	赤色					
899	河道1北岸	弥生土器	高杯	9.2	6.4	-	8.6	内外面:丁寧なヘラミガキ	微砂 長・英・赤	橙色			内面赤色顔料		
900	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.0	8.4	-	9.5	内外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	灰黄色					
901	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.2	-	-	-	口縁部:ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい橙色					
902	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.4	-	-	-	-	長・英・雲・赤	浅黄褐色					
903	河道1北岸	弥生土器	高杯	24.1	13.0	-	15.6	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
904	河道1北岸	弥生土器	高杯	21.5	11.9	-	13.6	内外面:ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい橙色					
905	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.9	10.5	-	12.7	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
906	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.7	11.3	-	13.2	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色					
907	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.1	11.2	-	11.9	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良 長	にぶい黄褐色					
908	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.6	11.8	-	11.8	杯部外面:ヘラケズリ	ヘラミガキ	水こし粘土?	灰黄褐色				
909	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.7	11.3	-	12.0	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			完形		
910	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.0	10.8	-	11.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい黄褐色			完形		
911	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.0	11.0	-	11.6	外面:ヘラケズリ後ハケメ後横方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤・角	橙色					
912	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.0	9.5	-	10.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
913	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.2	9.6	-	11.4	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土?	にぶい褐色					
914	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.8	10.2	-	11.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色			完形		
915	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.2	10.2	-	11.6	杯部外面:横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	橙色					
916	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.8	10.6	-	11.1	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良~砂礫 長	灰黄色					
917	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.6	9.5	-	11.6	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色					
918	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.4	10.1	-	12.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良 長・英	にぶい褐色					
919	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.6	9.4	-	9.7	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色					
920	河道1北岸	弥生土器	高杯	14.4	9.2	-	11.3	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			完形		
921	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.1	7.7	-	10.6	杯部内外面:ヘラミガキ	水こし粘土	橙色			完形		
922	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.3	8.9	-	11.0	杯部内面:ハケメ	精良 長・英	にぶい黄褐色					
923	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.2	9.0	-	11.2	内外面:ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
924	河道1北岸	弥生土器	高杯	13.7	9.6	-	9.5	内外面:ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色					
925	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.0	9.4	-	10.6	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
926	河道1北岸	弥生土器	高杯	13.7	8.7	-	9.8	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい褐色					
927	河道1北岸	弥生土器	高杯	16.0	10.6	-	11.2	口縁部:ヨコナテ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			外面灰・内面炭化物?		
928	河道1北岸	弥生土器	高杯	19.0	-	-	-	外面:縦方向ヘラケズリ 横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色					
929	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.0	-	-	-	杯部外面下半:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
930	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.2	10.6	-	11.6	脚部外面:縦方向ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	橙色			粗痕		
931	河道1北岸	弥生土器	高杯	11.3	8.6	-	9.0	内外面:ヘラミガキ	精良 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			脚部内面光沢		
932	河道1北岸	弥生土器	高杯	15.8	10.2	-	11.5	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良~砂礫 長・赤	灰白色					
933	河道1北岸	弥生土器	高杯	12.6	9.9	-	9.9	杯部外面:ヘラケズリ	水こし粘土 長・雲・赤	にぶい黄褐色			外面黒斑		
934	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.8	-	-	-	内外面:丁寧なヘラミガキ	微砂 雲・赤	にぶい黄褐色					
935	河道1北岸	弥生土器	高杯	20.9	12.4	-	13.2	杯部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	橙色					
936	河道1北岸	弥生土器	高杯	18.6	11.6	-	14.0	杯部外面:ヘラケズリ	ハケメ	ヘラミガキ	長・英・雲・赤				
937	河道1北岸	弥生土器	高杯	17.6	10.4	-	13.7	杯部外面:ヘラケズリ	ヘラミガキ	水こし粘土					
938	河道1北岸	弥生土器	壺	6.5	19.4	12.8	12.6	杯部内面:指オサエ	工具ナテ	微砂 長・英・雲・角	にぶい黄褐色				
939	河道1北岸	弥生土器	壺	5.0	16.2	14.0	13.6	杯部内面:シボリ	ヨコナテ	長・雲・赤	橙色			脚部内面光沢	
940	河道1北岸	弥生土器	壺	7.2	14.6	16.3	12.2	内面:ナテ	工具ナテ	底に工具痕あり	水こし粘土				
941	河道1北岸	弥生土器	壺	7.0	13.8	12.5	11.6	杯部内面:ナテ		精良 長・英・雲・赤	にぶい褐色			脚部内面光沢	
942	河道1北岸	弥生土器	壺	7.3	15.0	14.2	12.0	杯部内面:ナテ		精良 長・英・雲・赤・角	にぶい褐色				
943	河道1北岸	弥生土器	壺	7.2	-	11.9	-	内面:接合痕	ナテ	ハケメ	微砂 長・雲				
944	河道1北岸	弥生土器	壺	6.9	-	12.5	-	杯部内面:ハケメ	ナテ		長・雲				
945	河道1北岸	弥生土器	壺	8.0	-	14.5	-	内面:工具ナテ	接合痕		水こし粘土				
946	河道1北岸	弥生土器	壺	8.1	-	10.8	-	杯部内面:粘土ひも接合痕	ナテ		水こし粘土				
947	河道1北岸	弥生土器	壺	6.7	16.7	14.3	11.9	口縁部外面:縦方向	ハケメ		水こし粘土				外面黒斑
948	河道1北岸	弥生土器	壺	7.7	12.7	12.1	10.6	内面:指オサエ後ナテ	下部ヘラミガキ		水こし粘土				
949	河道1北岸	弥生土器	壺	8.2	-	15.2	-	杯部内面:シボリ	ハケメ		微砂 長・英・赤				
950	河道1北岸	弥生土器	壺	6.7	17.5	15.1	13.1	杯部内面:シボリ	ナテ		精良 長				底部穿孔1カ所
951	河道1北岸	弥生土器	壺	9.7	-	16.4	-	杯部内面:底部付近ハケメ	ナテ?		砂礫 長・英				外面残付着
952	河道1北岸	弥生土器	壺	6.5	-	11.3	-	杯部内面:シボリ	ハケメ	ナテ	精良 長・英				
953	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	5.0	10.7	8.2	8.9	杯部内面:工具ナテ			精良 長				
954	河道1北岸	弥生土器	壺	9.0	-	13.5	-	杯部内外面:押圧	ナテアゲ		水こし粘土				
955	河道1北岸	弥生土器	壺	7.7	-	14.3	-	杯部外面:ヘラミガキ			精良 長・英				
956	河道1北岸	弥生土器	壺	6.6	-	13.3	-	内面:指オサエ	ヨコナテ	ハケメ	微砂 長・英・雲・赤				
957	河道1北岸	弥生土器	壺	8.6	-	13.3	-	杯部外面:横方向ヘラミガキ			微砂				
958	河道1北岸	弥生土器	壺	12.0	23.4	16.7	16.4	杯部内面:ヨコナテ	ハケメ		水こし粘土				
959	河道1北岸	弥生土器	壺	9.5	-	13.7	-	杯部内面:ハケメ	ナテ		水こし粘土				
960	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	14.4	14.2	杯部内面:ハケメ	ナテ		水こし粘土				

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	底径						
961	河道1北岸	弥生土器	壺	8.6	-	-	口縁部外面: 縦凹線	長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			外面黒斑
962	河道1北岸	弥生土器	壺	8.2	20.1	-	杯部内面: 放射状ハケメ	水こし粘土	にぶい黄橙色			
963	河道1北岸	弥生土器	壺	10.0	21.1	15.6	脚部外面: 面取り	細砂 長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			
964	河道1北岸	弥生土器	壺	8.2	17.5	-	杯部内面: ハケメ ナデ	水こし粘土	橙色			
965	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	-	内面: 下部ナデ工具痕 ハケ ナデ	水こし粘土	明赤褐色			
966	河道1北岸	弥生土器	壺	8.1	12.3	16.5	外面: ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
967	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	14.4	底部外面: ヘラケズリ	微砂	にぶい黄橙色			
968	河道1北岸	弥生土器	壺	11.7	-	17.0	内面: シボリ 指オサエ ヨコナデ	水こし粘土	橙色			外面煤付着
969	河道1北岸	弥生土器	壺	8.5	13.8	13.5	内面: 指オサエ ハケメ ヘラミガキ	長・英	橙色			
970	河道1北岸	弥生土器	壺	-	-	13.3	外面: タタキ後ヘラケズリ後ヘラミガキ ナデ	水こし粘土	にぶい黄橙色			
971	河道1北岸	弥生土器	壺	7.6	12.1	13.2	底部外面: ヘラケズリ後同一方向ヘラミガキ	長・雲・赤	にぶい黄橙色			
972	河道1北岸	弥生土器	壺	(8.0)	13.5	15.9	体部内面: ヨコナデ	微砂 長・赤	にぶい黄橙色			完形
973	河道1北岸	弥生土器	鉢	66.0	-	61.8	体部内面: 縦・横方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			内面底に炭化痕跡
974	河道1北岸	弥生土器	鉢	47.5	-	-	外面: 横方向ハケメ 縦方向ハケメ	長・英	にぶい黄橙色			内面炭化痕跡
975	河道1北岸	弥生土器	鉢	47.5	26.7	-	底部外面: 同一方向ヘラケズリ	細砂〜砂礫 長・英	灰黄色			備後系
976	河道1北岸	弥生土器	鉢	(43.5)	-	-	口縁部内外面: ヨコナデ	長・英	にぶい黄橙色			
977	河道1北岸	弥生土器	鉢	47.8	23.0	45.6	外面: ハケメ ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	にぶい黄橙色			口縁部一部欠損
978	河道1北岸	弥生土器	鉢	36.0	22.5	32.0	底部外面: ナデ	長・英・雲	橙色			外面煤・内面炭化痕跡
979	河道1北岸	弥生土器	鉢	37.5	26.8	39.5	底部外面: 同一方向ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい黄橙色			
980	河道1北岸	弥生土器	鉢	-	-	-	体部内面: 縦・斜め方向ハケメ	微砂 長・英・雲	にぶい黄橙色			内面赤色顔料
981	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.6	14.3	21.4	体部内外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	橙色			
982	河道1北岸	弥生土器	鉢	23.1	19.6	23.7	外面: タタキ ハケメ ヘラミガキ	長・英・雲・角	橙色			
983	河道1北岸	弥生土器	鉢	24.1	14.5	21.1	内面: ヘラケズリ 横・斜め方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄橙色			
984	河道1北岸	弥生土器	鉢	35.5	23.5	35.1	底部外面: ナデ	精良 長・雲・角	黄褐色			外面煤付着
985	河道1北岸	弥生土器	鉢	28.2	15.1	27.9	体部内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	微砂 長・角・雲	浅黄色			内面炭化痕跡
986	河道1北岸	弥生土器	鉢	38.7	22.2	37.7	底部外面: ナデ	長・英	にぶい黄橙色			
987	河道1北岸	弥生土器	鉢	34.0	18.5	-	内面: 横・斜め方向ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
988	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.0	20.4	20.1	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	にぶい黄橙色			外面煤付着
989	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.8	18.6	19.4	脚部: ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			口縁部補修痕
990	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.4	20.0	20.1	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	砂礫 長・石	にぶい黄橙色			
991	河道1北岸	弥生土器	鉢	20.9	18.7	21.4	底部外面: ヨコナデ	砂礫 雲	灰黄色			
992	河道1北岸	弥生土器	鉢	32.8	18.3	32.0	底部外面: ヘラケズリ	長・英・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化痕跡
993	河道1北岸	弥生土器	鉢	32.6	18.5	-	底部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	浅黄色			内面赤色顔料
994	河道1北岸	弥生土器	鉢	39.3	17.7	-	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
995	河道1北岸	弥生土器	鉢	31.8	22.4	31.7	内面: ヘラケズリ後横・斜め方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄橙色			
996	河道1北岸	弥生土器	鉢	19.2	-	22.0	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・角	灰黄色			台部穿孔6カ所
997	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.8	17.1	16.9	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英・雲	浅黄色			
998	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.2	-	16.0	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲・角	にぶい黄橙色			
999	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.8	13.8	14.9	体部外面: タタキ ヘラミガキ	雲・角・長	灰黄色			台接合明瞭
1000	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.1	14.4	14.0	外面: 縦方向ハケメ ヨコナデ ヘラミガキ	長・英・赤・雲	灰黄色			外面煤・内面炭化痕跡
1001	河道1北岸	弥生土器	鉢	41.8	24.1	-	底部: ヘラケズリ	長・石	にぶい黄橙色			補修痕あり
1002	河道1北岸	弥生土器	鉢	33.0	21.8	-	内面: 横方向ハケメ ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
1003	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.3	10.9	14.5	(8.9) 体部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい黄橙色			
1004	河道1北岸	弥生土器	鉢	10.8	13.7	13.9	体部内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			完形
1005	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.5	11.0	12.7	内外面: 丁寧なヘラミガキ	長・英	橙色			完形
1006	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.0	8.0	-	体部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良〜砂礫 長	にぶい黄橙色			
1007	河道1北岸	弥生土器	鉢	(16.3)	10.6	-	台部: ヨコナデ	長・英・雲・赤	浅黄色			
1008	河道1北岸	弥生土器	鉢	19.0	15.5	-	底部: ナデ	微砂	にぶい黄橙色			
1009	河道1北岸	弥生土器	鉢	(45.4)	28.3	(45.8)	底部外面: ハケメ後ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			内外面黒斑
1010	河道1北岸	弥生土器	鉢	(25.5)	18.3	27.3	底面: ヘラケズリ後同一方向ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			
1011	河道1北岸	弥生土器	鉢	26.7	17.1	25.2	体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
1012	河道1北岸	弥生土器	鉢	23.7	14.2	-	底部外面: ヘラケズリ	精良〜細砂 雲・長	黄灰色			
1013	河道1北岸	弥生土器	鉢	(23.6)	13.3	-	(6.3) 体部外面: ハケメ後ヘラミガキ	英・長・雲	灰黄色			
1014	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.2	15.6	18.1	体部外面: ハケメ後ヘラミガキ	長・英	にぶい黄橙色			内面赤色顔料
1015	河道1北岸	弥生土器	鉢	27.2	16.7	-	底面: 同一方向ハケメ後ナデ	長・英	灰黄色			
1016	河道1北岸	弥生土器	鉢	25.2	14.4	23.8	底面: 同一方向ハケメ後ナデ	長・角・英	にぶい黄橙色			
1017	河道1北岸	弥生土器	鉢	24.0	13.8	-	体部外面: ヘラケズリ後ナデ	長・英	灰黄色			
1018	河道1北岸	弥生土器	鉢	21.8	11.8	20.8	(4.0) 体部内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
1019	河道1北岸	弥生土器	鉢	(19.6)	15.7	20.5	6.1 体部内外面: 不特定のハケメ	長・雲・赤	にぶい黄橙色			
1020	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.5	16.5	19.1	7.6 体部外面: 縦・横・斜め方向ハケメ	長・英・雲	にぶい黄橙色			内面炭化痕跡
1021	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.3	15.5	19.4	7.4 体部内面: ヘラミガキ?	長・英・雲	にぶい黄橙色			
1022	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.0	16.8	20.8	6.9 体部内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい黄橙色			
1023	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.0	11.8	15.9	7.0 体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			外面煤付着
1024	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.9	-	16.9	- 内面: ヘラミガキ	長・英	にぶい黄橙色			外面煤・内面炭化痕跡
1025	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.8	18.0	19.8	6.0 体部内面: ヘラケズリ後一部ナデ	細砂 長・英・雲	にぶい黄橙色			
1026	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.3	14.9	16.6	6.9 底部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・角	浅黄色			
1027	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.3	14.1	16.1	5.1 底部外面: 同一方向ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			外面煤付着
1028	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.5	-	15.4	- 内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄橙色			外面煤・光沢
1029	河道1北岸	弥生土器	鉢	(16.3)	14.0	19.0	5.6 底部外面: ヘラミガキ	微砂〜細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1030	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.2	8.7	13.1	4.1 内面: ヘラケズリ後ハケメ	微砂 赤・雲	灰黄色			外面煤付着
1031	河道1北岸	弥生土器	鉢	10.8	8.7	12.2	3.8 内外面: 丁寧なヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
1032	河道1北岸	弥生土器	甕	12.2	11.0	12.6	4.4 底部外面: ヘラケズリ	長・英・雲	淡黄色			
1033	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.8	8.6	11.9	3.5 体部外面: ヨコナデ ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
1034	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.9	7.1	12.3	2.7 底部外面: ヘラケズリ後工具ナデ	水こし粘土?	橙色			
1035	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.0	8.5	14.1	2.7 体部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	水こし粘土	にぶい黄褐色			完形
1036	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.0	6.1	12.4	4.3 底部外面: 同一方向ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1037	河道1北岸	弥生土器	鉢	10.8	7.8	9.5	2.1 底部内外面: ヘラミガキ	微砂 雲	にぶい黄褐色			
1038	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.5	10.2	16.5	5.6 外面: ハケメ後ヘラケズリ ナデ	雲・長・英	にぶい黄褐色			
1039	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.9	10.6	-	4.1 外面: ハケメ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			外面煤付着
1040	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.4	9.0	-	6.8 底部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1041	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.4	9.4	14.7	4.6 内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1042	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.3	8.5	16.1	4.6 底部外面: ヘラケズリ	長・雲	にぶい黄褐色			
1043	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.6	10.2	-	5.8 底部外面: ヘラケズリ	長・英・赤	にぶい黄褐色			
1044	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.7	10.5	15.5	5.8 底部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	橙色			
1045	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.8	-	14.7	- 外面: ヘラケズリ後ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			外面煤付着
1046	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.5	8.9	14.8	5.3 内外面: ヘラミガキ	水こし粘土?	にぶい黄褐色			
1047	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.7	7.8	-	- 内外面: 丁寧なヘラミガキ	長・赤・角	暗灰黄色			完形
1048	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.1	6.9	-	4.8 体部内面: ハケメ後ナデ	長・英	浅黄色			
1049	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.0	7.7	-	3.4 内面: ヘラケズリ ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄褐色			
1050	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.6	9.3	-	5.4 外面: ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			
1051	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.0	7.4	-	5.7 底部外面: ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			完形
1052	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.0	7.4	-	3.9 体部外面: ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
1053	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.9	7.4	-	3.8 体部外面: ヘラケズリ後ナデ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
1054	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.9	-	16.6	- 体部内面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・英	灰黄褐色			
1055	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.8	15.8	16.4	4.7 底部外面: ヘラケズリ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色			
1056	河道1北岸	弥生土器	鉢	23.4	-	24.3	- 内外面: ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	底径						
1057	河道1北岸	弥生土器	鉢	28.2	12.0	9.0	内外面:ハケメ後ヘラミガキ	雲・角	浅黄色			外面煤・内面赤色顔料
1058	河道1北岸	弥生土器	鉢	20.0	-	-	外面:横方向ハケメ 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			
1059	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.7	8.5	6.1	体部内面:工具ナデアゲ	長・赤・雲	黄灰色		完形	
1060	河道1北岸	弥生土器	鉢	(17.8)	7.1	(6.6)	内外面:ヘラミガキ	精良 長・英	褐色			外面黒斑
1061	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.4	6.2	3.3	底部:ヘラミガキ	水こし粘土	におい赤褐色			
1062	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.5	6.5	15.8 3.6	内面:ナデ	細砂 雲・長・角	灰黄褐色			外面煤付着
1063	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.0	8.6	3.8	体部外面:指オサエ後ハケメ	長・雲	灰黄褐色			外面煤付着
1064	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.9	8.6	5.0	底部外面:ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・英	灰黄褐色			外面煤付着
1065	河道1北岸	弥生土器	鉢	(17.6)	8.2	(5.2)	外面:ナデ	精良 長・雲	灰褐色			
1066	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.0	6.3	3.5	外面:ハケメ	長・英・雲	におい黄褐色			
1067	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.9	6.8	-	外面:ハケメ後ヘラミガキ	細砂 長・英・雲	におい黄色			
1068	河道1北岸	弥生土器	鉢	(16.6)	8.3	4.9	底部外面:ヘラミガキ	英・長・雲・赤	におい褐色			
1069	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.7	7.2	3.6	底部外面:一部ヘラケズリ後ハケメ	長・英	褐色			
1070	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.5	5.9	2.7	外面:ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	精良 長・英	灰黄色			
1071	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.9	5.0	3.4	底部外面:ヘラミガキ	水こし粘土	におい褐色			
1072	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.8	7.5	4.1	外面:ヘラケズリ 斜め方向ヘラミガキ	微砂 長・英・雲	褐色			完形
1073	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.1	7.2	6.1	底部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲・赤	におい黄褐色			
1074	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.2	6.9	4.6	内外面:ヘラミガキ	精良~細砂 長・赤・英	灰黄色			初庄痕
1075	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.2	7.9	3.6	内外面:横・縦方向ヘラミガキ	微砂~砂礫 長・英・赤	浅黄色			
1076	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.8	6.4	2.9	底部外面:ヘラミガキ	水こし粘土	灰黄色			
1077	河道1北岸	弥生土器	鉢	(16.0)	7.0	(4.8)	外面:ヘラミガキ	微砂 雲	におい褐色			外面煤付着
1078	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.0	7.6	4.8	外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英	赤褐色			
1079	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.7	8.8	6.0	体部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英	におい黄褐色			外面煤付着
1080	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.1	7.2	5.7	底部外面:同一方向ヘラミガキ	精良 長・雲・角	灰黄色			完形
1081	河道1北岸	弥生土器	鉢	18.2	8.2	4.6	内面:横方向ハケメ	長	褐色			
1082	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.9	6.7	17.6 -	外面:ヘラケズリ後縦方向ヘラミガキ	微砂 長・雲・赤・角	黄褐色			
1083	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.5	6.4	4.8	内面:ハケメ後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			完形
1084	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.5	7.6	5.7	外面:ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	微砂~砂礫 長・英・雲	におい黄褐色			
1085	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.8	7.0	5.8	内面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂~細砂 長・英・雲	灰白色			
1086	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.0	5.6	4.7	底部~底部:ヘラケズリ	長・英・雲	灰黄褐色			外面煤付着
1087	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.0	6.5	6.5	底部外面:ヘラミガキ	微砂 長・英	浅黄色			
1088	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.8	6.4	4.3	底部外面:ヘラミガキ	長・雲	黄褐色			
1089	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.6	6.5	4.1	底部外面:ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	褐色			完形
1090	河道1北岸	弥生土器	鉢	16.0	7.2	16.8 4.9	外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	におい褐色			赤色顔料・煤付着
1091	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.0	5.3	2.9	底部外面:ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			
1092	河道1北岸	弥生土器	鉢	10.3	6.2	10.5 3.2	内外面:ヘラミガキ	水こし粘土?	褐色			内面赤色顔料
1093	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.4	5.9	12.0 3.2	底面:工具ナデア後ヘラミガキ	長・英・雲・角	褐色			外面黒斑
1094	河道1北岸	弥生土器	鉢	17.0	8.0	17.4 4.4	体部外面:タタキ後ナデア	細砂 長・英・雲	灰黄褐色			
1095	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.7	6.9	3.1	内外面:ヘラケズリ ナデア	長・英・雲	灰黄褐色			
1096	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.0	9.2	3.7	外面:縦方向ヘラケズリ後工具ナデア	長・英	浅黄褐色			
1097	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.0	8.0	4.3	体部内面:ヨコナデ 縦方向ナデア	長・英	におい褐色			
1098	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.0	6.9	3.3	体部外面:ナデア	長・英・雲	におい黄色			
1099	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.9	-	-	体部外面:タタキ後ナデア	微砂~砂礫 雲	におい黄褐色			煤付着
1100	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.5	7.5	3.7	内外面:ナデア	長・英・雲	におい黄褐色			
1101	河道1北岸	弥生土器	鉢	10.9	8.2	10.3 2.6	底部外面:ヘラミガキ	微砂	褐色			
1102	河道1北岸	弥生土器	壺	8.0	9.9	9.2 3.1	体部外面:タタキ後ハケメ	長・英・雲	におい黄褐色			
1103	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.3	10.1	5.7	内面:縦・斜め方向ナデア	長・英・雲	褐色			
1104	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.8	7.9	4.3	内外面:ナデア	長・英・雲	灰黄色			
1105	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.1	-	-	内外面:ハケメ後ナデア	長・英・雲	淡黄色			
1106	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.2	7.6	4.5	体部内面:ハケメ後縦方向ナデア	微砂 長・英・雲	灰黄褐色			
1107	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.0	6.2	4.0	体部外面:ナデア	微砂 長・英	灰黄褐色			
1108	河道1北岸	弥生土器	鉢	14.7	7.8	5.7	内外面:ヘラケズリ	長・英	灰黄色			
1109	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.8	8.5	5.2	体部外面:ナデア	長・英	におい褐色			
1110	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.6	6.4	4.5	体部外面:ナデア	微砂 長・英	褐色			
1111	河道1北岸	弥生土器	鉢	(12.9)	6.1	(5.4)	体部外面:指オサエ後指ナデア	微砂 長	明赤褐色			台部接合明瞭
1112	河道1北岸	弥生土器	鉢	11.0	8.8	5.8	内外面:ナデア	長・英	におい黄褐色			初庄痕・外面煤付着
1113	河道1北岸	弥生土器	鉢	13.3	15.0	4.2	内面:ヘラケズリ後ハケメ ナデア	長・英・雲	におい褐色			完形
1114	河道1北岸	弥生土器	器台	20.0	-	-	口縁部外面:縦方向ハケメ後ナデア	長・英・雲	におい黄褐色			
1115	河道1北岸	弥生土器	器台	-	-	19.0	内面:横方向ヘラケズリ	細砂 長・英・雲	灰白色			補修痕跡
1116	河道1北岸	弥生土器	器台	-	-	32.6	脚縁部内面:ヘラケズリ後ハケメ	雲・赤	におい黄褐色			
1117	河道1北岸	弥生土器	器台	31.6	-	35.8	脚縁部内面:ハケメ後ナデア	精良~細砂 長・英・角	浅黄色			
1118	河道1北岸	弥生土器	器台	-	-	-	外面:ヨコナデ 鋸歯文 突帯	微砂 長・雲・赤	褐色			
1119	河道1北岸	弥生土器	器台	31.1	-	-	口縁部:鋸歯文 棒状浮文 内面:鋸歯文	微砂 長・雲	におい黄褐色			
1120	河道1北岸	弥生土器	器台	-	-	24.0	内外面:ナデア	長・英・雲	におい黄色			初痕
1121	河道1北岸	弥生土器	器台	15.0	-	-	脚部内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤	浅黄色			
1122	河道1北岸	弥生土器	器台	14.0	-	-	受部外面:鋸歯文2列	長・英・雲・赤	におい褐色			
1123	河道1北岸	弥生土器	器台	16.5	18.8	11.9	脚柱部外面:ヘラミガキ?	長・英・雲・角	褐色			
1124	河道1北岸	弥生土器	器台	14.1	11.9	15.9	内外面:丁寧なヘラミガキ	長・英	灰黄褐色			
1125	河道1北岸	弥生土器	器台	-	-	36.2	内面:指オサエ ナデア	砂礫 長・英・雲	におい褐色			
1126	河道1北岸	弥生土器	壺	(28.6)	-	-	口縁部内面:剥落	長・英・雲・角	におい褐色			
1127	河道1北岸	弥生土器	手焙	-	18.7	16.5	履帯内面:指オサエ ナデア ナデア	精良 長・赤・雲・角	浅黄色			外面黒斑
1128	河道1北岸	弥生土器	手焙	-	-	-	外面:ハケメ ヘラミガキ 内面:ハケメ	微砂 長	浅黄色			
1129	河道1北岸	弥生土器	鉢	15.6	10.7	3.2	体部外面:タタキ	砂礫	におい黄褐色			底部穿孔
1130	河道1北岸	弥生土器	瓶	13.5	9.5	4.1	内面:ナデア	長・英	褐色			
1131	河道1北岸	弥生土器	不明	-	-	-	外面:面取り ヘラ切り	長	暗灰黄色			
1132	河道1北岸	弥生土器	不明	-	-	-	内面:ハケメ及び押圧	精良 長・雲・角	黒色			
1133	河道1北岸	弥生土器	手捏ね	6.4	-	7.5	内面:ナデアゲ シボリ	長・英・雲	におい黄色			内外面煤付着
1134	河道1北岸	弥生土器	蓋	15.0	8.3	3.4	内面:ナデア ハケメ	長・英	灰黄褐色			完形
1135	河道1北岸	弥生土器	蓋	18.2	7.1	5.2	体部外面:指オサエ ナデア	長・英	におい黄褐色			外面煤付着
1136	河道1北岸	弥生土器	蓋	13.6	10.6	10.2	内外面:ヨコナデア	長・英・雲	におい黄褐色			
1137	河道1北岸	弥生土器	蓋	8.0	4.0	-	内外面:ナデア	微砂 長・英	褐色			完形
1138	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.6	9.0	7.4 3.5	底部外面:ナデア	微砂 長・英・雲・角	淡黄色			
1139	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.0	5.7	4.2 2.1	体部外面:ヘラミガキ 刺突文	長・英・雲	におい褐色			
1140	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	6.2	9.8	6.1 3.2	内面:指オサエ	長・英	淡黄色			
1141	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.5	6.8	8.9 3.7	底部外面:ヘラミガキ	長・英・雲	におい黄褐色			穿孔2か所
1142	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.1	5.8	9.5 2.7	底部外面:ヘラケズリ後ナデア	長・英・雲・赤	褐色			外面黒斑
1143	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	(4.5)	6.6	(7.1) 2.5	底部外面:面取り ナデア ヘラミガキ	長・雲・赤	におい黄色			
1144	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	10.2	7.8	10.4 4.0	底部外面:押圧 ヘラケズリ	微砂 雲	褐色			外面煤付着
1145	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.8	7.8	3.8	内面:ヘラケズリ後ナデア後一部ヘラミガキ	長・英・雲	浅黄色			内外面黒斑
1146	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	5.6	5.2	2.2	底部外面:ヘラケズリ	長・雲・赤	灰黄色			
1147	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	6.8	6.8	3.0	内面:ヘラケズリ後指オサエ後ナデア	長・英・雲	灰黄色			内面黄色粘土付着
1148	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.6	10.1	8.9 3.3	体部内面:ナデアゲ 底部外面:工具ナデア	精良 長・英・雲	灰黄色			外面黒斑
1149	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.7	9.3	8.7 3.3	底部外面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤	におい黄色			外面煤・内面炭化痕跡
1150	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.6	7.6	8.8 3.0	内面:ナデア	長・英・雲	褐色			
1151	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.5	9.2	2.0	体部外面:ナデア	長・英	褐色			
1152	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	7.0	6.7	2.8	体部内面:縦方向ナデア	長・英・雲	におい褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径						
1153	河道1北岸	弥生土器	鉢	(10.4)	5.9	—	3.9	口縁部:ヨコナデ 内部内外面:ナデ	英・長・雲	灰黄色		
1154	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	(10.0)	6.0	—	2.9	底部外面:縦方向ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		外面黒・内面炭化痕跡
1155	河道1北岸	弥生土器	鉢	12.5	5.5	—	3.1	底部外面:ナデ ヘラケズリ後ナデ	長・英・雲・赤	灰黄色		
1156	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.6	4.6	—	3.0	底部外面:ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲	褐色		外面黒斑
1157	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	8.9	3.5	—	2.5	底部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色		
1158	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	6.7	4.1	6.3	3.0	内部外面:丁寧なナデ	長・英	浅黄色		
1159	河道1北岸	弥生土器	手捏ね	—	—	5.7	4.1	内外面:指オサエ	長・雲・赤	浅黄色		
1160	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	3.2	6.4	7.5	3.2	内部:ナデアゲ 指オサエ	長・英・雲	浅黄色		
1161	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	(1.5)	(3.6)	(3.7)	—	内部外面:ナデ	微砂 長・英・雲・赤	灰黄色		外面黒斑
1162	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.9	5.5	—	1.4	外面:縦方向ナデ及び押圧	微砂 長・英・雲	浅黄色		外面黒斑
1163	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	4.2	5.5	4.7	2.0	底部:ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色		
1164	河道1北岸	弥生土器	鉢	(6.0)	5.0	—	1.3	内外面:ナデ 底部内面:指オサエ	微砂 雲・赤	にぶい褐色		
1165	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	5.5	4.5	—	1.8	内面:ヨコナデ 指オサエ	精良 長・英	にぶい褐色		
1166	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	5.5	4.4	—	2.3	内外面:手捏ね	雲・長・英	灰黄色		内面黒斑?
1167	河道1北岸	弥生土器	手捏ね	4.2	3.8	—	3.3	外面:指オサエ ナデアゲ ナデ	長・英・雲・角	にぶい黄褐色		
1168	河道1北岸	弥生土器	ミニチュア	—	—	—	7.4	胴部外面:ハケメ後ナデ後ヘラミガキ	水こし粘土・長・雲	褐色		
1169	河道1北岸	弥生土器	高杯	—	—	—	7.1	脚部外面:面取り	長・英・雲	にぶい褐色		
1170	河道1北岸	弥生土器	壺	(33.6)	—	—	—	口縁部:ヨコナデ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	灰黄色		補修痕
1171	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:ヨコナデ 縦方向ヘラミガキ 鋸歯	長・英・雲・赤	にぶい褐色		
1172	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	—	—	外面:ヨコナデ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	灰黄色		
1173	河道1北岸	弥生土器	壺	19.4	—	22.5	—	内面:ナデ	細砂 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		
1174	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	—	—	内部内面:板状工具によるナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		初混入
1175	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	36.0	—	外面:ヘラミガキ 波状文 内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤	褐色		
1176	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	29.0	—	外面:貼り付け突帯 刺突 波状文	長・英・雲・赤	灰黄色		外面黒斑
1177	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	—	—	口縁部外面:ナデ 刺突 波状文 竹管文	長・雲	にぶい黄褐色		
1178	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	口縁部外面:波状文 沈線5条 刺突	長・英・雲	にぶい黄褐色		初混入
1179	河道1北岸	弥生土器	器台	39.8	—	—	—	胴部と受部接合面水平	長・英・雲	明赤褐色		初混入
1180	河道1北岸	弥生土器	器台	43.0	—	31.5	—	口縁部内面:粘土帯 スカシ凹?	長・英・雲・赤・角	にぶい褐色		
1181	河道1北岸	弥生土器	器台	(44.6)	—	—	—	口縁部外面:ヨコナデ後縦方向ヘラミガキ 鋸歯	長・英・雲・赤・角	褐色		
1182	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	内外面:ヘラミガキ	長・英・雲	褐色		
1183	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	—	—	口縁部外面:ヨコナデ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色		外面赤色顔料
1184	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:ハケメ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	にぶい褐色		外面顔料
1185	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	32.7	—	外面:鋸刻 縦方向ヘラミガキ 内面:ナデ	砂礫 長・英・雲・角・赤	にぶい褐色		
1186	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	37.7	—	内面:工具ナデ	砂礫 長・英・雲・角	にぶい赤褐色		初混入
1187	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:縦方向ヘラミガキ 鋸歯	砂礫 長・英・雲・赤	褐色		
1188	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	内外面:ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤・角	にぶい褐色		
1189	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:波状文 縦方向ヘラミガキ 鋸歯 竹管文	細砂 長・英・雲・赤	にぶい褐色		外面黒斑
1190	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:波状文 竹管文 縦方向ヘラミガキ 内面:ナデ	長・英・雲・赤・角	にぶい褐色		
1191	河道1北岸	弥生土器	特殊器台	—	—	(34.0)	—	外面:横方向ヘラミガキ 波状文 内面:ヨコナデ 鋸歯	長・英・雲	にぶい褐色		
1192	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	—	外面:縦方向ヘラミガキ 波状文2条 竹管文	長・英・雲	黄灰色		
1193	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	30.5	—	外面:波状文 縦方向ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	褐色		初混入
1194	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	36.3	—	内面:ナデアゲ ヘラケズリ	長・英・雲	褐色		初混入
1195	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	—	49.7	タガ上面:縄書きによる多糸沈線	長・英・雲	にぶい赤褐色		
1196	河道1北岸	弥生土器	不明	—	—	—	—	外面:工具ナデ 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色		内面煤付着
1197	河道1北岸	弥生土器	器台	—	—	(34.7)	—	内面:ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	褐色		顔料
1198	河道1北岸	弥生土器	不明	—	—	—	—	内面:縦ナデ 指ナデ	長・英・雲	にぶい赤褐色		外面赤色顔料
1199	河道1北岸	弥生土器	不明	—	—	—	—	口縁部:縦方向ヘラミガキ 内面:指オサエ	長・英・雲	にぶい褐色		外面黒斑・内面煤付着
1200	河道1北岸	弥生土器	壺	28.6	—	—	—	外部外面:粘土補充痕跡	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色		
1201	河道1北岸	弥生土器	壺	—	—	—	—	内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤・角	褐色		外面赤色顔料
1202	河道1北岸	弥生土器	特殊器台	—	—	—	—	外面:鋸刻 内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤・角	明赤褐色		外面赤色顔料
1203	河道1北岸	弥生土器	特殊器台	—	—	—	—	外面:鋸刻 内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤・角	明赤褐色		外面赤色顔料
1204	河道1北岸	弥生土器	特殊器台	—	—	—	—	外面:横方向ヘラミガキ 鋸歯 内面:ヘラケズリ	長・英・雲・赤・角	明赤褐色		
1205	河道1南岸	弥生土器	壺	15.0	—	19.3	—	外面:ヘラミガキ 刺突文	精良 長・雲・角	淡黄色		鋸刻
1206	河道1南岸	弥生土器	壺	20.0	—	—	—	頸部外面:刺突	長・英・雲・赤	灰黄色		内面黒斑
1207	河道1南岸	弥生土器	壺	(19.0)	—	—	—	頸部外面:完結沈線20条	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		外面黒斑
1208	河道1南岸	弥生土器	壺	18.8	—	(23.4)	—	頸部外面:らせん状沈線	長・英・雲・赤・角	灰黄色		
1209	河道1南岸	弥生土器	壺	20.4	—	—	—	頸部外面:らせん状沈線	長・英・雲・赤・角	浅黄色		頸部外面一部に煤
1210	河道1南岸	弥生土器	壺	18.6	—	—	—	頸部外面:完結沈線30条	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		
1211	河道1南岸	弥生土器	壺	19.6	—	—	—	頸部外面:完結沈線36条	長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色		
1212	河道1南岸	弥生土器	壺	17.6	32.4	20.8	7.6	頸部外面:らせん状沈線	長・英・雲・赤・角	浅黄色		外部外面に穿孔
1213	河道1南岸	弥生土器	壺	—	—	14.1	—	外部外面:ヘラケズリ	長・英	にぶい褐色		
1214	河道1南岸	弥生土器	壺	6.4	—	—	11.1	外面:丁寧なヘラミガキ	水こし粘土	明黄褐色		
1215	河道1南岸	弥生土器	壺	8.0	11.9	10.1	11.6	脚部外面:穿孔4か所	長・英	にぶい褐色		
1216	河道1南岸	弥生土器	壺	6.1	12.2	9.6	6.6	外面:ハケメ ヘラケズリ	水こし粘土	にぶい黄褐色		完形
1217	河道1南岸	弥生土器	壺	4.8	—	12.7	—	内部内面:工具ナデ	水こし粘土	にぶい褐色		
1218	河道1南岸	弥生土器	壺	7.4	—	(14.8)	—	頸部内面:横方向ヘラミガキ ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい褐色		
1219	河道1南岸	弥生土器	壺	(8.3)	—	—	—	胴部内面:ハケメ	長・英・雲・赤	灰白色		
1220	河道1南岸	弥生土器	壺	4.7	—	—	—	内面:シボリ ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・角・赤	褐色		
1221	河道1南岸	弥生土器	壺	10.7	—	21.7	—	外部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長	浅黄褐色		
1222	河道1南岸	弥生土器	壺	20.0	—	—	—	口縁部:ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄色		
1223	河道1南岸	弥生土器	壺	19.9	—	—	—	口縁部外面:縦凹線	英・雲・角	にぶい黄色		
1224	河道1南岸	弥生土器	壺	24.9	—	—	—	口縁部外面:ヨコナデ	長・英	浅黄色		
1225	河道1南岸	弥生土器	壺	(18.0)	—	—	—	口縁部外面:縦凹線	長・英・雲・赤	にぶい褐色		
1226	河道1南岸	弥生土器	壺	17.4	—	—	—	外部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		
1227	河道1南岸	弥生土器	壺	19.4	—	—	—	口縁部外面:縦凹線	長・英・雲・赤	浅黄色		
1228	河道1南岸	弥生土器	壺	(18.6)	—	—	—	外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・角・雲	浅黄色		
1229	河道1南岸	弥生土器	壺	(23.0)	—	—	—	頸部外面:横方向ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄褐色		
1230	河道1南岸	弥生土器	壺	14.3	—	29.2	—	外部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長	浅黄色		
1231	河道1南岸	弥生土器	壺	14.6	—	(28.8)	—	外部外面:ハケメ後ヘラミガキ	英・雲・角・赤	にぶい黄褐色		
1232	河道1南岸	弥生土器	壺	18.4	—	—	—	外部外面:ハケメ	長・英・雲・角・赤	浅黄色		
1233	河道1南岸	弥生土器	壺	14.4	—	24.0	—	口縁部外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄色		
1234	河道1南岸	弥生土器	壺	15.3	—	—	—	口縁部内面:ヘラミガキ	長・雲	黄褐色		
1235	河道1南岸	弥生土器	壺	22.5	—	—	—	口縁部外面:ヨコナデ ハケメ	長・英・角	にぶい黄褐色		
1236	河道1南岸	弥生土器	壺	—	—	—	10.8	外部外面:縦方向ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		外面煤付着
1237	河道1南岸	弥生土器	壺	—	—	—	(11.6)	外部:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄色		
1238	河道1南岸	弥生土器	壺	—	—	—	12.0	外部外面:縦方向ハケメ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄色		
1239	河道1南岸	弥生土器	壺	(13.4)	—	(16.3)	—	外部内面:一部ナデ ヘラケズリ	長・英・雲	灰黄褐色		
1240	河道1南岸	弥生土器	壺	6.5	—	—	—	口縁部:ヨコナデ	長・英・赤	にぶい黄褐色		
1241	河道1南岸	弥生土器	壺	11.0	15.8	12.8	5.2	外部外面:ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい褐色		
1242	河道1南岸	弥生土器	壺	14.2	—	18.8	—	外面:粗いハケメ後細かいハケメ	長	にぶい黄褐色		
1243	河道1南岸	弥生土器	壺	13.1	—	—	—	外部内面:工具ナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色		煤付着
1244	河道1南岸	弥生土器	壺	13.4	—	—	—	胴部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		
1245	河道1南岸	弥生土器	壺	13.0	23.6	17.9	5.2	外部外面:指オサエ	長・雲	褐色		完形
1246	河道1南岸	弥生土器	壺	15.7	27.4	22.0	5.1	外部外面:指オサエ後ナデ	長・英・雲・赤	浅黄色		完形
1247	河道1南岸	弥生土器	壺	14.4	—	—	24.0	外部外面:ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄色		底部穿孔 煤付着
1248	河道1南岸	弥生土器	壺	(15.8)	—	(19.5)	—	口縁部外面:縦凹線	長・英・雲	にぶい褐色		吹きこぼれ痕 煤付着

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1249	河道1南岸	弥生土器	甕	16.2	-	(20.4)	-	口縁部外面: 凹凹線	長・英・雲・赤	にぶい赤褐色			
1250	河道1南岸	弥生土器	甕	14.2	22.8	(19.5)	(5.8)	底部外面: ナデ	水こし粘土	灰黄色			
1251	河道1南岸	弥生土器	甕	14.3	-	17.5	-	口縁部外面: ヨコナデ	長	にぶい褐色			外面煤附着
1252	河道1南岸	弥生土器	甕	-	-	-	5.4	底部外面: ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			内面煤附着
1253	河道1南岸	弥生土器	甕	-	-	-	5.6	底面: 同一方ハケメ	長・英・雲・角	にぶい黄色			底部穿孔
1254	河道1南岸	弥生土器	高杯	25.6	-	-	-	口縁部外面: 刺突文 鋸歯文 ヘラミガキ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
1255	河道1南岸	弥生土器	高杯	(32.0)	-	-	-	杯部内面: ハケメ後放射状縦方向ヘラミガキ	長・英・赤	褐色			
1256	河道1南岸	弥生土器	高杯	18.8	-	-	-	外面: ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄褐色			蓋に転用
1257	河道1南岸	弥生土器	高杯	15.8	-	-	-	脚柱部外面: 面取り後ヘラミガキ 接合痕	水こし粘土	にぶい黄褐色			
1258	河道1南岸	弥生土器	高杯	(18.3)	-	-	-	杯部外面: ヘラケズリ後ナデ後ヘラミガキ	長	にぶい褐色			
1259	河道1南岸	弥生土器	高杯	20.2	-	-	-	杯部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄褐色			
1260	河道1南岸	弥生土器	高杯	17.8	9.8	-	9.8	外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい赤褐色			
1261	河道1南岸	弥生土器	高杯	(16.3)	(9.0)	-	(10.2)	内外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			蓋に転用
1262	河道1南岸	弥生土器	高杯	23.4	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1263	河道1南岸	弥生土器	高杯	14.9	8.7	-	9.6	杯部内面: ハケメ後ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1264	河道1南岸	弥生土器	高杯	22.4	-	-	-	口縁部外面: 一部に横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1265	河道1南岸	弥生土器	高杯	19.1	-	-	-	脚柱部外面: 面取り	微砂	にぶい黄褐色			
1266	河道1南岸	弥生土器	高杯	11.8	7.5	-	10.7	口縁部外面: ヨコナデ	水こし粘土	にぶい褐色			完形
1267	河道1南岸	弥生土器	高杯	10.5	7.7	-	11.2	口縁部外面: ナデ 沈線2条	水こし粘土	褐色			
1268	河道1南岸	弥生土器	高杯	11.6	9.8	-	11.1	脚柱部外面: ハケメ 穿孔なし	水こし粘土	浅黄褐色			完形
1269	河道1南岸	弥生土器	高杯	(11.4)	8.0	-	(8.7)	脚柱部外面: ヘラミガキ 穿孔4か所	長・雲・赤	にぶい黄褐色			
1270	河道1南岸	弥生土器	高杯	9.8	7.7	9.5	10.6	内外面: ヘラミガキ	長・英	灰黄褐色			
1271	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	10.6	脚部外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			
1272	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	11.4	脚柱部外面: ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色			
1273	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	10.0	脚部: ハケメ	長・英・雲・赤・角	褐色			
1274	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	9.7	脚部外面: ヘラミガキ	長・英・赤	褐色			
1275	河道1南岸	弥生土器	高杯	12.0	-	-	-	脚柱部外面: ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1276	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	9.4	脚部内面: シボリ	長・英・角・雲・赤	にぶい褐色			
1277	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	(11.8)	脚柱部外面: ヘラミガキ	長・英・角・雲・赤	にぶい黄褐色			
1278	河道1南岸	弥生土器	高杯	-	-	-	17.2	脚柱部外面: 沈線3条	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1279	河道1南岸	弥生土器	鉢	12.4	-	-	7.9	脚部外面: 横方向ナデ	長・雲	浅黄褐色			
1280	河道1南岸	弥生土器	鉢	12.0	-	-	-	外面: ヨコナデ ナデ 粘土の接合痕	水こし粘土	褐色			
1281	河道1南岸	弥生土器	鉢	9.2	-	-	4.4	底部外面: ヘラケズリ	長・英	浅黄褐色			
1282	河道1南岸	弥生土器	鉢	9.1	-	9.0	-	底部外面: ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1283	河道1南岸	弥生土器	鉢	(11.8)	(5.3)	(11.8)	2.8	底部内面: 指オサエ及びナデ	長・英・雲・赤・角	にぶい褐色			
1284	河道1南岸	弥生土器	鉢	14.4	(7.2)	(14.5)	(5.4)	口縁部: ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1285	河道1南岸	弥生土器	鉢	9.9	22.0	19.8	4.8	口縁部外面: ヨコナデ	長・英・雲	浅黄褐色			
1286	河道1南岸	弥生土器	鉢	23.7	-	24.4	-	口縁部: ヨコナデ	長・雲	にぶい黄色			
1287	河道1南岸	弥生土器	鉢	33.6	-	32.0	-	底部外面: ハケメ(とても細かい)	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			内面煤附着
1288	河道1南岸	弥生土器	鉢	(38.0)	-	-	-	底部外面: ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい黄色			
1289	河道1南岸	弥生土器	鉢	(44.0)	21.8	(40.2)	(9.8)	底面: ヘラケズリ	長・雲・赤	にぶい黄褐色			
1290	河道1南岸	弥生土器	鉢	26.1	17.5	25.1	8.1	底部外面: 一定方向ヘラケズリ	長・英・赤	にぶい褐色			
1291	河道1南岸	弥生土器	鉢	(18.2)	9.2	(16.8)	5.0	口縁部: 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤・角	褐色			
1292	河道1南岸	弥生土器	鉢	16.0	-	18.6	-	口縁部: ヨコナデ	長・英・雲	浅黄褐色			外面煤附着
1293	河道1南岸	弥生土器	器台	10.3	-	-	-	口縁部内面: 横方向ヘラミガキ	長・英・雲	黄褐色			
1294	河道1南岸	弥生土器	器台	39.0	-	-	-	口縁部外面: ヨコナデ 鋸歯文	長・英・雲・赤・角	灰黄色			
1295	河道1南岸	弥生土器	器台	-	-	-	36.4	脚柱部外面: ハケメ後ヘラミガキ	雲・角	浅黄褐色			
1296	河道1南岸	弥生土器	器台	-	-	-	-	筒部内面: シボリ ヘラミガキ	長・英・角	にぶい黄色			
1297	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	-	14.2	(17.6)	9.4	底面: ナデ	長・雲・火山ガラスか?	褐色			
1298	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	6.0	-	10.0	-	口縁部外面: ヨコナデかヘラミガキ	長・英・雲	にぶい褐色			
1299	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	3.6	8.5	8.2	9.2	脚柱部外面: 穿孔5か所	微砂 長・英	浅黄褐色			
1300	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	3.4	-	-	6.3	外面: 横方向ハケメ後縦方向ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1301	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	2.8	4.2	3.2	1.7	底面: ナデ	精良	黒色			完形
1302	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	-	-	2.9	0.6	雲・角	雲・角	灰黄色			
1303	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	-	-	2.8	1.3	底部外面: 指オサエ及びナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1304	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	4.3	-	4.6	-	底部外面: 指オサエ	長・赤	灰白色			外面煤附着
1305	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	5.0	-	6.2	-	底部外面: タタキ	長・英・雲・角	にぶい黄色			
1306	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	8.6	8.8	7.8	3.9	底部外面: 縦方向ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			完形
1307	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	8.2	11.5	7.8	3.5	底部外面: ヘラミガキ	水こし粘土	灰白色			
1308	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	10.1	6.3	-	8.4	口縁部: ヨコナデ	微砂 赤	褐色			完形
1309	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	(2.7)	(2.8)	-	(3.6)	外面: 押圧痕 内面: 押圧痕 ナデ	微砂 長・英・雲	黄灰色			完形
1310	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	6.5	4.2	6.8	2.8	内外面: ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1311	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	5.3	3.1	4.8	2.0	底部: ナデ	長・英・雲・角	灰黄色			完形
1312	河道1南岸	弥生土器	手捏ね	5.8	4.0	-	-	外面: ナデ	精良	黒色			完形
1313	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	6.3	5.2	6.6	2.7	底部外面: ナデ	長・英・雲	浅黄色			完形
1314	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	(8.0)	6.1	9.2	3.1	外面: 指オサエ後縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	灰黄色			完形
1315	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	5.6	4.8	6.2	2.3	底部外面: ナデ	赤	灰オリーブ色			完形
1316	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	6.0	2.7	6.0	3.4	杯部外面: ヘラミガキ	長・英・雲・赤	灰黄色			
1317	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	13.9	5.0	(9.1)	4.1	底部外面: ナデ	微砂 長・英・雲・角	浅黄色			
1318	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	6.6	5.3	7.4	2.0	内外面: ヘラミガキ	精良	にぶい黄褐色			完形
1319	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	5.5	5.9	6.9	3.0	口縁部外面: ナデ	長・英・雲	浅黄色			完形
1320	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	(10.8)	-	(8.2)	-	底部外面: ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1321	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	8.0	5.5	-	3.3	底部外面: ナデ	水こし粘土	にぶい黄褐色			
1322	河道1南岸	弥生土器	ミニチュア	7.4	7.1	7.4	3.0	底部外面: ヘラミガキ	微砂 長・英・雲・角	黄灰色			完形 外面黒斑
1323	住居25	土師器	甕	13.5	-	-	-	口縁部: ハケメ後ヨコナデ	微砂 長	にぶい黄褐色			
1324	住居25	土師器	甕	17.5	-	20.0	-	底部内面: ヘラケズリ後ハケメ及びナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1325	住居25	土師器	壺	10.1	8.6	-	-	内外面: ヨコナデ	精良 長	にぶい褐色			
1326	住居25	土師器	高杯	-	-	-	13.0	脚柱部内面: シボリ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
1327	住居26	土師器	高杯	-	-	-	-	内外面: ヘラミガキ	微砂 長・英	浅黄褐色			
1328	住居26	土師器	器台	9.2	9.3	-	10.8	脚柱部外面: 縦方向ハケメ後横方向ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色			
1329	住居27	土師器	壺	4.4	5.0	5.7	-	底部外面: 指オサエ後ナデ	微砂 長・英	褐色			完形
1330	住居27	土師器	壺	8.3	8.0	7.8	-	底部外面: ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・雲・角	灰黄褐色			完形
1331	住居28	土師器	台付鉢	-	-	-	-	外面: タタキ	砂礫~細砂 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1332	住居28	土師器	台付鉢	-	-	-	5.5	外面: タタキ	砂礫~細砂 長・英	にぶい赤褐色			製塩土器
1333	住居28	土師器	台付鉢	-	-	-	5.0	外面: タタキ	砂礫~細砂 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1334	住居28	土師器	台付鉢	-	-	-	5.2	外面: タタキ	砂礫~細砂 長・英	にぶい赤褐色			製塩土器
1335	住居29	土師器	壺	9.5	5.9	-	-	底部外面: ナデ ヘラケズリ	砂礫 長・英・赤・チャート	褐色			
1336	住居29	土師器	壺	9.8	8.1	-	-	内外面: ヘラミガキ	細砂 長・英	にぶい赤褐色			
1337	住居29	土師器	甕	12.0	18.3	17.3	-	内面: ヘラケズリ 指オサエ	精良 長・英	明褐色			
1338	住居29	土師器	甕	16.8	34.0	31.2	-	内面: ヘラケズリ後指オサエ シボリ	微砂~砂礫 長・英	浅黄色			
1339	住居30	土師器	甕	15.0	-	26.2	-	底部外面: ヘラミガキ?	砂礫 長・英・雲・角	にぶい褐色			
1340	住居31	土師器	壺	11.2	7.3	8.3	-	外面: ヘラケズリによる面取り後横方向ハケメ	細砂 長・英	灰白色			
1341	住居31	土師器	壺	11.8	-	-	18.2	底部外面: 縦方向ハケメ ナデ	細砂 長・英	浅黄褐色			
1342	住居31	土師器	壺	1									

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径							底径
1345	住居33	土師器	鉢	-	-	-	外側：ヘラミガキ	長・英・雲	にぶい橙色				
1346	住居34	土師器	甕	-	-	-	外側：ヘラミガキ	水こし粘土	赤褐色				
1347	住居34	土師器	高杯	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	細砂 長・英	明赤褐色				
1348	住居34	土師器	高杯	-	-	-	外側：赤色顔料	微砂 長・英	灰白色			赤色顔料	
1349	住居34	土師器	高杯	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	精良～微砂 長・英	にぶい橙色				
1350	住居34	土師器	台付鉢	-	-	5.4	外側：指オサエ	微砂～細砂 長・英	暗灰色			製塩土器	
1351	住居34	土師器	台付鉢	-	-	5.0	外側：タタキ 指オサエ	細砂～砂礫 長・英	にぶい橙色			製塩土器	
1352	住居34	土師器	台付鉢	-	-	-	外側：タタキ	微砂 長・英	灰褐色			製塩土器	
1353	住居35	土師器	壺	-	-	-	口縁部外側：縦方向ヘラミガキ	微砂 赤	にぶい橙色				
1354	住居35	土師器	壺	-	-	-	口縁部外側：横方向ヘラミガキ	微砂 白	橙色				
1355	住居35	土師器	壺	-	-	8.6	体部内側：横方向ハケメ	微砂～細砂 雲・白・赤	にぶい黄褐色				
1356	住居35	土師器	壺	10.0	-	-	体部外側：横方向ヘラミガキ	微砂 白・赤	にぶい橙色				
1357	住居35	土師器	壺	18.8	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	褐色				
1358	住居35	土師器	甕	-	-	-	体部外側：タタキ	微砂～細砂 白	灰黄褐色				
1359	住居35	土師器	甕	-	-	-	口縁部内側：ヨコナデ	細砂 白 粗い粘土	にぶい橙色				
1360	住居35	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ハケメ	長・英	褐色				
1361	住居35	土師器	甕	15.1	-	16.0	体部内側：指オサエ ナデ	微砂 雲・白・黒	にぶい黄褐色				
1362	住居35	土師器	甕	12.5	14.5	14.3	体部内側：ナデ下半ナデ後指オサエ	微砂 黒	褐色			外面煤・吹きこぼれ痕	
1363	住居35	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色				
1364	住居35	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色				
1365	住居35	土師器	甕	-	-	-	体部外側：縦方向ハケメ	細砂 白	にぶい褐色				
1366	住居35	土師器	甕	15.2	-	-	口縁部：縄巻き沈線 ハケメ	精良～微砂	にぶい褐色				
1367	住居35	土師器	甕	13.6	-	-	口縁部：縄巻き沈線 ハケメ	微砂 白	褐色			外面煤付着	
1368	住居35	土師器	高杯	-	-	-	脚部内側：シボリ後ヨコナデ	長・英・雲	浅褐色				
1369	住居35	土師器	高杯	-	-	-	脚部内側：ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色				
1370	住居35	土師器	高杯	15.4	-	-	胴部外側：面取り 下部面取り後ハケメ後ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色				
1371	住居35	土師器	高杯	-	-	13.0	台部内外面：横方向ハケメ	長・英・雲	褐色				
1372	住居35	土師器	鉢	-	-	7.8	内外面：ヨコナデ	長・英・雲	褐色				
1373	住居35	土師器	鉢	-	-	-	口縁部外側：ヘラミガキ?	微砂 雲・白	明赤褐色				
1374	住居35	土師器	鉢	-	-	-	口縁部内外面：ナデ一部横方向ハケメ	微砂～細砂 黒	にぶい褐色				
1375	住居35	土師器	鉢	9.0	3.2	-	体部外側：指オサエ後指ナデ	微砂～細砂 白	にぶい褐色				
1376	住居35	土師器	鉢	-	-	-	内面：ナデ	長・英	にぶい褐色				
1377	住居35	土師器	鉢	-	-	-	体部外側：ヘラケズリ後ナデ?	微砂 白・黒	にぶい褐色				
1378	住居35	土師器	杯	12.8	5.1	-	体部内側：縦方向ハケメ	微砂～細砂 白・赤	にぶい褐色				
1379	住居35	土師器	鉢	15.0	5.1	-	体部外側：指オサエ後ナデ	微砂～砂礫 英・長・雲	浅黄褐色				
1380	住居35	土師器	鉢	(30.6)	-	-	外側：上半縦方向ハケメ 下半不定方向ナデ	長・英	浅黄褐色				
1381	住居35	土師器	器台	-	-	15.2	内面：横方向ハケメ	長・英・雲	褐色				
1382	住居36	土師器	壺	4.5	7.4	-	2.1 体部内外面：ヨコナデ後指オサエ	精良～細砂 雲・英・長	灰白色				
1383	住居36	土師器	甕	-	-	-	体部外側：タタキ	精良～微砂 白	にぶい黄褐色				
1384	住居36	土師器	甕	-	-	-	体部外側：縦方向ハケメ	細砂 白	にぶい褐色				
1385	住居36	土師器	高杯	-	-	-	-	微砂	褐色				
1386	住居36	土師器	鉢	-	-	-	体部内側：ヘラケズリ ヘラミガキ	微砂～細砂 白	にぶい褐色				
1387	住居36	土師器	鉢	-	-	-	外側：ヨコナデ	微砂～細砂 白	にぶい黄褐色				
1388	住居36	土師器	台付鉢	-	-	-	外側：ナデ	細砂～砂礫 赤	赤褐色			製塩土器	
1389	住居36	土師器	台付鉢	-	-	5.7	外側：指オサエ後ナデ	細砂～砂礫 白	にぶい赤褐色			製塩土器	
1390	住居37	土師器	甕	-	-	-	体部外側：ハケメ	微砂～細砂 白	褐色			外面煤付着	
1391	住居37	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良～微砂 長・雲	にぶい黄褐色				
1392	住居37	土師器	製塩土器	-	-	4.9	内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長	淡赤褐色				
1393	住居37	土師器	鉢	12.3	8.6	11.1	-	精良 長・英・雲	褐色			完形	
1394	住居37	土師器	鉢	12.5	-	-	体部外側：ヘラケズリ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色				
1395	住居37	土師器	鉢	12.7	4.6	-	体部内側：上半ナデ 下半ヘラケズリ	微砂 長・英	灰黄色				
1396	住居37	土師器	鉢	11.0	3.2	11.4	-	細砂 長・英・角・雲・赤	にぶい褐色			完形	
1397	住居37	土師器	鉢	14.0	5.4	-	体部内側：ヨコナデ	水こし粘土	褐色				
1398	住居38	土師器	甕	-	-	-	内外面：ヨコナデ	微砂～細砂	褐色				
1399	住居38	土師器	甕	-	-	-	口縁部内側：ハケメ	長・英・雲	灰白色				
1400	住居38	土師器	鉢	-	-	-	体部内外面：ヘラミガキ	微砂 雲	にぶい黄褐色				
1401	住居38	土師器	鉢	-	-	-	-	精良～微砂 白	褐色				
1402	住居38	土師器	手捏ね	6.1	5.6	-	内外面：指ナデ	微砂～細砂 白	にぶい黄褐色				
1403	住居38	土師器	手捏ね	-	-	-	内外面：不明	長・英・雲	灰白色				
1404	住居38	土師器	台付鉢	-	-	4.8	高台：指オサエ後ナデ	細砂 白	にぶい褐色			製塩土器	
1405	住居39	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色				
1406	住居39	土師器	器台	9.8	-	-	口縁部：ヘラミガキ	微砂 雲	褐色				
1407	住居39	土師器	高杯	20.7	-	-	内外面：横・斜め方向ハケメ	水こし粘土	浅黄褐色				
1408	住居42	土師器	高杯	-	-	-	-	長・英・雲	褐色				
1409	住居42	土師器	壺	-	-	-	口縁部外側：横方向ヘラミガキ	水こし粘土	褐色				
1410	住居43	土師器	壺	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 白	にぶい褐色				
1411	住居43	土師器	鉢	16.8	5.5	-	4.9 内外面：ヘラミガキ	精良～微砂 白	褐色				
1412	住居43	土師器	甕	-	-	-	口縁部外側：板状(櫛状)工具ナデ	微砂～細砂 白	にぶい褐色				
1413	住居43	土師器	鉢	-	-	-	体部外側：ナデ	微砂～細砂 白	にぶい黄褐色				
1414	住居43	土師器	鉢	-	-	-	内面：上半ナデ 下半ヘラケズリ	細砂 白	にぶい黄褐色				
1415	住居45	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	白・英・雲	にぶい黄褐色				
1416	住居45	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	白・角・赤	にぶい褐色				
1417	住居45	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ナデ	白	にぶい褐色				
1418	住居45	土師器	甕	15.3	-	-	口縁部：ナデ後ヨコナデ	白・雲	褐色				
1419	住居45	土師器	鉢	-	-	-	体部外側：ヘラケズリ後ナデ	雲・角	にぶい黄褐色				
1420	住居45	土師器	鉢	-	-	-	底部外側：ヘラケズリ?	白	浅黄褐色				
1421	住居46	土師器	鉢	-	-	-	体部外側：横方向ヘラミガキ?	微砂 砂礫	褐色				
1422	住居46	土師器	壺	(11.0)	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	灰赤色				
1423	住居46	土師器	壺	-	-	7.2	4.4 体部外側：ヘラミガキ	雲・赤	にぶい褐色				
1424	住居46	土師器	壺	(10.4)	-	-	内外面：横方向ヘラミガキ	精良	にぶい褐色				
1425	住居46	土師器	壺	10.6	7.6	5.8	-	口縁部外側：横方向ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長	褐色			
1426	住居46	土師器	壺	9.4	7.7	-	(2.0) 口縁部外側：ハケメ後ヘラミガキ	微砂～砂礫 赤	褐色				
1427	住居46	土師器	壺	(10.9)	(7.7)	-	口縁部外側：ヘラミガキ	精良 長・英・赤	褐色				
1428	住居46	土師器	壺	11.7	6.7	-	体部外側：ヘラケズリ ナデ	水こし粘土?	褐色				
1429	住居46	土師器	壺	9.6	8.0	8.0	-	体部内側：指オサエ後ナデ	微砂 長・角	褐色		完形	
1430	住居46	土師器	壺	9.6	8.6	8.3	-	体部内側：上半縦方向ハケメ	微砂 雲・赤	褐色		完形	
1431	住居46	土師器	壺	10.6	7.5	7.8	-	体部外側：縦・横・斜め方向ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1432	住居46	土師器	壺	10.1	7.6	8.0	-	体部内側：工具のヘラケズリ痕あり ナデ	細砂 長・英	淡褐色			完形
1433	住居46	土師器	ミニチュア	-	-	-	体部内側：ナデ	長・英・雲	にぶい赤褐色				
1434	住居46	土師器	手捏ね	-	-	4.0	台部外側：面取り痕後ナデ	微砂 雲	黒褐色				
1435	住居46	土師器	手捏ね	-	-	-	体部内外面：指オサエ	細砂 雲・赤	褐色				
1436	住居46	土師器	壺	13.6	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい褐色				
1437	住居46	土師器	壺	(19.2)	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色				
1438	住居46	土師器	壺	12.0	-	-	口縁部：横方向ヘラミガキ	微砂～細砂	褐色				
1439	住居46	土師器	壺	(18.9)	-	-	口縁部外側：ヨコナデ後ヘラミガキ	長・英・赤・角	にぶい黄褐色				
1440	住居46	土師器	壺	(10.4)	-	(13.3)	口縁部内側：板状工具によるナデ	長・雲・赤	にぶい黄褐色				

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1441	住居46	土師器	壺	(8.0)	—	(10.9)	—	肩部外面：ハケメ	長・英・雲	橙色			
1442	住居46	土師器	壺	9.8	9.4	11.2	—	体部：ヘラミガキ?	微砂～細砂	明褐色			
1443	住居46	土師器	甕	12.8	21.2	19.0	—	外面：櫛描き沈線 刺突	長・英	にぶい橙色			
1444	住居46	土師器	甕	(15.2)	—	23.3	—	外面：櫛描き沈線 タタキ	長・英・雲・赤	灰白色			
1445	住居46	土師器	甕	13.0	—	19.6	—	外面：櫛描き沈線 ハケメ	精良～微砂 白	にぶい橙色			
1446	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	外面：上半縦方向ハケメ	精良～微砂 白	にぶい橙色			
1447	住居46	土師器	甕	(12.2)	—	—	—	外面：櫛描き沈線 ハケメ	長・英・雲	にぶい黄橙色			
1448	住居46	土師器	甕	12.8	—	—	—	外面：櫛描き沈線 ハケメ	長・英・雲	にぶい橙色			
1449	住居46	土師器	甕	12.6	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	精良～細砂 英・長	にぶい黄橙色			
1450	住居46	土師器	甕	11.3	—	—	—	体部外面：縦方向ハケメ	細砂～砂礫 角・雲	暗褐色			
1451	住居46	土師器	甕	12.9	—	16.9	—	外面：タタキ後ハケメ 内面：ヘラケズリ後ナデ	長・英・雲	浅黄褐色			
1452	住居46	土師器	甕	(12.6)	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤・チャート	にぶい黄橙色			
1453	住居46	土師器	甕	(14.8)	—	—	—	体部外面：タタキ	長・英・雲・赤	にぶい黄橙色			
1454	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	微砂	灰黄褐色			
1455	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英・雲・赤	にぶい橙色			
1456	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 白	橙色			
1457	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部内外面：ヨコナデ?	長・英・雲	褐色			
1458	住居46	土師器	甕	13.0	—	—	—	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	明赤褐色			
1459	住居46	土師器	壺	18.9	—	—	—	口縁部外面：ヨコナデ ヘラミガキ	細砂～砂礫 白	にぶい橙色			
1460	住居46	土師器	甕	—	—	—	—	体部外面：ハケメ	長・英・雲	褐色			
1461	住居46	土師器	高杯	16.1	—	—	—	杯部外面：ナデ ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	褐色			
1462	住居46	土師器	高杯	16.6	—	—	—	杯部内外面：ヘラミガキ	精良 長・英	明赤褐色			
1463	住居46	土師器	高杯	—	—	—	—	杯部外面：縦方向ヘラミガキ	精良 英・長	褐色			
1464	住居46	土師器	高杯	16.5	—	—	—	杯部外面：ヘラケズリ	微砂～細砂 赤	褐色			
1465	住居46	土師器	高杯	15.6	—	—	—	口縁部内外面：横方向ヘラミガキ	精良 英・長	褐色			
1466	住居46	土師器	高杯	16.0	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂	にぶい橙色			
1467	住居46	土師器	高杯	(13.4)	—	—	—	口縁部内面：ハケメ後ヘラミガキ	長・英・雲・赤	浅黄褐色			
1468	住居46	土師器	高杯	16.2	—	—	—	内外面：ヘラミガキ	雲	にぶい黄褐色			
1469	住居46	土師器	高杯	12.8	—	—	—	杯部外面：ナデ後横方向ハケメ 指オサエ	微砂～細砂 長・英	浅黄褐色			
1470	住居46	土師器	高杯	16.0	—	—	—	杯部内外面：ヨコナデ後一部縦方向ハケメ	細砂～砂礫 白	赤褐色			
1471	住居46	土師器	高杯	15.3	12.5	—	10.4	脚柱部内面：シボリ	長・英・雲	褐色			
1472	住居46	土師器	高杯	—	—	—	10.7	脚柱部内面：シボリ	雲	にぶい橙色			
1473	住居46	土師器	高杯	—	—	—	12.3	脚部外面：ハケメ	精良～微砂	灰黄褐色			
1474	住居46	土師器	高杯	—	—	—	11.2	脚柱部内面：横方向ヘラケズリ	細砂 白	褐色			
1475	住居46	土師器	高杯	—	—	—	11.8	脚柱部内面：ナデ	微砂～細砂	褐色			
1476	住居46	土師器	高杯	—	—	—	—	脚柱部内面：上半ヘラケズリ 下半ヨコナデ	微砂 長・英	にぶい橙色			
1477	住居46	土師器	高杯	—	—	—	13.8	脚柱部内面：指オサエ ハケメ	精良 英・長	褐色			
1478	住居46	土師器	高杯	11.6	8.2	—	8.2	杯部外面：横方向ヘラミガキ?	微砂～細砂 白	褐色			
1479	住居46	土師器	高杯	16.3	11.7	—	10.2	杯部内面：上半ヨコナデ 下半ナデ	精良 長・英	浅褐色			
1480	住居46	土師器	高杯	—	—	—	10.6	脚部内面：斜め方向ハケメ	長・英・雲	にぶい橙色			
1481	住居46	土師器	高杯	—	—	—	9.8	脚部内面：斜め方向ハケメ	精良 長・英・雲	明褐色			
1482	住居46	土師器	器台	8.4	—	—	—	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1483	住居46	土師器	器台	—	—	—	9.0	脚柱部内外面：横方向ヘラミガキ	微砂	褐色			
1484	住居46	土師器	台付鉢	—	—	—	(4.4)	—	細砂	褐色			製塩土器
1485	住居46	土師器	台付鉢	—	—	—	—	外面：指オサエ後ナデ	細砂	褐色			製塩土器
1486	住居46	土師器	鉢	38.4	—	—	—	口縁部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
1487	住居46	土師器	鉢	39.0	—	—	—	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 白	にぶい黄褐色			
1488	住居46	土師器	鉢	15.0	4.1	—	—	体部外面：ナデ 下半指オサエ	細砂 長・英	褐色			
1489	住居46	土師器	鉢	14.6	—	—	—	体部外面：上半ナデ 下半横方向ヘラケズリ	微砂～細砂 雲・白・赤	にぶい黄褐色			
1490	住居46	土師器	鉢	13.7	4.1	—	—	体部内外面：ナデ後横方向ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1491	住居47	土師器	壺	—	—	—	16.0	外面：ハケメ	細砂～砂礫 白	褐色			外面煤付着
1492	住居48	土師器	壺	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	長・英	にぶい黄褐色			
1493	住居48	土師器	手捏ね	5.5	4.6	—	—	内外面：指オサエ	微砂 雲・赤	にぶい黄褐色			
1494	住居48	土師器	鉢	15.2	—	—	—	内面：工具による ナデ	長・英・雲	褐色			
1495	住居48	土師器	高杯	24.2	—	—	—	口縁部内外面：ハケメ後ヨコナデ	長・英・雲	にぶい橙色			
1496	住居49	土師器	甕	—	—	—	—	—	白	明赤褐色			
1497	住居49	土師器	高杯	—	—	—	—	脚柱部内面：ヘラケズリ	白	にぶい橙色			
1498	井戸1	土師器	壺	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 白	褐色			
1499	井戸1	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	細砂 白	にぶい黄褐色			
1500	井戸1	土師器	甕	—	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	細砂 白・赤	にぶい橙色			
1501	井戸1	土師器	甕	12.8	23.8	21.0	—	体部外面：指オサエ ナデ ハケメ	微砂 長・英・角	にぶい黄褐色			
1502	井戸1	土師器	甕	12.1	19.7	18.7	—	体部外面：ハケメ ナデ	砂礫～微砂 長・英・角	にぶい黄褐色			完形 外面煤・内面炭化物痕跡
1503	井戸1	土師器	甕	12.7	20.2	18.8	—	体部外面：指オサエ ナデ ハケメ	細砂 長・英・角	にぶい黄褐色			完形 外面煤付着
1504	井戸1	土師器	甕	12.9	21.4	18.8	—	体部外面：指オサエ ハケメ	細砂 長・英・角	灰白色			外面煤付着
1505	井戸1	土師器	甕	14.7	24.9	21.9	—	体部外面：ナデ ハケメ ヘラミガキ	細砂 長・英・角	灰白色			外面煤・内面炭化物痕跡
1506	井戸1	土師器	甕	12.9	20.6	19.3	—	体部外面：ナデ ハケメ	微砂 長・英・雲	にぶい橙色			外面煤付着
1507	井戸3	土師器	壺	13.9	22.5	16.3	—	体部外面：一部ハケメ後ナデ	細砂 長・英	灰黄褐色			外面煤付着
1508	井戸3	土師器	壺	10.6	—	15.6	—	体部外面：タタキ後ヘラミガキ	細砂 長・英・赤	にぶい橙色			
1509	井戸3	土師器	甕	—	—	—	—	体部外面：横方向ヘラミガキ	精良～微砂 長・赤	にぶい黄褐色			
1510	井戸3	土師器	甕	11.8	9.9	12.4	—	体部内面：ヘラミガキ後ナデ	細砂 長・英	灰白色			
1511	井戸3	土師器	甕	10.6	12.8	14.0	—	口縁部：ヨコナデ	細砂 雲・長・英	灰白色			
1512	井戸3	土師器	甕	11.8	—	—	—	外面：ハケメ	細砂～砂礫 長・英・雲	黄灰色			
1513	井戸3	土師器	甕	13.7	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1514	井戸3	土師器	甕	12.0	19.7	16.7	—	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤付着
1515	井戸3	土師器	甕	13.0	20.8	18.9	—	体部外面：縦方向ハケメ	細砂 長・英	灰褐色			外面煤付着
1516	井戸3	土師器	甕	12.8	21.5	17.9	—	体部外面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・赤	にぶい褐色			外面煤付着
1517	井戸3	土師器	甕	11.3	—	19.6	—	体部内面：ヘラケズリ後ナデ	細砂 長・雲・英	褐色			
1518	井戸3	土師器	高杯	15.2	13.7	—	11.5	脚柱部外面：ヘラケズリ後斜め方向ハケメ ナデ	微砂～細砂 長・英・雲	浅黄褐色			
1519	井戸3	土師器	高杯	15.3	15.0	—	10.8	脚柱部内面：シボリ ナデ 指オサエ	微砂 長・英	にぶい橙色			
1520	井戸4	土師器	甕	—	—	—	—	体部外面：ハケメ	長・英・赤	褐色			
1521	井戸4	土師器	甕	12.8	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	長・英・角	赤色			
1522	井戸4	土師器	鉢	9.9	—	—	—	体部内面：板状工具によるナデ	微細 雲	にぶい褐色			下半穿孔1か所
1523	井戸5	土師器	壺	(15.8)	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	明赤褐色			内外面赤色顔料
1524	井戸5	土師器	壺	19.8	—	—	—	内外面：ヨコナデ後ヘラミガキ	微砂～細砂 白	褐色			
1525	井戸5	土師器	甕	13.2	—	—	—	外面：ハケメ	微砂～細砂 白・赤・角・雲	明褐色			外面煤付着
1526	井戸5	土師器	甕	15.6	—	—	—	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
1527	井戸5	土師器	甕	19.4	—	—	—	体部外面：縦方向ハケメ 横方向ヘラミガキ	微砂 長・英・角	褐色			
1528	井戸5	土師器	甕	15.3	24.4	20.4	4.2	底部外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	にぶい黄褐色			底部に穿孔
1529	井戸5	土師器	甕	—	—	22.9	4.5	底部外面：ヘラミガキ	細砂 白・赤	にぶい橙色			外面煤付着
1530	井戸5	土師器	甕	—	—	21.0	—	体部外面：ハケメ	細砂 角・長・英	にぶい橙色			外面煤・内面炭化物痕跡
1531	井戸5	土師器	高杯	18.5	—	—	—	内外面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 長・英	褐色			
1532	井戸5	土師器	高杯	20.0	—	—	—	内面：ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	褐色			
1533	井戸5	土師器	高杯	—	—	—	—	口縁部外面：ヨコナデ後一部横方向ヘラミガキ	微砂 雲・白	黒褐色			
1534	井戸5	土師器	高杯	—	—	—	8.1	脚柱部内面：ヘラケズリ後一部ナデ	雲・長・角	褐色			
15													

遺物観察表

掲載番号	遺物種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径						
1537	井戸5	土師器	高杯	-	-	15.2	脚柱部外面：縦方向ナデ	精良 赤・長・英	橙色			
1538	井戸5	土師器	鉢	11.5	6.3	3.7	内部内面：ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	英・長・雲	にぶい橙色			
1539	井戸5	土師器	鉢	-	-	-	内外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 白	橙色			
1540	井戸5	土師器	鉢	13.2	7.4	5.0	内部：下半ヘラケズリ	精良～細砂 長	橙色			
1541	井戸5	土師器	鉢	20.0	16.3	(5.3)	底部：ヘラケズリ後ナデ 何らかの圧痕あり	細砂	にぶい黄褐色			外面煤付着
1542	土壇61	土師器	甕	-	-	22.3	内部外面：ハケメ	白・赤	橙色			外面煤付着
1543	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	5.0	外面：タタキ	微砂～細砂 長・英	にぶい赤色			製塩土器
1544	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	4.2	外面：タタキ	細砂 英	にぶい橙色			製塩土器
1545	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	4.8	外面：タタキ	細砂～砂礫 長・英	橙色			製塩土器
1546	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	3.4	内外面：指オサエ	微砂～細砂 長	赤色			製塩土器
1547	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	4.6	内外面：指オサエ	微砂～細砂 長・英	明赤褐色			製塩土器
1548	土壇62	土師器	台付鉢	-	-	3.9	内外面：指オサエ	細砂 長	明赤褐色			製塩土器
1549	土壇63	土師器	壺	20.0	-	-	内外面：横方向ヘラミガキ	雲	明赤褐色			
1550	土壇66	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい黄褐色			
1551	土壇66	土師器	高杯	-	-	-	脚柱部内外面：ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1552	土壇66	土師器	台付鉢	-	-	3.9	脚柱部内外面：指オサエ	砂礫 長・英	明赤褐色			製塩土器
1553	土壇67	土師器	壺	9.8	-	-	口縁部内面：ヨコナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
1554	土壇67	土師器	台付鉢	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	橙色			製塩土器
1555	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	-	内面：ハケ状工具によるナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい黄褐色			製塩土器
1556	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	-	内面：ナデ	微砂～細砂 長・英・雲	灰黄褐色			製塩土器
1557	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	-	内面：ナデ	精良～微砂 長・英	褐色			製塩土器
1558	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	-	内面：ナデ	細砂 長・英	灰白色			製塩土器
1559	土壇68	土師器	台付鉢	11.0	-	-	内面：指オサエ ナデ	微砂～細砂 長・英	黒褐色			製塩土器
1560	土壇68	土師器	台付鉢	13.0	-	-	内部外面：タタキ	長・英・雲	褐色			製塩土器
1561	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	外面：タタキ	長・英・角	褐色			製塩土器
1562	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.1	外面：タタキ 指オサエ	長・英・角・雲	にぶい橙色			製塩土器
1563	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.3	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	褐色			製塩土器
1564	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.0	脚部外面：指オサエ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1565	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	脚部外面：指オサエ	細砂～砂礫 長・英	褐色			製塩土器
1566	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	4.7	脚部外面：指オサエ後ナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1567	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.3	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい赤褐色			製塩土器
1568	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.5	内面：ナデ	長・英・角	赤褐色			製塩土器
1569	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.5	脚部外面：指オサエ	長・英	にぶい褐色			製塩土器
1570	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	内面：ナデ	長・英	にぶい褐色			製塩土器
1571	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.5	内面：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	淡赤褐色			製塩土器
1572	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.0	内面：ナデ	長・英	にぶい赤褐色			製塩土器
1573	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	4.5	内面：ナデ	長・英・雲	にぶい赤褐色			製塩土器
1574	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	内面：ナデ	細砂 長・英	赤褐色			製塩土器
1575	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	脚部外面：指オサエ	細砂～砂礫 長・英	赤褐色			製塩土器
1576	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.0	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	浅黄褐色			製塩土器
1577	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	外面：指オサエ タタキ	細砂～砂礫 長・英	褐色			製塩土器
1578	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.0	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1579	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.4	外面：タタキ	細砂 長・英・白	淡褐色			製塩土器
1580	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	脚部外面：指オサエ ナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1581	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	4.7	脚部外面：指オサエ	細砂 長・英	浅黄褐色			製塩土器
1582	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.5	脚部内外面：指オサエ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1583	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.6	外面：指オサエ	長・英・雲	にぶい赤褐色			製塩土器
1584	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.5	内面：ナデ	長・英	赤褐色			製塩土器
1585	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.3	脚部外面：指オサエ	長・英・角	にぶい赤褐色			製塩土器
1586	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.1	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい赤褐色			製塩土器
1587	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.2	内面：指オサエ後ナデ	細砂～砂礫 長・英	赤色			製塩土器
1588	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.4	内面：ナデ	細砂～砂礫 長・英	明赤褐色			製塩土器
1589	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.4	内面：横方向ハケメ	細砂～砂礫 長・英	褐色			製塩土器
1590	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	(5.2)	外面：指オサエ	細砂 長・英	にぶい褐色			製塩土器
1591	土壇68	土師器	台付鉢	-	-	5.4	外面：ナデ	細砂～砂礫 白	褐色			製塩土器
1592	土壇71	土師器	壺	10.9	7.2	-	口縁部：ヨコナデ	精良 長・英・雲・角	褐色			
1593	土壇71	土師器	ミニチュア	7.9	7.3	8.2	内部外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 赤・雲・角	にぶい黄褐色			
1594	土壇71	土師器	鉢	14.8	-	14.9	内外面：ヨコナデ 指オサエ	微砂～細砂 英・赤・雲・長	にぶい褐色			
1595	土壇74	土師器	甕	16.6	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 白	にぶい褐色			
1596	土壇74	土師器	甕	-	-	-	内部外面：タタキ ナデ	細砂～細砂 白	にぶい黄褐色			
1597	土壇74	土師器	高杯	18.0	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 赤	褐色			
1598	土壇74	土師器	高杯	19.8	-	-	内外面：ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1599	土壇74	土師器	高杯	-	-	-	内面：ヘラケズリ	水こし粘土	褐色			
1600	土壇74	土師器	高杯	-	-	-	外面：ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1601	土壇74	土師器	鉢	15.0	4.9	4.3	内外面：ヨコナデ	細砂 白・黒	褐色			
1602	土壇74	土師器	鉢	-	-	6.5	外面：タタキ 指オサエ	細砂～砂礫 白	にぶい褐色			
1603	土壇75	土師器	高杯	-	-	-	脚部内外面：不明 脚部：穿孔あり	微砂	褐色			
1604	土壇76	土師器	壺	9.6	-	-	口縁部外面：ヘラミガキ	水こし粘土	褐色			
1605	土壇77	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい褐色			
1606	土壇77	土師器	甕	-	-	-	内部内面：指オサエ ハケメ	白・英・雲	浅黄褐色			
1607	土壇77	土師器	高杯	-	-	16.2	脚部内面：ハケメ	水こし粘土?	灰黄褐色			
1608	土壇77	土師器	高杯	-	-	-	-	雲・英・長	にぶい褐色			
1609	土壇77	土師器	手捏ね	3.1	2.9	-	内外面：指オサエ	白・英	にぶい黄褐色			
1610	貝塚5	土師器	甕	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	精良～微砂 長	にぶい赤褐色			
1611	貝塚5	土師器	台付鉢	-	-	3.5	脚部：押圧 ヘラケズリ	微砂～砂礫 英・長	灰褐色			製塩土器
1612	住居50	土師器	甕	8.4	-	-	-	微砂～細砂 白	褐色			
1613	住居50	土師器	壺	-	-	-	外面：縦方向ハケメ	砂礫 白	にぶい褐色			
1614	住居51	土師器	甕	12.8	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・英	褐色			
1615	住居51	土師器	甕	16.0	-	-	口縁部内面：ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1616	住居51	土師器	高杯	-	-	14.0	脚柱部内外面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1617	住居51	土師器	高杯	-	-	15.8	脚部外面：ハケメ ナデ	細砂 長・英	褐色			
1618	住居51	土師器	甕	13.6	-	-	内部外面：ヨコナデ後ナデ 内外面：ナデ	微砂～砂礫 長・雲	褐色			
1619	住居52	土師器	壺	9.3	9.0	9.8	内部内面：指ナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色			
1620	住居52	土師器	高杯	-	-	12.2	穿孔3か所?	長・英・角・雲	褐色			
1621	住居53	須恵器	杯蓋	11.8	5.1	-	天井部：ヨコナデ ヘラケズリ	細砂～砂礫 長・英	青灰色	良好	完形	
1622	住居53	土師器	鉢	11.6	5.4	-	-	水こし粘土	褐色			
1623	住居54	土師器	壺	11.0	-	15.0	内部内面：ナデ	砂礫 長・英	にぶい褐色			
1624	住居55	土師器	甕	-	-	-	内面：ナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1625	住居55	土師器	高杯	15.0	-	-	杯部外面：縦方向ハケメ	砂礫 長・英・雲	浅黄褐色			
1626	住居55	土師器	甕	(22.0)	-	-	内部内面：ハケメ ナデアゲ	細砂～砂礫 長・英	にぶい褐色			
1627	住居56	土師器	甕	-	-	21.6	外面：ハケメ	砂礫 白	にぶい褐色			外面煤付着
1628	住居56	土師器	壺	8.2	8.4	-	内部外面：ナデ	細砂 白	褐色			
1629	住居56	土師器	高杯	-	-	-	内面：ナデ一部ヘラケズリ	微砂 白	灰白色			
1630	住居56	土師器	高杯	22.6	-	-	外面：上半ヨコナデ 下半ナデ	細砂	にぶい黄褐色			
1631	住居57	須恵器	杯蓋	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 雲	灰色	良好		
1632	住居57	須恵器	杯蓋	12.4	-	-	内部外面：上半ケズリ 下半ヨコナデ	微砂～細砂	灰白色	良好		

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	成存状況	備考
				口径	器高	最大径						
1633	住居57	須恵器	高杯	-	-	-	脚部内外面：透かし	微砂	灰色	良好		
1634	住居58	土師器	甕	8.8	10.4	9.5	体部内面：ナデ? 肩部：指オサエ?	砂礫 長・英	褐色		完形	体腔上部に穿孔1か所
1635	住居58	土師器	甕	15.2	-	-	体部内面：シボリ後ナデ	長・英・雲	褐色			
1636	住居58	土師器	高杯	19.0	-	-	内面：ヘラミガキ	木こし粘土	褐色			
1637	住居58	土師器	高杯	14.6	-	-		長・英・雲	におい黄褐色			
1638	住居58	土師器	高杯	14.8	-	-		長・英・雲	褐色			
1639	住居58	土師器	高杯	15.9	-	-	外面：ナデ	白	褐色			
1640	住居58	土師器	高杯	13.0	-	-	脚部内面：ヘラケズリ	黒・赤	褐色			
1641	住居58	土師器	高杯	-	-	10.6	脚柱部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	浅黄褐色			
1642	住居58	土師器	高杯	-	-	10.1	脚柱部内面：シボリ	微砂 雲	褐色			
1643	住居58	土師器	高杯	-	-	-	脚柱部内面：ヘラケズリ	白	褐色			
1644	住居58	土師器	鉢	9.5	6.2	-	内外面：押圧	白	褐色			
1645	住居59	須恵器	杯蓋	10.4	3.3	10.6	外面：ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 英	灰色	良好		
1646	住居59	須恵器	高杯	-	-	9.9	外面：ヨコナデ 透かし孔	微砂～細砂 長	灰白色	良好		
1647	住居59	須恵器	壺	-	-	-	内外面：ヨコナデ?	細砂～砂礫 長・英	灰色	良好		
1648	住居59	土師器	甕	14.6	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ ハケメ	微砂～砂礫 長・英・雲・角	におい黄褐色			
1649	住居60	須恵器	杯蓋	-	-	-	内外面：ヨコナデ	白	灰白色	良好		
1650	住居60	須恵器	杯身	10.3	4.8	5.4	内面：仕上げナデ	精良～微砂	灰色	良好	完形	ヘラ記号
1651	住居60	須恵器	高杯	-	-	(9.4)	脚部内面：ヨコナデ 透かし孔あり	微砂	灰色	良好		
1652	住居60	須恵器	高杯	9.3	-	-	杯部外面：ヨコナデ ヘラケズリ	微砂～細砂 長・英	灰白色	良好		
1653	住居60	須恵器	高杯	11.2	7.4	8.0	杯部内面：当て具痕後ナデ	白	灰白色	良好		
1654	住居60	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ナデ	白	褐色			
1655	住居60	土師器	甕	-	-	-	体部外面：ハケメ	白	褐色			
1656	住居60	土師器	製塩土器	-	-	-	体部外面：タタキ	長・英	褐色			
1657	住居60	土師器	鉢	11.6	5.1	-	体部外面：上半ナデ 下半指オサエ	白・雲	褐色			
1658	住居61	須恵器	杯蓋	-	-	-	体部：上半ヘラケズリ 下半ヨコナデ	微砂	灰色	良好		
1659	住居61	須恵器	杯身	-	-	-	体部外面：ヘラケズリ	赤	灰白色	良好		
1660	住居61	須恵器	杯身	-	-	-	体部：下約1/2ヘラケズリ	微砂 長・雲	灰色	良好		
1661	住居61	土師器	壺	-	-	-	外面：ヘラミガキ	長・英・雲	におい黄褐色			線刻土器
1662	住居61	土師器	甕	(22.0)	-	-	体部外面：板状工具による縦方向ナデ	長・英・雲	灰褐色			
1663	住居61	土師器	ミニチュア	7.3	-	-	内面：ヘラケズリ後ハケメ	微砂 雲	褐灰色			
1664	住居61	土師器	甕	-	-	-	体部外面：縦・横・斜め方向ハケメ	長・英・雲	灰黄色			
1665	住居61	土師器	甕	-	-	-	指オサエ及びナデ	長・英・雲・角	褐色			
1666	住居62	土師器	甕	(13.0)	-	-	口縁部：ヨコナデ	雲・長	におい黄褐色			
1667	住居63	土師器	壺	-	-	-	内面：ナデ ヘラケズリ	微砂～細砂 長・角・雲	におい黄褐色	良好		
1668	住居63	土師器	壺	9.9	-	-	外面：ハケメ ナデ	細砂 英・赤・長・雲・角	におい褐色	良好		
1669	住居63	土師器	壺	8.4	9.4	8.5	外面：ハケメ	微砂～砂礫 長・英・赤・雲・角	におい褐色	良好	完形	
1670	住居63	土師器	甕	16.2	-	-		長・英・雲	におい赤褐色			
1671	住居63	土師器	甕	15.5	-	-	口縁部：ヨコナデ ハケメ	砂礫 英・長・雲・角・赤	灰黄褐色	良好		
1672	住居63	土師器	甕	13.1	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英・雲・角	におい黄褐色	良好		
1673	住居63	土師器	高杯	-	-	-	脚柱部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	におい褐色			
1674	住居63	土師器	高杯	-	-	-	脚柱部内面：ヘラケズリ	長・英・雲・赤	におい褐色	良好		
1675	住居63	土師器	高杯	-	-	(15.8)	脚蓋部：ヨコナデ?	微砂～細砂 長・英・雲・角	におい黄褐色	良好		
1676	住居65	土師器	甕	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	白	におい黄褐色			
1677	住居65	須恵器	壺	-	-	18.6	体部内面：ヨコナデ 下部当て具痕	精良	黄灰色	良好		
1678	住居66	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	白・赤	におい褐色			
1679	住居66	土師器	高杯	-	-	-	体部外面：ナデ	白・赤	褐色			
1680	住居67	土師器	壺	-	-	-	内外面：ヨコナデ	長・英・雲	におい褐色			
1681	住居67	土師器	甕	(12.2)	-	-	内外面：ナデ	雲	灰褐色			
1682	住居67	土師器	甕	17.4	18.0	-	体部外面：ナデ	長・英・雲	褐色			
1683	住居67	土師器	壺	10.6	-	-	体部外面：縦方向ハケメ後ヨコナデ	微砂～細砂 長・英・角	淡赤褐色			
1684	住居67	土師器	高杯	14.6	-	-	杯部外面：縦方向ハケメ	砂礫 長・英・角	におい褐色			
1685	住居67	土師器	高杯	15.3	-	-	杯部外面：ナデ 指オサエ ヨコナデ	砂礫 英・角	褐色			
1686	住居68	須恵器	杯蓋	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂	灰色	良好		
1687	住居68	須恵器	杯蓋	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂	灰色	良好		
1688	住居68	須恵器	杯蓋	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ	白	灰白色	不良		
1689	住居68	須恵器	杯蓋	14.8	-	-	外面：上半ヘラケズリ 下半ヨコナデ 自然釉	白	灰色	良好		
1690	住居68	須恵器	杯蓋	13.0	4.7	-	天井部外面：上半ヘラケズリ 下半ヨコナデ	長・英	灰白色	不良		
1691	住居68	須恵器	杯蓋	13.8	4.9	-	天井部：ヘラケズリ	微砂 白	灰色	良好		
1692	住居68	須恵器	杯身	-	-	-	内外面：ヨコナデ	微砂～細砂	灰色	良好		
1693	住居68	須恵器	杯身	10.2	4.9	-	外面：上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	白	灰色	良好		
1694	住居68	須恵器	杯身	10.3	5.1	-	外面：上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	細砂 白	灰色	良好		
1695	住居68	須恵器	杯身	13.0	5.0	-	外面：上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	微砂～細砂	灰白色	良好		
1696	住居68	須恵器	杯身	12.0	-	-	外面：上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	微砂～細砂 白	灰色	良好		
1697	住居68	須恵器	杯身	11.8	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂	灰色	良好		
1698	住居68	須恵器	甕	19.6	-	-	外面：タタキ後カキメ	微砂～細砂 赤・黒	灰白色	良好		甕部外面にヘラ記号
1699	住居68	土師器	甕	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	におい褐色			外面煤付着
1700	住居68	土師器	甕	-	-	-	内外面：ナデ	白	褐色			
1701	住居68	土師器	甕	-	-	-	口縁部内外面：ナデ?	微砂 赤	におい褐色			
1702	住居68	土師器	高杯	-	-	-	脚蓋部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	におい褐色			
1703	住居68	土師器	甕	-	-	-	指オサエ	微砂 白	におい褐色			
1704	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：タタキ 内面：ナデ	長・英・雲	灰黄褐色			製塩土器
1705	住居68	土師器	鉢	7.7	-	-	体部外面：タタキ ハケメ	微砂～細砂 白	浅黄褐色			製塩土器
1706	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：タタキ	白	褐色			製塩土器
1707	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：タタキ	微砂～細砂 白	灰黄褐色			製塩土器
1708	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部内面：指オサエ ナデ	微砂～細砂 白・赤	におい褐色			製塩土器
1709	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：横方向タタキ	微砂～細砂 白	赤褐色			製塩土器
1710	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：タタキ	細砂 白	におい褐色			製塩土器
1711	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：タタキ	微砂～細砂 白	灰褐色			製塩土器
1712	住居68	土師器	鉢	-	-	-	外面：上半板状工具によるナデ下半不明	細砂	灰白色			
1713	住居68	土師器	鉢	-	-	-	口縁部外面：タタキ	微砂～細砂 赤	灰白色			製塩土器
1714	住居68	土師器	鉢	-	-	-	体部外面：上半タタキ	精良～微砂 白・赤・雲	におい黄褐色			製塩土器
1715	住居69	土師器	甕	12.5	25.1	22.8	口縁部内外面：ハケメ	白	褐色			外面煤付着
1716	住居69	土師器	鉢	13.5	3.8	4.7		微砂～細砂 長・英・赤	褐色			
1717	住居70	土師器	甕	9.4	9.8	11.0	体部外面：不明	長・英・雲	におい黄褐色			
1718	住居70	土師器	鉢	14.6	5.0	-	体部内面：ヘラミガキ?	長・英・雲	におい褐色			
1719	井戸6	土師器	壺	8.8	8.7	9.3	体部内面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・角	におい黄褐色			
1720	井戸6	土師器	手捏ケ	5.8	4.9	-	内外面：指オサエ ナデ	微砂～細砂 長・英	におい黄褐色			
1721	井戸6	土師器	甕	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	細砂 角	におい黄褐色			生駒西麓
1722	井戸6	土師器	甕	18.1	-	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲	褐色			
1723	井戸6	土師器	甕	12.8	21.8	19.1	外面：ハケメ(2種類のハケ使用)	砂礫 長・英・雲・角	におい黄褐色			外面・内面炭化物痕跡
1724	井戸6	土師器	甕	15.6	-	-	体部外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 長・英	におい黄褐色			外面煤付着
1725	井戸6	土師器	高杯	-	-	11.3	脚柱部外面：ナデ	微砂 長・英	におい黄褐色			
1726	井戸6	土師器	高杯	-	-	10.4	脚蓋部外面：ナデ	長・英・雲	におい黄褐色			
1727	井戸6	土師器	高杯	16.1	-	-	杯部外面：ハケメ ヨコナデ	砂礫～微砂 長・英・雲・赤	におい褐色			
1728	井戸7	土師器	壺	8.1	8.4	9.5	体部内面：ナデ	微砂 長・英・雲	におい黄褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	保存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1729	井戸7	土師器	壺	8.1	7.8	8.0	-	体部内面：ヘラケズリ後ナデ	微砂 長・英	にぶい黄色			下半に穿孔1か所
1730	井戸7	土師器	壺	7.6	8.7	9.2	-	体部外面：ヘラケズリ後一部ナデ	精良～微砂 長・英	にぶい黄褐色			外面煤附着
1731	井戸7	土師器	壺	9.8	-	-	-	内面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色	完形		
1732	井戸7	土師器	甕	11.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい橙色			外面煤附着
1733	井戸7	土師器	甕	14.4	-	-	-	口縁部外面：ハケメ後ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい橙色			外面煤附着
1734	井戸7	土師器	甕	14.7	24.6	24.2	-	体部外面：ハケメ	細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤附着
1735	井戸7	土師器	高杯	13.6	-	-	-	体部外面：指オサエ後ナデ	長・英・雲	灰黄色			外面煤附着
1736	井戸7	土師器	高杯	16.8	-	-	-	杯部内外面：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲	灰黄色			
1737	井戸7	土師器	高杯	18.0	-	-	-	杯部外面：ヨコナデ 指オサエ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			
1738	井戸7	土師器	高杯	19.1	-	-	-	脚柱部内面：ヘラケズリ	微砂 長・英	褐色			
1739	井戸7	土師器	高杯	17.5	11.3	-	11.2	杯部内外面：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			外面煤附着
1740	井戸7	土師器	高杯	-	-	-	12.6	脚柱部内外面：ヘラケズリ	微砂 長・英	にぶい橙色			
1741	井戸7	土師器	高杯	-	-	-	-	脚柱部内面：ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい橙色			
1742	井戸7	土師器	高杯	-	-	-	14.2	脚柱部内面：ヘラケズリ ハケメ	細砂 長・英	褐色			
1743	井戸7	土師器	鉢	14.0	8.8	-	5.6	内面：ハケメ後工具ナデ	砂礫 長・英	にぶい橙色			外面煤附着
1744	井戸8	土師器	壺	8.2	-	10.4	-	-	細砂 長・英	褐色			
1745	井戸8	土師器	壺	11.0	-	-	-	体部外面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	褐色			
1746	井戸8	土師器	ミニチュア	5.4	-	-	-	体部内面：ナデ	微砂 長・英	黒褐色			
1747	井戸8	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	褐色			
1748	井戸8	土師器	甕	-	-	-	-	内外面：ハケメ	細砂 長・英・赤	灰黄褐色			
1749	井戸8	土師器	甕	13.8	21.5	19.5	-	体部内面：ヘラケズリ 指オサエ ナデ	長・角	灰白色	完形		
1750	井戸8	土師器	甕	9.6	-	10.2	-	体部外面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	にぶい橙色			
1751	井戸8	土師器	甕	12.0	-	-	-	口縁部内面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	にぶい橙色			
1752	井戸8	土師器	甕	12.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良～細砂 長・赤・英	にぶい黄褐色			
1753	井戸8	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	微砂 長・英	褐色			
1754	井戸8	土師器	甕	12.5	22.1	21.0	-	体部内面：ヘラケズリ 指オサエ	細砂 長・英	浅黄褐色			外面煤附着
1755	井戸8	土師器	甕	15.8	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	にぶい橙色			
1756	井戸8	土師器	甕	15.6	-	21.0	-	体部外面：縦・横・斜め方向ハケメ	細砂～砂礫 長・英・雲	にぶい褐色			外面煤附着
1757	井戸8	土師器	甕	14.7	-	24.5	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1758	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英・赤	にぶい橙色			
1759	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい橙色			
1760	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	-	内外面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	灰黄褐色			
1761	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 縦方向ハケメ後ナデ	微砂～砂礫 長・英	にぶい橙色			
1762	井戸8	土師器	高杯	16.0	-	-	-	内外面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	明褐色			
1763	井戸8	土師器	高杯	16.7	-	-	-	内外面：ハケメ	細砂 長・英・黒	にぶい黄褐色			
1764	井戸8	土師器	高杯	15.8	-	-	-	内外面：ハケメ	微砂 長・英	にぶい橙色			
1765	井戸8	土師器	高杯	18.0	-	-	-	口縁部外面：ハケメ	細砂～砂礫 長・英・赤	にぶい橙色			
1766	井戸8	土師器	高杯	17.2	-	-	-	内外面：ハケメ	細砂～砂礫 長・英	にぶい橙色			
1767	井戸8	土師器	高杯	24.5	-	-	-	口縁部：ハケメ後ナデ	精良～細砂 長	褐色			
1768	井戸8	土師器	高杯	20.4	-	-	-	内外面：ハケメ	細砂 長・英	褐色			
1769	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	11.7	内面：ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい橙色			輪郭口に転用
1770	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	-	-	精良～細砂 長・英	褐色			
1771	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	13.4	脚柱部内面：ヘラケズリ	精良～細砂 長・英	褐色			
1772	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	12.0	脚柱部内面：シボリ ヘラケズリ	長・英・雲	褐色			
1773	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	12.0	脚柱部内面：横方向ヘラケズリ	精良～砂礫 長	褐色			
1774	井戸8	土師器	高杯	17.5	10.9	-	10.0	口縁部内外面：ヨコナデ	細砂 長・英	浅黄褐色			
1775	井戸8	土師器	高杯	-	-	-	8.8	内外面：ヨコナデ	精良～砂礫 長・赤・英	褐色			
1776	井戸8	土師器	手捏ね	3.7	3.1	-	-	内外面：指オサエ	微砂 長・英	明赤褐色			
1777	井戸8	土師器	鉢	-	-	-	10.0	体部外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 長・英	褐色			
1778	井戸9	土師器	壺	12.6	24.1	25.7	-	口縁部：ヨコナデ	英	灰白色			
1779	井戸9	土師器	壺	13.6	22.0	21.0	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	黒色	完形		
1780	井戸9	土師器	壺	17.6	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・英・雲	浅黄褐色			
1781	井戸9	土師器	甕	14.8	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい橙色			
1782	井戸9	土師器	甕	13.2	-	-	-	口縁部外面：ハケメ	微砂～砂礫 長・英・雲	明黄褐色			
1783	井戸9	土師器	甕	15.5	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	精良～砂礫 長	褐色			
1784	井戸9	土師器	甕	13.0	-	-	-	体部外面：ハケメ ヨコナデ	微砂～細砂 長・英・雲	にぶい橙色			外面煤附着
1785	井戸9	土師器	高杯	17.8	-	-	-	杯部外面：ハケメ後ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1786	井戸9	土師器	高杯	16.0	-	-	-	口縁部：ハケメ後ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1787	井戸9	土師器	高杯	22.4	13.6	-	13.8	杯部内外面：ヨコナデ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1788	井戸9	土師器	高杯	20.2	13.7	-	15.8	杯部外面：ヨコナデ	長・英・雲	褐色			
1789	井戸9	土師器	高杯	-	-	-	-	脚柱部内面：シボリ ヘラケズリ	細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1790	井戸9	土師器	高杯	-	-	-	15.3	脚柱部内面：ヘラケズリ	精良～細砂 長	褐色			
1791	井戸9	土師器	高杯	-	-	-	14.3	脚柱部外面：ヨコナデ	精良～砂礫 長	褐色			
1792	井戸9	土師器	高杯	-	-	-	12.0	脚柱部外面：ハケメ	微砂～細砂 長・英	にぶい黄褐色			
1793	土壘81	土師器	高杯	11.8	-	-	-	内面：ヨコナデ ナデ	細砂 長・英	褐色			
1794	溝37	須恵器	杯身	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	微砂 白	灰白色	良好		
1795	溝37	須恵器	杯身	-	-	-	-	外面：ヨコナデ カキメ	微砂 白	灰色	良好		
1796	溝37	須恵器	甕	-	-	-	-	外面：タタキ 内面：ハケメ	微砂 白	灰色	良好		
1797	溝37	須恵器	甕	-	-	-	-	外面：タタキ	微砂 白	灰色	良好		
1798	溝37	須恵器	高杯	-	-	-	12.0	脚柱部内面：ヘラケズリ	微砂を多く含む 英	褐色	良好		
1799	溝37	土師器	杯身	13.0	4.1	-	9.0	底部外面：ヘラ切り	微砂 白	にぶい黄褐色			
1800	たわみ1	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	つまみ部：ヨコナデ	微砂 白	灰色	良好		
1801	たわみ1	須恵器	杯蓋	12.8	-	-	-	外面：ヨコナデ ヘラケズリ	砂礫 雲	灰色	良好		
1802	たわみ1	須恵器	壺	-	-	-	-	口縁部外面：ナデ後被状文	微砂 白・雲	灰白色	良好		
1803	たわみ1	須恵器	高杯	-	-	-	9.6	内外面：ヨコナデ	微砂 雲	灰黄色	良好		
1804	土器溜まり1	土師器	壺	9.0	13.4	12.6	-	外面：ヘラケズリ ナデ ミガキ	微砂 長・英・角	褐灰色			
1805	土器溜まり1	土師器	壺	11.8	16.2	14.1	-	体部内面：指オサエ 指ナデ	砂礫 長・英	にぶい橙色			
1806	土器溜まり1	土師器	壺	10.2	-	17.6	-	内面：押圧及びナデアゲ ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1807	土器溜まり1	土師器	壺	11.0	7.0	8.9	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1808	土器溜まり1	土師器	壺	10.6	6.7	8.5	-	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲・赤・角	褐色			外面煤附着
1809	土器溜まり1	土師器	壺	10.6	7.5	6.8	-	内面：ヘラケズリ後ナデか？	長・英・雲	灰黄色			
1810	土器溜まり1	土師器	壺	12.0	7.8	8.3	-	体部内面：ヘラケズリ	長・英・雲	浅黄褐色			
1811	土器溜まり1	土師器	壺	6.9	7.2	8.2	-	内面：ナデか？	長・英・雲	灰黄色			
1812	土器溜まり1	土師器	壺	7.7	7.2	7.9	-	内面：ナデ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1813	土器溜まり1	土師器	壺	8.7	8.1	8.7	-	外面：横方向ヘラミガキ ヘラケズリ及びナデ	微砂～細砂 長・赤・角	明赤褐色			
1814	土器溜まり1	土師器	壺	8.5	7.1	7.1	-	外面：指オサエ 下半ヘラケズリ及びナデ	砂礫 長・英・雲	灰白色	完形		
1815	土器溜まり1	土師器	壺	9.6	8.3	8.0	-	外面：工具によるナデ 少し面をもつ	微砂～細砂 長・英	にぶい黄褐色	完形		
1816	土器溜まり1	土師器	壺	9.8	8.0	7.3	-	外面：ヨコナデ	微砂	浅黄褐色			
1817	土器溜まり1	土師器	壺	9.4	8.0	8.5	-	体部内面：ヘラケズリ及びナデ	砂礫 長・英	にぶい橙色	完形		
1818	土器溜まり1	土師器	壺	8.1	-	7.9	-	体部外面：ハケメ後ヨコナデ	精良 長・赤	にぶい橙色			
1819	土器溜まり1	土師器	壺	10.0	9.3	9.3	-	体部内面：ナデ ヘラケズリ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色			
1820	土器溜まり1	土師器	壺	8.9	8.6	9.1	-	体部内面：ナデ	水こし粘土	赤褐色	完形		
1821	土器溜まり1	土師器	壺	11.0	9.9	9.1	-	体部外面：ハケメ後ヨコナデ ヘラケズリ	精良～微砂 長・英・角	浅黄色	完形		
1822	土器溜まり1	土師器	壺	9.1	7.7	7.5	-	内面：ナデ	砂礫 長・英・雲・角	褐色			
1823	土器溜まり1	土師器	壺	8.8	8.0	7.6	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲	にぶい黄褐色	完形		
1824	土器溜まり1	土師器	壺	7.7	8.0	8.6	-	体部内面：縦方向ハケ工具によるナデ	微砂～細砂 長・英・角	灰白色	完形		

遺物観察表

掲載番号	遺物種類	種類	器種	量尺 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	保存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1825	土器溜まり1	土師器	壺	9.8	-	9.2	-		長・英・雲・角	にぶい橙色			
1826	土器溜まり1	土師器	壺	8.4	8.7	7.8	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲	橙色			
1827	土器溜まり1	土師器	壺	8.4	9.0	8.4	-		長・英・雲・角	浅黄褐色			
1828	土器溜まり1	土師器	壺	7.8	9.1	8.8	-	体部外面：指オサエ? ナデ ハケメ	砂礫 長・英	にぶい橙色		完形	
1829	土器溜まり1	土師器	壺	7.5	8.9	8.4	-		長・英	浅黄褐色			
1830	土器溜まり1	土師器	壺	8.1	8.4	8.9	-	体部内面：指オサエ及びナデ ヘラケズリ	微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色		完形	
1831	土器溜まり1	土師器	壺	8.9	9.0	9.4	-	内面：工具による横・斜め方向ナデ	微砂 長・英・角	灰白色			
1832	土器溜まり1	土師器	壺	7.6	7.3	8.3	-	外面：工具によるヘラケズリ	細砂 長・英・雲	灰黄色			
1833	土器溜まり1	土師器	壺	7.5	8.0	8.1	-	体部内面：指オサエ及びナデ?	細砂 長・英	にぶい黄褐色		完形	
1834	土器溜まり1	土師器	壺	7.2	7.2	7.9	-	体部内外面：指オサエ ナデ	砂礫 長・英	にぶい黄褐色			
1835	土器溜まり1	土師器	壺	6.2	6.2	7.7	-	体部内外面：指オサエ	微砂 長・英・角	にぶい黄褐色			
1836	土器溜まり1	土師器	壺	7.8	6.8	7.5	-	体部内面：指オサエ後横方向ナデ	微砂 長・英・角・雲	にぶい黄褐色		完形	
1837	土器溜まり1	土師器	壺	7.2	6.0	6.5	-	体部外面：指オサエ後ハケメ	細砂 長・英	灰白色			
1838	土器溜まり1	土師器	壺	7.7	6.2	-	-	体部外面：指オサエ 内面：ナデ	砂礫 長・英	にぶい黄褐色		完形	
1839	土器溜まり1	土師器	壺	5.5	7.9	7.5	-	外面：指ナデ 指オサエ後ナデ ハケメ	精良 長・英	灰黄色		完形	
1840	土器溜まり1	土師器	鉢	10.0	7.4	-	-	内面：ナデアゲ 押圧 ハケメ	微砂～砂礫 長・英	褐色			
1841	土器溜まり1	土師器	壺	10.2	11.6	11.4	-	体部外面：縦方向ハケメ	砂礫 長・英・角・雲	浅黄褐色		完形	底部葉脈の繊刻
1842	土器溜まり1	土師器	壺	12.6	-	15.2	-	口縁部外面：縦方向ヘラミガキ	長・英・雲・角	灰白色			山陰系
1843	土器溜まり1	土師器	壺	13.2	14.5	15.3	-	外面：指オサエ及び丁寧なナデ ハケメ	微砂 長・英	にぶい黄褐色			
1844	土器溜まり1	土師器	甕	(14.4)	14.7	(14.9)	-	体部外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	微砂 白・雲	褐色			
1845	土器溜まり1	土師器	甕	12.8	14.3	13.8	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1846	土器溜まり1	土師器	甕	12.9	18.7	16.0	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		完形	
1847	土器溜まり1	土師器	甕	11.6	17.5	(16.9)	-	体部外面：ハケメ	微砂 長・英・角	浅黄褐色			
1848	土器溜まり1	土師器	甕	13.7	20.0	18.3	-	体部外面：ハケメ	微砂 長	浅黄褐色			
1849	土器溜まり1	土師器	甕	(16.0)	-	-	-	体部外面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1850	土器溜まり1	土師器	甕	13.8	-	21.1	-	体部外面：ハケメ ナデ	微砂 英・角・雲	褐色			
1851	土器溜まり1	土師器	甕	15	-	(22.0)	-	体部外面：ハケメ	細砂 長・英	浅黄褐色			
1852	土器溜まり1	土師器	甕	(14.4)	23.2	21.6	-	体部外面：ハケメ	長・赤・英・雲	にぶい黄褐色			
1853	土器溜まり1	土師器	甕	14.2	-	(22.3)	-	体部外面：ハケメ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1854	土器溜まり1	土師器	高杯	(14.1)	10.8	-	9.9	脚柱部外面：面取り痕	長・英・赤	にぶい褐色			
1855	土器溜まり1	土師器	高杯	15.5	12.8	-	10.4	脚柱部：穿孔1か所	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい褐色		完形	
1856	土器溜まり1	土師器	高杯	14.4	11.8	-	10.7	脚柱部内面：ヘラケズリ	長・英・赤	浅黄褐色		完形	
1857	土器溜まり1	土師器	高杯	16.6	12.2	-	12.0	脚柱部外面：ヘラケズリ	微砂 雲・長	明黄褐色			
1858	土器溜まり1	土師器	高杯	17.0	14.6	-	13.0	杯部外面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1859	土器溜まり1	土師器	高杯	(17.3)	14.5	-	12.3	杯部外面：ヨコナデ ヘラケズリ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1860	土器溜まり1	土師器	高杯	15.7	14.0	-	11.3	脚柱部内面：ヘラケズリ	長・英・赤	明赤褐色			
1861	土器溜まり1	土師器	高杯	(14.8)	(12.4)	-	(5.6)	外面：ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	細砂 長・英・雲・角	浅黄褐色			
1862	土器溜まり1	土師器	高杯	(15.2)	11.7	-	10.6	杯脚部外面：ハケメ	精良 長・英・赤	明赤褐色			
1863	土器溜まり1	土師器	鉢	15.2	7.1	15.5	(3.7)	体部外面：ヘラケズリ ナデ	長・英・雲・角・赤	にぶい黄褐色			
1864	土器溜まり1	土師器	手捏ね	4.5	5.2	4.1	-	体部外面：指オサエ	微砂 長・雲	褐灰色			
1865	土器溜まり1	土師器	手捏ね	5.6	5.4	5.3	-	体部外面：指オサエ 内面：指ナデ	微砂 長・英・雲・角	にぶい褐色			
1866	土器溜まり1	土師器	手捏ね	5.8	6.2	-	4.9	脚部外面：指オサエ 面取り	微砂 長・英・赤・角	灰黄色			
1867	土器溜まり1	土師器	手捏ね	5.0	5.0	5.5	-	脚部外面：指オサエ 面取り	微砂 長・英・角・雲	浅黄褐色		完形	
1868	土器溜まり1	土師器	手捏ね	4.0	2.9	4.1	-	体部内外面：指オサエ ナデ	微砂 長・英	にぶい褐色			
1869	土器溜まり1	土師器	手捏ね	6.2	3.2	4.6	-	体部外面：指オサエ	微砂 長・英・角	灰白色		完形	
1870	土器溜まり1	土師器	手捏ね	5.9	3.7	4.5	-	体部内外面：指オサエ ナデ	精良 長・英・赤・角・雲	にぶい黄褐色		完形	
1871	土器溜まり1	土師器	手捏ね	5.2	4.3	4.3	3.0	体部：指オサエ ナデ	微砂 長・英・雲・角	褐灰色		完形	
1872	土器溜まり1	土師器	手捏ね	(5.2)	3.1	4.7	3.0	体部：指オサエ	長・英・雲・赤	にぶい褐色			
1873	土器溜まり1	土師器	手捏ね	7.6	4.2	7.9	-	体部：指オサエ ナデ	微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色		完形	
1874	河道1	土師器	壺	9.0	6.1	-	2.0	体部内外面：横方向ヘラミガキ	微砂 長・英	赤褐色			赤色顔料
1875	河道1	土師器	壺	7.9	7.5	9.6	-	体部外面：ヘラケズリ後横方向ヘラミガキ	長・英・雲・赤	褐色		完形	
1876	河道1	土師器	壺	7.0	7.6	8.4	-	体部外面：面取り後ハケメ	微砂～細砂 雲	浅黄褐色			
1877	河道1	土師器	壺	9.5	6.1	7.8	-	体部外面：ヘラケズリ	水こし粘土	にぶい褐色			
1878	河道1	土師器	壺	14.4	6.1	8.6	-	体部内面：ハケメ後丁寧なナデ	長・英・雲	褐色			
1879	河道1	土師器	壺	11.3	-	9.6	-	体部との接合部：指オサエ	微砂 長・英・雲・赤	褐色			
1880	河道1	土師器	壺	6.2	7.0	8.0	-	底部外面：指オサエ ナデ	細砂 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1881	河道1	土師器	壺	8.5	7.8	8.8	-	体部外面：ハケメ	微砂 長・英・赤・角・雲	明褐灰色		完形	
1882	河道1	土師器	壺	9.6	7.3	8.5	3.9	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい褐色			底部煤付着
1883	河道1	土師器	鉢	10.6	7.0	9.6	2.5	体部外面：ナデ	細砂 長・英・角	黄褐色			
1884	河道1	土師器	壺	7.5	6.4	7.5	-	底部：条痕	微砂 長・英・角・雲	にぶい黄褐色		完形	
1885	河道1	土師器	壺	7.5	6.1	6.9	-	体部外面：指オサエ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1886	河道1	土師器	壺	(6.0)	6.6	6.5	3.4	体部外面：ナデ タタキ	長・英・赤	にぶい黄褐色			
1887	河道1	土師器	壺	(10.2)	9.0	7.5	4.4	底部：ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面黒斑
1888	河道1	土師器	壺	(9.9)	10.8	8.5	3.4	内外面：ナデ?	長・英・雲・赤	灰黄色			外面黒斑及び煤付着
1889	河道1	土師器	壺	16.0	-	-	-	頸部内面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1890	河道1	土師器	壺	16.4	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 火山ガラス・長・英・雲・角	灰黄色			赤色顔料
1891	河道1	土師器	壺	16.4	-	-	-		微砂 長・英・雲	褐色			赤色顔料
1892	河道1	土師器	壺	20.6	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 沈線	微砂 長・英	褐色			赤色顔料
1893	河道1	土師器	壺	12.4	18.2	17.5	-	内面上半：ヘラケズリ 下半：指オサエ	微砂 長・英	浅黄褐色			
1894	河道1	土師器	壺	(14.8)	-	-	-	外面上半：横・斜め方向ハケメ	長・英・雲・角	浅黄色			
1895	河道1	土師器	壺	14.6	-	-	-	外面：ハケメ	微砂 長・英	褐色			
1896	河道1	土師器	壺	19.8	35.3	28.9	5.5	内面：ヘラケズリ 指オサエ ナデ	細砂 長・英・雲・赤	灰黄褐色		完形	
1897	河道1	土師器	壺	21.0	42.5	39.5	8.2	体部内面：ナデ 底部外面：タタキ	長・英・雲・赤	褐色			
1898	河道1	土師器	壺	18.8	-	26.4	-	体部内面：ハケメ ナデ	微砂～細砂 英・赤	褐色			
1899	河道1	土師器	甕	14.0	23.0	20.4	-	口縁部外面：ヨコナデ 襷描き沈線	長・英・雲・角・赤	灰黄褐色			
1900	河道1	土師器	甕	12.7	18.1	17.5	-	外面：襷描き沈線 ハケメ	微砂 長・英	灰黄色			
1901	河道1	土師器	甕	14.7	20.1	-	0.7	体部外面：タタキ	砂礫 長・英	褐色			
1902	河道1	土師器	甕	13.0	18.3	-	-	体部外面：タタキ後ナデ	微砂～砂礫 長・英・雲	暗灰黄色			
1903	河道1	土師器	甕	18.0	(34.4)	30.6	-	体部内面：シボリ後指オサエ ヘラケズリ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面煤付着
1904	河道1	土師器	甕	15.1	30.4	26.2	-	口縁部：ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・赤	浅黄褐色			
1905	河道1	土師器	高杯	22.3	-	-	-	口縁部内外面：ナデ	細砂 長・英	褐色			
1906	河道1	土師器	高杯	(20.5)	14.0	-	(14.8)	口縁部内外面：ハケメ後ヘラミガキ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1907	河道1	土師器	高杯	18.6	14.3	-	12.8	外面：ハケメ 面取り	細砂～微砂 長・英	淡褐色			
1908	河道1	土師器	高杯	17.8	12.8	-	(11.7)	脚柱部：ヘラケズリ	砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1909	河道1	土師器	高杯	17.9	12.0	-	13.8	脚柱部：ヘラケズリ	微砂 長・雲	浅黄褐色			
1910	河道1	土師器	高杯	13.9	12.0	-	(10.5)	体部外面：ナデ	長・英・赤・雲	浅黄褐色			
1911	河道1	土師器	高杯	(14.4)	12.3	-	(10.6)	口縁部内外面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			
1912	河道1	土師器	高杯	-	-	-	13.8	体部外面：ハケメ	長・英・雲	にぶい黄褐色			
1913	河道1	土師器	鉢	16.0	6.5	-	(2.8)	外面：ヘラケズリ 内面：ハケメ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		完形	外面煤付着
1914	河道1	土師器	鉢	24.2	-	22.6	-	口縁部：ヨコナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			内面炭化物? 痕跡
1915	河道1	土師器	鉢	(36.8)	-	-	-	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	長・英・赤	褐色			
1916	河道1	土師器	鉢	35.0	22.0	(33.1)	-	体部外面：ハケメ後ナデ	長・英・雲・赤	にぶい黄褐色			外面黒斑
1917	河道1	土師器	鉢	12.6	-	-	-	体部外面：タタキ	微砂 角	にぶい褐色			製塩土器
1918	河道1	土師器	鼓形器台	17.4	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ ヘラミガキ	長・雲・英・角	にぶい黄褐色			
1919	河道1	土師器	鼓形器台	28.4	-	-	-	口縁部内面：ヘラケズリ後ハケメ後ヘラミガキ	細砂 長・英	褐色			外面赤色顔料
1920	河道1	土師器	甕	29.2	-	-	-	口縁部：ヨコナデ 外面：ハケメ後タタキ	細砂 雲	にぶい黄褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1921	住居71	須恵器	杯身	-	-	-	-	体部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	砂礫 長・英	灰白色	不良		
1922	住居71	土師器	鉢	-	-	-	-	口縁部外面:ナデ	細砂~砂礫 長・英	灰褐色			製塩土器
1923	住居71	土師器	鉢	-	-	-	-	口縁部外面:ナデ	細砂 長・英	におい黄橙色			製塩土器
1924	住居73	須恵器	杯蓋	15.8	-	-	-	体部外面:ヘラケズリ ヨコナデ	細砂	灰色	良好		
1925	住居73	須恵器	杯身	13.3	-	-	-	杯部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	細砂	灰色	良好		
1926	住居73	須恵器	杯身	11.6	-	-	-	外面:上半ナデ 下半ヘラケズリ	精良 長・英	灰色	良好		
1927	住居73	須恵器	杯身	11.8	-	-	-	内外面:ヨコナデ	微砂	灰色	良好		
1928	住居73	須恵器	高杯	-	-	-	-	外面:波状文	精良	灰色	良好		
1929	住居73	土師器	高杯	-	-	-	13.0	脚縁部外面:横方向ヘラミガキ	長・英・雲	灰黄色			
1930	住居75	須恵器	杯蓋	15.1	5.0	-	-	天井部外面:ヘラケズリ ナデ	細砂~砂礫 長・英	灰白色	良好	完形	
1931	住居75	須恵器	杯蓋	15.0	4.8	-	-	天井部外面:上半ヘラケズリ ヨコナデ	細砂 長・英	灰色	良好		
1932	住居75	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	細砂	灰色	良好		
1933	住居75	須恵器	杯身	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	細砂	灰色	良好		
1934	住居75	須恵器	杯身	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	細砂	灰白色	良好		
1935	住居75	須恵器	杯身	13.4	5.4	-	-	杯部外面:ヘラケズリ	砂礫 長・英	灰白色	良好	完形	
1936	住居75	土師器	甕	20.4	-	24.9	-	体部内面:ヘラケズリ後ナデアゲ	細砂 白	におい橙色			
1937	住居75	土師器	甕	-	-	-	-	体部内面:指ナデ	英・角・雲	褐色			
1938	住居75	土師器	高杯	11.8	-	-	-	不明	長・雲	橙色			
1939	住居75	土師器	鉢	11.4	7.0	-	3.8	内面:ヘラケズリ後一部ナデ	長・角・雲	におい橙色			
1940	住居75	土師器	甕	-	-	-	-	体部内面:ヘラケズリ	白	浅黄褐色			
1941	住居75	土師器	鉢	17.2	16.7	-	-	体部内外面:指オサエ	長・英・雲	灰褐色			製塩土器
1942	住居77	須恵器	杯蓋	14.7	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	微砂 長	灰色	良好		
1943	住居77	須恵器	杯蓋	15.3	-	-	-	口縁部内面:ヨコナデ	精良 長	灰色	良好		
1944	住居77	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	精良	灰色	良好		
1945	住居77	土師器	甕	-	-	10.5	-	体部外面:タタキ ナデ	細砂 長・英・雲・赤	におい黄橙色			
1946	住居77	土師器	甕	18.0	-	-	-	体部内面:ナデ	細砂 白	におい黄褐色			外面煤付着
1947	住居77	土師器	甕	-	-	-	(11.4)	内面:ヘラケズリ	微砂 長・英・角・雲・赤	灰黄褐色			
1948	住居78	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	内外面:ナデ	精良 長・英	灰色	良好		
1949	住居78	須恵器	杯身	-	-	-	-	内外面:ナデ	精良 長・英	灰色	良好		
1950	住居78	須恵器	杯身	12.8	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	微砂 長・英	灰色	良好		
1951	住居78	須恵器	杯身	12.8	3.9	-	-	外面:ナデ ヨコナデ ヘラケズリ	細砂~砂礫 長・英	灰色	良好		
1952	住居78	土師器	甕	14.0	-	-	-	口縁部内面:横方向ハケメ	精良~微砂 白・角・雲	褐色			
1953	住居80	須恵器	杯蓋	14.8	-	-	-	内外面:ヨコナデ	英	灰色	良好		
1954	住居80	須恵器	杯身	12.4	4.9	-	3.0	内面:ナデ 仕上げナデ	微砂	灰色	良好		
1955	住居80	須恵器	壺	-	-	-	-	体部内面:ヨコナデ	白	灰白色	良好		
1956	住居80	須恵器	甕	-	-	-	-	内面:当て具痕	微砂	灰色	良好		
1957	住居80	土師器	甕	22.8	-	-	-	体部外面:一部工具ナデ	長・英・雲	におい橙色			
1958	住居83	須恵器	杯蓋	11.8	-	-	-	内外面:ナデ	微砂 白	灰色	良好		
1959	住居83	須恵器	杯蓋	10.8	-	-	-	体部内外面:ヨコナデ	微砂	灰色	良好		
1960	住居83	須恵器	杯蓋	10.6	-	-	-	天井部:ヘラケズリ	微砂	灰色	良好		
1961	住居83	須恵器	杯身	12.5	5.0	-	2.8	体部外面上半:ヨコナデ 下半:ヘラケズリ	微砂 白	灰白色	良好		
1962	住居83	須恵器	甕	-	-	-	-	内面:当て具痕	微砂	灰色	良好		
1963	住居83	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	英・雲	褐色			
1964	住居83	土師器	甕	-	-	-	-	内外面:ナデ	雲	黄灰色			
1965	住居83	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部内面:ハケメ	白	褐色			
1966	住居83	土師器	甕	-	-	-	-	外面:ハケメ	英・雲	褐色			
1967	土壌85	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	微砂 雲	灰色	良好		
1968	土壌88	須恵器	甕	-	-	15.2	-	外面:タタキ 内面:当て具痕	精良 長・角	灰色	良好		
1969	土壌90	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	体部内面:仕上げナデ	精良~微砂	灰色	良好		
1970	土壌90	須恵器	杯身	-	-	-	-	内外面:ヨコナデ	微砂	灰色	良好		
1971	土壌91	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	体部外面:上半ヘラケズリ 下半ヨコナデ	長・英・雲	灰色	良好		
1972	溝38	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ	長・英	灰色	良好		
1973	溝38	須恵器	甕	-	-	-	-	外面:タタキ	長・英	灰色	良好		
1974	配置土器	須恵器	杯蓋	15.3	3.4	-	-	外面:ヘラケズリ 内面:当て具痕	砂礫 長・英	灰色	良好		
1975	配置土器	須恵器	杯身	13.0	4.8	-	-	体部外面上半:ヨコナデ	砂礫 長・英・雲・黒	灰色	良好		
1976	配置土器	須恵器	杯身	11.5	4.7	-	-	体部内面:仕上げナデ	細砂 長・黒	灰色	良好		
1977	配置土器	須恵器	杯身	12.4	4.8	-	-	体部外面上半:ヨコナデ 下半:ヘラケズリ	砂礫 長・英	灰白色	良好		
1978	配置土器	須恵器	杯身	12.5	4.1	-	-	体部外面上半:ヨコナデ 下半:ヘラケズリ	細砂 長・英	灰白色	良好		
1979	河道2	土師器	壺	8.2	-	8.2	-	体部内面:ケズリ ヘラミガキ	長・英・雲・角	におい黄褐色			
1980	河道2	土師器	壺	7.9	9.3	9.1	-	体部内面:ヘラケズリ後ナデ	長・英・角・雲	におい黄褐色			完形
1981	河道2	土師器	壺	17.0	-	-	-	口縁部:ハケメ	細砂 長・英	におい褐色			
1982	河道2	土師器	壺	24.4	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	精良~細砂 長	黄褐色			
1983	河道2	土師器	壺	18.7	-	-	-	体部内面:ナデ	微砂 長・英・雲	におい黄褐色			
1984	河道2	土師器	甕	11.9	-	-	-	口縁部外面:櫛掻き沈線	長・英	黒色			
1985	河道2	土師器	甕	14.2	-	-	-	口縁部外面:櫛掻き沈線	長・英	浅黄褐色			
1986	河道2	土師器	甕	16.8	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂 角	灰黄色			生駒西麓
1987	河道2	土師器	甕	15.8	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	長・雲	褐色			外面煤付着
1988	河道2	土師器	甕	12.7	-	-	-	外面:ハケメ	長・黒	黒色			外面煤付着
1989	河道2	土師器	甕	14.7	-	-	-	口縁部内外面:ヨコナデ	微砂~砂礫 長・黒	浅黄褐色			
1990	河道2	土師器	高杯	20.0	-	-	-	口縁部内外面:ハケメ後ナデ	微砂 長・英	灰黄色			
1991	河道2	土師器	高杯	-	-	-	11.0	脚柱部内面:シボリ 指オサエ	水こし粘土	褐色			
1992	河道2	土師器	器台	-	-	-	12.5	杯部内外面:ヘラミガキ	長・英	赤色			
1993	河道2	土師器	手焙	-	-	18.0	9.8	内面:指オサエ ナデアゲ	微砂 長・英	浅黄色			
1994	河道2	土師器	鉢	-	-	-	-	口縁部外面:指オサエ後ナデ	微砂 角・長	褐色			製塩土器
1995	河道2	須恵器	杯蓋	(11.9)	-	-	-	内外面:ヨコナデ ヘラケズリ	細砂	灰色	良好		
1996	河道2	須恵器	杯身	9.5	4.0	-	-	外面:ヘラケズリ	砂礫 雲	灰色	良好	完形	
1997	河道2	須恵器	杯身	10.0	5.0	-	-	底外部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 長・英	灰色	良好		
1998	河道2	須恵器	杯身	10.0	4.5	-	-	外面:ヘラケズリ	細砂 長	灰色	良好		
1999	河道2	須恵器	高杯	12.0	4.4	-	-	体部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	細砂 長・英	褐色	良好		
2000	河道2	須恵器	高杯	10.6	9.4	-	8.4	杯部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 長・英	黄灰色	良好		
2001	河道2	須恵器	高杯	10.0	-	-	-	杯部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	長	灰色	良好		
2002	河道2	須恵器	高杯	10.0	7.6	-	8.7	杯部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 雲	灰色	良好		
2003	河道2	須恵器	高杯	11.1	6.4	-	8.0	底外部外面:ヘラケズリ	微細~細砂	灰色	良好		
2004	河道2	須恵器	高杯	-	-	-	7.0	杯部外面:ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 長	黒色	良好		
2005	河道2	須恵器	高杯	-	-	-	9.4	頸部外面:ヘラケズリ	細砂~砂礫 長・英	灰色	良好		
2006	河道2	須恵器	高杯	13.4	-	-	-	杯部外面:ヘラケズリ	細砂 長	灰色	良好		
2007	河道2	須恵器	壺	14.6	-	-	-	内外面:ヨコナデ	細砂 長・英	灰白色	良好		
2008	河道2	土師器	甕	13.8	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ	精良~砂礫 長・英・雲・角	におい黄褐色			
2009	河道2	土師器	甕	(14.9)	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ ハケメ	精良~砂礫 長・角	灰黄色			
2010	河道2	土師器	甕	18.0	-	-	-	体部外面:ハケメ	長・英・雲	におい褐色			外面煤付着
2011	河道2	土師器	甕	16.0	-	23.8	-	内面:ヘラズリ後ハケメ	長・英・雲・角	黒褐色			
2012	河道2	土師器	高杯	19.6	-	-	-	内外面:ハケメ後縦方向ヘラミガキ	精良~微砂 長・英	におい褐色			外面煤付着
2013	河道2	土師器	高杯	15.6	-	-	-	内外面:ヨコナデ	精良 長・英	褐色			
2014	河道2	土師器	高杯	14.8	-	-	-	内面:ヨコナデ	細砂~砂礫 雲・長・英	におい黄褐色			
2015	河道2	土師器	高杯	17.0	-	-	-	口縁部内外面:ハケメ	長・英・角・雲	におい黄褐色			
2016	河道2	土師器	高杯	-	-	-	9.9	脚柱部内面:ヘラケズリ	精良~微砂 長・英・雲	褐色			

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	底径						
2017	河道2	土師器	高杯	-	-	-	10.1	脚部外面：ナデ	精良～微砂 長・角・雲	橙色		
2018	河道2	土師器	高杯	-	-	-	10.4	脚柱部内面：ヘラケズリ後ナデ	微砂～砂礫 長・英	にぶい橙色		
2019	河道2	土師器	高杯	-	-	-	12.8	脚柱部外面：面取りナデ	精良 長・雲	にぶい橙色		
2020	河道2	土師器	手捏ね	5.0	5.0	5.3	-	内面：ナデ	精良～微砂 長・英	灰白色		
2021	河道2	土師器	手捏ね	6.5	7.0	-	2.2	体部内面：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	黄灰色		
2022	河道2	土師器	手捏ね	4.8	2.9	-	3.5	内外面：指オサエ	微砂 長・英	にぶい橙色		完形
2023	河道2	土師器	手捏ね	5.0	3.7	-	-	口縁部外面：ヘラケズリ後ナデ	長・英・雲・角	にぶい橙色		完形
2024	河道2	土師器	手捏ね	8.0	3.2	-	3.9	内面：工具ナデ	精良 角	にぶい黄褐色		
2025	河道2	土師器	手捏ね	10.1	4.6	-	-	内外面：指オサエ後ナデ	精良 長・英	灰白色		
2026	河道2	須恵器	杯蓋	13.8	5.0	-	-	天井部外面：ヘラケズリ	微砂 長・英	灰色	良好	
2027	河道2	須恵器	杯蓋	13.0	3.6	-	-	天井部外面：ヘラオコシ	微砂 長・英	灰色	良好	
2028	河道2	須恵器	杯蓋	11.8	-	-	-	天井部外面：ナデ	細砂 長・英	灰色	良好	
2029	河道2	須恵器	杯身	13.8	4.7	-	-	杯部外面：ヘラケズリ	微砂 長・英	褐灰色	良好	
2030	河道2	須恵器	杯身	13.5	4.8	-	-	杯部外面：ヨコナデ ヘラケズリ	細砂	灰色	良好	
2031	河道2	須恵器	杯身	14.2	3.6	-	-	体部外面：下半ヘラケズリ	砂礫 長	黄灰色	良好	
2032	河道2	須恵器	杯身	13.2	-	-	-	杯部外面：上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	微砂 長・英	灰白色	良好	
2033	河道2	須恵器	杯身	11.8	4.9	-	-	底部：ヘラケズリ	微砂 長	灰色	良好	
2034	河道2	須恵器	杯身	12.2	-	-	-	杯部外面：ヨコナデ ヘラケズリ	微砂 長	灰色	良好	
2035	河道2	須恵器	提瓶	7.4	-	-	-	口縁部内外面：ヨコナデ	精良 長	暗灰色	良好	
2036	河道2	須恵器	壺	12.0	-	-	-	頸部外面：波状文	微砂 長	灰色	良好	
2037	河道2	須恵器	壺	-	-	-	-	底部外面：ヘラケズリ	微砂 長・英	灰色	良好	
2038	河道2	須恵器	壺	16.0	-	-	-	体部外面：タタキ後カキメ	細砂 英・長	灰色	良好	
2039	河道2	須恵器	甕	24.8	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ	細砂 白	灰色	良好	
2040	河道2	須恵器	高杯	-	-	-	8.8	内外面：ヨコナデ	精良～砂礫 長・英	灰色	良好	
2041	河道2	須恵器	高杯	-	-	-	14.7	内外面：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英	灰色	良好	
2042	河道2	土師器	甕	15.8	-	-	-	体部内面上半：ナデアゲ	微砂 長・雲	褐色		
2043	河道2	土師器	甕	-	-	-	7.4	外面：ヘラミガキ	長・英	灰白色		穿孔 焼成前
2044	河道2	土師器	甕	(18.4)	-	-	-	外面：ハケメ	細砂 長	にぶい褐色		
2045	河道2	土師器	甕	(18.0)	-	-	-	口縁部内面：ハケメ後ナデアゲ	微砂 長・雲・角	黄灰色		
2046	包含層	土師器	壺	(10.2)	(7.0)	-	(6.6)	口縁部内外面：ヘラミガキ	長	にぶい黄褐色		
2047	包含層	土師器	壺	11.2	8.3	-	-	体部外面：ナデ ヘラケズリ	長・英	浅黄褐色		
2048	包含層	土師器	壺	8.8	10.1	11.0	1.5	口頸部内面：ヨコナデ	長・英	褐色		
2049	包含層	土師器	壺	8.3	8.4	8.8	2.0	体部外面：ヘラケズリ	長・英・角	褐色		面影
2050	包含層	土師器	壺	8.6	10.8	10.1	-	体部外面：縦・横・斜め方向ハケメ	長・英・雲・赤・角	にぶい黄褐色		
2051	包含層	土師器	壺	(6.7)	(6.7)	7.0	-	-	微砂 長・英・角	灰色		
2052	包含層	土師器	壺	5.3	5.4	5.1	4.1	底部外面：ナデ	精良	褐色		面影
2053	包含層	土師器	壺	3.8	5.4	5.3	1.3	体部外面：ナデ 指オサエ後ナデ	微砂 長・英	浅黄褐色		
2054	包含層	土師器	甕	17.0	19.0	18.2	3.1	口縁部外面：飾描き沈線 6条廻る	微砂 長・英	にぶい褐色		
2055	包含層	土師器	甕	13.8	24.3	21.0	-	口縁部外面：飾描き沈線 6条以上認める	微砂 長・英・雲	にぶい赤褐色		
2056	包含層	土師器	甕	(16.8)	-	(22.2)	-	体部外面：ナデ ハケメ	砂礫 長・英・雲・赤・角	褐灰色		
2057	包含層	土師器	鉢	13.0	5.7	-	5.1	底部：ヘラケズリ	微砂～砂礫 長・英・雲・赤	黄灰色		
2058	包含層	土師器	鉢	11.2	5.3	11.6	3.1	体部外面：指オサエ ナデ	砂礫 長・英	褐色		
2059	包含層	須恵器	杯身	10.0	4.7	-	2.7	外面：ヨコナデ ヘラケズリ ヘラ切り痕後ナデ	細砂 長・英	灰白色	良好	
2060	包含層	須恵器	杯身	11.1	3.9	-	-	杯部：ナデ ヘラケズリ	細砂～砂礫 長・英	灰白色	不良	
2061	包含層	須恵器	高杯	10.1	-	-	-	-	細砂～砂礫 長・英	灰白色	良好	
2062	包含層	須恵器	高杯	13.0	5.5	-	7.6	杯部外面：ヨコナデ ヘラケズリ	砂礫 英・長	灰白色	良好	
2063	包含層	須恵器	甕	-	-	-	-	外面：波状文	微砂 白	灰色	良好	
2064	包含層	須恵器	甕	19.8	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ後上下に波状文	微砂 白	灰色	良好	
2065	包含層	須恵器	甕	-	-	-	-	体部外面：沈線	微砂 長・英	灰色	良好	
2066	包含層	須恵器	甕	22.8	-	-	-	体部外面：縦方向ハケメ後ナデ	細砂 長・英	灰色	良好	
2067	包含層	須恵器	甕	(21.6)	-	-	-	体部外面：タタキ後ナデ	砂礫 長・英	灰色	良好	
2068	土塚93	須恵器	杯身	-	-	-	-	底部外面：ヘラケズリ	細砂 長・英	灰白色	良好	
2069	土塚94	土師器	甕	-	-	-	-	内外面：ハケメ	細砂 白・長・英	黄褐色		
2070	溝42	須恵器	杯身	-	-	-	(11.6)	内外面：ヨコナデ	微砂 長・英	灰色	良好	
2071	溝42	須恵器	杯身	-	-	-	(9.9)	底部外面：ヘラ切り痕	微砂 長・英	黄灰色	良好	
2072	溝42	須恵器	杯	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	微砂 長・英	灰白色	良好	
2073	溝42	須恵器	杯	-	-	-	(11.0)	内外面：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・英・雲	灰色	良好	
2074	溝42	須恵器	杯身	-	-	-	6.8	底部内面：ヘラ記号	長・英・雲	灰色	良好	
2075	溝42	須恵器	壺	-	-	-	(7.0)	底面：糸切り痕	精良～微砂 長・英	灰色	良好	
2076	溝42	須恵器	杯	(12.0)	-	-	-	内外面：ヨコナデ	細砂	灰白色	不良	墨書
2077	溝42	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	内面：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	灰色	良好	
2078	溝42	須恵器	杯	-	-	-	-	杯部外面：ヘラケズリ	長・英	灰白色	良好	墨書
2079	溝42	須恵器	平瓶	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	長・英・雲	灰色	良好	
2080	溝42	須恵器	壺	-	-	-	10.6	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	灰色	良好	
2081	溝42	須恵器	甕	(21.8)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	灰色	良好	
2082	溝42	須恵器	杯	-	-	-	5.9	底部外面：糸切り痕	微砂 長・英	黄灰色	良好	
2083	溝42	黒色土器	甕	(16.0)	-	-	-	内外面：暗文	微砂 長・英・赤	にぶい褐色		内黒
2084	溝42	土師器	甕	16.0	-	-	-	内外面：ヨコナデ ナデ	微砂～砂礫 長・英	にぶい黄褐色		内面煤付着
2085	溝42	黒色土器	甕	-	-	-	7.0	内面：暗文	長・英・雲	にぶい褐色		内黒
2086	溝42	黒色土器	甕	-	-	-	7.4	外面：ヨコナデ	微砂 長・英・角・雲	にぶい黄褐色		内黒
2087	溝42	土師器	甕	-	-	-	8.8	内外面：ヨコナデ	微砂 長・英・赤	にぶい褐色		
2088	溝42	土師器	杯	-	-	-	8.0	底部外面：ヘラ切り痕 ナデ	微砂～細砂 長・英・角	黄灰色		
2089	溝42	土師器	杯	-	-	-	8.2	内外面：ナデ	細砂～砂礫 雲・長・英・赤	にぶい黄褐色		
2090	溝42	土師器	杯	-	-	-	-	底部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	にぶい褐色		
2091	溝42	黒色土器	甕	-	-	-	8.0	底部：ヘラケズリ後ナデ	微砂 長・英	褐色		内黒
2092	溝42	土師器	甕	17.0	-	15.5	-	内外面：暗文	微砂～砂礫 長・英	にぶい黄褐色		
2093	溝42	須恵器	甕	-	-	-	6.0	内外面：ナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色	良好	黒色土器
2094	溝42	瓦器	甕	-	-	-	(5.9)	内外面：暗文 指オサエ	精良～微砂 長・英	暗灰色	良好	和泉型
2095	溝42	土師器	甕	(14.4)	4.8	13.0	6.3	外面：ヨコナデ 外面：ナデ	微砂 長・英	灰白色		
2096	溝42	土師器	甕	-	-	-	-	外面：ヨコナデ	細砂 長・英	明黄褐色		
2097	溝42	土師器	甕	13.6	4.3	-	6.4	体部内外面：横方向ナデ	精良～細砂 長・英	浅黄褐色		
2098	溝42	土師器	杯	13.0	-	11.9	-	口縁部外面：横ナデ	細砂 長・英・雲	灰白色		
2099	溝42	土師器	甕	-	-	-	-	長・英・雲	長・英・雲	浅黄褐色		外面煤付着
2100	溝42	土師器	甕	-	-	-	5.9	内外面：ナデ	細砂 長・英・雲	にぶい黄褐色		
2101	溝42	土師器	杯	10.2	2.3	8.8	5.2	底部外面：ヘラオコシ	微砂 長・英	灰褐色		完形
2102	溝42	土師器	甕	-	-	-	-	体部内外面：ハケメ	微砂 長・英	にぶい黄褐色		外面煤付着
2103	溝42	土師器	甕	-	-	-	-	-	微砂 長・英	にぶい褐色		外面煤付着
2104	溝42	土師器	甕	-	-	-	-	-	精良～細砂 雲・長・英	灰黄褐色		外面煤付着
2105	溝48	須恵器	杯	-	-	-	6.6	底部：糸切り痕	微砂	灰色	良好	
2106	溝49	土師器	皿	14.0	3.0	-	10.2	底部外面：ヘラ切り痕 板痕跡	微砂 赤・長・英・雲	にぶい黄褐色		完形 内面墨付着
2107	溝50	黒色土器	甕	(15.2)	-	(14.2)	-	口縁部外面：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	黄灰色		内黒
2108	溝50	土師器	甕	(16.1)	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	精良～微砂 長・英・赤	褐色		
2109	溝50	土師器	皿	-	-	-	5.7	底部外面：板目	精良 雲・赤・長	黄灰色		
2110	溝50	黒色土器	甕	-	-	-	(6.6)	内底面：ナデ	微砂～細砂 長・英	黄灰色		内黒
2111	溝50	土師器	杯	-	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい褐色		
2112	溝50	土師器	杯	10.2	3.2	-	7.8	底部外面：ヘラオコシ	精良	浅黄褐色		完形

遺物観察表

掲載番号	遺構種類	種類	器種	量目 (cm)				調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
2113	溝50	土師器	杯	11.3	2.1	-	7.5	内外面：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英・雲・角	灰黄色			
2114	溝50	土師器	皿	10.8	1.4	-	7.8	底部外面：ヘラオコシ	微砂～細砂 長・英・角	灰黄褐色		完形	
2115	包含層	須恵器	杯身	13.0	4.0	-	-	底部：一部ヘラケズリ	微砂～細砂 長・英	灰色	良好		
2116	包含層	須恵器	椀	(12.0)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	精良	灰色	良好		
2117	包含層	須恵器	壺	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	精良～微砂 雲母	灰白色	良好		
2118	包含層	緑釉陶器	椀	14.0	2.5	-	7.2	台部外面：ケズリ出し	精良	オリーブ灰色	良好		
2119	包含層	緑釉陶器	皿	12.0	3.0	-	6.6	台部外面：ヨコナデ 貼りつけ高台 糸切り	微砂～細砂 長・英・赤	深緑色	良好		
2120	包含層	黒色土器	椀	15.0	6.3	-	7.0	外面：指オサエ 暗文	細砂～砂礫 長・英	灰黄色			
2121	包含層	黒色土器	椀	14.3	5.7	-	7.8	体部外面：ヨコナデ	精良 雲・白	にぶい褐色			内黒
2122	包含層	黒色土器	椀	15.4	5.6	-	7.0	体部外面：指オサエ ナデ 内外面：暗文	微砂～砂礫 長・英	浅黄褐色			
2123	包含層	黒色土器	椀	14.2	5.0	-	6.6	底部：ヘラ切り	精良～微砂 白	褐色			内黒
2124	包含層	黒色土器	椀	-	-	-	8.2	内面：暗文	長・英・雲	にぶい黄褐色			内黒
2125	包含層	土師器	鉢	-	-	-	-	内外面：ナデ	精良 長・英	明赤褐色			
2126	包含層	土師器	椀	-	-	-	9.8	底部：ヘラ切り	細砂 白	にぶい橙色			
2127	包含層	黒色土器	椀	-	-	-	5.4	体部内面：暗文	微砂 白	黒色			両黒
2128	包含層	黒色土器	椀	15.0	4.7	-	7.8	内面：暗文	微砂 雲	にぶい褐色			内黒
2129	包含層	土師器	皿	20.8	2.9	-	-	内外面：ヨコナデ	細砂 長・英	褐色			
2130	包含層	土師器	小皿	10.8	-	-	-	底部外面：回転ヘラ切り痕後ナデ	精良 長	にぶい黄褐色			
2131	包含層	土師器	皿	8.8	3.0	-	4.9	底部外面：ヘラ切り	微砂 長・英	褐色			
2132	包含層	土師器	皿	12.6	3.5	-	7.3	底部外面：ヘラ切り	微砂 長・英	灰白色			
2133	包含層	土師器	皿	11.3	3.5	-	7.0	底部外面：ヘラ切り	精良 長・英・角	にぶい黄褐色			
2134	包含層	土師器	皿	-	-	-	8.0	底部：回転ヘラ切り	微砂 雲 白	褐色			
2135	溝51	須恵器	杯身	-	-	-	10.0	体部外面：ヨコナデ	微砂 白	灰白色	良好		
2136	溝51	須恵器	杯身	-	-	-	7.2	-	長・英	灰白色	良好		
2137	溝51	須恵器	壺	-	-	-	-	体部内面：ヨコナデ	精良 白	灰色	良好		
2138	溝51	土師器	椀	-	-	-	-	高台：ナデ	微砂	にぶい褐色			内黒
2139	溝51	土師器	椀	-	-	-	6.3	底部内面：ナデ	微砂 白	明赤褐色			内黒
2140	溝51	黒色土器	椀	-	-	-	-	高台：ナデ	微砂 雲・白	にぶい褐色			内黒
2141	溝51	黒色土器	椀	-	-	-	-	高台外面：ナデ	微砂 白	にぶい褐色			内黒
2142	溝51	黒色土器	椀	-	-	-	7.9	高台：ナデ	微砂 雲	黄灰色			
2143	溝51	黒色土器	椀	-	-	-	7.6	内面：暗文	雲母 白	浅黄褐色			
2144	溝51	土師器	皿	-	-	-	-	底部外面：ヘラ切り	微砂 白・赤	にぶい褐色			
2145	溝51	土師器	皿	(8.8)	(1.0)	-	(6.4)	-	精良	にぶい褐色			
2146	溝51	土師器	小皿	-	-	-	8.1	底部：ヘラ切り痕	微砂 雲	浅黄褐色			
2147	溝51	瓦質	鉢	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	英	黒色			
2148	溝51	土師器	カマド	-	-	-	-	指オサエ	微砂 英・長・雲	灰黄色			外面煤付着
2149	溝52	土師器	椀	-	-	-	6.4	高台：ヨコナデ	白	浅黄褐色			
2150	溝52	黒色土器	椀	-	-	-	-	-	精良～微砂 白・赤	褐色			内黒
2151	溝53	須恵器	杯身	-	-	-	-	体部内外面：ヨコナデ	微砂～細砂	黄灰色	良好		
2152	溝53	土師器	椀	15.2	4.6	-	6.1	体部内面：板状工具によるナデ	微砂～細砂 白	灰白色			
2153	溝53	土師器	椀	14.0	5.1	-	6.2	体部内面：指オサエ ナデ	微砂 白・赤	灰黄色			
2154	溝53	土師器	椀	14.4	4.7	-	6.4	体部内外面：ナデ	雲・英・長	灰黄色			
2155	溝53	土師器	椀	13.8	4.7	-	6.5	体部内面：ナデ	英・雲	灰黄色			
2156	溝53	土師器	椀	14.4	5.0	-	6.4	体部内面：ナデ	精良 白	灰白色			
2157	溝53	土師器	椀	14.1	4.3	-	6.0	体部内面：ナデ	雲・英・長	にぶい黄褐色			
2158	溝53	土師器	椀	12.6	4.3	-	5.7	口縁部内外面：ナデ	英・長・雲	浅黄色			
2159	溝53	土師器	椀	-	-	-	6.3	高台：ヨコナデ	雲・英	灰白色			
2160	溝53	土師器	皿	14.3	2.8	-	9.2	内外面：工具ナデ	長・雲	にぶい褐色			
2161	溝53	土師器	小皿	7.4	1.0	-	4.8	底部外面：ナデ後ヘラオコシ	細砂 白	灰白色			
2162	溝53	須恵器	壺	19.4	-	-	-	体部外面：タタキ	細砂 雲・白	灰色	良好		
2163	溝53	土師器	鉢	(39.8)	-	-	-	体部内外面：細かいハケメ	雲・英・長	灰白色			
2164	溝53	土師器	鉢	-	-	-	-	体部内面：横方向ハケメ 一部ナデ	微砂 白	黒色			
2165	溝53	土師器	鉢	41.7	-	-	-	体部内外面：ハケメ	微砂 英・雲	浅黄色			取手付
2166	溝53	土師器	鉢	35.8	-	-	-	体部内外面：ハケメ	微砂～細砂 白	灰黄色			
2167	溝53	土師器	鉢	-	-	-	-	指オサエ	英・長・雲	にぶい褐色			
2168	溝53	土師器	鉢	44.8	-	-	-	体部内外面：ハケメ	微砂 雲・英・白	淡黄色			
2169	溝53	土師器	カマド	-	-	-	-	外面：取手と思われる痕跡あり	長・雲	にぶい黄褐色			外面煤付着
2170	溝55	青磁	椀	(12.1)	-	-	-	口縁部外面：片切り彫りしのぎ連弁 施粒	精良	灰オリーブ色			
2171	溝55	土師器	椀	-	-	-	5.7	体部外面：ヨコナデ	精良	灰白色			
2172	溝56	土師器	鉢	41.6	-	-	-	体部内外面：ハケメ	雲・英・長	にぶい黄褐色			
2173	溝57	備前焼	甕	-	-	-	-	外面：ヘラケズリ	長・英	にぶい赤褐色			
2174	溝57	須恵器	壺	-	-	-	-	体部外面：ヘラケズリ	長・英・雲	灰色	良好		
2175	溝60	備前焼	甕	-	-	-	-	内外面：ヨコナデ	精良～細砂 長	灰赤色			
2176	溝60	土師器	不明	-	-	-	-	内面：ヘラケズリ	精良～細砂 長	褐色			
2177	溝60	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	-	精良 角	灰白色	良好		
2178	溝66	土師器	椀	-	-	-	-	内面：ナデ	細砂 白	灰白色			
2179	溝66	黒色土器	椀	-	-	-	-	-	精良～微砂 白	黒褐色			内黒
2180	溝66	土師器	椀	-	-	-	-	-	細砂 白	褐色			
2181	溝67	土師器	椀	-	-	-	-	-	長・英	灰白色			
2182	溝69	磁器	皿	14.9	3.8	-	9.5	外面：松葉の文様 圏線	-	-			肥前
2183	溝69	磁器	碗	-	2.9	-	4.0	外面：樹木の文様	-	-			肥前系
2184	溝69	磁器	鉢	9.0	4.0	-	4.9	外面：鱗唐草文	-	-			肥前系
2185	溝69	磁器	白磁碗	11.1	6.0	-	4.3	内外面：やや緑色をおびた灰白色の釉	-	-			肥前系
2186	溝69	磁器	香炉	9.8	3.0	-	-	外面：灰緑色の釉	-	-			肥前
2187	溝69	磁器	小碗	-	3.4	-	3.4	内外面：白色釉	-	-			肥前
2188	溝69	磁器	蓋物	9.3	3.9	-	-	外面：花状の文様	-	-			肥前
2189	溝69	磁器	仏飯器	7.9	7.5	-	4.4	外面：植物文圏線	-	-			肥前系
2190	溝69	磁器	碗	-	-	-	4.3	外面：圏線	-	-			肥前
2191	溝69	磁器	蓋	9.3	3.0	-	-	-	-	-			肥前系
2192	溝69	磁器	碗	10.4	3.9	-	-	外面：木葉と鳥の模様	-	-			肥前
2193	溝69	磁器	小碗	7.2	-	-	2.6	外面：花の文様	-	-			瀬戸美濃
2194	溝69	磁器	碗	-	-	-	-	外面：花の文様	-	-			瀬戸美濃
2195	溝69	磁器	小碗	-	-	-	-	外面：不明の文様	-	-			瀬戸美濃
2196	溝69	陶器	小碗	8.7	4.8	-	3.2	内外面：灰褐色の釉	-	-			関西系
2197	溝69	陶器	灯火皿	10.8	2.3	-	3.8	内外面：灰褐色の釉	-	-			関西系
2198	溝69	陶器	碗	12.8	4.2	-	-	内外面：灰色の釉	-	-			関西系
2199	溝69	陶器	小碗	-	-	-	-	外面：「ヒラ掛け」の文様	-	-			萩

遺物観察表

土製品観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値(mm)				重量(g)	胎土	色調	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径						
C 1	水田 2	紡錘車	41.0	40.0	15.5	5.0	29.8	細砂 英・長	にぶい赤褐色	完形	弥・前	
C 2	住居16	土玉	30.0	28.0	26.0	3.5	17.5	微砂 英・長・赤 (?)	褐灰色		弥・後・Ⅳ	孔は貫通していない
C 3	住居16	勾玉	23.5	17.0	10.5	3.0	2.9	微砂 英・長・赤	橙色		弥・後・Ⅳ	
C 4	住居16	紡錘車	43.0	-	5.0	8.0	6.4	精良～微砂 長・英・赤	灰黄色		弥・後・Ⅳ	土器片の転用
C 5	住居16	紡錘車	(33.0)	(27.0)	6.0	7.0	8.0	精良 長・英・雲	黒褐色		弥・後・Ⅳ	土器片の転用
C 6	土塚25	土鉢	(51.5)	(31.0)	-	(7.0)	24.8	精良～細砂 長・赤・英・雲	にぶい橙色		弥・後・後半	
C 7	土塚48	土鉢	84.0	(79.0)	-	-	220.9	微砂 長・英・雲・角・赤	にぶい黄褐色		弥・後	
C 8	土塚48	土鉢	4.3	-	4.5	8.0	37.7	微砂 長・英・雲・角	にぶい橙色		弥・後	
C 9	河道 1	紡錘車	57.5	53.0	5.0	7.0	21.2	微砂 長・英	黒色		弥・後	未製品
C 10	河道 1	紡錘車	53.0	50.0	4.0	5.0	11.8	精良 長・英	灰黄褐色	ほぼ完形	弥・後	土器片の転用
C 11	河道 1	土版	67.0	69.0	13.0	6.0	50.8	精良 長・英・雲	灰黄色		弥・後	黒斑あり
C 12	河道 1	凹板状	60.5	57.0	13.0	-	46.3	精良 長・英	黄灰色		弥・後～古	
C 13	河道 1	土鉢	58.0	56.0	-	13.0	181.0	微砂～細砂 長・英	灰白色		弥・後～古	
C 14	河道 1	土鉢	52.0	50.0	-	19.0	134.3	微砂 長・英・雲・赤	灰黄色	完形	弥・後～古	
C 15	河道 1	土鉢	59.0	50.0	-	15.5	147.3	微砂 長・英・角	灰黄色	ほぼ完形	弥・後～古	
C 16	河道 1	土鉢	84.5	47.0	-	22.0	150.0	微砂 長・英	灰黄色		弥・後～古	
C 17	河道 1	土鉢	79.0	45.0	-	18.0	141.1	精良～細砂 長・雲	灰白色	ほぼ完形	弥・後～古	
C 18	河道 1	土鉢	75.0	48.0	-	12.0	165.5	微砂～細砂 長・英・角・赤	にぶい黄褐色	ほぼ完形	弥・後～古	
C 19	河道 1	土鉢	71.0	41.5	-	25.0	114.4	微砂 白	にぶい黄褐色		弥・後～古	
C 20	河道 1	土鉢	65.0	46.0	-	18.0	120.5	微砂～細砂 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		弥・後～古	
C 21	河道 1	不明	53.0	11.0	13.5	-	12.0	精良 長・英・雲・角	にぶい黄色		弥・後～古	
C 22	河道 1	土鉢	58.0	56.0	-	13.0	3.3	精良 長・英	灰黄褐色	完形	弥・後～古	
C 23	河道 1	紡錘車	39.0	35.0	4.0	7.0	7.0	精良～細砂 長・角・雲	にぶい褐色		弥・後～古	土器片の転用 未製品
C 24	河道 1	紡錘車	40.0	-	5.5	6.0	5.3	精良 長・雲・角・赤	橙色		弥・後～古	土器片の転用
C 25	河道 1	紡錘車	49.0	-	5.0	5.0	7.9	精良～細砂 長・雲・赤	にぶい黄褐色		弥・後～古	土器片の転用
C 26	河道 1	凹板状	52.5	50.0	8.0	-	22.2	細砂 英・長・角	にぶい橙色		弥・後～古	土器片の転用
C 27	河道 1	凹板状	56.0	(42.0)	12.5	-	35.6	微砂 英・長・角	黄灰色		弥・後～古	土器片の転用
C 28	河道 1	凹板状	35.5	34.0	8.0	-	10.0	細砂 英・長・角	にぶい黄褐色		弥・後～古	土器片の転用
C 29	河道 1	土鉢	(54.0)	63.5	-	11.5	140.3	微砂 長・英・雲・赤・角	橙色		弥・後～古	
C 30	河道 1	ミニチュア	29.5	31.0	10.0	4.0	32.6	微砂～砂礫 長・英・雲・角	褐色	完形	弥・後～古	
C 31	河道 1	土玉	37.0	39.0	31.0	-	44.9	微砂～細砂 長・角・赤	褐灰色		弥・後～古	
C 32	住居26	勾玉	28.0	18.0	10.5	3.0	3.2	精良 長・水こし粘土	褐色		古・前・Ⅱ	
C 33	住居34	ミニチュア	11.1	23.0	7.0	-	3.6	精良 長・英・雲	褐色		古・前・Ⅰ	
C 34	住居35	土玉	23.0	22.0	19.0	-	8.1	微砂 英・長	灰黄褐色		古・前・Ⅱ	
C 35	住居43	ミニチュア	40.5	21.0	17.5	-	9.9	精良～微砂 長・英・角・赤	にぶい黄褐色		古・前・Ⅱ	
C 36	住居49	紡錘車	48.5	47.0	6.5	7.0	17.1	微砂 英・長	灰黄褐色		古・前・Ⅱ	土器片の転用
C 37	住居49	紡錘車	42.0	41.0	5.5	8	14.1	微砂 雲	明赤褐色		古・前・Ⅱ	土器片の転用
C 38	住居49	紡錘車	(38.0)	(31.0)	6.5	5.5	10.0	微砂 長・英・雲・角	にぶい黄褐色		古・前・Ⅱ	土器片の転用 未製品
C 39	住居61	紡錘車	48.5	46.0	27.5	6.0	65.0	微砂 長・英・角・雲	にぶい黄褐色		古・中・Ⅱ	
C 40	住居61	紡錘車	44.0	35.0	4.0	8.0	7.1	精良～微砂 長・英・雲・赤	褐色		古・中・Ⅱ	土器片の転用
C 41	住居63	土玉	23.5	25.0	24.0	3.5	13.7	微砂 英・長・角	灰黄色		古・中・Ⅱ	
C 42	住居64	支柱	14.3	45.5	-	-	321.4	精良～砂礫 長・英	淡黄色		古・中・Ⅱ	
C 43	住居66	土鉢	67.0	(40.0)	-	-	66.7	精良～微砂 長・英・雲・角	灰白色		古・中・Ⅰ	
C 44	たわみ 1	不明土製品	74.0	62.0	-	-	143.4	精良 白	灰黄褐色		5 c 末～6 c 初	
C 45	土器溜まり 1	紡錘車	-	-	-	-	-	微砂	にぶい褐色		古・中・Ⅰ	土器片の転用
C 46	土器溜まり 1	土鉢	62.5	16.0	-	3.0	16.9	精良～微砂 英・長・赤	暗灰黄色		古・中・Ⅰ	
C 47	土器溜まり 1	土鉢	72.5	16.0	-	3.0	16.1	微砂 英・長・赤・雲	にぶい黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 48	土器溜まり 1	土鉢	57.0	13.0	-	2.5	8.0	微砂 英・長・角	にぶい黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 49	土器溜まり 1	土鉢	(43.0)	12.0	-	4.5	6.7	精良 長・英・雲	灰黄色		古・中・Ⅰ	
C 50	土器溜まり 1	土鉢	96.5	11.0	-	3.0	12.8	微砂 英・長・赤	灰黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 51	土器溜まり 1	鏡形	51.0	47.0	7.5	2.5	13.7	微砂 長・雲	にぶい黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 52	土器溜まり 1	鏡形	47.0	44.0	20.5	4.0	14.6	微砂	にぶい黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 53	土器溜まり 1	鏡形	54.5	50.0	12.0	-	20.2	微砂 英・長・角・赤	浅黄色		古・中・Ⅰ	
C 54	土器溜まり 1	鏡形	50.5	46.0	10.5	2.2	13.7	微砂 英・長・角・赤・雲	灰黄色		古・中・Ⅰ	
C 55	土器溜まり 1	勾玉	28.5	18.0	18.5	3.0	5.5	微砂 英・長	灰黄色	完形	古・中・Ⅰ	
C 56	土器溜まり 1	勾玉	(45.5)	27.0	18.0	5.0	11.4	精良	にぶい黄褐色		古・中・Ⅰ	
C 57	土器溜まり 1	勾玉	45.5	29.0	19.5	5.0	15.6	微砂 角・雲	にぶい黄褐色	完形	古・中・Ⅰ	
C 58	土器溜まり 1	勾玉	51.5	33.0	17.5	3.0	20.5	微砂 英・長・角・赤・雲	浅黄色	完形	古・中・Ⅰ	
C 59	住居71	勾玉	44.0	16.0	20.0	3.0	16.4	精製粘土	にぶい褐色		6 c 後半	
C 60	住居81	勾玉	43.0	24.0	14.5	3.0	10.3	微砂～細砂 英・長・角	にぶい褐色		古・後	
C 61	住居81	紡錘車	45.0	39.0	4.0	5.5	10.8	微砂～細砂 英・長・角・赤	黄灰色		古・後	土器片の転用
C 62	土塚90	土鉢	46.5	21.0	-	5.0	17.1	微砂～細砂 英・長・角・赤	にぶい黄褐色		古・後・Ⅲ	
C 63	河道 1	鏡形	70.0	67.0	1.1	2.0	41.2	精良～砂礫 長・赤・英・角	にぶい黄褐色		古墳	
C 64	河道 1	勾玉	34.0	10.5	11.5	2.0	4.7	精製粘土	にぶい黄褐色		古墳	
C 65	溝42	土鉢	35.5	14.0	-	2.0	5.5	精良 長・赤	にぶい褐色		古代	
C 66	溝42	土鉢	44.0	9.5	-	3.0	3.5	精良～微砂 長・角・英	にぶい黄色		古代	
C 67	溝42	土鉢	(29.0)	11.0	-	2.0	3.7	精良～微砂	黄褐色		古代	

木器・木製品観察表

掲載 番号	遺構・土層名	器 種	計 測 値 mm			樹 種	木 取 り	備 考
			最大長	最大幅	最大厚			
W 1	溝14	部材	710	38	38	-	芯持削出し	完形
W 2	池 1	籠	(284)	(160)	-	-	-	一部欠損
W 3	池 1	樹皮製品	108	42	40	-	-	完形
W 4	河道 1北岸	斧柄	707	44	29	クスギ節	割材削出し	完形・ほぞ穴あり
W 5	河道 1北岸	斧柄	(515)	171	52	-	芯持削出し	一部欠損・未製品
W 6	河道 1北岸	斧柄	(496)	80	36	-	芯持削出し	完形
W 7	河道 1北岸	斧柄	(349)	104	32	クスギ節	芯持削出し	一部欠損
W 8	河道 1北岸	斧柄	108	43	34	-	芯持削出し	一部欠損
W 9	河道 1北岸	斧柄	(100)	(48)	(39)	スギ	芯持削出し	一部欠損
W10	河道 1北岸	斧柄	(105)	47	30	-	半截削出し	斧台のみ
W11	河道 1北岸	斧柄	(83)	48	(25)	-	割材削出し	斧台のみ
W12	河道 1北岸	柄	218	21	20	イヌマキ	丸太材削出し	完形
W13	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(平鉄)	(470)	158	8	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W14	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(444)	(69)	18	-	楕目材	一部欠損
W15	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(543)	(60)	13	-	楕目材	一部欠損
W16	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(528)	(131)	13	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W17	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(899)	(64)	9	-	楕目材	一部欠損
W18	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(639)	115	10	-	楕目材	一部欠損
W19	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	863	138	12	アカガシ亜属	楕目材	完形
W20	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	841	124	13	アカガシ亜属	楕目材	ほぼ完形
W21	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	(511)	104	10	アカガシ亜属	楕目材	スカシあり ほぼ完形
W22	河道 1北岸	ナスビ形農耕具(又鉄)	757	130	11	アカガシ亜属	楕目材	スカシあり 鉄刃装着 ほぼ完形
W23 a	河道 1北岸	代掻き	(362)	(33)	(75)	台木:アカガシ亜属	-	一部欠損
W23 b	河道 1北岸	代掻き	184	21	9	-	-	一部欠損
W23 c	河道 1北岸	代掻き	(176)	23	9	菌:アカガシ亜属	-	一部欠損
W23 d	河道 1北岸	代掻き	(158)	21	10	-	-	一部欠損
W24	河道 1北岸	代掻き	(152)	(42)	(28)	-	割材削出し	台木のみ
W25	河道 1北岸	代掻き	(90)	(21)	(19)	-	台木・菌ともに 割材削出し	台木のみ
W26	河道 1北岸	鋤	(520)	185	20	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W27	河道 1北岸	鋤?	(418)	102	10	-	楕目材	一部欠損
W28	河道 1北岸	掘棒	(550)	101	25	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W29	河道 1北岸	掘棒	(516)	102	20	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W30	河道 1北岸	掘棒	(144)	100	17	-	楕目材	一部欠損
W31	河道 1北岸	掘棒	(180)	120	16	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W32	河道 1北岸	反柄	1011	160	18	バラ科	割材削出し	完形
W33	河道 1北岸	反柄	(238)	312	18	-	割材削出し	一部欠損
W34	河道 1北岸	反柄	(219)	31	13	-	割材削出し	柄のみ
W35	河道 1北岸	柄	788	37	32	-	割材削出し	一部欠損
W36	河道 1北岸	柄	(808)	83	30	柄:アカガシ亜属 把手:アカガシ亜属	割材削出し	一部欠損
W37	河道 1北岸	柄	(815)	45	35	-	割材削出し	一部欠損
W38	河道 1北岸	堅杵	281	78	51	-	割材削出し	なき部のみ 転用?
W39	河道 1北岸	堅杵	711	76	56	ツバキ	芯持削出し	完形
W40	河道 1北岸	堅杵	970	76	59	ツバキ	芯持削出し	完形
W41	河道 1北岸	横槌	(84)	57	34	-	芯持削出し	一部欠損
W42	河道 1北岸	横槌	(235)	70	21	-	割材削出し	一部欠損
W43	河道 1北岸	横槌	(254)	59	43	-	芯持削出し	一部欠損
W44	河道 1北岸	横槌	464	93	79	-	芯持削出し	完形
W45	河道 1北岸	編台日盛板	(251)	8	29	ヒノキ	割材削出し	一部欠損 刻目
W46	河道 1北岸	編台	(284)	226	26	ヤマグワ	芯持削出し	一部欠損
W47	河道 1北岸	木鏝	89	91	61	アカガシ亜属	芯持削出し	完形
W48	河道 1北岸	木鏝	113	50	40	-	芯持削出し	完形
W49	河道 1北岸	木鏝	114	65	43	-	芯持削出し	完形
W50	河道 1北岸	木鏝	(109)	69	(34)	-	芯持削出し	一部欠損
W51	河道 1北岸	木鏝	112	77	59	アカガシ亜属	芯持削出し	完形
W52	河道 1北岸	木鏝	108	82	72	アカガシ亜属	芯持削出し	完形
W53	河道 1北岸	木鏝	122	66	47	-	割材削出し	完形
W54	河道 1北岸	木鏝	122	76	62	ツゲ	芯持削出し	完形
W55	河道 1北岸	木鏝	119	90	66	ヤマグワ	芯持削出し	完形
W56	河道 1北岸	木鏝	121	93	72	イスノキ	芯持削出し	完形
W57	河道 1北岸	木鏝	130	84	58	-	芯持削出し	一部欠損
W58	河道 1北岸	木鏝	112	67	51	-	芯持削出し	一部欠損
W59	河道 1北岸	木鏝	139	84	62	-	芯持削出し	完形 未製品?
W60	河道 1北岸	櫛	(540)	42	11	アカガシ亜属	楕目材	一部欠損
W61	河道 1北岸	櫛	(759)	75	13	-	楕目材	一部欠損
W62 a	河道 1北岸	網杵	(522)	23	11	-	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W62 b	河道 1北岸	網杵	(315)	21	11	-	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W62 c	河道 1北岸	網杵	(193)	20	11	-	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W63	河道 1北岸	網杵	(708)	30	23	-	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W64	河道 1北岸	網杵	(643)	25	15	カヤ	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W65	河道 1北岸	柄頭	(66)	42	17	ムクノキ	芯持削出し	一部欠損 穿孔 黒漆
W66	河道 1北岸	柄頭	(28)	24	14	-	芯持削出し	一部欠損 穿孔
W67	河道 1北岸	鞘装具?	325	39	28	ヒノキ	割材削出し	完形
W68	河道 1北岸	弓	(191)	23	15	アカガシ亜属	芯持削出し	一部欠損
W69	河道 1北岸	弓?	(391)	29	18	-	割材削出し	一部欠損 黒漆 赤漆
W70	河道 1北岸	弓?	(130)	25	11	マテバシイ	割材削出し	一部欠損 赤漆
W71	河道 1北岸	弓?	(606)	25	18	スタジイ	割材削出し	一部欠損 黒漆
W72	河道 1北岸	小札	(108)	51	8	スギ	楕目材	一部欠損 穿孔
W73	河道 1北岸	小札	(226)	116	6	コナラ節	楕目材	一部欠損 穿孔
W74	河道 1北岸	盾	(96)	(24)	4	-	板目材	一部欠損 穿孔
W75	河道 1北岸	盾	(123)	(18)	7	-	板目材	一部欠損 穿孔
W76	河道 1北岸	盾	(103)	(37)	6	-	追板目材?	一部欠損 穿孔 赤色顔料?
W77	河道 1北岸	盾	(134)	(27)	6	-	板目材	一部欠損 穿孔
W78	河道 1北岸	盾	(140)	(55)	5	モミ	板目材	一部欠損 穿孔
W79	河道 1北岸	盾	(215)	(41)	6	モミ	板目材	一部欠損 穿孔
W80	河道 1北岸	盾	(176)	(55)	6	モミ	板目材	一部欠損 穿孔 赤色顔料 黒漆
W81	河道 1北岸	盾	(244)	(38)	10	モミ	板目材	一部欠損 穿孔 赤色顔料
W82	河道 1北岸	盾	(247)	(61)	11	モミ	板目材	一部欠損 穿孔 両面赤色顔料
W83	河道 1北岸	盾	(338)	(65)	8	モミ	板目材	一部欠損 穿孔
W84	河道 1北岸	杓子型木器	(158)	(49)	8	-	楕目材	一部欠損
W85	河道 1北岸	匙	(177)	(64)	9	サカキ	割材削出し	一部欠損 黒漆
W86	河道 1北岸	匙	(210)	(33)	8	-	割材削出し	一部欠損
W87	河道 1北岸	匙	(206)	84	30	-	割材削出し	一部欠損
W88	河道 1北岸	杓子	(182)	86	35	エノキ	割材削出し	一部欠損
W89	河道 1北岸	容器	(222)	(92)	21	ヒノキ	楕目材	一部欠損 木釘

遺物観察表

掲載 番号	遺構・土層名	器 種	計 測 値 mm			樹 種	木 取 り	備 考
			最大長	最大幅	最大厚			
W90	河道1北岸	容器	203	(185)	23	ヒノキ	柵目材	一部欠損 木釘
W91	河道1北岸	容器	252	248	9	スギ	板目材	完形
W92	河道1北岸	木葉形木製品	(174)	(100)	9	-	板目材	一部欠損
W93	河道1北岸	木葉形木製品	(137)	(112)	8	アカガシ亜属	柵目材	一部欠損 穿孔
W94	河道1北岸	木葉形木製品	(202)	(107)	11	スタジイ	板目材	一部欠損 穿孔
W95	河道1北岸	木葉形木製品	(237)	114	10	スタジイ	柵目材	一部欠損 穿孔
W96	河道1北岸	木葉形木製品	(256)	95	9	-	柵目材	一部欠損 穿孔
W97	河道1北岸	木葉形木製品	(246)	116	10	コナラ節またはクスギ節	板目材	一部欠損 穿孔
W98	河道1北岸	把手	(58)	(28)	9	-	柵目材	一部欠損 穿孔
W99	河道1北岸	把手	(76)	(42)	12	-	柵目材	一部欠損
W100	河道1北岸	把手	(106)	(46)	20	-	割材削出し	一部欠損
W101	河道1北岸	槽	271	(95)	46	スタジイ	割材削出し	一部欠損
W102	河道1北岸	裝飾板	(504)	(261)	17	クスノキ	板目材	一部欠損
W103	河道1北岸	発火具	(240)	(275)	15	ヒメシヤラ	割材削出し	一部欠損
W104	河道1北岸	腰掛	326	179	80	クスノキ	割材削出し	ほぼ完形
W105	河道1北岸	背負子状木製品	617	56	22	-	芯持削出し	一部欠損
W106	河道1北岸	背負子状木製品	(562)	(43)	23	-	芯持削出し	一部欠損
W107	河道1北岸	背負子状木製品	(437)	73	21	-	芯持削出し	一部欠損
W108	河道1北岸	用途不明品	(495)	52	13	アカガシ亜属	柵目材	一部欠損 穿孔
W109	河道1北岸	用途不明品	(484)	60	18	種：スタジイ 属種：アカガシ亜属	種：柵目材 属種：柵目材	一部欠損 組合部材 木釘
W110	河道1北岸	用途不明品	(183)	82	112	-	板目材	一部欠損 組合部材
W111	河道1北岸	用途不明品	(110)	69	15	アカガシ亜属	柵目材	一部欠損
W112	河道1北岸	用途不明品	(255)	26	15	-	芯持削出し	一部欠損
W113	河道1北岸	用途不明品	(171)	47	21	-	柵目材	一部欠損 スカシ
W114	河道1北岸	用途不明品	(317)	54	30	-	割材削出し	一部欠損 穿孔 スカシ
W115	河道1北岸	用途不明品	(258)	51	23	-	柵目材	一部欠損
W116	河道1北岸	用途不明品	(198)	(92)	16	-	柵目材	一部欠損
W117	河道1北岸	用途不明品	(353)	28	10	-	柵目材	一部欠損
W118	河道1北岸	用途不明品	(417)	25	20	-	柵目材	ほぞ穴あり 一部欠損
W119	河道1北岸	部材	(96)	15	12	-	丸太材	一部欠損
W120	河道1北岸	部材	(148)	19	21	-	割材削出し?	一部欠損
W121	河道1北岸	部材	(183)	31	10	-	割材削出し	一部欠損
W122	河道1北岸	部材	(209)	33	25	-	丸太材	一部欠損
W123	河道1北岸	部材	(380)	23	8	-	丸太材	一部欠損
W124	河道1北岸	部材	(305)	30	(17)	-	丸太材	一部欠損
W125	河道1北岸	部材	(237)	39	26	-	丸太材	一部欠損
W126	河道1北岸	部材	(90)	52	43	-	割材削出し	一部欠損
W127	河道1北岸	部材	(164)	72	(55)	-	芯持削出し	一部欠損
W128	河道1北岸	部材	(213)	78	(47)	-	丸太材	一部欠損
W129	河道1北岸	部材	(380)	59	53	-	芯持削出し	一部欠損
W130	河道1北岸	部材	(564)	62	45	-	芯持削出し	一部欠損
W131	河道1北岸	部材	(46)	25	25	-	丸太材	一部欠損
W132	河道1北岸	部材	507	29	15	-	丸太材	完形
W133	河道1北岸	部材	487	29	21	-	丸太材	ほぼ完形
W134	河道1北岸	部材	905	33	28	-	丸太材	一部欠損
W135	河道1北岸	部材	1094	39	30	-	丸太材	一部欠損
W136	河道1北岸	部材	(1400)	30	22	-	丸太材	一部欠損
W137	河道1北岸	部材	(1609)	42	36	-	丸太材	一部欠損
W138	河道1北岸	部材	(1787)	35	23	-	丸太材	一部欠損
W139	河道1北岸	用途不明品	(83)	(18)	3	-	不明	一部欠損 黒漆 糸付着
W140	河道1北岸	用途不明品	44	52	17	-	柵目材	ほぼ完形 赤色顔料
W141	河道1北岸	用途不明品	(232)	66	14	-	柵目材	一部欠損 赤色顔料
W142	河道1北岸	用途不明品	(177)	(60)	13	-	割材削出し	一部欠損
W143	河道1北岸	用途不明品	158	72	47	-	割材削出し	完形
W144	河道1北岸	用途不明品	403	68	27	-	柵目材	完形
W145	河道1北岸	用途不明品	80	9	7	-	割材削出し	完形
W146	河道1北岸	用途不明品	(195)	9	8	-	割材削出し	一部欠損
W147	河道1北岸	用途不明品	(273)	9	7	-	割材削出し	一部欠損
W148	河道1北岸	繩物	(275)	(165)	-	-	-	一部欠損
W149	河道1北岸	環	191	176	-	-	-	ほぼ完形
W150	河道1北岸	環	115	96	-	-	-	ほぼ完形
W151	河道1北岸	環	115	96	-	-	-	ほぼ完形
W152	河道1北岸	環	88	64	-	-	-	一部欠損
W153	河道1北岸	環	127	36	-	-	-	一部欠損
W154	河道1北岸	樹皮製品	(121)	8	7	-	-	一部欠損
W155	河道1北岸	柱	(1487)	161	121	針葉樹(あて材)	丸太材	一部欠損 ほぞ穴
W156	河道1北岸	柱	(1383)	137	105	二葉松類	丸太材	一部欠損 ほぞ穴
W157	河道1北岸	柱	2719	89	88	二葉松類	丸太材	完形
W158	河道1北岸	柱	2335	73	69	-	丸太材	一部欠損
W159	河道1北岸	柱	(1879)	100	87	-	丸太材	一部欠損
W160	河道1北岸	柱	1672	109	108	シャシャンボ	丸太材	ほぼ完形
W161	河道1北岸	柱	1200	128	120	二葉松類	丸太材	完形
W162	河道1北岸	柱	1179	115	90	二葉松類	丸太材	ほぼ完形
W163	河道1北岸	柱	1167	108	99	二葉松類	丸太材	完形
W164	河道1北岸	柱	(612)	107	88	-	丸太材	一部欠損
W165	河道1北岸	柱	(434)	72	(42)	-	丸太材	一部欠損
W166	河道1北岸	柱	(578)	78	(40)	-	丸太材	一部欠損
W167	河道1北岸	柱	(733)	53	48	-	丸太材	一部欠損
W168	河道1北岸	梯子	(2074)	157	57	クリ	半截削出し	一部欠損
W169	河道1北岸	建築部材	2485	137	40	クリ	板目材	完形
W170	河道1北岸	建築部材	(2018)	145	29	コナラ節	板目材	一部欠損 ほぞ穴 えつり穴
W171	河道1北岸	建築部材	(2628)	150	25	コナラ節	板目材	一部欠損 ほぞ穴 えつり穴
W172	河道1北岸	建築部材	(1438)	170	29	スタジイ	板目材	一部欠損 ほぞ穴 えつり穴
W173	河道1北岸	建築部材	(977)	144	24	クリ	板目材	一部欠損 えつり穴
W174	河道1北岸	建築部材	(404)	135	(54)	-	割材削出し	一部欠損 ほぞ穴
W175	河道1北岸	職放し	837	222	72	ツブラジイ	半截削出し	ほぼ完形
W176	河道1北岸	建築部材?	650	179	8	スタジイ	板目材	一部欠損 ほぞ穴
W177	河道1北岸	栓	92	56	52	サカキ	割材削出し	ほぼ完形 穿孔
W178	河道1北岸	栓	85	51	49	サカキ	割材削出し	ほぼ完形 穿孔
W179	河道1北岸	建築部材	(453)	64	19	クスギ節またはコナラ節	柵目材	一部欠損 えつり穴
W180	河道1北岸	建築部材	(875)	68	28	コナラ節?	芯持削出し	一部欠損 えつり穴
W181	河道1北岸	建築部材	(1557)	89	32	アカガシ亜属	半截削出し	一部欠損 えつり穴
W182	河道1北岸	建築部材	(814)	94	42	クスギ節	半截削出し	一部欠損 えつり穴
W183	河道1北岸	建築部材	(1255)	54	44	-	丸太材削出し	一部欠損 えつり穴 ほぞ穴
W184	河道1北岸	建築部材	(1964)	88	32	ヒサカキ	芯持削出し	一部欠損
W185	河道1北岸	建築部材	(1077)	89	31	ヒサカキ	芯持削出し	一部欠損

遺物観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値 mm			樹種	木取り	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
W186	河道1北岸	建築部材	935	56	25	ヒサカキ	芯持削出し	一部欠損
W187	河道1北岸	建築部材	(199)	57	46	-	丸太材	一部欠損
W188	河道1北岸	建築部材	(453)	45	41	-	丸太材	一部欠損
W189	河道1北岸	建築部材	(600)	43	24	-	丸太材	一部欠損
W190	河道1北岸	建築部材	(381)	47	42	-	丸太材	一部欠損
W191	河道1北岸	建築部材	(838)	67	47	-	丸太材削出し	一部欠損
W192	河道1北岸	建築部材	(1638)	133	59	-	丸太材	一部欠損
W193	河道1北岸	建築部材	(1098)	52	44	-	丸太材削出し	一部欠損
W194	河道1北岸	建築部材	1073	43	42	ヒメシヤラ	丸太材	完形
W195	河道1北岸	建築部材	1063	48	40	クスギ節	丸太材	完形
W196	河道1北岸	建築部材	1699	48	30	スタジイ	丸太材	完形
W197	河道1北岸	建築部材	(1688)	68	50	-	丸太材	一部欠損
W198	河道1北岸	建築部材	(1636)	60	52	-	丸太材	一部欠損
W199	河道1北岸	建築部材	1596	50	43	クスギ節	丸太材	完形
W200	河道1北岸	建築部材	3095	70	60	-	丸太材	完形
W201	河道1北岸	建築部材	(2423)	57	43	-	丸太材	一部欠損
W202	河道1北岸	礎板	418	128	84	-	半截削出し	完形
W203	河道1北岸	部材	316	220	47	-	追根目?	一部欠損 穿孔
W204	河道1北岸	部材	(429)	(160)	32	-	板目材	一部欠損 穿孔
W205	河道1北岸	部材	(592)	136	17	-	板目材	一部欠損 穿孔
W206	河道1北岸	部材	(159)	43	9	-	板目材	一部欠損 穿孔
W207	河道1北岸	部材	(172)	(68)	10	-	板目材	一部欠損 穿孔
W208	河道1北岸	部材	(271)	45	20	-	割材削出し	一部欠損 穿孔
W209	河道1北岸	部材	(506)	49	20	-	板目材	一部欠損 穿孔
W210	河道1北岸	部材	(458)	75	10	-	板目材	一部欠損 穿孔
W211	河道1北岸	部材	(140)	(92)	6	-	板目材	一部欠損 穿孔
W212	河道1北岸	部材	(140)	74	13	-	板目材	一部欠損 穿孔
W213	河道1北岸	部材	212	(93)	14	-	板目材	一部欠損 穿孔
W214	河道1北岸	部材	275	187	6	-	板目材	一部欠損 穿孔
W215	河道1北岸	部材	225	152	10	アカガシ亜属	板目材	一部欠損 穿孔
W216	河道1北岸	部材	927	257	25	ウリカエデ	板目材	完形
W217	河道1北岸	部材	327	70	24	-	半截削出し	完形
W218	河道1北岸	部材	386	(111)	13	-	板目材	一部欠損
W219	河道1北岸	部材	(360)	130	15	-	板目材	一部欠損
W220	河道1北岸	部材	493	244	23	-	板目材	完形
W221	河道1北岸	用途不明部材	(6572)	75	72	クスギ節	丸太材削出し	一部欠損
W222	河道1北岸	用途不明部材	(1063)	89	57	クスギ節	半截削出し	一部欠損
W223	河道1北岸	用途不明部材	1290	83	40	-	半截削出し	一部欠損
W224	河道1北岸	用途不明部材	(797)	77	40	クスギ節	半截削出し	一部欠損
W225	河道1北岸	用途不明部材	(356)	77	56	-	丸太材削出し	一部欠損
W226	河道1北岸	粗加工材	815	64	37	-	割材削出し	ほぼ完形
W227	河道1北岸	粗加工材	827	86	37	ヤマグワ	割材削出し	完形
W228	河道1北岸	粗加工材	823	76	35	-	割材削出し	完形
W229	河道1北岸	粗加工材	888	58	44	-	割材削出し	完形
W230	河道1北岸	粗加工材	579	68	48	-	割材削出し	完形
W231	河道1北岸	粗加工材	629	103	65	-	割材削出し	完形
W232	河道1北岸	粗加工材	728	76	41	-	割材削出し	完形
W233	河道1北岸	粗加工材	750	41	46	-	割材削出し	完形
W234	河道1北岸	矢板?	(660)	(151)	(38)	-	板目材	一部欠損
W235	河道1北岸	矢板?	875	109	39	-	板目材	完形
W236	河道1北岸	二股材	233	46	46	-	丸太材	完形
W237	河道1北岸	二股材	542	136	52	-	丸太材	ほぼ完形
W238	河道1北岸	二股材	1142	76	35	-	丸太材	一部欠損
W239	河道1北岸	二股材	(1242)	58	51	-	丸太材	一部欠損
W240	河道1北岸	二股材	(1838)	132	62	-	丸太材	一部欠損
W241	河道1北岸	二股材	1796	103	69	-	丸太材	完形
W242	河道1北岸	二股材	1445	88	53	-	丸太材	完形
W243	河道1北岸	二股材	1649	125	48	-	丸太材	完形
W244	河道1北岸	二股材	2834	128	41	-	丸太材	完形
W245	河道1北岸	二股材	1823	116	85	-	丸太材	一部欠損
W246	河道1北岸	二股材	1841	184	91	-	丸太材	一部欠損
W247	河道1北岸	杭	(307)	57	42	-	丸太材	一部欠損 伐採痕
W248	河道1北岸	杭	408	30	22	-	丸太材	完形
W249	河道1北岸	杭	1056	63	43	-	丸太材	完形
W250	河道1北岸	杭	(868)	60	62	-	丸太材	一部欠損
W251	河道1北岸	杭	978	73	67	-	丸太材	ほぼ完形
W252	河道1北岸	杭	1040	70	60	-	丸太材	ほぼ完形
W253	河道1北岸	杭	1194	60	58	-	丸太材	ほぼ完形
W254	河道1北岸	杭	(2638)	53	49	-	丸太材	一部欠損
W255	河道1北岸	杭	3066	70	60	-	丸太材	ほぼ完形
W256	河道1南岸	茶柄	84	43	32	-	芯持削出し	茶台のみ
W257	河道1南岸	茶柄	122	48	17	-	芯持削出し	茶台のみ
W258	河道1南岸	ナスビ形農耕具(又鎌)	(335)	(53)	11	-	板目材	一部欠損
W259	河道1南岸	ナスビ形農耕具(又鎌)	(414)	(82)	12	-	板目材	一部欠損
W260	河道1南岸	代掻き	(286)	160	(46)	台木:アカガシ亜属 歯:アカガシ亜属 柄:アカガシ亜属	台木:割材削出し 歯:割材削出し 柄:板目材	一部欠損
W261	河道1南岸	横鎌	(99)	349	9	アカガシ亜属	板目材	一部欠損
W262	河道1南岸	鋤	a(178)	(110)	(21)	-	板目材	一部欠損
W263	河道1南岸	鋤	b(129)	(92)	(8)	-	板目材	一部欠損
W263	河道1南岸	掘棒	(85)	72	11	-	板目材	一部欠損
W264	河道1南岸	掘棒	(324)	84	14	アカガシ亜属	板目材	先端のみ
W265	河道1南岸	掘棒	(602)	94	20	-	板目材	一部欠損
W266	河道1南岸	反柄	1218	200	27	クスギ節	割材削出し	完形
W267	河道1南岸	反柄	(310)	(68)	22	-	割材削出し	一部欠損
W268	河道1南岸	柄	(515)	46	30	-	割材削出し	一部欠損
W269	河道1南岸	堅杵	566	80	56	-	割材削出し	一部欠損
W270	河道1南岸	堅杵	(604)	92	64	-	割材削出し	一部欠損
W271	河道1南岸	横槌	201	67	40	-	芯持削出し	一部欠損
W272	河道1南岸	横槌	269	68	50	-	割材削出し	完形
W273	河道1南岸	横槌	273	85	58	-	割材削出し	完形
W274	河道1南岸	横槌	(263)	94	86	-	割材削出し	一部欠損
W275	河道1南岸	横槌	(324)	97	(52)	-	芯持削出し	一部欠損
W276	河道1南岸	横槌	(357)	117	88	-	芯持削出し	一部欠損
W277	河道1南岸	木錘	101	67	51	-	芯持削出し	一部欠損
W278	河道1南岸	木錘	125	87	63	-	芯持削出し	ほぼ完形

遺物観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値 mm			樹種	木取り	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
W279	河道1南岸	木鏟	(149)	60	59	-	芯持削出し	一部欠損
W280	河道1南岸	木鏟	157	71	56	-	芯持削出し	完形
W281	河道1南岸	木鏟	176	71	58	-	芯持削出し	完形
W282	河道1南岸	櫛	(1166)	69	18	アカガシ亜属	榧目材	ほぼ完形
W283	河道1南岸	匙	(94)	51	10	-	不明	一部欠損
W284	河道1南岸	杓子形木器	164	43	6	-	榧目材	ほぼ完形
W285	河道1南岸	杓子形木器	(182)	(58)	15	-	榧目材	一部欠損
W286	河道1南岸	匙	246	81	53	-	芯持削出し	完形 未製品?
W287	河道1南岸	把手	(90)	58	23	-	榧目材	一部欠損 穿孔
W288	河道1南岸	槽	321	114	50	-	割材削出し	完形
W289	河道1南岸	背負子	(372)	(120)	28	-	芯持削出し	一部欠損
W290	河道1南岸	背負子	(410)	31	20	-	芯持削出し	一部欠損
W291	河道1南岸	背負子	(471)	33	23	-	芯持削出し	一部欠損
W292	河道1南岸	背負子	563	36	29	-	芯持削出し	一部欠損
W293	河道1南岸	用途不明品	(349)	111	23	-	榧目材	一部欠損 スカシ 穿孔
W294	河道1南岸	用途不明品	(309)	35	31	-	割材削出し	一部欠損
W295	河道1南岸	部材	(329)	(157)	11	-	榧目材	一部欠損 穿孔
W296	河道1南岸	用途不明品	(554)	43	315	-	芯持削出し	一部欠損
W297	河道1南岸	用途不明品	574	40	32	-	芯持削出し	ほぼ完形
W298	河道1南岸	用途不明品	(1630)	44	18	-	割材削出し	一部欠損
W299	河道1南岸	編物	(81)	(43)	-	-	-	一部欠損
W300	河道1南岸	編物	(160)	(101)	-	-	-	一部欠損
W301	河道1南岸	樹皮製品	99	8	7	-	-	一部欠損
W302	河道1南岸	樹皮製品	167	8	6	-	-	一部欠損
W303	河道1南岸	樹皮製品	66	16	16	-	-	棒を繋縛
W304	河道1南岸	樹皮製品	50	34	18	-	-	完形
W305	河道1南岸	用途不明品	(565)	36	16	-	芯持削出し	ほぼ完形
W306	河道1南岸	用途不明品	(309)	28	14	-	割材削出し	一部欠損
W307	河道1南岸	用途不明品	(428)	29	18	-	丸太材	一部欠損
W308	河道1南岸	用途不明品	(628)	36	27	-	丸太材	一部欠損
W309	河道1南岸	用途不明品	1502	52	40	-	丸太材	一部欠損
W310	河道1南岸	用途不明品	1626	47	40	-	丸太材	一部欠損
W311	河道1南岸	用途不明品	2824	60	38	-	丸太材	一部欠損
W312	河道1南岸	用途不明品	2772	58	53	-	丸太材	ほぼ完形
W313	河道1南岸	導管?	1237	160	73	-	丸太材?	芯はなく空洞 穿孔
W314	河道1南岸	二股材	433	(155)	55	-	丸太材	一部欠損
W315	河道1南岸	二股材	427	36	34	-	丸太材	完形
W316	河道1南岸	二股材	1209	81	(52)	-	丸太材	ほぼ完形
W317	河道1南岸	二股材	1270	47	39	-	丸太材	ほぼ完形
W318	河道1南岸	二股材	(2110)	336	141	-	丸太材	一部欠損
W319	竪穴住居51	柱	(120)	(130)	(97)	クヌギ節	丸太材	底部のみ
W320	竪穴住居51	柱	(202)	(83)	(56)	アカガシ亜属	丸太材	底部のみ
W321	井戸6	支脚	197	155	30	スギ	榧目材	完形
W322	井戸6	柄	375	35	22	-	割材削出し	一部欠損
W323	井戸6	部材	306	82	70	-	割材	完形
W324	河道1	未製品	359	117	93	-	割材削出し	未製品?
W325	河道1	横植	389	64	90	-	芯持削出し	完形
W326	河道1	底板	197	(177)	6	-	榧目材	一部欠損
W327	溝42	刀形	159	17	4	-	-	一部欠損

石器・石製品観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石 材	時 期	残存状況	備 考
			最大長	最大幅	最大厚					
S1	水田1	石鏃	22.0	14.0	2.7	0.7	サヌカイト	弥生前期	ほぼ完形	
S2	水田1	石鏃	17.5	14.5	2.5	0.6	サヌカイト	弥生前期	完形	
S3	水田1	石鏃	23.0	11.5	3.3	0.8	サヌカイト	弥生前期	完形	
S4	水田1	石鏃	23.0	12.5	3.0	0.5	サヌカイト	弥生前期	完形	
S5	畦畔1	石鏃	38.5	13.5	6.0	2.6	サヌカイト	弥生前期	完形	
S6	水田1	磨製石包丁	123.5	50.5	5.6	55.2	頁岩	弥生前期	完形	
S7	水田2	石鏃	27.5	17.0	3.0	1.2	サヌカイト	弥生前期	ほぼ完形	
S8	水田2	石鏃	24.7	12.0	2.7	0.9	サヌカイト	弥生前期	完形	
S9	水田2	石鏃	13.0	12.5	2.5	0.4	サヌカイト	弥生前期		
S10	水田2	石鏃	29.0	23.5	4.8	1.66	サヌカイト	弥生前期	完形	
S11	水田2	石鏃	32.0	8.0	4.3	1.2	サヌカイト	弥生前期		
S12	包含層	石鏃	25.0	17.0	4.0	1.3	サヌカイト	弥生前期	完形	
S13	住居 3~5	石鏃	36.5	19.5	6.0	4.0	サヌカイト	弥生後期		
S14	住居 3~5	砥石	91.0	62.0	12.5	87.9	頁岩	弥生後期		
S15	住居9	叩き石	67.0	60.0	44.0	236.1	花崗岩	弥生後期	完形	
S16	住居9	石鏃	28.0	19.0	4.0	2.1	サヌカイト	弥生後期	完形	
S17	住居16	石包丁	12.0	38.0	8.0	2.4	サヌカイト	弥生後期		
S18	住居16	砥石	139.0	138.5	61.0	1535.0	流紋岩	弥生後期		
S19	住居18	石鏃	50.0	37.0	39.0	81.6	流紋岩	弥生後期		
S20	袋状土壌4	石鏃	19.0	11.0	2.5	0.5	サヌカイト	弥生後期		
S21	土壌4	片	32.0	40.0	8.5	8.4	サヌカイト	弥生後期		
S22	土壌39	叩き石	63.0	46.5	16.0	70.7	未同定	弥生後期		
S23	土壌57	叩き石	95.0	77.0	80.0	790.0	長石	弥生後期	完形	
S24	土壌57	石皿	182.5	122.0	56.3	2060	流紋岩	弥生後期		
S25	溝26	楔形石器	29.0	28.0	7.3	8.4	サヌカイト	弥生後期	完形	スクレイパーを転用か
S26	溝26	叩き石	99.5	65.0	40.0	368.8	半花崗岩	弥生後期	完形	
S27	溝33	打製石包丁	107.5	51.0	13.0	85.7	サヌカイト	弥生後期	完形	珪酸付着
S28	溝33	打製石包丁	108.0	45.0	9.5	59.5	サヌカイト	弥生後期	完形	珪酸付着
S29	溝33	叩き石?	76.0	53.0	9.0	58.8	頁岩	弥生後期		
S30	溝33	不明	53.0	47.0	36.0	137.5	礫岩	弥生後期		珪酸付着
S31	河道1	打製石包丁	131.5	45.0	12.0	82.8	サヌカイト	弥生後期	完形	
S32	河道1	打製石包丁	77.5	45.0	23.0	96.4	ホルンフェルス	弥生後期	完形	
S33	河道1	打製石包丁	73.5	42.0	10.0	37.4	サヌカイト	弥生後期	完形	
S34	河道1	磨製石包丁	92.0	42.0	7.7	48.8	流紋岩(ガラス質)	弥生後期		
S35	河道1	柱状片刃石斧	99.0	31.5	29.5	203.6	流紋岩(黒色ガラス質)	弥生後期	ほぼ完形	
S36	河道1	石杵?	81.5	46.5	37.0	296.0	礫岩	弥生後期	完形	
S37	河道1	大型蛤刃石斧	92.5	67.0	44.0	399.2	礫岩	弥生後期		
S38	河道1	石鏃	85.0	76.5	51.5	491.9	花崗斑岩	弥生後期	完形	
S39	河道1	石鏃	76.0	74.0	60.0	476.8	花崗閃緑岩	弥生後期	完形	
S40	河道1	石鏃	73.0	62.0	54.0	362.1	未同定	弥生後期	完形	
S41	河道1	石鏃	87.0	77.5	66.0	686.5	閃緑岩	弥生後期	完形	
S42	河道1	石鏃	77.0	62.0	43.0	298.1	石英斑岩	弥生後期	完形	
S43	河道1	石皿	141.0	100.0	50.0	1135.9	礫岩	弥生後期		
S44	河道1	砥石	67.5	58.5	41.0	221.9	流紋岩	弥生後期		
S45	河道1	砥石	114.0	80.0	54.5	705.1	砂岩	弥生後期	完形	
S46	河道1	砥石	164.0	88.0	118.0	2593.6	流紋岩	弥生後期		
S47	河道1	砥石	134.0	84.0	65.0	645.7	泥岩	弥生後期		
S48	河道1	石皿	164.0	163.0	85.0	2310.0	花崗斑岩	弥生後期		
S49	河道1	砥石	70.0	56.0	40.5	216.3	流紋岩	弥生後期	ほぼ完形	
S50	河道1	砥石	72.0	41.0	43.0	141.1	流紋岩	弥生後期		
S51	河道1	砥石	66.5	37.0	33.0	144.7	流紋岩	弥生後期	ほぼ完形	
S52	河道1	砥石	48.0	24.0	21.0	39.8	流紋岩	弥生後期		
S53	河道1	砥石	92.5	64.0	39.0	253.9	流紋岩	弥生後期	ほぼ完形	
S54	河道1	砥石	54.5	63.5	37.0	178.2	流紋岩	弥生後期		
S55	河道1	砥石	112.0	43.0	13.0	72.1	頁岩	弥生後期		
S56	河道1	砥石	243.0	201.0	98.0	6500	流紋岩	弥生後期		
S57	河道1	叩き石	104.0	30.5	2.0	114.3	安山岩	弥生後期	完形	
S58	河道1	叩き石	83.0	51.0	44.0	269.7	花崗岩	弥生後期		
S59	河道1	砥石	164.0	96.0	42.5	949.2	頁岩(黒色)	弥生後期		
S60	河道1	叩き石	143.0	53.0	33.0	439.4	礫岩	弥生後期	完形	
S61	河道1	叩き石	107.0	60.0	40.0	442.0	安山岩	弥生後期		
S62	河道1	叩き石	111.5	89.0	39.0	528.7	花崗岩	弥生後期	完形	
S63	河道1	叩き石	109.5	68.5	25.0	260.5	流紋岩	弥生後期		
S64	河道1	叩き石	110.0	53.5	17.0	192.3	ガラス質安山岩	弥生後期		
S65	河道1	不明	75.0	67.5	28.0	148.0	サヌカイト	弥生後期		敲打痕あり
S66	河道1	叩き石	59.0	48.0	3.0	118.7	花崗岩	弥生後期	完形	
S67	河道1	石鏃	107.0	76.0	54.5	604.9	花崗岩	弥生後期		
S68	包含層	石鏃	32.0	19.0	4.0	2.6	サヌカイト	弥生後期		
S69	包含層	石鏃	-	36.5	17.0	5.8	サヌカイト	弥生後期		
S70	包含層	石鏃	23.0	14.5	4.0	1.2	サヌカイト	弥生後期	ほぼ完形	
S71	包含層	石鏃	22.5	15.0	3.0	0.9	サヌカイト	弥生後期	ほぼ完形	
S72	包含層	石鏃	28.0	19.0	4.0	2.1	サヌカイト	弥生後期	完形	
S73	包含層	石鏃	25.5	13.0	3.7	1.3	サヌカイト	弥生後期		
S74	土壌67	打製石包丁	82.5	32.0	7.0	22.4	サヌカイト	弥生後期	完形	珪酸付着
S75	河道2	打製石包丁	92.5	47.0	12.0	82.9	サヌカイト	弥生後期	完形	
S76	包含層	打製石包丁	83.5	42.5	9.0	39.5	古銅輝石安山岩	弥生後期	完形	
S77	包含層	打製石包丁	32.0	46.0	15.0	26.5	サヌカイト	弥生後期		珪酸付着
S78	住居41	打製石包丁	19.0	36.5	5.0	5.2	サヌカイト	弥生後期		
S79	住居45	石槍	26.0	25.5	9.0	3.9	サヌカイト	弥生後期		石包丁を転用
S80	包含層	石槍	36.5	23.5	8.5	7.1	サヌカイト	弥生後期		
S81	溝51	スクレイパー?	60.0	46.0	10.5	31.6	サヌカイト	弥生後期		
S82	12Q-P76	石鏃?	46.0	31.0	6.0	8.0	サヌカイト	弥生後期		石包丁を転用か
S83	河道2	楔形石器?	33.0	38.0	8.0	11.7	サヌカイト	弥生後期		
S84	溝53	スクレイパー	44.0	41.0	7.0	11.4	サヌカイト	弥生後期		
S85	住居45	スクレイパー	27.5	42.0	8.5	5.9	サヌカイト	弥生後期		
S86	住居45	スクレイパー	26.5	31.0	5.8	5.1	サヌカイト	弥生後期		
S87	たわみ1	スクレイパー	48.5	50.0	8.0	26.7	サヌカイト	弥生後期		
S88	住居38	片	50.0	30.0	11.0	14.1	サヌカイト	弥生後期		
S89	12R-P744	不明	24.5	46.0	7.5	9.1	未同定	弥生後期		
S90	12Q-P415	浮子	21.0	20.0	12.3	1.2	軽石	弥生後期	完形	
S91	河道2	未製品?	141.0	53.0	50.0	495.1	安山岩	弥生後期		粗割段階未製品
S92	11Q-P533	石製模造品	55.0	31.0	3.5	8.58	未同定	弥生後期		
S93	住居36	大型蛤刃石斧	128.5	63.0	51.0	800.0	礫岩	弥生後期		
S94	溝51	大型蛤刃石斧	117.0	61.0	46.0	543.3	安山岩	弥生後期		
S95	河道2	大型蛤刃石斧	103.0	75.5	54.0	660.1	安山岩	弥生後期		叩き石転用
S96	包含層	砥石	78.0	66.0	52.0	405.4	流紋岩	弥生後期		

遺物観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S 97	13Q-P61	砥石	89.0	43.0	34.0	143.5	流紋岩	弥生後期		
S 98	包含層	砥石	87.0	49.5	15.5	102.6	頁岩	弥生後期		
S 99	河道 2	砥石	143.0	73.5	36.0	540.1	泥質片岩 (黒色片岩)	弥生後期		
S100	河道 2	砥石	169.0	94.0	128.0	3037.3	粗粒花崗岩	弥生後期		
S101	包含層	石錘	88.5	68.5	58.0	475.6	花崗斑岩	弥生後期	完形	
S102	溝51	石錘	87.0	80.0	41.0	382.9	流紋岩	弥生後期	完形	
S103	包含層	石錘	59.0	56.0	37.0	171.2	花崗岩	弥生後期	完形	
S104	土壙85	石錘	78.5	68.5	47.5	419.1	閃緑岩 (細粒)	弥生後期	完形	
S105	住居81	石錘	81.0	75.5	39.0	290.6	花崗岩	弥生後期		
S106	包含層	石錘	87.0	87.0	55.0	588.0	花崗岩	弥生後期	完形	
S107	溝51	石錘	159.0	96.5	42.0	743.3	未同定	弥生後期	完形	
S108	住居24	砥石	63.0	68.0	45.0	261.1	流紋岩	古墳前期		
S109	住居43	砥石 and (叩き石)	109.0	95.0	46.0	565.0	ホルンフェルス	古墳前期	完形	
S110	住居45	砥石	67.0	57.4	22.7	85.7	未同定	古墳前期		
S111	住居46	砥石	120.0	27.0	16.0	60.0	未同定	古墳前期		
S112	住居46	砥石	63.0	57.5	35.5	134.88	流紋岩	古墳前期		
S113	住居46	砥石	78.0	33.5	33.0	128.8	流紋岩	古墳前期		
S114	住居49	浮子	42.5	34.0	25.0	9.14	軽石	古墳前期	完形	
S115	住居55	砥石	110.0	52.5	51.0	318.2	流紋岩	古墳中期		
S116	住居56	砥石	150.0	110.0	72.0	845.0	流紋岩	古墳中期	完形	
S117	住居56	たまご石	54.0	37.5	22.4	62.8	石英	古墳中期	完形 自然石	
S118	住居58	支柱石	138.0	101.0	59.0	1229.86	流紋岩	古墳中期	完形 自然石	
S119	住居60	石錘	97.0	86.0	56.0	646.9	花崗岩 (細粒)	古墳中期		
S120	住居63	砥石	59.5	28.5	29.0	61.1	流紋岩	古墳中期		
S121	井戸6	石錘	35.0	28.5	21.0	34.3	流紋岩	古墳中期	完形	
S122	井戸7	砥石	32.0	12.0	11.5	8.3	流紋岩	古墳中期		
S123	井戸9	浮子	42.0	34.0	28.0	13.1	軽石	古墳中期		
S124	たわみ1	砥石	101.5	48.5	14.5	71.3	頁岩	古墳中期		
S125	住居81	台石	260.0	279.5	73.0	6500.0	花崗岩	古墳後期		
S126	溝42	砥石	51.0	27.5	17.0	37.6	流紋岩	古代		

金属器観察表

掲載番号	器種	材質	出土遺構名	計測値(mm)			重量(g)	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M 1	鉄鏃?	鉄	竪穴住居9	(28.0)	22.0	3.0	6.14	弥・後・Ⅲ	
M 2	鉄片?	鉄	竪穴住居9	(40)	14	3	2.61	弥・後・Ⅲ	
M 3	鏃?	鉄	竪穴住居9	(38.0)	51.0	4.0	10.93	弥・後・Ⅲ	
M 4	鏃?	鉄	竪穴住居9	(31.0)	43.0	3.0	15.7	弥・後・Ⅲ	
M 5	刀子?	鉄	土壙31	(9.0)	47.0	3.0	4.87	弥・後・Ⅱ~Ⅲ	
M 6	鉄斧	鉄	土壙49	4.2	3.0	0.3	24.33	弥・後・Ⅲ	
M 7	棒状品	鉄	貝塚1	(43.0)	3.0	2.0	2.03	弥・後	
M 8	棒状品	鉄	貝塚3	(29.0)	3.0	2.0	0.9	弥・後	
M 9	方形板刃先	鉄	河道1	(36.0)	56.0	2.0	19.35	弥・後	
M10	方形板刃先	鉄	河道1	(21.0)	64.0	1.5	15.7	弥・後	
M11	刀子?	鉄	河道1	(12.0)	30.0	3.0	5.12	弥・後	
M12	たがね	鉄	河道1	6.1	1.0	-	27.33	弥・後	
M13	方形板刃先	鉄	包含層	(38.0)	85.0	2.0	65.03	弥生時代	
M14	方形板刃先?	鉄	包含層	5.5	6.5	0.3	47.08	弥生時代	木質一部残
M15	棒状品	鉄	竪穴住居34	24.0	7.0	3.0	1.58	古・前・Ⅰ	
M16	鉄鏃	鉄	竪穴住居35	(73.0)	19.0	4.0	19.71	古・前・Ⅱ	X線
M17	棒状品	鉄	竪穴住居35	(52.0)	15.0	6.0	11.47	古・前・Ⅱ	X線
M18	棒状品	鉄	竪穴住居35	(74.0)	11.0	6.0	31.24	古・前・Ⅱ	X線
M19	板状品	鉄	板状品	2.5	1.1	0.2	2.17	古・前~中	
M20	棒状品	鉄	竪穴住居39	2.6	0.8	0.4	3.15	古・前~中	
M21	鉄鏃?	鉄	竪穴住居39	2.6	0.8	0.4	2.89	古・前~中	
M22	銅鏃	銅	竪穴住居46	(22.0)	9.0	3.0	0.82	古・前・Ⅱ	
M23	やりがんな	鉄	竪穴住居46	(97.0)	7.0	2.0	20.26	古・前・Ⅱ	
M24	板状品	鉄	竪穴住居46	(28.0)	57.0	4.0	26.64	古・前・Ⅱ	
M25	鉄鏃?	鉄	竪穴住居49	(53.0)	21.0	5.0	19.31	古・前・Ⅱ	
M26	板状品	鉄	竪穴住居50	(15.0)	14.0	2.0	1.3	古・中・Ⅰ	
M27	銅鏃	銅	竪穴住居56	(25.0)	8.0	3.0	1.89	古・中・Ⅰ	
M28	鉄斧	鉄	竪穴住居79	8.9	4.9	0.5	127.32	古・後	X線
M29	やりがんな	鉄	竪穴住居80	(90.0)	10.0	3.0	30.18	古・後	
M30	鉄鏃	鉄	竪穴住居81	(25.0)	10.0	3.0	3.15	古墳時代	
M31	やりがんな	鉄	竪穴住居82	(60.0)	10.0	3.0	11.81	古墳時代	
M32	銅鏃	銅	包含層	(38.0)	16.0	3.0	3.37	古墳時代	
M33	銅鏃	銅	包含層	(31.0)	9.0	3.0	2.44	古墳時代	
M34	銅鏃	銅	包含層	2.7	1.9	0.2	2.5	古墳時代	
M35	銅鏃	銅	包含層	(22.0)	6.0	2.0	0.95	古墳時代	
M36	銅鏃	銅	包含層	(27.0)	8.0	3.0	2.14	古墳時代	
M37	用途不明品	鉄	包含層	6.3	2.3	2.3	61.78	古墳時代	X線
M38	馬鍔の歯	鉄	溝42	(190.0)	25.0	8.0	130.9	中世	
M39	馬鍔の歯	鉄	溝42	(178.0)	22.0	8.0	141.57	中世	
M40	釘	鉄	溝48	(38.0)	7.0	4.0	3.31	中世	

骨角器観察表

掲載番号	器種	出土遺構名	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
B 1	骨鏃	河道1 貝塚1	62.3	9.3	7.2	3.1	シカ角	弥生後期後半	
B 2	輪鼓状耳飾	河道1 貝塚2	11.5	2.5	5.0	0.3	エイ類椎骨	弥生後期後半	
B 3	骨鏃	河道1 北岸	78.4	12.0	9.5	6.3	シカ角	弥生後期後半	
B 4	骨鏃	河道1 北岸	46.4	10.0	9.3	3.2	シカ?肩甲骨	弥生後期後半	
B 5	骨鏃	河道1 北岸	58.2	10.7	10.0	4.3	シカ角	弥生後期後半	
B 6	骨鏃	河道1 北岸	55.5	9.0	5.5	2.6	シカ?肩甲骨	弥生後期後半	
B 7	刺突具	河道1 北岸	57.0	6.5	3.5	1.3	エイ類尾棘	弥生後期後半	
B 8	束	河道1 北岸	71.5	29.0	15.5	22.1	未同定	弥生後期後半	
B 9	管玉状製品	河道1 北岸	42.5	21.5	20.0	12.4	未同定	弥生後期後半	
B10	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	84.0	45.0	17.0	15.2	シカ角	弥生後期後半	
B11	卜骨	河道1 北岸	98.0	41.0	23.0	11.8	シカ?肩甲骨	弥生後期後半	
B12	輪鼓状耳飾	河道1 北岸	17.5	3.0	7.0	1.0	エイ類椎骨	弥生後期後半	
B13	輪鼓状耳飾	河道1 北岸	13.5	2.5	7.5	0.7	エイ類椎骨	弥生後期後半	
B14	耳せん?	河道1 北岸	14.0	7.5	6.0	0.4	エイ椎骨	弥生後期後半	
B15	輪鼓状耳飾	河道1 北岸	13.5	4.5	6.5	0.4	エイ類椎骨	弥生後期後半	
B16	輪鼓状耳飾	河道1 北岸	20.0	3.0	10.0	0.8	エイ椎骨	弥生後期後半	
B17	輪鼓状耳飾	河道1 北岸	21.5	6.0	8.5	1.7	エイ類椎骨	弥生後期後半	
B18	用途不明品	河道1 北岸	38.5	10.0	2.5	1.2	未同定	弥生後期後半	
B19	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	67.0	58.0	40.0	53.9	シカ角	弥生後期後半	
B20	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	203.0	71.0	38.5	137.9	シカ角	弥生後期後半	
B21	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	40.5	37.5	16.5	8.1	シカ角	弥生後期後半	
B22	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	159.0	66.0	23.0	42.9	シカ角	弥生後期後半	
B23	切断痕のあるシカ角	河道1 北岸	53.5	47.0	16.0	17.3	シカ角	弥生後期後半	
B24	卜骨	河道1 北岸	36.5	37.0	27.0	9.7	シカ?	弥生後期後半	
B25	刻骨	河道1 南岸	225.0	61.0	46.0	114.7	シカ角	弥生後期後半	
B26	骨鏃	河道1 南岸	55.0	9.0	7.0	2.1	シカ角	弥生後期後半	

玉類観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値(mm)				重量(g)	石	調整・特徴	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径					
J 1	住居16	管玉	9.5	2.5	-	1~1.5	0.07	碧玉	光沢あり 暗オリーブ灰色	弥・後・Ⅳ	
J 2	土壇10	小玉	3.5	-	1.7	1.0	0.02	ガラス	明るく光沢のある藍色	弥・後・Ⅲ	
J 3	土壇10	白玉	4.0	-	2.0	1.7	0.06	滑石	オリーブ灰色	弥・後・Ⅲ	
J 4	土壇57	白玉	4.0	-	3.0	1.5	0.05	滑石	オリーブ灰色	弥・後・Ⅳ	
J 5	住居35	小玉	4.6	-	3.5	1.3	0.09	ガラス	半透明で濁った青色	古・前・Ⅱ	
J 6	住居39	勾玉	14.0	7.2	1.8	なし	0.40	滑石	オリーブ灰色	古・前~中	
J 7	住居39	小玉	4.4	-	3.0	1.0	0.07	滑石	オリーブ灰色	古・前~中	
J 8	住居39	小玉	4.0	-	3.2	1.5	0.07	滑石	オリーブ灰色	古・前~中	
J 9	住居44	玉	20.5	15.5	14.5	-	6.20	石英	灰白色	古・前・Ⅱ	
J 10	住居45	管玉	24.0	5.5	-	2.0	1.96	緑色凝灰岩グリーンタフ	オリーブ灰色	古・前・Ⅱ	
J 11	住居56	小玉	5.0	-	3.0	2.0	0.10	ガラス	半透明で青に近い緑色	古・中・Ⅰ	
J 12	住居56	勾玉	24.5	13.5	7.0	2.7	3.20	滑石	オリーブ灰色	古・中・Ⅰ	
J 13	河道1	管玉	31.4	8.5	-	3.4	3.81	碧玉	オリーブ黒色	古・前	
J 14	住居73	双孔円盤	18.8	18.0	4.0	1.6	2.00	滑石	オリーブ灰色	古・後・Ⅰ	
J 15	住居78	小玉	3.0	-	3.7	1.0	0.05	ガラス	半透明で緑色	古・後・Ⅱ	
J 16	住居78	白玉	6.5	-	2.3	2.3	0.11	滑石	オリーブ灰色	古・後・Ⅱ	
J 17	住居80	小玉	3.6	-	2.5	1.0	0.04	ガラス	半透明で青に近い水色	古・後・Ⅰ	
J 18	住居81	管玉	19.5	7.5	-	2.5~3.5	1.51	碧玉	光沢あり 暗オリーブ灰色	古・後	
J 19	包含層	白玉	4.7	4.7	3.0	2.0	0.06	滑石	オリーブ灰色	古墳時代	
J 20	包含層	管玉	20.5	4.6	-	2.0	0.74	滑石	暗オリーブ灰色	古墳時代	
J 21	包含層	管玉	19.5	4.7	-	1.5~2.0	0.55	碧玉	光沢あり 緑灰	古墳時代	

鉄滓観察表

鑑定番号	出土遺構	遺構の時期	種類	大きさ(mm)	重量(g)	備考
1	溝67	中世	楕形鍛冶滓破片	45×32×20	66.03	
2	竪穴住居58	古・中・Ⅰ	鉄塊系遺物	25×20×10	8.34	
3	竪穴住居75 床面直上	古・後・Ⅰ	楕形鍛冶滓破片	60×40×30	119.79	
4	竪穴住居75	古・後・Ⅰ	炉底塊破片か	35×30×30	66.78	
5	竪穴住居73 壁体溝	古・後・Ⅰ	鍛冶滓破片か	30×20×10	9.58	
6	竪穴住居56	古・中・Ⅰ	鍛冶滓破片か	35×23×25	32.48	
7	竪穴住居56	古・中・Ⅰ	含鉄鉄滓	50×43×25	45.82	土多く付着
8	竪穴住居60	古・中・Ⅱ	楕形鍛冶滓破片か	37×45×28	52.67	
9	竪穴住居67	古・中・Ⅱ	炉底塊破片か	30×30×25	30.48	粘土付着
10	竪穴住居78	古・後・Ⅱ	炉底塊破片か	20×23×22	16.42	
11	竪穴住居41	古・前	楕形鍛冶滓半分	85×60×35	299.08	楕円形
12	竪穴住居82	古・後	流出滓(精錬滓)	40×25×20	32.55	
13	竪穴住居82	古・後	流出滓(精錬滓)	23×40×16	26.96	
14	竪穴住居82 床面	古・後	流出滓(精錬滓)	35×40×20	43.87	
15	竪穴住居82 柱穴(P3)	古・後	流出滓(精錬滓)	30×25×10	13.78	
16	12Q P21	古墳後期?	鉄塊系遺物	30×26×20	12.69	
17	12Q P27	古墳後期?	流出滓?	35×32×15	20.34	土付着
18	12Q P27	古墳後期?	ガラス質滓(鍛冶滓)	22×18×15	2.73	

※大澤正己氏による肉眼鑑定。鉄滓のほとんどは混入とみられる。

遺構名称新旧対照表

遺構名称新旧対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	時期
竪穴住居 1	No106住居	7 P・Q	弥・後・Ⅳ
竪穴住居 2	No261住居	10Q	弥・後・Ⅰ
竪穴住居 3	No168住居	10・11Q・R	弥・後
竪穴住居 4	No168住居	10・11Q・R	弥・後
竪穴住居 5	No168住居	10・11Q・R	弥・後・Ⅱ
竪穴住居 6	No182住居	11Q	弥・後・後半
竪穴住居 7	No206住居	11Q	弥・後・後半
竪穴住居 8	No247住居	11Q	弥・後・後半
竪穴住居 9	No191住居	11Q	弥・後・Ⅲ
竪穴住居10	No163住居	11Q	弥・後・Ⅲ
竪穴住居11	No166住居	11R	弥・後
竪穴住居12	無名	11Q・R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居13	No165住居	11Q・R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居14	無名	11Q・R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居15	No264住居	11Q・R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居16	No211住居	11Q・R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居17	No273住居	11R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居18	No303住居	12R	弥・後・Ⅳ
竪穴住居19	No249住居・No270土壇	12R	弥・後・Ⅲ
竪穴住居20	No304住居	12R	弥・後・Ⅲ
竪穴住居21	No255住居	12Q	弥・後・後半
竪穴住居22	未実測	12Q	弥・後
竪穴住居23	No34住居	5 Q	古・前
竪穴住居24	No280住居	9 Q	古・前
竪穴住居25	No235住居	9・10Q・R	古・前・Ⅱ
竪穴住居26	No219住居	10R	古・前・Ⅱ
竪穴住居27	No220住居	10Q・R	古・前・Ⅱ
竪穴住居28	No243住居	10Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居29	No309住居	10Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居30	No. 310住居	10Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居31	No223住居	10・11Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居32	No181住居	11Q	古・前
竪穴住居33	No238住居	11Q	古・前
竪穴住居34	No196住居	11Q	古・前・Ⅰ
竪穴住居35	No157住居	11Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居36	No226住居	11Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居37	No187住居	11Q	古・前・Ⅰ
竪穴住居38	No198住居	11Q	古・前
竪穴住居39	No248住居	12Q	古・前～中
竪穴住居40	No239住居	11・12Q・R	古・前・Ⅰ～Ⅱ
竪穴住居41	No240住居	11Q・R	古・前
竪穴住居42	No268住居	11・12Q・R	古・前
竪穴住居43	No167住居	11R	古・前・Ⅱ
竪穴住居44	No67住居	12Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居45	No68住居	12Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居46	No135住居	12R	古・前・Ⅱ
竪穴住居47	No291住居	12R	古・前・Ⅲ
竪穴住居48	No290住居	12R	古・前・Ⅲ
竪穴住居49	No93住居	13Q	古・前・Ⅱ
竪穴住居50	No14住居	5 Q	古・中・Ⅰ
竪穴住居51	No65住居	7 P	古・中・中葉
竪穴住居52	No260住居	10Q	古・中・Ⅱ
竪穴住居53	No281住居	10Q	古・中・Ⅱ
竪穴住居54	No262住居	10Q	古・中・Ⅱ
竪穴住居55	No164住居	11Q	5 c 後半
竪穴住居56	No116住居	11Q	古・中・Ⅰ
竪穴住居57	No117住居	11Q	古・中・Ⅱ
竪穴住居58	No104住居	11Q	古・中・Ⅰ
竪穴住居59	No162住居	12Q	古・中・Ⅱ
竪穴住居60	No144住居	10・11R	古・中・Ⅱ
竪穴住居61	No153住居	11R	古・中・Ⅱ
竪穴住居62	No267住居	11・12R	古・中・Ⅰ
竪穴住居63	No169住居	11・12R	古・中・Ⅱ
竪穴住居64	No141住居	12Q・R	古・中・Ⅱ
竪穴住居65	No136住居	12Q・R	古・中・Ⅱ
竪穴住居66	No123住居	12R	古・中・Ⅰ
竪穴住居67	No148住居	12R	古・中・Ⅱ
竪穴住居68	No134住居	12R	古・中・Ⅱ
竪穴住居69	No125住居	12R	古・中・Ⅱ
竪穴住居70	No69住居	12・13Q・R	古・中・Ⅱ
竪穴住居71	No66住居	7 P・Q	6 c 後半
竪穴住居72	No130住居	7 Q	古・後
竪穴住居73	No115住居	11Q	古・後・Ⅰ
竪穴住居74	No114住居	11Q	古・後
竪穴住居75	No113住居	11Q	古・後・Ⅰ
竪穴住居76	No253住居	11・12Q	古・後
竪穴住居77	No201住居	12 P・Q	古・後・Ⅱ
竪穴住居78	No170住居	11Q	古・後・Ⅱ
竪穴住居79	No155住居	12R	古・後
竪穴住居80	No128住居	11・12R	古・後・Ⅰ
竪穴住居81	No59住居	12Q	古・後
竪穴住居82	No60住居	12Q	古・後
竪穴住居83	No61住居	13Q	古・後・Ⅰ
掘立柱建物1	無名	6 Q	古・前
掘立柱建物2	No189建物	11Q	古・後・Ⅲ
掘立柱建物3	No82建物	12・13Q	古・後
井戸1	No20井戸	5 Q	古・前・Ⅱ
井戸2	No. 18井戸	5 Q	古・前
井戸3	No. 279土壇	10Q	古・前・Ⅱ
井戸4	No. 311土壇	10 P・Q	古・前・Ⅰ
井戸5	No. 286土壇	12R	古・前・Ⅰ
井戸6	No. 49井戸	6 P	古・中・Ⅰ
井戸7	No. 139土壇	7 Q	古・中・Ⅰ
井戸8	No. 315井戸	7 Q	古・中・Ⅰ
井戸9	No. 323土壇	7 P	古・中・Ⅰ
土壇墓 1	No129溝内出土人骨	7 P	弥・中
袋状土壇 1	No15袋状土壇	4 Q	弥・後・Ⅰ

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	時期
袋状土壇 2	No35袋状土壇	4 P	弥・後・Ⅰ～Ⅱ
袋状土壇 3	No30袋状土壇	4 P	弥・後・Ⅰ
袋状土壇 4	No29袋状土壇	4 Q	弥・後・Ⅰ
袋状土壇 5	No39袋状土壇	5 Q	弥・後・Ⅰ
袋状土壇 6	No282袋状土壇	10Q	弥・後・Ⅲ
土壇 1	No19土壇	5 Q	弥・後
土壇 2	No37土壇	5 Q	弥・後・Ⅱ
土壇 3	10 Q - P 77	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇 4	No244土壇	10Q	弥・後・Ⅲ
土壇 5	10 Q - P 51	10Q	弥・後
土壇 6	No216土壇	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇 7	No218土壇	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇 8	No283土壇	10Q	弥・後・Ⅲ
土壇 9	No190土壇	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇10	No200土壇	10Q	弥・後・Ⅲ
土壇11	No245土壇	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇12	No259土壇	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇13	No215土壇	10Q	弥・後・Ⅲ
土壇14	No185土壇	10Q	弥・後
土壇15	10 Q - P 166	10Q	弥・後・Ⅳ
土壇16	No258土壇	10Q	弥・後・Ⅱ
土壇17	No257土壇	10Q	弥・後・Ⅱ
土壇18	No313土壇	10Q	弥・後・Ⅱ
土壇19	No222土壇	10・11Q	弥・後・Ⅲ
土壇20	No231土壇	11Q	弥・後
土壇21	No209土壇	11Q	弥・後
土壇22	No213土壇	11Q	弥・後
土壇23	No172土壇	11Q	弥・後
土壇24	11 P - P 3	11P	弥・後
土壇25	No203土壇	11Q	弥・後・後半
土壇26	No212土壇	11Q	弥・後
土壇27	11 Q - P 28	11Q	弥・後・Ⅳ
土壇28	No241土壇	11Q	弥・後
土壇29	No251土壇	11Q	弥・後
土壇30	No179土壇	11R	弥・後
土壇31	No161土壇	11Q	弥・後・Ⅱ～Ⅲ
土壇32	No180土壇	11R	弥・後
土壇33	No159土壇	11R	弥・後
土壇34	No275土壇	11R	弥・後・Ⅳ
土壇35	No227土壇	11R	弥・後・Ⅲ
土壇36	11 R - P 442	11R	弥・後・Ⅲ
土壇37	11 R - P 441	11R	弥・後
土壇38	11 R - P 593	11R	弥・後
土壇39	11 R - P 581	11R	弥・後
土壇40	11 R - 599	11R	弥・後
土壇41	No183土壇	11Q	弥・後・Ⅲ
土壇42	No269土壇	11Q	弥・後・Ⅲ
土壇43	11 Q - P 14	11Q	弥・後
土壇44	No193土壇	12P	弥・後・Ⅲ
土壇45	No202土壇	12P	弥・後
土壇46	No192土壇	12 P・Q	弥・後
土壇47	No96土壇	12Q	弥・後・Ⅲ
土壇48	No254土壇	12Q	弥・後
土壇49	No285柱穴	12Q	弥・後・Ⅲ
土壇50	11 R - P 736	11R	弥・後
土壇51	No298土壇	12R	弥・後・Ⅳ
土壇52	No292土壇	12R	弥・後
土壇53	No278土壇	12R	弥・後
土壇54	12 R - P 600	12R	弥・後
土壇55	No274土壇	12R	弥・後
土壇56	No296土壇	12R	弥・後・Ⅳ
土壇57	No300袋状土壇	12R	弥・後・Ⅳ
土壇58	No145土壇	12R	弥・後・Ⅲ
土壇59	12 R - P 759	12R	弥・後
土壇60	No100土壇	12・13R	弥・後
土壇61	No40土壇	5 Q	古・前・Ⅱ
土壇62	No80土壇	6 Q	古・前
土壇63	No109土壇	6 Q	古・前・Ⅰ
土壇64	No118土壇	6 Q	古・前
土壇65	No322土壇	7 P	古・前
土壇66	No320土壇	7 Q	古・前・Ⅲ
土壇67	No242土壇	10Q	古・前・Ⅱ
土壇68	No210土壇	11Q	古・前
土壇69	No224土壇	10Q	古・前
土壇70	No221土壇	10Q	古・前・Ⅱ
土壇71	No184土壇	11Q	古・前・Ⅱ
土壇72	No147土壇	12Q	古・前
土壇73	No138土壇	12R	古・前
土壇74	No272土壇	12Q	古・前・Ⅰ
土壇75	No98土壇	13Q	古・前
土壇76	No99土壇	13Q	古・前・Ⅱ
土壇77	No81土壇	13Q	古・前・Ⅲ
土壇78	No112土壇	6 Q	古・中
土壇79	No137土壇	6 Q	古・中
土壇80	No314土壇	9 Q	古・中
土壇81	No246土壇	11Q	古・中・Ⅱ
土壇82	No121土壇	6 Q	古・後
土壇83	No108土壇	6 Q	古・後
土壇84	No232土壇	11Q	古・後
土壇85	No158土壇	11Q	古・後・Ⅰ
土壇86	No173土壇	11Q	古・後
土壇87	No250土壇	12Q	古・後
土壇88	No188土壇	11Q	古・後
土壇89	No97土壇	12Q	古・後
土壇90	No194土壇	12P	古・後・Ⅲ
土壇91	No103土壇	13R	古・後・Ⅲ
土壇92	No83土壇	6 Q	古代

遺構名称新旧対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	時期
土塚93	No73土塚	7 P	古代
土塚94	No208土塚	11Q	古代
土塚95	No48土塚	5・6 P	近世
土塚96	No105たわみ	7 P	近世
溝 1	No38・44溝	4～6 Q、7 P	弥・前
溝 2	No44溝	6 Q	弥・前
溝 3		10・11Q	弥・前
溝 4		10・11Q	弥・前
溝 5		11R～12Q	弥・前
溝 6		11R～12Q	弥・前
溝 7	No46溝	4 Q	弥・前
溝 8		10Q	弥・前
溝 9		10Q	弥・前
溝10		10Q	弥・前
溝11		10Q	弥・前
溝12	No45溝	5 Q～7 P	弥・中
溝13	No129 a 溝	6 P	弥・中
溝14	No129 b 溝	6 P	弥・中
溝15	No126溝	6 Q	弥・中
溝16	No317溝	11Q	弥・中
溝17	No306溝	10・11Q	弥・中
溝18	No307溝	11R～12Q	弥・中
溝19		11Q	弥・中
溝20		11Q	弥・中
溝21		11Q	弥・中
溝22	No 2 溝	3 Q	弥・後・Ⅱ
溝23	No21溝	4 P	弥・後
溝24	No 9 溝	4 Q～5 P	弥・後・Ⅲ
溝25	No10溝	4 Q～5 P	弥・後・Ⅲ
溝26	No22溝	4 Q～5 P	弥・後・Ⅱ
溝27	No42・120溝	4 R～6 Q	弥・後・Ⅰ
溝28	No43溝	4 R	弥・後
溝29	No44溝	4 R～5 R	弥・後
溝30	No26溝	5 Q	弥・後
溝31	No146溝	5・6 Q	弥・後
溝32	No92溝	6 P・Q	弥・後・前半
溝33	No45溝	5 Q～7 P	弥・後・Ⅲ
溝34	No302溝	12R	弥・後
溝35	No301溝?	12R	弥・後
溝36	No 3 溝	3 Q～4 P	古・前
溝37	No319溝	7 P・Q	古・前
溝38	No318溝	7 P・Q	古・前
溝39	No23溝	4 Q～5 P	古・中・Ⅱ
溝40	No64溝	7 P	6 c 後半
溝41	No271溝	12R	古・後
溝42	No47溝	6 P・Q	古代
溝43	No177溝	10Q・R	古代
溝44	No176溝	10Q	古代
溝45	No263溝	10Q	古代
溝46	No143・175溝	10Q・11R	古代
溝47	No62溝	12Q	古代
溝48	No142溝	11Q	古代
溝49	無名	4 区	古代
溝50	無名	4 区	古代
溝51	No24溝	4 Q～5 P	中世
溝52	No28溝	5 P・Q	中世
溝53	No12溝	4 R～5 P	中世
溝54	No84溝	6 Q	中世
溝55	No13・11溝	5 Q・R	中世
溝56	No 8 溝	5 R～5 P	中世
溝57	No 7 溝	5 R～5 P	中世
溝58	No 6 溝	5 P	中世
溝59	No51溝	7 P・6 P	中世
溝60	No50溝	7 P	近世
溝61	No 4 溝	5 P	中世末～近世
溝62	No107溝	6 Q	中世
溝63	No122溝	7 Q	中近世
溝64	No110溝	7 Q	中近世
溝65	No111溝	7 Q	中世
溝66	No76溝	11・12Q	中世
溝67	No74溝	11R～12Q	中世
溝68	No75溝	11・12R	中世
溝69	No 1 溝	4 P	近代

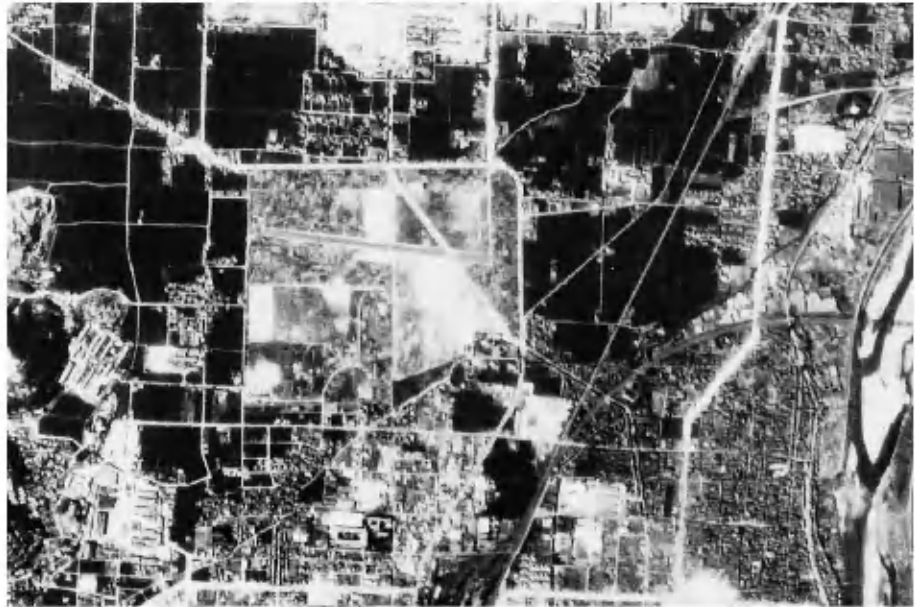
報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	時期
池 1	No150池	6 Q	弥生中期
たわみ 1	No.16たわみ	4 Q、5 P・Q	5 C末～6 C初
土器だまり 1	土器だまり1		古・中・Ⅰ
貝塚 1	貝塚 1		弥生後期
貝塚 2	貝塚 2		弥生後期
貝塚 3	貝塚 3		弥生後期
貝塚 4	貝塚 4		弥生後期
貝塚 5	No321貝塚		古・前
微高地 1	鳥状高まり	4 Q	弥生前期
微高地 2	鳥状高まり	4 Q	弥生前期
水田 1		1 区	弥生前期
水田 2		3 区	弥生前期
水田 3		1 区	弥生前期
水田 4		3 区	弥生前期
水田 5		4 区	弥生前期
水田 6		5 区	弥生前期
畦路 1		11R～12Q	弥生前期
畦路 2		11R～12Q	弥生前期
配置土器	配置土器	6 Q	古・後・Ⅰ
河道 1	No140河道	1～3 区	弥生後期～古墳
河道 2	No237河道	3 区	古墳時代
足場	足場		弥生後期
護岸 1			弥生後期
護岸 2			弥生後期

版 图

1 遠景
(南西から)



2 空中写真
(昭和23年南から)



3 空中写真
(昭和37年北東から)



図版 2



1 水田 1
(西上空から)



2 水田 1
(南西から)



3 水田 1
石包丁出土状況
(南西から)

1 水田 1
(南から)



2 水田 1
(北西から)



3 水田 3
(南西から)



図版 4



1 水田 2
(南から)



2 水田 4
(北東から)



3 水田 4
(南から)

1 溝 12・33
(南西から)



2 溝 12・33
土層断面
(南西から)



3 溝 12・33
土層断面
(北東から)



図版 6



1 溝 33
(南から)



2 溝 16~21
(南西から)



3 土壇墓 1
(南西から)

1 溝12~14・池1
(南から)



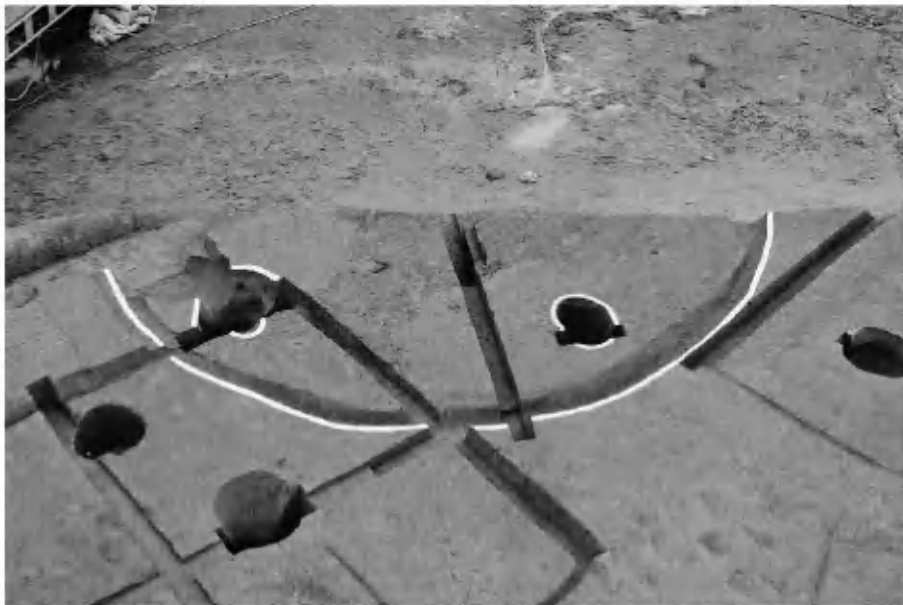
2 池1 堰
(南から)



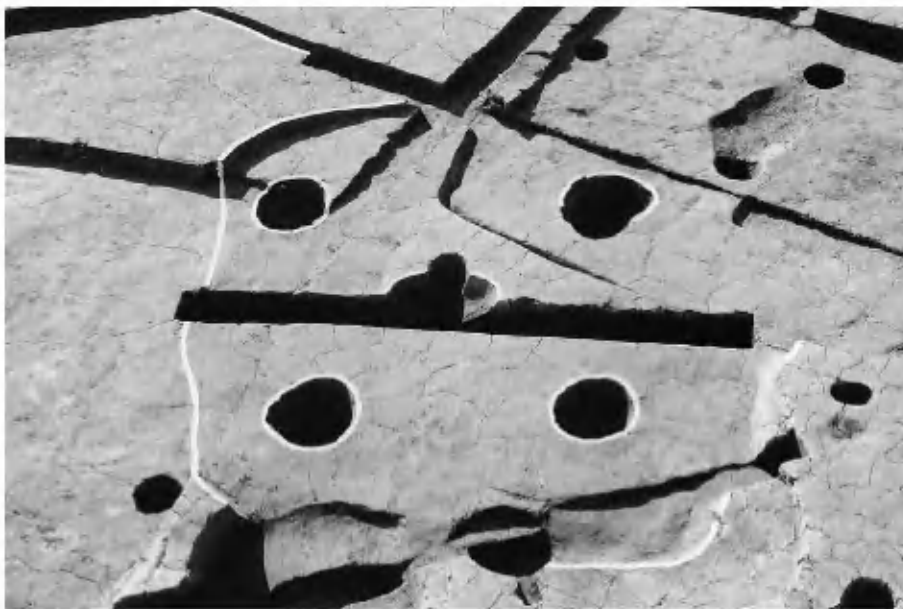
3 池1
籠状有機物
出土状況
(南から)



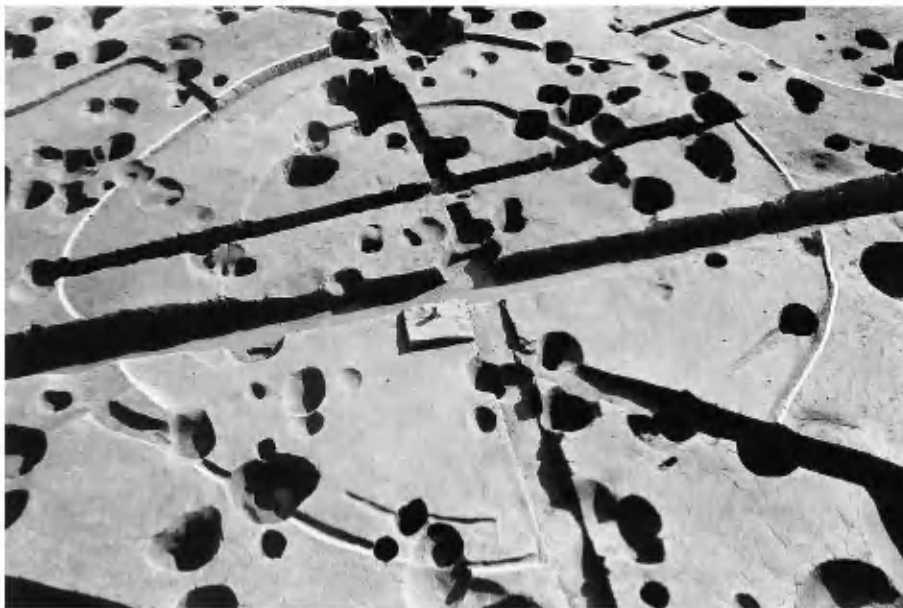
図版 8



1 竪穴住居 1
(南から)



2 竪穴住居 2
(東から)



3 竪穴住居 3~5
(北から)

1 竪穴住居 6~8
(南から)



2 竪穴住居 9
(東から)



3 竪穴住居 10
(東から)



図版 10



1 豎穴住居 11~16
 (南から)



2 豎穴住居 17
 (西から)



3 豎穴住居 18
 (南東から)

1 竪穴住居 19
(東から)



2 竪穴住居 20
(東から)



3 竪穴住居 21
(南東から)



図版 12



1 袋状土壇 1
(北東から)



2 袋状土壇 4
(南東から)



3 土壇 10
(北東から)

1 土壌 10
炭化米出土状況
(南東から)



2 土壌 18
(北東から)



3 土壌 57
(南東から)





1 河道1 全景
(南から)



2 河道1 北岸
遺物出土状況
(東から)



3 河道1 北岸
木製品出土状況
(北東から)

1 河道1北岸
貝塚1と
階段状遺構
(東から)



2 河道1北岸
貝塚4
(南から)



3 河道1北岸
護岸杭列
(西から)





1 河道1北岸
建築部材
出土状況1
(南東から)



2 河道1北岸
建築部材
出土状況2
(南から)

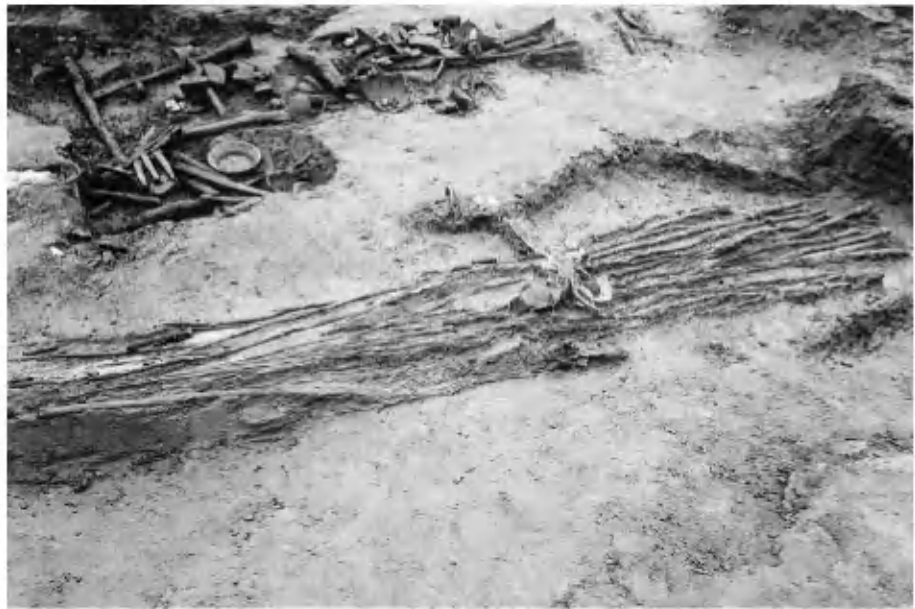


3 河道1北岸
建築部材
出土状況3
(東から)

1 河道1北岸
構造材1
出土状況
(南から)

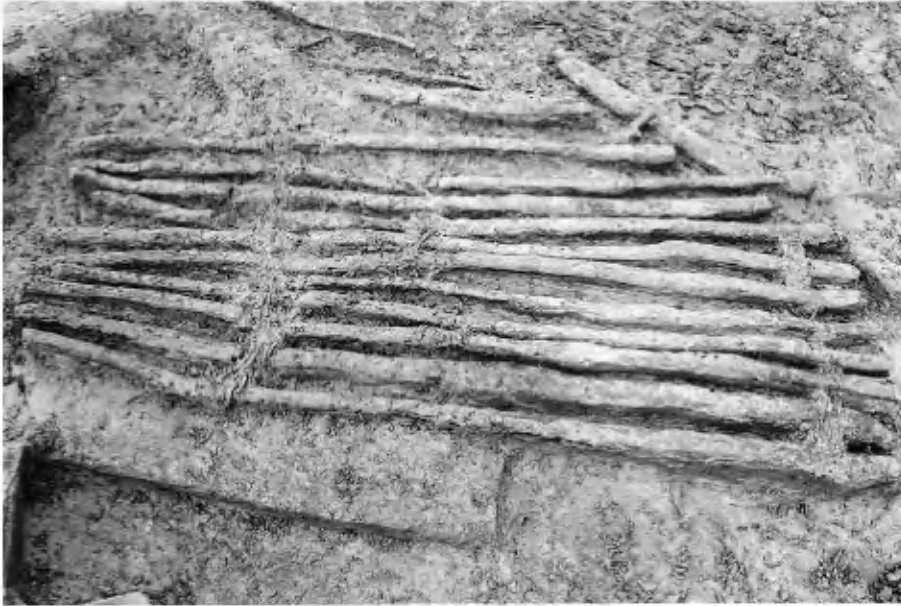


2 河道1北岸
構造材2
出土状況
(南東から)



3 河道1北岸
構造材7
出土状況
(南東から)





1 河道1北岸
構造材3
出土状況
(南から)

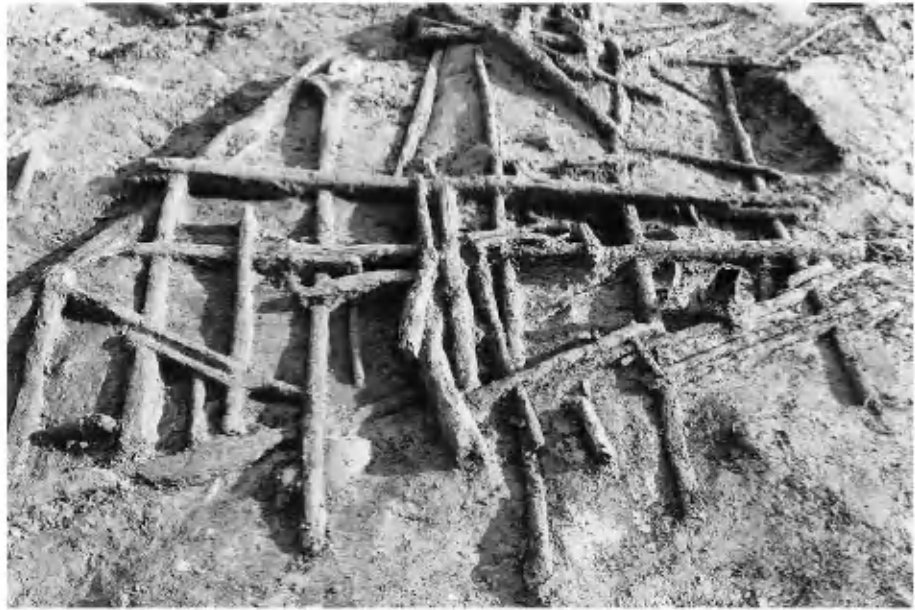


2 河道1北岸
構造材3
緊縛状況1
(東から)



3 河道1北岸
構造材3
緊縛状況2
(東から)

1 河道 1 北岸
構造材 5
出土状況
(北東から)



2 河道 1 北岸
構造材 6
出土状況 1
(南東から)



3 河道 1 北岸
構造材 6
出土状況 2
(北西から)



図版 20



1 河道1北岸
構造材6
緊縛状況
(北から)



2 河道1北岸
構造材6
緊縛状況
(北から)



3 河道1北岸
構造材6
緊縛状況
(南から)

1 河道1北岸
植物樹皮
出土状況
(南西から)



2 河道1北岸
植物性繊維
出土状況
(南から)

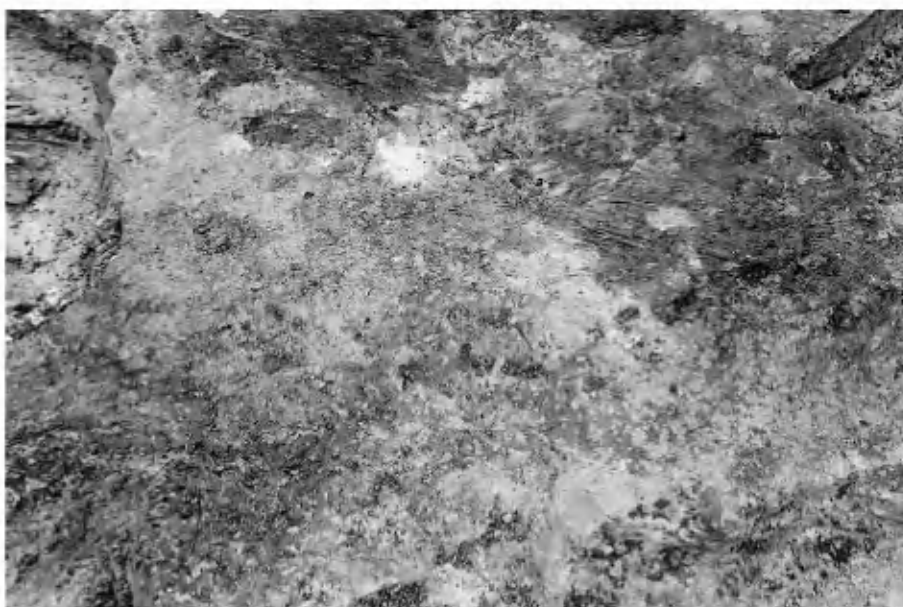


3 河道1北岸
植物性繊維
出土状況
(南から)





1 河道1北岸
植物性繊維
出土状況
(西から)



2 河道1北岸
植物性繊維
出土状況
(南東から)



3 河道1北岸
植物性繊維および
構造材出土状況
(北から)

1 河道1北岸
遺物出土状況1
(北東から)



2 河道1北岸
赤色顔料
出土土器
(南東から)



3 河道1北岸
土器内植物繊維
出土状況
(南から)

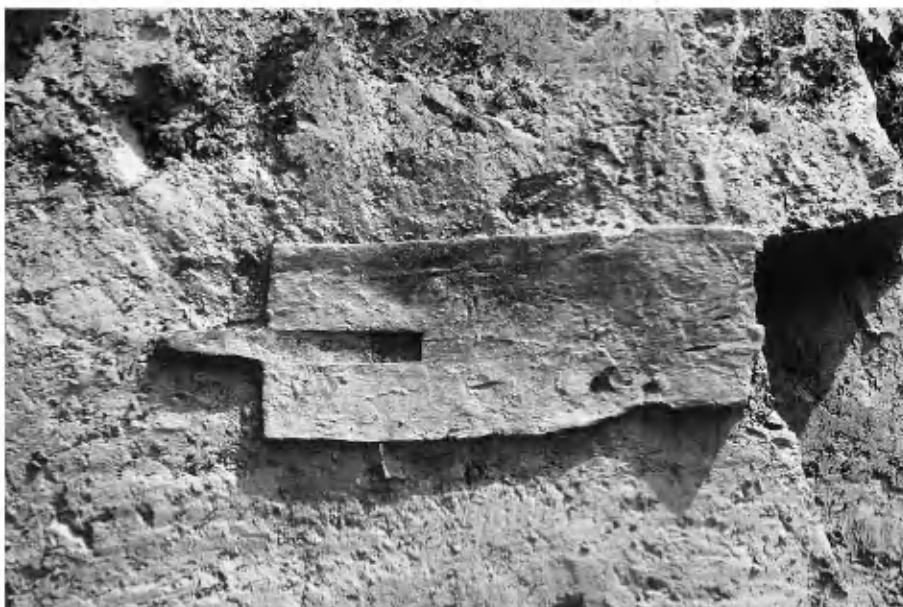




1 河道1北岸
ナスビ形農耕具
出土状況
(東から)



2 河道1北岸
ナスビ形農耕具
出土状況
(北から)



3 河道1北岸
鋤出土状況
(北から)

1 河道1北岸
代掻き出土状況
(東から)



2 河道1北岸
反柄出土状況
(北から)

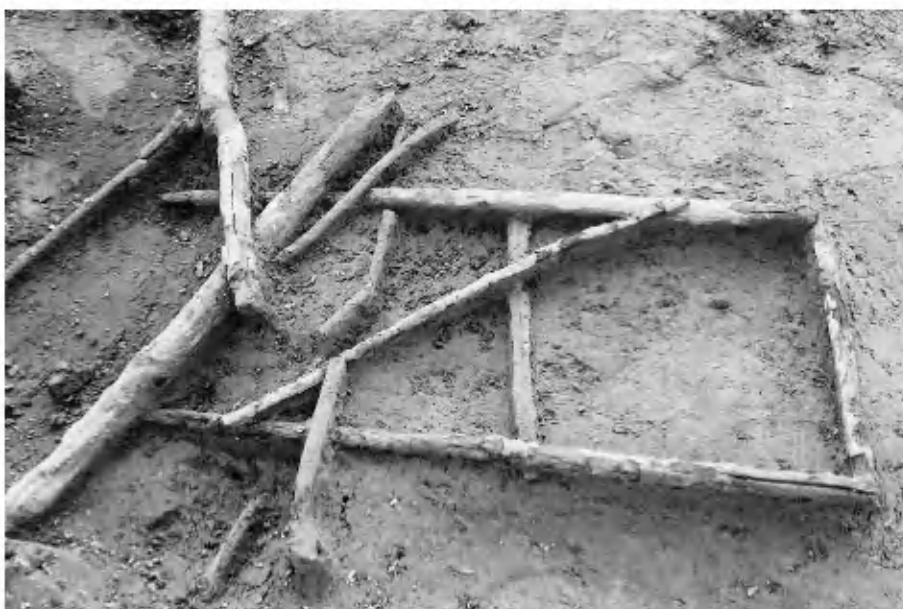


3 河道1北岸
裝飾板出土状況
(南から)





1 河道1北岸
腰掛け出土状況
(南から)



2 河道1北岸
先端加工材
出土状況
(北から)



3 河道1北岸
環出土状況
(東から)

1 河道1北岸
蹴放し出土状況
(北西から)



2 河道1北岸
槍状部材
出土状況
(北西から)



3 河道1北岸
粗加工材
出土状況
(南西から)





1 河道1南岸
木製品出土状況
(北東から)

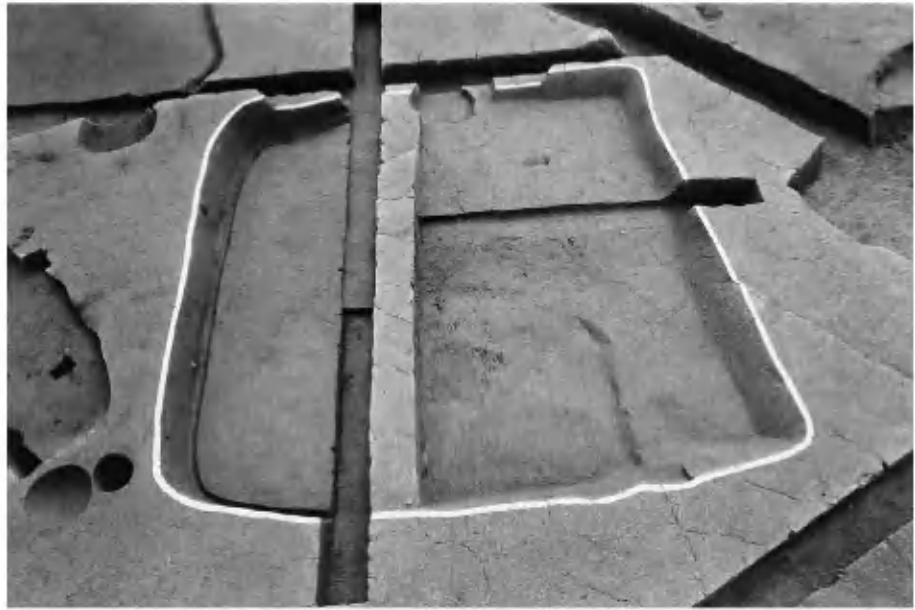


2 河道1南岸
代掻き出土状況
(南から)



3 河道1南岸
刻骨出土状況
(北から)

1 竪穴住居 28
(北東から)



2 竪穴住居 29
(南東から)



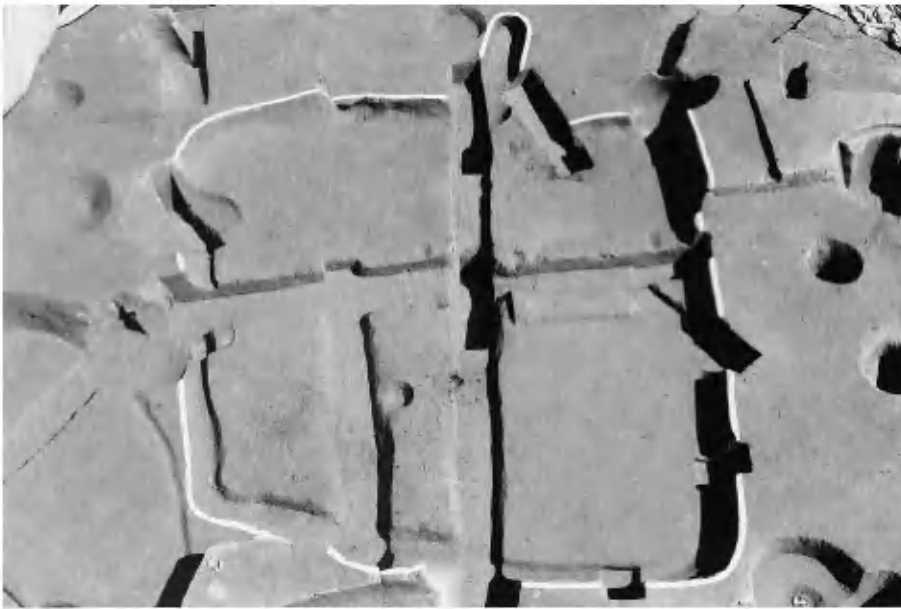
3 竪穴住居 30
(南東から)



図版 30



1 竪穴住居 31
(北東から)



2 竪穴住居 34
(南西から)

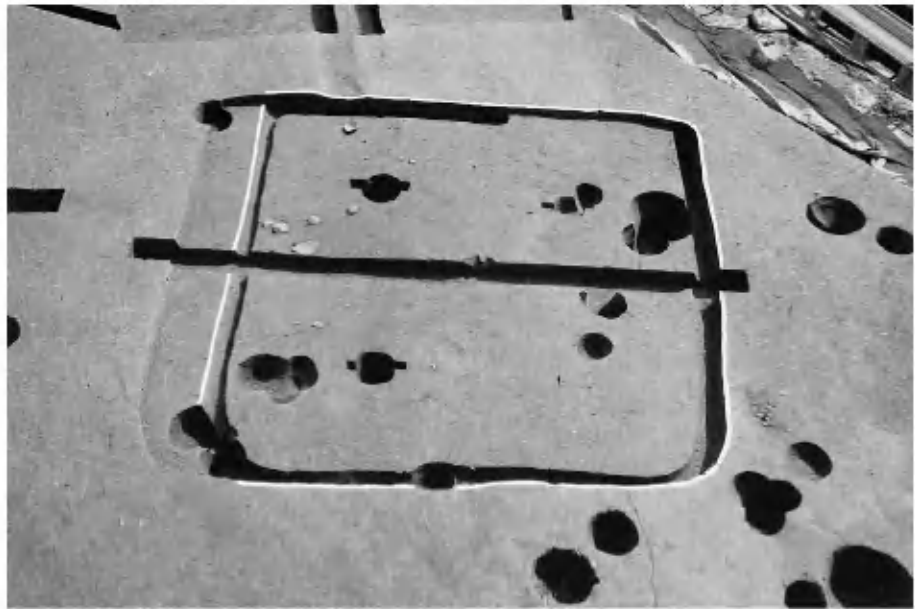


3 竪穴住居 35
(南東から)

1 竪穴住居 36
(北東から)

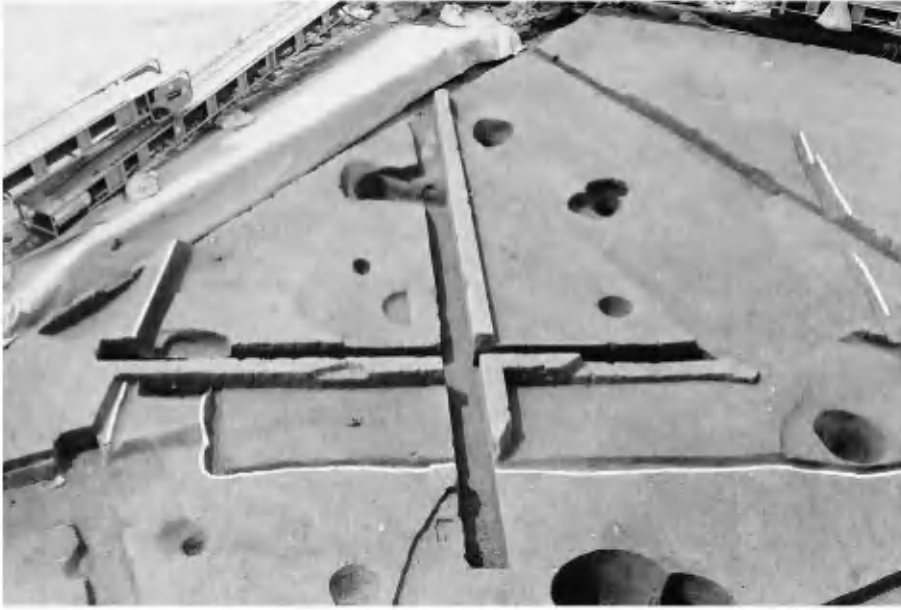


2 竪穴住居 37
(北東から)



3 竪穴住居 39
(西から)





1 竪穴住居 40・41
(北東から)



2 竪穴住居 42
(南東から)

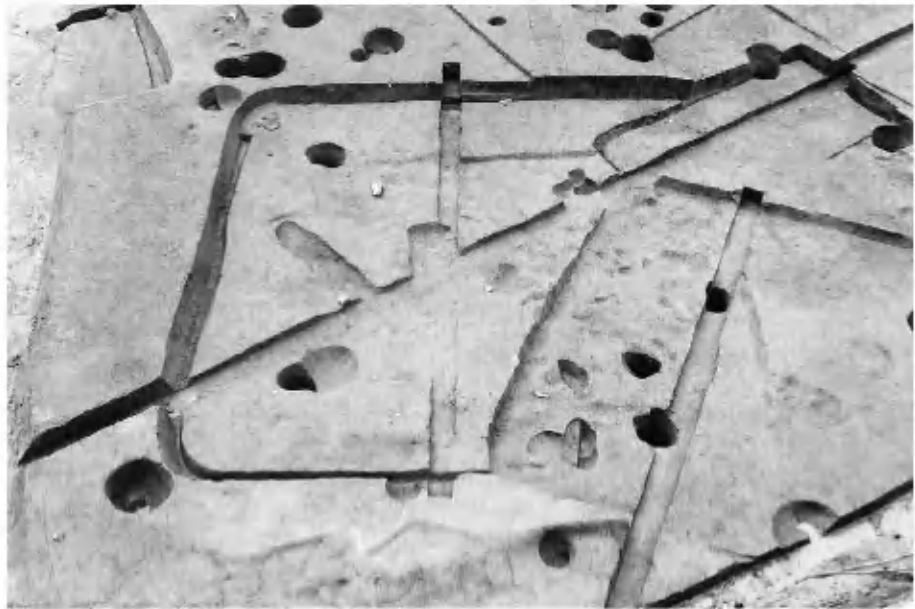


3 竪穴住居 43
(北西から)

1 竪穴住居 45
(南西から)



2 竪穴住居 46
(南から)



3 竪穴住居 49
(南東から)



図版 34



1 井戸1
(南から)



2 井戸2
(北から)



3 井戸5
(北西から)

1 土壙 67
炭化米
出土状況
(北東から)



2 土壙 68
製塩土器
出土状況
(北東から)



3 竪穴住居 51
(南東から)





1 竪穴住居 54
(北東から)

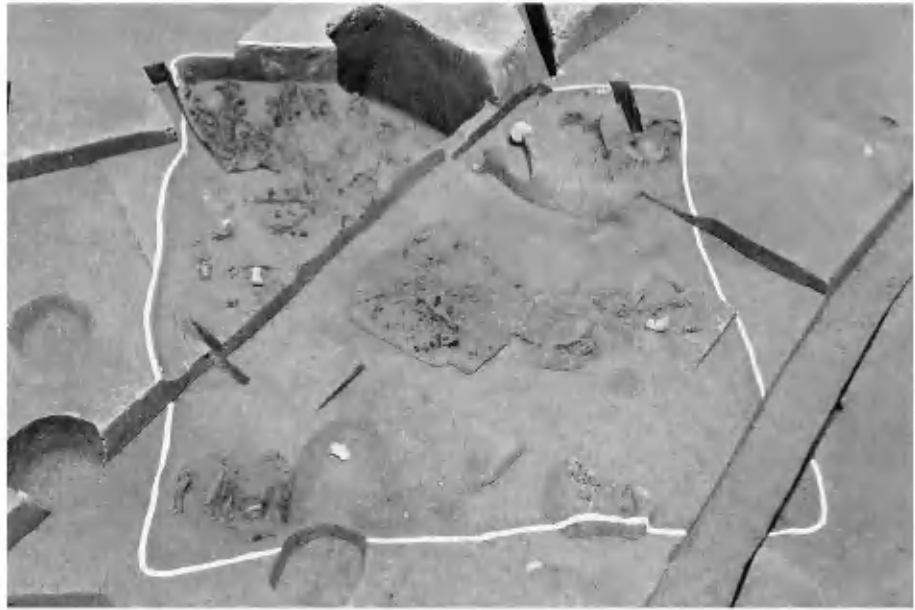


2 竪穴住居 54
カマド
(北から)

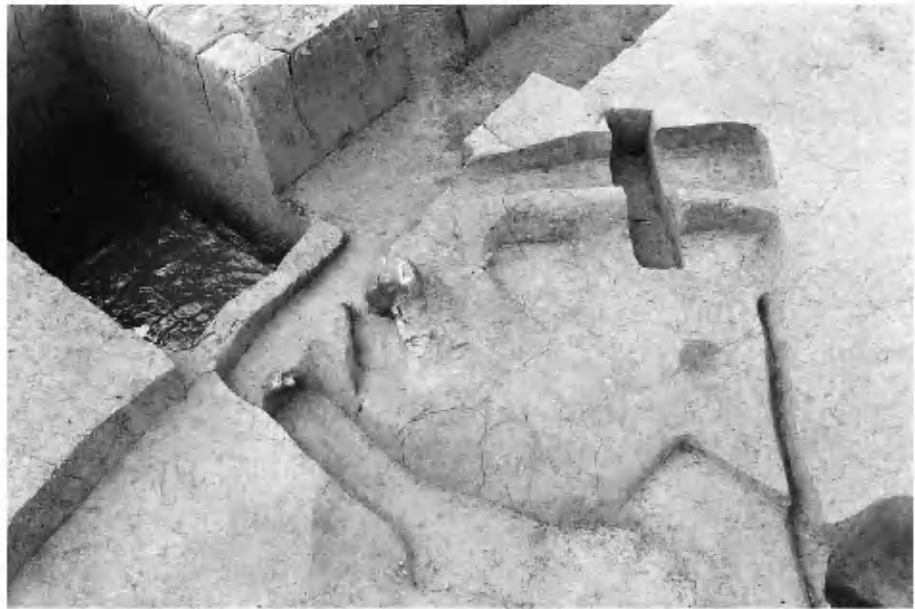


3 竪穴住居 54
カマド
(北西から)

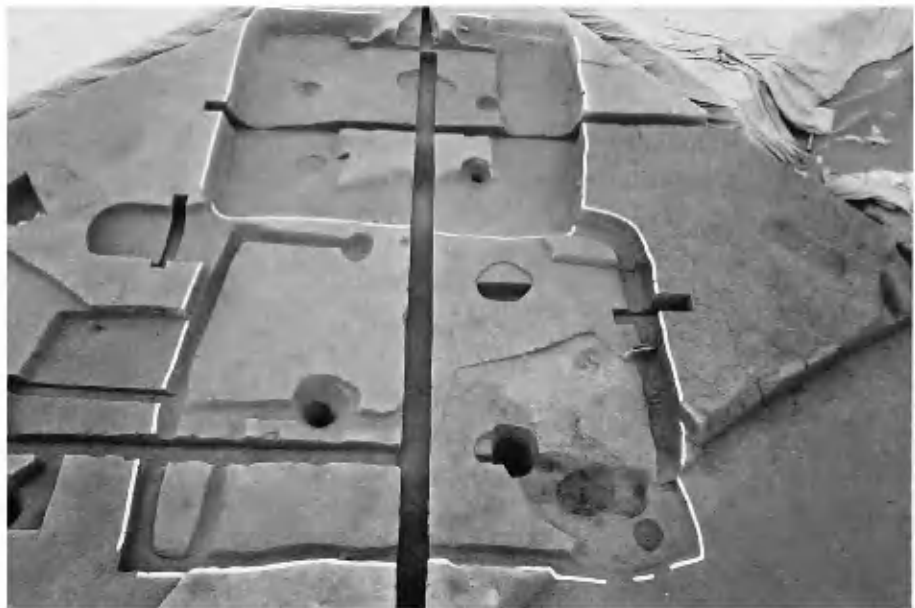
1 竪穴住居 55
炭化材
出土状況
(南東から)

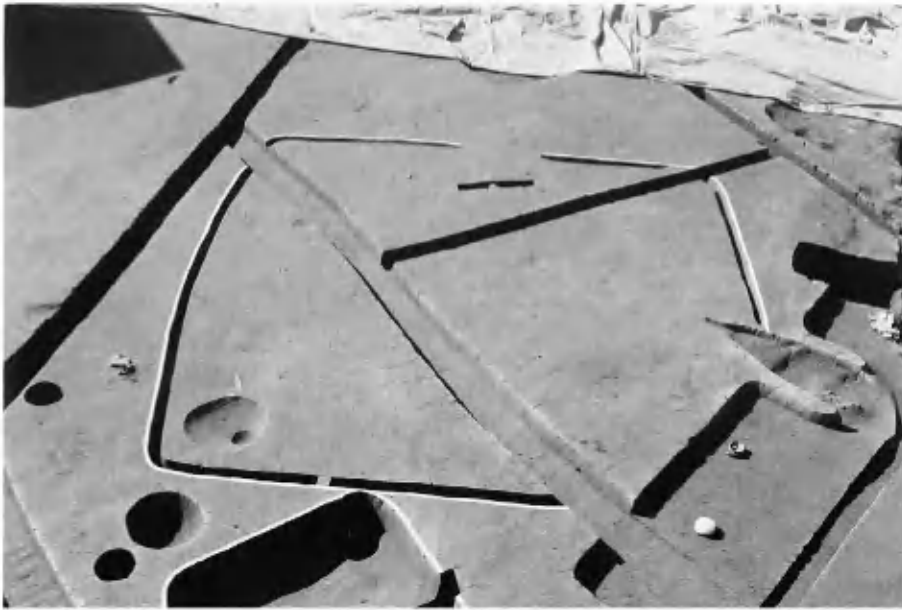


2 竪穴住居 55
カマド
(南東から)

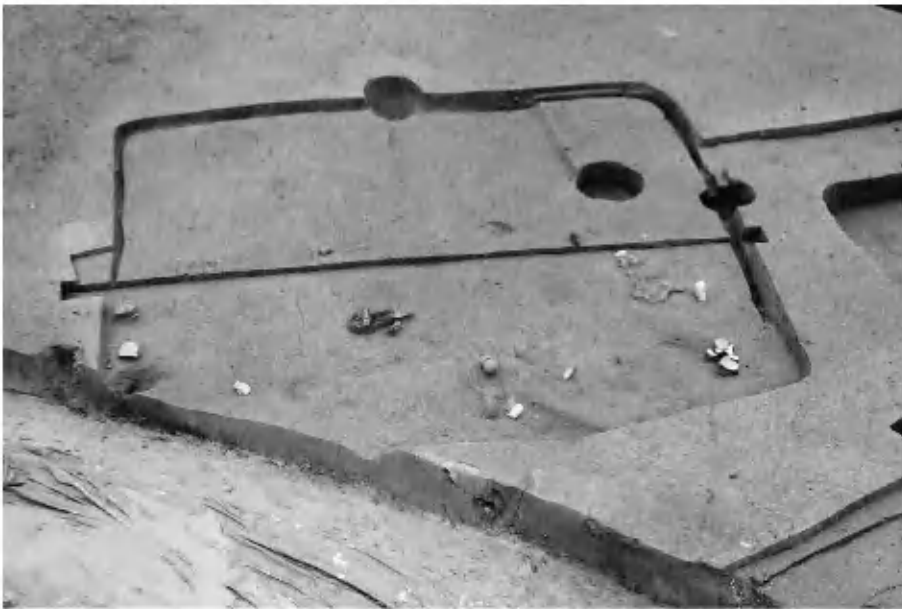


3 竪穴住居 56・73
(南東から)





1 竪穴住居 57
(南から)



2 竪穴住居 58
(南東から)



3 竪穴住居 59
(南東から)

1 竪穴住居 60
(南から)

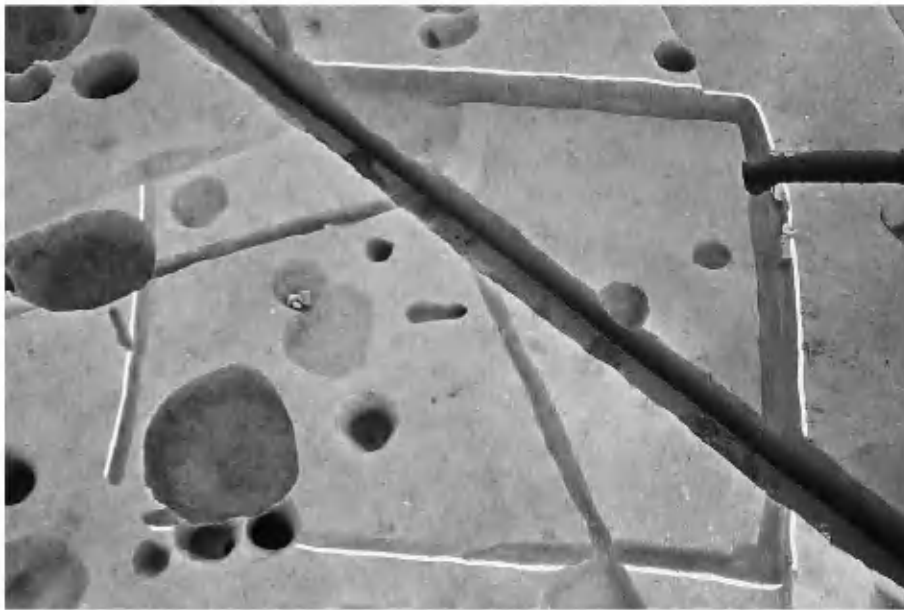


2 竪穴住居 60
カマド
(南から)



3 竪穴住居 61
(南から)





1 竪穴住居 62
(北西から)

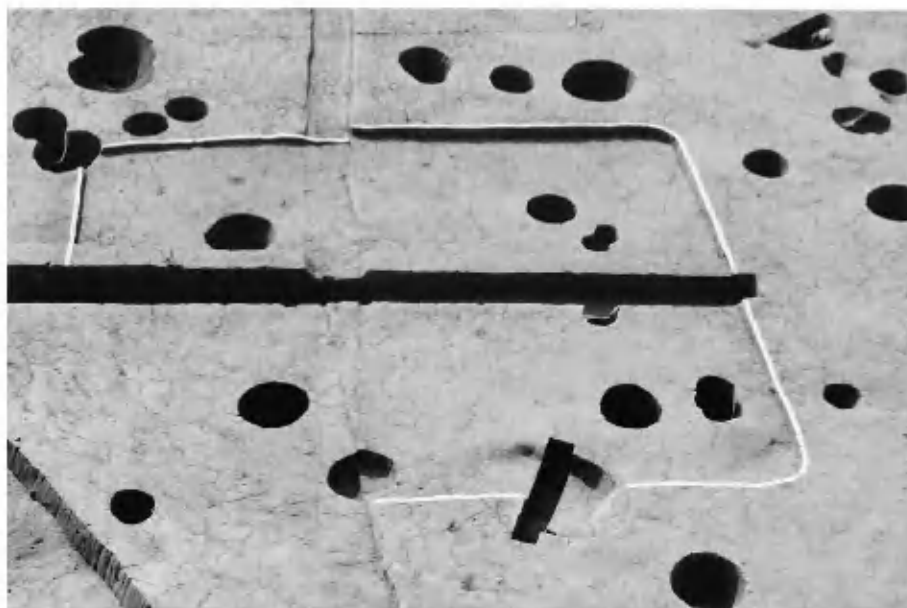


2 竪穴住居 63
(南から)



3 竪穴住居 64
(南西から)

1 竪穴住居 66
(南東から)



2 竪穴住居 67
(南西から)

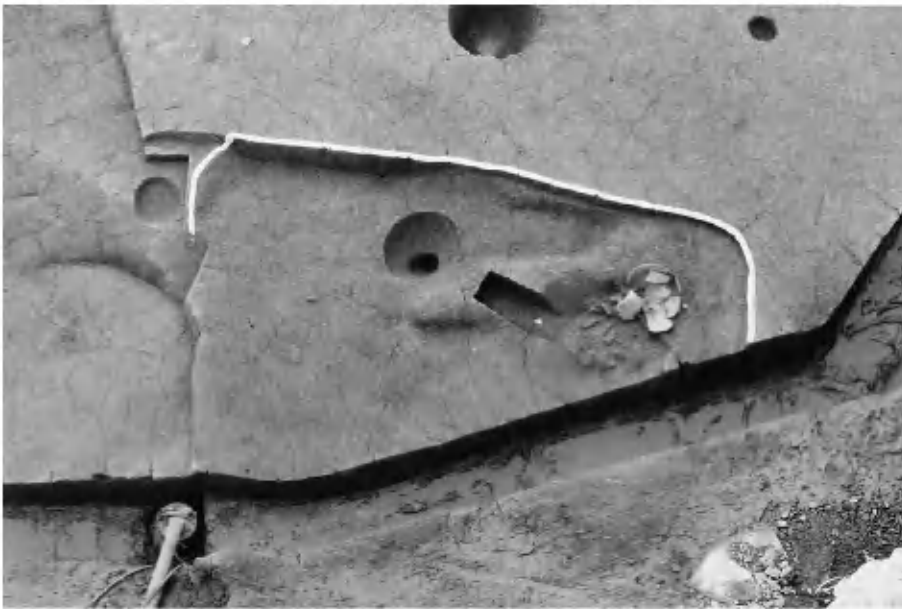


3 竪穴住居 67
カマド
(北西から)





1 竪穴住居 68
(南東から)



2 竪穴住居 69
(南東から)



3 竪穴住居 69
カマド
(南から)

1 竪穴住居 70
(東から)



2 井戸 6
(西から)



3 井戸 7
(南東から)



図版 44



1 井戸 8
(北から)



2 井戸 9
下層土器
出土状況
(東から)



3 土器溜まり 1
(西から)

1 土器溜まり 1
(東から)

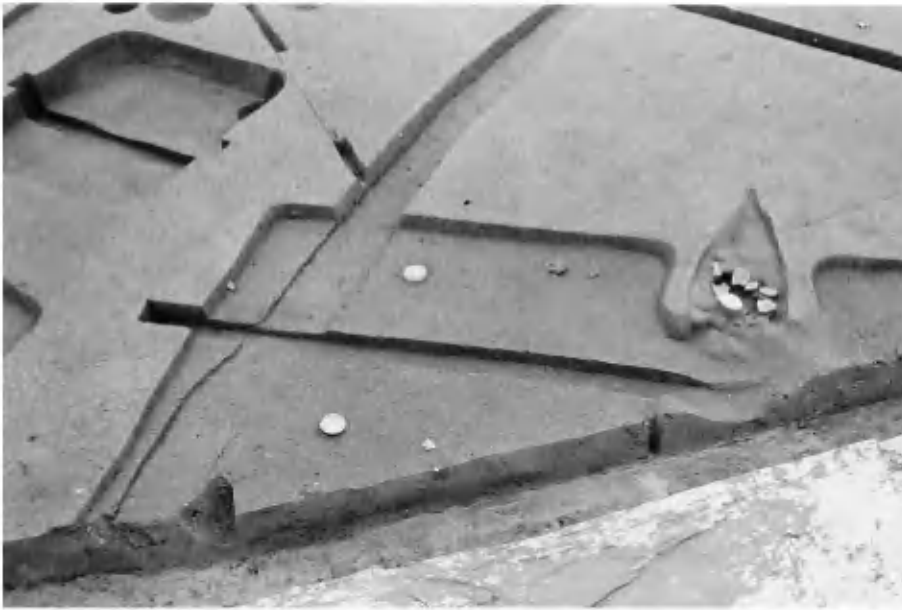


2 竪穴住居 73
(南東から)



3 竪穴住居 74
(南から)





1 豎穴住居 75
(東から)



2 豎穴住居 75
カマド
(東から)

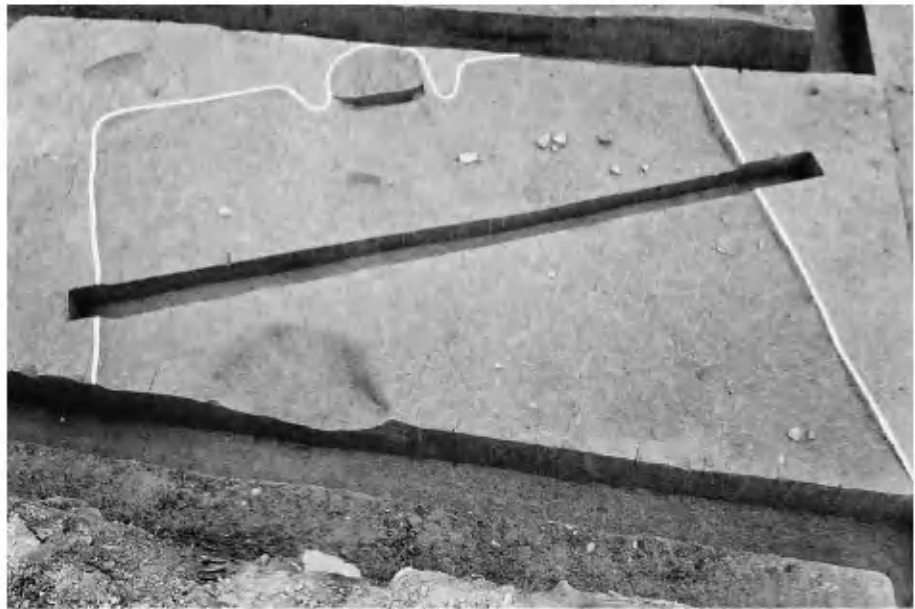


3 豎穴住居 77
(南から)

1 竪穴住居 80
(南から)

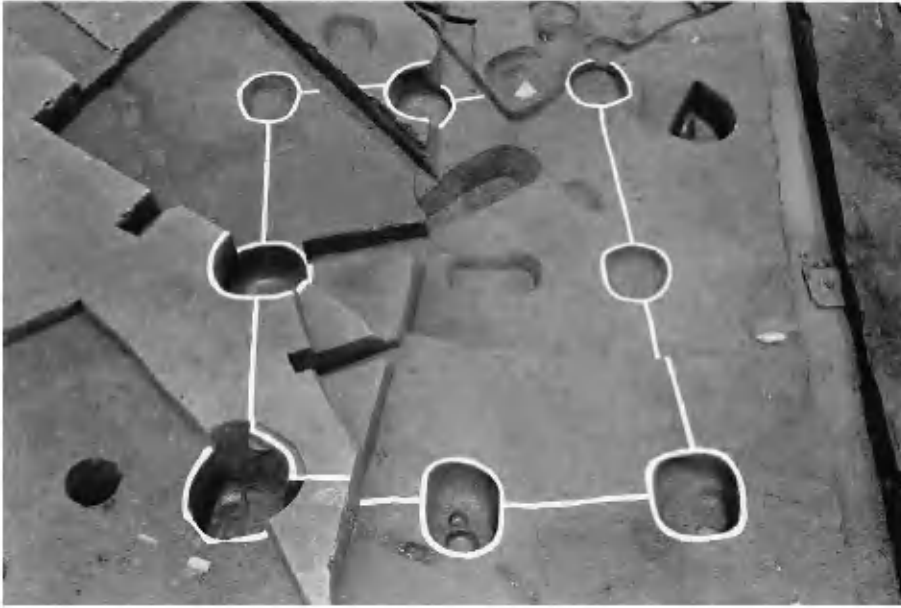


2 竪穴住居 82
(南東から)



3 竪穴住居 83
(南東から)





1 掘立柱建物 2
(南から)



2 配置土器 1
出土状況
(南から)



3 河道 2
(北から)

1 3区全景
(北から)



2 溝 42
(西から)



3 溝 43~48
(北西から)



図版 50



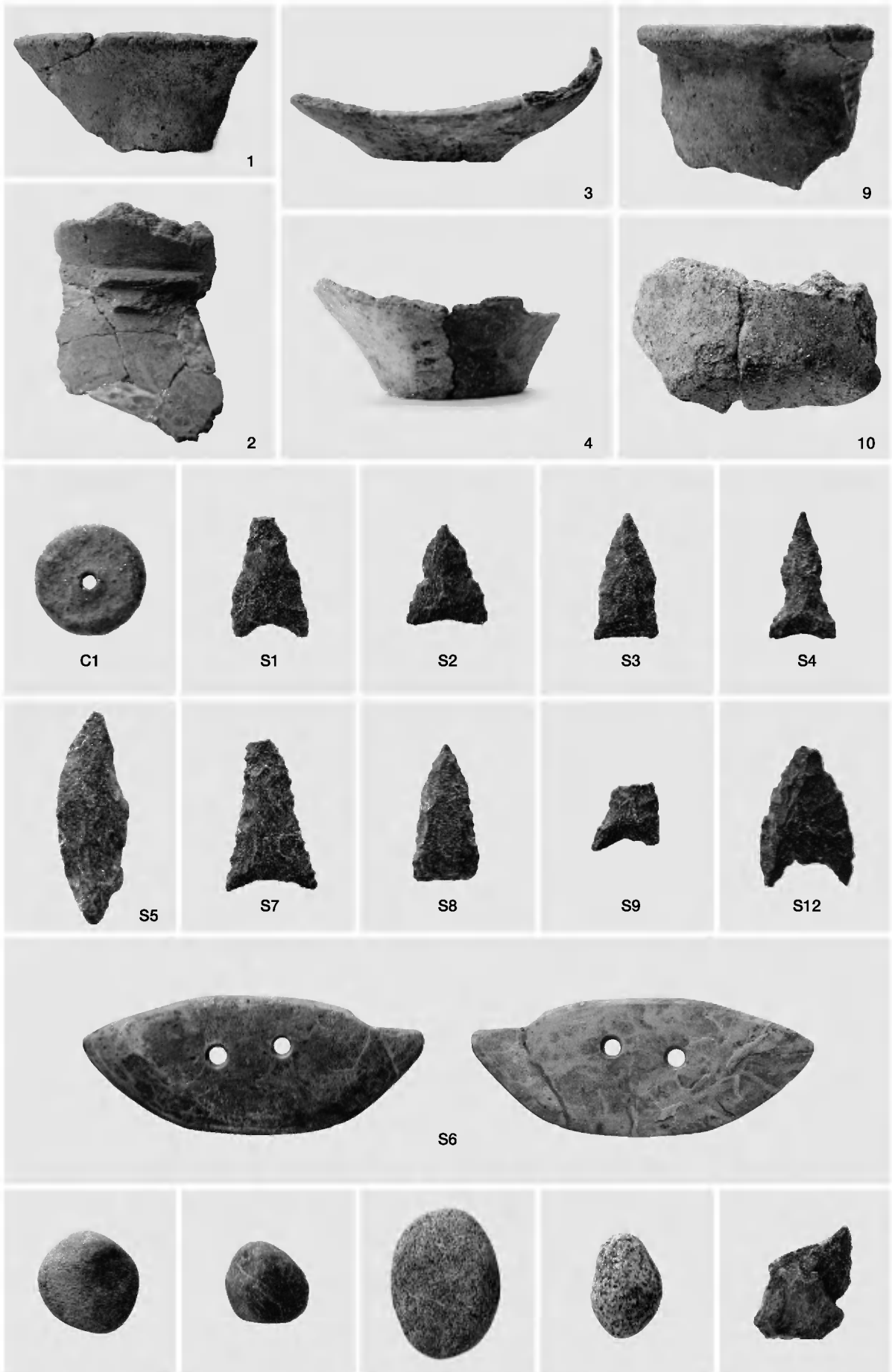
1 4区
溝49・50
(南から)



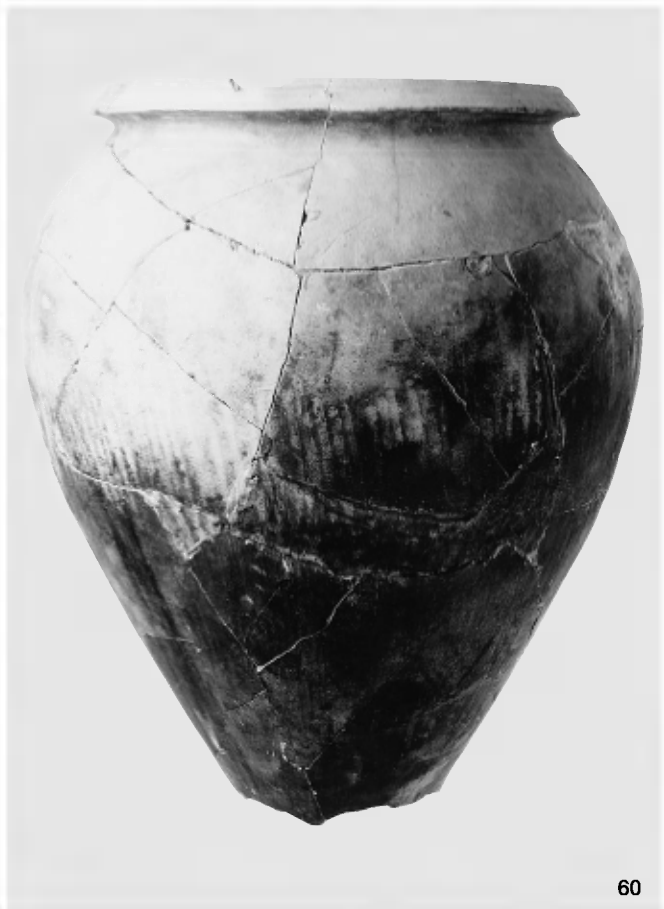
2 4区
水田5
(南東から)



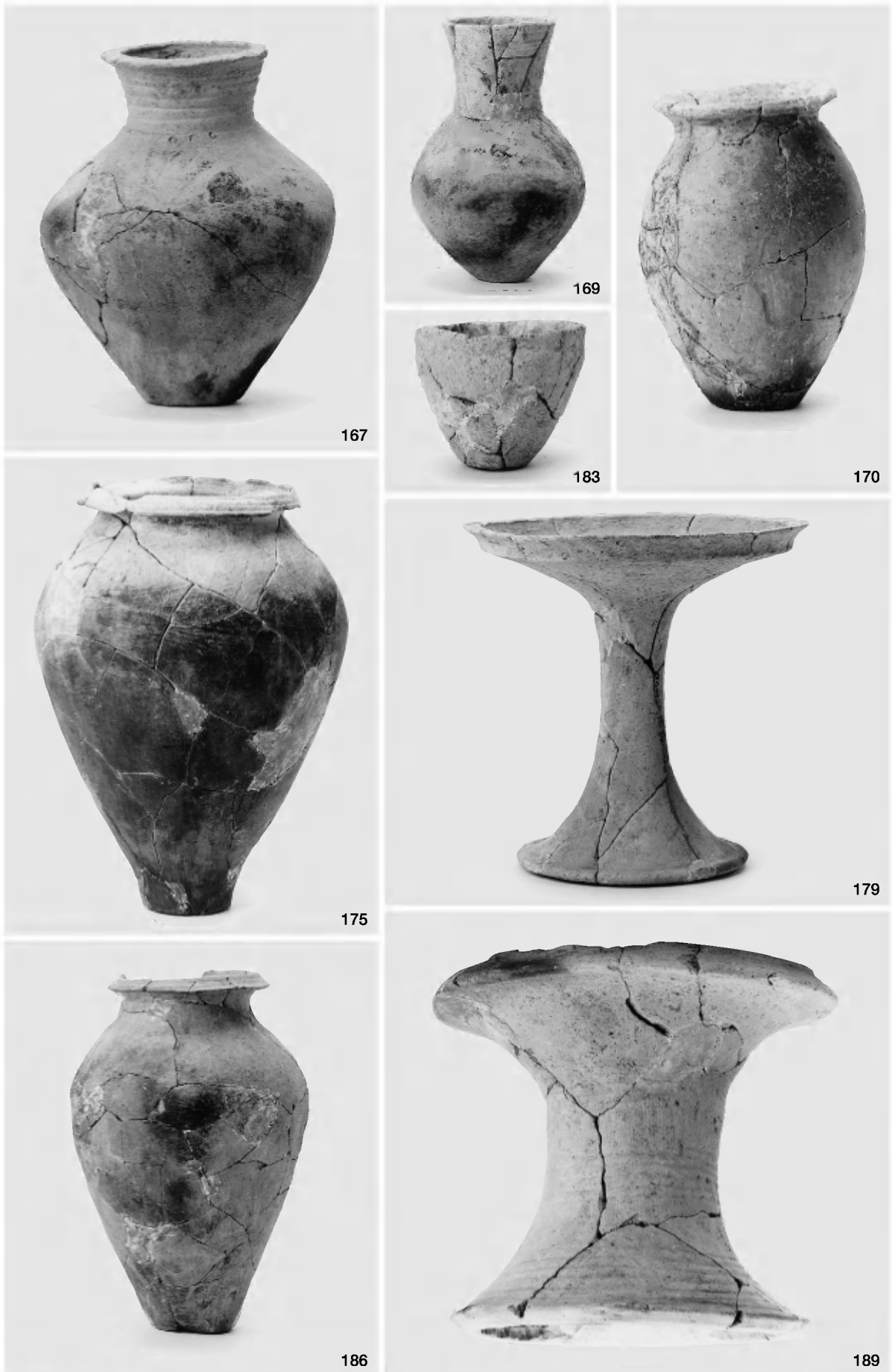
3 5区
調査区全景
(北東から)



弥生時代前期（微高地、水田1～3）出土土器・土製品・石製品・礫

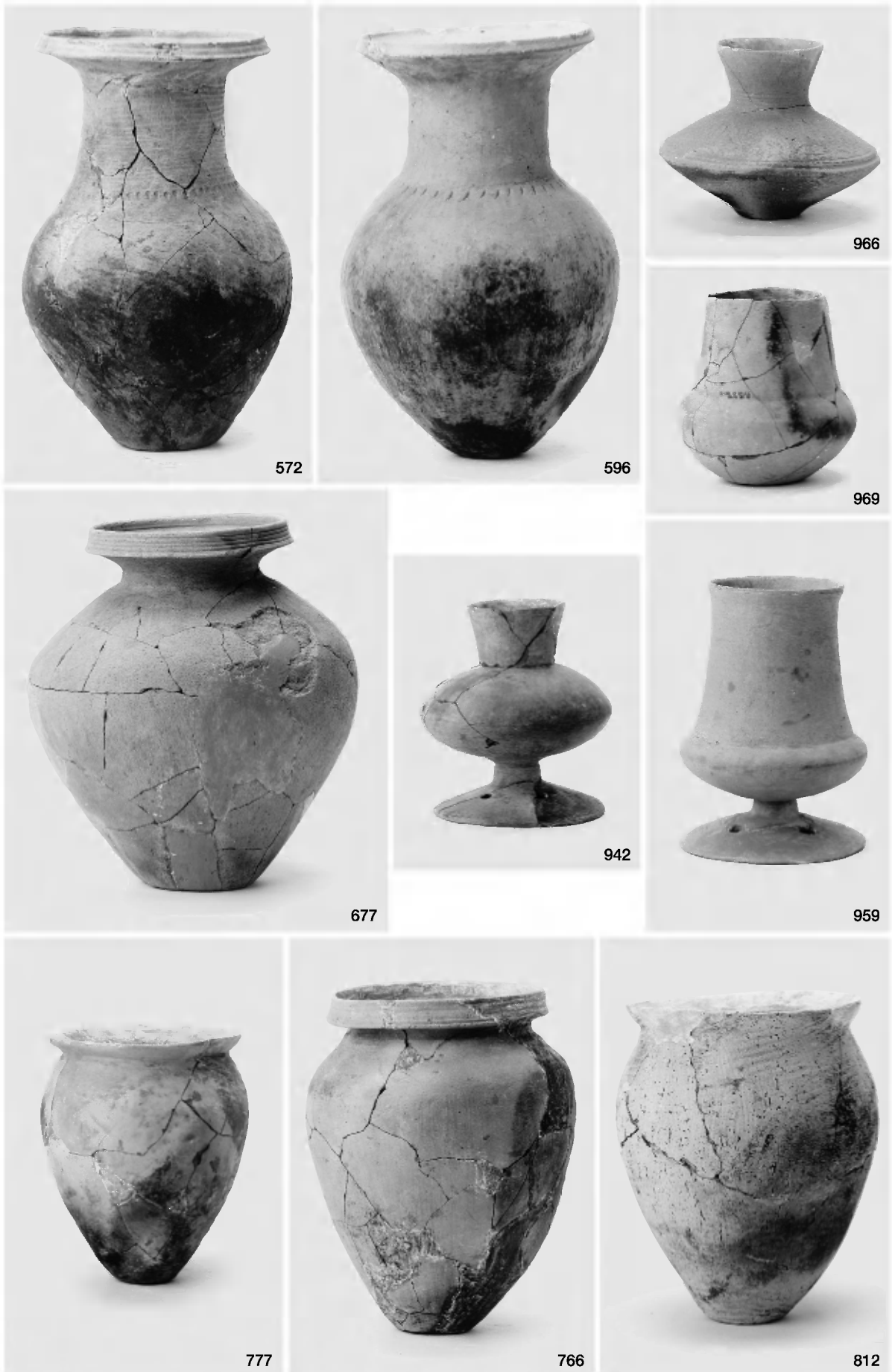


弥生時代中期（溝 13）出土土器



弥生時代後期（袋状土壙 1・5）出土土器

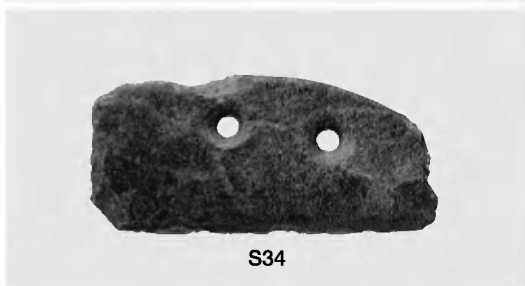
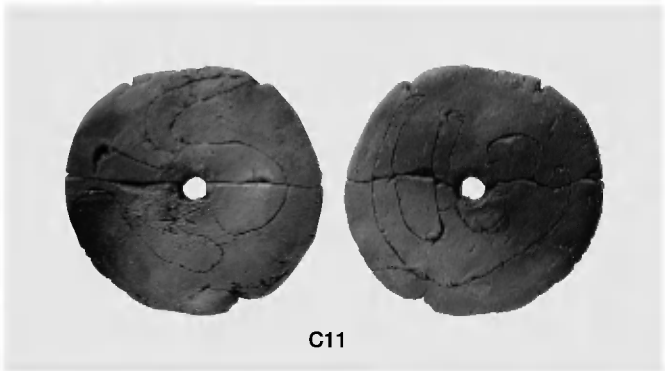
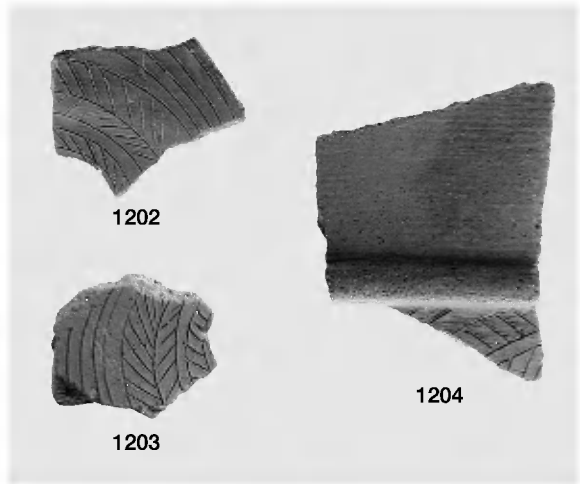
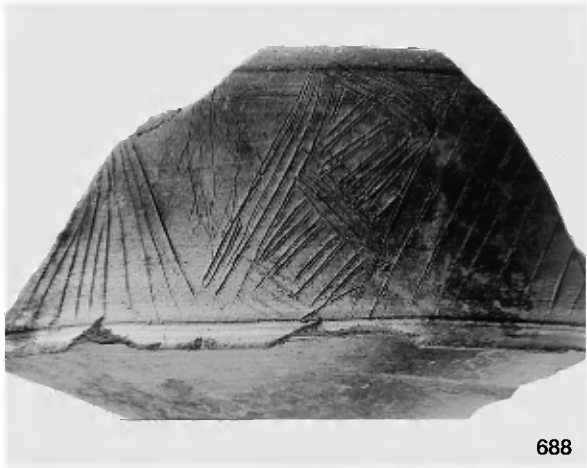




弥生時代後期（河道1）出土土器



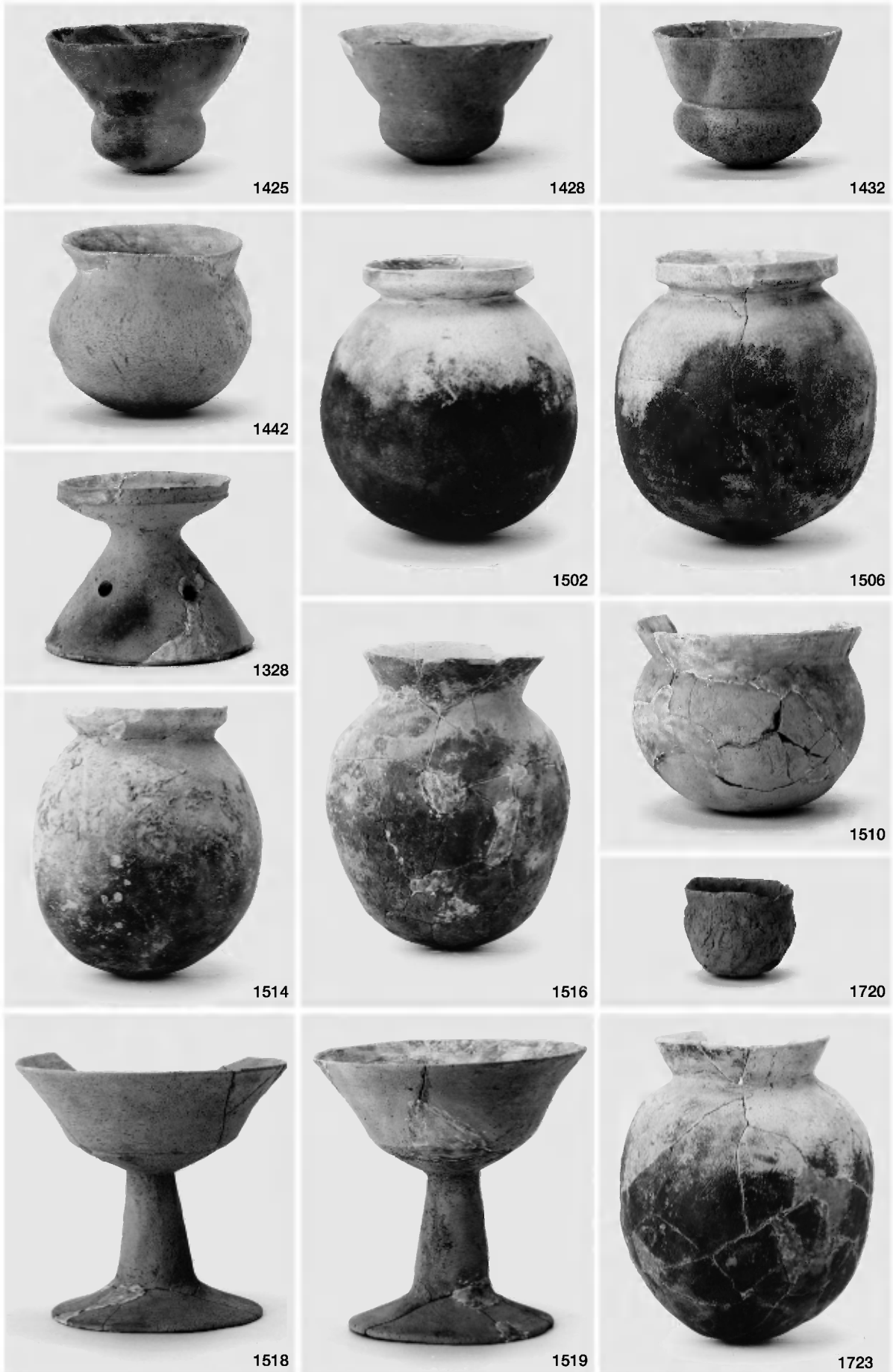
弥生時代後期（河道1）出土土器（籠目土器）



弥生時代後期（河道1）出土特殊器台形土器・線刻土器・土製品・石製品



弥生時代後期（河道1）出土骨角器

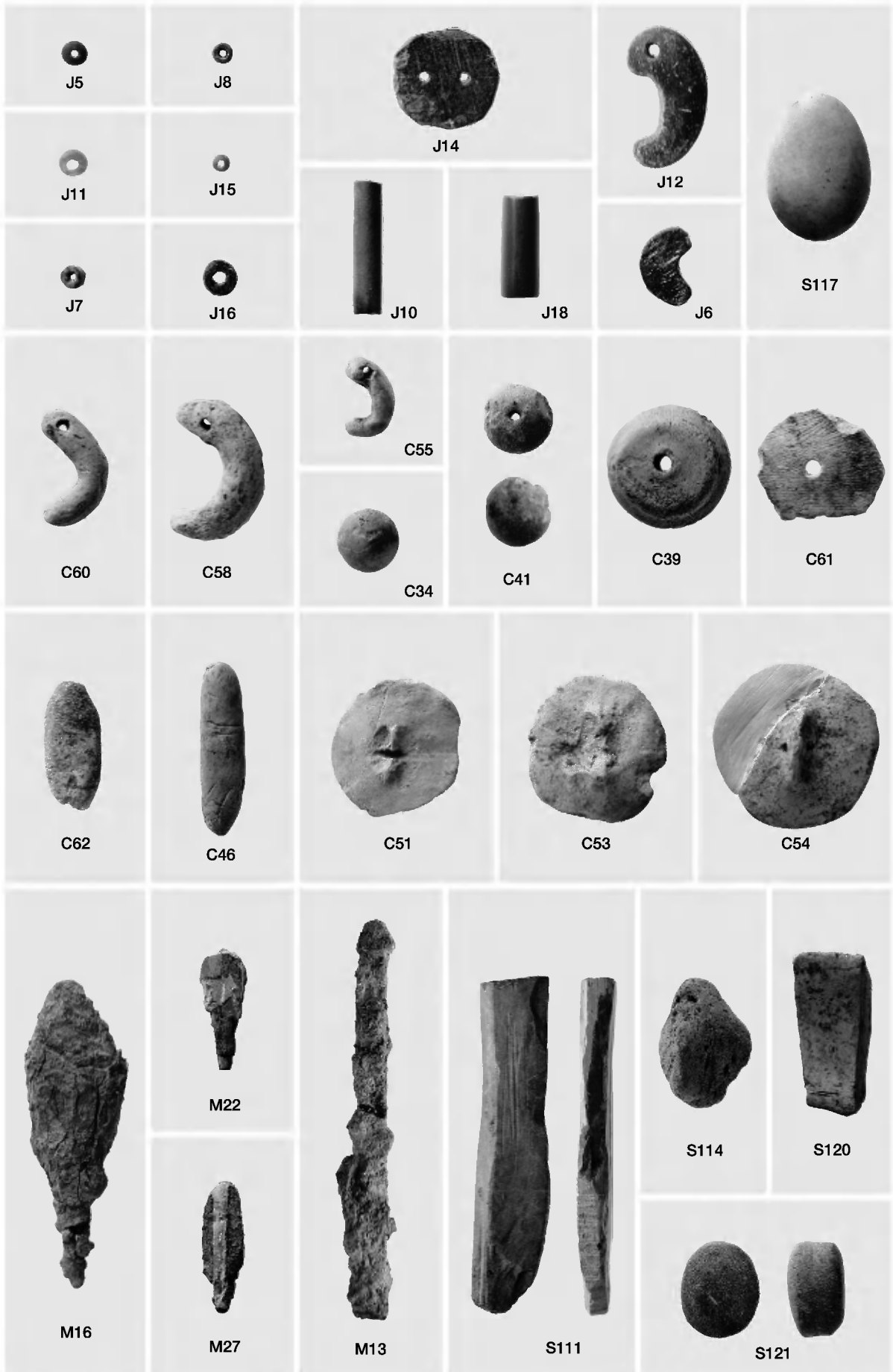


古墳時代前・中期（井戸 3・6・7、竪穴住居 26）出土土器

図版 60



古墳時代中・後期（土器溜まり1、竪穴住居68、配置土器）出土土器



古墳時代前～後期出土 石製品・土製品・金属器

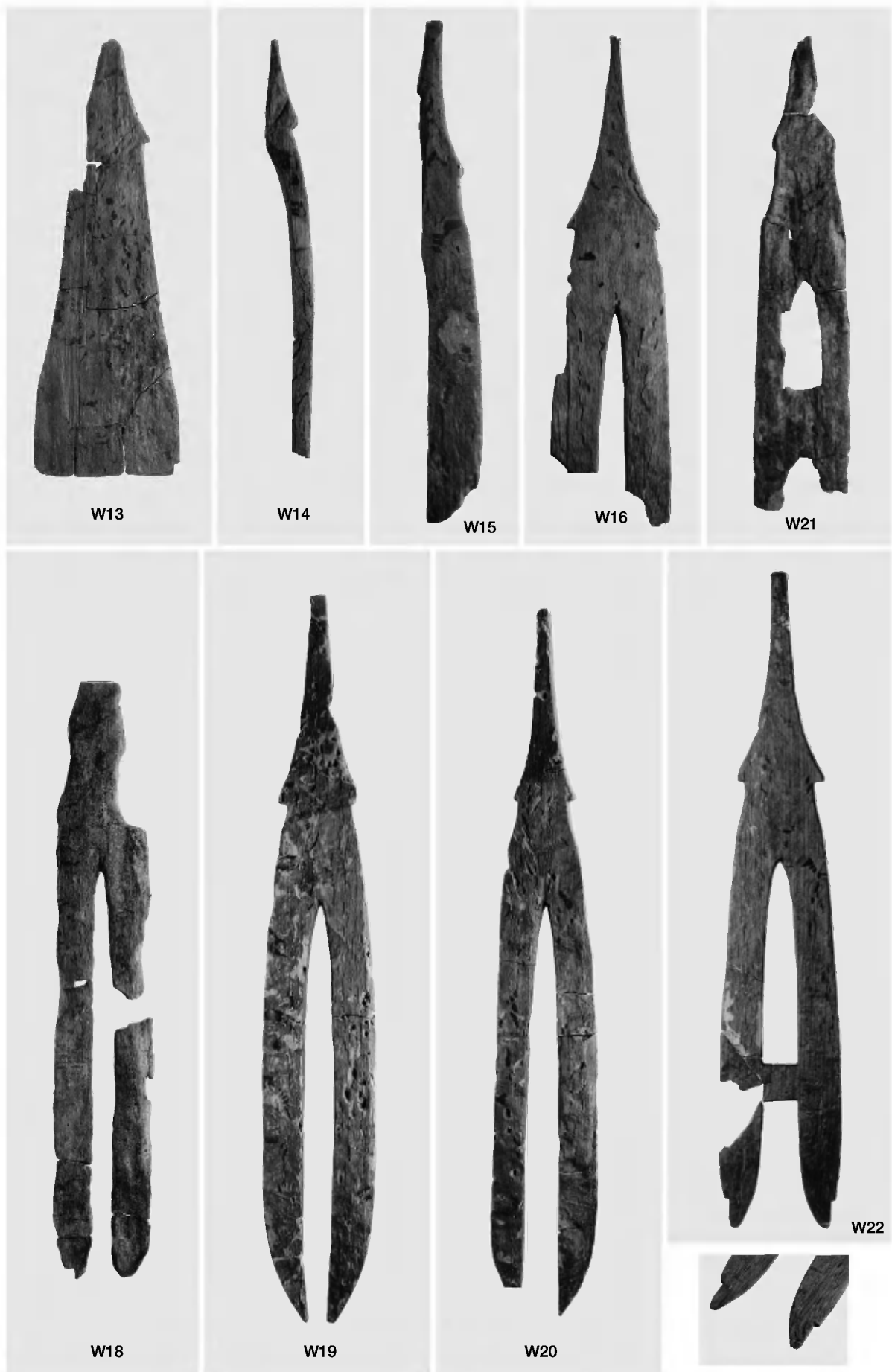
図版 62



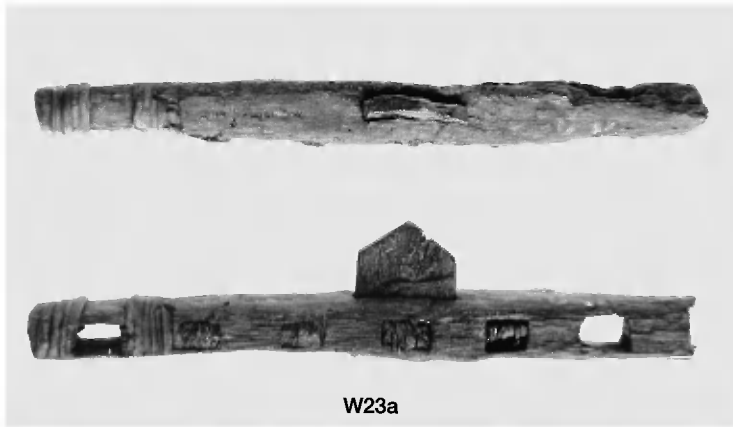
古代～中世（溝 42・53、包含層）出土土器・金属器



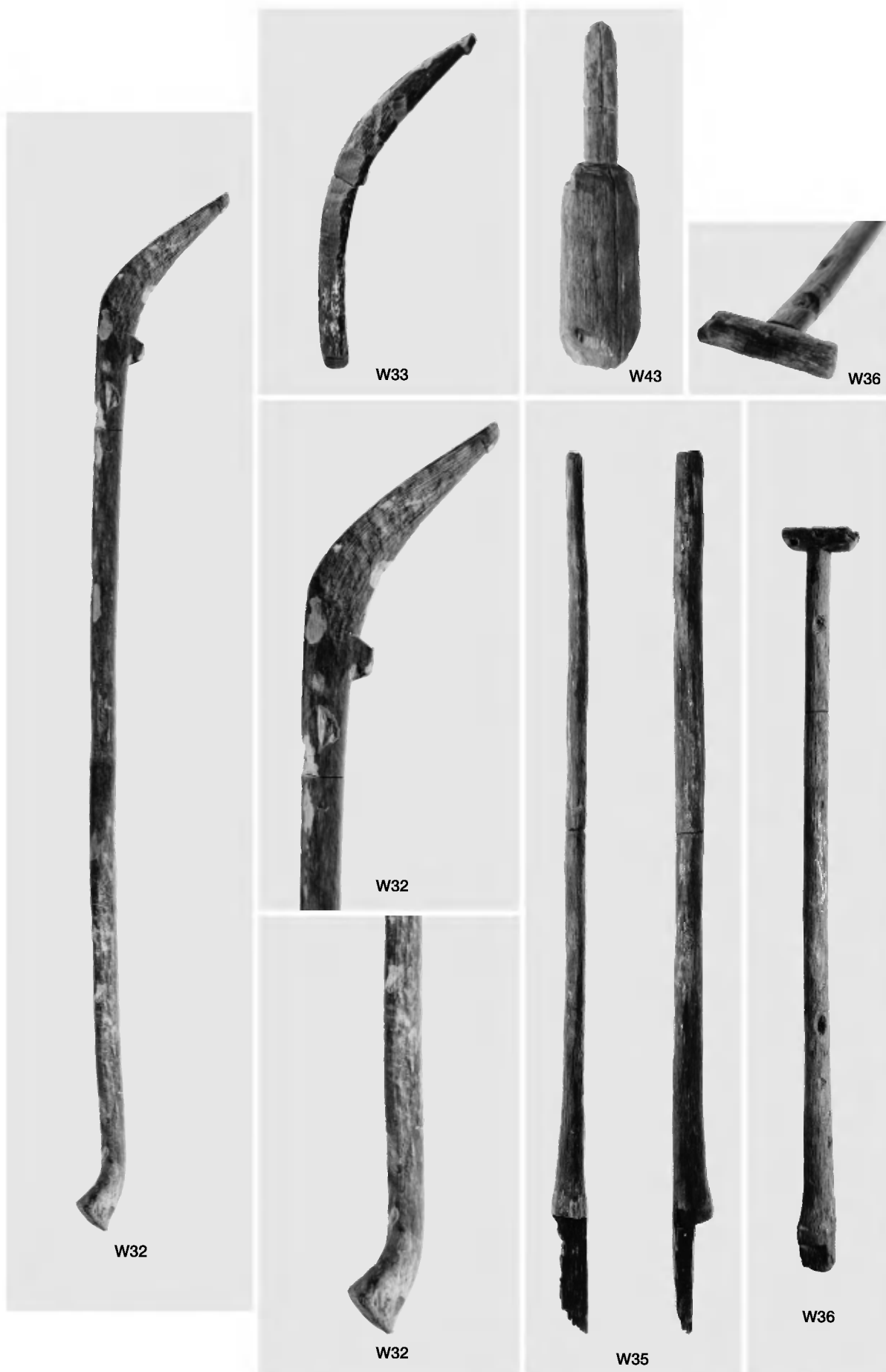
河道 1 出土木器 (斧柄)



河道 1 出土木器 (ナスビ形農耕具)



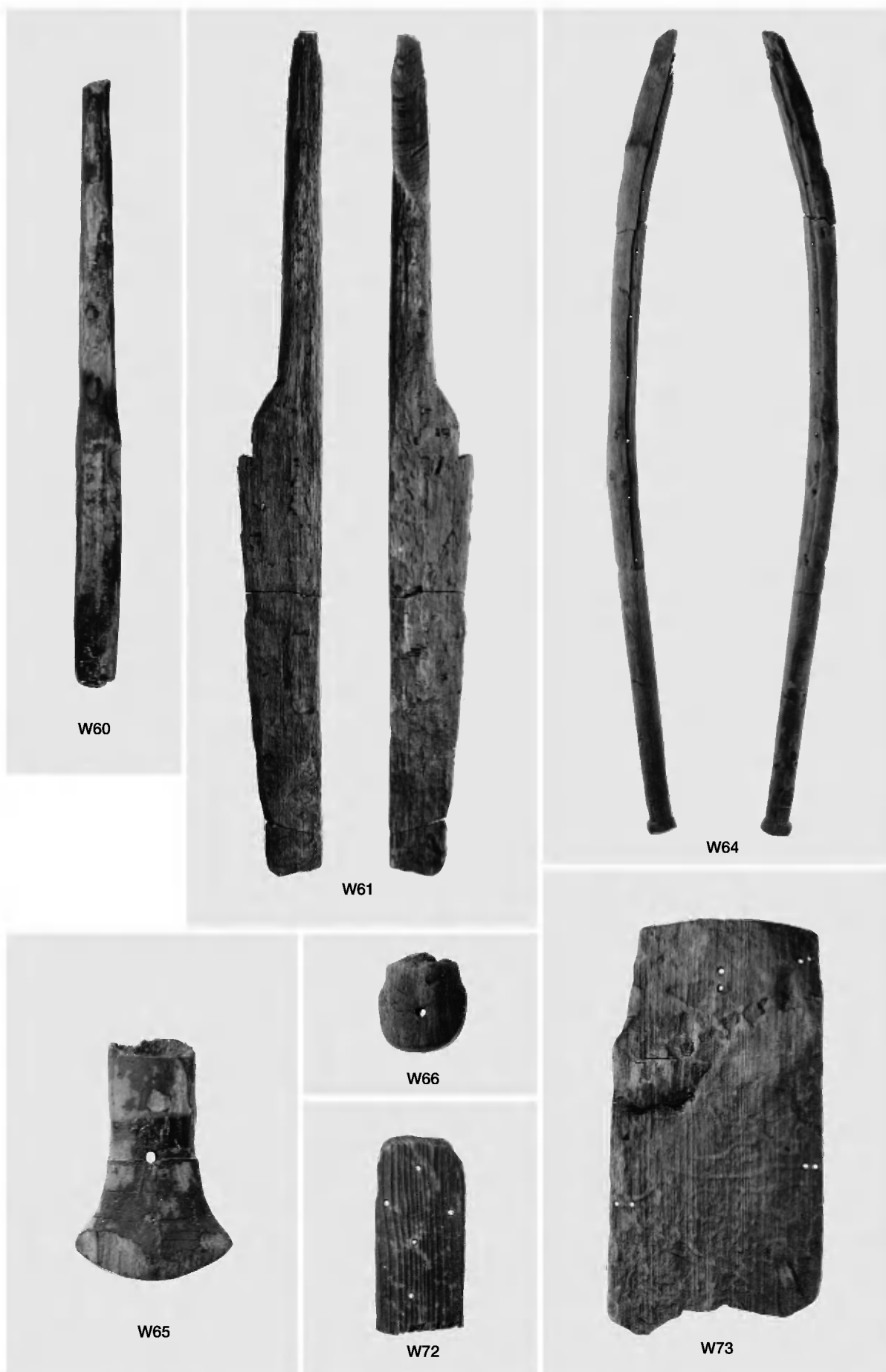
河道1 出土木器 (代掻き・鋤)



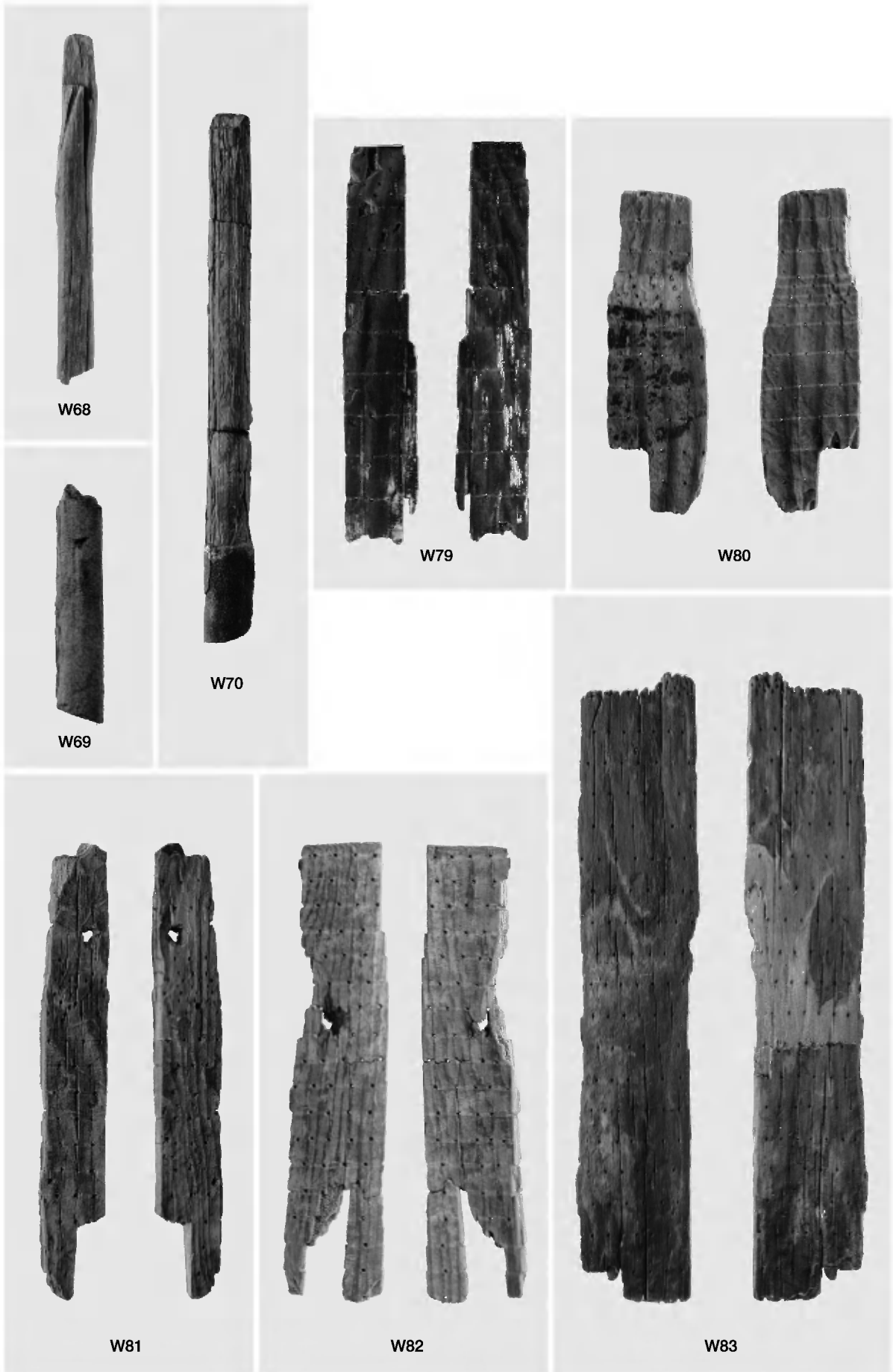
河道 1 出土木器 (反柄・柄・横杵)



河道 1 出土木器 (豎杵・編台目盛板・編台・木錘)

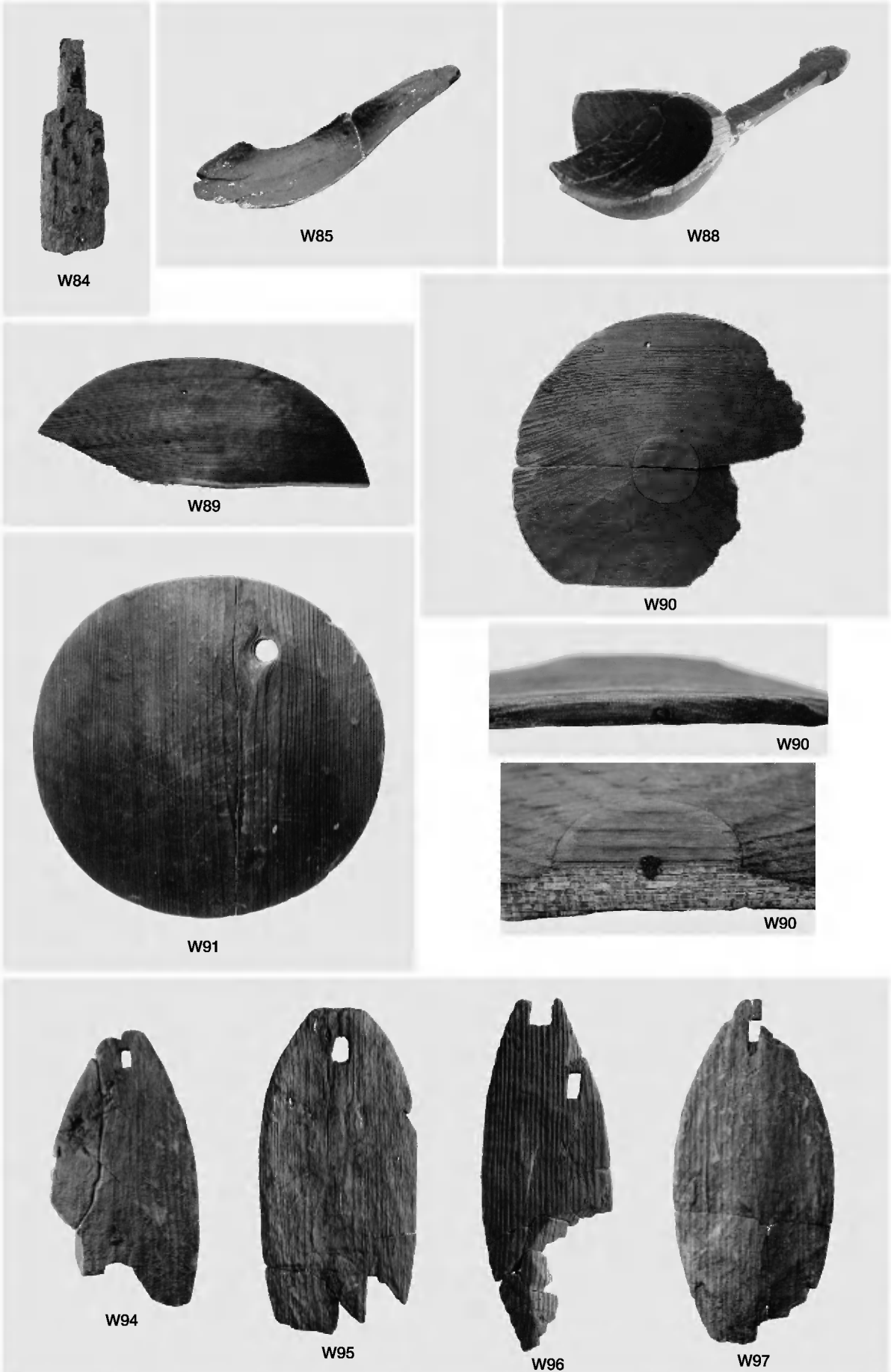


河道 1 出土木器 (櫂・網杵・柄頭)

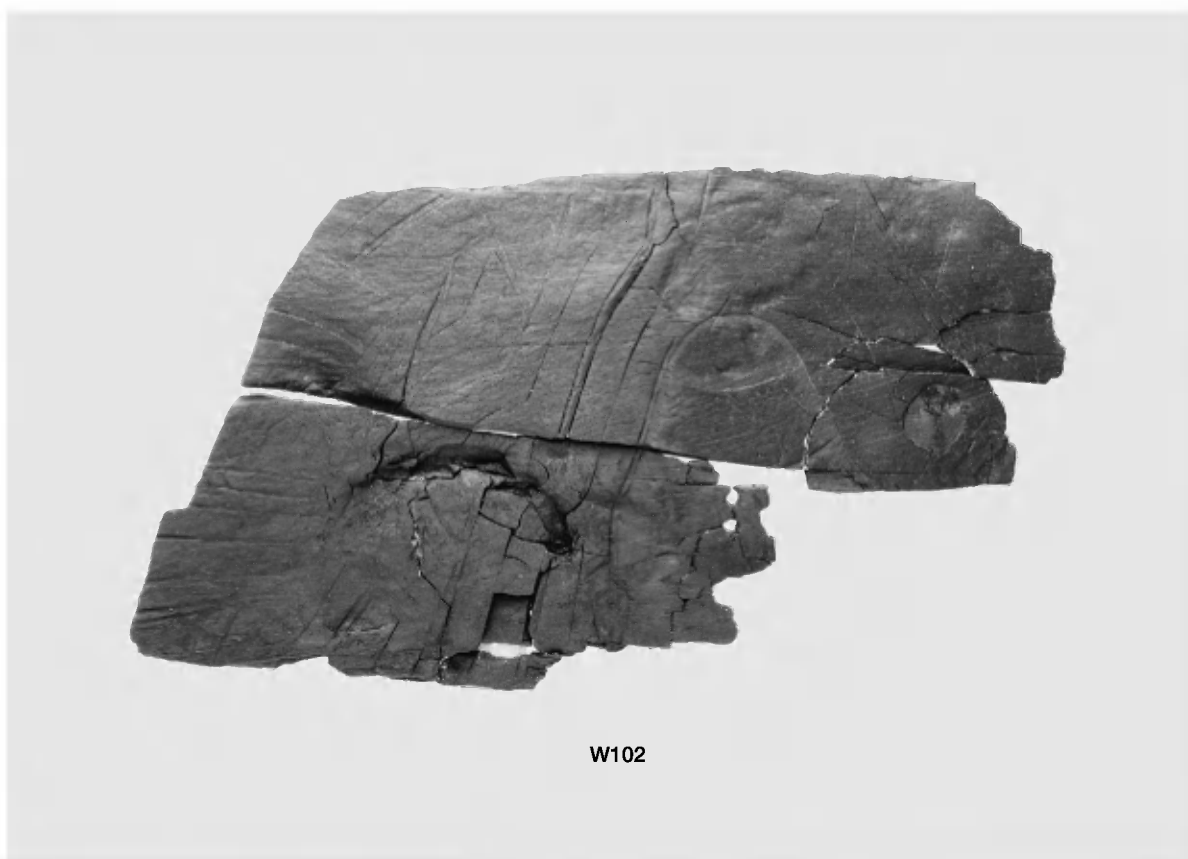


河道1 出土木器 (武器・武具他・盾)

图版 70



河道 1 出土木器（食事具・容器）



W102

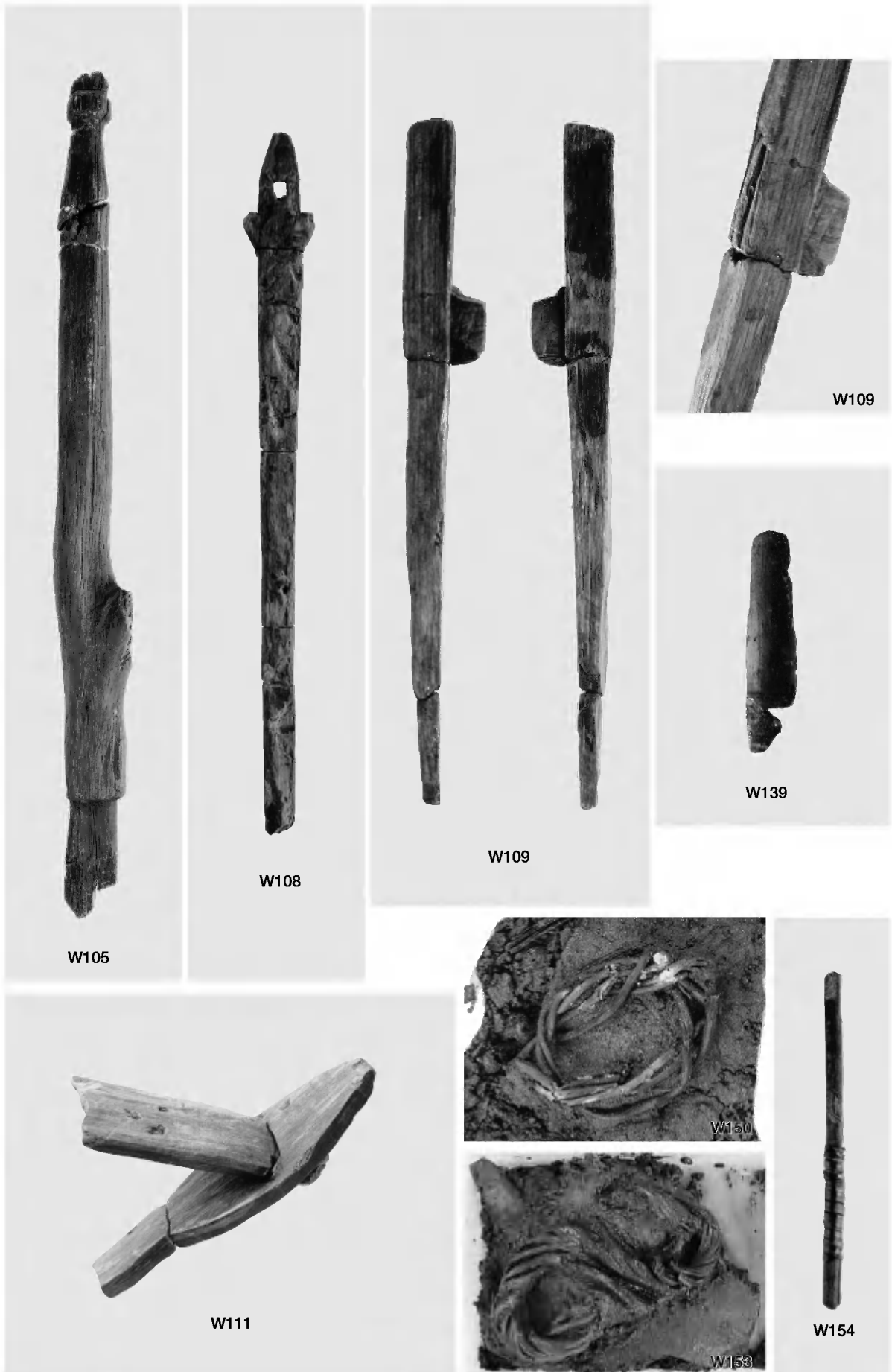


W103

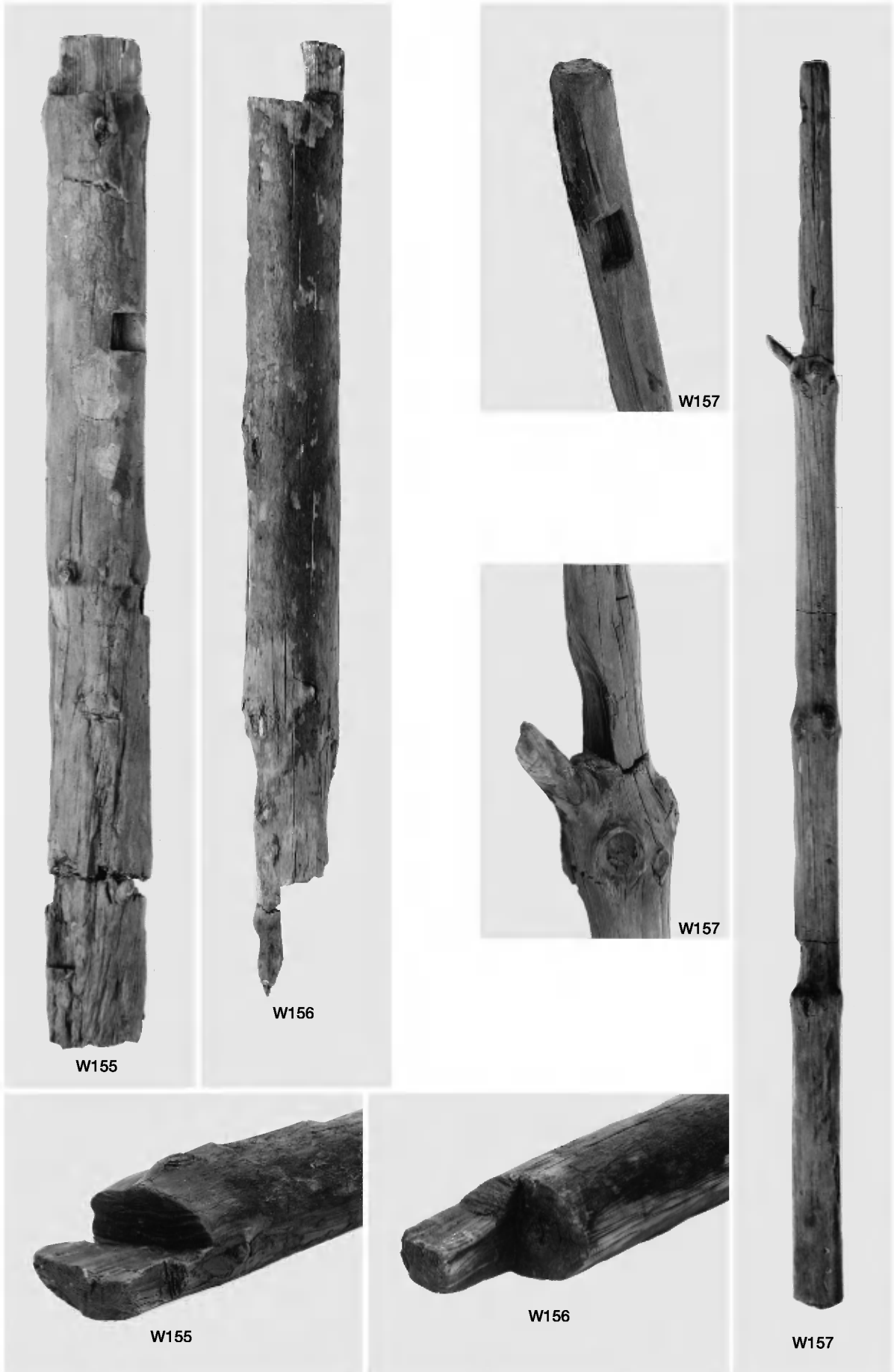


W104

河道 1 出土木器 (裝飾板・発火具・腰掛)

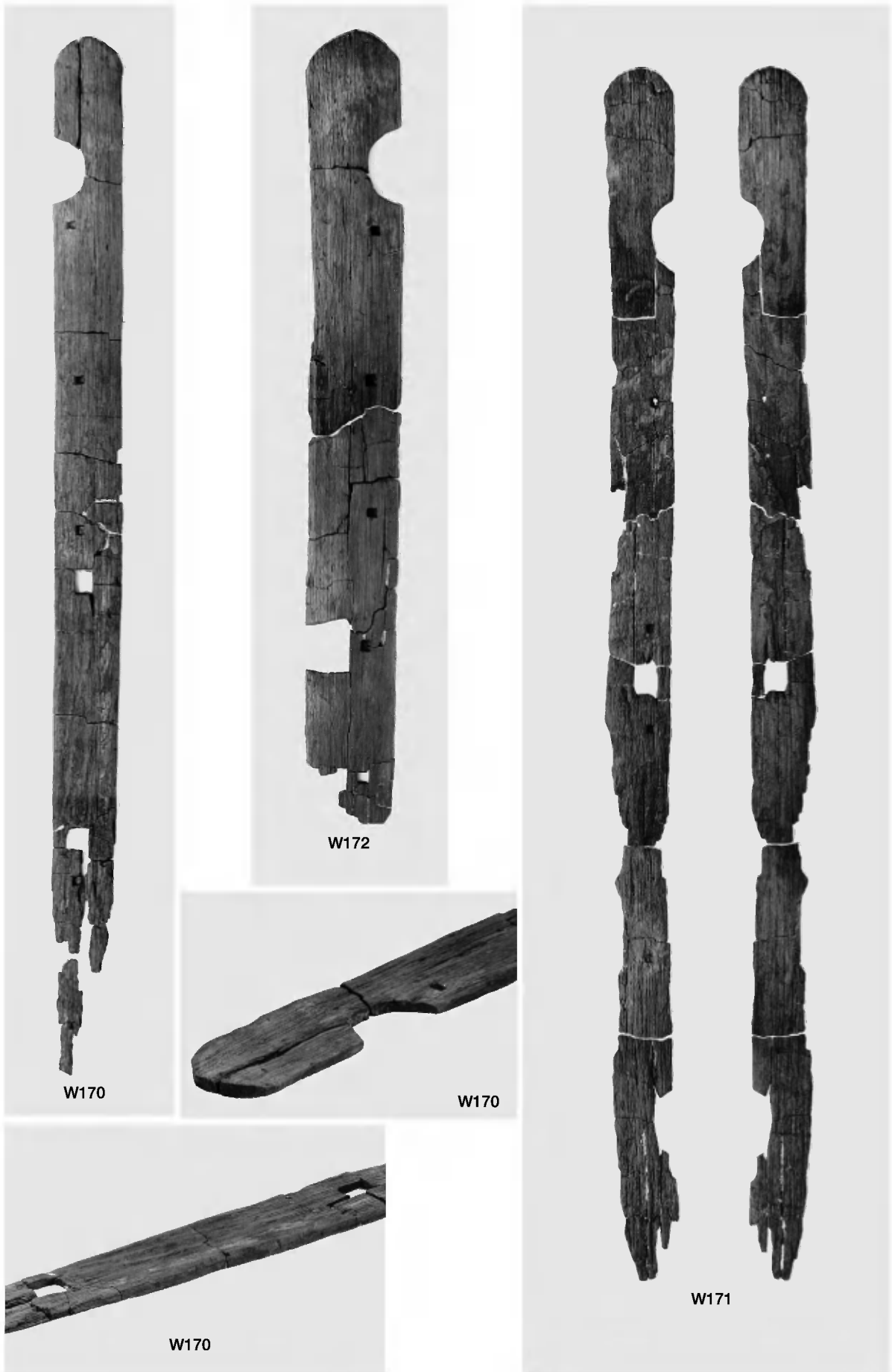


河道 1 出土用途不明部材



河道 1 出土建築部材

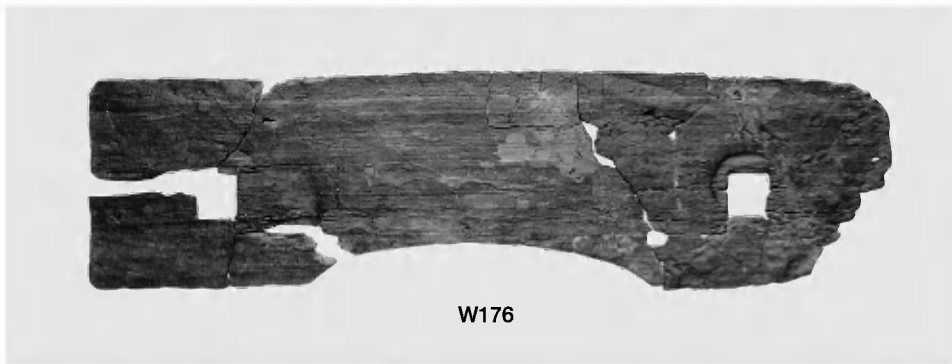




河道 1 出土建築部材



W175



W176

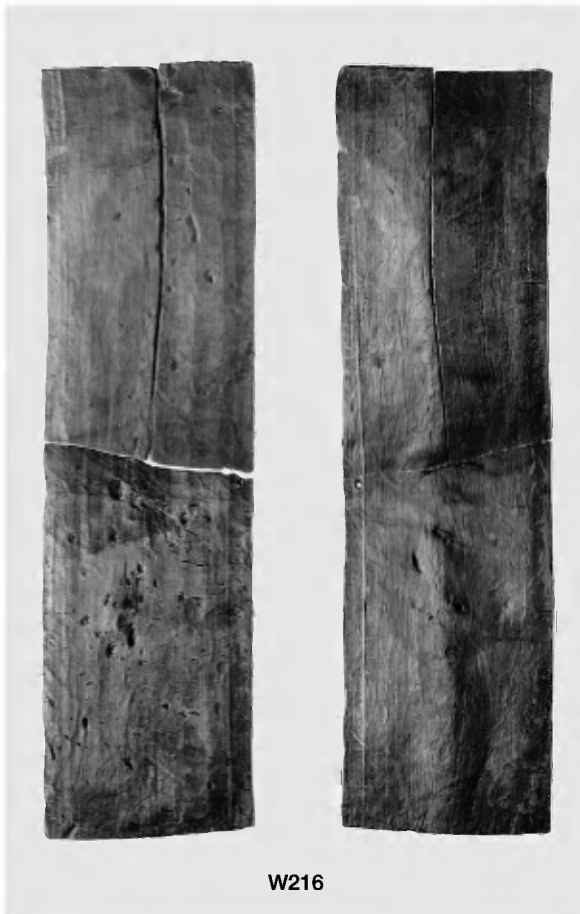


W177

W178



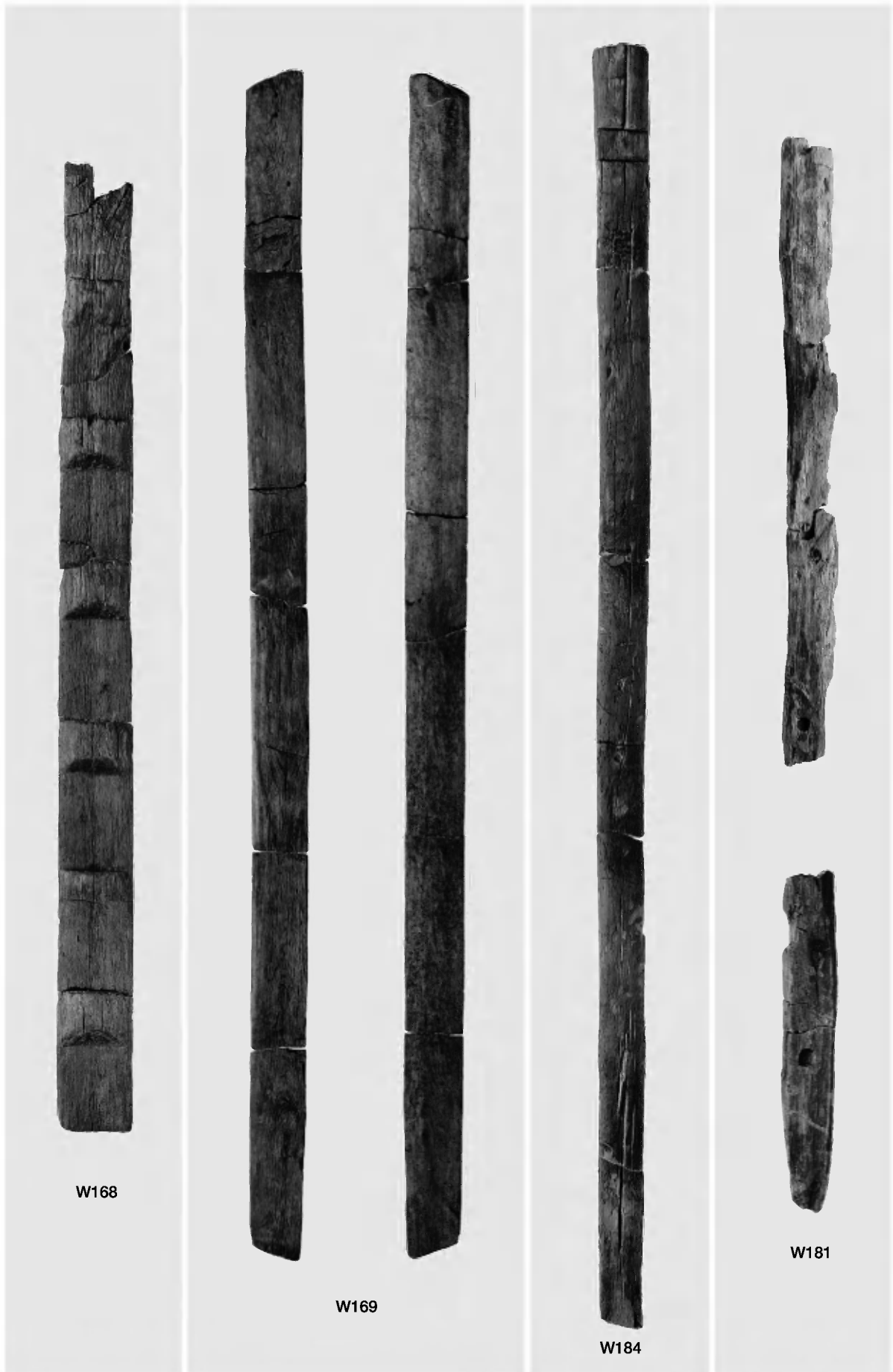
W215



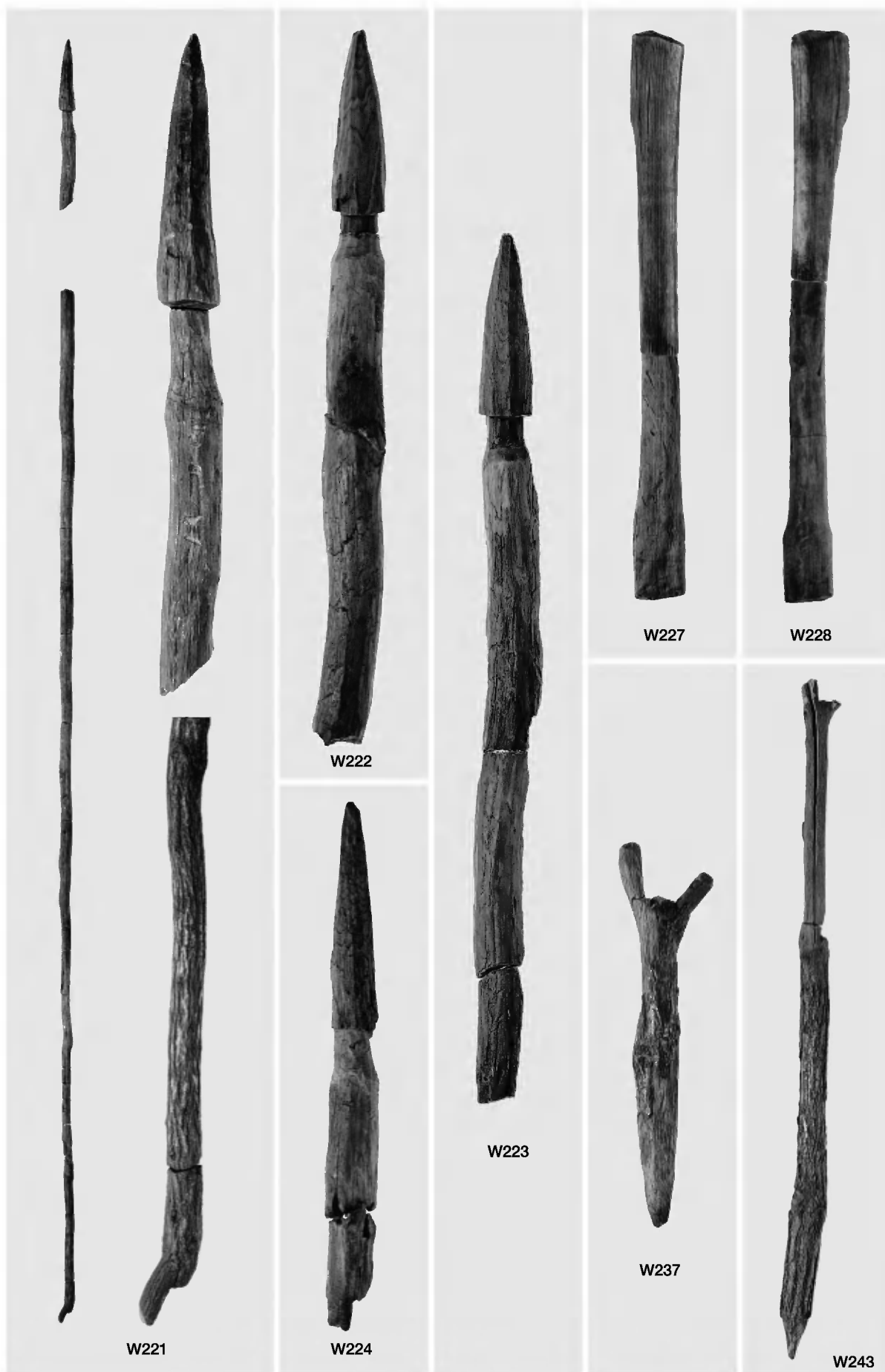
W216



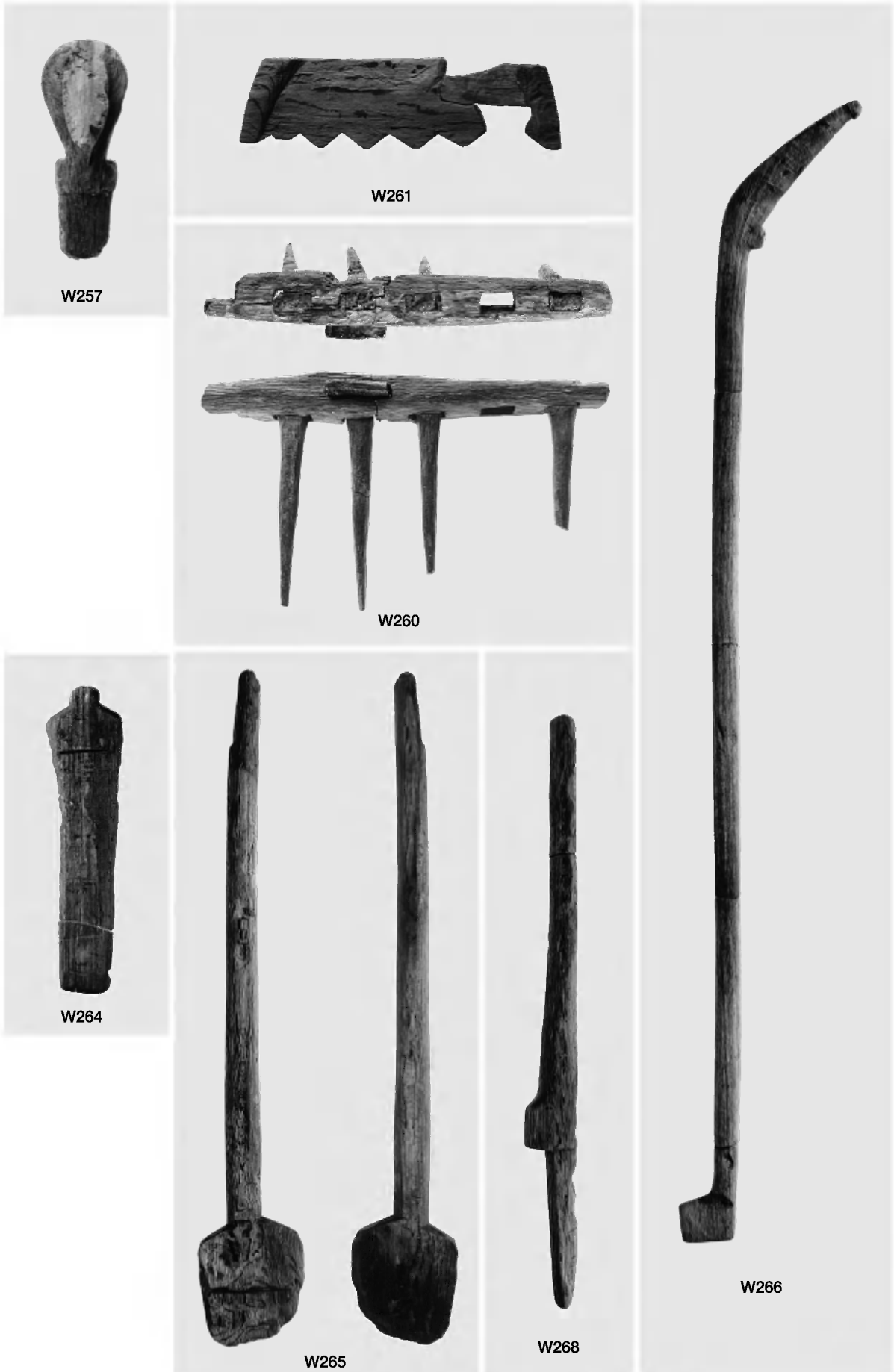
W194



河道 1 出土建築部材

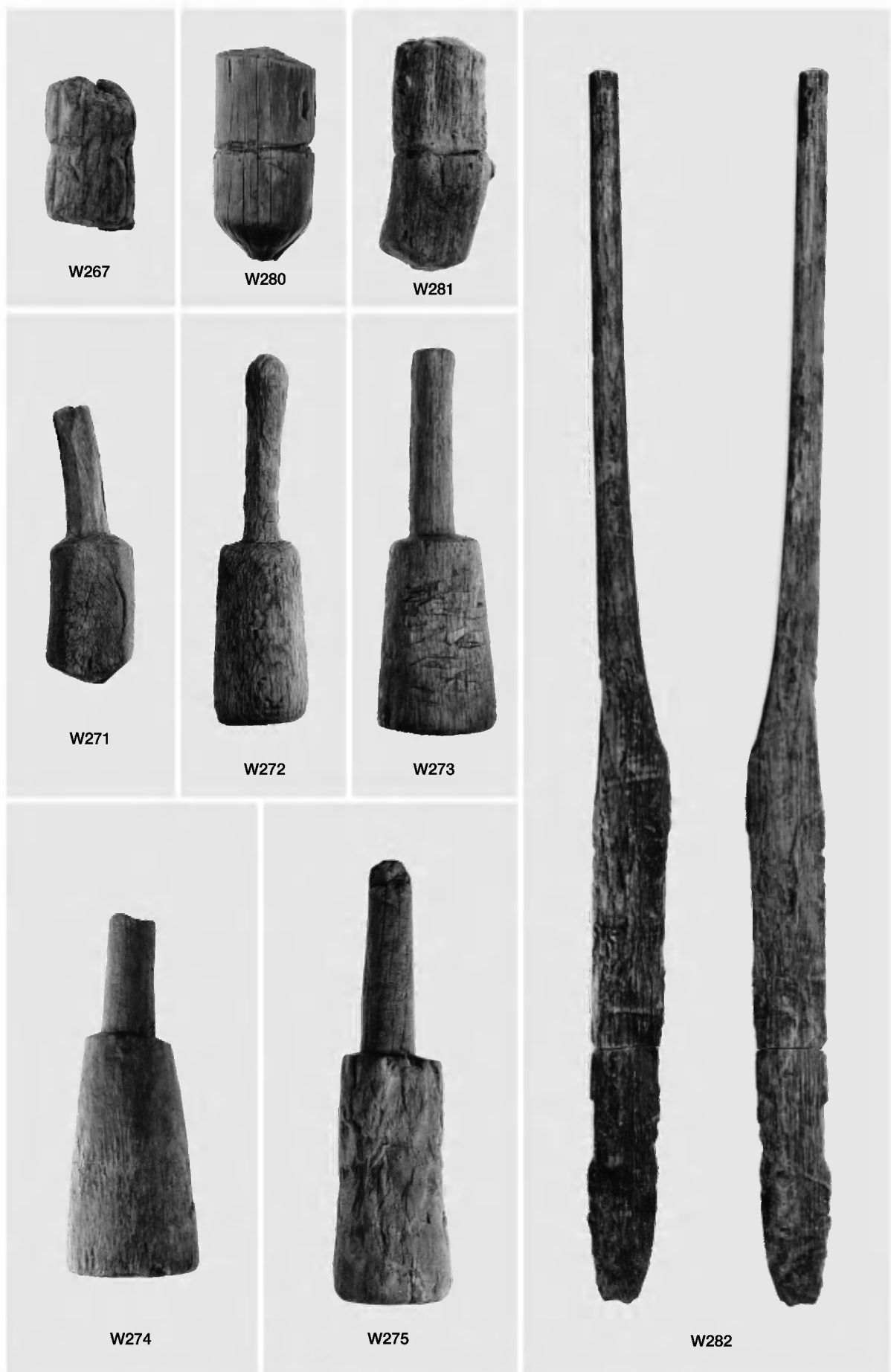


河道 1 出土部材・二股柄

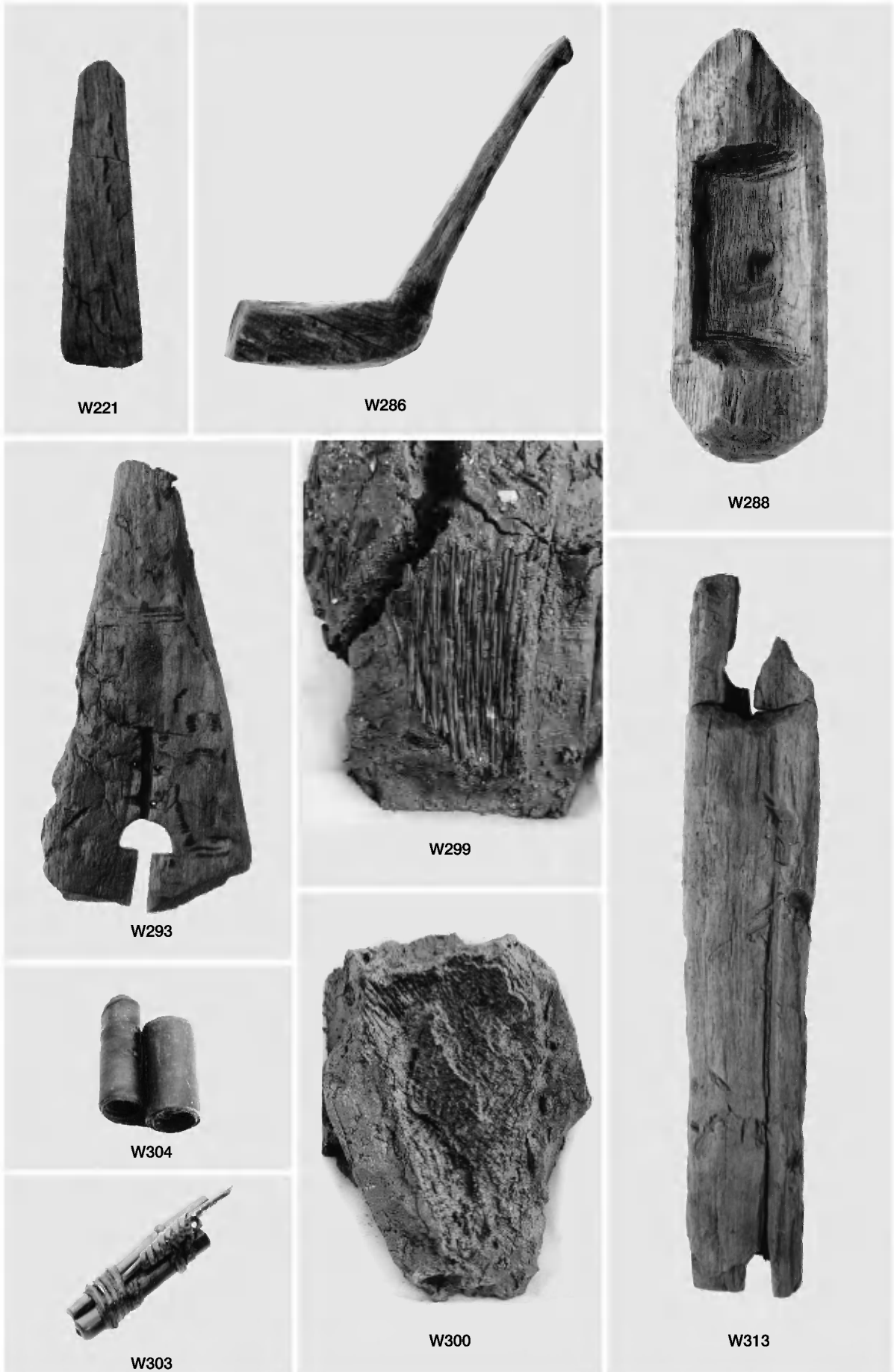


河道 1 出土木器 (斧柄・代掻き・鋤・反柄・柄)

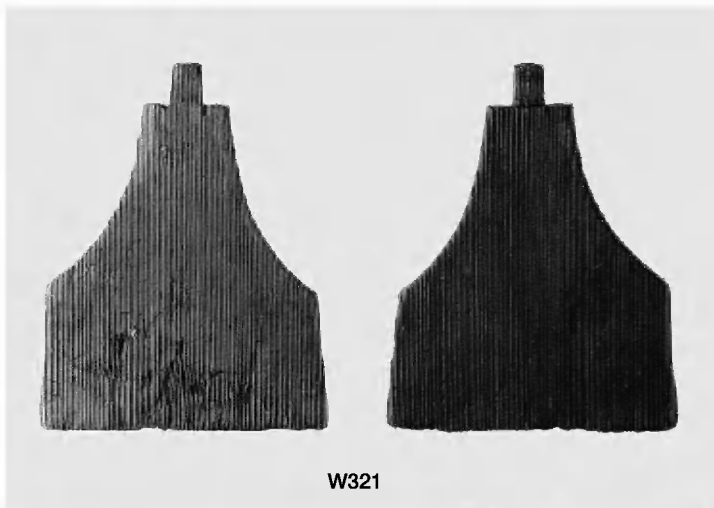
図版 80



河道 1 出土木器 (木錘・横杵・櫂)



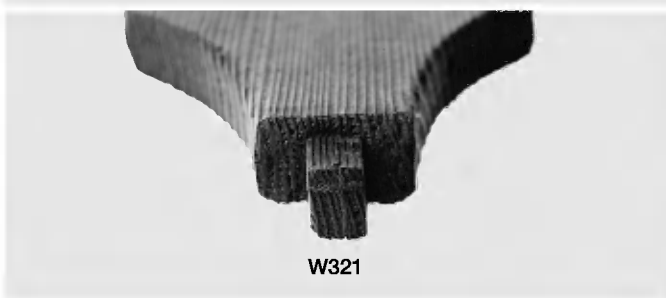
河道 1 出土木器 (食事具・容器・用途不明部材・編物・樹皮製品・導管)



W321



W326



W321



構造材6 緊縛痕1



構造材6 緊縛痕4



構造材6 緊縛痕6・7



構造材6
緊縛痕5



構造材6
緊縛痕6

報告書抄録

ふりがな	つしまいせき							
書名	津島遺跡4							
副書名	岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	173							
編著者名	高畑知功・井上 弘・島崎 東・光永真一・氏平昭則・金田善敬・小林利晴・杉山一雄・岡本泰典・時實奈歩・米田克彦・宮本長二郎・小田嶋梧郎・富岡直人・松谷暁子・佐藤洋一郎・四柳嘉章・本田光子・志賀智史・白石 純・木戸一博							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2003年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つしまいせき 津島遺跡	おかやまけんおかやまし いずみ ちよう 岡山県岡山市いずみ町	33201		34°40'37"	133°55'18"	2000. 1. 5 ～ 2000.12.27	6,200 ㎡	岡山県陸上 競技場改修 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津島遺跡	集落・水田	弥生時代	竪穴住居 土壙 溝 水田 旧河道	弥生土器 石器 石製品 土製品 木器 鉄器		弥生前期の畦畔と水路を伴う水田 弥生時代後期の河道から土器・木製品・建築部材が大量に出土		
		古墳時代	竪穴住居 掘立柱建物 井戸 土壙 溝 旧河道	土師器 須恵器 石製品 鉄器 木器		古墳中期の「L」字カマドを伴う竪穴住居		
		古代～近世	土壙 溝	土師器 須恵器 陶器 石製品? 木製品		条里の郷境に該当する古代の大溝		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173

津島遺跡4

岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査
(第2分冊)

平成15年3月5日 印刷

平成15年3月24日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1